

ハイスクールD×D～転生したら騎士（笑）になってました～

ガスキン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「朝やで！ はよ起きんさい！」 そんな声で目覚めた主人公の目の前にはオカンな神様がいた。オカンに気に入られた主人公は転生する事となり、平和な世界へと跳ばされるはずだった。・・・が、オカンの勘違いで跳ばされたのは平和とは無縁な世界だった。久しぶりの二次創作にチャレンジしてみました。拙い内容ですが、少しでも楽しんで頂けたら幸いです。※オリ主の勘違いっぷりは病気ともいえません。無理やり過ぎなのは好きじゃないという方はブラウザバックしてください。

四月二十四日、小説の宣伝の為にツイッター始めました。詳細は活動報告をご覧ください。

目次

プロローグ 異世界転生のイミテーションナイト

第一話 オカンな神 | 1

第二話 目覚めたら騎士になってました | 7

第三話 絶望の戦場に舞い降りた騎士 | 16

第四話 教えてアル||ヴァン先生！〜戦闘編〜 | 22

第五話 テンプレでもいいじゃないだってオリ主だもの・・・

28

第六話 騎士と姫の出会い | 33

第一章 旧校舎のディアボロス

第七話 あれから色々ありまして | 38

第八話 後輩は思春期 | 44

第九話 身分違いの恋って素敵ですよ | 51

第十話 聖女の祈りは神に届かずさけれど友の叫びは騎士へ届く

55

第十一話 最終兵器発動 | 67

第十二話 人間辞められませんでした | 77

第二章 戦闘校舎のフェニックス

第十三話 同居人が出来ました | 85

第十四話 貴様！見ているな！ | 94

第十五話 教えてアル||ヴァン先生！〜特訓編〜 | 100

第十六話 いつから生身なら弱いと錯覚していた？ | 105

第十七話 紅き姫の夢と赤き龍の苦悩 | 110

第十八話 託された思い | 119

第十九話 悲しみの少女に救いの手を | 129

第二十話 おや？騎士（笑）の様子が・・・ 142

第二十一話 蘇る伝説 152

第二十二話 再会 159

第三章 月光校庭のエクスカリバー

第二十三話 居場所 166

第二十四話 騎士の過去 175

第二十五話 またお前らか！ 180

第二十六話 真に断罪されるべきは 186

第二十七話 満月の下で 193

第二十八話 時にキミはSかMか？ 199

第二十九話 もう・・・ブチ切れてもいいよね？ 206

第三十話 やめたげてよお！ 220

第三十一話 Qそれはクールビズですか？ Aいいえただの露出

です 228

第三十二話 新たなる日常 234

第四章 停止教室のヴァンパイア

第三十三話 ご家族の方ですか 242

第三十四話 下着と水着でどうして恥ずかしさが違うんですかね

249

第三十五話 たとえ何者であろうとも 260

第三十六話 キミは一人じゃない 268

第三十七話 晒し者じゃないですか！ 275

第三十八話 時獄からの解放 279

第三十九話 約束 287

第四十話 彼女が堕ちたのは・・・ 296

第四十一話 本人の許可無く撮影してはいけません | 302

第四十二話 因縁 | 308

第四十三話 騎士(笑) VS ペロリストそして・・・ | 324

第四十四話 並び立つために | 332

第四十五話 覚悟 | 339

第四十六話 騎士の願いと彼女の心 | 354

第四十七話 もう一つのプレゼント | 361

第五章 冥界合宿のヘルキャット

第四十八話 あなたがもらったのは『悪魔の駒』ですか?それと

も・・・ | 367

第四十九話 サプライズだからってやり過ぎたら駄目でしょうが

第五十話 いざ冥界へ | 374

第五十一話 彼らの名は・・・ | 380

第五十二話 自業自得という言葉を知ってるか? | 391

第五十三話 趣味は千差万別 | 398

第五十四話 人の夢を馬鹿にするなあ! | 410

第五十五話 つかの間の休息 | 415

第五十六話 壁に○○ | 425

第五十七話 知らず知らずに公開処刑 | 431

第五十八話 冥界どうでしょう | 437

第五十九話 改z・・・特訓開始! | 446

第六十話 イメージは大切ですよ? | 453

幕間その一 ある親子の決意 | 457

第六十一話 お出掛け | 464

470

第六十二話 初心×残念Ⅱ辱め | 475

第六十三話 ボツチのグルメ | 485

第六十四話 彼女が残念になった理由 | 490

第六十五話 男子三日会わざれば刮目して見よ | 497

第六十六話 教えてアルⅡヴァン先生！〜伝授編〜その一 | 503

第六十七話 教えてアルⅡヴァン先生！〜伝授編〜その二 | 512

幕間その二 魔王少女と残念さん | 517

第六十八話 教えてアルⅡヴァン先生！〜伝授編〜その三 | 523

第六十九話 教えてアルⅡヴァン先生！〜伝授編〜その四 | 528

第七十話 魔改造にだってバランスが大事 | 538

第七十一話 騎士の戦い | 549

第七十二話 言わせねえよ！ | 565

第七十三話 誇り | 575

第七十四話 再起 | 587

第六章 体育館裏のホーリー

第七十五話 恩という名の呪縛 | 596

第七十六話 幸せの形 | 601

第七十七話 自らの意思で | 610

第七十八話 新たな絆 | 618

第七十九話 どうしてこうなった・・・ | 628

第八十話 大いなる怒り | 641

幕間その三 騎士の想いと彼らの想い | 653

第八十一話 舞い降りる剣 | 661

第八十二話 『F』 | 670

第八十三話 日常への帰還 | 685

幕間その四 トップは辛いよ※ただし一名は除く | 695

第七章 放課後のラグナロク

第八十四話 最強の矛×最強の盾は矛盾ではなく無敵である

701

第八十五話 王道と霸道 | 707

第八十六話 来るべき時が来てしまったようです | 711

第八十七話 天使護衛計画 | 720

第八十八話 現世の神と異界の神 | 725

第八十九話 その想いを届ける為に | 733

第九十話 腹を割って話そう | 738

第九十一話 魔装騎士くTHE KNIGHT OF FURY | 745

5

第九十二話 一世一代の告白 | 759

第九十三話 新たな力の可能性 | 766

第九十四話 ゲームのデザインはイメージです実際の神様とは異

なる場合もございます | 773

第九十五話 性癖なんて人それぞれです偉い人にはそれがわから

んのです | 781

第九十六話 男女間の友情は成立する | 788

第九十七話 ペットのヤンチャは飼い主が責任を取りましょう

797

第九十八話 調教の基本はアメとムチ | 805

第九十九話 覚悟のススメ | 812

第一百話 家族が増えたよやったね騎士(笑)! | 826

第一百話 どうやら騎士(笑)だけでなく家主(笑)にもなっ

まったようです

第八章 修学旅行はパンデモニウム

第二百二話 今日のわんこ

第二百三話 永久に共に

第二百四話 白猫が隠していたもの

第二百五話 旅立ちの日に

第二百六話 見ている人はちゃんと見てくれてるんです

第二百七話 やってやる！ やってやるぞお！

第二百八話 本能と理性の狭間

第二百九話 呼ばれて飛び出て「フアフアフアッ!？」

第三百十話 動物好きに悪い人はいません

第三百十一話 守護者はいつも命がけ

第三百十二話 英雄の資格

第三百十三話 違った道 取り返しのつかない道

第三百十四話 触れるな危険！

第三百十五話 ドラゴン怒りの鉄拳

第三百十六話 シーリング・ブレイク

第三百十七話 彼はあと二つの枷を残しています

第三百十八話 解き放たれしは太陽の牙

第三百十九話 英雄の皆様はお帰りになるようです

幕間その五 もう一度やり直す為に

第二百二十話 リザルト

第九章 学園祭のライオンハート

第二百二十一話 重要度・・・測定不能

第二百二十二話 そうですわたすが鋼の救世主(泣)です

832

839

845

853

860

866

875

884

895

904

912

926

936

951

959

966

976

981

996

1008

1017

1026

1032

第二百二十三話 背負い続けるという事

第二百二十四話 YESロリータ NOタッチ

第二百二十五話 目標は大きく持ちましょう

第二百二十六話 足りない物は他の部分で補えばいいんですよ

1055

第二百二十七話 ネガティブはネガティブを呼ぶ

第二百二十八話 モブだからって無礼るなよ

幕間その六 滅びへのカウントダウン

第二百二十九話 ようこそ我が家へ

第二百三十話 赤と白

第二百三十一話 龍神様と遊ぼう！

第二百三十二話 天然の恐ろしさ

幕間その七 やっぱりトツプは辛いよ※ただし一名は欠席

第二百三十三話 それお願いちやう脅迫や

第二百三十四話 祭り・・・それはリア充達の巣窟である

第二百三十五話 あなたは食べる派？それとも遊ぶ派？

第二百三十六話 それは小さいけれど大きな変化

第二百三十七話 失敗から立ち上がるからこそ価値がある

第二百三十八話 せきりゆーてーが託されたもの

第二百三十九話 悪魔よ！これが騎士（笑）だ！

第二百四十話 努力を笑う者は本当の努力を知らない

第二百四十一話 覚悟はいいか？オレは出来てる

第二百四十二話 姉の想いと未来の私

第二百四十三話 グレモリーVSバアルその裏で・・・

第二百四十四話 やっぱり必殺技にはカッコいい名前を付けたい

1222120911971189118211761167115811391131112411191110110110921083107810711063

104910421038

第四百四十五話 男の戦い

第四百四十六話 夢の形

第四百四十七話 紅の龍帝と金色の獅子王

第四百四十八話 自分REST@RT

第十章 殲滅必至のナイト・オブ・フューリー

第四百四十九話 伊達に人生経験積んでませんから

第四百五十話 試験で結果を出したいなら毎日の積み重ねが大事で

す

第四百五十一話 目と目が合う瞬間

第四百五十二話 家族に乾杯

第四百五十三話 信頼を得るのは大変だが失うのはとても簡単であ

る

第四百五十四話 堕ちた英雄

第四百五十五話 騎士(笑)の時間旅行

第四百五十六話 抵抗は正当な権利です

第四百五十七話 マスクドナイト・笑

第四百五十八話 後ろ向きに前進DA!

第四百五十九話 そして世界は彼を失った

第四百六十話 受け継がれる遺志

第四百六十一話 反撃の狼煙

第四百六十二話 今の僕達には勢いがある

第四百六十三話 闇の目覚め

第四百六十四話 キミの中の英雄

第四百六十五話 Birthday

第百六十六話	騎士(笑)と魔人	1489
第百六十七話	痛み	1499
第百六十八話	紅き覇を越えて	1510
第百六十九話	D×D	1520
幕間その八	冥界に蒼いローブが舞い踊る	1531
第百七十話	もうどうにも止まらない	1541
第百七十一話	正義なんかでは無い	1551
第百七十二話	いともたやすく行われるえげつない行為	1568
第百七十三話	Guardian (Fallen) Angel	1578
第百七十四話	父として	1589
第百七十五話	凶兆	1607
第百七十六話	自分らしく誇らしく	1618
第百七十七話	同じ意志の下で	1625
第百七十八話	なりたい自分になっていいんだよ	1633
幕間その九	勇者とは勇ある者だけではなく人々に勇気を与える	1644
者の事でもある		1644

プロローグ 異世界転生のイミテーションナイト 第一話 オカんな神

(あれ、俺どうしたんだっけ…)

寝起き直後のように頭がぼんやりする。視界が真っ暗で何も見えない。って、ただ目を瞑っているだけか。

「朝やで！ はよ起きんさい！」

突然の声に意識が急速に覚醒する。それと同時に湧きあがる疑問。今の声の主は何者なんだろう。自分にそんな言葉をかけてくれる人は、もう何年も前に亡くなっているというのに。

そんな事を考えながら目を開ける。そこにはどこまでも真っ白な空間が広がっていた。前も右も左も上も下も、その全てが白かった。ここはどこだろう。俺は確かコンビニに向かったはずなんだが。

「はあ、やっと起きたんかいな。このまま目を覚まさんかと思っておばちゃんめっちゃ心配したで」

唯一確認していなかった後ろからまたあの声が聞こえた。少しだけ緊張しながら後ろに振り返る。そこにいたのは、パンチパーマをあて、エプロンを纏い、買い物袋をひじにひっかけ、ニコニコした顔で自分を見つめている中年女性が立っていた。

「…オカン」

それが自分がこの人に抱いた第一印象だった。うん、我ながら、第一印象がオカンとはどういう事かと思うが、それしか思いつかなかつた。この人はオカンだ。誰が何と言おうとオカンだ。

そんな事を考えている俺の前で、オカンは笑顔を崩す事無く再び口を開いた。

「ああ、ゴメンなあ。けど、心配せんといて。おばちゃん、怪しい者やないで。おばちゃんな、こう見えても神様なんよ」

「…はい？」

「せやから、おばちゃん神様なんよ。見た目はこんなんやけど、結構凄いいんよ。神様にも順位みたいなモンがあつてな。おばちゃんはその

第三位なんやで」

「はあ…。その神様が俺に何の用なんですか？」

そう尋ねると、オカンは若干の戸惑いが籠った表情を浮かべた。

「…アンタ、おかしいとか思わんの？ 正直、いきなり神様だとか名乗ったら引かれるかと思うたんやけど」

まあ、普通は関わろうとは思わないわな。変な壺とか買わされそうだし。だけど、自分は疑う事が好きではない。だから、この人が自分を神だというなら、この人は神なのだろう。それに、放っているオーラとでも言おうか、とにかくそれもどこか人間離れしている。

そう答えると、自称神のオカンは懐からハンカチを取り出すといきなり泣き始めた。なんか、「アンタ、ほんまにええ子やなあ」とか言われてしまった。

「ええっと、とりあえず聞きたいんですけど。ここはどこで、俺はどうしてここにいますか？」

すると、オカンは神妙な面持ちになり、衝撃的な答えを口にした。「アンタは死んだんよ。トラックに轢かれそうになった子どもを飛ばってたな」

オカンの言葉に急速に記憶が蘇って来た。そう、始まりは部屋の押し入れの整理をしていた時だ。俺こと神崎亮真は奥の方から懐かしい物を発見した。それは、ゲームボーイアドバンスと、それに差さっていたスーパードット大戦Jだった。懐かしさに駆られた俺は、久しぶりにプレイしようと、電池を買いにコンビニに向かっている所で道に飛び出した子どもとそれに迫るトラックを目撃し、そして子どもを突き飛ばした瞬間、かつてない衝撃を受けて――。

自分は死んでしまった…。だがどうしてだろう。それほどショックでは無かった。それよりもあの子の事が心配だ。自分はちゃんと助ける事が出来たのだろうか。

「それは心配せんでもええで。アンタのおかげであの子は助かった。まあ、突き飛ばした時に膝をすりむいたみたいやけど、それだけや。ちゃんと五体満足やで」

「そうですか。はは、死んだ甲斐がありましたね。それで俺は神様の

所に来たってわけですね？」

「その通り。そしてここはおばちゃんが作った『転生の間』。選ばれた人間に第二の人生を歩ませる為の場所や」

「…という事は、ここにこうして立っている俺はあなたに選ばれたと？」

「そうや。ここはおばちゃんに認められた人間にしか来る事が出来へん神聖な場所なんよ」

その神聖な場所にどうして自分がいるのかがわからないのだが。首を傾げる俺の前で、オカンはまたハンカチ片手に語り出した。

「おばちゃんな、アンタの最後に感動したんよ。最後だけやない。アンタの歩んで来た人生全てに感動したんよ。アンタの人生は『人を助ける』為に使われた。私欲の為やない。ただ一心に相手の為を思つての行動におばちゃんはハンカチが手放せんかった」

人助け…。まあ、確かに自分は知人、他人問わず多くの人の力になった。それこそ、お節介、お人よしと呼ばれるくらい。だけど、それは自分にとっては当然の事だ。

自分がこんな性格になったのは、両親の影響によるものだ。父も母も自分以上に他人の為に生きる人間だった。そして…最後は他人の為に死んだ。

二人を喪つた直後は、あらゆるものを憎んだ。けど、すぐにそれは間違いだと気付いた。それは、父と母の生き方を否定するものだったから。

父はよく言っていた。「困っている人がいたら、よほどの事が無い限り助けてあげなさい。それがお前自身の幸せに繋がるはずだ」と。

そして決めた。自分も他人の為に生きようと。どんな小さな事でも困っていたら力になろうと。それが、あのどうしようもないくらいお人よしだった二人の息子である自分の役目だと。

ふと気がつく、先程よりオカンの泣き声が大きくなっていた。涙は滝のように流れている。凄い。マンガみたいだ。

「アンタ…アンタどこまでええ子なんや！ おばちゃんアンタの事大好きになつてしもうたわ！」

それは光栄だが、今のは胸の内の言葉で実際に口にはしていない。なのはどうしてこんな反応を…。

「グスツ…。あ、この空間では何を考えとるか全部おばちゃんに伝わるといふことよ」

という事は、さつきまでの考えが全て筒抜けになつていたのか。いや、決して不快ではないが、なんかというか恥ずかしい。

「何も恥ずかしがることなんかない！ おばちゃんもアンタみたいな息子が欲しかったわ」

神様にも子どももっているのだろうか。…と、話がだいぶ逸れてしまった。とにかく、自分はこのオカンに認められたらしい。だが、第二の人生とはどういう意味だろう。

「そのまんまの意味やで。死んでしまった人間に再び生を与えるんや」

では、自分は生き返る事が出来るか？

「ただ、一つだけ制限があるんよ。同じ世界には戻れない。必ず別の世界で生き返ってもらつていうな。せやけど、それを差し引いてもおつりが来るくらいのビッグな特典が付くんや！」

特典？

「その特典というのは…『あらゆる望みを叶えての転生』が出来る権利や！ 力が欲しければ力を、金が欲しければ金を、異性が欲しければ異性を、とにかく望むもの全てを手に入れての転生を約束するで！」

なるほど…ならば、自分の答えはノーだ。

「…え？」

ポカンとするオカン。…ポカンとオカンで似てるな。まあ、響きだけだが。

などどうでもいい事を思い浮かべていると、オカンが戸惑った様な表情を見せた。

「の、ノーってどういう事やの？ …あ、もしかして脳？ わかった！

天才的な頭脳が欲しいって言うわけやな！」

「違います。何もありません。普通でいいです」

またしてもポカンとするオカン。やっぱりポカンとオカンって（以下略）。

「な、何で!? ホンマに何でも手に入るんやで!？」

望めば何でも手に入る。それは確かに魅力的だが、それは平凡な自分にとっては分不相応な権利だ。平凡な自分には平凡が一番似合うというものだ。

「それより、俺が死んだ事をあの子が負い目に感じないようにしてあげてください」

そう伝えると、オカンはまた泣きそうな顔になった。涙もろいんだな。

「アンタ、こんな時くらい自分の願い言ってもバチ当たらんやで！」

それも叶えたるから、アンタ自身の願いを言い！ 三つや。三つまで叶えたるから！」

だから、それが俺の願いなんですけど。なんかもう、言わないと梃子でも動かんぞ！ って感じになってるな。

三つの願いか…うーん、とりあえず無難なところでいってみるか。

「わかりました。では願いを言います。次は長生きしたいので、健康な体にしてもらえるとありがたいです。それと、どんな世界に送ってもらえるか知りませんが、出来れば平和な世界でお願いします。最後は、その…ちよつとでいいんで、カツコよくしてもらえたら嬉しいです」

最後の願いだけ情けない気がするが、オカンは任せるとばかりに胸を叩いた。

「わかった。なら、今からアンタを転生させるからそこに横になり」

指示通り体を横たわらせるとオカンが何やら祈り始めた。同時に自分の体が少しずつ光り始めた。…なんだろう。眠くなって来た。

と、いきなりオカンが叫んだ。何を我慢していたのだろう…などとぼんやりして来た頭で考えてみたりする。

「アンタは人の為に生きて来た！ なら今度こそ自分の幸せの為に生きるべきや！ というわけで、おばちゃんからアンタにプレゼントや！ 楽しみにしとき！」

(プレ：ゼン：ト？ 何だ：ろ：う)

その言葉を聞きながら、俺は意識を手放したのだった。

S I D E O U T

オカン S I D E

「さてと、どんな世界に転生させてあげようかねえ」

悩むウチの頭に、ふと妙案が浮かんだ。ウチ以外の神も気に入った人間を転生させとるけど、最近は「あにめ」とか「げーむ」の世界に転生させて欲しいというのが多いらしい。ほんなら、ウチもそのぶーむに乗っかってみるのもええかもな。

「とはいえ、たくさんのおにめやげーむからあの子が喜びそうな世界を見つかるんは大変そうやな」

あの子、あの性格やから、あまり青春も謳歌出来へんかったみたいやし、そこら辺の事を考慮してあげんとな。

「：ん？ これなんかええんやないの」

『ハイスクールD×D』：わぎわぎタイトルにハイスクールなんて付けとるんやから、きつと楽しい学園生活が送れるはずや。

「よし、決定や！」

こうして、ウチはろくに内容も確認せんと、あの子を転生させた。

第二話 目覚めたら騎士になってました

さて、自称神様のオカンに転生させてやると言われ、再び目覚めた俺は、たくさんの木々に囲まれた場所にいた。見渡す限り、本当に木しかない。そして空を見上げると、そこは紫一色だった。

「…紫？」

んー、おかしいな。俺の知る空ってこんな色じゃ無かったはずだけど。これじゃまるで、別世界みたいじゃないか。…って、その別世界とやらの転生したんだっけ。

『おーい、聞こえるかー？』

オカンの声だった。だが、声はすれども姿は見えず。まさか、幻聴？

『幻聴ちゃうよ。こっちからアンタに声を届けとるだけや』

「電話みたいなものですか？」

『そういうことや』

「さすが神様。で、俺は一体どんな世界に転生したんですか？」

『ええっと、ハイスクールD×Dとかいう世界や』

ん？　なんか聞き覚えがあるような。…ああそうそう、ラノベだらノベ。友達の一人が愛読してたから名前だけ知ってる。ええと、確かそいつ曰く、「おっぱい」「パワーインフレ」「オーフィスたんprpr」な小説だとか。うん、さっぱりわからん。

「俺、平和に暮らせる世界に行きたいってお願いしたんですが。というか、何故にラノベの世界？」

パワーインフレなんて単語が出る時点で、普通の世界じゃないはずだ。

『うん、せやからその世界にしたんよ。ハイスクールなんてタイトルやから、きつと楽しい青春が送れると思ってな』

ううむ、彼女なりにちゃんと考えて俺をこの世界に送ったみたいだ。だがしかし、一言言わせてもらおう。

「あの、どういう内容の世界か確認とかしました？」

『ん？　してへんよ？』

「ああ、やっぱり…」

項垂れた俺に何か感じたのか、オカンの声にちよつとした焦りが混ざった。

『あ、あの、ウチ、なんか勘違いしとった?』

「今からでも確認してみてもらえますか?」

『わ、わかった! ちよつとまっとき』

そして数分後、オカンの口から発せられたのは…。

『勘忍や! ホンマに堪忍やああああああ!!』

心からの謝罪であった。にしても、この短い時間でどうやって確認したんだろうか。もし小説を全巻読んだとしたらもの凄い早さだな。神様なら本の内容くらい読まなくても理解できそうだけど。

「まあ、来てしまったものは仕方ないですよ。それに、勘違いしてたとはいえ、真剣に俺の事を考えてくれた上でなんですから」

『うう、アンタの優しさが今は辛い。…いや、泣いとる場合やない! こうなったら、アンタがその世界で平和に暮らせるよう、おばちゃんがアンタを強くしたる!』

涙声かとおもったら、いきなり気合いの入った声を出すオカン。しかし、具体的にはどうしてくれるんだろう。

『まずはアンタの体や。アンタが望んだ「丈夫な体」。本当は病氣や毒にかからない体にしようと思っただけど、さらにその世界で最強の存在に最強の一撃を受けても皮がささくれる程度にしかないようにしたる。本当ならおばちゃんと同じ神の体をあげたかったんやけど、流石にそれは認められへんから堪忍や』

申し訳なさそうに説明するオカン。いやいやいやいや! それだけで十分というか、やり過ぎだし! それってつまり、この世界で俺を傷付ける事の出来る存在は皆無と言っても過言じゃないって事だろ! それとも、それくらいししないとすぐさま死んでしまうくらい物騒な世界なのか!? ええい、こうなるならアイツに小説貸してもらっておけばよかった!

『次もアンタが言った、イケメンに生まれ変わりたいって願いやけど、これは口で説明するより、実際見てもらった方がええな。今から手鏡

送るから自分の顔確かめてみ』

目の前がぐにやりと歪んだと思ったら、そこから小さな手鏡が出て来た。言われた通りそれを覗く。その瞬間、俺は驚きのあまり目を見開いた。

「…フアツ!?!」

そこには、明らかに自分とは違う青い髪のイケメンの顔が写っていた。そして、俺はその顔に見覚えがあった。本来あるはずの（刺青？ 痣？ 化粧？ 何でもいいか）部分が無く、顔だちも少しだけ若い感じがするが、この顔は間違い無く…。

「アルⅡヴァンじゃん!」

俺の顔は、スパロボのオリキャラ、アルⅡヴァンになっていた。

アルⅡヴァン。フルネームはアルⅡヴァン・ランクス。スーパードボット大戦Jに登場する、オリジナル敵組織『フューリア騎士団』の騎士で、所謂主人公のライバルポジションのキャラだ。ライバルというには、中盤から終盤まで登場しなかったりして、影が薄い気がするが、正直、男主人公の統夜よりも好きだった。

まあ、理由としては、一緒に乗るパートナーの三人娘とハーレムする統夜がムカついたから。このJという作品、恋愛要素が他の作品より強い。統夜を主人公にした場合、好感度が一定値を超え、なおかつ一番高い一人と最終的に恋人関係になる。え？ なら好感度が低かったら誰ともくっつかないんじゃないのかって？ 甘い、甘すぎる。個別エンド条件を満たさなかった場合、ノーマルエンドという名のハーレムエンドを迎える事になるのだ。恋人にこそなっていないが、明らかに三人とも統夜に好意を抱いている様子だった。

その点、アルⅡヴァンは容姿もカッコいいし、同胞達の為に戦う姿はいかにも「騎士」で好きだった。それに俺と同じで彼女もいない…いや、女主人公のカルヴィナと恋仲だったつけ。ええい、こいつもリア充だったか!

…はっ! つい話が脱線してしまった。それで、どうしてこんな事になってしまったのか、オカンに聞かなければ。

『一言でイケメンっていつでも色々あるやろ? こっちで考えたイケ

メンがアンタにとってもイケメン……ってわけにならんかもしれんし。ならいっそ、アンタのイメージするイケメンにしてしまおう思うてな。アンタが死ぬ直前に抱いていたイケメンを参考にさせてもらったんや』

なるほど、そういう経緯があつたのか。言われてみれば、あのコンビニに向かう道で、Jのキャラクター達について考えてた覚えがあるような。その中からアルⅡヴァンを選んだって事か。……よかった。これでグⅡランドンとかになってたらそれこそ俺自身が「絶望せよおおおおをを！」な事になってたに違いない。

「そういえば、なんか目線も少し高いな。もしかして、顔だけじゃなく、体も？」

『元の方がよかつたか？』

「いや、こつちでいいです」

『どうやら気に入ってもらつたようで何よりや。なら三つ目は戦う力やな。何が欲しい？ おぼちゃん、何でも用意したるで』

力か……。うーん、やつぱり、アルⅡヴァンといつたら、彼の乗るラフトクランズだよな。あの強さは今思い出しても凄まじいの一言だ。剣、盾、銃全てを装備しているので、切り払い、シールド防御、そして今は亡き撃ち落としが可能。何よりも、バリア、分身、地形に影響されず常に最大の移動力が得られ、さらにエネルギー回復の効果まで持つ「オルゴン・クラウド」は最早チートである。条件を満たせば主人公も乗れるが、そうなるとラスボスは主人公一人で倒せてしまう。それくらい強かつた。

それと、時を止める時間兵器ラースエイレムと、それを無効化するラースエイレムキャンセラーという物も装備されているが、これはストーリー専用装備なのでそこまで印象に残るようなものではない。まあ、実際はトンデモ兵器なのだが。

見た目もカッコいいし、武器もバランスが取れている。その中でも特に印象深いのは、二つある携行武器の一つであるソードライフルから放つオルゴンライフルだ。

このラフトクランズという機体は全部で四機存在し、それぞれの機

体で特定の武器が専用アニメーションとなっている。その中で、主人公機と、アルⅡヴァンと同じ『フューリア騎士団』の女性騎士フルーのラフトクランズの専用アニメーションの武器がオルゴンライフルになっている。流れとしては、明らかに銃口とは不釣り合いな極太のエネルギー波を発射。直後オルゴンクラウドを発動させ一瞬で敵機の背後に移動し、再度発射。前後からの極太エネルギー波が敵機を押し潰す様に飲み込む様は、初めて見た時思わず嘔き出した。

——これ、HPとか関係無く即死だろ！

そういうわけで、ラフトクランズに乗れたら最高なのだが、アルⅡヴァンで無い俺に操縦できるはず無いし、そもそも操縦出来たとしてもあんな巨大なロボットを置く場所など無い。そうなる諦めるしか…。

『ああ、そんなら、アンタ自身がそのロボットになればええやん』

どういう意味だと聞き返そうとしたその時、突然俺の体が光ったかと思えば、次の瞬間、俺の腕は深蒼色の装甲に包まれていた。腕だけじゃない。足も体も、そして顔も、全てが同じ物に覆われていた。

「こ、これは?」

『アンタが言ったロボットをアンタにも使えるように小型化したモンや。ま、鎧みたいなモンだと思ってくれたらええ』

地面に置いてあった手鏡をまた覗くと、そこにはアルⅡヴァンの顔では無く、ロボット…ラフトクランズの顔が写っていた。

「マジで…マジで俺、ラフトクランズになっちまったのか!」

『んー、ちよつと違うな。それは限りなく本物に近い贋作って言った方がええかもな。やろうと思えば本物にする事も不可能やないんやけど』

テンションの上がっていた俺は、オカンの言葉に首を傾げる。出来るのならなんでわざわざ贋作にする必要があるんだ?

『ええか。本物…すなわち完成品はそれ以上変化する事は無い。当然や、完成しとるんやから。せやけど、贋作…どれほどやっても本物として完成する事の無い物は、どこまでも変化していく事が出来る』
「えーつと…どういう事ですか?」

『完成してしまった本物には出来ない事でも、贋作には出来るって事や。そうやな・・・例えばアンタのその鎧、元になったロボットは一本しか剣を持ってなかったみたいやけど、アンタの場合、それを二本持てたりとか』

「・・・つまり、永遠に完成する事の無いって事は、永遠に変化・・・言い換えれば強化していく事が出来るって事ですか？」

『そう言う事や』

しれつと言うけど、それって滅茶苦茶凄い事なんじゃないのか？

つまり、俺の考え次第で、ゲーム以上のチート機体に強化されていくって事だよな。おいおい、これ以上チート化したらそれはもうチートじゃなくてバグじゃないのか？

『満足してもらえたか？』

「え、ええ。むしろやり過ぎだと思ってくらいに」

『それはよかった。もう一つ、その世界に送ってしまったお詫びに願いを一つ叶えたるけど・・・なんかある？』

「うーん・・・正直、すぐには思いつかないんで、保留にさせてもらっていますか？」

『ええよ。いつでも言ってくれてかまへんからね。・・・それで、実はもう一つ謝らなあかん事があるんやけど』

え、このタイミングで？

『実は、アンタを送る座標を少し間違えてしもうたんよ。今再転移の準備をしとるんやけど、少し時間がかかりそうなんや。すまんけど、少し待つとつてもらえるか』

「あ、はいわかりました」

『ほな、準備出来たらまた連絡するな』

それを最後にオカンの声は聞こえなくなった。さて、連絡が来るまで何してようか。

「そういえば、この鎧がラフトクランズなら、空も飛べるのかな？」

ゲームのラフトクランズは飛行可能だったから出来るはずだけど。どうやればいいんだろう。

「スイッチとか無いし・・・念じてみるとか？」

飛ばせ！ と念じてみる。すると、背中のブースターから何かが噴き出すような音が聞こえた。その音は次第に大きさを増し、ある一定の大きさに達した瞬間、俺の足がゆっくりと地面を離れ始めた。

「お、おお！ すげえ！俺、浮かんでる！」

興奮している間にも、俺の体はどんどん浮かび上がり、地面から十メートル以上も離れてしまった。

「よ、よし！次は前進だ！」

さつきと同じように、進め！ と念じてみると、ガゴン！ と背中が音が出たと思うと、ゆっくりと前に向かって進み始めた。

どんどん加速し、自転車、原付、そして今は自動車くらいの速さで進んでいた。周りの景色が後ろに流れて行くのを眺めながら、俺は止まるよう念じた。だが、俺の体は止まるどころか益々加速していく。「ちよ、止まれ！止まれって！」

念じるだけでなく声にも出すが、止まらない。何故に!? 上昇、前進はすんなりいったのに何で止まらない!?

「止まれってコラ！止まってください！お願いします！」

最早泣きそうな俺。その時、前方に赤と白の何かが見えて来た。その周りでは爆発みたいなものが頻繁に起こっている。

「な、何だ……？」

猛烈に嫌な予感がしてきた。そして、その予感は見事に的中する事となった。近づくと大きくなくなっていく赤と白。その正体ははっきりとした時、俺は己が目を疑った。

威風堂々という言葉がそのまま形となったと思わせる巨躯。

何もかもをかみ砕いてしまふような凶悪な牙。

巨木ですら紙屑のように吹き飛ばしてしまうであろう尻尾。

その巨躯を軽々と宙に舞いあがらせる勇壮な翼。

俺がいた世界では空想の存在でしかなかったモンスター。

——— どう見てもドラゴンです。本当にありがとうございました。
「つて、マジかよおおおおおおおおおおおおおおおおお!!?!?!」

何だよアレ!? 何だよアレ!? 大事な事なので二回……つてそんな事言ってる場合じゃねえ！ これ、明らかに直撃コースだよね!?

と、とにかく何とかして逃れないと！

「曲がれええええええええええええええええええ!!」

どこぞの鉱山で働く少年のごとく叫びながら体を無理矢理ねじる。観る度に思うが、彼の身体能力も大概チートだよな。

すると、僅かにだがドラゴンに向かって右側へ進路がずれ始めた。よし、後はこのまま全速力で通り過ぎれば…!

ホツとする俺だったが、次の瞬間に凍りついた。なんと、今度は前方にフリフリな服を纏いステッキを持った魔法少女？ らしき姿を確認してしまった。何故魔法少女？ とか、なんか羽みたいなの生えている？ という疑問は今が全力で放り投げる。このままだと今度はあの魔法少女にぶつかってしまう。しかも向こうは気付いていないっぽい。ぶつかれば間違い無くあの魔法少女は大怪我、最悪死んでしまうかもしれない。せつかく生き返ったのに殺人犯になるのは絶対嫌だ。

(ならやる事は一つ。ぶつかる直前にあの魔法少女を抱えあげるしかない！)

距離的に避けるのは不可能だと判断し、俺はそう決めた。タイムミングが狂えばアウト。しかもチャンスは一度きり。転生前の俺なら絶対に失敗しているだろうが、今の俺はアルⅡヴァン！ 騎士なのだ！ (俺は出来る！ 俺は騎士！ ほら、諦めんよ、もつと熱くなれよおおおおおおお!!)

自分で自分を鼓舞しながら意識を集中する。魔法少女まで残り五メートル…四メートル…三メートル…二メートル…一メートル…! 「え？」

(魔法少女ゲットオオオオオオオオ!!)

加速したまま、魔法少女を抱きしめる。直後、背後を赤いドラゴンの吐いた炎が通り過ぎて行った。

冷や汗が流れる。もし自分がいなかったら、この子は今の炎に呑み込まれていたかもしれない。

知らずも人命救助を果たしてしまった俺。そして、一向に言う事を聞かなかったブースターが、ドラゴンから数十メートル離れた所でよ

うやく停止した。

(や、やっと止まった…)

あのまま止まらなかつたら、俺、この魔法少女と一緒にどこまでも飛び続けてたんだよな。…うん、誰がどう見ても誘拐だよな。マジで止まってくれて助かった。

安堵しつつ、抱きしめたままの魔法少女を見下ろすと、がっちり目があった。

「あ、あの、あなたは一体…」

いや、うん、当然の疑問だよな。だがしかし、ここで素直に本名をバラすのは何だかマズイ気がする。

「…フューリー」

だから、とつさにアルⅡヴァンの種族名を口にした俺は間違っただけだった…はず。

第三話 絶望の戦場に舞い降りた騎士

さて、無事に激突を回避したはいいが、これから…というか、この子どうしよう。

「フューリー…さん？」

腕の中の魔法少女が呟く。うーむ、改めてみるとこの子結構、いや、かなり可愛いんですけど。あどけない顔に不釣り合いな二つのふくらみにも目がいきそうになるが、紳士な俺はさつと視線を逸らした。

「セラフォルー！」

と、そこへ唐突に聞こえて来たイケボイスに目を向ければ、そこにはやっぱりイケメンがいた。うぬ、イケメンは滅びろ！

「サーゼクスちゃん」

魔法少女がイケメンに顔を向ける。察するに、この子の名前がセラフォルー。イケメンの名前がサーゼクスかな。どうよこの名推理！え？ 誰でもわかるって？ ですよー。

ま、なんだか知り合いみたいだし、ここは彼に任せよう。

「この子を頼む」

「あ、ああ…」

なんか顔が引きつってるんですけど。はっ！ まさかさっきの嫉妬の呪詛が聞かれたのか!? 心の中で叫んだはずなのに無意識に声に出てたとか!?

よく見たら、イケメンの後ろにも何人か人がいるし、その人達も全員顔を引きつらせてる。やばい、まさか、あの人達にも聞かれたのか。白い翼の女性とか、黒い翼のダンディーなオジサマとか明らかに睨んでるし。あれか、イケメンの友達か何かか？ いきなり現れた変なヤツが友達に暴言吐いたから怒ったのか？

(…よし、逃げよう)

そもそも関わる気は無かったしな。うん、そうと決まればブースターを…。

「ふん。貴様も俺達の戦いを邪魔しに来たのか？ 先程の殺気、どうやら他の連中よりはマシなようだが、雑魚がいくら増えようが同じ事

サーゼクスSIDE

天使、墮天使、そして僕達悪魔からなる三大勢力による戦争は長い年月が経つ事により泥沼と化していた。戦争が始まった理由は何なのか、それは誰にもわからない。ただ、このまま続けば、犠牲者のみが増え続け、いずれは全てが滅びてしまうだろう。

そんな戦争にある時転機が訪れた。二天龍と称される『赤龍帝』ドライトと、『白龍皇』アルビオンが突如として争いを始めたのだ。その争いの余波は三陣営全てに甚大な被害をもたらした。

この状況で戦いを続けるほど、僕達は愚かでは無かった。すぐに停戦協定を結び、僕達は協力して二天龍を止める為動き出した。

そして今日、僕達は決着をつける為、二匹が争う場に乱入した。当然、戦いは熾烈を極めた。既に百人以上が犠牲になっているが、それでも僕達は止まらない。今日で全てをおわらせるんだ！

戦闘の最中、同じ悪魔で友人でもある、セラフオール・シトリーを、ドライトの剛爪が襲った。その一撃を何とか防ぐセラフオールだったが、ドライトと目を合わせてしまい、恐怖で固まってしまった。

無理も無い。相手はあの『赤龍帝』だ。恐怖を抱かない者の方がおかしい。だが、戦場で動きを止めれば待っているのは『死』である。

「くっ！ セラフオール、逃げろ！」

叫びながら、彼女を助けに向かう。だが次の瞬間、彼女の姿はそこからかき消えていた。そして、彼女がたった今までいたその場所を、ドライトの吐いた炎が包みこんだ。

(セ、セラフオールは?!)

辺りを見渡す。すると、少し離れた場所に彼女はいた。…いや、厳密に言えばそこにいたのは彼女だけでは無かった。

(何だ、アレは…?)

全身、それどころか顔すらも全て覆う深い青色の装甲を纏った何か、背中から青白い光を吹き出しながら、セラフオールをその胸の中に抱いていた。

その異様な姿は…機械で出来た人形とでも言えばいいだろうか。

この決戦の為に新しく作られた兵器か？ …だが、天使、墮天使からそんな話は聞いていないし、もちろん、悪魔も知らない。

僕は警戒しながら近付いて行つた。セラフオールを助けてくれた事には感謝するが、得体の知れないものを信用するわけにもいかない。気になつたのは僕だけじゃないらしく、天使や墮天使達の何人かも機械人形の方へ近づいて行つた。

「セラフオール」

「サーゼクスちゃん」

セラフオールが僕に気付き、続いて機械人形もその無機質な顔を僕に向ける。

——その瞬間、僕を圧倒的なまでの殺気が襲つた。

放つたのは間違い無く、この機械人形だろう。僕が警戒心を抱いている事に気付いたのだろうか。「お仲間を助けてやった恩人への態度か？」まるでそう言われているような気がした。他のみんなも殺気に向けられたのか、さらに警戒を強めたみたいだ。

「この子を頼む」

しゃべつた!? という事は、これは人形などではなく、鎧か何かなのだろうか。一体何者なのだろう。相当な実力者だとは思うが。

「あ、ああ…」

声からして、男性なのは間違いなさそうだ。セラフオールを引き寄せるわずかな間に、僕はそんな事を考えた。

すると、用は済んだとばかりに、彼はドライグの方へ顔を向ける。そんな彼に対し、ドライグが口を開く。

「ふん。貴様も俺達の戦いを邪魔しに来たのか？ 先程の殺気、どうやら他の連中よりはマシなようだが、雑魚がいくら増えようが同じ事だ」

絶対的な強者のセリフ。だが何故だろう。その声に若干の緊張が込められている気がした。ドライグの言葉を聞いても、彼は答ええない。「やってみろ」とでも言わんばかりに、ただ無言でドライグを見つめ続けている。

「いいだろう。まずは貴様から消してやる。塵一つ残さずな！」

言うや否や、ドライグの口から炎が漏れ始める。それを見た僕はすぐに指示を出した。

「ッ！ 散開!!」

セラフォルーと共にドライグから離れたつつ、彼の様子を伺おうと首だけ動かして後ろを見た僕は目を見開いた。彼は逃げるどころか、その場から一步も動いていなかったのだ。

「馬鹿な!? 死ぬ気か!？」

「早く逃げろ!」

どこからかそんな声が聞こえて来る。しかし、その声が聞こえていないのか。それでも彼が動く事は無かった。

「フューリーさん！ 逃げてええええええ!!」

「死ね!」

そして、隣にいるセラフォルーの叫びも虚しく、彼：フューリーはドライグの炎に飲み込まれていった。

「あ、ああ……!」

「セラフォルー!」

崩れ落ちそうになる彼女をとっさに支える。当然か。さつき自分を助けてくれた人物が目の前で殺されたのだから。

「ふははははは！ 雑魚が粹がるからこうなるのだ！ さあ、次に死にたいのは誰：ファツ!？」

「え……!？」

「なん……だと!？」

驚愕の声を発するドライグ。いや、ドライグだけでは無い。僕、セラフォルー、そして残りのみんなも声さえ出さなかったが、全員が目を見開いてた。

何故なら、ドライグの業火の中へ消えたはずの彼が、先程とまったく変わらずそこへいたからだ。その鎧は燃え尽きるどころか、焦げさえついていないように見えた。

いや、一ヶ所だけ違う所があった。それは彼の右手。そこには一本の剣が握られていた。鎧と同じ青色のそれは、剣と銃を組み合わせたような特異な形状をしていた。

「俺の炎を受けても無傷だ?! 貴様! 何者だ!?!」

信じられないといった表情のドライグを尻目に、彼は感触を確かめるように剣を振るう。その動きは一切の無駄が無く、まるで剣舞を見ている様だった。

それを終えると、彼は剣を構えながら改めてドライグと対峙する。そして、先程までの沈黙を破り、静かに口を開いた。

「騎士として、貴様等の所業を許すわけにはいかない。我が剣、ラフト克蘭ズによって、貴様等をヴォーダの闇に還してやる!」

それは、絶望が支配する戦場において、等しく皆の心を奮い立たせる力強い凱歌のようであった。体が、心が、自分を構成する全てが熱くなつていくのを感じる。気力がみなぎり、自然と拳を握りしめる。横を見れば、セラフオルーも興奮しているらしく、頬が赤い。

「彼に…騎士に続くんだ!」

彼と一緒に戦いたい! そんな思いに支配され、僕は今一度戦いの場へ舞い戻った。

だから僕はちつとも気付かなかった。セラフオルーが頬を赤くしていたのには別の理由があり、彼を見つめるその瞳がやけに潤んでいた事に。

第四話 教えてアルⅡヴァン先生！〜戦闘編〜

(オワタ…)

迫り来る灼熱の炎を呆然と見詰めながら、俺は胸の内ですう呟いた。きつと今鏡を見れば、本編では見れなかったアルⅡヴァンの間抜け顔を見る事が出来ただろう。

こうして、二度目の生を授かった俺は、僅か一時間足らずで二度目の死を迎え…なかった。

全身を包む炎は確かに熱い。だが、その熱さはせいぜい風呂に入った程度にしか感じず、むしろ心地よかった。ただそれだけ。俺の体は今も炎の中で健在だった。

『おーい、いつまで固まっとるん?』

「あ、オカン!」

『はい?』

はっ、しまった! つい呼んでしまった! やばい、神様に対して失礼な呼び方をしたんだから、怒られる…というか天罰受ける!?

『アンタ、何でウチの名前がオ・クアーンやって知っとるん? ウチの記憶が正しければ教えた覚えないんやけど』

まさかの事実! ピツタリ過ぎて逆に笑えねえよ!

『ま、ええわ。それより、どうや? 新しい体は? 今のアンタなら、あの赤トカゲちゃんの炎なんて屁でもないやろ』

おおう、ボスクラスのドラゴンをトカゲちゃん呼ばわり。さすが神様。いや、けど正直、オカンのおかげで助かった。やり過ぎとか思ってたさっきの自分に今の状況を見せてやりたい。

『さあ! これで恐れるもんは何もあらへん! 反撃や!』

「いやいや、ちよつと待ってください! 反撃って言ったって、どうすればいいんですか!」

『そのロボットの武器で戦えばええやん』

「あのですね。高校の選択授業で剣道やったくらいの人間が剣なんてまともに扱えるわけないでしょ」

体はアルⅡヴァンでも中身は俺なのだ。彼の様な戦い方が出来る

筈も無い。そう言うと、オカンは何でも無い様な感じで答えた。

『なら、早い話、その人物の戦いの経験や知識をアンタに授けられたいわけやな。そう言う事なら任しときー!』

「何を…ッ!?!」

その瞬間、猛烈な頭痛が俺を襲った。何かが無理矢理頭の中に流れ込んでくる。知らないはずの剣の型、自身よりも巨大な相手との戦い方。それは彼…アルⅡヴァンが騎士として己を磨き続けた技術であり、経験であり、知識であった。

「わかる…。剣の振り方が。戦い方が。この体の動かし方が!」

…あれ、おかしいな。今俺、「すげえ! 今なら何でも出来そうだ!」って言おうとしたのに、何でこんな口調になってんの?」

『あらら、ちよつとふいーどばつくし過ぎたみたいやな。口調も元の人物と似た感じにしてしもうた』

「なるほど。しかし、よくそんな言葉を知っているな」

おお、なんかアルⅡヴァンっぽいぞ俺。…なんて言ってる場合じゃない! ちよ、何とかならんのか?! 口調はカッコイイのに中身がこれじゃ逆に恥ずかしいんですけど。

『ふふん。ウチは神の中でも、いんてり』やからな。さあ、これで戦えるやろ。頑張りや!』

ええい! こうなったらヤケクソだ! 俺は無理矢理テンションを上げると、腰についていたソードライフルを手を取った。

そこで、ようやく炎の勢いが弱くなって来た。俺が死んだと思っているのだろう、赤ドラゴンが大声で笑いだした。

「ふはははは! 雑魚が粹がるからこうなるのだ! さあ、次に死にたいのは誰…フアッ!?!」

赤ドラゴンが驚愕の表情を見せる。ま、気持ちはわかるけどな。にしても、何故お前がああ先輩を知っている?

「俺の炎を受けても無傷だと?! 貴様! 何者だ!?!」

何者と言われても…ただの人間ですけど。それよりも、赤ドラゴンが驚いてる間に本当に戦えるのか確認しないとな。

ソードライフルを振ってみる。考える間も無く、体が勝手に動く。

縦に振り降ろし、横に薙ぎ、前に突き出す。それは洗礼された型であり、全くの無駄が無い。その美しい剣舞を他の誰でも無い、俺がやっているのだ。

「凄い！ 凄いよアルⅡヴァン！ いや、アルⅡヴァン先生！」

たった今から彼の事は呼び捨てでは無く先生と呼ぶ事にしよう。よし、ここは先生に肖って気合いの籠ったセリフを一つ！

「騎士として、貴様等の所業を許すわけにはいかない。我が剣、ラフト克蘭ズによつて、貴様等をヴォーダの闇に還してやる！」

：言つてから後悔した。何が騎士だよ！ 見た目だけのお前なんか騎士（笑）で充分だつての！ てか、ヴォーダの闇つてのが何なのかもわかつてないくせに何言つてんのマジで！

ああほら！ 赤ドラゴンが引いてる！ 二十四にもなつて中二病とかマジウケルんですけど！ とか思つてる目だあれは！

「彼に…騎士に続くんだ！」

穴があつたら入りたい。というか死にたい…。などと鬱つていると、またしても背後からあのイケボイスが聞こえて来た。

「「「うおおおおおおお!!!」」」

何事!? と思う暇も無く、続け様にとんでもない雄叫びが辺りに響き渡つた。いよいよ確認しないとマズイと思つた俺が振り返ると、あのイケメンを先頭に、何十、何百の翼を持った人達がこつちに向かつてもの凄い勢いで飛んで来ていた。

想像して欲しい。殺つてやる！ とでも言わんばかりの形相を見せる人達が大軍となつて自分に向かつて来る光景を。さっきの発言がそれほど気に食わなかつたんですか!? だからつてそんな大勢で袋叩きは残虐すぎるでしょうが！

フルボッコにされる姿を想像し震える俺…ではなく、その人達はみんなそのままあの赤ドラゴンに向かつて突つ込んでいった。

「滾る！ 滾るぞお！」

「勝つ！ 絶対にい！」

そんな気合いの籠つたセリフと共に赤ドラゴンに攻撃を加える人達。爆発が起こつたり、光り輝く槍がそれこそ大量に赤ドラゴンに突

き刺さる。

「ぐおおお!?、こいつら、先程とは気迫も力もまるで違う!?」
塵も積もれば山となるとでも言えればいいか。一つ一つの攻撃は、赤ドラゴンの体に比べればはるかに小さい。だが、それが何十、何百も重なれば、それは赤ドラゴンの体をたじろがせる程の威力となる。
「フューリーさん!」

その戦いをボケーッと眺めていた俺の所へ、あの魔法少女がやって来た。なんか顔が赤いけど、まさか、体調不良をおしてここにいるのか? あの赤ドラゴンを止める為に、そんな幼い年にも関わらず。立派だな。お兄さん感動しちゃった。

「ええい、調子に乗るなあああああ!!!」

赤ドラゴンが切れた。その太すぎる尻尾を俺の方へ向かって振り降ろして来る。

「ッ……!」

「ふあっ!」

やばい、このままだとこの子も巻き込まれる。とつさに魔法少女を左腕に抱き、俺はソードライフルを振り上げた。

(アル!!ヴァン先生舐めんなよおおおとおおお!!!)

そして、ただ力任せに剣を振り降ろした。次の瞬間、赤ドラゴンの尻尾が半ばから綺麗に切断された。

「があああああああ!!!」

斬り口から大量の血を吹き出させながら、赤ドラゴンが痛々しい悲鳴を上げる。

俺はというと、そんな赤ドラゴンを見つめながら内心驚きまくっていた。剣を振ったのはいわばテンションに身を任せただけで、いざとなったらこの無敵ボディで魔法少女を守るつもりだった。だが実際は、赤ドラゴンの尻尾を斬り飛ばしてしまった。

(なにこの威力!? 熱血か魂でもかかってんの!?)

「す、凄……!」

「ドライブのあの皮膚を紙のように……!」

もしくはフル改造済み!? どつちにしろ斬れる大きさはじゃないよ

ね！　いくらラフトクランズがチート機体だつて言つてもこれは異常だろ！　なんか周りの人達も驚いてるし…。

「貴様！　貴様ああああああああ!!！」

赤ドラゴンが血走った目で俺を睨む。怖っ！　だが、魔法少女の手前、ビビつてはいけない。ここは自分を奮い立たせる為にか何か言おう。

「我が剣に誓つて、この少女には指一本触れさせはしない！」

騎士（笑）とはいえ、巻き込んだの俺だし。それくらいの責任は持ちますよ。

「…素敵」

魔法少女が小さい声で何か呟いた。気になるが、それを確かめている暇は無い。とりあえずこの子を連れて下がろう。

「よし！　ドライグは僕達がこのまま抑える！　他のみんなは向こうでアルビオンと戦っている者達の援護に向かつてくれ！」

イケメンが指示を出す。アルビオン？　それって向こうで飛びまわつてるあの白いドラゴンの事か？　赤ドラゴンと違って空中を動きまわる白ドラゴンに、周りの人達も手こずつてるみたいだ。

（…って事は、あの翼を使えなくしたら戦いやすくなるわけか）

そう感じた俺は、ソードライフルのグリップを持ち直し、白いドラゴンに照準を合わせた。そして、躊躇い無くその引き金を引いたのだった。

「貫徹ええええええ!!！」

俺の叫びと共に放たれた緑色の極大のエネルギー波は、あつという間に白ドラゴンの翼を貫通し、遙か彼方へと消えて行つた。

「がっ!?　あああああああああ?!?!」

凄まじい地響きと砂煙をまき散らしながら、白ドラゴンが大地に落下する。そこへ待つてましたとばかりに攻撃が加えられる。

「な、なんて威力なの…」

魔法少女が呆然といった様子で呟く。うん、それ俺のセリフ。いや、ね、オルゴンソードの威力で大体予想してましたよ。けどね、今のはそれを遥かに超えてました。え、妙に冷静じゃないかって？　人

間、驚き過ぎると逆に冷静になるんだよ。

そして、冷静になると同時に、先程からの騎士（笑）発言が頭に蘇る。せつかく気にしないようにしてたのに、また恥ずかしさが込み上げて来た。

『お疲れさん。カツコよかったで』

再びオカンと繋がった。やめて、今はなに言われても恥ずかしいだけだから！ それより何の用なの。

『ああ、そうそう。さっき言いかけたんやけど、転移の準備が整ったで。どうする？ すぐに移動するか』

（お願いします！）

俺は間髪入れずに頷いた。とにかく、一刻も早くこの場から離れたかった。ああ、かなうなら、いつそのままこの場にいる人達がいない場所へ。：そうだな、千年後くらいに行きたいな。

『よっしゃ、任せときー！』

「フューリーさん？」

魔法少女をそつと離す。俺の様子がおかしいと思ったのか、彼女は不思議そうに首を傾げるが、次の瞬間目を見開いた。

「フユ、フューリーさん！ 体が…！」

言われて見ると、俺の体がゆっくりと透け始めた。どうやら転移とやらが始まったらしい。

「…行っちゃうんですね」

魔法少女が寂しげに顔を伏せる。むう、何故に彼女はそんな表情を見せるのか。「はく、やつと痛い人から解放されたわく」とか言わないのか？

「また…また会えますよね？」

ツ!? そ、その上目使いは反則だろ!? だがしかし、騎士（笑）の俺はあくまでも冷静に答える。

「…それが運命ならば」

そして、最後に死にたくなるセリフを残し、俺は魔法少女の前から消えたのだった。

第五話 テンプレでもいいじゃないだつてオリ主だもの……

痛いセリフと共に魔法少女と別れた俺は、気付けばまたしても森の中に立っていた。空は相変わらず紫色だ。だが、さつきと同じ色のそこには、魔法少女もイケメンも、あの赤ドラゴンや白ドラゴンの姿も無い。それと、俺の姿も元の状態に戻っていた。

『ほい、転移完了や。体の調子はどうや？ 気分が悪いとか無いか？』
「大丈夫だ。問題無い」

あれ、このセリフ、なんかのフラグだったような……。ま、いいか。それより、ここはどこ？ あとすつげえ今さらな疑問んだけど、あのドラゴンとか、翼持った人達つてなんなの？ まさか、この世界に来て初めて出会った相手があんなとんでもないものになるとは思って無かった。

『ここは冥界。悪魔の住む世界や。あの赤と白のトカゲちゃんの名前は『赤龍帝』ドライグと、『白龍皇』アルビオンで、あの翼の子達はそれぞれ天使、堕天使、そして悪魔や。そしてここはアンタがさつきまで戦つとつた場所とほぼ同じ場所や。ま、あの時代から千年ちよつと経つとるけど』

「…はっ？」

ステイステイ。うん、ちよつと落ち着こう。一片に全部の疑問に答えてくれたのは嬉しいよ？ けど、その答えが全部俺の予想の範疇を三段くらい跳び越えてるんですけど。もう一度、それぞれについて詳しく聞かせてもらえませんかね。いや、マジで。特に最後について！
まず、冥界って何？ ハイスクールD×Dって冥界が舞台なの？
タイトル詐欺じゃね？

『んー？ 別にそういうわけやないよ。ちゃんと人間が住んどる世界もあるで』

「なら、何故俺をそこに送らなかつた？」

あ、割とどうでもいいけど、口調が似ても自分の事は「俺」って呼

べるのね。よかった。これでアル・ヴアンみたいに“私”とかだつたらもう泣いてた。仕事とかならまだしも、普段の生活で自分の事を“私”と呼ぶ男って寒いと思うんだ。これあくまで俺の考えだからね？

『とりあえず適当な場所に送るだけ送って、後の事はアンタと話し合って決めよう思うてな。ほら、おばちゃんせつかちやから。まあ、あのトカゲちゃんと悪魔ちゃん達の戦いの近くに送ってまうとは思わなかったけど』

いや、知らんがな。…つと、今さらつと気になる事言つたな。

「…あなたはあのドラゴンの事を知っているのか？」
『ちよつとな。その世界の事を勉強したんよ』

そう言つて、オカンは俺に色々教えてくれた。まず、あの赤ドラゴン：ドライグと、白ドラゴン：アルビオンについて。

『赤龍帝』と『白龍皇』なんて中二心をくすぐる呼び名を持つあの二頭は、ずっと争いを繰り返してたらしい。で、ドラゴン達はイケメンや魔法少女のような悪魔、黒い翼のオジサマ達墮天使、白い翼の女性達天使がやってた戦争の最中に現れて、三つの陣営に恐ろしいほどの損害を与えたらしい。いやあ、どこの世界にも戦争ってあるのね。怖い怖い。

このままじゃ“オワタ”になると危機感を抱いた三陣営は、戦争を止めて一緒にドラゴン達を止める為に協力する事にしたらしい。胸熱展開だね。んで、いよいよ決戦だ！　って所で空気も読まず乱入したのが、騎士（笑）こと俺だった。…やっぱり死にたい。

そういうわけで、俺が千年前の魔界に跳んだのは、オカンの適当さが原因だったのだ。そして、俺が千年の時を超えこの時代に来てしまったのは、あの騒ぎの中、俺がふと思った「千年後くらいに行きたい」という願望を叶えてくれたかららしい。望むのなら今度こそ人間界に送ってやると言われたので早速お願いしようとした…その時だった。俺の耳に争う様な声が聞こえて来たのは。

「こんな人里離れた森の中に人がいるのか？」

奥から聞こえて来る男と女の声。正直、関わりたくは無かった。だ

が何故だろう。俺の足は自然とそちらに向かっていた。女の声に焦りが混ざっているから？ 男の「犯してやる！」という下卑たセリフが耳に入ったから？ あるいは、その両方から嫌な胸騒ぎを覚えたから？

そして、俺の目にその光景が飛び込んで来た。

——纏っている和服を無残にも破かれ、片胸が完全に露出している女性。

——見たくも無い部分をさらけ出し、女性にのしかかろうとする男。

俺は間髪入れずに走り始めた。女性がネコミミや尻尾を装備しているとか、魔界に何で和服があるのかとか、気になる所はあるが、今俺がやらなければならないのはその理由を知る事では無い。

今俺がやらなければならないのは…この握り締めた拳を、あの強姦魔の横っ面に全力で叩きつける事だ！

「現・行・犯!!」

「パムツ!」

「にやつ!」

加速をつけた一撃は正確に男の頬を直撃し、男は大きく吹っ飛んだ。アルllヴアンの身体能力+怒りの威力は凄まじく、男を受け止めた太い木が半ばからへし折れ、それでも威力が殺しきれなかったのか、男は二本目、三本目の木々を巻き込んでいった。

「だ、誰にや…?」

女性が戸惑いの顔を向けて来る。とりあえず、その刺激的すぎる格好を何とかしないと。俺は上着を脱ぐとそれを彼女の肩にかけた。

「大丈夫。俺はあなたの味方だ」

状況を見るに、彼女は汚される正に寸前だった。そう、寸前で済んだのだ。これであと少しでも来るのが遅れたら、いや、そもそもここに来ようと思わなかったら。考えただけでゾツとする。

「テ、テメエ、何者だ!」

強姦魔が鼻血を吹き出しながら戻って来た。つーか、いいかげんズボン穿けや。

「俺が誰だかわかっているのか！ いや、そもそもその女がああ悪名高い黒……」

「黙れ」

自分でも驚くほど低く冷たい声が出た。女性を守るように男の前に立つ。

犯罪者に人権など無い……なんて過激な事を言うつもりは無い。罪は罪。だが、そこには色々な事情があるかもしれない。根っからの悪人では無く、仕方なく犯罪に手を染めた者だっているかもしれない。

だが強姦魔。テメーは別だ。理性を失い、ただ自分の欲望を満たす為に女性の心と体に深すぎる傷を負わせるテメー等は擁護のしようが無いクズだ。この世で最も重い罪は殺人だが、この世で最も憎むべき犯罪は強姦だと俺は思う。異論は認めない。

「男の風上にもおけない下衆が。それ以上この女性に近づくな」

「ぐうう！ テメエこそ黙れ！ 犯罪者に加担したテメエも同罪……」

「ふんっ！」

クズと話す気は無いとばかりに、俺はもう一度男の懐に飛び込むと、渾身の昇ry：アッパーを放った。ゴキッ！ という物騒な音と共に、男は上空へ舞い上がりUターン。そして地面に熱烈なキスをかまし、気絶した。

男をブツ飛ばした俺は、女性の様子を確認しようと振り向いた。だが、そこに彼女の姿は無く、俺が貸した上着と、その中に包まった黒い猫だけがいた。

「猫……？」

あの女性はきつと俺が男をブツ飛ばしている間に逃げたのだろう。逃げる前に一言残して言うて欲しかったと言うのは酷だろう。それよりこの猫、かなり衰弱してるみたいだ。それにケガもしている。このまま放っておいたら間違い無く死んでしまう。

「オ・クアーン」

『……何や？』

名前を呼ぶと、少し間を空けてオカンが返事をした。何か様子が変だ。

「どうかしたのか?」

『いや、アンタの行動にまた感動してしもうて。おばちゃん、このままじゃ脱水症状で倒れそうや』

神様でも脱水症状になるのね。てか、やっぱり感動屋だなこの人。

『それで、何やの?』

「転移する時、この猫も連れて行きたいのだが」

放置しては後味が悪すぎる。可能ならケガが元気になるまで面倒を見てあげたい。

『それくらいならお安い御用や。それじゃ、今度こそ人間界へ送つたる』

俺は上着を羽織り、猫を優しく抱きあげた。そしてその直後、俺は三度目の転移を果たしたのだった…。

第六話 騎士と姫の出会い

さて、俺が人間界にやって来て、早くも一月が経とうとしていた。とりあえず、その間に何があったのか、ここで振り返る事にしよう。

人間界に来て最初に浮かんだ問題が、衣、食、住である。何せ体一つでこの世界にやって来てしまった俺には持つ物が何も無いのだ。騎士（笑）としては、ホームレスになる事だけは回避したかったのだが、これは何ともあつげなく解決した。

『ウチに任しとき』

そう、我らがオカンである。彼女はその力を以て、俺に一人暮らしには広すぎるくらいの立派な一軒家を与えてくれたのだ。それだけじゃない。当面の生活費や、本来存在しない俺の戸籍等まで用意してくれたのだ。

それに対し、もちろん感謝の気持ちはあった。だけど同時に、どうしてここまでしてくれるのか不思議でならなかった。彼女からすれば、俺はただの人間の一人にしか過ぎないのに。

『そんなん関係あらへん。アンタが幸せな一生を送れるよう見守る。それがウチの責任や』

…そう答えられた時俺は、ああ、やっぱりこの人は神様なんだと思っただ。

そういうわけで、俺はこの世界で新しい生活を始めたのだ。そして、俺は今、とある学園の校門前に立っていた。名前は私立駒王学園。元々女子高だったらしい。が、今はそんな事はどうでもいい。問題は、どうして俺がここにいるのかだ。

（ほんと、どうしてこうなった…）

そびえ立つ校舎を眺めながら、俺は心の中でそう呟いた。

そもそのきっかけは、三日前のオカンとの会話だった。夜、俺が黒歌…あ、この黒歌っていうのは、あの強姦魔をぶちのめした時に保護した猫の名前だ。保護した直後、ケガと衰弱でかなり弱っていたこの猫を助ける為、オカンから勘違いのお詫びとしてもらった願いを一つ叶える特典を思い出し、『スパロボの新旧全ての作品の精神コマン

ドが使えるようにして欲しい』とお願いをした。

精神コマンド：簡単に言えば魔法の様なものだ。敵に与えるダメージを増やしたり、逆に敵から受けるダメージを少なくするもの等があるが、その中には味方を回復させるものというのもある。まあ、普通に魔法を使えるようにしてもらおうのもいいが、どうせならスパロボ繋がりですべての方がいいと思ったのでこうした。

願いを叶えてもらい、俺は早速猫に回復系精神コマンド『信頼』を使った。猫に信頼というのも変な感じだが、使用直後、キラキラした光が猫を包み、体の傷が一瞬で消え去ったのを見てちゃんと効果があつたのだとホツとした。ちなみに使い方としては、頭の中に一覧表みたいなのが浮かび、その中から選択するような感じだった。

猫自身も驚いたのか、横たえていた体を起こすと、その場でグルグル回り始めた。その様子が微笑ましくて、つい頭を撫でてしまった。最初は何だか警戒していたみたいだが、しつこく撫で続けていると、やがてはお腹を見せてくれるようになった。その時確認したが、雌だった。

ケガは治したが、それでサヨナラというわけにはいかない。俺はこの猫を飼う事に決めた。そこで、名前をつけようとしたが結局決まらず、その日は過ぎて行つた。

その夜、不思議な夢を見た。シルエットのぼやけた女性から一枚の紙を受け取るという夢だ。そこには『黒歌』と書かれていた。変な夢だったが、何か意味があるのかと思い、俺は猫にそのまま黒歌という名前をつけた。

え？ 何でぼやけてたのに女性だつてわかつたのかつて？ そりやあなた、胸に二つの果実をつけている人物が男なわけないでしょうが。あ、今思い出すと、あの時助けた女性に似ていたような…。

…つて、かなり話が逸れてしまった。その黒歌とじやれていた時、唐突にオカンから連絡が入つたのだ。何事かと尋ねる俺に対し、オカンは言った。

『アンタ、学校へ行ってみん？』

どういう意味かと俺が首を傾げれば、オカンは答える。最初に説明

した通り、俺をこの世界に送ったのはもう一度学生生活を楽しんでもらう為。予定とはだいたいずれてしまったが、行ってみてはどうかと。しかし、二十四にもなつてまた学校に行くのもどうなのだろう。ただ、オカンの心遣いを見失ふにすることも申し訳ない。すでにたくさんのお金を貰っているのに、これだけ断るといふのもおかしいし。

少し悩んだが、結局、俺はオカンの提案を受ける事にした。ついでに、ここで明らかになったが、今の俺の肉体年齢は十七歳だそう。道理で鏡で見た時、ゲームのアルヴァン先生より若く見えたわけだ。

そして三日後の今日。いつの間にか用意されていた駒王学園の制服を纏い、俺は家を出たのだ。場所がわからなかったが、偶然同じ制服を着た男子を見つけ、気付かれないように後について行った。

こうして数十分後、俺は何とか駒王学園へ辿り着いたのだ。しかし、ただ突っ立って校舎を見上げている俺を不審に思ったのか、周りから視線を向けられているのがわかった。「なんちゃって高校生乙」とか、「二十四にもなつて制服とか…コスプレ？」なんて声が聞こえて来そう。居心地悪さMAXの中、俺は動いた。もう、とにかく職員室の場所聞いてここから離れよう。

「キミ、ちよつといいか？」

一番近くにいた女の子に声をかける。その子は俺の顔を見るなり、顔を赤らめて俯いてしまう。視界にも入れたくないってわけですね。

「な、何ですか？」

「すまないが、職員室の場所を教えてくださいませんか？」

はあ、アルヴァン先生の口調でよかった。もし素の俺だったらメンタルダメージが大き過ぎて涙声になっていたかもしれない。しどろもどろに説明してくれる女の子を見つめながら、俺は軽く落ち込んでいた。

女の子にお礼を言い、移動を開始する。今さらオカンの事を疑うつもりは無いが、職員室へ行っても「そんな話は聞いてません」とか言われたらもう立ち直れないかもしれない。

「そ、それじゃあ、教室まで案内します」

まあ、そんな事も無く、職員室に入った俺を一人の女性の先生が迎えてくれた。山田と名乗ったこの人が俺の担任だそうだが、見た目明らかに前の俺より年下っぽいな。あと、胸が凄い。こうして教室に向かつて歩いていてるだけでポヨポヨ揺れている。

「では、私が合図したら中に入って来てください」

そう言っただけで先に山田先生が教室へ入って行った。

「みなさん、おはようございます」

「おはよー真耶ちゃん！」

「今日も可愛いね！」

「ふえっ!? あ、ありがとうございます。：じゃ、じゃなくて、先生をからかっちゃいけませんよ！」

中からそんな声が聞こえて来る。どうやら生徒との仲は良好らしい。ま、わかる気がする。彼女優しそうだし、何より可愛いし。

「こ、コホン！ 実は今日はみなさんにお知らせがあります。今日からこのクラスに新しい仲間が増えます」

おー！ と歓声が響き渡る。ああ、このテンション、何だか懐かしい。：こんな事を思う俺ってもう年なのかもしれない。それから、男か女かという質問をする男子。男と答えた先生にカツコイイかと聞く女子。それに対し、「え、えっと、実際に見てもらった方がいいですね」と答える先生。いい判断です。ここでハードル上げられてもキツイのは俺ですから。

「では、入って来てください」

先生の合図が入る。俺は気合を入れ戸を開けて教室へ足を踏み入れた。その瞬間、たった今まで騒いでいたクラスメイト達が一斉に口を閉じた。：って、何その反応？ そんなに期待外れでしたか？ 「はあ…」

誰かの溜息がやけに大きく聞こえた。もう決定だねこれは。ちくしょう、やつぱりこうなる運命だったのか。：。なんだか先生も予想外の反応に戸惑っているみたいだ。

「で、では、自己紹介してもらいましょうか」

この空気ですか!? いや、自己紹介は空気とか関係ないか。なら

ばここで冷静になって印象のいい自己紹介をすればまだ持ち直せる！

「今日からこのクラスの一員となる神崎亮真だ。よろしく頼む」

…やっちまった（涙）。クールを通り越して無愛想ここに極まりといった挨拶をしてしまった。ああ、室内の空気がさらに悪くなった気がする。先生が気を遣って「何か質問がある人はいませんか」と言ってくれたが、誰も手を上げてくれなかった。

そんなこんなで朝のHRが終わり、今は一時間目が始まるまでの数分の休憩時間。俺は窓際の一番後ろの席で外の景色を眺めながらボーっとしていた。何でそんな事してるかって？ 誰も話しかけてくれないからですよ。なんか「ね、ねえ、声かけてきなさいよ」とか「ア、アンタが行きなさいよ」とか耳に届く。嫌なら無理して来なくていいです。むしろそつととして…。

そんなボツチ街道を独走しようとした俺の前に…彼女が現れた。

「ちよつといいかしら？」

景色からそちらに顔を向けた俺の前に彼女はいた。

———それだけで芸術と思わせるような美しい真紅の長髪。

———道を歩けば誰もが振り返るであろう端正な顔立ち。

———制服の上からでもわかる、下手なモデルも顔負けな抜群のスタイル。

今日ほど自身の語彙の無さを恨んだ日があっただろうか。固まる俺の前で、彼女は柔らかな笑みを浮かべながら自らの名前を名乗った。

「初めまして。私はリアス・グレモリー。これからよろしくね、神崎君」

これが、俺…神崎亮真と、彼女…リアス・グレモリーの出会いだった。

ああ、これから言う言葉は完全に蛇足だ。なので心の中で呟かせてもらおう。

キミ…ホントに高校生？

第一章 旧校舎のディアボロス 第七話 あれから色々ありまして

光陰矢のごとし：昔の人は上手い事言ったもんだ。なんちやって高校生になって既に一年が過ぎ、俺は最上級生となっていた。

「オッス、神崎」

「ああ、おはよう」

クラスメイトと挨拶を交わし、俺は席に着いた。え？ お前ボツチになつたんじやなかったのかつて？ ふふふ、確かに俺はボツチになりかけていた。だがしかし！ そんな俺を救ってくれたのが彼女：最初に俺に声をかけてくれた、リアス・グレモリーさんだった。

彼女曰く、「みんな緊張して話しかけられないみたいだから、私がきっかけになってあげようと思って」との事だった。転校生相手に何故に緊張するのかと首を傾げれば「鈍いのね」なんて言われる始末。さっぱりわからん。

けれど、確かに彼女をきっかけにして、一人、また一人とクラスメイト達が話しかけて来てくれた。女子の方は未だに緊張している様子だったけど…。とにかく、そうして俺はようやくクラスに受け入れられたのだ。

いやもうね、彼女には感謝感謝だよ。年下（精神年齢的に）の子達と一緒に空間でこれからずっと一人で過ごしていかなければならぬと思ってたから。そこでお返しにと困った事があつたら何でも言ってくれと伝えると「期待しておくわね」と大人な返しをされた。改めて思うが、彼女は本当に高校生なのだろうか…。

そういうわけで、俺はなんとかボツチロードを歩まずに済んだのだが、すると、今度は何がどうしてそうなったのか、逆にやたらと相談事を受けるようになってしまった。

何がきっかけだっただろうか。確か、同じクラスの男子に恋愛相談を受けたのが最初だったと思う。何で俺なのかと問えば「なんか年上っぽくて頼りになりそう」だとか。…やはり溢れ出る年上臭さは隠

しきれなかったのかとちよつと落ち込んだりしたが、頼られた以上は応えてあげたい。生前は生まれてから死ぬまで彼女なんていなかった自分だが、彼らよりちよつとだけ人生経験豊富な俺は持てる知識を総動員して、それっぽい答えを出してあげた。

するとなんとという事でしよう。その男子は見事に意中の相手と恋仲になれたそうなのだ。そこで話は終わるはずだったが、その男子が俺に相談したら彼女が出来たと宣伝してしまったらしく、それから同じクラスだけでなく、別のクラス、果ては学年の違う子達までが俺の元へ相談事を持って来るようになったのだ。

別にそれ自体は嫌では無い。頼られるのは悪い気分じゃ無いしな。：だが、先生まで相談に来るのはどうかと思う。あなた達、”する”側じゃなくて”聞く”側でしように…。

まず来たのは山田先生だった。「生徒にからかわれるのはやっぱり自分が先生らしくないからか？ いっその事、尊敬する先輩の真似を試みようかと思うのだけど」と結構切実な悩みだった。とはいえ、俺が見た限り、生徒達はしつかり彼女の事を先生として尊敬していると思うのだが、やはりちゃん付けで呼ばれる事に抵抗でもあるのかもしれない。

ちなみにどんな先輩かと聞いてみると、軍人みたいな話し方で、特技は騒ぐ生徒を出席簿の一撃で黙らせる事だとか。うん、想像しただけで、寒気がした。

なので「そのままのあなたが素敵です」と答えると、先生は顔を真っ赤にさせてプルプル震え始めた。今思い出すと、なんか口説いてるみたいな答えで自分で恥ずかしくなった。真剣な悩みに、んなふざけた返しをされたら、そりゃあ優しい山田先生でも怒るわな。

結局、山田先生が相談に来たのはそれが最初で最後だったが、それからの彼女は何か吹っ切れた感じに見えた。ただ、俺と目を合わす度に微妙に頬を赤らめる辺り、まだ怒りの方は収まってないみたいだったが。

そんな感じで相談事を受けていたら、気付いた時には『駒王の頼れるお兄様』なんてこっ恥ずかしいあだ名をちようだいしてしまった。

まあ、『お父さん』とか『おっさん』にならなかつただけですか。

というわけで、俺に関する事はこれくらいだろうか。ついでにこの駒王学園についても少しだけ語っておこうか。一年間この学園に通い続けて思ったが、ここには少し、いやかなり個性的な子達が多く在籍している。

まず、俺をボツチから救ってくれた恩人こと、リアス・グレモリーさん。やっぱりというか彼女、学園全体でもの凄い人気が高い。男女問わず『お姉様』なんて言われる人間、マンガの中でしか見た事無かったが、いやはや、実際に見るとなんかこつちが恥ずかしくなる。言われる本人はまったく気にしていないようだが。

「おはよう、神崎君」

噂をすれば本人が登校して来た。相変わらずの素敵スマイルを見せる彼女のその隣には艶やかな黒髪をポニーテールに纏めたいかにも大和撫子な少女が立っている。

彼女は姫島朱乃さん。グレモリーさんの友人で、同じクラスの女の子だ。グレモリーさんに負けず劣らず綺麗な子で、彼女と合わせて『駒王学園の二大お姉様』と称される程である。あれだね、どつかでマリア様が見てたりするんじゃないのか。

…ん？ 何でさつきから年下相手にさん付けしてるのかって？

いや、俺、基本的に呼び捨てせずに同い年、年下にも君、さん付けしてるからな。生前の中学まではそうでもなかったんだけど、高校に入ってから急にそれがしつくり来るようになったんだが、あれってなんなんだろうな？

「どうしました、神崎君。私の顔をそんなに見つめて。もしかして見惚れてました？」

茶目っ気のある微笑みを見せる姫島さん。うーん、何だろうな。決めつけるのは良くないけど、この子、Sっぽいんだよな。

「ああ」

肯定する。いや、実際見惚れたのは事実だし、下手にごまかすと、それこそ彼女に弄られる恐れがあるしな。すると、姫島さんは微笑みを崩す事はなかったが、若干狼狽した様子を見せた。

「…まさか、真顔で答えられるとは思ってませんでしたわ」

「ふふ、残念だったわね、朱乃。神崎君にはそう言うのは通用しないってこの一年で思い知ってるでしょうに」

グレモリーさんの言う通り、姫島さんは事あるごとにさつきみみたいな感じでからかって来るのだ。それに対し、表面上は冷静に対応出来ているが、内心はかなり焦ったりして居る俺。

いや、だってさ、こんな綺麗な子に思わせぶりな事言われたらそりゃ焦るでしょ。これで何も反応しないヤツはどこぞのラノベの鈍感系主人公かホモオ…くらいしかいないと思うんだ。

「近い内に必ずあなたのうろたえる顔を見てあげますから」

そう言っただけで細くしなやかな指を俺に向ける姫島さん。正直、俺の精神的ライフがゴリゴリ削れるんで止めて欲しいです。

まだ何かされるのかと身構える俺だったが、そこで唐突に鳴ったチャイムに救われた。時計を見れば、いつの間にかHRが始まる時間となっていた。席に着く二人の背を眺めながら、俺は今日も平穩に過ごせる事をオカンに祈った。

あつという間に時間は過ぎ、今は放課後。俺はというと、図書室へと足を運んでいた。

「あら…神崎君」

その道中、前方から歩いて来た少女が俺の名を呼ぶ。ショートカットの黒髪に、知的な雰囲気醸し出す眼鏡。いかにも優等生といった感じの彼女は、まさしくこの学園の生徒会長だった。

「支取さんか」

支取蒼那…それが彼女の名前だ。クラスは違うが、彼女とも友人関係構築している。初めてあったのは図書室、同じ本を取ろうとして手が触れあったという何ともドラマチックな出会いだった。とはいえ、

クールな彼女は頬を赤らめたりもせず、俺にその本を譲ろうとしてくれた。だがそこは俺、逆に彼女にその本を譲った。

最初困った様な顔だった彼女だが、俺が黙って本を差し出すと、お礼の言葉と共に微笑みながら受け取ってくれた。あれだね、クールな女の子が笑った時の破壊力って尋常じゃないね。

「また図書室で勉強ですか？」

「ああ、まだまだやらなければならぬ事が多いからな」

何せ、高校の授業なんて何年ぶりのものか。こうして空き時間に予習復習しないと不安でしようがない。だが、ここでもアルⅡヴァン先生のスペックに脱帽してしまった。生前は必死こいて勉強したはずの内容が、この体だと少しやっただけでスラスラ理解出来るのだ。やっぱりイケメンって恵まれてるんだと学んだ俺だった。

「神崎君は学生の鑑ですね。ここで、私でよければ教えてあげます：と言いたい所なのですが、これから生徒会の仕事があるので申し訳ありませんが：」

感心した様子でそう言ってくれる支取さんだが、俺はそうは思わない。だってこの学園、勉強熱心な子がたくさんいるからな。俺が図書室で勉強するようになって、同じ様に勉強する子が日に日に増えていったし。ただ、それが女の子だけっていうのが気になるが。駄目だぞ男子、遊びや部活もいいが、ちゃんと勉強しないと後から苦労するぞ？ あ、これ実体験ね。

そして律儀な彼女は本を譲ってくれたお礼にと、たまに勉強を教えしてくれる。それがまたわかりやすく大変ありがたいものだった。今の謝罪はその事だろう。

「いや、気にしないでくれ。むしろ、その仕事で俺に手伝える事は無いかな？」

お礼にお礼で返すと永遠に終わらない気がするが、彼女には世話になってるしな。そう言うと、支取さんは小さく首を横に振った。

「すみません。生徒会の仕事を一般生徒に任せるのは気が引けますので、お気持ちだけ受け取っておきます」

「そうか：」

ま、そう言う事なら仕方ない。厚意つてのは押しつけるものじゃないしな。「それでは」と頭を下げる彼女と別れ、俺は再び図書室へ向かって歩き始めた。

あ、そうそう。彼女を通して、三年生で副会長の真羅椿姫さんを始めとする生徒会のメンバーとも知り合いになった。初めて紹介された時は、この学校の生徒会は美人じゃないとは入れないのか：と本気で思った。何せ、所属する女の子みんな例外無く綺麗な子、可愛い子ばかりだったからだ。

そして、その中でただ一人男子として所属する匙元士郎君。男一人という事で色々大変だろう彼とは是非とも仲良くしたいと思ったのだが：支取さんに紹介された時、友好的だった他のメンバーと違って、彼だけは何故か睨むような目を向けて来たのだ。

しまいには「会長とどういふ関係ツスカ」なんて言われた。キミは支取さんの父親か？ 無難に友人と答えると睨むのを止めてくれたが、未だに睨まれた理由がわからん。

回想している間に、図書室までもう少しの距離まで来ていた。何だか女の子の事ばかりだな。後一人、一年生で知り合いになった子がいるが、その前に男子の事も触れておこうか。

元女子高という事で、女子ばかりが目立っているように見えるが、もちろん、男子にも個性的な子はある。俺が知る限りその二人はどちらも有名人だ。とはいえ、有名という言葉は必ずしもいい意味で使われるわけではない。

「待ちなさい！ 兵藤ーーーーー!!」

「この変態三人組！ 今日こそ引導を渡してやるわ！」

どこからか女子の叫び声が聞こえて来る。ああ、これはまた「彼」が何かやらかしたんだらうな。

近付いて来る複数の足音に、俺はとある少年の顔を思い浮かべるのだった…。

第八話 後輩は思春期

イツセイSIDE

俺は今、友人である松田と元浜と共に、放課後の校舎を全力疾走していた。え？ 何でそんな事してるのかつて？ ははは、そんなの…。

「待ちなさい！ 兵藤ー！ー！！」

「この変態三人組！ 今日こそ引導を渡してやるわ！」

俺達の後ろから恐ろしい速度で迫って来る女子二人から逃げる為に決まってるでしょうが！

並走する松田が俺の方へ顔を向ける。

「おいイツセイ！ 女の子からのご指名だぞ！ 今すぐ足を止めて相手してやれよ！」

「俺に死ねと!? つーかあいつらは女の子じゃねえ！ 鬼だ！」

修羅の如き形相で竹刀を片手に追って来るのは、同じクラスの村山と片瀬。二人とも剣道部に所属している。ええい、何で俺達がこんな理不尽な目に！

「くっ、まさかあの二人に覗きがバレるとは思わなかったぜ！」

「お前らがデカイ声出すからだろうが！」

いや、ゴメン訂正。十中八九自業自得です。女子剣道部の部室を覗きました。だからあの二人に追われています。でも仕方無い！ 俺達は自分の情熱を押さえる事が出来なかっただけなのだから！

俺：兵藤一誠はこの駒王学園の二年生。この学園は元女子高で、男女比率も女子の方が多い。そう、俺がこの学園に入学した理由はそれだった。

たくさんの女の子と一緒に過ごしたい！ それだけで俺は難関と言われた試験すら突破し、こうしてここにいる。俺はこの学園で俺だけのハーレムを作るのだ！

しかし、現実是非情だった。ハーレムどころか、女の子と仲を深める事すら出来なかった。だってあの子達、俺の事ゴミクスみたいな目で見て来るんだぞ。そして気付けば、同級生の松田、元浜と合わせて

『変態三人組』とまで呼ばれるようになってしまった。酷いよな、俺達はただ、教室でエロ本やAVを貸し借りしてただけなのに。

そもそも、性欲は人間の三大欲求の一つで大事なものだぜ？ 俺達を冷たい目で見る女の子達にだって性欲はある。清楚に見える女の子も、クールなあの子も、もしかしたら夜な夜な火照った体を慰めたりするんじゃないのか？ あ、やべ、想像したら息子が…。

「イツセー！ 走り方がキモいぞ！」
「ほっとけ！」

と、とにかく！ 俺は自分の心に正直なだけだ！ おっぱい揉みたいし、乳首も吸いたい。なんと言われようと、それだけは譲れないのだ！

それに、蔑まれてばかりの俺達だが、味方が一人もいないってわけじゃない。

「ツ！ イツセー！ あそこ！」
角を曲がった所で、元浜が前を指差す。そこにはたった今思い浮かべようとした人物の後ろ姿があった。俺は躊躇い無くその人物の名を叫ぶ。

「神崎先輩！」

俺の声に反応し、先輩が振り返る。その顔は俺達が来る事を予想していたかのようなだった。

この人は三年生の神崎亮真先輩。二大お姉様であるリアス・グレモリー先輩、姫島朱乃先輩と同じく、おそらくこの学園で知らない者はいないであろう超有名人だ。イケメンフェイスにクールながらも面倒見のいい性格、頭も良くてスポーツも万能。どこぞの完璧超人かって話ですよ。あれだな、ここまでくると嫉妬する気すら起きないな。

おかげでリアス先輩と姫島先輩をもじって『駒王学園の頼れるお兄様』なんて呼ばれたりもする。本人はそう呼ばれて困惑してるみたいだけど、俺は妙に納得したりする。なんか、先輩って凄く大人びてるというか、本当に俺と一つしか変わらないのかって思う時があるんだよな…。

「ああ、やっぱりキミ達か」

「せ、先輩！ 助けてください！ 俺達追われてるんです！」

「追いついたわよアンタ…達…」

「観念しなさい…いい…」

村山と片瀬がすぐそばまでやって来たが、二人とも神崎先輩を見るなり目を見開き、先程までの修羅顔から一瞬で乙女の顔に変わってしまった。確認するまでも無いが、こいつらも神崎先輩のファンだ。

「こ、こんにちは、先輩」

明らかに緊張している様子の村山。そんな彼女に対し、先輩はいつものクールな表情で挨拶を返す。

「こんにちは。キミ達、竹刀なんか持ってどうしたんだ？」

「えっ!? あ、それは…その…」

困ってる困ってる。そりやそうだよな。憧れの先輩に俺達ぶちのめす為に持って来ましたなんて口が裂けても言えないだろうし。

「そ、そう！ 外で素振りをしようと思っただんです！ たまには自然を感じながら竹刀を振るのも悪くないと思って…！」

「そうか。部活熱心なんだな」

「そ、そう言う事なので私達！」

「し、失礼します！」

深々と頭を下げ、二人は逃げるように去って行った。ふう、どうにか助かったな。

「…さて、今回は何をやったんだ？」

村山達の背中を見送った先輩が俺達の方を向く。事情を説明すると、先輩は呆れたかのような苦笑いを見せた。

実を言うと、先輩にはこうして何度も庇ってもらってたりする。他のヤツらは庇うどころか、一度注意すると後は勝手にしろとばかりに何も言っただけで来ないが、先輩は違う。こうして庇ってくれて、毎回毎回注意してくれる。改めて思うと、こんな風に真剣に向かい合ってくれる人ってかなり貴重なんじゃないのか？

「前にも言った気がするが、キミ達はもう少し自重した方がいい」

「で、ですが先輩！ 先輩と違ってモテない俺達はこうして己の内の獣を満足させるしか方法が無いんです！」

元浜の訴えに、俺と松田はその通りとばかりに頷いた。すると、何故か先輩は不思議そうに首を傾げた。

「誤解しているようだが、俺も彼女なんていないぞ?」

「ぬなっ!」

「なん…だと…」

愕然とする二人と違って、俺はどこか納得する気持ちがあった。完璧すぎて逆に近づけないというか…。あれだ、女子はきつとテレビの向こうのアイドルみたいな感じで先輩の事見てるんじゃないかな。「私、見てるだけで満足です」みたいな?

「な、なんて勿体無い! もし俺が先輩だったら、毎日のように女の子と(自主規制)や(自主規制)をするというのに!」

「俺だって(自主規制)とか(自主規制)さらには(自主規制)とかしたりするのに!」

俺だったら…じゃない! こ、こいつら、いくらなんでも本人の前で言うか!? 見ろ! 滅多な事じゃ動じない先輩の顔が微妙に引き攣ってるじゃねーか! や、やばい、先輩を怒らせたら本人じゃなくてファンの女子全員に命を狙われる!

「お、おい! 俺達もそろそろ行こうぜ!」

「ん? ああ、そうだな。んじゃ、先輩、失礼します」

「そーいや松田。お前最近新しいAVを仕入れたらしいな。久しぶりに観賞会でもしようじゃねえか」

「おお、いいな! ならウチに来いよ! イッセー、お前ももちろん来るだろ?」

「わ、わかった! わかったからとにかく一刻も早くここから離れよう!」

「あ、そうだ。よかったら先輩も…」

「だあああああ! もうっ!」

俺は二人の首根っこを掴むと再び全力疾走を始めた。痛い! とか 擦れる! とか聞こえるが気にしてる場合じゃない。つーか先輩を巻き込もうとした事が広まったら本気でマズイぞ。

そうして、俺達は先輩の前から姿を消したのだった…。

「…ブレないな彼等は」

去って行く三人を見つめながら、俺はポツリと呟いた。彼等の噂はこの学園に来てすぐに学年の違う俺の耳にも届いた。

曰く、常日頃からおっぱいおっぱい言ってる。

曰く、平然と女子のパンチラ写真を撮影する。

曰く、眼鏡を通すだけで女子のスリーサイズを看破してしまう。

そんな彼らのあだ名は『変態三人組』。俺としては、そこまで言われなくてもスタンスを崩さない彼等はある意味凄いなと思う。…まあ、見習おうとは思わないけど。そりゃね、男なら女の子に興味を持つのは当然だと思うよ？ ただ、何事も限度というものがある。割と本気で、近い内に国家権力の方のお世話になるんじゃないのかと心配している。

何でそんなヤツ等を心配してるのかって？ 確かにそうだ。けど、どうにもあの三人…特に兵藤君はついつい気にかけてしまう。というのも、彼、生前の俺の友達によく似ているのだ。いつも女の子の事考えてる所とか、いつも女の子のお尻を追っかけてる所とか、いつも女の子との出会いを求めている所とか。あ、全部同じか？

見た目も何となくだが似てる。そんな友達は、就職先でセクハラが問題となって僅か三ヶ月でクビになった。…あれ？ これってヤバくね？ フラグじゃね？

「…相変わらずですね、あの人達」

手錠をはめる兵藤君の姿をやかにリアルに脳裏に浮かべていると、物陰から一人の少女が心底呆れたような顔で出て来た。って、何で塔城さんがここにいるんだ？

「神崎先輩の匂いがしたので」

彼女は一年生の塔城小猫さん。学園のマスコットの存在として、男女共に人気のある女の子だ。あまりしゃべらない子だが、決して無感情というわけではない。というか、今のセリフ、俺そんなキツイ体臭発してんの？ だとしたらすぐにも制汗スプレー買いに行きます

けど。

でも、この子初めて会った時もこんな感じだった気がする。「懐かしい匂いがしましたから」とか言われた時はお線香とか焚いた覚えな
いですけど！ と叫びたかったが、そういうわけでもないらしい。解
せぬ。

それからというものの、俺はどういうわけか、彼女に気に入られた
みたいだった。俺としては、こんな可愛らしい子と知り合いになれた
のでよかったが。：言っておくが俺はロリコンでは無い。あれだ、妹
的な存在ってやつですよ。

「先輩、また図書室ですか？」

「ん？ そうだが…」

「そうですか。なら、私はこれで」

ペこりと頭を下げ、塔城さんは去って行った。うーむ、何をしに来
たのだろうか？ まあ、気にしても仕方無いか。

その後、一時間ほど図書室で勉強し、俺は帰宅した。玄関を開ける
と、リビングの方から黒歌がちよこちよこと駆け寄って来るのが見え
た。

「ただいま、黒歌」

そう言って頭を撫でれば、「にゃー」と甘えるような声をあげる黒
歌。ああ、癒される。特別猫が好きだったわけじゃないのだが、今で
はすっかり猫好きとなったしまった。黒歌、恐ろしい子！

この一年で黒歌もずいぶん懐いてくれたと思う。たまに姿を見せ
なくなる時があるが、猫は気まぐれって言うし、いつも最後にはちや
んと帰って来てくれるのでそれでいい。

それと、朝起きるといつの間にか俺のベッドに紛れ込んでる時があ
る。それ自体は大歓迎なのだが、そうすると何故かいつも同じ夢を見
るのだ。内容はというと、和服姿のネコミミ美女と抱き合ったり、胸
に顔を埋めたり逆にその美女が俺の胸に顔を埋めたりといったもの
で、触れあう肌とかの感触が夢にしては妙にリアルだったりする。そ
して目を覚ませば、隣には黒歌。：まさか俺、猫にまでムラムラする
ほど欲求不満なのか？ いやしかし、この体になってから、アル

ヴァン先生の鋼の意思が働いてるおかげかそんな気分になった事はまだ一度も無い。それはそれで問題ある気もするが…。

「…気にしても仕方が無いか」

偶然。そう、ただの偶然だろう。俺はそれ以上考えるのを止め、黒歌を抱きあげるとリビングへと向かった。さて、今日の夕飯はどうしようかな…。

第九話 身分違いの恋って素敵ですよ

唐突だが、生前の俺は男子校出身だった。だから女の子との出会いも少なく、それが彼女の出来なかった理由だったんじゃないかと思う。：はい、わかっています。出会いがあったって彼女が出来るって決まってるわけじゃないって事くらい。

そんな俺が、今ではグレモリーさんを始めとする何人もの女の子と友達になれた。やっぱりこれもアルヴァン先生のイケメンフェイスとボディのおかげなんですかね。あふれ出る騎士(笑)のフェロモンが女性を引き付けるとか：うん、無いな。

今だってこうして見知らぬ女性三人に絡まれてる。ははは：どうしてこうなった。おかしいな。ほんのついさっきまで俺は予約した一セット六個入りの限定シュークリームを手に入れてホクホク気分が家で帰ろうとしてただけなのに。二十四にもなって予約してまでスイーツ食べようとするなんてキモい？ 愚かな。『スイーツ男子』という言葉があるのを知らないのかな？

家を出る。

店に着いてシュークリームを買う。

家まで我慢出来なかったので途中の公園でベンチにでも座って一っだけ味見しようと立ち寄る。

いざ食べようとした所で女性三人組が通りかかる。

その内の一人が俺の持つシュークリームを見て羨ましそうな顔で立ち止まる。

嗜めようとした別の女性のお腹が可愛らしい音を鳴らせる。

真っ赤になった女性と最後の一人の女性もシュークリームに目を向ける。↑今ここ。

(な、何だ何だ？ もしかしなくても食べたいのか？)

「「じー……」」

(止めて、そんな目で見ないで。駄目だぞ。これは限定スイーツだ。それを見ず知らずの他人に渡すなど：！)

「「じー……」」

(渡す…なんて…)

「「じー…」」

「…よければ食べるか?」

おうふ、プレッシャーに負けて言ってしまった。アルⅡヴァン先生。こんな小心者な俺をお許しください。そんなチキンな俺を尻目に、二人の女性…青いロングヘアの女性と金髪ツインテールの女性がシュークリームを手取る。残った黒髪の女性(さっきお腹を鳴らせた)が「に、人間ごときに施しは受けないわ」とか言ったが、その後またお腹を鳴らせ、なんか泣きそうな顔でシュークリームに手を伸ばした。

にしても今の言葉…まさかこの人中二病発症中なのか? いかん、いかんぞ。今は楽しいかもしれんが、近い将来必ず後悔する時が来るんだから。だいたい、寝ようとしてベッドに横になった瞬間とかにふと思い出したりして。

ただ、三人の中で、黒髪の女性が一番可愛らしくシュークリームを頬張っていたのはすっかり記憶しました。んで、食べている間、無言で見つめるのもあれなので、ちよつと話しかけてみた。

まず、彼女達の名前はそれぞれ、黒髪の女性がレイナーレさん。青のロングヘアの女性がカラワーナさん。そして金髪ツインテールの女性がミッテルトさんというらしい。髪の色から何となく予感していたが、やっぱり外国の人だったようだ。

次に、この街に何をしに来たのか聞いてみた。レイナーレさんは話したくなかったみたいだが、黙って見つめ続けると諦めたように話してくれた。ちゃんと目を見つめてお願いしたおかげだな。だが直後、彼女の口から語られた話に、俺は不覚にも感動して泣きそうになってしまった。

なんか『神の子を見張る者』とか『セイクリッド・ギア』とか仰々しい専門用語のオンパレードで理解するのが大変だったが、俺なりに纏めると次の様な感じだ。

まず、彼女達はこの若さで就職しているそうで、この街に来たのは仕事の為との事。カラワーナさんとミッテルトさんはレイナーレさ

んの部下で、後一人ドーナシークさんっていう男の人もいるんだとか。

レイナーレさんはその就職先の社長さんに想いを寄せているらしい。だけど、一般社員である自分は想いを伝えるどころか、近付く事すら難しい。しかし、今回の仕事を成功させれば、社長さんに近付けるかもしれないと奮起し、部下の三人を連れてやって来たんだって。

健気：その一言に尽きる。想いを寄せる相手に近づきたくて自分出来る事を頑張る。こんな素敵な女性に想われるその社長さんが心底羨ましいと思った。採用したのは正に運命だったのかもしれない。

そして、そんな上司の恋を応援する部下達。なんとというか、理想の関係だよな。

ちなみに、その仕事っていうのは、とある物を手に入れる事と、危険物の駆除だとか。便利屋みたいな仕事なのかな？ 今ここにいないドーナシークさんは一人で駆除の仕事に出ているそうさ。

とにかく、レイナーレさんの乙女っぷりにいたく心を揺さぶられた俺も彼女の恋が叶うよう応援する事にした。すると、どうしてか、三人が戸惑った様子を見せる。そりゃあ、会ったばかりの人間に真剣な顔で応援しますとか言われたら困るだろうけど、それでも言わずにはいられなかった。

「ふ、ふん！ 人間なんかそんな事言われても嬉しくないわよ！」
などと言いつつそっぽを向くレイナーレさん。乙女な上に照れ屋らしい。僅かに見える頬がうつすら赤くなってるのがこちらからでもハッキリ確認出来た。けど、告白する前にその中二病は治した方がいいと思うな。カラワーナさんとミツテルトさんも優しい顔でレイナーレさんを見つめている。

その後、彼女達を見送り、俺も公園を後にした。結局残ったシュークリームも全部彼女達にあげてしまったが後悔は無い。いやー、今の時代にもああいう女性っているんだなあ。心が洗われるようだよ。

ホント、彼女の恋が実る事を切に願う。社長と一般社員：結ばれるには色々困難が待ち受けてると思うけど、ああいう健気な女性は幸せ

になるべきだと思う。つーかしろ、この世界の神様！

『呼んだか〜?』

いえ、あなたじゃないです。

翌日、登校した俺をちよつとした騒ぎが待ち受けていた。

「嘘よー！ どうしてお姉様があの男と！」

「ああ、夢なら早く覚めて！」

何事かと覗いてみると、そこには並んで歩く兵藤君とグレモリーさんの姿があった。いや、そんなに騒ぐ事か？ ただ先輩と後輩が一緒に歩いてるだけにしか見えないけど。

「あ、お兄様ー！」

おおー、ターゲットがあの二人から俺になった。

「お兄様！ お願いです！ お姉様をあの変態から救い出してくださいー！」

「あの身の程知らずに正義の鉄槌を！」

「むしろ私を殴ってください！」

おい、最後の子。何で理由も無いのにキミを殴らにやならん。心の中でツッコんでいると兵藤君とグレモリーさんは玄関の前で別れていた。

「俺も行くか」

未だ騒ぎの収まらない周囲を余所に、俺も二人に続いて玄関へと向かうのだった。

第十話 聖女の祈りは神に届かずされど友の叫びは騎士へ届く

教室へ入ると、グレモリーさんが女子に囲まれてた。「何であんなの?!」とか「考え直した方がいいわ!」とか耳に届く。あの子達、さっきの騒ぎを窓から見てたみたいだな。

「おはよう、神崎君」

「おはよう。朝から凄い騒ぎだな」

女子達から解放されたグレモリーさんに挨拶すると、彼女は疲れた様子で苦笑いを見せた。

「みんな気にし過ぎよ。私はただ後輩君と一緒に普通に登校しただけなのに」

いやキミ、もうちよつと自分の影響力というものを考えた方がいいぞ。大丈夫かな、兵藤君。いつか闇討ちされるんじゃないのか…。

「あなたはどうか? もしかしてヤキモチとか焼いた?」

「いや別に」

本人が普通の事だつて言ってるのに、今の話のどこにヤキモチを焼く要素があつたのだろう? そう言うと、グレモリーさんは少し不満そうに頬を膨らませた。

「…即答しなくてもいいじゃない」

何ですか、その可愛い反応は…。普段は優雅で大人びている様子の彼女が見せた子どものような表情にちよつと萌えた。

「いや、すまない。そうだな…今、少しだけ兵藤君が羨ましいと思ったよ」

「え? あ、そ、そう…」

今度は照れたように頬を染めるグレモリーさん。さっきの顔と合わせて、こつやつたたまに年相応の反応を見せるのも彼女の魅力の一つなのかもな。とりあえず、今この場にカメラが無かった事が残念でならない。

「そ、そろそろHRが始まる時間ね! 神崎君も席に着いたら?」

「そうだな」

いそいそと自分の席に向かうグレモリーさんを姫島さんが微笑ましいものを見るような目で見つめていた。しかし俺は騙されないぞ。あれは、何か面白いものを見つけましたって感じの目だ。頑張れグレモリーさん。

その後、朝の登校騒ぎ以外に特に何かが起こる訳でもなく、あつという間に放課後になった。俺はいつものように図書室へと向かおうとしたが、その途中で二人の男子に出会った。

「あ、神崎先輩」

一人は兵藤君。そしてもう一人は…。

「こんにちは、先輩」

…誰だこのイケメンは!? いや、まあ木場君なんだけどね。

彼は兵藤君と同じ二年生の木場祐斗君。兵藤君とは別の意味で有名な少年だ。何で有名なのかなど語る必要も無い。その顔を見れば全てがわかる。今こうして挨拶している間も、教室や廊下の各所から女子の黄色い歓声があがっている。

「見て！ お兄様と木場君のツーショットよ！」

「誰かカメラ持ってないの!？」

「おい！ 俺もいるんですけど！」

「うっさい兵藤！」

「そこどきなさいよ！ アンタまで写っちゃうじゃない！」

「ちくしょう！ だから一緒に行きたくなかったんだ！」

ガチ泣きしてる兵藤君。…うん、そつとしておこう。とりあえず木場君に話を振ると、これから兵藤君をある人物に会わせるそうだと、そのある人物っていうのがグレモリーさんで、今は彼女のいるオカルト研究部の部室へ案内していた途中なんだとか。

「そうか。すまない、邪魔を試みたいだな」

「いえ、お気になさらず。こうして先輩とお話し出来て光栄ですからね」

おお、なんとというイケメンセリフ。彼は男まで落とす気なのか？ 元々イケボイスなのにそんなセリフ言われたら落ちない女子なんて

いないんじゃないのか？

あ、イケボイスと言えば、生前とあるオタク友達に「お前、顔は残念だけど、声は割といいよな。なんか某声優に似てる気がする」とか言われた事があるが…。悪かったな残念で。

「それじゃ、先輩、僕達は行きます。…ほら兵藤君、どうして泣いてるのかわからないけど、そろそろ泣きやんでくれないかな」

「それをお前が言うか!? ああはいはい！ わかりましたよ！ どこにでも連れて行ってくださいってんだ！」

木場君を置いて歩きだす兵藤君。連れて行けって言ってるのに先に行つてどうするんだ？ …まあいいか。とりあえず、俺も目的の場所へ行きますかね。

次の日、兵藤君が「ハーレム王に俺はなる！」と叫んでいる場面に出くわした。一体昨日何があったのかと心配になってしまった俺だが、とりあえず頑張れとだけ心の中で呟いた。

そして、それからさらに数日が経過した。気分が乗らなかつたので図書室へは行かず放課後すぐに帰宅する事にした俺の前に…天使が現れた。

いきなり何言つてんだ？ とか思われるかもしれないが、とにかくそう表現するしかないほど、目の前の少女…アーシア・アルジエントさんは愛らしく、そして素晴らしい心の持ち主だった。

彼女との出会いは数分前、歩いている俺の元へヴェール…でいいのか？ が飛んで来た。それを拾い上げた直後、一人の少女が駆け寄つて来たのだ。その子は俺の持つヴェールに目を向ける。それでこれが彼女の物だと察した俺はヴェールを差し出したのだが。

「これはキミのか？」

「あ…う…」

何故か言い淀む少女を見て、俺は一つの仮説を抱いた。金色の髪に翠色の目。明らかに日本人じゃない彼女はもしかしたら日本語が話せないのではないかと。

困った。言葉が通じなければどうしようもない。困った俺の頭にオカンの声が響く。

『お困りのようやな』

本当に、どうしてこう毎回毎回絶妙なタイミングで現れるんですね、この神様は。

『神様やから』

シンプルかつベストな回答ありがとうございます。で、俺はオカンの力で違う言語でも会話が出来るようにしてもらった。

「…俺の言葉がわかるか？」

「ッ！ は、はい！」

互いの言葉が伝わるようになった所で、俺は改めて少女にヴェールを差し出した。それを受け取った彼女は正に太陽の様な笑顔でお礼を言ってきた。

「ありがとうございます！ おかげで助かりました！」

なんとという眩しさ！ ああ：俺の心の汚れた部分が浄化されていくのを感じる…。

「私、アーシア・アルジェントと申します。少し前にこの街の教会に赴任して来たシスターです」

「ご丁寧にも。俺は神崎亮真。この街にある駒王学園の三年生だ。よろしく」

「はい、こちらこそ。…はあ、また道行く方にご迷惑をかけてしまいました。この前だってイツセイさんにぶつかっちゃったのに…」

アルジェントさんから知人の愛称が飛び出た事に驚く俺。なんでも、この街に来たその日に兵藤君とぶつかってしまったそうで、教会の場所がわからなかった自分を嫌な顔せず案内してくれたらしい。おお、やるじゃないか兵藤君。俺の中で彼に対する評価が上がった。「ただ、その、私を見る目がちよつとギラギラしてたのが怖かったです。駄目ですよね私、親切にしてくださいました方を怖いなんて思ったら」

その直後、アルジェントさんの続けた言葉で再び下降する評価。…兵藤君、マジで自重。

にしても、こんな若い子が一人でこんな所に来るなんて、何か事情があったりするのかな？ それとなく話を振ってみると、アルジェン

トさんは今の今まで明るかった表情をあっという間に暗くさせたと思うと、その場で涙を流し始めた。ちよっ!? スタッフウー~~~~!!
どうなってるのコレ!? そんな泣くほどの地雷踏んじやったの俺!?

「す、すみま…せ…急に…泣い…たりなんか…して」

「い、いや、こちらこそすまない。嫌な事を聞いてしまったみたいだな」

「気にしないでください。…聞いてもらえますか、リョーマさん？」

「俺でよければ」

そして、彼女は自分の半生を語ってくれた。

生まれてすぐに両親に捨てられ孤児院で育った事…。

子どもの頃から信仰深かったおかげで奇跡の力を手に入れた事…。

その力によって『聖女』として崇められた事…。

その裏で、周りが自分を人とは違う生物であるかのように見ていた事…。

ある時、偶然自分の近くに現れた悪魔を助けた事…。

それによって『魔女』の烙印を押され教会から追い出された事…。

その時、誰も自分の味方をしてくれなかった事…。

行き場の無くなった自分を、とある組織が拾ってくれた事…。

悪魔って…もしかしなくてもあの赤髪のイケメンと魔法少女みたいな人達の事だよな。え、悪魔ってこの世界にもいるの？

予想以上のハードな内容に始めは驚いた俺だが、聞いている内にとある感情がふつつつと湧いて来た。それは…こんな優しい少女を傷付けた全ての存在に対する怒りだった

馬鹿だろ両親! アホだろ教会! ああ、叶うならこの子を追い詰めた連中全員の所に行つてボッコボコにしてやりたい。

「きつと、私の祈りが足りなかったんです。だからこそ、主はこうして試練を与えてくれたんだと思います。今を頑張れば、いつかきつと報われる時が来ると私は信じてます。そうすれば、友達だつてきつと…」

「なら…俺と友達になろう」

「え……？」

また泣きそうになっていたアルジエントさんにそう言うと、彼女は涙の代わりにポカンとした様子でそんな声を出した。

「キミは自分の心に従ってその悪魔を助けた。そののどろろが悪い。その優しさは人として何よりも清く尊いもの。そんなキミのどろろが『魔女』だ。キミは今も間違い無く『聖女』だよ。俺は、そんなキミとは非とも友達になりたいと心の底から思う」

アルⅡヴァン先生というフィルターを通して俺の口から気障なセリフがスラスラ出て来る。だけど恥ずかしいとは思わない。俺自身の稚拙な言葉よりずっと気持ちが悪く籠ってるように思うから。

「どうして……私なんかそんな言葉をかけてくれるんですか？」

「理由は無い。ただキミと友達になりたいだけだからな」

俺の言葉に、アルジエントさんはクスッと小さく笑う。そう、笑ってくれたのだ。

「……はい、こんな私でよければ友達になってください」

差し出された手を握り締める。小さく、温かい手だった。

「何か困った事や助けて欲しい事があつたら呼んでくれ。いつでもどこでも駆けつけるからな」

アルジエントさんの為ならオルゴン・クラウドを使う事も辞さないぞ俺は！

「ふふ、はい。その時はよろしくお願いします」

それから、早速どこかへ遊びに行こうかと誘ったが、実は用事のあつたアルジエントさんは申し訳なさそうに断った。だから今度、アルジエントさんのいる教会にこっちから遊びに行くと約束して、その日は別れた。

さらに数日後、俺はアルジエントさんの所へ遊びに行く事にした。途中駄目元で例の限定シュークリームの店に寄つたら、奇跡的に三つだけ手に入った。運がいい。レイナーレさん達に出くわさないようにしないとな。

調べた住所を頼りに歩き続ける事数十分。辺りはすっかり暗くなってしまった。まずいな、こんなに時間がかかるとは思わなかつ

た。今からお邪魔しても迷惑かもしれない。よし、とりあえずシュークリームだけ渡して帰ろう。そう決めた俺の前によく教会が姿を現した。

さて、アルジエントさんはどこにいるだろうか？ とりあえず、目の前の聖堂に入って、中に誰かいたら居場所を聞いてみようか。

静かに両開きの扉を開けると、中には神父の格好をした一人の男性が立っていた。いや、男性というよりは少年かな？

「んー？ おいおい、てつきりあのクソ悪魔君達がやって来ると思ってたんですけどねえ。つーか誰ですかアンタ？」

なんか神父というにはちよつと言葉使いが悪い気がするが、あの格好は間違い無く教会の関係者だろう。丁度いい、彼に聞こう。

「すまない、ここにアーシア・アルジエントさんという子がいると思うのだが」

「おやおやあ？ アーシアたんを知ってるって事は、アンタもしかしてあのクソ悪魔君達のお仲間ですかあ？ 悲しいねえ。人間のくせに悪魔と仲良くするなんて。そんな残念なアンタは・・・ここで死ねやあああああああ!!!」

「ッ!？」

考えるよりも先に体が動く。その刹那、神父は光る剣で俺の頭があつた場所を薙ぎ払った。

お、おまわりさー！ー！ー！んっ！ ！ ここです！ ！ ここに銃刀法違反のクレイジー神父がいます！ てか何なのあの剣!？」

「ああもう、よけんじゃねーですよ！ 大人しくしてろって！ じゃないと殺せないでしょーが!」

「何の真似だ?」

「だから殺しますって言ってんだろろうが！ 頭に蛆でも湧いてんのか テメエー!」

忌々し気に叫びながらクレイジー神父が懐から拳銃を取り出す。って拳銃!?! やば――。

「はい、ドーン!」

一切の躊躇無く引き金を引くクレイジー神父。そして発射された

弾丸は一直線に俺の胸に突き刺さる…事は無かった。

まるで見えない壁に阻まれているかのようには、弾丸は動きを止め、やがて地面に落下した。これは…まさかバリア？ え、ラフトクランズの姿にならなくてもオルゴンクラウドって発動するの？

「おいおいおいおい！ 何だよテメエ！ 神器所有者なら先に言いやがれ！」

神器？ 何それ美味しいの？ なんてボケてる場合じゃない。この状況は良くない。何とかこのクレイジー神父を取り押えないと。

どうしようか考えを巡らそうとした俺に向かってクレイジー神父は素早い動きでこちらに接近。再度剣を振り降ろして来た。迫り来る刀身に対し、俺は両手で挟みこむようにして受け止めた。これぞ…真剣白刃取り！

「んなっ!」

驚愕した様子のクレイジー神父を見つめながら、俺は心の中で悲鳴をあげた。

つつつつ怖ええええええええええええ!! これ駄目だ！ もう二度とやらねえぞ！ は？ お前の体なら問題無いつて？ 馬鹿野郎！ オルゴンクラウドとチートボディがあつたつて怖いもんは怖いんだよ！

そ、それより、クレイジー神父が固まっている今がチャンスだ。今の内にこの剣を取り上げてしまえば！ そう思い、挟む手に力を入れた刹那、剣は俺の手の中で呆気無く砕け散った。

（え、剣ってこんな簡単に砕ける物なの？ これじゃまるで玩具じゃ…玩具？）

俺はその瞬間理解した。そうか！ あの剣は玩具だったのか！ つて事は、このクレイジー神父、玩具振り回して遊んでただけ？ さっきの銃も玩具だったのか？

「…テメエ、マジで何者だ？ あの剣をただの人間が砕けるはずが…」
「その程度の玩具ならその気になれば誰でも壊せるだろう」

「玩具!? はは、こいつはいいや！ 言うに事欠いて玩具呼ばわりかよ！ 止めだ止め！ アンタみたいなバケモン相手に出来つかよ！」

「何？」

突然だった。クレイジー神父が参ったとばかりに両手をあげる。

「つーわけで俺はここでドロクンさせて頂きます。アンタ相手じゃあのカソ墮天使共も終わりだな」

えーつと：つまり見逃してくれるって事でいいのか？ 混乱する俺に対し、クレイジー神父は奥の方を指差した。

「アンタの愛しいアジアさんは地下にいるぜえ。助けるならどうぞご自由に、俺にはもう関係ねえからな。そんじゃ、バイビー」

言うなりさつさと聖堂から出て行くクレイジー神父。何だったんだ一体？ 最後にアルジェントさんの場所を教えてくれたって事は実はいい人？ いやいや！ 玩具とはいえ、剣とか銃を向けて来る相手がいい人なわけない！ 騙されるな、俺。

なんか、アルジェントさんの事が凄く心配になって来た。俺はシュークリームの入った箱をその場に残し、クレイジー神父の指した方へ向かった。そこには巧妙に隠された階段があった。いかにもヤバイ雰囲気だが。ここまで来たら行くしかない。

階段を下りると、そこには道が一本だけ存在していた。そしてその一番奥に巨大な扉を確認した俺はそちらに歩を進めようとした：その時だった。

「助けて！ 助けて、リョーマさん！」

それは間違い無くアルジェントさんの声だった。その尋常じやない声色に即座に走り出す俺。女の子があんな声を出す時は：「G」か!? “G”でも出たのか!? 正直俺も苦手だが、アルジェントさんはもつと苦手なんだろう。ならばここは彼女に代わってヤツの相手を…!!

そんな事を考えながら扉を開ける。そこには衝撃的な光景が広がっていた。

S I D E O U T

ア ー シ ア S I D E

「さあ、アジア、覚悟は決まったかしら？」

レイナーレ様が微笑む。だけど今の私にはわかる。その笑みに優しさや慈しみは一切込められていない事を。

私がここに送られた理由。私がこれから何をされるのか。そして、その結果私に何が待ち受けているのか。レイナーレ様はその全てを私に話した。

「あなたの神器…『聖母の微笑み』を手に入れる事で、私は至高の墮天使となる！ そうすれば、私はあの方々の寵愛を授かる事が出来るのよ！」

恍惚とした顔で語るレイナーレ様。その傍にいるカラワーナ様とミッテルト様はそれとは対照的に、どこか気まずそうな表情を浮かべていた。

「お姉様…本当にやるんですか？」

ミッテルト様の言葉にレイナーレ様が表情を改める。

「今さら何を言っているのミッテルト？ もうあと少しで目的が果たせるのよ？」

「そう…ですけど。なんか、本当にこれでよかったのかなって。もしかしたら、あの方々から愛してもらう方法は他にもあるのかもしれないって。何ですかね。ついこの間までそんな事考える事無かったのに」

「あの人間の所為なの？」

ビクツと体を振るわせるミッテルト様。一体何があったのか想像もつかない。でも、ある人がこの方達に何かしらの影響を与えたというのは何となく理解出来た。

「…そうね。私にも思う所はあったわ。でももう遅い。私達は取り返しのつかない所まで来てしまった。…さあ、この話はもうお終いよ。儀式を始めるわ」

レイナーレ様が私に近付いて来る。

「受け入れなさい、アーシア。これもまたあなたの言う主の与えた試練なのだから」

これが試練？ “死”を受け入れる事が試練？

(…いや)

少し前の自分なら、もしかしたら受け入れていたかもしれない。だけど、今は違う。

『なら…俺と友達になろう』

『アーシア、俺が友達になってやる。いや、俺達、もう友達だ』

だって今の自分には、ずっと欲しかった素敵なお友達が二人もいるのだから！

“死”が近付いて来る。今さらだけど恐怖が湧きあがって来る。助けて欲しい。私を“死”から救って欲しい。

『何か困った事や助けて欲しい事があつたら呼んでくれ。いつでもどこでも駆けつけるからな』

その中でふと、彼と交わした約束を思い出した。彼にとっては軽い口約束だったのかもしれない。私がこんな事になつているなんて彼が知る筈もない。…それでも、あの時の彼の優しい表情を思い出すと叫ばずにはいられなかった。

「助けて！ 助けて、リヨーマさん！」

「リヨーマ？ 誰だか知らないけど、助けなんて来るはずが…」

バンツ！ とレイナーレ様の言葉を遮るように勢いよく開かれた扉。そして…その奥に彼は立っていた。

「リヨーマ…さん」

届く筈の無い私の叫び。だけど、彼は…リヨーマさんは来てくれた。

「何を…何をしている」

リヨーマさんが言葉を発する。その瞬間、部屋の中の温度が急激に下がったかのような錯覚に陥ってしまった。レイナーレ様は目を見開き、カラワーナ様は顔を青ざめ、ミッテルト様は震えていた。

誰もが一瞬で理解した。リヨーマさんは怒っている。それも周りに影響を与えるほど強烈に。その様子に恐怖を抱いてしまう私だったが、同時に胸に何か温かいものが込み上げて来た。

だってリヨーマさんは、私の為に怒ってくれているのだから。さらにリヨーマさんは私と目を合わせると、あの時と同じように優しく微笑みながら告げた。

「アルジエントさん。すぐに助ける」

その言葉に、その姿に、私はどこまでも頼もしさを感じるのだった。まるで・・・お伽噺に出て来る騎士様のように・・・。

アーシアSIDE OUT

IN SIDE

「リョーマ…さん」

俺の目に飛び込んで来た光景…。まずは大勢の人間。全員がさっきのクレイジー神父と同じ光る剣を握っていた。ならばこいつらも教会の人間という事か。

そいつらの奥にそびえる巨大な十字架。何故かその傍にレイナールさん達。そして…その十字架に張り付けにされたアルジエントさん。

「何を…何をしている」

ふざけるな…ふざけるなよお前ら！ アルジエントさんをここへ招いたのはこんな事が目的だったのか！

あの優しくて、純粋で、無垢なアルジエントさんを……………十字架プレイなんてマニアック過ぎて意味不なプレイに巻き込む事が！ おのれ！ アルジエントさんを傷付けたくせにその上こんな辱めを与えるとは！ そもそも十字架プレイって何だよ!? 何が楽しいか理解出来ない！ てかしたくない！

アルジエントさんと目が合う。彼女は泣きそうな顔をしていた。当然か、友達にそんな恥ずかしい格好を見られてるんだから。でも大丈夫。お兄さんはわかってるよ。キミが自ら望んだわけじゃないって。優しいキミの事だ。頼まれたから断れなかったんだろう。

「アルジエントさん。すぐに助ける」

とりあえず…ここにいる変態どもを全員ぶちのめしてからな！

第十一話 最終兵器発動

「な、何者だ！」

「邪魔はさせんぞ！」

うっさい変態共！ いい年した大人がそんな物でなに遊んでんだよ！ 仕事しろよ！ その調子じゃ掃除とかもしてないんだろ！ 外から見た教会ポロポロだったぞ！

しかもこの人数、まさかこの教会の人間全員が集まつてるのか？

おいおい、よくもまあ同じ趣味の変態を同じ場所に集めたな。それとも、ここはそういう連中を集める所なのか？ 変態の巣窟じゃないですか、やだー！

ならば俺も遠慮はしない。こんな変態共にアルⅡヴァン先生のお力を譲り受けた俺が負けるはずが無いのだ！

俺は自重という名のリミッターを外した。今はこいつらに対する怒りのままに暴れてやる。よっし、気合い入れるぞ！ 今から俺は騎士（笑）になるのだ！

「我が名は神崎亮真！ 駒王学園の三年生にして、そこに囚われたアーシア・アルジェントの友である！ 我が友へ与えた苦痛・・・この我がそのまま貴様等に返してやる！」

騎士（笑）つばいセリフを叫んでみる。：いいね、コレ。テンション上がって来た。よし、今後この状態の事を『アルⅡヴァンモード』と呼ぶ事にしよう。

「リョーマさん・・・」

ただ、そのセリフを聞いたであろうアルジェントさんが顔を赤くしていたのにちよつと落ち込んだ。きつと「勝手に私の名前を使わないでください。不愉快です」って怒ってるんだらうな。ゴメンねアルジェントさん。どうか許してください。

「え、ええい、黙れ！」

一番近くにいた変態が斬りかかって来た。遅い、遅いぞ！ さっきのクレイジー神父に比べると止まって見えるわ！

「甘っー」

僅かに体を右にずらし、その一撃を避ける。お返しとばかりに右拳を変態の腹に叩きこんでやると、その変態はもの凄い勢いで吹っ飛び、頭から壁に突っ込んだ。

「…なっ!?!」

吹っ飛んだ変態を見て驚愕する残りの変態達。ふん、今の俺は常時熱血が発動していると思うがいい！　…いや、実際には使って無いですよ？　使ったら頭とかパーンってなるかもしれないし。あれだ、気分的なヤツだ。

そこからはもう大乱闘。向かって来る変態共をちぎっては投げ、ちぎっては投げ、たまに殴り、時に蹴飛ばし、縦一列になって来る三人の先頭のヤツの頭を踏みつけ「俺を踏み台にしたあ!?!」なんて悲鳴をあげさせたり、とにかくもうアルルヴァン先生の身体能力をフルに使ってお仕置きしてやった。にしても先生、剣だけじゃなくて格闘も得意なんだな。まあ、考えてみれば、騎士と呼ばれているからって剣しか使えないってわけじゃないか。

それにしたって圧倒的だ。よかったな統夜。機体じゃなくて生身の勝負だったら序盤で負けてたぞお前。

そして気付けば、そこに立っていたのは俺以外誰もいなかった。とりあえず、気絶した変態共は後で正座させるとして…。

「アルジエントさん！」

遮る物を全て蹴散らした俺はアルジエントさんの元へ向かった。彼女の手足を拘束していた枷の様なものをぶっ壊し、フラツと倒れて来た彼女を抱きしめる。

「…間に合ってよかった」

いや、マジで。彼女が如何わしい行為をされる前に助けられて。

「リョーマさん！　リョーマさん！　私…届くはず無いって、聞こえるはず無いって…！　けど、あなたはこうして私を助けに…！」

可哀そうに、よっぽど恥ずかしかつたんだな。溜まった涙を決壊させる彼女の背を撫でながら、俺は安心させるように笑いかけた。

「約束しただろ？　困った事や助けて欲しい事があつたらすぐに駆けつけるよ」

「ッ…！ リョーマさああああああん！」

とうとう我慢出来なくなったのか大声で泣き始めるアルジエントさん。ええい、あの変態共全員、もう一回くらい殴ってやろうか。

「あ、ありえない…ただの人間がこんな…。あなた…あなたは何なのよ!?!」

すっかり放置されていたレイナーレさんが取り乱した様子で叫び散らす。何なの？ それはこちらのセリフだ。どうして…どうしてあなた達がここにいるんだ。

「これが…こんな事が、あなた達のやりたかった事だというのか！」

信じてたのに…。好きな相手の為に一生懸命仕事してると思ってたのに。それを放り出してこんな場所でこんな事を。しかもその格好、ボンテージってやつじゃないですか。十字架プレイに加えて女王様プレイとかもう勘弁してくださいよ！

「ッ!?!」

狼狽するレイナーレさんから、カラワーナさんとミツテルトさんに視線を移す。

「こうなる前にどうして止めなかった！」

「ひっ!?!」

「ぐうっ!?!」

仕事サボってまでやる事じゃないでしょうが！ 上司の趣味に付き合うのも大切だけど、時と場合を考えなさい！

青ざめた顔のカラワーナさんとガタガタ震えるミツテルトさん。

俺のお説教が効いたみたいだ。うん、ちゃんと反省してくればそれでいいんだ。

「…あなたに」

「ん？」

「人間のあなたに私達の何がわかるっていうのよ！ 所詮、底辺の存在でしかない私達が、あの方々の愛を授かるには…周囲を見返す為には…こうするしか無かったのよ！」

俯いていたレイナーレさんが突如激昂する。いや、だから仕事しろよ！ 勤務中にアブノーマルなプレイに勤しんでいたなんてバレた

らそれこそ周りから冷たい目で見られるぞ！

それともあれか？ その社長さんが実はそういう趣味の人で今から練習してたとか？ だとしても、今から勉強熱心だね…とはならんぞおい。

「その想いを否定したのはあなた自身だろう！」

真面目に頑張ればいつか報われてたかもしれない。その可能性を投げ捨てたのは他の誰でも無い、彼女自身だ。ほんと、何してるんですか…。

「黙れ！ 黙れ！ うああああああああ!!!」

錯乱したかのように絶叫したレイナーレさんは、その手に光る槍を握りしめ、それを俺達に向かって突き出す。対する俺はアルジエントさんを背に隠し、その槍を掴む。

「なっ!？」

「遊びは終わりだ」

幸い、ここにいるのは俺達だけ。今から仕事に戻れば会社の人間にはバレずに済むだろう。握り締めるように力を入れると、槍は簡単に壊れた。やっぱりこれも玩具だったか。

「あ…ああ…」

その場にペタンと女の子座りするレイナーレさん。もしかして玩具壊されたのそんなに悲しいの？ むう、弁償するべきか。え、変態共の剣はどうするかって？ あんな連中なんか知らん。

「さあ、すぐにここから出——」

「アーシアアアアアアアア！ 助けに来…え？」

とりあえずレイナーレさんを立たせてあげようと近づこうとしたその時、部屋の入り口からそんな雄叫びが聞こえて来た。振り返るとそこにはゴツイ籠手みたいなものを着けた兵藤君が立っていて、その後ろにはさらに木場君と塔城さんの姿も確認出来た。

「こ、これは…エクソシスト達が全滅している？ 誰がこんな…」

「ツ…い… か、神崎先輩…!？」

塔城さんが真っ先に俺の事に気付く。あ、木場君、それ俺がやりました。反省も後悔もしていません。だって変態だもの。

「イツセーさん！」

「ア、アーシア。それに神崎先輩？ ど、どうして先輩がここに？ てか、そこにいる三人って墮天使!? 先輩、アーシア！ すぐにそいつらから離れて……！」

「大丈夫だ、兵藤君。彼女達はもう何もしないさ」

「え、ど、どういう事ですか？」

「イツセー君。今はとにかくあの墮天使達を捕まえよう」

「…先に行きます」

「え、あ、わかった！」

三人が一斉にこちらに向かって来る。そして、あれよあれよという間にレイナーレさん達を捕まえてしまった。おいおい、穏やかじゃないな。てかキミ達なにしに来たの？ ま、まさか…兵藤君達もあの変態共の宴に参加しようとして…いや、無いな。そんな事あつてたまるか。

「イツセー君。とりあえず、その女の子がキミの言っていた子なんだね?。」

「あ、ああ。彼女がアーシアだ」

「なら目的は達成だね。とりあえず、一度外に出よう。僕としてはここから一秒でも早く出て行きたいからね。…先輩、あなたもついて来てくれますか?。」

一応承諾を求めているかのような言い方だが、その目には有無を言わさぬ迫力があつた。止めるよ、イケメンが睨むと地味に怖いんだから。

「…わかった」

こうして、俺は兵藤君達と一緒に地下を後にした。聖堂から外に出ると、既にそこは真つ暗となっていた。そして、そこにはグレモリーさんと姫島さんの姿があつた。

「ずいぶん早かったわ…え、神崎君!。」

「あらあらまあまあ。どうしてあなたがこんな所に?。」

それはこっちのセリフだよ姫島さん。そんな風にツツコんでいると、グレモリーさんがレイナーレさん達に向かって話しかけていた。

「ごきげんよう、墮天使レイナーレ」

…え？ 墮天使？ 墮天使ってあの赤ドラゴンと白ドラゴンとの戦いの時にいた黒い翼の人達？ って、あっ！ よく見たらレイナーレさん達の背中にも同じ物が！ 何で気付かなかったんだ俺！？ つて事は、この世界には悪魔だけじゃなくて墮天使もいるって事？ ここ人間界だよな？ 冥界じゃないよね？

『都合主義ってヤツやな』

あれ、今オカンの声が聞こえたような…いや、気のせいかな。

「グレモリー一族の娘…」

「ええ、そうよ。私はリアス・グレモリー。グレモリー家の次期当主よ。そして、この辺りの土地は今この私の管轄になってるわ」

え、マジで？ どこことなく普通の子と思つて無かつたけど、そんな凄い子だったの彼女？ いや、グレモリー家っていうのがどういう一族なのかわからないけど、名前からしていかにも凄そうな感じだな。ていうか、その若さで土地を任せられるってどうよ。

「今回の計画とやらの真相はもう明らかになつてるわよ。墮天使全体のものではなく、あなた達が独断で動いたものだという事をね」

グレモリーさんの指摘にレイナーレさんが表情を変える。

「ど、どうしてそれを!？」

「あなたの部下…確かドーナシックつて言つたかしら？ そいつがペラペラしゃべってくれたわ。…まあ、実際に聞いたのはイツセーなんだけどね。そうでしょ？」

「は、はい、部長。アイツがアシアの神器を奪うつて話をして、それで俺はアイツをこの籠手…『赤龍帝の籠手』でブツ飛ばしました」
『赤龍帝の籠手』ですつて!?! 神滅具の一つであるあの!?!」

…うん、さっぱりわからん。誰か俺に説明してください。中二ワードの応酬に混乱する俺の前で、グレモリーさんはさらに話を続ける。「理解出来た？ もうあなた達は終わりよ。今この場から逃げたとしても、いずれ他の墮天使があなた達を捕まえに来る。その前に、私が終わらせてあげるわ」

グレモリーさんが初めて見せる冷たい表情。終わらせる？ まさ

か…通報？ 通報するんですか？ そりゃあ、自分の土地であんな変態騒ぎを起こされたんだから怒るのもわかる気がするけど…。

「待ってくれ」

自分でも驚くくらい自然に体が動いた。レイナーレさん達を守るようにグレモリーさんと対峙する俺。

「…どういうつもり、神崎君？」

怖っ！ 目がマジだよ！ だがしかし、ここでひるんではいけない。

「どうか、彼女達の話聞いてあげてくれないか？」

そう、本当はちゃんとした人達なんです。今回はあれだ、魔が差しただけなんだ！

「話ならすでに聞いたわ。どうしてあなたはその三人を庇うの？ まさか…あなた、教会と関係が…」

「俺をあんなヤツらと一緒にするな!!」

酷いよグレモリーさん！ キミの目には俺とあの変態共が同じに見えるのか!? 誤解を解く為につい声を荒げてしまった俺は悪くないはず。

「ご、ごめんなさい…」

お、どうやら俺の必死の思いは通じたようだ。申しわけなさそうに謝るグレモリーさんにホッとすする。

「先輩…まさか、あなたも教会に恨みを…」

木場君が何やら呟いてる。うん、それはいいんだけど、何故にそんな悲しそうな顔を向けて来るの？

「違うというのなら余計にわからないわ。あなたがレイナーレ達を庇う理由が」

「…確かに、彼女達は間違いを犯した」

やらないといけない仕事を放り出してはつちやけてしまった。けど…あの時、公園で社長さんについて語る彼女達の顔は…とても輝いていたんだ。

「それでも…俺は、彼女達を…彼女達の想いを信じたいんだ」

中二病でも、女王様でも、レイナーレさんの社長を想う心だけは、絶

対に疑いような無い、本物なのだから。

「…そうね。愛に生きる。確かにそれは素晴らしい事だと思うわ」

え、もしかしてグレモリーさんもレイナーレさん達の事情を知ってるのか？ それなら何とかなるかも。

「でもね、神崎君。レイナーレ達がやった事は許される事じゃないの。その子…アーシアさんは結果的に無事だったからよかつたけれど、現にイツセーは、ドーナシークに殺されかけたのよ」
「ッ!?!」

ちよ、傷害事件起こしてたのかドーナシークさん!?! さっきの兵藤君の言葉から察すると正当防衛で返り討ちにあつたみたいだけど。そりゃ駄目だろ!

…いやいや待て! 事件を起こしたのはドーナシークさんであつてレイナーレさん達じゃない。部下の責任を一緒に背負うのが上司だけど、個人の犯罪まで一緒に背負う必要は無いだろ!

けど、そんな事を言つてもグレモリーさんは納得しないかもしれない。いつの間にか親しくなつてゐるみたいだし、そんな相手を傷付けられて激おこ…いや、激おこプンプン丸状態なのかもしれない。ならば…ここは最後の切り札を切るしかないな。

「え…?」

「まあっ…!」

「なっ!?!」

「ちよ、先輩!」

「何を…!」

両手両足、さらに額を地面に擦りつける。これで、日本人が世界に誇る最終兵器! DO☆GE☆Z A! プライド? そんな物とつくの昔にゴミ箱にシュウウウウウウーッ!! 超! エキサイティン!! しましたけど何か?

「頼む…どうか、もう一度だけ、彼女達にチャンスをあげてくれないか」

グレモリーさんは答えない。ただ、レイナーレさんが「どうして、あなたはそこまで…」なんて言つてるのが耳に届く。

そうだよな。わからないよな。気持ち悪いよな。だけどな、レイナーレさん。俺はあの時、あなたの恋路を応援するって決めたんだ。いわばこれはただの意地。だけど、その意地を通すだけの価値はあると俺は信じてる。

「…頭を上げて、神崎君」

ようやくの言葉に頭を上げる。そこには困った様な、けどどこか感心したようなグレモリーさんの顔があった。

「正直、あなたがそこまでしてあげる様な相手じゃないと思うけれど…一人の男性の必死な嘆願を聞き入れないほど私は薄情では無いわ」「では…!」

「ええ。私は何もしない。ただし、墮天使側に連絡はさせてもらう。それだけは譲れないわよ」

「わかった」

仕事場に帰れば、今回の事で肩身の狭い思いをするかもしれないけど、通報よりはマシだろ。グレモリーさん、マジ天使。いざとなればDO☆GE☆ZAのもう一段階上であるDO☆GE☆NEを披露しようと思ったが、ふふふ、どうやらその必要は無かったようだな。

「レイナーレさん、カラワーナさん、ミツテルトさん」

やりましたよ! と胸を張って振り返れば、そこには大粒の涙を流す三人の姿がありました。って、何故に!?

「何故泣いている?」

「わからない。わからないわよ…。ただ、あなたが跪く姿を見てたら急に涙が…」

なんと、DO☆GE☆ZAの効果があんな所にまで!? うーむ、やはり最強説は揺るがないな。ただ、いつまでも泣かれています。こっちは参ってしまふ。…あ、そうだ。

「少し待っていてくれ」

俺はみんなを残し聖堂を後にする。ええっと、たしか…お、あった。あった。シユークリムの箱。それを手に俺はみんなの所に戻る。

「それは…」

察しがいいなミツテルトさん。さすが、あの時最初に立ち止まった

だけはある。俺は中のシュークリームを一つずつ彼女達に手渡した。
「餞別だ。受け取ってくれ。そしていつか、再び出会う事が出来たら
…その時は一緒に食べよう」

ついでに社長との関係もどうなったか聞かせて貰いますからね。

「…ありがとう」

涙を流しながらも、僅かながら笑みを見せてくれるレイナーレさん。
うん、その笑顔があればきっと社長も落とせるさ。

「グレモリーさん。後は任せても？」

「ええ。だけど、あなたにはちゃんと話を聞かせてもらおうわよ？ 近い内にね」

「？ わかった」

話？ 何の事だ？ まあいいか、とりあえず、さつさと帰ろう。なんか一安心したら、さつきの『アルⅡヴァンモード』の時の事を思い出して急に恥ずかしくなって来た。あれだな、赤ドラゴンとの戦いの時と同じだ。

こうして、様々な人達を巻き込んだ変態騒動（俺命名）は一応の解決を果たしたのであった。

第十二話 人間辞められませんでした

イツセイSIDE

あの墮天使達の戦いから数日が過ぎた。いや、まあ、実際には気合を入れて行ったらほとんど終わってたんですけどね…。

この日の放課後、俺はオカルト部の部室にいた。俺だけじゃない。木場は相変わらずのムカつくイケメンフェイスで俺の隣に座ってるし、小猫ちゃんも静かに読書している。そんなもって朱乃さんはニコニコ顔でこれから来るお客さんの為にお茶を準備していた。

で、部長はというと、自らそのお客さんを迎えに行っている。そのお客さんっていうのは、他の誰でも無い、神崎先輩とアーシアだ。

何でアーシアが駒王学園にいるのかって？ それは部長の計らいのおかげだ。教会にいられなくなった彼女を、この学園に迎え入れてくれたのだ。実質的に学園を支配している部長にかかれば、女の子一人転入させる事くらいわけないってさ。

そんなわけで、俺と同じ年のアーシアは、クラスも俺と一緒にになった。可愛い彼女はあつという間にクラスに馴染みただけれど、その中であいつら…松田と元浜が当然の如くアーシアに迫った。予想して俺は全力で二人からアーシアを守った。彼女をあの変態共の毒牙にかけさせるわけにはいかないからな！ …お前もその一人だろうって？ うるせえ！ 今は俺の事はいいんだよ！

それに、俺は結果のわかってる勝負に挑むほど愚かじゃない。アーシアの口からはしきりに神崎先輩の話題が出て来る。そんなの聞かされてたら嫌でもわかるっての。

そんな事を考えていると、複数の足音が部室の方へ近づいて来るのが聞こえた。そしてそれは入り口でピタリと止み、直後、扉が開いて部長が入って来た。

「さあ、どうぞ入ってちょうだい」

「失礼する」

「し、失礼します！」

部長に続いて、神崎先輩とアーシアが部室へ入って来た。アーシア

は緊張している様子だったが、先輩はしきりに周りをキョロキョロしている。あれだ、初めて俺がここに来た時と同じだ。魔法陣とか、リアルで見ると初めてなんだらうな…。

「適当に座って。今、朱乃がお茶を淹れるから」

二人がソファに座った。部長のアイコンタクトで朱乃さんが優雅な手つきでお茶を淹れる。二つのカップがそれぞれ先輩とアシアの前に置かれた。

「ありがとう」

「い、頂きます」

先輩達がお茶を飲む。そして、少しだけ間を空けて、いよいよ部長が本題へと入った。

「神崎君。大体の話はアシアから聞いたわ。けれど、私はどうしてもあなた本人から直接聞きたい事があるの」

「…俺に答えられる事なら」

すげえな神崎先輩。部長の前であんなに堂々としてられるなんて。俺だったら、部長に正面から見詰められたらついその大きなお胸様に目が…つとと、流石に今はエロは自重しないとな！

「ありがとう。それなら聞いわ。あの日…どうしてあなたは教会にいたの？」

神崎先輩は人間。それは間違い無いつて部長は言っていた。けど、それならどうして、普通の人である先輩が墮天使達の根城にいたのか？

教会の関係者かと疑ったが、それは先輩自身が否定した。

『俺をあんなヤツらと一緒にするな!!』

…初めて見た。先輩があんなに感情を露わにする所を。正直、ちよつと…いや、かなり怖かった。部長の疑念は、先輩の触れてはいけないものに触れてしまったらしい。

木場は冷や汗を流し、小猫ちゃんは怯えた様子だった。朱乃さんもいつもの表情を崩してた。部長がすぐに謝るといつもの先輩に戻ったけど、あの時の事は当分忘れられそうに無いな。

「そうだな…何から話したらいいか」

俺は回想を止め、先輩の話に集中した。果たして、どんな内容が語

られるのか。怖くもあり、楽しみでもあった。

「数日前、俺は偶然アルジエントさんと出会い、友人になった」

あつ！ アーシアが俺の事をこの街で出来た二人目のお友達って言った意味がわかった！ そうか、先輩もアーシアと…。よかったな、アーシア。先輩って凄くいい人だからな。

「あの日、俺はアルジエントさんを訪ねてあの教会へ赴いた。そして…俺はそこで一人の神父に襲われた」

ッ!? それってまさか「アイツ」か!? 思わず立ち上がった俺を、みんなが一斉に注目する。

「どうしたの、イツセー?」

「あ、あの先輩! もしかしてその神父って、若くって白髪で、言動が滅茶苦茶なヤツじゃなかったでした!?!」

「ああ、確かそんな感じの男だったな」

「やっぱり!」

あの野郎：フリード・セルゼン！ やっぱりあの場にいやがったのか！ アーシアを殴ったアイツを俺は絶対に許さない。いつか、絶対にぶん殴ってやる！

「よく無事でしたね、先輩」

木場もびつくりしたのか、いつものイケメンフェイスを驚きで満たしている。いや、でも確かに木場の言う通りだ。フリードはヤバイ。そんなアイツに襲われて無事だったなんて。

「まあ、流石にいきなり剣を振り回されたのは驚いたがな。それを壊したらあつさりどこかへ行ってしまったよ」

…あれ、俺の聞き間違いかな？ そうじゃなかったら、先輩、今とんでもない事言いましたよね？

「こ、壊した!? エクソシストの持つあの剣をですか!?!」

今度こそ木場が狼狽した。木場だけじゃない。アーシアを除く俺達全員が同じ反応をした。フリード達エクソシストが持つ光の剣は、光が苦手な俺達悪魔にとって最悪の物だ。もちろん、悪魔だけじゃない。人間だってあの剣で斬られたらあつけ無く死んでしまう。それをぶっ壊したって…。

「ど、どうやって!？」

「少し握ったら簡単に壊れたぞ。神父にも言ったが、あの程度の玩具、その気になれば誰でも壊せるだろう?」

「いやいやいやいや! 無理ですから! 死んじやいますから!」

先輩、あなたほんとに人間ですか!? 止めてください。その玩具に苦戦した俺の立場が無いツス…。

「話を続けていいかな?」

圧倒されてばかりの俺達は、ただただ頷くしかなかった。あの部長ですら、先輩の滅茶苦茶な話で顔を引き攣らせている。まあ、そんなお顔も美しいんですけどね!

「去り際、あの神父から、アルジエントさんは地下にいと聞かされてな。嫌な胸騒ぎがしたので向かってみれば…そこには大勢の人間とレイナーレさん達。そして…十字架に張り付けにされたアルジエントさんの姿があった」

ビクリと体を振るわせるアーシア。きっとあの時の事を思い出して怖くなつたんだろうな。そんな彼女の頭を優しく撫でる先輩。凄く紳士です。はあ、ああいうさりげない部分が女子にモテる秘訣なんだろうなあ。現に、アーシアは震えを止めた代わりに、その可愛らしい頬を薄紅色に染めている。

「その光景を見た瞬間、全てを理解した。俺は怒りのままに連中を叩き潰し、アルジエントさんを救出した。その直後だ、兵藤君達があの場に現れたのは…」

この人は何回俺達を驚かせれば気が済むのだろう。あの大勢のエクソシスト達にたった一人で立ち向かうなんて。ただ友達を助ける…その為だけに。

「怖く…なかったんですか?」

小猫ちゃんが尋ねる。それに対し、先輩はどこまでも真っ直ぐな瞳で答えた。

「恐怖は無かった。俺はただ彼女を…アルジエントさんを助けたかった。その為なら、例えばあんな連中が何人立ちはだかろうとも、全て打ち倒すのみだ」

…カッコいい。純粹にそう思った。すげえよ、先輩。正にヒーローじゃん。クールだとばかり思ってたけど、本当はこんなにも熱い心を持つてる人だったんだな。ちくしょう…俺は女の子が大好きなはずなのに、不覚にもドキツとしちまった。

見ると、部長達の顔が赤い。そりゃ、自分の事じゃ無いとはいえ、ここまでストレートな事言われたら気恥ずかしくもなるよな。

ただ、今の先輩の言葉で、アーシアの目がえらい事になってた。なんか、キラキラって擬音が聞こえて来そうだ。…グツバイ、俺の初恋。「以上が、俺があの場合にいた理由だ。納得してもらったか？」

「え、ええ。よくわかったわ」

部長、何で先輩から目を逸らすんですか？ …はっ、ま、まさか、今ので何かしらのフラグが!?! そんな…そんなはず無い！ 俺は認めないぞお！

「こ、コホン。なら次の質問よ。神崎君、レイナーレ達とどこで知り合ったの？」

あ、それ、俺も気になってました部長。土下座してまで助けたあの三人と先輩の関係って何なんだ？

「彼女達との出会いは公園だった。俺が買ったシュークリームに興味を持ったミツテルトさんが俺の前で立ち止まったのが始まりだ」

そこから語られた話に、俺はまたしても耳を疑った。つーか、あいつら、見ず知らずの他人のお菓子に集るって何やってんだよ…。

あの墮天使達、先輩に自分達の計画を話したらしい。もちろん、少しぼかした感じでだ。これには部長が驚いていた。人間を軽視する傾向にある墮天使が、全てじゃ無いにしろ、先輩に対して計画を話した事が信じられないとの事だ。

「そういえば、彼女達はどくなったんだ？」

「約束通り、しかるべき場所に引き渡したわ。…そうそう、伝言も預かってるわよ。「どんなに無様でも、どんなに惨めでも、罪を償って、必ず約束を果たしに行きます」ですって」

「そうか…」

先輩はそれ以上何も言わなかった。けれど、その顔がどこか嬉しそ

うに見えたのは、きつと気のせいじゃないと思う。

「さ、これで私の質問は終わりよ。あなたから何か質問はあるかしら？」

「ならば、反対に、どうしてキミ達があの場合に現れたのか、教えてくれないか？」

「当然の疑問ね。ええ、話してあげる。そうね…みんな」

部長の合図で、木場達が一齐に悪魔の翼を出現させた。そういう事かと俺も慌ててそれに続く。

「その前に私達の正体を教えてあげないとね。神崎君…私達はね、『悪魔』なの」

「…え？」

部長のカミングアウトに、先輩はどこか呆けた表情で反応した。今の先輩の顔を撮ったら、女子にいくらで売れるかな…。

そんな下世話な事を考えている間にも、部長は先輩に色々説明していた。俺達『悪魔』、それと敵対する『墮天使』、そしてその二つを纏めて滅ぼそうとする『天使』。それぞれが大昔からずっと争い続けている現状の基本的な説明から、人間だった俺が『悪魔の駒』と呼ばれるものによって『悪魔』になった事。そうなってしまった理由である『神器』について。とにかく様々な事を先輩へ伝えていった。

「だいたいこんな所かしらね。どう？ 突然の事で戸惑ったかもしれないけど、納得してくれた？」

「ああ。…だが、一つだけ腑に落ちない事がある」

「何かしら？」

「何故その三つの種族は争っている？ 昔は一緒に戦っていたんじゃないのか？」

「ッ…!？」

何気ない先輩のその一言に愕然とした表情の部長。俺も説明を受けたけど、確かに先輩の言う通り、三陣営の争いはある存在の介入によって一度終結した。それがなんなのかはまだ話してもらってないけれど。

答えない部長の代わりに、木場が先輩の問いに答えた。

「先輩のおっしやる通りです。ですが、どうしてあなたがその事実を……?」

先輩は何も言わない。代わりにどこか納得したような感じだった。

「…神崎君。あなた、『フューリー』という単語を聞いた事は?」

「いや…初めて聞くな」

「…そう」

俺も初めて聞く単語だった。後で部長に教えてもらおう。

「なら、他に何か聞きたい事は?」

「いや、特には」

「ならいいわ。所で神崎君…あなた、『悪魔』になってみる気は無い?」

「部長!？」

突然の部長の言葉に、目を丸くする俺達。

「俺が『悪魔』に?」

「あなただけじゃないわ。アーシア…あなたも」

「ふえっ!? わ、私もですか!？」

「ええ。あなたの持つ神器はとても魅力的なの。それを狙ってまたよからぬ事を考える輩があなたの元へ現れるかもしれない。けど、あなたが私の眷属になれば、そういった連中からあなたを守ってあげられるわ」

そう言つて、今度は先輩に顔を向ける部長。

「神崎君は…いえ、回りくどい事は言わないわ。私は、あなたが欲しい」

なんとというストレートなお誘い! 部長、それって、先輩の戦闘力が魅力的だからって意味ですよね!? 決して男女の感情によるお誘いじゃないですよね!?

「…どうする、アルジエントさん? 俺としては、またあの教会の連中のようなのが現れるかもしれないと考えると、グレモリーさんに守ってもらった方がいいと思うんだが」

「わ、私は…信仰を捨てる事になるかもしれませんが、命の恩人であるリョーマさんがなるのなら、一緒に…」

「そうか…。なら、グレモリーさん。まず俺を『悪魔』にしてくれ」

「嬉しいわ、神崎君。なら、あなたには『騎士』の駒を授けるわ」

『騎士』か：なんか先輩にピッタリだな。駒を先輩の胸に当てながら詠唱を開始する部長。やがて、その詠唱が終わると同時に『騎士』の駒は先輩の胸に吸い込まれて行き：直後、勢いよく飛び出して来た。「成功したのか？」

首を傾げる先輩の前で、部長が普段の優雅さの欠片も無く取り乱していた。

「こ、駒を受け付けない!? いえ、むしろ駒が自ら出て来たの!? どういう事!? こんな前代未聞だわ!」

部長にも予想外の事だったらしい。ただ一つだけ言えるのは、先輩は『悪魔』にはなれなかったという結果だけだ。

結局、先輩がならないのならと、アーシアも『悪魔』になる事を拒否。けど、『悪魔』にならなくなったって、友達であるアーシアを傷付けようとするヤツは俺がブツ飛ばしてやるさ! それに、先輩もアーシアの事を気にかけてくれるって言ってくれたしな。

そんな感じで、この日は解散となった。ただ、先輩とアーシアが帰った後も、部長が落ち込んだままだったのがやけに印象的だった。

：本気でショックだったんですね、部長。微妙な雰囲気漂う部室内で、俺達はそんな部長を労わるような目で見つめるのだった。

第二章 戦闘校舎のフェニックス

第十三話 同居人が出来ました

友達が悪魔でした…。頭大丈夫？とか思われるかもしれないが、俺は至って正常です。むしろ、周りが異常なんです。

数日前、グレモリーさんによって突然彼女が部長を務めている『オカルト部』へ連れて行かれた俺とアルジエントさん。魔法陣や謎の文字の書かれた壁等、予想以上に本格的な雰囲気の中で、グレモリーさんは衝撃的な事実を口にした。

『その前に私達の正体を教えてあげないとね。神崎君…。私達はね、『悪魔』なの』

そう言つて背中から翼を出すグレモリーさん。彼女だけじゃなく、その場にいた姫島さんや木場君、塔城さん、さらには兵藤君までもが同じ物を出したのだ。

『…え？』

それに対し、アホみたいに呆けた声を出す俺。いや、だつてさ、いきなりそんな見せられたら誰だつてこうなるだろ？

この物語…というか、この世界に悪魔がいるというのはオカンから聞いたし、実際あの赤髪イケメンや魔法少女を見たから疑いはしなないけどさ。まさか、こんな近くに、しかも友達が悪魔だったなんて誰が予想出来る？

内心酷く驚いている俺に、グレモリーさんは色々な事を話してくれた。

…正直、内容が濃く、かつ難しい部分があつて全てを一度に理解する事は出来なかったが、長々とした説明をまた最初から話してもらうのも申し訳なかったもので、とりあえず理解しましたつて感じのポーズをとってしまった。また機会がある時にでも姫島さん…は何言われるかわからないから、木場君にでも聞いてみるか。

ただ、そのグレモリーさんの話の中で一つだけ不思議に思う所があった。オカンの話の中では、悪魔と天使と墮天使はあの赤と白のド

ラゴンを倒す為に自分達がやっていた戦争を中止して一緒に戦っていたはずだ。てつきりそれからみんな仲良くなったとばかり思っていたのに、まさかまた争うようになっていたとはな。

その疑問を口にする、グレモリーさんは酷く驚いているようだった。木場君の説明を挟んだ後、彼女の一言に俺は衝撃を受けた。

『…神崎君。あなた、フューリー』という単語を聞いた事は？』

咄嗟にお茶を吹き出さなかった自分に花丸をあげたい。聞いたも何も、それつてもしかして、俺の事ですか？ Why!? なんて千年以上前の俺の恥の一部が今にまで伝わってるんですか!?

いや、落ち着け、名前が同じで別人って事かもしれないだろ！：けど、もしそうじゃなかったら？ そんでもって、今にまで伝えられている理由が『いがみ合う三つの種族が一致団結し強大な敵に立ち向かってる最中に突然現れて、聞いているこつちが恥ずかしいと思うセリフを叫んで戦場を混乱させた痛すぎるヤツ』って感じで伝えられているとしたら？ あの赤髪イケメンや魔法少女が言いふらしたのか!?

「つーかさー、僕達が一生懸命に戦ってたのにさー、あれはないよねー」

「ほんとほんと、てかいきなり抱きしめて来るとかどういいう神経してるのかしらね？ 訴えたら勝てたわよ」

なんて感じで！ や、やべえ…。こんなバレたらもう俺、悪魔にも天使にも堕天使にも指差されて笑われるぞ。「あ、伝説の騎士(笑)だ」とか、「ヴォーダの闇って何ですか？ 教えてくださいよ騎士(笑)様」とか言われたら俺は即行で引きこもりになる自信があるぞ！

『絶望せよおおおをを！』

『いや…初めて聞くな』

『…そう』

どこからか絶望総代の叫びが聞こえて来たが、もちろんそんなのゴメンだ。よって、絶望の未来を回避する為、嘘を吐く俺。グレモリーさんもそれ以上追及して来なかったが、気のせいかな、なんかその目が疑ってますって言うような気がした。止めて！ 俺のライフ

はもうゼロよ！

けど、そんな俺の嘆きなど知った事では無いとばかりに、グレモリーさんは突然俺に「悪魔にならないか」と勧誘して来た。たしか、『悪魔の駒』を使ったら人間でも悪魔になれるんだったよな。それで兵藤君も悪魔になつたらしいし。

けど、グレモリーさん。勧誘の言葉が思いつかなかつたとはいえ、「あなたが欲しい」なんて言ったら駄目だぞ。俺のように身の程をわきまえている人間なら大丈夫だけど、他のヤツ等絶対勘違いするぞ。お兄さん心配だ。

それはともかく、悪魔か。俺としては…まあ、どっちでもよかつた。けど、アルジエントさんは別だ。グレモリーさんの言う通り、また可愛らしい彼女を狙つていつまた変態共が襲つて来るとも限らない。土地を任されるほどの力を持っている彼女に助けてもらえるのなら、是非ともそうした方がいい。なので勧めてみると、俺がなるなら自分もなるとの事だ。

きつと、自分だけつていうのが不安なんだろうな。ならば、そこは年長者として先に悪魔になつてやろうじゃないか！ 一歩前に出た俺の胸にグレモリーさんがチェスの駒を当てた。なるほど、これが『悪魔の駒』か。

続けて、グレモリーさんが仰々しい呪文のような物を唱え始めた。それが終わると、駒が俺の胸の中に吸い込まれて行った…かと思えばすぐに出て来た。えーつと、これは成功でいいのか？

『こ、駒を受け付けない!? いえ、むしろ駒が自ら出て来たの!? どういう事!? こんなの前代未聞だわ!』

あ、やっぱり失敗だったのね。うーん、何でだろう。ひよつとして、このチートボディが悪魔になる事を拒否したのかな？ それとも、『悪魔の駒』を異物と判断したとか？ なんか悪魔になると光に弱くなるって言つてたし、わざわざ弱点が増える様な存在にならなくても今のままで充分だとか？ あくまで予想だけだな。

グレモリーさんが酷くショックを受けていた。そんなに俺を悪魔にしたかったのかな？ けど、こんな痛い人間を悪魔にしたらそれこ

そ悪魔全体の恥になりますよ？　こんだけ言ってるけど、俺これからもアルⅡヴァンモード使い続けると思うし。じゃないと怖くて戦いなんか出来たもんじゃない。…いや、待て。何で戦う事前提なんだ俺？

そんな感じで、あの日は過ぎて行つた。そして俺は家に帰るなりベッドに飛び込み、過去の過ちによる羞恥心で枕を涙で濡らしたのだった。

「…マさん。リョーマさん！」

「はっ…！」

名前を呼ばれ、深い思考の海から抜け出す。目の前には可愛らしく首を傾げているアルジエントさんがいた。

「どうしたんですか？　さっきからお呼びしても全然反応されませんでしたけど」

「いや、すまない。ちよつと考えごとをな」

「そうですか。もし、何か悩みごとがあるなら遠慮無く話してくださいね。解決出来るかわかりませんが、一緒に考える事は出来ますからー！」

「ありがとう。アルジエントさん」

「お礼なんていりません。私は、その…リョーマさんの為なら何でもしますから」

ああ…天使や。ここに天使がおるで。なんか、アルジエントさんの背中に白い翼が見えるよ…。

「それと、私の事はアースシアでいいですよ。これからリョーマさんにはお世話になるんですし、そもそも年下なんですから」

え、いいの？　基本を崩す気は無いけど、許可を貰えるのなら遠慮無く呼ばせてもらうぞ？

「アーシア。…これでいいか？」

「…はうう」

ちよ、今自分でいいって言ったよね？　なんでそんな恥ずかしそうなの？

「嫌なら元の呼び方に戻すが？」

「い、いえ！　戻さなくていいです！　頑張りますから！」

遠慮しなくても、頑張らないといけなくらい嫌なら戻すよ？　けれど、気合い入れてる彼女を見て何も言えない俺。

さて、そろそろ本題に入ろうか。そもそも、休日である今日、俺がどうしてアルジェントさ…アーシアと一緒にいるのか？　それは先程彼女が言った『お世話』という言葉に関係がある。

と言っても、別に難しい話じゃない。単純に、彼女がこれから俺の家に住むというだけの話だ。…唐突過ぎて意味がわからない？　よろしい、ならば順番に語ってやろう。

変態共が処分され（よくわからんが、おそらくグレモリーさんに通報されて全員逮捕）、教会が機能しなくなつた事でアーシアも住む所が無くなってしまった。不憫に思つたグレモリーさんが近くのホテルに数日間泊まらせてあげていたそうだ。さすが、グレモリーさん。俺らに出来ない事を平然とやってのける。そこに痺れる憧れる！

けどまあ、流石にそんな生活をずっと続けているわけにもいかない。そこで話し合つた結果、グレモリーさんが俺の家に住ませてあげたらどうかなんて提案をしたのだ。別に俺はそれでも構わなかった。部屋なら余っているし。けど、野郎が一人暮らししている家に住むつて言うのは年頃の女の子には抵抗があるんじゃないのか？

そう思つて顔を顰めている俺を見てアーシアは勘違いしたのか、悲しそうに顔を伏せてこう言った。

「…迷惑…ですよね」

…お前ら、そんな顔でそんな事言われて断れるか？　もし断るといふヤツがいたら、俺がオルゴンクローを装備した上で全力ビンタしてやるから安心しろ。もちろん魂と直撃をかけてな！　そして、誓おう。これから先、万に一つの可能性で、彼女に邪な思いを抱いたその

時、俺はオルゴンソードで自分の「アレ」を全力で斬り飛ばすと！

というわけで、この度同居人が出来ました。そして今は、彼女の日用品を買いに近くのパートへ足を運んでいる最中だ。そういえば、この先だったな。レイナーレさん達に出会った公園は。

「あ、公園ですね」

「ああ、俺が彼女達に出会ったのもここだった」

「…レイナーレ様達の事ですね」

今頃どうしてるのかな。堕天使にも会社というものがあるなんて驚いたけど、きつと反省して頑張っているんだろうな。

「俺は…彼女達の力になれたのだろうか」

あまりに悲しかったので偉そうに説教してしまったけど、彼女達からしたら、社会の厳しさも知らない若造にあんな事言われて憤慨ものだったかもな。いや、生前はちゃんと仕事してましたよ？ けど、今は精神はともかく肉体は十八だからなあ。

「もちろんですよ、リョーマさん。それに、部長さんから伝えて頂いたあの言葉…あなたはレイナーレ様達の命だけじゃなく、心も救ったんだと思います」

命（社会的な意味）と心…か。アールシアがそう言うならきつとそうなんだろうな。ちなみに、どうして彼女がグレモリーさんの事を部長と呼んでいるのかと言うと、事情を知った俺達も、非正規部員としてオカルト部に所属する事になったからだ。

「私は、悪魔でも悪い悪魔といい悪魔がいる事を知りました。そして、部長さん達はみんな優しく素敵な悪魔さんだと思います」とはアールシアの談である。

「ほら、後五十回よー！」

「はい、部長ー！」

そのまま公園を通り過ぎようとした俺の耳に、聞き慣れた声が届いた。興味本位でそちらに目を向けると、そこには腕立て伏せをする兵藤君と、その背中に乗って回数をカウントしているグレモリーさんの姿が確認出来た。

「あ、部長さんにイツセーさんー！」

アーシアの声に反応したグレモリーさんがこちらに振り向いた。

「あら、アーシアに神崎君。おはよう」

「はい、おはようございます!」

「おはよう。何をしているんだ?」

「イツセーを鍛えているの。この子の能力は鍛えれば鍛えるほど強くなっっていくものだからね」

確か『赤龍帝の籠手』だったっけ? 一回しか見てないけど、カッコいい籠手だったよな。って、あれ? 赤龍帝って確か、あの赤ドラゴンもそう呼ばれていた様な…。

「ぶ、部長! 俺もアーシアと先輩に挨拶を!」

「いいからあなたは腕立てを続けなさい。無駄口を叩く余裕があるなら回数を増やすわよ!」

「ひくく!」

「が、頑張ってくださいね、イツセーさん」

「それはそうと、二人はどうしたの? 休日にわざわざ出て来るなんて…もしかして、デートかしら?」

「ふええっ!?! デ、デートなんてそんな…!」

「誤解だ。俺達はこれからアーシアの日用品を買いに行くだけだぞ?」

なあ、アーシア」

実際、こんな可愛らしい子とデート出来たら最高だけどな。けど、今回はそんな浮ついたものじゃない、必要なものを買うに行く。ただそれだけだ。

「…はい、そうですね。それだけです」

おや、アーシアの表情が暗い。もしかして、俺なんかとデートしていたと勘違いされて気分を害したのか? さっきもかなり動揺していたしな。地味に傷付くが、彼女も傷ついているのだから耐えよう。…帰ったらまたベッドで泣いてやる。

「…なるほど。今は一方通行ってわけね。頑張りなさい、アーシア」

「はうう…」

「けれど、羨ましくもあるわね。何も縛る物が無く、そうやって想える相手がいるのって…」

一瞬だけ、グレモリーさんが悲しそうに顔を俯かせた。けれど次に瞬間にはいつもの余裕のある表情に戻っていた。

「グレモリーさん？」

「ううん、何でも無いわ。気にしないで」

「わかった。けど、いつぞやも言った気がするが、悩みや困った事があるならいつでも相談してくれ」

「ええ、その時はお願いね」

「先輩！ 今度遊びに行つていいですか？」

腕立てを続けながら兵藤君がそんな事を口にする。もちろん、それは大歓迎だけど。今は筋トレに集中した方が…。

「イツセー…：いいわ、後百回追加ね」

「フアツ!？」

健闘を祈るぞ兵藤君。頑張れ、マジで頑張れよ…！

兵藤君の悲鳴を背に、俺達は公園を後にし、改めてデパートへと向かった。そこで二時間ほど買い物をし、二人して両手にパンパンになった買い物袋を手を、家へと帰るのだった。

新しく始まった日常。環境が環境だった所為か、アジアは中々に世間知らずな所もあったが、そこは俺がフォローするという形で彼女はすぐにこの家に馴染んだ。

とても充実していた毎日。だが、それはある日、一人の女性によって突然破られてしまった。

ここは俺の部屋で、俺は今ベッドに仰向けで横になっている。そして、その俺の腹の上に…裸のグレモリーさんが馬乗りになっていた。

プロデューサー！ 裸ですよ裸！ いや、マジで何もつけてない。辛うじてパンツは装備しているが、上は生まれたままだ。その豊満なバストも、その先端の薄桃色の部分もフルオープン状態だった。夢？

夢だよなこれ？ 友人でエロい夢見るとか我ながら最低だな！ 確認と戒めの為に全力で頬を抓ったが…めっちゃ痛かった。あれ、夢じゃない？

「突然ゴメンなさいね、神崎君。けど、真つ先に頭に浮かんだのがあなただったから」

何の話!? 混乱の極みにいる俺を尻目に、グレモリーさんは続ける。

「それに、あなたは前にこう言ってくれた。「悩みや困った事があるなら相談してくれ」…と」

「い、いや、確かにそう言ったが、それとこの状況に何の関係が…」

「お願い、神崎君。私の悩みを解決するために…私を抱いてちょうだい」

(ぶふおっ!?)

フューリーについて触れられても耐えた俺だが、この時ばかりは我慢する間も無く吹き出してしまうのだった。

第十四話 貴様！見ているな！

「お願い、私の処女をもらってちょうだい」

HEY HEY HEY！ どういう事ですか!? いきなり現れて服を脱がれて「抱いてくれ」!? 誰かこの状況を正確に教えてください！

急遽、脳内会議が開かれた。円卓の席に数人の小さい俺が着いている。

「はい、発言の許可を求めます、俺A」

「許可します、俺B」

「ありがとうございます！ まず、俺は部屋で休んでいました。ここまではいいですよね？」

「ええ、その通りです」

「続きは俺が」

「お願いします、俺C」

「はい。そうやって休んでいる時に、突然、床に変な模様が浮かびあがりました。そこから光が発生し、それが治まったと思った、次の瞬間、そこにはグレモリーさんが立っていました。突然の事に面食らう俺の前で、彼女はいきなり服を脱ぎ始めました」

「てつきり黒い下着かと思ったら、予想外の白！ いや、これもまたいいんですけどね！」

「誰か、俺Dをつまみ出してください」

「な、何をするだあ!？」

「馬鹿は置いておいて。そうやって服を脱いだ彼女は、俺の腹に馬乗りになりました。これが経緯です」

「はい、ありがとうございます。では、先程の「抱いて」発言と合わせて、今の状況を説明出来る俺はいますか」

「「ははは、無理!」「」

「ですよー!」」

以上、僅か十秒足らずで脳内会議終了。ええい、役立たず共め！
つかD！ てめー何しっかり見てやがる！

「これでも体には多少の自信があるわ。初めてだけど、あなたを満足させる事は出来ると思うけど」

いや、俺が聞きたいのはそういう事じゃないんですけど！ 止めて！ 俺の手を胸に持って行かないで！ 指が沈み込む感触とか、一部コリコリした所があるとか考えるな俺！

「あ…ん…」

艶やかな喘ぎ声を漏らすグレモリーさん。ヤバい、いくらアル|| ヴアン先生の鋼の意思を受け継いでいる俺でもこれ以上は持たない！

最早限界か!? と思ったその時、俺は気付いた。グレモリーさんの肩が僅かにだが震えている事に。それを確認すると同時に、暴走しかけた俺の意思が急速に冷えていった。

「グレモリーさん」

「え、神崎君?」

俺は上体を起こし、震えている彼女の肩を優しく掴んだ。わかった…わかったぞ！ これは…ドッキリだな！ そうだ、きつと俺の慌てふためく所を撮影して後でみんなで笑うつもりだったんだな！

しかし、詰めが甘いグレモリーさん！ そうやって笑いを堪えている姿を見れば誰だって真相に気付くぞ！ でも、ドッキリの為とはいえ、体張り過ぎだろ。もしかしたら、笑いと一緒に恥ずかしさも堪えてるのかもしれない。

俺が気付いてしまった以上、ドッキリは失敗だ。とりあえず、これ以上恥ずかしい思いをさせるのもあれだし、シートか何かで隠してあげよう。

「もういい。キミがそれ以上傷付く必要は無いんだ」

「ッ!?!」

羞恥心っていうのは、大小問わず、しばらく残る物だ。グレモリーさんもこれから先、今回の件を思い出して悶える時が来るだろう。そんなキミに先輩からちよつとしたアドバイス。…もうね、受け入れなさい。否定したらした分だけダメージでかくなるから。けど、反対に

受け入れたら、それだけ恥ずかしさも小さくなるぞ。ああ、これも自分の一部なんだって。そう思えるから。

「何があるろうと、俺はキミの味方だ」

「あっ…」

同じ悶え仲間として、キミのショックを和らげるためなら何でも協力するぞ。とりあえず、俺の言葉に呆けている彼女の頭を撫でてあげた。うーん、相変わらず綺麗な髪だなあ。

さて、彼女の事はこれでいいとして、問題はこれからだな。見た所、カメラらしき物は周りに無い。という事は撮影では無く、場に乱入するパターンか? 『ドッキリ大成功!』と書かれたプラカードと共にオカルト部の誰かが部屋の扉を開けて入ってくるかもしれない。

だが残念、すでにネタはバレている。さあ、いつでも来るがいい! そんな感じで身構えていると、またしても床が光り始めた。誰が来る? 姫島さんか? 木場君か? 塔城さんか? 兵藤君か? はたまたまさかの全員登場か? 誰が来ようと返り討ちだ!

眩い光に目を閉じる。そうして再び目を開ければ、そこにはいたのは先程あげた子達の姿では無く、銀色の髪にメイド服を纏ったとんでもない美女が立っていた。

(つて誰ですかあなた!?)

「あなたが来るとはね、グレイファイア」

知り合いかよ!?! グレモリーさんに名前を呼ばれ、女性が口を開く。

「こんな事をして破談に持ち込もうというわけですか」

「こうでもしないと、私の意見なんて誰も聞いてくれないでしょ?」

何やら話を進める二人。破談? 意見? え、これってもしかしてドッキリじゃないの? じゃあ、さっきのは全部俺の勘違い?

『もういい。キミがそれ以上傷付く必要は無いんだ』

『何があるろうと、俺はキミの味方だ』

あれも全て見当違いの言葉だったって事? …イ、イエアアアアアアアアアアツ!! また俺の黒歴史が増えてしまったああああああ!! 殺せよ! もういつそ誰か殺してくれ

よおおおおお!!!

「このような下賤な輩に操を捧げて…」

そう言いかけてグレイファイアさんがジツと俺を見つめて来た。見るなよ・・・今の俺を見ないでくれよお！

「…あなた、何者ですか？」

勘違いして自爆する間抜けですけど何か？ いや、そんな事聞きたいわけじゃないってわかってますけどね。

「初めまして。俺は神崎亮真。グレモリーさんとは同じクラスで友人です」

誰か、ズタボロメンタルでもちゃんと挨拶出来た俺を褒めてください。いや、マジで。ご褒美にちようど首括るのに使えそうなロープとかくれたらなおよし。

「そういう事を聞いているわけではありません」

なら、何を聞きたいんですか？ 趣味ですか？ 好きな食べ物ですか？ ははは、今ならヤケクソで何でも答えてあげますよ。

「…語るつもりは無いという事ですか」

はい？ なんか納得しちやってるんですけど。それにさつきより目つきが怖い。自己紹介で気分を害されるって俺くらいじゃね？

「グレイファイア。神崎君は私の大切な友人よ。手を出すのは許さないわ」

手を出す？ それってグーパン何かですか？ やだ、この人、見た目と違ってすぐに暴力振るったりするわけ？

「その様なつもりではありませんでしたが。…まあ、いいでしょう。では、こちらも改めて挨拶させて頂きましょうか。初めまして、神崎様。私はグレモリー家にお仕えする者の一人でグレイファイアと申します。どうぞお見知りおきを」

お辞儀の仕方から何から完璧な挨拶だった。まさにメイドだなこの人。これでバイオレンスな所がなければ最高だと思う。…グレモリー家の人達大丈夫なのかな？

「グレイファイア。あなたがここに来たのはあなたの意思？ 家の総意？ それともお兄様のご意思なの？」

「全部です」

「そう…」

すっかり放置された俺を尻目に、グレモリーさんは諦めたように頷いた。あ、終わったんですね。なら俺にも説明してください。

だが、俺への説明などする必要は無いと言わんばかりに、グレモリーさんはいそいそと衣服を纏い、グレイフィアさんの傍へ近寄った。それと同時にまたあの模様が床に浮かびあがる。

「ゴメンなさい。神崎君。それとありがとう。さっきのあなたの言葉、凄く嬉しかったわ。ふふ、どうしてかしらね。あなたが味方って思うだけで心が満たされる。凄く心強いわ」

え、ちょ、待っ！ だから説明を…！

「どうしてこんな事をしたのか、近い内に必ず話すわ。人間であるあなたに関係の無い話ではあると思うけれど」

その言葉を最後に、グレモリーさんとグレイフィアさんは光の中へ消えて行き、その場にはただ俺だけが残された。

「…解せぬ」

いや、もうね。あまりにも色々な事があり過ぎて頭ん中がパンパンだぜ。

「あの、リョーマさん。お風呂が湧きましたよ」

ノックと共にアーシアのそんな声が聞こえる。ああ、次は入浴だ…。

「ああ、なら先にアーシアが」

「え、えつと…その、よかつたら一緒に入りませんか」

…ファイ？ 今あの子なんて言ったの？ 一緒に入る？ どこに？ 風呂に？ 誰と誰が？

「あの…ですね。日本では、は、裸の付き合いというものがあると、とある方に教えて頂きました…。お、お風呂で一緒に体を洗ったりして、親睦を深めるって」

誰だこらあ!!! ウチの天使にふざけた事吹き込んだヤツはあ!!!

許さん、絶対に許さんぞ貴様ああああ!!! ソードか？ ライフルか？ クローか？ お望みのファイナルモードをぶち込んでやる

！

「アーシア」

「は、はい!？」

「それはあくまで同性同士の話であって、男女で親睦を深めるのに一緒に風呂に入るといふ話は俺も聞いた事が無いんだが」

「え、そ、そうなんですか?」

「ああ、だからせつかくのお誘いで申し訳ないんだが、一人で入ってくれ」

「…わかりました。でも、私はリョーマさんなら別に…」

「何か言ったか?」

「い、いえ! では先に入らせてもらいますね!」

いざとなれば誓いに従って去勢するつもりだが、それでもあんな可愛い子と混浴などしたら俺が持たない。きつと彼女なりに一緒に暮らすにあたってより深い信頼関係を築きあげたいと思つての提案だったのだろう。ハッキリ言おう、それは逆効果です。

去つて行く足音を聞きながら、俺は長く大きな溜息を吐いたのだつた。そして、それから数日経つたある日、俺とアーシアはグレモリーさんの別荘へと招かれる事となる。

やれやれ、ここはまたあのセリフを口にしなければならぬではないか。それではみなさん、ご唱和ください。

…どうしてこうなった!

第十五話 教えてアルヴァン先生！〜特訓編〜

「うわあ、素敵な所ですね〜！」

「ふふ、ありがとう、アジア」

木造建設された別荘の外観を見上げ感想をもらすアジアに、グレモリーさんが柔らかな笑みで礼を口にする。いやね、確かにいい所だと思うよ。けど、今はどうして俺達がこんな所にいるのかが重要だね？ よろしい、では回想だ。

Q：あなた達がここに連れて来られた理由を四行以内に纏めなさい。

A：グレモリーさんには婚約者がいた。

けれど、グレモリーさんが大学を卒業するまでは彼女の好きなように過ごさせてあげるといふ話になっていた。

そのはずだったのに、その婚約者が突然やって来て強引に話を進めようとした。

話が違おうと激おこグレモリーさん。ならば、ゲームで勝負して自分が勝ったら婚約自体を無かった事にしてもらおうと啖呵をきる。

相手がOKしてくれたので、これからそのゲームに勝つ為に合宿をとり行います！ なのでお前も来い！

：四行は無理でした。けどまあ、そんな事は些細な事さ。それよりも、婚約者か。グレモリーさん、お嬢様っぽいなーとは思っていたが、そんなのまでいたのか。

だけど、将来の相手を決めるのにゲームで勝負って。しかもわざわざ合宿まで。悪魔って色々凄いな。

『グレモリーさんドッキリ勘違い事件』から二日後、彼女は改めて俺の家にやって来た。その時はちゃんと玄関から入って来たけどな。そこで開口一番、先程の回答の内容を語り、あれよあれよと準備をさせられたのだ。

ゲーム自体は彼女の眷属：オカルト部のメンバーしか参加出来ないらしい。なら俺達いらなくね？ と言いたくなかったが、グレモリーさん曰く、手伝って欲しい事があるとの事だった。

俺としては、協力出来る事があるのなら参加してもよかった。アジアも同じ意見だったが、そうなるの一つだけ問題があった。それは我が家の癒し担当こと黒歌の事だ。合宿で家を空けている間家に一匹だけとなる黒歌が心配だった。

けれど、それも近所の知り合いに世話を任せるという事で解決した。知り合いって誰かって？ 何を隠そう、山田先生その人である。

いやあ、数か月前に偶然知ってからちよくちよく近所付き合いさせてもらっているけど、こういう時ありがたいよな。事情を説明すると、「はい、任せてください！ 私も猫ちゃん好きですから！」とその豊満な二つの果実を揺らしながら引き受けてくれた。

別れ際、しばらく会えなくなるからと、念入りに撫でまくってあげた。なんか、最後の方でトローンとした目でひくひくしてたけど…やり過ぎたか？

そんなこんなで、俺とアジアはオカルト部の合宿の拠点であるこの別荘へとやって来たのだ。今の説明でわからなかった者は後で別荘の裏に来なさい。

「はひ…はひ…」

隣で兵藤君が、背中に冗談と思えるような量の荷物を背負いながら苦しそうに喘いでいた。ふもとまではあの時、グレモリーさんが俺の部屋に現れた光…転移魔法であつという間に移動出来たが、そこからは山道を歩いて登る事となった。魔法かあ…。いいな、俺も使えたり…しないですよね。

途中、疲れた様子のアジアを背負ってあげたり、それに便乗した姫島さんをお姫様抱っこで運んだり（からかうつもりが本気にされて恥ずかしかつたのか顔が赤かった）しながら、結構な時間が経った頃、俺達はようやく目的地へと辿り着いたのだった。

「それじゃ、私達は着替えてくるわね」

リビングに荷物を置き、女性陣が着替えの為に二階へと上がって行く。それに続いて木場君もジャージを持って奥の方へ歩いて行く。

「先輩。イツセー君。僕も着替えて来るから」

「わかった」

「あ、ああ。俺はもうちよつとここで休んでる」

「覗かないでね」

「そのイケメンフェイスふっ飛ばしてやろうか!？」

「おお、兵藤君がマジギレしてる。そりゃあ、男にまで手を出すと誤解されたらキレたくもなるわな。しょうがない、俺だけでも彼を労わってあげよう。」

「兵藤君。気の済むまで扇いであげようか?」

「確か、荷物の中に扇ぐのに使えそうな物があつたはずだ。」

「…俺の味方は先輩だけです」

「時間にして十分くらいだろうか。俺は兵藤君の汗が完全に引くまで全力で扇いであげた。おかげで腕がパンパンだぜ。あ、このネタ二回目か。」

それから、着替えの為にその場を離れ、再び戻った時には既に全員が集まっていた。メンバーの顔を見渡し、グレモリーさんが手を叩きながら口を開いた。

「それじゃ、早速修業を始めましょうか」

「その前にいいか? 具体的に、俺達は何をすればいいんだ?」

「雑用とか任せてもらってもいいけど、それだけだとどうしても時間が余ってしまう。俺達だけ何もしないっていうのも気が引けるというか…。」

「そうね…。神崎君、あなたには祐斗と小猫の修行の相手をしてもらいたいの」

「はい? 俺が二人の修行の相手? この騎士(笑)がですか? へへ、冗談きついで。」

「一人で大勢のエクソシスト達を圧倒するあなたなら、きっと二人のいい刺激になると思つたの。何か気付いた事があつたら遠慮無く言つてあげてちょうだい」

「よろしくお願いします、先輩」

「…お願いします」

「あ、マジなんです。殺る気…じゃなくて、やる気満々な二人の顔を見て逃げ道が無い事を悟る俺。」

「あの、私は…」

「アーシア。神器を持つあなたも修業してみなさい。お節介かと思っただけど、あなた一人だけ不参加っていうのも寂しいと思っこの場に呼んだのだから」

「あ、そういう事だったんですね。ありがとうございます、部長さん！」

「…それに、こっちの都合で神崎君と離れ離れにしちゃ悪いもの」「はわっ!？」

何言っただ、グレモリーさん。アーシアの顔がトマトになってるぞ。けど、修行かあ。俺じゃどうしようもないし。ここはアルⅡヴァン先生の出番だな。

「わかった。ならば、まずは木場君。キミから始めようか」

アルⅡヴァン先生は教えるのも上手。だって先生だもの。…いや、俺が勝手に呼んでるだけですけどね。

各々修業を開始する中で、俺と木場君は木剣を手に広場で向かい合っていた。

「ようやく先輩の実力をこの目で見れるんですね。ちよつとワクワクしています」

止めて！ そんな期待されても困るだけだから！ 仕方無い。予定通り、ここはアルⅡヴァンモードを発動するしかない！

「それじゃ…行きますすー！」

感触を確かめるように軽く剣を振った次の瞬間、木場君が突っ込んで来る。速い！ あのクレイジー神父と同じ…いや、それ以上だ！ 正面からの鋭い突きを、剣を下から打ち上げるようにして逸らす。カッン！ と木剣同士がぶつかる音が辺りに響き渡る。それでも木場君は止まらない。反動を利用して振り下ろし、バックステップして避けた俺に再び突き。さつきと同じ対処をしようとした俺の動きを読んだのか、一瞬動きを止める。タイミングを誤った俺の腹に、一閃が叩きこまれるかと思ったその瞬間、俺は足で木場君の剣を受け止めた。

「なっ!？」

大きく目を見開く木場君。きつと、純粋な剣の勝負が出来ると思っただらうな。でもゴメンね。アルⅡヴァン先生の戦い方は、剣だけじゃなく、体術も組み合わせたものだから、それをトレースする俺もバンバン足技とか使うんでそこんところよろしく。

心の中で謝る俺の前で、一度距離をとる木場君。どうにも申し訳なかったので現実でも謝る事にした。

「すまない。あまり修行にならないかもしれないな」

「いえ、むしろそんな変則的な動きを相手にした方が色々身に付けられそうです。：それにしても、小手調べの域に過ぎませんでした、僕の動きに完全について来られるなんて…。ふふ、やはり先輩は面白いですね」

熱っぽい視線を向けて来る木場君。それってただ感心してるだけですよね？ それ以外に何も無いですよね？ BでL的な感情じゃないよね？ キミの様子見てると、割とシヤレにならないと感じる時があるんだけど。

「さあ、先輩！ これからもつと激しく僕と突き合いきましょう！ 大丈夫、痛いのも、怖いのも最初だけですから！」

もうキミ絶対狙って言うてるよね!? 咄嗟に尻を押さえた俺を誰が責められようか！ いや、攻め（誤字にあらず）られる筈が無い！ 「では先輩！ 次はあなたから攻めて来てください！ どれほどのものであろうと絶対に受け止めてみせますから！」

ひいいい!? だ、駄目だ！ ビビるな俺！ 呑まれるな！ 気合を入れろ！ 気分はそう：：どこぞのエリート兵の如く！ やってやる！ やってやるぞお！

一時間後、その場にはやり遂げた顔で剣を天高く掲げる俺と、その近くで地に伏せる木場君の姿があったとき。めでたしめでたし。：じゃねえよ！

俺：この合宿の間、変な階段上ったりしないよね？ 初日からこれじゃ先が思いやられ過ぎて俺の胃がストレスでマッハなんですけど。とりあえず：：木場君連れて帰ろう。後の事は後で考えればいいのだから……。

第十六話 いつから生身なら弱いと錯覚していた？

夜、俺達は揃って夕食の時間を過ごしていた。ちなみに作ったのはカレーである。その中で、グレモリーさんが今日一日の修行についてそれぞれに成果を尋ねた。

「さて、とりあえず一日目が終わったけど、みんな今日はどうだった？」

「っ、疲れたツス」

「わ、私もですう」

グロツキー状態の兵藤君とそこまでとはいえないまでも疲れた様子のアーシア。それとは対照的に、姫島さんと塔城さんはいつもの微笑みと無表情で答える。

「まだ一日目ですし、何とも言えないですわね」

「同じく・・・」

「そう。なら祐斗は？ 神崎君との修行はどうだった？」

グレモリーさんの問いに、木場君は興奮した様子で答え始めた。「とても充実したものになりました。部長、先輩は凄いです。結局、僕の攻撃は避けられるか防がれるかで一撃も与えられませんでした。反対に強烈な一撃を受けて気絶してしまいました。ふふ、あんな激しいヤツは初めてでしたよ」

褒めてくれるのはいいけど、こっちは見ないで！ キミの雰囲気やバ過ぎてアルヴァン先生の全力の一撃を叩き込んでしまったのは悪いと思ってる。だけど、あの時の俺にそれ以外にどうしたらよかつたって言うんですか!?

「・・・驚いたわね。祐斗が手も足も出なかったなんて。なら神崎君、あなたから見て祐斗はどうだった？ 遠慮無く言ってちょうだい」

え？ うーん・・・そうだなあ。必死過ぎてあんまり覚えてないんだけど、とりあえず言えるのは・・・。

「速さは大したものだと思う。だが、その代わり、一撃一撃が軽い気がした」

剣を振るスピードはあのクレイジー神父を上回っていたが、あの

時、たった一度だけが受け止めた一撃の方が木場君より重かった。「察するに、木場君は手数の方で勝負するタイプじゃないのか?」
「はい、その通りです。僕は一撃よりも速さに重きを置いています」
ああ、やっぱりね。なら、その長所をそのまま伸ばしていった方がいいんじゃない? なんて偉そうな事を言ってみたが、木場君は納得したように頷いてくれた。ええ子や。こんな素人意見にも耳を傾けてくれるなんて。今ならちよつとくらい触られても・・・なんてなるわけねえよ。俺はノーマルだ!

「あらあら、神崎君はよく祐斗君を見ているのね。ちよつと妬けてしまいますわ」

いや、そんなつもりは毛頭ありませんよ? けど、今の会話で姫島さんは仲間ハズレにされてしまった気分になったようだ。ならばここは年長者としてしつかりフォローせねば。

「? なんですか、神崎君。私の顔をそんなに見つめたりして」
「大丈夫だ姫島さん。キミの事はいつも見ているからな」
「ツ!?!」

自称、気配り上手な神崎さんは友達の変化は見逃しませんよ? だから安心しなさい。そういう意味を込めての発言だったが。

「え、ええつと・・・」

おや? 姫島さんの様子がおかしい。顔が赤いが、カレーが辛かったのか? 一応、甘口で作ったはずだけど。

「朱乃・・・あなた、思ったより学習能力が無いのね」

「ふふ、先輩って思っていたよりも情熱的な方なんですな」

「同じ事をイツセー先輩が言っても何も無かったでしょうけど・・・」

「相変わらずサラツと毒吐くね小猫ちゃん!」

「はうう・・・リョーマさんは朱乃さんみたいな方が好みなんですか」

おいおい、一遍に喋られたらお兄さんわからないよ。とりあえずアーシア、自分の胸を擦りながら溜息を吐くのは止めなさい。ほら、兵藤君が見てるぞ。

そんな騒がしい夕食を楽しみながら、一日目の夜はゆっくりと更け

ていったのだった。

.....

修行二日目。俺は朝から外に出ていた。今日は午後から塔城さんに付き合う予定となっている。それまでの時を、俺は自身の修行にあてる事にした。ま、せつかくの機会だし、この体がどれほど凄いのか検証してみようというわけだ。

別荘から少し離れた場所に、大きな岩がごろごろ転がっている場所を発見し、そこを修業の場と決めた。軽い柔軟をこなし、体が温まった所で、早速始める事にした。

ふふふ、アルⅡヴァン先生ならば、この程度の岩を壊すなど、第四次のドロームを倒すくらい容易い事なのだよ。・・・いや、マジで雑魚だったよなアイツ。HPが三ケタとか生身ユニット並みじゃん。

おっと、余計な事を考えてしまった。集中、集中。

深く深呼吸し、腰を落とす。そして右腕を振りかぶり、自身の身長よりも少し高いその岩の中心に向かって全力で殴りかかる。

「騎士パンチー！」

俺の拳が突き刺さった岩は、バカでかい音を発しながら見事に砕け散った。流石アルⅡヴァン先生だけ！ もちろん、痛みなんてこれっぽっちも感じない。

「さあ、次だー！」

なんかテンション上がって来た！ 今なら誰も見てないし。どんだけ恥ずかしいセリフを吐いたって、どんだけ恥ずかしい動きをしたって自由なのだ！

俺は次のターゲットを選び、そこから十分な距離を取った。そして助走をつけ、目標まであと一メートルまで迫った所で思いっきりジャンプした。

「ゲイ・・・じゃない。ガイ・モード発動！ ミドガルスオルム！」

・・・あかん。昨日の木場君との一件が予想以上に尾を引いてしまっているようだ。ええい！ ならばこのモヤモヤも一緒に叩きこんで

やる!

生前のスパロボ最新作の主人公機の技の名を叫びながら、空中で右足を突き出す。あの肩車コックピットって最早ギャグだよな。あんな美人の太ももに挟まれるなんて羨ましい限りだけど。主人公のフィールグッド云々のセリフは太ももについての感想を言っているんだと思ったのは俺だけじゃないはず。

カッコつけてしまいましたでしたが、実際はただの飛び蹴りなんですけどね。そういえば、この世界に来て一年以上経ってるけど、元の世界じゃもう後編出てるのかな。

そんな事を考えている間に、必殺の蹴りがまたしてもあっけなく岩を破壊する。ゲームならこの後、敵の背後に回り込んで拳から気弾みたいなの撃つんだよな。いや、俺には出来ませんよ? けど、せつかく真似したんだからそこまでやってみようかな。

反動で再び跳躍し、砕けた岩の後ろに降り立つ、そして、記憶を頼りにそれっぽく拳を構える。はい、ここまでが一連の流れです。

そうやって満足した次の瞬間・・・俺の拳から緑色の何かが飛び出し、目の前の岩を粉微塵にしてしまった。

「・・・・はい?」

目の前で起きた出来事に固まる俺。出たよね? 今確かに出たよね? 妄想じゃないよね?

・・・キエアアアアアアアア!? マジで出ちゃったああああああああ!? オカン! オカアアアアアアアアアア!!!
俺の体から何か出て来たんですけどおとおおとおお!!!

『おー。久しぶりの呼びだしやなあ。心配しとつたんやで〜』

あはは、それは済みませんでしたね。後で全力で謝りますから、今は俺の疑問に答えてください!!

鼻水出しそうなくらい慌てふためきつつ自分の身に起こった事を説明すると、オカンは呆れたような口調で答えた。

『あんなあ。いっちゃん最初に説明したやろ? 完成する事の無い贋作はどこまでも変化していくて』

いや、確かにそう説明されましたけど・・・え、まさか、ラフト

クラズだけじゃなくて、この体自体がつて事？

『そういう事や。その体も本物を模した物やろ？ アンタが「こやったらこうなる」つちゆうイメージをすればそのまんま実際にそのイメージ通りに起こるわけや。せやから気弾が出たんや』

ナンテコツタイ。

『まあ、流石に人間の体の構造上不可能な事は出来へんけどな』

ええつと・・・つまり、体を使った技は出来るけど、武装は出せないって事でいいのか？ 残念。ワームスマツシャーとかリボルビングステークとか使えたらよかったのに。しょうがない。ミドガルズオームが出来るなら、あのスタイリッシュ指パッチン攻撃も可能だって事で我慢しよう。

『例外として、アンタが選んだ例のロボットの武器だけはその姿でも出せるからな。そんなや、ウチはこの辺で。そろそろ買い物に行かんとあかんから』

あ、行つてらっしゃい。・・・神様でも買い物するのね。

しっかし、計らずもここでまさかのパワーアップを果たしてしまうとは。いや、何でもやってみるもんだね。

その後、俺は延々と岩を砕く作業に没頭し、約束の時間となった所で、塔城さんの所へ向かった。もちろん、彼女との修行では特別な事はしなかったけどな。

第十七話 紅き姫の夢と赤き龍の苦悩

十日：実際には最終日は休息に当てるので九日に及ぶ今回の合宿。最初は長いなーと思っていたが、既に半分の日数を消化していた。俺はひたすらに木場君と塔城さんの相手、そして自分の鍛練を行っていた。

何故この二人だけなのかというと、グレモリーさんと姫島さんは肉弾戦じゃ無く魔法みたいなもので戦うらしいので俺じゃ役に立たない。アーシアの修行も他の人間が手助け出来るものじゃないらしい。兵藤君はというと、人間の俺じゃ攻撃受けたら死ぬかもしれないと許可自体出なかった。

それはそれとして、たった数日だが、木場君も塔城さんも素人目から見てもメキメキ成長していた。木場君は剣の速度がさらに増していたし、格闘技を得意とする塔城さんも、所謂コンビネーション技が光るようになってきた。

いや、初めて彼女の戦いを目にした時は驚いた。とりあえず打って来てとお願ひした上で食らったパンチで俺は簡単に吹っ飛ばされたのだ。その時、つい「な、なんだこいつのパワーは!？」と某島田兵のセリフをリアルに叫んでしまった。それくらいの衝撃だったのだ。この体でなければ間違い無く内臓パーン！してただろうな。

けれど、この合宿で一番頑張っているのは、あの二人では無く兵藤君だと俺は思っている。何せ、特訓中に何度も彼の悲鳴が聞こえて来たし、夕飯の時間ではスタボロになった彼の姿を見るのが日課となっていた。

それでも、俺の前で彼が弱音を吐いた事は一度も無かったのだ。そんな兵藤君の姿に、密かに感動していた俺。せめて精のつく物を食べさせてあげようと、俺は毎日気合いを入れて料理を作った。

ちなみに、食事は全部俺の担当だ。これでも一人暮らし歴は長いのだ。料理の腕だって嫌でも上がるってものさ。まあ、流石にレストラレベルの物を出せと言われたら無理だが、それなりの物を振る舞うくらいは出来る。

この日も、夕食の時間が終わり。皿洗いを済ませた俺は、涼を求めて外に出た。ふと上を向き、そこに広がっていた満天の星空に目を奪われていると、背後から声がかけられた。

「神崎君」

「グレモリーさん？」

声の主はグレモリーさんだった。彼女はゆっくりとこちらに近づいて来ると、俺の隣に立った。

「あなたが外に出て行くのが見えたから。どうしたのこんな時間に出る？」

「少し涼もうと思っただけ。そうしたら綺麗な星空だったんでつい見惚れていた」

「ふふ、そうね。とても綺麗だわ…」

ここで恋人同士なら「ふ、キミの方がずっと綺麗だよ」「嬉しい！抱いて！」なんて会話が繰り広げられるんだろうが。残念、俺とグレモリーさんはただの友人である。そんな発言をすれば、絶対零度の目で「気持ち悪い」と言われる事間違い無し！

よって、無言で夜空を見上げ続ける俺。グレモリーさんも俺に倣って夜空に目を向けている。

…うーむ。気まずい。無言の時間っていうのはどうにも苦手だ。けれど、今も昔も彼女なんていない俺は、女の子と何を話せばいいのか、さっぱりなのです。ここは脳内チャットで意見を求めよう。

HN騎士(笑)「凄く綺麗な同級生と一緒に星空を眺めているんですが、どうしたらいいですか？」

HN理論家だけど異性好き「押し倒せ！」

HN姉様「むしろ押し倒されるのもアリよん！」

HN霞さん「でもそれって根本的な解決になりませんよね？」

流星、霞さんはブレないな。…マジでどうしよう。

「…ごめんさい」

そんな俺の気持ちを察したのか、グレモリーさんの方から話しかけて来てくれた。ただ、その内容が謝罪というのはどういう事なのだろうか？ 俺、彼女に謝られるような事無いと思うんだけど…。

「何故謝るんだ？」

「私の事情に巻きこんでしまって、本当に申し訳無いと思ってるわ。それに、この前の事もそうよ。あの時の私はホントにどうかしてたわ」

ああ、あの襲撃事件の事ね。いや、まあ確かに驚いたのは驚いたけど、別に怒ってはいないよ？ それに今回の合宿だって、どこかで楽しんでる俺がいるし。

「気にするな。ただ俺に役に立ってる事があるならと思っただけだからな」

「ふふ、あなたっていつもそうよね。「友達だから」「困っているから」そう言っただけ、ただそれだけの理由で付き合ってくれよ……」

「それは当然の事じゃないのか？」

少なくとも、俺はそう思っている。そう言うと、グレモリーさんは小さく首を横に振った。

「気分を悪くしたのなら謝るわ。けど、決して馬鹿にしているわけじゃないの。むしろ、その思いには尊敬の念を抱いているわ。そんなあなただから、学園のみんなも頼りにしているんだろうし。…私も甘えてしまいたいそうになる」

「別に甘えてくれてもいいんだけど」

「駄目よ」

キツパリと言い放つグレモリーさん。その姿は、俺にはなくまるで自分自身に言い聞かせているように見えた。

「何故？」

「私はグレモリー家の次期当主で、イツセイ達の『王』よ。そんな私が弱音を吐いたり、誰かに寄り添ったりしては、他の者達に示しがつかないわ」

一瞬寂しそうな表情を見せるグレモリーさんだが、次の瞬間には決意の籠った瞳で俺を見つめて来る。そんな彼女を見て、俺は理解する。ああ、この子は自分の家を誇りに思っていて、周りの期待に応えようとしてこまでも一生懸命なんだなと。

…けどな、グレモリーさん。キミは一つだけ勘違いしているぞ。

「グレモリーさん。俺はなんだ？」

「え？」

「キミにとって、俺はどんな存在なんだ？」

「…と、友達？」

よかった。彼女もそう思ってくれていたみたいだ。これでただのクラスメイトとか言われてたらこれからの話が全部意味無くなつた。

「ありがとう。俺もキミの事を大切な友人だと思っている。…だからこそ、キミのさっきの言葉が許せない。キミが弱音を吐けないほど、キミが甘えられないほど、俺は頼りないか？」

「ち、違うわー！ あなたの事を頼り無いなんて思った事は一度も無い！ けど、私は…！」

「さつきキミはこう言った。自分はグレモリー家で王だからと。だがな、そんなのは俺には関係無いんだ。俺は人間で、キミの眷属じゃないから。俺とキミは…ただの友達なんだ」

「ツ…！」

ハツとするグレモリーさん。やれやれ、そんな簡単な事にも気付いてなかったのね。

「学園でも、オカルト部でも、キミはみんなの中心にいる。きっと色々な重責があるんだろう。…だからといって、それを我慢しなければならぬ理由なんてどこにもない。たとえば、キミが何者であろうとな」

「神崎…君…」

瞳を揺らすグレモリーさん。もう一押しして所か。ならば、ここは勢いに任せて、普段では絶対やらない事をして追い込んでやろう！

「あっ…」

俺はグレモリーさんを正面から力一杯抱きしめた。彼女の体の柔らかさが一気に伝わってくる。

「キミは誇り高い女性だ。全てを曝け出してくれ…とは言わない。だが、こうして心配している男が…悪魔でも眷属でも無い、ただの人間の友達がいるという事を忘れないでくれ」

…うーわ、恥ずっ！ こんな俺のキャラじゃない。けれど、恩人

であり友人である彼女が悩んでいるのに、何もしないなんてそれこそ俺じゃない。生前「お節介が服を着て歩いている」という異名を与えられたのは伊達ではないのだ！

過去を振り返る俺の背中に、グレモリーさんがおずおずといった感じで腕を回して来た。これで、俺達は完全に抱き合っている形となった。ははは、今の状況を学園の彼女のファンに見られたら殺されるな。

「…今だけ」

「ん？」

「今だけ…このままでいさせて。きつと、きつとすぐにいつもの私に戻るから…」

はいはい。お兄さんでよければいくらでも胸を貸しますよ？ なんか女の子特有の甘い香りが漂って来るが、真面目モードの俺はそんな事では動じ…てますけど何か？ 逆に何も感じないヤツは男として致命的な何かを失っていると思うな。

その状態で、グレモリーさんはポツポツと自分の事を語ってくれた。彼女には立派なお兄さんがいるらしい。しかも、前回グレモリーさんを迎えに来たグレイフィアさんはなんと、お兄さんの奥さんなんだとか。二人は周囲の反対にもめげず大恋愛の末に結婚したらしく、自分もお兄さんのように、心から好きになった相手を生涯の伴侶にするのが夢なんだとか。

「私は、私を…リアスを見てくれる人と一緒にになりたい。小さな、本当にささやかな夢なんだけどね」

「グレモリーさん。夢に大きいも小さいも無い。どんな夢だって、その人にとってはかけがえの無い物なんだから」

あくまで俺の持論だけだな。ちなみに俺の夢は平穩無事な日常を送る事。…すでに大きく道を逸れている気がするが。

「ふふ、あなたって、本当に私が欲しい言葉をかけてくれるわね。…あなたみたいな人が相手だったら私も…」

ボソボソと独り言を呟くグレモリーさん。なんだか、思っている事が勝手に口から出てしまったって感じだな。ならば聞かなかった事

にしておこう。…実際聞こえなかったし。

それからしばらくして、グレモリーさんが静かに俺から離れた。その顔はどこか満足そうに見えたのは自惚れだろうか。

「ありがとう、神崎君。おかげで少し気が楽になったわ」

「それはよかった」

と、ここでグレモリーさんが思い出したように話題を変えた。

「あ、そういえば、ここに来る前にイツセーとすれ違ったんだけど、何だかあなたに相談したい事があるって言ってたわよ。もしかしたら今頃あなたの部屋に行ってるかも」

あ、そうなの？ なら待たせるのも悪いし、そろそろ行くか。俺はグレモリーさんをその場に残し部屋に戻ろうとして…振り返った。

「そうだ、グレモリーさん」
「？」

「俺ごときに評されるのは不快かもしれないが…俺から見てキミはとも素敵な女性だと思うよ」

「なあっ…!?!」

フオロー完了。神崎亮真はクールに去るぜ。

はてさて、グレモリーさんの言う通り、俺の部屋の前には兵藤君の姿があった。

「待たせたな、兵藤君」

「神崎先輩…」

…あれ、兵藤君だよな？ 学園でいつもおっぱいおっぱい叫んでる彼と今の彼が同一人物とは思えないほど意気消沈している。と、とりあえず部屋に入ろう。

「適当に座ってくれ」

ベッドに腰掛ける俺と、向かい合うように椅子に座る兵藤君。さ

て、グレモリーさんが言うには、相談事があるらしいけど…。

「兵藤君。俺に何か話があるんだろ？」

「先輩…俺、不安なんです」

「不安？」

「合宿が半分過ぎて、自分が弱すぎるって事に気付かされたっていうか…。部長も朱乃さんも木場も小猫ちゃんもどんどん強くなっていったのに、俺だけまるで成長してない気がするんです」

そんな事は無い…とは、今の彼の顔を見ると軽はずみには言えなかった。兵藤君は本気で悩んでいるみたいだ。

「もちろん、部長をあんな焼き鳥野郎に渡すつもりなんてありません」
焼き鳥？　グレモリーさんの婚約者って焼き鳥屋さんか何かなのか？

「…でも、本当に俺なんか部長を守れるのかって思ってるのも事実です。『赤龍帝の籠手』なんて凄い神器を持つてるのに、これじゃ宝の持ち腐れですよ…」

「兵藤君…」

「はは、情けないですよ、俺。それに比べて、先輩は凄いですよ。木場も小猫ちゃんも褒めてましたよ。人間の身でありながら悪魔である自分達を簡単に負かしてしまうなんてって。…先輩、どうしてあなたはそんなに強いんですか？」

「…強くならなければならなかったから」

「じゃないとこの世界ではすぐに死んじゃうらしいからね！」

「そうですか。なら、先輩には守りたい人っていますか？」

守りたい人か。うーん、普通なら家族とか仲間とかかって言うんだろ
うけど、この世界じゃ俺って一人だからな。けど強いて言うなら…。

「今の俺にはアジアくらいしかないな」

我が家の天使である彼女に近寄ろうとする変態共は俺が成敗してくれるわ！ それと、人間じゃなくていいのなら我が家の癒しである
黒歌の事も忘れてはいけない。

「今の…？ それじゃ先輩は大切な人を亡くした事が…」

兵藤君が愕然とした顔で俺を見つめて来る。え、どうしたの？

俺、変な事言った？

「す、すみません、先輩！」

かと思えば、いきなり頭を下げる兵藤君。ちよちよちよ、どうしたのさ急に!？」

「ホント、すみません！ 嫌な事思い出させちゃって！ くそ、最低だ俺って…!」

何を言っているのかさっぱりわからないよ？ とはいえ、兵藤君のあまりにも真剣過ぎる表情に何も言えないチキンな俺。とにかく、気にしないって事をアピールしよう。

「兵藤君。俺は気にしてないから頭を上げてくれ」

「でも…」

「いいから」

「…わかりました」

ようやく頭を上げてくれた兵藤君。さて、いよいよ本題だ。弱音を吐かなかった彼が、ここに来て初めてそれを口にした。ならば、それを最初に聞いた俺にはそれに答える義務がある。

「兵藤君。キミがそこまで悩んでいるなんて思わなかった。だから、大丈夫だ、とか、余裕だ、とか軽はずみに言うつもりは無い。そんな物はキミに対しての侮辱にしかない」

「…」

「けど、俺は兵藤君が今日まで必死で努力を重ねて来たのは知っている。だからそれを…キミ自身の努力を信じてあげる事くらいはしてもいいんじゃないか？」

「俺の努力を…信じる?」

「腕立ての一回一回で兵藤君の力は増していく。険しい道を走れば走るほど、兵藤君の体力は増えていく。それら全てが合わさって、兵藤君という存在を強くする。努力っていうのは、どんな小さなものだった、決して無駄にはならないんだ」

「努力は…無駄にならない」

「グレモリーさん達だって努力を重ねている。だから強くなっているんだ。キミが弱いんじゃない。キミが強くなる間に、彼女達も強く

なっていていつているんだ。だから、キミは周りの事は気にせず、一秒前の自分よりも強くなれるよう、頑張ればいい」

周りが凄すぎて劣等感を抱いているみたいだが、そんなの関係無い。兵藤君は兵藤君の強さを磨いていけばいいだけだ。

「…はい。はい！ そうですね！ 俺は俺だ！ 木場みたいに剣は振るえないし、小猫ちゃんみたいに上手に戦えない。でも、そんなの関係無いんだ！ 俺は木場でも小猫ちゃんでも無い！ 俺は兵藤一誠なんだから！」

…おい、急にイケメンになったぞこの子。まるで漫画の主人公のようなセリフを叫びながら、椅子から立ち上がる兵藤君。

「ありがとうございます、先輩！ おかげで吹っ切れました！ 『駒王学園の頼れるお兄様』って名は伊達じゃないって身を以て知りました！！」

ぶふおっ!? な、何で今それが出て来るの!? 心の中で嘔き出す俺に対し、兵藤君は満面の笑みを向けて来た。

「先輩！ 俺、明日も頑張ります！ 絶対に強くなって、部長を守ってみせます！」

深々と頭を下げ、兵藤君は俺の部屋を出て行った。いや、若いっていいね。

翌日、兵藤君が山を吹っ飛ばす場面を目撃する事を、この時の俺は知る由も無かったのであった…。

「先輩！ 見てくれましたか！」

「…これは夢か？」

第十八話 託された思い

ついに合宿の日程が終わりを告げた。一日の休息日を挟み、いよいよ、グレモリーさん達がゲーム（正式にはレーティングゲームというらしい）に挑む時がやって来た。しかし、改めて思うけど、模擬戦をゲームって呼ぶのって何か違和感があるような…。

少し話が逸れるが、合宿自体はこれといった問題無く終わった。ただ、あのお悩み相談の真似事をした日から、妙に兵藤君に懐かれたような気がする。山をふっ飛ばした後に、「キミは強いよ」なんて声をかけたらそれはもう満面の笑みで元気よく返事なんてするものだから、戸惑ってしまった。なんだろう、弟がいたらこんな感じなのかもしれないな。

逆に、グレモリーさんは俺と顔を合わせる度に焦った様子で視線を逸らしてしまうようになってしまった。やはり調子に乗って抱きついてしまったのが悪かったようだが、今さら後悔しても遅い。いざとなったら再び最終兵器の封印を解くまでである。

ゲームの開始は深夜零時ちょうど。俺達は自宅で彼女達の勝利を祈る：つもりだったのだが、どういうわけか、全員に「傍で見守っていて欲しい」と言われ、ゲームの舞台となる学園に足を運ぶ事となってしまった。

そこに現れたバイオレンスマイドことグレイファイアさんに案内され、モニタールームとして使われるらしい放送席に向かう俺とアシア。そこで色々彼女に説明してもらったが、グレモリーさん達は実際に学園で戦うんじゃないかと、別の空間に作られた戦場で勝負するらしい。

そう語りながらグレイファイアさんが腕を振ると、俺達の前に大小様々なモニターがいくつも出現した。もうファンタジーなのかSFなのかわからなくなってきたよ俺。

「はわわ、何だか私まで緊張して来ました」

隣に座るアシアがガチガチの表情でグレモリーさん達が映っているモニターを食い入るように見つめている。いや、まだ始まってす

らないんですけどね。

そんなアジアを一瞥し、俺は対戦相手：グレモリーさんの婚約者が映っているモニターに目を向けた。金色の髪に、胸元全開の赤いスーツを身に纏った男性。おそらく彼がそうだろう。というか、十人以上いる集団の中で、男は彼しかいない。

うーむ、イケメンだな。焼き鳥屋というよりホストって言った方がしっくりくるかも。

何て名前なんだろう。そういえば、グレモリーさんから全く話を聞いてないんだよな。…あ、こういう時こそ、精神コマンドの出番か。

俺は脳内パネルを出現させ。そこから『偵察』を選んで使用した。これは敵の情報を知る事が出来る精神コマンドだ。さてさて、何が出て来るかな。

名前：ライザー・フェニックス

特殊能力：不死

使用技：炎

非童貞

：おい、最後の情報なんだよ!? 他人の性体験の有無なんか誰が知りたいってんだよ! てか、男でこれなら、女性でもそうなのか? …確認しないのかった? するわけねえだろ!

「今回のレーティングゲームはあなた方だけでは無く、両家のみなさまも別の場所からご覧になっています」

グレイフィアさんの言葉に意識を取り戻す。残念だが、これから『偵察』を使う時はずっと訪れないだろうな…。

「さらに、魔王ルシファー様も今回の一戦を拝見されております」

その言葉に耳を疑う。魔王!?! このメイドさん、今魔王って言ったの!?! しかもルシファーっていったら超大物なんじゃないの!?! ど、どんな人なんだろう? やっぱり滅茶苦茶怖い顔してて筋骨隆々な感じだったりするのか?!

「ですので、あまり下手な真似はしませんように。万が一にも干渉すれば、その時点であなた方は魔王様のお怒りに触れる事になる事を忘れなく」

「干渉？ 今となつては俺達に出来る事は無いですけど？」

これは彼女達の勝負なんだからな。見守るしか出来ない。

「なるほど。『今』は動く気は無いと…そういう事ですね」

何故か『今』を強調するグレイフィアさん。何でそんなに興味深そうな顔で見て来るんですか。危ない人とはいえ、あなたみたいな綺麗な人に見つめられると照れるんですけど。

「そろそろ開始時間となりますね。では、私は両陣営に最後の説明を
してまいりますので。お二方はこのままお待ちください」

一礼し、グレイフィアさんが転移していく。その場に残された俺達
は開始時間まで余計な真似はせず、ただ待つ事にした。

「部長さん達、勝てるでしょうか？」

「信じよう」

数分後、グレイフィアさんが戻つて来た。そして、それからすぐに
彼女が校内放送とチャイムでゲームの開始を宣言したのだった。

さて、いよいよ始まったレーティングゲームだが、モニターの向こ
うのグレモリーさん達は動こうとしない。何やら作戦会議を開いて
いるようだった。

「どうしたんでしょう、みなさん？」

「アルジエント様。レーティングゲームとはすぐに決着が着く様なも
のではございません。実際のチェスの様に、長い時間をかけて競いあ
うものなのです」

アシアの疑問にすぐさま答えるグレイフィアさん。なんだろう、
この人結構優しい人なのかもしれない。グーパンするけど。

数分の時間が過ぎ、作戦会議を終えた所でいよいよ両陣営が動き始
める。果たして、どんな勝負になるのだろうか。固唾を飲んで見守る
俺達の前で、兵藤君達は特訓の成果を存分に発揮していた。

『部長と合流しに来たんだ。だけどお前がいるなら話は別だ！ ライザー！ テメエは俺がブツ飛ばす！』

ビシッ！ と指を突きつける兵藤君に、フェニックスさんは何がおかしいのか大声で笑い始めた。

『ふ…はははは！ お前が俺を倒す？ 中々面白い冗談だ！』

『舐めんなよライザー！ うおおおおおおお！！』

兵藤君の全力パンチがフェニックスさんの顔面を文字通り消し飛ばす。殺った!? 殺っちゃったの!?

だが、ハラハラする俺を余所に、フェニックスさんの顔があつた部分に炎が出現し、それが消えた時、彼の顔は元通りのイケメンに戻っていた。

『なっ!?』

『ふん』

驚く兵藤君を、フェニックスさんは手から出した炎で押し飛ばした。誰か水！ 水持つて来て！

『リアス、もういいだろう。投了しろ。これ以上はキミのお父上にも、サーゼクス様にも格好がつかないだろう。キミはもう詰んでいるんだ』

あれ、今どつかで聞き覚えのあるような名前が出て来たような。気のせいかな？

『…そうね。確かにあなたの言う通りだわ。けれど、それだけは絶対に嫌。私は最後の瞬間まで戦い続ける』

『何故だ。何故キミはそこまで…』

フェニックスさんの問いに、グレモリーさんは胸に手を当て、僅かに頬を上気させながら答えた。

『こんな私を…誇りある女と言ってくれた人がいる。今ここで諦めたら、私は一生その人に顔向けが出来なくなる！ だから、どんなに絶望的な状況だろうと、私は諦めるわけにはいかないのよ！』

…やっぱ凄いわ、グレモリーさん。この状況で、彼女の眼はまだ死んではいなかった。それは、兵藤君も同じだ。火傷を負いながらも彼はゆっくりと立ち上がった。

『…俺だって。俺だって負けるわけにはいかねえ。部長の為に…。そして、俺を信じてくれた先輩の為に!!』

直後、兵藤君の体を、赤い何かが包みこんだ。

S I D E O U T

イツセーS I D E

…痛え。痛えよ。こんな痛み、ドーナシックに襲われた時以来だ。朱乃さんも木場も小猫ちゃんもやられた。残った俺もボロボロ。ここから逆転するなんて、ハッキリ言つて無理だ。でも、何でだろう。諦めるつていう気持ちは全く湧いて来なかった。

『——キミは周りの事は気にせず、一秒前の自分よりも強くなれるよう、頑張ればいい』

俺の頭に、神崎先輩の言葉が蘇る。あの日、俺の悩みに真剣に答えてくれた先輩のおかげで、俺は周りを気にする事を止めて、俺らしい強さを得る事が出来た。

人間でありながら、木場や小猫ちゃんを圧倒するほどの強さを持つ先輩。だけどあの人は言った。自分は強くならなければならなかった。今の自分にはアシアしかない。その言葉が俺には衝撃だった。

きっと、先輩は昔、自分の無力さから大切な人を失ってしまった事がある。だから、俺に自分と同じ辛さを味わわせないようにと、助言をくれたんだと思う。

『キミは強いよ』

そんなあの人が俺の事を強いと言つてくれた事が本当に嬉しかった。先輩に認めてもらえた事が、先輩が俺の強さを信じてくれた事が。

そんな俺が…こんな所で倒れていいのか？俺が倒れたら、先輩を嘘つきにしてみよう。それでいいのか兵藤一誠？

——ならば、どうする。

気付けば、目の前に巨大な存在の姿があった。お前…いつぞやのドラゴンか!?

——ドライグ。それが俺の名だ。

そのドライグさんが俺に何の用だよ？

——このままではお前は負ける。だが、お前は諦めていない。まだ勝算があると思っているのか？

勝算？　ねえよそんなもん

——ならば。

勝算が無かったら諦めるしかねえってか？　それこそ馬鹿な話だ。そうだ：俺は弱い。強くなっただけど弱い。でも、そんな俺を信じてくれている人がいる。部長、朱乃さん、木場、小猫ちゃん、アーシア、そして：神崎先輩。あの人達の思いを背負った俺が：諦めるわけにはいかねえんだよ！

俺の言葉に、赤ドラゴンが口を歪める。これは：笑っているのか？

——ふん、体の方はまだまだだが、どうやら精神の方は少しはマシになったようだな。いいだろう、認めてやる。俺の力：お前に預ける。

「——私は諦めるわけにはいかないのよー！」

部長の声が聞こえる……。その声はまだ力強く、自らの勝利を信じているように聞こえた。なら、俺もいいかげん起きないとな。

「…俺だって。俺だって負けるわけにはいかねえ。部長の為に……。そして、俺を信じてくれた先輩の為に!!」

叫びながら、俺は『赤龍帝の籠手』を天高く掲げた。

「輝きやがれ！　オーバーストオオオオオオ!!」

『Welsh Dragon over booster!!』

俺の全身を真紅のオーラが包み込む。その中で、俺の体には真つ赤な鎧が装着されていた。

——十秒だ。それ以上はお前の体が持たない。

上等！　十秒と言わず五秒で終わらせてやる！　俺は背中のブースターを噴射させ、ライザーめがけて突撃した。

「な、何だそれは!？」

「これは『赤龍帝の鎧』！　お前をブツ飛ばす為の力だああああああ!!!」

目を見開くライザーの顔面を再び殴る。けど今の俺は止まらない。吹っ飛んだ先へ回り込み、殴る！ さらに回り込んで殴る！ とにかく殴る！ 殴る殴る殴る！

「き、貴様あ、調子に乗るなあああああ!!」

ライザーが今までで一番の炎を放って来る。だけどそれがどうした。そんなモンで俺を止められると思うなよ！

「うおおおおおおお!!」

「ッ!? があああああああ?!?!」

そのまま炎を突っ切って、ライザーの腹に拳を叩き込む。体をくの字に曲げたまま、ライザーは部長の近くに吹っ飛んだ。

——あと五秒だ。

ちっ、間に合わなかったか。まあいい、このまま終わらせてやる。もう一度ブースターを起動させようとした俺に対し、立ち上がったライザーが不気味な笑みを浮かべた。

「…ふ、ふふふ。いいだろう。お前の力を認めてやろう。…だが、それでもこのゲームは俺の勝ちだ！」

「何をっ?!」

ライザーが動く。だがその標的は俺では無く部長だった。

「テメエ、卑怯だぞー！」

部長を羽交い締めしたまま、ライザーが高笑いする。

「ふははは！ ほぎけ！ 卑怯だろうがなんだろうが、最後に勝てばよからうなのだアアアアアッ！」

「つぎけんなああああああ!!!」

この焼き鳥！ マジで許さねえ！ 今すぐ殴ってやろうと走り出す俺だったが、その体から急速に力が抜けて行くのを感じた。

——時間切れだ。

なっ?!? こんな所で！ 待てよ！ もうちよつとだ！ もうちよつとでヤツを倒せるんだ！

「おや、どうやら時間切れらしいな。まあいい、そこで見ているがいい、リアスが俺の物になる瞬間をなあつ！」

ライザーが右手を掲げる。きつと、その炎で部長を焼く気だ。

「部長おおおおおおお!!!」

地面に這いつくばりながら手を伸ばす俺の眼前で、部長が口を動かす。次の瞬間、部長はライザーの炎にその身を包まれた。

——タスケテ。

部長の声無き求め。けど、それはきつと、俺に向けられた物じゃない。今この光景を見ているであろうあの人へ向けられた物だ。

…すみません、先輩。俺、部長を守ってあげられませんでした。だからお願いです。あなたの手で部長を…。

『リアス・グレモリー様の『王』リタイヤ。よってこのレーティングゲーム、ライザー・フェニックス様の勝利となります』

アナウンスの音がやけに遠くに聞こえた…。

イツセーSIDE OUT

IN SIDE

…あのゲームから数日が経過した。今日は日曜日。だけど、俺は制服に身を包んでいた。理由は、今俺が持っている一枚の招待状。グレモリーさんとフェニックスさんの婚約パーティーへの物だ。一昨日、家にやって来たグレイフィアさんから貰った。

『ゲームは終わりました。ここから先、あなたが何をしようが自由です。パーティーは明後日となりますのでお忘れなく』

いや、こんな物渡されたら選択肢なんて一つしかないじゃないですか。

「…行くか」

じゃないと、あのバイオレンスマイドさんに何されるかわからないからな。けどこれ、時間と書いてないけど今からいつて大丈夫なのか？ グレイフィアさん曰く、封を切れば会場に転送されるみたいだけど、もう始まっている中にいきなり現れたりしたら迷惑になるだろうし。

「リョーマさん…」

「アシア？」

悲し気に顔を伏せたアシアが姿を見せる。どうした？ と聞こ

うとした途端、彼女はいきなり抱きついて来た。

「行くんですね？ 部長さんの所に…」

「ああ」

「きつと…きつと部長さんはリョーマさんを待ってます。だから止めません。私はここであなたの帰りを待ちます。私がついて行っても足手纏いにしかりませんから」

はて？ パーティーに参加するだけの事に足手纏いも何も無いと思っただけ。

「お願いします…。どうか、どうか無事に帰って来てください」

「ああ、任せてくれ」

迷子になるかと心配してくれてるのか？ けど、向こうにはこの招待状があればすぐだし、帰りだってきつと何とかなるさ。いざとなればオカンに頼めばいいし。

『任せとき。…アンタの男気、しっかりこの目で見させてもらうからな』

突然頭に響く、オカンの今まで聞いた事の無い様な声色のセリフに目を丸くしつつ、俺は招待状の封を切った。

第十九話 悲しみの少女に救いの手を

リアスSIDE

「皆様！ この度は私、ライザー・フェニックスと、その妻となるリアス・グレモリーの婚約の席にお集まり頂き、誠にありがとうございます！」

両手を高々と掲げ、会場全てに響く様な声で挨拶するライザー。その背中を、私は他人事であるかのような気分で見つめていた。パーティーに参加する名だたる貴族達がそれに合わせるように盛大な拍手を送る。

ふと、視線を動かすと、幼い頃からの友人であるソーナ。その姉でお兄様と同じ四大魔王の一人であらせられるセラフォル様。そして、イツセーを始めとする私の眷属達の顔が見える。

(みんな…そんな顔をしないで)

四人はそれぞれの表情を浮かべているが、共通するのは「悲しみ」だった。特にイツセーは酷い。今にも泣き出しそうだ。もしかしたら、責任を感じているのかもしれない。

でもね、イツセー。あなたが悲しむ必要は無いのよ。あの土壇場で、『禁手』へと至るなんて誰が想像出来たかしらね。

イツセーだけじゃない。朱乃も、祐斗も、小猫も、みんな自分の全力でゲームに挑んでくれた。本当に、私は恵まれている。あんなに素晴らしい眷属を持つ事が出来たのだから。

神崎君とアジアはここにはいない。人間である彼等はこの場には呼べないのだ。

その事に、どこか安堵している私が出た。あの二人…特に、神崎君には今の私を…ライザーの物となった私の姿を見て欲しくなかった。

——不思議な男の子。

それが、神崎君への第一印象だった。一年前、山田先生に連れられて教室へ入って来た彼の姿を見た瞬間、私は強い興味を抱いた。

淡麗な顔つきに、逞しい体。他の子達はそちらに惹きつけられたみたいだったけど、私が何よりも惹かれたのは、その鮮烈な目。強い意

思の込められたそれは、「戦う者」の目だった。そんなはずは無い。普通の人間がそんな目をするはずが無い。そう頭では思っても、心では否定しきれなかった。

そんな彼の放つ独特な雰囲気、皆興味はあっても近付けないようだった。私が最初に彼に話しかけた。今だから言うけれど、きっかけを作ってあげよう……というのは建前だった。私は、今まで出会ったどんな男性とも違う彼と何故か繋がりをもちたかったのだ。

それからすぐだった。彼と友人となったのは。

神崎君の性格を一言で表すなら……『優しい』。これに尽きる。物静かだが、決して無口では無い。誰であろうと、困っていたら手を貸す。悩んでいたら相談に乗る。そんな彼を学園の子達は『駒王学園の頼れるお兄様』なんて呼ぶようになった。

私も、彼と過ごす時間は楽しかった。「こちら側」じゃない彼との何気ない会話は、私を悪魔のリアスでは無く、ただの学生であるリアスでいさせてくれた。彼と話す時だけが、私を色んなしがらみから解放してくれる瞬間だった。

そんな彼の秘密を知ったのは、イツセーの友達を助ける為に教会に乗り込んだ時。何故かそこにいた神崎君は、大勢のエクソシスト達を一人で殲滅し、さらには墮天使すらも無力化させていた。神器すら持たない普通の人間がありえない……と思いつつ、どこか納得してしまう私はおかしいのだろうか？

その後、どうしてかその墮天使達を庇う彼を、私は教会の人間かと疑ってしまった。……この時ほど己の浅はかさを悔いた時は無かった。

『俺をあんなヤツらと一緒にするな!!』

見えないはずの怒気が刃となって私の全身を貫いた。ハッキリとした恐怖と、それを越える悲しみが私の心を支配する。

——そんな、そんな目で私を見ないで。

言いたいけれど言えなかった。だって、彼にそんな目をさせてしまったのは私の所為なのだから。

すぐさま謝罪したら彼はあっけなく許してくれた。でも、私の心は晴れなかった。そんな私の前で、ついには土下座までして墮天使を庇

う神崎君。彼女達にチャンスを。そう懇願する彼の顔には、信念の様な物が宿っていた。結局、私は墮天使達を消滅させる事が出来なかった。

後日、彼の事情と私達の正体について話す為、二人をオカルト部へ招いた。そこで語られた彼とアシアの関係。小猫の問いに、何が相手でも彼女を守ると言い放った彼に、私はいいよの無い感情を抱いた。彼にそこまで想われるアシアの事が羨ましいとさえ思ってしまった。

そして、気付けば、彼に悪魔への転生をもちかけていた。了承する神崎君だったけれど、結果は『悪魔の駒』を受け入れられないという前代未聞の失敗に終わった。

その結果に、自分でも驚くくらい落ち込んでしまった。どうして？ 彼ほどの戦力を引き入れる事が出来なかったから？ それとも…？ それとも？ 戦力以外に他に何かあるのか？ あの時の私にはそれが何なのかはわからなかった。

それから数日経ち、朝の公園でイツセーを鍛えている私の前に、神崎君とアシアが現れた。仲睦まじい様子で買い物に行くと言う二人の姿に、何故か胸がモヤモヤした。

会話の節々に込められるアシアの神崎君への好意。けれど、彼の方はそれに気付いていない。それを察した私はアシアに知った様なセリフを吐きながら、心のどこかで安堵していた。

…それからすぐだった。私とライザーの婚約の予定が早まったと聞かされたのは。彼は私の求める相手とは正反対の男だった。だからどうしてもこの婚約を破棄したいと思った私は、神崎君の元へ押しかけ、処女を奪ってくれるようお願いした。

けれど、彼は全てを理解したかの様な顔で、私の肩を優しく抱いてくれた。私が傷つく必要は無いと、何があっても私の味方だと、私を安心させるようにひたすら優しく。

そこでようやく、私は自分が震えていた事に気付いた。覚悟はしていたつもりだった。けれど、私は怖かったのかもしれない。神崎君に抱かれる事が。こんな形で初めてを失う事が。

今なら普段言えないような事も言えそうだと、私は自身の夢を神崎君に話した。グレモリーの私じゃ無く、リアスとしての私を見てくれる人と一緒にになりたい。そんな小さな夢を、彼は肯定してくれた。

(…ああ、そうだったのね)

私はようやく気付いた。

どうして、神崎君に睨まれたのがあそこまで怖かったのか。

どうして、彼を眷属に出来なかったのがあれほどまでにショックだったのか。

どうして、アーシアとの仲を見てモヤモヤしてしまったのか。

どうして、処女を捨てようとした時に、真っ先に彼の顔が思い浮かんだのか。

どうして、彼の言葉があんなにも私の心を揺さぶったのか。

どうして、彼に抱きつかれた時、幸せに感じてしまったのか。

どうして、レーティングゲームであそこまで追い込まれたのに諦めなかったのか。

どうして、届くはずが無いのに、助けを求めてしまったのか。

(私は…こんなにも彼の事を…)

最後の最後に気付く事が出来て本当によかった。これから、私は違う男性の物として生きていく事になる。けれど、この心は…この想いだけはあなただけに捧げます。

(神崎君。せめて、もう一度だけでもあなたに…)

「では！ 改めてご紹介しましょう！ 彼女こそ、我が最愛の妻となる女性リア——」

ライザーの言葉が止まる。それと同じように、参加者達の拍手も治まった。何事かと沈めていた顔を上げれば、会場の中心…その床に、紫色の魔法陣が出現した。まさか、参加者の誰かが遅刻して来たのだろうか？

「おや、今になって誰だ？ 確か、参加者は全員揃っているはずだが」

「いえ、もうお一方残っております」

首を傾げるサーゼクスお兄様に、傍に控えていたグレイファイアが答える。

「グレイファイア。キミは知っているのか？」

「ええ。そして、これから現れるお方こそ、リアスお嬢様が一番会いたいと望んでいるお方です」

魔法陣から発せられる光が徐々に強くなっていく。そこから現れた人影。その正体が明らかになった時、私は己が目を疑った。

…嘘よ。そんなはずない。彼が…彼が、ここに来るはずなんて無いのに…！

その人物は魔法陣から静かに出て来ると、周りを見渡す。そうやって私を見つけたその人物は、招待状を持つ手を掲げ、いつものように私の名前を呼んだ。

「すまない、グレモリーさん。少々遅れてしまったようだ」

「神…や…」

どうして…どうしてあなたは、そんなにも私の求めに伝えてくれるの…？

泣くつもりなど無かった。決して情け無い姿を見せるつもりは無かった。けれど、私は、溢れ出る涙を止める事が出来なかった。

リアスSIDE OUT

サーゼクスSIDE

「すまない、グレモリーさん。少々遅れてしまったようだ」

魔法陣から現れたのは、制服を纏った青い髪の少年だった。何故だろうな、あの少年の髪色を見ると、かつての“彼”を思い浮かべてしまった。

「あの少年は？」

「あの方の名は神崎亮真様。リアスお嬢様のご友人の“人間”です」

…そうか。彼がキミの言っていたリーアの本当の想い人か。グレイファイアの“人間”発言に周りの者達が一斉に騒ぎ出す。

「人間だ?! 何故そんな者がこの場所に!?!」

「招待状を持っているという事は、正式な参加者なのか?」

「馬鹿な! 人間などがこの席に呼ばれるはずが無かろう!」

好き勝手に喋る貴族達。その中でライザー君が衛兵に指示を飛ば

す。

「何をしている！ さっさとつまみ出せ！」

「で、ですが、招待状を持って…」

「知るか！ 人間ごときにこのめでたい場を汚されてたまるか！ 早くしろ！」

神崎君を取り囲む衛兵達。だが、その包囲網は呆気無く崩壊した。
「うおおおおおおおおおお!!」

リーアの眷属：確か兵藤君だったかな？ その彼が、『赤龍帝の籠手』で衛兵の一人を殴り飛ばした。

「先輩！ 待ってましたよ！」

「貴様！ 邪魔をするか！」

別の衛兵が兵藤君に跳びかかる。すると今度は別の少年がその衛兵の槍を、自らの剣で受け止めた。

「ふふ、ずいぶんと遅いご到着ですね、先輩」

「けど…！」

「ええ。信じてましたよ、神崎君。あなたなら、きっとリアスを助けに来ると！」

神崎君を守るように立ち塞がるリーアの眷属達。姿を見せただけで、先程まで沈んでいた彼等をここまで奮い立たせるなんて。どうやら相当人望のある少年の様だ。

「おらあ！ 道をあげやがれ！ 先輩の邪魔をするヤツは、俺が相手してやる！ 『赤龍帝の籠手』にぶん殴りたいヤツはかかって来やがれえ！」

「ついでに、僕の剣と！」

「私の拳…！」

「さらに、私の雷もセットでお付けしますわよ！」

「ひ、怯むな！ かかれ！」

一斉に動き出す衛兵達を相手に、リーアの眷属達は縦横無尽に暴れ回った。ゲームを観ている時にも思ったが、彼等は一人一人凄い可能性を秘めている。その証拠に、衛兵達がまるで相手になつていなかった。

「先輩！　ここは俺達に任せてください！　部長が待ってますよ！」
「…わかった」

兵藤君の言葉を背に、神崎君がリーアの方へ向かってゆっくりと歩いて行く。一人となった今ならば、彼を止めるのは簡単だろう。そのはずなのに、誰一人として動こうとしない。

…気圧されているのだ。悪魔である彼等が、人間である神崎君から発せられているプレッシャーのようなものに。そうして誰もがただ見つめる中、神崎君はライザー君と対峙した。

「貴様あ！　何者だ！　貴様のような男が何故ここに…！」
「言う必要があるのか？」

刹那、神崎君から放たれた圧倒的な殺気に、ライザー君は戦慄の表情を見せる。いや、彼だけじゃない。きつと今の僕も彼と同じ顔をしているだろう。

何故なら、神崎君の放った殺気…それは、かつて僕が“彼”から向けられたものと酷似していたのだから。

——この婚約を認めるわけにはいかない。

神崎君は何も言っていない。けれど、言葉にしなくても、その殺気が、ここにいる全員にそう受け取らせた。

…そろそろ動かないとな。

信じられないが、神崎君の実力は、おそらくライザー君を上回っている。このままでは最悪の展開になるかもしれない。そう危惧した僕は努めて冷静に二人に近づいた。

「待っていたよ、神崎君」

最初からその予定だったかのように声をかけると、神崎君が僕の方へ顔を向ける。…一瞬だけ目を見開いたのは僕の見間違いだろうか。

「キミの事はリーアから聞いているよ。人間の身でありながら、かなりの実力を秘めているとね」

「サ、サーゼクス様!?　あなたがこの人間を呼んだのですか!？」

「そうだよ。リーアから彼の事を聞いて興味湧いてね。そこでだ、ライザー君。どうだろう、この子…神崎君と手合わせしてみないかい？」

「なっ!? 何故私が人間など?!」

「リーアの夫となる者の力を、集まったみんなに見せてあげたくてね。…で、どうだろうか?」

「…それがご命令なのでしたら」

渋々ながら頷くライザー君。

「ならば早速準備をしよう。…そうそう、ライザー君。キミの眷属も全員参加させてくれ」

「全員ですと!? サーゼクス様! この私が人間ごときに後れを取るとでも思っておられるのですか!?!」

「いや、そんなつもりでは無いよ。けれど、もし、僕のこの予想が現実となるのなら、あるいは…。とにかく、これも命令だ」

「ぐっ…!」

「神崎君もそれでいいかな?」

「…はい」

両者が納得した所で、僕は早速準備を命じた。急遽バトルフィールドが用意され、会場には超大型モニターが出現した。フィールドの中央。眷属にフォーメーションを組ませるライザー君と、ただ一人、その様子を見つめる神崎君。

(さあ…いよいよだな)

神崎君…キミの力、見せてもらうよ。

サーゼクスSIDE OUT

イツセイSIDE

俺…いや、会場の全ての悪魔達が見守る中、神崎先輩とライザーの勝負が始まるうとしていた。ライザー側は、俺達と勝負した時と同じフルメンバー。対する先輩はたった一人、普通に考えたら勝負にはならない。

「何でだろうね。先輩が負ける姿が全く想像出来ないよ」

「私です」

木場と小猫ちゃんの言葉に俺も頷く。

「そうですね。もし負けたら…私がキツイお仕置きでも」

げっ！ 朱乃さんがドSモードになってる！ 先輩！ 勝つてく
ださいよ！ じゃないと下手したら俺にまでとぼつちりが…！

『くそ、何故俺があんな人間の相手など…！』

モニターの向こうで、ライザーが忌々し気に吐き捨てる。うーん。
イラついてるアイツの顔見ると気分がいいや。

『そもそも、貴様は何者だ！ 俺のリアスとどうい関係だ！』

まだお前のじゃねえよ！ 心の中でツッコむ俺。

『彼女は大切な友人だ』

クールに答える先輩。それから逆にライザーに向かって質問した。
『聞かせて欲しい。あなたは何故グレモリーさんとの婚約にそこまで
こだわる？』

『ふん、下等な人間などに語った所で理解など出来るはずもないが、い
いだろう。いいか、俺とリアスは共に純血悪魔と呼ばれる存在だ。先
の大戦で純血悪魔はその数を半数以下に減らした。だからこそ、純血
悪魔の血を途絶えさせない為に、俺達が夫婦となるのは必要な事な
だ』

『ならば、あなたにとってグレモリーさんは純血としての価値しかな
いと？』

『まさか！ あれほどの美貌と肢体だぞ！ さぞや俺を楽しませてく
れるだろうさ！ はは、今から夜が待ちきれないくらいだ！』

…最低だな、アイツ。本人も家族も聞いているのによくあんな事が言
えるもんだ。何か女性悪魔達も気分を害しているみたいだった。

『…違う』

『なに？』

『違う。違うぞ。グレモリーさんの価値はそんなものじゃない』

静かに反論する神崎先輩。…俺にはわかる。今、あの人は怒ってい
る。しかも、爆発一歩手前くらいの所まで。

『ならば、貴様の言うリアスの価値とは何だ？』

『…彼女は、グレモリーさんは…とても誇り高い女性だ』

『あの人間は何を言い出すんだ？』

「ちよつと、黙っててくれるかしら」

神崎先輩の言葉に、会場内から戸惑いの声があがった。そのほとんどが男性悪魔の声だったが、すぐに女性悪魔達がそれを制する。

『周りの期待に応えようといつも一生懸命で、学園ではお姉様と呼ばれて多くの生徒に慕われている。いつも優雅で大人びた様子だが、不満な時には頬を膨らます等、年相応の反応を見せてくれる時がある』
「ほお、紅髪の滅殺姫と呼ばれている妹君にそんな一面があるとはな」
「ふふ、やっぱり女の子ですね」

先程とは違い、会場に笑い声が響き渡る。何だか、みんな少しずつ先輩の話に夢中になっていっている様子だった。

『そして、何よりも、彼女はとても優しい。俺は…そんな彼女の優しさに救われた。そんな彼女と友人になれた事を…俺は心から誇りに思う』

…すげえよ、先輩。よくもそんなセリフを臆面も無く言えるもんだ。しかも、普段より熱の籠った口調と笑顔のセットで。聞いてるこっちが赤面ものだけ。

現に、会場の女性悪魔達が皆等しく顔を赤らめている。…あ、よく見たらライザーの眷属の子達もだ。で、肝心の部長はと言うと…。

「あ…あう…」

言葉が出ないのか、口を金魚のようにパクパクさせている。顔なんか赤を通り越して紅色になっている。

『あいにくだが、純血悪魔という物の価値は俺にはわからない。だが、彼女の価値が外見にしかないような風と言うあなたの言葉は認められない。そんな物は、彼女を構成する一部でしか無い。それを含めたグレモリーさんの全て。それこそが真に彼女の持つ魅力だと俺は思っている』

決定的な言葉だった。グレモリー家との繋がりと部長の体だけを求めるライザーと、部長の全てが魅力的なのだと言う先輩。どちらがより部長を想っているかなど、一目瞭然だった。

『え、ええい！ 黙れ黙れ黙れ！ 黙って聞いていればくだらない事をグダグダしゃべりやがって！ 話は終わりだ！ お前達！ やつてしまえ！』

ライザーが眷属達に指示を出す。けれど、それに応えた者は一人と
していなかった。

『おい、どうしたお前達！ 早くあの人間を殺…』

『お断りしますわ』

その中から、金髪縦ロールの女の子が一步前に出る。あの子…確か
ライザーの妹のレイヴェルだったっけ？

『ど、どういう事だ、レイヴェル？』

『お兄様。私達全員、あのお方とは戦うつもりはありません』

『な、何故だ!?!』

慌てるライザーに、レイヴェルは冷たい目で答える

『…わからないのならそれで構いません。そもそも、私達はあのゲー
ムの最後に不満を持っていきますの。確かにお兄様の判断は正しかつ
たのかもしれない。ですが、最後まで誇りを持って戦おうとしたり
アス様に対してのあの所業、正直言って私はあなたを軽蔑します』

そう言って、レイヴェルは神崎先輩の方へと顔を向けた。ライザー
に向けたものとは百八十度違う優しい表情で。

『神崎様…でよろしいかしら？ お聞きになられていたとは思いますが、この勝負、私達は手出しをしません。ですから私達の事は気にせ
ずに戦ってください』

レイヴェルの言葉に従うように、他の女の子達も武器を下ろしたり
構えを解いたりした。

『ッ！ もういいい！ ならばお前達はさがっている！ こうなれば俺
自らの手でこいつを…!』

ライザーが先輩に向かって手をかぎそうとしたその瞬間、ライザー
の体が宙を舞った。

『ぐばっ!?!』

受け身も取れず地面に転がるライザーに、先輩が殴り飛ばした格好
そのままに言い放った。

『悪いが…本気で行かせてもらおうぞ』

…あばよ、ライザー。骨は拾ってやるからな。

モニター越しに見る先輩のマジ顔に震えつつ、俺は手を合わせたの

だ
っ
た。
。

第二十話 おや？騎士（笑）の様子が・・・

ちーっす！ 騎士（笑）がお祝いに来ましたー！ …なんてノリで行こうとした俺はすぐに己の置かれた状況を理解した。

冗談のように広い部屋で、スーツやドレスを纏ったたくさんの人達がみんな揃って俺の方を見つめている。ええつと…もしかしなくても、もう始まってました？ しかも、割と大事な場面で乱入しちゃいました？

や、やっべえ、どうしよう。と、とりあえず、知り合いを探してサツと合流しよう。視線を動かすと、真正面に赤いドレスを纏ったグレモリーさんの姿が確認出来た。綺麗だなー。今日の主役だもんなー。・・・やっぱりその前に主役に謝った方がいいよな。

「すまない、グレモリーさん。少々遅れてしまったようだ」

「神…ぎ…」

おい、泣いちやったよあの子!? え、もしかして、俺がお祝いに来たのがそんなに嬉しかったの？ だとしたら俺も嬉しいんですけど。

内心喜んでいた俺の周りが突如騒がしくなる。

「人間だど!? 何故そんな者がこの場所に!?!」

「招待状を持っているという事は、正式な参加者なのか?」

「馬鹿な！ 人間などがこの席に呼ばれるはずが無かろう!」

なんか、あまり歓迎されてない？ まあそりゃそうか。遅刻したしな。でも悪いのは俺だけじゃないと思うんですけどね。

「何をしている！ さっさとつまみ出せ!」

うわーい、フェニックスさんがカム着火インフェルノオオオウウ状態だ。いや、うわーいじゃねえよ。あの、一応俺、招待された身分なんですけど。

「で、ですが、招待状を持って…」

「知るか！ 人間ごときにこのめでたい場を汚されてたまるか！ 早くしろ!」

なんか槍を持った兵士みたいな人達が俺を取り囲んで来た。ステイステイステイ！ 悪魔のパーターって遅刻しただけで槍向けら

れんの!?

「うおおおおおおお!!」

かと思つたら、聞き覚えのある雄叫びと共にその内の一人が勢いよく飛んで行く。声の主の正体と兵士の人をぶつ飛ばした主の正体は同一人物・・・即ち兵藤君だった。彼は『赤龍帝の籠手』を装備した状態で、俺に向かつて笑顔を向けて来た。

「先輩・・・待ってましたよ!」

いや、何ぶつ飛ばしちやってんの!? キミそんなキャラだったわけ!? ああほら、兵士の皆さんの視線がめっちゃ厳しくなっちゃったぞ!

「貴様・・・邪魔をするか!」

別の兵士が兵藤君に跳びかかる。けど、その槍は横から現れた木場君の剣によつて防がれる。

「ふふ、ずいぶんと遅いご到着ですね、先輩」

「けど・・・!」

「ええ。信じてましたよ、神崎君。あなたなら、きつとリアスを助けに来ると!」

塔城さんと姫島さんまでもが俺の前に立つ。え、何この状況? それと姫島さん、グレモリーさんを助けにっつてどういう事? 何か困った事でも起きたの?

「おらあ! 道をあげやがれ! 先輩の邪魔をするヤツは、俺が相手してやる! 『赤龍帝の籠手』にぶん殴りたいヤツはかかって来やがれえ!」

「ついでに、僕の剣と!」

「私の拳・・・!」

「さらに、私の雷もセットでお付けしますわよ!」

おい、いいいいいい! マジでどうなってるのお!? 四人とも殺る気満々で戦闘態勢に入ってるんですけどお!? しかも何か俺が指示してるみたいになってるし!! 違うよ、グレモリーさん! 俺はこんな事命令してないよ!?

「先輩! ...ここは俺達に任せてください! 部長が待ってますよ!」

そ、そうか、直々に言い訳させてくれるってわけだな。…って、あれ？　そもそも原因って兵藤君じゃ…。

「…わかった」

え、ええい。気にしても仕方無い。逝く…じゃない。行くぞ！　頭の中で必死に言い訳を考えながらグレモリーさんに向かって歩き出す。なんか周りからの視線を凄じい感じるけど、ここは我慢しないと。あ、真剣さをアピールする為に真面目な顔をしておこうか。

グレモリーさんの前まであと少しという所で、俺の前にフェニックスさんが立ちはだかった。

「貴様あ！　何者だ！　貴様のような男が何故ここに…！」
「言う必要があるのか？」

友人の婚約パーティーに来る理由なんて、お祝いする以外の目的なんて無いでしょ？　そう言うと、フェニックスさんが顔を青ざめた。ははーん、自分の質問が当たり前過ぎる事に気付いて恥ずかしくなっただんですね？　けど、恥ずかしさで顔を赤じゃなくて青にするなんて珍しい人だな。

それはさておき、グレモリーさんと同じでこの人も今日の主役だ、きちんと謝罪しないと。そう思って俺が頭を下げようとした時…その人が現れた。

「待っていたよ、神崎君」

ツ!!　こ、このイケボイスはまさか…!!　恐る恐る声のした方へ振り向くと、そこには、あの赤ドラゴンとの戦いで見かけた紅い髪のイケメンが立っていた。

何故千年前の人がここに!?　…なんてな。グレモリーさんから聞いているぞ。悪魔って特定の年齢を越えたら容姿を自由に変えられるってな。…あれ、という事はこのイケメン実はお爺さ…いや、止めとくか。口にしたら色々まずそうだし。

「キミの事はリーアから聞いているよ。人間の身でありながら、かなりの実力を秘めているとね」

リーア？　誰ですかそれ？　俺の周りにそんな名前の人いないんですけど。首を傾げる俺の前でフェニックスさんが目を見開く。

「サ、サーゼクス様?!? あなたがこの人間を呼んだのですか?!?」

あ、そうだそうだ。サーゼクスだこの人の名前。ゲームの時から妙にひっかかっていたものがようやく取れたよ。

「そうだよ。リーアから彼の事を聞いて興味が湧いてね。そこでだ、ライザー君。どうだろう、この子…神崎君と手合わせしてみないかい?」

「なっ!? 何故私が人間など?!?」

「リーアの夫となる者の力を、集まったみんなに見せてあげたくてね。…で、どうだろう?」

「…それがご命令なのでしたら」

「ならば早速準備をしよう。…そうそう、ライザー君。キミの眷属も全員参加させてくれ」

「全員ですと?!? サーゼクス様! この私が人間ごときに後れを取るとでも思っておられるのですか!?!」

「いや、そんなつもりでは無いよ。けれど、もし、僕のこの予想が現実となるのなら、あるいは…。とにかく、これも命令だ」

「ぐっ…!」

「神崎君もそれでいいかな?」

…え? すみません、リーアさんの事考えてて聞いてませんでした。ま、いいか、とりあえずうんって言つところ。

「…はい」

もしこの時に戻れたのなら、俺は軽はずみな返事をした過去の自分に飛び蹴りを食らわせていただろう。

大勢の人が慌ただしく動き始める。俺とフェニックスさん。そして、フェニックスさんの眷属の子達が同じ場所に並べられた。

「では、これからキミ達をバトルフィールドへ送る。まずはライザー君達だ」

フェニックスさん達の姿が光に包まれる。そうして、イケメン…いかげん名前で呼ぶか。サーゼクスさんが俺の方を向く。

「神崎君。これは魔王では無く、私個人としての願いだ。…どうか、キミの全力を見せてくれ」

へー、この人が魔王だったんだー。魔王…魔王…ファツ!?

驚愕する俺の体を光が包む。次の瞬間、俺は広大なフィールドの中心でフェニックスさんと向き合っていた。

「くそ、何故俺があんな人間の相手など…!」

フェニックスさんが睨んで来るが、今の俺はそれどころじゃなかった。やべえよ。俺、魔王様をイケメン呼ばわりしたり、呪詛向けたり、やりたい放題じゃん! 絶対怒ってるよあの人! さっきも声は優しかったけど顔はマジだったし!

『———どうか、キミの全力を見せてくれ(手え抜いたらわかってんだろうなあ? あーん?)』

俺にはそんな副音声が届きました! 誰か、魔王を怒らせた時に許してもらえる方法を教えてください!

「処刑だろ」

「拷問ね」

「オワタ」

悲惨な未来しか浮かばねえ! しかも、フェニックスさんって不死なんだろ? スパロボで言う無限回復状態なんでしょ? そんなチート相手にどうしろっていうんですか!?

「そもそも、貴様は何者だ! 俺のリアスとどう関係だ!」

フェニックスさんがそう聞いて来る。しかし声でかいなこの人。

「彼女は大切な友人だ」

俺の答えにフン! と鼻息を鳴らすフェニックスさん。婚約者に悪い虫がついて無いか気になってるのか? 心配性だな。それだけグレモリーさんの事を想ってるって事でいいのか?

「聞かせて欲しい。あなたは何故グレモリーさんとの婚約にそこまでこだわる?」

そんな彼を見てついそんな事を尋ねてしまう。すると、フェニックスさんはドヤ顔で俺の質問に答えてくれた。

「ふん、下等な人間などに語った所で理解など出来るはずもないが、いいだろう。いいか、俺とリアスは共に純血悪魔と呼ばれる存在だ。先の大戦で純血悪魔はその数を半数以下に減らした。だからこそ、純血

悪魔の血を途絶えさせない為に、俺達が夫婦となるのは必要な事なのだ」

へー。…でも、それなら別にグレモリーさんじゃなくてもよくね？
いくらなんでも女性の純血悪魔がグレモリーさんだけじゃなくってわけじゃないだろうし。

「ならば、あなたにとってグレモリーさんは純血としての価値しかないと？」

「まさか！ あれほどの美貌と肢体だぞ！ さぞや俺を楽しませてくれるだろうさ！ はは、今から夜が待ちきれないくらいだ！」

いつそ清々しいくらいの答えありがとうございます。でもなあ…。
確かに、グレモリーさんは凄く綺麗な女の子だけど、他にも魅力的な所はたくさんありますよ？

というわけで、俺はグレモリーさんのいい所を、思いつくだけ説明してみた。なんか、途中からフェニックスさんの眷属の子達の顔が赤くなって来たけど…。あまりに熱心に説明したせいでストーリーカーが何かと勘違いされたかも。今にも「この女の敵！」「誰か通報して！」なんて言われそうな気がしてなりません。

「え、ええい！ 黙れ黙れ黙れ！ 黙って聞いていれくださいらない事をグダグダしゃべりやがって！ 話は終わりだ！ お前達！ やつてしまえ！」

あるえっ!? あなたの為に説明したのに何で怒るんですか!? は、ひよつとして、さっきの発言は照れ隠しだったとか？ なのに空気読まずに真面目に語り出した俺が許せないって事？

だが、フェニックスさんの命令を受けたはずの眷属の子達は一向に襲い掛かってこなかった。それに戸惑う彼の前に、金髪ドリルヘアの女の子が出て何やら話していた。かと思えば、俺の方へ顔を向けて柔らかな微笑を浮かべる。

「神崎様…でよろしいかしら？ お聞きになられたとは思いますが、この勝負、私達は手出しをしません。ですから私達の事は気にせず戦ってください」

あら、いつの間にそんな話に？ けどまあ、俺としては大歓迎です

よ？ 集団リンチとかマジ勘弁だからね。

：そんじゃ、いいかげん覚悟決めますか。どうせ結末はフェニックスさんの勝ちで終わるんだろうし、精々それっぽくやってやるよ。

手を向けて来るフェニックスさん：いや、フェニックスの懐に飛び込む。そして勢いのまま、鳩尾に向かって右拳を突き刺す！

「ぐばっ!？」

地面を転がるフェニックスに向かって、俺は自分に言い聞かせるように言い放った。

「悪いが…本気で行かせてもらおうぞ」

じゃないと、あの魔王様に何されるかわからないからね!!

「に、人間が…人間ごときがこの俺をおおおおお!!」

フェニックスが怒りの形相で腕を振るう。瞬間、俺の周りを巨大な炎の壁が取り囲んだ。

「ははは！ そのまま骨まで燃え尽きろお！」

勝ち誇っている所悪いが、アルⅡヴァン先生相手にこの程度の炎が通用するなんて思うなよ。俺は迫り来る炎…その先に立つフェニックスに向かってゆつくり歩き始めた。徐々に、徐々にスピードを上げていく。再現するのは、某ドリルアニメの最終局面で見せたダツシユからの全力パンチ！

「なにいつ!？」

炎から飛び出て来る俺に驚愕するフェニックス。その顔面に向かって振りかぶった拳を叩きつける！ 食らえ！ 合宿のおかげで俺の騎士力だってパワーアップしてるんだ！ “リョク” じゃなくて“チカラ” って読むのがポイントです！

ゴキイツ！ という鈍い音がフィールドの中に響き渡った。うへ、やっぱり人殴るのって気分良くないな。あ？ 教会の変態共は遠慮なくぶっ飛ばしてたろって？ だってあいつら人間じゃなくて変態じゃん。

しっかし、妙に熱いなあ。…と思つてたら、制服が燃えてました。しかも結構激しく。こりやもう駄目だな。そう判断して、俺はボロボロになった上着を脱ぎ捨てた。

「きゃっ!?!」

さっきのドリルヘアーの子が短い悲鳴を上げる。しまった。勢い良く引つ張った所為で中のシャツまで破いてしまい、上半身裸になってしまった。ゴメンねー、見苦しい物見せちゃって。一応、アルⅡヴァン先生の体を三段腹なんてみつともない物にしないように筋トレとかは欠かして無いんだけどな。…そんな問題じゃないか。

「お、おのれえ…！一度ならず二度までも、この俺を殴るなど！」
ホントすみませんね。けど、こっちも魔王様のご期待に応えないとマズインです。無敵なんですからちよつとくらい勘弁してくださいよ。

『あの子、厄介やな』

あ、オカン。もしかして見てたんですか？

『当然や。アンタの一世一代の大勝負なんやからな。…で、どうするつもりや?』

んー…ここはいよいよスタイリッシュ指パッチン攻撃を…。

『そんな回りくどい事せんでも、あの姿になればええやん』

ラフト克蘭ズの事ですか？ 駄目ですよ！ たくさんの悪魔の人達が見てるんですよ!?! その前であの姿になったら大恥かく…。

——いつまで過去を引きずるつもりだ？

俺の頭に、オカンじゃない別の誰かの声が響き渡った。厳しくも優しい声色のそれは、俺にある人物の顔を思い浮かばせる。

——それが私の力を受け継いだ者の覚悟なのか？

ツ!?! あ、あなたはまさか…先生!?! アルⅡヴァン先生ですか!?!

——誰であろうと過去は変えられない。ならば、それを受け入れ、己が糧とするしか無い。お前になら出来る。私の力を…私の剣を受け継いだお前ならば。

過去は変えられない…。そうだ、あの赤ドラゴンとの戦いにはもう戻れない。俺の黒歴史はもう消せない。既に終わった事を否定する事に何の意味があるのだろうか？

わかってた。アルⅡヴァンモードを発動させる度に悶えていたら

いつまで経っても俺は成長出来ないって。二十四にもなつて中二病から抜け出せないなんて情けないっていいわけをいつまでもグズグズ言っても何の意味も無いって。

けど、それが俺なんだ！ テンション上がればはっちゃけて、この年でも中二病なのが俺なんだ！ それこそが俺、神崎亮真なんだ！

——ならば答えよ神崎亮真！ 貴様は何者だ！

今なら胸を張って言える。俺が…俺こそが、騎士（笑）だ！

——上出来だ。ならば騎士、神崎亮真よ！ お前の剣で、あの不死鳥をヴォーダの闇へと帰してみせろ!!

その言葉を最後に、アルⅡヴァン先生の声は聞こえなくなった。…感謝します、先生。俺はやっと過去を受け入れる事が出来ました。

「…フェニックス」

「ッ…！」

「不死であるあなたを倒す事は叶わないかもしれない。だが、俺を見守っている人の為にも、最後まであがかせてもらおう！」

アルⅡヴァンモード。そして…ラフトクランズモードを発動させた俺の体を、どこまでも蒼き鋼の鎧が覆い尽くす。

「そ、その姿は…!？」

さあ…始めよう、フェニックス。最早…俺の辞書に自重という言葉は無い！

S I D E O U T

サーゼクスSIDE

「は、はは、はははははは!!」

笑い声が止まらない。なんという、なんという事だ！ まさか、まさか、あの少年が本当に「彼」だったとは！

何故人間が千年の時を越えられたのか、何故リアの友となつていたのか、今はそんな事はどうでもいい。重要なのは、「彼」が再び僕達の前に現れたという事だ！

「う、嘘…。フューリーさん？ 本当にフューリーさんなの!？」

セラフオルーが発した、愕然という言葉すら生温いほどの声に、会

場内が一気に騒がしくなる。

「フューリー？ …ツ、フューリーだと!? 二天龍との戦いで三陣営を救ったあの伝説の騎士か!」

「馬鹿な！ ありえん！ その正体が人間だったなど！」

「そ、そうだ！ あれはただの真似じゃないのか!」

「ただの人間がああ存在を知っているはずが無い！ ならば…やはりあの少年がフューリーその者だという事にほかならない！」

「うーむ、レヴィアタン様のお作りになられた特撮物の彼とは少し違う所があるようだが…」

誰もが神崎君の姿に目を奪われる。全身を包む蒼き鎧、背中から吹き出す青い炎。そして…腰に下げる剣。その全てがかつての彼…フューリーと同じだった。

『不死であるあなたを倒す事は叶わないかもしれない。だが、俺を見守っている人の為にも、最後まであがかせてもらおう!』

そして、強大な相手を前に、決して諦めないその気高い心も、あの時と変わっていなかった。

第二十一話 蘇る伝説

イツセーSIDE

俺達が見守る先で、神崎先輩が変身した。…何言ってるかわからないって？ 安心しろ、俺も何が起こったのか理解できてない。

なんて例えたらいいんだろうな。うーん…。強いて言えば、ロボットのかな？ アニメに出るロボットがそのまま鎧みたいになって神崎先輩の全身を覆っている。

『不死であるあなたを倒す事は叶わないかもしれない。だが、俺を見守っている人の為にも、最後まであがかせてもらう！』

モニター越しなのに、先輩の気迫が俺に伝わって来た。なんかもう、カツコ良すぎて逆に何も言えねえや。

…あれ、そういえばドライグが急に黙ってしまった。さっきまで神崎先輩の戦いに感心したようにしゃべってたのに。

おい、どうしたんだよドライグ？

——尻尾く尻尾く。俺の尻尾が宙を舞うく。流血く流血く。流れる血は止まらないく。

マジでどうしたドライグ!?

ゾクリとするくらいおどろおどろしいドライグの歌声が俺の頭に響いた。

——翼く翼く。白の翼に穴が開くく。俺の炎も何のそのく。蒼いアイツにや敵わないく。止めて！ 俺のライフはゼロよお！

ドライグ!?! ドライグ!?! しっかりしろ！ そんなんお前のキャラじゃねえだろ！

——オデノカラダハボドボドダく！ ウソダドンドコドーン！

ド、ドライグが…壊れちゃった。誰か医者を、ドラゴンが診れるお医者様を呼んでくださいいいいいいい!!

イツセーSIDE OUT

IN SIDE

…なんだ、どこからかマダオの泣き声が聞こえて来た気がするんだ

が。空耳か？

「え、ええい！ そんな虚仮威しで俺がビビると思ってるのか！」

「虚仮威しかどうか、その身で確かめるがいい」

「こちとら騎士ですよ？ ラフト克蘭ズですよ？ あんまり舐めてたら怪我しますぞ？ まあ、無敵なあなたには言っても意味無いかもしれないけどね。」

「けどまあ、これはチャンスだ。どうせ何をしても効かないのなら、精々胸を貸してもらおう。フェニックス…あなたには俺の糧（練習相手）になつてもらおうぞ！」

左腰にマウントされていたクローシールドを腕に装着し、先端を展開させる。まずはこれ…オルゴンクローを受けてもらおうか。

あ、ついでにオルゴン・クラウドも使ってみるか。

発動させた瞬間、俺の姿がその場から消える。

「ッ!? 消え…」

俺の前に、驚愕するフェニックスの背中がある。これぞオルゴン・クラウドの効果の一つである空間跳躍！ さあ、受けるがいい。これが真正正銘の騎士の一撃だ！

「何処を見ている」

「!!」

お決まりのセリフを口にしながら、フェニックスに向かってクローを振り降ろす。刹那、彼の上半身が跡形も無く消し飛んだ。おおー！

なんとという威力だ！ 流石ラフト克蘭ズ！

「けど大丈夫。なんとって彼は無敵なんだ。ほら、少し立てばすぐに元通りに…元通りに…ならないんですけど？ あれ、おかしいな。確か前回のゲームだとももの数秒で復活してた気がするんだけど。」

「なんて思っていたら、フェニックスの上半身があった部分に炎が出現し、それが消えるとそこには元の彼の姿があった。スパロボじゃ無限回復するヤツってのはイベントが発生しないと倒せないようになってるけど、これはスパロボじゃないし、イベントなんて起こらない。こりゃあ、やっぱり勝つのは無理だなー。」

「はあっ…！ はあっ…！ き、貴様…何だそのデタラメな威力は!？」

いやあ、褒めないでくださいよ。てかそれに耐えるあなたの方がデタラメですよ。なんか、フルマラソンでもこなしたみたいに息が荒いんですけど、どうかしたんですか？

「そ、そうか…わかったぞ！ 神器だな！ しかも神滅具クラスの！ おのれ、赤龍帝のガキといい貴様といい、何故こうも俺の前に立ちはだかるのだ！」

神器？ 神滅具？ これはただのラフトクランズですよ？ なんか勝手に納得した様子のフェニックスを眺めながら、俺はクローを仕舞い、ソードライフルを手にした。

はい、それじゃあ次の攻撃行きますよ。俺はソードライフルをライフルモードに展開させ、フェニックスに向かって引き金を引いた。

「うおおおおおおおおおおおお?!?!」

相も変わらずな極太加減^{!!}で迫るエネルギー波を、フェニックスが必死の体で回避する。ただ、完全に避け切れなかった所為で、右腕が飲み込まれてた。掠っただけでこの威力ってやっぱりちよつとおかしいよね。けど、それがラフトクランズクオリティ！

「ぐうっ！ お、おのれおのれおのれええええええええええ!!!!」

あ、やべ、完全にキレちゃったよあの人。ゲームの最後で兵藤君に向けたのと同じくらい…いや、それ以上の超巨大な炎の塊が俺に迫る。しかし甘い。ラフトクランズにはこれがあるのだ！

「ば、馬鹿な。俺の最大火力を放ったというのに」

呆然としたフェニックスの眼前で、バリアに阻まれた炎が左右へ散って行く。ほ、よかった。彼の炎の威力は1200以下みたいだな。じゃないと今頃はバリア貫通されてたぞ。

「さて、反撃させてもらおうか」

ライフルからソードに変形させ、それを構える。そんな俺を見てフェニックスが酷く狼狽した様子で口を開いた。

「な、何なんだ！ 何なんだよお前はあ！ 俺はフェニックスだぞ！

この婚約には悪魔の未来がかかっているんだぞ！ 人間であるお前に何の関係があるというのだ！」

急にどうしたんだこの人？ 婚約の話は関係無いだろう。

「フェニックスも婚約も悪魔も関係無い。俺はただ…あなたを斬るだけだ」

今は俺とあなたの勝負の時間でしか無い。…あれ、そもそも何で俺この人と戦う事になったんだっけ？ …まあいいや、そんなじゃ次はソードの感触を確かめさせてもらおうかな。ついでに魂もセットで。脳内パネルから魂を使用。同時に、オルゴンソードの刀身を青白い光が包みこんだ。…なんでかな、無性に「魂iiiiiiiiii!!」って叫びたくなってしまった。

S I D E O U T

サーゼクス S I D E

モニターから目が離せない。僕だけじゃない。今この場で彼の戦いを見ていない者は一人として存在していない。父も母も、グレイファイアも、ライザー君のご両親も、セラフォルも、リアも、リアの眷属の子達も、貴族達も、圧倒的という言葉すら生温い一方的な蹂躪の光景に目を奪われていた。

不死と呼ばれるフェニックスだが、弱点が無いわけではない。圧倒的な力で押し潰すか、精神的に追い込んで倒すか。方法は二種類だ。

現にライザー君はフューリー…神崎君の腕に装着された剛爪の一撃を受け、精神に大きなダメージを負ってしまったみたいだ。一撃…そう、たった一撃でライザー君は追い込まれていた。

『な、何なんだ！…何なんだよお前はあ！俺はフェニックスだぞ！この婚約には悪魔の未来がかかっているんだぞ！人間であるお前に何の関係があるというのだ！』

最早完全に余裕を失ったライザー君の叫びに、神崎君は淡々と答える。

『フェニックスも婚約も悪魔も関係無い。俺はただ…あなたを斬るだけだ』

…ああ、そうだ。まさしく彼には関係の無い話だ。フェニックス家も婚約も悪魔の未来も、人間である彼を止める理由にはならない。彼はただリアを…彼の大切な友人を取り戻しに来ただけなのだから。

キミは幸せだね、リアア。こんなにも自分の事を思ってくれている友人を持てて。願わくは、僕も彼とそんな関係を築ける事を祈ろう。

そんな事を考えている間にも、神崎君は剣を構える。その剣を青白いオーラが包む。一目見ただけで、それが危険な光だと本能が理解した。はは、魔王である僕の背筋を凍らせるなんて、キミはどこまで驚かせてくれるんだ、神崎君。

『う、うああああああああ!!!』

錯乱するライザー君に向かって、神崎君は背中への噴射口から激しい光を出しながら突撃。そして、その無慈悲な一撃を振り降ろした。かつて、ドライブの尾を紙屑のように斬り飛ばしたあの剣の一撃に、若い悪魔である彼が耐えられるはずも無かった。

これ以上は…やる必要も無いだろう。今のでライザー君の心は完全に折れた。

「そこまで。この勝負…神崎君の勝ちとする」

僕の宣言が、無言に包まれる会場内に響き渡った。

サーゼクスSIDE OUT

IN SIDE

なんか、気付いたら勝ってしまった。…どういう事？ フェニックスさんが勝つ事が決まっていたんじゃないの？

ラフトクランズモードを解除した俺は会場に戻された。もうね、みんなからの視線が酷い。だがしかし！俺は全てを受け入れた！最早羞恥心に苛まれる事は無いのだよ！

「見事だったよ、神崎君」

魔王様からのお褒めの言葉頂きました！よかった…これでまた一つ、絶望の未来を回避する事が出来た！協力してくれたフェニックスさんには感謝感謝だ。

「これでキミを止める者はいない。リアア…リアスを連れて行きなさい」

え、リアアってグレモリーさんの事だったの？ いや、それよりも

連れて行けってどういう事？ 何で花嫁を奪う間男扱いになつてんの俺？

「さあ…」

魔王様の微笑みという名のプレッシャーに押され、俺はおずおずとグレモリーさんの前に立つ。…もういいや。ここまで来たら最後まで騎士（笑）らしく振る舞ってやろうじゃないか。

「…お迎えにありがとうございました、姫」

気障つたらしいセリフと共に、アルⅡヴァン先生の知識から騎士の儀礼を引つ張り出し、グレモリーさんの前に跪く。あはは、急にこんなわけわからない事言われたらグレモリーさんだって戸惑う…。

「神崎君…。あなたは…あなたは…」

かと思つたら、何か涙声で抱きついて来ましたよこの子！ え、もしかして、俺の騎士（笑）ごっこに乗ってくれたの？ 最近、彼女の半分は優しきで出来ると本気で思うようになってたんだけど、これはもう確定的だね。

けどさ、冷静になつてみると、これ後で絶対怒られるよね。パーティーに遅刻して、主役の面目丸潰れにして、最後の最後に騎士（笑）ごっこで…。いや、まあ後半は魔王様の所為でもあるから、もし謝罪しないといけないのならあの人も一緒だと思っただけ、そこらへんどうなんですかね？

「神崎君…」

何？ と言おうとした俺の口を柔らかな何かが塞ぐ。目の前にはグレモリーさん。塞いでいるのは彼女の唇。

「騎士様へのご褒美と…私の気持ちよ。本当に…本当にありがとう、神崎君！」

…え、もしかして俺、キスされたの？ 俺が、こんな綺麗な子と？

いやいや、ありえん。夢か、夢なんだな！

「先輩！ 部長！」

声を弾ませ、嬉しそうな顔で駆け寄って来る兵藤君達を尻目に、俺は自分の身に起こった事が信じられず、混乱していた。

こうして、予想外の出来事のオンパレードだった婚約パーティーは

終了したのだった。

第二十二話 再会

いやあ、婚約パーティーは台無しでしたね。…主に俺の所為で。あの後…フェニックスさんとの戦いを終えた俺に魔王様が言った。ついでに、上半身裸だった俺の為にカツコイイ服を貸してくれた。サーゼクスさんマジ魔王。

「近い内に、改めて話の場を設けさせてもらおうよ。キミの周りはこちら色々大変な事になりそうだからね」

「て事は帰っていいんですね？ そう判断した俺だけど、その前にせめて両家の親御さんに謝った方がいいよな。というわけで、俺はグレモリーさんにご両親がどこにいるか聞いた。」

「グレモリーさん。キミのご両親はどちらに？」

「え？ あ、えつと…あそこよ」

「教えてもらった先には、いかにも厳格そうなオジサマと、グレモリーさんにとてもよく似た似た女性の姿があった。んじゃあ、行きますか。…今の内に最終兵器の封印を解いておこう。」

「何をやる気なの？」

「いや、ご挨拶（という名の謝罪）をしておこうと思ってるな」

「え、そ、それって…！」

「おろ？ なして顔を赤らめるのグレモリーさん？ ま、いいか。彼女をその場に残し、俺はご両親の元へ向かった。」

「初めまして、神崎亮真といます。グレモリーさんとは普段から仲良くさせてもらっています」

「あ、ああ…」

「ご、これはどうもご丁寧に…」

「おうふ、顔が引き攣ってる。間違い無く怒ってるよ。けど仕方ないよな。それだけの事をしちやっただし。」

「今回の件の責任は全て俺にあります。ですからグレモリーさんを責める事だけは止めて頂けるよう、切に願います」

「もし俺の所為で親子の仲が悪くなったりしてしまったら、俺は一生自分を許せないだろう。既に親のいない俺だからこそ、親子の大切さ」

は痛いほど理解しているから。

「フューリー…いや、フューリー殿…」

とそこへ、別のダンディーなオジサマが近付いて来た。彼の隣には先程の金髪ドリルヘアの子の姿もある。

「あなたは？」

「私はライザーの父だ。貴殿には感謝している。今回の件で息子も学んだろう。フェニックスの力は、決して絶対ではないという事を」

あれ、謝ろうと思ったら感謝されちゃったよ。よくわからんけど、何か嬉しそうだし、わざわざツッコむ事も無いか。

「あ、あの…」

ドリルっ子が躊躇いがちな様子で声をかけて来た。頬が赤いけど、もしかしてさっきのフェニックスさんの炎の熱がまだ残ってるのかな？

「あ、改めてご挨拶させていただきます。ライザー・フェニックスの妹のレイヴェル・フェニックスと申します。ま、まさか、伝説の騎士様とお会いできるとは思ってもみませんでしたわ」

レイヴェルさんかー。こうして改めて見ると、いかにもお嬢様って感じの子だなー。ドリってるし、ですわ口調だし。

「フューリー殿、レイヴェルは貴殿のファンなのだよ。レヴィアタン様の作られた貴殿の特撮DVDを全て買いそろえるほどまでにな」

「お、お父様!」

…んー? ちょっと今聞き捨てならない言葉を聞いた気がするんですけど。もう一回言ってくれませんか? なんか、俺の知らない間に恐ろしい事になってる気がしてならないんですけど。

「わ、私は…その…」

もぢもぢするレイヴェルさん。おい、何だこの可愛い生き物は!

誰かカメラ寄越せ!

「その内、我が家にも遊びに来て頂きたい。レイヴェルもさぞ喜ぶだろうさ」

「お父様! いいかげんに…!」

「ははは、これ以上は無粋かな? ではフューリー殿、私達はこれで失

礼するよ。・・・グレモリー卿。今日はお互いによい日となりましたな」

「ふっ…そうすな」

渋すぎる笑みを交わす二人。カツコいいな。俺じゃ一生あんな顔出来ないだろうなあ。

「そ、それでは、失礼します。…あの、いつでもいらしてくださいね？」
そう言つて、先に去つて行つたお父さんについて行くレイヴェルさん。ええ子や。今度菓子折りでも持つて行こうかな。…家の場所知らんけど。

さてと、謝罪も済ませたし、そろそろ帰るかな。ええつと、とりあえずオカン呼んで…。

「フューリーさん！」

脳内会話を行おうとした俺の耳に、幼い少女特有の甲高い声が届く。すわ、何事!? とそちらに向け、一人の女の子が俺の方へ向かつて走つて来ていた。

「おっとー」

しかも、そのまま俺の胸に飛び込んで来ましたよ!? 流石に避けるわけにいかないので、そのまま受け止めると、女の子はパツと俺の顔を見上げた。

「ひっく、会えた…! ぐす、やつと会えたよお…!」

ホワツト!? 何で泣いてるのこの子!? 会えた? こんな子初めて…。

いや…違う。間違い無い。この子…あの時の魔法少女だ!

「ずっと…ずっと信じてたの。絶対また会えるって…あなたの言った運命が、きつとまた私達を巡り合わせてくれるって…!」

あー…そういえば、そんな鳥肌モノなセリフを吐いた覚えが…。しっかし、何なんだこの反応? てつきり痛い人間だと思われてるとばかり思つてたのに、これじゃ俺と再会出来たのが嬉しいみたいじゃないか。この騎士(笑)に対してですよ? 冗談にしては笑えないぜ。へ、ここでおめでたい勘違いをするほど俺は間抜けじゃねえですよ? 「元氣そうで良かった」

とりあえず、あたりさわりの無い事を言ってみると、魔法少女は涙を拭いつつ、笑みを浮かべて答えた。

「え、えへへ…あの時、あなたが助けてくれたからだよ。ずっと、お礼が言いたかったの。本当に…本当にありがとう。私を助けてくれて」「礼はいらない。俺はただ、キミを守りたかっただけだからな」

そもそも、助けるどころか、むしろ最初は俺がキミに怪我を負わせる所だったんですけどね。いや、アルⅡヴァンモードも使えなかったのに、よくやったと思うよ、あの時の俺。

でも、俺にとつては少し前の出来事だけど、彼女にとつたら大昔の事なのにずっと感謝の気持ちを持っててくれたなんて…。凄く律儀な子なんだなあ。

「はうっ…!?!」

などと感じている俺の前で、いきなりゆでダコみたいに真っ赤になる魔法少女。なんだ？ さっきのレイヴェルさんといい、この子といい、悪魔の女の子ってのはみんな瞬間湯沸かし器みたいな機能でもついているのか？ 何のために？

「うう…そんなセリフずるいよう。…でも、嬉しいかも」

ブツブツ独り言を呟く魔法少女。セリフとか嬉しいとか何の事だろう。ま、俺には関係無いか。

「お姉様！」

「ッ！ 支取さん？」

またしても聞き覚えのある声の主は、まさしく支取さんだった。しかも、その後ろには他の生徒会のメンバーも揃っている。

「あ、ソーナちゃん」

「あ、じゃないですよ！ こ、こんな大勢の皆さんの前でなんて事をしてるんですか！」

「だってだって、フューリーさんだよ！ ずっと会いたかった人によつと会えたんだよ！ 今の私は誰も止められないのです！ えへん！」

「なんですか、そのドヤ顔は！」

「へへ、ソーナちゃんもドヤ顔って知ってるんだあ」

「話を逸らさないでください！」

普段学園で見るクールな彼女とは真逆の様子に思わず面食らう。何気に彼女の大声なんて初めて聞いたな。

「支取さん。キミはこの子と知り合いなのか？」

「それは…」

「私とソーナちゃんは姉妹なんだよ？ とつても仲がいいんだ〜」

支取さんの言葉を遮り、魔法少女が答える。そういえば、さつき支取さんはお姉様って言ってたな。見た目どう考えても逆だと思っただけ、この子も外見を変えてるのかな。

「そ、それよりも、神崎君。まさか、あなたが悪魔の関係者。しかも、あの伝説のフューリーその人であった等と誰が予想出来たでしょう」
俺はキミ達が悪魔だという事実には驚いてますけど…。

「そう言う割には、落ち着いているみたいに見えるが？」

「まさか、明かされた事実が大き過ぎて受け入れられていないだけです。時間が経てば、きっと驚きますよ。私だけじゃなく、ここにいる全員が」

支取さんの言葉に、後ろにいた真羅さん達がコクコク頷く。伝説かあ…。今の俺なら例えどんな内容だろうと受け止める覚悟はあるぞ！

「先輩！ カッコ良かったッス！ 俺、感動したッス！」

匙君が興奮した様子で俺の手を握る。地味に嬉しい。俺、なんだか彼には嫌われてると思ってたから。

「そうですね。…まさか、会場に乗り込んでまでリアスを助けるなんて。…少しだけ、彼女が羨ましいと思ってしまうました」

女性陣が同感だとばかりに頷く。それって、俺がお祝いに来た事が？ なんだ、そんな事なら心配しなくてもいいですよ？

「もし…」

「え？」

「もし、グレモリーさんと支取さんの立場が逆だったとしても、俺はここに来ていた」

「なっ…!？」

「もちろん、真羅さんや、由良さん、それに他の子達だったとしてもな」
彼女達だって大事な友達だ。俺でよければいつでもお祝いに駆けつけますぜ？　ただ、今回のように、余興として戦わせるのは勘弁してほしいですけど。

「え、ええ…!？」

「それって…!？」

「あう…!？」

…やべ、調子に乗り過ぎたか？　支取さん達の顔がえらい事になってる。けどさ、自分の晴れの舞台に是非ともお祝いに来て欲しいなんて言われたら誰だって嬉しくなるだろ？　だからテンションの上があった故の発言という事で勘弁してください。

「やっぱり…やっぱり、アンタは敵だあああああ!!!」

そして匙君、キミは何でそんな親の仇でも見る様な目で睨んで来るの!？　お兄さん、怖いよ!？」

「こ、コホン！　で、でいえは、私達はこれで失礼しましゅ！　お、お姉しやま、神崎君にあまり迷惑をかけないでくださいやいね!」

そう言い残して生徒会メンバーを引き連れて足早に去って行く支取さん。…なんか所々噛んでたけど、調子でも悪いのか？

「につしつし。ソーナちゃんもフューリーさんの魅力にメロメロだね。けど、負けないよ」

支取さんを気遣う俺の耳に、魔法少女のその言葉は届かなかった。

そうして、俺は魔法少女とも別れ、グレモリーさん達の所へ戻った。…のだが、何故か頬を膨らませたグレモリーさんと、いつもの微笑みなのにどこか怖い姫島さん、ジト目で見つめて来る塔城さんに、苦笑いの木場君、そして滝の様な涙を流している兵藤君に出迎えられてしまいましたとき。

その後、兵藤君達と一緒に人間界へ送ってもらい、俺は自宅へ帰った。ドアを開けた途端、アジアに泣きながら抱きつかれた。うーん、寂しかったんだねえ。やっぱりこの子も一緒に連れていくべきだったかな。

トトトと足音を鳴らせ、すり寄って来る黒歌の頭を一撫でし、俺は

アーシアと一緒にリビングへ向かった。何があつたのかと真剣な顔で聞いて来る彼女に一連の出来事を話す。途中、「ま、負けませんから！」なんて言われたんですけど、誰かどういう意味での発言か教えてくれませんかね。

はあ、なんか急に疲れて来たな。今日は色々あつたし。久しぶりにラフトクランズモードにもなったしなー。というわけで、さつさと寝る事にしようかね。

夕食と風呂を早めに済ませ、俺はベッドに横になった。…あ、燃えた制服どうしよう。代えてあつたつけ？

そんな事を考えながら、俺の意識は次第に沈んでいった。

翌日、目を覚ました俺は、自分の顔面を一発殴ってみた。

「…痛い」

って事は、これは夢じゃない。現実、リアルなんですよ。この頬に感じる痛みも…。

「すう…すう…」

目の前で裸のまま眠っているグレモリーさんも。

誰か…誰か！ 俺にこの状況を説明してくださいー！ーい!!!

彼女を起こさないよう、俺は心の中で盛大に叫んだのだった。

第三章 月光校庭のエクスカリバー 第二十三話 居場所

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ。俺が目覚ましたと思ったら、隣に下着すら着けずに眠っているグレモリーさんがいた。な……何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何が起こっているのかわからなかった。夢だとか妄想だとか、そんなチャチなものじゃあ断じてねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。

某銀色の戦車使い状態の俺の前でグレモリーさんがゆっくりとその目を開いた。

「ふああ……おはよう、神崎君」

うん、おはよう。とりあえず見えちやつてるから隠してくれないかなあ！ 胸の先端のピンクとか、下腹部にちよろつと見える紅とかアルーヴァン先生でもきついんですよ！ ほらシーツシーツ！

「グ、グレモリーさん。何故キミがここにいて俺の隣で寝ているんだ？」

「それはね、私が今日からここに住むからで、寝る時は基本的に裸だからよ」

答えてもらって悪いけど、ますますわけがわからなくなつたよ!?

何故に急に住むなんて話に……。

「もうね、我慢するのを止めたの。私がグレモリー家の娘で『王』なのは変わらない。けど、あなたの前ではただのリアスでいるって。だからお願い、私をあなたの傍にいさせて」

潤んだ……というか、泣きそうな顔のグレモリーさんを見て妙に冷静になる俺。なんか、凄く真剣というか、切羽詰まっているというか……。

そんなグレモリーさんの様子に、俺は一つの仮説を立てた。彼女が気まぐれでこんな事をするはずが無い。必ず理由がある。……それはきつと、あの婚約パーティーの一件だ。

どうやら、俺の謝罪は受け入れてもらえなかったみたいだな。パー

ティーを台無しにした俺に対して怒るご両親を、優しいこの子はきつと庇ってくれたんだろう。けど、その所為でご両親とケンカになつてしまい、衝動的に家出でもしてしまったのかもしれない。そうだとしたら、悪いのは全て俺だ。ならば、俺のすべき事は一つだ。

「・・・グレモリーさん」

「は、はい」

俺の真剣な顔に背筋を正すグレモリーさん。そんな彼女の肩を優しく抱きながら、俺は告げた。

「責任はとる。キミが満足するまで、ずっとここにいてくれ」

その内、お互いに冷静になって話せる機会が必ず来る。その日まで、彼女に住処を提供するのが俺の責任だ。

「せ、責・・・！ は、はい。こちらこそ、末永くお願いします」

深々と頭を下げるグレモリーさんの後頭部を眺めつつ、俺はこれらの事について考えていた。とりあえず、彼女の部屋を決めて・・・その前にアジアに説明しないとな。

というわけで、部屋の隅に置かれていた馬鹿でかい鞆から服を取り出して着替えたグレモリーさんと一緒にリビングへ向かうと、既に起床していたアジアが俺達を見て目を見開いた。んでもって、テーブルに向かい合って彼女へと説明を行う俺とグレモリーさんに、アジアはあつけ無く頷いてくれた。

「わかりました。・・・正直、どこかでこうなるかもしれないって思っていましたから」

俺がパーティーを滅茶苦茶にするって？ それならどうして止めてくれなかつたのさ！ 何て今さら言っても仕方無いんですけどね。「これからよろしくね、アジア。悪魔と一緒に生活するのは思う所があるでしょうけど」

「はい、こちらこそ、よろしくお願いします！ そんなの気にしていませんよ。以前お話ししたように、私は悪魔だからってその人の全てを否定するつもりはありませんから」

流石ウチの天使は言う事が違いますね。当然、俺だってそんな事は気にしないですよ？

「ありがとう。あなたとならきつと仲良くやっていけると思うわ。……けど、神崎君については譲る気はないからね?」

「はうっ!? わ、私だって、負けませんから!」
握手しながらも激しく目線をぶつけ合うグレモリーさんとアーシア。なしてそんなライバルチックな感じになつてんの?

……ま、仲良くするんならそれでいいか。それより、アーシアへの説明が済んだ事だし、この家の一員であるもう一匹も紹介しておこうかな。

「グレモリーさん。キミ、猫は好きか?」

「え? え、ええ。嫌いでは無いわ」

「実は、猫を一匹飼っていてな。名を黒歌というんだが……」

「ッ!? 黒歌ですって!?!」

驚愕の様子グレモリーさんに気付かず、俺は黒歌の姿を探した。

「アーシア、黒歌は?」

「黒歌ちゃんなら……」

とそこへ、我が家の癒しこと黒歌が満を持しての登場。早速抱き上げる為に近づこうとした俺を、グレモリーさんの鋭い声が制止した。

「下がりなさい神崎君! アーシア!」

「え?」

「な、何ですか!?!」

「その猫は悪魔よ。……しかも、冥界では有名過ぎるほどの大物よ!」

ウエイ!? マジですか!?! いや、確かにあの子は冥界で拾いましたけど、まさか悪魔だったなんて!

「さあ、正体を現しなさい! 主殺しの大罪人、黒歌!」

手にヤバそうな光を宿らせるグレモリーさん。すると、俺達の前で黒歌がその姿を変えていく。そして遂には、黒髪にネコミミと尻尾。それに艶めかしく着崩した和服という出で立ちの美女へと完全なる変身を遂げるのだった。

「……にゃ、にゃはは、とうとうバレちゃったにゃ」

気まずそうに表情を暗くする美女。猫が人になるなんて驚くしかない。けれどそれ以上に、俺は別の事に衝撃を受けていた。だって彼

女には見憶えがある。あの時、強姦魔に襲われていた女性じゃん！
「どうしてあなたが人間界に！ いえ、そもそもどうして神崎君の家に……！」

「待つてくれ、グレモリーさん」

色々聞きたい事があるが、とりあえず彼女に言いたい事があった俺は、グレモリーさんを制して美女の前に立った。

「ツ神崎君！ その女は危険よ！」

「大丈夫」

美女が俺を見上げる。なんか凄く辛そうな顔をしている。

「あなたはあの時の女性で間違い無いかな？」

「う、うん……」

「よかった。あの時急に姿が見えなくなって心配してたんだ。まさか、あの時の猫があなただなんて思わなかったけどな」

あんな目に遭った女性を一人にするのは心苦しかったけど、あの時は強姦魔をぶちのめすのに夢中だったからな。そう言うと、女性の目に見る見る内に涙が溜まって行った。

「ツ……！」

あつと驚く間も無く、気付いたら女性に抱きつかれてました！ 胸元でしゃくりあげるように泣き始める彼女に固まる俺。ただ、そのですね、この人滅茶苦茶スタイルいいんで、この状態だと色々密着して来て生きるのが辛いんですけど……。

「ごめんなさい……。ごめんなさい。隠すつもりじゃ、騙すつもりじゃ……」

隠す？ 騙す？ 何の話ですか？ グレモリーさんも泣いている彼女に戸惑っているみたいだし、アーシアは猫が人になった事によってど衝撃を受けたのかさつきから一言も発さずに固まっていた。

「とりあえず……みんな落ち着こうか」

カオスな空間に、俺の声がやけに大きく響いた。

……

その後、落ち着きを取り戻した美女を加え、俺達四人は改めて話し合いのテーブルに着いた。

「神崎君、あなたどうやって黒歌に接触したの？」

「偶然、彼女が男に乱暴されている場面に遭遇してな。その男を相手している間に彼女は姿を消して、その場には一匹の猫が残されていた。衰弱していた様なのでそのまま連れて来たんだ」

「・・・そうなの、黒歌？」

「ご主人様の言う通りにや。グラシヤラボラスのお下劣男に不覚にも罠にハマられて、私自身がハマられそうになった時、突然現れたご主人様に助けてもらったにや」

この空気で下ネタブツ込んできたよこの人！ グレモリーさんとアーシアが僅かに頬を赤らめる。何を想像したのかなキミ達は！

「それからは、ご主人様と一緒に人間界で暮らしてたにや。誓って言わせてもらえれば、ご主人様を利用しようとか、何かを企むとか、そういう考えは一切抱いていないにや」

「それって、去ろうと思えばいつでも去れたって事でしょ？ 何で今までそうしなかったの？」

「私だって何度も出て行こうと思ったにや。私と一緒にいたら、何にも知らないご主人様にいつ危険が及ぶかもわからないからって・・・」
「それならどうして」

「・・・出来なかったのにや。ここは私の居場所じゃない。そう思っても、次の瞬間にはご主人様の向けてくれる優しい笑顔が、撫でてくれる温かい手の感触が、私の頭を一杯にしたから。あの温もりから離れたくない・・・いけないと頭ではわかっていても、心は納得してくれなかったにや」

・・・なんか、凄く嬉しい。彼女が俺の事をそんな風に思ってくれたなんて。ならば、これからは今まで以上に愛情を込めて撫でてあげなければ！

「ずいぶんと勝手なのね。あなたのせいで小猫・・・いえ、白音がどん

な辛い目に遭って来たのかわかってるの?」

どうしてここで塔城さんの名前が出て来るんだろう? 首を傾げる俺を見て察したのか、グレモリーさんが説明してくれた。

「神崎君。小猫の本当の名前は白音。あの子は黒歌の実の妹なのよ」

え、マジで!? まさかの身内発覚に驚く俺に、グレモリーさんは続ける。

「かつて黒歌は、力を暴走させ、仕えていた主を殺害し逃亡した。その妹である白音が周りからどんな扱いを受けて来たのか・・・予想は出来るでしょ?」

殺害という単語にアシアの目に怯えが宿る。もちろん、俺だってビビった。けれど、俺の勝手な考えだけど、この人、理由も無くそんな事するような人には見えないんだよな。

「何か理由があるんじゃないのか?」

「ツ・・・!」

そう思った俺は、気付けば自然とその疑問を口にしていた。それは、彼女の反応を見た瞬間確信が変わる。

「話したくなければ無理に話さなくていい。だけど、話さないと伝わらない事だってあるんじゃないかな」

そこから誤解や勘違いが生まれる。それを訂正するには、やっぱりちゃんと話すのが一番の方法だ。・・・お前が言うな? ははは、何の話ですか?」

「・・・わかった。ご主人様がそう言うなら、全て話すにや」

決心した顔で女性は思い口を開いた。なんと、彼女・・・黒歌さんと、塔城さんは猫? という妖怪なんだとか! そんなのまでするのねこの世界って・・・。

んで、昔は二人で静かに暮らしてたんだけど、そこへ二人の力に目をつけた主ってヤツがやって来て、塔城さんを人質に黒歌さんを無理矢理眷属にしたそうさ。

・・・この時点で胸糞な話だが、それだけでは終わらない。主は黒歌さんが操る仙術というものを塔城さんにも使わせようと強引に迫ったそうさ。仙術って危険なものらしく、その時幼かった塔城さん

ではもしもの事が起こるかもしれない。大切な妹を守る為に黒歌さんは主を止める為に戦い・・・結果、殺害したそうさ。

なるほど。それで主殺しなんて呼ばれてるのか。けどさ、それって・・・。

「そ、そんな、黒歌ちゃん・・・さんは妹を守ろうとしただけじゃないですか！　なのはどうして・・・！」

うん、アジアの言う通り。殺意があったわけじゃなく、家族を守る為に止むを得ずって完璧な正当防衛じゃん。黒歌さん悪くないじゃん。いや、殺すのはよくないけど、情状酌量の余地はありまくりじゃん。

「・・・まさか、そんな真実が隠されていたなんてね」

グレモリーさんも初耳だったのか目を丸くしている。って事は、その事件を知る大多数の人間もこの事を知らないってわけね。それって、上手くいけば罪を軽くしたりとかも可能なんじゃないのか？

「わかったわ、黒歌。あなたの話を全て信じたわけじゃない。でも、あなたがわざわざ話してくれた事を否定するわけにもいかない。今の話はサーゼクスお兄様にもお伝えしておくわ。・・・それと、小猫には説明するの？」

「ま、待って。心の整理がいたら必ず白音にも話すから。それまではあの子には何も言わないで」

やっぱり、色々複雑なんだろうな。こればかりは俺には何も言えない。彼女自身の問題だからな。

「そう・・・なら、私から言う事は無いわ。それじゃ、今後の話をしましょうか。黒歌、あなたこれからどうするの？」

「・・・ご主人様にもバレちゃったし、ちょうどいい機会にや。今度こそ、この家を出て行くにや」

は？　おいおいおい、何でそんな話になっただけなの？　つーか、今の話聞かされて、放り出せるのか思ってたの？

「待て、黒歌さん。そんな事が許されると思ってるのか？」

「え？」

「黒歌さんの正体が何者であろうと、あなたは既にこの家の一員だ。

だから出て行く必要なんて無い」

「そ、そうですねよ！ そんなの駄目です！ 黒歌さんがいなくなったら寂しいです！」

「で、でも、私は……」

「俺達の事は気にするな。微力だが、アーシアとあなたの二人を守る事は出来るはずだ」

彼女はこの世界で得た家族の様なものだ。例えこれから先に何があつたとしても、いざとなれば二人を背負ってオルゴン・クラウドで逃げまくってやるぜ！

「フューリーであるあなたが微力なんて言っても皮肉にしかならないわよ」

「そうか？」

「フューリー？ ……フユ、フューリー!? あの伝説の騎士がご主人様!? にや、にやにそのギャグとしか思えないような展開!?」

そうだよね。いきなり伝説の騎士(笑)なんて言われても困るよね。ま、その話は追々として、今は黒歌さんの事だ。

「絶対に守るって誓うよ。だから俺を信じてくれないか、黒歌さん。あなたの居場所は……帰るべき家は、ここなんだ」

「ご、ご主人様……! ご主人様あああああ!!!」

再び抱きついて来る黒歌さん。今度は固まったりせず、俺も彼女を思いっきり抱きしめた。

「怖かった……。ご主人様にこの姿を見られるのが。私の過去を知られるのが……。でも、いいんだよね? ご主人様の傍にいてもいいんだよね?」

「ああ」

「う、うわああああああああん!!!」

子どもの様に泣きじやくる黒歌さんの背中を、俺はいつまでも優しく撫で続けた。彼女はきつと嬉しくて泣いている。自惚れるつもりは無いけど、きつとそうだと信じる事にしよう。

……

「というわけで、私はこれからもこのお家のお世話になる事になりました。どうぞよろしくにや」

「・・・まあ、仕方無いわね」

「はわわ、同居人さんが一気に二人も増えてしまいました。今夜の夕食はどうしましょう」

渋々受け入れるグレモリーさんと、夕飯の心配をするアーシア。

「ねえねえ、ご主人様」

「何だ、黒歌さん？」

「呼び捨てでいいにや。それよりもご主人様、今日は一緒にお風呂に入るにや。それで夜は一緒のベッドで寝るにや。寝る時は、私が抱き枕になってあげるからね？」

「な、何を言い出すのよ黒歌！」

「そ、そうですよ！　そ、そんな羨まし・・・じゃなくて、そんなの駄目ですよ！」

「ふっふーん。やっとうご主人様に堂々と抱きつく事が出来るようになったんだし、我慢なんてしないにや！」

「そ、それなら私だって！　神崎君！　私の方が抱き心地がいいはずよ！」

「わ、私だって、精一杯ご奉仕しますよ、リョーマさん！」

はは、なんか、一気に賑やかになってしまったな。けど、こういう賑やかさなら大歓迎だな。

騒ぐ三人を見つめながら、俺は無意識に微笑むのだった。

第二十四話 騎士の過去

黒歌の告白ですっかり意識の外に出ていたが、今日は平日。つまり俺達は学校へ行かないといけない。

「あら、もうこんな時間ね。そろそろ出ないと間に合わないんじゃない？」

「そ、そうですね。急ぎましょう」

「いつてらっしゃい。ご主人様のお帰りを耳を長くして待つてるにや」

黒歌のそんなセリフに見送られ、俺達は家を飛び出した。その道中、グレモリーさんに今日の放課後、オカルト部へ来てくれと言われた。理由は・・・やっぱり、俺の正体についてだよなあ。はあ、なんて説明しよう。まさか、オカンな神様に転生させてもらいました・・・なんて言ったら病院に連れて行かれるかもしれないし・・・。

まあ、放課後まで時間はある。それまでに何とかそれっぽい話でも考えてみるかな。そう決めて、俺は学園へと向かう足を速めるのだった。

・・・
・・・
・・・

結論だけ言わせてもらおうと、何も思い浮かびませんでした。

放課後のオカルト部。自分を囲むようにソファに座るオカルト部のメンバー+アーシアを前に、俺は心の中で焦っていた。

「今日来てもらったのは他でも無いわ。神崎君、あなたには聞きたい事があるわ」

あー、やっぱりね。今からじゃどうやっても逃げられないし・・・マジでどうしよう。

「あなたの正体は、かつて、悪魔、天使、堕天使の三陣営を救ったフューリーと呼ばれた騎士。・・・それで間違い無いのよね？」

「・・・ああ」

もうどうやっても誤魔化しきれない。観念した俺は素直に頷いた。

そんな俺に対し、オカルト部の面々は皆一様に驚いた反応を見せた。その中で、アーシアの驚きは特に顕著だ。

「ほ、本当に驚きました。まさか、リョーマさんがあの『神の騎士』様だったなんて・・・」

何その寒い呼び名!? 悪魔の皆さんに対しては覚悟してたけど、そっちは全く予想してなかったよ!? 詳しく教えてくれませんかねアーシアさんや! そんな俺の訴えを目で察したのか、アーシアはそのまま話を続けた。

「遠い遠い昔、邪悪なる者との戦いで傷付いていく天使様達を守る為、主が遣わせた聖なる騎士・・・。教会ではそう教えられていました」
いいかげんにしろよ教会! 変態を集めたり、人の事勝手に辱めたり、俺に何か恨みでもあるのかよ! ああ、駄目だ。やっぱり俺、教会の人間とは仲良くなれそうに無いや・・・。

「冥界もそんな感じね。悪魔を救う為、冥界へ舞い降りた孤高の騎士・・・だったかしら?」

それって暗にボツチつて言ってますよね? まあ、たった一人できなり姿を現したわけだからそうとられても仕方無いか・・・。

「只者では無いとは常々思っていましたけど、まさか生ける伝説をこの目で見られる時が来るなんて・・・。はは、やっぱり先輩はとても興味深い人ですね」

「・・・ただただ驚きです」

うん、木場君。とりあえずその流し目は止めてくれるかな? それと塔城さんの驚いた顔って珍しいな・・・お姉さんが近くにいるって教えたらもつと驚いたりして・・・。

「本当にあなたは退屈させてくれませんかね、神崎君。ですが、フューリーの伝説は千年以上前からのものです。悪魔でも何でも無い、人間であるあなたがどうやってその時を越えたのかしら?」

ツ・・・。やっぱり来たかその質問。・・・ええい、しょうがない。この設定ばかりは使いたく無かったが、最早これ以上の案は思いつかん! 行くぞ!

「・・・わからない」

「え？」

「どうしてあの場へいたのか、どうして今の時代へとやって来てしまったのか、あの戦いの直前までと直後の記憶が・・・俺には無いんだ」

「ッ!? それって・・・!」

はい、やってしまいました。困った時の記憶喪失設定。これでごり押しするしかない。いや、我ながら酷い捏造だと思うわ。でも、臭い物には蓋をしろってわけじゃないけど、謎は謎のままにしておくのが一番だと思う。どうせ、俺の過去なんて誰も気にしないだろうし。そう、大事な今は今! この危機を乗り越える事さ!

などとお気楽に考える俺を、グレモリーさん達が悲痛な面持ちで見つめている事に気付いた。え、どうしたの? やっぱ無理があつた? ?

「そんな・・・。それじゃあなたは、記憶を失って、たった一人この時代に放り出されたって事なの?」

「・・・悲しい話ですね」

「ごめんなさい・・・。私の軽はずみは質問で、あなたを傷付けてしまいました。知らなかった・・・なんて理由にはなりませんわね」

「せ、先輩! 俺に出来る事があつたら言ってください! 何でもしますよ!」

「僕もです、先輩。あなたは一人じゃない。僕が・・・僕達が先輩を支えます」

「リョーマさん・・・。私は、あなたの孤独を癒してあげたいです。神器じゃなく、私の心で・・・!」

・・・おい、俺。テメーの軽はずみな発言の所為で大変な事になったじゃねえか。止めてくれみんな! そんな気遣う様な目とかしなくていいんだよ! 過去どころか昨日の夕飯すら余裕で覚えてますから!

しかし最早手遅れ。グレモリーさん達の中ではすでに俺は記憶喪失だと認識されてしまった。なんだろう、最近、迂闊な言動で取り返

しのつかない場所まで来てしまった感じがしてならない。
重々しい空気が漂う部室内で、俺は一人そんな事を考えるのだっ
た。

S I D E O U T

麻耶 S I D E

放課後、廊下を歩く私の前から神崎君がやって来た。その顔は酷く
消沈していて、いつもの彼とは随分と様子が違っていた。

「神崎君？ どうかしたんですか？」

「山田先生……」

泣きそうな顔で私の名を呼ぶ彼に、どうしてか胸が締め付けられ
た。だから私は、気付けば勝手に口を動かしていた。

「……酷い顔をしていますよ？ 何かあったんですか？ 私でよければ
相談に乗りますよ？」

以前は私が彼に相談に乗ってもらった。だから今度は私が……
『そのままのあなたが素敵です』

ッ！ うう、別にそれまで思いださなくていいでしょ、私！ 頬を
熱くさせる私を尻目に、神崎君が重々しく口を開く。

「俺は……最低な事をしてしまいました。大切な友人にあんな嘘
を……。叶うなら、あの時の自分を殴ってやりたい……！」

果てしない後悔の念。今の神崎君からはそれが感じられた。意外
だった。彼はそういうのとは無縁な人だと思っていたから。

「俺は、俺の都合を優先してグレモリーさん達を傷付けた。優しい彼
女達にあんな事を言えば、ああなるなんて予想出来たはずなのに！」

「神崎君！」

自らを傷付けるように罵る彼の痛々しい姿に、私は我慢出来なかつ
た。衝動にかられ、私は彼を力一杯抱きしめた。

「先生……？」

「神崎君、私はあなたが理由も無く人を傷付ける子だとは思っていま
せん。きつと、きつと理由があるんですよね？」

神崎君は答えない。けどそれでもいい。私はただ、私の思いを伝え

るだけだ。

「誰も傷付けないで生きる事なんてどんな人でも出来ません。私も、あなたも。でも、あなたは友達を傷付けてしまった事をとんでも後悔している。あなたのその気持ちは届いているはずです。きつと、友達も許してくれると私は思います」

友達を傷付けた後悔は友達を想う優しさの表れ。だから心配しないで……。そう最後に付け加えると、神崎君はゆっくりと私から離れた。

「……ありがとうございます、先生」

その顔は、全快とは言えないまでも、先程よりかはずっとマシになっていった。

「生徒の悩みは私の悩みです。だって私は先生ですから！」

ちよつと得意気に胸を張ってみると、神崎君は小さく微笑んでくれた。何だかその笑みが妙に気恥ずかしくなって、私は思いついたように口を開いた。

「え、ええつと……それじゃ、私はそろそろ職員室へ行きますから！」

「あ、先生」

返事も聞かず歩きだす私を神崎君が呼び止める。

「なんですか？」

「あなたは……最高の先生です」

「ふえっ!？」

そんな言葉と、神崎君の笑顔のダブルパンチを受け、私はその場に崩れ落ちた。そして次に目を覚ました時、私は保健室のベッドで横になっていたのだった。

第二十五話　またお前らか！

どうも、先日のオカルト部での一件で、騎士（笑）に加えて記憶喪失（笑）の称号を得てしまった神崎亮真です。今度こそ本気で首を括ろうと思いましたが、山田先生の優しいお言葉を受け、生きて罪を償う事にしました。本当、彼女は教師の鏡です。

とりあえず、今後、オカルト部の面々に何か困った事や助けて欲しい事があつたりしたら、俺の全力でを手助けすると決意しました。パシリだろうとなんだだろうと喜んでやりますよ俺は！

ただね、あの日からみんなが俺に向ける目が辛い。だって、明らかにこつちを気遣ってるってわかるんだもん。本当は、そんな風に思ってくれる資格なんてないのに。

『失った過去など必要無い。こうしてグレモリーさん達と出会えてこの時代に生きている・・・。俺にはそれだけで充分だ』

なので、戦闘時でも無いのにアルⅡヴァンモードでそう言うと、みんな顔をリンゴみたいにして納得してくれた。・・・あまり関係の無い話だが、このみんなというのは兵藤君と木場君も入っている。キミ達にまでそんな反応されたら俺もどう受け取ればいいのかわからないよ。

ついでに、名前とラフトクランズモードの使い方、それとフューリーという単語だけは覚えていたという感じで補足した。じゃないと、どこかで矛盾が生じる恐れがあつたからな。

もちろん、黒歌にも説明済みだ。俺じゃ無く、グレモリーさんとアーシアからだ。泣きながら俺を抱きしめる彼女に、別の意味で死にそうになったのは記憶に新しい。

本当に、みんな良い子達ばかりだ。ただ、良い子過ぎて不安でもある。なんか悪いヤツ等に騙されるんじゃないのか？　だが、もしそんな輩がグレモリーさん達に近づこうものなら、その時は騎士（笑）である俺が成敗してやる。主に拳を使って！

そんな感じで俺の贖罪の日々が始まって数日後、俺は「相談事があります」と兵藤君に呼び出された。

「木場君の様子がおかしい?」

たった今、兵藤君の口から出た言葉をそのまま繰り返すと、彼は妙な面持ちで頷いた。何でも、兵藤君の家に遊びに来た木場君に、彼のお母さんがアルバムを見せたらしい。最初は楽しそうにそれを眺めていた木場君だったが、ある写真を見た途端表情を一片させたのだとか。

「木場は聖剣がどうかって言っていました。アイツのあんな憎しみの籠った顔・・・俺、初めて見ましたよ」

俺も驚いた。木場君はいつも優しく微笑んでいるイメージがあったからな。でも、それはあくまでイメージだ。本当の彼を俺は知らない。

「木場、あの日からずっと変なんです。だから心配っていうか・・・。と、とにかく、先輩もちよつとでいいんで気にかけてくれませんか?」
「わかった」

当然だ。彼は大切な後輩だし、大切な友人だからな。悩み事でもあるなら是非とも話して欲しいが、一番仲の良さそうな兵藤君にも話していないのを見ると、俺にも教えてくれそうに無いな。

「ありがとうございます! それじゃ、俺、部長にも木場の事聞いてみるんで、失礼します」

駆け出していく兵藤君の背中を見送る。彼つて凄く友達思いの優しい子なんだな。・・・相変わらずおっぱいおっぱい叫んでるらしいけど。

まあいいか。とりあえず、木場君に会ってみよう。そう決めた俺だったが、結局この日は学園で木場君には会えなかった。

放課後、気付けば外は酷く土砂降りの様子だった。生憎傘は持って来ていない。ここは時間をかけずにさっさとダッシュで帰ろう。俺は鞆を手に下駄箱を飛び出した。

瞬間、叩きつけるような雨が俺の全身を襲う。酷い雨だ。天気予報マジで役に立たねえ。内心ぼやきつつ、家への道を走る俺の耳に、聞き覚えのあるその声が届いたのは、ちようど家まで半分の所まで来た時だった。

「はっはあ！ 久しぶりの再会だ！ 楽しもうぜクソ悪魔あ！」
「いいだろう。その剣ごと破壊してあげるよ！」

一方は間違い無く木場君だ。ならもう一方は？ 確かめる為そちらに向かった俺の眼前に、なんか黒いオーラみたいなのを出す剣を持つ木場君と、それとは対照的な光るオーラを出す長剣を構える・・・クレイジー神父の姿が飛び込んで来た。

「木場君」

「ッ!? か、神崎先輩!? どうしてここに!?!」

「あーん？ ゲ、あの時の化物君じゃないですかあ！ なになにに、この少年の知り合いだったの？ それならそうと早く言つてくださいよお！」

酷い！ 化物つて言う方が化物なんだぞ！ 来いよクレイジー化物！ 剣なんか捨ててかかって来いよ！

「・・・またそんな玩具を振り回して遊んでいるのか」

もうね、教会にまともな人間は存在しないんじゃないかと思う今日この頃ですよ。ホント、そう考えると、幼い頃から教会に属していたアーシアが他の連中に毒されずにあんな天使でいられたのって奇跡なんじゃないのか？

呆れてしまった俺に向かって、クレイジー神父は何が楽しいのかもの凄い笑顔で返事して来た。

「ぎくんねくん！ これはあの時の剣とは違うんだなあ！ これはねえ、エクスカリバーっていう聖剣なんですよ？ ゲームとかで聞いた事あるでしょ？ 最強にして最高の剣がこれってわけですよ！」

ああ、はいはい、エクスカリバー（笑）ね。やれやれ、玩具にそんな名前までつけるなんて・・・しかも、いくら愛着があるからって、玩具にそんな仰々しい名前ってどうよ？ 発光機能がついてるのは評価出来るけど、他にもギミックが搭載されてたりするのかな？ 何にせよ、木場君がケガしたら嫌だし、取り上げるか。

「キミにも会いたかったんだよお！ あの時、俺を虚仮にしてくれたお礼をしないとねええええええええ!!」

言うや否や、クレイジー神父がエクスカリバー（笑）を振りかぶつ

て突っ込んで来た。この人、そろそろ自分が周りからどう見られてるか気付いた方がいいと思うな。

心の中で呟きつつ、俺は前と同じく、向かって来た剣を右手で掴んだ。ただし、前回と違うのは、このエクスカリバー（笑）は妙に固く、軽く力を入れただけではビクともしないという点だった。

そうやって感触を確かめている俺を前に、クレイジー神父がこの世の終わりを迎えたかのような絶望的な表情を浮かべていた。なんか横から木場君の息を飲む音まで聞こえて来る。

「あ、ありえねえ……ありえねえありえねえありえねえありえねえ！

聖剣だぞ!? 本物のエクスカリバーなんだぞ!? テメエは斬られて死ななきやいけねえんだぞ!? なのに……何で受け止めてんだよおおおおおおお!!!」

いや、玩具とはいえ、剣振り降ろされたら誰だって受け止めるでしょうが! アンタそんな事もわかんないの!? つーかその剣買った時に注意書きとか読んだのか? 絶対「人に向かって振るわないようにしてくださいって」書かれてただろうに。

「あなたにこの剣を持たせるのは危険だ。故に……破壊させてもらう」
少して無理なら全力で力を込めれば壊れるだろうと剣を握る手に意識を向けようとした刹那、クレイジー神父は強引に俺の手から剣を離した。

「ひやは! ひやはははは! 嫌なこったあ! この剣は俺の大事な大事な宝物なんですよお? テメエごときに奪われてたまるかってんですよお!」

クレイジー神父の剣から光が消え、彼は俺達に背を向けて走り始めた。それに向かって木場君が叫ぶ。

「ま、待て! 逃げる気か!」

「ええ、逃げますよお! だがな、次に出会った時は絶対に殺す! テメエも……そっちの化物も必ずなあ!」

そんな捨て台詞を残し、クレイジー神父は完全に俺達の前から姿を消した。

「……彼は何がしたかったんだ?」

チャンバラごっこがしたいのなら、同じ教会のヤツ等とやればいいのに。こんな風に関係無い人間に襲い掛かるとか通り魔ってレベルじゃねえぞ。

「聖剣すら先輩には……。これが伝説の騎士の力だとも言うのか……」

木場君が何やらブツブツ言っている。いや、雨に濡れながら憂いの表情を見せるイケメンって画になるなあ。

「木場君、大丈夫か？」

「……心配してもらわなくても僕は元気ですよ。それで、先輩はどうしてここに？」

「ここに来たのは偶然だ。だが、俺としてはちようど良かった。キミに会いたかったからな」

「僕に？」

「ああ。兵藤君がキミを心配していたぞ。最近の木場君の様子が変わるから、俺にも気にして欲しいとな。だからキミに会って話を聞こうと思っていたんだ」

「そうですか……。イツセー君も余計な事を……」

「そういう言い方は良くないぞ。彼は木場君の事を本気で心配していたんだからな」

普段の木場君からは絶対に出ないであろう言葉に面食らいつつ、フォローを入れる俺に、木場君は無理矢理作った笑顔を向けて来た。

「……そうですね。今のは失言でした」

「木場君、本当に何があっただ？ 悩みがあるのなら俺に話して……」

「先輩には関係ありません」

こちらを一切受け入れるつもりが無いと言わんばかりのその言葉に、俺は何も言えなかった。だが、それはつまり、他者を寄せ付けない程の深刻な理由があるとと言う事に他ならない。

そうだな、木場君。確かに俺はキミの事情には関係無いかもしれない。けど、俺は自分が薄情な人間だとは思って無い。

「キミの言う通りだ。これは俺の自己満足に過ぎない。それでも、俺はキミの力になりたいんだ。キミは俺の大切な後輩で友人だからな」
「先輩……」

長い長い沈黙。それは木場君によって破られた。

「先輩、僕はね、あなたと同じなんですよ」

「俺と同じ？」

「教会に恨みを持つという点です。記憶を失ったはずのあなたの中に残る教会への憎しみ。僕はそれ以上の物を持っています。ヤツ等は幼かった僕を……僕の仲間達を……！」

そこまで言つて、木場君は俺に背を向けた。

「……これ以上は言えません。これは僕がやらなければならぬんです。ただ、助けてもらった事にはお礼を言わせてもらいます。ありがとうございます、先輩。そして、さようなら」

一度も振り向かず、木場君は去つて行つた。残された俺は、ただ木場君の最後の言葉を頭の中で繰り返していた。

『——ヤツ等は幼かった僕を……僕の仲間達を……！』

……ああ、そうか。そうかよ。アーシアを追放したあげく十字架プレイに巻きこんで、仕事を放棄してチャンバラごっこ、通り魔。

そして……幼い木場君とその友達にまで手を出すシヨタコン&口リコン共。その全てが、教会のド腐れ野郎どもによるものだったってわけか。もう、この世界で起こる全ての悪い事って全部教会の関係者がやった事なんじゃないのか。

いいかげん我慢の限界だ……。上等だよ教会。たった今からテメエらは俺の敵だ。これ以上俺の周りの人間に変態の手を伸ばすつもりなら、俺が叩き潰してやる！

未だ止まぬ雨の中、俺は力強く拳を握りしめながらそう誓うのだった。

第二十六話 真に断罪されるべきは

数分後、帰宅した俺を見て、出迎えてくれた黒歌が目を見開いた。「うにやつ!? ご、ご主人様、ずぶ濡れじゃない! 傘持って行かなかったの!?’ と、とりあえずタオルを……」

「黒歌、頼みがあるんだ」
「え?」

引き止めた黒歌に、俺は自分の考えを話した。腑に落ちないといった様子だが彼女は協力してくれると言ってくれた。一人より二人、それに猫になれる彼女なら色々都合がいいからな。

木場君。悪いが、俺はしつこい男なんぞでな。俺なりの方法をとらせてもらおうぞ……。

S I D E O U T

ホム……祐斗S I D E

フリード・セルゼン。エクスカリバーを所持していた彼なら、きっと「あの男」の情報を持っているはず。そう思い、ここ数日フリードを探し続けていた僕の元へ、また神崎先輩がやって来た。

「……なんですか、先輩」

どうしてもトゲのある言葉になってしまふ。けれど先輩は特に気にしている様子も無く、僕に向かって一枚の紙を差し出した。それは、この街周辺について描かれた地図だった。所々マーカーで○と×の印が刻まれているそれを見て、僕は戸惑った。何故こんな物を僕に見せたのだろうか。

「この地図に描かれた○の部分には、空き家や廃ビル、今は稼働していない工場等がある」

「それが何か?」

「真つ当じゃない連中は、真つ当じゃない場所を拠点にしているかと思っただけ。俺なりに調べてみたんだ」

真つ当じゃない……。間違い無く、フリードの事を言っているのだろう。つまり、フリードとその協力者が潜んでいそうな場所を先輩

なりに予想したって事だろうか。けど、この地図に描かれた○の数は十や二十どころでは無い。こんなたくさんの場所を、たった数日で一人で調べ上げたっていうのか？ おかしい。一日の半分を学園で過ごす先輩がそんな時間をとれるはずが……。

そこで僕は気付いた。先輩の目の下にうつすらとクマが出来ている事に。つまり先輩はロクな睡眠もとらずにこの地図を作り続けていたという事に他ならない。他の誰でも無い……僕の為に。

……部長やアーシアさんが先輩に惹かれた理由が今さらながらわかった気がする。この人は仲間の……友達の為ならそれがどんなに大変でも辛くても躊躇いも無く実行してしまう人なんだ。

アーシアさんを助ける為、堕天使とエクソシストの集団を相手に一歩も引かなかった。

部長の涙を止める為、不死とされていたライザー・フェニックスすらも倒した。

例え相手がどれほどの存在でも、例えその結果、自分が傷ついてしまおうとも、先輩はただ仲間の為にその力を振るう。その行動理念は、正に誇り高い騎士のようだ。こうして復讐に囚われている僕なんかとは比べる事すらおこがましい。けれど、それでも僕は、仲間の命を奪った連中を許してはおけない。そうだ、その為に僕は今まで生きて来たのだから……！

「ちなみに、この×印はその周りで神父の姿が目撃された場所なんだが……どうやら、今この街には複数の神父がいるらしい。だから、木場君を襲ったあの神父がそこにいたのかどうかはわからない」

「……どういふつもりですか？ 僕は言つたはずです。これは僕の問題で、僕が一人で片付けると」

違う。僕が言わないといけないのはそんな言葉じゃない！

頭ではわかっていても、感情がそれを許さない。けど、そんな僕に、先輩は優しい声で答えた。

「勘違いしてもらったら困る。この地図をどう使うかはキミ次第で、その結果、木場君に何か利益が発生したとしても、それはただの偶然だ。これは、俺が勝手に作った物なんだからな」

偶然？ そんなわけ無い。これで僕がフリードの手がかりを得られたのなら、それは必然だ。だって先輩・・・あなたは最初から僕のためにこの地図を・・・。

ふいに込み上げて来る感情に目頭が熱くなった。駄目だ、弱い部分を見せるな。僕は一人でやるんだ。僕の復讐に・・・この人を巻き込むな！

顔を見られないよう、僕は先輩に背を向けた。そうして、震えそうになる声を必死に抑えながら何でも無いように言う。

「そうですか・・・。なら、精々有効に使わせてもらいますよ」

「ああ、そうしてくれ」

先輩はそれ以上何も言わない。それが今の僕には何よりもありがたかった・・・。

・・・
・・・

先輩からもらった地図を頼りにフリードを探す日々。その最中だった。教会の関係者を名乗る人物が僕達の前に現れたのは・・・。

イツセー君の幼馴染である紫藤イリナ。そしてゼノヴィアと名乗ったその二人から放たれる聖なる気はそれだけで僕の神経を逆なでしてくれた。

叶うのなら、今すぐ斬りかかりたい。だが、それを実行に移すほど僕はまだ堕ちていない。まだだ。全てはこの二人から話を聞いてからだ。

「本題に入る前に。フューリー・・・まずはあなたに出会えた事を主に感謝しよう」

天界・・・いや、教会にもフューリーが再び姿を現した事は知られているのか。やはり、先輩はそれだけの存在だという事なんだな。

ゼノヴィアが先輩に握手を求める。それに応える先輩だったが、その顔には明らかな嫌悪が滲んでいた。

「だけど、〃神の騎士〃と呼ばれていたフューリー様が、まさか悪魔と繋がりを持っていたなんて・・・」

信じられないといった表情の紫藤イリナの一言に、先輩の顔がさらに曇る。けれど、それに気付いた様子も無く、二人は今度こそ本題へ入った。

教会の管理していたエクスカリバーが盗まれ、その犯人がこの日本へ逃れて来た。犯人の名はコカビエル。『神の子を見張る者』の幹部にして、聖書にもその名が記されている超大物だ。教会側はエクスカリバーを取り戻そうと、何人もの神父をこちらに送っているらしい。おそらく、先輩が言っていたフリード以外の神父とは彼らの事だろう。現に僕も、あの雨の中の戦いの直前、フリードによって殺される神父の姿をこの目で見た。

話の最中、二人が所持するエクスカリバー……。『破壊の聖剣』と『擬態の聖剣』を見せられ、今度こそ動くこうとしたが、神崎先輩に目で制された。

ゼノヴィアは言う。これは自分達の問題である。故に、この街に住む悪魔は一切の介入を行わず、黙っている……。

突然やって来てのその言い分。ずいぶんと勝手だよね。案の定、部長も腹を立てている様子だった。

「・・・それは牽制のつもり？　なら随分と見当外れな牽制ね。私達がコカビエルと手を組んで聖剣をどうにかするつもりだとしても？」

「上はそう考えてるよ。魔王の妹。もしもあなた達がコカビエルと手を組むのなら、その時は我々は完全にあなた達を消滅させるつもりだ」

「私が魔王の妹だと知っているなんてね……。なら言わせてもらおうわ。私はグレモリーの名にかけて、絶対に堕天使などと手は組まない。この私が、魔王の顔に泥を塗るような真似をすと思うって？」

「ふ、それだけ聞ければ充分だよ。ならば、次はフューリー。あなたに話が・・・」

「ちよつと待って、ゼノヴィア。その前に気になる事があるの」

紫藤イリナが神崎先輩・・・正確には、先輩の背後に隠れるように立つアーシアさんに目を向ける。

「まさか『聖女』・・・いえ、『魔女』であるあなたとこんな場所で会う

なんてね。アーシア・アルジェント」

「ん？ ああ、言われてみれば確かに。『魔女』として追放された後の行方は明らかになっっていなかったが、こんな極東の地へ落ち延びていたとはな」

二人の視線にアーシアさんが体を震わせる。そんな彼女に、紫藤イリナとゼノヴィアは容赦無い口撃を加え始めた。

「悪魔すら癒す忌まわしき力をその実に宿す気分はどうだ？ こうして悪魔と関わっているとは・・・堕ちるところまで堕ちたものだな」
「あなたは、『魔女』と呼ばれている今も、主への信仰心を忘れていないの？」

「・・・はい。ずっと、ずっと信じて来たものですから」

「なるほど。・・・ならばいつその事、今この場で私達が断罪してやろうか？ 『魔女』であろうと、我等の神ならばきつと救いの手を差し伸べてくれるはずさ」

どの口が言っているのだろう。僕もアーシアさんの事情は聞かせてもらっている。持ち上げるだけ持ち上げて、かと思えばあつけ無く切り捨てる。いかにも教会がやりそうな手だ。反吐が出そうだよ。

部長達も同じ気持ちなのか、皆一様に怒りの形相を見せている。イツセー君なんか今にも掴みかかりそうだ。けれど僕達は失念していた。ここには僕達以上に今の言葉に怒りを抱く人がいる事に。

「・・・どこまでも俺を不快にさせてくれるな、貴様等は」

たった一言・・・それだけで、神崎先輩はこの場を支配してしまつた。抑えるつもりが無いであろう凶暴な殺気が先輩の体から溢れ出す。それを正面から受け止めてしまった紫藤イリナとゼノヴィアの顔が凍りつく。

「悪魔を癒したから『魔女』。貴様等はそう言ったな？」

「あ、ああ。その通りだろう？ 神から与えられた力を悪魔に使う等、神への冒瀆に・・・」

「それがそもそも間違っていると何故気付かない」
「え？」

「グレモリーさん、神器は誰が作った物だ？」

「そ、それは、『聖書の神』が・・・」

急な名指しに、慌てて部長が答える。それに満足した様子で先輩が一度頷き、改めて口を開いた。

「神器は神が作った。ならば、アーシアの神器が悪魔も癒すように設定したのは神自身だろう。アーシアは正しく神から与えられた力を使っただけに過ぎない。それを否定する貴様等こそ、神を冒瀆しているんじゃないのか」

「ツ!?」

先輩の指摘に愕然となる二人。そうだ、言われてみたら確かにその通りだ。ならば、今の教会の連中はほとんどが冒瀆者というわけか。はは、滑稽だね。自分達こそ敬虔な使徒だと思っている者達こそ、実は誰よりも神を冒瀆しているなんて。きつと連中には一生理解出来ないんだらうな。

「わかったか？ アーシアは今も『聖女』だ。それを手にかけてする貴様等こそ、神に背いた『魔女』として断罪されるべきだと知れ。それを異とするならば、今すぐアーシアに謝罪しろ。貴様等教会は、大いなる過ちを犯したのだと胸に刻みながらな」

反論の余地は無い。先輩の言った事は間違い無く正しい事だったから。絶対零度の視線に晒され、ゼノヴィアは額に汗を滲ませ、紫藤イリナは全身を震わせていた。

「お、おい、早く謝った方がいいぞ」

そんな二人に近づき、イツセー君が小声でそう言った。それでも洩るゼノヴィアに対し、イツセー君は慌てて付け加える。

「いいから謝れ！ 先輩が多弁な時ってブチ切れてる証拠なんだよ！ しかもあのライザーすら『あなた』と呼ばわりだったのに、『貴様等』とかもうこれ以上ないくらい頭に來てるぞ！」

「そ、そうなの!? ど、どうしよう、ゼノヴィア!?!」

「う、うむ。マズイな。これではフューリーと繋がりを持つというもう一つの目的を達せられそうに無い」

「そう思うなら今すぐ謝れ。もちろん、形だけじゃなく、心を込めてな」

イツセイ君。そんなヤツ等を氣遣う必要なんて無いのに……。僕としては、このまま先輩の怒りに触れてこの二人が破滅してくれた方がよかった。

そんな僕の願いもむなしく、二人はアーシアさんに向かって呆気無く頭を下げた。

「……すまない。アーシア・アルジェント。私達が間違っていた」

「あなたは主の慈悲の御心に正しく応えただけ。それに気付く事が出来なかった私達の罪をどうか許してください」

「そ、そんな……お二人とも、頭を上げてください。そう言っただけで私は……」

そう言うアーシアさんの目に、見る見る内に涙が溜まっていく。

「アーシア……」

「え、えへへ。おかしいですよ。教会の方にこうやって理解して頂いて嬉しいのに。涙が止まりません」

味方が一人もいなかった……。アーシアさんは前にそう言った。だからこうして教会の人間に自分の事を認めてもらえた事が本当に嬉しいのだろう。

その後、ゼノヴィアと紫藤イリナは逃げるようにオカルト部を出て行った。先輩の殺気を受けた事がよっぽど怖かったのだろう。けどその気持ちはわかる。

あれがフューリー……。神崎先輩の本気。

パーティー会場でライザー・フェニックスに向けたものとは訳が違う。並みの者なら一瞬で意識を失うであろう濃厚なそれを受け止めただけでも大したものだろう。教会の人間を褒めるなんて癪だね。

「……どうやら、他の連中よりは少しはマシなようだな」

神崎先輩の眩きがやけに大きく聞こえた気がした……。

第二十七話 満月の下で

・・・やっちゃまった。たった今オカルト部を出て行った紫藤さんとゼノヴィアさんの恐怖に歪んだ顔を思い出し、俺は深く後悔していた。

確かにアーシアに対する言葉は許せなかったけど、もう少し優しい言い方というものがあつただろうに。最後はちゃんと素直に謝ってくれたし。教会の人間というだけでいい感情を持って無かつたけど、話を聞くに、彼女達はこの街でバカやってる連中を止めに来たみたいだからな。特に幼馴染である紫藤さんを怖がらせた俺に兵藤君なんかは怒ってるかもしれない。

「すまない、兵藤君。キミの幼馴染に対してついキツイ事を・・・」
「い、いえ、むしろよく言ってくれました、先輩。いくらなんでも、さっきのはあいつらの言い過ぎです」

あ、そう？ それならいいんだけど。でも、しばらくこの街に滞在するみたいだし、もし再会したら、その時の様子次第ではフォローとか入れた方がいいかもな。

「・・・話は終わりですね。それじゃ、僕も行きます」

木場君が入口の扉に手をかけようとした所でグレモリーさんが止める。

「待ちなさい、祐斗！ コカビエルなんて大物が動いている以上、勝手な動きは許さないわよ！」

確か、墮天使なんだっけ？ そのコカビエルとかいうヤツ。ずいぶん偉い人物みたいだけど、騒ぎの元になるような物を持って来るのかな。・・・てか待てよ、もしかしてそいつが変態共のトップって事か？ ならそいつを何とかすれば、教会のクリーン化が一気に進む可能性もあるじゃないか！ よし、殺ろう。ぜったいに殺ってやろう。

「すみません、部長。ですが、フリードの物だけでなく、他の聖剣までもがこの地を集っている以上、僕はもう止まるつもりはありません」

冷静さの中に激情の籠った声でそう答え、木場君は出て行った。聖剣？ 木場君は教会に恨みがあるんじゃないのか？

『さあ、飲み込んで、僕のエクスカリバアツー!』

・・・よし、聖剣持つてるヤツ等全員ブチ殺そう。一瞬だけ頭に浮かんだヤバ過ぎるイメージに猛烈な殺意が湧いてしまった。ただ、紫藤さんとゼノヴィアさんもエクスカリバー(笑)を持つてるけど、彼女達は除外だな。根は良い子達みたいだし。何より女の子だし。

「ど、どうしました、リョーマさん?　なんか凄く怖い顔してますけど」

「ん?　ああ、連中にどう落とし前をつけさせてやろうか考えてたんだ」

待ってるよ、下劣な性職者(誤字にあらず)共。この騎士(笑)が、お前達の腰にあるそれを一本残らず砕いてやるからな!

「神崎君、あなたは祐斗の事情を知ってるの?」

「ああ。少しだけだが彼自身から教えてもらった」

「ツ!　そう・・・。そうね、あなたにならあの子も・・・。ねえ神崎君、祐斗が無茶しないよう、見てあげていてくれないかしら?　私の言葉じゃなく、あなたならもしかしたら・・・」

「わかった」

その日はそこで解散となり、俺はグレモリーさんとアーシアと一緒に帰宅した。その夜、夕飯の席でグレモリーさんから俺が教会の二人にした説教の内容を聞いて黒歌が大笑いしていた。

「あなたにも見せたかったわよ。神崎君の指摘に表情を変えるあの二人を」

「にやははは!　ざまみろにや!　ウチのアーシアを悪く言うからそういう目に遭うにや!　流石ご主人様、私達が気付かなかった事を平然と言つてのける。そこに痺れる憧れるにや!」

別に俺は人間止めてないし、ロードローラーを頭上から落としたりしないよ?　などと心の中でツツコミつつ、夕飯をパクつく自分を、アーシアがジツと見つめている事に、俺は気付かなかった。

入浴も済ませ、後は寝るだけとなった午後十一時過ぎ。唐突に部屋の扉がノックされた。誰だろう。大体、この時間に来るのは黒歌かグレモリーさんのどちらかだけだ。・・・何しに来るのかって?　別に

変な事じゃないぞ。ただ一緒にいたいからってベッドで並んで座って話をするだけだ。あんな綺麗な子達と同じ空間で二人きりとか緊張しかないけど、せつかくスキンシップを計ろうとしてくれる彼女達の優しさを無下にするなど出来ないの、アルⅡヴァンモードできりぬけてます。

おっと、いつまでも待たせてたら悪いな。入るよう促すと、ゆつくりと扉が開いた。けれど、その先に立っていたのは黒歌でもグレモリーさんでも無かった。

「アーシア?」

可愛らしい寝間着姿のアーシアがそこにはいた。ちなみに、今着ている寝間着は一番最初に一緒に出かけた時に買ったやつだ。

「すみません、リヨーマさん。こんな時間に」

「いや、構わないよ。とりあえず入ってくれ」

「はい、失礼します」

部屋に入ったアーシアを隣に座らせる。何やら話がありそうだなので、彼女が口を開くまで俺は黙って待っていた。すると少しして、アーシアが静かに話し始めた。

「・・・リヨーマさん。今日はありがとうございました。リヨーマさんが言ってくれた言葉、私、本当に嬉しかったです」

言葉って言う・・・やっぱあの説教の事か? あれ、以前グレモリーさんから神器について説明された時からずっと疑問に思ってたんだよな。というか、何で今まで誰もそれに気付かなかったのが俺には不思議だけど。

「前にも言ったかもしれないが、アーシアは間違った事はしていない。悪魔だろうがなんだろうが、目の前で消えそうになった命を救った事のどこが悪になる。何故教会の連中がそれを理解出来ないのかが俺にはわからない」

「・・・いいんです」

「え?」

「もういいんです。私は、こうしてリヨーマさんに理解して頂くだけでいいんです。私は、主への信仰を忘れてはいません。ですが、今は

こうしてリヨーマさんと一緒にいられる事が、ずっと大事で、幸せなんです。教会にいた時より、ずっと、ずっと……」

胸に手を当て、独白するアーシアを、俺はただ黙って見つめていた。「リヨーマさん、部長さん、黒歌さん、イツセイさん、オカルト部のみなさん、学校のみなさん、気付けばこんなにもたくさんの方々に囲まれて私はここにいます。ずっと一人だった私が、こんなにも素敵な方々と出会う事が出来た……。その奇跡を授けてくれたのは、主では無く、リヨーマさん……。あなたです。あなたが私を救ってくれたから、だから私は今こうしていられるんです」

……言葉が出ないってこういう事なんだな。この子が、こんなにも強い思いを俺に抱いていてくれたなんて。本当に、あの時変態共から彼女を救いだせて良かった。そうだ、この子はこれまでずっと辛い目に遭って来たんだ。だからこれからはうんと幸せになる権利がある。その為に俺が役立てるなら何でもするよ、アーシア。

とりあえず、もうキミに二度と手を出せないよう、この街にいる変態共のトップは絶対ぶつ潰してあげるからな！

「アーシア、キミはもう一人じゃない。これから絶対一人にさせない。俺に出来る事なら何でもする。ずっとキミは我慢して来たんだ。甘えたい時や寄りかかりたい時はいつでも言ってくれ」

感情を込めてそう言うと、アーシアは急にもぢもぢし始めた。いや、可愛いんだけど、どうしたの？

「あ、あの……。それじゃ、一緒に寝てもいいですか？」

「……え？」

ちよいちよい、今この子なんて言った？ 一緒に寝る？ 俺とアーシアが？ いやいや、それってマズイだろ。恋人同士でも無いのにそんな刺激的なイベント。

「そ、その、今日はリヨーマさんの傍にいたくて……。駄目……。ですか？」

「大丈夫だ、問題無い」

いや、実際は問題ありまくりだよ？ けどね、上目使い+赤い頬に俺の心のバリアは呆気無く貫通されちゃいましたよ。このコンボは

駄目だよ。オルゴン・クラウドでも防げないですよ。

「ほ、本当ですか！ えへへ、ありがとうございます」

エンジェルスマイルを浮かべ、アジアがいそいそと就寝の準備を始める。さあ・・・ここからが地獄（理性的な意味で）の始まりだ。

（覚悟はいいか？ 俺は出来てる）

電気を消し、いざという時の最終手段をいつでも発動出来るよう、そして、となりから聞こえる可愛らしい寝息に意識を向けよう、俺は一人素数を数え始めるのだった。

・・・

それから数日が経過し、今日は土曜日。俺は昼から変態共の搜索を行っていた。そして気付けば空に星が見える時間、俺は街外れの高台にやって来ていた。

そろそろ家に帰らないとな。早足で移動する俺の前に休憩所のような場所が現れた。そして、そこには一人の女性がベンチに腰かけていた。

こちらに背を向けて座っているので顔はわからないが、その長いダークシルバーの髪が月の光を浴びて輝く様についつい目を奪われてしまった。あれ、今の俺ちよつと変態っぽくない？

「・・・今日は満月ね。手を伸ばせば掴めてしまえそう・・・」

女性の独り言が耳に届く。うーん、なんか自分の世界に入ってるみたいだし、ここは邪魔しないようさっさと退散しようか。

「ねえ、あなたもそう思わない？」

言葉と共に、女性がこちらに振り向く。え、もしかしてさっきのつて俺に言ってたの？ てつきり気付いていないとばかり思ってたのに。

女性の碧い瞳が俺を捉える。予想通りというか、凄く綺麗な人だった。年は・・・見た感じ今の俺と近い気がする。

「この街は面白い。色々な力が集い始めている。ふふ、今から楽しみでしょうがないわね」

えっと、何の話だ？ 疑問符を浮かべる俺に対し、女性は小さく微笑みながら立ち上がる。そして、俺の方へ歩いて来ると、すれ違い様にこう言った。

「それじゃあね。今度は別の場所で会えるのを楽しみにしてるわ。・・・騎士様」

「ッ!?!」

瞬間、振り返った俺の前から女性は完全に姿を消していた。今の言葉・・・彼女は俺の正体を知っているのか？ え、何!?! もしかなくてもお化け!?! それじゃ、別の場所って・・・あの世!?! やだ怖い！ 美女っていうのが余計怖い！ よし帰ろう！ すぐに帰ろう！

薄ら寒い何かを感じつつ、俺は家に向かって全力で走り始めるのだった。

第二十八話 時にキミはSかMか？

紫藤さんとゼノヴィアさん。彼女達との再会は思った以上に早かった。夕飯の買い物に出かけた俺の前に、二人が並んで姿を現したのだ。

「む、フューリーではないか」

「あ・・・」

ゼノヴィアさんがまず俺に気付く。続いて目を合わせた紫藤さんがゼノヴィアさんの背中に隠れる。はあ、やっぱり前回の件が尾を引いているみたいだな。とりあえず、今からでも関係を修復しておかないと・・・。

「神崎亮真だ。出来れば名前で呼んでくれると助かる」

「ふむ、ならば神崎殿と呼ばせてもらおうか。それで、こんな所で何をしているのだ？」

「ああ、夕飯の買い出しに向かう途中だったんだ」

「夕飯？ まさか・・・あなたが作るのか？」

目を丸くするゼノヴィアさん。え、そんなに以外な事？

「おっと、すまない。別に変な事を考えたわけじゃない。伝説の騎士が料理を作る姿を想像して驚いただけだ」

まあ、周りから色々言われてますけど、中身は至って普通の人間ですからね。てか、さつきから紫藤さんが一言もしゃべらないのが気になるんですけど。

「紫藤さん」

「ひゃ、ひゃい!？」

思い切り裏返った声で返事しながら体をビクつかせる紫藤さん。いや、マジでトラウマ一步手前レベルになってない？

「先日は済まなかった。身内の事とはいえ、強く言い過ぎたと反省している。どうか、許してくれないだろうか」

スツと頭を下げると、紫藤さんが驚いているのが気配でわかった。

「あ・・・」とか「う・・・」とか、言葉になつてない声が途切れ途切れに聞こえて来る。

「イリナ。いつまで彼に頭を下げさせているつもりだ」

「え、あ、そ、そうね！ き、騎士様！ 頭を上げてください！」

ゼノヴィアさんに促され、紫藤さんがようやく言葉を発した。頭を上げると、苦笑いを浮かべているゼノヴィアさんと、真剣な面持ちの紫藤さんの顔があつた。

「騎士様、あの時のあなたの怒りは尤もだと理解しています。私達は目先の事実に関われ、その裏にあつた主の本当の御心に気付く事が出来なかつた。それを気付かせてくれたあなたにはむしろ心から感謝しています」

「そういうわけだ、神崎殿。あなたが気に病む必要は無い。・・・まあ、先程までのイリナの態度を見ていればそういうわけにもいかなかつたのかもしれないがな」

ニヤリという擬音が相応しい笑みを見せるゼノヴィアさんに対し、紫藤さんがどういう意味だと尋ねる。

「お前はさつきまで神崎殿に対し、怯えていた。それを察したからこそ、彼は謝つてくれたのだらうさ」

「なっ！ 別に私は怯えてなんか・・・！」

「ふん、どの口が言っている。これだからプロテスタントは・・・」

「ちよつと！ 今それは関係無いでしょ！ 何かあればすぐそうやって比べようとするのがカトリックの悪い所よね！」

「何だと、異教徒！」

「何よ、異教徒！」

えーつと、なんか突然宗教絡みのケンカが始まってしまったんだけど、どうしたらいいんだらう。おつかしいなあ。紫藤さんもようやく落ち着いてくれたみたいだったのに、ゼノヴィアさんの怯え云々のセリフからおかしな方向へ向かい始めたぞ・・・。

「・・・おいイリナ」

「何よゼノヴィア」

「このやりとり、最近した覚えがあるような気がするのだが。私の記憶違いか？」

「・・・奇遇ね。私もそう思ってたわ。具体的には・・・二時間くらい

前？」

おい！ 何からツツこんでいいかわからねえよ！ てか二時間前の記憶すらうろ覚えとかゼノヴィアさんヤバくね？ まだボケる年じゃないでしょうが。

と、とりあえず、ちよつと冷静になつてみるみだいだから、今の内に話を変えて意識を逸らせよう。・・・何で出会ってまだ数日しか経つて無い相手にこんなに気を遣つてるんだろう、俺・・・。

「ところで、ゼノヴィアさん達は何をしていたんだ？ 例の聖剣を奪つた犯人を探している最中だったとか？」

「ん？ ああ、実は先程まで悪魔・・・いや、ドラゴンと呼ばせてもらおうか。その力を宿す少年達と話をしているな。彼の提案で今回の件について協力体制を取る事となつたのだ」

ドラゴンの力？ ・・・それって、もしかして兵藤君か？ けど、悪魔である彼と協力するのって彼女達からしたらあまり好ましくないんじゃない・・・。

「元々、私達二人だけで聖剣を三本も回収するのに加え、あのコカビエルを相手にする等ほぼ無理だと思つていた。そこへ現れた協力の話。任務の成功確率を一パーセントでも上げる為なら、私は手段は選ぶべきでは無いと思つている」

その話に、俺は感心していた。目的達成の為なら仲が悪い相手とも力を合わせる。その柔軟な考えは素直に凄いと思う。嬉しいな。アーシア以外にもまともな人間がいたなんて。

「それと、『聖剣計画』の被験者である少年とも手を組む事となつた。名前は・・・確か木場と言つたか？ 随分と渋つていたが、彼と後輩の女の子の説得で一応の了解をしてくれた」

そうか、木場君が・・・。あんなに誰も寄せつけようとしなかったのに。それを説得するなんて。兵藤君には交渉人の素質が・・・。いや、違うか。きっと彼の木場君を思う心が届いたんだらうな。やはり、偉そうな先輩よりも、友達の言葉の方がよかつたんだらうなあ。

にしても、『聖剣計画』か・・・。具体的な内容は教えてもらつてないけど。幼い子ども達に手を出すような連中が考える計画なんてど

うせクズみたいな中身なんだろうな。

「あの・・・出来れば騎士様にも協力してもらおうと嬉しいんですけど」
紫藤さんが躊躇いがちにしながら上目使いでそう言ってきた。答えはもちろんイエスだ。

「俺でよければ喜んで力を貸すよ」

「あ、ありがとうございます！」

紫藤さんが心から嬉しそうな笑顔で頭を下げる。うーむ、ここまで喜んでもらうと、何も役に立てなかった・・・なんて事にならないようしっかりと頑張らないとな。

「いいのか？ 私達の事情に巻きこんでしまつて？」

「ああ、構わない。・・・個人的に、今回の首謀者に報いを受けさせてやりたいからな」

ホント、同じ墮天使なのに、レイナーレさん達とはえらい違いだな。今度はグレモリーさんが（社会的に）消そうとしても俺は止めんどぞ。

思わず表情を引き締めると、ゼノヴィアさんと紫藤さんの顔がまたしても凍りついていた。なんで？ 今回はキミ達に対して何か怒つたわけじゃないよ？

「な、なんて殺気・・・。いったい騎士様とコカビエルの間になんか・・・」
「わ、わからない。だが、コカビエルの行いが彼の逆鱗に触れてしまい、最早激突は免れない事は確かだろうだ」

ヒソヒソ話で盛り上がる二人。なんだよ、俺も混ぜてくれよ。こうやって発言すると、たまにグレモリーさん達も同じ様にヒソヒソ話するから気になるんだよ。不思議だよなあ。そんなに変な事言っているつもりはないんだけどなあ。

「何か気になる事でもあるのか？」

「い、いや、こちらの話だ。とにかく、感謝する。この協力を機に、教会とあなたとで良い関係を築きたいものだ」

「・・・俺としては、教会では無く、キミ達二人と関係を築きたいんだがな」

あんな変態連中と仲良くするなんて絶対に嫌だ。その点、ゼノヴィアさんと紫藤さんはまともで真面目な子達だからな。何かあつたらきつと力になってくれるはずだ。

そういう意味を込めての発言だったが、眼前の二人の様子がおかしい。ゼノヴィアさんは戸惑っているみたいだし、紫藤さんは頬が赤い。

「・・・イリナ、私達は口説かれているのか？」

「ふえっ!? そそそそそ、そんな事聞かないですよ！」

「う、うむ、こんな事を言われたのは初めてだからな。正直どう反応したらいいのか・・・」

「まあ、あくまでも俺の希望だからな。そこまで真剣に考えてもらわなくてもいいさ。ただ、俺はそう思っているという事だけ覚えておいてくれ」

変態共を一掃する・・・。教会という組織と友好的な関係になるのはそれが済んでからだ。

「わ、わかった。胸の内にも秘めておくよ」

「わ、私も・・・」

それはよかった。満足した俺はそれから少しだけ彼女達と雑談を交わし、その場を後にした。よし、それじゃあ面白い物に行きますか。

・・・

それから三日ほど経った。放課後、一人帰り道を歩いている途中、公園から悲鳴と共に、何かを激しく叩く音が耳に届いた。

「うわーっ！ 済みません、会長！ 許してくださいっ！」

これって・・・匙君の声だよな？ なんかももの凄い涙声なんですけど。・・・見に行った方がいいよな。そう判断して公園に入った俺の目に飛び込んで来たのは、四つん這いになった匙君と、その彼の尻を連打している支取さんの姿だった。他にも、グレモリーさんと兵藤君、それに塔城さんもいる。あらやだ、何この混沌空間・・・。

「・・・何をしているっ！」

今の状況でこれ以外に言う言葉があるだろうか？ いや、無いね。俺の声に反応したみんなが一齐にこちら振り返る。その中で、支取さんがいち早く口を開いた。

「か、神崎君!? こ、これはですな・・・!」

おお、ものつそい狼狽してる。ならこんな人目のつく所でやらなければいいのに。

「支取さん。個人の趣味趣向についてとやかく言うつもりは無いが・・・流石に外でするような事では無いと思うぞ」

「ち、違——!」

「か、会長! さあ、もつと叩いてください! 俺を! 俺だけ」

突然活き活きと尻を振り出す匙君。キミ、さつきまで止めて欲しがってたよね? しかも、妙に自慢気というか、得意気というか。え、もしかしくなくてもMなの?

「サ、サジ!? あなた何を・・・!?!」

「そうさ! 会長のお仕置きは今は俺だけの物だ! たとえアンタにだって渡しはしねえ! ははは、羨ましいツスか先輩!」

うわっ、もう決定的だ。匙君はM、はつきりわかんだね。けど、俺はノーマルだからね? 羨ましいとか全く思っただけよ?

「匙、お前ってヤツは・・・」

そして兵藤君は何でそんな戦友を見送る様な目で匙君を見てるのかな? ……ま、まさか、兵藤君もMなのか? だから同じ性癖を持つ者同士で通じ合うモノがあるとか?

「い、いいかげんにしなさいなああああああ!!」

「みぎやあああああああああああ!!」

鞭のようにしなった支取さんの手が、匙君の尻に直撃する。ドバチーン! というド派手な音と共に匙君が悲鳴を上げる。

「・・・ドン引きです」

「そういえば、神崎君はSなのかしら、それとも・・・どっちにせよ、応えられる様にしておかないと・・・」

塔城さんがゴミを見る様な目で匙君を見つめている。駄目だぞ塔

城さん。彼にとってはそれもご褒美になっちゃうぞ？　そしてグレ
モリーさん。俺がSかMかは今関係無いと思うな。

既に薄暗くなり始めている空を見上げ。俺は心の中でもう一度呟
いた。

・・・何このカオス、と。

第二十九話 もう・・・ブチ切れてもいいよね？

匙君の悲鳴をBGMにしつつ、とりあえず兵藤君に事情を聞いてみた。

何でも、教会の二人と協力出来るようになってから、夕方は兵藤君、木場君、塔城さん、そして匙君の四人でクレイジー神父の行方を捜索していたそうだ。

そしてほんのついさっき、目的のクレイジー神父と遭遇し、とっ捕まえようとしたらしい。さらにそこへゼノヴィアさんと紫藤さんも合流し、捕獲まであと一歩といった所で、逃げられてしまったそうだ。

しかも、その途中で、木場君と因縁のあるバルパーとかいうヤツまで現れて大変だったみたい。木場君とゼノヴィアさん、そして紫藤さんの三人はすぐさま追いかけて行ってしまっただけにはいない。そうやって残された兵藤君達の元へ、グレモリーさん達が何事かと確認。勝手な行動を取った事へのお仕置き最中に俺、参上。ここまですが一連の流れだった。

「なるほど。だが、そうなると木場君達が心配だな」

「ええ、そうね。今からでも探しに行った方がいいかしら」

「いや、もう夜になる。グレモリーさんや塔城さんは帰った方がいい。兵藤君と匙君も疲れているみたいだしな。ここは俺が探してみるよ」「わかったわ。なら私は何があっても大丈夫なように準備しておくから」

「気をつけてください、先輩」

「先輩、俺もいつでも動けるようにしておきますから、木場の事頼みますー！」

「ああ、その時は頼りにさせてもらうよ」

それからすぐ、俺はみんなと別れて木場君を探しに行こうとしたのだが、グレモリーさんに引き止められた。流石に一人だと心配だから猫モードの黒歌を連れて言ったらどうかと提案された。というわけで、俺は一度グレモリーさんと自宅へ帰り、黒歌へ事情を説明。猫モードの彼女を肩に乗せ、改めて木場君を探しに出かけた。

「ご主人様、どこから探すにや？」

正直、全く見当がつかない。逃げた相手を追ったんだから常に移動してるだろうし。うん、こうしてあれこれ考えるよりもとにかく歩きまわった方がいいな。

「しらみつぶしだ。濟まないが付き合ってくれ、黒歌」

「了解にや。墮天使や教会の連中に、白音の住む街で好き勝手させないにや」

やる気に溢れる今のセリフだけで、彼女が塔城さんをどれだけ大切に思っているか何となくわかった。早く二人が和解出来るよう、俺も出来るだけの事をしてあげたいな。

その為にも、今は木場君を探さないとな！俺は気合いを入れ、走り始めた。

・・・

それから十分が経過し、三十分が過ぎ、一時間が経った。今の所、木場君どころかゼノヴィアさんも紫藤さんも見つかっていない。それでも根気よく探し続けていると、時刻は既に午後九時四十分を過ぎていた。辺りはすっかり真つ暗だ。そして、気付けば俺は、いつぞやの高台にまでやって来ていた。

「・・・まさか、こころも見つからないとはな」

流石にマジで心配になって来た。木場君もだが、ゼノヴィアさんと紫藤さんは女の子だ。しかも二人とも可愛いし綺麗だ。もし変態共が変な事を考えてたりしたら・・・。その時は本気で潰してやろう。

「ご主人様、そろそろ戻——」

そう黒歌が口を開いた刹那、彼女は突然人の姿になると、ネコミミも尻尾も逆立て、街の方へ鋭い視線を向けた。

「こ、この圧倒的な力の気配は・・・!!? しかもすぐそばにあの子の気も・・・!!」

ただならぬ様子の黒歌に声をかけようとしたとたん。彼女は猛烈な速度で走り始めた。

「黒歌!？」

「ご主人様! 白音が危ない! アイツが・・・コカビエルが出て来たにや!」

え、マジで!? ついに変態共のトップがお出ましなのか!? さっきの彼女にならって街の方へ目を向けると、遠くの方で見るからに危なそうな光が発生していた。あれって・・・もしかしくなくても学園の方か?」

「私は先に行くにや! 絶対、絶対あの子は守ってみせる! 私の命にかえても!」

何気に今のつて死亡フラグ? いやいや、まさか!・・・むう、なんか猛烈に嫌な予感がしてきたぞ。これは俺も急いだ方がいいかも。既に豆粒ほどの大きさになってしまった黒歌に続き、俺は学園へ向かって全速力で走り始めた。

S I D E O U T

イツセーS I D E

「・・・ずつと、ずつと思っていたんだ。どうして僕が、僕だけが生き残ってしまったのかって・・・」

遂に姿を現したコカビエル。駒王学園での決戦の最中に語られたバルパーのクソ野郎の過去の所業。ヤツは木場の仲間達を殺した。聖剣を扱う為に必要な因子・・・たったそれだけの物を手に入れる為に。

全てを話したバルパーは、木場の仲間達から抜いた因子の結晶を木場に投げた。好きにしろと。もうこんな物は必要無いと。人の命を奪ってまで手に入れた物を、最早ゴミだと言わんばかりに。

木場が涙を流しながらそれを拾い上げた。・・・その時だった。因子の結晶が光を発し始めた。それは徐々に大きさを増して行き、やがてその光は小さな人の姿へと形を変えた。

俺にはわかった。あれは・・・あの子達は木場の・・・。

傍にいた朱乃さんが言う。今この戦いの場に渦巻く力が、あの結晶から彼らの魂を解き放つたと。

「僕よりも夢を持った子がいた……！ 僕よりも生きたかった子がいた……！ なのに僕だけがこうしてのうのと生きて……！」

……違う。違うよ木場。その子達の顔を見てみるよ。お前を羨んでるように見えるか？ お前を恨んでいる様に見えるか？ 違うだろ！ その子達は笑ってるだろ！ お前が生きている事を喜んでくれているだろ！

「……自分達の事はもういい。キミだけでも生きてくれ。……そう言っています」

朱乃さんが彼らの言葉を代弁する。ようやく彼らの思いが届いたのか、木場の目から涙が溢れ始める。そして、仲間達の口が一斉に動き出す。木場もそれに合わせて口を動かす。

「あれは……聖歌です」

アーシアが呟く。聖歌……それは、『聖剣計画』という辛い実験の日々の中で、彼らが夢と希望を持ち続ける為の手段。今幼子のような無垢な笑顔を見せている木場も、きつと当時は……。

『僕らは、1人ではダメだった——』

『私たちは聖剣を扱える因子が足りなかった。けど——』

『皆が集まれば、きつとだいじょうぶ——』

ツ……！ 聞こえる！ 俺にも彼らの声が……！ 彼らの声を聞いている内に、俺は自然と涙を流していた。俺だけじゃない、アーシアもだ。あの子にもきつと、彼らの歌が特別に聞こえるんだろうな……。

『聖剣を受け入れるんだ——』

『怖くなんてない——』

『たとえ、神がいなくても——』

『神が見ていなくても——』

『僕たちの心はいつだって——』

「——ひとつだ」

仲間達の魂が天へと昇り、それは一つの大きな光となって木場の元へ降りる。そして、木場の体をどこまでも優しく、温かな光が包みこんだ。

——相棒。

ド、ドライブグ!? どうしたんだよこんな場面で! 先輩とライザールの戦いからずっと黙ったまんまだから心配してたんだぞ!

——スマン、あの時の俺はどうかしていた。もう大丈夫だ、問題しか無い。

そ、そうか。それなら・・・え?

——それよりもあの『騎士』だ。所有者の思いや願いがこの世界の『流れ』にすら逆らった時・・・神器は至る。そう・・・禁手だ。ツ・・・! それって俺の『赤龍帝の鎧』と同じ・・・!

——そうだ。ヤツは至った。もうあの『騎士』は今までの『騎士』では無い。相棒。うかうかしていると追い越されるぞ?

そつか・・・。木場、やったな。あの子達はずっとお前の中で生き続ける。それに俺達だっている! オカルト部のみんながお前を支えてやる!

「木場ああああああ!!! お前はもう一人じゃねえええええええ!!! だからお前が! お前の手で! エクスカリバーをブチ壊せええええええええ!!!」

「そうよ、祐斗! やりなさい! 自分の手で全てに決着をつけなさい! エクスカリバーを越えるのよ! あなたなら出来る! 私の『騎士』はエクスカリバーごときに負けるはずが無い! そうでしょ、祐斗!」

「祐斗君、信じてますわよ!」

「祐斗先輩・・・!」

「全力で応援させて頂きます!」

俺だけじゃない! みんなだってお前を信じてる! だから見せてやれ、木場! あの人を人とも思わないクソ野郎に! お前を失敗作なんていいやがったあのクソ野郎に! お前と、お前の仲間達の思いと力を!!

「・・・ありがとう。みんな。ならば僕は・・・剣になる。僕を想ってくれる部長や仲間達を守る為に。何ものにも負ける事の無い、最強の剣にツ!!」

木場の想いに応えるように、あいつの神器が変化していく。元々の闇色のオーラに、あの子達の光が混じり合い、一つになる。あれが、あれこそが木場の禁手……!

「禁手……『双覇の聖魔剣』。聖と魔……その二つを有する剣の力、その身で受けるといい!」

神々しい光と禍々しい光。まさに聖魔剣というに相応しいその一本の剣を手に、木場はフリードへ襲い掛かった。ヤツはイリナから奪った一本を含めた四本のエクスカリバーを合体させた物で木場の攻撃を受け止めるが、木場の剣がフリードの剣のオーラを瞬く間に飲み込んでいく。それに驚愕しつつ反撃するフリードだが、木場はそれを完璧と言っているいい動きで全て避けてみせた。

「すげえ、マジで今の木場って無敵モードじゃね? あのフリードがまるで相手になってねえ。そこへさらにゼノヴィアが、デュランダールというトンデモ秘密兵器を解放して乱入する。これにはバルパードころかコカビエルまでも驚いていた。」

「感謝するぞ、フリード・セルゼン。お前のおかげで、デュランダール対エクスカリバーという頂上決戦が出来る。はは、歓喜で体が震えそうだ! せいぜい一太刀目で死んでくれるなよ!」

「……もしかしなくても、あの人戦闘狂? 目がマジじゃないですかやだー! 等と思いつつ見守る俺達の前で、木場とゼノヴィアは確実にフリードを追い詰めていた。」

そして……。

「チエックメイトだ!」

木場が聖魔剣を一閃させる。直後、フリードのエクスカリバーが甲高い金属音を発しながら根元からへし折れた。

「ば、馬鹿な、エクスカリバーが……!?!」

驚愕で固まるフリードに、木場は容赦無く剣を振り降ろした。肩から脇腹まで深々と切り裂かれ、フリードがその場に崩れ落ちる。

「……やったよ、みんな。僕らの力は今……エクスカリバーを越えたんだ!」

天に向かって剣を掲げる木場。その叫びは、天国に在るであろう仲

間達へ勝利を届けようとしているかのようだった。おめでとう、木場。しつかり見せてもらったぜ。お前とお前の仲間達の完全勝利を！

そんな木場に対し、バルパーが信じられないといった様子で顔を強張らせていた。

「せ、聖魔剣だ?!? そんな事が……。聖と魔……。反発しあう二つの要素が何故……」

「さあ、バルパー・ガリレイ。覚悟を決めてもらう」

木場がバルパーに剣を向けても、ヤツはブツブツと呟いている。と思っていたらバルパーが突然閃いたように叫んだ。

「……そうか！ そういう事か！ 聖と魔のバランスが崩れたのだな！ それならば説明がつくぞ！ つまり、過去の対戦で魔王だけではなく神も……」

「そこまでだ、バルパー」
「なっ!?!」

バルパーの言葉は最後まで続かなかった。ヤツの胸を貫く光の槍がその命を刈り取ったからだ。倒れ伏したバルパーに向かい、ヤツを殺した張本人……。コカビエルが口を開く。

「バルパー。お前は確かに優秀だった。だからこそそれに気付いたのだろうが……。残念だな、最早お前は必要無い。いや……。最初から俺だけでもよかったんだよ」

こいつ……。協力者をこんな躊躇いも無く殺せるのか!? たった今起きた惨劇に固まる俺達の前で、コカビエルが静かに大地へと舞い降りる。

「ふん、雑魚共の相手をするつもりは無かったのだがな。おいリアス・グレモリー。この地にはあのフューリーがいると聞いている。だからこそ俺はこの地を選んだのだ。ヤツはどこにいる?」

「ッ！ テメエ、目的は神崎先輩か！」

「神崎?。ほお、フューリーの本名は神崎というのか」

何を感じているのか頷くコカビエル。確かに先輩は今ここにいない。けど、あの人の事だ。きつと全速力でこっちに向かつてるはず

だ。

「彼の手は煩わせない。コカビエル、あなたはここで私達が倒す！」

部長の言う通りだ。先輩がいればきつとコカビエルも余裕で倒せる。けど、それじゃ駄目だ。あの人にばかり負担を掛けさせるわけにはいかない。そして俺自身、いつかあの人と肩を並べて戦えるように、強くならないといけない。コカビエル。テメエ相手に立ち止まってるわけにはいかないんだよ！

「・・・吠えるなよ小娘」

「ツ!? う、うわああああああああ?!!?!」

イラつきの混じった声と共に放たれた衝撃波。たったそれだけで、俺達は容易く吹き飛ばされてしまった。加えて、全身に何かで切り裂かれたかのような切り傷が出来ていた。

「今の兇戯に耐えられないお前達が、俺を倒せると思ってるのか?」

これが・・・これが、墮天使の幹部の力だつてののかよ! 悔しきで拳を握り締める俺達に向かって、コカビエルが憐れみの感情を込めた声をかけて来た。

「それにしても、仕えるべき神は既に死んでいるというのに、お前達はよく戦うものだな」

・・・え? 今、アイツなんて言った? 神が死んでる? それってどういう事だよ?

「どういう意味かしら?」

部長の返しに、コカビエルは嘲笑うように再び口を開いた。

「ハハハ! まあ、知らなくて当然だな。神が死んだなどと誰も言えないからな! 人間は神がいなくては心の均衡と定めた法も機能しない不完全な集まりだ! 我ら墮天使、悪魔さえ下々にそれらを教えるわけにはいかなかった。どこから神が死んだと漏れるかわかったもんじやないからな。三大勢力でもこの真相を知っているのはトップの一部の者達だけだ。先ほどバルパーが気づいたようだがな」

誰もが言葉を失う。それを見てコカビエルはさらに喜悦に顔を歪ませながら続ける。

「戦後残されたのは、神を失った天使、魔王全員と上級悪魔の大半を

失った悪魔、幹部以外ほとんどを失った堕天使。最早、疲弊状態どころじゃなかった。どこの勢力も人間に頼らねば種の存続ができないほどまでに落ちぶれたのだ。特に天使と堕天使は人間と交わらねば種を残せない。堕天使は天使が堕ちれば数は増えるが、純粋な天使は神を失った今では増えることなど出来ない。悪魔も純血種が希少だろう?」

マジか・・・マジで神は死んでんのか?・・・おい、待てよ。それじゃ、施設にいた木場は何を信じて・・・。アーシアやゼノヴィアは、イリナは今まで何を信仰してたつていうんだよ!?

「そんな・・・嘘だ・・・嘘だろう・・・」

少し離れた場所にいたゼノヴィアが力無く崩れ落ちる。俺でさえ衝撃だったんだ。彼女のショックは計り知れない。

「正直に言えば、もう大きな戦争など故意にでも起こさない限り、再び起きない。それだけ、どこの勢力も先の戦争で泣きを見た。お互い争う大元である神と魔王が死んだ以上、戦争継続は無意味だと判断しやがった。アザゼルの野郎も戦争で部下を大半亡くしちゃったせいか、『二度めの戦争はない』と宣言するしまつだ! 耐え難い! 耐え難いんだよ! 一度振り上げた拳を収めるだど!? ふざけるなツ!

あのまま継続すれば、俺たちが勝てたかもしれないのだ! それを奴はツ! 人間の神器所有者を招き入れなければ生きてはいけぬ堕天使どもなど何の価値がある!」

「主がない・・・。主が死んでいる・・・。ならば、ならば、私達に与えられる愛は・・・」

「そうだ。神の守護、愛がなくて当然なんだよ。神はすでにいないのだからな。ミカエルはよくやっている。神の代わりをして天使と人間をまとめているのだからな。まあ、神が使用していた『システム』が機能していれば、神への祈りも祝福エクソシストもある程度動作する。ただ、神がいる頃に比べ、切られる信徒の数は増えたがね。その聖魔剣の小僧が聖魔剣を創りだせたのも神と魔王のバランスが崩れているからだ。本来なら、聖と魔は交じり合わない。聖と魔のパワーバランスを司る神と魔王がいなくなれば、様々ところで特異な

現象も起こる」

愛は存在しない。神はもういないのだから。アーシアが絶望するには充分過ぎる理由だった。

「俺は戦争を始める、これを機に！ お前たちの首を土産に！ 俺だけでもあのときの続きをしてやる！ 我ら墮天使こそが最強だとサーゼクスにも、ミカエルにも見せ付けてやる！」

「ぞっけんなあ!!」

限界だった。こいつにこれ以上しゃべらせたくない。俺はありつたけの大声を出しながらコカビエルを睨みつけた。

「テメエの勝手な都合でこの街を、みんなを消させてたまるかよ!! 今度こそ、どんなヤツが相手だろうと、絶対に仲間を守る！ あの時、俺の代わりにライザーから部長を救ってくれた先輩に・・・俺はそう誓ったんだ!!!」

それに、俺はハーレムを作るんだ！ まだ見ぬ女の子達の為に、俺はまだ死ぬわけにはいかねえんだよ!!

「ふん、威勢だけは立派だと評価してやろう。だが、気合だけで全て片付けられる等とは思うなよ？ それよりもフューリーだ。そうだな・・・とりあえず、貴様等の内の誰か一人でも殺せば、フューリーも本気になってくれるだろうか？」

背筋が凍りそうなほどの冷たい微笑と共にコカビエルがターゲツトにしたのは・・・小猫ちゃんだった。

「まずは貴様だ。俺とフューリーの戦いの為に死ぬ」

小猫ちゃんは逃げようとするが、吹き飛ばされたダメージが抜け切っていないのか立ち上がれない様子だった。

「逃げなさい、小猫！ 早く！」

部長の悲鳴にも似た叫びに、小猫ちゃんは這いながらコカビエルから離れようとする。駄目だ！ そんなんじゃ意味が無い！

「ふんっ！」

コカビエルの放った光の槍が一直線に小猫ちゃんへ迫る・・・その時だった。突然の声で俺の耳に届いたのは。

「白音

!!!」

黒い何か……。それが小猫ちゃんの前に立ち塞がり、その身に光の槍を食い込ませるのだった。

イツセーSIDE OUT

小猫SIDE

……目の前の出来事が信じられなかった。コカビエルは私を殺そうとした。なのに、どうして私は生きているの？ どうして、目の前の人物のお腹に槍が刺さっているの？ どうして……その人物が黒歌姉様なの？ どうして？ どうして？ どうして!?

「ご……ふ……」

「姉……様……?」

大量の血を吹き出す姉様に、私はただそう呼ぶ事しか出来なかった。そんな私に、姉様は遠い昔の記憶の中にある笑顔をそのまま私に向けて来た。

「にや、にやは……は……。間に……。合つ……。て、よかつ……。

白……。音……。ケガ……。は……」

「ね、姉様……? 本当に姉様なの? どうして、どうしてここに……」

「そん……。なの……。ぐうっ! 白音の事が……。心配……。がはっ! だったからに決まって……。ぐふっ!」

しゃべりながら、姉様の口からは血が溢れ続けている。槍の刺さったお腹からも、血と共に煙が立ち上り始めている。

「ね、姉様! あ、ああ、血が! こんなにたくさんの血が……!」

「こん……。にやの……。今までの……。白音の辛さに比べたら……。ゴメンね……。駄目なお姉ちゃんゴメンね……」

姉様の目から徐々に光が失われていく。それは間違い無く“死”へ近づいている証拠だった。

「い、嫌……。! 嘘です! 嘘ですよね姉様! 死なないで! 死なないでください姉様!」

せつかく再会出来たのに! 言いたい事だっていっぱいあるのに! また私を置いて行ってしまいませんか! もう嫌です! 一人ぼっちは嫌です!

「姉様あ！ 私を・・・私を一人にしないでええええええええええ!!!」
誰でもいい。私に出来る事なら何でもします。だからこの人を・・・
姉様を助けてください!!

「・・・そうだと、黒歌。せつかく再会出来たのに、すぐにお別れなんて俺が許さないぞ」

「え？」

背中越しに届く優しい声。それが聞こえたと思った次の瞬間、姉様の体を不思議な光が包みこんだ。そしてそれが治まった時。そこには出血どころか、掠り傷一つ負っていない姉様の姿があった。

「どうやら間に合ったようだな・・・」

声の正体。それは、神崎先輩だった。振り返った私に対し、先輩は満足気な笑みを向けて来た。

「先輩・・・。あなたが、姉様を・・・」

いや、聞かなくてもわかる。きっとこの人が姉様を助けてくれたんだ。まず抱いたのは安堵。そして次に抱いたのは、先輩に対する心からの感謝の気持ちだった。

「先輩・・・ありがとう・・・(ぎゅ)・・・」

ちゃんとお礼を言いたい。なのに、後から後から出て来る嗚咽がそれを邪魔する。そんな私を、先輩はわかっているという表情をしながら優しく頭を撫でてくれた。

けれど、その優しい顔は次の瞬間豹変していた。先輩はコカビエルに向かって能面の様な顔を向けた。

「・・・貴様がコカビエルか」

「ああ、そうとも！ そういう貴様がフューリーだな！ 待っていたぞ！ さあ、俺と心ゆくまで戦ぐあつ!？」

コカビエルの言葉は強引に中断させられた。瞬間移動・・・。正にそうとしか言えない方法で、先輩がコカビエルの眼前に出現、その顔面に向かって恐ろしい速度で膝蹴りを受けた事で。

白い何かを口から出しながら、コカビエルが吹き飛ぶ。だけど先輩はそれを逃がさない。またしても瞬間移動すると、コカビエルの胸倉を掴み、顔面に拳を叩きつける。

「ぎッ!?!」

「答えろコカビエル。貴様、黒歌に何をした？　なあ、何をしてくれたんだ？」

淡々とした口調。それが逆に私の背筋を凍らせた。今の先輩は怒りという感情が振りきれてしまい、逆に冷静な状態になっているんだと思う。だって、こうして私から見える先輩の背中から、燃え盛る様な激しいオーラが立ち上っている様に見えるから。

「答えろよコカビエル。よりにもよって塔城さんの目の前で、黒歌に何をしたんだ？　貴様というヤツは一体どこまで俺を怒らせたら気が済むんだ？　それが貴様の趣味だとも言うのか？　おい、聞いているのか？　いいから答えろコカビエル!!」

あ、あの・・・先輩。そんな殴つたらしやべりたくてもしやべれないんじゃない・・・。けど今の空気では口に出して言う事でもないのだからで、心の中で呟く私。

「ぐぶっ!?!　え、ええい、調子に乗るなああああああ!!」

顔を腫らし、鼻血を流したままコカビエルは上空へ逃げる。

「せ、先輩・・・」

イツセー先輩が小刻みに震えている。当然かもしれない。私達を圧倒したコカビエル。そんな存在をたった数秒であそこまで傷付けた神崎先輩に、味方ながら恐ろしさを感じたのかもしれない。

「限界だよコカビエル。貴様はやり過ぎた。貴様と、貴様に関わった者達の所為で悲しみ、傷付いた人達の為・・・貴様はここで終わらせる!!」

トクン・・・！　と、一瞬だけ心臓が跳ねた気がした。なんだろう、たった今、勇ましくコカビエルに向かって叫ぶ先輩の姿に、妙な気分になってしまった。

「にやはは、やっぱりご主人様はカツコいいにゃ」

「ッ！　姉様!」

起き上がった姉様を抱きしめる。伝わってくる温もりが、これが夢ではない事を証明してくれた。

「白音、もう大丈夫にゃ。ご主人様がいれば、あんな墮天使ちよちよい

のちよいにや」

「え？ あ、は、はい。そうですね。ところで、何で姉様は神崎先輩の事をご主人様って……」

「それは後で話すにや。今は一緒に、ご主人様の戦いを見守る事にするにや」

「わ、わかりました」

どつちにしろ、この戦いを終わらせないと落ちつく事も出来ませんしね。その言葉に従い、私は姉様の隣に座って先輩の戦いを見守る事にした。

(どうか、先輩に勝利を……)

神は死んだ。それに私は悪魔だ。だからそれ以外の何かに、先輩の勝利を祈る事にしよう。

——安心しいや〜!

……空耳だろうか？

第三十話 やめたげてよお!

イツセイSIDE

やべえ……。あのコカビエルがボコボコだよ。ただ淡々と殴り続けるとかトラウマだよ。今ほど先輩が味方でよかったと思う時は無いわ……。

しかも、小猫ちゃんを助けたセクシーなお姉さんの致命傷レベルの傷を一瞬で治してしまった。あの人に不可能って無いのだろうか？ やろうと思えば月とかぶっ壊せるんじゃないかねえのか。ははは、まさか……。出来ませんよね、先輩？

顔面を變形させられ、射殺さんばかりに睨みつけて来るコカビエルを無視するように、先輩は俺と木場の方へ悠々と歩いて来た。

「せ、先輩。あの女の人は？ 何がどうなって……」

「後で全部話すよ。だから今は、あの男を倒すのに協力して欲しい」

「お言葉ですが、先輩。僕達は先程コカビエルに手も足も出ませんでした。そんな僕達と一緒に、かえって先輩の足手纏いに……」

……。悔しいけど、木場の言う通りだ。ここで俺達が余計な真似をするよりも、先輩に任せられた方が……。

「甘ったれるな!!」

鋭い怒声に思わず背筋が伸びる。え、先輩、怒ったのか？ というか、何気に先輩に怒られたのって初めてだったりする？ そんなどうでもいい事が頭に浮かぶくらい、俺には予想外な事だった。

「何故諦める！ どうして抗おうとしない！ 最初から勝つ気の無い者が勝てるでも思っているのか！」

「ツツ!」

先輩の言葉が深く胸に突き刺さる。勝つ気が無い。……そうだ、俺はほんの数秒前までそう思っていた。俺は先輩に任せようとした。けど、それは、先輩を信頼してるからじゃない。俺は先輩に甘えようとしたんだ。この人ならやってくれると。俺は戦わなくていいと。先輩に何もかも押しつけようとしたんだ。

……馬鹿か。馬鹿なのか俺は！ さっきコカビエルになんて言っ

た！俺がみんなを守るって言ったばかりじゃねえか！それなのに戦わないだど!? テメエは何様だ兵藤一誠！こんなんじや、いつまで経つてもこの人と・・・先輩と肩を並べて戦えるようになるなんて夢物語で終わっちまうぞ！

逃げるな！立ち向かえ！ここが俺の運命の分かれ道だ！俺がもつと強くなれるか、それとも永遠に弱者のままか。それを決めるのが今だ！

「先輩、俺は・・・！」

「信じろ、キミ達自身の力を！信じろ、共に戦う仲間を！信じろ、俺を！」

体が熱い。消えかけていた闘志の炎が瞬く間に激しく燃えあがる。拳を握りしめ、木場と見つめ合う。俺を捉えるその目が燃えている。アイツも俺と同じ気持ちのようだ。

「・・・やります。やってやります、先輩！今度こそあの野郎をぶん殴ってやります！」

「僕もです、先輩。この命・・・あなたに預けます！」

俺達の決意に、先輩は満足気に頷くと、コカビエルの方へ顔を向けた。

「良い返事だ。ならば、一誠！祐斗！俺について来い！」

「うつつ！・・・て、先輩、今俺達の事・・・」

先輩が振り返る。その顔に不敵な笑みを張り付けて。

「これから共に戦う仲間だ。名前で呼ばせてもらっても構わないだろう？」

「ツ・・・！」

カ、カツケエエエエエエ！なんだよそのセリフ！今言うの反則だろ！俺が女だったら一瞬で惚れてるね！

「リアス！朱乃！援護は任せた！黒歌！小猫！キミ達は離れている！」

「え、あ、は、はい！」

「・・・朱乃・・・今確かに私の事を・・・」

「了解にゃ！」

「わ、わかりました！」

先輩の声にそれぞれ反応する部長達。その中で朱乃さんの様子がちよつとおかしい。うつすら頬を上気させながらブツブツ呟いてる。なんか怖いんですけど……。

「ところで、彼女達はどうしたんだ？」

先輩の視線の先には、未だにショックから立ち直れていないアーシアとゼノヴィアがいた。俺は手短かに事情を説明した。それを聞いた先輩が二人に声をかける。

「アーシア！ ゼノヴィア！ 立て！」

「せ、先輩！ 今の二人は……！」

止めようとする俺を振り切り、先輩は尚も言葉を続ける。

「神は死んだ。だけどキミ達はまだ生きている！ 死んだ者を忘れろとは言わない。だがそれに引き摺られるな！ 立て！ 今は立つて戦うんだ！」

「リョーマさん……」

「神崎殿……」

「継るものが必要ならば、頼れるものが必要ならば、俺がその役目を背負ってやる！ キミ達の悲しみも辛さも全て受け止めてやる！ だから、今は戦うんだ！」

余計な物など何一つ無い。ただただ二人を想つての先輩の魂の叫びに、アーシアとゼノヴィアの目に少しずつ光が戻り始めていた。

「……はい。はい！ 私はリョーマさんを信じます！」

「私もだ。未だ心の整理はつかないが、今はあなたの思いに応えよう！」

「ならばアーシア！ キミはいつでも治療出来るよう準備を！ ゼノヴィアはアーシアを守ってくれ！」

アーシアとゼノヴィアが立ち上がる。絶望に沈んでいた俺達が、こうして希望を胸に再び立ち上がる事が出来た。たった一人の人間……神崎先輩が姿を見せただけで。

「……待たせたなコカビエル。俺達全員で貴様の相手をする」

「はっ！ わざわざ足手纏いを伴うとは酔狂だな。言っておくが、雑

魚をいくら増やそうが物の数では無いぞ」

馬鹿にするように笑うコカビエル。・・・ボコボコの顔に鼻血まで出してるからすっげえカッコ悪いけど。

「ならば、その雑魚にやられる貴様は雑魚以下という事だな」

「ツ！ 貴様、雑魚以下とは言ってくれるな！」

「それ以前に、貴様は勘違いしている。一誠達は決して雑魚では無い。それを、今から貴様の体に教えてやる」

「やってみろよお！ フェーリイイイイイイイイ！！！」

翼を大きく羽ばたかせ、コカビエルが戦闘態勢に入る。負けねえ！

これだけの面子が揃ってんだ！ 負けるわけがねえんだよ！！

「一誠、祐斗、ヤツが何をしようが全て俺が止める。だからキミ達はそれぞれ全力の一撃をアイツに叩きこむ事だけ考えてくれ」

「わかりました！」

「よっしやああああああ！！！！ いくぜえ！ 『赤龍帝の籠

手』アアアアアア！！！」

『Boost！ Boost！ Boost！ Boost！ B o

o s t！』

もつとだ！ もつと溜めろ！ アイツをぶっ飛ばす為に！ 俺の

全力を叩き込む為に！

「させん！」

コカビエルが俺に向かって突っ込んで来る。けれど、ヤツの動きは宣言通り神崎先輩の放った蹴りが止めた。

「貴様あ！ 邪魔を——」

「余所見してていいのか？」

「ツ!?!」

背後へ顔を動かすコカビエル。そこには、滅びの魔力を右手に宿した部長がいた。そして、部長はその魔力の塊をコカビエルの翼に向かって叩きつけるように放った。

「ぬぐああああああああああああ?!!?!」

絶叫と共に、コカビエルの翼が部長の魔力に飲み込まれていく。あれは文字通り全てを滅ぼす反則級の力だ。いくらコカビエルだって

無傷でいられるはずが無い。魔力が消え去った時、コカビエルの十枚の翼は一つ残らず消滅していた。

「どう？　これで偉そうに空から私達を見降ろせなくなったでしょ？」

「こ、小娘があああああああああ!!」

怒り狂ったコカビエルが部長に手を伸ばす。だがそれは横から入って来た木場の聖魔剣によって防がれる。いつもの余裕ある微笑みを浮かべながら、木場が口を開く。

「薄汚い手で部長に触れないでくれるかな」

「おのれえ！　邪魔をするなど言つて・・・」

「下がちなさい！」

朱乃さんの声に反応出来たのはコカビエルを除いた三人だけだった。そして、一人その場に残されたコカビエルの頭上に、超巨大な雷が降り注いだ。

「ぎあああああああああ?!?!?!」

「どうかしら？　私の自慢の雷は？　遠慮しなくてもまだまだたくさん食らわせてさしあげますわよ？　ふふ・・・ふふ・・・おーっほっほっほー！」

ヒイヒイヒイ！　あ、あのお方が・・・ドSモードの朱乃様が光臨なされたぞおおおおお！

ビシャーン！　ビシャーン！　と、ライザーとのレーティングゲームで体育館を吹き飛ばした時よりもさらにデカイ雷をこれでもかとコカビエルに落とす朱乃さん。もう絶対楽しんでますよね！　全ての雷の直撃を受けたコカビエルが全身から黒い煙を出しながら悶えている。

『Booost!』

そうこうしている間に、限界までの倍加が完了した。後はこれをコカビエルのヤツにぶつけるだけだ！

「先輩iiiiiiii!!」

一瞬だけ合わさった目。それで充分だった。先輩は俺のやりたい事を理解し、俺は先輩のやろうとしている事が理解出来た。理屈じや

ない。心と心で。

「うおおおおおおお!!」

「サモツ!」

閃光の様な一撃を放ち、先輩がコカビエルを俺の方へ吹き飛ばす。いいぜ、来いよ！俺は・・・ここにいます！

「食うらあええええええ!!」

『Explosion!!』

「ハンツ!」

解放した力をコカビエルの横つ面に叩きこむ！ まだだ！ まだ
終わりじゃねえぞ、コカビエル！

「木場あー!」

俺は木場の方へコカビエルを殴り飛ばした。それを待ち受ける木場は、聖魔剣をまるで野球のバットの様に水平に構える。

「オーライ、イツセイ君！ さあ、飛ばしますよ先輩!」

「キンポツ!」

アッパースイングで振り切られた聖魔剣がコカビエルを天高く打ち上げる。口から血を吐き出しながら、コカビエルが初めて狼狽した様子で叫ぶ。

「な、何故だ・・・！ 赤龍帝はまだ納得出来る！ だが、何故リアス・グレモリー達まで急にこんな力を・・・!」

「だから言っただろう・・・。彼女達は強いと」

空を舞うコカビエルよりもさらに高く・・・校舎の屋上くらいの位置から先輩がコカビエルに告げる。先輩から俺に、俺から木場に、そして、最後に木場からもう一度先輩へ繋げる。これこそ、正に『龍と騎士のトライアングルアタック』ってな!

——もう少し良い名前は無かったのか、相棒?

テメツ！ ドライグ！ 俺の渾身のネーミングにケチつけんな!

「さあ、止めだ、コカビエル。貴様の歪んだ欲望によって大切な物を散らされた子ども達の怒り、嘆き、そして悲しみを・・・今こそその身に受けるがいい」

欲望？ 子ども達？・・・おい、まさかコカビエルのヤツ、バル

パーと同じように何の罪も無い子どもを……!? だから先輩もあんなにキレて……。

「な、何の話だ!？」

「……どこまでもシラを切るつもりか。いいだろう。今さら何を語ろうが、貴様の罪は変わらないのだからな。いがみ合う双子……。その力を見せてやる!」

先輩がコカビエルに向かって拳を向ける。瞬間、そこから緑色の球体が放たれ、コカビエルの背中に直撃。その勢いでうつぶせに地面に叩きつけられたコカビエルに向かって、先輩がとんでもない速度で急降下し始めた。

「ニーベルング・アナイレーションツツツ!!」

流星……。今の先輩は正にそれだった。青白い光を全身に纏い、高速を越えた光速でコカビエルに迫る。そして、全てを破壊尽くさんとするかのように突き出された足が……。コカビエルの尻に突き刺さった。

「アツーーーーー?!?!?!」

悲鳴? 悲鳴だよな? 悲鳴だって言ってくれ! コカビエルの奇声の所為で、先輩の叫んだアナイレーションって言葉が穴入レーションって聞こえたのは俺の心が汚れてるからかな?

「ううううううおおおおおおお!!!」

凄まじい衝撃が余波となって俺達を襲う。耐え切れなかった地面が抉れ、巨大なクレーターが出来る。それでも先輩の勢いは止まらず、遂にはコカビエルと共に地中へと潜り始めた。

「か、神崎君!？」

姿の見えなくなった先輩を心配してか部長が叫ぶ。直後、その声に応えるかのように、先輩だけが穴から飛び出して来た。

「終わりだ、コカビエル……!」

穴を背に、先輩がパチンと指を鳴らす。それを合図に、コカビエルの沈んだ穴からとてつもなく巨大な光の柱が立ち昇った。

誰もがそれに目を奪われる。俺も、部長も、朱乃さんも、木場も、小猫ちゃんも、アーシアも、ゼノヴィアも、小猫ちゃんを助けたあの女

性も……。神崎先輩の力を証明するかのように伸びるその光の柱をただ見つめ続けていた。

十秒……。二十秒……。やがて光の柱は徐々に小さくなつていく。そしてそれが完全に消えた時、そこには、手足をありえない方向に曲げ、ピクピクと体を痙攣させているコカビエルと、それを黙って見下ろす神崎先輩だけがいた。

「……か、勝つたの？」

部長の呆然とした眩きにハツとなる。そ、そうだ！ 勝つた！ 俺達、コカビエルに勝つたんだ！ 最後は結局先輩に任せてしまったけど、こうして勝てたんだ！

「先輩！ やりま……！」

「——驚いた。まさか、コカビエルを倒すなんてね」

最初に聞こえたのはそんな声。そして次に感じたのは言い様も無い緊張感と恐怖。その発生源は……。空だ！

——この気配、ヤツか！

ドライグ!? お前知ってんのか!?

——『赤い龍』である俺と対を為す存在……。ヤツは『白い龍』だ！

『白い龍』!? それってお前がいつか話した……！

慌てて空を見上げる。そして、俺は目を見開いた。

舞い降りて来たのは、白く輝く鎧で両手両足を覆いながらも、肝心の体は最低限な部分しか隠していないという超刺激的な格好をした銀髪のお姉さんだったからだ。

「ふふ、初めまして。今代の『赤龍帝』君。そして、久しぶりね……。騎士様」

寒気がするくらい蠱惑的な笑みを向けられ、俺は無意識の内に後ずさった。そんな俺とは対照的に、神崎先輩は少しだけ驚いた様子でお姉さんの視線を受け止めていた。

第三十一話 Qそれはクールビズですか？ Aいいえただの露出です

…ええつと、今どういう状況なんだ？ 黒歌の血まみれ姿にプツツンしてからの記憶が曖昧なんだが。ただ、頭の中でしきりに「諦めんなよ！ もっと熱くなれよ!!」って言葉がエンドレスで繰り返されてたのは何となく覚えてる。

目の前ではオパピピピピじゃない。コカビエルがピクピクしてる。ピピピピ、心の底からクスだったな。変態な上に、まさか殺人未遂まで起こすとは俺も予想していなかった。だがそれも今日で終わりだ。さあ、グレモリーさん！ 通報してくれ！

「先輩！ やりまピピ！」

俺の元へ駆け寄ろうとした兵藤君を、第三者の声が遮った。

「——驚いた。まさか、コカビエルを倒すなんてね」

関心と驚きが混ざったその声は上の方から聞こえた。しかし、なんだろう。どこか聞き覚えがある様な……。

既視感とも違う妙な感じを抱く俺の前に、声の主は悠然と姿を現した。腰より少しだけ上で切り揃えられた黒みがかった銀髪。寶石の様な碧い目。それはまさしく、あの満月の夜、高台で出会った女性だった。

「ふふ、初めまして。今代の『赤龍帝』君。そして、久しぶりね……騎士様」

突然の乱入者に目を丸くするグレモリーさん達とは違い、俺は深く安堵していた。あー、よかった、お化けじゃなくて。いつ枕元に出て来るか本気で心配してたんだよなあ。

ホッと息を漏らしつつ、俺は女性の姿を改めて見て……愕然とした。

何だよその格好。何だよその格好。何だよその格好。思わず三回繰り返してしまうほど、彼女の格好はぶっ飛んでいた。

両手両足を覆う鎧と、背中にある八枚の翼は共に白銀に彩られ、

いつそ神々しいときえ思わせるほどだ。そこまではいい。ただだな・・・肝心の体の部分が丸見えってどうよ!?

上も下もギリギリだ。思わず、「隠す気あんのか!」とツツコミそうになった俺は至って正常だと思います。

「な、なんて破廉恥な・・・!」

そうだね。グレモリーさん。キミの言う通りだ。だが、それをキミが言う資格は無い! キミがいつつも風呂上がりにする格好を思い出してみなさい! スケスケネグリジエなんて危険装備を見せつけられる俺の気持ちを考えて事があるのかい! 俺を男として見てないのは充分理解したから、いいかげんちゃんと服を着てください!

グレモリーさんの破廉恥発言に、女性は心外だといった表情で反論した。

「失礼ね。これは動きやすさを極限まで突き詰めた結果よ。それに、見られて恥ずかしい体をしているつもりは無いわ」

ツ・・・!! こ、こぼれる!?

これみよがしに胸を揺らす女性に、思わず口からそのセリフが出そうになった。けど、見られて構わないって事は、逆を言うとも見てもらいたいって事ですよな? え、まさかこの人・・・露出強(誤字にあらず)!!

「ぶはああああああ!!」

「イツセー君!」

何事!? と振り向くと、兵藤君が噴水のように鼻血を天に向かって噴き出しながらその場に倒れ、木場君に助け起こされていた。どうやら、今の光景は彼にとっては刺激が強すぎたみたいだ。

もちろん、俺だって何も感じてないわけじゃない。ただ、初めての露出強(誤字にあらず)との出会いに、混乱と驚きの方が大きいのだ。「特にお尻に関しては、形、大きさ共に誰にも負けない自信があるわ」誰も聞いてないよ! というか、見せつけるの止めて! 確かに桃みたいにぷりぷりで可愛らしいとは思うけど、兵藤君が死んじゃう! 「いい夢を・・・見させてもらったぜ」

「キミはどここの聖戦士なんだい！ ああ！ 目を瞑つちや駄目だ、イツセー君！」

おい！ 割と本気で死にそうじゃねえか！ やべえ！ 『信頼』…いや、『友情』だ！

慌てて兵藤君を回復させる。なんかすつかりグダグダになってしまったが、そろそろ気分を切り替えないとな。離れていた黒歌達を呼び戻し、俺達は女性を囲むように立った。

「あなた…何者？ 感じられる殺気や覇気が尋常じゃないからただの悪魔だとは思わないけれど」

「そうね。いきなり乱入して名乗らないなんて無礼極まりないものね。初めまして、私はヴァーリ。今代の白龍皇…と言えはわかるかしら？」

「ッ！ それって…！」

グレモリーさん達が驚き過ぎて固まっている。白龍皇って言ったら、あの赤ドラゴンと一緒にいた白ドラゴンの事ではないんだよね？

確か二体は倒されて、その魂が神器に宿されたって聞いたけど。それが兵藤君の籠手と…ヴァーリさんの神器ってわけか。

「私は上の命令でそこに倒れてる堕天使を捕まえに来たのよ。それを、フューリーがいたとはいえ、まさかあなた達だけで倒してしまうなんてね。ふふ、さっきの連携は見事だと言わせてもらおうわ」

そう言って、ヴァーリさんは突然陶醉したかのような熱っぽい顔で、俺の方を向いて来た。

「特にフューリー…。あなたが最後に放ったあの技。見た瞬間に魂が揺さぶられたわ。コカビエルすら再起不能にする強大な一撃…。アレをこの身で受け止めると想像したら…ああ、それだけで濡れてしまいそうだわ」

ちよ、おいしいiiiiiiii!! 何言ってるのこの人お!? てか俺何したの!? 誰か教えて!!! わざわざ攻撃されたいとかこの人もMなのか!? ならば大至急匙君を呼んでくれ!!! Mの気持ちはMにしかわかんねえよ!!!

「いつか、あなたと全力でぶつかれる時が来るといいのだけれど…。」

うふふ、その時が今から楽しみでしようがないわ」

俺は全力で拒否します！　もしそんな事になったら俺はオルゴン・クラウドで逃げます！　ホントに何なのこの人。めっちゃ美人なのに、格好はヤバいし、露出強（誤字にあらず）だし、Mだし、どこまで残念なんだよ！

「な、なななな、何言ってるよのあなたは！　か、神崎君は渡さないわよ！」

「そ、そうです！　エッチなのはいけないと思います！」

「ご主人様に近づくな、変態！」

俺を守るようにヴァーリさんの前に立ちはだかるグレモリーさん、アーシア、黒歌。ああ、俺には守ってくれる人がいる。こんなに嬉しい事は無い。

「あらあら、嫌われたものね。まあいいわ。強者と強者は引かれ合う運命。フューリー、あなたと私の運命も必ず交わる時が来る。それを忘れないでね」

そんな運命、燃えるゴミの日に出してやる！　絶対にだ！

—— 久しぶりだな、白いの。

突然発せられた、低く、威厳のある声が、俺を冷静にさせた。発生源は兵藤君。・・・正確には、彼の籠手だった。

—— ひ、久しぶりだな、赤いの。

続けて、ヴァーリさんの手を覆う鎧についた綺麗な宝玉から、光と共にその声が聞こえた。けど、何でビクビクした感じなんだろう。

—— 無理するな、白いの。気持ちはわかる。俺も再びヤツの姿を目にした時、我を忘れて錯乱してしまった。

—— そ、そうか。お前も辛かったのだな。

—— ふ、やはり俺の気持ちをわかってくれるのはお前だけだな、白いの。

なんか、めっちゃ仲良さ気に会話してるんですけど。あなた達、悪魔と天使と堕天使を壊滅一步手前くらいまで追い込むくらい激しいケンカしてたんですよね？　なのになんですかその長年連れ添った親友みたいな雰囲気は？

——どうする？ あの誓いを果たすか？

——まだ早い。それにお前はまだ気持ちの整理がついていないだろう。今は待て。そして、時が来たら俺とお前でヤツを……。

——わかった。ならばそれまで力をつけておけよ、ドライグ。

——お前もな、アルビオン。

それつきり声は聞こえなくなった。誓いつて何の事だろう……。なんかも凄惨な胸騒ぎがするのはどうしてだろう……。
「……さて、それじゃそろそろ目的を果たしますか」

ヴァーリさんがコカビエルへと近づく。

「驚いた。まだ生きてるのね。フューリー、あなたならあのまま始末出来たはずなのに、どうしてそうしなかったの？」

さてな。あの時の俺が何を思っていたのかはわからないけど、流石に殺人を犯すのはマズイってブレーキかけたんだろな。

「俺は人は殺さない。その怨念を殺す」

「「「「「ツ!!」「「「「「」

こんだけボコってやったんだ。こいつも二度と子ども達に手を出す事は無いだろう。つか、またそんな事しようもんなら、今度こそこいつの聖剣（笑）をこの手で跡形も無く砕いてやる！

それはそれとして、何でグレモリーさん達、そんな変な物を見る様な目を向けて来るの？ もうね、俺、自分がどんだけ中二的なセリフ吐いたって後悔しないつもりだけど、周りからそういう反応されるのってまだ辛いんだよね。……なら自重しろ？ だが断る。

「あなたはコカビエルの持つ「戦争」という怨念を殺したってわけね。それほどの力を持ちながら、不殺を貫くその心……。ふふ、流石は騎士様と言えいいかしら」

お、おお！ なんかヴァーリさんが好意的な事を言ってくれた！ 嬉しいな。残念な人だけど、距離感さえ常に把握しておけば、仲良くなれそうな人だな。

「それじゃ、コカビエルは預かるわ。また会いましょう、騎士様。それと……『赤龍帝』君も、次に会う時までにはもうちよつと強くなつてくれると嬉しいな」

最後にウィンクし、ヴァーリさんはコカビエルの首根っこを引っ掴んだまま空の彼方へ飛んで行った。

こうして、紆余曲折ありながらも、変態共の討伐は成功という形で幕を下ろしたのだった。

第三十二話 新たなる日常

「そろそろ寝るか」

枕元の時計をチラ見し、俺はベッドに横になった。ああ、ホント、あれから色々あつて大変だったなあ。

ド腐れ親玉の撃破、その後の露出強との出会いは既に一週間も前の事になっている。丁度いい機会だし、一つ一つ思い出してみるかな。残念美女ヴァーリさんが去った後、グレモリーさんが木場君に心配をかけた罰として、支取さんが匙君にやった様に彼の尻を叩きまくった後、俺がまずやる事になったのは、みんなに黒歌を紹介する事だった。彼女が塔城さんの姉で、どうしてもここにいいのか、そして今は俺の家に住んでいる事を説明すると、案の定、事情を知らない子達は驚いていた。兵藤君なんかは、黒歌が何者なのかよりも、俺と一緒に住んでいるという所に反応してたけど。

そこへ、グレモリーさんが何故か対抗するかの様な感じで、俺の家に住んでいると付け加えた途端、兵藤君は突然滝の様な涙を流し始めた。「まさか・・・まさか、ハーレム王がこんな近くにいたなんて!!」とか叫んでたけど、それ誤解ね。確かに俺以外みんな女の子だけど、アーシアは保護者みたいな感じだし、グレモリーさんは家出中に寝る場所を提供してるだけだし、黒歌はペット・・・いや、もうそういう言い方は止めた方がいいか。あれだ、家族の一員だ。

「姉様」

みんなが兵藤君へ苦笑いを向ける中、塔城さんが一人黒歌の前に出る。そこで俺は思いついた。こうして再会を果たした事だし、ついでにここで関係の修復もしてみたらどうかと。

みんなクタクタだったし、とりあえず今日はもう家に帰ったらどうかという流れになり、俺はグレモリーさん、アーシア、黒歌、さらに塔城さんを連れて家に帰った。塔城さんを連れて来たのは、落ち着いて話せる場所で、黒歌と思う存分対話してもらおう為だ。

黒歌の部屋へ二人を送り、俺達はリビングで待ち続けた。既に日付は変わっている。アーシアなんかは今にも眠ってしまいそうだった

が、黒歌と塔城さんの事が気になるからと、睡魔と全力で戦っていた。それから三時間が経った。途中、塔城さんの怒鳴り声や、黒歌の叫び声、そして二人の泣き声等が耳に届き、内心ハラハラしまくっていたが、次に部屋を出て来た二人がどこか晴れ晴れとしていたのを見て、俺はわだかまりが解消されたのだと確信した。

「もういいの、小猫？」

いたわるグレモリーさんに、塔城さんは小さく頷きながら答えた。

「・・・はい。まだ全てを受け止められたわけじゃないですけど、姉様は私を助ける為にその手を血に染めてしまった。私は・・・姉様を受け止めたい。いえ、受け止めなくてはならないんです」

「白音・・・」

「なら、後はあなた達二人で解決なさい。もう離れ離れになる事もないでしょうし、時間はたくさんあるのだから」

ニッコリ微笑むグレモリーさん。うんうん、彼女の言う通りだ。今の時間だけで足りないのなら、これからもっともっと話せばいい。そうすれば、いつかはお互いに心から手を取り合う事が出来るはずだ。「嬉しそうですね、リョーマさん」

アーシアが俺の顔を見て笑う。いや、だってずっと離れていた姉妹が再会したんだよ？ 感動ものじゃないか。

「当然だ。家族は一緒にいるのが一番なんだからな」

そう言うのと、途端にみんなの顔が曇った。あれ？ 結構いい事言っただつものなのに、なんですかその反応・・・。

「先輩、あなたの家族は・・・」

「ん？」

「い、いえ、何でも無いです」

塔城さんが何か言いかけてたけど、よく聞こえなかった。なんだよ、気になるじゃんか。遠慮せずに言っちゃいなYO。

「ね、ねえ、神崎君。その・・・新しい家族を持つのもいいんじゃないかしら？」

と思つたら、グレモリーさんの方が口を開いた。その内容はなんのこつちやわからなかったけど。ただ、頬をピンクに染め、もちもぢす

るその姿はとても可愛かったのは確かでした。

「そ、それって……！ 部長さん、なんて大胆な……！」

「ご主人様。私を選んでくれたら、白音もセットでついて来るよ」

「……何言ってるんですか、姉様」

「にゅふふ、今の不自然な間はなんだったのかにゃ〜？」

「ツ……！ な、何でもありません！ 変な事言わないでください！」

え、何？ みんなグレモリーさんの言葉の意味がわかったの？ や

べえ、俺一人だけ間抜けじゃん。このままでは年上（精神的な）の威厳が！ よ、よし、ここはわかってますよ的な雰囲気を出してやる。

「そうだな。俺もみんなと一緒にいられたらいいと思ってるよ」

……あれ、これって微妙に噛み合って無い様な気が……。しかし、発言してしまっただけから後悔しても後の祭りだ。見る、みんなだっ

て意味不明な言葉に首を傾げ……

「み、みんな……!!? それって全員娶るって事……!!?」

「はわわわわ!!? そ、そんな、私はどうしたら……!!?」

「うわ〜。ご主人様、5Pなんて激し過ぎにゃ〜」

「ふ、不潔です！ 先輩がそんな人だったなんて……!!」

うほっ!!? 何その反応!!? てか黒歌！ そんなはしたない言葉を天使（アーシア）の前で言っちゃ駄目でしょうが！ それ以前に、今の会話から何でそんな単語が出て来るの!!? あれか、深夜の妙なテンションでおかしくなったのか!!? それならもう寝なさい！

……なんて感じで、最後はカオスになりながらも、黒歌と塔城さんの話し合いは終わった。しかし、ようやく問題が解決したと思っただけ、すぐさま新たな問題が発生した。

「というわけで、今日から白音もここに住む事になりました」

二日後、黒歌が塔城さんを再び家に招き、俺達の前でそんな事を言った。

「どういうわけよ……」

グレモリーさん。俺に代わってのツツコミありがとう。黒歌の隣で塔城さんが申し訳なさそうな顔をしている。

「姉様、やっぱり止めた方が」

「嫌にや！ やつと白音と会えたのに、もう絶対離れたくないにや！」
ずるい！ 流石黒歌ずるい！ そんな泣きそうな顔でそんな事言われたらNOなんて言えるわけないでしょうが！

「大丈夫だ、問題無い」

最近、これが口癖になってきている気がする。本来は禁句なはずなのに。もしかして、俺って知らない内にヤバイフラグとか建てまくったりしてるのかな？ そうだとしたら、アルⅡヴァン先生、俺にそれを乗り越える力をお与えください。

「さつすがご主人様！ 愛してる！」

愛の告白頂きました。しかし、俺は自意識過剰なチャラ男では無い。それが冗談だとすぐに理解出来る。

「あ、でも、それだと部屋が足りない気がするんですけど」

あ、そつか。四つある個室はもう満杯だ。塔城さんの部屋が用意出来ない。いや、まさか部屋の数で困る時がやって来るとはなあ……。

「……わかったわ。私に任せてちょうだい」

そう言いながら自慢のお胸様を叩くグレモリーさん。僅かに揺れたそれを見たアーシアと塔城さんの瞳から一瞬ハイライトが消えました。……うん、忘れよう。それが俺の為だ。

とりあえず、グレモリーさんの考えが実行されるまでは、塔城さんは黒歌の部屋で一緒に寝る事になった。うーん、今の黒歌の喜びようを見ていると、このままでもいいような気がするけど……。

「そうか。なら頼むよグレモリーさん」

任せるという気持ちを込めてポンと肩を叩くと、なんとグレモリーさんの顔が急に悲し気に沈んだではありませんか！ え、そんなに痛かった？

「グレモリーさん？」

「……リアスって呼んでくれないの？」

「え？」

「あの時は名前で呼んでくれたのに……」

うん？ 彼女の名前を呼んだ記憶って無いんだけど……。もしかして、コカビエルにプツンしてる時に呼んだとか？ 記憶が曖昧に

なるくらいブチ切れてたんだから、何かを切っ掛けにそうした可能性も無いとは言い切れない。

まあ、それはそれとして。アーシアの時もそうだったけど、呼んでいいなら遠慮せずに呼ばせてもらいますよ？

「なら、今からリアスって呼ばせてもらおうよ」

そう言うと、グレモリーさん・・・じゃなくて、リアスは、心から嬉しそうな笑みを浮かべた。・・・衝動的に抱き締めなくなったのは俺が変態だからでしょうか？

「う、うん。お願い。じゃ、じゃあ、私もあなたの事名前と呼んでいい？」

「ああ」

「そ、それじゃ・・・リョーマ」

「何だ、リアス」

「リョーマ」

「リアス？」

「リョーマ・・・リョーマ・・・リョーマ・・・」

ちよ、なんか怖いよりアス！ 名前を呟かれるのって言い様も無い恐怖感を抱いてしまう。とそこへ、黒歌がわざとらしく咳をした。

「コホン！ えー、勝手に二人だけの世界を作らにやいでください。見ていて思わずもげろ！ って思ってしまった」

「うう、せっかく部長さんから数少ないリードをとっていたのに・・・追いつかれてしまいましたあ・・・」

「そうやって手当たり次第に女性に手を伸ばすんですね。先輩は」

「とか何とか言っつて、本当は自分も名前でもらいたいんじゃないの？」

「姉様！ さつきから私をからかって何のつもりですか！」

「ご、ごめんなさい！ だから尻尾は！ 尻尾は止めて〜！」

塔城さんに尻尾を掴まれ悶える黒歌。この場に兵藤君がいたら今度こそ別世界への道を開くかもしれない・・・。

そんな感じで、これからまた家が賑やかになりそうだ。さて、家の事はこれくらいにして、次はゼノヴィアさんの事だな。

「何故急に彼女の名前が出て来るのかというと、あのド腐れコカビエルをぶっ飛ばして、彼女と紫藤さんも無事に任務を達成したはずだったのだが、どういうわけか、ゼノヴィアさんは再び俺の前に姿を現した。しかも、駒王学園の制服を纏い、さらに背中に悪魔の翼を生やしてだ。そんなものを急に見せられて混乱しないはずがない。」

そんな俺に対し、ゼノヴィアさんは涼し気な顔で淡々と答えた。「神の不在を知り、教会を追い出されて行く所が無くなったからな。だが清々した部分もあるよ。まさか、あれほどまでに掌を返されるとは思ってたからな」

それを聞いて、やっぱり教会は馬鹿だと思った。せつかくこれからまともな組織として再結成されるだろうに、ゼノヴィアさんみたいな数少ないまともな子を追い出すとか、アジアに対して同じ事をした頃から全然変わって無いのな。

「それに、神崎殿。私はあの時、コカビエルを圧倒したあなたにどうしようもないくらい惹き付けられた。苛烈にして、凄絶・・・正に無双というに相応しいその強さ。デュランダルの手として、あなたの傍でその強さを学ばせてもらいたい。悪魔は長い時を生きられると聞いている。ならばどこまで強くなれるか、試してみるのも面白いかな・・・」

そこで一度言葉を切り、今度はどこかソワソワした様子でゼノヴィアさんがもう一度口を開く。

「・・・そ、それに、教会にいるよりも、こうして近くにいた方が、以前あなたが言った『良い関係』とやらを築き易いだろうからな」

あれはキミが教会にいますという前提で言ったんだけど。・・・まあいいか、こんな良い子をあつさり突き放す連中なんかもう知らん。はあ、紫藤さんは大丈夫かな。一人になって連中の変な考えに影響されないといいけど。

「とにかく、そういうわけだ。これからよろしくお願いしますよ、神崎先輩？」

「・・・ああ、こちらこそ」

ゼノヴィアさんが俺に向かって手を差し出す。てか、先輩？ え、

年下？

新たな仲間の意外な事実には驚きつつ、俺も彼女に向かって手を伸ばすのだった。

．．．
．．．
．．．

これくらいかな。もの思いにふけっていたら既に三十分以上過ぎていた。これ以上起きてたら明日に響く。

(そういえば．．．今日は木場君の機嫌が妙に良かったな。明日辺り何かあったのか聞いてみるか)

そして、俺はゆっくりと意識を手放したのだった。

S I D E O U T

祐斗 S I D E

．．．夢を見た。とても幸せで、とても嬉しい夢を．．．。

どこまでも続く広い広い草原。それを僕は空から見下ろしていた。その草原を、あの子達が．．．僕に新たな力を授けてくれたかつての仲間達が走り回っていた。

「ほら、こっちだよ！」

「待つてよ〜！」

「あはは！ 頑張れ〜！」

みんな本当に楽しそうに笑っている。それだけで、僕も嬉しかった。彼らの心からの笑顔を、こうして目に焼き付ける事が出来たのだから。

声はかけられない。さっきから声どころか体すら動かす事が出来ないからだ。けれど、それでもよかった。今の彼らを邪魔したくなかったから。ちよつと寂しい気もするけどね。

そうやって彼らを見ろしていると、新たな人物が姿を現した。その人は女性で、ちよつと僕の方へ向かって顔を上げた。

——その瞬間、僕は不覚にも胸をときめかせた。

余計な言葉はいらない。ただ、美しいと、女性の顔を見た僕はそう

思った。失礼を承知で言わせてもらえるなら、部長すらも彼女の前では霞んで見えてしまいそうだ。絶世という言葉すら彼女の美しさを表現するには全然足りない。こんな陳腐な言葉を使いたくないけど・・・女神様という言葉がピッタリだと思った。

風になびく金色の長髪。同じく、こちらの全てを見透かしてしまいそうな、金色の瞳。鼻も口も、その他全ても完璧としかいいようがない。心臓が激しく鼓動する。

加えて、彼女からは神聖な気を感じる。なのに、僕はそれに対して嫌悪感を全く抱いていない事に自身で驚いた。むしろ、温かみすら感じってしまう。

(・・・木場祐斗)

唐突に、僕の頭の中に声が響いた。耳がとろけてしまいそうになるほどの、甘美なるその声の主は、あの女性だと、何故か理解出来た。

(木場祐斗。あなたと、この子達の過去を視させてもらいました。安心なさい。この子達は私が必ず幸せにしてみせます。ですから、あなたはあなたの生を全うしなさい。そして願わくは、私の所為である世界へ跳ばされてしまった「彼」を助けてあげてください)

あ、あなたは何者なのですか！ それに「彼」とは一体・・・!?

(わたし・・・オ・・・アー・・・亮・・・を・・・頼・・・す・・・)

雑音と共に、声がどんどん小さくなっていく。

ま、待ってください！ まだ話を・・・!

目の前が真っ白になる。思わず目を瞑ってしまった僕が次に目を開けた時、そこは見慣れた僕の部屋だった。

「・・・夢？」

これだけハッキリ覚えている夢なんて、過去についての夢以外では初めてだ。ふと、頬を熱い何かが流れて行く。それは涙だった。

夢でもいい。幻でもいい。彼らの笑顔を、僕は永遠に忘れる事は無い。僕にとってはそれだけで充分だった・・・。

「・・・ふふ、今日は何だか良い一日になりそうだ」

第四章 停止教室のヴァンパイア 第三十三話 ご家族の方ですか

オカンが眠りについた。いや、別に「オカンは死んだ！ もういい！」っていうわけじゃない。そのまんまの意味通り、眠ってしまっただのだ。

『いや、ほっとけへんかったとはいえ、この年で、ゴツデスフォームなんて使うもんや無いなあ。おかげで体中バツキバキやしクタクタやでホンマ』

なんか声に合わせてバキバキとか音が聞こえるけど、正直何の事を言っているのかさっぱりわからない。まあオカンの事だ。もしかしたら、どこかの誰かにお節介でも働いたのかもしれない。

『ちゅうわけで、アンタには悪いけど、ちょっと休ませてもらうなあ。そうやな・・・アンタの時間で表すと一ヶ月くらいかなあ。その間はウチも手助け出来へんから、気張りや〜』

その言葉を最後に、オカンの声は聞こえなくなった。試しに何度か呼んでみたけど、返事が返ってくる事はなかった。けれど、これまで散々世話になって来たわけだし、むしろ休んで貰った方がこっちとしては気が楽になるからいいか。

そんな会話が交わされたのが三日前。で、今の俺はというと、リアスにオカルト部に呼び出されていた。いつものメンバーの前で、彼女はいかにも怒ってますといった顔で話を切りだした。

「まさか、墮天使の総督がいつの間にかこの街へ侵入していたなんて・・・」

どういう事かという、悪魔のお仕事（呼び出された相手の願いを叶える仕事らしい）に出かけた兵藤君を待っていたのが、墮天使陣営のトップを務めている凄い人だったらしい・・・もしかして、レイナーさんの想い人ってその人なのかも。

「いくら三陣営のトップ会談がこの街で執り行われる事になっているとはいえ、これはれっきとした営業妨害だわ」

ああ、そうだ。ド腐れコカビエルの一件をうけて、なんか悪魔と天使と墮天使のお偉い方がどういうわけかこの街にやって来るって聞いてたな。て事は、その人、一足早く現地入りしてたわけか。うーん、予定ではもうちよつと先って聞いてたけど、遅れないように誰よりも先に来るなんて、凄く真面目な人なんだろうなあ……。

「目的は恐らく……神崎先輩との接触。そして、イツセー君の神器でしようね」

「え、ええ!?! 何でだよ木場!?! コカビエルぶつ飛ばした先輩ならわかるけど、どうして俺まで!?!」

「イツセー君。アザゼルはね、神器にとっても造詣が深い事で有名なんだ。それに、優秀な神器使いを集めているとも聞いている」

「マジかよ……。墮天使のヤツ等、どこまで俺に付き纏う気だよお……」
ゲンナリした様子の兵藤君に対し、木場君が彼の肩に手を置きながら、女の子なら間違いない顔を赤らめるであろう素敵スマイルを浮かべた。

「安心して、イツセー君。キミの事は僕が絶対守るよ。僕の事を助けてくれたキミを、今度は僕が助けたいんだ」

うんうん、男同士の友情って素晴らしいね。兵藤君、こういう友達って本当に貴重だから、木場君とは仲良くやらないと駄目だぞ。

「もちろん、先輩もですよ」
「ん?」

木場君が目だけこちらに向けて来た。

「あなたはイツセー君とは違って、影ながら僕を手助けしてくれました。あの時頂いた地図は、本当に役に立ちましたし、コカビエルとの戦いで弱気になっていた僕を熱い言葉で励ましてくれた。……嬉しかったです。僕は、あなたと出会えて本当によかった」

後輩が困っていたらそつと手を貸すのが先輩の役目だしな。そういう意味では、あの時のお節介は無駄じゃなかったって事か。

「せ、先輩、ちよつと……」
「?」

急に手招きする兵藤君に近寄ると、彼はそつと耳打ちして来た。

「な、なんか、木場おかしくないですか？」

「兵藤君、ああいう風に言ってくれる友人を悪く言うのは感心しないぞ」

「ち、違いますよ。アイツが俺に対してああ言ってくれたのは嬉しいですよ？　ただ、その・・・アイツの顔を見てると、BでLな感じがして・・・」

「顔？」

言われてチラッと様子を覗う。俺と兵藤君を見つめる木場君。その瞳は妙に熱っぽく、頬もやや上気している。・・・いや、そんなわけない。俺は見間違っただけだ。

「気のせいだ」

「え？　で、でも・・・」

「気のせいだ。ああ、そうとも。気のせいに決まっているじゃないか、兵藤君。あれは慣れない事を言ったから照れているとかそういう感じのヤツだ」

「そ、そうなんですか？」

「・・・そう思うしかないじゃないか」

ちよつとばかり本気で兵藤君に言い聞かせる。今、彼が抱いている懸念・・・それに触れた時、俺達は取り返しのつかない道を歩む事になるだろう。

「先輩？　イツセー君？」

「何でも無いよ。なあ、兵藤君？」

「あ、え、あつと・・・そ、そうツスね！　何でも無いぞ、木場！　そうだとも。誰もそんな展開など望んでいないのだからな！　よし、この話はこれで終いだ。リアス、続きをお願いします！

「けれど、実際どうしたものかしらね。相手は墮天使総督・・・。うかつに接触など出来るはずも無いし・・・」

腕を組み、むむむと唸るリアス。・・・ああ、なんか今、無性に三國志が読みたくなった。この学園の図書館にあったっけ？　時間出来たら探してみるか。

「・・・ふ、アザゼルは昔から思い立ったら即行動が常だったからね」

ふお、この甘いイケボイスは・・・イケメン魔王！ 貴s・・・あなた、見ているな！

全員が一斉に振り向く。そこにはやはり予想通り、赤い髪が素敵な魔王ことサーゼクスさんがいましたときさしかもその背後にはバイオレンスメイドさんまでいるではありませんか。

「お、お兄様?! グレイフィアまで?!」

あーそっか、この人ってリアスのお兄さんでもあるんだよな。パーティー会場で聞かされた時はめっちゃ驚いたけど。確かに言われてみたら似ている部分が見受けられる。

数人を除いて、残りの子達が彼に向かって跪く。ちなみにその数人の中には俺がいる。後は兵藤君とアーシア、それとゼノヴィアさん。前者の二人は驚いて、後者の一人は単純に誰かわかってないからだろうな。じゃあ俺はって？ いや、普通に今日もイケメンだなーって間抜けな事考えながら魔王様の顔見てますけど何か？

「はは。そんなに畏まらなくていいよ。今日の私・・・いや、僕は魔王としてここに来ているわけじゃない。つまりただのプライベートさ」魔王なのにこの気さくさ。流石イケメンは違う。リアス達もその言葉を受けてみんな一斉に立ち上がった。

「フューリー。いや、それとも神崎君と呼んだ方がいいかな？」

サーゼクスさんの瞳が俺を捉える。

「どちらでもお好きなように」

「ふむ・・・。いつその事、リョー君とでも呼んでみるのも面白いかな」

まさかの愛称!? 名前ぶっ飛ばしていきなりそれですか!? てかこの年でリョー君とかマジ恥ずかしいんで止めてください。

「サーゼクス様。お戯れはその辺で」

「いや、戯れってわけじゃ・・・」

「・・・」

「・・・はい、すみません」

グレイフィアさんの無言の圧力に押し黙るサーゼクスさん。賢明な判断だと思えます。あのまま続けてたらきつと鉄拳が飛んできた

と思うんで。

「そ、そうだ、グレイファイア。キミも神崎君に何か言う事があったんじゃないのかい？」

露骨な逸らしに、グレイファイアさんが一度大きく溜息を吐くと、その美しい顔を俺に向けて来た。

「お久しぶりでございませぬ、神崎様」

「ええ、そうですね」

「あの時、あなたのお部屋であなたを見た時、只者ではないとは思っていましたが・・・まさか、伝説の騎士と呼ばれていた方であったとは、流石に驚きを禁じ得ませんでした」

俺はあなたがいきなり部屋にやって来た事に驚きましたよ。

「これからも、お嬢様の事をよろしくお願いいたします。友人・・・いえ、ゆくゆくはそれ以上の関係として」

「グ、グレイファイア！」

「はい。もちろん、(友人として)そのつもりです」

「ふえっ・・・!?!」

俺の答えに満足気なグレイファイアさんと、顔が真っ赤なりアス。すまない。身内から友達に「仲良くしてやってくれ」とか言われたら恥ずかしいだろうが、ここは自分の意思をハッキリ示しておく必要があるんだ。中途半端な答えだとこの人に何されるかわかんねえし・・・。「ははは！ いやあ、リーアのそんな顔を見るのは新鮮だなあ！ それだけでここに来た価値があるよ！」

肩を揺らし大笑いするサーゼクスさん。この人、もしかして身内イジリ好き？ うわあ、大変だな、リアス。きつと家でもからかわれまくってたんだらうな。

あ、家つつつたら、彼女いつになったら親御さんと連絡取るつもりなんだろう。そろそろ向こうも心配してるだらうし、一度勧めてみるか。安心してくれ、リアス。一人で不安なら俺も一緒に付いて行くからな。

「お、お兄様！ 私をからかいに来たわけではないのでしよう！ 早くご用件を言ってください！」

未だに笑いを抑えられないまま、サーゼクスさんは懐から一枚の紙を取り出した。見憶えのあるその紙には、大きな文字で『授業参観のお知らせ』と書かれていた。

「これに参加しようと思ってるね。あ、それと父上にも伝えてあるから安心なさい」

授業参観か……。ウチはだーれもないからなあ。黒歌はワケありだから来れないし。

「な、何を言っているのですか！ 魔王であるあなたが仕事を放棄して授業参観なんて……！」

リアスの言葉に、サーゼクスさんは待つてましたと言わんばかりに答えた。

「これも仕事だよ。実は三陣営のトップ会談をこの学園で執り行うつもりなんだ」

ドヤア！ なんて音がどっかから聞こえて来そうな感じの顔だった。ふーん、ここでやるのか……。……。……。ファツ！

「ええ!? そ、それは本当ですか!？」

「ああ、本当だよ。この学園とは色々縁がありそうだしね。魔王の妹であるキミに、赤龍帝を宿す少年、聖魔剣という世の理を越えた力、聖剣デュランダル使い、さらに、魔王セラフオール・レヴィアタンの妹まで在籍し、そこへコカビエルと、露出k……。白龍皇の襲来。そして……。伝説の騎士フューリー。様々な力がどういわけかこの地へ集結している」

おい、今この人絶対ヴァーリさんの事、露出狂って言おうとしたよな。ああ、やつぱりそういう認識されてるのね、彼女。てかそれなら言っただけ訂正させてもらうなら、彼女は露出狂ではなく、露出強だ。

「とにかく、そういう事なんだ。ああ、そうそう。当日は神崎君にもぜひ参加してもらいたい」

「俺もですか？ しかし、俺は悪魔でも何でも無いのですが」

「ははは、そんな事は全く関係ないさ。正直、僕達は会談よりもキミの

話を聞く方が楽しみでしようがないんだからね。あの時約束した話をする場をようやく設ける事が出来たってわけさ」

おい、それでいいのか魔王様！ しかも僕達〴〵って事は他の人達もって事でしょ？ おい会談しろよ。目的履き違えてるじゃないですか。

「おや、話に夢中になつていたらもうこんな時間か」

それから、初対面という事で、ゼノヴィアさんとサーゼクスさんが互いに自己紹介を済ませた所で、サーゼクスさんが時計に目を向ける。ああ、確かにもう結構遅い時間だな。もう帰らないと黒歌が心配してしまう。

「それじゃ、僕達はそろそろ失礼するよ。今からでも探せば宿泊施設くらい見つかるだろう」

「わかりました。それではお見送りを」

「いいよ。これはプライベートだって言っただろ？ だからリーア達も早く帰りなさい。さあ、行こうかグレイファイア」

「はい」

「さて、部屋はどうしようかな。やっぱり相部屋？ それとも別々にぐあ!？」

み、見た。ついに見てしまった。グレイファイアさんの拳が、サーゼクスさんの鳩尾に吸い込まれる瞬間を!! す、すげえ、早過ぎて残像が見えただぞ。

「馬鹿な事言つてないで、行きますよ」

「は、はい……」

鳩尾を擦りながらグレイファイアさんに付いて出て行こうとするサーゼクスさん。そして、二人が出て扉が閉まる直前、俺の耳にこんな声が聞こえた。

「……相部屋がいいです」

その声を聞いた俺が、再び魔王様に呪詛の念を送ってしまったのは、仕方無い事だと思う。

第三十四話 下着と水着でどうして恥ずかしさが違 うんですかね

青い空、白い雲、そして腹が立つくらいギラギラに輝く太陽の下、俺は学園から家に向かって歩いてた。いやー、にしても、暑いってレベルじゃないよ。こりや下手したら熱中症で倒れるな。

こういう日は家で大人しくしておくのが一番なのだが、今日に限って言えばそうではない。何故なら、俺はこれから学園のプールで思いつきり涼むのだから！

先日、支取さんからオカルト部にプール掃除の命令が下った。で、自分達が最初にプールに入る事を条件にリアスが快諾。それから必死こいてプールを掃除し、ようやく遊べる当日となったのだ。

みんな今日という日を楽しみにしていた。ウチの女の子達なんか、姫島さんとゼノヴィアさんも誘ってみんなで新しい水着を買いに行ってしまうほどだった。しかも、今回は黒歌も参加する。外に出る時はいつも猫モードだったので、たまには人の姿で楽しんでもいいんじゃないかと提案したら呆気無く了承された。まあ、すでにみんなにも紹介してるし、今回は事情を知っている子達しかいないからな。

そういうわけで、今頃みんなは冷たいプールで思い思いに楽しんでるだろう。ならお前は何で家に帰ってるのかって？ ははは、忘れたんですよ、水着をね……。

兵藤君達と一緒に着替える直前に気付いた。タオルとかその他諸々は完璧だったのに、肝心の物を忘れるとかアホ過ぎだろ、俺。まあ、今さらなに言っちゃって意味は無い。さっさと目的の物を持って学園に戻ろう。

そうやって歩く速度を速めた俺の前に、突然彼女が現れた。

「あら……、騎士様じゃない」

あっ！ やせいのろしゆつきようがあらわれた！ ……なんて言ってる場合じゃないな。何でヴァーリさんがここにいるんだ？

「ふふ、やはり私とあなたは運命という首輪と鎖で繋がっているのね」

「・・・そこは普通、糸じやないのか？」

「それで、急いでいるみたいだけど、どうかしたの？」

見事にスルーされました。なんというか、マイペースな子だよなあ。・・・まあ、そうじやないと露出強なんて我が道を爆進出来るはずもないか。それはそれとして、聞かれても困る事でも無いし、話すか。

事情を説明すると、ヴァーリさんは興味深そうな感じで俺に擦り寄って来た。

「面白そう。ねえ、私もお邪魔していいかしら」

ええつと・・・俺一人じゃ判断出来ないな。というか、そんなに近付かないで。胸元バックリのタンクトップにホットパンツとか流石ですね。しかも見た感じブラしてないし。おかげで柔らかいマシユマロの感触がダイレクトに腕に伝わって来ます。ヤバイです。相手が露出強とはいえ、これはマズイです。

「すまないが、この場でイエスとは言えないな。みんなにも了解を得ないと」

「わかったわ。それじゃ、行きましょ」

俺の腕を取り、歩きだそうとするヴァーリさんを慌てて引き止める。

「ま、待ってくれ。とりあえずさつき言った通り、まずは俺の水着を取りに行かせてくれ」

「あ、そうだったわね。ごめんなさい。あなたと裸の付き合いが出来ると思ったらいてもたってもいられなくて」

裸じやないし付き合わないよというツツコミを喉元で押さえ、俺はヴァーリさんを連れて改めて自宅へ向かって歩き始めた。

「そういえば、アルビオンはどうしたんだ？ さつきから黙ったままだが」

あの時は兵藤さん家のドライグ君と仲良く話してたのに、今はずっとだんまりだ。

「え？ ああ・・・気にしないでいいわ。彼、ちよつと今トラウマと戦ってる最中だから」

それって大変じゃん。というか、ドラゴンにもトラウマってあるんだなあ。

「わかった。それともう一つ聞きたいんだが」

「何？」

「仮にキミもプールに入れたとして、水着はどうするんだ？」

「あんな布、邪魔にしかならないと思わない？」

俺の指摘に、ヴァーリさんは真顔で即答した。よし、買いに行こうか！ お金なら俺が出すから安心しなさい！ とりあえず、彼女のワガママボディは刺激が強すぎるから、なるべく体全体が隠れる感じの水着でいこうかな。

これが、ヴァーリさん露出強脱却の第一歩になる事を願いつつ、俺は一直線に自宅を目指すのだった。

S I D E O U T

イツセーS I D E

「ふ……ふふふ……ふはははははは!!」

今日という日をどれだけ待ち望んだ事だろう！ 震えるぞハート

！ 萌え……燃え尽きるほどヒート！ 今の俺のテンションならライザーどころかコカビエルすらも敵ではないわ！

「ふふ、元気だね、イツセー君」

木場の方へ向いた瞬間、若干テンションが落ちた。お前……ブルーメランとか何考えてんだよ。妙に似合ってるのが余計ムカつくし怖い。

「お前、なるべく俺の視界に入るなよ」

「何でだい？ むしろイツセー君にはぜひ見てもらいたいと思ってるんだけどな」

おい、それは冗談だろうな。だとしたら笑えねえし、本気だったら俺はマジでお前から逃げるぞ。うう、先輩。早く戻って来てください。このままじゃ、学園で松田と元浜が流しやがったアツー！ な噂が現実……！

「そ、それにしても、部長達遅いなく〜！」

何とか話を逸らす。誰でもいい、この空気を変える為にも来てくれ。

「女の子は色々準備が大変だからね。まあ、おかげでイツセー君と二人で入れるからいいけどね。ここに神崎先輩もいれば完璧なんだけど、まさか水着を忘れるなんて、先輩にもおつちよこちよいな所があるんだね。そうは思わないかい、イツセー君」

「マジで誰か来てええええええ!!」

その時、俺の涙混じりの叫びが届いたのか、一人の女の子が姿を現した。

「わわ、お二人とも早いですね」

声の主はアーシア。その体をピンク色のセパレート水着に包んでいる。いい！ 露出具合はワンピースより高く、ビキニよりは低いが、彼女によく似合っている。なんか「幼馴染のお兄さんを振り向かせようと背伸びしちやっただ少女」って感じで萌えるぜ！

「よく似合ってると思うよ、アーシアさん」

しまった！ 木場に先を越された！ 俺も何か言わないと！

「うんうん、俺もそう思うぞ、アーシア！」

「あ、ありがとうございます。ちょっと恥ずかしいですけど、これくらい冒険しないと駄目だって部長さんが・・・」

はにかむアーシア。ちくしょう、やっぱり可愛いな。冒険って言うてるけど、やっぱり神崎先輩に見てもらうためなんだろうなあ。羨まし過ぎるぜ先輩！ マジであなたのモテ加減の十分の一でも俺にくれば、今頃俺だって彼女が来て、俺の好みの水着を着せてあんな事やこんな事を・・・。

「お待たせしました」

次に現れたのは小猫ちゃん。こちらもセパレート型の水着だ。ただしアーシアのとは若干の違いが見受けられる。彼女のは上がタンクトップ型だから所謂タンキニだな。

「・・・イツセー先輩。目がやらしいです」

「し、しまっ・・・じゃない！ ち、違っよ小猫ちゃん！ 俺はただ可愛いなと思っただけで、エロい目線を送っていたわけじゃ！」

健康的な色気に思わず目を奪われたただけなんです！ ほら、その証拠に息子もちよつとしか反応してないでしょ！

「あらあら、イツセイ君は相変わらずですわね」

その声は朱乃さん!? い、いやだから違うんで――。

「イエアツ!?!」

弁解しようと振り向いた俺を待ち受けていたのは、白い極小マイクロビキニを装着した朱乃さんの破壊力抜群なお姿だった。奇声と共に固まりながらも、俺は彼女の姿を目に焼き付ける。

ヤバい。マジでヤバい。どれくらいヤバいっていうとマジでヤバい。布面積で下乳余裕でした。ああ、前の二人には無いブレスト巴厘が俺の目を引き付けて離さない。あそこに顔を埋められたら、俺は死んでも構わない。そう思わせてしまうくらいの威力だ。

「うわ〜。凄いです〜」

「・・・化物め」

アジアと小猫ちゃん目の目が朱乃さんのお胸様に集中する。やっぱり同性でもそうなつちやうのね。

「ふふ、ありがとうございます」

「すまない、待たせた」

ゼノヴィアもやって来た。うん、朱乃さんの後でも霞まないご立派なスタイルとビキニがとつても魅力的ですね。

「こういう物には今まで興味が一切湧かなかったものだから、ちゃんと着こなせているか不安なのだが、どうだろう?」

「いえいえ、すつごくお似合いですぜ!」

俺の全力の褒め言葉に、ゼノヴィアは気を良くしたのか僅かに笑みをこぼした。

「そうか。ならば、神崎先輩にも評価してもらいたいのだが・・・彼はどこだ?」

「ああ、先輩なら・・・」

「お待たせ」

木場の声を遮り、我らが部長がやって来た。待ってました! さあ部長! 今こそその最終兵器を俺の前に披露してください!

果たして朱乃さんを越える事が出来るのか!? そんな期待を抱きつつ、俺は振り返る。刹那、俺の鼻から勢いよく血が噴き出し始めた。「イツセー君!？」

「ば、馬鹿な…モノキニだど!? しかもO型!? そんな、まさか…。エロDVDでしか見る事がないと思っていた至高の装備を部長が!? ああ、谷間どころか可愛らしいおへそまで丸見えじゃないですか!」

「あらあら、攻めたわね、リアス」
あの朱乃さんまでもがちよつと顔を赤らめている。てか誰かティツシユか何か持ってね?

「どこかの鈍感騎士様を振り向かせるにはこれくらいでも足りないかもしれないわ。…ただでさえ、この前のヴァーリなんて女まで出て来たんだもの。これまで以上に積極的に攻めないで勝てないわ」

大丈夫です! 今の部長に勝てるヤツなんかいませんよ! ポツチと乳輪までくつきり浮かび上がってもうたまりません! さすがグラビアとかエロDVDでしか見ない水着だ! これっってもう泳ぐ為の物じゃないよね!

「イ、イツセーさん! 大丈夫ですか!？」

アジアが神器で鼻血を止めてくれた。ゴメンね、神器をこんな事に使わせちゃって。けど、これが男の性ってヤツさ。

「あの、部長。姉様は…?」

「ああ、黒歌なら」

「にやつはつはつはあ! 真打登場にや!」

「ぶはあああああ?!?!」

回復してもらったばかりだというのに、俺は先程よりもさらに激しく鼻血を吹き出した。ジャーン! ジャーン! という銅鑼の音と共に俺の脳内で誰かが叫んだ。

『ス、スリングショットだ! スリングショットが出たぞおおおおお!!!』

『に、逃げろ! いや、やっぱり逃げるな! しつかり目に焼き付けろおおおおお!!!』

』

縦長の紫色の布が首、胸、ヘソの横を通って、下腹部まで綺麗に別れたまま伸び、横に繋がる部分は首と腰の所しかない。正にスリングショット（パチンコ）の名に相応しい。部長のモノキニを上回る、エロ水着Ⅱこれといっても過言では無い最終兵器を越える究極兵器がついに、ついに俺の前にはいいいいいい!!!

「ああ・・・時が見える・・・」

「目が逝ってる!?! し、しっかりするんだイツセー君!」

「だ、大丈夫だ、木場。こんなお宝を前に、この俺がくたばるわけねえだろ」

しかしまずい。フラフラする。鼻血出し過ぎて貧血かもしれない。駄目だ！俺は倒れるわけにはいかねえ！

「はわわわわわわ!?!」

「ね、姉様!?! 何ですかその水着は!?!」

「にや? これはスリングショットって言って・・・」

「名前を聞いているんじゃないです！ 私が聞きたいのは、どうしてそんな水着を選んだのかって事です!」

「えー。だって普通の水着じゃご主人様の記憶に残らないじやにやい。その点、これならインパクトバツチリにや」

「だ、だからって、そんなほとんど丸見えな格好・・・」

「心配しなくても “処理” は完璧にや」

「誰も聞いてません!」

「・・・ほほう。確かに」

「イツセー先輩!」

「すんまつせん!」

小猫ちゃんの鋭すぎる目に即土下座する俺。だ、だけどき、そんな事言われたら男ならつい見ちやうぜ?

「はあ・・・。私もさつき見た時は目を疑ったわよ。それはエロティックというよりただのINRANにしか見えないわよ」

部長のツツコミに、お姉さんがキュピーンと目を光らせた。

「ほっほーう。この私をINRANとな? 確かに私自身自覚してはいるけど、リアスにだけは言われたくないにや〜」

あ、自覚してるんですね。

「どういう意味よ?」

「この前、リアスの部屋の前を通った時、中から艶めかしい喘ぎ声でご主人様の名前を連呼するのを聞いた……」

「うわああああああああ!!!! ちよ、ちよつとお! いきなり何デタラメぬかしてるのよあなたはああああああ!!!!」

部長の絶叫がプール全体へ響き渡る。それでもお姉さんの追撃は止まらない。

「さーて。あの時リアスは一体何をしていたのかにや?」

「そ、そそそそそんなの! き、ききききき決まってるじゃない! 運動よ! う・ん・ど・う!」

「ご主人様の名前を呼びながら?」

「そ、そうよ! リヨーマの顔を想像しながらやるとはかどるのよ!」

「ご主人様を想像しながらヤルとはかどる運動ねえ……」

ぶ、部長……。その運動つてまさかオn……!

「それ以上は駄目だ、イツセー君」

ピンクを通り過ぎて真っ赤な妄想の世界へダイブしようとした俺を、木場がかつてない真剣な表情で引き戻す。

「な、なんだよ、木場」

「いいかい。この人達はBLには寛容だけど、そっちのネタには厳しいんだ。表現をぼかすのはまだいい。だけど、直接的に表してしまつと、この物語が終わってしまう恐れがあるんだ」

「ホモはよくてエロは駄目ってどんな連中だよ!」

「それは禁則事項さ。だから、キミもそれだけは常に心がけてくれると助かる」

それだけ言って、木場は俺から離れた。なんだよその意味深なセリフは。言い様も無い恐怖が過る中、部長とお姉さんの言い争いはより激しくなっていた。

「そ、それを言うなら黒歌だつて! お風呂場でシャワーを使ってあんな……!」

「にやにや!? 何で知ってるにや!? まさか覗いてたのにや!? I N

RANに加えて覗き趣味まで持つなんて、とんだエロキングにや！」
「誰がエロキングよ！ 扉をしっかりと閉めて無かったあなたが悪いでしょうが！」

「にやにおく〜！」

「何よー！」

うおっ！ ヒートアップして近付き過ぎたせいで、二人の胸が密着してムニムニ形を変えている！ ああ、そんなに押しつけあったら……。ツ！ 見えたあああああ!!!

「マズイな。この状況を止められるのは先輩しか……」

「呼んだか？」

「ツ!? せ、先輩!？」

木場の驚き声のつられて振り返ると、そこには先輩と……。え、あの時のエロエロお姉さんまでいるじゃん！ 何だその組み合わせ！

「はあい、赤龍帝君。中々面白い展開になってるじゃない」

これを面白いと言いますかあなたは!？」

「とりあえず、状況を説明してくれ」

「あ、じゃあ僕から」

木場が先輩へ説明する。それを聞いた先輩が部長とお姉さんの間に割って入り、騒ぎは一応終結した。そうになると、次の話題は必然的には彼女の事になった。

「……で、どうしてあなたがリョーマと一緒にここに来たの？」

「簡単よ。私もお仲間に加えてもらおうと思っただけよ」

「俺だけでは判断出来なかったからな。みんなに意見をもらおうと思っただけよ」

「はあ、なるほど。そういう事なら大歓迎ですよ、先輩。美人が増えるのは良い事ですから。」

「何が目的なの？」

部長だけは彼女を疑っているようだ。まあ、部長の立場からしたらそうだよな。

「だから言ってるじゃない。私にもプールを楽しませて欲しいだけよ。それ以外に変な事は考えてないわ」

見つめ合う両者。やがて、部長が諦めたような表情で溜息を吐いた。

「・・・しようがないわね。いいわ。あなたの参加を認めます。ただし、変な真似をしたその時は・・・」

「わかつてるわ。その時は騎士様が私を滅茶苦茶にするんでしょ？」

そう・・・エロ同人誌みたいに！」

「なわけないだろ（でしょ）!!!」

先輩と部長のツツコミが見事に合わさった。あ、そういえば先輩のツツコミって初めて聞いた気がする。

「ふふ、冗談よ。さあ、お許しも出た事だし、早速着替えないとね」

そう言うと、エロエロお姉さんはその場で服を脱ぎ出した。すわ!!? まさかの生着替え鑑賞のチャンス!? と思ったら、中に既に着てました。そりやそうですよね。

ちなみに、着ていたのは黒いビキニ。・・・普通だ。この人ならもつとヤバイヤツなのかと思つてたけど。

ふと先輩の方を見る。エロエロお姉さんを見つめるその顔からは、疲れと共にどこか達成感が感じられた。そこで、俺は察した。

「先輩。もしかしてあの水着・・・」

「ああ・・・。三十分以上説得してなんとかアレで納得してくれた。彼女自身が選んでいたのは、その・・・ただのヒモみたいなヤツだったからな」

俺としてはそっちの方がよかったけど。奮闘した先輩の前で言うわけにもいかないのです、俺は曖昧に頷いた。

「それじゃ、お先に！」

言うや否や、プールへダイブするエロエロお姉さん。

「ちよ、私達より先に入るなんてどういうつもり！」

「ふふ、出遅れてしまいましたわね」

「僕達も行きましょうか」

「み、みなさん！ 準備体操はしっかりやらないといけませんよ！」

みんなが一斉にプールへ飛び込む。俺と先輩は互いに頷き合った。
「行くうか」

「ほいー！」

よっしゃあ！今日は思いっきり楽しんでやるぜ！

結局、俺達は陽が傾く頃までプールではしゃぎ続けるのだった。

第三十五話 たとえ何者であろうとも

「ほら、もっとしつかり足を動かして」

「こ、こうですか〜！」

「その調子にや、白音。ちゃんとお姉ちゃんが手を持ってあげるか
ら安心して泳ぐにや」

「は、はい・・・！」

「・・・やっぱり締め付け具合が不快ね。今からでも脱ごうかしら」

「ちよつと！ 変な真似しないでつて言ったでしょ！」

「ほーら、イツセイ君。早く逃げないと捕まえちゃうよ」

「何で teme と追いかけてこしなきゃなんねえんだよ！ マジで近付
くな！」

「・・・はあ」

水と戯れる美女、美少女達（一部例外あり）に思わず溜息が出る。俺
だつて健全な男だ。こんな素晴らしい光景を前に何も思わないわけ
は無い。眼福とは正にこの事だな。

しかし、あの二人・・・リアスと黒歌の水着はなんとかならんのか。
あれ最早水着じゃないだろ。他の子達はどうして止めなかったのだ
ろうか。いやね、似合つてないとは思つてないよ。むしろ似合い過ぎ
ててヤバイ。ハッキリ言うとうとエロい。学校のプールで着るつだけ
なのに、何であんな扇情的かつ挑発的な水着を選んだのかね。・・・
いや、逆に大勢の前じゃ着られないからこそ、ここで着たのかもな。
そして、あの危ない水着の名称を知っていた兵藤君は流石だと思つ
た。

『前にエロ水着特集のDVD見た時に知りました』

自慢気に語る兵藤君。それを塔城さんがコールドアイで見つめて
いたのを俺は見逃さなかつた。まあ、彼女は他の子達に比べて一層そ
ういったネタが好きじゃないみたいだから仕方ないのは仕方ないん
だけどな。

あの二人に比べて、露出強のヴァーリさんがまともに見えるつてい
うのがおかしいな。あの時の俺の説得は間違つていなかったようだ。

思い返すと、店で彼女が手に取っていたのは、黒歌のアレよりもさらに危険なブツだった気がする。・・・マジでよくやったよ、俺。下手したら今頃通報されてたかもな。

そんな感じでプールサイドからみんなの様子をボケーッと眺めていると、姫島さんが一人プールから上がると、どういうわけかこつちに近付いて来た。明らかに小さすぎるビキニが、水の所為で体にピツタリと張り付き、おかげで胸の先端の色と形がくつきり浮かび上がっている。自称、紳士な俺はさりげなく視線を逸らす。

やがて、彼女は俺の前に立った。

「ちよつと疲れてしまいましたわ。ご一緒してよろしいかしら」
「どうぞ」

「それでは」と前置きし、姫島さんが俺の隣に座る。すかさず傍に置いてあつたタオルを彼女の肩にかける。

「それで体を拭くといい」

「ふふ、紳士ですわね。ではありがたく使わせて頂きますわ」

ホントはキミの上半身を隠す為なんですけどね！ などと言えれば逆に変態扱いされてしまう恐れがあるので、俺は微笑みを返すだけにした。

「あなたと二人きりでお話するなんて久しぶりな気がしますわね」

「そうだな・・・。去年は大体リアスとキミがセットだったし、今年はおカルト部のみんなと一緒にの時間がほとんどだったからな」

そう答えると、姫島さんはどこか含みのある笑みを向けて来た。彼女がこういう顔をする時は誰かをからかう時が相場だ。

「そういえば、いつの間にかリアスの事を名前で呼んでいますわね」

「ああ。彼女から許しが出たからな。おかげでより友人としての仲が深まった気がするよ」

「友人・・・ですか」
「ん？」

「何でもありませんわ。ただ、そういう理屈なら、未だ名字で呼ばれる私は、神崎君との仲はまだ深くないという事になりますわね。うう、悲しいですわ。大切なお友達と思っていたのに、あなたの方はそう

じやなかったなんて・・・」

わざとらしくタオルで目元を拭う姫島さん。だがしかし、口元がうっすら笑っているのできっと嘘泣きだ。証明終了！ 真実はいつも一つ！

よかろう。ならば、ここはそれを逆手にとつてイタズラ返しをしてやろうではないか。ふふふ、イジリキャラがイジられたらどういう反応をしてくれるのかね。

「朱乃」

「ツ・・・!?!」

「そんな事を言わないでくれ、朱乃。俺だって、本当はキミの事を名前前で呼びたかったんだよ」

「え？ え？ ええ？」

「朱乃。ああ、朱乃。実にキミに相応しい名前だ。キミは俺にとって大切な（友）人だよ。キミにそんな不安を抱かせてしまうなんて、情けないな、俺は」

「か、神崎君、もう・・・」

「俺の事も名前でも呼んでくれないか？ キミのその艶やかな声で呼ばれたら、それだけで俺は——」

「わ、わかりました！ 調子に乗った私が悪かったですわ！ ですからもう止めてください！」

よし、勝利！ 俺は心の中でガッツポーズを取った。対する姫島さんは恥ずかしいのか、それともからかわれて腹が立ったのか、顔が真っ赤だ。俺としては前者だとありがたいんだけどな。

「うう、いつかリアスに言われた事を改めて思い知りましたわ」

何の事かと尋ねると、姫島さんは慌てて何でもないと言った。首を横に振った。その反応は何でもないわけじゃないよね？ よし、今度リアスに聞いてみよう。

「も、もうこの話はお終いですわ。別の話をしましょう」

俺としてはこのままキミをイジってるのも楽しんだけど。まあ、ここらが引き際かな。あまりやり過ぎると本気で怒らせてしまうかもしれないし。

というわけで、適当な話題を出し合っている内に、今度の授業参観。そして、三陣営のトップ会談の話となった。

「リアスは大変そうだな。お兄さんに加えてお父さんまで来る事になっているとは」

「・・・そうですわね」

あれ、ついさっきまで笑顔で話していた姫島さんが急に表情を曇らせてしまったぞ。なんか、俺が言ったお父さんという単語がきっかけだったように見えたが・・・もしかして、父親と仲が悪いのかな。

「姫島さんは家族の方は？」

「来ませんわ。・・・いえ、来れないと言った方がいいかもしれないわね」

ああ、仕事とか？　なんて考えた俺に対し、姫島さんは衝撃的な事実を口にした。

「私の母は・・・私が幼い頃に死んでしまいましたから」

「ッ!？」

マ、マジか・・・。くそ、知らなかったとはいえ、なんて軽率な質問をしてしまったんだ。俺はすぐに姫島さんに謝罪した。

「すまない。嫌な事を話させてしまった」

「いいんです。話していなかっただけに非がありませんもの」

優しいな、姫島さん。明らかにこっちが悪いのに、こうやってフォローしてくれるなんて。考えてみると、彼女っていつも周りに対しての気配りが上手いよな。オカルト部でもさりげなくみんなにお茶やお菓子を出してくれたりするし。・・・っと、今はそれは関係無いか。

「そう言ってくれると救われるな。ならば、お父さんの方——」

「あの人の事は知りません」

俺が言い切る前に、いつもの微笑みを消し、完全な無表情で答える姫島さん。その表情に薄ら寒さを感じつつ、俺はそれ以上踏み込むのを止めた。

「そうか。ちなみに俺もキミと同じで誰も来ないよ」

露骨な逸らしだったが、姫島さんはそれに乗ってくれた。

「あら、黒歌さんは呼ばないのですか？」

「彼女はわけありだからな。それに、魔王が来るとわかった以上、余計呼ぶわけにはいかなかったからな」

「そうですね……。ただ、あの人が来ると別の意味で大変になりそうですね」

「どういう意味だ？ あ、もしかして、あんな美女がやって来ると騒ぎになるって言いたいのか？」

「大勢の前でご主人様なんて呼ばれたら……。ふふ、一躍時の人になりそうですね」

「イアエ!? そ、それはまずい！ 今は奇跡的にまともな人間に見られているのに、家族にご主人様なんて呼ばれているなんて知られたら……。その先に待つのは変態誕生という名の地獄だ！ 下手したら今度こそボツチロードを歩くハメになる恐れが！」

「どうやら、私達にとってはあまり関係無い一日になりそうですね。それよりも、その後に控えるトップ会談の方が重要じゃないかしら」
う、うん。そうだな。姫島さんの言う通りだ。俺達はそっちの方を考えよう。

確か、コカビエルの一件が今回の会談のそもそものきっかけなんだよな。あんなド腐れ堕天使一人の為に、各陣営のトップが集まるってちよつと腑に落ちないんだけど。やっぱり幼い子どもに手を出すのはどこから見ても外道な行為なんだろうか。ま、それは当然か。もうね、前回の事件に関わった野郎ども全員のアレをちよん切っちゃえばいいと思うんだ。

「堕天使のトップは……。確かアザゼルという名だったな」

「……。神崎君は、堕天使に対してどういう感情を持っていますか？」
あまりに脈絡の無い質問に面食らう。けれど、そう聞いて来る姫島さんの顔は真剣で、どこか緊張している風にも見えた。

堕天使に対する感情か。……。どうだろう。コカビエルの様なヤツもいるし、レイナーレさん達みたいな子もいる。だからその問いに対する答えは……。

「わからない……。かな」

「わからない？」

「ああ。今の俺は堕天使という括りに対して何か思う様な事は無い。ただ、コカビエルや、レイナーレさん達のような個人に対する感情しか持っていないからな」

コカビエルはムカつくが、たった一人の所為で他の人にまで同じ感情を抱くのは間違っている。実際にこの目で見てから判断しないと、いつか間違いを犯してしまうだろう。

「…でしたら。もし、もしですわよ。あなたの友人が実は堕天使だったら・・・あなたはどう思いますか？ 正体を隠していたその相手を責めますか？ それとも、騙された怒りそのままに、相手を滅ぼしますか？」

滅ぼすて・・・。姫島さん、キミの中の俺のイメージってそんなクレイジーなの？ 止めてよ、俺はあの神父とは違うんだから。

いや、詮索は後にしよう。とりあえず答えないと。うーん、でもなあ。正直・・・。

「どうでもいいな」

この一言に尽きる。

「ど、どうでもいい・・・？」

呆気というか、呆然とする姫島さん。中々見れないレアな表情を脳内カメラで撮影しつつ、俺は続ける。

「堕天使だろうがなんだろうが、その相手が友人だという事には変わらない」

「で、ですが、あなたを騙していたんですよ？」

「正体を隠さなければならぬ理由があるとしたら？ 本当の事を言えない事情があるとしたら？ それを騙されたと思うのは違うんじゃないのかな。むしろ、一人ですつと抱え込んでいた事に気付いてやれなかった事が申し訳ないくらいだ」

たとえ悪意を持って騙していたとしても、俺は直接真実を聞くまでは相手を責めたりはしない。そもそも、相手が何者かってだけで責めたりするヤツが友達って言えるのかって話だよな。

「俺はただ友人を受け入れるだけだ。それが堕天使でも悪魔でもな。だから・・・正体など、どうでもいいんだ」

・・・うわー。また語っちゃったよ、俺。けどまあ、聞かれた事を答えただけだし、別に気にする事でも無いか。うん、そうだ。気にしたら負けだ。

その時、姫島さんが突然俺に背中を向けた。なんか小刻みに体が震えているけど、もしかして寒いのか？ タオルもう一枚貸そうか？

「姫島さん？」

「何でも・・・何でも無いですわ・・・」

いや、声も震えてるじゃん。やせ我慢なんかしないでいいっての。

「無理するな姫島さん。辛いなら辛いと云ってくれ」

そう言うと、姫島さんはゆっくりこちらへ振り向くと、次の瞬間、俺の胸に飛び込んで来た。ちよっ！ 予想外にも程があるわ！ πが！ πの感触がああああああ!!

「辛いではありません・・・。ですが、どうかしばらくこのままですさせてください」

しばらくってどのくらいですかね！ やばい。薄着での密着ってこんなに強烈なのか！ このままでは理性がマツハだ！・・・『鉄壁』って精神的な固さも倍になったりする？ ええい、気休めでも構わん！ 使うぞ！

そうやって『鉄壁』を発動させようとした俺に、プールからの叫び声が届いた。

「あ、朱乃!! あなたリョーマに何して・・・!!」

慌てた様子でプールを上がるリアス。出来たらキミにはずっと中にいて欲しかったんだけどな。止めて。その扇情的過ぎる姿で近付かないで。

俺の祈りも虚しく、リアスは大股で俺の方へやって来ると、未だ離れてくれない姫島さんの手を取った。

「と、とにかく離れなさい朱乃！ リョーマも嫌がつてるじゃない！」

そんなリアスに対し、姫島さんはいつもの微笑みを取り戻し、益々俺との密着を強めた。それに合わせて形を変える大玉スイカが俺の精神的なHPを激しく削っていく。

「リアス」

「な、何よ？」

「私……ちよつとばかり本気で挑ませてもらってよろしいかしら？」

挑む？　どここの誰に？　というか、何で今の流れでそんな話に？

けど、リアスにはそれがどういう意味かしっかり伝わったようだ。彼女は驚愕の表情を姫島さんに向けた。

「……そう。そういう事なのね」

「ええ、そういう事ですわ」

「リョーマ！」

「な、何だ？」

「朱乃ばかりに構ってないで、私の相手もしてちょうだい！　ほら、このオイルを背中に塗って！」

胸の谷間から小さなボトルを取り出すリアス。すごいなー。そんな物まで収納出来るんだー。：：なんて感心すんな俺！　ここはツツコむ所だろうが！

「それなら私にも塗って欲しいですわね。もちろん、背中だけなんて言わず、前も」

「わ、私だって！　リョーマが望むなら胸でもどこでも揉ませてあげるわよ！」

何この羞恥プレイ。そしてリアス、何で揉むって話になつてんの？　オイル塗るだけだよな？　美少女二人の体を触れるとか男にとつては夢の様なシチュエーションだけど、彼女でもない子の体をまさぐる気は無いよ？　それだけは譲らない。ヘタレと言われようがこれが俺のルールだ。いつかそういう時が来るまで、俺は童帝の座に君臨し続けてやる。

さて、盛り上がる二人は置いておいて、向こうで鼻血を吹き出しながら木場君から逃げている兵藤君を助けに行くか。

そう決めて、俺はプールへ向かって歩き始めるのだった。

第三十六話 キミは一人じゃない

プールではしゃぎまくっていたら、いつの間にか夕方になっていった。いや、遊んだ遊んだ。こんな遊びに遊んだのはいつ以来だろう。前世じゃ彼女のいない野郎どもだけでプール行ったら負けだという今にして思うとわけわからん感情の所為で全く行ってなかったからなあ。それはともかくとして、今日はもうこれでお開きだ。みんな着替えを済ませ、今は校門の前に集合している。別れ前の最後のおしゃべりってヤツだ。

「騎士様」

話しかけて来たのはヴァーリさんだ。まだ完全に乾いていないのか、夕日に照らされた髪がキラキラ光っている。

「今日は楽しかったわ。初めはただの興味本位。なのに、気付けば自分でも驚くくらいはしゃいでしまった。不思議だわ。私にもこんな感情がまだ残っていたなんて。私が求めるのは強さだけ。・・・そう思っていたのにな」

そう話すヴァーリさんの笑みは、年相応のとても可愛らしく素敵なものだった。初めてだ、彼女のこんな表情を目にするのは。・・・それを見てドキツとしてしまったのは秘密だ。

「ふふ、こんな事言われたって困惑するわよね。今のはただの独り言。だから忘れてちょうだい。それじゃあね」

俺に背を向け、歩きだすヴァーリさん。そんな彼女に、俺はたまらず声をかけた。今の独り言とやらを聞いて、どうしても彼女に言いたい事があったからだ。

「待ってくれ、ヴァーリさん」

振り向いた彼女に俺は続ける。

「いつでもいい。また遊びに来てくれ。キミはもう、俺にとっては大切な友人の一人なのだからな」

俺の言葉に、ヴァーリさんは僅かに目を見開き、そして再び微笑んだ。

「・・・伝説の騎士の友人になれるなんて光栄だわ。なら、またいつか、

お邪魔させてもらうわね」

「ああ、待っている。それと、俺の名前は神崎亮真だ。覚えておいてくれ」

「いい名前ね。それじゃ、亮真。今度こそ失礼するわ。次に会う時を楽しみにしているからね」

今度こそ、ヴァーリさんは去って行った。あの子・・・ひよつとしたら、友達とこういう風に遊んだ事無いのかもしれないな。先程の独り言を聞いて、俺はそう推測した。いや、下手したら友達と呼べる相手すらいないのかもしれない。やっぱり露出強に対する世間の風当たりは強いんだろうな・・・。

そこで思いついた。だったら、俺が彼女の友達になればいいのだと。そして、一緒に露出強からの脱却を目指せばいいのだ。それさえ何とかすれば、きっと他の友達だってすぐに出来るはずだ。うん、我ながらいい考えではないか。

「リョーマ。ヴァーリは？」

いつの間にか隣にいたリアスがそう聞いて来たので、帰った事を伝えた。

「そう。なら私達も帰りましょうか」

「そうだな」

兵藤君達と別れ、俺達は家に向かって歩き始めるのだった。

・・・
・・・
・・・

帰宅して荷物を置くと同時に、みんな慌ただしく動き始めた。

「もうこんな時間ね。すぐに夕食の用意をしないと。ええと、今日の当番は・・・」

「あ、私です！」

「それじゃ、お願いね、アジア。その間、私はお風呂の掃除でもしよるかしら」

「では、私はお洗濯を」

リアス、アジア、塔城さんが各々の場所へ向かう。さて、俺は何

をしようかな。

「ご主人様。ちよつといい？」

俺の服を引っ張りながら、黒歌が神妙な面持ちで話しかけて来たので、俺は彼女とソファアに腰掛けた。

「どうしたんだ、黒歌？」

「ありがとね、ご主人様。今日はとっても楽しかったにや」

一瞬だけ微笑むが、すぐにまた表情を戻す黒歌。

「・・・犯罪者だった私に、こんな楽しい毎日を過ごせる事が、今でも信じられないにや。しかも、離れ離れだった白音ともまた一緒に暮らせるなんて・・・。何もかも、ご主人様のおかげにや。あの時、ご主人様が現れなければ、私は今頃・・・」

塔城さんと別れた後、一体どれほど辛い目に遭って来たのか。口にせずとも、こうして俺の前で流している涙が全てを物語っていた。

「負担にしかない存在の私に、たくさんの幸せを与えてくれて、大切な妹との関係を取り戻させてくれて、消えかけた命を救ってくれて・・・本当にありがとう、ご主人様」

黒歌の心からの感謝の思いがひしひしと伝わってくる。・・・やべえ、俺も泣きそうなんですけど。こういうのめっちゃ弱いんだよね、俺。しかし、騎士（笑）である俺は人前で泣き顔など見せてはならないのだ。なので、必死こいて笑顔を作った。

「俺は俺に出来る事をやっただけに過ぎない。それとっておく。キミを負担に思った事など一度も無い。今までも、これからも。金輪際、そんな風に自分を卑下するのは許さないからな」

「・・・うん」

カッコつけたセリフではあるが、これは本心だ。彼女はもう、この家には欠かせない子なのだから。けれど、彼女が自分の立場を重く見ているのも確かだ。

「いつその事。今度の会談の時にサーゼクスさんに話してみるか」

あの見た目も中身もイケメンで、優しいリアスのお兄さんである魔王様なら、真実を伝えたらきつと情状酌量してくれるはずだ。・・・昔の戦いの借りを返してくれって言ったらいけるかもと思った俺は

下衆ですかね？

「そ、それは駄目にや。そんな事したらご主人様まで罪に問われる可能性が・・・！」

確かにその可能性も否定出来ない。ううむ、俺だけならまだいいが、リアスやアーシア、それに塔城さんまで巻き込まれたら嫌だな。だが、行動しなければ黒歌はずっと肩身の狭い日々を過ごさなければならぬ。それこそもつと嫌だ。

「何とかする。いや、何とかしてみせる」

黒歌にではなく、自分自身に言い聞かせる。そうだ。騎士（笑）ならば、この程度の苦難を乗り越えられないでどうする！ やる前から諦めていては何も出来はしないぞ！

心の中のやる気スイッチをこれでもかと連打しつつ、俺は黒歌を安心させるように頭を撫でてあげた。サラサラで触り心地は最高だ。ついでにネコミミもモフりたいが、なんか敏感な部分らしいので自重した。そんな所を許可もなく触ったらセクハラになっちゃうもんね。「・・・不思議にや。ご主人様に触れると、不安とかそういうのが全部吹っ飛んじやうにや」

ふ、どうやら俺は気付かない間に、掌から癒しの波動が出せるようになっていたようだ。・・・はいすみません。調子に乗って馬鹿な事言いました。

「わかったにや。私はご主人様を信じる。でも、無理だけはしないで欲しいにや。私は、今の生活で充分幸せだから・・・」

「ああ」

全ては俺の交渉次第というわけか。とりあえず、本屋に行つてわかりやすい交渉術についての本でも探してみようかな。

そうして考えごとに夢中になっていた俺は、黒歌が潤んだ瞳で俺を見つめていた事に最後まで気付く事は無かったのだった。

・・・
・・・
・・・

さて、時間は飛んで、とうとう授業参観の日がやって来た。授業を

受ける俺達の後ろに、クラスメイト達の親御さん達が並んで立っている。その中には、先日の予告通り、サーゼクスさんとリアスのお父さんの姿もあった。

しかし、こうしてみると、やっぱりあの二人の雰囲気というか、オーラっていうのは半端ないな。なんかお母様方の視線が子どもでもではなくあの二人に集中している気がする。

そんな感じで授業は進んでいき。気付けば昼休みとなっていた。今、俺は姫島さんと一緒に自販機に向かっている。何だか最近、こんな風に姫島さんと出くわして行動を共にする機会が増えた気がする。まあ、彼女曰くただの偶然との事なので、俺も別段気にはしていないが。ちなみに、リアスも一緒に付いてこようとしていたが、サーゼクスさんとお父さんに捕まっていた。しかしこれは丁度いい機会だ。今日で和解出来たらいいんだけど。

そうして、自販機までもう少しという所まで来た時だった。前方から支取さんが、普段の落ち着きはどこへ行ったのだとばかりの全力疾走でやって来た。

「支取さん。どうしたんだ、そんなに慌てて」

「か、神崎君！ お願いです、私を匿って……！」

「待つてよ……！ ソーナちゃん……ん！」

廊下一杯に響き渡る可愛らしい声に、支取さんが絶望の表情を見せた。そして、俺達の前に、声の正体が姿を現した。

片手にステッキ。特徴的な意匠が施された服。ギリギリまで攻めたスカート。そして……見覚えのあるその顔。それは間違い無く、支取さんのお姉さんである魔法少女だった。

「も……！ どうして逃げ……。ツ!? フユ、フューリーさん!」

俺の顔を見るなり、瞬間的に顔を真っ赤にしてもちもぢする魔法少女。……なんだろう。久しぶりに萌えらしい萌えを見た気がする。

「こ、こんにちは、フューリーさん」

「ええ、こんにちは」

一応、年上なので敬語に改めておく。

「あの……その……はう……。お、おかしいな。お話したい事

がいつぱいあったのに、頭の中が真っ白になっちゃったよお」

ブンブンとステッキを振り回しながら俺を見つめる魔法少女。うん、とりあえず落ち着きなさい。結構固そうだし、万一窓にぶついたらえらい事になるぞ。

「ふふ、やはりいらしていたのですね。セラフォル・レヴィアタン様。妹を溺愛するあなたならば、必ずいらっしやると思っていましたわ」

そう声をかける姫島さんに、魔法少女が若干の落ち着きを取り戻した。

「そーゆうあなたは、リアスちゃんの眷属の子だね！」

会話を始める二人を尻目に、支取さんが静かにその場から立ち去ろうとしていた。しかし、魔法少女はそれを見逃さなかった。

「どこ行くの、ソーナちゃん？」

「い、いえ、ちよつとお手洗いに」

「じゃあ私も行く行く〜！ あ、でもフューリーさんともお話したいし。う〜ん、どうしよ〜」

「わ、私の事は気にせず、好きなだけ神崎君とお話してください！」

「でもでも〜。ソーナちゃんとも離れたくないし〜。．．．あ、そうだ！ フューリーさんも一緒におトイレに来てくれればいいんだ！」

いや、それダメでしょ！ 野郎が女子トイレに入ったら即逮捕ですよ！ あかん。この子自由すぎる．．．。

「な、何を言っているのですか！ 魔王であるあなたがその様な発言をしては．．．！」

「魔王？」

え、おかしくない？ 魔王ってサーゼクスさんの事でしょ？ 何で

この魔法少女までそう呼ばれてるの？

「ああ、そういうえば、神崎君は知らないのでしたわね。魔王は一人ではありません。『ルシファー』、『レヴィアタン』、『ベルゼブブ』、『アスモデウス』の名を冠する四人を合わせ、四大魔王と呼ばれているのですわ。セラフォル様は、現『レヴィアタン』様なのです」

「えっへん！ そうなのです！ 改めて自己紹介しますね！ セラ

フォルー・レヴィアタンです！ 魔王やってます！ レヴィアたんつて呼んでくださいね！」

魔法少女・・・いや、訂正しよう。魔王少女が眩いばかりの素敵スマイルとピースサインを向けて来た。対する俺は、あまりに予想外な展開にただただ放心するのだった。

第三十七話 晒し者じゃないですか！

昼休みが終了し、午後の授業が始まった。苦手な数学だったが、俺はとて上機嫌で黒板に書かれた数式をノートに写していた。というのも、先程セラフオルーさんからとても嬉しい話が聞けたからだ。

セラフオルーさんが実は魔王だと聞かされた後、俺は彼女と二人きりで色々話をさせてもらった。その際、姫島さんが凄く微妙な顔をしていたけれど、おそらく俺が魔王様相手に失礼な事をしでかさなにか心配だったんだろう。以前サーゼクスさんの前で婚約パーティーを無茶苦茶にしてしまった前科があるので、そう思われても仕方ないのは仕方ないんだけどな。

支取さんが生徒会室を開けてくれたので、俺達はそこで話をすることにした。二十分くらいしたら戻ると言い残し出て行った支取さんは、去り際に申し訳なさそうに俺に頭を下げた。きつと身内が迷惑をかけて悪いと思うってたんだろうな。彼女真面目だし。

まあ、そういうわけで、俺はセラフオルーさんと向かい合う形で椅子に座り、彼女と話を始めた。当然というか、最初はやはり俺の事について色々聞かれた。ただ、好きな食べ物とか趣味はまだいいとして、好みの女性のタイプまで尋ねられるとは思ってなかった。しかも、その質問の時だけ、妙に真剣な感じだ。メモまで取ってたけど、一体何の参考にするつもりなんだろうか……。

あと、これも当たり前というか、あの時、セラフオルーさんの前から消えてから俺が何をしてたのかも聞かれた。正直、これ以上嘘を吐きたく無かったが、リアス達と違う事を言えば矛盾が生じるので、同じ様に記憶が無いのだと伝えると、凄く悲しい顔をされた。マジで、今から修正とか出来ないかね。リアス達も含めて心苦しさMAXなんですけど。

それから、俺の力についてもいくつか説明して、今度はセラフオルーさんから悪魔側についての話をしてもらおう事になった。ここで、俺がずっと抱いていた不安が払拭される事となった。

不安というのは、悪魔のみなさんの間で語り継がれていたフュー

リーの伝説。それがどれほど痛くて恥ずかしい感じで伝わっているのか。いよいよその真相が明らかになる時が来た。

結論から言うと、俺が予想していた物とは違っていた。それどころか、俺は悪魔を救った救世主扱いされているらしい。そんな俺が、前回のパーティーで再び姿を見せた事が広まり、冥界では大騒ぎだとか。正に奇跡だ。俺の恥ずかしい言動を好意的に受け取ってくれた悪魔のみなさんには本当に感謝の思いしか無い。・・・この時の喜びを、俺は一生忘れる事は無いだろう。

大人から子どもまで、フューリーの名を知らない悪魔はいないとまで言われてしまった。けど、寿命の長い悪魔の時間感覚はわからないけど、千年以上前の人物がどうしてそこまで人気があるのか俺には不思議だった。だって、たった一度しか姿を見せてないんだぞ。

そう口にするると、セラフォルーさんは得意気に胸を張りながら答えた。フューリーを題材にした特撮物を作ったからだ。おかげで子どもには大人気だし、大人も夢中になっていると。ちなみに監督はセラフォルーさん自身だそう。

いや、意味わからん。特撮ってあの変身！とか叫ぶやつだろ？ちなみに、主人公のキメゼリフは「貴様をヴォーダの闇に還してやる！」だとか。ノリノリなポーズでゼリフを叫ぶセラフォルーさんを見て泣きそうになった。なんでよりによって一番恥ずかしいそれが採用されてんの!?

今度DVDを送るって言われたけど、正直見たいの半分、見たくないの半分だった。だってへたしたら黒歴史追加じゃん。

さらに劇場版もいくつも制作され、フィギュア等のグッズもバカ売れとか。セラフォルーさんも第一期からヒロイン役で出演しているそう。その時、カテレアさんっていう女性とヒロイン役を争って勝利したが、彼女はその後、姿を消してしまっただけ。予定では第二期からヒロインを追加するつもりだっただけに残念だったとセラフォルーさんは言う。

ついでに説明されたが、セラフォルーさん自身、『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』っていう名前の特撮物で主役張ってるとか。どうり

で魔法少女コスが似合ってるわけだ。それと、最近ではパイロットスーツのコスプレにもハマってるみたいで、今日もどっちを着て来ようか悩んだそう。パイロットスーツってほしいピチピチで体のラインがモロに出るから、そっちで来てたらえらい事になってたろうな。……なんとなく、ヴァーリさんと並ぶ彼女を想像してみた。凄く……危ないです。

アホな妄想している俺にセラフオルーさんがとんでもない提案を持ちかけて来た。フューリー復活に合わせ新作を作るから俺に主役をやってくれと。今までは正体が不明だったから鎧姿でしか出せなかったけど、これでようやく正体を明かせるし、それを本人がやるのなら、大人気間違いなし！ と興奮して詰め寄って来るセラフオルーさんの雰囲気は圧倒されつつ、前向きに検討しますとだけ答えました。

いやだっすぐに決心なんてつかないよね普通。しかも演技ド素人の俺が……待てよ、アルⅡヴァンモードならなんとかなるかも。いやいや、何やる気出してんの俺。そしてセラフオルーさん。俺は検討するって言っただけですから嬉しそうにしないでください。そんな顔されたら断ろうとする俺が悪人みたいじゃないですか。

キスシーンどうしようとか、やつと恋人設定が活かせるとかブツブツ呟くセラフオルーさん。え、子ども向けなのにそんな事やっていいの？ なんて疑問を抱いていると、支取さんが戻って来た。気付かない内に二十分経っていたみたいだ。

二人と一緒に生徒会室を出た。そろそろ午後の授業が始まる。

教室に戻る途中で、支取さんからどんな話をしたのか聞かれたので、つい主役の話を書くと、支取さんから「……楽しみです」と予想外のお言葉を頂いてしまった。あら、もしかしてキミ特撮好き？

あのお姉さんにしてこの妹さんありつてヤツか？ とりあえず、逃げ道が狭まった事は理解出来ました……。

まあ、そんな感じで、魔王少女との対談は幕を下ろしたのだった。色々話が聞いたのは良かったが、なんだかまた悩みが増えてしまった気がするのはどうだろうか。

とりあえず、家に帰ったらみんなに相談してみよう。アーシアや塔城さんはまだしも、リアスや黒歌あたりは面白いからやれとか言っただけだな。

「それじゃこの問題を・・・神崎、解いてみる」

先生の指名にふと意識を取り戻す。ま、今悩んでも仕方無いし、夜まで待つか。

俺は席を立ち、黒板へと向かった。

・・・

・・・

・・・

そして夜、俺は昼休みの件をみんなに伝えた。黒歌なんかはもう一人の魔王が来ていた事にまず驚いていた感じだったが。

というか、アーシアを除く全員がフューリーの特撮を知っていた事に驚いた。ホントに人気あるんだな。主役の話をしたらぜひともやって欲しいとまで言われてしまった。

かと思うと、キスシーン云々の話をした途端に猛烈に反対されてしまった。あれですか。演技とはいえ、俺ごときがあんな可愛い子とキスなど言語道断！身の程を知れ！って事か。

鬼気迫る顔で反対を唱えるリアス達を見て俺はそう思うのだった。

第三十八話 時獄からの解放

大変だった者は大変で、そうじゃなかった者はそうじゃなかった授業参観の翌日、俺はリアスと姫島さんに引っ張られて旧校舎にやって来ていた。

道中、自然と二人に腕を組まれ、柔らかい物がずっと肘辺りに当たっていた。これぞ正にハーレム状態！・・・まあ、実際は俺が逃げ出さないように捕まえてるつもりなんだろうけどな。やれやれ、そんながつしり掴まなくても逃げたりしないって。

目的地である旧校舎一階のとある教室の前に着くと、そこにはすでに他のオカルト部の面子が集まっていた。一度みんなの顔を見渡してから教室へ目を向ける。

そういえばこの教室、なんか変な呼び名がついてたよな。ええつと・・・ああそうだ、確か『開かずの教室』だったっけ。名前しか知らないが、学園七不思議みたいなホラー的なヤツか？　ここで何するんだろう。あれか？　百物語とか？

「ここに私の眷属の『僧侶』がいるの」

全然違いました。悪魔関係の話でしたよ。初めて聞いた俺やアジアの為にリアスがしてくれる説明を聞きながらふと思う。なんだろう。すつごく今さらな気がするけど、人間である俺が毎回毎回悪魔に関する事に首突っ込んでいいのだろうか。

せつかくだし聞いてみるか。そう思っって尋ねてみたら、全員から思いつきり呆れられてしまった。

「本当に今さらね・・・」

「それはひよつとしてギャグで言っているのかしら？」

「先輩、あなたはすでに人間という括りを突き抜けてますよ」

「ある意味、人外より人外だと思います」

「・・・一度自分の規格外さを振りかえってみたらどうですか」

「ふ、コカビエルが聞いたらショック死するんじゃないのか」

痛い。みんなの言葉が痛いよ。そりやね、この体は確かにチートですよ？　けどそれ以外は普通の人間なんですよ？

「だ、大丈夫です！ リョーマさんはリョーマさんですよ！」

励ますように俺の手を握ってくれるアーシア。今日も相変わらずの天使っぷりに心が癒される。

気分が落ち着いた所で話を戻そう。そもそもどうしてこのタイミングで『僧侶』の話が出て来たのかというと、元々その『僧侶』は能力が危険過ぎるという理由でずっと封印されていたそう。それが、前回のフェニックスさんとのレーティングゲームの内容と、コカビエルとの一戦が評価され、この度封印が解かれたんだとか。確かに、あのゲームで最後に見せたリアスの誇りある姿は評価されて当然だと思う。コカビエルの件はよくわからんけど、きっと俺がプツンして間にリアス達が頑張ったんだろう。

「その子は一日中この教室の中にいるの。一応、深夜だけは封印が解けて旧校舎内だけなら出歩いてもいいのだけれど、その子自身がそれを拒否してる現状なのよね」

立ち入り禁止のテープが張られた扉に向かって手をかざしながら説明するリアス。

「それって引きこもりってヤツなんじゃ・・・」

兵藤君の指摘に、リアスが溜息と共に頷く。そっか、引きこもりか。やっぱり暗い部屋でパソコンに向かって色々やっていたりするのだろうか。姫島さんの追加説明では、実際にパソコンを使って悪魔のお仕事をこなしているそうだし。

「準備完了。それじゃ、開けるわよ」

はてさて、どんな人物が出て来るのやら。若干ワクワクしている俺の前で、リアスが扉を開ける。

「いやあああああああ!!!」

絹を裂くとはこの事かといわんばかりの悲鳴が俺の耳をつんざいた。ええ、マジでホラーだったの!? お札を！ 誰かお札を寄越してくれ！

突然の悲鳴に固まる俺達を尻目に、リアスと姫島さんが躊躇い無く教室へ入って行く。直後、彼女達と別の声のやりとりが聞こえて来た。所謂中性的な感じのその声は、女の子とも、少年ともとれるもの

だった。

「せ、先輩。どうしますっ?」

「・・・入ってみよう」

このままここにおいても意味が無いし、そもそも俺達は声の主に会いに来たのだ。俺は兵藤君達と一緒に教室へ入った。

まず目に入ったのはでかい棺桶。おやおや、益々ホラーじみてきたぞ。で、その棺桶のさらに奥の方にリアスと姫島さんがいる。そして、その二人に挟まれるように『僧侶』の子がいた。

駒王学園の女子の制服を纏った金髪のその子は、涙目で震えていた。ああ、女の子だったんだな。しかし凄く可愛らしい子だ。

「お、女の子!? しかもすっげえ可愛いじゃないですか!」

嬉しそうだな、兵藤君。だが、そんな彼に対し、リアスが首を横に振った。

「イツセー。喜んでいゝ所悪いのだけれど、この子は男の子よ」

「・・・え?」

俺と兵藤君の声がハモる。いや、え? 男の子? この明らかに見た目美少女なこの子が?

「で、でも、女子の制服を!」

「女装趣味があるんです」

「なるほど」

女装癖よりもっと凄い性癖を持つてる子を知っている俺は、姫島さんの説明をすんなり受け入れた。しかし、リアル男の娘なんて初めて見たぞ。これは後で記念撮影をしておかないと。

「マ、マジかよおおおおおおお!!?!」

兵藤君の方は未だ信じられない様子だったようで、驚きの声を張り上げていた。その声に、男の娘が再び悲鳴をあげる。

「ヒイヒイヒイヒイ! ご、ごめんなさい! 許してくださいださあああああ!」

「こ、こんな残酷な事が許されていいのか! つーか、引きこもりのくせに何で女装癖なんだよ!」

「だ、だって、女の子の服の方が可愛いし・・・」

「ぎげんなこらあ！ 返せよ！ 俺の夢を返せよおおおおおおお!!」

どうしてだろう。今の兵藤君の叫びは別の場面で使われるべきだったと思ってしまった。

「・・・人の夢と書いて、夢い」

おお、上手いな塔城さん。山田先生！ 塔城さんに座布団一枚お願いします！

「と、ところで、この方達は・・・？」

男の娘が俺、兵藤君、アーシア、ゼノヴィアさんを指す。いかんいかん。すっかり自己紹介が遅れてしまった。ここは年長者として最初に名乗らねば。

「初めまして。神崎亮真だ。よろしく」

「アーシア・アルジエントです！ よろしくお願いします！」

「・・・兵藤一誠」

「ゼノヴィアだ」

「イツセーとゼノヴィアは新しく増えた眷属よ」

「え？ じゃ、じゃあ、そっちの人達は？」

「リヨーマとアーシアは人間よ。最も、二人ともただの人間じゃないわ。アーシアは神器所有者だし。リヨーマは・・・あの伝説のフューリーその人よ」

「そ、そうなんです・・・フューリーイイイイイイイイ!??!」

男の娘は絶叫しながら、体の震えを激しくさせていた。もうね、この反応にも慣れましたよ。

「そうよ。あの伝説の騎士があなたを迎えに来てくれたのよ？ さあ、一緒に外に出ましよう」

「嫌ですう！ 僕ごときがフューリー様に迎えてもらう資格なんて無いんですう！ お外怖いよお！ 僕なんて迷惑をかける存在でしかないのにい！」

「あー、わかったわかった！ 泣きごとなら外で聞いてやるからー！」

兵藤君が男の娘の手を掴む。あー、駄目だぞ兵藤君。そういう子には無理矢理じゃなく、まずは落ちつかせないと・・・。

「や、止めてえ！」

男の娘が叫ぶ。その途端、表現のしようが無い変な感覚が俺を襲った。ただそれだけ。別に頭が痛くなったりとかそういうわけじゃない。ただ、変な気分になっただけだ。

とりあえず謎の違和感は置いておいて、とりあえず兵藤君を止めよう。俺は兵藤君と男の娘に近づこうとんた。

「な、ななななななななでええええええええええ?!?!」

近付こうとする俺を見て顔面蒼白で叫ぶ男の娘。え、俺、別に変な事してないよね？ なんでそんな怖がられないといけないわけ？

「ぼ、僕の神器が効かないなんて！ 嫌あ！ 近付かないでえ！」

泣き叫ぶ見た目美少女へ近付く俺。……このシチュエーション。第三者から見たら俺って変質者じゃね？ と、とりあえず落ち着かせないとな。

「あつ……！」

「大丈夫、落ち着いてくれ」

一瞬の隙を突き、俺は男の娘を抱き締めつつ頭を撫でた。とにかく、こちらに敵意が無い事を伝えないと。抱き締めるのはやり過ぎかもしれないが、これくらいおおげさにしないとこの子には伝わらないかもしれない。野郎相手に抱きつくとかアレだが、男の娘ならギリセーフだろ。こういう時にナデポの力があれば便利なんだけどなあ。……いや待て、男の娘相手に使ったら駄目だろ。

「は、離し……！」

「俺はキミを傷付けるつもりは無い。だからどうか落ちついて俺と話をしてくれないかな？」

逃げ出そうとする男の娘をしっかりとホールドしつつ説得する。すると、徐々にだが彼の緊張が解れていくのがなんとなくわかった。

「……あ、あのお。もう大丈夫なんで離してください」

まだ少しおどおどした感じの声だったが、そう言われたら離れるしかない。男の娘の背中と頭に乗せていた手を離して彼と向かい合う。若干顔が赤いが、この暑い時期に抱きついたりしたら暑いよな。ゴメンね。

「まずは、キミの名前を聞かせてくれないか？」

「ギャ、ギャスパー・ヴラデイですう」

「そうか。よろしく、ヴラデイ君。それで、どうして俺に対してあんなに怯えていたんだ？ 特別キミを脅かすような真似をしたつもりはないんだが？」

「そ、それは、あなたが僕の神器の発動した中で普通に動いていたから……」

「キミの神器はどういう物なんだ？」

「え、えつと、『停止世界の邪眼』っていつて、時を止められるんです。本当なら、あなたも他のみんなみたいに止まってるはずなんですけどお」

「凄いな名前だな。てか時を止めるって反則もいいところじゃないか。そして今気付いた。俺以外のみんなの動きが止まっている。でも、それならなんで俺だけ……」

「……ああ。もしかして、『ラースエイレムキャンセラー』のおかげかもしれないな」

ゲーム内で、敵組織の使う時間兵器『ラースエイレム』に対抗する為に主人公機に搭載されていた装置だ。時を止める『ラースエイレム』と、それを無効化する『ラースエイレムキャンセラー』。チート兵器な割にイベントでちょこっとしか出なかった可哀そうな装置がまさかこんな所で役に立つとは。

「ラ、ラースエイレムキャンセラー？」

「ああ。詳しくは説明出来ないが、どうやら俺にはキミの神器は効かないみたいだ」

「じゃ、じゃあ！ あなたも僕と同じ時間に関係する神器を持っているんですか!? ラースエイレムキャンセラーっていうのはその神器の名前……!?!」

「いや、違う。これは俺の持つ能力の一つとでも言うべきか。……すまない、俺自身よくわかってないんだ」

そもそも、何で神器相手に効果が発動するのか。そこから俺にはわかっていない。そう答えると、ヴラデイ君は落ち込んだ様子で顔を伏

せた。

「・・・そうですか。けど、流石フューリー様ですね。僕なんかと違って完璧に制御出来るみたいで羨ましいです」

「なら、キミは・・・」

「はい。僕は神器を制御出来てません。それどころかさつきみたいに暴走させちゃうんです。その所為で、みんな止まってしまふ。友達も、仲間も。そしてその度に、みんな怖がる。みんな嫌がる。僕は、こんな神器なんて欲しく無かった・・・！ この神器の所為で僕は一人ぼっちなんだ・・・！ こんな神器を宿している僕なんて消えちゃえばいいんだ・・・！」

絞り出すような声で話すヴラデイ君。ネガティブ思考に囚われている彼は、アルⅡヴァン先生から言葉をもらう前の俺にどことなく似ている気がした。あの時の俺も、今のヴラデイ君みたいに消えてしまいたいと度々思っていた。

だからこそ、ヴラデイ君の気持ちはなんとなくわかる。だからこそ、ヴラデイ君を放つてはおけない。だからこそ・・・俺はヴラデイ君を導いてあげないといけない。俺にとって、アルⅡヴァン先生がそうだったように。

「・・・俺がいるよ、ヴラデイ君」

「え？」

「俺にはキミの神器は効かない。だから怖くないし嫌がりもしない。キミが俺を受け入れてくれるのなら、俺は絶対にキミを一人ぼっちはさせない」

「フューリー様・・・」

「辛い思いをしてきたのだろう。悔やむ事もあったのだろう。俺も同じ。自らの行いを何度後悔した事か。けれど、そのおかげで今の俺がいるのも事実なんだ。大事なのは、後悔を糧に自分を変えようとする勇気を持つ事だ。」

「・・・無理ですよ。そんな勇気、僕なんか持てるわけが無いです」
「大丈夫。俺に出来たんだ。キミに出来ないわけがない」

ヴラデイ君は今の自分を嫌っている。それは、今の自分から変わり

たいと思っっている証拠だ。きつかけさえ与えてあげれば、きつと彼は変わるはずだ。

思いの丈を全てぶつけた。そうして数秒の沈黙の後、ヴラデイ君が囁くように口を開いた。

「本当に・・・本当に、僕も変わる事が、この神器を制御出来るようになれるんでしょうか？」

「ああ。諦めなければ、いつかきつとな」

「フューリー様も・・・見守ってくださいますか？」

「もちろんだ」

「ぼ、僕は・・・えぐ、僕は・・・消えなくていいんでしょうか？」

「消える必要は無い。リアス達だってそう思っているはずだ」

「うう・・・うわあああああああん!!!」

大粒の涙を流しながら抱きついて来るヴラデイ君を優しく抱きしめ返す。その瞬間、またあの謎の感覚が襲ってきた。さらに、止まっていたはずのリアス達が一斉に動き出す。そして、抱き合う俺達を見て呆氣にとられていた。

「・・・どういう状況かしら?」

とりあえず、ヴラデイ君が泣きやんでから説明させてもらおうかな。あやすように彼の頭を撫でつつ、俺はそう決めたのだった。

第三十九話 約束

「というわけで、ヴラディ君の神器は俺には効かないらしい」

「そ、そうみたいですう・・・」

「・・・もう驚く気力も無いわ」

「ますます人外じみて来ましたわね」

時間停止中のやりとりを説明すると、リアスと姫島さんからそんな風に言われてしまった。

「時間を止めるって・・・そんなん反則レベルじゃないですか」

「そう言うイツセー君の力だって、僕達からみたら十分反則レベルだよ？」

兵藤君に対し、木場君がそう返す。確かに、時間をかければかけるほど、どんどん力が倍が増えていくって、恐ろしいよな。俺も精神コマンドさえ使えば同じ様な事は出来るけど、精々三倍が限界・・・いや、『捨て身』を使えばもう少しいけるか。代わりに相手の攻撃全部受ける事になるけど・・・。

「けれど、ギヤスパーはその神器を制御出来ず、無意識に発動してしまう。だから今まで封印されていたのよ」

「へー。けど、部長ってやつぱり凄いですね。そんなヤツを駒一つだけで眷属にしちゃうなんて」

そっか。能力の高い相手を眷属にするのって駒が複数必要だったわけ。兵藤君も『兵士』の駒を八つ使ってやっと眷属に出来たって聞いているし。

「それは『変異の駒』のおかげよ」

「『変異の駒』？」

また新しいワードが出て来た。首を傾げる兵藤君に、リアスの言葉を引き継いだ木場君が答える。

「通常の駒と違って、明らかに駒を複数使うであろう転生体が、一つで済んでしまったりする特異な現象を起こす駒の事だよ。だいたい、上位悪魔の十人に一人は一つは持つてる物さ。ギヤスパー君はその駒を使った一人ってわけさ」

「もしかしたら、神崎君も『変異の駒』を使えば悪魔に転生させられるかもしれないわね。うふふ、将来独立した時に手に入ったら使ってみようかしら」

うーん、どうなんだろう。あの時は駒の数がどうかじゃなくて、駒自体を受け付けられない感じだったんだけどな。

「そうやって眷属に出来たのはいいのだけれど、問題はこの子の才能にあったの」

「? どういう事ですか?」

「ギヤスパアの神器は無意識の内にどんどん力が高まっていくみたいなの。将来的には『禁手』へ至る可能性もあるという話よ」

『禁手』かあ。あれってカツコイイんだよね。俺のラフトクランズも『禁手』しないかな。・・・まあ、そもそも神器じゃないから無理か。「だ、大丈夫なんですか? 『禁手』ってただでさえ危険なのに、コイツみたいにならないうツが至ったらえらい事に・・・」

「そうね。ただ、上はそうは思っていないようなの。今の私ならこの子をちゃんと制御出来ると判断されたみたい。この子は本当に凄いよ。ハーフだけど、由緒正しい吸血鬼の家柄出身で、能力を有しているし、強力な神器も宿している。さらに魔術にも秀でているわ。・・・こうして改めて説明してみると、駒一つで済むわけがないわよね」

・・・今さらつと爆弾発言しましたよね? え、吸血鬼までいるのこの世界?」

「きゅ、吸血鬼!? 本当にいたんですか!?!」

ほら、兵藤君も驚いてる。そうだよ。それが普通の反応だよ。ええ。ギヤスパアは正真正銘の吸血鬼よ。さらにダイウオーカーっていう特殊な存在なの。この子は日中でも活動出来るのよ」

「そ、それじゃあ血は? 吸血鬼っていったらやっぱり血を吸うんじゃない・・・」

「ハーフだからそこまで強い吸血衝動を持っているわけじゃないわ。もともと血を飲むのは苦手みたいだし」

「・・・つまり、ヘタレヴァンパイア」

塔城さん、もう少しオブラートに包もうよ。ブラディ君、さつきからずつと俺の制服の端を掴みながら後ろに隠れてるし。

「それにしても・・・ずいぶん懐かれたみたいだな、神崎先輩」

感心と呆れが混じった表情を俺に向けるゼノヴィアさん。これって懐かれてるのかな？　ただデカイ壁があるからそれに隠れてるだけなんじゃないの。

「・・・ねえ、リアス。もしかしてまた・・・」

「ありえるわね。リョーマって無自覚で落とすから・・・」

「で、でも、男の子ですよ？」

「先輩には性別なんて関係ないんじゃないですか」

「これもフューリーの力とでも言えばいいのかな」

女性陣が輪になってコソコソ話している。こんな時に内緒話なんて止めてくれよ。気になってしょうがないじゃないか。

「リョーマ。時間停止中はギヤスパーと話をしただけなのよね？」

さつきそう説明したんですけど。だって本当に話以外に特別な事なんてした覚えは無い。

「ああ。他にこれといってやった事はないぞ。なあ、ブラディ君？」

ブラディ君に話を振ると、彼は俺の背中越しにリアス達に向かって答えた。

「は、はい。怯える僕を抱きしめてくれて、励ましてくれただけなんです。あ、あんな風に優しく抱きしめてもらったのって何だか凄く久しぶりな気がします」

よかった。ちよつと強引過ぎたかと思っただけど、ブラディ君は好意的に受け止めてくれたみたいだ。ホツとする俺とは対照的に、リアス達が酷く狼狽した様子を見せる。

「だ、抱きしめ・・・!?　まさか、リョーマってそっちの気が・・・!?」

「それが本当なら、リアス達の誘惑に反応しないのも領けますわね」

「・・・姉様が聞いたら卒倒しそうですね」

「と、とんでもないライバルが出現してしまいましたあ・・・」

「むう、これでは私の計画が・・・」

「なるほど。先輩も・・・」

おい、なんかとんでもない勘違いされてねえか!? 違うから! 俺は普通に女性が好きだから! ホモオ・・・じゃないからああああああ!!!

「いやいやいや! みんな落ち着こうよ! 先輩はただギヤスパーを励まそうとただけだった! つーか木場! お前なんで嬉しそうなんだよ!」

救世主、兵藤君登場! そう! キミの言う通り! だからみんなその勘違いを早く解いてちょうだい!

結局、誤解を解くのに五分もかかってしまった。とりあえず、今後は兵藤君までとは言わないまでも、もう少し女性好きであるとアピールした方がいいかもしれない・・・。

「すまない、ヴラディ君。キミまで巻き込んでしまいそうだったな」「い、いえ。気にしないでください。・・・そこまで嫌じゃなかったですし」

顔を逸らし、囁くように答えるヴラディ君。おそらく本心では不満なんだろうけど、俺が落ち込まないようにあえてそう言ってくれたんだろう。優しい子だ。

「こ、コホン! つい話が逸れちゃったわね。それじゃ、これからの予定を説明するわ。私と朱乃は会談の会場の打ち合わせに向かうわ。祐斗、お兄様があなたの『禁手』について話を聞きたいそうだから一緒に来てちょうだい。残りのみんなは、私が戻って来るまで、ギヤスパーに色々教えてあげて。特にリョーマ。この子の神器を無効化するあなたと一緒になら、ギヤスパーも落ちつけるだろうし、傍にいてあげて欲しいの」

「任せてくれ」

ついさつき、見守るって約束したばかりだからな。

そうして、俺達はそれぞれの役割を果たす為に動き始めるのだった。

.....

さて、俺達はヴラディ君を相手にする役割を与えられたわけだが……。

「ほら、走れ。デイウォーカーは日中でも走れるのだろう」

「ひいいい！ お、お助けええええええええええ!!」

「……どうしてこうなった」

眼前で繰り広げられる追いかっこを眺めながら、俺は一人呟いた。

光り輝く剣を持ったゼノヴィアさんから全力で逃げているヴラディ君。あの剣、前に見たエクスカリバー（笑）と違って本物だそう。デュランダルとかいったっけ。銃刀法違反なんだけど、悪魔相手に人間の法律持ち出しても意味無いか。

「健全な精神は健全な肉体に宿る」……素晴らしい考えだと思うよ、ゼノヴィアさん。その為に体力作りから始めるのもいいと思うよ。でもね、最初からクライマックスってのは可哀そう過ぎやしませんかね？

ガチ泣きしながら逃げるヴラディ君と違い、なんかめっちゃ生き活きとした顔してるゼノヴィアさん。そういうえば、この街に住むようになって、色々な事が新鮮で楽しいって言ってたな。

「ゼ、ゼノヴィアさん！ ギャスパー君が怯えてますよ！」

アーシアの制止も届かず、ゼノヴィアさんの追跡は続く。そうそう、ブラディ君は一年生だった。だからアーシアも彼を君付けしているのだが。これまでずっと周りにさん付けしていた所為か、彼女のその呼び方が何となく新鮮だった。

「アイツ……マジで生まれて来る性別間違えてるよな……」

なんともいえない表情でそう漏らす兵藤君。しかし、こればかりはどうしようもない。受け入れなさい。彼は男の娘なんだ。

「ギャー君はニンニクを食べてもつと健康にならないと駄目だと思
う」

「みぎい!? 小猫ちゃんまで僕をいじめるううううう!!」

とつさに「ひだりい!」と叫びそうになった俺はねじ切られればいいと思う。

「おーおー、やってるなあ」

「ッ!?!」

突然現れた匙君の姿を確認した瞬間、俺はさりげなくアーシアを隠すように立った。DMな彼をウチの天使に近付けさせるわけにはいかない!

「・・・おい、兵藤。なんか先輩が俺を睨んでる気がするんだけど」

「お前、なんかやったのか?」

「別に。ただ、会長に手を出そうとしてるからたまに呪いの念を送ったりしてるだけだぞ」

「いや、それしかねえだろ理由!」

仲いい二人とも。俺としては兵藤君が彼に影響されない事を切に願う。

「つか、何しに来たんだよ」

「ちよつと仕事があつてな。ついでにやつと解禁された引きこもり眷属を一目見ようと思つて。で、どこにいるんだ?」

兵藤君がヴラデイ君を指差すと途端に嬉しそうな顔をした匙君だが、直後男の娘だと聞かされて一瞬で表情を沈ませた。

「詐欺じゃねえか! 俺のときめき返せ!」

「だよなあ。やっぱりそう叫びたくなるよなあ」

意気投合する二人。とそこへ、第三者の足音が近づいて来た。

「ほお、魔王眷属の悪魔さん方は、こんな所でお遊戯会つてわけか」

二十四時間戦えそうな力強い声が耳に入る。誰だろうとそちらへ振り向くと、そこには浴衣を身に纏ったワイルドな男性の姿があった。こんな人この学園にいたっけ?

「ッ!?! ア、アザゼル!?!」

兵藤君が目を見開く。アザゼル? それって確か・・・ああ、そうそう。墮天使陣営のトップの名前じゃ・・・え?

兵藤君の一言でみんなの空気が一変した。ヴラデイ君を追いかけていたはずのゼノヴィアさんがいつのまにか俺達のすぐ横で男性に向かつて剣を向けていたし、兵藤君自身も神器を装備していた。

「兵藤! アザゼルつてまさか!」

「ああ、そうだ！ こいつが墮天使の総督だ！ 正体を隠して俺に接近してたんだ！」

マジで本人かよ。しかし・・・改めて見るとカツコイイ人だな。野性的というか、どこことなくフェニックスさんと同じ方向な感じがした。うーむ。レイナーレさんが惚れちゃうのもわかる気がするなあ。「おいおい、そう殺気立つなよ。お前らもまさか本気で俺に敵うとは思ってないだろうに。・・・いや、お前がいれば話は別か」

アザゼルさんが俺の方へ顔を向け、ニヤリとした。

「会えて嬉しいぜ、フューリー。会談までお預けだと思ってたが、いや、俺は運がいい」

「俺を知っているのですか？」

「当たり前だろう。というか、すでにお前の復活を知らない者を探す方が難しいだろうな」

自分の事なのに実感がわからない。まあいいや。それよりも丁度いい。レイナーレさん達の事を聞いてみよう。

「レイナーレさん達は元気ですか？」

「あ？ 何でお前がレイナーレの事知ってたんだ？」

あれ？ 話聞いてないのかな？ 仕方無い、説明しないとな。

レイナーレさん達との出来事を簡単に説明すると、アザゼルさんは突然腹を抱えて笑い始めた。

「は、はは、ははははは!! こいつはいい！ まさかあいつらの言っていた恩人の正体がお前だったとはな!!」

「それで、彼女達は今どうしていますか？」

「くくく。ああ、教えてやるよ。あの三人は元気さ。今は俺と一緒に人工神器の研究を行っている」

そっか。元気ならそれでいいや。安心する俺に、アザゼルさんが続ける。

「あいつら、俺の前に連れて来られた途端にいきなり土下座なんかしやがってな。最初はただの命乞いかと思ったんだが、それにしちやあ目が澄んでたから理由を聞いてみたんだよ。そしたら、あいつら何て答えたと思う？」

「何て答えたんですか？」

「自分達を助けてくれた恩人との約束を果たしたい。だから、たとえばどんなに重い罰でも受ける。けれど、どうか命だけは助けて欲しい。あの人との約束を果たした後ならば、喜んでこの命を差し出す……だとき。罪人のくせに注文つけるとか、いい根性してると思わねえか？」

そこで一度言葉を切り、アザゼルさんは再び口を開く。

「……でもな、俺はその答えがどうも気に入っちゃった。事前の報告だと、実力も無えのに無駄にプライドだけが高い連中だと聞いていたヤツ等が、あんな風に誰かの為に躊躇い無く額を地面に擦りつけるとは流石の俺でも予想なんて出来ねえよ。だから、少しの無償奉仕をさせた後で、俺の研究の助手をさせている。元々神器に興味があつたみたいでな、中々に優秀な働きをしてくれてるぞ」

「そうですか……」

よかつたですね、レイナーレさん。一気に急接近じゃないですか。このまま二人の仲が進展するよう祈っておきますね。しかし、まさかDO☆GE☆Z☆Aを披露するとは。あの時、日本人の心もすっかり伝わっていたみたいだな。

「くく、それにしても、嬉しい誤算だぜ。お前があいつらと繋がりがあつたとはな。……そうだな。いつその事、あの三人をお前の所へ送るのもありか。フューリーとのパイプが出来れば色々都合がよさそうだしな」

俺に聞こえない声で独り言を呟くアザゼルさん。その姿もカッコ良かった。いいな。俺もあんな風にちよつとした動作でも大人の色気が出せる男になりたい。……まあ、一生無理なんだろうけど。

「す、すげえ、神崎先輩。墮天使のトップとあんなに自然な会話を……！」

匙君がどこか尊敬の混じった視線を向けて来る。……なんか、あまり嬉しくないのはどうしてだろう。

それからアザゼルさんは、ヴラディ君と匙君に、それぞれの神器についてのアドバイスしていた。木場君が言っていた通り、アザゼルさ

んは凄く神器に詳しく、匙君本人も知らなかった彼の神器の使い方
簡単に説明していた。いわく、匙君の神器をヴラデイ君に接続した状
態で、ヴラデイ君が神器を発動するようにすれば、暴走も少なくなる
だろうとの事だった。

「んじや、精々頑張りな。フューリー。会談もよろしく頼むぜ」

悠々と去って行くアザゼルさんを見送り、早速彼の言った練習法を
試してみた。とはいえ、長年の悩みが簡単に解決出来るわけもなく、
練習は中々はかどらなかつた。

そうこうしている間にリアスも戻って来た。入れ換わるように匙
君が仕事とやらへ戻る。

「ギヤスパー。ここからは私も付き合おうわ。一緒に頑張りましょう」

「は、はい！ 頑張りますう！」

結局、この日の夜まで、ギヤスパー君の練習は続けられたのだった。
俺はというと、たまに全ての動きを止めてしまう彼をひたすら励まし
続けていた。

ああ、こういう時にSYUZZOがいればなあ・・・

第四十話 彼女が堕ちたのは・・・

ヴラディ君、そしてアザゼルさんとの出会いから数日が経った。堕天使のトップの突然の来訪に、悪魔関係者達は驚いていたみたいだ。それとヴラディ君についてだが、あれから兵藤君がよく面倒を見てあげているようだ。意外・・・と言っては彼に失礼かな。悪魔のお仕事と一緒に出かけたり、女性のタイプを話し合ったりして盛り上がったとか言ってた。あんな風に面倒見のいい部分をアピールしたら、学園の女の子達からも好意的に見られるかもしれないだろうに。

もちろん、俺も約束を忘れたつもりじゃない。放課後はヴラディ君のいる教室へお邪魔して一緒に神器の特訓を行っている。やはり、止まる事のない俺がいる事に安心出来るのか、結構のびのびとした様子で特訓していた。上手くいった時なんか満面の笑みを見せてくれたのだが、その笑みに一瞬だけ危ないモノが目覚めそうになったのは永遠に胸に秘めておこう。

とまあ、そんな感じの日々だった。で、休日の今日、俺は兵藤君と一緒にとある場所へ向かっていた。

「この道で合っているのか？」

「はい。そろそろ見えて来ると思います」

今俺達が目指しているのは、姫島さんの神社。なんと彼女は巫女さんなんだとか。悪魔なのに巫女っていうのも変な感じだが。まあ細かい事はいいか。

彼女いわく、兵藤君に会わせたい相手がいるとか。で、俺には話したい事があるらしい。なので別々に行くよりも一緒の方がいいと、学園前で兵藤君と合流し、こうして二人で神社へと向かっているというわけだ。

「つと、言ってる内に見えて来ましたよ！」

兵藤君の指し示す先には長い石段。そしてその先にそびえ立つ真っ赤な鳥居だった。さらに、その石段の下には巫女服姿の姫島さんが立っていた。

「お待ちしましたわ、二人とも」

「おはよう、 姫島さん」

「お、おはようございます、 朱乃さん！ その格好、 滅茶苦茶似合ってますね！」

「確かに、 大和撫子とはまさにこの事だな」

「ふふ、 ありがとうございます。 では、 早速ご案内しますわ」

先に石段を上り始める姫島さんの後について行く。 道中、 彼女から色々説明を受けた。

まずはここについて。 神社は神聖な場所ではあるが、 ちよつとした理由があつて、 悪魔でも普通に足を踏み入れられるらしい。 人間である俺には関係無いが、 兵藤君は明らかに安心した顔をしていた。

姫島さんは先代の神主さんが亡くなってからずっとここで一人で生活しているそう。 その際、 リアスが手を回してくれたのだとか。 ホント、 彼女の優しさは天井知らずだな。

そんな話を話しながら石段を上りきると、 眼前に立派な本殿が出現した。 厳かな雰囲気について見惚れていると、 姫島さんがこちらに振り返った。

「さて、 それではイツセー君はここで待っていてください。 もう少ししたらあの方がいらっしやるはずですよ」

「え？ ちよ、 朱乃さんと先輩は・・・？」

「私達は席を外します。 先方はあなたと二人きりで話をしたいみたいです。 私達は私達がいては邪魔になるでしょう。 私達はあちらの家で待機していますから、 終わったら来てくださいね。 神崎君、 行きましょう」

「わかった」

「うう、 いったい誰が来るんだろう・・・？」

ちよつと不安そうな兵藤君をその場に残し、 俺は姫島さんの家へ足を動かした。 一人残すのは心苦しいが、 相手が彼と二人だけになるのを望んでいるのなら仕方ないか。

・・・何気に、 女友達の家にお邪魔するのって今回が初めてだった。 知りませんでした。 少しばかり緊張していた。 情けない？ 知るか。 童帝舐めんな。

そうして玄関を通され、俺が案内されたのは和室だった。つい正座してしまった俺の前で、姫島さんがお茶をたてていた。うむ、実に画になる光景だ。オカルト部でも姫島さんの淹れてくれたお茶はいつも美味しかったが、その理由がわかった気がした。

「はい、どうぞ」

「頂きます」

差し出された茶碗を持ち、一息に飲み下す。熱くも無く、かといって温くも無い。正に絶妙な温度のお茶がスルスルと俺の喉を通って行くのを感じる。そんな俺を見て満足気に微笑む姫島さん。改めて思う。この子・・・完璧過ぎる。美人で、スタイルも良くて、性格も穏やかで（ちよつとSよりだが）、自分は一步引いて相手を立てる奥ゆかしさも魅力的だし、たまに部屋で出してくれる彼女手作りのお菓子も絶品だから料理だってきつと上手なんだろう。こんな子を将来お嫁さんに出来る男ってマジで幸せだろうな。・・・いや、すでにその段階で一生分の運を使い切っていたりして・・・。

「神崎君？　どうかしました？」

「いや、気にしないでくれ。キミの魅力を再確認してただけだ」

まあ、俺にとっては高嶺の花だ。こうして友人でいられるだけでも恵まれてると思わないとな。

「それで姫島さん、話というのは？」

「え!?　あ、そ、そうね!　話をしないといけないわよね!」

何をそんなに慌てるんだろう?　妙にあたふたする姫島さんに、俺は疑問符を浮かべた。しかし、次の瞬間には、彼女の顔が真剣なものへ変わる。その様子に自然と俺も背筋が伸びた。

「憶えていますか、神崎君。以前、私はあなたに聞きました。もしもあなたの傍に正体を隠している堕天使がいたらあなたはどうするかと」

「ああ。確かプールでの事だったな」

キミの刺激的な格好が印象深過ぎて未だにクツキリ憶えています。口に出したら軽蔑されそうなので言いませんけど。

「あの時、私はもしもの話としてあなたに聞きましたが、本当は違うんです。実際に、あなたの傍に堕天使はいたんです」

え、マジ話だったの？ 誰だろう。クラスの誰か？ それとも……まさかの山田先生とか？

「これが……その正体です」

姫島さんが突然翼を広げた。けれど、それは今まで見て来た物とは違っていた。片方は悪魔の翼。そしてもう片方は……黒い翼。それは、レイナーレさんやアザゼルさんとまったく同じ物だった。

「キミが……堕天使？」

「……そうです。堕天使の幹部であるバラキエルと、人間である母の間に生まれた者。それが私です」

つまり、ハーフ？ ヴラディ君と一緒にじゃん。あつちは吸血鬼だけだ。

「私は汚れた翼を持っています。それが嫌で嫌で仕方無かった。あの男の血を引いている証であるこの翼が……！ だからリアスと出会って私は悪魔になった。これでこの忌まわしい物から解放されると信じて」

堕天使の方の翼を憎々しげな表情で掴む姫島さん。ふと、その顔が自嘲に変わった。

「でも、結果はこの通り。悪魔と堕天使の両方の翼を持ったおぞましい存在。どちらにもなれず中途半端な存在でしかない。ふふ、汚れた血が流れている私にはむしろお似合いなのかもしれないですね」

そうかそうか。自分は汚れてて、おぞましくて、中途半端ですか。なるほどなるほど。……お兄さん、そういうの許せないなあ。

よかろう。ここはいつちよ、OSSEKKYOUさせてもらおうじゃないか！

S I D E O U T

朱乃 S I D E

彼の前で、私の抱えていた闇を吐き出す。けれど、神崎君は何も答えない。その代わりに、私に向かって手を向けると、親指と中指で輪を作った。不可解な行動に戸惑う私の額を、突然の激痛が襲った。

「ふあっ!？」

咄嗟に額を手で押さえる。い、いったい何事!? あまりの痛みには涙まで出て来てしまった。そのまま神崎君を見ると、彼の中指が私の方へ伸びていた。そこで理解する。私は今、彼にデコピンされたのだ。

「か、神崎君?」

「・・・姫島さん。俺はな、友人を蔑む相手が大嫌いなんだ。たとえば、それが本人だとしてもな」

神崎君の瞳に怒りが宿っていた。確かに、普段物静かな彼だけけれど、友達や仲間に手を出されると途端に豹変する。現に、エクスカリバーの件の時は、アーシアちゃんを傷付けた二人を振るえあがらせるほどの感情を見せていた。さらに、黒歌さんを傷付けたコカビエルを圧倒的な力で蹂躪してみせた。そんな仲間思いな彼がこうして怒っている。私を蔑んだ私自身に対して。

「リアスといい、キミといい、どうしてそこまでこだわるんだ。墮天使だろうがなんだろうが、そんな事は問題にすらならない。姫島さんは俺にとっては大切な友人だ。汚れてもいないし、おぞましくもないし、中途半端でもない」

神崎君が私の肩を掴み、顔を近付けて来る。至近距離に迫る彼に心臓が跳ね上がるのがわかった。

「ああ、そうだとも。あの時も言ったが、本当にどうでもいい。理解してもらってないようなので、もう一度ハッキリ宣言させてもらうぞ。姫島朱乃は俺のかけがえのない友人だ。その正体がなんであろうと、その関係を崩す気は無い!」

「ッ・・・!」

真つ直ぐに私を見つめる神崎君。そこには同情も憐れみも存在しない。あるがままに私を受け入れようとしている彼の激しくも温かい言葉に、気付けば頬を涙が伝わっていた。

「それに、こうして改めて見ると綺麗な翼じゃないか。コカビエルの物とは比べる事すらおこがましい。キミの清らかな心がそのまま形になったと思うくらいだ」

・・・ずるい。反則だ。そんな事まで言われたら、そんな風に優しく撫でられたら、もう抗いようがないじゃない。あの時、プールで彼

に抱いた感情は間違っていない。私は、彼を、彼の事を……。リアス、アーシアちゃん、黒歌さん、それにもかいたら小猫ちゃんもゴメンなさい。私……。もう自分の気持ちを抑え切れない。

「姫島さん？」

俯いてしまった私を心配したのか、神崎君が覗きこんで来る。そんな僅かな優しさでさえ嬉しくなってしまう。ああ、自覚するところなにも世界が変わって見えるなんて……。

「これからは朱乃って呼んで。あの時のように」

「え？ ああ、ああ、キミがいいのなら名前でも呼ばせてもらおうけれど」

「お願い」

「なら……。朱乃。これからも、友人としてよろしく頼む。俺の事もよければ名前で呼んでくれ」

プールでの時は、恥ずかしさしか感じなかった。けれど今、こうして彼の口から私の名前が出た瞬間、全身を圧倒的な歓喜が包みこんだ。ああ、この感情は危険だ。多くの男女がこの感情の所為で破滅してしまった気持ちがよくわかる。他の全てを放り出しても構わないときえ思ってしまう。

リヨーマ。あなたの言葉は本当に嬉しい。……。けれど、私は友人で終わるつもりは無いから。精々覚悟していてちょうだい。

「ふふ……」

私……。姫島朱乃は恋をした。相手の名前は神崎亮真。どこまでも強く、どこまでも優しい素敵な男の子。前途は多難だ。ライバルは多い。それでも、譲るつもりは無い。

だって、彼以上に魅力的な男性なんて、これから先には絶対に現れないって断言出来るから……。

この初恋を、いつか必ず実らせてみせよう。一步一步、着実に歩んで行こう。彼との未来をこの手に掴む為に。

第四十一話 本人の許可無く撮影してはいけません

とうとう会談の日がやって来た。会場は学園の職員会議室だ。俺達は時間が来るまでオカルト部の部室で待機していた。

なんだかみんな緊張しているようだが、おまけでしかない俺はいつも通り朱乃の淹れてくれたお茶を飲みながらリラックスしていた。

悪魔からはサーゼクスさん。堕天使からはアザゼルさん。そして天使は・・・ミカエルさんだったつけ。先日、神社で兵藤君に会っていたのはその人らしい。その時、ミカエルさんからアスカロンっていう剣を貰ったとか聞いた。アスカロンっていったら、ゲームとかでも有名な龍殺しの剣だ。そんな物をプレゼントするなんて、流石天使のトップは太っ腹だなと思った。

「・・・さて、そろそろ行きましようか」

立ち上がるリアスに俺達も続く。ただし、ヴラデイ君はお留守番だ。もし会談中に神器が発動してしまったらえらい事になるからだ。

「み、みなさん、行ってらっしゃい」

「おう、行って来るぜギヤスパー。ヒマになったらそこにあるゲームでもやってな。終わったらすぐに戻って来るからよ」

「は、はい。わかりました」

「ふふ、イツセー君って面倒見がいいよね」

「べ、別に。これくらい普通だろ」

木場君に言われ、照れ臭そうにそっぽを向く兵藤君。そういう優しさを普通と言える彼はちよつとカッコイイと思った。

.....

「失礼します」

リアスが会議室の扉をノックし開ける。彼女の後ろから中を覗くと、そこにはすげえ高そうな巨大テーブルが置かれ、それを囲むようにして数人が座っていた。

・・・前言撤回。こりや緊張するわ。横にいる兵藤君の生唾を飲み

込む音がやけに大きく聞こえた。アーシアも俺の手を不安そうに握って来た。

まず、悪魔側にはサーゼクスさんとセラフォルーさん。それとグレイフィアさんがいた。

続いて墮天使側はアザゼルさんと・・・どういわけかヴァーリさんがいた。彼女は俺を見てニコリと微笑むが、俺としてはなんでキミがそこにいるのかが気になります。

最後に天使側だが・・・なんか凄い人がいた。何あれ、金色の翼つて派手すぎるだろ。しかもイケメンだし。そのイケメンの隣に座る白い翼の女性もとんでもない美人だ。どっちがミカエルさんなんだろう？ やっぱり金色の人かな。

にしても、こうして人外の方々が揃っている所を見させられると、改めてこの世界の異常さを思い知らされるなあ。俺・・・平穩に暮らしたいはずだったのに・・・。

「紹介しよう、私の妹とその眷属。・・・それと、我ら三陣営全ての恩人であるフューリーと、その家族である子だ」

サーゼクスさんがリアス達の紹介と、ついでとばかりに俺とアーシアについても触れる。うわ、めっちゃ見られてる。特に天使のお二人の視線が凄い。

「先日のコカビエル襲撃は、彼女達の尽力とフューリーの助力によって解決した」

「ええ、報告は受けていますよ。みなさんには深くお礼を申し上げます」

ミカエルさん（予想）のお礼に、リアスはただ黙って会釈するだけだった。彼女が緊張しているのが痛いほど伝わってくる。

「すまねえな、ウチのコカビエルが迷惑かけた。しかしまあ、驚いたぜ。鎮圧のためにヴァーリを送ったら、すでにやられていたんだからな」

「ふふ、凄かったわよ。亮真の一撃によって虫けらのように倒れ伏せるコカビエルの姿は滑稽だったわ」

「へ、そういう事なら俺自身が出張っていれば良かったぜ」

アザゼルさんが残念そうにそう漏らす。すると、セラフオルーさんが突然席を立った。

「ふっふーん！ やっぱりみんなフューリーさんの事が気になっちゃうよね。それなら、会談を始める前にみんなでこれを見ようよー！」

そう言つて、セラフオルーさんはビデオカメラを取り出した。

「セラフオルー。予定と違う事をしないで欲しいのだが」

「えー、いいじゃない、サーゼクスちゃん。あなただって、フューリーさんとコカビエルの戦いが気になるって言つてたじゃない」

「確かにそうだが・・・」

「いいじゃねえか、サーゼクス。これから堅苦しい話ばかり続くんだ。その前に楽しんでよ」

「そうですね。私も彼の伝説の騎士の戦いというものを見てみたいです」

アザゼルさんとミカエルさんに押され、サーゼクスさんが諦めたように溜息を吐いた。

「・・・二人がそう言うなら仕方ないかな。それでセラフオルー。そのカメラには何が映っているんだ？」

「このカメラは、前回の婚約パーティーの後すぐにソーナちゃんに渡した物なの。新作ドラマの参考にするために、もしもフューリーさんがまた戦う様な事があつたら、ぜひとも撮影して欲しいって」

「そうなのかい？」

サーゼクスさんが部屋の壁際に顔を向ける。そこに置かれた椅子に支取さんが座っていた。

「そ、その通りです魔王様。あの時、私は戦闘に参加せず結界を張っていたのですが、ふとレヴィアタン様のお言葉を思い出し、不謹慎なのは承知していましたが、つい・・・」

公の場だからか、セラフオルーさんをそう呼ぶ支取さん。まあ、流石にここでお姉様はまずいよな。

「ふふ、口では文句を言いながらも、こうやつてお姉ちゃんのお願いを聞いてくれるソーナちゃん大好き！」

そしてこの人は変わらないな。支取さんの顔が恥ずかしさからか

真っ赤だ。

「なるほど。つまり神崎君とコカビエルの戦いが映っているという事か」

「そーゆう事！ さ、それじゃ早速準備しましょうか」

そして、あれよあれよと観賞会の用意が進められた。ホントにいいのかこんなんびりな感じで？ でも、ある意味ありがたいかな。あの時、俺が一体何をしていたのか、ようやく判明する。

—— 答えるコカビエル。貴様、黒歌に何をした？ なあ、何をしてくれたんだ？

—— 限界だよコカビエル。貴様はやり過ぎた。貴様と、貴様に関わった者達の所為で悲しみ、傷付いた人達の為・・・貴様はここで終わらせる!!

—— 何故諦める！ どうして抗おうとしない！ 最初から勝負の無い者が勝てるでも思っているのか！

—— 神は死んだ。だけどキミ達はまだ生きている！ 死んだ者を忘れるとは言わない。だがそれに引き摺られるな！ 立て！ 今は立って戦うんだ！

—— さあ、止めだ、コカビエル。貴様の歪んだ欲望によって大切な物を散らされた子ども達の怒り、嘆き、そして悲しみを・・・今こそその身に受けるがいい。

・・・うん、絶対調だな、俺！ 恥ずかしいセリフをこれでもかと口走ってますよ。しかもSYUZOなりに暑苦しい・・・もしかして俺ってアルヴァン先生からだけじゃなくてSYUZOからも何か受け継いでんの？

予想外の熱血展開が繰り広げられる。そして、その最後を飾ったのは・・・。

—— ニーベルング・アナイレーションツツツ!!!

ツ!! 来た！ スタイリッシュ指パッチン来た！ これで勝つる！ オルゴン・クラウドによる瞬間移動でコカビエルよりも高い位置に移動した俺が、急降下を開始する。そして、その突き出された足がコカビエルを捉えた。

——アツ——アツ——アツ——アツ?!?!?!?

おい！ なんつー悲鳴あげてくれてんだコカビエル！ いや、狙った俺にも責任あるけどさ、そこはギャー！ とかでいいだろうが！ 地面が抉れ、俺とコカビエルの姿が地中深くへと沈んでいく。少しして、俺だけが穴から飛び出し、パチンと指を鳴らす。刹那、冗談の様な光が穴の底から立ち昇った。

映像はそこで止まっていた。無言の室内に、溜息が響き渡る。それは俺か、リアスカか、はたまた全員だったのかもしれない。

「・・・お、驚いたな。私はてつきりあの姿で戦ったのだとばかり思っていたのだけれど」

「生身でこれかよ・・・」

「手加減していたようにも見えましたね。全力を出したらどうなってしまうのか。・・・想像したくありませんね」

サーゼクスさん、アザゼルさん、ミカエルさんが一斉に俺に目を向ける。どうやら最後の技の印象が深すぎたのか、その前に繰り広げられた俺の恥ずかしいセリフについては別に触れるつもりはないらしい。ああ、よかつ・・・。

「えへへー。カツコイイセリフがいっぱいだったなく。これはぜひとも次の脚本に組み込まないと」

ツ?! ちよ、待つ、セラフオールさん待つて！ 止めて！ メモしないで！

「あー、言われてみりゃあ確かに。・・・お前、よくもまああんな赤面ものなセリフを堂々と叫べるもんだな」

ぐふツ!?

「別におかしくはないでしょう。素晴らしい鼓舞だったと思います
が」

がはっ!?

「そうだね。見ているだけなのに思わず熱くなってしまったよ」

刺さる刺さる！ 言葉の刃が刺さりまくってます！ ちくせう・・・恨みますよ、セラフオールさん。

・・・いや、そもそもプツンしなかつたらこんな事にならなかつ

たんだ。よし、今後は二度とプツンしないぞ！

観賞会が終わり、ようやく本題に移ろうとしている中で、俺はそう誓うのだった。

第四十二話 因縁

ちよつと脱線してしまつたが、ようやく会談が始まつた。支取さんの所に並んでいた椅子に腰掛け、俺達はサーゼクスさん、セラフオルーさん、アザゼルさん、ミカエルさんの話し合いの様子を黙つて眺めていた。

途中、コカビエルの事について、リアスに質問がいくつか飛んで来た。それに淡々と答える彼女だったが、よく見るとちよつと震えていた。寒い・・・わけじゃないだろうな。やっぱり緊張が凄いなだろう。それでもしつかりとした言葉で答えるあたり、流石だと思つた。

「アザゼル、今の答えを聞いた上で、墮天使総督の意見を聞きたい」
「先日の事件はコカビエルが俺や他の幹部に黙つて単独で起こした事件だ。先程見せてもらった映像の通り、フューリーにやられた後、『神の子を見張る者』の軍法会議で刑を執行した。『地獄の最下層』で永久冷凍の刑だ。・・・最も、そんな事せずとも再起不能な状態だったがな。ま、形だけでも処分しておかないと示しがかかなかつたわけだ」
「確認しておきますが、単独という事は、あなた自身は我々と事を起こす気はないと受け取つてよろしいのですね？」

ミカエルさんの問いに、アザゼルさんが当然だとばかりに答える。
「当たり前だろ。俺は戦争なんて全く興味ねえんだからよ。コカビエルも散々俺の事こきおろしてくれてたみたいだしな」

「私からも質問する。キミはここ数十年の間、神器所有者をかき集めていると聞いている。戦争の為に戦力の増強を凶つていると思つていたが、そうじゃないとしたら一体なんの目的があるんだ？」

「そうですね。『白い龍』までも手に入れたと聞いた時は強い警戒心を抱いたのですが、あなたはいつまで経つても仕掛けて来なかつた」

「そりゃそうさ。俺が連中を集めたのは戦う為じゃねえ。単純に神器の研究がしたかつただけなんだからよ。なんだつたら研究の資料も一部くらいくれてやろうか？ 宗教への介入も、悪魔の業界へ手を出すつもりも無い。俺は今の世界に十分満足してんだからよ」

「では・・・」

「ああそうさ。お前らもそのつもりでここにいるんだろ？ 結ぼうじゃねえか・・・和平をな」

どんだん話が進んでいく。正直ついていけない。けれど、隣に座るリアスや、その奥に座る支取さんは凄く真剣な顔でアザゼルさんを見つめている。

「次に戦争すれば、今度こそ三すくみは共倒れだ。人間界にも影響するだろう。文字通り世界の終わりだ」

世界の終わり・・・。大袈裟な言葉かもしれないが、墮天使のトツプが言うのと重みがまるで違う。

「ここにいる者は皆、神がない事を知っている。・・・だが、神がない世界は間違いだと思うか？ 俺はそうは思わない。何故なら、俺やお前達は神の存在など関係無くこうして生きているのだから。そう・・・神がなくても世界はこうして回っているのさ」

神がいなくても世界は回る・・・か。大丈夫かな、近い将来、女神が転生するような世界にならないかな。・・・いや、天使や悪魔がいる時点でもうなってるか。マルカヅリされる結末を迎えない様気をつけないな。

「さて、話し合いも良い方向へ片付いて来ましたし、そろそろお二人のお話を聞かせてもらいましょうか」

なんて事を想像している間に、話題が変わっていた。ミカエルさんが俺と兵藤君にそれぞれ意味深は視線を送って来る。

「あの・・・ミカエル様。俺、聞きたい事があるんです」

「何でしょう？」

「アーシアを追放したのはどうしてですか？」

兵藤君の質問にみんなが目を丸くする。俺も同じだ。え、アーシアを追放したのって教会でしょ？ なのに何でミカエルさんに聞いているの？ 悪いのって教会のド腐れ連中じゃないの？

ミカエルさんが答える。神が残した『システム』を守る為だと。その為に、『システム』に影響を与える神器を持つアーシアを教会から遠ざける必要があったと。救済出来る者を一人でも増やす為には仕方無かったのだと。

「アーシア・アルジェントの神器は悪魔も墮天使も回復出来てしまう。それは周囲の信仰に影響を出す恐れが……」

「けど、それっておかしいですよね」

「おかしい？」

「はい。前にゼノヴィアとイリナ。えっと、俺の幼馴染なんですけど……。同じ様な事言っただけです。けど、その時神崎先輩がこう言っただけです。神器は神が作った物。だったら、アーシアの神器が悪魔にも墮天使にも効くのは神が設定したからじゃないのか。神を蔑ろにしてるのは今の教会の連中じゃないのかって」

「ッ……！」

ミカエルさんが僅かに目を見開く。えー。まさか、天使のトップともあるう方まで気付いてなかったの？ うっかりじゃ済まないでしょ。その所為でアーシアが辛い目に遭っただけってどういうのに。

「くはははは！ こりゃ一本取られたなミカエル！ ああそうだ。言われてみればその通りだ。見ろよミカエル。お前の答えにフリーもムカついてるみたいだぜ」

「いえいえ、誤解ですよアザゼルさん。ただ驚いてるだけですから。だからミカエルさんもそんなに焦らなくていいですよ。」

「……そうですね。確かにその通りです。ですが、それでもそうするしか……『システム』を守るしか、我々には出来なかったのです。信徒を救う為に……」

そこへ、アーシアが口を開く。

「あ、あの、ミカエル様。私の事でしたら気にしないでください。たった一人と大勢の人々……どちらを重きに置けかねて考えるまでもありません。それに、私は今、リョーマさんや他のみなさんと一緒にいられて凄く幸せなんです」

気休めでもおべつかでもない。アーシアの心からの言葉を受け、ミカエルさんの表情が明るくなる。

「……ミカエル。逃がした魚はでけえぞ」

「そうですね。本当にそう思います。そして、ゼノヴィア。あなたにも謝罪を。何一つ落ち度の無かったあなたを、神の不在を知ったが為

に異端としてしまいました」

「いえ、ミカエル様。私もアジアと同じ気持ちです。教会に仕えていた頃には出来なかつた事や、封じていた事を堂々で行えて、私の日常は非常に華やかに彩られています。私は今の自分に満足していません」

「そうですか。アジア、そしてゼノヴィア。あなた達の寛大な心に深い感謝を。そして赤龍帝殿とフューリー殿にも、大切な事に気付かせて頂き感謝いたします」

ミカエルさんが深々と頭を下げる。立場ある身なのにこうやって躊躇い無く頭を下げられるって凄いよな。ちよつと尊敬するわ。

「い、いえいえ、そんな！ 俺、余計な事言っちゃつたみたいで……」

「そんな事無いです。私、嬉しかつたですよ、イツセーさん」

「アジア……。はっ！ これはまさかフラグが……！」

「フラグ？」

「あ、ああつと、何でもないよアジア」

「そつちの話は終わりか？ なら今度はフューリーに聞きたい」

「何でしょう？」

「お前、今の所悪魔に肩入れしているみたいだが。この先もその姿勢を崩す気は無いのか？ さつき和平を結ぼうと提案した俺が言うセリフじゃねえが、もしもその和平に亀裂が入ったら……。その時、お前はどの陣営につくつもりだ？」

「別に俺は悪魔に肩入れしているつもりはありませんよ？ ただ、困っている友人を助けただけで、それが悪魔だっただけですから」

うん、ただそれだけだ。リアス達が悪魔でも堕天使でも、はたまた天使だったとしても、俺がやる事に変わりはなかつただろう。

「困ってたから助けましたか。へ、まるで子どもの答えだな」

呆れたように苦笑いするアザゼルさん。

「ですが、それはとても尊いものだと思いますよ」

純粋に感心した様子の子のミカエルさん。

「……という事は、キミは状況によつては我々にも牙を剥く可能性があるあるわけか」

サーゼクスさんの眩きは俺には聞き取れなかった。

それから、また兵藤君の方へ話が移った。兵藤君は自分が悪魔になったのは墮天使の所為だとアザゼルさんに詰め寄ったが、あっけなくダンガンなロンパされていた。

「フューリー殿、これは純粋な興味なのですが、二天龍との戦いから消えた後、あなたはどうしていたのですか？」

「ッ!? ま、まさか、ここでそれを聞かれるとは!? うわ、まずい。サーゼクスさんとアザゼルさんまで食いついて来た。

「ほほお、そりや俺も聞きたいねえ」

「私もだ。よければ教えてくれないかな」

さ、流石に答えないわけにもいかないか……。仕方無い、さらっと記憶喪失だつて言っておこう。

などと軽く考えながら発言したら、なんかアザゼルさんにめっちゃ疑わしい目で見つめられました。

「記憶喪失ねえ……。それは本当なのか？」

「ど、どういう意味だよ、アザゼル」

「おいおい赤龍帝。まさかお前そのまま信じてたのかよ？ どう考えでもおかしいだろうが。記憶が無いくせに自分の力や能力だけはバッチリ憶えてるって都合が良すぎると思わねえか？」

「ッ……！」

「それによ、俺はフューリーが復活して、その正体が人間だと知ってから色々調べてみたんだよ。あの時代、人間界に二天龍を圧倒するヤツなんか存在していない。あれだけの力を持つ者が有名にならないわけがないだろうに、何もかもが謎のままだった……。突然この世界に誕生したって言われた方がまだ信憑性があるかもな」

「当たってる！ 当たってますよ思いつきり！ ヤバい……。墮天使のトップともなると洞察力が半端無い！ そりやね、嘘なんていつかバレる物だけどき！ 今の状況はマズイよ！」

「フューリー。今さらお前の口から何が語られようが驚きはしねえよ。お前の存在そのものが冗談みたいなもんなんだからよ。だから話してくれよ。伝説の騎士様の秘密つてヤツをよ」

ニヤリとするアザゼルさん。話してくれなんてお願い風味だが、俺にはわかる。彼は命令しているのだと。

・・・はあ、しようがない。覚悟決めるか。信じてもらえないだろうが、本当の事を話そう。

俺は一度深く深呼吸し、静かに口を開いた。

S I D E O U T

アザゼル S I D E

「・・・流石、堕天使の総督を任されているだけありますね」

ヤツの様子が一変する。さつきまでの穏やかさはどこへやら。俺ですら若干緊張するほどの雰囲気醸し出しながら神崎亮真が語り始める。

「あなたの言う通りです。俺は記憶喪失などではありません。以前、リアス達に同じ質問をされた時に吐いた嘘です」

「ッ!? リョーマ!?!」

サーゼクスの妹達が酷く驚いている。友人を大切にしているこいつと、その友人に嘘を吐くこいつ。どちらが本当のこいつなんだろうな。何にせよ、俺はとんでもない蓋を開けちまったようだ。

「すまないリアス。本当の事を言っても信じてもらえないと思ったんだ。・・・いや、違うな。俺は怖かったんだ。真実を聞いたキミ達から見放される事が・・・」

自嘲の込められた微笑みを浮かべる神崎亮真。だが次の瞬間には再び真剣な顔に戻る。

「アザゼルさん。あなたはさつき、突然この世界に誕生したと言われた方がまだ信じられると言った。実際その通りです。俺はあの戦いに乱入する直前にこの世界にやって来ました」

俺以外の全員が驚愕する。なるほど、もしかしたらその可能性もあるとは思っていたが、当たりだったとはな。

「やって来たとは妙な言い方をするな。その言い方だと、世界は複数あるかのようじゃねえか」

「その通りです。俺は別の世界で死んだ。そして、ある人の手でこの

世界に送られたんです」

「何だど?」

今度ばかりは俺も驚いた。異世界など所詮空想の産物に過ぎない。だが、その存在を証明するヤツがこうして目の前に存在している。嘘……ではないだろう。嘘を吐く人間にあんな目が出るわけがない。

「キミほどの力を持つ者が死ぬ世界……。いったい、どれほどの強者達が存在する世界なのだろうな」

サーゼクスの言う通りだ。万が一、こいつのような規格外が他にも大勢やって来たとしたら……。確実にこの世界は終わる。世界最強の「あいつら」でもおそろく止める事は出来ないだろう。

「教えろフューリー。お前を送ったのは何者だ? そいつは他にも誰か送って来たのか?」

「名前はオ・クアーン。彼女は自らを神と名乗りました」

「神!? あなたの世界にも神が……!?!」

世界すら越える力を持つ神か……。確実にこっちの世界の神を上回る力を持っているのだろうか。

そんな存在が人間に目をつけた。その世界において、この男はそれほどまでの価値があったとでもいうのか。

「この世界に送られたのは俺だけです。彼女は俺の願いを叶える為にこの世界を選んだそうです」

「あなたは……。その神に何を願ったのですか?」

「平穏……。俺はただそれだけを望みました」

これほどの力を持ちながら平穏だと? ならばこいつは、この世界にやって来るまで、平穏とは無縁な場所にいたとでもいうのか。どうやら、元の世界も争いの絶えない世界だったようだな。

だからこそ、あの戦いの場に姿を現したのかもかもしれない。平穏を脅かす敵を排除する為に。滅びを迎えそうになった俺達を救う為に。

「そして、あの戦いで消えた俺は、気付いたら千年の時を越えていました」

「そうか。それで人間であるキミがこうしてこの時代に……」

「ええ、そうです。彼女には感謝しています。おかげで、俺はリアス達に出会う事が出来た」

「リョーマ……」

こいつさりげなく口説き文句口にしたぞ。いや、まあそれはどうでもいい。それよりも、そのオカン……じゃねえ。オ・クアーンとかいうヤツは何を狙ってこいつをこの時代に？ こいつはオ・クアーンのおかげと言っているが……もしも、オ・クアーンが最初からサーゼクスの妹達と出会わせるつもりでこの時代へ送ったのだとしたら……。それはこいつの望みを叶えた事にはならないんじゃないのか？

魔王の妹に関わらせれば、間違いなく平穏からは遠ざかる。神を名乗る者がそれに気付かないはずが無い。それなのにあえて接触させるとは。……ええい、くそ。考えれば考えるほどわからなくなってくる。

「……わかった。話してくれてありがとうよ」

別世界の神、オ・クアーンか……。出来る事なら直接会ってみたいものだな。

アザゼルSIDE OUT

IN SIDE

あー、なんか全部吐き出したらスッキリした。やっぱり嘘ってよくないよね。それに、みんなこんな与太話を信じてくれたみたいだし。「リョーマ……。正直、話の壮大さについていけないのだけど、これだけはハッキリ言わせてもらおうわ。たとえあなたが何者であろうと、私は気にしないわ」

「あなたは私を受け入れてくれた。だから、私もあなたを受け入れる」
「……先輩は先輩です」

「私は、ずっとリョーマさんのお傍にいます！」
「そうですよ。例え別の世界の人間だろうと、先輩は俺の尊敬する先輩です」

「僕達にとってはそれで充分です」

「むしろ、あなたの事を知れてよかったよ」

みんなの温かくて優しい言葉に泣きそうになる。こんな事なら最初から本当の事を言えばよかったな。

そんな感動している俺をあの感覚が・・・。ヴラデイ君が時を止めた時に感じるあの感覚が襲った。現に、数人の動きが止まっている。サーゼクスさんとグレイフィアさん。セラフオルーさんにアザゼルさん。さらにミカエルさんと天使の女性はみんな無事だ。それとリアスに木場君、ゼノヴィアさんも動いている。さらに数秒して兵藤君も動き始めた。

「イツセーは赤龍帝を宿す者、祐斗は禁手に至り、イレギュラーな聖魔剣を持っているから無事なのかしら。ゼノヴィアは直前になってデュランダルを発動させたのね。それとリョーマも。確か・・・。ラーズエイレムキャンセラーだったかしら」

「時間停止の感覚はなんとなく、体で覚えた。停止させられる寸前にデュランダルの力を盾に使えば防げると思ったけど、正解だった」

おお、それって普通に凄い事じゃないの？　ゼノヴィアさんって何気にスペック高いのね。

「な、何が起こったんですか？」

俺の疑問を兵藤君が代わりに口にくれてくれた。それに対し、アザゼルさんが窓の外を見ながら答える。

「テロだよ」

テロ？　テロってあのテロ？　ここ日本だよ？　しかも深夜だよ？　どれをとつてもおかしいよね？

窓の外から激しい光が見える。しかも微妙に校舎全体が揺れているのを感じる。

「攻撃を受けているのさ。見ろよ、魔法使いまでいやがるぞ。察するに、中級悪魔クラスつてところか。まあ、俺達の展開した防壁があるから何をしても無駄なんだがな」

吸血鬼に続いて魔法使いか。益々カオスっぷりが激しくなっている。く。

「な、なあ、さっき、時間が停止した感じがしたんだけど」

「その通りさ。おそらく、力を譲渡出来る神器か魔術であるのハーフヴァンパイアの小僧の神器を強制的に『禁手』状態にさせたんだろうさ。一時的なものだろうが、それでも視界に移したであろう校舎の内部にいる者達にまで効果を及ぼすとはな」

それって、ヴラディ君がテロリストに利用されてるって事か？ あんなに自分の力に怯えて、苦しんでいた彼に無理矢理力を使わせているって事か？

——僕は、こんな神器なんて欲しく無かった・・・！

——本当に・・・本当に、僕も変わる事が、この神器を制御出来るようになるんでしようか？

——ぼ、僕は・・・えぐ、僕は・・・消えなくていいんでしようか。

・・・これはキレてもいいですよ？ ええ、キレますとも。キレないわけがないじゃないですか。

「・・・おい、フューリー。腹が立つのもわかるが、そのアホみたいな殺気は抑えろ。およそ人間が出せるもんじゃねえぞそれ」

「いいえ、リヨーマの怒りは正しいわ。ギヤスパーは旧校舎でテロリストの武器にされている。どこで情報を得たのか知らないけれど、私の大切な眷属をよくも・・・！ しかも、大事な会談を付けねらう戦力にされるなんて。これほど侮辱される行為はないわ！」

「やれやれ、仕方ねえヤツらだ。なんにしろ、これ以上『停止世界の邪眼』の効果を高められたら、俺達ですら停止させられる恐れがある。それだけはなんとしても阻止しないとイケない」

「ここから逃げるのか？」

「逃げられねえよ。逃げる為には結界を解く必要があるが、そうすれば人間界に被害を出すかもしれない。ここは籠城して親玉が出て来るのを待つ」

「アザゼルの言う通りだ。私達は下調べを行う。だが、まずはテロリスト達の活動拠点となっている旧校舎からギヤスパー君を奪い返さないよね」

「私が行きます。あの子は大切な眷属です。私が必ず助け出してみせ

ます」

「そうだな、キミならそう言うと思ったよりアス。けど、一人で大丈夫なのかな？」

「だが、その心配は無用だったようだ。なんか、『キャスリング』っていう技を使えば『王』と『戦車』の位置を一瞬で入れ替えられるらしい。『王』がリアスで、『戦車』の駒が部室に保管してあるらしい。だから、その技なら彼女は部室へひとつ飛び出来るんだと。さらに、それをサーゼクスさんの力で複数人移動させられる事が出来るそうだと。リアスともう一人。」

「俺が行きます！」

立候補しようとしたら、先に兵藤君に手をあげられてしまった。なんか、もの凄い気合いの籠った顔をしている。彼がこういう顔をしている時はマジだ。

「先輩！ ギヤスパーは俺にとっても大切な後輩なんです！ だから、今回は俺に任せてください！ 絶対に部長と一緒にアイツを取り戻してみせます！」

そんな熱いセリフを言われたら頷くしかないじゃないか。

「わかった。キミに任せるよ」

俺の分までヴラディ君を利用した連中を殴って来てね。

「なら、こいつを持って行け」

アザゼルさんが兵藤君にリングを投げ渡した。

「それをはめれば神器がある程度抑える事が出来る。あの小僧を見つけたらそれをはめてやれ。多少は役に立つはずだ」

「わ、わかった」

「お前の禁手は対価を支払わなくてもいい代わりに時間制限がある。使うとしてもタイミシングを間違えるなよ」

「え、そうなの？」

——当然だ、相棒。俺の宿主には俺の誓いを果たす手伝いをしてもらわなければならん。それなのに、対価だなんだと払わせて無駄に消耗させるわけにはいかないからな。

おっと、ここでドライグさんの登場だ。前にも言ってたけど、その

誓いってなんなんだろうね。

「では、すぐに準備します。お嬢様、しばしお待ちを」

「お願いね、グレイファイア」

グレイファイアさんの準備が進められる中、アザゼルさんとミカエルさんが何やら話している。

「アザゼル。あのような物まで作れるほど神器の研究は進んでいるのですか？ あなたはその研究の先に何を求めているのですか？」

「神器を作りだした神はもういない。少しでも神器を解明出来るヤツがいた方がお前にとつてもいいんじゃないか？ それと・・・まあ、備えていたっていうのもあるかな」

「備えていた？」

サーゼクスさんも話に加わる。いけないと思いつつ、俺も聞き耳を立てていた。

「お前らに対してじゃねえ。連中の・・・『禍の団』への備えさ」

『禍の団』か。・・・中々に痛いネーミングだなあ。

「何の組織だ？」

「名前と背景が判明したのはつい最近さ。最も、それ以前からウチの副総統であるシエムハザが目をつけてたんだがな。連中の目的は破壊と混乱。その為に三大勢力の危険分子を集めているそうさ。簡単に言えばテロリストさ。しかも、最大級に性質の悪い」

「では、今回のテロも」

『『禍の団』によるものだろうさ。さらに悪い事に、そいつらの頭が危険過ぎる。あの強大にして凶悪なドラゴンだよ」

「ツ・・・！ そうか、彼が・・・『無限の龍神』であるオーフィスが、神すら恐れた最強の存在がつかいに動いたのか・・・」

オーフィス？ それって、生前の友達がPrPrPrしたいって言ったキャラの名前じゃないか。そんなキャラをトップにするって。・・・まさか、『禍の団』ってペロリストの巣窟なのか!?

おいおい、テロリストでペロリストって最悪じゃないですか！ ちくしょう！ 教会という変態共を退治したと思ったら第二の変態集団が現れるとは！

しかも、サーゼクスさん、今「彼」って言ったよね？ アカン。もう手遅れや。教会なんて足元にも及ばないよ。そしてあの友達も変態だったのね。

『・・・そう。オーフィスが『禍の団』のトップです』

妖艶な声と同時に、会議室の床に魔法陣が浮かびあがる。以前見たリアスやグレイフィアさんの物とは違う。見た事の無い形だった。「なるほど、そういう事か！ グレイフィア！ リアスとイツセイ君をすぐに飛ばしてくれ！」

「了解しました！」

グレイフィアさんが叫ぶと同時に、リアスと兵藤君の姿がかき消えた。二人の消えた室内で、俺達は先程出現した魔法陣へ目を向けた。一体、何が出て来るんだろうな・・・。

S I D E O U T

サーゼクスSIDE

「レヴィアタンの魔法陣・・・」

最早疑いようが無い。やはり「彼女」か

「え？ ですが、僕が知るレヴィアタン様の紋様とは違う気がするのですが」

木場君の疑問は最もだ。彼はセラフォルの魔法陣しか知らないはずなのだから。だけど、これは間違い無くレヴィアタンの物だ。

「・・・ヴァチカンの書物で見た事あるぞ。あれは旧魔王のレヴィアタンだ」

ゼノヴィアがそう言った直後だった。魔法陣から一人の女性が姿を現す。

「ごきげんよう、現魔王のサーゼクス殿」

「やはりキミか。先代レヴィアタンの血を引く者。カテレア・レヴィアタン」

旧魔王の一族。まさか、彼女達まで動き始めていたとは。

「旧魔王派の者達はほとんどが『禍の団』に協力する事に決めました」「何だ?!」

「おーおー。新旧魔王サイドの確執が本格的になったわけか。悪魔も大変だな」

く、アザゼルめ、他人事みたいに言ってくれるな。まあ、実際他人事なんだろうけど。

「ならばカテレア、キミも『禍の団』に？」

確信しつつもあえて尋ねる。だが、カテレアはまるで心外だとばかりの表情で反論して来た。

「まさか！ どうして私がテロリストなどに加担しなければならないのですか」

どういう事だ？ ならばどうしてこの場に現れたのだ？ 戸惑う僕を尻目に、セラフオールが彼女に声をかける。

「カテレアちゃん！ どうしてあなたが・・・！」

「あなたがそれを言うのセラフオール・・・！ 私からあれを奪ったあなたが・・・！」

そうか。彼女の目的は、レヴィアタンの座を奪ったセラフオールへの復讐・・・。

「許さない！ 『魔装騎士フューリー』のヒロインの座を私から奪ったあなたの事を、私は絶対に許さないんだから！」

「・・・え？」

固まる僕の前で、セラフオールとカテレアの言い争いが始まった。

「まだそんな事を！ あれはちゃんとした審査によるものだったんだから仕方ないじゃない！」

「いいえ！ あれは絶対に出来レースでした！ でなければ、あなたみたいな見た目お子ちゃまな人が選ばれるわけがありません！ 私のような顔もスタイルもいい女こそがヒロインに相応しかったのです！」

「子ども向けの特撮ドラマにお色気を求めてもしょうがないでしょ！ それに、第二期からはもう一人ヒロインが追加される予定だったんだよー！」

「な、なんですって!? どうして教えてくれなかったんですか！」

「あなたが姿を消しちゃったからでしょ！」

ヒートアップする両者。最早完全に蚊帳の外だ。だけど、めげてはいけない。どうしても確認しておかないと。

「あ、あの、カテレア？」

「なんですか！ 私は今セラフオルーとの話で忙しいんですよ！」

「いや、キミとセラフオルーに親交があった事にも驚いてるんだけど、そもそも、キミは何をしに来たんだ？」

「そんなの、本物のフューリー様に会いに来たに決まってるじゃないですか。審査に落ちて、いつかセラフオルーを見返してやろうと色々やってたら、いつのまにか旧魔王派に組み込まれて。けど、私は他のみなさんと違います。今回の会談にフューリー様も参加されると聞いたからこうして足を運んだだけに過ぎません」

「で、では、キミ個人はこちらに敵対するつもりは無いと？」

「ええ。正直、魔王が誰であろうと私としてはどうでもいいのです。あの二天龍との戦いでフューリー様のお姿を拝見したその時から、私はその方の虜。彼を思い、何度自分を慰めた事か……。ですが、それも今日でお終いです。さあ、フューリー様はどこです！」

・・・なんかもう、色々残念な女性だな。憧れというより最早心酔レベルだ。しかし、これは嬉しい誤算だ。上手くいえば彼女をこちらに引き込めるかもしれない。僕はそつと神崎君に耳打ちした。

「神崎君。どうやら彼女のお目当てはキミのようだ。キミから彼女に投降するよう説得してくれないか」

「わ、わかりました」

流石の神崎君も戸惑っているみたいだ。一步進み出た彼をカテレアが捉える。

「あ、あなたがフューリー様ですか!？」

「え、ええ」

「お会い出来て光栄ですわ！ ああ、なんと凛々しいお顔なんでしょう。正に私の想像通りのお方でしたのね！」

「カテレアさん。俺達はあなたと戦いたくないです。ですから、どうか投降してくれませんか？」

「もちろんですわ！ どうして私がフューリー様に敵対しなければな

らないのです！ 望まれるのなら、このまま外にいる旧魔王派の連中を私が片付けて来ますわ！」

こうして僕達は、戦う事無くカテレアを確保する事が出来た。結果は上々。だがしかし、ここはあえてこの言葉を口にさせてもらおう。「・・・どうしてこうなった」

第四十三話 騎士（笑）VSペロリストそして・・・

なんか凄い人が出て来た。俺に対し興奮を隠さないカテレアさんに圧倒される。なんだろう、どこことなくヴァーリさんと同じ匂いがする。そう・・・「残念」という匂いが。見た目は出来る女性！ つて感じなのに・・・。

「あーよかった。私、カテレアちゃんとか戦いたくなかったもん」

「勘違いしないでくださいセラフオール。私はフューリー様のご命令に従っただけで、あなたと慣れ合うつもりは・・・」

「あ、そうだ！ カテレアちゃんにも見せてあげるね。これ、フューリーさんとコカビエルの戦いが映ってるんだよ」

「拝見しましょう！」

再びビデオカメラをいじるセラフオールさんと、嬉々として彼女に寄り添うカテレアさん。とりあえず、あの人は彼女に任せておこう。

「キミ達、今はそれぞれどころじゃ・・・」

「ほっとけサーゼクス。あれを見ればこの女も大人しくしてるだろう。それよりも、外にいる連中を黙らせておこうぜ。ヴァーリ、行って来い」

「いいの、私が出て？」

「ああ、蹴散らしてきな。それとフューリー。お前も出てくれ。結界は俺とサーゼクス達でさらに強化しておく。遠慮はするな。お前の力を連中に見せてやれ」

望む所だ。教会、コカビエル、そしてペロリスト。俺の前に現れる連中の共通点・・・それは「変態」。ならば、俺の役目は、被害者が増える前に、連中を排除する事だ！

「わかりました。・・・叩き潰します」

暴力的な感情が胸の中に渦巻くのを感じる。おそらく今、俺は危ない笑みを見せているだろう。現に、俺を見ているアザゼルさん達の顔が引き攣っている。

「ふふ、素敵な殺気ね。魂まで凍りついてしまいそうだわ。よっぽど外の人達が気に食わないみたいね」

ヴァーリさんの言葉に頷く。テロリストでペロリストなヤツなど、この世に必要な無い。変態には罰を。ド変態には死を。それがこの世の真理だ。

「さて、私も準備しないとね」

ヴァーリさんの背中に光の翼が出現する。そこからさらに彼女の言葉は続く。

「――禁手化」

『Vanishing Dragon Balance Break
er!!!』

機械的な音声が発せられた途端、ヴァーリさんの体を真っ白なオーラが包みこむ。それが治まった時、彼女の体は白銀の鎧に覆われていた。

「それが白龍皇の禁手。……だが、前回現れた時はそんな鎧では……」

木場君の言う通りだ。それが禁手だというなら、あの露出強全開な姿はなんだったんだらうか。疑問を抱く俺達に、ヴァーリさんが薄く笑いながら答える。

「これはいわば第一段階。本当に強い相手との戦いになれば、余計な部分をパージするの。もつとも、今回の相手はその必要も無さそうだけどね」

「禁手に段階!? さらに能力が上がるというのか……!」

「それじゃ、先に行かせてもらうわ」

窓を開け、ヴァーリさんが飛び出していく。俺も急がないと。美人な彼女を見てペロリスト共がやらかすかもしれないしな。

「木場祐斗君。キミも出てくれないか? あの二人で充分かもしれな
いが、敵の数も甘く見れない。故に、キミにフォローを任せたい」

「はっ! お任せください! ゼノヴィア、キミも来てくれ!」

「了解。神崎先輩の戦いを傍で見られる絶好の機会だ。色々吸収させてもらう」

おお、二人も来てくれるのか。それは心強いな。

木場君とゼノヴィアさんを連れ、俺はヴァーリさんが開けた窓を飛び出すのだった。

S I D E O U T

アザゼルS I D E

校庭に降り立ったフューリー達を、魔術師共が取り囲む。

「新手か！ あの女悪魔は何をやっている！」

「捨ておけ！ 所詮、伝説とやらに縋る愚かな女でしかない！」

好き勝手にカテレアをこきおろす魔術師たち。どうやら、あいつが望んで旧魔王派へ入ったわけではないというのは本当らしいな。

「・・・彼女と貴様等を同じにするな」

フューリーが放ったその一言が魔術師共を凍りつかせる。ああして対峙した事で理解出来たのだろう。自分達の前にいる野郎が、ただの人間ではないのだと。

『禍の団』・・・俺は貴様等を認めない。己の目的や欲望の為に、関係の無い人達を傷つける貴様等は害悪でしかない。俺が・・・俺達が、貴様等を止めてみせる！」

・・・なるほど。あいつが騎士たる理由がわかった気がする。かつて、あいつがいたという世界でも、あんな調子で戦っていたのだろう。己の心に従い、顔すら知らぬ他人の為に・・・。

ただのカッコつけ野郎とは違う。あの男は“本物”だ。

「だ、黙れ！ 貴様ごときに、我らの崇高な理想を・・・！」

「語る舌は持たない。言いたい事があるなら力づくで聞かせてみる」

その言葉を皮きりに、フューリー達と魔術師達の戦闘が幕を開けた。聖魔剣使いの小僧が軽やかに敵を斬り伏せて行く。速さが自慢なのだろうが、俺から見たらまだまだだ。鍛えがいはいありそうだな。

反対に、デュランダル使いの女は典型的なパワータイプのようだ。デュランダルの一振りと共に光の波動が迸り、校庭を敵ごと抉っている。まったく、もうちつとスマートに扱えないのか。あれじゃただ振り回してるだけじゃねえか。

そして、肝心のフューリーはというと・・・。

「青龍鱗！」

構えた両手から青白い光を放ち、魔術師共を吹き飛ばしていた。向こうでヴァーリが波動弾をぶつ放しているが、それと同レベルくらいの威力はありそうだ。

続けて、光を両手に収束させるフューリー。映像で見せた瞬間移動で一人の魔術師の眼前に現れると、俺ですら霞んで見える速度で拳を叩き込む。やり過ぎなくらい連打した後、相手の腹部に両手を当て、収束した光を一気に解き放った。

「白虎咬！　でいいいいいいやっ!!」

炸裂した光の衝撃が、魔術師の体を紙屑のように宙へ舞い上がらせる。そいつはそのまま校舎の壁に叩きつけられた。

「ほお、中々面白い技を使・・・」

「頑張れー！　フューリーさん！」

いつの間にか俺の横でセラフォルとカテレアが観戦していた。

「セラフォルー！　録画は!？」

「バッチリだよ！」

「流石ですね！　あとアザゼル、邪魔なんでどいてください」

「お前らな・・・」

サーゼクスじゃないが、つい溜息が出てしまう。レヴィアタンの名を持つ悪魔が、人間の虜となるつても妙な話だ。あいつ・・・女難の相がありそうだな。こいつらでこれだ。あいつの周りの女共も何人かは落としているかもな。

「おっと、どうやらイツセイ君とリアスも上手くやったみたいだな」

サーゼクスの声につられて旧校舎の方へ目を向けると、たった今玄関から二人と、赤龍帝の背中に乗った吸血鬼の小僧の姿が確認出来た。

外の戦いも終わりを迎えようとしている。敵の増援が来るスピードが目に見えて落ちて来たのだ。もう少し掃除すれば、決着がつくだろう。

それから数分後、最後の魔術師が地面に倒れ伏した。これでようやくここから出られる・・・はずだった。

「あ？　ヴァーリのヤツ、何してんだ？」

戦いを終えたはずのヴァーリが禁手を解かない。それどころか、魔術師共と戦っていた時よりも巨大な闘気を放ちながらフューリーの前に降り立った。

・・・嫌な予感がする。あいつの性格からして、魔術師との戦いは退屈極まり無かったはずだ。もし、その不満をぶつける相手が近くにいたとしたら、あいつは間違い無く……。

「ねえ、亮真……。私と戦ってくれない?」

チッ! やっぱりこうなりやがったか……!

アザゼルSIDE OUT

IN SIDE

「ねえ、亮真……。私と戦ってくれない?」

はい? この露出強さんは何を言ってるんですかね。たつた今ペロリスト共を片付けたと思ったら自分と戦え? いやいや、どういう流れだよ。

「駄目なのよ。この程度の連中じゃ、私の疼きは止められない。私が求めるのは強者との戦い。だから亮真。異世界よりやって来た騎士様。あなたなら、きっと私を満足させてくれるはず。だから、私と戦ってちょうだい」

何を言っているのかさっぱりわからないよ? 戦うのが好きって、所謂戦闘狂ってヤツ? 露出強で戦闘狂とか、この子どもまで行く気なんだろう……。

そもそも、キミと戦う理由なんて俺には無いよ? そう伝えると、ヴァーリさんは僅かに首を横に振った。

「あなたには無くても、私……いえ、彼にはあるのよ。ねえ、アルビオン?」

ヴァーリさんの問いかけに鎧の宝玉が激しく点滅し、聞き覚えのある声が発せられた。

——お、落ちつけ、ヴァーリ! まだ時期尚早……!

「いいじゃない。どうせいつかは戦うんだから」

——し、しかし。

「それに、しばらくはドライブとも会えないかもしれないし。ここで一度互いの実力を測るのもいいと思わない?」

俺を無視してどんどん話を進めていくヴァーリさんとアルビオン。キミら、人の話はちゃんと聞いてくださいよ。

——・・・わかった。お前の言葉に従おう。ドライブ! ドライブはいるか!

アルビオンが叫ぶ。すると間髪入れずに別の声が響き渡った。

——ここにいるぞアルビオン!

「お、おい、ドライブ! 何だよ急に!」

振り返ると、リアスと兵藤君、それにヴラディ君がいた。どうやら無事に彼を救出出来たみたいだな。

「ヴラディ君。無事でよかった・・・」

「は、はい。ご心配とご迷惑をおかけしましたあ」

「来たわね、赤龍帝君。さあ、私と一緒に亮真と戦いましょう」

「いやいやいや! 突然何言ってるのアンタ!? 何で俺が神崎先輩と戦わないといけないんだよ!」

「それが赤と白の龍を宿す者の運命だからよ」

「え・・・?」

——その通りだ、相棒。俺達を宿す者が、どのような理由や目的で力を振るおうが構わない。だが、たった一つだけ俺達には譲れないものがある。何百年経とうが、決して譲れない「誓い」がな。

——赤と白は何代にも渡って争い続けていた。だがそれは決して憎しみによるものではない。いつでも「誓い」が果たせるよう、宿主を徹底的に鍛え上げる為だ。

「そ、そういえば、前にもそんな事言ってたよな。なら、お前らの言う「誓い」ってなんなんだ?」

兵藤君の問いに、ドライブとアルビオンが声を揃えて叫んだ。

——我らの目的はただ一つ! フューリー! 貴様を倒す事だ

!!!

「・・・えっ」

ちよちよちよっ! 何で!? いやマジで何で!? 俺が何をしたつ

ていうの!?

「待つてくれ。理由がわからない……」

——うるせえこの野郎! 俺の尻尾ぶった切りやがった恨みは忘れてねえからな!

——よくも翼に穴開けてくれたな! いきなり地面に落ちてマジで怖かったんだからな!

ありましたよ理由! やべえ、そういえばあの時の事、謝ってなかった。違うんです! あの時はただ無我夢中だったんです!

「ドライブ、気合い入ってる所悪いが、俺は先輩と戦う気は無いぞ」
いいぞ兵藤君! なんとかドライブ様の気持ちを落ち着かせてあげて!

「あら、ずいぶん弱気ね、赤龍帝君。あなた、亮真に憧れてるんでしょ? ここで逃げたら益々彼は遠ざかっちゃうわよ」

「そ、それは……」

「はあ……仕方ないわね」

そう言うと、ヴァーリさんが目を閉じる。そして次に目を開けた時、彼女の鎧が派手な音と共に弾け飛んだ。そう……露出強モード(勝手に命名)だ!

「もし一緒に戦って勝てたら……私の胸、好きにしていいわよ」

「勝負です、先輩!」

変わり身早っ!? 胸か!? やはり胸なのか!? まずいぞ。みんな感情が高ぶってまともな判断が出来てない。ここは一旦冷静になって話し合おうじゃないか!

えーっと。確かこういう時に役に立つセリフがあったよな……。

S I D E O U T

リアス S I D E

目の前で繰り広げられるやりとりに頭が痛くなって来た。確かに、歴代の赤龍帝と白龍皇が常に争っていたというのは聞いた事があるが、まさかりヨーマを倒す為だったなんて……。

それにしても、イツセー。あなたって本当にブレないわね。リョー

マもこれくらいとまではいかなくていいから、もうちよつと男の子の性を見せてくれていいのに。毎日毎日エッチな下着で誘惑してるけど何の反応もしてくれないから、全く女性として意識されてない気がして落ち込んでるのに。

そうやって心の中で愚痴っていると、リョーマの雰囲気急変した。彼から発せられるとてつもないプレッシャーが私達を襲う。

「ドライグ……アルビオン……」

——ッ！

感情の全く籠っていない機械的な呼び声に、ドライグ達が息を呑む。そして亮真は死刑宣告とも取れる言葉を口にした。

「少し頭……冷やそうか？」

僅かな微笑み。私にはそれが死神のそれに見えた。直後、ドライグとアルビオンの悲鳴が校庭に響き渡った。

——あ、ああああ相棒うううううううう!! 早く! 早く『赤龍帝の鎧』を纏ええええええええ!!!

——ヴァーリ! ヴァーリ! 『覇龍』だ! 『覇龍』じゃないとやられる! やられる!! 殺られるうううううううう!!!

「お、おとおお落ちつけドライググググ!」

「まずあなたが落ちつきなさい。それとアルビオン。私、こんなところで『覇龍』は使うつもりは無いわよ?」

かつて二天龍と称された存在が本気で恐怖している。その様子はどこか滑稽だった。錯乱し過ぎて口調もちよつとおかしい。リョーマ……一体どれだけのトラウマを植え付けたのかしらね。

(もう勝敗はついてると思うのだけれど、本当にやるのかしら?)

そう思いつつ、私は三人のやりとりをじっと眺め続けるのだった。

第四十四話 並び立つために

「ふふ、さあ、始めましょうか・・・」

「何考えてんだこのバカ娘」

アザゼルさんが黒い翼を羽ばたかせてやって来た。どうでもいいけど、十二枚もあると手入れとか大変そうだ。

彼はヴァーリさんの後ろに降り立つと拳を振りあげ、それを彼女の頭に落とす。ゴツン！ と聞いただけで痛くなりそうな音が響いた。

「何よアザゼル。邪魔しないでちょうだい。それと、今の拳骨は駄目ね。私を満足させたかったらあと三十回は殴ってくれないと」

「黙れドM。お前を喜ばせる為に殴ったんじゃないやねえよ。ようやく連中が片付いたつてのになんでまた戦おうとしてんだお前は」

「愚問ね。あの程度で私が満足出来ると思ってるの？ 私はもつと強い相手と戦いたい。それを邪魔するというのはならアザゼル・・・あなたから潰すわよ？」

あらやだ、目が本気ですよこの子。やばいよー。この子やっぱり色々やばいよー。アザゼルさん。何とかしてくださいよ。あなた保護者みたいな立場なんですよ？

「つたく、めんどくせえ小娘だな。・・・おい、フューリー。俺が許可する。この勘違い娘をちよつと教育してやってくれ」

は？ いやいや、ちよつと待つてくださいよ！ あーた止める側でしようが！ 何戦わせる気満々なんですか!?

「許可は出た・・・。これでもう私達を邪魔するものは存在しないわ。さあ・・・存分にぶつかりましょう！」

・・・ああ、そうですね。もう決定なんですね。・・・いいだろう。ならば、キミの言う通り、存分にOHANASHIしようじゃないか。聞き訳の無い子を大人しくさせるのも年長者の務めだ。

俺と同じ露出強を友人に持つ別世界のリリカルな魔王様・・・。どうか、俺にOHANASHIする力をお与えください！

S I D E O U T

イツセーSIDE

先輩が俺達から距離を取るために歩きだす。その背中を眺めながら、俺は自分で自分を責めていた。

あーもう、俺の馬鹿野郎！　いくらヴァーリちゃんのおっぱいが魅力的過ぎたからって、先輩と戦うとかやっぱありえないだろ！　どう考えても絶望しか無えじゃねえか！

——覚悟を決める相棒！　怖いのは俺も同じだ！　だが、この恐怖を乗り越えなければ俺達は前に進めない！

・・・カツコつけてる所悪いけどな、ドライブ。お前に対して言いたい事が一杯あるんだ。そもそも、お前らが三陣営を巻き込んだケンカしてたから神崎先輩が止めに入ったんだろうが。どう考えても悪いのはお前ら。今お前らが抱えている怒りは完全に逆恨みなんじゃないのか？　そこんとこどう思ってるんですか、ドライブさんよお。

——ぴゅーぴゅー。

わざとらしく口笛吹くな！　ちくしょう、アザゼルもアザゼルのだ。最初、先輩は乗り気じゃ無かったのに、アイツが余計な事言った所為で覚悟決めたみたいだし。

「あ、あの、ヴァーリちゃん。やっぱり俺、止めとくわ。キミと先輩だけで好きなだけ戦ってくれ」

「どうして？　私の胸じゃ満足出来そうに無いから？」

「とんでもない！　キミのおっぱいは最高だ！　けど、俺なんか先輩の相手になるわけ無いし・・・」

最後の方はすっかり小さい声になってしまった。そんな俺の態度に、ヴァーリちゃんの表情が曇る。明らかに落胆しているようだった。

「・・・あなたはそうやって自分よりも強い相手から逃げ続けるつもりなの？」

「ち、違っ・・・」

「いいえ、違わないわ。自分よりも強いとわかってる。だから挑んでも勝てるわけない。なら、他の人に任せて自分は安全な所から見ればいい。・・・あなたが言っているのはそういう事よ」

何も言い返せない俺を、ヴァーリちゃんはさらに責める。

「亮真は強い。頼りたくなる気持ちはわかるわ。だからって、全部を亮真に押しつける気？ 強い者が弱い者を守るのは義務だとも思ってるのかしら？ そんなのは弱者の都合でしか無い。強者にとって弱者なんて足手纏い以外のなんでもないわ」

「俺が足手纏いだって言いたいのか？」

「あなただけじゃない。あなた達、亮真の友人全員が足手纏いだって言ってるの。彼を殺すのは敵じゃなく、味方であるはずのあなた達の誰かかもね」

意味わかんねえ。俺達の誰かが先輩を殺す？

「そんな・・・そんなわけねえだろ」

「そうね。あなた達が直接殺すわけじゃないでしょう。私が言っているのはあなた達の存在が間接的に彼を殺すかもしれないって事よ」

「間接的・・・なるほど、そういう事ね」

傍で聞いていた部長が理解したように頷いた。

「流石、魔王の妹は聡明ね。赤龍帝君。亮真は二天龍を圧倒した伝説の騎士なのよ？ その力を欲する者なんて腐るほどいるはず。そういった連中が手っ取り早く亮真を従えさせようとした時・・・どんな手段を取ると思う？」

「それは・・・脅すとか？」

「その答えは五十点ね。下手な脅しは亮真の怒りを買うだけ。だってら本人じゃなく、他人を利用すればいい。・・・ここまで言えばわかるわよね？」

ツ・・・！ そうか・・・人質！ 俺達の誰かを盾に、先輩に言う事を聞かせるつもりって事か！

「他にも、亮真の存在を目障りに思っている者だっているでしょう。そいつらによって抵抗も出来ずに罅り殺しにされる可能性だってあるわ。亮真が抱えるただ一つの弱点・・・それがあなた達よ」

俺が・・・先輩の弱点？ 俺の所為で・・・先輩が死ぬ？ 俺が・・・俺が・・・

「私はそんなのゴメンだわ。誰かの弱点になりたくないし、誰かを弱

点にしたくない。だから私は一人でいい。一人で全てを圧倒する強さを手に入れないといけないの……」

呆然とする俺の前で、ヴァーリちゃんは僅かに悲痛な表情を見せた。けど、次の瞬間にはいつも通りの余裕ある笑みを浮かべ、背中の翼を羽ばたかせながら神崎先輩に向かって行つた。

「さあ、亮真！ 私を楽しませてちょうだい！」

くそ、俺は……俺はどうしたら……。

——何を悩む必要がある、相棒？ あの女に共闘を持ちかけられた時、すでに心は決まっていたのだろうか？

な、何言つてんだよドライブ。俺はただヴァーリちゃんのおっぱいにつられて……。

——いいかげん道化を演じるのは止める。お前はヤツとの実力差に絶望しつつも、自分の力をぶつけたいと心のどこかでずっと思っていたはずだ。

なんだよ……。何でお前にそんな事がわかるんだよ。

——わかるさ。俺も相棒と同じだからな。

え……？

——正直言って、今の俺達ではヤツには勝てない。それは絶対だ。だからと言って、戦う前から諦めるなど、俺には出来ない。それをしてしまったら、俺は本当の意味でヤツに負けた事になってしまうからな。

本当の……負け？

——今回勝てなければ次に勝てばいい。次に勝てなければさらにその次に勝てばいい。相棒、本当の負けつていうのはな、体じやなく、心が屈した時の事を言うんだよ。

心が屈した時が本当の負け。……ああ、そうだ。確かに俺は以前負けてしまった。コカビエルとの実力差に圧倒されて、最初は諦めてしまった。

けれど、俺はそのまま倒れる事も無く、再び立ち直る事が出来た。それは何故か。言わずもがな先輩のおかげだ。あの人の熱い励ましが俺の心から諦めという弱さを払拭してくれたのだ。

・・・やつぱり、俺って馬鹿だな。こんなんじや、先輩に追いつける日なんて永遠に來ないかもしれない。でも、それでも、諦めたくは無い。

「うぐっ・・・！」

ヴァーリちゃんが吹っ飛んで來た。彼女の両手を覆う鎧に大きな罅が入っている。はめ込まれていた宝玉が取れ、俺の方へ転がって來た。

彼女を吹っ飛ばした張本人である先輩は、ライザーとの戦いで見せたあのロボットみたいなの鎧を纏っていた。

「そろそろ終わりにしないか？」

「冗談！ こんな楽しい戦いを止められるわけないじゃない！ ええ、そうですとも！ 諦めてたまるものですか！ 亮真！ 私が諦めるのを諦めなさい！」

再び先輩へ突撃するヴァーリちゃん。蒼い光と白い光が空中で何度もぶつかり合う。それを眺めながら、俺は決意した。

もう言い訳は止めよう。もう諦めるのは止めよう。もう恐れは捨てよう。俺自身の為に。そして・・・先輩の為に！

「部長、離れててください！」

部長を下がらせ、俺は『赤龍帝の籠手』を掲げ叫んだ。

「ごちゃごちゃ考えるのは止めだあ！ いくぜドライグウウウウウウ!!!」

『Welsh Dragon over booster!!!』

俺の体を『赤龍帝の鎧』が包みこむ。続けて俺は足元に転がっていた宝玉を拾い上げた。

——相棒、それをどうするつもりだ？

「神器は想いに応えて進化する・・・。お前は前にそう言ったよな」

——その通りだ。

「なら、俺は進化してみせる！ 今までの弱い自分を変えてみせる！ ドライグ、俺の想いに応えてくれ!!」

浮かび上げたイメージを強く思い描き、ドライグに伝える。それを受け取ったであろうドライグが困惑の中に喜悦を交えた声で応えた。

——ははははは！ 面白い！ 面白いぞ相棒！ だが、それを望むのなら死を覚悟する必要があるぞ？ お前にその覚悟はあるのか？

「上等だ！ 死だろうがなんだろうが、絶対に越えてみせる！ ドライグウ！ お前もそうだろうがああああああ!!！」

——応っ！ 俺も覚悟は出来ている！ 我は赤き龍の帝王！ この程度の障害など乗り越えて見せるさ！

「ヴァーリちゃん！ アルビオン！ お前らの力を手に、俺は俺を越えてやるぜえ！」

気合いと共に、俺は右手の甲の宝玉をブチ壊し、そこへ拾った宝玉を叩きつけるようにはめ込んだ。

赤と白の力の融合。俺の狙いはそれだった。相反する力だが、不可能じゃないはずだ。何故なら、すでに木場が聖魔剣という結果を出しているのだから！

宝玉をはめ込んで数秒後、俺の中で何かが脈打ったのを感じた刹那・・・右手から全身に尋常じゃない痛みが伝わり始めた。

「う、が、ああああああああああ!!?!」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!?!痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!?!

「ぎぎああああああああああ!!?!」

「兵藤君!？」

俺の名を叫ぶ先輩に、痛みで飛びかけた思考が僅かに戻って来た。耐えろ！ 耐えろ俺！ あの人に心配をかけるためにこんな事したんじゃないだろ！

——何を考えているドライグ!? 誓いを果たさぬまま消滅するつもりか!?

アルビオンの驚愕した声が耳に届く。それに対し、ドライグも苦悶の声をあげつつ答える。

——相変わらずお前の冗談は笑えんなアルビオン！ 心配せずとも見ているがいい！ 俺と相棒の進化をな！

未だに止まない痛みに晒されながら、俺は先程の会談で語られた先輩の秘密を思い出していた。別世界からたった一人でやって来た孤独な来訪者。家族も、友人も、もしかしたら恋人だっていたかもしれない。けれど、この世界に先輩との繋がりを持つ人はいない。

『——彼女には感謝しています。おかげで、俺はリアス達に出会う事が出来た』

あの時、先輩はそう言ってくれた。あの人は、俺達の事を大切な仲間として見てくれている。それが嬉しかった。俺達が、あの人の孤独を少しでも癒せた事が。

だから、もう先輩を一人にしちやいけないんだ。先輩が俺達を守ってくれたように、俺達も先輩を守らなくちやいけないんだ。俺達の弱さが先輩の弱点だっていうなら……。

「強くなってやる！ あの人の背中を追いかけるんじゃない、あの人の隣に立って戦う為に!!」 だから……俺の想いに応えろおおおおおおお!!

『Vanishing Dragon Power is taken!!』

その機械音声が鳴り響いた直後、俺の右手をまばゆい白い光が包む。同じく白いオーラが右腕を包む。そして……俺の右手に白き籠手が出現した。

『白龍皇の籠手』……。これが俺の覚悟の証だ!」

赤と白の籠手をぶつけ合い、俺は先輩へ顔を向けた。

「先輩……。俺の覚悟を受け止めてください!」

顔までバツチリ覆われているので、先輩がどんな表情をしているかはわからない。けれど、先輩は今笑っている。何故かそう思った……。

第四十五話 覚悟

祐斗SIDE

僕は・・・いや、今この場にいる全ての存在が、目の前で繰り広げられる戦いに目を奪われる。二天龍対フューリー・・・かつての伝説がこうして現代で再現されている事実、僕はアニメに夢中な子どもみたいな興奮と喜びを感じていた。

きつかけはヴァーリさん。魔術師を殲滅した直後、彼女は突如として神崎先輩に勝負を挑んだ。イツセー君までも巻き込んだ。

そして語られた二天龍の「誓い」。神崎先輩を倒す為に互いの力を高め合っていた二頭。・・・自業自得という言葉、僕はそつと飲み込んだ。

やる気満々なヴァーリさんに対し、イツセー君は消極的だった。気持ちはわかる。先輩と戦うなんて悪い冗談としか思えない。コカビエルに勝てなかった僕達が、コカビエルを倒した先輩に勝てるわけない。

だけど、そんなイツセー君に対し、ヴァーリさんは厳しくも射た言葉を放った。将来、神崎先輩を殺すのは僕達かもしれない。僕達の存在が先輩の弱点になると。

確かに彼女の言う通りだ。今の僕達は神崎先輩の足手纏いにしかならない。イツセー君はその言葉に酷くショックを受けたみたいで、顔がこわばっていた。

「・・・言い返せないのが余計悔しいな」

隣のゼノヴィアが苦虫を噛み潰したような顔をしている。彼女も思う所があるようだ。そして、それは僕も同じだ。部長の婚約も、コカビエルも、先輩がいなければ僕達は乗り越えられなかった。それは裏を返せば、先輩がいなければ僕達は何も出来ないという事になる。弱者の都合に強者を巻き込む・・・。ヴァーリさんの言葉が胸に突き刺さる。

僕達は先輩に依存している。それは誤魔化しようのない事実だ。けど、それでいいの？ おそらく・・・いや、間違い無く、僕達は

これからも様々な相手と戦う事となるだろう。それは『禍の団』や、もしかしたら他の組織かもしれない。その中には、今の僕達では足元にも及ばない強大な敵だっているはずだ。

もし、そんな相手が僕達の前に現れたら？　もし、その相手によって僕達が傷つきそうになったら？　その時はきつと先輩は僕達を守ってくれるだろう。

なら・・・その先輩を守るのは誰だ？　未だあの人の力の全てをこの目にしたわけではないけれど、先輩にだって限界はある。いつか、先輩が危機に陥った時、手を差し伸べられるのは誰だ？

それはきつと、僕達だけだろう。先輩が友人である僕達を守ってくれるように、僕達も友人である先輩を助けないといけない。いや・・・僕は助けたい。平穩を望みながら、それでも守りたいものの為に剣を取り続けるあの誇り高い騎士様を。同じ騎士である僕が！

「・・・強くなりたいな。もっと、もっと・・・」

「ああ・・・私もだ」

無意識に出た呟きに、ゼノヴィアが頷く。

チラリと視線を向けると、先輩はフューリー・・・いや、以前聞いた話ではあれはラフトクランズという名前だったっけ？　とにかく、あの鎧を纏っていた。素顔が見えない所為か、いつも先輩が放つプレッシャーよりもさらに冷たいそれが感じられる。

「さあ、亮真！　私を楽しませてちょうだい！」

ついに戦いが始まった。イツセイ君を残し、ヴァーリさんが先輩へ襲い掛かる。僕の目でなんとか認識出来るほどの凄まじい速度で先輩へ向かって足を振り上げるヴァーリさん。対する先輩は両腕をクロスさせ、防御態勢に入る。

そこへ、ヴァーリさんが閃光の様な速度で蹴りを叩きこむ。だが、先輩は吹き飛ばされるどころか、その場に根を生やしたかのように僅かたりとも動かなかった。ダメージはもとより、衝撃すら完全に防ぎきってしまったようだ。

「触れたわね？」

攻撃が通らなかつたにも関わらず、ヴァーリさんが不敵な笑みを見

せる。そこで僕は彼女の狙いに気付いた。

『白龍皇』の神器・・・『白龍皇の光翼』は、触れた相手の力を半減させ、それを己が力へと変換させる力を持つと聞いている。彼女は先輩の力を奪うつもりなんだ。確かに、先輩のあの凄まじい力をそのままぶつけてしまえば、いくら先輩でも・・・。

だが、ヴァーリさんの狙いは失敗に終わった。それどころか、先輩から奪った力は彼女を追い込む事となった。

『Divide!』

「ッ!? あ、あがあああああああ?!?!?」

力の奪取が完了した事を伝える音声が鳴り響いた直後、ヴァーリさんが胸を掻き毟りながら絶叫したのだ。背中の翼から噴出される光が、かつて無いほどに激しくなる。

——な、なんという力だ!? 処理しきれん! ヴァーリ! すぐに吐き出せ!

強すぎる力は身を滅ぼす。今、ヴァーリさんは自分の許容量以上の力を得た事で、逆にその力に飲み込まれそうになったのだ。

「な、何が起こったんでしよう・・・!?」

いつの間にか、会議室にいた全員が集まっていた。ギヤスパー君が落ちついた事で、停止したままだった朱乃さん達もそこに加わっていた。

「・・・」

セラフォル様とカテレアは無言で撮影に夢中になっている。・・・うん、そつとしておこう。

「あの馬鹿。身の程も知らずに奪おうとするからだっつての」

「アザゼル、彼女は」

「ああそうさ。フューリーから奪った力がデカ過ぎたんだ。制御出来ない力が暴れてアイツの体を蹂躪してんだよ」

やはりそうだったか。僕達が見つめる先で、なおもヴァーリさんがもがき続ける。その様子をジツと見つめる先輩は果たして何を思っているのだろうか。

「はあっ・・・はあっ・・・! ふ、ふふふ、まさか、たった一度の半

滅でこんな目に遭うなんてね。素敵よ亮真。こんなの初めてだわ」

「——どうするヴァーリ？ ヤツの力を半減出来ないとなると……。」

「ええ、素の状態のままでは、先程の様に防がれてしまう。ここは赤龍帝君の倍加の力を借りられればいいのだけけれど」

「——だが、ヤツは戦いを放棄した。助力は期待出来んぞ。」

「だったら、私だけでやらないとね！」

ヴァーリさんが再度先輩へ向かって飛び掛かる。今度は直線的には無く、攪乱するかのように先輩の周囲を旋回しつつ拳を放つ。

「もらったわ！」

僅かに反応の遅れた先輩の顔面にそれが突き刺さる。これは効いたか？ そう思ったのもつかの間。先輩は自身の顔を襲った手と、反対の手の両方を掴むと、それを握り締めた。

「いぎっ!？」

かつて、エクソシストの剣どころか、エクスカリバーすら素手で破壊しかけた先輩なら、彼女の両手を粉碎する事など容易い事だろう。現に、ヴァーリさんの手を覆う鎧に急速に罅が入り始めていた。

「……そう言えば、木場祐斗君。以前聖魔剣の事で話をさせてもらった時に、キミは言っていたよね。神崎君は素手で聖剣を破壊しようとしたと」

僕が頷くと、サーゼクス様を除いた全員が酷く驚いた。うん、当然の反応だと思うな。

「うぐっ……!」

両手を握り締めたまま、先輩が軽くヴァーリさんを押し出す。たったそれだけの動作で、彼女はイツセー君の所まで呆気無く吹き飛ばされていた。

イツセー君は先程から立ち竦んだままだ。彼の足下に、ヴァーリさんの鎧から外れた宝玉が転がって行くのが見える。

「そろそろ終わりにしないか？」

戦いが始まって初めて先輩が口を開いた。ヴァーリさんを気遣う様なその声色は、いかにも先輩らしい。例え戦っている相手でも、そ

れが友人なら手を指し伸ばす。それを優しさと呼ぶか、それとも甘さと取るべきか。僕には判断がつかなかった。

「冗談！　こんな楽しい戦いを止められるわけないじゃない！　ええ、そうですとも！　諦めてたまるものですか！　亮真！　私が諦めるのを諦めなさい！」

正直言つて、ヴァーリさんが勝てる見込みはこの時点ではほぼゼロだと言つてもいい。それでも、彼女の目には、言葉には、諦めの色は感じられなかった。

絶対的な強者を前にしても臆する事無く挑み続ける。その姿が、どこまでも眩しく、どこまでも羨ましく見えた。

「俺は楽しくもなんともないのだがな……」

空へ舞い上がったヴァーリさんを、先輩も溜息を吐きつつ、背中から青白い炎を噴射させて追う。結界に覆われた空で、蒼き騎士と白き龍が幾度となくぶつかり合う。

「……私達に必要なのは、あの子みたいな強さなのかもしれないわね」
イツセー君の所にいたはずの部長がいつの間にか傍にいた。ヴァーリさんに向ける目には、どこか憧憬の様な物が込められている気がした。そして、それは部長だけでは無かった。

「ぐちやぐちや考えるのは止めだあ！　いくぜドライ
グウウウウウウ!!!」

『Welsh Dragon over booster!!!』

どこか吹っ切れた表情を見せ、イツセー君が禁手を発動させた。勇ましい鎧姿となった彼は、ヴァーリさんが落とした宝玉を拾い上げた。

——相棒、それをどうするつもりだ？

「神器は想いに応えて進化する……。お前は前にそう言ったよな」

——その通りだ。

「なら、俺は進化してみせる！　今までの弱い自分を変えてみせる！

ドライグ、俺の想いに応えてくれ!!」

決意の込められたイツセー君の言葉に、ドライグも力強く答える。

——ははははは！　面白い！　面白いぞ相棒！　だが、それを望

むのなら死を覚悟する必要があるぞ？ お前にその覚悟はあるのか？

「上等だ！ 死だろうがなんだろうが、絶対に越えてみせる！ ドライグウ！ お前もそうだろうがああああああ!!！」

——応っ！ 俺も覚悟は出来ている！ 我は赤き龍の帝王！

この程度の障害など乗り越えて見せるさ！

一体何をするつもりだ？ そう思った直後、イツセー君は自分の右手の甲にはめ込まれていた宝玉を自ら破壊し、そこへヴァーリさんの宝玉をはめ込んだ。

「はっはあ！ 面白え！ アイツ、『赤龍帝』と『白龍皇』の力を融合させるつもりか！」

相反する二つを混ぜる。僕と同じだ。だけど、それは本来ありえない現象だ。故にそれを成す為には相応のリスクや代償を負う可能性が……。

「う、が、ああああああああああああ!!?!?!?」
「イツセー!!！」

右手を押さえながら絶叫するイツセー君に、部長が悲鳴にも似た声をあげる。あれが、あの痛みが融合の代償か！

「ぎああああああああああ!!?!?!?」
「兵藤君!!！」

尋常じゃない叫びに、先輩は動きを止めてイツセー君の方へ顔を向ける。その声に反応するかのように、イツセー君も先輩の方へ顔をあげる。

——何を考えているドライグ!? 誓いを果たさぬまま消滅するつもりか!?

信じられないといった様子のアルビオンに対し、ドライグが答える。

——相変わらずお前の冗談は笑えんなアルビオン！ 心配せずとも見ているがいい！ 俺と相棒の進化をな！

進化……。ああそうだ。進化だ。イツセー君はまさしく進化しようとしているのだ。今までの自分を変える為に。

「強くなつてやる！ あの人の背中を追いかけらんじゃなく、あの人の隣に立って戦う為に!! だから・・・俺の想いに応えろおおおおお!!!」

『Vanishing Dragon Power is take n!!』

そして、イツセー君は掴み取った。新たな自分を。新たな力を。その右手に輝く白い籠手と共に。

『白龍皇の籠手』・・・これが俺の覚悟の証だ!」

・・・イツセー君。今僕は、純粹にキミを凄いと思つた。ヴァーリさんの言葉を否定せず、自分の弱さを受け入れ、そしてそれを乗り越えようと決意し、その為の可能性を掴み取ったキミを。

「先輩・・・。俺の覚悟を受け止めてください!」

言い様も無い高揚感が僕の全身を駆け抜ける。ただひたすらに熱い。体の震えが止まらない。武者震いと言つた方がいいかもしれない。

「どうしてかな。今すぐあの場に乱入したくてしょうがない」

「はは、僕もだよゼノヴィア。だけど・・・」

「ああ、今回はあの二人に譲ろう。いずれ機会があれば、私も神崎先輩に挑んでみたい」

「その時は僕も参加させて欲しいな。騎士同士の戦いだ。きつと楽しいだろうね」

「ふ、そうだな・・・」

先輩、僕達の事も受け止めてくださいね？

祐斗SIDE OUT

IN SIDE

なんだろう。一瞬ものつそい寒気がしたんだけど・・・。風邪でも引いたかな？

・・・なんて、くだらない事考えてる場合じゃないか。

OHANASHIするためにラフトクランズモードになったのはいいけど、さつきから色んな事が起こり過ぎて混乱するわ。ヴァーリ

さんは絶叫するし、結局兵藤君まで参加してるし、かと思ったら彼も絶叫するし……。

しかも、またイケメン化したよ彼。すっげえカッコイイセリフと共になんかパワーアップしたみたいだけど、何であんなに熱血しちやつてんのかな？

もしかして、ヴァーリさんを傷付けた俺に対して怒ってたりして……。誤解だよ？俺はただ停戦といえど握手だろうと思ってる。女の子を握っただけなんだよ？でも、女の子大好きな彼からしたら、女の子を傷付けた俺が許せないんだろうな。一応、ヴァーリさんに『信頼』かけたから大丈夫だとは思うけど。手加減って難しいね。しかし、あれだね。今の俺達を現すなら、兵藤君が熱血主人公でヴァーリさんがヒロインって感じかな。……あれ、それだと俺って悪役？

「驚いたわ。まさか、私の力を取り込むなんて」

「ヴァーリちゃん。キミのおかげで目が覚めたよ。一緒に戦わせてくれ！」

「……いい気迫ね。さっきの負け犬根性丸出だった時とは別人のようだね。期待させてもらおうよ、赤龍帝君」

「兵藤一誠だ。好きに呼んでくれ」

「なら……行くわよ、一誠！」

「おう！」

もうキミ達付き合っちゃえば？今のやり取りを見てそう思ったのは俺だけじゃないはず。

「先輩！俺が先輩と共に歩む資格があるかどうか、この戦いで見極めてください！」

むしろ今のキミのイケメンっぷりに俺がついて行きたいですよ！いや、マジであの短い間で彼に何があったの？

まあいいか。どちらにせよ、兵藤君もOHANASHIしないと引っ込んでくれそうにないし。ここはアル||ヴァンモードも合わせて発動させるしかないな。

「いいだろう。……来い、兵藤君！」

S I D E O U T

リアスS I D E

ついに赤き龍帝と白の龍皇が並び立った。二つの龍の力を宿した者達が立ち向かうは、絶対的な力を誇る気高き騎士。

それにしても、イツセー。リヨーマもだけど、あなたにも驚かされてばかりね。見せてもらうわ、あなたの「覚悟」を。それが、きつと私の「覚悟」にも繋がるはずだから。

——相棒。パワーアップしたのはいいが、その所為で禁手を保つ時間が食われた。残り五分を切ったが、何とか出来るか？

「そんだけありやあ充分だ！ 俺の全力を先輩に見せてやる！」

「一誠。力を奪えない私では、亮真の防御を突破する事は出来ない。でも、あなたの倍加なら、限界まで溜めればもしかしたら・・・」

「へへ、コカビエルの時と同じだな。よっしゃ、任せろ！ ヴァーリちゃんは時間を稼いでくれ！」

「了解」

リヨーマに対し、ヴァーリが三度目の攻撃をしかける。今度は接近戦は挑まず、遠距離からの魔力弾でリヨーマを攻める。無限に等しい魔力弾が四方八方から彼に襲い掛かった。

けれど、リヨーマはまるで気にしていないかの様に、背中から激しく炎を吹き出しながらヴァーリの元へ向かい始める。弾幕の中を駆け抜ける騎士は、その体にいくつもの魔力弾の直撃を受けているにも関わらず、その速度を緩める事は無かった。

その姿に私は思った。リヨーマの真の恐ろしさは、コカビエルを簡単に沈める攻撃力ではなく、むしろ、あれほどの攻撃を受けても全く意に介さない防御力の方ではないのかと。思い返せば、これまでリヨーマが戦ってきた相手は彼に掠り傷一つ負わせていなかった。果たして、この世界でリヨーマにダメージと呼べるものを与えられる者は存在するのだろうか。

「もう、ちよつとは痛がつてよね・・・！」

決して接近を許さず、ひたすらリヨーマから距離を取り続ける

んでいる。

「これは・・・凄まじいな。流石赤龍帝と言うべきか・・・」

「ふん、スケベ根性だけは立派で、実際は人間に毛が生えた程度のヤツだと思っていたが・・・少しだけ評価を上げてやる必要があるそうだな」

「なんとという魂の輝き・・・。あれが彼の『覚悟』という事ですか」

各陣営のトップがそれぞれ感心と驚きを込めた言葉を口にする。対象的に、私の眷属達は、この光景に圧倒されているのか、固まっている。

——相棒！ 準備完了だ！

「おっしやあ!! ヴァーリちゃん!! 後は俺に任せろお!!」

イツセーの指示を受け、ヴァーリが下がる。リョーマも、ここでもうやくイツセーを視界に捉えた。

「いきます、先輩！ これが・・・今の俺の全力だあああああああ!!!」

イツセーが腰を落とす。その状態のまま、両手を上下で合わせ、そこへ魔力球を生み出す。それは瞬く間に大きさを増していく。文字通り、自身の全てが込められたそれを、イツセーはついに解き放った。

「ドオオオオオオオラアアアアゴオオオオオンンンン・・・シヨツトオオオオオオオオ!!」

撃ったイツセーの五倍・・・いや、十倍はあろうかという巨大な魔力球が、地面を抉り、大気を震わせ、進行上のあらゆるものを破壊しながら一直線にリョーマに迫る。

「リョーマさん！」

アジアが叫んだ直後、リョーマが動いた。彼の背中から肩に向かって二つのユニットがせり上がると同時に、腹部に開いた穴に急速に緑色の光が収束していく。肩のユニットにも同様に光が集まり始める。

「・・・おい、サーゼクス。アレはやばいぞ」

「ああ、わかっている。みんな！ 衝撃に備えろ！」

お兄様の指示にみんながすぐさま地面に伏せる。その状態を保ち

つつ顔を上げた私の目の前で、リョーマはそれを発動させた。

「オルゴンキャノン・・・発射!!!」

魔力球に向かい、腹部と両肩から一斉に放たれた緑色のエネルギー波。互いが互いを呑み込まんとするかののように、二つの力が激しくぶつかり合う。その結果、校舎は跡形も無くなっていた。

凄まじい光と音が私を襲う。気を抜けば吹き飛ばされてしまいそうになるのを、必死で耐える。やがて、光と音が治まった時、そこには魔力球も緑色のエネルギーも何も残っていなかった。

「へ・・・へへ、これでも届かなかったか。やつぱ・・・先輩は凄・・・」
禁手が解け、イツセーがその場に崩れ落ちた。私達はすぐさま駆け寄った。

「イツセー! 大丈夫!?!」

——心配するな。疲れて気絶しただけだ。そつとしておいてやってくれ。

「そう・・・」

ドライグの言葉にホツとする。お疲れ様、イツセー。あなたの「覚悟」・・・確かに見せてもらったわ。私も、そんなあなたの『王』として相応しい器になる事を誓うわ。

「一誠は大丈夫なの?」

降りて来たヴァーリがイツセーの顔色をうかがう。

「ええ。疲れて気絶しただけみたいよ」

「そう・・・」

「それで、あなたはまだ続けるの?」

継戦の意思を確認すると、ヴァーリは小さく首を横に振った。

「流石に、アレを見た後で続ける気は起きないわ。勇気と無謀は違うもの」

「それはよかった」

元の姿に戻ったりリョーマがやって来た。あれだけの戦いを繰り広げたというのに、その顔に疲れは感じられなかった。

「完敗だわ、リョーマ。敗者は勝者に従うのがルール。さあ・・・私を

好きにすればいいわ。そう・・・エロ同人誌みたいに！」

好きねそのネタ・・・。リョーマも呆れたのか頭を抱えている。

「と、とにかく、戦いは終わりね。とりあえず、イッサーを保健室に・・・」

「いんやう。凄かったなあ。思わず仕事も忘れて見入っちゃまったぜい」

聞き覚えの無い声が私の言葉を遮った。その正体を探す為に視線を動かすと、そこには一人の男性が立っていた。

「あら、美侯じゃない。どうしたのよ？」

ヴァーリが親しげに声をかける。

「迎えに来たんだぜい？ 好き勝手遊ぶ時間は終わりだぜい。そろそろ北の田舎神族とやり合うから帰って来いとさ」

「あら、そうなの？ わかったわ」

「ちよ、ちよつとヴァーリ。誰よその人？」

「彼は美侯。闘戦勝仏の末裔よ」

「闘戦勝仏？」

「こう言った方がわかりやすいか？ こいつは孫悟空。西遊記に出て来るクソ猿だよ」

突然アザゼルが会話に割り込んで来た。補足として、実際には孫悟空の力を受け継いだ猿の妖怪なのだとか。けど、今はそれはあまり重要では無い。大事なのは、何故このタイミングで現れたのかという事だ。

「おいヴァーリ。お前こいつとつるんで何をやっている？」

「丁度いいわ、アザゼル。たった今から、私は『禍の団』の元へ向かうから。あなたとはここでお別れね」

「何だと!？」

突然の宣言に驚愕する私達に対し、ヴァーリがさらに続ける。

「私が求めるのは戦い。あなたの下にいるより、あっちにいた方がより多くの強者と出会えるでしょうからね」

「そういうわけさ。んじゃあ、お別れのあいさつも済んだ事だし。そろそろ・・・」

「・・・行かせない」

リヨーマがヴァーリの手を掴んだ。あまりの速さに誰も反応出来なかった。

「ヴァーリさん、行ってはいけない。キミはあんな場所にはいけないんだ」

「あら、私がどこで何をしようと、あなたには関係無いじゃない」

「関係はある」

「え・・・？」

リヨーマはヴァーリの目をしっかりと見つめながら続ける。

「大切な友人が間違った道を進もうとしている。ならば、それを止めるのが俺の役目だ」

「ッ・・・！」

初めて、ヴァーリの顔に動揺の色が浮かんだ。他者を寄せ付けず、一人での強さを求める彼女にとって、今の言葉は衝撃だったのかもしれない。

「でも・・・それでも私は・・・」

「ヴァーリさん？」

「美侯。お願い・・・！」

「あいあいさあ」

美侯が手にした混を地面に突き立てる。瞬間、地面に闇が出現し、それに捉われたヴァーリと美侯の体が沈み始めた。

「ヴァーリさん！」

掴まれた手を払い、ヴァーリが彼に告げる。

「さようなら、亮真。次に会う時は本当に敵同士ね」

そして、完全に闇に沈む直前、彼女の囁き声が私に届いた。

「・・・ごめんなさい。それと・・・ありがとう」

その言葉を最後に、ヴァーリと美侯の姿は私達の前から消えたのだった

リアスSIDE OUT

IN SIDE

ヴァーリさんが消えて行った地面をじつと見つめる。これで彼女にペロリスト属性が付いたら、止められなかった俺の所為になるのかな・・・。

「リョーマ。あなたなら力づくで止められたらと思うけど、何か考えがあるの？」

確かに、止めるだけなら力に訴えてもいいかもしれない。けど、それでは意味が無い。そんな事をすれば、彼女の性格からしてきつと反発を招いてしまう。おそらく、今止めたとしても、再び『禍の団』に行こうとするだろう。

ならば、俺に出来る事は、ひたすらに説得し、彼女自身の意思で『禍の団』を抜けてもらう事だけだ。

待ってろよ、ヴァーリさん。必ずキミの目を覚ましてみせるからな！

決意を新たにする俺の前で、たくさんの悪魔や堕天使、天使のみなさんが滅茶苦茶になった校庭や校舎の片付けを始めていた。そういえば、どーすんだこれ？ 修理費用とか俺も払うべきなのかな？

もしそうなら、何とか払える範囲で治まるように・・・！ そう願いつつ、俺は作業の様子を眺めるのだった。

第四十六話 騎士の願いと彼女の心

氣絶した兵藤君が目を覚ましたのは、ヴァーリさんが美侯と名乗った男性と共に消えてから三十分ぐらい経ってからだった。彼を含めて、俺達は改めて話し合いを行う事となった。校舎がぶっ壊れてる所為で、校庭の中心での話し合いとなってしまうた。ホント済みません。

けど、あの時、兵藤君がぶっ放して来たヤツには本気でビビった。あれって、以前の合宿で山一つ消し飛ばした技で間違い無いよな。流石に食らうわけにはいかなかったし、バリアも意味無いと思って、こっちもラフトクランズ唯一の内蔵武器だったオルゴンキャノンで何とか相殺を狙った。万が一の事を考えて出力を抑えて撃ったが、成功してよかった。

「アザゼル、彼女は・・・」

ヴァーリさんの事を言っているのだろう。サーゼクスさんから向けられた視線に、アザゼルさんも両手を振りながら答える。

「まあ、ある意味必然とも言えるか。アイツは露出狂でDMだが、それ以上に力を追い求める女だったからな。言われた時は驚いたが、時間が経った今なら納得出来るってもんだ」

『白龍皇』が『禍の団』にか・・・厄介だな」

「そうか？ 案外、すぐにでも離反しそうだけだな」

「何故そう思うのですか、アザゼル？」

「なに、少々変わってはいるが、アイツも女って事だ」

アザゼルさんが意味深な視線を送って来る。そこには期待のようなものが見えられている気がした。

「ああそうだ。おい、赤龍帝」

「いいかげんその呼び方止めてくれ。俺には兵藤一誠っていうちゃんとした名前があるんだ」

「なら兵藤一誠。正直、お前の実力はまだまだだ。未熟な者が相手であればいいが、格上の者や、『赤龍帝の籠手』の能力を把握している者が相手からすれば御しやすいものだ」

「わかってる。俺は・・・」

「それを指摘した上で言わせてもらう。・・・兵藤一誠。お前の見せた『覚悟』を俺は認める。それを抱き続ける限り、お前はどこまでも強くなれるはずだ」

「・・・え？」

アザゼルさんの評価に、兵藤君が呆けた顔を見せる。あれは、まさか褒められるとは思わなかったといった感じの顔だ。

「アザゼルの言う通りだ。イツセー君。キミは正に『赤龍帝』の力を振るうに相応しい男だ。今後も期待しているよ」

「これからも努力なさい。いつか、彼の隣に立てる事を祈っておきますね」

「え、あ、その・・・」

サーゼクスさんとミカエルさんにも褒められて、兵藤君が完全に固まってしまった。そりゃあ、あんな凄い人達から褒められたらそうなるよな。

「イツセー。あなたはそれだけのものを見せたのよ。もつと胸を張りなさい」

「カツコよかったですわよ、イツセー君」

「・・・ちよつと見直しました」

「僕の目標が一つ増えたよ」

「私も、イツセーさんみたいに弱い自分を変えたいです」

「見事だった。・・・私にはそれ以上の言葉が見つからない」

「ぼ、僕も、立ち向かう大切さを学んだ気がします」

「俺は・・・」

リアス達からも称賛され、兵藤君は自分の手を見つめながら小刻みに震えている。あれかな。嬉しくてしょうがないからか？

そこへ、リアスがそつと耳打ちして来た。

「リョーマ。あなたからも何か言っておいて。きっと、あなたの言葉を一番に待ってるはずだわ」

俺みたいな覚悟もクソも無い人間の言葉なんてむしろ失礼じゃない？ でも、なんか兵藤君も期待してる感じだし。ならばここは最大

限の敬意を持って言わせてもらおう。

「兵藤君。キミは本当に強くなった。これからも、お互いに色々助け合っていていける事を願うよ」

「ツ……！ お、俺なんかが、先輩の助けになるでしょうか？」

「もちろん。頼りにさせてもらうぞ」

「は、はい！ 俺の方こそ、よろしく願います！」

爽やかさと力強さの混じったイケメンスマイルを向けて来る兵藤君。眩しい！ 目が！ 目があああああ！

「んふふ♪ フューリーさんと二天龍の戦い。これは凄い物が撮れちゃったな」

「セラフォル。わかっているとは思いますが……」

「もつちろん。DVDに焼いてあげるからね」

「そりゃいいな。おい、セラフォル。ウチにも何枚か寄越してくれよ。連中が喜ぶぜ」

「私にも分けて頂きたいのですが……下手したら墮天する者が増えてしまいそうですね」

「ミカエル様。何故私を見るのです？」

お供の女天使さんを見つめるミカエル様。それに対し、怪訝な表情を返す女天使さんに、ミカエルさんが柔らかな笑みを浮かべる。

「いいえ、他意はありませんよ」

「OK！ 出来たらそれぞれの所に送ってあげるから、楽しみにしててね」

「その前に、カテレアには事情聴取をさせてもらいたいんだけどな」

「何ですって!?! サージェクス、あなた私とフューリー様を引き離すつもりですか!?!」

怒りの形相で詰め寄るカテレアさんに、サージェクスさんもやや圧倒されながら答える。

「望んで入ったわけでは無いとはいえ、キミが『旧魔王派』だったのは事実だ。疑いを晴らす為にも改めて話を聞かせてもらえれば助かる」

「ですが……」

「……それで容疑が晴れば、大手を振って神崎君と出会えるよう私

がとりなす事を約束しよう」

「何でもお答えします!」

サーゼクスさんが耳打ちした途端、カテレアさんが急に事情聴取に乗り気になってしまった。一体、何を伝えたのだろうか……。
「と、ところで、さつきから気になってたんですけど、そのEr…セクシーなお姉さんは誰なんですか?」

あ、そっか。ブラディ君を助けに行った兵藤君や、停止していた子達からしたら、カテレアさんって初めて見る人か。

「彼女はカテレア・レヴィアタン。旧レヴィアタンの血を引く悪魔だ」
「ついでに、フューリーにイカれて色々残念になっちゃった女でもある」

「失礼ですね、アザゼル。私のフューリー様に対する想いは純粹なんですよ」

「はっ! 自家発電のネタにしたのに純粹とかよく言うぜ!」

「うええ!?! そ、それって…」

「イツセー君。それ以上は駄目だと前に念押ししたよね?」

木場君が恐ろしいほどの無表情で兵藤君の肩を掴む。怖い! なんか知らんが怖いよ!

「リヨーマ…あなたって本当に…」

リアスはリアスでジト目で睨んで来る…あれ、朱乃にアーシア、それに塔城さんまで一緒だ。止めてよ、それもちよつと怖いんだから。

その視線に気付かないフリをしながら、サーゼクスさん達のやりとりを黙って眺め続ける。すると、今度はいつの間にか俺の話になっていた。

「神崎君。今回もキミには非常に助けられた。そこでだ、お礼に、私達が出来る範囲での願いを聞いてあげようと思うのだが。何がいいかな?」

まさかのご褒美に面食らう俺。いやだって、俺はただ自分の感情に任せてペロリスト共をぶちのめしたただけだ。いわば俺の都合で暴れただけ。それなのにお礼なんてもらうわけにはいかないだろ。

「いえ、俺はそんなつもりでは・・・」

「んな事は百も承知だ。でも、それじゃ俺達の気が済まねえんだよ」
「アザゼルの言う通りです。そもそも、かつて我ら三陣営を救ってくれた英雄に何もお返し出来ていない事がおかしいのです。遠慮せず
に言つてください。お望みなら、赤龍帝殿に贈ったアスカロン以上の
剣を差し上げますよ」

ミカエルさんの主張はとてもありがたいんだけどなあ。正直、現状
で満足な生活が送れてるし、これ以上望む事なんて・・・。

『——私は、今の生活で充分幸せだから・・・』

あるじゃん、俺。そうだ。何よりも望む事があつたじゃないか！

彼女を・・・今も苦しんでいる彼女を解放する事が、俺の望みだ！

「・・・俺の望みはただ一つ。黒歌の事だけです」

S I D E O U T

小猫S I D E

三陣営のトップからの直々の褒美。望むなら、それこそ手に入らな
い物なんて存在しないと思う。

「・・・俺の望みはただ一つ。黒歌の事だけです」

なのに・・・それなのに・・・神崎先輩はそう言った。富でも名声
でも力でも無い。あの人の・・・姉様の事を。

「黒歌？ どうしてはぐれである彼女の名前が・・・いや、待てよ。
そう言えば、先程会議室で見た映像に一瞬だけ彼女が映っていた気
が・・・」

サーゼクス様のおっしゃる通り、さつき見たビデオには神崎先輩に
よって回復された姉様の姿が映っていた。

「今、黒歌は俺の家で生活しています」

「どういう事だ？ 何故キミと黒歌が・・・？」

腑に落ちない様子のサーゼクス様に、神崎先輩が姉様との出会いを
話した。私はすでに聞いていたけど、改めて思う。姉様が汚されなく
て本当によかった。そして、姉様を助けてくれた神崎先輩には心から
感謝を。

「サーゼクスさんは黒歌が過去に何をしたのかはご存知だと思います。指名手配までされているみたいですからね。俺も彼女の口から聞きました。それを踏まえた上でお願いします。彼女の罪の帳消し。もしくは罪の軽減は出来ないでしょうか？」

それを聞いて私は確信した。先輩、あなたはあの日の・・・プールから帰って来てからの姉様との約束を果たすつもりなんですね。あの時、私も聞いてたんですよ。あなたが、姉様の事をサーゼクス様にお問い合わせするつもりだった事を。その時はとても驚いて、とても嬉しくてちよつと泣いちゃいました。先輩が、そこまで姉様の事を大切に思ってくれている事が。

「だが、彼女の犯した主殺しは・・・」

「それも聞きました。そして、その裏にあつた真実も」

「真実？」

「塔城さん。話してもいいかな？」

こんな時にでも私を気遣ってくれる先輩。それが少し・・・ううん、とても嬉しかった。だから私は、迷う事無く首を縦に振った。

私の了解を得て、先輩は姉様が主殺しをした本当の理由を話した。それを聞いたサーゼクス様の表情が変わる。

「・・・そうか。あの事件の背景にそんな事が」

「黒歌は塔城さんを守る為に罪を犯した。それは変わりようの無い事実です。ですが、たった一人の肉親を守る為にやってしまった事を、悪」と断定するのはあまりにも悲し過ぎはしませんか？」

感情に訴えるかのような先輩の口調に、サーゼクス様の瞳が揺れる。そこへ、アザゼル・・・様が、からかうように先輩に尋ねた。

「フューリー。もしもサーゼクスが許さなかったら、お前はどのようなつもりだ？」

「そうですね。黒歌が俺の所へいると知られてしまったわけですし・・・彼女を連れて逃げましょうか」

「そりゃいい！ そうなったら俺の所に来いよ。お前の力の研究もしたいし、歓迎するぜ」

楽しそうに笑うアザゼル様。もし本当にそうなったら、先輩に守つ

てもらえる姉様はきつと大丈夫。でも、それだと、私の前から姉様と先輩がいなくなってしまう事になる。それは……それだけは嫌だ。私はずも、姉様と離れたくない。神崎先輩だって……その、優しくて、頼りになる素晴らしい人だし、これでお別れなんて寂しい。うん、そう、それだけ。他意なんて無い。

「アザゼル。さりげなく神崎君を勧誘するのは止めてくれ」

「それはお前の選択次第だぜ。フューリーが留まるか、それとも、俺の所に来るか」

それが止めの一言だった。サーゼクス様は小さく溜息を吐かれると、神崎先輩に向かって口を開いた。

「……わかったよ。キミの願いを叶えよう。今この場で、黒歌の罪を不問とする事を誓おう」

ツ……！ や、やった。やりましたよ姉様！ 神崎先輩がやつてくれました！ これで、これで姉様も……！

「ど、どうしたんだ、小猫ちゃん!？」

イツセー先輩が私を見て驚いている。その顔と、頬を流れる熱い物に、私はようやく自分が涙を流している事に気付いた。

「……何でもありません」

「で、でも、泣いて……」

「いいんです。これは悲しくて泣いているんじゃないですから」

むしろ逆。私は今とても嬉しくて、とても幸せなんです。あの人の、先輩のおかげで……。

涙を拭う私を、先輩はいつものように優しい笑顔を向けてくれた。

トクン……！

あ……まただ。またあの不思議な感覚だ。コカビエルとの戦いの最中にも抱いた、表現出来ない不可解な感情。だけど、嫌じゃない。むしろ、どこか幸せな気持ちになって来る。

神崎先輩に対するその気持ちが一体何を表しているのか。今からちよつとだけ遠い未来に、私はとても恥ずかしい目に遭わされる事だと思ひ知らされる事となるのだった。

第四十七話 もう一つのプレゼント

俺の願い通り、サーゼクスさんは黒歌の罪を許してくれた。よくて減刑くらいだと思ってたけど、まさか罪自体を無くしてくれるなんて、流石魔王様はスケールが違うぜ。

塔城さんも喜んでくれたかな。そう思って彼女の方を向くと、プイッと顔を背けられてしまった。あら、思ってた反応と違う……。そんなでもって、片付けもだいぶ済んだという事で、この場は一度解散しようという流れになった。

「では、私は一度天界に戻り、今回結ばれた和平と『禍の団』についての対策を考える事にします」
「すまない、ミカエル。こんな騒ぎに巻き込んでしまつて。この場を会場にした私達の失態だ」

「とんでもない。これで無益な争いが少しでも減るでしょうし、それだけで私としては嬉しいのですよ?」

「それをブチ壊そうとしているのが『禍の団』ってわけだ。わざわざ会談の場にまで現れたんだ。連中の動きも慌ただしくなるだろうよ」
「そうだな。今後は我らの連携が重要となる。また近い内に話をしよう」

「ああ、そうだ。ちよつと待てミカエル。行く前にお前も聞いていけ」
「何をですか?」

アザゼルさんが笑みの中に真剣さを混ぜて聞いて来た。

「フューリー。最後にもう一度聞かせてくれ。お前はどの勢力につき気も無いんだな? あくまでも、お前の言う友人とやらの為だけに動くを受け取っていいんだよな?」

「はい」

俺の答えに、アザゼルさんは満足そうに頷いた。

「よし、それだけ聞ければ充分だ。サーゼクス、ミカエル、お前達も聞いたな? 今後こいつとどう接するかは勝手だが、他の勢力まで巻き込むなよ」

「私達天界は、今後もフューリー殿と仲良くしていきたいと思ってい

ますよ」

「私達悪魔側も同じ気持ちだ。あとそのセリフ、そっくりそのままお返しするよ。この中で、一番失礼な事をしでかしそうなのはアザゼルだからな」

「へ、言ってる。あとミカエル。ヴァルハラと須弥山の連中にも説明しとけよ。下手にオーデインとかに動かれても困るからな」

「お任せください。神への報告は慣れていきますからね」

そう言い残し、ミカエルさんは女天使さんや他の天使のみなさんと一緒に飛んで行った。最初から最後まで優しそうな人だったな。またいつか会える時が来ればいいけど……。

「さてと、俺も部下達にしつかり言い聞かせておかないとな」

続いて、アザゼルさんが墮天使のみなさんに向かって威厳たつぷりの声で言い放った。

「いいか！ 和平という道を歩み始めた以上、墮天使は今後悪魔とも天使とも争わない！ 不服なヤツは今この場で去れ！ 最も、次に会う時は容赦無く殺すがな！ それをふまえた上で、俺について来たいヤツだけついて来い！」

『我が命、アザゼル総督の御為に！』

「……ありがとよ、お前ら」

やべえ……この人、カリスMAXじゃないですか！ 今の眩く様な感謝の言葉もカッコ良かったし。レイナーレさんがこの人に惚れてしまった理由を思い知った気がする。

「よし、それじゃ俺はそろそろ帰る。お前らもさっさと帰りな」

アザゼルさんの指示で、墮天使のみなさんが魔法陣を展開させて次々と姿を消していった。ついさっきまであれだけの天使や墮天使がいたのに、今では俺とアーシア。リアスとオカルト部の面々に支取さん。サーゼクスさんとグレイファイアさん。セラフオルーさんとカテレアさん。そして、悪魔のみなさんだけだった。

墮天使で唯一残ったアザゼルさんが背伸びしながら校門に向かって歩き始める。

「サーゼクス、後始末は任せた」

「これからどうする気だ？」

「聞いてなかったのかよ。疲れたから帰るんだよ。そんじや、フューリー、兵藤一誠、”また”な」

そう言つて、今度こそアザゼルさんは去つて行つた。最後の”また”にやけに含みがあつた気がしたが・・・。

「やれやれ、相変わらず勝手なんだから。まあいい。それでは私達もそろそろ・・・」

「サーゼクス様。その前に、神崎様にアレをお渡ししなくてよろしいのですか？」

「アレ？」

何の事かと首を傾げる俺と、思い出したように手を叩くサーゼクスさん。

「おっと、そうだった。グレイファイア、頼むよ」

「かしこまりました」

グレイファイアさんが俺に向かって一歩進む。そして、いかにも高価そうな黒い箱を差し出して来た。

「どうぞ、開けてみてください」

グレイファイアさんに言われるままに箱を開け、中を覗き込む。そこには見憶えのある黒いチェスの駒が収められていた。間違い無い、これは・・・。

『『悪魔の駒』？』

「その通り。先程の願いは私・・・魔王として、悪魔の代表としてのキミへのお礼だ。そしてこの『悪魔の駒』は、僕・・・サーゼクス個人からキミへの贈り物だ」

そう言いながらイケメンスマイルを見せるサーゼクスさん。

「全ての眷属を揃えるか。一つも使う事無く引き出しの奥に仕舞うのかはキミの自由だ。ここで誤解して欲しく無いのだが、これを贈る事でキミを悪魔側に引き込もう等とは思っていない。ただ将来、キミとキミの眷属によるレーティングゲームを特等席で観戦する事が僕の夢でもある事は憶えておいて欲しい」

期待してもらつて申し訳無いんですけど、リアスみたいな『王』と

しての誇りも無い俺の眷属になつてくれる物好きな悪魔さんなんているわけないと思いますよ。万に一つの可能性で、黒歌ならなつてくれる可能性もあるだろうけど、なんか恩に着せるみたいで嫌だし。

「フューリー様！ も、もしよろしければ、この私を貴方様の眷属に……！」

「はいはい。カテレアちゃんはとりあえず冥界に帰りましょうねー」

「な、何をするのだー!? 離してくださいセラフォルー！」

「サーゼクスちゃん。ひとまず、私はカテレアちゃんを連れて先に帰るね」

「頼む。彼女がいると話が進まない……」

「わ、私は諦めません！ 帰って来ます！ 私は必ず帰って来ますからねええええええ……！」

セラフォルーさんとカテレアさんが魔法陣の向こうへ消えて行く。とりあえず、眷属候補が一人出来た事を喜ぶべきなのか？

「よ、よかったですね、先輩。あんな綺麗でスタイルもいいお姉さんが眷属候補になつてくれて。羨ましいツスよ」

嘘だよな？ キミ、羨ましいとか思つてないよね？ だつて顔が引き攣つてるもん。兵藤君ですらこの反応で……。カテレアさん、あの意味深い女性だな。

「ですが、真面目な話。これはとても名誉な事ですよ、先輩。魔王様から直々に『悪魔の駒』を授けて頂けるなんて」

木場君が俺の持つ箱に目を向けながらそう告げる。確かに、言われてみれば凄い事だよな。俺みたいな騎士（笑）がこんな物もらつていいのかな。

「リアス。これは由々しき事態よ。もしも、神崎君が『悪魔の駒』を手に入れたなんて事が冥界に広がったら……」

「当然、自らを眷属にという悪魔が殺到するでしょうね」

「ええ。しかも、おそらくその七割以上が女性悪魔……」

「……想像しただけで頭が痛くなるわね。もう、お兄様ったら余計な物をー！」

「実はそれを狙つてたりして」

「お兄様！」

「じ、冗談だよーア。だからその振り上げた拳を下ろしごはっ!?」

「・・・代わりにお仕置きしておきました」

「GJよグレイファイア」

相変わらず、グレイファイアさんの鉄拳の凄まじさには恐れ入る。そしてサーゼクスさん、前回の反省が活かされてませんね。彼女の前で余計な事言わない方がいいですって。

「は、ははは、グレイファイアの愛が重げふっ!?!」

無言で二撃目を叩きこむグレイファイアさん。しかし俺は見逃さない。彼女の頬が僅かに赤くなっている事を！拳で愛を確かめ合うって、中々にぶっ飛んでるなあ。

「で、では、キミ達もそろそろ帰りなさい。僕達はアザゼルの言う後始末をやらないといけないからね」

何とも締まらない最後だったが、こうして三陣営のトップによる会谈は幕を閉じた。その後、俺達はそれぞれの家に帰宅したのだが・・・
「何でしれっとなついて来てるのよ、朱乃」

どういうわけか、朱乃まで俺達の家に来て来た。リアスの間に、彼女はにこやかに答える。

「だって、この時間に一人で家になんて怖くて帰れませんわ。だから、ここは神崎君のお家に泊めてもらおうと思っ」

あら、呼び方が名字に戻ってる。・・・ははーん。みんなの前だと恥ずかしいんですな？それなら、俺もみんなの前では姫島さんって呼んだ方がいいかな。

「あなたなら余裕で返り討ちに出来るでしょうに」

「うう、神崎君、リアスが酷いですわ。あなたならそんな事言わずに泊めてくださいますよね？」

「別に構わないが、キミが寝る部屋が・・・」

「でしたら、神崎君のお部屋で構いませんわよ」

なるほど、彼女を俺の部屋に寝かせて、俺はリビングのソファアーでも寝ればいいのか。

「なら、それで・・・」

「駄目に決まってるでしょ！」

リアス達に猛反発された。俺としてはいいアイディアだと思ったんだけど。

「お帰り、ご主人様。．．．にや？ 一人増えてる」

「ただいま、黒歌。夜も遅いから、彼女は今日ここに泊まってもらう事になった」

「ふくん。わかったにや。とりあえず、玄関で騒いでないで入るにや」
「そうだな」

言い争うリアスと朱乃をなだめ、俺達は家の中に入った。

第五章 冥界合宿のヘルキヤット

第四十八話 あなたがもらったのは『悪魔の駒』ですか？それとも……

トップ会談、ペロリストの襲来、そしてヴァーリさんの離脱。様々なイベントてんこ盛りだったあの日から二週間が経った。あれだけの事があったのだから、しばらくは事件も無いだろう……と思っていた時期が俺にもありました。

実際は、この二週間の間で大小様々な出来事があった。とりあえず、一つ一つ振り返ってみよう。

まず一つ目。カリスMAXこと、アザゼルさんが駒王学園に再びやって来た。しかも、オカルト部の顧問としてだ。堕天使のトップの方が顧問なんて凄い事だと思うが、何故？ という疑問と戸惑いの方が大きかった。

「つーわけで、オカルト部の顧問となったアザゼルだ。俺の名を呼ぶ時は先生をつけるよ。もしくは総督でもいいぜ」

「いやいやいや！ それ以前に何でアンタがここにいるんだよ!?!」

兵藤君が全員の思いを代弁する。

「元々ここには滞在する予定だったんだよ。喜べ兵藤一誠。お前や『僧侶』の小僧を俺が直々に世話してやる。制御出来ない神器を見るのは許せないんでな」

「それと、あなたが顧問となる事に何の関係があるのかしら?」

「文句ならセラフオルーの妹に言え。俺にこの役職を与えたのはあの娘だからな。まあ、俺は知的でイケメンだからな。ついでに女生徒も食いまくってやるさ。とりあえず、まずはここに来る前に見かけた眼鏡の超巨乳のねーちゃんでも……」

それって、もしかして山田先生の事か？ あの人押しに弱いから、アザゼルさんみたいにワイルドな男性に迫られたら大変だろうな。まあ、アザゼルさんもまさか、本気で女の子達に手は出さないだろう。今のはきつと場を和ますための彼なりの冗談みたいなヤツなんだろう

うな。

なので、俺も冗談めかして、「山田先生に手を出したら、穴ブチ抜きます」などと言ってみたら、アザゼルさんは途端に押し黙ってしまっただ。しかも、心なしか額に汗まで滲ませてるし。そんなもって、リアス達もちよつと引いてた。うーん、穴ブチ抜くはちよつと下品だったかなあ？

微妙な空気の中、アザゼルさんが再び説明を始めた。何でも、彼がここに滞在するための条件として、リアスの眷属達・・・兵藤君や木場君が持つ神器を成長させる役割を頼まれたそうさ。あのペロリストこと『禍の団』に対する抑止力にするつもりだそうさ。

「これはお前達の為だけじゃない。フューリー、お前にも関係のある話だ」

「え？」

「ヴァーリも言っていただろう。フューリーの『友人』であるお前達の事は『禍の団』にも知られただろうし、連中がフューリーの無力化の為にお前達を狙ってくる可能性もある。そうならない為にも、お前達には速やかに実力をつけてもらわなくては困るんだよ」

みんな神妙な顔してますけど、俺は初耳ですよ？ あの時、兵藤君とヴァーリさんが何か話してたのは知ってるけど、二人から離れ過ぎてて何話してるか聞こえなかったんだよな。

「兵藤一誠は、あの戦いで『覚悟』を見せた。リアス・グレモリー。お前達はどうか？」

「わかってるわ。私達はリョーマに頼り過ぎていた。だけどそれだけじゃ、守られるだけじゃ駄目なのよ。私達では彼の強さに届かないかもしれない。なら、せめて足手纏いにならないくらいには強くならないと」

「・・・なるほど。一応お前らにも『覚悟』はあると受け取らせてもらうぜ。『禍の団』との本格的な戦いは当分先の話になるだろう。その間に、精々強くなる事だ」

リアス達は、いつかペロリスト共と戦わないといけないのか・・・。その時は、俺も力を貸さないとな。俺は悪魔でも天使でも墮天使でも

ないけれど、連中の存在を許してはいけな事だけは充分理解しているつもりだ。

「まあ何にせよ、これからよろしく頼むぜ、お前ら」

こうして、アザゼルさんもとい、アザゼル先生が俺達の日常に加わったのだった。

二つ目の出来事は、黒歌の立場についてだ。会談の翌日の夜、全員がリビングに揃った所で、俺は黒歌にサーゼクスさんと交わした約束を伝えた。

その時の黒歌の喜びようと来たら……。最初は何を言われたのか理解出来なかったのかポカンとしてたが、時間が経つにつれてその顔が戸惑いに変わり、最終的には号泣しながら笑顔を見せるという離れ業を見せてくれた。

ついでにこれでもかというくらいの感謝の言葉と共に思いっきり抱きつかれました。正直、煩惱を追い出すのに必死だったから内容自体は憶えて無いけど。彼女はいつも喜びや悲しみを体で表現するけど、やられる方はたまったもんじゃない。アルⅡヴァン先生じゃなかったら間違い無く理性が崩壊してただろう。

その二日後、リアスに連れられて黒歌は冥界へ向かった。サーゼクスさんと直接話す事になったらしい。んで、そのまた二日後に、彼女は帰って来た。

「ご主人様！ これで私も自由になったにや！ これで、今日からは堂々とこの姿でご主人様と一緒ににお出掛け出来るにや！」

誰に見られているかわからないからと、黒歌と一緒に出かける時は、いつも猫の姿の彼女を肩に乗せていた。おかげで、近所の方々に『猫のお兄さん』なんて呼ばれるようになってしまったが、それも今日で終わりだ！

「まずは、これまでの分を取り返すために一杯デートするにや。そして、いい雰囲気になった所で、ホテルに……。にゅふふ、猫の姿であちこち歩いてたから場所はすっかり頭に入ってるにや」

何やらブツブツと呟く黒歌。小さくて聞き取れないが、きつと、今まで不自由な生活をしてたから、やりたい事がたくさんあり過ぎて何

から手をつけていいのか悩んじゃってるんだろうな。はは、中々可愛らしい所があるじゃないか。ただ、その後でなんかギラギラした目で俺を見つめて来たのはちよつと怖かったけど……。

そんなでもって三つ目の出来事。丁度一週間前だった。学校から帰ったら家がでつかなくなってた。二階建てだったはずなのに、どう見ても三階建てになってた。

最初見た時は当然混乱した。ひよつとして帰り道間違えた？ なんて思ったりもした。現に一緒に帰って来たアーシアも「あ、あれ？ 道、間違えちゃいました？」とか言ってた。

戸惑いつつ、インターホンを鳴らすと、少ししてドアが開き、黒歌が顔を見せた。

「はい。あ、お帰りにやさしい。ご主人様、アーシア。さき、中に入るにや」

言われるままに玄関で靴を脱ぎ、リビングに向かう。そこで黒歌から説明を受けた。以前、部屋の数が足りないという悩みにリアスが一肌脱ぐと言っていたが、今日、俺達が学校に行っている間に、冥界から来たという業者のみなさんがササつと増築したんだとか。

そんな短時間で増築って出来るもんなの？ けど、外から見た分には決して手抜き工事な感じじゃ無かったし。ここは「冥界の技術つてすげー！」という事で納得しておこう。

その後、帰って来たリアスと塔城さんを加えて、改めて増築の事について話し合った。今回の増築で出来た三階には部屋が五つあるんだとか。おかしいよね。塔城さんの部屋だけでいいはずだよな？ 無駄になるんじゃないの？

そう言ったら、リアスに溜息を吐かれてしまった。しかも、「どうせ、すぐに満室になるわよ」とか言われてしまった。ウチってホテルじゃないんですけど……。

アーシア達はアーシア達で、「ああ……」とか妙に納得してるし。もうわけがわからないよ。誰か、俺でもわかるように説明してください！

「必要なら、これからもその都度増築するわ。精々、これ以上増えない

様に自重してね、リョーマ」

え、俺の所為なの!?

夕食の準備に入るリアス達が動きだす中、ポツンとその場に残された俺は一人小さく呟いた。

「・・・解せぬ」

これが三つ目に起こった事だった。そして四つ目、これが最後の出来事だ。眠っていたオカンがついに目覚めた。一昨日、寝ようとした時に、久しぶりにあの声が頭の中に入って来たのだ。

『いんや〜、久しぶりやなく〜! おかげで元気百倍やで!』

声でわかる。どうやら絶好調のようだ。そっか、あれからもう一ヶ月が経ったのか。月日が流れるのは早いねえ。・・・今の年寄り臭かったか?

『ウチが寝とる間にも色々大変やったみたいやなく』

ええまあ、確かに色々ありましたよ。俺はオカンにこの一ヶ月の事を話した。その中でオカンが興味を持ったのは、サーゼクスさんからもらった『悪魔の駒』だった。

『ふくん。それが『悪魔の駒』かあ。・・・で、それどうすんの?』

机の上に駒を並べると、オカンがそんな事を聞いて来た。

「どうだろうな。そもそも、俺自身には使えないみたいだしな」

『そらそうやで。悪魔つて光に弱いんやろ? アンタの体にマイナスになるのわかつとるのに、受け付けるわけないやん』

この体、そんな機能まで付いてんの? 自分の事ながら恐ろしいんですけど。

「だが、せっかく貰った物を腐らせるのも申し訳無い気がするかな」

『ん〜? そういう事なら、ウチが何とかしようか?』

「何をやる気だ?」

『休んで溜まったパワーを使うええ機会や。ウチに任せとき』

頭の中に、「ふんっ」とか「はあっ」とかいう気合いが入った声が響いたと思ったら、『悪魔の駒』が急に光り始めた。ちよ、今度は何やらかしたんですかオカン!?

『・・・よし、出来たで!』

「今の一瞬で何を・・・?」

満足気なオカンに早速問い質す。

『ちよつと弄らせてもらっただけや。得られる特性や恩恵をそのままに、悪魔になる機能だけ除去させてもらった』

「つまり、この駒を使っても、人間のままでいられると?」

『その通りや。種族は変わらん。もちろん、元々悪魔の子にも使えるから安心し。ウチの加護もたっぷり込めてあるから、きつと気に入ってもらえると思うで』

「ごめんなさい、サーゼクスさん。せつかく頂いた物ですが、オカンが魔改造した所為でもう、『悪魔の駒』とは呼べません。オカンの手で生まれ変わったこの駒達。あえて名づけるなら・・・『オカンの駒』だろうか。うわ、効果は凄いのの名前だけ聞くとヒドイ!

ところで、オカンの加護って何だろう・・・。聞きたい様な、聞きたくない様な、何とも反応に困ってしまうじゃないか。

『あ、そうそう。『王』の駒だけは、アンタにしか使えんからな』

「何故?」

『それはアンタにこそ相応しい駒やからや。正しき願いや想いを抱き、力を欲したなら、その時、駒はアンタに新たな力を与えてくれるはずや』

何でこれだけパワーアップアイテムみたいな感じになつてんの?

てか、これ以上力なんて必要無・・・いや、待てよ。パワーインフレが代名詞なこの世界で力をつけておく事に越した事は無いか・・・。

『ほな、ウチはそろそろ失礼するな。これからあの子達とご飯やねん』

あの子達って・・・。いつの間に子持ちに!? いや、オカンだからいいのか・・・。

「正しき願いや想いを抱く時、新たな力が授けられる・・・か」

果たして、そんな時が本当に訪れるのだろうか。オカンの声が聞こえなくなった後、俺は手に持った『王』の駒をジッと見つめた。

さて、以上がこの二週間で起こった出来事だ。あと数日もすれば夏休みに入る。何故だろう。何だかまた騒ぎに巻き込まれそうな気がしてならないんだけど・・・。

「今から気にしても仕方が無いか・・・」

そうだ、ポジティブにしよう！ 一応、高校生活最後の夏休みじゃないか！ いい思い出を作ろう！

期待と不安を抱きつつ、俺は部屋の電気を消し、ベッドに横になるのだった。

第四十九話 サプライズだからってやり過ぎたら駄目でしょうが

ついに終業式を迎えた。明日から夏休みという事で、教室内は色めき立っていた。みんな、口々に自分の予定を話したり、友達に聞いたりにしている。それ自体は別に問題無いと思うけど、三年の夏休みつて、受験の為に勉強するのも大事だと思うよ？ 前世の俺も、最後の夏休みはほとんど勉強してた記憶がある。

べ、別に、友達がいなかったとかいうわけじゃないんだからね！ただ、志望校に対して俺の偏差値がヤバ過ぎたから必死こいて勉強してただけなんだからね！

朝のSHR終了後、俺達はすぐに体育館に移動した。そこで、夏休み中も学生らしい行動をく等といったありがたいお言葉をこれでもかと頂き、終業式は幕を閉じた。

「それじゃ、みんな、怪我や病気だけには気をつけてな。以上、解散」
先生がそう言い終わった途端、一斉に教室を出て行くクラスメイト達。それを見送り、俺もゆつくり席を立った。さて、これからどうするかな……。

支取さんに話す事があると言うリアスと朱乃と別れ、俺は一人玄関へと向かっていたが、その途中で山田先生と遭遇した。

「あ、神崎君。これから帰るんですか？」

「ええ」

「そうですか。夏休み、楽しんでくださいね。でも、勉強も疎かにしたら駄目ですからね？」

「はい、気をつけます。そういう山田先生は、何かご予定はあるんですか？」

「夏休みはあくまでもあなた達生徒のみなさんのお休みですから、私達教師は仕事があるんですよ。でも五日間だけお休みを頂けたんで、それを使って先輩と小旅行に行く事になりました」

「その先輩というのは、以前話していた人ですか？」

「そうですよ。急に「私より強い男（ヤツ）に会いに行く」とか言い出して、なんか一人にするのが不安になっちゃったからついて行く事にしたんです」

それなんてストリートファイター？ その人、出席簿アタックだけじゃなくて、手から気弾とか衝撃波とか出したりしないよね？

「・・・大丈夫なんですか？」

「一応、先輩の弟さんも心配だから一緒に来る事になってますから、無茶はしないと思うんですけど・・・」

なぬ!?! 可愛い年上女性と旅行だ?!? おのれ、羨ましいぞ弟君!

・・・あ、でもストリートファイターなお姉さんも一緒か。そっか、うん、頑張れ・・・。

「神崎君はどこか行かないんですか？ ほら、彼女とデートとか」

「生憎、そう呼べる相手がいないので」

「え!?! そ、そうなんですか!?!」

先生、俺に彼女がいないのがそんなに意外ですか。つか、何でみんな彼女がいて当然・・・みたいな感じに言うんですかね。

「そっか・・・。うん、そうなんですわね・・・」

・・・何でちよつと嬉しそうなんですわ先生。あなた、人の不幸を笑う様なキャラじゃないでしょうが。

いいさ、別に今すぐ彼女が欲しいわけじゃないし。・・・今「負け惜しみ乙」とか思ったヤツ表出る。存分に拳で語り合おうじゃないか。

「先生、何か？」

「ふえっ!?! い、いえ、何でもありませんよ！ そ、それじゃ、私はそろそろ行きますわね！ 神崎君、いい夏休みを！」

慌てた様子で立ち去って行く山田先生。後ろからビターン！ という音がすると共に「きやわっ!?!」とか「ひやあつ、スカートが!?!」とか聞こえてくるが、決して振り返りはしない。何故なら、俺は紳士だから。この場面では手を差し出すのではなく、あえてスルーするのが正解のはずだ。

「・・・行くか」

山田先生と別れ、俺は再び玄関へ向かって歩き始めるのだった。

．．．．．
．．．．．
．．．．．

玄関でアーシアと塔城さんに会ったが、アーシアは友達と遊びに行くらしく、塔城さんは買い物してから帰ると言ってそれぞれ去って行った。なので、俺は一人帰り道を歩いていた。最近では登下校はずっと誰かと一緒だったから、こうして一人で下校するのは久しぶりだ。「少し、寄り道でもするか」

どうも真つ直ぐ家に帰る気が湧かなかったので、特に目的も無く公園に立ち寄った。はしゃぎ回る子ども達に目を向けながら、ベンチに腰掛ける。．．．そういえば、レイナーレさん達に出会った時も、俺つてここに座ってたっけ。アザゼル先生から今の彼女達の事も聞いているけど、やっぱりもう一回直接会って話とかしたいな。

「ッ．．．！」

．．．疲れてんのかな、俺。向こうにレイナーレさんの姿が見える。幻覚見えるってヤバくね？ 今から帰って寝ようかな．．．。

目を擦りながら立ち上がる。だが、レイナーレさんは消えない。幻覚の彼女は酷く驚いた顔を見せながら、俺に向かって近づいて来た。おつかしいなあ。幻にしているのは妙にリアルな気がする。

「あ、あの．．．！」

「ああ、幻覚に加えて幻聴まで聞こえて来た．．．」

「ち、違います！ 私は本物です！」

そつかそつか。本物．．．。え、本物!?! 幻覚じゃないの!?!

「ほ、本当にレイナーレさんなんですか．．．!?!」

まさかの登場に愕然となる俺に対し、レイナーレさんは可愛らしくはにかんだ。

「お、お久しぶりです、フューリー様。まさか、つい立ち寄ったここであなたにお会い出来るなんて思ってもみませんでした」

それこつち！ こつちのセリフですから！ 何であなたがここに
いるんですか!?!

・・・はっ！もしかして、アザゼル先生について来たとか？ そうだ、確か助手だつて言つてたし、きつとそうだ。それならそうと言つてくれたらよかつたのに。

ちよつと冷静になつた俺は、レイナーレさんと一緒にもう一度ベンチに腰掛けた。それから少しだけ間を空けて、改めて彼女と話した。

「まずは、お元気そうでなによりです」

「え、ええ。フューリー様もご健勝のご様子で・・・」

ずいぶん難しい言葉知つてるんですね。日常会話でご健勝とか言われたの初めてだわ。

それはともかく、ちよつと・・・いや、かなり緊張してる様子のレイナーレさん。アザゼル先生から聞いたのか、俺がフューリーだつて事も知つてるみたいだし。それが関係してるのかな。

「レイナーレさん。そんなに畏まらなくても、以前と同じような感じで接してもらつていいんですよ？」

「と、とんでもありません！ 私ごときが伝説の騎士様にそんな・・・！ 知らなかつたとはいえ、あの時はとても無礼な真似を働いてしまひ、本当に申し訳無く思つています」

うーん、本当に気にしなくてもいいのに。けど、この様子じゃ無理に言うのも悪いし、諦めるか。

「ところで、この街に来たのはレイナーレさんだけですか？ それともカラワーナさんとミッテルトさんも来てるんですか？」

「はい。あの二人も一緒です。アザゼル様の勅命で、今日からこの街に滞在する事になりました。よろしくお願いします、フューリー様」
「ええ、こちらこそ。それと、俺の名前は神崎亮真です。どうぞ好きなように呼んでください」

「で、では、神崎様と呼ばせて頂きます」

もの凄く今さら感のある自己紹介を終えた所で、俺はあの別れからずっと気になっていた事を聞いてみた。それはもちろん、アザゼル先生とレイナーレさんの恋の行方についてだ。助手なんてかなり近い立場になつたのだから、ひよつとしたら上手くいったかもしれない。

そう考えながらレイナーレさんに尋ねると、彼女は少し寂しそうな

表情で答えた。

「・・・何もありますんよ。あのお方はどこまでいっても私達を『女』ではなく『部下』として見ていますから」

なぬっ!? こんな素敵な女性をフツちやったのか、アザゼル先生! 人の恋について外からとやかく言うつもりはないけど、それでもレイナーさんみたいな健気な人を女性として見ないなんて。まさか、あの人ホム・・・。

「でも、変なんですすよね、私。あれほどあのお方の寵愛を受けたかったというのに、あまりショックじゃないんです。カラワーナとミツテルトもそれほど悲しんでいませんし、今は純粹に尊敬出来るお方として仕えさせて頂いています」

強いんだな、レイナーさん達って。失恋どころか、そもそも告白の経験すら無い俺が想像するよりもずっと辛かっただろうに。

「・・・すみません。嫌な事を聞いてしまいました」

「気にしないでください。むしろ、神崎様にお話し出来て良かったです」

それって俺に聞いて欲しかったって事? それとも、誰かにぶっちゃけてスッキリしたかったとか? おそらく後者だろうけど、それならなおさら俺でよかったのかな? いや、そもそも俺が無神経な質問したのが悪いのか。

だけど・・・だけど、せめてこれだけは言わせて欲しい。

「レイナーレさん。あなた達は健気で、強くて、素敵な女性です。今回は残念でしたが、その内もつといい出会いが巡って来ると思っています。次こそ上手くいくよう、応援してます」

何とか励ましたいと感情が高ぶり過ぎて、語りながらついレイナーレさんの手を握ってしまった。おかげで彼女も慣れ慣れしいと思っただのか怒った様に顔を赤らめている。俺は慌てて手を離し、頭を下げた。

「すみません、つい・・・!」

「い、いえ、別に謝って頂く様な事では。・・・そう言って頂けて嬉しかったですし」

小さい声だった事に加え、近くで車がクラクションを鳴らした所為でほとんど聞き取れなかった。おのれ、何でこのタイミングで鳴らすかな！

「レイナーレさん。ちよつと聞き取れなかったので、よければもう一度言ってもらえませんか？」

「し、知りません・・・！」

俺のお願いも虚しく、プイっと顔を逸らすレイナーレさん。結局、さっきの言葉については教えてくれなかった。だがまあ、最後に可愛い表情が見れたから良し！

それから、今後の為にと、彼女達が住んでいるという家まで案内してもらったのだが、なんとそこは俺の家から歩いて五分もかからない場所だった。聞けば、アザゼル先生がその方が都合がいいからと用意してくれたそうだ。

ついでに後の二人にも挨拶していこうと、レイナーレさんに家の中に通してもらった。彼女に続いて姿を現した俺を見るなり、リビングでのんびりしていたカラワーナさんがソファアールから転げ落ち、飲み物を飲んでいたミッテルトさんがそれを口から盛大に噴き出していた。まるでマンガみたいな反応にこっちまで驚いてしまった。

だけど、二人も元気そうでよかった。今日は挨拶だけだけど、次はあれを持ってお邪魔する事にしよう。

レイナーレさん、カラワーナさん、ミッテルトさん。あなた達がずっと憶えていてくれたように、俺だって、「約束」を忘れていませんよ。

「とりあえず・・・予約の電話を入れないとな」

三人の家を後にし、俺は自宅までの僅かな道を歩きながらそう呟くのだった。

第五十話 いざ冥界へ

「突然だけど、冥界に帰るわ」

夏休みに突入し、何をして過ごそうかな。とか色々計画を練ろうとした矢先、リアスがいきなりそんな事を言い放った。なるほど、急に兵藤君達を家に招いたのは悪魔関係の話をする為だったからか。

兵藤君、木場君、朱乃にゼノヴィアさん、そしてヴラディ君が私服姿でリアスの話に耳を傾けている。同居組のアジア、黒歌、塔城さんも同じ様になっている。

しかしまあ、当然と言えば当然だけど、兵藤君達はウチを見るなり驚いてたなあ。特に朱乃なんか、前に来た時は二階建てだったのに、いつの間にか階が増えてたから何回も目を擦ってたし。でも、三階の説明をした時に一瞬だけ目を光らせたのはなんだったんだろう。

「本当に突然ですね。何か事件とか？」

兵藤君の問いに、リアスが笑いながら答える。

「心配しないでイツセー。純粋に里帰りするだけよ。毎年の恒例なの」

「なんだ。俺はてつきり『禍の団』が冥界でなんかやらかしたのかと。・・・あれ、でも、部長の里帰りと俺達に何か関係があるんですか？」

「関係あるに決まっているじゃない。眷属であるあなた達も一緒に行くのよ。冥界にね」

そう言つて、驚いた様子の兵藤君から俺に視線を移すリアス。

「リヨーマ。出来ればあなたにもついて来て欲しいのだけれど」

「俺も？」

「ええ。あなたを連れて来て欲しいっていう方がたくさんいるのよ。お父様やお母様まで、改めて話が見たいなんておっしゃってるの。だから、お願い」

「ご両親が俺に？・・・はっ、これはもしかして、以前ご迷惑をおかけした時の謝罪をするチャンス!? 授業参観の時も、父親との関係の修復は出来なかったみたいだし、ここは俺自身が直接謝らせてもら

うしかない。

「そういう事なら構わないが、アジアと黒歌を残してしまうのは・・・」

「心配しなくても、二人も一緒よ」

「当然にや」

「わ、私もご一緒していいんですか!?!」

当たり前のように言う黒歌と、まさかの許可に驚くアジア。

「もちろんよ。ただ、流石にロザリオとかは置いていってもらうけれど」

そりやそうか。悪魔の苦手な物を持っていったら変な勘違いされるかもしれないな。ただでさえ、この子は変な連中に狙われやすいんだから。まあ、ウチの天使に手を出そうものなら、その時は俺が直接OHANASHIさせてもらうだけだな。

「一応、八月の二十日過ぎまでは向こうで過ごす予定よ。修行やその他諸々の行事は冥界で行うからそのつもりでいてね」

「修行・・・。ちようどいい。神崎先輩、是非ともあなたに稽古をつけてもらいたいのだが、どうだろう」

「おっと、先に言われちゃったな。先輩、僕もお願いします」

ゼノヴィアさんと木場君が期待込めた目で見つめて来る。ちよつと待とうよ。俺で手伝えるなら断る気は無いけど、まともなアドバイスとか出来ないよ? 精々アルllヴァンモードで相手するくらいだよ? それでもいいのかな?

「あ、あの、私も・・・」

「白音は私が稽古をつけてあげるにや。今の白音なら仙術を教えるてもよさそうだしね」

「・・・お願いします」

姉からの直々の指導か。よかつたね、塔城さん。なんか直前に言いかけたみたいだけど、おそらく自分から黒歌をお願いしようとしたんだろう。それを察して先に答えた黒歌は流石お姉さんだな。ちよつと残念そうなのは、自分の考えが見透かされちゃって悔しかったからかな?

「冥界かあ。あいつらには悪いけど、後で断りの連絡入れとかないかな」

「イツセー君、何か予定でもあったの？」

「ん？ ああ、松田と元浜の二人と海とかプールに行こうかなって。今年こそ彼女を作るって妙に気合い入れてたなあいつら・・・」

「冥界には海は無いけど、湖ならあるわよ。プールもあるし温泉だってあるわ。それじゃ駄目なの？」

「あ、すみません部長。別に行きたくないって言ってるんじゃないですよ。元々、あいつらの誘いにも乗り気じゃなかったですし」

「意外だね。イツセー君なら一も二も無く頷くと思ってたけど」

「そりゃあ、俺だって彼女は欲しいよ。俺の最終目標はハーレム王だからな。・・・でも今はそれ以上に、強くなりたいっていう気持ちの方が大きいんだ。女の子達を守る力も無いくせに、ハーレムなんて作ったら駄目だと思っただ」

「おお、カッコいいぞ、兵藤君。・・・言ってる内容はあれだが、守る為に強くなりたいっていう気持ちは大事だと思うぞ。」

「そういえば、最近、兵藤君が変わったって話を聞いたつけ。以前に比べて大人しくなったとか、自重を覚えたとか色々耳に届いている。そのおかげか知らないが、女生徒の間で評価が少しだけ上がっているらしい。まだまだ悪評は無くなりそうにないが、それも時間の問題かもしれないな。」

「そういうお前は、この夏に女の子とデートとかしないのかよ？」

「僕は修業があるからね」

熱心だね、木場君。・・・女の子に興味が無いわけじゃないよね？
ただ修行に力を入れてるだけだよな？

「真面目だなあ、お前は。なら、ギヤスパーは？」

「ぼ、僕はそんな・・・でも、神崎先輩や、イツセー先輩を見て、このままでいいのかなって思ったりして・・・少しでも変われたらいいなって・・・あうう、上手く言えないんですけど・・・」

良い傾向じゃないか、ヴラディ君。今の自分を変える為の第一歩は、変わりたいって思う事だ。俺の何がキミの手本になったのかわか

らないが、その気持ち忘れなければ、きっとキミは変われるはずだ。

「言いたい事はわかるよ、ヴラデイ君。応援してるからな」

「は、はい……!」

「お前も色々考えてんだな。それじゃあ、神崎先輩は……」

その瞬間、室内の温度が一気に低下した。同時に、数人の女性から言いようも無いプレッシャーが放たれた。

「イツセー……リョーマが何かしら?」

「うふふ、まさか、私達以外に相手がいるとでも?」

「赤龍帝は冗談が下手くそなのにや」

ちよ!?! どうしたのさキミ達!?! 目から光が消えてるよ!?! 今の

兵藤君のセリフのどこに病む要素があつたのさ!?!

「な、何でもありません! マム!」

素人目から見ても完璧な敬礼を取る兵藤君。周りを見渡すと、アジアがガタガタ震えていて、木場君とゼノヴィアさんが引き攣った顔で冷や汗を流している。そんなもってヴラデイ君は白目剥いて気絶している。

唯一、無表情で佇んでいる塔城さんに、俺はそつと聞いてみた。

「塔城さん。一体彼女達はどうしたんだ?」

「……本気で聞いてるんですか?」

いやいや、今の状況で茶化して聞けないでしょ! 頷く俺に対し、

塔城さんが冷たい目で答える。

「知りません。どうぞお好きにだけ悩んでください」

これ以上言う事は無いとばかりに、塔城さんはジュースのストローに口を付けた。

「よお、遊びに来……何だよこの修羅場感たつぷりな空気は」

そこへ突然現れたアザゼル先生が、室内の空気に対してそうツツコむのだった。

……
……
……

アザゼル先生の登場にようやくリアス達が正気に戻った所で、彼を

加えて改めて話をする事となった。

「どこから入って来たの？」

「どこからって・・・玄関からに決まってるだろうが。窓ガラスブチ破って来て欲しかったのか？」

「いやいや、誰もそんなアクション映画的な物を求めてないですから。トウウエンティーでフォーな展開なんてこの家に必要無いですから。」

「心配すら感じませんでした。僕もまだまだですね」

「だな。お前らはまだまだまだひよっこでしかねえからな。それよりも、冥界に帰るんだろう？なら先生である俺もついて行くぜ」

「言いながら、アザゼル先生が懐からメモ帳を取り出した。」

「ええつと・・・。とりあえずスケジュールとしては、リアスの里帰り」と、現当主に眷属の紹介。あと例の新鋭若手悪魔達の会合。まあ、メインとしてはお前らの修行だがな。それとフューリー。お前もついて来るんだろう？」

「はい、そのつもりです」

「お前はなるべくリアス達と行動を共にしてくれ。お前一人にすると騒がしくなるだろうからな。ただ、ヒマな時でいいから、一度カテレアに会ってやってくれ。あの女、毎日のようにお前に会わせろってうるせえらしいからな」

「わ、わかりました」

カテレアさんか・・・。いい人なんだろうけど、あの勢いはちよつと苦手なんだよな。

「それじゃ、アザゼル・・・先生もあちらまで同行する事でいいのね？」

「なら、行きの予約もこっちでしておいていいのかしら？」

「おう、よろしく頼む。悪魔のルートで冥界入りするのは初めてだからな。ちよつと楽しみだぜ」

というわけで、オカルト部＋黒歌という結構な人数で冥界へと行く事になりました。まさか予定と立てようとした矢先にこんなイベントが舞い込んで来るなんてな。最も、こちらとしては大歓迎だけだな！

・
・
・
・
・
・
・

それから、あつという間に旅立ちの日を迎えてしまった。集合した俺達が向かったのは、最寄りの駅だった。どうやって冥界まで向かうのか気になってたけど、まさか電車で行くの？

兵藤君やアーシアも戸惑っているみたいだ。いやだって、普通に利用している駅がまさか冥界に繋がってるなんて予想出来るわけないもんな。

そんな俺達を余所に、リアスと朱乃が迷い無くエレベーターの方へ向かう。急いでついて行った俺達に、二人が振り返った。

「ここから降りるわ。まずはリヨーマとイツセー。それにアーシアとゼノヴィアからね。私と一緒に乗ってちょうだい」

「お、降りる？ 部長、このエレベーターって昇るだけじゃ・・・」
「ふふ、乗ればわかるわ。朱乃、あなた達はアザゼルと一緒に降りて来てね」

「ええ」

とりあえず、指定されたメンバーでエレベーターに乗り込んだ。俺もここを利用してから知ってるが、この駅は一階と二階だけで地下なんて存在しないはずだ。それなのに「降りる」ってどういう事なんだろう。

「これを使うのよ」

俺達が見守る前でリアスが懐から一枚のカードを取り出すと、それを電子パネルに向けた。瞬間、電子音が鳴り響いたと思ったら、エレベーターが静かに下降し始めるのを感じた。

「マ、マジで降りてる!?! 部長、これって一体・・・!?!」

「この駅にはね、地下に秘密の階層があるの」

「は、初耳ですよそんなの!?!」

「当然よ。これは悪魔専用のルートだもの。人間では一生辿りつけないわ。あ、でもリヨーマとアーシアがこうして通ってるから訂正しないとね。意外かもしれないけど、この街にはこんな風に悪魔の領域が

結構な数隠れているのよ」

——つまり！ 我々の街はすでに悪魔に支配されているのだ！

——な、何だってえ!?

一瞬、そんなやりとりが頭の中を過った。

そうこうしている間に、エレベーターが停止し、扉が開いた。リアスに促された俺達の目に飛び込んで来たのは、冗談みたいに広大な空間だった。

「これは・・・凄いな」

「広いですね〜」

ゼノヴィアさんとアーシアがこの光景に圧倒されたのか口々に漏らす。よく見たら、なんだか駅のホームみたいな造りになっている。

「あ、先輩！ 線路がありますよ！ これって地下鉄って事でいいんですかね?！」

兵藤君の言う通り、向こうの方まで真っ直ぐに線路が伸びていた。そうやって色々見渡していると、上に残っていたメンバーがエレベーターから姿を現した。

「それじゃ、みんな揃った所で、三番ホームまで歩くわよ」

リアスと朱乃を先頭に、俺達もゆっくり歩き始めた。しかし、ホントに広いな。天井が滅茶苦茶遠いぞ。

「先輩。なんか、叫んでみたくなりませんか?！」

「確かに。ここならよく響き渡りそうだな」

「にやら、実際にやってみたらどうにや?！」

いつの間にか隣に並んでいた黒歌がさりげなく俺の腕を取りながらそう提案して来た。

「いや、実際に行動に移すほど子どもじゃないさ」

「残念。ここで大声で愛の告白とかされたら面白いと思うけどにや」

それももう罰ゲームだよな? そもそも告白する相手いないし。

「わ、私は、二人っきりの時にしてもらう方がいいです」

反対に並ぶアーシアが会話に入ってきた。てか、アーシア、今の言い方だと告白されたい相手がいるの? お兄さん、気になるよ。

「おい、イツセー。あれがお前の目標としているヤツだ。今の悔しさをバネに精々頑張る事だな」

「先生……！」

視界の端で、兵藤君とアザゼル先生が肩を組んでいる。最近急激に仲良くなってるんだよな、あの二人。何か通じ合うものでもあるのだろうか。

そうして歩き続ける事数分。通路から広い場所へ出た俺達の目の前に、ずいぶんと特徴的な意匠が施された列車が姿を見せた。

「す、すげえ、グレモリーの紋様に、サーゼクス様の紋様……。部長、この列車ってもしかして！」

「ええ、グレモリー家が所有する列車よ」

列車まで持ってるんのキミン家!? グレモリーのお家が凄いつていうのは前から聞いてたけど、どうやら俺の想像を遥かに越えた場所にいらっしやるみたいですね。

「さあ、みんな乗ってちょうだい。すぐに冥界に出発するわよ」

リアスの指示で俺達はすぐに列車に乗り込んだ。席も細かく決まっているそうで、リアスは先頭車両。兵藤君達眷属とアザゼル先生は中央から後ろの車両。そして、人間である俺とアジア、眷属じゃない黒歌は最後尾の車両となった。

対面席で、俺とアジアが並んで座り、黒歌が俺の前に座る。直後、勢いよく汽笛が鳴らされ、列車がゆっくりと動き始めた。これで後は到着まで待つだけだ。

「どのくらいで着くんだろうな」

「さつき別れる前にリアスに聞いたといたにや。大体一時間くらいで着くって言ったにや」

一時間か。長い様な短い様な。まあ、のんびり過ごしとけばいいか。

「はうう、まさか、シスターの身でありながら、冥界へ行く事になるなんて思いませんでした。一体どんな所なんでしょう……」

「心配しなくてもいいにや。悪魔がそこらじゅうにいて、空が紫色な以外は人間界とそんなにやに変わらないにや」

あんまりフオローになつて無いですよ黒歌さん。けど、正直俺も冥界にちやんとした形で行くのつて初めてなんだよな。

「にしても、一時間もジツとしてるにやんてヒマでしかにやいにや。ここはご主人様に甘えるしかにやいにや！」

言うや否や、いきなり猫モードになつた黒歌が俺の膝に乗つかる。そして尻尾を振りながら期待を込めた視線を向けて来た。

「さあ、ご主人様。好きなだけ私を撫でまくるがいいにや！ どうか、撫でてください！ 最近ご主人様に可愛がってもらつてにやいから欲求不満にやのにや！」

誤解を招く発言は止めなさい！ アーシアが誤解……。

「そ、そんな。リョーマさんと黒歌さんがすでにそんな関係だつたなんて……」

しちやつてるよ！ 現在進行形で誤解しちやつてるから！ 違ふよ、アーシア！ 俺変な事してないからね！

それから必死こいてアーシアの誤解を解いてたら二十分も経つた。この状況を招いてくれた張本人は幸せそうに膝上で寝てくれます。

「はあ……」

ついつい溜息が出てしまう。何で到着前からこんなに疲れてるんだろう。俺も一眠りしてやろうかな。

「あ、あの、リョーマさん。ちよつとお願いがあるんですけど」「何だ？」

もぢもぢするアーシアに聞き返すと、彼女は躊躇いがちに体を寄せて来た。その状態のまま自分の頭を俺の肩に乗せるアーシア。

「……ちよつとだけ、このままでいさせて頂いていいですか？」

「ああ、構わないよ」

「ありがとうございます」

寄り掛かつて来るアーシアの重みを感じながら、俺も少しずつ意識が遠くなつて来た。

「えへへ、今だけはリョーマさんを一人占めです……」

アーシアが最後に何か呟いたのを聞きながら、俺は完全に意識を手

放すのだった。

.....

俺が目を覚ました時、列車は目的地まであと少しという所までやって来ていた。

『まもなく、グレモリー本邸前。まもなく、グレモリー本邸前。皆様、ご乗車ありがとうございます』

おお、邸宅の近くに駅とか便利過ぎるだろ。まあ、グレモリー家の列車なんだからそれくらい出来てもおかしくないか。

とりあえず、兵藤君達と合流しようかと車両を移動した。リアスも含め、全員が揃ったのを見計らったように列車が停止した。

「さあ、到着よ。みんな、私の後に続いて出て来てちょうだい」

「じゃーな、お前ら。俺はこのままグレモリー領を抜けて魔王領に向かう。サーゼクス達との会談が終わったら合流するから先に挨拶だけでも済ませとけよ」

グレモリー領？ またなんか凄そうなワードが出て来たな。後でリアスに聞いてみよう。

『リアスお嬢様！ お帰りなさいませ！』

瞬間、外の方から怒号の様な声が響いて来た。出口から覗き見ると、もの凄い数の人達が綺麗な列を作ってリアスを出迎えていた。つておい、花火まで上がってるぞ。

「や、やっぱり部長って凄い人なんだな・・・」

「イツセー君。とりあえず後ろがつかえてるから出てくれるかな」

「あ、わ、悪い」

先頭で固まっていた兵藤君が動いた事で、後ろに並んでいたみんなも次々に駅に降り立って行く。何だかんだで一番後ろだった俺も最後に駅に降りた。

刹那、あれだけ賑やかだった周囲からピタリと音が止んだ。どうしたの？ 何かトラブルでもあったの？

「あ、あれがフューリー・・・」

「なんと凜々しきお顔なのでしよう・・・」

「まさか、伝説の存在をこの目に焼きつけられる日が来ようとは・・・」
見られてる！　なんかめっちゃ見られてる！　兵士っぽい人もメ
イドさんも執事さんもみんな俺を見てる！　俺、なんかしました!?

そこへ助け船を出してくれたのはリアスだった。彼女は手をパン
パンと叩き注目を集めると、やや大きめな声で言い放った。

「ほら、みんな。伝説の騎士に会えて興奮するのはわかるけど落ちつ
きなさい。彼も困ってるでしょ」

『も、申し訳ありません!』

一斉に頭を下げるみなさんにホツと息を吐く。先日、アザゼル先生
が俺一人だと騒がしくなるって言った理由がわかった気がした。

「お待ちしておりました、お嬢様。眷属のみなさま。そして・・・神崎
様とそのご家族の方々」

一人の女性が前に進み出る。それはグレイファイアさんだった。

「では、みなさま馬車へお乗りください。本邸までこちらで移動しま
す」

グレイファイアさんの指した先には、豪華絢爛という言葉が相応しい
馬車がいくつも並んでいた。馬車自体初めてなのに、あんな凄いの
に乗ってもいいんですかね。

「ぶ、部長。ひよつとしたらなんですけど、向こうの方に見えるでつか
い城って・・・」

兵藤君が見つめる先に、見事過ぎる城の姿が確認出来た。はは、ま
さかね。いくらなんでもあれは・・・。

「ええ。私のお家の一つで本邸よ。今から私達はあそこに行くのよ」
「なん・・・だと・・・!?!」

兵藤君と俺のセリフが一字一句ピツタリ重なった。もうね、色々ス
ケールが壮大過ぎて脳が追いつかないわ。

こうして、夏休み唯一にして最大のイベントは、最初から全速力な
感じでスタートを切るのだった。

第五十一話 彼らの名は・・・

画面の前のみなさま、こんにちは。それともこんばんは？ まあどっちでもいいか。神崎亮真の建物探訪のお時間がやってまいりました。

本日お邪魔いたしますのはこちら、リアス・グレモリーさんのお宅です。いやあ、途中でお庭も拝見させて頂きましたが、美しい花々や、見事と言えない造形の噴水、色彩様々な鳥達が飛び回っております。これだけでも見応え充分なのですが、これはいわば前座。肝心のお宅まであと少しといった所で・・・。

「さあ、着い・・・どうしたの、リョーマ？ そんなに遠い目をして」
・・・はっ。俺は今まで何を・・・。なんか馬車の中でグレモリー領のトンデモ面積を耳にしてからの記憶がぶっ飛んでるんだけど。この年でボケが始まるとかマジ勘弁してください。

開かれたドアから外に出る。まず目に飛び込んだのは、執事さんとメイドさんが整列して作られた長い道と、そこに敷かれた真っ赤なカーペット。それは向こうの城の方まで伸びていて、城門がゆっくりと開き始めているのが見える。

「・・・先輩。俺、ホントにあそこにお邪魔していいんですかね？」

「安心してくれ、兵藤君。・・・俺も同じ気持ちだ」

一度顔を見合わせ、それから城を見上げつつ溜息を吐く俺と兵藤君。そこへ、グレイフィアさんが言葉を発する。

「それではみなさま、どうぞお進みください」

「行くわよ、みんな・・・」

「リアスお姉様あー！」

城に向かって歩き出そうとした刹那、その声と共に人の列の中から紅い髪の子どもが飛び出して来た。その子は嬉しそうな顔でリアスに抱きついた。

「ミリキヤスじゃない。ふふ、大きくなったわね」

「お姉様こそ、益々お美しくなられたようですね！」

「あら、お上手ね。流石お兄様の子どもだわ」

「リアス、その子は？」

俺が訊くと、リアスがその子を俺達の方へ一歩進ませながら答える。

「この子の名前はミリキヤス・グレモリー。お兄様の子どもよ。私からしたら甥という事になるわね」

あの魔王様お子さんいたのか。言われてみればどことなく面影があるな。

「ミリキヤス。この子が私の新しい眷属よ。挨拶なさい」

「初めまして。ミリキヤス・グレモリーです」

「こ、こちらこそ初めまして！ お、俺、じゃなくて、自分、でもなくて、ぼ、僕の名前は兵藤一誠です！」

ガツチガチだな兵藤君。でも気持ちにはわかるよ。相手は魔王様のお子さんだもんな。そんな彼の様子がおかしかったのか、リアスが微笑む。

「イツセー。そんなに緊張しなくてもいいわ。魔王の名は継承した本人しか名乗れないの。だからこの子はお兄様の子どもだけどグレモリー家なのよ。私の次の当主候補でもあるわ」

なるほどな。でも、やっぱり魔王様の子だけあって、どことなくカリスマ的なオーラが出てる気がする。きっと将来、いい男になるんだろうな。

「と、ところで、お姉様。今回の里帰りにはあのお方もご一緒だと聞いていたのですが」

「ええ。彼がそうよ」

リアスが俺を示す。その瞬間、ミリキヤス君の表情が一変した。あの凄くキラキラした目でこっちを見つめているその様子は、まるで尊敬するヒーローに出会って興奮している幼子のようなだった。いやまあ、実際子どもなんだけど。

「リョーマ。ミリキヤスもあなたのファンなのよ。今回の里帰りでお父様やお母様以上にあなたに会いたがっていたのがこの子なの」

「あ、あの、フューリー様！ お会い出来て嬉しいです！ あ、握手してもらっていいですか!?!」

「あ、ああ……」

汚れも曇りも無い純粹無垢な目を向けて来ながら握手を求めるミリキヤス君。ホントは、そんな風に見てもらえる資格なんて全く無いんですけど……。だが、こんな俺をそうやって見てくれる子どもの想いを否定するようなクズにまでなつたつもりはない。

なので、精一杯の笑顔を浮かべながら、ミリキヤス君の手を握る。子どもらしく、温かくて柔らかい手だった。

「うわあ……！ フューリー様と握手しちゃった！ もうこの手は洗えないです！」

いや、そこは洗おうよ。汚いからね。

「……早速一人撃墜にゃ」

ん？ 黒歌、何か言つたか？

「さて、ミリキヤスも満足したみたいだし、そろそろ屋敷に入りましようか」

今度こそ城に向かって歩き始める俺達。その間、ヴラディ君が俺の背中にくつついたままだったけど、やっぱりこれだけの人の間を歩くのは彼にはキツかったのだろう。

門を潜り、さらに先にあつた門を潜る。そうやっていくつかの門を抜けた先に、玄関ホールがあつた。入る前から予想してたけど、やっぱり中も広い。

「お嬢様、早速みなさまをお部屋にお通ししようと思つたのですが」

「そうですね。私もお父様とお母様に挨拶しないとイケないし」

「ではすぐにご案内させます。それと、旦那様は現在外出中です。夕刻までにはお帰りになる予定です」

「わかつたわ。なら、みんなには一度休んでもらおうかしら。みんなの荷物もすでに運んでいるわよね？」

「もちろんです。お部屋の方も今すぐお使い頂いて構いません」

「みんな、聞いた通りよ。お父様が戻るまで一旦解散するわ。それぞれの部屋に案内させるから、しばらく休んでちょうだい」

グレイフィアさんの後ろに控えていたメイドさん達がみんなを一人ずつ連れて行き始めた。俺の前にも、とても綺麗なメイドさんが

やって来た。

「そ、それでは、ご案内させて頂きます！」

「お願いします」

随分と気合いの入ったメイドさんだ。職務を全うしようという気概が伝わってくるようだ。チラチラと俺の顔を見て来るけど、やっぱりここじや人間って珍しいんだろうなあ。

そんな事を思いつつ、俺はメイドさんの後に従って、ホール前方の階段に向かって歩き始めるのだった。

．．．．．
．．．．．
．．．．．

さて、部屋に案内されたのはいいが．．正直、ヒマでしようがない。ここは誰かのお部屋に突撃したい所だが、勝手に動きまわるのも良くないだろうし。やっぱり時間が来るまでジツとしとくしかないか。

そう思つてベッドに横になろうとした直後、部屋の扉が小さくノックされた。もしかして、俺と同じくヒマになった誰かが遊びに来てくれたのかな？

そう予想しつつ扉を開けると、そこにいたのはオカルト部の面々でも、アーシアでも黒歌でも無かった。俺を見上げるその少年は、どこからどう見てもミリキヤス君だった。

「あの、お休みの所申し訳ありません。でも、僕、どうしてもフューリー様とお話したくて．．．！」

いやいや、まさかキミが来るなんて微塵も思つて無かつたけど、俺としては大歓迎ですよ？ 俺は迷い無くミリキヤス君を部屋に招き入れた。

立派な机と椅子があつたので、俺達はそこへ向かい合うようにして腰をかけた。それで、話がしたいと言つてたけど、一体何を話せばいいんだろうか。

「フューリー様。僕はあなたが異世界からやって来られた事を教えてもらっています。もしよかったら、フューリー様がいた世界の事を教

えてもらえませんか？」

え？ 何で知って……。ああ、きつとサーゼクスさんあたりから聞いたんだろうな。つっても、この世界に比べると特に面白い所なんて無いしな。

だけど、そんな答えじゃ、わざわざ来てくれたミリキヤス君に悪いし。うーん……。

悩む俺だったが、少しして妙案が浮かんだ。フューリーのファンつて事は、きつとミリキヤス君もロボットとか好きなのかもしれない。だったら、スパロボの話とかどうかな。ストーリーだけでも結構面白いと思うけど。

よし、そうと決まれば、俺がストーリー的に一番気に入っているαシリーズについて語ってみようか。

「ミリキヤス君。今から話すのは、人々の為に己の命や想いを鋼に乗せて駆け抜けた勇者達の物語だ」

そう前置きして、俺はαからα外伝、第二次、第三次のストーリーを順番にミリキヤス君に語り始めた。

バルマー戦役。イージス計画。荒廃した未来での戦い。封印戦争。そして、自らの野望の為に、勇者達を集めていた真の黒幕との全宇宙をかけた壮絶な決戦。二度と戻れないと知りつつ、愛する者の為、守りたいものの為に決戦の地へ旅立った彼らの事を、人々はこう呼んだ。——『鋼の救世主』と。

「(コントローラーを通じて)彼らと共に戦った記憶を、俺は一生忘れる事は無いだろう……」

そう締めくくり、俺は話を終えた。いやー、語った語った。なんか久しぶりにαシリーズがやりたくなってきたわ。でもこの世界にスパロボは存在しないんだよな。残念。

さすがに全シリーズを語るには時間が足りなかったから、αの中盤くらいまでしか話せなかった。それでも語り始めて数時間は経過しただろう。ちよつと調子に乗り過ぎたかな。

「……ありがとうございます。フューリー様。では、僕はそろそろ失礼しますね」

そそくさと立ち上がり、ミリキヤス君は部屋を出て行った。あら、やっぱり二時間も拘束しちやったから怒ったのかな。ゴメンね。・・・あ、最後にゲームの話だって言うの忘れてた。まあ、あんな内容が現実であるわけない事くらいミリキヤス君だってわかってるだろうし、別にいいか。

ああ、なんかしゃべり過ぎて喉が渴いた。どっかに飲み物無いかな。

俺は飲み物を探す為に部屋の中を調べ始めるのだった。

S I D E O U T

ミリキヤス S I D E

フューリー様のお部屋を出た僕は、すぐ近くの壁に背を預けた。興奮が収まらない。まだ心臓がドキドキしている。

フューリー様に語ってもらったお話。それは、彼の戦いの歴史そのものだった。あの方の世界が闘争に溢れた世界だとは聞いていたけど、まさか、宇宙すらも巻き込む壮大なものだったなんて・・・！

何度も何度も危機を迎えても、その度に勇者達が・・・『鋼の救世主』達が立ち上がり、人々の為に戦い続けた。これほどの英雄譚を、僕はこれまで聞いた事は無い。ううん、おそらく、これからどれほどの時間が経とうとも、あの方を越える英雄なんてきつと現れないだろう。

伝えたい、この話を。『鋼の救世主』の物語を！　これは、僕だけが知っていていい話じゃない。出会ったばかりの僕に、フューリー様が語ってくださったのには、きつと意味があるはずなのだから！

「フューリー様・・・。僕はやります！　あなたの戦いを、あなたの物語を、決して忘れない為に！」

決意を新たに、僕は自分の部屋に向かって歩き始めた。よし、まずは十分なペンと紙を用意しないと！

ミリキヤス S I D E O U T

こうして、一人の少年が抱いた決意は、これより数カ月後に形となって悪魔達の前に現れる。

ミリキヤス・グレモリー著『鋼の救世主』。人々の為に戦い続けた勇者達の壮絶で壮大な物語は、発表から何千、何万年経とうとも、決して色褪せる事無く悪魔に、そして墮天使や天使の心に残り続ける事となる。

それは同時に、フューリーの名を永遠のものとするものであった。冥界だけでなく、全てを救う為に戦い続けたとされる騎士。

その誇り高き名を有する青年は、未だ己の歩む事となる道に気付いてはいないのだった。

「・・・なんだろう。変な悪寒が・・・」

第五十二話 自業自得という言葉を知ってるか？

ミリキヤス君が出て行ってほしい一時間くらい経った頃、またしてもノックされたのでドアを開けると、俺をここまで案内してくれたあのメイドさんが立っていた。

「旦那様がお戻りになりましたので、みなさまには今一度ホールに集まって頂きたく参上いたしました」

「わかりました。すぐに行きます」

さあ、いよいよリアスのご両親との再会だ。彼女が家出してしまうくらい関係を悪くさせてしまった以上、顔を合わせるなり殴られたりするかもしれないが、何をされても、何を言われても受け入れよう。俺はそれだけの事をしてしまったのだから。

玄関ホールにはすでにみんな揃っていた。どうやら俺が最後のようだ。そして、みんなの前には、見憶えのある美男美女の姿。それは間違い無くリアスのご両親だった。

よし、いくぞ！ これが俺の・・・全身全霊の謝罪だあ！

「おお、フューリー殿。この度はよくぞ参られ・・・」

「申し訳ありませんでした！」

こうして、リアスのご両親との二回目の顔合わせは、俺の完璧な四十五度角度のお辞儀による謝罪から幕を開けたのだった。

・・・
・・・
・・・

「ははははは！ フューリー殿。つまり貴殿は、自分の家にリアスが押し掛けて来たのは、婚約パーティーの件で私や妻とケンカした事による家出だと思っていたのかね！」

腹を抱えて大笑いするリアスのお父さんことグレモリー卿。謝罪した直後、明らかに戸惑っている周囲にその理由を話した所、こんな状況になっていた。

「え、ええ。そうでなければ、彼女が俺の家に住むなんて言うはずありませんし」

「あらあら。英雄と呼ばれたお方も、女心には全くの無頓着なのですからね」

お母さん……ええと、ヴェネラナさんだったつけ？　の方は苦笑いしている。女心？　そりゃ男ですからわかりませんよ？

「ふ、ふふふ……。そう。そうだったのね。道理で私がどんなに迫っても何の反応もしなかったわけだわ……」

そんでもって、リアスがどこぞの前髪ボクサーばりに燃え尽きていた。朱乃や黒歌が懸命に背中を擦ったりして慰めている姿が印象的だった。

「フューリー殿。誤解しているようだが、あれから今日まで、私達親子の関係は良好なままだ。娘は純粹に貴殿の傍に……」

「あなた。それ以上はあなたから言うべきではありませんわ」

ヴェネラナさんがそう遮ると、グレモリー卿も何かを察した様子だった。

「はは、確かに私から告げるのは無粋だろうな。ならば、この話はこれまでとしておこうか。改めて、ようこそ我がグレモリーの屋敷へ。この時間まで待たせてしまって済まなかったね。すぐに夕食の準備をさせよう」

そうして、あれよあれよと夕食の準備が進められた。俺達は全員揃って食事をする部屋に案内された。そこには一般のお宅ではまず目に出来ないであろうもの凄く長いテーブルや、聞くまでも無く高価であろう装飾が施された椅子が並べられていた。そして、そのテーブルの上にこれでもかと乗せられた豪華な料理の数々。これ、明らかに食べきれぬ量じゃないでしょ。食べる前からタッパーが欲しいと思った俺はやはり一般人だという事だろうな。

「あわわ、こんな凄いお料理を本当に頂いてしまっているのでしょうか」

隣のアーシアが目を丸くしている。そうだよな。こんな料理を目の当たりにしちゃったら遠慮してしまうよな。だが、これは俺達の為に用意してもらった物だ。ならば、ありがたく頂くのが礼儀というもの！

・・・ぶつちやけ、早く食べたいだけなんですけどね。

「では、遠慮せずに楽しんでくれたまえ」

全員が席に着いた所で、さつき別れたばかりのミリキヤス君も加えての食事会が始まった。最初こそ恐縮した様子を見せていたみんなだったが、時間が経つにつれて、隣の子と会話するくらいの余裕を見せ始めた。

「ぶ、部長。俺、こういう場でのマナーとか全然知らないんですけど・・・」

「ふふ、そんなの気にしないでよろしいのよ。この会食の一番の目的は、お客様でもあるあなた達に楽しんでもらう事。どうぞ気持ちを楽にしてちょうだい」

ヴェネラナさんの言葉にホツとする兵藤君。そういう事なら俺も食べやすいやり方でいかせてもらうか。一応、アルⅡヴァン先生の知識の中にはテーブルマナーも含まれていたからいざという時は頼らせてもらうつもりだったけど、どうやらその必要も無さそうだ。

「そういえば、ミリキヤス。あなた、フューリー殿にずっと会いたいの言っていたけれど、こうして実際にお会いしてどうだったのかしら？」

続いてヴェネラナさんがミリキヤス君に話を振ると、彼はどこか神妙な顔で答えた。

「・・・僕は、本当に幸せ者です、おばあ様。先程、僕はフューリー様とお話させて頂きました」

「ほお、どんな話をしたのだ？」

「とても言葉では言い表せません。ですが、いつか、お二人にもお伝え出来るよう頑張ります。それが・・・僕の使命ですから」

あれ、今の彼の言葉から察すると、もしかしてスパロボ語りを気に入ってくれたのかな？ それなら嬉しいんだけどな。お望みなら他の作品のストーリーも語ってあげるよ？

でも、作品で一、二を争うスケールのデカさを誇るαシリーズを最初に語っちゃったから、次もそれに勝るとも劣らないヤツを考えないと。・・・UX？ それともZ？ だけどZはまだ完結してないしな。

「・・・いい目だ。何かを決意した男の目をしている。ならば、私はその時が来るのを楽しみに待つ事にしよう」

「はい！ フューリー様、お時間がある時でいいので、ぜひまたお話を聞かせてください！」

「おや、てつきり長話にうんざりしてたと思ったら楽しんでくれたたのか。それなら喜んで続きも話してあげよう。」

「わかった。いつでも聞きにきてくれ」

「ありがとうございます！」

「フューリー殿。貴殿は早速この家に新しい風を吹かせてくれたようだな。ところで、話は変わるのだが、貴殿は悪魔になる気は無いかな？」

「おお、本当に唐突ですね。なんでみんな俺に悪魔になるよう勧めるんだろう。」

「その事なんですけど、どうやら俺は悪魔にはなれないみたいなんです」「なれない？ ならないでは無くて？」

「ええ。俺の体は『悪魔の駒』を受け付けません。ですから、なりたくてもなれないんですよ」

「そうなの、リアス？」

「彼の言う通りです、お母様。以前、私はリョーマを眷属にしようとして『悪魔の駒』を使おうとしたのですが、最後は『悪魔の駒』を弾き出すという前代未聞の結果となりました」

「それは、フューリー殿とあなたの実力差があり過ぎたからでは無くて？」

「はい。リョーマの言う通り、駒自体を拒否した様に見えました」

リアスの説明に、グレモリー卿がわざわざナイフとフォークを置いて腕を組んだ。

「困ったな。彼であれば私も妻も全く問題無いと思ってるが、これで悪魔として我が家に来てくれればもう言う事は無いのだが・・・」
「ですがあなた、私達にはすでにミリキヤスがいますし、伝説の騎士の血を継いだ子どもならば、ハーフであろうとも、必ずや悪魔に素晴らしい未来をもたらしてくれるはずですよ」

何やら顔を寄せ合って話し合う二人。ただでさえ距離があるのに、そんな風にヒソヒソ話されたら全然聞こえない。まあ、大切そうな話みたいだし、部外者の俺が聞くのも悪いから特に気にしないけど。

「・・・うむ、その通りだ。彼を受け入れられる事自体が悪魔の将来の為になる。フューリー殿。いや、神崎殿」

何故に言い直したんですか？ というか、俺の本名も知ってたんですね。フューリーとしか呼ばれないから知らないんじゃないかと思っただけだよ。

「何でしょう？」

「たった今から、私の事を父と思ってくれたまえ！ 私も、貴殿を本当の息子だと思おう事にしよう！」

ちよつ、『悪魔の駒』からどこをどう通ったらそんな話になるんですか!? 友達の親を父呼ばわりとか、小学生がふとした事で先生をお父さんって呼んだ時と同じレベルの恥ずかしさじゃないですか！ ちなみに体験済みですけどねちくしょう！

「い、いや、流石にそれは・・・。友人が自分の親をそう呼ぶなんて、リアスだって不愉快・・・」

「べ、別にいいんじゃない？ うん、いいと思うけど？」

まさかの許可頂きましたー！ なんて言ってる場合じゃない！

駄目だよリアス！ キミは否定側でしょ！ 何満更じゃなさそうな顔してんの!?

「あなた。流石にそれは性急過ぎますわ。リアスの気持ちにすら未だに気付いていないようですし、ここはゆつくり時間をかけていきましょう」

「ふむ、いい考えだと思ったのだがな。ならば、神崎殿。その気になった時はいつでも言ってくれたまえ。我がグレモリー家はいつでも貴殿を迎え入れるつもりだからな」

「は、はあ・・・」

なんか納得しちやってるし。てか、あれだけ言って具体的な説明は無しですか？ けど、聞いたなら聞いたでややこしい事になりそうだし、ここはもう流してしまおう。

そんな感じで、夕食の時間は過ぎて行つた。やっぱりというか、みんな食べきれずに残してたけど。その中ただ一人、塔城さんがその見かけからは想像出来ないペースで全てを平らげていた姿には流石に驚いてしまった。

もしかして、ここでお世話になる以上、これからもこんな感じの食事になるのだろうか。大丈夫かな、俺。夏休みが終わる頃にはフードファイター目指せるレベルになってたりして……。

冥界第一日目の感想は、そんなくだらないものであった。

……
……
……

それから早くも数日が経つた日、俺達は再び列車に揺られていた。なんでも、今日はリアス達のような若手悪魔と呼ばれる人達にとつて重大なイベントがあるらしい。んで、アザゼル先生の言う通り、俺は彼女達について行く事となった。なんでも、サーゼクスさんも俺をこの場に同行させるつもりだったらしい。ただ、“人間”であるアースアと、罪が無くなったとはいえ、“元犯罪者”である黒歌は留守番させられる事となってしまったがな。……俺も人間なんですけどね。まあいい。終わったらお土産でも買って帰ってあげよう。

三時間後、俺達が降り立つたのは、魔王領の都市であるルシファード。旧魔王であるルシファーがいたという冥界の旧都市である。

以上、木場君から説明してもらつた事をそのまんま繰り返してみました。

そこからさらに地下鉄に乗り換える為に移動する。その最中、駅にいた悪魔のみなさんがリアスに向かって黄色い歓声を上げていた。

朱乃曰く、彼女は魔王の妹である上にとても美しいから、下級、中級の悪魔のみなさんの憧れの的らしい。

それだけならいいんだけど、リアスから俺に視線を移した途端にぎわつくのは止めてください。思わず、ここは地下労働施設か！ と叫びたくなつた俺は至つて正常だと思う。

そうして乗り継ぐ事五分。ようやく目的地に到着した。列車から

降りて、近くのエレベーターに全員で乗り込む。

「みんな。もう一度確認するわね。何が起こっても平常心でいる事。何を言われても手を出さない事。上にいるのは、私達のライバルよ。無様な姿は見せられないわ」

ふむ、圧迫面接的なものでもやられるのだろうか。

「リョーマ。あなたもお願いね」

任せてくれリアス。最初からそういうものだって知ってれば、余程の事が無い限りプツツンしたりしないって。例えば、大切な友人を馬鹿にされるとか、そういった事が無い限りはね。

エレベーターが停止し、扉が開く。その先にあつたのは広いホールだった。使用人っぽい人達がこちらに向かつて頭を下げる。

「お待ちしておりました、グレモリー様。こちらへどうぞ」

その内の一人の後に従って歩いて行くと、前方に複数の人影が見えて来た。その先頭に立つ逞しい体つきの黒髪の男性がこちらへ顔を向けたと瞬間、リアスが声をあげた。

「サイラオーグ！」

「リアスか。随分と久しいな」

にこやかな表情で握手を交わす両者。もしかしなくても知り合い？ ははーん。こんなイケメンと知り合いだなんて、キミも隅に置けませんリアス。だけど、このイケメンさん、どことなく誰かに似ているような……。

「ええ。あなたも変わりないようでよかったわ。初めての者がいるから紹介させてもらうわね。彼はサイラオーグ。私の母方の従兄弟なの」

へえ、従兄弟さんか。

「たった今紹介された身だが、改めて名乗らせてもらおう。俺はサイラオーグ・バアル。バアル家の次期当主だ」

それじゃ、この人がリアスのライバルの一人って事になるのか。見るからに強そうな人なんだけど、大丈夫なのかなリアス。

「ねえサイラオーグ。あなた、眷属と一緒にこんな通路で何をしていたの？」

「ふん、あまりにもくだらんから出て来ただけだ」

「くだらない？　もしかして、他のメンバーも来てるの？」

「ああ。アガレスもアスタロトもすでに来ている。その上ゼファードルだ。着いた早々にアガレスとゼファードルがやり合い始めてな」

ライバル同士、闘志をぶつけ合ってるって感じか？　けど、それにしたってやり合うって穏やかじゃない表現だな。なんか嫌な予感がするぞ。

そう思った直後、建物が大きく揺れ、何かがぶっ壊れたような音が俺の耳をつんざいた。言ったそばからこれだよ！

「まったく、だから開始前の会合などいらないと俺は進言したのだ」

音のした方にある大きな扉に向かい始めるリアスとサイラオーグさん。その後続く二人の眷属達十俺。

そして、リアスによって開かれた扉の先には、見事にボロボロになった大広間があった。用意されていた机や椅子も例外無く全て壊されている。

その中央に、睨み合うようにして佇んでいる悪魔のみなさんがいた。一方は、眼鏡をかけた綺麗な女性。そしてもう一方は……

その男の顔を見た瞬間、俺は前に進み出していた。そうかそうか。あの野郎。あの時痛めつけてやったのに、まだ懲りて無かったのか！

「リ、リョーマ!？」

後ろからリアスの驚いた声が聞こえる。だが、俺は歩みを止めず、騒ぎの中心に向かうのだった。

S I D E O U T

イツセーS I D E

大広間の中央で、悪魔のみなさま方が睨み合っていた。武器まで取り出して、正に一触即発という言葉が相応しい状況だ。

一方は、悪そうな格好をした魔物や悪魔の集団。もう一方は、比較的普通そうな悪魔のみなさん。ただ、見た目は違えど、放っているオーラはどちらも恐ろしいほど冷たいものだった。

「ゼファードル、こんなところで戦いを始めても仕方ないと思わないの？ 死ぬの？ 死にたいの？ 殺しても上に咎められないかしら」
まともそうな悪魔のみなさんの先頭に立っている眼鏡をかけた美少女が冷徹な声を発する。叶うならじつくり眺めたいけど、そういう空気がないから止めとこう。

「はっ、言ってるよクソアマ！ 俺がせっかくそっちの個室で一発しこんでやるって言ってやってんのによ！ アガレスのお姉さんはガードが固くて嫌だね！ だから男が寄って来ないんだよ！ いつまで処女やってる気なんですかねえ！ だから俺がわざわざ開通式やってやろうって言ってやってんのによお！」

たった今、下品さに溢れるお言葉を言い放ったのが、もう一方の兄ちゃん。顔にタトウー。緑色の逆立った髪。ほぼ裸な上半身。そこにも刻んでるタトウー。スボンにジャラジャラ付けられている装飾品。

・・・どう見てもヤンキーです。本当にありがとうございます。

「ここは元々、時間が来るまで待機する場所だったんだがな」

そう前置きして、サイラオーグさんがさらに続ける。

「さらに言えば、若手が集まって軽い挨拶を交わす所でもあったのだが、実際はこのありさまだ。血の気の多い連中を集める以上、こうなる事くらい予想出来るものだがな。ヤツらが何をしようが関係無いが、ここらが潮時だろう。俺が止め・・・」

サイラオーグさんが進み出ようとしたほんの数瞬間、彼よりも先に動いた人物がいた。他の誰でも無い、神崎先輩その人だ。

「ッ・・・！」

僅かに確認出来た横顔は、完全に怒りに満ちていた。美少女とヤンキー達が放っていた以上に凄まじいプレッシャーを放ちながら進む先輩に向かって部長が声をかけたが、それでも先輩は止まらなかった。

「なんとという殺気だ・・・！ あの男、まさか・・・！」

サイラオーグさんがさつきまでの不満そうな顔を一変させた。驚愕と興奮の混じった視線を先輩の背中に送っている。

言い争っていた両陣営も、先輩のプレッシャーに反応したのか、一斉に顔をこちらに向けた。直後、ヤンキーの顔が驚愕の色に染まった。

「なっ!? テ、テメエ・・・!?」

「・・・久しぶりだな、強姦魔」

し、知り合いだったんですか、先輩!? てか今なんて言いました!?

強姦魔!? あのヤンキーが!?

「黒歌だけでは飽き足らず、今度はこの女性に手を出すつもりか」

美少女を守るようにヤンキーの前に立つ先輩。

「黒歌ですって? もしかして・・・!」

「あの男が・・・姉様を汚そうとした張本人・・・!」

部長と小猫ちゃんがハツとした表情を浮かべる。どういう事かは後で聞くとして、今はこの状況を見守るしかない。

「う、うるせえ! 犯罪者に何をしようが構いはしねえだろうが!

おい! この野郎は主殺しの黒歌を庇った共犯者だぞ! 誰か捕まえろ!」

「生憎だが、黒歌はすでにサーゼクスさん直々に無罪を言い渡されている。貴様の言う犯罪者など、もうどこにも存在していない」

「なっ!?!」

狼狽するヤンキーに向かって、先輩はただひたすらに淡々と告げる。感情の籠っていないその声が、逆に俺に恐怖を抱かせた。

「貴様こそ、強姦未遂という立派な罪を犯した事をわかっているのか? 貴様の一時の快樂の為に、女性に一生癒えないかもしれない傷を負わせる事に何も抵抗が無いとでも言う気か?」

交わされる会話から察したのか、広間にいるヤンキー勢力以外の全員が、ヤンキーに向かって侮蔑の視線を向けていた。もちろん、俺だって同じだ。エッチな事をしてみたいという気持ちはあるが、無理矢理なんて最低過ぎる。

「し、知るかあ! 俺は俺のやりたいようにやるだけだ! 邪魔するならば殺してやる!」

「待て! ゼファードル! その男、いや、その御人は・・・!」

サイラオーグさんの制止も虚しく、ヤンキーは魔力を込めた拳を先輩に向かって放った。だが次の瞬間、吹っ飛ばされたのはヤンキーの方だった。

理由は簡単、ヤンキーの拳が届く前に、先輩の拳がヤンキーの顔面を捉えたからだ。およそ人を殴った時に出るものとは思えないド派手な音と共に、ヤンキーが勢いよく壁に叩きつけられた。すげえ、完全にめり込んでるよあれ。

「犯罪者をどうしようが自由。・・・その理屈ならば強姦魔、貴様にも人権など存在しないと思え」

こ、怖ええええええええ!!! 目が、目が本気ですよ先輩！ 下手したらあの視線だけで人殺せそうだわ！

「き、貴様！」

一瞬の出来事に固まっていたヤンキーの仲間達が、正気を取り戻して先輩を囲む。だが、それを止めたのはまたしてもサイラオーグさんだった。

「それまでだ。お前達のやるべき事はまず主の介抱だろう。これから何が行われるのか理解しているのならば、まずは主を回復させる事に全力を注げ」

その言葉に、仲間達も先輩を置いてヤンキーの方へ駆け寄って行った。それを一瞥し、先輩はヤンキーに向けた表情とは真逆の微笑みを美少女に向けた。それをモロに見てしまった美少女の顔が瞬く間に真っ赤に染まる。うは、さっきまでのクールな感じがすっぱり消えちゃったよ。てか先輩、これってフラグですよね。

「あの男に何かされましたか？」
「い、いえ、何もございませぬ。た、助けて頂いてありがとうございます」

「気にしないでください。個人的に、あの男が許せなかっただけなので。あの時再起不能にまで追い込んでおけばよかった。そうすれば、あなたに不快な気持ちも味わわせる事も無かったのですが」

どこまでも気遣う様な優しい言葉に、美少女は完全にノックアウトされていた。「ポツ」とか「ドキッ」なんて効果音がそこかしこから聞

こえて来そうだ。

「と、ところで、あなたは・・・」

「俺の名前は神崎亮真といいます。今日は彼女・・・リアス・グレモリーの同行人としてこの場にお邪魔しました」

「神崎亮真？・・・ッ!? え、そ、それって・・・!」

「伝説の騎士フューリー。まさか、この日この場でお会い出来るとはな。このくだらない会合において、ただ一つの有意義な出来事と言えるな」

サイラオーグさんの発した言葉に、俺達グレモリー眷属以外のみなさんが目を見開く。こういう反応を見る度に、神崎先輩がどれだけ凄いい人なのか思い知らされるよな。

「お、兵藤・・・って、なんじゃこりや!?!」

突然聞き覚えのある声で名を呼ばれたので振り返ると、そこには匙を始めとする駒王学園の制服を纏った人達がいた。

「ぶきげんよう、リアス、兵藤君。とりあえず、この状況の説明を求めます」

会長の要求に、部長は溜息を吐きつつも、一から説明を始めるのだった。

第五十三話 趣味は千差万別

Q 強姦魔と再会しました。どうしましょう？

A 遠慮無く、慈悲無く、容赦無くぶっ飛ばしましょう。

というわけで、早速ぶちのめしてやったわけだが。よくよく考えると、この場にいたという事は、あの強姦魔も若手悪魔という事になるのだろう。そんなヤツをいきなり殴り飛ばしたら問題になったりして・・・。

内心冷や汗流しながら、騒ぎを起こしてしまった事も含めて謝罪したら、全員から気にするなといった旨の答えが返って来た。むしろ何人からはよくやってくれたとまで言われてしまった。俺としては大変ありがたいのだが、そんなにおおらかな感じがいいのだろうか。

それからすぐ、さきほどエレベーターを降りた時に出迎えてくれたスタッフのみなさんがやって来て、壊れてしまった机や椅子を修復してくれた。交換では無く修復である。しかも魔法っぽいものを使っただ。便利過ぎるだろ魔法。

その机を囲み、若手悪魔のみなさんがそれぞれ自己紹介をする事になった。俺は悪魔じゃないので、そこから離れた壁に背中を預けながらその様子に目を向けていた。

「私の名前はシーグヴァイラ・アガレス。大公、アガレス家の次期当主です」

そう口火を切ったのは、さきほど強姦魔に狙われていた女性だ。大公っていうのがどういう存在かは知らないが、悪魔社会のスケールのデカさを考えると、きつと凄い立場なんだろうな。

ふと、アガレスさんがこちらに目を向けて来たので微笑み返したら、ものっそい速度で顔を逸らされた。解せぬ。

「私はリアス・グレモリー。グレモリー家の次期当主です」

「私はソーナ・シトリー。シトリー家の次期当主です」

続いて、リアスと支取さんが名乗る。そういえば、支取さんって本名じゃなかったんだっけ。しかし、今さらシトリーさんと呼ぶのもなあ。それに、学園でそう呼んだら悪魔関係者以外の子達が不審に思

うだろうし。・・・うん、やっぱり支取さんで通そう。

「俺はサイラオーグ・バアル。大王、バアル家の次期当主だ」

正に「威風堂々」といった感じで自己紹介するバアルさん。うーむ、見た目も中身もイケメン過ぎるぞこの人。男が惚れる男って感じがする。・・・尊敬的な意味だからね。勘違いしないでね。

「ディオドラ・アスタロトです。アスタロト家の次期当主です」

最後にそう名乗ったのは、見るからに優しそうな少年だった。争い事とは無縁ですって雰囲気だけど、大丈夫なのかな。仮にバアルさんと戦う事になったら片手でやられそうな気がするけど。

「それと、先程フューリー殿に片付けられたあの男だが、ヤツの名はゼファードル。グラシヤラボラスの次期当主だ。グラシヤラボラス家は先日の御家騒動で次期当主とされていたものが事故死を遂げたばかりでな。ゼファードルが新たな候補となったそうだ」

バアルさんが説明してくれた。やっぱりアイツも次期当主だったのか。後で問題にならない事を祈っておこう。

とにかく、これで全員の自己紹介が終わった。・・・で、これからどうするんだろう。さっきバアルさんはここが待合室だと言っていた。という事は、時間が来たらまた移動するのだろうか。

「・・・マ。リョーマったら」

「ん？」

リアスの呼び声で考え事から抜け出すと、なんかみなさんからめっちゃ視線を向けられていた。え、何かあったの？ それとも無意識でまたなんかやらかしちゃった、俺？

なんて心配してたら、俺も自己紹介してくれと言われた。リアスのオマケとして来た上に、部外者である俺が自己紹介なんかしても意味無くないですかね？

けどまあ、言われた以上はするしかない。なんかアガレスさんとバアルさんが期待を込めた目を向けて来ているが、面白い事とか言えませんかよ？ 自己紹介で狙って面白い事言おうとすると大怪我するって知ってるので。

「初めまして、神崎亮真です。本来、この場にいられるような者では無

いのですが、事情によりリアス・グレモリーのお供という形でこうしてここにいます。どうぞ、よろしく願います」

よし、転入初日のあいさつに比べてずいぶん柔らかい感じで済んだぞ。あの時みたいな沈黙は二度とゴメンだからな。

「フューリー殿。貴殿とリアスが懇意にしているのは、先日の婚約パーティーの件で理解しているが、そもそも、どうやって知り合っただの？」

何でバアルさんが婚約パーティーの事知ってるんだろう。まさか、事件扱いで冥界に知れ渡ったりとかして・・・無いよね？

「俺が転入した学園に彼女がいて、それからの付き合いです。最も、彼女が悪魔だと知ったのはつい最近でしたけどね」

「なるほど・・・」

「それと、出来れば俺の事は名前でも呼んでもらえるとありがたいです」
「ならば神崎殿と呼ばせてもらおう。俺もサイラオーグで構わない。敬語も結構だ」

そう言ってもらえるのはいいが、流石に出会ったばかりで呼び捨ては憚られるので、しばらくは「さん」付けさせてもらおう。

続いて、アガレスさんがやや躊躇いがちに話しかけて来た。

「神崎様。改めまして、先程はありがとうございました。それで、その・・・こんな事をお願い出来る立場では無い事は重々承知しているのですが、もしよろしければ、あのお姿を見せて頂く事は出来ないでしょうか？」

あの姿？・・・あ、もしかして、ラフトクランズモードの事を言ってるのか？ ひよつとして、アガレスさんロボット好き？ そうじゃないと女性である姿に興味を持つわけも無いし。

「おい、アガレス。戦場以外で戦装束を纏えなどと、どれほど無礼な願いなのか理解しているのか？」

サイラオーグさんの指摘に、アガレスさんが気まずそうに顔を伏せる。

サイラオーグさん。俺を気遣っての発言はありがたいですけど、別にこだわりとか無いんで見せる事にはなんの抵抗も無いですよ。

「わかりました。ちょっと待ってください」

俺はラフトクランズモードを発動させた。はてさて、どういう反応を見せてくれるのやら。

「・・・うわあ」

アガレスさんの瞳が瞬く間にキラキラと輝き始めた。それを見て俺は確信した。彼女、間違い無くロボット趣味の人だ。ミリキヤス君と三人でロボット談義でもしたらさぞかし盛り上がるだろうな。

「ふむふむ、ここがブースターね。この二基のユニットは何かしら。胸部のこれは発射口に見えるけど。あは、この剣がドライグの尾を斬り飛ばしたという剣ね。それに、これは盾？」

各部について感想をもらしながら、俺の周囲を回るアガレスさん。見えやすいように剣と盾を両手に構えると、彼女は嬉々として写真を撮り始めた。そのカメラどこから出したの？

その後、タイミングを見計らい、俺は彼女に声をかけた。

「もういいですか？」

「はい！ それはもう・・・！」

そう言いかけて、アガレスさんの表情が曇った。

「どうかしましたか？」

尋ねる俺にアガレスさんが答える。父に勧められたロボットアニメの影響で、ロボットが大好きになった事。今では自分で一からオリジナルロボットのプラモデルを作れるようになった事。そして、この趣味に没頭している所為で、男性との浮いた話が一切ない事。

「・・・引いちゃいますよね。こんな女らしくない趣味を持つてる女なんて。でも、私にとってはとても大切なものなんです」

「別に変とは思いませんよ」

「え？」

「趣味は人それぞれ。読書だってアニメだってロボットだって、その人にとってはかけがえのないもの。それを外野がどうこう言う資格なんて無いですよ。少なくとも、俺はあなたの趣味を馬鹿にするつもりは全くありません。俺も好きですからね、ロボット」

むしろ、男の趣味に合わせられる女性って人気になるんじゃないの

？ しかもアガレスさん美人だし。周りの野郎どもは見る目が無いな。俺ならすぐさま彼氏に立候補するのに。：まあ、俺なんかじゃ即「ごめんなさい」だろうけど。

「神崎様・・・」

泣きそうな顔のアガレスさん。その様子が子どもっぽかったので、ついその頭に手が伸びてしまった。

「いつか、あなたの作ったというプラモデルを見せてもらいたいものです」

あやす様に頭を撫でながら俺は彼女にそう言った。そういえば、この世界に来てからロボットアニメというものを全く見ていない。人間界に帰ったらチェックしてみよう。

「・・・はい。必ず・・・必ずお見せします」

アガレスさんが笑う。その笑顔は、とても晴れ晴れとしていて美しかった。自惚れるつもりじゃないが、彼女の抱えていたものを少しは軽く出来たのかもしれない。

・・・と、ここで終われば万々歳だったのだが、そうは問屋がよろさないらしい。

ふいに背筋が寒くなったので振り返ると、そこにはジト目で見つめて来るリアス、朱乃、塔城さんがいた。しかも、支取さんや、匙君を除いた眷属の子達まで同じ様な目線を送って来ていた。

その視線から逃げるように顔を背けると、その先でアスタロトさんと目があつた。彼は相変わらずの柔らかな笑みを浮かべている。それが今の俺にはありがたかつた。彼とは仲良くなれそうな気がする・・・。

「皆様、大変ながらくお待たせいたしました」

そこへ、再びスタッフの方が姿を現した。おかげで感じていた寒気がピタリと止んだ。まさに天の助けだ。ここ冥界だけだ。

「いよいよね。みんな、行くわよ」

リアスを先頭に部屋を出て行くみんな。そんな彼女達に遅れないよう、俺も部屋を後にするのだった。

第五十四話 人の夢を馬鹿にするなあ！

スタッフさんの後ろをホイホイついて行ったら、さっきの待合室よりもさらに広い場所へ辿り着いた。

俺達がいる所からかなり高い所に席があり、そこに見るからに権力持ってそうみなさんがふんぞり返って座っていた。彼らの後ろにも同じような感じで何人か座っていて、さらにその後ろにはサーゼクスさんとセラフオールさんが座っていた。パツと見、大学なんかで見られる階段教室って感じだった。

懐かしいなあ。一番後ろだとほとんど死角だから、何やってもバレなかったんだよな。ゲームしたり、マンガ読んだり、色々やってたヤツ等がいたつけ。

っと、今はそんな事はどうでもいいか。にしても、何だか嫌な雰囲気だ。お偉いさん方から向けられる視線は、明らかにこちらを見下している。これはいよいよ俺の予想通り、圧迫面接が始まるのだろうか。

俺も前世の就職活動中に一社だけやられたけど、あれはキツかった。「キレない。泣かない。口答えしない」が鉄則だったつけ。

今の所、リアス達は特に緊張している様子は見られない。あの年で大したもんだよなあ。逆に、兵藤君なんかは落ちつかないのか、視線をうろうろさせている

・・・と思ったら、他の眷属の女性達に目を向けて鼻の下を伸ばしていた。あれが兵藤君なりの緊張の解し方なのだろうか。

俺も少しだけ目線を上にあげると、セラフオールさんと目が合った。はにかみながら小さく手を振ってくれた彼女にちよつとだけ癒された。

そうしている間に、リアス達若手悪魔六人が一步前に出た。・・・六人？ あ、強姦魔もいるじゃないか。あの野郎、いつの間に復活しやがったんだ。顔がめっちゃ腫れてる。ザマア。

「・・・まずはこうして集まってくれた事に感謝を。この会合は、次世代を担う若き悪魔である貴殿達を見定める為のものである」

真ん中に座っていた初老の男性が威厳に満ちた声でそう切り出した。なるほどね。そういう目的の為にここに連れて来られたってわけか。

「だがその前に・・・過去より蘇りし英雄殿に一言言わせて頂こうか」
「ご立派なヒゲを生やした男性がそう言った途端、サーゼクスさん達を含めた全員の視線が一斉に俺に注がれた。そのプレッシャーたるや尋常ではない。前世の俺なら卒倒してただろう。」

しかし！今の俺はアルⅡヴァン先生！これくらいでへこたれていては騎士（笑）の名折れというもの！耐えろ！耐えてみせろ俺！

「かつて貴殿は三陣営を救った。その事は我らも感謝している。だが、本来貴殿はこの場に存在する事は許されない事は理解して頂こうか」

「さよう。人間ごときがこの会合に立ち合うなど本来あってはならない事である」

「魔王様きつての願いにより、貴殿は同席を事を許されている。それを忘れぬ事だ」

おお、いきなりかまして来たぞ。つまり、「魔王様が言うからいいけど、余計な事すんなよ」って事ですかね？ だけど、そんな事言われなくてもわかってますって。今回の主役はリアス達であって、俺はあくまでオマケなんだから。

「まあ、お三方。そこまで言わなくともよろしいではないか。フューリー殿。私の孫があなたのファンでな。後でサインの一枚でも頂けるとありがたいのだが」

隅っこの方に座っていたお爺さんが優しい声で宥める。圧迫面接なのにそんな優しい事言っているんですか？

「さて、キミ達六人は家柄や実力を合わせて申し分無い次世代の悪魔だ。だからこそ、デビュー前に互いに競い合い、その力をより高め合って欲しい」

サーゼクスさんが六人にそれぞれ視線を向けながらそう口を開く。若者が互いに切磋琢磨するのはいい事だと思うけど、具体的に何する

んだろう。

「我々もいずれば『禍の団』との戦に投入されるのですね？」

え、マジで？ サイラオーグさん達もペロリストと戦うの？ 止めた方がいいよ。特に女性陣とアスタロトさんは連中からしたら格好の得物になるだろうし。強姦魔は・・・むしろヤラれてしまえ。

「それはまだ何も言えない。だが、私としては、出来るだけ若い悪魔達は戦いに投入したくないと思っている」

だよな。流石サーゼクスさん。俺と同じ懸念を抱いているんだろ。妹まで変態の毒牙にかけられる恐れがあるんだから当然か。

「お言葉ですが、若いとはいえ、我らとて悪魔の一端を担っています。この年になるまで先人の方々から多くのご厚意を受けている身でありながら、何も出来ないとなれば・・・」

「サイラオーグ。その気持ちは嬉しい。勇氣も認めよう。だが、ハッキリ言わせてもらえれば、それは無謀というものだ。万が一にも、キミ達を失うわけにはいかないのだ。次世代を担うキミ達は、キミ達自身が思っている以上に、私達にとってはかけがえのない宝なのだから。焦らず、ゆっくり、確実に成長して行って欲しいのだよ」

厳しくも優しいサーゼクスさんの言葉に、サイラオーグさんも納得したのか、それ以上言う事は無かった。

にしても、今のサーゼクスさんの言葉には「重み」があつたな。グレイフィアさんに殴られたりリアスをからかったりどこかひょうきんな部分があるけれど、やっぱり魔王様なんだなあ。

それから、お偉いさん方の何人かが、冥界の歴史やら自分達の事やらを語り、サーゼクスさんがレーティングゲームについて色々説明をしたりして時間が過ぎて行った。

それらを後ろから眺めながら、俺は思った。マジで俺必要無くない？ 冥界の事やらレーティングゲームの事やら、聞けば聞くほど自分が場違いな気がしてならない。サーゼクスさん、何の目的があつて俺をここに連れて来たんだらう。

いつその事、オルゴン・クラウドで抜けだそうかな・・・とか考えていたら、ようやくこの長かった会合が終わりに差しかかろうとし

ていた。

「さて、長い話に付き合わせてしまつて申し訳無かつた。これで最後だ。冥界の宝であるキミ達に、それぞれの夢や目標を語ってもらおう」

「俺の夢は魔王になる事・・・それだけです」

最初にそれに答えたのはサイラオーグさんだった。迷い無く、サーゼクスさんを正面から見据えながら堂々と言い切つた彼の背中には滅茶苦茶カツコよく見えた。

「ほお、大王家から魔王が出るとしたら前代未聞だな」

つて事は、もしその夢を実現したら、掛け値無し of 偉業という事になるな。夢はでっかくか。・・・正に漢だな。

「私はグレモリーの次期当主として、これから先どんな困難が立ち塞がろうと、〃誇り〃だけは決して失わない様に生き、そしてレーティングゲームの各大会で優勝する事が近い将来の目標です」

二番手はリアス。家と誇りを大事にする彼女らしい目標だった。後ろに控えていた兵藤君の目が燃えている。きつと彼も今のリアスの言葉に触発されたのだろう。

それから、アガレスさん、アスタロトさん、強姦魔の順でそれぞれの夢や目標をサーゼクスさんに伝える。以外にも、強姦魔の夢がまともだった。最も、それでヤツを許すつもりはないが。

そうして、いよいよ最後の一人である支取さんが自分の想いを語り始めた。

「私の夢は・・・冥界にレーティングゲームの学校を建てる事です」

学校？ レーティングゲームの？

「レーティングゲームを学ぶ場所ならばすでにあるはずだが？」

さっきのヒゲ男爵が指摘するが、支取さんは淡々と続ける。

「それは上級悪魔と一部の特権階級の悪魔のみしか行く事が許されない学校の事です。私が建てたいのは、下級悪魔、転生悪魔も通える分け隔ての無い学び舎です」

差別の無い万人に開かれた学校か。・・・もの凄く立派な夢じゃないか。まだ若いのもう次代の教育の為に尽力しようとするなんて、

支取さんらしいな。

きつと支取さんはいい先生になるんだろうな。教え方も上手いし、それこそ、さつきサーゼクスさんの言った『宝』である子ども達の実力が増せば、冥界の為になるんだろうし。

頑張れ、支取さん。俺はキミの夢を応援・・・。

「はははははははははは!!」

感動していた俺を現実に戻したのは、けたたましい笑い声だった。声の正体は、嘲笑を顔に張り付けているお偉い方。

「それは無理だ!」

「これは傑作だ!」

「なるほど! 正に夢見る乙女というわけですな!」

「若いというのはいい! しかし、シトリー家の次期当主ともあるう者がそのような夢を語るとは! ここがデビュー前の顔合わせの場でよかったというものだ!」

.....

あ?

「ソーナ・シトリー殿。下級悪魔、転生悪魔は上級悪魔たる主に仕え、才能を見出されるのが常。その様な養成施設を作っては伝統や誇りを重んじる旧家の顔を潰す事となりますぞ?」

「さよう。悪魔の世界が変革の時期に入っているのは我々も認めている。だが、変えていいものと悪いものの区別くらいはつけてもらいたい」

「たかが下級悪魔に教育など、悪い冗談としか思えんな」

んー? 俺の耳がおかしくなかってなかったら、コイツ等、今、支取さんの夢を馬鹿にしやがったのか? あんなすばらしい夢を?

そつちから夢を聞かせるとか言いやがったくせに?

・・・ザケンナ。

圧迫面接である以上、キツイ事を言うのはわかる。だけど、その人の持つ大切な夢を侮辱するなど、面接以前に人として絶対にやったら

駄目だろうか・・・！

叶うなら今すぐ叫びたい。謝れと。支取さんの夢を馬鹿にするなと。だが、悲しいかな。俺は部外者。それに、ここに来る前にリアスから平常心でいると言われている。

なので、せめてもの抵抗とばかりに、さつき笑いやがった連中に向かってメンチビーム（妄想）を放ってやった。するとどうだろう、見る見る内に連中の顔が青ざめ始めたでは無いか。

それどころか、他の皆さん、さらにはリアス達までもが同じように顔を青くしている。どうしたんだろう。誰かエアコンの温度でも下げたのかな？

S I D E O U T

サーゼクスSIDE

ソーナ君の夢。中々に興味深い物だった。もしも本当に彼女が言う学校を建てられたら、今よりももっと悪魔の可能性は広がっていくだろう。

しかし、彼らには困ったものだ。この会合の目的を忘れてしまったのだろうか。若手の夢を笑うなど許されない事だ。これで彼女が折れてしまったらどう責任を取るつもりなのだろう。最も、ソーナ君に限ってそれは無いだろうが。

隣に座るセラフォルーなんか今にも彼らに噛みつきそうだ。割とシャレにならないので、そろそろ終わりに・・・。

——その瞬間、ソーナ君の夢を笑った者達の首に剣が突き付けられた。

「「ッ!?!」」

誰もが目の前の光景に目を見開く。もちろん、剣は本物では無い。

「彼」の放った強烈な殺気が、幻影となって現れたのだ。

所詮は幻・・・とはとても言えない。濃厚な殺気は、下手をすればそれだけで対象の命を奪い取ってしまう。光を反射して輝く刀身は、触れる物全てを一切の容赦無く斬り裂いてしまいうさだ。

リーア達が皆例外無く震えている。離れている僕ですらこれだ。

傍にいるあの子達がああなるのも無理は無い。むしろ、よく気絶しないものだ。

殺気の正体である“彼”……神崎君は、かつて無い程の鋭い視線を彼らに向けていた。彼は怒っているのだ。先程、自分に対して色々言われた時には全く動じていなかった彼が、友の夢を侮辱された事に對し、その感情を静かに爆発させていた。

彼らは神崎君を……フューリーを侮り過ぎたのだ。所詮は人間？ 過去の人物？ それはとんでもない思い違いだ。彼がその気になれば、ここにいる者達など、数秒も経たずに殺されるだろう。

鬪争の世界で戦い続けた騎士。彼の世界では理不尽に夢を奪われるなど日常茶飯事だったのかもしれない。だからこそ、夢を持つ者を想い、それを侮辱する者は許せないのだろう。

それに、以前リーアも言っていた。

『夢に大きいも小さいも無い。どんな夢だって、その人にとっては何かがえの無い物だ』

神崎君から言われたというその言葉が、彼が夢というものをどれだけ大切にしているのかを証明している。

「フユ、フューリー……殿。何か言いたい事でも？」

先程までの高圧的な態度を一変させ、一人が尋ねる。だが、神崎君は答えない。その代わり、僕の方へ視線を向けて来ていた。それが発言の許可を求めているのだとすぐにわかった。

頷く僕に、神崎君も頷きながらついに口を開いた。

「別に何も。ただ、今の支取さんの素晴らしい夢のどこに笑う要素があったのか気になっただけです」

落ちついた口調は、逆に恐怖を増幅させる。現に、目を合わせられた一人が大量の冷や汗を流している。

「若手は“宝”……。そう言ったのはどちら側ですよ？ その“宝”の夢を笑うとはどういうつもりですか？ それに、支取さんの夢は彼女だけでなく、悪魔全体の為になるものじゃないんですか？」

「そ、それは……」

「もちろん、伝統も誇りも大事なものと承知しています。長い時の

中で築かれていったであろうそれらを捨てる事が難しい事もわかっていきます。だからと言って、新しい可能性を潰す権利は誰であろうと無いんじゃないですか？」

そこで一度言葉を切り、神崎君は無表情だった顔に怒りを込めて再度口を開いた。

「色々言わせてもらいましたが、俺が真に言いたいののはこれだけです」
——俺の大切な友人の夢を侮辱した貴様等を、俺は絶対に許さない。

そう締めくくった神崎君が下がる。

誰も言葉を発せない。殺気の剣は未だ消えていない。もし、これらの対応を間違えれば、彼らは間違い無くその命を散らされるだろう。

「フューリーさん……。ありがとうございます」

セラフォルー。嬉しいのはわかるが、今は彼らの心配をしてあげなさい。

僕達が固唾を飲んでも守る中、動いたのは彼らだった。

「……ソーナ・シトリー殿」

「はい」

名前を呼ばれ、一步前に出たソーナ君に対し、彼らは迷い無く頭を下げた。

「無礼を詫びよう。フューリー殿の言う通り、どんな夢であろうとそれを否定するなどあってはならなかった。応援する事は出来ないが、金輪際、貴殿の夢を笑う事はしないと誓う」

まさか謝られるとは思わなかったのか、ソーナ君の表情が驚きに染まる。そしてその直後、幻影の剣が静かにその姿を消していった。どうやら、今の対応が「正解」だったようだ。

ひとまず……。一件落着だろうか。では、落ちついた所で、一つ提案をしてみようかな。

サーゼクスSIDE OUT

IN SIDE

・・・なんか、気付いたらお偉方が支取さんに謝ってた。その過程の記憶が無いって事は、もしかしなくてもまたプッツンしてしまったのかもしれない。俺ってこんなに怒りっぽかったっけ？

謝罪タイム終了後、サーゼクスさんから提案により、リアスと支取さんでレーティングゲームをする事になった。予定は人間界の時間で八月二十日。

リアスも支取さんもやる気満々だった。二人にはぜひとも頑張つて欲しい。可能なら俺も当日に応援に行きたいけど・・・。

その他細々とした説明が済んだ所で、会合は終了した。なんか、数人のお偉方が気分が悪いと言って早々と退散していった。その中には、支取さんを笑った連中も入っていた。

アスタロトさんや強姦魔が会場を後にする中、リアス、支取さん、サイラオーグさん、そしてアガレスさんが輪になってそれぞれ会話していた。

「リョーマ・・・。あれだけ念押ししたのに、やってくれたわね」

リアスが呆れたように溜息を吐く。心外だ。メンチビームを放つた以外、俺は特に何もやってないよ。・・・プッツンした後は知らんが。

「サーゼクス様のおっしゃった通りだ。俺も井の中の蛙だったという事か」

サイラオーグさんが含みのある笑みを向けて来た。うん、さっぱりわからない。

「で、でも、俺、嬉しかったツス。先輩が会長の夢を守ってくれて」

匙君が涙目で俺を見つめて来る。彼は支取さんの事を凄く尊敬してるから、悔しかったんだろう。

「そうですね。神崎君、先程はありがとうございました」

微笑む支取さん。そんな彼女に、俺はかつての恩師の言葉を伝える事にした。いつも熱くて、生徒の事を第一に考えていたあの人の、“若手”に相応しいあの言葉を。

「・・・夢にときめけ。明日にきらめけ」

「え？」

「俺の恩師の言葉だ。支取さん。誰がなんと言おうと、キミの夢は素晴らしいものだ。キミならいつかきつと立派な学校を建てられると信じている。微力かもしれないが、俺に役に立てる事があるならばいつでも声をかけてくれ。何でも協力するから」

心からの応援を込めた笑顔で支取さんにそう告げる。

「ふふ、その時はぜひお願いしますね。それと今の言葉、学校を建てた暁には、標語に使わせてもらって構いませんか？」

「それはいい。あの人も喜ぶよ」

「それじゃ、私達もそろそろ帰りましょうか。ソーナ、次はゲームの会場で会いましょう」

「ええ。その時を楽しみにしています」

最後に握手を交わすリアスと支取さん。そうして、会場を出ようとした俺達・・・正確には俺をアガレスさんが引き止めた。

「あの、神崎様。冥界ではどちらにお住まいに？」

「リアスの実家にお世話になっていきますけど」

「で、では、いずれグレモリー家に使いを出しますので、その時はぜひとも我が家にお越し頂けないでしょうか。その・・・私の作品を見て頂きたいのですが」

お、それってさつき言ってたプラモの事か？ それは是非とも見たいな。

「わかりました。楽しみにしていますね、アガレスさん」

「は、はいー」

そんな嬉しそうでいられるところちも嬉しい。ひよつとして、誰かに作品を見せるのが初めてとか？

「行くわよ、リョーマー！」

リアスに強引に腕を組まれ、俺はアガレスさんをその場に残し、会場を後にした。

「もう、あなたのそうやって呼吸するように口説く癖、治して欲しいわ」

リアスの小さな呟きは俺の耳に届く事は無かった。

第五十五話 つかの間の休息

「フューリーさーん！」

帰りの電車を待っていると、セラフオルーさんが手を振りながらこちらへ駆け寄って来た。さっきまでキツチリしたスーツ姿だったのに、今は例の魔法少女コスを身に纏っている。

「はあ、よかったあ。間に合った」

「セラフオルー様。どうなされたのですか？」

「リアスちゃん。ちよつとだけフューリーさんとお話しさせてもらっていいかな？」

彼女の登場に不思議そうな顔をするリアスに、セラフオルーさんが目的を話す。わざわざ追いかけて来てまでする話なんて・・・は、もしや、先程の会合でメンチビームなどと失礼な真似をしでかした俺に一言物申しに来たのだろうか。

「ええ。構いません。でしょ、リヨーマ？」

「・・・ああ」

ビクビクしながら頷く。やってしまったものは仕方ない。大人しく怒られる事にしよう。

「ありがとう。それじゃ、フューリーさん、こっちにきて」

そう言つて、みんなから少し離れた所へ移動した所で、セラフオルーさんが再度口を開いた。その顔に、とても嬉しそうな笑みを浮かべながら。

「あのね、フューリーさん。さつきはソーナちゃんを、ソーナちゃんの夢を守ってくれてありがとう。私、とっても嬉しかった！」

あれ？ 説教どころかお礼言われてしまったぞ。メンチビーム撃つてからの俺って何しでかしたんだろう。誰かまた録画とか・・・してないですよ。

「ソーナちゃんの夢、今の冥界じゃ叶えるのは大変だと思う。上級悪魔の多くは、あのオジサマ達みたいな考えの人がほとんどだから」

もちろん、私は応援するけどね！ と付け加え、セラフオルーさんの言葉は続く。

「でも、その中でフューリーさんみたいに真っ直ぐに応援してくれる人がいる事は、あの子にとつて凄く励みになると思うの。だから、これからもどうか、ソーナちゃんを応援してあげてくれないかな。あなたに見守ってもらえれば、ソーナちゃんもきつと頑張れるはずだから」

「もちろんです。彼女の夢はとても尊い。俺は、俺に出来る全力で彼女を応援します」

俺に出来る事なんてたかがしれているだろうが、それでも、あんな立派な夢を持つ友人の為なら、何だつてやる覚悟はある。それが、彼女への恩返しにもなるだろうし。

「えへへ、聞くまでも無かったかな。フューリーさんなら、きつとそう言ってくれるつて思つてたから。それでね、これは個人的に興味があつて聞くんだけど、フューリーさんの夢つて何？」

夢・・・か。正直、俺にはリアスや支取さんの様な明確な目標や夢なんて無いんだよな。それこそ、こんな人外魔境な世界で毎日生きて行くのに精いっぱいだし。

「そうですね・・・。多くは望みません。人並みの幸せで充分です」

「人並みの幸せ？」

「ええ。職に就いて、生涯のパートナーを見つけて、天寿を全うする。そんなありふれた夢です」

リアス達に比べたら普通過ぎる夢。けど、俺にとっては大切な夢だ。前世じゃ二番目と三番目を叶える事無く逝ってしまったからなあ。この体なら三番目は叶えられそうだけど、二番目は・・・うん、頑張ろう。具体的にどうしたらいいかさっぱりだけど。

「・・・そっか。そうだよな。フューリーさんは、そんな当然の夢すらも叶えられない様な世界からやつて来たんだもんね・・・」

セラフオールさんが神妙な顔で呟く。その様子は、俺の夢を肯定してくれているようで、ちよつと嬉しかった。

「わかった！ 私に任せて、フューリーさん！ このレヴィアたんが、あなたの夢を叶える手助けをしてあげるね！」

ビシッとポーズを決めたと思つたら、すぐにそれを崩して、胸の前

で両手の人差し指をつつき始めるセラフオルーさん。手助けってなんだろう。・・・就職先でも紹介してくれるのだろう。

「そ、それでね、パートナーが欲しいっていう夢なら、今すぐでも叶えられるんだけど・・・」

『まもなく、列車が参ります。危険ですので、白線の内側までお下がりください』

その時、ホームに響くアナウンスが、セラフオルーさんの言葉をかき消した。

「すみません、セラフオルーさん。アナウンスの所為でよく聞こえなかった・・・ん・・・」

俺の言葉は最後まで続かなかった。何故なら、セラフオルーさんの様子が豹変したからだ。

ゴゴゴゴゴ!

そんな効果音が今のセラフオルーさんには相応しかった。先程までの可愛らしい顔を無表情に変えその場に立つ彼女はまさに「魔王」だった。

「フューリーさん・・・。ちょっと用事が出来たから、私は行くね」

「わ、わかりました。こっちも電車が来たみたいですから失礼します」

俺は逃げるようにセラフオルーさんの横を通って、たった今ホームに入って来た電車に向かった。

「ふふふ、女の子の一世一代の告白を邪魔してくれたお邪魔虫さんには、きつつくいお仕置きをしてあげないとね」

よくわからんが、誰かが彼女を怒らせてしまったようだ。心の中でその誰かに合掌しつつ、俺はグレモリー領へと舞い戻るのがだった。

・・・
・・・
・・・

「なるほどねえ、シトリー家か」

リアス宅へ戻った俺達を迎えてくれたのはアーシアと黒歌、そしてアザゼル先生だった。考えてみれば、サーゼクスさんが会合の場にいるんだから、話し合いだって終わってたはず。だからこの人がここに

いるのも当然か。

「人間界の時間って言うところ……今から計算して二十日間か」

「やっぱり修行ですよね？」

尋ねる兵藤君に、先生は当然だとばかりの表情で頷く。

「早速明日から開始するぞ。すでに各自のトレーニンングメニューは考
えてある。フューリー。お前にも手伝ってもらおうぞ」

「わかりました」

それ以外にも、確かカテレアさんに会う事になってるし、アガレス
さんのお家にもお邪魔する事になるかもしれない。おお、今の俺って
ひよっとしてリア充ってヤツでは!?

……はい、言ってみただけです、すみません。

「でも、俺達だけ墮天使総督に加えて、先輩にまで協力してもらって
いんですかね」

「俺は悪魔側にデータを渡した。天使側もバックアップするとかいう
話だ。あとは若手の連中のプライド次第だな。真に強さを欲するの
なら、なんくだらねえもんには拘ってるヒマも無いだろうが」

「……どんなに無様だって、最後に勝てばいい」

「え？」

「ある人物の言葉だ。彼はさらにこう続けた。無様も晒せない負け犬
が、一丁前に吠えるなど」

ふと、今のアザゼル先生の言葉で思い出した。カツコイイセリフだ
けど、あの絶望しか無い世界で戦う『彼』だから言えるセリフだよ
な。言った後で何だが俺が口にしても寒いだけだわ。

「中々に的を射た言葉だな。それはそうと、フューリー。シトリー側
もセラフオルー経由でお前に協力を要請して来るかもしれない。判
断は任せる。好きにいな。どうやら、あつちに手を貸す『理由』も出
来たみたいだしな」

いや、それは無いでしょう。むしろ、俺が行ったら邪魔にしかなら
ない気がする。

「話は以上だ。明日は朝食後に庭に集合しろ。そこで改めて修行の内
容について説明する。気合い入れろよ」

各々に気合いの籠った返事をするリアス達。そこへ、狙いすましたかのようにグレイフィアさんが姿を現した。

「お話がまとまった所で、温泉のご用意が出来ましたのでよろしければご利用ください」

温泉って個人の家にある物なんですか？ 冥界じゃそれが普通なの？ それともこの家が凄過ぎるの？ そこんところどうなんですか、グレイフィアさん。

「お、いいねえ！ やっぱ冥界といえは温泉に限る」

なるほど、つまり冥界＝温泉というわけですか。・・・いや、なるほどじゃねえよ。何でその二つが＝で結ばれてるんだよ。もう今後何があるうとも「冥界だから」で通していいんですかね。

「冥界で屈指の名家であるグレモリーの私有温泉とくれば、名泉も名泉だろう。今から楽しみだぜ」

ウキウキ顔のアザゼル先生に触発されたのか、みんなもそれぞれに温泉についてしゃべりだした。

「そうね。会合で疲れちゃったし、早速入ろうかしら」

肩に手をやりながらそう言うリアス。確かに、この中で精神的に一番彼女が疲れているだろう。

「うふふ、この温泉に入るのも久しぶりですわね」

いつもの微笑みを浮かべる朱乃。久しぶりって事は、何回か入った事があるんだろうな。

「白音、一緒に背中を流しっこするにや」

そう言いながら、手をワキワキさせる黒歌。明らかに洗う動きじゃないよね。

「いいですけど。・・・変な所触らないでくださいね」

警戒した様子で黒歌に返事をする塔城さん。黒歌、もしや前科があるのか？

「ふむ、ならアシア、私達も互いに背中を洗ってみるか？」

そんな姉妹に触発されたのか、横のアシアに提案するゼノヴィアさん。元々外国人だった彼女は、もしかしたら初温泉になるのかな。

「はい、ゼノヴィアさん！ 精一杯頑張ります！」

妙に気合いを入れているアーシア。何事も一生懸命な彼女らしい。きつとゼノヴィアさんの背中はずルズルピカピカになるだろう。

「そういう事なら、僕もイツセー君の背中を……」

それが当然と言わんばかりに兵藤君を見つめる木場君。……うん、他意は無いよね。

「だが断る！ お前にだけは絶対に背中を任せんぞ！」

全身で拒否の意を示す兵藤君。本来、背中を任せられる友人のはずなのに。

「うう……そ、そんな、神崎先輩と裸の付き合いなんて、僕には難易度が高すぎますう……」

ヴラディ君、キミも男でしょうが。それと、俺だけじゃないからね。兵藤君も木場君もアザゼル先生もいるんだからね。てか、何で俺の名前を引き合いに出すの。なんか俺が危ない人みたいな感じじゃないか。

そんな感じで、俺はそれぞれの会話や言葉に心の中で感想を漏らした。なんだろう、以前のプールを思い出してしまった。

最も、今回は露出強な「彼女」はいないから、ゆつくりのんびり温泉を楽しめるはずだが。……はずだよな？

というわけで、俺達はそれぞれの部屋に一旦戻り、着替えを持って温泉へと向かうのだった。

第五十六話 壁に〇〇

グレイファイアさんが言っていた温泉は、庭の一角にひっそりと位置していた。純和風の造りは風情があつていいと思うが、冥界で日本を感じられるなんて不思議な感覚だな。

「旅ゆけば〜」

乳白色の温泉に浸かっているアザゼル先生が上機嫌に歌っている。相変わらずいい声だ。そういえば確か、歌を歌うなら風呂場とかで歌った方がいい声になるって聞いた事があるな。喉が乾燥しないからだったっけ？

「生き返るぜえ。これでは酒と女がいれば完璧なんだがなあ」

いや、先生としてそのセリフはどうかと思いますよ。木場君もどう答えたらいいのか困ったのか、曖昧な笑みを見せている。

「そういうえば、兵藤君とヴラデイ君は？」

「二人ならあそこですよ」

木場君が指したのは脱衣場と温泉を繋ぐ入口。そこにはヴラデイ君の腕を掴んでいる兵藤君がいた。恥ずかしがっているヴラデイ君を兵藤君が説得中といったところだろうか。

それはいいんだが、ヴラデイ君。キミは何故に胸元までタオルで隠してるのかな。もう見た目完全な女の子なんだが。事情を知らない人が見たら兵藤君が無理矢理女の子を男湯に引きこもうとしている様にしか見えない。

「だから、いつまでも恥ずかしがってたつてしょうがないだろ」

「だ、だって……。うう、こっちは見ないでくださいよお」

「というか、何だよその格好！ 男なんだから胸を隠すな！ いくら女装癖があるからつてそこまで女の子みたいにされたら戸惑うわ！」
「ひっ！ ま、まさか、イツセー先輩、僕の事をそんな目で……！」

ブチ！

あ、キレたな……。

「吸血鬼一体入りまああああああつす!!!」

突如、ヴラデイ君を抱え上げた兵藤君が、そのまま彼を温泉の方へ

放り投げて来た。狙ったつもりではないだろうが、綺麗に俺の方へ飛んで来たので、反射的にキャッチする。

「っと、大丈夫か、ヴラデイ君」

「うーん・・・は、はうあ!? か、かかか神崎先輩!?!」

所謂お姫様抱っこの形で俺の腕に収まったヴラデイ君の顔が瞬く間に赤く染まる。まだお湯に浸かって無いのに早くね? 場の雰囲気当てられたのか?

「兵藤君、流石に危ないぞ」

「すみません、先輩。ですが、反省はしていますが、後悔はしていません!」

何かをやり遂げたかのように晴れ晴れとした顔を見せる兵藤君。いや、俺にどう返せと? まあいい、とにかくヴラデイ君を降ろそう。

「降ろすぞ、ヴラデイ君」

「は、はいいー!」

降ろすやいなや、肩までお湯に沈めながらススッと離れた場所へ移動するヴラデイ君。左胸に手を当てながら深呼吸している。やつぱり投げられたのが怖かったのだろう。

とりあえず、騒ぎも一段落したので、改めて全員で温泉に浸かる。ああ・・・気持ちいい。温泉なんて何年ぶりだろうか。

しばし無言の時が続く。そうになると、必然的に俺達以外・・・女湯の方からの声が耳に届いて来た。

『リアスったら、また胸が大きくなったのね。ちよつと触ってもいいかしら?』

『え? 別にそんな・・・ふあつ! ちよ、ちよつと、なんで先つぽまで摘むのよー!』

『うふふ、相変わらず感度がいいわね』

『どれどれ。私にも触らせるにや』

『く、黒歌・・・ひあつ!?! や、止め・・・そこは関係無いでしょ!』

『ほくれほれ。ここかにや? ここがいいのかふぎやつ!?!』

『何をやっているんですか、姉様』

『まあまあ、ここは無礼講といきましょうよ、小猫ちゃん?』

『ひにやつ!? あ、朱乃先輩、そこは……!』

『はあ……羨ましいです。私もお湯に浮くくらい大きければ……』
『アーシア。私がクラスメイトから聞いた情報では、揉んでもらうと大きくなるそうぞ。どれ、私が試してみよう』

『ちよ、ゼノヴィアさ……きやうつ!? あ、だ、駄目ですう、こんなのお……』

『む、そういえば、「好きな相手」というのが抜けていたな。まあいい、私のと違って、アーシアのは触り心地が素晴らしい。もう少し堪能させてもらおう』

……あー、その、なんだ。温泉だから気が大きくなって、普段やらない様な事をやっても仕方ないよな。ここは聞かなかつた事にしてあげるのが優しさだろう。

「ところで兵藤く……」

空気を変えたかったので、適当に話を振ろうとして兵藤君の方を向いたら……そこにはおびただしい量の鼻血を両方の鼻の穴から噴き出している兵藤君がいた。

「兵藤君!？」

「……先輩。教えてください。俺はあと何回鼻血を出せばいいんでしょうか。ドライグは俺に何も言っってはくれないんです……教えてください、先輩」

そりやそんな事聞かれてたってドライグさんも答えられないよ! いいからまずは温泉から出て鼻血を止めようよ!

意識が朦朧としているのか、意味のわからない事を口にする兵藤君を温泉から引つ張り上げ、『友情』をかける。これで、彼の鼻血を止めたのは二回目だ。にしても、精神コマンドをこんな使い方していいのかなあ……。

「情けねえな、イツセー。あの程度の内容で鼻血なんぞ、いかにも童貞らしい反応だぜ」

呆れ顔でそう言うアザゼル先生に、回復した兵藤君が反論する。

「し、仕方ないでしょ。むしろあれで反応しない方がおかしいですつて!」

「その様子じゃ、女の胸を揉んだ事もつついた事も無さそうだな」

「つ、つつく!? それってどこを!?」

「乳首に決まってるじゃねえか」

「なん・・・だと・・・!?」

猥談を始める兵藤君とアザゼル先生。似た者同士とでも言えはいのか、とにかく、ああなった二人は止められないし、そつとしておこう。

「そういえば、先輩。ここの温泉って飲めるらしいですよ。ほら、あそこ・・・」

会話に入らない俺を気遣ってか、木場君がそう言って視線を向けた先には、お椀みたいにくりぬかれた大きな石に、温泉がなみなみと注がれ、傍に柄杓が数本置かれていた。

「飲んでみますか、先輩?」

「そうだな、せっかくだし、ヴラディ君はどうする?」

「じゃ、じゃあ、僕も」

という事で、二人を連れて飲泉場に向かう。背後から「乳首は玄関のブザーじゃないんですよ!」という兵藤君の声と、「いや、あれはブザーさ。押すと鳴るんだよ・・・いやーんってな」と返すアザゼル先生の声が聞こえて来た。なんちゆう会話だ。

「そうだ。フューリー。お前に聞きたい事があるんだが」

「何ですか?」

柄杓でお湯を掬いながら、アザゼル先生の聞きたい事とやらを待つ。すると、彼はとんでもない事を聞いて来た。

「お前、リアス達と同棲してるみたいだが、もう一人くらい抱いてやったのか?」

「ぶっ!?」

予想だにしない問いかけに、俺は口の中のお湯をぶちまけた。そのせいで、目の前の木場君の顔にそれがかかってしまった。

「す、すまない、木場君!」

「・・・先輩の出した白濁液が僕の顔に」

アウツ! その表現完全にアウツ! お湯がかかったただけだから

！ ただの乳白色のお湯だからああああああ!!!

「ア、・アザゼル先生！ 何て事を聞くんですか!？」

「別におかしくはないだろう。男と女が一つ屋根の下で暮らしてんだ。そういう流れになるのが普通だろう」

「ど、どうなんですか、先輩！ 俺、気になります!」

キミはどこその古典部か！ とにかく、勘違いしているようだからハッキリ言っておかないと。彼女達にも迷惑がかかるし。

「どうも何も、俺と彼女達はそんな関係じゃないですよ」

「お前、ひよつとしてあれか？ 恋人以上の関係にならないと抱く気にならないとかいうヤツか？」

「それが普通じゃないんですか？」

他はどうか知らないが、俺の中の倫理感に当てはめれば、それが当然といえる。

「イツセーもだが、お前も大概だな。いい女が身近にいるのに抱かないなんて逆に失礼だろうが！ グダグダ考えている暇があれば抱け！ 抱いてから考えろ!」

おかしいな、何で俺の方が怒られてるんだろう。というか、抱け抱け言わないでくださいよ恥ずかしい。

「それとも何だ。お前にとつてリアス達は女としての魅力が無いとでも言うのか？」

「そんなわけないじゃないですか。彼女達はみんなとても魅力溢れる素敵な女性だと思ってますよ」

そこだけはキツチリ明言させてもらおう。むしろ、彼女達に魅力を感じない男がいたら見てみたいわ。

「なら、語ってもらおうか。お前の言うリアス達の魅力ってヤツを」「いいですよ」

売り言葉に買い言葉。俺はアザゼル先生に誘導されるように、リアス達の魅力について語り始めた。

この時、俺がもう少し冷静だったら気付いていただろう。アザゼル先生のニヤついた表情が何を意味していたのか。

そして・・・さつきまで騒がしかった女湯からの声が全く聞こえない

くなっていた事に。

第五十七話 知らず知らずに公開処刑

リアスSIDE

朱乃及び黒歌によるセクハラから逃げ出し、私は息を整える。最早スキンシップを超え、完全に愛撫と呼べるものだった。

特に黒歌はやり過ぎよ。急に太股を擦って来たかと思ったら、そのまま手を足の付け根の方へ移動させて来たし。もし小猫が止めてくれなかったら、絶対いく所までいったわね。

：まあ、抵抗もせずにはすがままだった私も悪いのだけれど。朱乃も黒歌も「上手い」のよね。・・・何がとは言わないけど。

朱乃は朱乃で、ターゲットを小猫に移してイタズラしてるし。視線を移せば、アジアもゼノヴィアに胸を揉みしだかれていた。

それにしてもアジアって、その、けっこう乱れちゃうのね。以前何かの本で、普段大人しい娘ほど、行為の時は激しいって読んだ事あるけど。

——ぶ、部長さあん・・・！

「・・・って、何考えてるのよ私！」

イツセーじやあるまいし、そもそも私は女よ！　こんな妄想するなんて、ひよつとしてのぼせちゃったかしら。

『兵藤君?!』

突如、男湯の方からリョーマの驚いた様な声が聞こえて来た。おそらく、今の私達の声はあちらに筒抜けだったのだろう。その結果、イツセーが鼻血でも出しちゃったんでしようね。

リョーマはどうだったのかしら。興奮した？　鼻の下が伸びちゃった？　それとも・・・。

(・・・駄目ね、想像出来ないわ)

というより、彼のそんな顔なんて想像でも見たくないわ。変な考えを追い出す様に、私は頭を振った。

「はあ・・・はあ・・・」

「ん・・・あ・・・」

ようやく解放された二人が、息も絶え絶えといった感じで肩を揺ら

している。上気した頬が何ともいえない扇情さを醸し出していた。

「ちよつと、朱乃もゼノヴィアもやり過ぎよ」

「うふふ、ゴメンなさいね、小猫ちゃん」

「すまない、アーシア。止められなかった」

「もうスキんシップは禁止よ。大人しく温泉を楽しみなさい」

温泉はのんびりゆったり楽しむもの。そう、そのはずだった……。『お前、リアス達と同棲してるみたいだが、もう一人くらい抱いてやったのか?』

なのに、アザゼル先生の放ったこの一言が全てを破壊してしまった。ピシリ! と、女湯の時間が一瞬にして停止する。

『ぶっ!?!』

リョーマが吹き出した。たぶん、飲泉を口に含んでいた所へ聞かれたんでしようね。けど、そんな事は全くどうでもいい。いま重要なのは彼の答えだ。私の知らない間に、他の娘とそういう関係になっていたらしたら、リョーマの性格からして、そのまま結婚という流れに!

リョーマは無自覚に女性を口説く。そこに悪意が無い分余計性質が悪い。本人の知らない内に着々とハーレムを築いている。ハーレムってイツセーの夢じゃなかったの? それとも、男はみんなハーレムを目標にしているのかしら。

彼の競争率はこれからも益々増えて行くでしょうね。だからこそ、同じ家に住むというアドバンテージを存分に活かして距離を縮めようと思ったのに……。まさか、ケンカして家出して来たと思われてたなんて……。思い出すだけで燃え尽きそうだわ。

話が逸れちゃったわね。さあ、リョーマ。なんて答えるの……。! 『どうも何も、俺と彼女達はそんな関係じゃないですよ』

という事は、まだ誰とも結ばれて無いのね。ああ、よかった……。のかしら? 今の言い方だと、私達とそう言う関係になるつもりが無いっていう風に受け取れるけど。

『それとも何だ。お前にとってリアス達は女としての魅力が無いとでも言うのか?』

『そんなわけないじゃないですか。彼女達はみんなとても魅力溢れる

素敵な女性だと思ってますよ』

「「「ほっ・・・」」」

私、アーシア、黒歌、小猫の溜息が綺麗に重なる。って、ちょっと待って。小猫の反応おかしくない？ この子、別にリヨーマに対して特別な感情を持っている様には見えないのに。

『なら、語ってもらおうか。お前の言うリアス達の魅力ってヤツを』
『いいですよ』

なんか妙な流れになって来たわ。けど、これはいい機会ね。リヨーマが私を、私達をどう思っているのか、存分に話してもらいましょう。
「部長、それにアーシア達まで。そんなに仕切りに近づいてどうし・・・」

「ゼノヴィアさん。ちょっと静かにしててください」

アーシアが未だかつて見せた事が無い表情でゼノヴィアを見つめた。というか睨んだ。

「ご、ごめんなさい」

雰囲気もといプレッシャーに圧されたのか、慌てて謝罪するゼノヴィアだけど、すでにアーシアの目は彼女では無く仕切り・・・その先にいるであろうリヨーマに向けられていた。

「まあまあ、落ち着いてくださいな、アーシアちゃん。ほら、ゼノヴィアちゃんもいらっしやい。もしかしたら面白い話が聞けるかもしれないわよ」

ちやつかり最前列に陣取っている朱乃がゼノヴィアを招き寄せる。そうして、全員が無言で耳を澄ませる中、リヨーマとアザゼル先生の会話が続けられる。

『そんなじゃ、まずはリアスだな』

『彼女はとても誇り高い女性です。どんな時でも常に誇りを持って行動しようとする彼女は、見ていてとても気持ちがいいですね』

誇り・・・か。あなたはいつもそう言ってくれるけど、それはあなたのおかげよりヨーマ。あなたという甘えられる人がいるから、私は立っていられるの。イツセー達の『王』として、そしてあなたに相応しい女になる為に。

『ああ、それと、彼女の笑顔はとても素敵だと思います。いつもの大人びた『王』の微笑みも美しいと思いますが、やはり時たま見せる少女らしい『リアス』の笑顔の方が俺は好きですね』
「ツ~~~~~!」

マズイ、私、今絶対ニヤけてる！　こんな顔、朱乃達に見られたら何を言われるか・・・！

耐える？　無理だ！　こんな・・・こんな嬉しい事を言われて耐えられるわけがない。あの日から結構経ったけれど、彼は変わらず私を『リアス』として見てくれている。それが、たまらなく嬉しかった。

『・・・しよっぱなから飛ばして来るな。なら次はアーシ・・・』
『天使です』

最後まで言わず、リヨーマが即答する。

『あ?』

『アーシアは天使です。俺にはこれ以上の言葉は思いつきません』

『いや、どういう意味だよ?』

『辛い人生を歩んで来ながら、それでもあんな風に他者を想いやれる慈悲深い彼女を天使と呼ばずになんと呼びますか。これまで、そんな彼女を利用しようと様々な連中が現れましたが、今後、同じ様に彼女に手を出す者が現れば、その時は俺の全力を以って排除します』

リヨーマの中の天使のイメージってどうなってるのかしら。でも、シスターであるアーシアからすれば、最上級の褒め言葉かもしれないわね。

「そ、そんな、私ごときが畏れ多いです・・・」

そう言いつつ、頬に手を当てながら嬉しそうな顔をするアーシア。
『いつか、彼女を守ってくれる男性が現れるまで、その役目は俺が勤め続ける所存です。今までの分、アーシアにはこれから十分に幸せになつてもらいたいですから』

そんな男性、現れないと思うけれどね。何せ、初めて恋した男性がこれ以上無いくらい素敵な人だったんだから。

「・・・私は、リヨーマさんのお傍にいられば、他には何も望みません」

頬から胸に手を移動させ、祈るアーシア。その汚れ無き美しい微笑みは、まさに『聖女』だった。間違っても『天使』とは言わない。私、『悪魔』だもの。

「ほらね」

「何か言ったにや、リアス？」

「ううん、別に」

『では、黒歌は？』

「うにやっ！ 私の番にや！」

耳をピンと立て、一字一句聞き逃さないつもりであろう黒歌。その姿は、もう主殺しと呼ばれていたかつての彼女とは別人だった。

『始まりは全くの偶然と言っています。いいものですが、俺は彼女と出会えて本当に良かったと思います。なんだかんだで、この世界で一番長い付き合いですからね』

「私も・・・ご主人様と出会えてよかったにや」

その言葉に、いったいどれだけの気持ちが入められているのだろう。罪からの解放。妹との再会。どちらもリョーマと出会えなければ叶わなかったものだ。

『猫が人になるなんて驚きましたが、この世界ではそれも普通なんですよね。彼女が正体を明かしてからは、家の雰囲気が変わりました。彼女の明るい性格が、家の中も明るくしてくれた気がします』

「・・・違うにや。それはご主人様がいるからにや。ご主人様が私を受け入れてくれたから、私は笑えるのにや」

黒歌の頬を流れるそれを、私は見なかった事にした。

『四人目は・・・小猫か』

「な、何で私まで・・・」

「そりや、あなただつてリョーマの家の住人だからよ」

「でも、私みたいな無愛想な女、先輩だつてきつと・・・」

『塔城さんは、普段物静かであり感情を出さない子ですが、本当は姉思いの優しい子です。それに、黒歌とのやりとりでは、ハッキリ感情を現しますしね。頬を膨らませたり、甘えたり、一緒に暮らすようになって、彼女の可愛らしい一面がたくさん見れるようになりました』

「・・・」

小猫の姿が消えた。・・・と思ったら、温泉の中に口元まで沈みつつ、プクプク息を出しながらそっぽを向いていた。顔は見えないけど、うなじが真っ赤だから、きつと顔も同じ感じでしょうね。

『そーかそーか。くくく、いいぜ。なら、次は朱乃だ』

『え？　ですが、彼女は俺の家には』

『いいじゃねえか。ついでに言っちまえよ。・・・その方が都合がいい連中もいるしな』

「さすが、アザゼル先生はわかってますわね」

今度は朱乃か。・・・というか、今のアザゼル先生のセリフ。もしかして、聞いているのバレてる？

『よくわかりませんが・・・。とにかく、姫島さんについてですよね。彼女を一言で表すなら“大和撫子”という言葉以外に無いでしょう。上品で奥ゆかしく、家事も万能です。部室で淹れてくれる彼女のお茶は密かな楽しみなんですよ』

騙されてる！　騙されてるわよりヨーマ！　この子の本性はそんなご立派なものじゃないのよ！　その微笑みの仮面に隠す“S”の顔こそがこの子の本質なのよ！

『以前、彼女の家にお邪魔した時にも、目の前でお茶を点てもらいましたが、あれは美味かった。また飲んでみたいです』

「まあ、リヨーマったら。私と一緒になれば、毎日でも点ててあげますのよ」

「ちよ、ちよつと朱乃！　家にお邪魔したってどういう事!?　聞いてないわよ！」

詰め寄る私に、朱乃は涼しい顔で答えた。

「当然よ、言っていないもの」

「なっ!?　あ、あなたね！　というか、さつきリヨーマって呼んだわよね！　いつの間に!?!」

「彼を家に招いた時よ。あの時、リヨーマは私を優しく・・・うふふ、これ以上は二人だけの秘密という事で」

「そんなの駄目に決まって・・・!」

『彼女と結婚出来る男は凄く幸せでしょうね』

リョーマの爆弾発言がまたしても時を止めた。その中で、朱乃が立ち上がり、勝ち誇ったかのように高笑いをあげ始めた。

「おほほほほー！ リアス、安心してちょうだいね。結婚式には呼んであげるからー！」

「ふざけんじゃないわよ！ いい!? リョーマは結婚出来る男は幸せだって言っただけで、あなたと結婚するって言ったわけじゃないんだからね！」

「でも、そう言うって事は、彼自身も私をそう言う対象として見てるって事でしょ？ なら両思いじゃない」

「寝言は寝て言いなさいー！」

「ええ!? もしかして朱乃さんもリョーマさんの事を!?」

「気付いてなかったのにな、アーシア？」

一気に騒がしくなった私達を大人しくさせたのは、ゼノヴィアのこの一言だった。

「そんなに大声を出すと、神崎先輩に聞かれるんじゃないのかな」

その瞬間、私達は一斉に口を噤んだ。おそらく、リョーマは私達が聞き耳を立てている事に気付いていない。もしバレたら印象が悪くなってしまう。私達は最後までこうして黙って見守るしかない。

『そんなじゃ次で最後だ。本当ならセラフオルやカテレア辺りについても聞きたかったが、それはまた次の機会にとっておくさ』

そう言って、アザゼル先生は最後の名前を口にした。

『ゼノヴィアはどうだ？』

「わ、私か？」

面食らうゼノヴィア。小猫と同じで、まさか自分まで呼ばれるとは思っていなかったでしょうね。

『ゼノヴィアさんは……。変わりましたね。あの日、部室で初めて彼女と出会った時と比べて、とても表情が豊かになりました』

「そ、そうなのか？」

「はい。ゼノヴィアさん、毎日がとても楽しそうですよ」

アーシアにそう言われ、ゼノヴィアは困惑しつつもどこか嬉しそう

だった。

「そ、そうか。自分ではよくわからないのだが。．．先輩は、私の事をよく見てくれているのだな」

．．ん？ 気のせいかしら。今建たせてはいけないものが建った気がする。

『ですが、今のゼノヴィアさんこそが、本来の彼女だと思います。これからも、彼女の素敵な所をたくさん見つけられたらいいと思ってます。リアス達に負けず劣らず、ゼノヴィアさんとても魅力的な女性ですから』

「先輩．．．」

いつものクールさはどこへやらとばかりに、乙女のように頬を赤らめるゼノヴィア。いやまあ、実際に乙女なんだけど。あれよね、のぼせちゃっただけよね。旗が建ったわけじゃないわよね？

『なるほどねえ。ありがとよ、フューリー。．．おーい！ お前らも聞いてただろー！』

「！！！！ツ！！！！」

『先生に感謝しろよ！ 後は精々頑張りな！』

や、やっぱりバレてた!? でも、先生、ひよつとして私達の為に？ 『アザゼル先生、何を．．．。って、まさか』

『そのまさかき。今のお前のセリフはバツチリ女湯へ届いてたんだよ』

『なん．．．だと．．．!?!』

『くくく。いやあ、傑作だったぜ．．．っておい！ 何やってんだ！』
アザゼル先生の声色が一変する。何かあつたのかしら？

『せ、先輩！ こんな所で剣出してどうするんですか!?!』

『イツセー！ 木場！ こいつを止めろ！』

『お、落ち着いてください、先輩！ アザゼル先生も笑い者にする為に言わせたわけじゃ！』

『ギヤスパー！ 『神器』を使え！』

『む、無理ですよお！ 僕の『神器』でも先輩は止められないんですからあー！』

『いいからやれ！ やってくれ！ やってください！ お願いします！』

「・・・黙祷」

私の指示で、朱乃達が揃って黙祷を捧げる。誰にとって？ それはもちろん・・・。

『アッーーーーー!!!』

たった今断末魔を上げたアザゼル先生に決まっているでしょ。

リアスSIDE OUT

ヴァーリSIDE

「はっ・・・!」

「どうしたんでい、ヴァーリ?」

「どこかで素敵なイベントが起こっている気がする!」
「?」

第五十八話 冥界どうでしょう

目を開けると、そこはベッドの上だった。

「・・・知らない天井だ」

お決まりのセリフを口にする。まあ、実際はすっかり見慣れたグレモリー邸における俺の部屋の天井なんだけど。首だけ動かして枕元の時計を確認すると、一日経過していた。

にしても、いつの間に眠ってしまったのだろう。昨日は確か、会談から帰って来て、みんな温泉に入る事になって、それから・・・それから・・・何があつたっけ？

記憶を辿ろうとするが、何だか靄がかかったかのように思いだせない。まるで、思い出さない方がいいと言われているかのようだ。ただ、同時にどこかスッキリした気分なのはどうしてだろう。

うーん、ひよつとしたら、のぼせて倒れてしまったのかもしれない。だとしたら、我ながら情けないな。兵藤君達にも迷惑をかけてしまっただろう。みんなに確認して、本当にそうだったらきっちり謝らないといけないな。

そう決めつつ、俺はベッドから起き上がるのだった。

・・・
・・・
・・・

グレモリー家の庭の一角、朝食を済ませた俺達はその集っていた。いよいよこの里帰りの最大の目的である特訓が始まる。

あ、そうそう。昨日の温泉では、俺はやっぱり気絶してしまつたらしい。兵藤君に聞いたら、青ざめた顔で「思い出さたくありません」と言われてしまった。どうやら相当な面倒をかけてしまったようだ。

女の子達は女の子達で、顔を真っ赤にして目を合わせてくれない。なんなのその反応。どれほどの醜態を晒してしまつたんだ、俺・・・。気になるけど聞くのは止めておこう。なんか、第六感的な何かがあるなど訴えてる。

「さて、メニューを発表する前に、言っておく事がある」

紙束を持ったアザゼル先生が全員の顔を見渡す。・・・微妙に内股に見えるのは気のせいだろうか。

「俺が提示するトレーニングメニューは、各々の将来的なものを見据えた上でのものだ。当然、効果を実感出来る時期は一人一人違うだろう。・・・だが、焦るな。今日より明日。明日より明後日。どれほど歩みが遅くても、進み続ける事が大事だと胸に刻め。お前らは若い。若いから未熟だ。だからこそ、これからどんどん成長していく事が出来るはずだ」

おお、先生つぽい、いい言葉だな。流石カリスマMAXなアザゼル先生。やっぱり上に立つ人は導くのが上手いのだと思った。

「というわけで、まずはリアス」

「はい」

返事をするリアスに、アザゼル先生は手元の紙を見ながら告げる。

「お前は元々が高スペックな悪魔だ。このまま何もせずに暮らしたとしても、いずれは最上級悪魔の候補となるだろう。だが、将来よりも今強くなりたいんだろう。・・・お前の「誇り」の為に」

「ええ。私は私の「誇り」に見合う強さを身につけたい。思いだけでも、力だけでも意味が無い。その二つを合わせ持つて初めて強さになると思うから」

「その通りだ。口先だけのヤツなど誰も相手にはしない。周囲を納得させられる実力を備えて初めて形となる。この紙にお前のトレーニングメニューが記してある。ゲームの直前までこなし続ける」

うーむ、女の子相手に使う言葉ではないが、リアスは本当にカッコいいな。決意に溢れた表情で手渡された紙に視線を落とす彼女を見て、俺はそんな感想を抱いた。

「基本的なトレーニング方法だが、お前はそれで充分だ。『王』であるお前に求められるのは「力」だけじゃない。むしろ、重要なのはゲームの最中、どんな状況に陥ろうとも、それを乗り越えられるだけの思考、機転、判断力・・・つまり「知」が必要だと思え」

「わかったわ」

「次は・・・朱乃。お前に求めるのはただ一つ・・・己が内に流れる血

を受け入れろ」

血つて言う・・・以前教えてもらった堕天使の血つて事ではないかな。でも、彼女自身はそれに嫌悪しているようだから、そう簡単にはいかないんじゃないか。

「フェニックス家との一戦を映像で見せてもらったが、お前の本来の力はあんなもんじゃねえだろう」

「いやいやいや！ あの時、朱乃体育館ふっ飛ばしてたよね！ あれで全力じゃなかったの!？」

「雷に光を乗せろ。お前の本当の力である『雷光』を見せてみる。否定するだけじゃ永遠に強くはなれない。自分の全てを認め、受け入れろ。その上でなってみせろ。『雷の巫女』から『雷光の巫女』にな」

「・・・わかりました。思う所がないわけではありませんが、そうなれるよう努めましょう」

目を逸らさず答える朱乃に、アザゼル先生が意外そうな表情を見せる。

「ほお、ずいぶん聞きわけがいいじゃねえか。てつきり文句の一つでも言われるかと思っただがな」

「私だって、見守ってくれる人がいれば成長しますわよ、アザゼル先生」

立派だと思うよ朱乃。だが、そのセリフは色々マズイと思うな。霞さんみたいにならないよう、注意しておかないと。

チラリと俺の方へ視線を向けて来た朱乃に対し、俺は密かに決意した。でも、あれほど頑なだった彼女の心を解したので誰なんだろうな・・・。

「三人目は木場だ」

「はい」

「お前の目的は、とにかく『禁手』を長時間保たせる事だ。第一段階として、解放状態で一日保たせる。第二段階は実戦形式の中で一日保たせる。それをひたすら続ける。後はリアスと同じで基本の繰り返しだ。それと、剣系の神器の扱い方についても、俺がみっちり叩き込んでやるからな。剣術の方はお前の師匠からもう一度習うんだったな

？」

「ええ。ですが、出来たら神崎先輩にもご指導をお願いしたいのですが」

俺？ 確かに、前の合宿でキミの相手してたけど、師匠がいるんならその人に任せた方がいいと思うよ。俺に出来る事と云ったら、アルⅡヴァン先生の知識と経験を元にしたアドバイスくらいで、俺自身にやれる事って無いし。

「心配せずとも、それも織り込み済だ。前衛は全員フューリーにも指導してもらうつもりだからな。精々、技の一つでも盗んでみせろよ」

「ファツ!? 増えちゃったよ! 前衛っていうと、兵藤君と木場君、それに塔城さんとゼノヴィアさんの四人だよな。やべえ、かつてないほどのピンチだ。先生! 助けてください!」

「ゼノヴィア。パワー馬鹿のお前はもう少し繊細さを身につけろ。デュランダルを今以上に使いこなす為には必要な事だ。それと、もう一本の聖剣にも慣れてもらおうぞ」

「もう一本とは?」

「詳細はまた後で教える」

楽しそうな表情を見せるアザゼル先生だが、すぐにそれを引き締め、今度はヴラデイ君の方を向いた。

「ギヤスパー」

「は、はい!」

「少しはマシになったみたいだが、お前の壁はその恐怖心だ。なので、心身を鍛え直す。お前自身のスペックは高い。それさえ克服出来れば、そのリングも必要無くなるだろう」

アザゼル先生が、ヴラデイ君の着けているリングを指す。あれって、確か会談の時、ペロリストに捕まったヴラデイ君を助けに向かう兵藤君に渡してたヤツだよな。

「わ、わかりましたあ! 出来るかどうかわかりませんが、一生懸命頑張りますう!」

おお、こんなにする気に満ち溢れているヴラデイ君は初めて見たぞ。これは全力で応援しなければ!

「続いて小猫」

「はい……」

「お前に関しては黒歌に一任してある。基礎の向上に励みつつ、仙術の一つでも教えてもらうがいい。元々の身体能力はいいんだ。曝け出すもの曝け出せば、すぐにでも強くなれるだろうよ」

「はあ……」

「だくいじょうぶ！ 私に任せておけば白音は絶対に強くなれるにや！」

「……正直、期待よりも不安が大きいのは何ででしょう」

「酷い！」

塔城さんの軽口に乗る黒歌。相変わらずの仲の良さを見せつけてくれるなあ。あの夜の頃のギスギス感は最早完全に無くなっているようだ。

「最後にイツセー……の前に、アーシア」

「え、え？ わ、私ですか？」

「人間であるお前はゲームとは関係が無い。だが、フューリーの傍にいる事が何を意味するのか、お前にもわかるはずだ」

先生。そんな、抽象的な言い方じゃわかりません。

「……はい」

わかったの、アーシア!?

「お節介だとは思ったが、一応、お前のトレーニングメニューも考えてある。やるかどうかはお前の自由だが……どうする？」

「や、やります！ やらせてください！」

差し出された紙を胸元で抱えるアーシア。まあ、一人だけ何も知らないってのも寂しいだろうし、何より、本人が凄くやる気みたいだからいいと思うが。ところで、さっきのアザゼル先生の謎かけの答えってなんなんですかね。こっそり教えてくれるとありがたいんだけど。

「それじゃあ、改めてイツセーの番だな。……そろそろ来る頃だと思うんだが」

「来るって何がですか？」

空を見上げるアザゼル先生に倣って、俺達も空を見上げる。――

“それ”が姿を現したのは、それとほぼ同じタイミングだった。
「なっ!？」

“それ”が降り立つと共に大地が激しく振動する。倒れそうになったアーシアを咄嗟に支えつつ、改めて“それ”を見つめる。

「・・・ドラゴン」

そう、ドラゴンだ。大きく裂けた口も、それから覗く牙も、巨大な腕や足も、背中の翼も、まさしくドラゴンのそれだった。これで、俺が出会ったドラゴンは、ドライグ、アルビオンに続いて三頭目になる。
「アザゼルよ、よくもまあ悪魔の領土に堂々と入れたものだな」

ああ、やっぱりしゃべれるのね。あの二頭も普通にしゃべってたからもしかしたらと思ってたけど・・・。

「お、心配してくれてんのか？ 安心しろ。魔王様からはちゃんと許可をもらってるぜ？ 文句は無いだろ、タンニーン」

「ぬかせ。サーゼクスの頼みだからとわざわざ来てやった事を忘れるなよ、アザゼル」

「へいへい」

そうやりとりする一人と一頭を黙って見つめる俺達。すると、そんな俺達にアザゼル先生が説明してくれた。

まず、このドラゴンの名前はタンニーンさん。聖書に記された龍で、かつて「五大龍王」が「六大龍王」だった頃の龍王の一角なのだから。
とか。

「五大龍王の事は前に話したと思うが、こいつが悪魔になった事で、六から五になったんだ。タンニーンは転生悪魔の中でも最強クラスの最上級悪魔だ」

いや、初耳なんですけど。兵藤君は、「あ、あの時の!」とか言ってる。それってどの時？

でも、彼の存在って、支取さんの夢の道標になるんじゃないのかな。転生悪魔でもこんな風になれるって。学校が完成したら、子ども達に講義でもしてもらおうのも面白いんじゃないか。

そんな想像をしている間にもアザゼル先生の説明は続く。彼をこの場に呼び出したのは、兵藤君に修業をつけるため。つまり、兵藤君

の先生になつてもらうためだった。

「なるほど、つまり、俺にこのドライブを宿した少年をいじめぬけと言
うのだな」

「ちよっ！ 扱いの差が酷過ぎるんじゃないですかね!? 何で俺だ
け……!」

「心得た。ではリアス嬢、すまぬがあそこに見える山を貸してもらえ
るか？ 修行の場にしたいのだが」

「ええ。存分に使つて鍛えてあげてちょうだい」

「本人の気持ちを無視しないで！ あ、ちよ、止めっ——」

問答無用とばかりに、タンニンさんは兵藤君を掴むと、翼を羽ば
たかせ、空に舞い上がった。そして、そのまま先程示した山の方へ向
かつて進み始めた。

「部長おおおおお！ 先輩iiiiiiiiii！ 誰か、誰か助けてくだ
さいiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

どんどん小さくなっていくタンニンさんを見送る俺達。

——藤村君！ これは拉致だよ！

この時、俺の脳裏には元の世界で大好きだった番組の出演者のセリ
フが過っていた。

「さあ、みんな！ イッサーに負けないように頑張るわよ！」

い、いいのよ、これで……。それぞれ動き出すみんなを余所に、俺
はもう一度山の方へ振り返り、手を合わせた。

……どうか、兵藤君が無事でありますように。

第五十九話 改Z・・・特訓開始!

みんながそれぞれの修行を始めるなか、俺は一人部屋に戻って唸っていた。というのも、俺ごときが何を教えてあげられるのか、真剣に悩んでいたからだ。アルⅡヴァン先生の知識と経験を受け継ごうと、俺の本質はただの一般人Aである。そんな俺が、彼女達に何を教えられるというのだろうか。

「とりあえず、データを渡しておく。それを参考に色々考えてみる」

そう言つて、アザゼル先生は部屋に戻ろうとした俺を引き止め、リア達のデータの記された紙束を渡して来た。さらっと目を通すが、そこに書かれた内容の濃さに目を見開く。それぞれの能力をランク付けしてあつた。リアスはB＋。朱乃はB－。中々に厳しい評価だ。で、兵藤君は・・・うん、頑張れ。

あ、俺のもある。ええつと、何々・・・「人外」？ え、どういう事？ ランク付けどころか人外指定つて酷くないですかね！ 人外さんに人外呼ばわりされる人間つて後にも先にも俺だけじゃないの？

「そうか？ 誰が見ても妥当な評価だと思うがな」

当然の様に答えるアザゼル先生。さらに、続けてこうも言った。

「そんな人外なお前に頼みがある。可能ならあいつらに必殺技の一つでも伝授してやってくれ」

もう人外云々はスルーして、何で必殺技？ と問えば、「そりや男の浪漫だからさ」と答えるアザゼル先生。いや、その気持ちはちよつとわかりませんが、女の子もいるんですけど・・・とツツコミたかったが、急に真面目な顔になった先生を見て口を噤んだ。

「冗談は置いといて、これは割とマジなお願いだ。＼とっておき＼を持つ事は、あいつらの自信にも繋がるからな。ついでに、リアスと朱乃のヤツも考えてくれたら助かる。ギヤスパーは・・・技を覚える余裕なんて無いだろうから今回はお預けだな」

まあ、確かに必殺技と呼べるような凄いものを習得したら、自分は強くなれたと実感出来るだろうけど、いくら彼女達が優秀だといっても、そんな簡単にいくものだろうか。

「それを何とかするのが俺とお前の仕事だ。案が浮かんだら一度俺に教える。この訓練期間中に覚えられそうならならすぐにメニューに組み込んでやるからな」

「頼んだぜ」と、俺の肩をポンと叩き、アザゼル先生は去って行った。こうして、一人残された俺は、自室へと戻ったのだった。

「さて・・・どうするかな」

一時間ほどデータとにらめっこして、俺は天井を仰いだ。下手なものや、中途半端なものは考えられない。こうしている今も、リアス達はそれぞれの目標の為に頑張っているのだ。・・・今日ほど「責任」という言葉を重く感じる日があっただろうか。いや、無い。

とはいっても、そんな都合よく必殺技なんて思いつかない。・・・やはり、ここは元々あるものを引用させてもらうしかないか。具体的には、スパロボからとかスパロボからとかスパロボからとか。

まずはリアス。『王』である彼女はゲームで動く事はほとんど無い。データによると「滅びの力」とかいう反則パワーを持っているみたいなので、「攻」は今でも十分だから、それよりも「守」の方が重要だろう。ならバリア・・・っていうのもちよつと違うか。そもそもバリアは技じゃないし。

イメージとしては、彼女に迫る脅威を自動で迎え撃つような、所謂ビットみたいな何か・・・となると・・・「銃神」のアレか？ 悪魔で『王』でビット・・・おお、正に彼女にピッタリじゃないか。ついでに巨大な鎌を持たせれば完璧だが、彼女は後衛タイプだから近接武器を持たせてもあまり意味が無いだろう。

問題としては、ビット自体をどうやって準備するかだよな。アザゼル先生に相談してみよう。案外、魔力で何とかなるかもしれないし（魔力万能説）。

続いて朱乃。なんといっても彼女の長所は、あの広範囲かつ、高威力の雷だな。さっきの会話だと、もっと強力なヤツを出せるみたいだし、あれを使わない手は無い。

雷を利用しての技となると神雷・・・はゴリゴリの格闘技だから彼女には合わないな。せつかくの遠距離攻撃なんだから、それを活かし

たものにしらないと。

・・・そうになると、龍虎王の爆雷符あたりだろうか。直接敵にブチ込んでもいいし、あらかじめセットした場所に誘い込んで一網打尽とかもいけるだろうし。護符を使って戦う巫女さんか・・・いいな。

あ、でも、悪魔が護符とか使って大丈夫なのかな。これもアザゼル先生に要確認だな。

兵藤君は、そうだな・・・格闘技、それも拳を使ったものもいいだろう。ゲシユペンストのジエツトマグナムとかいいかもしれない。『禁手』状態ならジエツトファントムもいけるかもな。前回、ヴァーリさんと一緒に戦うはめになってしまった時に見せた、あのおっそろしい魔力弾を、殴ると同時に相手に叩きこんだらそれこそ一撃必殺レベルの威力になるんじゃないのか。

それか、もしくはブーストナツクルか。あ、グルンガストみたいに飛ばすヤツじゃなくて、ブーストで加速して殴るザムジード方式の方だからね。生身でやれとかトラウマもんだわ。・・・いや、そもそも加速して殴るのはすでにやってるから意味無いか。

木場君は、前に合宿で突き合った・・・もとい付き合ったから知ってるが、とにかく動きが速い。高速の剣士といえば、やはりヴァイサーガ以外思いつかないな。流星に本家みたいに音速や光速を越える事は出来ないだろうが(いつかは越えるかもしれないけど)、それでも風刃閃や光刃閃を習得すれば、おそらく大抵の相手は何も出来ずにやられてしまうだろう。速さっていうのはただそれだけで武器になる・・・みたいな感じの言葉があったけど、誰の言葉だったっけ？

ゼノヴィアさんは木場君とは対照的に、力こそパワー！ を地で行く子みたいだ。なので、親分とその師匠である大親分の技を引用させてもらおう。さらにデータを見るに、デュランダルはゼノヴィアさんの魔力で刀身を伸ばせるみたいなので、やろうと思えば星羅の太刀も使えるんじゃないだろうか。

塔城さんは・・・どうしようかな。俺としては彼女には白虎咬とか覚えてもらいたいけど。もしくは虎龍王の乱舞系の技とか。でも、あまり変な技を教えようとしても黒歌に怒られてしまうかもしれない。

彼女に関しては一度本人と話し合ってみるか。

そこでふと、俺は自分の考えの間違いに気付いた。塔城さんだけじゃない。そもそも、本人が何を求めているか知らないのに、見当外れな技を教えたってしょうがない。俺が最初にやらないといけなかったのは考える事じゃない。聞き込みだ！

俺はすぐさま部屋を出た。そして、修行中の一人一人に事情を説明し、意見を聞きながら考えを纏めて行った。生憎、拉致された兵藤君と、早速師匠さんの所へ出掛けてしまった木場君には話を聞く事は出来なかったが、概ねこんな感じで俺の考え通りになった。

リアス・・・ガン・スレイブ。

朱乃・・・爆雷符。

兵藤君・・・ジェットマグナム（案）。

木場君・・・風刃閃もしくは光刃閃（案）。

ゼノヴィアさん・・・斬艦刀系。

塔城さん・・・白虎咬。

こんな所か。話が聞けなかった二人については（案）のままになってしまったが、とりあえず、これでアザゼル先生に提案してみよう。ゲームの技なんて提案したら怒られるかもしれないが、俺なりに真剣に考えたものなので、そこはちゃんとアピールしないと。

それぞれの技についての簡単な説明を紙に纏め、それを手に、俺は再び部屋を出てアザゼル先生の部屋へと向かうのだった。

第六十話 イメージは大切ですよ？

とりあえずの案を持ってアザゼル先生の部屋へ向かうと、扉の前で何やら話しているアザゼル先生とメイドさんの姿が見えた。あのメイドさん、確か最初の日に俺を部屋まで案内してくれた人だ。

「どうだ？ これから俺の部屋でゆっくりお茶でも・・・」

あら嫌だ。もしかしてなくてもナンパの最中？ 大人の色気溢れる笑みと共に、メイドさんの頬に手を伸ばすアザゼル先生。そんな先生に対し、メイドさんは・・・。

「仕事中ですので」

そうピシヤリと言つてのけ、手を払いのけた。うん、そりや仕事してる時に誘つたつて断られるに決まつてるよね。

と、ふいにメイドさんがこちらを振り向いて、その目を大きく見開いた。

「か、神崎様!？」

「うおっ!？」

アザゼル先生を押しつけ、駆け足で近付いて来るメイドさん。どうしたんだろう。

「あ、あの！ アザゼル様とは偶然お会いしただけでして、お誘いを受けるつもりは一切無くてですね・・・!」

・・・ああ、わかった。このメイドさん、アザゼル先生と一緒にいる所を見て、俺が変な誤解したと思ってるんだな。初めてお世話になった時から仕事熱心な人だったし、そういう勘違いされるのは不服なんだろう。

「そんなに慌てなくても、あなたがそんな人じゃない事はわかってますから」

そう言うと、メイドさんは心の底から安堵した表情で深々と頭を下げ、足早に去って行った。その際、頬が真っ赤に見えたが大丈夫だろうか。体調を崩しているのなら休んだ方がいいと思うが。

こうして、この場に残されたのは、ナンパに失敗したアザゼル先生と、それを目撃した俺だけとなった。なんとも気まずい空気が辺りを

漂う。

「・・・よお、俺に何か用か？」

「は、はい。頼まれた件についてお話したい事がありました」

「そうか・・・まあ、入れ」

あー、やっぱり日を改めて・・・駄目ですかね？　そうですか、わかりました。お邪魔しますよ。

逃げ出したい気持ちを抑え、俺はアザゼル先生の部屋にお邪魔するのだった。

・・・

・・・

・・・

「・・・という感じで考えてみたんですが」

リアス達のデータ、そして自分の考えた案を記した紙を机に並べ、俺は三十分以上かけながらその一つ一つをアザゼル先生に丁寧に説明した。説明中、先生は一言も口を挟まず、今も腕を組んで無言を貫いている。

な、何でこんなに緊張するんだろう。例えるなら・・・そう、小学生の時に、親に通信簿を見せる時の様な。わかるかなあ。わかんないだろうなあ・・・。

「なるほど。それぞれの役目、もしくは長所をさらに特化させた技つてわけか。中々理に叶っているものだとは思うが・・・」

「何か問題でも」

「・・・地味だ」

「え？」

「必殺技つつつたらもつとこう派手で、発動させたら相手が死ぬくらいのレベルのものじゃねえと詰まらないだろう。朱乃やゼノヴィアのものはまだいいが、リアスやイツセーのはややインパクトに欠ける気がするんだよな」

そんなエタフオレベルを要求されても・・・いや、必ず殺す技だから必殺技って呼ぶわけで、そう考えるとむしろそれくらいのものが普通なのか？　でも、派手さ以外にも求められるものつてあると思う

けどな。

「なあフューリー。この案の技は、お前がいた世界で考えられたものなんだろう?」

「ええ」

技というか、そういうモーション全てを考えている人達ならいますけど。毎回毎回、よくもあれだけの派手な演出を考えられるよな。ただ、星やらなんやらを簡単に破壊する技とか武装の演出はちよつとやり過ぎだと思う。いや、俺は好きだけどね。OG外伝の最終話付近の「闇脳」とか「魔神」とか凄かったもんなあ。

まあ、中にはゲシユキツクとかR・H・Bとかネタっぽいものもあるけど、それはそれで見応えがあった。てか、ネタにしてはかなり強力だったしな。・・・アーシアと塔城さんでR・H・Bを妄想しかけた俺はカイ教官にしごかれるべきかもしれない・・・。

「なら他にも色々あるんだろ? この際、リアス達に教える云々は置いていて、思いつくだけ教えてくれよ」

「それは構いませんが・・・何故ですか?」

「そりやもちろん、人工J・・・っと、なに、純粋に興味があるだけさ」興味かあ。それこそ浪漫兵器や浪漫技は山のようにあるけど、アザゼル先生もそういうのが好きなのかな。

「な? 頼む」

「わかりました。でも、キリが無いので、三十ほどでいいですか?」

「おお、構わねえよ。他のはまた聞かせてもらえばいいだけだしな」

というわけで、何故かアザゼル先生に武装や技を教える事になってしまった。とりあえず、版權のものまで加えたらえらい数になるので、オリジナル限定で挙げていこう。

まずは・・・そうだな。ラフトクランズ繋がりでJの主人公機である、グランティード、クストウエル、ベルゼルトから触れてみるか。グランティードといえば、やっぱりテンペストランサーかな。というか、武器らしい武器ってあれくらいしか無かった気がする。後は額からのビームとか手刀とかだったような。

続いてクストウエルだが。あの機体はほぼ肉弾戦で戦う。武器も

技も両肩のクローシールドを合体させたクローアームを利用したものがほとんどだ。あのクリスタル鉄拳はずいぶん人気が無かつたらしいが、後継機はカツコ良かったつけ。

最後にベルゼルト。この機体が一番武装が豊富だった。ミサイルに小型のビーム銃。それと、ラフトクランズのものとは形状が異なるオルゴンライフル。こっちはビームだけじゃなくて実弾も撃てる。反面、剣とかそういう近接武器は一切持たない完全な遠距離仕様の機体だった。

うろ覚えながら、武器の形を紙に描いたりしながら説明していく。壊滅的に下手というわけではないが、上手でも無いのでちゃんと伝わっているのか不安だ。

「ふむ．．．数的にもちようどいいし、これはあいつらに．．．いや、決めるのは早いな。全部聞いてから改めて考えるべきか．．．」
「先生？」

真剣な表情で呟く先生が気になって声をかけると、先生はパツと表情を戻した。

「ああ、何でも無えよ。続けてくれ」

明らかに何でも無い様な雰囲気では無かったが、追及してもしようがないので、俺は口を動かす作業に戻った。リボルビングバンカーやら、機神拳やら、とにかく思いついた傍からしゃべり続けていたら、あつという間に三十に達してしまった。見ると、アザゼル先生はまだ満足してないみたいだし、俺自身もちよつと火が着いたので、もう三十、合計で六十ほど列挙してみた所で、ようやく先生は満足してくれたみたいだった。

「これくらいでいいですか？」

「ああ、よくわかつたぜ。．．．この世界にやって来たのがお前で本当に良かった事がな」

？ どういう意味だろう。そういえば、途中グランゾンの武装の説
明辺りで顔色が変わってたような．．．。それと関係があるのか？

でも、架空の存在とはいえ、あんなチートスペックな「魔神」様の事を初めて聞けばそうなるのもわかる気がする。第三次や第四次でヤ

ツが現れた時の絶望感と来たらもう……。

特に第四次の最終話で分身したのを見た時はコントローラーを投げそうになったつけ。α外伝じゃ序盤でネオの状態が出て来るし。……イベントシナリオだと思って考え無しに味方を突っ込ませて全滅してしまったのはきつと俺だけじゃないはず！

「それで、話が逸れてしまいました。俺の考えた案でいいんですか？」

「ああ。ゲームまでの日数を考えたら一つだけで充分だ。とはいえ、細かい調節は必要だがな。例えばこのガンスレイブとかいうヤツは、今からビットを一から作るよりもリアス自身の魔力を応用して形成した方が早いな。……最も、魔力を放出では無く、自分の周囲に収束展開させ、そこから魔力波を撃つなんて芸当が、今のアイツの実力で出来るかどうかはわからないがな」

出来るかわからない。つまり出来る可能性は一応あるという事か。やっぱり魔力万能説は正しかったな。

「よし、とにかく方向は決まった。いよいよコイツの出番だな」

そう言うと、アザゼル先生は一度席を立ち、部屋の奥からヘッドフォンみたいな形をした物と、ノートパソコンを持って来た。何が始まるのかと見守る俺の前で、先生はパソコンを起動させた。その画面には、広いフィールドと、その中央に立つ人形の姿が映っていた。

「それは……？」

「まあ、騙されたと思ってこれを着けてみる」

言われるままにヘッドフォンを着ける。すると、人形の姿が一瞬でアルⅡヴァン先生に変わった。

「え……!?!」

「驚くのはまだ早いぜ。フューリー、何でもいいから動きをイメージしてみろ」

とりあえず走っているイメージを浮かべる。するとなんという事でしょう。画面の中のアルⅡヴァン先生も走り始めたではありませんか。

「先生、これは……」

「これは俺が作ったソフトでな。そのヘッドフォンを着けた者のイメージした動きをそのまま画面で再現する物だ。百聞は一見にしかずというだろ？ グダグダ口で説明するよりも、こうして動き付きの説明の方がずっとわかりやすいからな。これを使って、お前にはこれらの技のモーションデータを作成してもらおう」

ああ、だからアルⅡヴァン先生の姿なわけね。．．サラツと説明してるけど、これってもの凄い発明じゃないのか？ まさか、こういう事を見越して作ったのだろうか。だとしたら、この人は間違い無く先見の明がある天才だ。

「先生は、どうしてこのソフトを作ろうと？」

「あ？ そりやお前、俺だけの技や武器を．．じゃねえ。あれだ、こういう事もあるうかとってヤツだ。ああそうとも。それだけだ。他に何かあるっていうんだ」

遠い目をしながらそう答えるアザゼル先生は、どこか後悔しているような感じだった。なんだろう。こんな凄い物を作ったんだからむしろ誇ってもいいような気がするが。

「とにかく、これを貸してやるから、明日までにモーションデータを作っとけ。それを使って実際の指導に入るからな。下手な物は作るなよ」

「わかりました。お借りします」

そうして、パソコンとヘッドフォンを手に俺は自室に戻り、早速モーションデータの作成を始めた。やり方としては、ゲームのアニメーションをそのまま思い浮かべるだけで、勝手にパソコンが処理してくれるから簡単だった。

それにしたって、このソフトの再現率は異常とも言えるくらい高い。冗談のつもりでOG外伝仕様の縮退砲をぶっ放してみたら地球が吹っ飛んで爆発が宇宙に広がっていく様子がキツチリ再現された。ただ、それをやっているのがアルⅡヴァン先生だというのが違和感ありまくりだったけど。どうせなら人形の姿もイメージで変えられたらよかったのに。人間の体から縮退炉がせり上がって来るとか怖すぎる。

・・・っと、いかんいかん。真面目にやらないと。ええっと、ガンスレイブと爆雷符のモーションは保存したから、次は兵藤君の分を・・・。

この時、パソコンの操作ミスで縮退砲のデータまで保存していた事に俺は気付かなかった。

そして後日、それを見たアザゼル先生によってちよつとした騒ぎとなったのだが、それはまた別の話である。

幕間その一 ある親子の決意

サーゼクスSIDE

「お帰りなさいませ、サーゼクス様」

「ただいま、グレイフィア」

魔王として忙しい日々の中、奇跡的に取れた休日を使って、僕はグレモリー邸に帰って来た。どうも、僕の周りは優秀で心配性な者が多い。今回の休みも、働き過ぎだから休んでくれとお願いされてのものだ。

とはいえ、突然の休みで予定も何も無かった僕が思いついたのは、こうして愛する妻と息子がいるここへ帰って来る事だけだった。

そういうわけで、グレイフィアを連れて部屋へと向かう途中、彼女は気になる事を口にした。

「ミリキヤスの様子がおかしい？」

聞き流せる内容では無さそうなので、詳しい説明を求める。なんでも、最近ミリキヤスはほぼ一日中自室に引き籠っているそうだ。さらに部屋の明かりが深夜遅くまで点灯しているらしく、気になったメイド数人が部屋を訪れても扉に鍵をかけたまままで返事もしないのだ。

「私も事情を尋ねてはみたのですが、「やるべき事をやっているだけの一点張りです。目の下にクマを作ってまでやるべき事とは何なのでしょう・・・」

「ふむ・・・」

「ですので、サーゼクス様からもそれとなく聞いて頂けないでしょうか。あなたから聞かれれば、流石のあの子も話してくれるでしょうし」

「わかった。この話は僕に任せてくれ」

「お願いします」

「・・・それとグレイフィア。今の僕は魔王では無くキミの夫だよ？」
期待を込めた目で見つめると、グレイフィアは戸惑っている様だった。

「ですが、誰が聞いているかわかりませんので」

「そんな事を気にする様な者はこの家にはいないさ」

促すようにそう言うと、ようやくグレイフィアは観念した様子だった。

「で、では・・・サーゼクス」

「うん、よろしい。互いの立場も大事だけど、愛する夫婦同士、やっぱり呼び捨てじゃないとね」

「別に呼び方など関係無く、私はあなたを愛して・・・」

「ん？ 何か言ったかいぐふっ!?!」

「わざとらしく聞き返さないでください」

「い、いや、確かにバツチリ聞こえてたけど、躊躇い無く鳩尾って酷く無いかな・・・？」

蹲る僕を尻目にスタスタと歩いて行くグレイフィア。

「・・・でも、あなたのそんな所も好きですけど」

そんな眩きが耳に届く。・・・ああ、全く困ったものだ。彼女のこういう所を見る度に僕は毎回こう思ってしまう。僕は世界で一番可愛い妻を得たのだと。

惚気？ ああ、惚気さ。それがどうしたというんだ。どうせ誰にも聞かれていないのだ。心の中でくらい惚気たつていいじゃないか。

衝動的に後ろから抱き締めなくなったが、僕はその気持ちを抑えた。幸い、休みは二日ある。彼女を可愛がる時間はたくさんあるからな。

「だけど、これくらい言っても構わないよね。」

「愛してるよ、グレイフィア」

「ツ・・・!?!」

一瞬だけ肩を震わせるグレイフィア。だけどそれだけだ。振り返りもしないし、何かを言うわけでもない。でもそれでいい。それが彼女だから。

さてと、これ以上置いて行かれるわけにはいかないな。僕は早足でグレイフィアを追いかけるのだった。

.....

・・・

部屋で少し休んだ後、リーア達にも挨拶しておこうと思ったが、よく考えればあの子達は今度のレーティングゲームに向けての鍛練の最中だった。その最中に邪魔するのも悪い気がしたので僕は挨拶を断念した。それに、今じゃなくても、食事の席で顔を合わせるのだから問題は無い。

なので、僕はミリキヤスの部屋へ向かう事にした。今日も朝から部屋に閉じこもっているらしい。

グレイフィアを伴ってあの子の部屋の前に立つ。ノックをして数秒・・・返事は無い。

「ミリキヤス？ いないのかい？」

「いえ、部屋を出た様子はありません」

ならばとドアノブを回してみると、部屋の扉は呆気無く開いてしまった。中に入ってミリキヤスの姿を探すと、あの子は机に突っ伏していた。

「何だ・・・？」

机の上には山のように重なった紙と、何十本ものペンが置かれていた。その異常とも言える量に、僕もグレイフィアも目を丸くする。いったい、この子は何をやっていたのだろうか。

「ミ、ミリキヤス・・・？」

「すう・・・すう・・・」

傍に近づいたグレイフィアが恐る恐る声をかけるが、ミリキヤスは応えない。代わりに聞こえて来たのは規則的な寝息だった。

「どうやら眠っているようです。けど、こんな時間からどうして・・・」

「・・・原因はこれだね」

眠っているミリキヤスの下敷きになっていた紙を引つ張り出す。それは原稿用紙だった。その原稿用紙の最初の部分を読み上げる。

『鋼の救世主』第一章 バルマー戦役 第五十話 ヴァリアブル・フォーメーション」

「どういう意味ですか？」

グレイファイアの問いに首を横に振る事で答える。『鋼の救世主』、バルマー戦役、ヴァリアブル・フォーメーション・・・その全てが初めて聞く単語だったのだから。

「どうやら、架空の戦争を記した物語のようだね」

興味が湧いた僕はそれを黙読する事にした。グレイファイアも気になったのか、近くの原稿用紙を手に取りそれに目を落としている。

親馬鹿と言われるかもしれないが、ミリキヤスは中々に聡明な子だ。こうして小説家の真似事をするのもこの子らしいとは思う。だが、言い方は悪いが、所詮は子どもの空想の産物レベルのものだろう。

しかし、僕のその考えはすぐに消える事となった。そこに書かれていた物語は、僕の想像を遥かに上回る、壮大にして壮絶な戦士達の戦いの記録だった。僕は瞬く間にその世界に引き込まれてしまった。

途中までしか書かれていないそれを読み終え、僕はすぐさま別の原稿用紙に手を伸ばした。それを読み終え、また別の用紙を、さらにそれを読み終えて別の用紙へ手を伸ばす。

三十分、いや、一時間は経つただろうか。僕はようやく物語から抜け出す事が出来た。正直まだまだ読んでいたいが、そろそろ潮時だろう。ちなみに、この一時間の間、グレイファイアは一言も声をかけていなかった。間違い無く、彼女もこの物語に引き込まれていたのだろう。

「・・・まさか、ミリキヤスにこんな才能があつたなんて」

「いや、この物語はミリキヤスの考えた物じゃないよ」

「え？」

「ここを見てごらん」

僕は一枚の原稿用紙を指した。

——この物語を『鋼の救世主』、そして彼らと共に戦い続けた『騎士様』へ捧げます。

「騎士様？・・・ッ！ まさか・・・！」

「う、ううん・・・」

その時、ミリキヤスが眠りから目覚めた。寝ぼけ眼で僕とグレイファイアの顔を交互に見た直後、顔を驚愕させ立ち上がる。

「お、お父様にお母様!? あ、あれ、何で・・・!?」

「おはよう、ミリキヤス。ちよつと休みが取れてね。こうして帰って来たんだ」

「そ、そうだったんですか。・・・はっ! ご、ごめんなさいお父様! お出迎えもせずにこんな・・・!」

「気にしないでいいさ。それでミリキヤス。起きて早々で悪いんだが、この大量の紙と、ここに書かれている物語は一体何なんだい?」
僕の問いに、ミリキヤスはバツの悪そうな表情を浮かべた。

「よ、読まれたのですか?」

「うん、バツチリね。とても素晴らしい物語だと思うよ。特に、最初に読んだ五十話のSRXというロボットの合体はとてもよく書けていたよ」

「私は、四十六話のヒュツケバインMk-III起動シーンが・・・」

「ほ、本当ですか!? 僕もその場面を聞いた時は凄く興奮しましたから、そう言ってもらえて嬉しいです!」

満面の笑みを見せるミリキヤスの頭を撫でる。同時に今の言葉で確信した。これはミリキヤスが考えた物語では無く、「誰か」から聞かされたものだと。

その「誰か」の正体をほぼ確信しつつ、僕はミリキヤスに尋ねた。

「ミリキヤス。このお話を聞かせてくれたのは誰なんだい?」

「え、えつと・・・フューリー様です」

ああ、やっぱりそうだったか。予想通りの名前が出たので、僕は特に驚かなかつた。

それにしても、どうして彼はミリキヤスにわざわざ自分の過去の戦いを話したのだろう。ふと浮かんだ疑問を口にする、ミリキヤスは真剣な顔でこう言った。

「・・・わかりません。ですが、僕はあの方の過去を僕だけしか知らな
いままでいるのは駄目だと思つたのです。だから、こうして形にした
かつたんです。それが・・・僕の役目で、使命だと思つたら・・・」

そう答えるミリキヤスの顔は「子ども」では無く、何かを固く決意した立派な「男」のものだった。

「なるほど。深夜まで明かりが点いていたのは、ずっと執筆を行っていたからだっただけというわけですね」

「ごめんなさい、お母様」

「怒っているわけではありません。ですが、自分の体も大切にしてください。．．．神崎様もあなたが無理をする事は望んでいないはず」

「．．．はい」

「ミリキヤス。その物語はいつ完成する？」

「ええっと、バルマー戦役編はもう少して完成しますけど、まだ第二章のイージス計画編と第三章の封印戦争編、それと最終章の終焉の銀河編が残ってますから、まだまだかかりそうです」

「なら、今書いている物が完成したら、すぐに僕に読ませてくれ」

「それは構いませんけど．．．」

「その顔．．．何か企んでいますね、サーゼクス」

「企むとは酷いなあ。僕はただ、可愛い息子の使命に協力しようと思っただけだよ」

さて、そうと決まれば、今から撮影用の予算を考えておかないと．．．。

サーゼクスSIDE OUT

後にミリキヤス・グレモリーによって発表される事となる『鋼の救世主』。著者の父親にして魔王であるサーゼクス・ルシファーにより、その世界はさらなる広がりを見せる事となるのだった。

「あら、リヨーマ。顔が青いわよ。どうしたの？」

「いや、変な悪寒が．．．。何だか以前もこんな事があった様な．．．」

第六十一話 お出掛け

リアス達の為のモーシオンデータは完成したが、その後もソフトで色々遊んでいたらすっかり夜になっていた。なので翌朝、俺はモーシオンデータを持って再度アザゼル先生の部屋を訪問した。再生された映像に満足そうな笑みを浮かべ、先生はパソコンを閉じた。

「いいじゃねえか。よし、これで準備は完了だな」

「では、早速みんなに技の練習を？」

と思っただのだが、先生は首を小さく横に振った。

「そうしたいのは山々だが、必殺技に気をとられ過ぎて本来のトレーニングメニューが疎かになったら本末転倒だ。そうだな・・・とりあえず一週間くらいは間を空けるか。少しでも能力が上がっていた方が、技も覚えやすくなるかもしれないしな」

なるほど、一理ある。最悪どつちも中途半端になったりしたら悔やんでも悔やみきれないだろうしな。とはいえ、予定も何も無い俺は一週間も何をしていたらいいのだろう・・・いつその事、俺も特訓とかけてみようかな。

独り言のつもりだったが、アザゼル先生の耳には俺の言葉が届いていたようだ。それはいいんだが、何で引き気味な感じで「止めてくれ。人外から化物になる気か」なんて言われにやならんのですか。以前クレイジー神父にも言われましたが、化物は言い過ぎでしょ。

・・・そういえば、あのクレイジー神父今頃何やってんだろう。変態共が一掃されたから、流石に彼も心を入れ替えてチャンバラごっこから卒業してるとは思うけど。

「特訓なんかより、お前には別の予定があるじゃねえか。ちょうどいい機会だ。この間にカテレアに会って来いよ」

あ、そうだった。それがあつた。よくわからんが、向こうが俺に会いたがってるんだっけ。そういう事なら先生の言う通り、カテレアさんに会いに行ってみるか。

「わかりました。ならそうさせてもらいます。といっても、俺は彼女の居場所を知らないのですが・・・」

「それなら心配するな。セラフオルーが同行する事になってるからな。アイツに連れて行つてもらえ」

どうしてセラフオルーさんが？ と疑問を口にする俺に、アザゼル先生は短く「保険だ」と答えたが、それが益々俺の頭を混乱させた。どうして訪問するのに保険が必要なのだろう。．．．ひよつとして、俺がカテレアさんを襲うとか思われてたりする？ そうならないように魔王である彼女をお目付け役に？

「連絡は俺から入れておいてやるよ。アイツの予定次第だが．．．まあ、お前が絡んでるから二、三日ほどで何かしらの動きがあると思うがな」

そう言つて、アザゼル先生はリアス達の様子を見に行くと部屋を出た。主がいない部屋にいつまでもいるわけにもいけないので、俺もすぐに先生の後に続いたのだ。続いた。

．．．
．．．
．．．

それから三日後、アザゼル先生の予想通り、セラフオルーさんがグレモリー邸にやって来た。今日は見慣れた魔法少女の格好じゃなく、シンプルな黄色いワンピースを身に纏っていた。

そんな彼女を出迎える俺とアザゼル先生。まさか、本当に来るとは．．．。驚く俺を、先生はしてやったとばかりに小突いて来た。「な？ 俺の言った通りだろ？」

「凄いですね、アザゼル先生。でも、どうしてわかつたんですか？」
「むしろ何でお前がわからないのかが俺には不思議でならんのだが」
「？」

「こんにちは、フューリーさん！ ついでにアザゼルちゃんも」

「ええ、こんにちは」

「俺はついでおかよ．．．」

「カテレアちゃんに会いに行くんだよね？ なら、早速出発しよっか！」

「え？ 今からですか？」

「うん。だってその為に来たんだもん」

「そうですねか・・・すみません。気を遣わせてしまったみたいで」

セラフオルーさんだって忙しいだろうに、俺の用事に巻き込んでしまつて申し訳無い気持ちで一杯だった。

「う、ううん！ そんなの気にしないでいいよ！」

「だよなあ。むしろお前からしたら望む所だもんなあ」

「え？」

「ア、・アザゼルちゃん！」

「くくく、まあそういう事だ。変な心配なんかせず、気楽に行つて来い。・・・っと、その前にコイツを渡しておかないとな」

そう言つて、アザゼル先生は懐から眼鏡を取り出した。見た感じ、何の変哲も無い普通の眼鏡の様に見えるが。この人の事だ。きつと何か便利機能が搭載されているのだろう。

「この眼鏡には認識障害機能が付いてあつてな、かけた者は周囲から別人として認識される。フューリーであるお前が街に出れば下手したらパニックになる恐れがあるが、それがあれば大手を振つて歩けるぜ」

おお、またしても凄い機能じゃないですか！ やはり天才は一味違うぜ。

「最も、リアス達のように既にお前と縁を結んでいる相手には効果が無いんだが、今回は関係無いか。ちなみに度は入ってないからな」

渡された眼鏡を早速装着する。うーむ、特に変わった感じはしな

『カシャ！』・・・カシャ？

「・・・何やってんだ、セラフオルー」

呆れ顔のアザゼル先生の目線の先で、セラフオルーさんは高そうなカメラのシャッターボタンを連打していた。

「愚問だよアザゼルちゃん！ 眼鏡をかけたフューリーさん・・・これを撮らないで何を撮るつていうの！」

答えながらもボタンを押す手を止めないセラフオルーさん。・・・写真に残しておきたいほど滑稽なのだろうか、今の俺は。勘弁してくださいよ。眼鏡つて似合う人と似合わない人がいるんですから。

「えへへ、カテレアちゃんにいいお土産が出来たなあ（それと、今度のお披露目会後に発行する写真集にも追加しないと・・・）」

・・・妙な胸騒ぎがする。例えるなら、密かに進行していた恐ろしい計画が、もう取り返しをつかない所まで来てしまったかの様な……。そんな気持ちを抱いていると、セラフオールさんはカメラを仕舞った。とりあえず、本来の目的を果たす為にも、そろそろ出掛けよう。「それでは、行って来ます先生。セラフオールさん、案内お願いします」

「おう。・・・頑張れよ」

「よし！ 出発進行〜！」

謎の励ましを背に、俺はセラフオールさんと共にグレモリー邸を出発した。邸宅を出てすぐに説明されたが、カテレアさんは今、ルシファードの高級住宅街で一人暮らしをしているそうだ。元々望んで旧魔王派に属していたわけじゃなく、さらに情報提供にも応じてくれたので、サーゼクスさんから色々融通してもらったらしい。

なので、会合の時と同じように、駅から列車でルシファードに向かう事になったが、駅まではリアスのご両親のご厚意で馬車を利用させてもらえる事になった。

その車内。向かい合って座ったセラフオールさんに、話しかける。

「そういえば、今日はいつもの服では無いんですね」

「え？ あ、うん。へ、変・・・かな？」

「まさか。とても可愛らしくて似合っていると思いますよ」

どこからどう見ても文句のつけようが無い可憐な少女だ。おそろく、俺以外の誰かに聞いたとしても、同じ答えが返って来るだろう。

——褒める時はキチンと褒める。下手な照れは相手に失礼。

ふと、母さんの口癖が脳裏を過った。

「ほ、ホント!？」

「え、ええ」

突然立ち上がるセラフオールさんに戸惑いながら頷く。馬車の中で立ったら揺れたりした時に危ないですよ。

「きゃっ!？」

と思つていたら、タイミングを狙ったかのように馬車が揺れ、セラフオルーさんがバランスを崩した。反射的に倒れそうになった彼女に向かつて手を伸ばし引き寄せた次の瞬間、彼女はすっぽりと俺の胸の中に収まった。女性らしい柔らかな感触と、柑橘系のいい香りがする。香水か何かだろうか。

「大丈夫ですか、セラフオルーさん」

「う、うん、大丈夫・・・へ？」

ゆつくりと顔を上げたセラフオルーさんと目が合う。十数センチまで迫る美少女の顔にドキツとしながらも、表面上は何とか冷静に振る舞う俺だった。

「あ、あわわわわ・・・！　フユ、フューリーさ・・・近づ・・・顔・・・近づ・・・！」

瞬く間に顔を真っ赤にし、セラフオルーさんは片言な言葉を数回発した後・・・。

「・・・きゆう」

気絶した。それはもう見事に、完全に、あつという間に。

「セ、セラフオルーさん？」

「・・・」

肩を揺するも反応が無い。どうしよう。というか、何で気絶？

・・・まさか、引き寄せる時にどこかで頭をぶつけたのか!?　まずい、すぐに『友情』をかけないと！

すぐさま『友情』を使用しセラフオルーさんを横たわせながら手を握り締める。頼む！　目を、目を開けてくださいセラフオルーさん！

そうやってその時が来るのを、俺は必死になって祈り続けるのであった。

第六十二話 初心×残念Ⅱ辱め

突然気絶したセラフオルーさんだったが、馬車が駅に到着したタイミングで目を覚ました。何はともあれ一安心した所で、俺達は列車に乗り込むのだった。

前回はグレモリー家専用の列車だったが、今回は普通の列車なので、当然一般の悪魔のみなさんも乗り込んでいる。時間的には昼前くらいなのだが、車内は人間界の朝のラッシュ並みに混んでいた。乗車して僅か数秒で、俺とセラフオルーさんは反対側の扉付近まで追いやられてしまった。

「大丈夫ですか、セラフオルーさん」

腕を突っ張り、体を盾にしながら小さいスペースを作って、そこへセラフオルーさんを立たせる。魔王である彼女がラッシュ程度で参ってしまうとは思えないが、今こうして俺の前で顔を俯かせている彼女の様子を見てみると庇護欲が湧くというか、何となく守ってあげたくなってしまふ。それに、こうすれば痴漢対策にもなるしな。変な手が伸びて来たらすぐに締めあげてやる。

「う、うん。フューリーさんこそ、辛かったら、その、私にくっついてもいいんだよ?」

心配してくれるのは嬉しいですが、そうしたら意味が無いんですよ。とにかく、目的地に着くまではこうして……。

『間も無く急カーブに入ります。お立ちの方は吊り革、または握り棒をお持ちください』

え? と言葉を発する前に列車が大きく傾く。直後、後ろから襲って来た強い衝撃に、俺は思わず手を滑らせてしまった。そうになると、後は押されるままだ。

(まずい! このままじゃ、セラフオルーさんを押し潰してしまふ!)
何とかそれだけは避けないといけない。そう思った俺は必死に踏ん張りながら再び腕を突っ張った。勢いが付き過ぎて扉をドン! と叩いてしまったがこの際しようがない。それよりもセラフオルーさんの安全の方が大事だ。

ほとんど密着状態と言つてしまつてもいいくらいの距離だが、どうにかセラフオルーさんを押し潰さずに済んだ。だが、ホツとする俺を見上げるセラフオルーさんは、どこか熱に浮かされていようような表情をしていた。

(こ、これつて所謂“壁ドン”つてヤツだよな？ それじゃ、もしかしてフューリーさん、私の事を・・・!?)

「セラフオルーさん？」

「ん・・・」

何を思つたのか、瞳を閉じながらアゴをあげるセラフオルーさん。なんか、ドラマとかで見るキスを待っている女性みたいな感じだったが、何故にこのタイミングで？

(この暑苦しい空間の中で何やってんだこいつら・・・)

同時に、背中に突き刺さる視線が一気に増えた気がした。解せぬ。

・・・
・・・
・・・

ルシファードに到着後、駅前のターミナルでタクシーに乗つて都内を移動する。ちなみに列車もタクシーもセラフオルーさんがお金を出してくれた。情けなかつたが、彼女は優しい笑顔で気にしないでいと言つてくれた。

三十分くらい経つと、周りに高そうな家が見えて来た。この住宅街のどこかにカテレアさんが住んでいるんだよな。一人暮らしと聞いたが、ああいう見た目出来る女性つて、プライベートじゃ案外自堕落だったりするイメージがある。まあ、マンガとかからのイメージだけだ。

そんな事を考えていると、タクシーが止まった。どうやら目的地に到着したようだ。セラフオルーさんに続いて降車すると、目の前に立派な一軒家が建っていた。あ、もう眼鏡も必要無さそうだし外しておこう。

「サーゼクスちゃんは本当はもつと凄い豪邸にするつもりだったんだけど、カテレアちゃんが断つたの。「既にただの“カテレア”である

自分にはそんな物は必要無い」からって」

これでも充分凄いなと思うんだけど、やはり魔王様はスケールが違うなあ。でも一人暮らしで大き過ぎる家だと寂しいし、カテレアさんの言う事もわかる気がする。

「それじゃ、早速チャイムを・・・」

液晶画面付きの立派なインターフォンをセラフォルーさんが迷い無く押した。数秒して画面が点灯し、そこには面倒臭そうな表情のカテレアさんの顔が映っていた。

「どちら様・・・って、セラフォルー？」

「こんにちは、カテレアちゃん！ 遊びに来たよ～～！」

「遊びについて、またあなたは唐突に……。帰ってください。私は忙しいんです」

「え～？ そんな事言わないでよ。せっかくカテレアちゃんが会いたがっていた人を連れて来たのに～」

「は？」

「にしし～・・・じゃーん！ フューリーさんです！」

セラフォルーさんが画面から少し離れたおかげで、ようやく顔を合わせる事が出来た。

「お久しぶりです、カテレアさん。突然お邪魔してすみません」

挨拶と謝罪を入れ、軽く頭を下げる。だが、カテレアさんからの応えは無い。というか、固まってる？

「カテレアさん？」

「・・・くあ」

「え？」

「くあwせdrftgyふじこーp?!?!」

「？ ふじこつてだくれ？」

!?!?!?!?!

最早言葉になっていない声をあげるカテレアさんと、辛うじて聞き取れた部分を尋ねるセラフォルーさん。ああ、どこからツツコだらいいんだろうか。

「せ、セラフォッ！ フューリッ！」

「はいはい、落ち着いてカテレアちゃん。はい、深呼吸」

「す〜は〜」

「その調子。はいもう一回」

「す〜は〜」

それからもう二、三回ほど深呼吸を繰り返し、ようやくカテレアさんは落ちついた様だった。

「落ちついた、カテレアちゃん？」

「大丈夫、問題ありません」

あかん、それフラグや・・・。

「そ、それで、どうしてフューリー様が私の家に？　そもそも、何故冥界にいらっしゃっているのですか？」

「リアスちゃんの里帰りの付き合いなんだって。それでね、カテレアちゃんがフューリーさんに会いたがってるって聞いたから、こうして来てくれたの」

「で、では、私の為にわざわざ!?　ああ、フューリー様！　このカテレア、あなた様のお気遣いに感激の意を禁じ得ませんわ！」

「そ、そうですか」

言えない・・・時間が出来たから会いに来たなんて絶対に・・・!

「そういうわけだから、お邪魔していいよねカテレアちゃん」

「ええ、もちろん・・・ッ！　ちよ、ちよつと待ってください！　隠す・・・じゃない、片付けないといけない物がありますからちよつとだけお時間をください！」

「じゃあ三十秒で支度してね」

ちよつと短過ぎませんかね。どこぞの空賊だってもう十秒くらい猶予くれるのに。

「無理です！　十分、いや五分でいいですからお願いします！」

「しようがないなあ。じゃあ準備出来たら教えてね」

「感謝します！　ええつと、ポスターはあそこで抱き枕はあそこで・・・ええい、面倒臭い！　全部押しこんでしまえ！」

スイッチを切り忘れていいのか、画面越しにカテレアさんのそんな声が聞こえて来た。別にポスターや抱き枕くらいそのままでもいいと思うけど。彼女なりにお客さんを招く時のこだわりみたいなもので

もあるのだろうか。

「お、お待たせしました！ どうぞお入りください！」

数分後、額に汗を浮かべたカテレアさんから許可が下り、俺はセラフォルーさんの後に続いて玄関へと向かった。

「お邪魔しますー！」

「お邪魔します」

扉を開けると、そこには以前の会談の時と同じ服を纏っているカテレアさんが立っていた。

「よ、ようこそおいでくださいました、フューリー様！ 心より歓迎させていただきますわ！」

「ありがとうございます」

「ではセラフォルー。フューリー様の事は私に任せて、あなたは帰ってくれて構いません。魔王の執務で忙しいのでしょう？」

「そうはいかないよ。今日はお仕事はお休みだし、何より私は『保険』なんだから」

(チツ。サーゼクスも余計な事を・・・)

「あの、セラフォルーさん。その『保険』っていうのは・・・」

「あ、こつちの話だよ。だからフューリーさんは気にしないで」

「心外ですね。私がフューリー様にナニをするといいのですかナニを」

そう言われると余計気になるんですけど。あとカテレアさんの何のイントネーションに若干違和感を覚えたんだけど・・・気のせいかな？

「とにかく、フューリー様。いつまでも玄関で話すのも格好がつきませんし、まずはリビングにご案内しますわ」

カテレアさん、セラフォルーさん、俺の並びで長い廊下を進み、リビングへ向かう。予想通りというか、そこはウチの二倍はあろうかというくらい広くて立派なリビングだった。一通り見渡して隅の方に小さな水槽を確認した。中では小さな魚が元氣よく泳ぎ回っている。見た事が無い種類の魚だ。やっぱり冥界の魚なんだろうか。

「すぐにお茶を用意しますので、フューリー様はお座りになっ

ください」

「あ、じゃあ私もお手伝いを」

「いえ、セラフオルーも座っていてください。お客様に手伝わせるな
どもつてのほかですからね」

微笑を浮かべキツチンの方へ進んでいくカテレアさん。うーむ、ど
うやら俺のイメージは彼女には当てはまらないみたいだ。プライ
ベートもキツチリしてるんだなあ。

感心する俺とは対照的に、セラフオルーさんは何か考えている様子
だった。どうしたんだろう。

「はい、お待たせしました」

机の上に三つのカップと、クツキーの皿が置かれる。香りからして
紅茶だろうか。クツキーも美味しそうだ。

「実は私、お菓子作りが趣味でして。お手製のクツキーです。どうぞ
遠慮無く召し上がってください」

「ありがとうございます。なら早速……」

「待つて、フューリーさん」

手を伸ばそうとした俺を、セラフオルーさんが制する。

「セラフオルーさん？」

「どうしました、セラフオルー？ 別に毒なんて入ってませんよ」

「……そうだね。毒は入ってないでしょうね。でも……」

一枚のクツキーを手にセラフオルーさんが立ち上がる。そのまま
水槽の方へ移動すると、掌の上でクツキーを細かく砕き、その欠片を
水槽の中にばらまいた。

突然の奇行に目を丸くする俺の前で、魚達が餌と思つてクツキーの
欠片を口にする。それから数秒も経たない内に、あれほど元気に泳ぎ
回っていた魚達が活動を停止した。え、死んだ!? 死んだの!?

「死んでないよ。ほら、エラが動いてる。眠っちゃったんだよ」

俺の心配を察したのか、セラフオルーさんがそう答える。いや、そ
れならよかったけど。そもそも何で急に眠っちゃったわけ？

「……カテレアちゃん。これはどういう事かな？」

「おや、私とした事が、間違えて医療用の睡眠薬を混ぜてしまったよう

です。残念ですが、これは処分しないといけませんね」

あ、なるほどー。あはは、カテレアさんもドジっ子さんだなあ。…：故意じゃないよね？ あくまでも事故なんだよね？ 淡々とした調子で言葉を紡ぐカテレアさんにいいようも無い寒気を感じた。

しばらく居心地の悪い空気が続いたが、俺から頑張つて話題を振り続けたおかげでなんとか雰囲気のを和らげる事が出来た。

「そういえばフューリー様。フューリー様をモチーフにした特撮ドラマが存在している事はご存知ですか？」

「え？ ああ、はい。以前セラフォルーさんから聞きました」

「あ、そうだ！ ゴメンねフューリーさん。DVD送るって約束したのにまだだったよね」

「いえ、別にそこまで見たいわけでは」

「何をやっているのですか、セラフォルー。仕方ありません。ならば今から観賞会を行いましょう。部屋からDVDを持って来ますからちよつと待つててください」

話聞いて…。

リビングを出たカテレアさんが少ししてケースを持って戻って来た。タイトルは『魔装騎士フューリー』…こうして実際に目にするのと何ともいえない気分になるな。とりあえず、悶え死なない様に今から『気合い』を重ねがけしておこう。

——これは、冥界の命運を託された少女と、それを守る騎士の戦いの物語である。

…今のナレーション、明らかにサーゼクスさんの声だった。何やってんですか魔王様。

冒頭からのサプライズに呆気にとられている間にも物語は進む。画面が切り替わり、セラフォルーさんの全身が映し出される。

——彼女の名はセラ。どこにでもいる普通の少女である。そう…この日までは。

「本来であればここには私が映っていたはずなのに」

愚痴りながらも画面から目を離さないカテレアさん。そこからしばらくセラの日常シーンが流れていたが、突如彼女の近くで爆発が起

きた。

『きゃあっ!?!』

『ぐふふふ、見つけたぞ。今代の運命の女を!』

続いて、いかにも悪役ですといった感じの怪人が現れる。着ぐるみ……だよな? 流石に冥界だからってこんな怪人が本当にいるわけないよな?

『な、何を言っているの!? 運命の女って何!?!』

『答える必要は無い。お前は黙って着いてくればいいのだ』

『い、いや! 近づかないで!』

演技上手いなセラフォルーさん。フィクションなのに助けに行きたくなくなってしまった。そして、怪人がセラにその手を伸ばそうとした次の瞬間だった。

『待て! それ以上その少女に近づくな!』

勇ましい声と共に現れたのは、蒼い鎧を全身に纏った偉丈夫。細かい差異はあるが、その姿はまさしくラフトクランズだった。という事は、もしかしてこれが……。

『な、何者だ貴様!?!』

『我が名はフューリー! 魔装騎士フューリー! 邪悪なる者よ、我

が剣で貴様をヴォーダの闇に還してやる!』

「キ、キマシタワァー! この宣告を受けた者は皆等しくヴォーダの闇に還されてしまうのですわ!」

やばい、カテレアさんのテンションがおかしくなって来た。そして俺のテンションもやばい。もうヴォーダの闇と聞くだけで過去の光景が鮮明に浮かぶようになってしまった。

『フューリーだと? 誰だか知らぬが、“教団”の幹部であるこのモー・ブ様に勝てると思っているのか?』

完全な敗北フラグを口にしながら怪人がフューリーに迫る。対するフューリーは落ちついた様子で腰から一本の剣を抜いた。あ、オルゴンソードまで再現してあるんだ。

『ドラゴンすら切り裂く我が剣の切れ味、身を以って知るがいい!』
今のってドライグさんの事言ってるんだよな。そういえば結局う

やむやのまま終わってしまったけど、やっぱり一度ちゃんと謝った方がいいよな。

『死ねえええええええええ！』

『はあああああああああ！』

一瞬の攻防が明暗を分ける。傷一つないフューリーに対し、怪人の方は額と肩から生えていた角が綺麗に切り飛ばされていた。

『ぐおお!? ば、馬鹿な! 儂の自慢の角が!』

『さあ、止めだ』

『くっ!』

剣を突き付けられた怪人が焦りの表情を見せる。翼を飛ばたかせ、逃げ出そうとするがもしも俺の予想が正しければこのあとフューリーは……。

『逃がさん!』

あ、やっぱりライフルモードにするのか。剣から銃に変形したそれを握り、フューリーが引き金を引く。銃口から放たれた緑色の光が瞬間に怪人を飲み込んだ。

『お、おのれフューリー! ゼクス様あ! 申し訳ありま——』

その言葉を最後に、怪人の姿は消滅した。何気に黒幕の名前を口にしたっほいけど、ゼクスってもしかして……。

『あ、あの……』

戦いが終わり、セラがフューリーに声をかける。それに応えずフューリーは背中ブースターを点火させる。

『ま、待って! あなたは一体……!』

『……運命を背負う少女よ。あなたは私が必ず守ってみせる』

『え?』

『では、さらばだ!』

高速で飛び去って行くフューリーを、セラはずっと見つめ続けた。た。

『魔装騎士……フューリー』

——謎の騎士フューリー。彼との出会いがセラの運命を大きく変えていくのだが、今の彼女がそれを知る術は無い。

最後にそんなナレーションで締められ、スタッフフロールが流れ始める。いや、うん、作品としてはとても面白いと思う。思うが・・・やっぱりキツイわ。というか、俺こんな芝居がかった口調じゃないと思うんだけど。やっぱり『気合い』使つといてよかったわ。鑑賞中に何度『脱力』された事か・・・。

「どうだった、フューリーさん。フューリーさんの魅力を前面に出す感じで作ったつもりなんだけど」

「え、ええ・・・面白かったですよ」

鬱りそうになりながらもそう答えた俺を誰か労わってください。

「では、続いて第二話を・・・」

「ッ!? ま、まずい。これ以上は俺の精神が持たない! 何とか話題を変えないと!」

「そ、そういうば、そろそろお昼ですね。お二人とも、昼食はどうしますか?」

「え? あ、ホントだ。どうしようカテレアちゃん」

「そうですね。では、私のお気に入りのレストランがあるのですが、そちらでランチでもどうでしょう」

「いいね。フューリーさんもそれでいいかな?」

「はい」

もう外に出れるならどこでもいいです。

「わかりました。ではお店の方に連絡を。あとタクシーも呼ばなくて
は」

十分後、俺達は再びタクシーに乗り込み、カテレアさんのお勧めレストランへと向かうのだった。

第六十三話 ボツチのグルメ

はてさて、俺のその場しのぎの発言からレストランへ行く事となつてしまったわけだが、どういうわけか、タクシーに乗り込んだ途端にカテレアさんの機嫌が悪くなつてしまった。あ、ちなみに眼鏡はカテレアさんの家を出る前に装着済みです。けど、その後すぐにカテレアさんが突然洗面所に用があると行って二分くらい帰つてこなかったのが少し気になった。

それと、今更ではあるが、有名人であるはずのセラフォルーさんがどうして騒がれなかったのかというと、どうやら彼女も認識阻害の魔法とやらを使っているとの事だ。普段なら特に気にしないそうだが、今回は俺がいるという事で配慮してくれたのだとか。

それはそれとして、現在タクシーの中は俺とセラフォルーさんが後部座席に座り、カテレアさんが前に座っている。どうやら、彼女はこの席順が不満らしい。

「くつ、どうして私が前に座らなくてはならないのですか・・・！」

「だって、そのレストランって運転手さんも知らない隠れた名店ってヤツなんでしょ？ だからカテレアちゃんにナビゲートしてもらわないといけないじゃない」

「それはそうですが・・・あ、そこを右に曲がってください」
「かしこまりました」

カテレアさんの指示通りにタクシーを走らせる年配男性運転手。常にニコニコ笑顔で返事をするあたり、流石プロだと思った。

「ところで、今から行くレストランはどんな所なんですか？ カテレアさんのお気に入りとの事ですが」

せつつかくなので聞いてみると、カテレアさんも指示しながら答えてくれた。

「親子三人で営んでいる本当にレストランです。見つけられたのは本当に偶然なのですが、以来何度かお邪魔させて頂いている所なんです」

へえ、聞くだけでも何か期待出来そうだな。これは今から楽しみ

だ。

そんな風に会話を交わしていると、タクシーがゆつくりと停車した。どうやら目的地についたようだ。降車した俺の目の前に小ぢんまりとした建物が建っていた。

「あは、かわいいお店だね」

お気に召したのか、セラフォルーさんが笑顔を見せる。一方のカテレアさんはというと、俺達をエスコートしようと一歩前に出ようとした。とそこへ、店の扉が開き、中から紫色の長髪をツインテールに纏めたエプロン姿の少女が姿を現わした。

「さーて、お掃除お掃除つと！　つて、あれ、カテレアさ……ッ!」

少女がカテレアさんに気づく。だが様子がおかしい。俺とセラフォルーさんを見るなり固まってしまった。ひよつとして、認識阻害効果が発揮されてない？　だとしたらマズイ気がする。

「ごきげんよう、レイラ。今から席は空いて……」

「お、おおおおおお父さ……お母さ……お母さ……お母さ……カテレアさんがあ！　カテレアさんが本当にお連れ様を連れて来たよおおおおおおお!!」

血相を変えて店の中へ駆け込んでいく少女。扉が閉まっているのに、中から「ホントか!?!」とか、「アンタ幻でも見たんじやないのかい!?!」とか聞こえてくる。そして、ドタドタと大きな足音が響いたと思っただ次の瞬間、再び扉が激しく開かれ中からコックさんの格好をした男性と、少女と同じくエプロン姿の恰幅のいい女性が飛び出してきた。

突然の出来事に、今度はこっちが固まってしまう。そんな俺達を見て男性と女性が愕然とした表情を見せる。いや、ホント、何でそんなに驚かれないといけないんですかね。

「お、おお……！　本当に連れがいるぞ！　しかも二人も！」

「て、店長？　どうかしましたか……」

「カテレアちゃん！」

突然、感極まった様子で女性の方がカテレアさんを抱き締めた。傍から見てもかなりの力が込められているのがわかる。現にカテレア

さんがめっちゃ苦しそうだ。

「ぐええ……。ちよ、ちよつと、おかみさん。離してください、苦し……。よかった！ 本当によかったよ！ アンタは一人じゃなかったんだね！ こんなにいい男と可愛らしい子を連れて来るなんて！ アタシは嬉しくて涙が止まらないよ！」

……推測するに、どうやらこの二人はカテレアさんが俺達を連れて来た事が相当嬉しいようだ。もしかして、そんなにお客さんが少ないのだろうか、この店は？

「ちよ、ちよつと待つてください。どうして私に連れがいることにそんなに驚くのですか？ さつき連絡した時に今回は三人だと伝えただじやないですか」

戸惑いを隠せないカテレアさんの問いに、少女が答える。

「だって、カテレアさんっていつも一人で食べに来てたじやないですか。そのくせ、他のカップルや親子連れのお客さん、友達同士のお客さんをいつも羨ましそうに眺めてましたし、だから私達、カテレアさんってそういう人がいないんだなあつて。さつき連絡してもらった時も、てつきり、孤独をこじらせすぎてとうとうエア友達を作り出してしまったとばかり……」

なんとという事でしょう。カテレアさんはこの親子にボツチだと思われていたのです。……あれ、おかしいな。自分の事じやないのに自然と涙が……。

「めでたいねえ。常連の奴らから影で“お一人様”と呼ばれていたカテレアちゃんに友達がねえ。……へへ、タマネギ切りすぎたかな。俺も涙が止まらねえぜ！」

「あなた達のトンデモ誤解にむしろ私が泣きそうですわよ！ それとレイラ！ 私は妄想はしますがエア友達などというものを妄想した事など一度もありません！ そして私をそう呼んでいた方々はいつか絞めます！ ええ、絶対にだ！」

体を震わせ、全身で怒りを表現するカテレアさんと、そんな彼女に抱き着きながら泣いている女性。そしてその傍でそつと目元を拭う男性と、それを眺めながら「よかったね、カテレアさん」と瞳を滲ま

せる少女。凄く・・・シニールです。

「あはは。カテレアちゃん、昔から友達少なかったもんね。だから勘違いされちゃうのも仕方ないかも」

ちよおっ!? 何起爆剤ブツ込んでくれるんですかセラフオールさん! ああほら! 女性がさらに抱きつく力を強めてるし、そのせいでカテレアさんの体からボキボキとか聞こえて来てる!! しかも女性がちやいけないようなぐったり顔になってるから!! 誰か止めて!!

「お、お母さん! カテレアさん口から泡吹いてるよ!?!」

「え? あ、いけないいけない。ちよつと力を入れすぎたかね」

少女に止められ、女性がようやくカテレアさんから離れる。アレをちよつととか・・・本気出したらラフトクランズの装甲も潰されるかも。「○○ブリーカー! 死ねえ!」なノリで。もちろん、実際に試したとしてもそんな事にはならないだろうが、そう思ってしまうほど、女性の抱きつき攻撃（じゃないけど）は衝撃的だった。

「おうふ・・・」

崩れ落ちるカテレアさん。あれ、ヤバくね!? と思つたのも束の間。女性がカテレアさんを仰向けに寝かせると、その胸に手を当てる。次の瞬間・・・。

「ふんはあ!!」

「ぐえっ!?!」

瓦でも割りそうな掛け声と共にカテレアさんの胸を押す女性。そして、それを受けて潰れたヒキガエルのような声をあげるカテレアさん。一瞬体をビクツとさせたが、それだけだった。

「ありや、おかしいねえ。今ので目覚めるはずなんだけど」

「力が弱かったんじゃない? もつと強くしたら?」

「そうかい? なんもつと力を入れて、目覚めるまで続けてみるかね」
コオオオオオオ・・・なんてどこぞの世紀末救世主みたいな呼吸をしながら集中する女性。あれ? 起こすんだよね? 殺る気じゃないよね?

「ふんっ! はあっ! とおっ!」

「たわばっ!? あべしっ!? ひでぶっ!?」

「ほあたあっ!!!」

「うわらばっ!? ……って、殺す気ですか!!!」

「あ、起きた……」

何度目かの痙攣の後、カテレアさんがガバツと起き上がった。

「さあて、カテレアちゃんも起きた事だし。そろそろお店にご案内しないかねえ! そつちのお兄さんとお嬢ちゃんには色々お話が聞きたいしね」

「ふ、カテレアちゃんのお祝いだ。今日はいつも以上に気合い入れて作らないとな!」

「はーい! 二名様ごあんなくい!」

「ちよ、待ちなさい! 私を置いて行かないでくださいよ!」

少女に背中を押しされ、俺とセラフォルーさんは店の中へと足を踏み入れた。少し遅れて、カテレアさんも入店する。その後、出された料理に舌鼓を打ちつつ、女性達からの質問に答えながら、楽しい食事会の時間は過ぎて行くのであった。

第六十四話 彼女が残念になった理由

料理、さらにはサービスで頂いたデザートまですっかり平らげ、今はまったり食後のティータイム中。他にお客さんがいないので、店の三人も加えて一つのテーブルで談笑していた。

「そういえばカテレアちゃん。アンタこの間フューリー様とお会い出来たって話してたけど、あれから何か進展はあったのかい？」

噴き出しそうになった紅茶を何とか飲み下し、俺は呼吸を整えた。

いきなりむせかけた俺に対し、ボルドさん達が不思議そうな顔を向けて来る。あ、ボルドさんっていうのはこの店主の人の名前だ。ちなみにおかみさんがマテリアさん、娘さんの名前がレイラさんだ。

それはともかく、何故ここでフューリーの名が出て来るんだ。……いや、待て。確かアザゼル先生は最初こう言っていた。

———というか、すでにお前の復活を知らない者を探す方が難しいだろうな。

あれは流石に言い過ぎだろうとタカをくくっていたのだが、こうして実際に冥界にやって来てそれが誇張でも何でもない事を実感した。バアルさんを含めた若手悪魔さんも俺の事知ってたし、それ以前に街中でのざわつきも、列車から出た時のみなさんの反応だって、今にして思えば納得が出来てしまう。

あんまり深く考えない様にして来たけど、俺ってとんでもない事をしてしまったのかも知れない。前世では何の取り柄も無い一般人だったのに、まさかここまで注目される様な人間になってしまうとは。

俺の望みだった平穏な生活……。ひよつとしてその夢への道は、最初の段階から思いつきり逸れてしまっていたのかもな。……だからと言って諦めるわけにはいかない。逸れてしまったのなら戻せばいいだけ。今は騒がれてるけど、きつと一過性のもんだろう。それさえ過ぎればきつとみんな忘れるはずさ。うん、今後は「自分から」目立つような事をする事もないだろうしな。

「どうしたの？ 急にむせたと思ったら難しい顔をして」

レイラさんが俺の顔を覗き込んで来る。俺は首を振り、気にしないで欲しいと伝えた。

「それならいいけど。．．．あーあ。私も写真じゃなくて本物のフューリー様に会いたいなあ」

「．．．え？」

写真？ え、写真!? ど、どういう事だつてばよ!? 何でこんなごく普通のお宅に俺の写真があるの!?

「す、すみません。今レイラさんが言った写真というのは．．．!?」

「え、あなた読んでないの？ 魔王、サーゼクス・ルシファー様の妹でいらつしやるリアス・グレモリー様の婚約パーティーの最中に現れた伝説の騎士、フューリー様のお姿が写ってるあの新聞を」

初耳です！ ええ、初耳ですとも！ いや、そりゃあ、あの凄い両家の婚約という事でそういう人があの場にいた事には納得出来るけど、何で主役じゃなくて俺を撮ってんの!? あの時の俺って遅刻した挙句騎士ごっこなんてふぎけた事やらかしてパーティー台無しにした張本人なんですけど！

色々と混乱している間に、レイラさんが店の奥に引っ込み、少しして一枚の新聞を片手に戻って来た。

「ほら、これがその新聞だよ」

俺は渡された新聞にすぐさま目を通した。マテリアさんが「こんな大ニュースを知らないなんて、アンタどんだけの田舎から出て来たんだい」とか言ってるがそんな事はどうでもよかった。

まず目に飛び込んだのはでかでかと言われた『蘇る英雄！ 紅き姫の元へ参上した伝説の騎士！』という見出しと、その下にこれまたでっかく載せられたラフトクランズモードの俺の姿が写っている写真だった。それを見た瞬間、衝動的に「な、なんじゃこりゃあ?!?」と太陽に向かって吠えたくなくなってしまった。だが残念！ 冥界には太陽は無い！

——この日行われるのはグレモリー家とフェニックス家の婚約パーティー．．．のはずだった。しかし、我々が目にしたのは伝説の騎士の復活という奇跡の瞬間だった。かつて、我ら悪魔、そして墮天

使、さらに天使の三陣営を二天龍から救った英雄フューリー。なんとその正体は人間！ しかもリアス・グレモリー様のご学友であった！

前々号を読んで頂いた方はご存知だろうが、今回の婚約、リアス・グレモリー様は納得しておらず、婚約相手であるライザー・フェニックス様とレーティングゲームを行い、勝てば婚約破棄とする約束を交わした。だが前号に記した通り、結果はライザー・フェニックス様の勝利で終わった。その結末はちよつとした物議をかもしだしたが、とにかく婚約は予定通りとり行われるはずであった。その会場に現れた一人の青年。「すまない、グレモリーさん。少々遅れてしまったようだ」。会場にいた上級悪魔さえも圧倒するプレッシャーを放ちながら、リアス・グレモリー様にそう語りかける青年の口調はどこまで優しかった……。

……駄目だ。とりあえず一行目から読んでみたけどもう限界です。チラツと「フューリー語録」とか見えたけど、ここから先を読む勇氣が俺にはありません。しかも下の方にはフェニックスさんの炎に焼かれて上半身裸になった俺の姿の写真がある。なんでよりによつてそれを載せるんですかね。

「私もこの新聞一部持つてるよ。劣化しない様に嚴重に結界をかけて保存してるんだあ」

「この新聞の反響って凄かったみたいだよ。新聞社に何百、何千もの問い合わせがあつたんだって。中には他の写真が欲しいとか、新聞に載つてた半裸の写真のカラーが欲しいなんて電話もあつたって聞いてるよ」

「あ、それ私です。ちなみに私は鑑賞、保存、さらに夜のお供用に三部確保しています。元々、私がフューリー様のご復活を知つたのはこの新聞ですからね。私にとつては特別な物なのです」

軽く現実逃避としゃれこんでた間に、セラフォルーさん達が何やら話しこんでいた。いいなあ。俺も仲間に入れてくださいよ。ダイオウイカの生態とか、ジャージの裾についてる「足掛」の存在意義とか何でもいいから話しましょうよ。

「アンタ……見てごらんよ。カテレアちゃんのあの活き活きとした

顔・・・！」

「へ、へへ、悪い母ちゃん。さつき調理中にぶちまけちゃった香辛料が今になって効いてきちゃった。俺の代わりに存分にカテレアちゃんを見てやってくれ」

で、お二人はお二人で何で泣いちゃってるんですか。もうカテレアさんを見る目が完全に親レベルになってる気がするんですけど。

そうやって一人疎外感を味わっている俺は静かに天井を見上げた。ああ、誰か俺を癒してくれないだろうか。・・・帰ったら黒歌に猫モードになって思いつきりモフらせてもらえるようお願いしてみようかな・・・。

・・・

・・・

・・・

「ありがとうございますました〜！」

「またいつでも来いよ！」

「カテレアちゃん！ その二人、絶対大切にするんだよ！ それがアంతアの為なんだからね！」

すっかり話しこんでしまった所為で時間的に夕方になってしまった。ボルドさん達の声の背に、俺達は店を後にした。

「お邪魔しました」

「また遊びに行くからね〜」

「だから！ それは誤解だと・・・！」

どうやらカテレアさんのボツチ誤解は最後まで解けなかったようだ。それを可哀そうに思いつつ、歩きだす俺達。入り組んだ場所なのでタクシーを呼ぶと迷わせるかもしれないので大通りに出るまで歩く事になったのだ。

「楽しかったね、フューリーさん。カテレアちゃん」

「そうですね・・・」

俺が楽しめたのは料理を食べ終わる所まででしたが。

「・・・そうですね。ええ、本当に。こんなに楽しかったのは久しぶりです」

カテレアさんの声のトーンが今までと違う。思わず立ち止まる俺とセラフオルーさんに対し、カテレアさんが再び口を開く。

「誰かと一緒に食事をして、たわいない話で盛り上がる。・・・こんな何気無い事を、私は随分と長い間忘れていました。旧魔王派にいた頃の私は一人でしたから」

やる気がなかったから当然ですけどね、とカテレアさんはおどけた様子で続ける。

「その切っ掛けを与えてくださったのは・・・他の誰でも無い、フューリー様です。あの時」もそうでした。私が「カテレア・レヴィアタ」から「カテレア」になる事が出来たのも・・・。あなたは出会うたびに私に切っ掛けを与えてくださいますね」

「カテレアさん？」

「ふふ、この先はまた次の機会にいたしましょうか。そうすれば、またこうしてフューリー様とお会い出来ますし」

人差し指を口に当てながら微笑むカテレアさん。その表情はとても晴れ晴れとしていて、そして、とても綺麗だった。

(やべ、カテレアさんの顔がまともに見れん・・・！)

残念さが目立つ女性だけど、普通に綺麗なんだよな。そんな人がどうして俺にここまで好意的なのかも、ひよつとしたら今言いかけた事が関係しているんだろうか。だとしたら、俺には聞く義務があるのかもしれない。

「ねえ、カテレアちゃん。私は？」

「あなたは別に。・・・ま、まあ、全く感謝していないと言えば嘘になりますけど」

「ホント!? 嬉しいー!」

「ぐえっ!?!」

セラフオルーさんの腹部へのダイブという名のタックルを受けたカテレアさんが勢いよく後ろに倒れた。

「ぐぐぐ・・・な、何をするんですかセラフオルー!」

「えへへ、ごめんなさい。嬉しくってつい」

ペロツと舌を出しながら起き上がるセラフオルーさん。俺はカテ

レアさんに手を差し出した。

「大丈夫ですか、カテレアさん？」

「は、はい。問題ありません」

手を握り、カテレアさんを引つ張り上げた。よく見たら頬が砂煙か何かでちよつと汚れてる。ええつと、ハンカチハンカチ……。

「カテレアさ……ひよつとして手を傷めましたか？」

掴んだ方の手を凝視するカテレアさんが心配になって声をかけると、彼女は慌てて手を振った。

「な、何でもありませんわ！ ほら、こんなに振っても痛くありませんし！」

千切れんばかりに手を振り回すカテレアさん。何も無いならいいけど、ちよつとやり過ぎじゃないですかね。なんか余計心配になつたわ。

「そうですか。それでは、少し失礼しますね」

答えを聞く間も無く、俺はハンカチを手にカテレアさんの頬をそつと拭つた。断りも無く女性の顔を触るなど失礼だろうが、一々口で伝えるよりもこの方が早いから勘弁してもらおう。

「え、あれ、今、フューリー様の手が私の……」

カタコトな口調でカテレアさんがそう呟いたと思つた瞬間……彼女の鼻から勢い良く血が噴き出した。ヴァツ!? 何事!? 鼻血は兵藤君の担当じゃないの!?

「セ、セラフォルーさん！ カテレアさんが……!」

「とりや~~~~~!」

どうしようかとセラフォルーさんの方を向くと、彼女は何を思つたのか地面に向かって思いつきりヘッドスライディングをかましていた。

「セラフォルーさん!」

「え、えへへ、ちよつとつまずいちゃつた。ほつぺも汚れちゃつたし、誰か拭いてくれないかなあ……?」

いや、明らかにつまずくつてレベルじゃなかったですよ！ しかも「とりや~~~~~!」とか叫んでたし！

片や鼻血を吹き出し、片や顔どころか全身を汚している。カオスな空気の中、俺は誰に言うでも無くこう口にした。
「・・・俺にどうしろと？」

第六十五話 男子三日会わざれば刮目して見よ

カテレアさんを訪問して数日、アザゼル先生の約束した一週間を迎えた。修行初日と同じく、リアス達が庭に集められた。その中には師匠さんの所へ行っていた木場君と、心を鍛えるプログラムを受けに行っていたヴラディ君もいる。今日の為に呼び戻されたのだ。あと、何故かアーシアも強制参加だった。

「よし、これで全員だな」

アザゼル先生がみんなの顔を見渡す。そこで木場君が異議を唱える様に挙手した。

「先生、イツセー君がいないんですけど」

木場君の言う通り、ただ一人兵藤君の姿だけがここには無い。だが、これにはちゃんとした理由があった。アザゼル先生が問題無いとばかりに頷く。

「ああ、アイツは差し入れも兼ねて個別に会いに行くから問題ねえよ」
ちなみに俺も同行する事になっている。兵藤君、元気かな。思い出すのは、タンニーンさんに拉致られる彼の姿と悲鳴。こうしている今も、タンニーンさんにしごかれてるんだろうな。

「それで、わざわざ祐斗達まで呼び戻した理由は何なの？」

リアスがもつともな意見を口にする。みんなの視線が向けられる中、アザゼル先生が本題を口にした。

「修行を始めて一週間ほど過ぎたが、ここでお前らにさらなる修行メニューを追加する」

「追加・・・ですか？」

疑問符を浮かべる朱乃。ここに来ての追加メニューに一同は顔を見合わせている。

「ただの追加メニューじゃねえ。この修行で、お前達にはそれぞれ必殺技を習得してもらおう」

どうだ！ とばかりに笑みを見せる先生とは対照的になんとも微妙な表情を浮かべるリアス達。そりゃあいきなり必殺技を覚えてもらうとか言われても反応に困るよな。

そんな彼女達の反応に、アザゼル先生が不満げな声をあげた。

「おいおい、お前らもつとテンション上げろよ。必殺技だぞ?」

「だって・・・ねえ?」

「突然言われましても・・・」

「というか、何故このタイミングなんですか?」

「白音に余計な負担を増やさないで欲しいにや」

みんな乗り気じゃなさそうだな。これだと今回の話は無かった事にした方がいいんじゃない?」

「このタイミングだからいいんだよ。それにいいのか? フューリー直々に技を教えてもらうなんて滅多に無い機会だと思いがな」

「え? まさか、リヨーマが考えてくれたの?」

そう続けたアザゼル先生に、みんなの目の色が変わった。あー、その、考えたと言つても元々あったヤツをそのまま引用しただけだからそんなに期待の込められた目を向けられてもなんか申し訳ない気が・・・。

特に木場君とゼノヴィアさんの目がヤバい。なんかキラキラしたものが飛んで来てる気がする。これは失望された時の事を考えると生半可な事は言えんぞ。

「そうだ。俺から見て中々面白そうな技ばかりだったぞ。どうだ、これでもやる気にならないか?」

反論の声はあがらなかった。それに満足したのか、アザゼル先生は五枚のディスクを懐から取り出した。

「これには各人に覚えてもらう技のモーションデータが入っている。俺とフューリーはこの後イツセーに会いに行く。その間に、一人でこれを見て自分なりに練習してみる。もちろん、ちゃんとした指導も行うがな。まずは・・・リアス」

「はい」

先生からディスクを受け取るリアス。続いて、朱乃、木場君、ゼノヴィアさん、塔城の順で続く。

「全員分行き渡ったな。それじゃあ・・・」

「あ、あの、アザゼル先生、僕の分は・・・?」

ヴラディ君がおずおずと手を上げる。それに対しアザゼル先生がきつぱりと答える。

「お前はお預けだ。神器も使いこなせていない現状で技なんて覚える余裕なんて無いだろう」

「うう、確かにそうですけどお・・・」

「文句があるならさっさと神器を使いこなせるようになれ。代わりに言ってはアレだが、プログラムの合間にフューリーとの特訓を入れてやる」

「ほ、本当ですかあ！ よかったあ、先輩と一緒になら頑張れそうですう」

ヴラディ君から信頼の込められた微笑みが向けられる。・・・俺よ、くどいようだが、いくら可愛くても男の子だからな。

「私にも無いんですか、アザゼル先生？」

「アーシア。お前の神器は完全な支援型だ。それにお前自身、他人を傷付ける力なんて欲しくないだろう？」

「・・・そうですね。私は誰かを傷付けてしまうような力なんていません」

アーシアらしいな。でも、彼女はそれでいい。優しい彼女にそんな力なんて必要無いもんな。いざという時は俺が彼女の代わりに殴ればいいだけだし。

でもなあ、それでも何かしらの自衛の手段は持つておいた方がいい気もするんだが。変態共が触れたら吹っ飛ぶバリアとか、安全な場所までの瞬間移動とか・・・って、これじゃまんまオルゴン・クラウドじゃん。

・・・いや、いいかもしれん。問題はどうやってアーシアにオルゴン・クラウドの力を持たせるかだけど・・・オカンの駒とか渡してみるか？ いや、しかし、うーん・・・。

「どうしたんだ、神崎先輩。先程から難しい顔で何やら考えているようだが・・・」

「きつと、僕達をどう指導するか色々考えてるんだよ。ふふ、これは気合を入れないと大変かもね」

「・・・頑張ります」

後輩三人から向けられる視線を感じながら、俺はしばらく思案を続けるのであった。

・・・
・・・
・・・

一時間後、俺はラフトクランズモードで兵藤君が連れて行かれた山に向かつて飛んでいた。

翼を飛ばたかせながら先行するアザゼル先生の後ろを追いかける。正直、この姿にならなくてもアザゼル先生に運んでもらった方が楽な気がしたが、「野郎を抱えて飛ぶ趣味はねえよ」とバツサリ却下されてしまった。

おっと、そんな事を考えている間に目的地が見えて来たぞ。ん？

何で山の中にいる兵藤君の場所がわかるのかって？ 別に兵藤君を見つける必要は無い。彼と一緒にいるはずの大きな目印を探せばいいだけの話だ。

その目印・・・タンニンさんの傍に降り立つ俺とアザゼル先生。ラフトクランズモードを解除し、タンニンさんに近づく。

「よお、タンニン。様子を見に来てやったぜ。どうだ、イツセーの調子は？」

「ア、アザゼルか・・・」

どこことなく気まずい声を出すタンニンさん。それを疑問に思いつつ辺りを見渡すが、肝心の兵藤君の姿が見えない。

「先生、兵藤君がいません」

「あ？ どこ行っただアイツ。タンニン。イツセーはどうしたんだよ？ シヨンベンか？」

「う、うむ、それなんだが・・・。確かに、俺もあの小僧を一日でも早く使い物にしようと少し気合いを入れ過ぎたのは認めるが、まさかあんな事になるとは・・・」

「おいおい、まさか殺しちまったわけじゃねえだろうな？」

「いや、そうじゃない。そうじゃないのだが・・・」

「アオオオオオオオオオオオン!!!」

「ツ・・・!?!」

タンニーンさんの声を遮るように、獣のものらしき咆哮が俺の耳をつんぎく。今の・・・かなり近いぞ。けど、どこか聞き覚えのある声なのはどうしてだろう。

奥の草むらが揺れる。おそらく声の正体はあの向こう。固唾を呑んで窺う俺達の前に、ついにそれが姿を現した。

「・・・」

「兵藤君?」

現れたのは兵藤君だった。服はボロボロだが、顔つきは良い。それに安堵しつつ、俺は兵藤君に近づこうとした。

「待て、フューリー。どうも様子がおかしいぞ」

そんな俺の肩を掴むアザゼル先生。え? と振り返ろうとした瞬間、兵藤君が天に向かって吠えた。

「アオオオオオオオオオオオン!!!」

こ、この声つてさっきの!?! つて事は、さっきのも兵藤君の声だったのか!?! だから聞き覚えが・・・じゃない! どうしたんだ兵藤君!?!

——ア、アザゼル! それにフューリー! 何故お前達がここに

!?! いや、今はそんな事どうでもいい! 頼む、相棒を止めてくれ!

混乱する俺の耳にドライグさんの声が届く。止めてくれて・・・
一体彼に何があったっていうんだ。

「ドライグ、イツセーはどうしたんだ?」

——タンニーンとの命がけの特訓、そして女断ちを強いられた結果・・・野生化した。今の相棒は本能のまま動きまわる獣そのものだ!
!

ナンテコツタイ! てか、どれだけ追い詰めたんですかタンニーンさん! と、とにかく、そういう事ならなんとかして正気に戻さないと。

再び近づこうとした俺の前で、兵藤君が地面に手をつける。まるでクラウチングスタートの様な体制をとると同時に、猛烈な寒気が俺を

襲った。そしてその正体が何なのか確かめる間も無く、次の瞬間には俺の視界には冥界の空が広がっていた。

「……え？」

何が起こったのか理解する間もなく、俺は地面に叩きつけられる様に落下した。呆然としたまま顔を上げると、さっきまで俺がいたはずの場所に、兵藤君の姿がある。そこでようやく、俺は彼にふっ飛ばされたのだと頭で理解出来た。

「ほお、大した速さだ。とても修行前のコイツが出せる速さじゃなかったが、どうやら成長自体はしっかりしているみたいじゃねえか」
感心するアザゼル先生を次の狙いにしたのか、兵藤君が襲い掛かる。けれど、先生はそれを片手で受け止めてしまった。

「……最も、来るのがわかっていれば怖くもなんとも無いがな。面白いモンが見れたし、そろそろ正気に戻してやるか」

そう言って、アザゼル先生は兵藤君を捕まえたまま、懐から一冊の雑誌を取り出した。やけに肌色の目立つ表紙の正体は、十八歳未満お断りのアレな雑誌だった。

「ッ!？」

兵藤君の目が大きく見開かれる。右へ左へ、アザゼル先生がその雑誌を移動させる度に、兵藤君の目もそれを追いかける。

「シャレのつもりで準備した差し入れがこんな場面で役に立つとはな。そらイツセー、お前の待ち望んでいたものだぞ！」

雑誌を放り投げるアザゼル先生。刹那、弾かれた様に雑誌に向かって走り出す兵藤君。そして、彼はそのまま雑誌と共に草むらの奥に消えてしまった。

「このタイミングで会いに来て正解だったな」

「そ、そうですね……」

あのまま野生化が進んでいたらとんでもない事になってただろう。それを思うと、本当に来てよかった。

数分後、晴れ晴れとした顔で戻って来た兵藤君を見て、俺はその思いをさらに強くするのであった。

第六十六話 教えてアルⅡヴァン先生！く伝授編く その一

「俺・・・そんな事になってたんですね」

アザゼル先生の機転？ で正気を取り戻した兵藤君。差し入れに持って来た弁当をかつこみながら、彼は自分の身に起きていた事を聞いてゲンナリした表情を浮かべている。

「すみません、なんか先輩にも迷惑かけちゃったみたいで」

「いや、気にしなくていいさ」

驚きはしたが、別にどこもケガとかしてないしな。そう言うと、兵藤君は少し安堵したようだった。

「そうだぜイツセー。むしろ誇れよ。不意打ちとはいえ、あのフューリーを吹っ飛ばしたんだぜ？ 良い自慢話になるじゃねえか」

「何言ってるんですか！ それで変な連中に目を付けられちゃったらやばいでしょうが！」

「にしても・・・さっきの野生化状態。なかなか興味深いな。あそこまで理性を失えば使い物にならねえが、暴走一步手前で抑える事が出来れば・・・」

「話聞いてますか!?!」

至近距離のツツコミにも関わらず、先生はアゴに手を当てながら熟考している。最近わかったが、どうも先生が考え事をする時には周りの声は届かないようだ。

「もういい、先生は放っておこう。先輩、部長達の様子はどうですか？

やっぱりみんな頑張ってますか?」

「ああ。みんな一生懸命に修行しているよ」

「そうですか。・・・なら、俺も頑張らないとな！」

残りの弁当を平らげ、気合いと共に立ち上がる兵藤君。しかしながら、彼の熱血っぷりは見ていても気分がいい。この世界は小説が元になっているが、ひよっとしたら彼が主人公だったりして・・・。「そんなやる気溢れるお前にさらなるやる気が出る話を持って来て

やったぞ」

考えごとが済んだのか、アザゼル先生が会話に加わる。何の事かと首を傾げる兵藤君に、先生はここを訪れた目的を告げた。

「イツセー。お前には今日から通常の修行に加えて、必殺技の修行も行ってもらおう」

「ひ、必殺技!?!」

「しかも、フューリーがお前の為に用意した必殺技だ」

「マ、マジツすか!?! 先輩が俺の為に!?! おおお! 燃えて来たぜえええええええええ!!」

兵藤君、喜んでくれるのは俺も嬉しいんだけど、そこまで大きなリアクションとられるとちよつと気恥ずかしくもあるんだよな。木場君達といい、どうしてこんな素人の意見をそこまで信頼してくれるんだろう。おかげでプレッシャーかかりまくって胃が痛くなつて来そうだ。

「いいぜ、イツセー。それこそ俺が望んでた反応だ」

「当然ツスよ! 必殺技と聞いて燃えない男なんていやしませんつて!」

「だよな! 燃えるよな!」

「ええ、燃えますとも!」

「はははは!!」

やっぱり仲いいなああの二人。肩まで組んじゃって。．．．そういえば、俺ってこの世界に来てあんな風に気心の知れた同性の友達つていたっけ? クラスのみんな．．．は仲はいいけど、親友と呼べる子はいないし。ていうかそれ以前にどうも年上目線になっちゃって一歩引いちゃうし。．．．あれ、ひよつとしなくても0人?

「よし、ならまずはこちらを見て．．．どうしたんだ、フューリー?」

「先輩、顔が真っ青ですよ? 気分でも悪くなりました?」

「いや．．．何でも無い」

二人の気遣いが今の俺には辛かった。．．．いや、しかしこれは丁度いい機会だったのかもしれない。こうして俺の置かれた状況に気付けたのだから。よし! 卒業までの目標が一つ出来たぞ。必ず親

友と呼べる相手を見つけてみせる！ 具体的には兵藤君と木場君みたいなの！

「そうか？ なら気を取り直して。イツセー、お前にはこの技を習得してもらおう」

アザゼル先生が小型プレイヤーにディスクを差し込む。画面に例の広大なフィールド、そしてアルⅡヴァン先生Ⅱ俺の姿が映し出された。

「え、これって先輩ですよ？ 先生、何なんですかコレ？」

「まあ見てろ」

先生がプレイヤーを操作すると、画面の中の俺が動き出した。十メートルほど離れた目標に対し、右腕を突き出し左腕を引く。そうして構えをとった俺の左腕が紫電を纏う。データ作成時にも思ったが、プラズマバックラーが無いので違和感ありまくりだ。とはいえ、イメージさえしつかりすれば再現は出来たので、今は気にする必要は無いのか。

ともかく、攻撃態勢をとった俺が目標に向かって一気に飛び出す。ブースターをイメージしたので、およそ人間の出せるとは思えない速度で目標に接近する俺。そして、振りかぶった左腕を、紫電と共に全力で目標に叩きこんだ。バチバチと弾けるプラズマが目標を包み込み、一瞬の間を置いた後、盛大に爆発した。

煙が晴れた時、そこには立ち尽くす俺と、足下で粉々になっている目標の残骸が映っていた。

映像はここで終了し、俺達は三者三様の表情で顔を見合わせた。その中で真っ先に口を開いたのは兵藤君だ。

「あの、先輩。せっかく考えてもらって悪いんですけど、この技、俺に使えますか？ 俺、朱乃さんみたいに雷を扱えるわけじゃないから、無理な気がするんですけど」

「別にこれをそのまま再現しろってわけじゃねえよ。これはあくまで雛型だ。これを参考にしてよりお前に相応しい技に昇華していく。例えば、お前が今言った雷を倍加に変えるとどうなる？」

答えようとしたらアザゼル先生が先に口を開いた。

「あつ・・・！」

合点がいったのかそんな声を上げる兵藤君。アザゼル先生は頷き、再びプレイヤーを起動させる。流れる映像は、もう一つの案であるジエット・ファントムのモーシヨンデータだ。ちなみに第二次では無くOGs仕様である。これにはちよつとした理由があった。

「イツセー。お前は以前白龍皇の力を馬鹿みたいないな方法で手に入れた」

「馬鹿みたいって・・・」

「褒めてんだよ。で、実際その力・・・『白龍皇の籠手』は使えるのか？」

——難しいだろうな。

アザゼル先生の問いに答えたのはドライグさんだった。

——元々が相反する力である上、相棒はまだ制御権を得ていない。使用自体は可能だろうが、おそらく完全には無理だ。消耗も激しいだろう。相棒が力をつけ、制御するに足りる者へと成長したその時、初めて『白龍皇の籠手』は全開の力を発揮出来るようになるだろう。

つまり、今の兵藤君では実力不足で使えないという事か。中々に厳しいですな、アルビオンさん。

——俺がアルビオンの立場なら、宿主以外に自分の力を勝手に使われるのは気分が悪い。それが実力不足な者ならばなおさらな。相棒、『白龍皇の籠手』を使いたいのなら、ヤツに認められる実力を早く身につける事だな。

「結局、俺の弱さが原因ってわけですか・・・。ああ、わかった！ わかりましたよ！ どうせいつかは再会するんだ。その時まで認められるよう強くなってやるさー！」

改めて強くなる必要性を確認する兵藤君。強化フラグにライバルは欠かせないしな。にしてもライバルか。仮にだけど、俺にもライバルがいたとしたら・・・いや、駄目だ。そもそも騎士（笑）なんて名前からしてふざけているような人間相手に真面目になつてくれる相手なんているわけないか。

「なるほどな。なら、今はまだこの技はお預けって事か」

「先生、どうしてここで『白龍皇の籠手』の話を？」

「一撃目で相手を『半減』させ力を奪い、二撃目で『倍加』と共に一気に叩きこむ。もちろん、簡単に出来る技ではないだろうが、これをモノに出来れば、おそらく若手の中でお前を止められる者は存在しないだろう」

「ツ……」

アザゼル先生の説明に息を呑む兵藤君。つまり、限界まで倍加して、さらに相手の力を上乘せして叩きこむって事でいいのかな。しかも、相手の力を半分にした状態で。それに、相手が強ければ強いほど奪える力も大きいから、今後兵藤君がこの技を使えるようになったら、完全なボスキラーになるじゃないですか。

情熱お兄さん「みんな、こういうのをなんて呼ぶか知ってるかい？」

みんな「チート！」

情熱お兄さん「そうだね。プロテインだね」

いかんいかん。つい脳内で懐かしいネタを再生してしまった。とにかく、今すぐには使えないが、将来的には期待出来る技になりそうだ。

「説明は以上だ。早速始めるぞ。タンニーン、ちよつと耳かせ」

ドラゴンに耳打ちする墮天使。・・・見る人が見たら卒倒しそうだな。一分ほどして顔を上げたタンニーンさんが突然翼を動かした。

「ふん、いいだろう。お前に従うというのも癪だが、中々面白そうだしちよつと待っている」

そう言い残し、タンニーンさんは空へ舞い上がり、どこかへ行ってしまった。何が始まるのか説明を求めたら「待ってる」と言われたので、そのままタンニーンさんが戻って来るのを待った。

数分後、タンニーンさんは大きな岩をいくつも抱えて戻って来た。どれくらい大きいか？ 地面に降ろしたら辺りが揺れるレベルですけど何か？

かと思うと、再び飛びあがるタンニーンさん。そして、次に運んで来た岩を見て、今度こそ俺と兵藤君は絶句した。その岩・・・最早ビ

ルレベルの大きさのそれを満足そうに見上げるアザゼル先生。

「おお、こいつは中々よさそうだな」

「ああ。どうもこの辺りの岩は質がいいみたいだな。固さは文句無しだ」

「あ、あの、先生。こんなでつかい岩で何をするつもりなんですか?」
「修行に決まってるだろうが」

「お前は何を言っているんだとばかりに答える先生。いや、それはこちらのセリフです。」

「アンタは何を言っているんだ」

あ、兵藤君が言っちゃった。けど、実際これでどうするつもりなんだろう。・・・まさかと思うが、これらの岩を相手にジェット・マグナムを撃つてみるとか?」

「イツセー、これからお前にはあの岩を使って技の練習をしてもらう。さっきの映像を思い出しながらやってみろ」

「当たりかよ! しかもいきなりやってみるとか流石に早過ぎじゃないですかね。」

「ちよ、ちよつと待ってくださいよ! アドバイスも無しにいきなり撃つとかどんなスパルタ!?」

「習うより慣れろっていうだろ。それに、うだうだ話すよりもこうして体を動かした方がお前には合ってるだろうが」

「そ、それはそうですね・・・」

「いいからやってみろ。アドバイスはそれからだ」

「わかりました。よし、いくぞドライブ!」

切り替え上手いな兵藤君。籠手を掲げた彼の体を真つ赤な鎧が包み込む。彼は一番小さな岩(それでも彼の身長に三倍はありそうな大きさだが)を目標に動いた。

「うおりやあああああああああ!!!」

左腕を振り上げながら岩に向かって全速力で走りだす兵藤君。そして、岩に向かって思いつきり拳を叩きつける。結果、岩は見事に碎け散った。

「どうでした?」

鎧を解除して駆け寄って来た兵藤君に、アザゼル先生が容赦無く拳骨を落とした。痛みで悶える彼にアザゼル先生が呆れた様子で言い放つ。

「アホ。お前の背中のブースターは飾りか？ あんなとろい攻撃が当たるとでも思ってたのか。覚えとけ。どんな強力な攻撃もな、当たらなければどうって事はねえんだよ」

「ッ!? 何故先生があのお少佐（発言当時）のセリフを!? つまり、兵藤君は今の三倍の速さを身につけなければならないという事なのか!?」

「仕方ねえ、ここはやっぱり先生のお手本を見せてもらおうしかねえな」「頼むぜ」と俺の肩を叩くアザゼル先生に戸惑う。え、手本って・・・俺が？

「わざとらしく言いおつて。最初からそのつもりで俺にあの岩を持つてこさせたのだろうか」

タンニーンさんの目線の先には、あのビル岩（勝手に命名）が聳え立っている。つまり、俺にあの岩をぶつ壊せと？ はは、それなんてイジメ？

「バラすなよタンニーン。・・・ま、そういう事だ。いっちょお前の例の力でイツセーに手本を見せてやってくれ」

それってラフトクランズモードでつて事？ それならまだ希望が持てる。流石に生身のパンチ一発でアレを壊すのはなあ・・・。

まあ、そういう事ならやってみよう。手本になるかわからないが、精々兵藤君に幻滅されないよう頑張らないとな。

S I D E O U T

イツセーS I D E

というわけで、俺の新しい必殺技のお手本を先輩が見せてくれる事になった。ワクワクするぜ。一体どれほどの威力の技になるんだろうな。

「・・・みんな、離れていてください」

あ、あれ・・・？ 気のせいかな。先輩の声が本気なんですけど。こ

イツセイSIDE OUT

IN SIDE

やれやれ、アザゼル先生も人が悪いなあ。最初からデモンストレーション用の岩を用意してたんなら言ってくれたらいいのに。

いきなり岩が消えた時は驚いたが、後になってアザゼル先生が何を考えていたのか俺なりに結論が出た。きつと先生は兵藤君が技の習得に積極的になるように、最初にインパクトを与えたかったんだろう。

その為にも、技の威力がどれだけ凄いか彼に見せる必要があった。だからあの岩にも最初から触れると消えるような細工がしてあったんだろう。俺が貰った認識阻害眼鏡のパワーアップ版とかかな？

実際にはそこにあるけど見えなくなるとかそういうヤツかも。殴った時もまるで手ごたえが無かったし、材料も発泡スチロールとかだったりして。よくよく考えてみれば、いくらなんでもあんな大きい岩が都合よくあるとも思えないし。わざわざタンニンさんに採りに行かせるフリまでしちゃって。おかげでまんまと騙されてしまった。

とはいえ、演技とか出来ない俺に教えてたら兵藤君に気付かれたかもしれないし、先生もそれが不安だったから俺に教えなかつたんだろうな。ただ、一言だけ言わせてもらえば、消すよりも壊すような演出の方がよかったかもしれないな。あれじゃ凄さがいまいち伝わってない様な気がする。

たぶん、この調子で他の子達にも色々教えないといけないんだろうな。木場君とかならなんとかなるけど、リアスのガンスレイブは無理だからね？ アルⅡヴァン先生にだって出来ない事はあるんだから。

とりあえず、時間一杯までは兵藤君の練習に付き合おう。そう決めて、俺は何故か委縮している兵藤君に近づくのだった。

第六十七話 教えてアルⅡヴァン先生！く伝授編く その二

二時間ほど兵藤君の特訓に付き合ひ、俺とアザゼル先生はグレモリー邸へと舞い戻った。兵藤君からは引き止められたが、アザゼル先生が「教えるべき所は教えた。ガキじゃねえんだから後は一人で頑張れ」とバツサリ切り捨てた。先生、彼はまだ高二です……。

とはいえ、アザゼル先生の言った通り、この二時間で技の流れは覚えられたみたいだし、これからは彼なりに技を磨きあげていくだけだ。頑張れ兵藤君。キミなりのジエツト・マグナムの完成を応援してるからな。

「あ、リョーマさん、アザゼル先生、お帰りなさい！」

最初に出迎えてくれたのはアーシアだった。彼女は顔をほころばせ、駆け足で近寄って来た。

「イツセイさんの様子はどうでした？」

「ああ……タンニーンさんと一緒に頑張っていたよ」

実際は野生化するくらい追い込まれていたが、それだけは口が裂けても言うわけにはいかない。兵藤君の名誉の為にも、この事は墓まで持っていこう……。

あの時の兵藤君はある意味凄かった。あれほどまでに見事に吹っ飛ばされたのは、前回の合宿で塔城さんにくっ飛ばされた時以来だ。……どうも俺は不意打ちというか、突発的な出来ごとに弱いかもしれない。まあ、塔城さんの時は不意打ち云々じゃなくて単純に油断してただけか。いやだってさ、あんな可愛らしい子があんな力を秘めてるなんて普通わかるわけないだろ。その後で『戦車』の特性について教えてもらったから納得出来たけど。

でも、クレイジー神父の時はちよつと違ったんだよな。あの時もうきなり襲われたけどギリギリで回避出来たんだっけ。なんか急に悪寒が過って勝手に体が動いた憶えがある。言葉じゃ上手く表現出来ない感覚だけど、これまでも何度か言い様も無い悪寒に苛まれた事が

あつたし、兵藤君に吹っ飛ばされる直前も寒気を感じた。

・・・ひよつとして、危険が迫るとセンサーみたいに反応するのだろうか。マンガとかだと武道の達人みたいなキャラに不意打ちかましても、まるで最初からわかってたかのように対処してしまうし、アルヴァン先生ならそのレベルに達していてもおかしくはない。つまり、彼を模したこの体も危険を察知する能力が優れているのかもしれない。

よし、今後あの感覚の事を『アルヴァンセンサー』と呼ぶ事にして、これから先センサーが反応したら何かが起こると思つて行動するようにしよう。最初から身構えておけば、何か起こった時に棒立ちにならずに済む。

考えてみる。兵藤君だったからよかつたものを、もしあれがペロリストだったら？　そんでもって、その場にアーシアがいたら？　吹っ飛ばされた隙に彼女が攫われてもしたら？

万が一・・・いや、億が一でもそんな事はあつてはならない。アーシアが幸せになるまで見守り続ける・・・彼女がウチに住む様になつてから俺はそう誓つた。

「リョーマさん？　難しい顔をしていますけど、何を考えているんですか？」

「アーシア。俺はもう同じ過ちは繰り返さない。これから先、何があろうとも、必ずキミを守ってみせる」

「ふ、ふええ!?　な、何ですか急に!？」

顔が真っ赤になるアーシア。突拍子も無くこんな事を言われて混乱するのは当然だろう。でも、こうして口にして誰かに聞いてもらつておかないと、すぐに忘れてしまいそうだから勘弁してもらおう。「おいフューリー。イチヤつくのは勝手だが、お前の役目を忘れるなよ」

その言葉に益々顔を赤くするアーシアとは対照的に、俺は冷静だった。だって、今のは決意表明みたいなものだ。それがどうしてイチヤつく事になるのか。

「ええ、わかつてますよ。では誰から見に行きますか?」

「そうだな……。まあ順当にリアスから見に行くか」

「わかりました」

「部長さんの所に行くんですか？」

「ああ。朝にアザゼル先生から必殺技の説明があっただろう？ その事でそれぞれに話をしにな」

「そうですか……」

「そういうわけだから、俺達はそろそろ……」

「あ、あの！ ちょっとだけでいいんで、私にお時間を頂けませんか！ 私もちろんと特訓している事をリョーマさんに確かめてもらいたいんです！」

やけに気合いの入った表情をしつつ、グツと拳を握るアシア。アザゼル先生の方をチラリと見遣ると無言で頷かれた。どうやら待ってくれるようだ。正直、彼女がどんな特訓をしていたのか密かに気になっていたのでありがたかった。

「わかった。俺でよければ見せてもらうよ」

「ありがとうございます！ それではですね、私から少し離れた所に立っててください」

指示通り、アシアから二メートルくらい離れた場所に移動する。うーむ、果たして何が始まるのだろうか。

「ところでアシア。アザゼル先生はキミにどんなトレーニングを命じたんだ？」

「あ、はい。私は神器の強化を目指してのトレーニングです」

「神器の強化？」

「アシアの神器は触れるだけで対象を回復させる。その回復速度も大したものだ」

俺の疑問にアザゼル先生が説明をしてくれた。

「だが、この『触れる』ってのが曲者だな。お前……は心配ないか。他のヤツ……例えばイツセーなんかは怪我をしたのに、わざわざ近づかないと回復が行えない。戦う力を持たないアシアが戦闘の中に飛び込むのは危険過ぎる。だからこそ神器の強化……触れるだけじゃなく、回復の効果範囲を広げる特訓を考えた。俺の計算では、こ

の特訓によって、アーシアは回復のオーラを飛ばす事で離れた相手でも回復出来るようになる」

「おお、それは凄い！ さりげなくdisられた気がするが、そんな事もどうでもいいと思えるくらいの凄さだ！」

「という事は、もしかしてアーシア。キミがこれからやろうとしているのは……」

「はい！ まだまだ完璧とは言えませんが、回復のオーラを飛ばせるようになりました！ 今からリョーマさんに向けて飛ばしますから見ててください！」

そう言つて、アーシアは祈るようなポーズをとったあと、胸の高さで両手を重ねてそれをグツと突き出した。

「むむむむくくく……えいっ！」

可愛らしい掛け声（おそらく本人は気合いの籠った声だと思つている）と共に、突き出した手に小さな光の球が出現した。それはゆつくりと手を離れ、これまたゆつくりした速度で俺の方へ飛んで来た。音をつけるなら「ふよふよ」といった所だろうか。

そうして飛んで来た光の球が、俺の胸元に当たると、そのまま吸いこまれるように胸の中に入って行った。瞬間、温かい何かが全身を行き渡るのを感じた。まるで、彼女の優しさが直接注ぎ込まれているような気分だ。

「ふう……。えへへ、まだこれくらいしか出来なですけど、いずれはもつともつと遠くまで飛ばせるようになって、みなさんのお役に立てるよう頑張ります！」

はにかむアーシア。……もう、あれだな。どうしてこう、彼女は一々やる事が可愛らしいのだろう。

限界だった。俺は無言でアーシアに近付くと、断りも無く彼女の頭を撫でまくった。余計な言葉はいらない。ただ彼女の頭を撫でたいと、この時の俺はそう思った。

「え、あ、あの、リョーマさん？」

「ありがとう、アーシア。これで後十年は戦えそうだ」

（これは……褒めて頂いているのでしょうか？ リョーマさんはたま

に私には理解出来ない事を言われる時がありますけど、今の何か私なんかでは考えの及ばない意味があるのでしょうか・・・)

確信した。彼女の神器は『友情』に加えて『激励』の効果もあると！ 今の俺なら何でも出来そうだ！

(い、いつまで続けるのでしょうか。あ、でも、私としては嫌とかじゃなくて、むしろリョーマさんに触れてもらって嬉しくて・・・あうう、誰にいいわけしてるのでしょうか私は・・・)

「・・・おい、誰かコーヒー持って来てくれ。ブラックの濃いヤツをな」

その後、痺れを切らしたアザゼル先生に強制的に引きはがされた俺はアーシアと別れ、特訓を行っているであろう他の子達の所へ向かうのだった。

幕間その二 魔王少女と残念さん

「それじゃあね、フューリーさん。今日はどうもありがとうございます」
「いえ、お役に立てたのなら嬉しいですよ」

何度も振り返りながら手を振るセラフオールさんに、俺も手を振り返す。突然お願いがあるとグレモリー邸までやって来た時はちよつとビックリしたが、あれくらいの事で喜んでもらえるなら安いもんだ。

でも、改めて考えてみると変なお願いだつたな。あ行からわ行までを読み上げて、それを録音するなんて。セラフオールさんはこれで見んな幸せになれるとか言つてたけど、どういう意味だつたんだろう。・・・まあ、魔王である彼女には俺なんかでは想像も出来ない深い考えでもあるのだろう。なので考えるだけ無駄かな。そんな事を考えている暇があつたら、リアス達の修行に付き合うべきだろう。

そう決めて、俺はそのまま修行中のリアス達の様子を見に行くのであつた。

S I D E O U T

セラフオールSIDE

フューリーさんに会いに行つた翌日、私はカテレアちゃんに会いに彼女の家に向かった。私が考えたとある計画にカテレアちゃんも巻き込む為だ。

インターフォンを鳴らす。・・・そういえば、前はフューリーさんと一緒に来たんだっけ。えへへ、あの時のカテレアちゃん、面白かつたなく。私の名前もちゃんと発せられないくらいテンパつてたんだよね。まあ、気持ちはわかるけどね。私だつて逆の立場だつたらビックリしただろうし。

・・・思い出しついでだけど、私、フューリーさんに壁ドンされちやつたんだよね。その前には咄嗟の事だつたとはいえ、だ、抱きついちやつたし。も、もしもうちよつと勢いが強かつたら、あのままキ、キスとかしちやつてたりして・・・。

「あわわわ．．．！ な、何考えてるんだろ、私」
「浮かんだイメージを追い出す様に頭を振る。．．．よし、落ちついた。」

それにしても、遅いなカテレアちゃん。いつもならもうそろそろ返事があるはずなのに。ひよつとして出かけちゃってるのかな？

私は門を開けて玄関へ移動した。ドアノブに手を伸ばすと、扉がゆっくりと開いた。うーん、ちゃんといえるみたいだね。寝てるのかな？ だとしたら鍵もかけずに不用心だよ。

「お邪魔しま〜す」

私は靴を脱いでお家上がった。さてさて、カテレアちゃんはどこにいるんだろう。とりあえず、カテレアちゃんのお部屋に行ってみよう。予想通りに寝てたりしたらきつとそこだろうしね。

私はカテレアちゃんのお部屋に向かった。扉の前、ノックしようと手を上げた直後、中からこんな声が聞こえて来た。

「はあ．．．はあ．．．フユ、フューリー様あん．．．！」

「あつ．．．(察し)」

どうやらお取り込み中みたい。もう、カテレアちゃんたらこんな時間から飛ばし過ぎだよ。しょうがない。カテレアちゃんが出て来るまでリビングで待つてよつと。

そう決めて、私はその場を立ち去るのだった。

．．．
．．．
．．．

数分後、ようやくカテレアちゃんが姿を現した。

「．．．で、さも当然の様に人様の家でくつろいでいるあなたは何をしに来たのですか」

「ちよつとカテレアちゃんに用事があるの。その前にシャワー浴びて来たら？」

「用事ですか。どうせまた変な事に巻き込むつもりなのでしよう。．．．まあいいですけど。とりあえず、あなたの言う通りシャワーを浴びて来ますからもう少し待っていてください」

「お菓子食べてもいい？」

「勝手に摘んでなさい」

そう言い残してお風呂場へ向かうカテレアちゃん。それを見送り、私はお菓子に手を伸ばした。

さらに数分後、さっぱりした様子のカテレアちゃんが戻って来た。

「それで、本題は？」

「あのね、今度サーゼクスちゃん主催のパーティーがあるんだけど、その時にね、フューリーさんのお披露目会もやろうと思っっているの。ほら、写真とかじゃない本物のフューリーさんを直接見たのってまだごく一部の悪魔だけでしょ？ だから、この機会に正式に発表した方がいいかなってサーゼクスちゃんと話しあったの」

「わかりました。つまり新しいドレスを用意しておけと言う事ですね」

「参加する気満々だねカテレアちゃん。まさかいきなりドレスの心配をされるとは思わなかったよ」

「むしろ参加しない理由がありませんけど。・・・まさか、駄目だとは言いませんよね？ もしそうであるならば、私は私の全てをなげうつでもサーゼクスの顔に一発かましに行きますよ」

「まさかサーゼクスちゃんも楽しいパーティーを企画したのにそんな重すぎる一発を受けるなんて想像もしていないと思うな。それに心配しなくても、カテレアちゃんも参加してもらおうから。はい、招待状」招待状を渡すと、カテレアちゃんはそれを大切に仕舞った。

「・・・今日からパーティーの日まで、万が一にも招待状を盗まれるような事が無いよう家の警備装置のレベルを上げておきましょう。とりあえず、私以外の者が敷地内に入った瞬間魔力弾で昇天するように設定しておけばいいですかね」

「うん、宅配便のお兄さんも昇天しちゃうから止めようね」

「それで、用件というのはこの招待状の事ですか？ もしそうなら確かに受け取ったのでお帰りください。私、これから色々予約やらなんやらで忙しくなりそうなので」

「ううん、違うの。本題は別にあってこれはおまけというか・・・」

「セラフオール！ あなた、フューリー様に関係する事をおまけ呼ばわりするなんて！ そこに直りなさい！ フューリー様の奴隷（予定）の私が直々に成敗して差し上げます！」

「普通に奴隷とか言うあなたに正直引いてるんだけど、本題もフューリーさんの事なだけどな」

「窺いましょうか」

「・・・カテレアちゃんってさ、めんどくさいとか言われた事ある？」

「何を言っているのですか、セラフオール」

「そうだよ。さすがに今のは私が悪・・・」

「そんなの、旧魔王派にいた時からしょっちゅう言われてましたから今さら気になんてなりませんわ」

「・・・」

うん、気にするのは止めよう。これ以上踏み込んだら私の為にもカテレアちゃんの為にもならない。私は直前の会話を無かった事にした。その上で、持って来た鞆からある物を取り出した。

「・・・何ですか、この変な機械は？」

怪訝な顔をするカテレアちゃん。ふふ、この顔が数秒後には驚きに変わるんだろうなあ。

「今度ね、フューリーさんの新しいグッズを作ろうと思ってるんだ。考えてるのは、『フューリー目覚まし時計』っていうグッズなの。名前の通り、目覚まし時計なんだけど、時間になるとアラームの代わりにフューリーさんの声が出るようにするつもりなんだ」

「ほほう・・・！」

「パターンも増やしてね、一年間全部違うメッセージが出るようにするの。毎朝フューリーさんの色々なメッセージで起こしてもらおうの。えへへ、素敵でしょ」

「セラフオール。ちよつとそのアルカディアの鍵を手に入れて来ますから留守番お願いします」

「もー。だからそれを今から作るつもりって言ったでしょ」

「ならば今すぐ作りなさい。迅速に、火急に、速やかに」

「その為にカテレアちゃんに協力して欲しいの」

「どういう事ですか」

「昨日ね、フューリーさんをお願いして声を録音させてもらったの。それでね、その音声データを、アザゼルちゃんに作ってもらったこの機械でこうすると……」

『おはよう』

「ツ!? い、今のは……間違い無くフューリー様の声! ど、どういう事ですか、セラフォルー!」

「えっへん! この機械は入力した言葉を、音声データにしゃべらせる事が出来るんだよ! フューリーさんの“あ”から“ん”までの声を、自動処理で最適に組み合わせる事で、自然なセリフにする事が出来るの!」

「た、確かに、いまのおはようは完璧なおはようでした。とてもバラバラに発していた声とは思えません」

「フューリーさん本人にたくさんセリフを言ってもらったら疲れちゃうでしょ。でも、これなら入力するだけで済んじゃうから負担はゼロ!」

「……何だか私、アザゼルの事がちよつと好きになりました」

「カテレアちゃんには私と一緒にこの機械を使って、メッセージ作成を手伝って欲しいの。一人だときつとすぐにネタ切れしちゃうだろうし、二人なら話し合う事で意見もたくさん出ると思うんだ」

「いい判断です、セラフォルー。そう言う事でしたら、不肖このカテレア、協力する事もやぶさかではありません」

「ふふ、そう言ってくれると思ってたよカテレアちゃん。よろし、それじゃあ二人で素敵なメッセージを一杯作っていき〜!」

「お任せください!」

こうして、私とカテレアちゃんのメッセージ作りの作業が始まった。思いついたメッセージを片っ端から入力しては保存、入力しては保存を繰り返す。

そして、充分な量のメッセージを取り終えた所で、私はホッと息を吐いた。これを元にして早速目覚まし時計を作らないと。あ、でもデザインとかどうしよう。うう〜、悩みなあ……。

第六十八話 教えてアルⅡヴァン先生！く伝授編く その三

通りがかったメイドさんにリアスの居場所を聞いてそこに向かうと、彼女は庭外れのベンチに腰掛けて難しい顔をしていた。

「よお、リアス」

「あら、アザゼル先生。リョーマ。帰って来てたのね。イツセーの様子はどうだった？」

「まあ、ぼちぼちつて所だ。で、お前はこんな所で何してんだ？」

ふむ、流石のアザゼル先生も野生化の事は黙っておくつもりか。まあ、優しい彼女に言っつてしまえば、それこそすぐさま助けに行こうとするだろうし、これが正解だよな。

「ちよつとね、提示された技について考えてたのよ」

「ほお。・・・で、感想としてはどうだ？」

「正解かどうかはわからないけど。魔力の収束、及び遠隔操作による攻防一体の技。・・・それが私の感想よ」

おおつと、ほぼ、というかもう完璧に正解じゃん。流石リアス。まだ何も教えて無いのにそこに辿り着くなんて。

「理解は出来ているようだな。それにしちやあ浮かない顔だが」

「理解は出来ても実行出来ず・・・。まさか、収束展開がここまで難しいものだとは思わなかったわ」

「まあ、お前の持つ滅びの魔力は、所謂一般の魔力とは根本から違うからな。収束させようにも魔力自身が自らを消しちまうってか？」

「ええ。だから絶えず力を注ぎ続けなければいけない。でも、そうすればあつという間に魔力がゼロになってしまう。そうなればもうどうしようもないわ」

「そこらへんは、魔力の総量を増やすしか無いな」

「やっぱり結論はそうなるのね」

うむむ、二人して何やら難しい話をしている。ピツタリだからという理由で即決したが、もつと色々考えて提案した方がよかつたのか

も……。

「リョーマ、どうしてあなたは私にこの技を覚えさせようと思ったの？」

わっほい!? 今思ってた事をそのまま質問されてしまった。どうしよう。ここは変に言い訳せずに素直に答えた方がいいよな。

「……その技はキミにこそ相応しいと思ったからだ。『悪魔』で『王』であるキミに」

「え?」

「どういう意味だ?」

アザゼル先生まで食いついて来た。俺はリアスの隣に座り、改めて説明する事にした。

「キミに提示した技の元々の使い手は『悪魔王』と称される存在だった」

「ツツ!」

「他にも銃神とも呼ばれていたが……今はそちらは置いておこう。ともかく、その『悪魔王』はガン・スレイブを巧みに操り、立ちはだかる敵を次々と沈めていった」

悪魔王……正式名称をデイス・アストラナガン。『負の無限力』というトンデモエネルギーで動く第三次αにおけるチート機体。高スペックな上にHP回復とEN回復を持ち、さらにはバリア、空も飛べて適応は宇宙と合わせてSときたもんだ。

……え? スパロボ知らないからわからないって? それならもつと簡単にこの機体がどれほど凄いか教えてあげよう。

味方……恐怖の対象。

敵……同じく恐怖の対象。

ラスボス……勧誘して来る。

以上である。味方にも敵にもガチで怖がられる機体ってこいつくらいじゃね? てか、開発に携わった人物までビビるって普通におかしいよね。

「最初は敵として現れたが、味方となってからはとても頼りになる存在だった」

あの初登場シーンは今思い出ししても衝撃的だったな。やっと主人公機強化かーとか思ってたらいきなり襲いかかって来たっけ。てか、ロボットなのに魔術的な演出で出て来るってどうよ。普通に「え、生き物？」とか思ったし。

(負の無限力・・・そんな力が存在するなんて・・・)

(そんな化け物を味方に見せてみせたのかコイツは。まさか、使役の為の契約を交わしたのか)

「どうかしましたか？」

何故か戦慄の表情を見せる二人に問いかける。気の所為か冷や汗まで流している様に見える。

「リ、リヨーマ、あなた、そんな存在をどうやって従えたの？」

「もちろん倒してだ。そうしなければどうしようもなかったからな」

「なっ!？」

まさか、新主人公機初お披露目のシナリオでいきなり沈めるハメになるとは思わなかったな。まあ、すぐにイベントが発生して使えるようになったからいいけど。

「囿にしたり、斬り込み隊長にしたり、色々世話になったよ。敵陣に突っ込ませたらいつの間にか全滅してた・・・なんて事もよくあった」

ぶっちゃけ、ラスボスすらもデイストラだけで倒したわ。気力上げの為に本隊で周りのザコを片付けさせながらデイストラだけ突っ込ませてたらGONGIイベント始まったし。

(囿!? 斬り込み隊長! 悪魔王と称される存在にそんな事をさせるなんて・・・!?)

(契約なんて生温い方法なんかじゃねえ。こいつ・・・力づくで屈服させたってのか!?)

ありや? また二人の様子がおかしくなった。リアス、震えてるけどひよつとして体調でも崩したのかな? アザゼル先生、今の説明、そんなに睨むほど不満なんですか?

「そういうわけで、俺はリアスに合う技を考えた時、真っ先にこれをおいついたんだ。・・・最も、そんなにも難しいものになるとは思ってもしなかったが。キミが望むのなら、今からでも別の技を・・・」

「いえ、それには及ばないわ」

言葉を被せるようにして俺の提案を拒否するリアス。先程までの震えは止まり、今は何かを決意した表情で俺を見つめて来ている。

「正直、分不相応だと思う。私は一生その悪魔王のレベルには辿りつけないと思う。．．．でも、それでも、あなたがそう言ってくれるのなら、私は逃げたくない。あなたが私にこの技を託してくれた信頼を裏切らない為にも．．．!」

そうか．．．この表情。前回のレーティングゲーム終盤、フェニックスさんに追い込まれてなお戦い続けようとした時のものと同じだ。決して諦めようとする強い意思。．．．はは、これなら確かに余計な気遣いは必要無さそうだ。

「キミなら出来る．．．なんて無責任な事は言わない。だから代わりにこの言葉を送る。．．．頑張れ」

「ツ．．．ええ!」

ベンチから立ち上がり、リアスは堂々とした足取りで去って行った。結局、具体的なアドバイスは出来なかつけど、リアスなら大丈夫。彼女の背中を見て、俺は何故かそう思った。

「行ってしまいましたね。それでは次は誰の所に．．．」

「フューリー」

「はい?」

「予定変更だ。ここからは二手に別れる。朱乃と木場、ゼノヴィアの所には俺が行く。お前は小猫とギヤスパーの方を頼む」

いきなりの変更に目を丸くする。てか、俺いなくていいの? まあ、説明する事に関しては俺よりアザゼル先生の方がよっぽど上手だから問題無いかもしれないけど。

「それは構いませんけど、どうしてですか?」

「サーゼクスに話さなければならぬ事が出来たんでな。その為には別れた方がいい。三人に話をしたらすぐにヤツに会いに行く」

サーゼクスさんに話? なんだろう。何か特訓に関係する事かな? ひよつとして、必殺技の習得に役立ちそうな機材とか頼むつもりなのかも。

うん、そう言う事ならしようがない。むしろお願いしますって感じだ。よし、それじゃあ早速塔城さんとヴラデイ君を探しに……。

「……フューリー」

歩きだそうとした俺を、アザゼル先生の低く固い声が止める。思わずドキツとしつつ振りかえると、そこには今まで見せた事の無い表情を浮かべるアザゼル先生がいた。

「お前は私欲で動く人間じゃない。少なくとも、俺は……俺やリアス達はそう思っている。その信頼……裏切らない事を祈る」

え？ え？ どういう意味？ よ、よくわからんが、何か答えないといけない空気だし……。

「ええ。あなた達がそう思っていてくれる限り、俺は俺であり続けますよ」

いや待て、意味わかんねえし。俺は俺であり続けるってなんだよ。聞く人が聞いたらナルシストに思われるじゃねえか。何でこんなセリフ言っちゃうかな俺！

「……信じてるぜ」

そう言い残し、アザゼル先生も去って行った。残された俺は一人、先程の発言を後悔していたが、このままここにいてもしようがないので、改めて塔城さんとヴラデイ君を探しに行くのだった。

第六十九話 教えてアルⅡヴァン先生！く伝授編く その四

アザゼル先生と別れた俺は、言われた通り塔城さんとヴラディ君を探して彷徨った。その途中、塔城さんと黒歌の声が耳に届いたので、そちらの方へ向かったのだが……。

「……」

「と、塔城さん……？」

修行中だったであろう二人に声を掛けた途端、塔城さんが目にも止まらぬ早さで近くの木の陰に隠れてしまった。現在、彼女はそこから僅かに顔を覗かせ、こちらの様子をうかがっている。

しかし、なんだ……一瞬しか見えなかったが、どうも塔城さんの頭とお尻に見慣れない物がくっついていていた様な気がする。具体的に言うと、耳と尻尾のようなヤツだった。

「……先輩。何をしに来たんですか？」

「あ、ああ、アザゼル先生に言われて、キミに技の指導をしに来たんだが」

「そうですか。ですが、姉様がいれば大丈夫ですから、先輩は他の人の様子を見に行ってください」

むう、どうやら歓迎されていないようだ。まあ、大好きなお姉さんとの一時を邪魔されたんだから不機嫌になるのも無理無いか。

そう結論づけた俺の横で、黒歌がやれやれといった様子で大袈裟に首を横に振った。

「もく、白音ったら、いくらご主人様に見られるのが恥ずかしいからってそんな言い方は無いと思うなあ。ほらほら、いつまでも隠れていないで出て来るにゃ！」

「え、あ、ちよ、ちよつと姉様?!」

言うや否や有無を言わさず塔城さんを引っ張り出す黒歌。そうやって目の前に出て来た彼女を見て、俺は先程の光景が見間違いないやなかったのだとわかった。

白い耳と白い尻尾。間違い無い、あれは猫の物だ。ああやって黒歌と並ぶと、ああやっぱり姉妹なんだなくと妙に納得出来てしまう。

「塔城さん、それは・・・？」

「こ、これは、その・・・」

「にゅふふ。恥ずかしさで頬を真っ赤にするプリチーな白音に変わって私が説明するにや！」

「べ、別に恥ずかしいなんて思ってます！　というか、プ、プリチーとか言わないでください！　そっちの方が恥ずかしいです！」

いや、俺もそう思う。凄く・・・プリチーです。茶化すとかからかうとかそういうの全く抜きにして、今の塔城さんはもの凄く可愛い。おかしいな、黒歌で見慣れてたはずなのに。

そんな塔城さんを弄る黒歌だったが、説明自体はキツチリやってくれた。以前、名前だけ出て来た「仙術」・・・というより猫又の力を使う為にあの姿になっているそうだ。今までは過去のトラウマから封印していたが、黒歌と和解した事で、その力を使う決意をしたのだとか。

「名付けて白音モード！　白音の可愛さでメロメロになった相手に仙術のキツツ〜イ一撃を叩き込む！　そう・・・それこそが必勝のパターンにや！」

ノリノリだな黒歌。对象的に、塔城さんは何かに耐えるように体を縮込ませていた。

「・・・姉様の馬鹿。私みたいな無愛想な女が可愛いわけが・・・」

「いや、可愛いよ塔城さん」

「え・・・!？」

何故か自虐スイッチが入ったっぽい塔城さんをフォローする為、俺はそう声をかけた。

「必勝パターン云々は置いておいて、その姿のキミはとても可愛らしいと思う。俺だけじゃない。きつとリアス達だって今のキミを見たら同じ事を言うと思うよ。だから、そう自分を卑下する事は・・・」

「・・・先輩は破廉恥です」

ファッ!?　フォロー失敗!?　しかもなんかいきなり破廉恥呼ばわ

りされてしまった！ いや、それは違・・・あ、でも否定したらさっきの可愛いつていうのも否定する事になるし。ああ、どうすればいいんだ・・・！

（んふふ。白音ったら、口ではああ言いながら、後ろに回した手が忙しなく動きまくってるにや。おまけに尻尾までフリフリ動かしで・・・けど、ご主人様に見えない様に体からはみ出ない程度の動きに抑えてる当たり、ツンデレが過ぎると思うけどね。この子ももっと素直になればいいのに）

なんか、塔城さんの後ろにいる黒歌がニヤニヤしている。おのれ、破廉恥扱いされた俺がよっぽど滑稽だったとでもいうのか！ いいだろう。キミは後で「モフモフの刑」に処してやる！

「ゴメンね、ご主人様。どうもご主人様が傍にいと緊張しちゃうみたいだから、白音の事は私に任せて欲しいにや」

「ね、姉様！」

ん・・・確かにその方がいいのかも。だけど、アザゼル先生から任された以上、何もしないのもな・・・。

「あの技・・・ええっと、白虎咬だっけ？ 私もう覚えちゃったから、白音にもバツチリ覚えさせて見せるにや」

「・・・えっ？」

いやいやいや、サラツととんでも無い事言いましたよこの猫娘さん！ てか、何でキミまで習得しちゃってるの!?

「そんなの簡単にや。お姉さんっていうのは、可愛い妹のお手本にならないといけない。だから覚えた。以上」

お姉さんパワーってすげー！

「けど、この技、中々面白いね。分身とかと合わせて使ったらいい感じになりそうにや」

分身はソウルゲインじゃなくてツヴァイザーゲインの方が得意だけどね。最も、黒歌や塔城さんはあんな禍々しい機体なんかと似ても似つかないけど・・・。

「そ、そうか。そう言う事なら塔城さんの事は黒歌に任せて、俺はヴラデイ君の所に行く事にするよ」

「ギャー君、何かあったんですか？」

「いや、彼にも何かアドバイスや特訓の手助けをしてくれと言われたんだ。じゃあ、俺はここで失礼するよ」

俺の役目は始まる前から終わってたのな。てか俺、ここまでロクに役目を果たせていないんですけど。これはヴラデイ君相手に目一杯力になってあげないと！

というわけで、俺はヴラデイ君を搜索したが、彼の姿はどこにも無かった。てつきり他の子達と同じように庭にいるのかと思ったのだが。

仕方無いので、一度休憩しようと自室へ戻ると、なんとドアの前にヴラデイ君の姿があるではありませんか。彼は俺に気付くと、パツと表情を明るくさせた。

「あ、か、神崎先輩い」

「ヴラデイ君。こんな所でどうしたんだ？」

「え、えっと、神崎先輩に特訓してもらいたくて、戻って来るのを待ってたんです」

「俺を待つて？　・・・まさか、俺が兵藤君の元へ行ってからずっと？」

「はいいー！」

いや、はいじゃないよ！　それならそうと言ってくれればこんな時間まで待たせる事もなかったのに！

「で、でも、他にみんなだつて先輩に色々教えてもらいたそうでしたし、それなら僕は最後でいいかなあって。えへへ、待つのは慣れてますから」

謝ろうとした俺に対し、ヴラデイ君は微笑みながらそう答えた。・・・上目使いと共に

ダ・・・オチツケ。カレハオトコダ。オトコだ。オトコダダダダダダ

「ひ、ひい！　先輩の目の色が恐ろしい事に！　せ、先輩、僕、何か怒らせるような事を!？」

「違う。違うんだヴラデイ君。キミは何も悪く無い。さあ、一緒に頑張ろう」

俺は無理矢理頭の中を整理し、ヴラデイ君を連れて改めて庭に出た。さあ、ここからは真面目に行こう。

「ヴラデイ君、アザゼル先生のトレーニングメニューはどうだ？ やっぱり大変か？」

「は、はい。それはもう大変ですう。でもでも、僕だつて変わらないといけないから、ダメダメなりに頑張つてますう！」

確か、恐怖心を乗り越える為の『引きこもり脱出計画』とかいう名前だったつけ。て事は、対人恐怖症を直すとか、外出出来るようになるとか、そういった事を目指しているんだらうか。

「ヴラデイ君、ちよつと俺の目を見てくれないか」

「え？ で、でも……」

「変な事はしない。ただ目を合わせてくれるだけでいいんだ」

「は、はいいい……」

恐る恐るといった感じで俺と目を合わせるヴラデイ君。お、これはいけるんじゃないか？

と思つたら、十秒ほど経つたら顔を伏せられてしまった。これはまだまだ先は長そうだ。

（あうう、な、なんでだろう。怖いとは思つて無いのに、先輩の顔がまともに見れないよお）

「よし、それならヴラデイ君」

「は、ははははいいいいいいい!!!」

「？ 久しぶりに神器の制御の練習でもしてみるか？」

「お、お願いしますう！」

最近忙しくて付き合つてあげられなかったからな。こういう機会をしつかり活かさなければ。

「……ああ、そうだ。始める前に少し話がある」

俺は以前から考えていた案をヴラデイ君に説明した。

「キーワード……ですか？」

「ああ。キミの神器は無意識に発動してしまう時がある。それを少しでも減らせるようにしたい。キーワードを口にして、それから神器を発動させる。そうやってキーワードをトリガーにして神器を発動さ

せるよう自分自身に徹底的に覚えこませるんだ」

「な、なるほど。確かに、そうすればキーワードを口にしなければ神器が発動しなくなるように出来るかもしれない。流石先輩ですう！」

いや、そこまで感心されるような素晴らしい案でも無いんだけど……。ま、まあ、せっかくのお褒めの言葉だし、素直に受け取っておこう。

「それで、肝心のキーワードなんだが」

「あ、あんまり難しいヤツは勘弁ですう」

吸血鬼……時間停止……そうなることやはり……。

「……『ザ・ワールド』」

「え？」

「『ザ・ワールド』なんてどうだろう？ それに『時よ止まれ』を加えらるとなおよし」

「な、何でワールド……？」

「ヴラディ君。キミの神器は時間という世界の法則を支配する力を秘めている。ならば、どこも変じやないと思うがな」

「そ、そう言われると、なんだかそんな気がしますう」

「……ヴラディ君。ついででといったてはなんだが、W R Y Y Y Y Y Yと
言ってみてくれないか？」

「え？ な、何ですか、それ？」

「純粋な興味というか……無理にとは言わないが」

「え、ええっと、言うだけでいいんですか？」

「ああ」

「そ、それじゃあ……う、うりい……」

……うん。これは無いな。恐怖どころか和んでしまった。ヴラディ君に自信をつけさせるために口癖にしてもらおうと思ったが、止めておいた方が賢明か。

「せ、先輩。今のはどんな意味が？」

「すまない。言わせておいて申し訳ないが、忘れてくれ」

「わ、わかりました……」

俺の顔を見て何か察したのか、ヴラデイ君は素直に引きさがってくれた。

さて、とにかくキーワードの案はヴラデイ君も納得してくれたし、今後はこの方法で練習を行う事にしよう。

それから一時間、俺はヴラデイ君の練習に付き合っただった。

．．．．．

．．．．．

．．．

その日の夜、夕食を済ませた俺は一人、自室のベッドに横になってもの思いに更けていた。

「．．．みんな、頑張っていたな」

思い出すのは、特訓に励むみんなの姿。目標に向かって努力を重ねるみんなの姿は、とても眩しく、そして、少し羨ましく見えた。

それと同時に、俺の中にある思いが生じた。果たして、俺はこのままでいいのだろうか。もちろん、今度のゲームに俺は出ない。けど、みんながそれぞれの目標に向かって進んでいるのに、俺だけ何もせずにただぼんやりと日を過ごすのはどうなんだろう。

アーシアだって、よくわからないけど、何か強い決意を持って特訓を行い、結果として治癒の力を飛ばせるようになっていた。彼女は自分自身の力で成長を果たした。

対して俺はどうだ？ 今まで、アルⅡヴァン先生の力に頼りっぱなしで、自分自身の力で何かを成し遂げた事があったか？ 正直、与えられた力に依存している俺に、アルⅡヴァン先生の力を使う資格は無いのかもしれない。

「このままじゃ．．．駄目だよな」

そう、駄目だ。このままズルズルと現状に甘んじていては駄目だ。よし、決めたぞ！ アルⅡヴァン先生の力に頼るだけじゃなく、俺自身の力を身につけよう！ そうして初めて、俺は資格を得られるのかもしれない。

そうと決まれば、アザゼル先生に相談してみよう。明日の昼にはサーゼクスさんの所から戻るって聞いたし、帰って来たらすぐに会い

に行こう！

うーん、なんか気分が明るくなってきたぞ。今日はよく寝れそうだ

！

そんな浮ついた気持ちのまま、俺は眠りにつくのだった。

.....

さて、気持ちを新たにスタートを切ったはずの俺だったが、一日目にして大変な事になってしまった。

アザゼル先生に自分を鍛えたいと相談すると、一瞬の間もおかずに「止める」と言われてしまった。おそらく、急な思いつきで始めても長続きしないから止めておけて意味だったんだろうが、俺はそれでも一生懸命説得した。

三十分かけて話し合いを続けた結果、最終的にはなんとか首を縦に振らせる事に成功した。やっぱり、真剣な話の時は真剣な顔をするのが一番だな。アザゼル先生も俺が中途半端な気持ちで言っているのではないとわかってくれたのか、諦めた様子で「好きにしろ」と言ってくれた。ついでに、俺が特訓出来る場所までリアスのご両親に頼んで用意してくれた。

グレモリー領の辺境の辺境にある渓谷。そこが俺の特訓場所になった。別に近場でもよかったんだけどな。まあ、せっかく用意してもらった場所に文句を言うつもりなんてないけど。

行きは転移魔法。三時間後に再び転移魔法で帰らせてもらえる事になった。気合いを入れて魔法陣に立った俺は、数秒後、広大な岩場に佇んでいた。

足場が悪い所だったので、そこからしばらく移動していると、目の前に巨大な洞窟の入口が現れた。よせばいいのに、この時の俺は変なハイテンションで洞窟内に足を踏み入れた。

この選択を、数十分後の俺は猛烈に後悔する事になる。何故なら、洞窟の奥深く・・・そこには巨大なドラゴンが存在していたからだ。すぐさま引き返そうとした俺を、ドラゴンの声が止める。やっぱり

というか、普通にしゃべってた。で、ドラゴン・・・ティアアマトさんがいうには、ここは彼？ 彼女？ 声からして雌っぽかったけど。とにかく、ティアアマトさんが最近見つけた寝床なのだから。

今も気持ち良く寝ていた所を、俺が邪魔してしまったらしく、大層お冠だった。しかも、俺がティアアマトさんを討伐に来たハンターなんて誤解までされてしまった。

すぐさま誤解を解こうとしたのだが、ティアアマトさんは聞く耳を持たず、その大きな尻尾で薙ぎ払い、それを受けた俺は壁に吹っ飛ばされた。

肉体的な痛みは無いが、心が痛かった。こんなに怒らせてしまうほど迷惑をかけてしまった事が本当に申し訳無く、これはもう誠心誠意謝らせて頂くしかないと思った俺は、すぐに起き上がるとティアアマトさんに向かって駆けた。

そんな俺を見てティアアマトさんは僅かに目を見開いたが、次の瞬間には右腕を振りかざし、俺に向かって迷い無く振り降ろした。またしても俺は吹っ飛ばされたが、先程と同じように起き上がり、再びティアアマトさんに近づく。

こちらが敵意を持っていない事を証明するためにも、反撃というか抵抗は出来ない。今の俺に出来るのは、ティアアマトさんが落ち着いてくれるまで声をかけ続けるだけだ。

ただ、流石に炎を浴びせかけられた時は漏らしそうになったけどね。なんだよあの「業炎（カルマ・フレア）」とかいう炎は、洞窟どころか周りの地形まで融けちゃったよ。気付いたら外にいたとかどんなイリュージョンだよ。あんな光景見てよく気絶しなかったな、俺。

でも、そのおかげでティアアマトさんが少し落ち着いてくれたからホッとした。冷静になって自分がやらかしてしまった事に気付いたのか、体が小刻みに震えていた。思ったよりも小心者なのかもしれない。小さな声で「これが・・・これが、恐怖・・・!？」とか言ってた。無理も無い、他人様の土地の地形を勝手に変えちゃったんだから。後でどれほど怒られるか想像して怖くなったのかも。

とにかく、これ幸いとはばかりに俺は今度こそティアマットさんと話をしようと思近をしてみた。だけど、ティアマットさんは突然翼を羽ばたかせ始めると、何故か逃げるように空へと舞い上がった。次の寝床を探しに行くつもりなのだろうか。だが、俺はまだ謝罪をしていない！ 正直、もう諦めてもいいとは思いますが、俺は意地になっていた。

ラフト克蘭ズモードでティアマットさんを追いかける。俺に気付いたティアマットさんがスピードを上げる。俺もスピードを上げる。そんな感じで追いかけたのだが、いつの間にかタイムリミットである三時間まであと少しとなっていた。あまり離れ過ぎては帰れなくなるかもしれない。そう判断し、俺はティアマットさん追跡を断念するしかなかった。

・・・とまあ、こんな感じで、一日目は修業らしい修行をする事が出来なかった。明日からは今日の分の遅れを取り戻す為にも頑張らなければ。

ティアマットさん。またあの渓谷に来てくれないかな。まあ、今日のあの様子じゃもう来ないと思うけど・・・。

・・・
・・・
・・・

それからは、みんなの特訓に付き合いつつ、俺自身も特訓するといふ日々が続いた。そして、支取さんとのレーティング・ゲームまで残す所あと数日となったある日。グレモリー邸に一人の初老の男性悪魔が尋ねて来た。

「アガレス家より使いとして参りました。フューリー様。お嬢様よりあなた様をアガレス家へ招待せよとの命を受け、参上いたしました」
「どうやら、今日の修行は休みになりそうだ・・・。」

第七十話 魔改造にだってバランスが大事

あまりにも突然の来訪に何事かと思ったが、話を聞くとなんて事は無かった。以前、ルシファードでの会合の時に話に出たアガレスさんの作ったプラモデル。それを見せる為に招待してくれたのだとか。

にしても、まさかあんな口約束を憶えていてくれたとは。って、こんな言い方はアガレスさんに失礼か。とにかく、そういう事情で俺は現在アガレス家へとお邪魔している。

中に入って早速、アリヴィアンという男性が出迎えてくれた。彼はアガレスさんの眷属で、専属の執事さんだそうだ。言われてみたら、確かにあの会合の場にも居たような気がする。

で、アガレスさんと呼んで来るのでここで待っていてくれと通された立派な部屋で、これまた立派なソファアに座ってまったりしていると、パタパタと忙しない足音が近づいて来るのが聞こえた。足音は俺がいる部屋の前でピタリと止まり、その正体である人物が控えめに扉をノックした。

「どうぞ」

入るように促して五秒くらい経ってから扉が開き、そこには俺をこの家に招待してくれた人・・・即ちシーグヴァイラ・アガレスさんの姿があった。

「よ、ようこそお出でくださいました、神崎様。こうしてご多忙の中、私ごときの招待に応じて頂いた事、このシーグヴァイラ・アガレス、感激の意を禁じ得ません」

か、固い。固いよアガレスさん。丁重に扱ってくれるのは嬉しいですけど、逆に恐縮してしまいますわ！ 止めて！ 俺なんかそんな恭しく頭下げる必要無いから！ え、俺ってプラモ見せてもらう為に邪魔したただけだよね!?

「アガレスさん。そう畏まらないでください。俺の方こそ、あんな軽い口約束を憶えていてくれて嬉しかったですから」

「・・・初めてでしたから。私の趣味を真剣に聞いてくれた男性は」
アガレスさんがボソツと呟く。何やら初めてとか聞こえたけど・・・

ひよつとして、友達を自宅に招くのが初めてなのかも。やっぱり大名家となると友達付き合いも厳しいのだろうか。うむ、そうだとするど、こうしてお呼ばれされた俺ってそうとう榮譽なのかな。

勝手に友達の立場になってるけど、それならなおさら畏まる必要なんて無いよな。もつとリラックスするようアガレスさんに言おう。

「とりあえず、もつと砕けた口調をお願いします。どうも、そんな風の話されるのは慣れないもので」

「で、ですが・・・いえ、神崎様がそうおっしゃるのなら、そうさせてもらいます」

うんうん、まだちよつと固いけど、さつきよりはだいぶ良くなったぞ。

「では神崎様、よろしければすぐにでも案内させてもらってもよろしいですか?」

「ええ、お願いします」

というわけで、挨拶も済んだので、俺は早速アガレスさんの後に続いて部屋を出た。扉の横にはアリヴィアンさんが立っていたが、ひよつとせずとここにいたのだろうか。まあ、執事である彼からしたら、いきなり現れたどこの馬の骨ともしれない野郎が、自分の大事な主と二人きりになるのが心配でたまらなかつたのだろう。

現に、こうして移動している今も、俺とアガレスさんの間に入って歩いている。どんな時でも主を守るといふ忠誠心はその背中から溢れ出ているような気がした。

己の職務に忠実な男ってカッコイイよな。俺もいつかはあんな頼りがいのある背中を見せられる様になるのだろうか・・・今後の参考のためによく観察しておこう。

「ッ・・・!?!」

おろ? 一瞬だけアリヴィアンさんの体がビクツとした様な・・・何かマズイ事でも思い出したのだろうか。それとも、俺の視線を煩わしいと思っているのかもしれない・・・冷静に考えたら、野郎に後ろから見つめ続けられるとかどんな罰ゲームだって話だよな。反省反省。

「・・・着きました。この部屋です」

で、気付いたら目的地に到着していた。アリヴィアンさんが扉の横に立ち、俺はアガレスさんの横に並んだ。

「ここは？」

「その・・・恥ずかしながら、私の作った作品を保管する為の部屋です。中にはこれまで作って来たプラモデルと、それを入れるショーケース。それと、ジオラマ等もあります」

うーむ、専用の部屋まで作るとは、まさに趣味人だな。こりゃあ、さぞかし凄い物が見れそうだ。オラ、ワクワクすつぞ。

「では、ご覧ください。これが私の全てです」

その言い方は誤解を招きます・・・よ・・・。

開かれた部屋の扉、その向こうに広がる光景に、俺は言葉を失った。広々とした部屋に並ぶショーケース。戦場を模したジオラマ。そして、そこに存在する数多くの小さなロボット達に目を奪われる。

銃を構える機体。剣を抜こうとしている機体。今まさに戦闘を始めようとしている機体。室内の至る所に、小さな・・・だけど立派な“世界”が存在していた。

・・・やばい。趣味って言葉で片付けられるレベルじゃない。普通に金取れるぞコレ！ くつ、あまりの感動に目から汗が・・・。

「あ、あの、やっぱり引いてしまいます・・・よね」

はっ、あまりに衝撃的だったからリアクション忘れてた。その所為でアガレスさんが誤解している。引く？ とんでもない！ こんな・・・こんな凄い物を見せてもらって何で引かないといけないのだ！

「素晴らしいです、アガレスさん。こんなに素晴らしい物は見た事がありません」

「ほ、本当ですか・・・!?」

「はい。ですからもっと自信を持ってください。適当な気持ちでこれほどの作品が作れるはずが無い。ここにあるプラモデルの一つ一つにアガレスさんの気持ちが目一杯込められているのが、初見の俺にだってわかります」

気持ちの込められた作品は、それを見た相手の心を揺さぶる。まさしく、アガレスさんのプラモデル達は、俺を感動させていた。

「ありがとう、アガレスさん。今日、こうしてあなたの作品を目にする事が出来て本当に良かったです」

いやホント、お世辞とか抜きで心の底からそう思うわ。しかも、このプラモデルってアガレスさんオリジナルなんだよな。機体のデザインや武器、色とかも全部。・・・アガレスさんの事、先生をつけて呼ぶべきなのかもしれない。

「神崎・・・様・・・」

気付いたらアガレスさんが衝撃を受けた様な表情で俺を見つめていた。しかも、瞳がやけに潤んでいる。何これカワエエ・・・。っと、いかんいかん。ここで不埒な事を考えたらアリヴィアンさんがすっ飛んで来るぞ。もっと色々見てみたいし、ここでつまみ出されるわけにはいかない。

「アガレスさん、よければ作品について色々説明してくれませんか」

「はい・・・はい！ 任せてください！」

右手で目を擦るアガレスさん。だが、次の瞬間には惚れ惚れしてしまうほどの満面の笑顔を浮かべていた。そのあどけない表情に俺自身もドキツとしてしまった。

「・・・それじゃあ、まずはこのジオラマの・・・」

それを誤魔化す様に、俺は目に留まったジオラマの前に移動した。廃墟の中、赤と白の機体がそれぞれ剣と銃を手に対峙している。

「ええっと、これはですね・・・」

説明の為に俺の横に並ぶアガレスさん。ここで一つ問題が発生した。どうも彼女との距離が近い気がする。というか、彼女の肩が完全に俺の腕に密着している。

「こちらの機体は最近作成した物で、特徴としては・・・」

アガレスさんの方は大して気にした様子でも無い。説明に集中している所為だろうか。なら、わざわざ指摘して変な空気になるよりはこのままの方がいいか。ふふふ、以前からリアスや黒歌のスキンシツプという名のイタズラを味わい続けたおかげで、感覚と意識を切り離

ず事が出来るようになったからな。こんな状況でも耐える事が出来るのさ！

「・・・という感じになります。ご理解頂けまし・・・たか・・・」
説明を終えたアガレスさんが満足そうにこちらに振り向く。・・・
そうなると、至近距離で顔を合わせる事になるわけで・・・。

「え、近、あ、す、すみません!!」

バヒユンなんて聞こえて来そうな速度で俺から離れるアガレスさん。やっぱり密着してた事に気付いてなかったのね。

「わ、私、集中すると他の事が気にならなくなるというか！ と、とにかく、馴れ馴れしい真似をしてしまい申し訳ありません！」

ああ、また畏まっちゃったよ。てか、むしろ謝るのは俺の方なのに。気付いた時点で俺から離ればよかったのだ。何でその考えに至らなかったんだらう。

とりあえず、気にしない様にとだけ伝えて、俺はショーケースの方へ顔を向けた。意識を別のものに向ければ、アガレスさんの気持ちも晴れるだろうし。

そんな感じで、色々見させてもらったわけだが、総じての感想は、アガレスさんがかなりの凝り性だという事だ。プラモや武器の一つ一つに名前をつけてあるのはもちろん、機体設定まで細やかに考えられていた。それらは全て、部屋の奥に設置されていた大型のPCの中にデータとして収められていて、それらを眺めているだけで普通に一日過ごせそうだった。

そして、それを見させてもらった俺は、何の気無しにアガレスさんに対して尋ねてみた。これだけの物を考えられる彼女なら、きつと今から俺が言おうとする事にも面白い答えを出してくれるはずだと確信して。

「アガレスさん。もしもあなたがラフトクランズを強化するとしたら・・・どんな風に強化しますか？」

「ラフトクランズって・・・ツ、ひよつとして、神崎様のあのお姿の事ですか？」

おお、察しがいいなアガレスさん。説明する手間が省けたわ。

「も、もしかして、近々実際に強化する計画が・・・!?」

「いえ、そういうわけでは無いです。ただ、こんなにも濃密な設定を考えられるアガレスさんの作りだすラフトクランズがどういう物になるのか興味がありました」

「あ、そうですか・・・」

ちよつと残念そうなアガレスさんだったが、気を取り直した様に真剣な表情で頷いた。

「わかりました。不肖、このシーグヴァイラ・アガレス。持てる知識の全てを動員して、必ずや満足して頂ける強化プランを考えさせて頂きます!」

あ、あれ・・・? なんか凄い気合い入ってますけど。俺はただのお遊び企画として言ってみただけなんですけど。

そんな風に思っていると、アガレスさんがPCのキーボードをもの凄いい速さで叩き始めた。画面が次々と切り変わり、やがてラフトクランズの全体像が画面一杯に表示された。

「以前撮らせて頂いた写真をPCに取り込ませた物です。ではまず、神崎様が纏われるこの鎧の正確なスペックを教えて頂けますか」

「わかりました」

というわけで、改めてオルゴンソード等の武装や、動力炉であるオルゴンエクストラクター、チート特殊能力オルゴン・クラウド、ついでにラースエイレムとラースエイレムキャンセラー、まだ一度も発動させていないFモードについても全部説明してみた。

「だいたいこれくらいですね」

何とかそれなりの説明が出来たので満足していると、アガレスさんが絶句していた。

「アガレスさん?」

「・・・はつ。す、すみません。あまりにも自分の想像とかけ離れたスペックでしたから呆けてしまいました」

ラフトクランズってオリジナルの中でも中々の位置の機体なんだけどなあ。これでもアガレスさんが満足するようなスペックじゃないのか。まあ、能力じゃなく、設定だけ見たら化物レベルの機体もた

くさんいるけど。

「では、それらを踏まえて、神崎様ご自身は強化するにあたって何か案がありますか？」

俺も口出ししていいの？ てっきりアガレスさんが全て決めるのかと思っただけ。そういう事なら、ちよつと考えてみるか。どうせ妄想なんだ。この際、実現可能かどうかは無視して、思いつき魔改造してやろうじゃないか！

よし！ お兄さん張り切っちゃうぞ！ 手始めに『バリオン創出ヘイロウ』でもくつつけてみようか！ それに某『史上最強の家』の動力炉を載せて……。

……

「……」

二時間後。PCの画面には、ラフト克蘭ズの面影など欠片も残さない、ラスボス臭漂いまくるトンデモ機動兵器の姿があった。

「あの……神崎様。話が盛り上がり過ぎて自重が出来なかったのは否めないのですが、これは……」

「ええ、わかっています。これは『無い』」

だって最早完全に別の機体だし！ 元々の目的だった『ラフト克蘭ズの強化』になってないし！ だからこのネオ・ラフト克蘭ズ（仮）はボツだな。

「で、では、換装パーツによる強化はどうでしょう？ 元々バランスが いい様なので、何かに特化する様な感じで」

おお、それは良いアイデア。よし、今度はさっきみたいに口出ししないでアガレスさんに任せよう。変に意見を出すとさっきの二の舞になりそうだし。

アガレスさんの作業を邪魔しない様、俺は再びプラモデルを鑑賞しながら時間を潰す事にした。

どれくらいそうしていただけるか。アガレスさんの「出来ました」という声で、俺はPCの所へ舞い戻った。

「お待ちせしました、神崎様。今回、私は換装パーツによる二つの強化案を提案させて頂きます」

そんな前置きと共にアガレスさんがキーボードを叩く。そうして画面に映し出されたのは、ラフトクランズであってラフトクランズではなかった。

“剣”・・・第一印象はそれだった。オリジナルの装甲をより鋭角にしたその姿は、機体そのものが剣を彷彿とさせるものだった。

肩から背中にかけて展開する二門の大型スラスターは見るからに出力が高そうだ。代わりに元々その位置にあったオルゴンキャノンが無くなっている。同様に、腹部のオルゴンキャノン発射口も追加された装甲で塞がれている。

「こちらは、ひたすらに近接、及び高機動戦闘に重きを置いたプランになります。神崎様の剣の腕を最大限に発揮出来るような設計にしています。代わりに、オリジナルにあった遠距離用の武装は全てオミットさせて頂きました」

極端過ぎるだろアガレスさん。いいぞ、もつとやれ！　こういう浪漫溢れるヤツは大好きです！

「その分、出力を他の場所へ回しました。それがこの大型スラスターです。武器の格納庫も兼ねているこのスラスターによって、オリジナルの約二倍、後で説明させて頂きますFモード発動時には三倍のスピードが出せる計算です」

三倍で・・・某赤い彗星さんばりの速度じゃないですか。今でさえ相当なスピードが出せるのに、それ以上とか激突必至な未来しか想像出来ない。

「続いて、武装についてです。最初に説明させて頂いた通り、近接特化型ですので、武器も全て近接用の物となります。まず、両腰にマウントされている剣ですが、ライフル機能を除いた純粋な実体剣となっています。この剣は左右対称の形となっていて、合体させる事で一本に、また柄頭同士を接続する事で双刃剣とする事も出来ます」

つまりこの武器だけで三つの形をとる事が出来るってわけか。いいね、デザインもカッコイイしこういうの好きだわ。

「二つ目は、膝から突き出ているこの部分です。ただの飾りに見えませんが、表面にオルゴン結晶を纏わせる事で格闘戦時に威力を発揮します」

油断して来た所に思い切り膝蹴りを入れるんですね。わかります。

「三つ目は、左のスラスタに格納されている大剣です。この剣は大形の相手・・・例えばドラゴンの様な存在への対抗手段としての物です。対ドラゴンの為の魔術的な処置を加えてもいいですが、かつてドライグの尾を斬り飛ばした神崎様には余計なお世話でしょうね」

仮に実装したら益々ドライグさんとの仲が悪化しそうでならない。どうも俺ってドラゴンとの相性が悪い気がする。この前だってテイアマットさん相手にやらかしてしまったし。

「武装に関しては以上です。また、盾についてですが、クロー部分を外し、小型化した上で、右腕に装着するタイプに変更しました。これで両手に剣を持って戦う事が出来ます」

装備は剣と盾のみ・・・ラフトクランズ・セイバー（仮）とでも呼ぶべきか。

「最後に、フューリーモードについて説明させて頂きます」

「フューリーモード？」

「オリジナルのファイナルモードは各武器の必殺技の名称でしたが、こちらは技では無く、能力を増加させるモードです」

ああ、リミッター解除みたいなもんか。

「このモードを発動させると、オルゴンエクストラクターがオーバードライブしてあらゆる能力が上昇します。その際、機体各部、特にスラスタ部から激しい光が放出され、さながら光の翼の様な形となります」

「その光の翼にも何か機能が？」

思わずそう尋ねると、アガレスさんは少し恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「と、特に意味は・・・。強いていえば、私の趣味というか・・・」

あー、そっか。そういう事ね。うん、わかるよ、カッコイイもんね翼。厨二だなんだと揶揄されるが、好きなものは好きなんだからしよ

うがない。

「オ、オホン。そして、このモード発動中に限り、各武装も真の力を解放します。さらに速度を維持したままでオルゴン・クラウドによる連続跳躍が可能となります。これにより、一方的に攻撃が行えます」

いきなり目の前に現れた何かに目にも止まらぬ速さで切り捨てられる・・・トラウマ一直線だな。

「説明は以上です。では二つ目の案について・・・」

とその時、部屋のドアが突然ノックされた。アガレスさんが入室を許可すると、入って来たのはアリヴィアンさんだった。どうもすつかり時間が経ってしまっていたようで、そろそろ帰った方がいいんじゃないかという事だった。

「ホントだわ、もうこんな時間・・・。神崎様、申し訳ありません。出来ればもう一つの案についてもお話させて頂きたかったです」

「いえ、気にしないでください。むしろ、とても楽しい時間を過ごさせてもらって嬉しかったです。もう一つについてはまた時間が出来た時にでも・・・」

「ですが、神崎様はもうじき人間界へ戻られるのでしょうか。そうなるとうとうしてお招きするのは難しいのでは」

あ、言われてみればそうだ。俺一人だけで軽々しくこっちに来るとか出来ないだろうし、どうしよう・・・。

「・・・あ、そうだわ」

思いついた様にアガレスさんはPCの置かれた机の引き出しから小さな端末を取り出すと、それをPCに接続させた。何やらデータを送っている様に見える。

「神崎様。どうぞこれをお持ちください」

「これは？」

「私も使っている端末です。外に出ている時に急にアイディアが浮かんだ時等にこれを使って記録しておくんです。この端末に先程の強化プランのデータを入れておきましたので、時間のある時にでもご覧になってみてください。それと、メール機能もついていて、人間界からでもこのPCにメールが送れます。もちろん、逆も可能です。もし

また何か思いついたら、メールさせて頂きますね」

「いや、待ってください。こんな高価そうな物をもらうわけには」

返そうとする俺に、アガレスさんは微笑みながら首を振った。

「どうか受け取ってください。こうして、誰かと一緒にロボットの話をするのが私の小さな夢だったんです。だから、お願いします。また、一緒にこうしてお話したいです」

・・・駄目だ。そんな風に言われたら受け取るしかないじゃないか。俺は端末をそつと懐に仕舞った。

「・・・大事にします」

「はいー」

こうして、最後に素晴らしいお土産まで頂き、俺はアガレス家を後にした。

ただの思いつきだったラフトクランズの強化プラン。まさか、これが後に重要な意味を持つ事になるとは、この時の俺には想像すら出来なかった。

さて、それはともかくとして、いよいよ修行も佳境に入った。時間の許す限りみんなの様子を確認するようにしていたが、どうやらみんなそれなりに必殺技の手ごたえを掴んでいるようだ。中にはほぼ完璧にマスターしている子もいた。

「はあっ・・・はあっ・・・どうして、どうして上手くいかないの・・・！」

ただ一人・・・リアスを除いて。

第七十一話 騎士の戦い

ついに修行期間が終了し、久しぶりに全員が集合した。それぞれの修行の報告会を開く為、俺達とはある部屋に集まっていた。

「ひとまず、お疲れさんとだけ言っておく。俺が提示したトレーニングメニューに関しては、全員ほぼ完璧にこなせたみたいだな。必殺技の方も概ね好感触と聞いてるぞ」

「・・・」
「うっす！」

代表して兵藤君が返事をする。しかし、ちよつと見ない間に随分と遅くなったように見える。

だけど、リアスは何だか浮かない顔をしている。どうも彼女だけあまり上手くいっていなかったと聞いたけど、やっぱりそれで落ち込んでいるのだろうか。

「イツセイ君、しばらく見ない間に変わったね。なんと言えればいいか、こう・・・野性味溢れるとでも表現するべきかな」

「あははは！ そりやそうさ木場！ 何せお前やゼノヴィアが別荘や山小屋で快適に修行している間にも、俺は野生動物を狩り、煮沸消毒した水を飲み、葉っぱに包まって寝てたんだからな！ おかげでタンニーンのおっさんに捌き方を褒められるくらいの腕になったぜ！

そのおっさんからは修行という名のいじめを受けまくったさ！ 岩が吹き飛んだり山火事レベルの炎なんて日常茶飯事！ どうだ、木場？ お前もあのおっさんと数日過ごせばきつと俺と同じになるぜ？」

「ご、ごめん。ごめんよイツセイ君」

「おいおい、何で謝るんだよ木場？ って、あれ？ 部長に朱乃さん、それに他のみんなも。どうしてそんな引き攣った顔をしてるんですか？ ほら、俺はこうして元気なんですからもつと笑ってくださいよ！」

無理だよ兵藤君・・・。だって、さつき長々と自分の話をしていた時のキミ、口調こそ明かかったけど目の光が完全に消えてたもの。とりあえず、休もう？ 今のキミに必要なのは休息だよ。

「先生！ 俺、これから先、どんな辛い事があっても頑張れそうです！」

「ああ、あの時の地獄に比べたら・・・」なんて感じで！」

「お、おう、そうか。まあ、しつかりな・・・」

珍しくアザゼル先生が狼狽した表情を浮かべている。・・・たぶん、兵藤君がこんな風になってしまった事に責任を感じているのかも知れない。

「・・・イツセー。もういいわ。あなたの報告はもういいから、すぐに部屋に戻りなさい。何か食べる物を用意させるから、それを食べてしつかり休みなさい」

「え、俺だけいいんですか、部長？ やったぜ、久しぶりにまともな物が食べそうだ！ それじゃあ、みんな！ 俺はお先に失礼させてもらうぜ！」

「俺が部屋まで連れていこう」

「墮天使の総督様に付き添ってもらえるなんて光栄だなあ！ よろしくお願ひします！」

アザゼル先生と共に部屋を出て行く兵藤君。その背中を見送った俺達は一斉に顔を見合わせた。

「・・・これからしばらく、イツセーには優しくしてあげましょう」

俺達の心が一つとなった瞬間だった。

その後、他の子達それぞれ自分の修行について色々報告を行っている、アザゼル先生が戻って来た。

「いきますー！ むむむ・・・えーい！」

ちようどアーシアの番だったので、説明も兼ねて実演してもらった。以前見せてもらった時より若干スピードの上がった光がふよふよと壁際まで飛んで行った。

「こ、こんな感じですけど、どうでしょう？」

ホントは自慢したいのに、性格が邪魔してそんな風にしか聞けないアーシアマジ天使。これでまた明日から頑張れそうだ。周りを見渡せば、リアス達の顔も綻んでいる。どうやら彼女達も俺と同じ気持ちのような。

「何だこの気持ちは。今すぐアーシアを思いつきり抱きしめたいと

思っている自分がいる」

ゼノヴィアさんが一人呟く。なら抱きしめればいいよ。俺がやったらハツ飛ばされるだろうけど、女の子同士なら問題無いと思うから。

「そういえば、先輩。さつきアザゼル先生から聞いたんですけど、先輩も修業をされていたそうですね。後学の為にもどんな修行されていたのかお聞きしてもいいですか?」

木場君の一言でみんなが揃ってこちらに顔を向けて来た。といっても、俺はみんなみたいに大変な事はしていない。ただ基本的な事をやっていただけだからな。

イメージに頼り切らないという目標の為、俺は技の型を徹底的に繰り返す修行をした。今までであれば、頭の中で技をイメージすると、体が勝手に動く。だけど、それはある意味操り人形状態であり、一度イメージすると、技の終了まで体の動きを制御出来ないという弱点の様なものがあった。

それに、一々イメージしなければ技が出せないというのも面倒だった。だったらイメージでは無く、俺自身が技を習得すればいい。そういう考えによる修業だった。

元々剣はおろか格闘技すらまともに経験した事の無い俺が思っていたのは、ただひたすらに技の型を練習する事だった。そのやり方が功をそうしたのか、はたまたこの体が優秀だったのか、修行開始三日目で白虎咬を出せるようになった。

その次に始めたのは剣の練習。木剣を手にアル・ヴァン先生の剣の知識を参考にしつつ、素振りをとにかく繰り返した。最後の纏めとして、木に向かつて全力の一閃を放ってみたが、木は斬れるどころか傷一つついていなかった。流石に一日でマスターは自惚れ過ぎだと反省したつけ。しかも木剣で。

そういえば、修行場所を変えてもらったけど、新しい修行場所の付近で何百本もの木が何者かによって斬り倒されていたらしい。こっちは一本すら斬れてないっていうのに。目撃者の話によると、普通に立っていたはずの木が、風が吹いた途端一斉に倒れたのだとか。犯人

は相当腕の立つ者に違いないとの事だった。

「特別な事はしていないよ。俺は未熟だからな。基本的な事ばかりや」

「あなたで未熟なら私達はなんなのかしら・・・」

「そりやもちろん凄いき。素の俺の駄目さ加減に比べ・・・いや、比べる事すらおこがましいか。」

「俺としちゃあ、騒ぎを起こしてくれなくてなにより・・・」

「騒ぎ・・・」

「どうしました、リョーマさん?」

「すみません、先生。騒ぎなら起こしちゃってます。しかも、初日に。どうしよう、やっぱ黙ったままじゃ駄目だよな。よし、懺悔しよう。」

「・・・実は、初日の事なんだが、グレモリー領の境界の地で修行しようとしたらあるドラゴンとトラブルになってしまった。名前は・・・確か、ティアマツトさん・・・」

「・・・はあ!」

リアスとアザゼル先生の声が綺麗に重なった。他の子達も声こそ出して無いが口をあんどり開けたり目を大きく見開いていた。アシアだけはよくわかっていないようで可愛らしく首を傾げているが。

「待て待て待て待てえ! ティアマツト!? ティアマツトだど!? お前なに普通に『天魔の業龍』と会ってんだあ!」

「何で五大龍王最強の存在がグレモリー領に!? リョーマ、教えて! ティアマツトは何をしていたの!? 内容によってはすぐに対抗策を講じないと甚大な被害が・・・」

「お、落ち着いてください二人とも。今から説明しますから」

「詰め寄って来る二人を何とか宥め。俺はティアマツトさんの事を説明する事にした。」

「まずリアス。ティアマツトさんは何もしていない。ただ、寝ていただけだ」

「ね、寝ていた?」

「ある洞窟を寢床にしているな、俺はそこへ迂闊に入ってしまったんだ。そして、ティアマツトさんに出会った。安眠を邪魔されたからか

かなり不機嫌で、その上、俺をハンターと勘違いしていて、完全に頭に血が上っていた」

「そ、それで・・・？」

「謝罪と誤解を解くために近づこうとしたら攻撃されてな。非がこちらにある以上、何をされても仕方が無いと思っていたが、最後は目を開けていられないほどの激しい炎を受けてしまった」

「で、そんな攻撃を喰らっても、お前はピンピンしてるわけだな」

「ええ」

「ええ・・・じゃねえだろ！ どうなっただよお前の体は！ ティアマットだぞ!? 『天魔の業龍』だぞ!? マジでちよつと一回調べさせろや!」

「お、落ち着いてください！ アザゼル先生！ 何で懐から工具取り出してるんですか!? 先輩の体にネジなんて付いてませんよ!」

「離せ木場あ! コイツの所為で、最近の俺は胃が荒れまくってんだよ! 胃薬を常に携帯しておかないといけない辛さがお前にわかるのか!」

「僕は健康体なのでわかりません。ですが、今の先生が間違っているのはわかります!」

アザゼル先生の目がヤバい! こうなったら俺の体の秘密を話した方がいいかもしれない。

「先生。俺の体は、この世界で最強の存在に攻撃されても皮がささくれる程度の防御力を有しています」

オカンに願った「丈夫な体」・・・最初こそやり過ぎかと思っただが、今では心底ありがたいと思っている。もしも願っていなければ、これまででもう何回死んでる事やら・・・。

改めて、オカンには感謝だな。祈りでもささげるか? それとも・・・。

「・・・」

そうやってオカンへの感謝をどう表すか悩んでいる俺の目の前で、アザゼル先生がぶつ倒れた。

「せ、先生!?! アザゼル先生!?!」

その後、すぐに人を呼び、アザゼル先生は運ばれていった。アースの神器と、俺も『友情』をかけておいたので、その内目覚めるとは思うが。

「リ、リヨーマったら、いくらなんでもあのタイミングであの冗談は性質が悪いわ。私も一瞬信じそうになっちゃったじゃない」

「そ、そうですね。いくらなんでも皮がささくくれる程度なんて……」

「にや、にやはは、ご主人様でもそんな冗談言うんだね。なんか意外にや」

二人が抜けた室内。リアスが場の空気を変える為に口を開いた。それに便乗するように朱乃と黒歌までそんな事を言う。

「さ、さあ！ 冗談はここまでにして、さっきの話の続きをお願い」

冗談じゃないんだけどな。でも、なんかリアスはもうこの話を切り上げたいみたいだし。まあ、野郎の体の事なんてそこまで興味湧かないわな。

「続きと言っても、もうあまり話す事はないぞ。その後、ティアマットさんはどこかへ行ってしまったって結局謝る事が出来なかったからな。

一応、追い掛けはしたんだが……」

「……追い打ちですね。というより……イジメ？」

「て、徹底的過ぎますよ先輩い」

そりゃあ、悪いのは俺だから必死になるよヴラディ君。悪い事をしたら謝る。当然で大事な事だからね。

「そうだ。リアス、キミにも謝らなければ。ティアマットさんの炎で地形が変わってしまったが、そもそも俺が迂闊に洞窟に入らなければそんな事にはならなかった。すまない……」

「あ、う、うん。そうね。でも気にしないでいいわ。むしろティアマトを追い払ってくれたんだから感謝しないといけないわ」

リアスは優しいなあ。でも、それに甘えたら駄目だよな。いずれ何かの形でお返ししないと。

「それじゃあ、そろそろ解散しましょうか。そうそう、明日は魔王主催のパーティーがあるわよ。ゲーム前の最後の息抜きになるでしょう

し、みんな今日はしつかり休んで明日に備えなさい」

最後にリアスがそう纏め、俺達は解散した。自室へ戻る前に兵藤君とアザゼル先生の様子を見たが、兵藤君の方は眠ってしまったのかイビキが廊下まで聞こえていた。アザゼル先生の方は目を覚ましていたが、ちよつと一人にさせてくれと部屋を追い出されてしまった。何か悩みでもあるのなら言ってくれていいのに。

・・・

次の日の夕方、学園の制服を着た俺は部屋を出て集合場所の客間へと向かったが、その途中、なんと支取さんと出くわした。

「あら、神崎君。お久しぶりですね」

支取さんは煌びやかなドレス姿だった。自己主張が激し過ぎず、かといって地味でも無い。まさに支取さんにピッタリなドレスだった。

「ああ、久しぶり支取さん。でも、どうしてキミがここに？」

「パーティー会場にはリアスと一緒にいる予定なので」

ああ、なるほどね。だから彼女もドレス姿なのか。改めて眺めていると、支取さんが怪訝な表情を浮かべた。

「あの・・・どこか変でしようか？」

「いや、支取さんのそういう姿を初めて見たからな。つい見惚れてしまった。不快な思いをさせてしまったのなら謝らせて欲しい」

流石にガン見はまずかったよな。支取さんの顔が怒りの所為か真っ赤になっている。だけどさ、言い訳させてもらえるなら、こんな綺麗な女性が目の前に現れたら誰だって見ちゃうだろ？

「こ、ここはありがとうございますと言えればいいのでしょうか・・・」

「そうしてくれるとありがたい」

俺の精神的にね！

「と、ところで、リアスがどこにいるかご存知ですか？」

「いや、俺も今部屋を出たばかりなのでわからない」

「そうですか。ひよつとするとまだ準備に時間がかかるのかもしれないね」

「リアスに何か用が？」

「ええ。宣戦布告を。今度の勝負。私達は夢の為に全力で彼女達に立ち向かいます」

夢・・・学校を建てるってヤツか。うん、やっぱり夢を語る時の支取さんは凄くいい顔をするな。

「そうか。俺は今度のゲームには関係が無いけど、応援してるから」

そういうと、何故か支取さんは信じられないものを見たように目を丸くしてしまった。

「どうかしたか？」

「いえ、今回はリアス側であるあなたに応援されるとは思っていませんでしたので・・・」

「確かに、リアスや他の子達にも色々手助けはしたけど、だからといって支取さんを応援しない理由にはならないだろう」

「え？」

「リアスも支取さんも、俺にとっては大切な友人だ。そこに順番や優劣は存在しない。そんなものをつけた時点で友人を語る資格など無いからな。俺に言えるのは、二人とも、それぞれの夢や目標の為に全力でぶつかり合って欲しいという事だけだ」

「神崎君・・・」

「だからこそ支取さん。俺はキミもリアスもどちらも『応援』するつもりだ。もちろん、今回の勝負が終わった後もずっとな」

リアス達の努力はこの目で見たし、支取さん達だって一生懸命に己を磨き続けたのだから容易に想像出来る。ただひたすらに相手に勝負事を目指して。そんなの、応援したくなるに決まってるじゃないか！

「・・・神崎君は八方美人ですね。女性にはいつもそんな風に言っているのですか？」

「え・・・!?!」

いやいやいや！ 誤解！ それ誤解！ てか、女の子を口説いた事なんて今まで一回も無いですからね！ 毎回毎回アホな事言っただけですからね！

「・・・なんてね。ふふ、冗談ですよ。さっきのお返しです」

じよ、冗談・・・？ ツ、冗談だど!? おのれ、騙したな支取さん！ そんな可愛らしくウインクしたって・・・許す！

「お、お返しと言われても・・・。俺、何かキミに気に障る様な事をしてしまったのだろうか？」

「さあ、どうでしょうね」

くっ、今度は人差し指を口に当てながらの微笑み・・・！ ちくしよ、普段見せない様な表情を連続でとか卑怯だろ。

「・・・ありがとうございます。神崎君。私は今まで、何を言われたって自分の夢を諦めるつもりはありませんでした。でも、こうして誰かに応援してもらえる事がこんなにも嬉しいなんて知りませんでした」
「そう思ってもらえるなら俺も嬉しいよ」

「ふふ、何故かはわかりませんが、今回の勝負、自分の思っている以上の『経験』、そして『成長』が出来そうです」

「そうか。・・・っと、すまない。いつまでも引き止めているわけにもいかないな。そろそろリアスの所へ」

「神崎君。女性の準備には色々と時間がかかるものですよ？」

「そういうもの・・・か？」

「ええ。ですからもう少しお話ししていきましょう。そうですね・・・神崎君の事を色々教えてもらいましょうか」

ひよっとして支取さんは『努力』の精神コマンドでも使えたりしてな。そんな事を思いつつ、俺は支取さんとの会話をもう少しだけ楽しむのだった。

・・・
・・・
・・・

支取さんと別れて数分後、客間で待機していた俺達の所に、ドレスアップしたりアス達が姿を現した。当然というか、みんな滅茶苦茶綺麗だった。特別参加の許されたアジアと黒歌もドレスを着ている。黒歌なんかは普段は和服姿だから新鮮だった。アジアは・・・天使っぷりが天元突破してた。

で、何故かヴラディ君までドレスを着ていて、それを兵藤君と匙君にツッコまれていた。支取さんがいたんだから彼がいるのも当然か。いや、ホント綺麗だわ。ついテンションが上がって色々口走ってしまった。無意識だったから内容は憶えて無いけど、とりあえず女子の顔を赤くさせてしまう様な事を言ってしまったようだった。

そうして全員の準備が整った所で、突然庭の方から何か着地したような大きな音が聞こえて来た。それから数秒して執事さんが一人客間へ入って来てこう言った。

「タンニーン様とその眷属の方々がいらつしやいました」

みんな庭に出ると、そこには確かにタンニーンさん、そしてドラゴンが合わせて十体ほどいた。

「おっさん！ 本当に来てくれたんだな！」

「約束だからな」

「兵藤君、約束とは？」

「おっさんがパーティー会場まで俺達を乗せて行ってくれるって約束してくれたんです。修行を頑張ったご褒美につて！」

「そういう事だ。・・・どうやら予定よりも人数が多いようだが、構わん。全員キツチリ運んでやろう」

まさかこんな所で男なら一度は夢見るドラゴンに乗る機会を得られるとは。ありがとう兵藤君。

「待て、フューリー」

ウキウキ気分でタンニーンさんの背中に乗ろうとしたら止められてしまった。え、まさかの乗車もとい乗ドラゴン拒否？ 俺だけ一人飛んでけつて事？

「スマンが、お前はアイツの背中に乗ってくれ。お前のファンでな。今回の話を持ちかけた時に真っ先に食いついて来たのがヤツだ。・・・ちなみに雌だぞ？」

いや、どう反応しろと？・・・まあ、そういう事なら彼女に乘せてもらおう。そして、俺が乗った所で、タンニーンさんを先頭に、全てのドラゴンが一齐に空へと舞い上がった。

乗り心地としては快適だった。結界を張って風圧がこつちに來な

い様にしてくれているそうさ。なので、俺は寝転んだり、歩いてみたり、肌を撫でてみたり色々やってみた。ただ、肌を撫でると体をビクつかせて失速しかけてしまったので、一回で止めておいたけど。

一時間くらい経った頃だろうか、下の方に明かりが見えて来た。目を凝らして光の発生源を確認してみると、そこには広大な森の中、天高く聳え立つ巨大なビルが存在していた。そちらの方へ飛んでいるので、あのビルがパーティー会場なのは間違いなさそうさ。

ビル近くのスポーツ競技会場っぽい所へ降り立つドラゴン達。最後に一言お礼を言い、俺も彼女から降りて兵藤君達と合流した。

すぐにさっきのビルの従業員らしき人達が近づいて来た。格好がホテルマンっぽいからひよっとしたらあそこはホテルなのかもしれない。

案内された先には立派なリムジンが三台停まっていた。一台目にリアス達。二代目に支取さん達。で、俺はというと、一人三台目に乗せられてしまった。

「えへへ、迎えに来ちゃった」

しかも、何故か中にはセラフオルーさんがいた。そして、彼女の口から出た話に、俺はあやうく吹き出しそうになった。

「今日のパーティーでフューリーさんのお披露目会もやるの」

セラフオルーさん曰く、既に俺の存在は冥界に知れ渡っているが、そろそろ正式な発表を行うべきだという話が出たらしく、ちょうどいい機会なので今回とり行う事にしたのだとか。・・・そういうのって普通、本人に最初に伝えるべきだと思うんですけど・・・。

「ドツキリにした方が面白いかなーって」

あ、ドツキリですか。そうですね。そう言われたら納得・・・出来ないよ！いきなり言われてもこっちにも心の準備があるのに！

「それでねそれでね、実はフューリーさんの服も作って来たの！」

俺の嘆きなど露知らず、そう言ってセラフオルーさんが取り出したのは、上下ともに蒼で統一されたかなり凝ったデザインの服だった。もっと簡単に表現するなら、アニメキャラが着てそうなデザインと言えはわかるだろうか。

「騎士であるフューリーさんをイメージして作ったんだよ！ カッコいいでしょ？」

あー、確かに言われてみれば騎士の儀礼用の格好って感じがする。見た目も確かにカッコいい。だが、それを実際に着てくれというのはどうだろう。正直、俺には似合わない気がする。見た目じゃなく中身的に。

「セ、セラフオールさん。せっかくですが、俺には制服の方が合っているま……」

「それにね、ただの服じゃないんだよ！ もうこれでもかというくらいに魔術的な処置を施していてね、防御力はもちろん、簡単な呪いだって跳ね返しちゃうんだよ！ お金も労力もいっぱいかかったちやつたけど、フューリーさんの為に頑張ったんだあ！」

あ、駄目だ。これ断れないヤツだ。断ったらたぶん俺の精神的に耐えられそうにないパターンだわ。

「……大切に着させてもらいます」

「ホント!? やったあ！ 喜んでもらって私もとっても嬉しいよ！」

「は、ははは……」

これを着て今から大勢の悪魔のみなさんの前に出る。……あれ、何でだろう。今までの俺なら焦ったりうろたえたりしたはずなのに、妙に冷静な気分だ。

(……そうか。これが「諦め」か)

わかった。わかりましたよ。覚悟は出来た。俺の持てる力全てを発揮して乗り越えてみせよう。たった今から俺は騎士(笑)では無い。悪魔を救った英雄……フューリーとなるのだ！

もうすぐホテルに着く。決戦の時は刻一刻と迫っているのだった。

S I D E O U T

イツセーSIDE

会場の入り口が開かれる。その先のフロア一杯に大勢の悪魔のみなさんや美味そうな料理の数々。そして天井には豪華なシャンデリア。これぞまさにパーティー！ つて感じだった。

「おお、リアス姫ではありませんか！」
「相変わらずのお美しさ。サーゼクス様もさぞかし鼻が高いでしょうな」

会場入りした部長に早速多くの人達が殺到した。ここでも流石の人気っぷりだなあ。つと、人気と言え、ここに来れば注目間違い無しの神崎先輩の姿が無い。何故か一人だけ別のリムジンに乗せられて、俺達とは違う入口から入ったって聞いたけど、まだ来てないみたいだ。

先輩不在の中、部長について色々回ったりして時間を潰している。突然照明が落とされた。ざわめく俺達の前で、会場の前方にライトが当てられる。その中心にはなんとセラフォル様が立っていた。「みんな〜！ お待たせ！ ただいまより本日のメインイベント！ フューリーさんのお披露目をとり行いたいと思いま〜す！」

ざわめきがさらに大きくなる。てか、俺も驚いてる。そうか、だから先輩だけ別行動だったのか。

「こ、こんなの聞いて無いですよお姉様！ 今日大事なお仕事があるとおっしゃっていたのに！」

近くにいた会長が頭を抱えて叫んでいる。そんな会長の叫びも虚しく、セラフォル様は神崎先輩の説明を続けていた。

「さて、長々と私がお話しても詰まらないだろうし、そろそろ登場してもらおうかな！」

セラフォルさんがフロア入口を指す。必然的に会場内の全ての視線がそこへ向けられる。うお、なんかテレビカメラまで用意されているぞ。

「それじゃ、フューリーさん！ どうぞ〜〜〜！」

セラフォル様の声と共に会場内に再び明かりが灯る。そして、扉がゆっくりと開いて行く。

「・・・はあ」

その溜息は俺か、部長か、会長か、もしかしたらここにいる全員のものだったのかもしれない。

現れたのは間違い無く神崎先輩だった。だけど、その身に纏ってい

たのは制服では無く、勇壮感溢れる蒼色の衣装だった。

“騎士”……俺の脳裏の真っ先に浮かんだのはその単語だった。先輩の為だけに存在していると言っても過言では無いその衣装を纏う姿は、まるで英雄譚の登場人物がそのまま現実に飛び出てきたかのようだった。いや、まるでじゃないか。先輩って本当に英雄なんだよな。

マジでカッコ良すぎる。いや、カッコイイという単語じゃ今の先輩を表現するには陳腐にも程がある。こういう時、木場ならビシツと言ってくれるんだろうけど、俺の頭じゃどう表現していいかわからない。

先輩がゆっくりと会場内へ足を踏み入れる。たったそれだけの動作で俺は圧倒されていた。それは俺だけじゃなく、悪魔のみなさんの何人かが数歩後ろに下がっていた。

途中、先輩が俺達に気付いた。そして、おそらく俺達グレモリー眷属だけにしかわからないだろう、ほんの僅かな笑みを向けて来た。

「はう……」

「ちよ、部長?」

へなへなと部長がその場に崩れ落ちた。部長だけじゃない、朱乃さんに小猫ちゃんのお姉さん、さらにはアーシアまでもが同じようにへたり込んでいた。

「……」

ゼノヴィアと小猫ちゃんは立ったままだ。だけど、その顔は見事なまでに真っ赤になっていた。

「は、はは。流石、先輩はこんな時でも堂々としてるね」

「ド、ドキドキしますう……」

木場は先輩の雰囲気当てられたのか額に汗を浮かべている。そしてギヤスパ。その感情は非常にマズイと思うぞ。

先輩はセラフォルー様の前まで進むと、そこで歩みを止めた。これからどうするんだろう。やっぱリスピーチとかするのかな。

「セラフォルーさん。この次は何をしたらいいですか?」

「ぼく……」

「セラフオルーさん？」

「ツ！ あ、ご、ごめんさい！ 自分の予想を遥かに超える破壊力に戸惑っちゃった！ え、ええつと。それじゃあ、何か一言お願いします！」

セラフオルー様からマイクを手渡され、先輩が困ったような顔を見せる。そのまま数秒経った所で、意を決したように静かに口を開いた。

「・・・初めまして。神崎亮真と申します。この場でこうしてみなさんに挨拶出来る事を光栄に思います」

先輩の口から迷い無くスラスラと流れるように発せられる言葉はあつという間にこの場の全ての悪魔の心を驚掴みにしていた。その証拠に、誰も彼も、先輩の言葉の一字一句を聞き逃さない様に集中している。

「以前から、自分が悪魔の英雄などと呼ばれている事は聞いています。ですが、自分はその様な誉れある呼び方をされる資格は無いと思っています」

資格が無い？ そんなわけが無い。先輩が過去で行った事は間違い無く称えられるべきものだ。三陣営のトップの方々だってそう言っていた。

・・・いや、ひよつとしたら、先輩自身は自分が特別な事をしたという自覚は無いのかもしれない。

——ただ助けたかった。

きつと、先輩はそんな簡単な理由で戦いの場に現れたんだろう。先輩はそういう人だ。どこまでも強くてどこまでも優しい「騎士」・・・それがあの人だ。

「・・・リョーマらしいわね」

いつの間にか復活していた部長がそつと呟く。きつと部長も俺と同じ感想を抱いたんだろう。部長だけじゃない。この会場で先輩の事を知っている人もきつと・・・。

「ですから、どうか自分相手に畏まったりしないでください。・・・人間と悪魔。種族の違いはありますが、自分はこれからも、悪魔のみな

さんとは友好的な交流をさせて頂きたいと思っっています」

そう締めくくり、深々と頭を下げる神崎先輩。だけど、会場内からは何の反応も無い。こういう時って普通拍手をするもんだよな。よし、ここは俺が先陣を切って……！

ぱちぱちぱち！

「えっ？」

とびつきりでかい拍手をやろうと思ったら、会場の一角から拍手が聞こえて来た。目を向けると、そこにはトップ会談の場に現れたあの強烈キヤラなお姉さん。確かカテレアさんだっけ？ が感動した面持ちで拍手をしていた。

「フューリー様！ 種族の壁を越えて友好を結ぼうとするあなた様の御心！ このカテレア感動いたしました！ もちろん、私は今後もフューリー様とより深い仲を築けるよう一層の努力をさせて頂く所存ですわ！」

相変わらずだなあの人……。でも、そんな熱烈なカテレアさんの姿に、他の悪魔達の間でも少しずつ拍手が広がっていき、最後には会場全体を揺らさんばかりの拍手が鳴り響いていた。

「以上でお披露目は終了だよ！ これからはフューリーさんにもパーティーに参加してもらおうから、お話したい人は順番にね！ それと、後でまたお知らせがあるから楽しみにしてて！ 特に女の子達はね！」

先輩、これからまた大変だろうなあ……。大勢の悪魔に殺到される先輩の姿に、俺は心の中でエールを送るのだった。

第七十二話 言わせねえよ!

「フューリー殿! 是非ともお会いしたいと思っております!」
「私はかつてあの戦場に身を置いておりましたが、まるで昨日の事のように思いだせまずぞ! 貴殿がドライグの尾を斬り飛ばした時など、思わず歓声をあげてしまいました!」

挨拶を終え、これで解放されると思ったら、もの凄い数の人達に囲まれてしまった。話をしたり、握手を求められたり、中には写真を撮ってくれとまで言ってきた人もいた。こうして人目に出た以上、今後はこういう扱いになれないといけないのかな。

お披露目会の時は入場の時から全神経を集中して騎士っぽく振る舞ってみたけど、今思い出すとももの凄く恥ずかしい。セラフォルーさんからはゆっくり入って来てと言われていたけど、もう牛歩レベルスピードのだったし、リアス達の姿を見つけた時は気が抜けてニヤけてしまった。その他にも細かな所で色々マズツたし。

てか、入った瞬間示し合わせたように一斉に溜息吐かれるとか完全に(精神的な意味で)殺しにかかってきてるよね。転校初日のクラスメイト達の反応を思い出したわ。

ああ、叶うなら、今この場で頭を抱えてグルングルン転げ回りたい……。

そうやって色んな人達の相手をして時間を過ごした俺だったが、いっしか人の数もまばらになり、ようやく自由に動けるようになった。さして、とりあえずリアス達に合流して、さつきから目に映ってる美味そうな料理の所へ突撃してやろう。

「すうー……はあー……。さあ、耐えるのよレイヴェル。直視しなければ大丈夫なはずですわ!」あ、あの、フューリー様……!」
「ん?」

もう何度その名で呼ばれたらうか。背後から届く声に目を向ければ、そこには金髪ドリルヘアーの女の子……以前の婚約パーティーで迷惑をかけてしまったフェニックス家のご息女、レイヴェルさんの

姿があつた。

「レイヴェルさん。久しぶりだな」

「ツ！ わ、私の事を憶えていてくださったのですか!？」

「それは当然さ。(そんな特徴的な髪) 忘れられるわけがない」

もちろん、髪だけが理由じゃない。この子は何故かフェニックスさんと勝負する事になった時も、集団リンチをよしとせず下がっていてくれたし。お兄さんを倒してしまった俺にもわざわざ改めて挨拶に来てくれたとてもよく出来た女の子だからな。

「嬉しい。本当に、本当に光栄です、フューリー様」

・・・本当に嬉しいのかな？ なんか泣きそうな顔してるんだけど。まさか、俺が憶えていた事で嬉し泣きしそうになってるわけないし。とりあえず、話題を変えよう。どうもこれ以上彼女のあんな表情を見ているのは忍びない。

「ところで、フェニックスさんは元気か?」

「お兄様でしたらずっと部屋に引き籠っていますわ。その、どうもフューリー様恐怖症になってしまったようで、今でこそ落ち着いていますが、最初の頃は「フューリー」や「騎士」という単語を聞いただけで悲鳴をあげていました。まあ、お父様もおっしゃっていました。が、才能にあぐらをかいていたお兄様にはちょうどいい薬になりましたけどね」

いや、ちよつと待って！ 俺、いつの間にかフェニックスさんにトラウマ植え付けてたの!？ むしろ事前に無敵だと聞かされていた俺の方がトラウマ抱えそうになつてたし！ そしてそれをいい薬だと言えちやうフェニックス家マジパネエ！

「眷属達が色々世話を焼いてはいるのですが、むしろその所為でお兄様は辛い目に遭っている様です」

「どうして?」

確か、フェニックスさんの眷属はみんな女性で、彼とは深い仲だつて聞いてたけど。

(眷属達もフューリー様のファンになつてしまつて、グッズやら何やらを見せられて怯えているなんて言えませんわ)

「レイヴェルさん？」

「さ、さあ、私にはわかりませんわ。私はもうお兄様の眷属ではありませんし」

「眷属じゃない？ 眷属というのは辞められるものなのか？」

疑問を口にする俺に対し、レイヴェルさんは丁寧に説明してくれた。レーティングゲームのルールの一つに“トレード”というやつがあつて、『王』の駒を持つ者同士がお互いの同じ駒を交換出来るんだそう。で、レイヴェルさんのお母さんが自分の使っていない『僧侶』の駒と交換してくれたらしい。でも、お母さん自身はレイヴェルさんをこのまま自分の眷属にしておくつもりはないそうで、レイヴェルさんが眷属になりたい相手を見つけたらトレードしてくれると言ってくれているのだとか。

「ですから、私は現在フリーなんです。いつか、私が眷属になるに相応しい方が現れてくれればいいのですが」

「はは、そうだな。でも、レイヴェルさんみたいにすっかりした子ならきっと引く手数多になりそうだが」

「い、いえ、そんな・・・」

「俺も先日サーゼクスさんに悪魔の駒をもらったんだが、未だに一つも使つて無いんだ。最も、俺の眷属になつてくれるような奇特な相手が現れるわけ無いとは思うから、きっと引き出しの奥に眠り続ける事になるんだろうがな」

その瞬間、レイヴェルさんの優雅な微笑みがもの見事に崩れ去つた。

「お、お待ちください、フューリー様！ い、今なんとおっしゃいました!？」

「ん？ だから引き出しの・・・」

「そ、その前です！ え、え!?! フューリー様も悪魔の駒をお持ちなのですか!？」

レイヴェルさんの声が会場内に響き渡った正にその時、会場内がどこぞのクズ主人公の漫画でお馴染の効果音で満たされた。

「あ、ああ。そんなに大声を出すほど驚く事かな？」

「と、当然ですわ！ フューリー様の眷属にして頂くなど、未来永劫その一族にとつての名誉となりますもの！」

それは流石に言い過ぎだよレイヴェルさん。どうせブームなんてすぐに過ぎて、俺もその内ただの人間扱いに戻るだろうし、その時になつて後悔するだけだと思ふよ。

「しかも、未だに一つもお使いになつていないなんて……。で、ではフューリー様。もしも、あくまでもしもの話ですが、私がフューリー様の『僧侶』に立候補させて頂いたら……。どうでしょう？」

なんだろう唐突に……。あ、俺がさつきそんな相手が現れるわけがないなんてぼやいたものだから慰めてくれてるのかもしれない。もしもって強調してるし。優しいなあ、レイヴェルさん。

「そうだな……。その時は喜んでお願いさせてもらおうよ」
IFな話くらい好きに言わせてもらつていいでしょ。野球ゲームで言うドリームチームですよ。

「ほ、本当ですか!? 本当に私を『僧侶』に!?!」
「ああ。俺の『僧侶』（妄想）はキミしかない」

「ツ……。！　そ、そうですか。と、ところでフューリー様。私、急にお母様への用事を『思い立ち』ましたので、申し訳ありませんがそろそろ失礼いたしますね」

優雅にドレスの裾をそつと持ち上げながら一礼し、レイヴェルさんは俺に背を向けて去つて行つた。……。なんかスキップしてる様に見えるけど、お母さんとの用事つてというのがそんなに楽しみなんだろうか。

あと、細かいようだけど、用事つて『思い立つ』ものなのかな。それを言うなら『思い出す』だと思ふんだけど。まあ、ツツコむ相手もいなくなつてしまつたし、今度こそリアス達に合流しよう。

「フェニックス家に後れをとるわけにはいかん！　娘よ、お前もお願いして来い！　そして、あわよくばフューリー殿を我が家に！」

「ま、待つてくださいいお父様！　今のフューリー様の御前に立つて意識を保つておく自信がありませんわ！」

「くつ、何故ウチには娘がおらんのだ！」

「気付いたら父上に存在をdisられていた件について」

んー、なんか騒がしくなってきたな。声が多すぎて聞き取れなかったけど、まあ、俺には関係無いだろう。きっと有名人か何かがいたんだろう。

さーて、リアス達はどこかな・・・。

・・・

・・・

・・・

ほどなくしてリアス達は見つかった。みんな固まって行動していたから探すのは簡単だった。

でも、合流したら女性陣とヴラデイ君が目を合わせてくれなかった。兵藤君に尋ねたら俺の格好の所為だと言われてしまった。さつきも入場した俺がみんなの方を向いた時に大変だったらしい。そんなに気持ち悪いニヤケ顔をしていたのだろうか、あの時の俺。

それに、やっぱりこの衣装は俺には似合っていないようだ。カツコイイのに勿体無い。同じ「騎士」なら（笑）が無い木場君の方がよっぽど着こなしそうだ。

「僕にそれを着る資格はありませんよ。それは先輩だけの物です」

口調こそ優しくかったが、表情は真剣そのもので木場君はそう言った。似合うと思うんだけどな・・・。

くそ、こうなったらせめて美味しい物でも食って気分を紛らわせてやる！ というわけで、早速俺は料理の置かれたコーナーへと足を運び、上等な料理の数々をこれでもかかと口にしていった。もちろん、周りに迷惑をかけたなり、下品にならない程度にね。

数分後、腹が半分ほど満たされ、次に何を食べようか迷っていると、背後からそつと声をかけられた。

「・・・リョーマ」

「リアス？ どうしたんだ？」

「その・・・ちよつと付き合ってくれないかしら」

今度はしっかりと目を合わせてくれるリアス。だけど、表情がどうも暗い。これはちよつと事情がありそうだな。

「わかった。俺でよければ」

「ありがとう。それじゃバルコニーに出ましよう」

二人揃って会場からバルコニーに出る。タイミングがよかったのか、他の人達の姿は無い。そのまま手摺の方まで並んで歩く。

「……」

自然と無言になってしまった。いったいリアスはどうして俺をここに連れて来たんだろう？ ……はっ！ まさか愛の告白!?

……はい。すみません。調子に乗りました。こんな魅力溢れる子がお前なんかには告白するわけがないだろうがボケ！ なんて声があちこちから飛んで来そうだ。

「……えっと、その服、とっても似合ってるわ」

「え？」

「だ、だから、その服が似合ってるって言ってるの!」

「あ、ああ、ありがとう」

褒められたのか怒られたのかどっちなんだろう。あれ、でもさつきはこの格好の所為で目を合わせてくれなかつたんじゃないやなかつた? ?

「って、そんな事を言う為について来てもらったんじゃないやなくて」

だよな。それなら会場で言えばいいんだし。

「……あのね、ここに来る途中、タンニンの背中でソーナに宣戦布告されたの。自分達の夢の為、全力で私達を叩き潰すですって。あの子らしいわ」

あ、ちゃんと伝えたんだな支取さん。叩き潰すって随分物騒だけど、試合前から火花を散らしてるんだな。

「それに、あなたの応援にも応えたいって言ってたわ。……なんか微妙にドヤ顔だったのが印象的だったけど。あなたって酷いわねリョーマ。私は応援してくれないの?」

「い、いや俺は……」

「……ふふ、冗談よ。あなたならきっと私もソーナも区別無く応援するってわかってたから」

く、くそ、また冗談か。そういうの止めてくれよ。

「ソーナ、凄く自信に溢れた顔をしていたわ。それに迷いも全く感じられなかった。きつと、ゲームではあの子もあの子の眷属達も実力を十二分に発揮して来るはずだわ。．．．それに比べて私は．．．」

俯き、自分の掌をジツと見つめたまま動かないリアス。普段こういう表情を見せない彼女なのでなんだか心配になってしまおう。

「私ね、最近になって気付いたの。いえ、気付いてしまったの。ソーナやサイラオーグ。若手と呼ばれる悪魔達の中で、私はおそらく．．．」
「リアス？」

「学校を建てたいソーナ。魔王を目指すサイラオーグ。二人ともしっかりとした夢や目標を持って生きている。それに比べて、私にあるのは誇りなんて呼ぶのもおこがましいちっぽけなプライドだけ」

「リアス」
「夢も無ければ実力も無い。．．．そんな私に相応しい呼び名は無n．．．」

「リアス！」
俺はリアスを抱き締めた。傷付けない様、だけど精一杯の力を込めて。彼女にそれ以上先を言わせない為に。言わせたら最後、彼女の中の何かが壊れる。そう思っ

「リヨー．．．マ？」

「もういい。もういいんだ。それ以上言わなくていい。それ以上泣かなくていい」

「え？ 私、泣いてなんか．．．」

そういうリアスの双眸からは涙が流れていた。この涙を見た瞬間、気付けば俺はこうして彼女を抱き締めていたのだ。

「そのままでもいいから聞いてくれ。確かに、夢や目標を持つ事は素晴らしい事だ。だけど、それを持って無いから駄目だなんて事は全然無いんだ。夢っていうのは必死になって探すものじゃない。気付いたら既にそこにあるものなんだ」

「気付いたら既に．．．？」

「ああ。だから焦らなくていい。キミはまだ若い。これから様々な事を経験する内に、きつと自分だけの夢を見つけられるはずだ」

「な、何その言い方。なんだか年下扱いされてるみたいなんだけど」
ちよつとだけ表情を明るくさせるリアス。だけどまだ足りない。
彼女の気持ちを少しでも軽くさせる為にもたたま掛けなければ！

「誇りに関してもそうだ。キミがこれまで積み重ねて来た努力は全て
キミが言う誇りの為じゃなかったのか？ さっきのリアスの言葉は
それを全て否定するものだ。そんなのは許さない。例えキミ自身の
言葉だとしてもな」

自分の努力を自分で否定する。そんな矛盾を口にしたリアスがど
うしても許せなかった。だって彼女は頑張ってたんだ。一生懸命努
力していたんだ。それを無かった事にしてしまうような言い方をそ
のままにしておくわけにはいかない。

「夢はこれから見つければいい。キミの誇りは決してちっぽけなんか
じゃない。だからハッキリ言わせてもらう」

俺は彼女に顔を近付け、先程彼女が言おうとした言葉を真正面から
否定した。

「キミは…決して“無能”なんかじゃない。俺はそう信じている！」
「ツ~~~~~！」

リアスの顔がクシャッとなったと思つた数瞬後、彼女は俺の胸に顔
を埋めて静かに嗚咽を漏らし始めた。そのまま彼女が落ち着くまで、
俺は黙って冥界の空を眺め続けるのだった。

.....

「.....もう大丈夫よ」

そう言つてリアスが俺からそつと離れる。まだ涙目だが、その顔は
少しだけ晴れ晴れとしていた。

「ありがとう、リョーマ。おかげで気持ち楽になったわ。ちよつと
ね、焦っていたの。みんながあなたから提示された技を順調に習得し
ていく中で、私だけが全く進歩が無い事に。これまで、何事も躓く事
無くこなせて来たからおさらね」

つて事は、俺の所為？ うわ、最悪じゃん俺。リアスがこんなに不

安を抱えてしまう様なものを出すなんて・・・！

「でも、もう気にしないわ。技を覚えられなかったからって、ソーナに勝てないわけじゃない。私は、今の私に出来るやり方でソーナと戦うわ！」

リアスの目が力強いそれに変わる。うん、もう心配はいらないな。いつもの自信溢れる彼女の目だ。

「ああ。それでこそリアスだ。それじゃあそろそろ戻ろう。少し冷えて来たからな」

「あ、待ってリョーマ」

「何・・・」

先に歩きだそうとする俺を引き止めるリアス。で、まだ何か話があるのかなと振り返った俺の唇に一瞬だけ柔らかなものが触れた。

「ふふ、これで二回目ね。いずれはあなたの方からしてもらいたいものだわ」

それじゃあ先に戻るわね・・・と会場の方へ戻って行くリアス。で、俺はというと、その場でラースエイレムでもかけられたかのように完全に固まっているのだった。

S I D E O U T

リアス S I D E

会場に戻ると、何やら前の方に人だかりが出来ていた。しかも女性悪魔ばかり。一体何があったのかしら。

「あら、リアス。あなたどこに行っていたの？」

左の方から朱乃が近づいて来た。何かしら。本のような物を持っているけど。

「ちよ、ちよつとバルコニーの方で涼んでいたのよ」

「涼んでいた割には顔がちよつと赤いけど」

「そ、それより、あの騒ぎは何？」

ちよつと逸らし方が強引過ぎたかしら。でも、朱乃は対して気にした様子も無く私の疑問に答えてくれた。

「セラフオール様が、明日から発売する亮真の写真集を無料で配って

いるの。しかも、この会場限定の写真までついてるヤツをね」
「何ですって!?!」

そんな素敵アイテム手に入れないわけにはいかないじゃない!

「焦らなくても、今日パーティーに招かれた方々全員分の数は一応用意しているそうよ」

「そ、そう。それなら安心・・・」

「残り全部ください!」

「ッ!?!」

「駄目だよカテレアちゃん。一人一冊って決まりだから。二冊目以降が欲しかったら明日出るヤツを買ってね」

「くっ・・・。仕方ありませんね。今夜はこれ一冊で我慢しましょう」

「・・・何をするつもりなのかしら」

「何って、それは・・・」

慌てて口を噤む。わ、私、今何を口走ろうとした!?

「リ、リアスったら何を想像したのかしら。私にはさっぱりだわ」

「そ、そう言う朱乃はどうしてそんなに顔が赤いのかしら?」

「・・・」

「止めましょう。これ以上はお互いの為にならないわ」

「ええ、そうね」

とりあえず、私も貫いに行かないと。・・・あ、よく見たら列の中に見知った顔がチラホラと。

今の所、あれの全部が全部ライバルというわけじゃないだろうけど・・・はあ、前途多難ね。

列の最後尾に並びつつ、私はこれから激しくなるであろうもう一つの戦いを思い、深々と溜息を吐いていた。

第七十三話 誇り

支取さんとのレーティングゲームの前夜、リアス達はアザゼル先生の部屋に集まって最後のミーティングを行っている。ここまで来ればもう出来る事は無いので、俺は自室のベッドに寝転がって明日の事を考えていた。

リアス側は七人、支取さん側は八人と聞いている。人数的には支取さんが有利だが、リアスには「赤龍帝」こと兵藤君がいる。アザゼル先生曰く、八十パーセントの確率でリアスが勝つと言われているらしいが、正直、そんなもの当てにはならない。言いかえれば二十パーセントの確率で負けるといふ事だし、そもそも、人の意思が関わる事に計算上の確率なんて何の証明にもならないと思う。

まあ、何が言いたいかという点、結局はどちらにも頑張つて欲しいという事だけだ。

さーて、このまま起きててもやる事無いし、そろそろ寝ようかな。
俺は部屋の電気を消し、目を瞑るのだった。

.....

翌日の早朝、俺とアーシア、黒歌の三人は電車で揺られながらある場所へ向かっていた。その場所というのはもちろん、リアス達の試合が行われる会場だ。

「ふわあ……。まったく、アザゼルはケチにや。どうせなら私達も連れて行って欲ればよかったのに」

あくびと共に不満を口にする黒歌。アザゼル先生は転移魔法で会場入りするそうなのだが、俺達には普通の交通手段で会場入りしてくれと指示されてしまった。

「お前は言わずもがな、人間であるアーシアも冥界では目立つ。今日の主役はあくまでもリアスとソーナだ。観戦は許可するが、あくまでもひっそりという条件の上でだ」

そういうわけで、一般観戦用のチケットを三枚渡され、俺達は試合

会場へ絶賛移動中というわけだ。ちなみに現在、俺は以前アザゼル先生に貰った認識障害眼鏡をつけていて、アーシアと黒歌もそれぞれ同じ機能のあるネックレスと腕輪を身につけている。

「アーシア、大丈夫か？」

「ふにゃ……。は、はい、大丈夫れすう……」

未だに眠そうなアーシアを気遣いつつ吊り革に掴まる。なんでも、リアス達の事が心配過ぎて寝られなかったらしい。全く、彼女らしいというかなんというか……。

「アーシア、本当に辛かったら寄り掛かってくれていいからな」

「だ、駄目ですう。そんな事したら耐えられな……」

あ、そうですか。俺に寄り掛かるのがそんなに苦痛なんですか。……これは泣いていいですよね。

（気持ちわかるにや、アーシア。眼鏡をかけたご主人様は新鮮だもんね。だけど、こういうチャンスはしっかり活かさないよ。というわけで、代わりに私が……）

地味に傷付いた心を誤魔化す様に車窓からの景色に目を移そうとした途端、電車が大きく揺れた。咄嗟にアーシアを支えたら、横の方からも女性が一人、バランスを崩してこちらに倒れて来たので受け止めた。

「大丈夫です……。か……」

「ええ、助かったわ。って、あら……」

その女性の顔を見るなり俺は目を疑った。女性の方も俺を見て目を丸くする。いや、だっておかしいよ。何でここにこの子が……。

「亮真じゃない。ふふ、久しぶりね。元気だったかしら」

露出強ことヴァーリさんがいるんですかねえ!? しかも眼鏡をかけた俺に気付いてるし! ……あ、待てよ。確か既に繋がりがある相手には効果が無いんだっけ。

「大丈夫かいヴァーリ? つと、おんやあ? そこにいるのはあの時の兄ちゃんじゃねえか」

「美猴。まずは謝罪が先でしょう。すみません、連れがご迷惑をおかけしました」

さらにそこへ、あの時ヴァーリさんを連れて行った美猴さん。そして初めて見る眼鏡にスーツ姿の男性が現れた。うん、ちよつと待とうか。あまりの急展開に頭が追いついて無いわ。

『禍の団』の連中がこんな所で何をしてるにや・・・?』

警戒心たっぷりにヴァーリさん達を睨みつける黒歌。はつ、そうだった! ヴァーリさんは今やペロリストの一員だったんだ!

「ふふ、そんなに警戒しないでちょうだい。私達だっていつも『禍の団』としての活動をしているわけじゃないわ。今日はプライベートよ」

「そういうこった。だから睨むのは止めてくれねえか。せつかくの美人が台無しだぜい?」

ヴァーリさんと美猴さんにそれぞれそう言われ、黒歌はフツと表情を緩めた。

「ところで、あなた達はこうしてこんな朝早くから電車に? ひよつとしてデートかしら?」

ヴァーリさん。それだと、俺が女の子二人と同時にデートしてる最低野郎って事になるよね。誤解にしたって酷いわ。

「実は・・・」

なので、俺はすぐさま本当の理由を話した。それを聞いたヴァーリさんはどこか楽しそうな顔で頷いた。

「ふうん。面白そうね」

「ん、ヴァーリ。お前さん、興味があるのかい?」

「ええ。といつても、リアス・グレモリーやソーナ・シトリーじゃなく、イツセーにだけどね」

お? その興味ってのはひよつとして男の子として・・・。

「あの『覚悟』からどれくらい強くなったのかしら。ふふ、一度やりあつてみて面白そうだわ」

あ、そつちですか。残念、兵藤君。

「・・・二人とも、盛り上がっている所すみませんが、そろそろ私にもそちらの方々を紹介してくれませんか?」

蚊帳の外だった眼鏡スーツの男性がヴァーリさんと美猴さんに声

をかける。実は俺もそろそろ彼について触れるべきだと思ってました。

「あら、ごめんなさい。そういえばあなたは初対面だったわね。亮真。彼はアーサー。私達と同じチームの一員よ」

「どうぞ、お見知りおきを」

凄く・・・紳士です。なんてアホな感想言ってる場合じゃない。こちらも自己紹介しないと。

それぞれ順番に自己紹介を済ませる。アーサーさんは俺がフューリーだと知つても特に驚く事は無かった。それどころか、「気苦労が絶えないでしょうが、どうか頑張ってください」なんて励まされてしまった。やっぱり紳士だわこの人。

「お前さん、仙術が使えるらしいな。実は俺っちもそうなんだぜい」

「ふうん・・・。興味無いにや」

「ヴァーリからあなたがフューリーの保護を受けているとは聞いていましたよ、聖女殿」

「あ、あの、私はもう聖女では・・・」

「いえ、あなたは聖女ですよ。誰がなんと言おうと・・・ね」

そして気付けば、黒歌と美猴さん。アジアとアーサーさんという構図になっていた。で、最後に残った者同士、俺はヴァーリさんと話をしていた。

「亮真。あなた、眼鏡をかけるのね」

「ちよつと事情があつてな」

効果を説明すると、ヴァーリさんは納得した様子で微笑んだ。

「なるほどね。確かに、今のあなたがそのままで出歩くのはよろしく無いわね。お披露目会の中継を見たけど・・・ふふ、あの時の会場内の様子は見ていて滑稽だったわね。まあ、気持ちはわかるけれど」

止めてヴァーリさん。あの時の事は思い出したいくないです。

「ところで話は変わるけど。亮真、あなたは今回の勝負、どちらが勝つと思ってるの?」

「それはわからない。俺に言えるのは二人とも悔いの無い勝負をして欲しいという事だけだ」

「ふうん。てつきりリアス・グレモリーに肩入れしていると思っただけだ」

「本人達からも言われたよ。だけど、俺にとっては二人とも大切な友人だからな。どちらかだけを応援するなんて事は出来ない」

「これがサイラオーグさんとかが相手だったらまだ違っただろうけどな。」

「ふふ、相変わらずな様で安心したわ」

「それはこちらのセリフだ」

「え？」

「あんな別れ方をして、心配していなかったと思っっているのか？まさかこんな所で再会するなんて夢にも思わなかったが、こうしてキミの元気な顔が見れて俺がどれだけ安心したかキミはわからないだろうな」

少し語気を強めながらそう言うと、ヴァーリさんは僅かにたじろいだ。

「り、亮真ったら、それは流石に大袈裟・・・」

「友人を心配するのに大袈裟も何もあるわけないだろう」

「ツ・・・！」

友達になったばかりの子がいきなり居なくなるだけでもアレなのに、加えてこれから露出強を更正させようと思っていたのにペロリストの一員になるなんて聞かされたこちらの身にもなってくださいよ。こんなの俺じゃなくても怒りたくなるさ。

「キミが何の目的で『禍の団』に入ったのかは聞かない。だが、キミはそんな所にいるべきではない。それだけは今この場で言っておく」

今の所、彼女にペロリスト属性がついた様には見えないけど、これ以上彼女の属性が増えたらもう大変な事になるぞ。そうなったら絶対ヴァーリさんの為にならない。今は若いからいいけど、将来絶対後悔するって。

「亮真・・・。私、私は・・・」

ヴァーリさんが何かを口にしようとしたが、不意にそれが止まる。気付けば美猴さんとアーサーさんに興味深そうな表情を向けられて

いた。

「ああ、俺っち達の事は気にしなくていいぜい。存分にイチャつけばいいさ」

「初めてですね。ヴァーリのその様な顔を見るのは。ふっ、これはいい土産話になりそうです」

「・・・あなた達ね」

そう言っつてヴァーリさんが目に危険な光を宿らせた瞬間、電車が突然停車してしまった。車内がざわめく中、ヴァーリさんに対して美猴さんがジト目を向ける。

「ヴァーリ・・・」

「ちよつと、まだ私は何もやってないわよ」

「まだつて事は、何かしようとしていたのですね」

「・・・早く動かないかしらね」

「誤魔化したぜい」

「誤魔化しましたね」

『ただいまトラブルが発生し、電車を停止させて頂きました。原因究明まで今しばらくお待ちください』

そんなアナウンスが流れてきた。あれ、これってまずくね？ 時計を見たらゲーム開始まで三十分を切っていた。会場へは次の次の駅を降りてさらに歩かないといけないのに。

「ご主人様。このままじゃ間に合わないにや」

黒歌も事の重大さに気付いたのか少し焦っている。でも、電車が動かない以上どうしようも無い。

「ん？ それならドアぶっ壊してやるから走って行くかい？」

「い、いえ、結構です」

近くのドアへ目をやる美猴さんを止める。考え方が物騒だよこの人。それに、走って行っている間に電車が動いたら意味無いし。

結局、電車が動いたのはそれから二十分後。目的の駅に着いたのはさらに二十分後。もう完全に遅刻していた。

「それじゃ、お別れね。また会える時を楽しみにしているわ」

ヴァーリさん達と別れ、俺はアーシアを抱え、黒歌と共に会場に向

かって全力疾走した。そうやってようやく辿り着いた会場の入り口で入場チケットを係に渡す。

「遅かったな。もう決着が付きそうだけ」

「「え!?!」」

係の一言に俺達は顔を見合わせ、慌てて会場内に飛び込む。正面に据えられた大型のモニター。そこに映し出されていたのは、支取さんや真羅さん。そして他の眷属の子達に囲まれたリアスの姿だった。

S I D E O U T

リアスS I D E

「さあ、追い詰めましたよリアス」

余裕そうな口調だけど、決して油断はしていない顔で私を見据えるゾーナ。私を取り囲む他の眷属達も皆同じ表情だった。

ゾーナ側でリタイアしたのは四人。対するこちらは私とギヤスパー以外全滅。どうしてこうなってしまったのだろうか。

ゲーム開始前のアザゼル先生の言葉が頭を過る。

『リアス。どうも必殺技を覚えさせたのは間違いだったようだ。昨日のミーティングで感じたが、イツセー以下、全員自信を通り越して慢心がみられる。よく言い聞かせておけ。例え技を習得出来たとしても、それ自体が即強さに繋がるわけではないとな』

まさにその言葉通りだった。イツセーは匙君相手に壮絶な殴り合いを展開し、最後は必殺技で決着をつけたけれど、その後すぐに倒れてしまった。原因は、匙君の神器。彼はイツセーと殴り合っていた間も神器を使いイツセーの血を吸い取り続けていた。その結果、大量の血を失ったイツセーは戦闘不能となりリタイア。

朱乃はトラップを設置するのに夢中で相手の接近に気付かず奇襲され、直前にトラップを発動させて相手を道連れにした上でリタイア。

小猫は一人で二人を倒す活躍を見せてくれたけど、疲弊した所を狙われアウト。ゼノヴィアは必殺技を使おうと剣に光の刀身を伸ばさせたらそれが天井に突き刺さって身動きが取れなくなってやられた。

そして祐斗はさつきまで私を守る為に戦っていてくれたけど、数の力には叶わず倒れた。そして今、私の前にギヤスパーが両手を広げて立っている。

「どきなさい、ギヤスパー君。あなたはこの勝負、神器の使用を禁じられています。ハッキリ言ってしまうえば、あなたは脅威になりえない」「か、関係ありません!」

「ギヤスパー?」

ソーナ達の視線を一身に受けながらも、ギヤスパーは決して引こうとしなかった。その姿は少し前までのこの子からは想像も出来なかった。

「た、確かに、僕は役立たずです! だけど! それでも! こんな僕でも部長の盾にはなれますう! イッセー先輩も小猫ちゃんも、みんな一生懸命頑張ってたんです! なのに、このまま何もせずに終われないんですう! じゃないと、こんな僕を色々気にかけてくれた神崎先輩にも顔向け出来ません!」

ギヤスパー……。それがあなたの「覚悟」なのね。あなたのその勇氣、私は尊敬するわ。そして、そんな物を見せてくれたあなたの思いを無駄にするわけにはいかない……!」

リアスSIDE OUT

ソーナSIDE

ギヤスパー君。引き籠りで自分に自信が持てないとは聞いていたけれど。今の彼を見てそんな風に思う者がいるとは思えない。

彼を変えたのは兵藤君を初めとするグレモリー眷属。それと「彼の存在も影響しているのでしょう。そして、それはきつと自分達も同じ。」

ゲーム開始前、私は眷属達に神崎君の言葉を伝えた。結果、皆の目の色が変わったのはちよつと面白かった。やはり、伝説の騎士に応援されるのは嬉しいのだろう。

もちろん、私も同じ気持ちだ。それと同時に、何だか神崎君の事を考えると妙に気持ちが高揚してしまうが、それは今関係無いので置い

ておこう。

サジに至っては泣いていた。「絶対、絶対負けねえからな！」と叫んでいた姿は今回の勝負に並々ならぬ思いをかけているのが見えてとても頼もしかった。現に、サジは自分の役目を見事に果たし、兵藤君をリタイアさせた。

他の子達も皆私の予想以上の働きを見せてくれた。まさか、ここまでの人数が残るとは思っていなかった。だけど、油断だけはしない。何せ、相手はリアス。彼女の諦めの悪さは、前回のフェニックス家との勝負でよく理解しているから。

「・・・ギヤスパー。ありがとう。下がっていなさい」

来た・・・！ 目に力強い光を宿らせるリアスに、私は警戒心を強めた。それと同時に不謹慎だがワクワクした。果たして、彼女はこれから何をを見せてくれるのだろうか。

「ソーナ。やっぱりあなたは凄いわ。戦術面で言えば、あなたは私の遙か上にいる。一体追いつくのにどれくらいかかるのかしらね」

「追いつかせませんよ。今までも、そしてこれからも」

「ええ。そうね。私があなたに追いつこうとすれば、あなたはきつとそれ以上のスピードでさらに先へ行ってしまう。追いかける事は出来ても、追い抜く事は出来ない。それぐらい、私とあなたには差がある」

初めて聞かされるリアスの弱音。・・・いえ、これは弱音じゃない。彼女はただそれを結論として受け入れているだけに過ぎない。その証拠に、リアスの目の光は益々その強さを増している。

「戦術が無理なら能力面で・・・と言いたい所だけど、それもサイラーグに比べたら全然だわ。どっちつかずな私は、結局リョーマから提示された技も覚える事が出来なかった」

神崎君からそれぞれに教えられたという技。確かに興味深かったけれど、使うタイミングが良く無かった。でも、今後さらに磨きを加えればきつと大きな戦力になる。それが私の感想だった。

「あなたやサイラーグと違って、私にあるのは誇りと呼ぶ事すらおこがましいちっぽけなプライドだけ。・・・それに気付いた時、私は

絶望したわ。それこそ、自分を無能だと思ってしまうほどにね。だけど、リヨーマはそれら全てを聞いた上で言ってくれた。私は・・・決して無能なんかじゃないと。自分はそう信じていると」

リアスの中から何か膨れ上がるのを感じる。本来であればすぐに指示を出して決着をつけるべきなのだろう。だけど、私はそうしなかった。リアスの・・・私の幼馴染でありライバルである彼女の思いを、私は受け止める義務があるから。

「私は信じるわ。私自身じゃ無く、私を信じてくれたリヨーマを！だから、いつまでも無能のままにいるわけにはいかないのよお!!!」

刹那、リアスの体から膨大な魔力が迸り始めた。それは凶暴な風となり、私達に襲い掛かる。だけど、それは余波。本命は別にある。

「椿姫!」

「ええ! 巴柄! 桃!」

号令と共に一斉にリアスに迫る三人。だけど、それは小さな蝙蝠に変化したギヤスパ―君によって妨害された。

「さ、させません!」

「くっ! 邪魔をしないで!」

椿姫の一撃でギヤスパ―君が退場する。だけど、彼女にとってはそれで充分だったようだ。

「はあああああ!!!」

雄叫びと共に魔力を掌に収束するリアス。魔力球となったそれは手を離れ、彼女の周囲を衛星の様に回り始める。濃密な滅びの魔力で作られた魔力球。触れればリタイア必至だろう。

「・・・なるほど、見た所相手の接近を許さない防御用の技と言った所でしようか。ですが、それなら近づかなければ良いだけの事・・・」
「残念。これはね、攻防一体の技なのよ! いきなさい、ガン・スレイブ!」

リアスの叫びに呼応したかのように、魔力球が凄まじい速度で巴柄に向かって飛んで行く。狙われた巴柄は僅かに表情を強張らせながらも回避行動に移る。

「ッ! こ、こんなの避ければ・・・!」

「今よ！」

避けたはずの魔力球から巴柄に向かつて三つの光弾が発射された。直撃を受け、巴柄の姿が消える。

『ソーナ・シトリー様の『騎士』リタイア』

「これが・・・リアスの奥の手・・・！」

いや、呆けている場合じゃない！ 考えなさい私！ 先程の射撃の正確さ。おそらく自動追尾機能もついているはず。消そうにも、あれ自体が滅びの力を有している以上、触ればこちらが危ない。

「い、今の内に本体を・・・！」

「待ちなさい桃！ 不用意に近付いてはいけません！」

私の制止も届かず、桃がリアスに肉薄する。対するリアスの手には先程と同じ魔力球。まさか、制御出来るのは一つだけではない!?

「おあいにく様！ 私の奴隷は一つだけじゃないのよ！」

その言葉通り、二つ目の魔力球から放たれた光を受け、桃が倒れる。不用意に動けない私達の前で、リアスはさらに三つ目、四つ目、そして五つ目の魔力球を展開させた。

「くっ・・・はあっ・・・さ、流星に、キツイわね・・・」

「ツ・・・！ リアス、血が・・・！」

リアスの右目から血が流れ始めた。まさか、あの技は体に相当の負担をかけているのだろうか。

「ふ、ふふ。さつきから頭の痛みも半端無いわ。今の私じゃ制御処理能力が足りないから脳への負担が凄みたい。でも、それがどうしたっていうのよ。あなたに勝つ為に、そして、今も会場のどこかで見ているだろう彼の前で、私の全力を出し切らないでどうするのよ！」

いつもの優雅さや余裕など欠片も無く、さながら幽鬼の様な佇まいを見せるリアス。だけど、その姿こそが彼女の“誇り”の強さを物語っていた。もし、今の彼女の姿を見て無様だと嘲笑う者がいれば、私はきつとその者を許さないだろう。

「リアス・・・。その思い、確かに受け取りました。受け止めた上で私は勝ちます！ あなたの誇りと同じように、私にも譲れないものがある

るのだから！」

「それでこそソーナよ！ そんなあなただからこそ、私は絶対に勝たないといけないのよ！」

私は椿姫を下がらせた。・・・おそらく、今回のゲームの評価は散々だろう。互いの王がこうして直接戦うなんて本来であれば下策中の下策だ。

・・・だけど、それ以上に今回のゲームは私達にとって評価以上の何かを得られたものになった。それは経験だったり、はたまた幼馴染の凄さに改めて気付かされたりといった感じだった。

「ソーナアアアアアアアアアア!!!」

魔力球を展開させたままりアスが私に迫る。それに対し、迎撃態勢を取ろうとした私の前で、不意にリアスが魔力球を全て消してしまった。

そして、その直後、リアスはゆっくりとその場に崩れ落ちた。

『投了を確認。この度のレーティングゲームはソーナ・シトリー様の勝利です』

そのアナウンスを、私はどこか他人事のような気分で聞いていたのだった。

第七十四話 再起

支取さんの勝利で幕を閉じたレーティングゲーム。決着のアナウンスが流れた直後、俺達はリタイアした子達が運ばれたという病室に駆け込んだ。

その途中、変なおじいさんに出会った。というか絡まれた。俺は何者だとか、その力はどうかやって手にしたのだから色々聞いて来たが、正直一刻も早く病室に向かいたかった俺は、失礼だとは思ったが道を開けてくれるように頼んだ。

およそ年配の方にする態度では無いと思う。現にそのおじいさんのお連れであろう綺麗な女性には厳しい視線を向けられてしまったが、それをあえて無視する形で俺達は先を急いだ。

「また会おう。異世界よりの騎士殿」

そんな言葉を背に、俺達は走った。そして、病室へ辿り着いた時、そこにはなんとサーゼクスさんの姿があった。

「やあ、神崎君。それにアーシア・アルジエントさんに黒歌。ひよつとしてお見舞いかい？」

「ええ。サーゼクスさんはどうしてここに？」

「今回のレーティングゲームで最も優れた戦いを演じた“彼”を表彰しに来たんだ。キミ達も来るかい？」

「ご主人様。私は先に白音の所に行くにや」

という事で、黒歌を見送り、サーゼクスさんに続いて病室へ突撃すると、そこにはベッドに横になった匙君と、それに付き添っている支取さんの姿があった。

「サ、サーゼクス様!? 痛っ・・・!」

「無理に起き上がらなくていい。安静にしていなさい」

「は、はい・・・」

緊張した様子の匙君に、サーゼクスさんは小さな箱を手渡した。一目見て高価とわかるそれに首を傾げる匙君。

「あ、あの、これは・・・?」

「これはレーティングゲームで優れた戦い、印象的な戦いをした者に

贈られるものだ」

微笑みながら答えるサーゼクスさんに匙君は言う。自分にはこれを受け取る資格は無いと。自分は兵藤君に負けてしまったからと。

サーゼクスさんが再び答える。確かに匙君は兵藤君に負けた。だけど、結果的には匙君も兵藤君を倒した。北欧のオーデインも匙君に大きな賛辞を贈ったと。・・・オーデインって誰よ。

それでも受け取ろうとしない匙君を見て、サーゼクスさんは自ら小箱から勲章を取り出すと、それを彼の胸に着けてあげた。

「今回のゲームを見た者達は、キミの持つ可能性を充分に感じ取った事だろう。キミの様な若手悪魔を見れて私は嬉しいよ。もつと精進しなさい。そして、これから何年先になろうとも構わない。キミの夢を・・・レーティングゲームの先生になる夢を叶えなさい。私は応援しているよ」

「ツ~~~~~!!」

匙君は声にならない声をあげながら大粒の涙を流し始めた。見れば支取さんも泣いているし、アーシアも感動した面持ちだった。俺も気を抜けば涙が出そうだ。しかし、俺は泣かない。いや、泣いてはいけない。

何故なら、俺は匙君の戦いを見ていないから。魔王様すら心を動かされる様な立派な彼の戦いを目にしていないのに泣いてしまえば、それは逆に匙君の頑張りに対する侮辱になるから。お前に彼の何がわかるんだと自分に対して怒りたくなってしまうから。

なので、これ以上ここにいる資格は無いと、俺は匙君の病室を後にした。去り際にサーゼクスさんに見つめられていた気がしたが、俺は構わずドアを開けた。

S I D E O U T

サーゼクス S I D E

匙君に一言も声をかける事無く、神崎君は病室を出て行った。

「神崎君は何をしに来たんでしよう?」

「あ、あはは、ひよつとして俺の情けない姿を見て呆れたとか」

彼の行動に疑問符を浮かべる二人に僕は答えた。

「いや・・・それは無いよ」

「え？」

一瞬だけだが、僕は確かに見た。神崎君の両目がほんの僅かだけ潤んでいたのを。呆れたわけじゃない。神崎君は感動していたのだ。

「夢」の為に己の可能性を最大限に発揮して見せた匙君に・・・。

そう伝えたと、匙君は大層驚いた表情でドアの方を見た。

「せ、先輩・・・。俺を、俺なんかをそんな風に見てくれて・・・！」

「伝説の騎士のお墨付きだ。自分を卑下する必要なんて無い。これからも夢の為、努力を怠らないようにね」

「はい・・・はい！俺はもうグダグダ難しい事を考えるのは止めます！そんな事をしているヒマがあるならただ夢の為に突っ走る方がずっと俺らしいから！」

およそ立ち上がれる状態ではないであろうに、匙君は拳を振り上げながらベッドから起き上がった。はは、青春だなあ。

若い子はそれでいい。がむしやらに、ひたすらに前に突き進んでいけば、いつかきつと目的地に辿りつける。それは若い子だけの特権だからね。

「さて、それじゃあそろそろ私は失礼するよ」

匙君の病室を後にする。さて、次は可愛い妹の様子でも見に行ってみようかな。

サーゼクスSIDE OUT

IN SIDE

匙君の部屋を後にし、他の子達を見舞っていた俺は、最後にリアスの病室へお邪魔したのだが、そこには死んだように眠るリアスがいた。

「おう、来たかフューリー」

「アザゼル先生。リアスは・・・？」

「心配すんな。眠ってるだけだ。お前も見ただろう？ コイツ、まさかの土壇場で成功させやがった。どうも追い詰められた事でコイツ

の中のリミッターが外れたらしい」

それって所謂バーサーク状態って事？ もっとわかりやすく言えば火事場の馬鹿力的な？

「リミッターってのは外せば自分の限界を越えた力が出せる。だがな、それは同時に自分の体の崩壊を招く事になる。当然だ。際限無く負荷をかけるんだからな。リアスの場合、魔力球の制御をするにあたって脳への負担がかなりかかっていたみたいだ。あの時の血涙はその所為だな」

冷静に説明するアザゼル先生に、俺の気分も幾分か落ち着いて来た。

「・・・フューリー。お前から見て、今日のゲームはどうだった？」

え？ いや、あの、すみません。終わりしか見てませんからなんとも言えないんですけど。でも、こんな事で誤魔化したら余計話が拗れるし。・・・ここは正直に本当の事を言うべきだろうな。

「すみません。最後のリアスの所しか見ていないので答えようがありません」

「・・・そうかい。いや、それでいい。ありがとよ」

優しいなあ先生。あえて礼を言う事で俺に気分を軽くしようとしてくれたんだらう。ホント、なんであの日あの時の電車が止まらにやならんかったんだらう。

それからすぐ、病室に入って来たサーゼクスさんがリアスを見て仰天していた。アザゼル先生が説明したら落ち着いてくれたけど、やっぱりこの人シスコンだわ。

結局、リアスが目を覚ましたのはゲームの日から数えて三日後の夜だった。夕食後、彼女達は前日の時と同じように、アザゼル先生の部屋に集まって反省会を行うそうだ。

どうも、みんなそれぞれに後悔の残るゲームだったらしいし、今回の経験を元に、次はいい結果が出せるよう祈っておこう。俺に出来るのはそれくらいだな。

冥界での生活も残す所後僅かとなったこの日、俺はそんな事を考えながら眠りにつくのだった。

S I D E O U T

イツセーS I D E

部屋の中を重苦しい空気が漂う。誰も言葉を発せない中、アザゼル先生の冷たい声が響く。

「・・・俺が何を言いたいかわかるな？」

答える者はいない。何故なら、答える必要が無いから。アザゼル先生の言葉の意味を理解していないヤツはここには誰もいないから。

「今回のレーティングゲームは直前の予想を大きく裏切る事となった。結果、ソーナ・シトリーは評価を大きく上げた。対するお前達はゼロどころかマイナスだ。俺自身、あまりの酷さに思わず目を覆いたくなった」

言い返せない。俺達だって自分がどれだけ不甲斐無かったかわかってる。アザゼル先生の修行をこなし、神崎先輩から教えてもらった必殺技を覚えて天狗になっていたんだ。そのくだらない慢心の所為で、俺達は勝てるはずだった勝負に負けたんだ。

「イツセーは相手の狙いに気付けなかった。小猫は一人で突出し過ぎた。朱乃、ゼノヴィアに関しては論外。木場は最後の最後で技に頼ろうとしなければもう少し粘れた。辛うじて褒められるのは自分の役目をすっかり果たしたギヤスパードだけだ。そしてリアス。あの場面で技を成功させたのは認めるが、お前が本当にやらなければならなかったのは、ああいう局面に陥らない様、全員に的確な指示を出す事だった」

匙・・・アイツは俺を確実に戦闘不能にさせる為に、神器で俺の血を吸い続けていた。しかも、俺と殴り合いをしながら並行してそれを行っていた。俺は、心のどこかでアイツを侮っていたのかもしれない。それが結局敗北に繋がったんだと思う。

「・・・それと、フューリーも今回のお前達の結果が相当不満だったようだぞ」

その一言は俺達を凍りつかせるのには充分だった。手に汗が滲む。喉もカラカラだ。心臓だって急に激しく動きだした。果たして、先輩

が俺達に下した評価はいい……。

「リアスの病室で俺はアイツにゲームの感想を聞いた。そしたら、なんて答えたと思う?」

ゴクリと誰かが喉を鳴らす音がやけに大きく聞こえた。それを合図にしたように、アザゼル先生が再び口を開いた。

「アイツは、最後のリアスの所しか見ていなかったと言った。……つまり、それ以前のゲームをアイツは見えていない。いや、あの時の表情から察するに、見る価値も無かったようだ」

「……「ツ!?!」……」

瞬間、頭が真っ白になった。あの人が……今までどんなに情けない姿を見せても決して見捨てないでいてくれた先輩をして見る価値の無かった勝負。は、はは、上に下された評価よりもずっとキツイや……。

「僕は……僕は一体何をやっていたんだろう……!」

木場が机に拳を叩きつける。その目からは涙が流れていた。他のみんなも同じだった。あの小猫ちゃんまでもがハンカチで目尻を拭っている。そして、俺もまた涙を流していた。

俺は……俺達は先輩の信頼を裏切ってしまった。それは誤魔化し様の無い事実だ。それこそ、さつきアザゼル先生が言った様に、俺達の評価は落ちる所まで落ちてしまったのかもしれない。

「……だが、これはお前達だけの所為じゃない。安易に必殺技を覚えさせようとした俺の責任でもある。技を覚える事と技を使いこなす事は違う。それを最初に叩き込んでおけばよかった。だから、今回の敗北は俺達全員の責任だ。……だが、これからは違う」

「え?」

「俺はもう二度とお前達に同じ悔しさを味わわせない。評価が最底辺まで落ちた? 上等じゃねえか。これ以上落ちないんだ。後はただ駆けあがっていけばいいだけじゃねえか。お前達だって、言われっぱなしで我慢するつもりはねえんだろ?」

……そうだ。ああ、そうだよ。先生の言う通りだ! 馬鹿な俺に出来る事なんて、今までもこれからも、ただひたすらに前に進む事だ

けなんだから！ 周りになんて言われようが、それが兵藤一誠のやり方だ！

「よっしゃ！ 泣くの終わり！」

「イツセー？」

「部長！ みんな！ もう一度頑張ってみようぜ！ きつとこれまでが順調過ぎたんだ！ たまにはこんな風に壁にぶち当たってみるのも面白いじゃん！ その壁だって、俺達が力を合わせればきつとすぐ乗り越えられるさ！ だって、俺達は天下のグレモリー眷属だぜ！ そんな俺達に越えられねえわけがないんだよ！」

俺の言葉にキョトンとする一同。だけど、それはやがて笑みに変わり、ついには大きな笑い声を招く事になった。

「ふ、ふふ、イツセー君。僕はキミのそういう所が本当に好きだよ」

「お前の好きは誤解を招くから止めろって言うてるだろうが！」

「だが、確かにイツセーの言う通りだな。なんだか目が覚めた気分だ」「そうですね。後悔や反省は大切だけれど、それに引き摺られるのは間違っていますわよね」

「・・・ありがとうございます。イツセー先輩」

「ぼ、僕も、僕なりに頑張りますう！」

「そうだよ。みんなには悲しい顔なんて似合わない。そんな風に笑ってない！」

「イツセー。あなたが眷属でいてくれて本当に良かったわ。これからも、あなたのその前向きな心で、私を支えてちょうだい」

「もちろんです！」

今回の敗北で、俺達が失ったものは多い。だけど、たった一つだけ得られたものがある。それは目に見えないけれど確かに存在するもの・・・。即ち、仲間同士のより強い絆だった。

イツセーSIDE OUT

IN SIDE

朝食を食べようと部屋を出たらリアス達にももの凄い勢いで謝られた件について。

いやホント、こつちがたじろいになってしまうほどの勢いだった。もう一度チャンスをくれとか、必ず汚名を返上してみせるとか、正直何を言っているのかわからないよ？ 状態だった。

アザゼル先生はアザゼル先生で、どうか受け入れてやってくれとか言ってくるし。その目が恐ろしいくらい真剣だったからつい頷いちやっただけど、マジで何だったんだろう。

リアス達も安心したように笑みを浮かべてそれ以上何も言っていなかったけど……。そつちだけ納得せずに、俺にもちゃんと説明して欲しいと思うのは間違いないはず。

そして、それからさらに数日後。いよいよ俺達が冥界を去る日がやって来た。帰りの列車が停まる駅前で、お世話になったみなさんと最後の挨拶を交わす。

リアスのご両親はもちろん。サーゼクスさんにグレイファイアさん、ミリキヤス君。さらにはセラフォルーさんにカテレアさんまでみんな揃っている。

「神崎殿。家の扉はいつでも開けておく。また気兼ねなく遊びに来てくれたまえ」

「はい。ありがとうございます」

「フューリー様！ 今度お会い出来る時までには必ず完成させておきますから待つててくださいね」

「？ よくわからないが、期待しておくよ」

「フューリーさん。次はこつちから会いに行くからね！」

「フューリー様の家……。ああ、きつと素敵なお家なのでしょうね」

「え、ええ。お待ちしております」

全員と握手をし、列車に乘ろうとしたその時、アガレスさんからもらった端末にメッセージが届いた。

『今日がお帰りの日だと聞いています。また一緒にお話出来る日を楽しみにしています』

俺もです……。と返事を送り、今度こそ列車に乗り込む。こうして、俺達の冥界生活は幕を閉じたのだった。後は残り少ない夏休みを消化するだけ。そう思っていたのだが……。

「アーシア。やっと見つけたよ。中継を見た時、もしやとは思っただけだ。やっぱりキミだったんだね」

「あ、あの、あなたは・・・？」

「僕はデイドラ。デイドラ・アスタロトだ。かつて、キミによって命を救われた悪魔だよ」

「ッ・・・!？」

「思い出してくれたかい？ アーシア。僕はキミを迎えに来たんだ。命を救われたあの時から、僕はキミの事をずっと想っていた。どうか、僕の妻になって欲しい。僕は、キミを愛しているんだ」

地下ホームに突然現れたと思ったら、これまた突然アーシアに求婚しちやっただアスタロトさん。どうやら、また一騒ぎ巻き起こりそうな雰囲気だった。

第六章 体育館裏のホーリー

第七十五話 恩という名の呪縛

ディオドラ・アスタロトさん。冥界の会合で見かけた時は、大人しそうな少年だったのに、まさかこんなにも情熱的な人だったとはなあ。

ポストに入っていた大量の手紙を机に置き、俺はそんな感想を抱いていた。アスタロトさん来訪から数日。既に二学期へと突入している現在、アジアに対するアスタロトさんのラブコールは激しさを増している。

こんなラブレターなんて序の口だ。他にも映画のチケットや食事の誘い。果ては豪華なドレスや宝石など、贈り物は実に多種多様だ。宝石なんて一つ売れば当分生活に困る事は無さそうなくらい価値がありそうだった。

だが、それらに対し、アジア本人はどうも困っているみたいだった。さらに言えば、ウチの女性陣の反応も悪かった。なんでも、物を贈れば靡くだろうという考えが透けていて不快なんだとか。うーん、やっぱり女心というのは難しいんだなあ。

さらに、イベントはこれだけでは無かった。二学期に入つてすぐ、なんと兵藤君の幼馴染で、以前ゼノヴィアさんのパートナーだった紫藤イリナさんが転校して来たのだ。

しかも彼女、天使になってしまったのだとか。あのミカエルさんのエース天使になれたと凄く喜んでいた。何でも、『悪魔の駒』と人工神器の技術を応用して転生天使という存在へ変わったらしい。これは是非ともウチの天使にも使ってくれませんか！なんて思っていたら、近い内に俺にその転生天使になるためのランプが贈られる話になってると紫藤さんから伝えられた。

どうも、俺がサーゼクスさんから『悪魔の駒』を贈られた事が知られているらしく、それならこつちからも贈っちゃえみたいな話になったんだとさ。そんなノリでいいんですかね天界のみなさん。そして、

きつとまたオカンによつて魔改造されるんだろうな……。

そんな感じで、学園生活に新たな仲間が増え、九月の一大イベントである体育祭に向けて練習を重ねる日々が続く中、またしてもアスタロトさんが訪ねて来た。てつきりアシアに用事かと思つたら、なんと俺と話がしたいのだとか。というわけで、彼を連れて近くの公園へ向かう事になった。

玄関口でリアス達から気をつけろと言われてたが、何に気をつけないといけないのだろう。腑に落ちないものを感じながら、俺は玄関を出た。

公園についてすぐ、アスタロトさんは自分とアシアの過去について語り始めた。そこでわかつたのだが、彼はアシアが教会を追放された原因……彼女が助けた悪魔その人だった。その時、教会の人間であるにも関わらず、悪魔である自分を助けてくれたアシアに特別な感情を持つようになったのだとか。

「恩を返す為に結婚を求めたわけじゃありません。僕は純粹に彼女を愛しています。こうして再び彼女と出会えたのは運命だと僕は思っています」

そう語るアスタロトさんの表情は真剣そのものだ。アシアの事を心底想っているのだと感ぜられるくらいに。だけど、なんでだろう。どうして……。

(こんなにもアルIIヴァンセンサーが反応しているんだ)

さつきから俺の中で警鐘が鳴り続けている。目の前にいるアスタロトさんに対する変な警戒心が拭えない。何故？ こんなにも優しいような少年にこんな気持ち湧くのだろう。

「フューリー様。お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「何を？」

「僕は僕とアシアの出会いをお話させてもらいました。よろしければ、フューリー様と彼女の出会いも話して頂けませんか？」

俺とアシアの出会いと言えば……やっぱりあの変態共との事だよな。あんなプレイに巻き込まれてしまった彼女の事を考えると、あまり言い触らすべきじゃないとは思うが、彼に先に話させてしまった

以上、こちらでも話すのが筋だろう。

そういうわけで、俺は彼女とのいきさつを簡単にだが話した。全てを語り終えた時、アスタロトさんは俺に対して深々と頭を下げていた。

「ありがとうございます、フューリー様。アーシアを守ってくれて」
「いや、俺は当然の事をしただけで・・・」

「ですが、今のお話で確信しました。フューリー様。あなたの傍にいたる事はアーシアの為にはなりません」

・・・一瞬何を言われたのか理解出来なかった。呆けた俺に対し、アスタロトさんが続ける。

「あなたはアーシアが幸せになるまで傍で見守り続けるとおっしゃった。ですが、それは結局はアーシアをあなたの元に縛り続ける呪縛になるとは思わないのですか？」

「呪縛・・・？」

「アーシアはきつと、あなたに多大なる恩を感じているはずです。そして、その恩に報いるまではきつとあなたから離れようとはしないでしよう。それこそ、自分の幸せなど二の次にしてね」

そんな馬鹿な・・・と言いかけて口を噤む。アーシアの性格を考えると俺。周りがほんの少し手助けしたりするだけで深々と頭を下げる様な子だぞ。俺は俺の感情で変態共を叩きのめしたただけだ。だが、もし、アスタロトさんの言うようにアーシアが俺に対してそんな風に思っているのだとしたら。彼女の幸せを邪魔している最大の原因は・・・俺？

「あなたが本当にアーシアの幸せを願うならやるべき事はただ一つ。彼女を解放する事です。そして、僕なら彼女を幸せにしてあげられると確信しています。彼女の望む物は全て与えてあげます。そして何より、僕は彼女を愛している！」

無言を貫く俺に、アスタロトさんは勝ち誇った様な顔を見せる。この時、俺は初めて彼に対して不快な感情を抱いていた。そんな俺の気持ちなど露知らず、アスタロトさんのセリフは続く。

「二度アーシアと話をしてみてください。そして、それを踏まえた上

で答えを出せばいいと思います。僕の方は彼女を受け入れる準備は出来ていますから」

そう言い残し、アスタロトさんは振り返る事無く立ち去って行った。残された俺はしばらくその場から動く事は出来なかった。

——アーシアの幸せを望むのなら、彼女を解放しろ。

アスタロトさんの言葉が何度も何度も頭の中で繰り返される。結局、俺が家に戻ったのはそれから一時間後の事だった。

「お帰りなさ．．．ど、どうしたのリョーマ!？」

帰宅した俺を出迎えてくれたリアスが俺の顔を見るなり慌てふためいた。どうしたって．．．こっちが聞きたいんだが。

「何でも無いよ」

「何でも無いって顔じゃないわ。何か嫌な事でもあったの？」

「リョーマさんが帰って来たんですか？」

廊下の向こうからアーシアが顔を覗かせる。俺は咄嗟に顔を背けた。．．．らしくないのは承知している。だが、今は彼女の顔がまともに見れなかった。

「リアス。すまないが部屋に戻らせてもらう」

「え？ あ、リ、リョーマ？」

答えを聞かず、俺は自室へと戻った。ホント．．．らしくないな。

．．．
．．．
．．．

それから数日後、アスタロトさんからのプレゼント攻撃は未だ続いている。それに我慢出来なくなったのはリアスだった。

「もう限界よ！．．．これだけはしたくなかったけれど、お兄様に事情を説明して止めさせるわ！」

そう言つてリアスがサーゼクスさんに連絡してさらに数日。返つて来た答えに俺達は目を丸くした。

「事情はわかった。．．．どうだろう。ここはレーティングゲームで決着をつけてみては？」

バトルで解決つて。どこの少年誌ですか!？」

ドヤ顔で訪ねて来たサーゼクスさんを前に、俺は心の中で盛大に
つつこむのだった。

第七十六話 幸せの形

「・・・どういう意味ですか?」

用意したお茶を一口、サーゼクスさんは俺の質問に答えた。

「言葉通りの意味だよ神崎君。キミとディオドラ君でレーティングゲームを行い、勝った方の主張を受け入れる。実に単純明快な方法だと思わないかい?」

「待つてくださいいお兄様! それはずまりアーシアを懸けて勝負させるといふ事ですか!? だとしたら私は認めません! この子の人生を何だと思っているんですか! 私はそんな答えが聞きたくてお兄様に相談したんじゃないやありません!」

サーゼクスさんの答えを聞いたリアスがソファから立ち上がり声を荒げる。それを聞いたサーゼクスさんは困った様な表情を浮かべた。

「あはは。グレイファイアにも同じような事を言われたよ。あの時のアップパーは痛かったなあ・・・」

おどけた口調でそう言うサーゼクスさんだったが、その表情がふいに引き締まった。

「誤解させてしまっているようだが、いくらなんでもそんな事で彼女の今後を決めさせるつもりは無いよ。神崎君が勝てばアーシアさんへのアプローチを止めさせる。ディオドラ君が勝てば今後もアプローチを続けさせるといふ事でどうだろう。悪魔というのは元々欲望が深い。口で言った所で納得出来ない事つてのは多いのさ。ましてや、個人の恋愛に魔王が口を出すべきじゃない。それはリーアだってわかっていいるだろう?」

「それは・・・」

「ディオドラ君にこの話を持ちかけたら二つ返事でOKをもらったよ。自分がいかに頼れる男かどうか、アーシアさんに証明するんだそうだ。・・・神崎君、キミはどうだい? 僕の案を呑んでくれるのかな?」

「・・・」

「リョーマ……」

「ご主人様……」

「……少し、考えさせてください」

あまりに突然の事で頭が追いついていない。何より、先日のアスタロトさんとの会話の答えを俺はまだ出せていない。こんな状態で返事をするわけにはいかない。てか、何で俺がレーティングゲームをせにやなんのですか。こちとら眷属ゼロのボツチですよ？

「わかった。また返事を聞きに来るよ。その時までには答えを出しておいてくれ」

そう言つてサーゼクスさんは帰つて行つた。具体的な期日は言われなかったが、あの様子じゃきつとすぐに聞きに来るんだろうな。

だが、事態は俺の意思など関係無く進んでいた。数日後、サーゼクスさんでは無くセラフォルーさんが家に来た。そして、彼女の持参した雑誌の表紙に大きく書かれたそれを見て、俺は己が目を疑つた。

——フューリーVSアスタロト 聖女を巡りレーティングゲームで激突！

「な、何よこれ……！」

リアス達も信じられないといった様子でそれに目を落としている。戸惑いを隠せない俺達にセラフォルーさんの説明が入る。

「この雑誌、冥界でも有名なゴシップ雑誌なんだけどね、なんでも匿名のタレコミがあつたそうだよ。その内容がやけに具体的だったから事実関係も確認せずに載せちゃつたんだって」

いやそれダメだろ！ 素人の俺でもわかるわ！ つーかタレコミ!? どの誰が!?

「この雑誌が発行されたのは一昨日。だけど、異様とも思えるスピードでたつた二日で冥界中に広がつちやつてるの。それこそ、誰かの意思が介入しているかのよう。この雑誌、普段はあまり評価は良くないみたいなんだけど、もうたくさんの悪魔がフューリーさんがついに戦うんだって信じちやつてるみたい」

「……誰がこんな事を」

思案顔の塔城さんにリアスが当然だとばかりに答える。

「そんなのディオドラに決まってるわ。リヨーマが返事を先延ばしにしたから逃げられない様にしたのよ。まさか、こんな姑息な手を使って来るなんて・・・!」

「そのタレコミをした相手の正体はわかってるの?」

「ううん。どうやら完璧に証拠が残らない様にしてみたい。私も調べてみたけど有力な情報は得られなかったの」

「そんな・・・」

「ともかく、これでフューリーさんは勝負を受けざるを得なくなってしまう。これだけの悪魔があなたのレーティングゲームを見たがっている。もし、今さら中止にしてしまったら、その期待はそのまま不満へと変わってしまう。そうなれば最悪暴動になる恐れがあるから」

「ぼ、暴動・・・!?!」

「アーシアちゃん。悪魔っていうのはね、娯楽に飢えているの。その飢えを満たせるものを目の前でちらつかされた挙句没収されちゃったら・・・我慢なんて出来るわけないと思わない?」

「ご主人様、これ見て。ご主人様だけじゃない。アーシアの写真まで載ってるにや。これってあのパーティーの時のヤツだよ」

黒歌に倣って記事に目を通す。そこにはアスタロトさんとアーシアの関係までもが書かれていた。

「な、なんでこんな事まで・・・!?!」

教会を追放された所が書かれた部分でアーシアの顔が強張った。記事から感じられる得体の知れない恐怖が彼女を襲ったのだろう。

「怖がらせてゴメンね。でも黙っておくわけにもいかないから、こうして知らせに来たの。サーゼクスちゃんも落ち込んでたよ。自分が余計な事を言わなければって」

「いえ、よく知らせてくださいました、セラフオール様。今後については、これからしっかり話し合っていきたいと思えます」

「そっか・・・。うん、わかったよ。なら私はそろそろ戻るね。大丈夫! 色々言っちゃったけど、普通に考えてフューリーさんが負けるわけないもんね!」

「・・・」

「フューリーさん？」

「え？ あ、ああ、何ですか？」

「・・・何でも無い！ 応援してるからね！」

セラフオルーさんを玄関まで見送り、俺達はリビングへ戻った。だけど、誰も言葉を発せない。どうも声を出し難い雰囲気だったから。だけど、そうやって無言でいる間にも時は過ぎて行くし、腹も減る。夕食の準備や風呂の準備のため、気付けば俺達は解散していた。

そして、今日は何の担当でも無かった俺は自室へ籠った。ベッドに横になりながらセラフオルーさんが置いて行った雑誌を手に取る。

『なんや、久しぶりに様子を見に来たら、またえらい沈んどるやないか』

・・・オカン？

軽く懐かしさを感じてしまったその声に思わず起き上がる。間違いない、今のはオカンの声だ。

『アンタのそんな顔、初めて見るわ。なんか悩みでもあるんか？ それならウチに話してみ。ズバツと解決したるわ！』

・・・そうだな。それもいいかもな。こうして一人で抱え込むより、誰かに聞いてもらった方がスッキリするかもしれないし。

「実は・・・」

俺はオカンに全てを話した。アスタロトさんの指摘・・・俺がアジアを縛っているかもしれない。彼女の幸せを邪魔しているのは俺なのかもしれない・・・と。

そうして俺が吐き出した悩みに対し、オカンは短くこう言った。

『はあ・・・アンタ、アホやな』

いや、アホで・・・。確かにそうかもしれないけどもう少し言い方というものが。

『あんなあ、あの子の幸せをアンタやそのアスタロトちゃんとかいう子が勝手に決めたらアカンやろ。何が幸せで何が不幸せか。それを決めるのはあの子自身やないの』

アーシア・・・自身？

『せや。人の幸せなんてそれこそ人それぞれやろ。お金をたくさん持つ事が幸せという子もおれば、好きな人と一緒に過ごせるだけで幸せだと感じる子もおる。あの子には、あの子なりの“幸せの形”があるはずや。それを知りもせんと、勝手に幸せだ不幸せだなんて語るもんやないで』

・・・あまりにも的を射過ぎた言葉に思わず目から鱗が落ちる気分になった。言われてみればそうだ。俺の思う幸せとアーシアの思う幸せは違う。なんで・・・なんでこんな単純な事に気付かなかつたんだろう。

『・・・どうやら、気付いたみたいやな。なら、アンタがやるべき事は一つや。あの子の“幸せの形”、それをしっかりと聞いて来るんや』

ええ!? いや、それはちよつと、心の準備が・・・。

『ええから行き! キメる時はキツチリキメるのがアンタやろ!』
はいい!

俺は弾かれるように部屋を飛び出した。目指すはアーシアの部屋だ。

扉の前に立ち、ノックをする。やべえ、緊張して来た。

数秒も経たずに扉が開き、アーシアが顔を見せる。彼女も俺が来た事に驚いたのかちよつと目を丸くしていた。

「リョーマさん。どうかしましたか?」

「ああ。少し話がしたい」

「そうですか。ではどうぞ中へ」

部屋にお邪魔し、ベッドに二人並んで腰をかける。その状態のままお互いに黙って顔を見合わせる。ええい、しっかりしろ俺!

「あの・・・お話というのは?」

「アーシア。正直に答えて欲しい。俺を気遣ったりする必要は無い。ただキミの思っている事をそのまま答えてくれればいい」

「な、なんででしょう?」

「キミは・・・キミの“幸せの形”を教えて欲しい」

「幸せの・・・形?」

「アーシア。俺はキミが幸せを手にするまでずっと傍で見守ると誓つ

ている。だが、この前アスタロトさんと話をした時に言われたんだ」
「そ、それってあの温泉の時の・・・！」

「え？」

「な、何でもありません！　そ、それでなんて言われたんですか？」

何故か少しだけ頬を赤くしたアーシアに困惑しつつ、俺は言葉を続けた。

「アーシアの幸せを邪魔しているのは俺自身だと。俺に対する恩こそが、キミを縛りつけているのだと。衝撃だったよ。何も考えられなくなるくらいにな」

「・・・」

「そして、本当にアーシアの幸せを願うなら、キミを解放するべきだと言われた。だからアーシア。聞かせてくれ。キミの本当の気持ちをもし、アスタロトさんの言う様に俺がキミを縛っているのだとしたら俺は・・・」

「えい！」

ぺちん！　とおよそ今の雰囲気に対応しく無い間抜けな音が室内に。音の発生源はアーシアからだった。彼女は右手を押さえながら涙目で俺を見つめていた。

「あうう。リヨーマさんのおでこ固すぎますよお・・・」

「アーシア・・・？」

「こ、コホン！　それよりもリヨーマさん！　私は怒ってますよ！」
「え？」

両手を腰に当てながら、私、怒ってます！　的なオーラを発するアーシア。ぶつちやけ全然怖くない。むしろ可愛い。

「確かに、リヨーマさんは私の恩人です。だけど、私があなたのお傍にいたいと思うのはそれだけじゃありません！」

「な、ならどうして・・・？」

「リヨーマさんと出会って、私の周りは変わりました。一人ぼっちだったはずの私が、部長さんを初めとするたくさんの人達に囲まれて笑いながら毎日を過ごしている。今の幸せも、今の日常も、あなたと出会わなければ得られなかったものです。あなたのお傍にいられた

から、私は幸せを手にする事が出来たんです」

「俺の傍にいたから・・・？　なら、俺はキミを・・・」

「そうです。リョーマさんは私の幸せを邪魔なんかしてません。あなたが私に幸せを与えてくれたんです。私の『幸せの形』は・・・あなたのお傍にいる事なんですから！」

「ツ・・・！」

愕然とする俺に対し、アーシアはムツとした顔を笑顔に変えて続けた。

「リョーマさんは難しく考え過ぎなんです。私も部長さんも黒歌さんも小猫ちゃんも、みんな同じ気持ちですよ。単純にあなたと一緒にいるのが好きなのです。リョーマさんはもう、私達の日常にとって無くてはならない人なんですから」

「アー・・・シア」

「な、何だか偉そうに語っちゃってすみません。わ、私、小猫ちゃんのお手伝いして来ますね！」

突然立ち上がり、逃げるように部屋を出て行くアーシア。主のいなくなった部屋で、俺はその場に縫いつけられた様に動けなかった。

『どうや？　聞いてみてよかったやろ？』

・・・ええ。本当に。アーシアの本心が聞けて本当に良かった。彼女の幸せな日常。そこには確かに俺も存在していた。

俺も同じだ。俺の日常に、最早彼女は無くてはならない存在だ。彼女だけじゃない。リアスも黒歌も塔城さんも。朱乃もゼノヴィアさんも、兵藤君も木場君もヴラディ君もアザゼル先生も。みんなみんな、俺の日常を彩ってくれる大切なピースだ。この中の誰か一人でも欠けてしまえば、俺の日常は色を失う。そして、それは決して代えが利かない。

「・・・覚悟を決めるか」

正直、今までは巻き込まれてばかりだった。だけど、今回は違う。俺だけの問題じゃない。アーシアの未来がかかっているんだ。

先生。アルⅡヴァン先生。こんなどうしようもない俺ですが、頑張ってみようと思います。戦いに対する不安はありまくりですが、彼

女を守るため、俺の全てをかけて戦ってみせます。

「さて、ならやるべき事は決まっているな」

俺はアーシアの部屋を出てリビングへ向かった。そして、電話の受話器を手にある人物へ連絡を入れた。

「・・・もしもし、アザゼル先生ですか？ 実はお願いしたい事が・・・」
アスタロトさん。あなたがアーシアを想う気持ちはとても大きいんだろう。だが、それでも、彼女の幸せの為、そして俺の日常を守るため、負けるわけにはいかない！

S I D E O U T

リアスS I D E

リヨーマが帰って来ない。時刻は既に午後十一時を回っている。彼は学校から帰って来るなり出て行ってしまった。夕食時にも帰って来なかったので心配になって連絡したら、荒い息遣いで自分の事は気にしないでくれと返事が返って来た。むしろより心配になったのだけれど、それからは連絡がつかなかったのでどうしようもなかった。

部屋でリヨーマの帰りを待っていると、ふいに玄関が開く音が聞こえて来た。きつと彼が帰って来たのだ。こんなに心配かけて、恨みごとの一つでも言つてやろうと部屋を出ようとすると、足音がこちらに近づいて来た。

「リアス・・・いるか？」

「ええ。入っていいわよ」

ドアが開き、リヨーマが姿を現す。そして、私は彼に対して口を開こうとして・・・固まった。

リヨーマは全身汗だくだった。着ているジャージは所々破けているし、顔や手足も汚れている。明らかにタダ事じゃなかった。

「ちよ、ちよっと！ どうしたのリヨーマ!? その姿!？」

「え？ ああ、これか。気にしないでくれ。走り込みをし過ぎて汚れただけだ」

「走り込みって・・・まさかこの時間まで?？」

学校から帰ったのが五時前。という事は・・・約六時間!?

「いや、流石にそこまでは」

「そ、そうよね。いくらなんでもそんな・・・」

「走りこみだけじゃ意味無いからな。アザゼル先生に頼んで修練の場所を用意してもらってそこでひたすら素振りや技の型の反復練習などをやっていた」

「え?・・・え!?!」

待つて待つて。という事はつまり、今までの時間の全てをトレーニングに費やしていたって事!?! 間違い無くディオドラとの勝負に向けてのものでしようけど、いくらなんでも気合い入れ過ぎじゃない!?! 「ね、ねえリヨーマ。とりあえず色々聞きたいんだけど、まずはお風呂にでも入ってゆつくり・・・」

「リアス・・・キミに頼みがあるんだ。俺に・・・俺にレーティングゲームについて教えて欲しい」

深々と頭を下げるリヨーマを見て私は思った。

(「ディオドラ・・・。あなた、起こしちやいけないものを起こしてしまつたのね))

ここ数日の件ですっかり評価を下げた相手に対し、私は憐れみに似た感情を向けるのだった。

第七十七話 自らの意思で

どうも、みなさん。イツセーこと兵藤一誠です。突然ですが、僕の話聞いてください。

既になんさんご存知でしょうが、僕には尊敬する一人の先輩がいます。その先輩の様子が最近エライ事になってるんです。

闘気：・オーラと言った方がいいですかね？ 漫画とかで見る、見えないけど感じ取れるアレです。そのオーラを、先輩が全身に纏ってるんです。もうね、最初に見た時はただただビックリしましたよ。これからラスボスとの決戦にでも赴くんですか!?! って本気で聞きそうになるくらいに。

だけど、そんな物騒な雰囲気とは裏腹に、先輩の顔は妙に晴れ晴れとしているんです。それこそ、何かを決意した「漢」の顔でした。ただでさえイケメンだったのに、そんな風になっちゃったからウチの学園の女子達が騒ぎまくって大変なんですよ。つーか、僕と先輩が最近仲が良いからって、普段嫌っている僕に先輩に何があったのか聞いて来るとか止めて欲しいですよ。まったく、こういう時だけ頼るなっつーの！

「・・・さつきから何を言っているんだい、イツセー君?」

オカルト部の部室、俺の対面に座る木場の声が俺の意識を呼び戻した。

「気にするな。今の俺の気持ちを見なさんに伝えたかっただけだ」

「今、この部室には僕とイツセー君だけ。キミの言うみなさんなんて人はどこにもいないんだけれど」

「いいんだよ。わかる人にはわかるんだから」

「僕はキミが何を言っているのかさっぱりわからないけどね」

何だよ。お前だって前に似たような事を言ってた癖に。・・・まあいい。俺だってこんな事をグダグダ続けるつもりは無い。今重要なのは神崎先輩の事だ。

「でもさ・・・確かにキミの言う通り、先輩には驚かされてばかりだよ。この前のアレ・・・僕は未だに信じられないよ」

ああ、アレな……。俺だつて忘れられねえよ。あの日、部室に集められた俺達に向かつて、深々と頭を下げた先輩を。

『俺はもう迷わない。アーシアの為、みんなの力を貸して欲しい』

何者かの所為で、先輩とディオドラがアーシアを懸けてレーティングゲームをする事は知っていたが、正直先輩が何に悩んでいたのかはさっぱりだった。でも、あの先輩が俺達に頭を下げたんだ。…。何より、ついこの間不甲斐無い姿を見せてしまった俺達を頼ってくれた事が嬉しかった。

俺達の答えは決まっていた。先輩からしたら取るに足らない存在の俺達だけど、それぞれの精一杯で先輩を支えようって。

部長はレーティングゲームについて色々教える。木場やゼノヴィアは先輩の特訓の相手。朱乃さんは特訓を行う先輩への差し入れ。ギヤスパーは神器を使って何やらやっているらしい。小猫ちゃんとお姉さん、そしてアーシアは家での先輩のケア。みんな自分が一番役に立てる事で先輩の力になろうとしていた。

アザゼル先生は……。どうなんだろう。なんか「胃が……。胃が……。とかブツブツ言ってたけど。」

俺？ 俺は……。どうしよう。俺の神器じゃ長時間の特訓には付き合えないし。……。朱乃さんみたいに差し入れとかしてみようかな。母さんに疲れた時に効く食べ物とか聞いてみるか。それと、俺の秘蔵のお宝本……。は止めとこう。見せた瞬間真つ二つにされそうだし。

「今の先輩を剣で例えるなら……。日本刀だろうね。斬るという目的の為に、極限まで研ぎ澄まされた刃。最も、先輩の目的は相手を斬るんじゃない、アーシアさんを守る事なんだろうけど」

ああ、何となくコイツの言わんとしている事が理解出来る。今の先輩って何となく近づき難いんだよな。松田と元浜ですら、今の先輩に感じるものがあるみたいだし。もちろん、話しかければ応えてくれるし、困っていたら助けてくれる所は変わって無いけど。

「今回のゲーム。先輩は並々ならぬ思いを抱いて臨むみたいだ。明らかにこれまでの先輩とは様子が違う」

「何言ってるんだ、木場。そんなの当たり前じゃないか」

「え？」

「アーシアは天使。・・・これ以上言葉があるかい？」

「・・・ゴメン。確かに愚問だったね」

「そういや、木場。話は変わるけど、お前一昨日に先輩の特訓に付き合っただら。どうだったんだよ？」

「・・・聞きたいかい？」

おい、何だよそのおどろおどろしい声は？ 聞いたらマズかったのか？

「確かに、僕は先輩の特訓の手伝いをさせてもらったよ。だけどね、その結果、僕は先輩の恐ろしさに改めて気付かされた」

「ど、どういう意味だよ？」

「最初はね、お互いの剣を軽く合わせる程度だったんだ。それでわかったんだけど、先輩の剣は凄く綺麗だった。いや、綺麗過ぎだった。まるで、ロボットが剣の型を繰り返している様に、何度やっても同じ角度、同じ速度で剣を振っていた」

「それって何か問題があるのか？」

「型通りに技を繰り出すのは悪い事じゃないよ。だけど、変化もつけず、ただ同じ事を繰り返していたらいつか必ず対処法を見つけられる。そうなれば、もういくら攻撃しても通じない」

なるほど。確かに、ワンパターンだとすぐに見切られたりするんだよな。俺がそうだし。

「だからね、開始十分くらいまでは何とか先輩の攻撃を防げていたんだ。だけど、それを過ぎてから先輩の剣が変わったんだ。今まで通りの剣かと思えば、突然乱雑な一撃を叩きつけてきたり、かと思えば今まで以上に正確無比な一閃を放ってきたり。素人と達人、両方の相手をしている気分だったよ」

「ほうほう。それで？」

「三十分を過ぎた頃だったかな。その時にはもう、先輩の剣は完全に別物と化していたよ。重さも鋭さも正確さも速さも、全てにおいて開始前を上回っていた。何となくだけど、僕の剣を参考にした動きもいくつもあった。あの短時間でそれを身につけたのか、それとも本来の

力を出しただけなのかは判断はつかないけど、よくよく考えたら、先輩ほどの人が素人丸出しな剣を振るうわけ無い。アレは僕を油断させるためにわざとやっていたのかもしれない。おかげで最後の方は避けるだけで精いっぱいだったよ。．．．あれでも手加減してたみたいだけどね」

や、やつぱり先輩ってすげえな。手加減した上で木場を簡単に追い込むとか。

「その後は休憩を入れて実践形式で手合わせを行っただけど．．．」
あ、また何かあったんだな。木場の見せる表情から俺は何となく察した。

「．．．『魔剣創造』で生み出した剣の海をもともせず突っ込んで来られた時は、正直泣きそうになったよ。僕の中の何かが粉々になっちゃった気がしてね」

そ、そうか。うん、ドンマイ、木場。最近．．．というか、だいぶ前から思ってるけど、先輩に俺達の常識を当てはめたら駄目だと思うんだ。

「極めつけは特訓が終わった後の先輩がボソツと呟いたセリフだよ。
「まだだ．．．まだ足りない．．．」だってさ。はは．．．もうね、笑うしかないよね」

「もういい！ もういいよ木場！ お前は頑張った！ 俺はお前を尊敬するよ！」

「イツセー君．．．」

木場でこれかよ．．．！ って、あれ。ちよつと待てよ。確か今日はゼノヴィアの番だった様な．．．。

「ゼノヴィアのヤツ。この機会に先輩の技を盗んでやるとか言ってたけど．．．」

「ああ、無理だよ。そんな事考える余裕なんてすぐに無くなるから」
て事は、お前も盗もうとしたんだな。つーか怖いから目のハイライト消すの止めれ。ヤンデレじゃあるまいし。

「そ、それにしても部長遅いなく！ どこに行っただらもうなく！」
何とか木場を元に戻そうと、いきなり話を変えてみる。すると、木

場の目に光が戻った。

「部長なら神崎先輩と一緒に生徒会室に行つたよ」

「生徒会室？ 何で？」

「特訓は夜だからね。その前に会長にレーティングゲームについて教えてもらえるよう頼みに行つたみたいだよ」

部長だけじゃなく、会長にもか……。もうさ、ここまで徹底すると勝負は決まった様なもんじゃないのか。

「なあ、木場。ぶっちゃけ、これほどまでに気合い入りまくりの先輩が負けると思うか？」

「・・・勝率八十パーセントの勝負に負けた僕達が言っても説得力が無いだろうけど、あえて言わせてもらおうよ。・・・そんな未来、絶対にありえない」

「だよなあ・・・」

ディオドラ・アスタロト……。とりあえず、無事でいられるようには祈っておいてやるよ。

イツセイSIDE OUT

ソーナSIDE

生徒会のメンバー。そしてリアス達が固唾を呑んで見守る中、私と神崎君の勝負に決着がつかうとしていた。

「・・・これでチェックメイトだ」

私の『王』が神崎君の手に取られる。こうして迎えた結末が信じられなくて、私はそれを呆然と眺めていた。

「か、会長が・・・負けた」

サジが声を震わせながら愕然としている。それは他のメンバーも同じだった。リアスも目を大きく見開いている。そんな周囲を尻目に、神崎君だけが微笑む。

「はは。何とか最後は勝てたか。五戦やって一勝四敗。やっぱり支取さんは強いな」

最終的な結果は私の勝ち越し。だけど、そんなものはどうだっていい。四勝一敗……。そう、私は最後の最後に負けてしまった。

数日前に、お姉様から神崎君とディオドラ・アスタロトがレーティングゲームを行う事は聞いていた。だから、レーティングゲームについて教えて欲しいとやって来た彼に、今現在の戦術眼の確認、そしてそれを鍛える為の軽いトレーニングのつもりで、私は彼にチェスでの勝負を持ちかけた。

チェスの経験を聞くと、彼はこう答えた。「経験は無いが、こういった駒を動かすシミュレーションならやった事がある」と。

ルールを簡単に説明し、いざ勝負してみれば、なるほど、確かに初心者にしては中々な腕だった。だけど、手加減しているとはいえ、経験者として簡単に負けるつもりは無かった。

そして、気付けば四連勝を達成していた。時間的に次が最後のゲームになるだろう。そう思った私は、ほんの軽い気持ちで彼にこう言った。

「次のゲーム。私の『王』をディオドラ・アスタロトだと思ってやってみてください」

そう冗談めかして告げた瞬間、彼の様子が一変した。穏やかだった表情は一瞬で引き締まり、私を見つめるその目が鋭さを増した。

「せ、先輩、何だか雰囲気が……」

「しっ……!」

「はああ……やっぱりカッコいいなあ」

眷属達のヒソヒソ声が聞こえる。この子達も神崎君の雰囲気の変化に気付いたのだろう。……一部、あまり関係の無い声も聞こえた気がしたが、流しておく事にした。

「では、神崎君からお先にどうぞ」

先行を彼に譲り、最後の勝負が幕を開けた。そして、私がそれに気付いたのはゲームが中頃まで進んだ時だった。

(……押されている?)

ほんの僅か、まだいくらでも挽回出来るチャンスはある。けどこの時、私はこの五戦の中で初めて彼にリードを許していた。

「くっ……」

「……」

勝負の時は流れ、逆転可能だったはずの差は、気付けば完全に不可能な所まで開いていた。このゲームも手加減はしていた。けれど、油断だけはしていないつもりだった。なのに、神崎君の『騎士』は既に私の『王』を射程圏内に捉えていた。

私は理解した。神崎君の吸収力、そして応用力は異常だ。一しか与えられなかった情報を、自分の中であつという間に十にしてしまう。私はこのゲーム、四戦目までの手のパターンを組み合わせた攻めを行ったが、彼はそれに気付いたのだろう。複雑なパターンを頭の中で整理し、私が次に何をするのかを予測し、最適な行動に移る。その結果が今の盤上に現れていた。

そして、彼は最後の言葉を口にする。

「・・・これでチェックメイトだ」

私の脳裏に、神崎君に剣を突き付けられるディオドラ・アスタロトの姿が浮かび上がった。こうして、私は負けたのだった。

「ま、まさか、ソーナに勝つなんて・・・」

「俺も何で勝てたのかわからない・・・」

自分でも信じられないのか、神崎君がそんな言葉を口にする。四戦目までと最後の違い。それは、彼が私の『王』を倒すべき敵と判断したから。

神崎君の行動理念がわかった。彼は自分じゃなく、他人の為に力を発揮する人だ。リアスの時も、コカビエルの時も、彼は自分じゃない誰かの為に戦った。誰かを思うその心が、彼の力を極限にまで引き出すのだろう。

「・・・なるほど。勝てないわけです」

「支取さん、何か言ったか？」

「いえ、何でもありませんよ。とりあえず、簡単にはありましたが、現在のあなたの能力についてわかりました。次はより実践的なアドバイスをさせてもらおうと思います」

「そうか。ありがとう。キミやリアスに教えてもらえると本当に心強いよ」

「あ、あの、神崎先輩！」

突然、憐那が声をあげた。何事かと神崎君が目を彼女に向ける。

「草下さん、何か？」

「私も何かお手伝い出来る事はありませんか？ アーシアさんの為に一生懸命な先輩に、私も何かしてあげたいんです」

「わ、私もお手伝いします！」

「私も・・・！」

気付けば、全員が神崎君へ協力を申し出ていた。だけど、気持ちはわかる。どうも今の彼を見ていると、助けてあげたくなくなってしまふ。私自身、どうしてこんな気持ちになっているのかはわからないけれど、それだけは確かに感じていた。

「俺もツス先輩！ 俺を認めてくれたあなたを、今度は俺が応援します！ いや、させてください！」

「みんな・・・」

「神崎君、この子達で良ければ、手伝わせてあげてください」

「だが・・・」

「遠慮は無用です。何故なら、私達は生徒会。そして生徒会の役目は、困っている生徒の力になる事ですから。・・・何より、大切な友人の為に何かしてあげたいと思うのは当然でしょう？」

「・・・ありがとう」

この時彼が見せた笑顔は、悪魔である私達でさえ見惚れてしまうほどの輝きに満ち溢れていたのだった。

・・・余談だが、後日彼の特訓に付き合ったらしいメンバーが翌日全員休んでしまい、生徒会の仕事が滞ってしまった。この責任はいずれ神崎君にとってもらうとしよう。

第七十八話 新たな絆

みんなに支えてもらいながら、アスタロトさんとのレーティングゲームに向けて自分を鍛える日々が続いた。その最中、サーゼクスさんが再び俺を訪ねて来た。

今回は俺の家ではなく、オカルト部の部室を話の場に設けた。リアス達に支取さん、そしてアーシアと黒歌も揃ってサーゼクスさんを迎える事となった。

「・・・なんて覇気だ。一体この数日でキミに何があつたのか是非とも聞かせてもらいたいものだね」

感心したかのようにそう言うサーゼクスさんだが、俺は特別な事など何一つしていない。俺の都合に巻きこんでしまったにも拘らず、それでも快く協力してくれたみんなに助けってもらって、今の自分を変えたかっただけなのだから。そして、俺はまだ自分自身に対して納得していない。

リアスや支取さんのおかげでレーティングゲームについての心構えや知識は僅かだが理解出来た。アザゼル先生のおかげで鍛えるのに十分な場所を得られた。木場君やゼノヴィアさん、真羅さん達のおかげで剣の振り方も多少はマシになった。朱乃や兵藤君の差し入れにヴラディ君の応援、さらに家での黒歌達のマッサージ等のケアのおかげで、一度も挫ける事無く鍛え続ける事が出来た。

それでも足りない。今まで頼ってばかりで素人丸出しの俺がこの程度で満足していいわけが無い。そんなの、俺の為に時間を割いてくれたみんなの優しさを裏切る事にしかならない。

「俺はただ、自分に足りなかったものを得ただけです。・・・ですが、まだ足りません。俺はもつと力をつけなくてはいけない」

(・・・アレで足りないと言うのねあなたは)

(神崎君、あなたはどこへ向かおうとしているんですか・・・)

(ストイックなんてチャチなもんじゃねえ。この人の中の強さの基準ってどうなってんだ・・・)

リアス達もそれがわかってているのか、俺に向かって無言の視線を

送っている。はあ、彼女達に認められるまでまだ先は長そうだ。

「なるほど……。着実に準備を進めているようだね。やる気を持ってくれるのは嬉しいよ。キミからすれば、ほぼ強制的に決められた様なものなのよね」

「その件に関してはサーゼクスさんが気にする事なんて無いですよ」

むしろ、この人は俺に考える時間を与えようとしてくれた。それを別の誰かが台無しにしてくれた。それだけだ。

「覚悟は決めました。後はもう駆け抜けるだけです」

自ら戦いの場へ上る事に恐れはある。不安だって拭いきれない。それでも、支えてくれる人達がいる限り、俺はもう迷いはしない。

「ただ駆け抜けるだけ……。か。いい言葉だ。……。メモしておこう」「え？」

「何でも無いよ。キミの想いは十分に伝わって来た。だけど、それに水を差すようですまないが、今回は本当の戦いでは無い。あくまでもゲームだ。当然ルールだってある。はそれはわかって欲しい」

「ルール……。ですか？」

「その説明の前に、神崎君。キミには今眷属はいるのかい？」

「いえ。悪魔の駒を貰ってから今まで、ゼロです」

「なら、ゲームまでに必ず一人は眷属を見つけておいてくれ。でなければ……。キミは確実に負ける」

負ける……。サーゼクスさんのその言葉にみんながざわめく。

「ど、どういう意味ですか、お兄様？」

「落ちついてくれ、リアス。サーゼクスさん。それは眷属の有無が関わるルールがあるという事ですか？」

「……。少しは慌てるかと思っただけど、流石だね。その通りだ。今回のゲームにおいて、キミには三つの枷をつけさせてもらう」

一つ……。俺自身が相手を出来るのは三人まで。四人目を戦闘不能に追い込んだ時点で俺の負けになる。

二つ……。ラフトクランズモードの使用禁止。

三つ……。回復魔法（精神コマンド）の使用は五回まで。

……。なるほど、眷属がいなければ負けるというのはそういう事か。

手を出せば負け。手を出さなくてもこちらに対抗手段が無いのだから結局は負け。中々に厳しいルールだな。

「な、何だよそれ！ 何でそんな先輩ばかり不利なルールに……！」
「これは厳正に話し合った結果だよ。ハッキリ言って、無条件で戦えばディオドラ君の負けは目に見えている。彼にも勝つチャンスを与えなければフェアじゃないからね」

「そ、それはそうかもしれないですけど……」

「だから神崎君。キミはゲームまでに眷属を見つけないければいけない。……だけど、眷属というのは本来、お互いに心からの信頼を結んだ上で関係を持つものだ。今回の様に時間の限られた中で慌てて探す様なものじゃない」

「では、どうすれば？」

「『悪魔の駒』は持って来ているね？」

「はい」

事前に『悪魔の駒』を全部持つてくるよう言われていたので、俺は全ての駒が収められた箱をサーゼクスさんに手渡した。

「この術式で……」

サーゼクスさんが何やら唱えると、箱が紫色の淡い光に包まれた。その光が治まった所で、箱が俺に返された。

「今のはアジユカ……現ベルゼブから教えてもらった術式でね。これでこの『悪魔の駒』は、一度だけだが、使用せずとも所持するだけで眷属とみなされるようになった」

つまり、一回だけの仮契約みたいなものか。確かにこれなら今度のゲームが終われば眷属じゃなくなるから問題無いな。

「今回のルールに対するキミへのお詫びだよ。こんなもので納得してもらえとは思っていないけどね」

「いえ、十分です。ありがとうございます、サーゼクスさん」

「どういたしまして。ところで、今から私は十秒だけ魔王からサーゼクスに戻らせてもらう」

「はいっ。」

「……応援してるよ神崎君。僕はキミに勝って欲しい」

ツ……。そうか。今のを俺に伝えたかったから十秒だけという事か……。

「さて、私はこれで失礼するよ。ゲームに向けて色々忙しくなりそうだからね」

魔法陣に消えて行くサーゼクスさんを見送り。俺達も解散する事になった。

……
……
……

夜。俺は自室で『悪魔の駒』とにらめっこをしていた。

「……眷属か」

貰った以上、いつかは使う事になるかもしれないとは思っていたけど、まさかここで迫られるとはな。

レイヴェルさん……は無理か。あれはただの俺の妄想だしな。そもそも連絡手段が無い。

となると……やはり「彼女」しかないか。きっと彼女ならアシアの為にも手を貸してくれるはずだ。もし駄目だったら……いや、考えるのは止めておこう。まずは話をしなければ。

そう決めて部屋を出ようとした時、ふいに扉がノックされ、たった今会いに行こうとしていた「彼女」の声が聞こえた。

「ご主人様……ちよつといい？」

「ああ、どうぞ」

ドアを開ける。彼女……黒歌は真つ直ぐに俺を見つめながら部屋に入ってきた。ひよつとしたら、彼女も俺と同じ事を考えているのかもしれない。そんな淡い期待が頭を過った。

「ご主人様……お願いします。私を眷属にしてください！」

「ツ……！」

「ご主人様にとって、アシアはとっても大切な存在なんだよね。ちよつと嫉妬しちゃうな。でもね……それ以上にご主人様の気持ちがわかるの。私にとってもあの子は大切だから。アシアは……この家の大切な家族だから！ ご主人様がいて、私がいて、リアスがい

て、アーシアがいて、白音がいるこの家は私の大切な場所だから！

私はそれを守りたい！ だって・・・私はみんなが大好きだから！」

「黒歌・・・」

「だからお願いします！ 私を眷属にしてください！ 足手纏いにだけは絶対にならないから！ 私にもあの子を・・・アーシアを守らせてください！」

土下座しそうな勢いで頭を下げる黒歌。それを見た俺は込み上げて来る笑いを押さえる事が出来なかった。

「は、ははは・・・！」

「ご、ご主人様？」

いきなり笑いだした俺に不安を感じたのか、黒歌の表情が強張る。いかんいかん。ちゃんと説明しないと。

「いや、すまない。今から頼みに行こうとしたのに先に言われてしまったてついおかしくなってしまった」

「頼みに・・・。え、そ、それじゃあ・・・！」

目を見開く黒歌に、俺は改めてお願いする事にした。

「黒歌。どうか俺の眷属になって欲しい。アーシアを守る為、キミの力を貸してくれ」

「・・・はいー」

差し出した手を、黒歌は満面の笑みを浮かべながら取ってくれた。

こうして、俺は黒歌という眷属・・・いや、仲間を得る事が出来た。

今日はもう遅い。明日もう一度部屋に集まってもらって、そこで発表する事にしよう。

・・・
・・・
・・・

翌日の放課後、俺はサーゼクスさんを除いた昨日と同じメンバーに集まってもらい、黒歌を眷属にした事を伝えた。

「まあ、妥当な所ね」

「これで一人目。出来ればもう二、三人いれば戦術も練りやすいんですけど」

支取さんの言う事は最もだが、もう候補となるような相手は・・・。
「そういえば、アザゼル先生は？　こういう時は先生に頼めば何とかしてくれると思うんだけど」

「おい、イツセー。俺をどこぞの眼鏡にこき使われる青いヤツみたい
に言うな」

噂をすればアザゼル先生のご登場。・・・なんかちよつとゲツソリ
してるけど、お腹でも壊してるんだろうか。後で『信頼』でもかけて
おいてあげよう。

「先生、どこ行つてたんですか？」

「フューリー。人手が欲しいんだろ？　おあつらえ向きなヤツ等を連
れて来てやったぜ」

「え？」

「入れ」

「失礼します」

思いがけない人物達の登場に目を丸くする。声を揃えて部室へ
入つて来たのは、レイナーレさん、カラワーナさん、ミッテルトさん
だった。

「みなさん、どうして・・・」

「今回の事情を説明したら面白いくらいに反応してな。そのやる気を
買って連れて来た」

「神崎様。私達でお力になれるのであれば、存分に使ってくださいま
せ」

恭しく頭を下げる三人に反応出来ずにいると、リアスがアザゼル先
生に尋ねた。

「先生、正直彼女達に戦力的な期待は出来ないんだけど」

「そりや以前のコイツ等の事だろ？　今は違うぜ。俺の助手に弱いヤ
ツ等がいても困るからな。俺自ら鍛えてやった。階級的には今も下
だが、実力だけ言えば中級は軽く超えている」

「なっ・・・！」

「それにな、コイツ等にはとっておきを渡してある。レイナーレ、見せ
てやれ」

「はい」

返事と共にレイナーレさんが右手をかざす。他の二人もそれに倣う。次の瞬間、眩い光が彼女達の右手を覆った。そして、それが治まった時、レイナーレさんは巨大なライフルを握り、カラワーナさんは鋭い槍を構え、ミッテルトさんの右手がごつい手甲に包まれていた。

そして、その全てに見覚えがある俺は、驚きのあまり目を見開いた。だって、彼女達の武器・・・どう見てもスパロボJの各主人公機の持つ武器じゃないですか！

「せ、先生・・・。これは・・・！」

「冥界でお前から話を聞いて作りたくなつてな。手始めにコイツ等専用の人工神器として作ってみた。一応、お前から聞いた情報通りに設計してみたぜ」

あんな話だけで実際に作るとか技術チートもいいところじゃないですか・・・。

「まあ、コレについて詳しく説明する前に、とりあえずコイツ等の話を聞いてやれ」

アザゼル先生に言われるがまま、とりあえず彼女達の話聞いてみる事にした。

「神崎様。もしも私達を末席に加えて頂けるのであれば、あなた様への恩。そして・・・彼女への贖罪の為、命を懸けて役目を務めさせて頂きます」

そう言つてレイナーレさんが見つめる先にはアシアがいた。視線が合った彼女はおそおそといった様子で口を開いた。

「レイナーレ様・・・」

「様なんてつけないでアシア。私達があなたにしてしまった事は決して許される事じゃないわ」

「贖罪って言ったって、結局は自己満足に過ぎないのかもしれないです」

「だが、それでも私達の力がほんの僅かでも助けとなるのであるならば・・・この身を捧げる事に躊躇いなどあるはずが無い」

「これが私達の気持ち。神崎様に救って頂いて、自分達の愚かさに気付けた私達の本当の気持ちよ」

言葉の節々に込められた心からの想い。それはアーシアの目に涙を浮かべさせるには十分だった。

「・・・嬉しいです。とつても、とつても心強いです・・・！」

「アーシア・・・ありがとう」

・・・いかん。俺の涙腺も潤んで来やがった。特殊プレイを望んだ者と、それに巻き込まれた者の和解がこんなにも感動的だなんて：。
「よっし、話は決まったな。それじゃ改めてコイツ等の神器について説明を・・・」

その時だった。慌ただしい足音が部室の方へ近づいて来た。全員が何事かと扉に目を向けたと同時に、足音が部室の前でピタリと止まった。

「見つけましたわオカルト部！ここにフューリー様がいらっしやるのね！」

「もー！待ってよカテレアちゃん！」

「・・・おい。この声まさか・・・」

アザゼル先生がそう言いかけた刹那、扉が大きく開かれ、その先には二人の女性が立っていた。一人はセラフオールさん。そしてもう一人は・・・。

「フューリー様！水臭いですわ！どうして私に声をかけてくださらなかったのですか!? ですが、私が来たからにはご安心ください！フューリー様の偉大さを理解していないアスタロト家の小僧なんか、私が（自主規制）してさしあげますわ！」

大声で物騒な事を口走るカテレアさんだった・・・。

S I D E O U T

カテレアがオカルト部に突入しているのと時を同じくして、冥界の某屋敷の一室ではたった今情事を終えた男が服を整えていた。

「はあ・・・はあ・・・」

男の足下には艶めかしく息を荒げる裸の少女が横たわっていた。

その数は一人では無い。

「・・・随分とお楽しみのようなようだったな。廊下まで声が聞こえて来たぞ」
部屋の扉が開き、新たな男が入室して来た。元々居た方の男がそれを一瞥しながら口を開く。

「盗み聞きとは良い趣味をしているね」

「ふん、こんな時間から盛っているお前こそ大したものだ」

軽口の応酬を済ませ、男達は本題へと移った。

「フューリーは勝負を受けるそうだな」

「そうだね。最も、受けざるを得なくなっただけみたいだけど。ゴシップってのは怖いよね。何を書かれるのかわかったものじゃない」
「・・・まあいい。これでヤツは戦場に立たざるを得なくなった。後は計画通りに進めるだけだ」

「そっちは任せるよ。僕にはもっと大切な目的があるからね。もう少しで『彼女』が手に入るんだ。今からどうしてあげようか悩んじゃうよ。ああ、彼女の中はどんな味なのかなあ・・・」

「あまり調子に乗るなよ。策があるとはいえ、相手は伝説の騎士だぞ」
「むしろ調子に乗っているのは向こうだろうさ。どうせこちらの事なんて気にも留めず、普段通りの生活を送ってるに決まってる。はは、その余裕面が一瞬にして崩れ去る瞬間を想像しただけで笑いが抑え切れないよ」

「・・・」

「それに、こっちには切り札が二つもあるんだ。そっちの状況はどうなんだい?」

「案ずるな。既に『皇帝機』の最終調整は完了している」

「それならいいんだ。ふふ、世界最強から与えられた『力』に『皇帝機』・・・この二つがあればフューリーだろうが敵では無い。騎士は皇帝の前に跪くもの。その逆なんてありえないんだからね」

今度こそ抑え切れなかったのか、男の口から盛大な笑い声が発せられた。もう一方の男はただ無言でそれを眺めていた。

(・・・役目さえ果たすのならば、何も言う事は無い。我ら悪魔が、いつまでも人間ごとくに踊らされるわけにはいかんだ)

それぞれの思惑を胸に動き出す者達。・・・だが、彼らは理解して
いなかった。自分達の取ろうとしている行動がある人物のフュー
リー・・・即ち“大いなる怒り”を呼び覚ましてしまう事になるのだ
と・・・。

第七十九話 どうしてこうなった・・・

どうも興奮を抑え切れない様子のカテレアさんをセラフオルーさんとアザゼル先生が実力行使で落ち着かせた所で、二人がここに来た理由を尋ねてみた。なんでも、俺が眷属を必要としている事を聞きつけたカテレアさんがそれなら是非とも自分を眷属に！との思いでこうしてわざわざ人間界にやって来たそうだ。

「本当は私もお手伝いしたいんだけど、みんなに止められちゃったんだ。残念」

そりゃ魔王と呼ばれる人が参戦するなんてなったらエライ事になるだろうしな。せっかく協力してくれようとしているのに、残念でない。

「ふふふ・・・セラフオルーなどいなくとも、この私がフューリー様の御前に立ちほだかる敵は全て蹴散らして差し上げますわ！」

「というわけだから、フューリーさんさえよかつたらカテレアちゃんを受け入れてあげて。色々残念な子だけど、実力だけは本物だから」
セラフオルーさんのお墨付きならばきつと本当に頼りになる人なんだろう。そんな人が自分から協力を申し出してくれる。断る理由なんか無いな。

「わかりました。カテレアさん。あなたの力を俺に貸してください」
「っしやあー！ その言葉を待っておりました！ このカテレア、頭の方から足の先まで、全てをフューリー様に捧げる事を誓いますわ！」
・・・相変わらず表現が独特な人だな。だけど、やる気だけは十分に伝わって来た。

こうして、黒歌一人だったはずの俺の眷属は、気付けば彼女を含めて五人となっていた。これならば戦術を練りやすくなる。だが、それを考える前に、まずは誰にどの駒を預けるか決めないと・・・。

アザゼル先生やセラフオルーさんの助言を参考に、最終的には黒歌に『戦車』。レイナーレさん、カラワーナさん、ミツテルトさんに『兵士』。そして魔法が得意だというカテレアさんには『僧侶』の駒を預け

た。カテレアさんは『女王』の駒を希望したが、今回それを預けるのはカテレアさんでは無く、彼女・・・アーシアだった。

もちろん、アーシアはゲームには参加しない。だけど、同じ物を持つ事で、心だけでも俺達と一緒に戦いたいという彼女の意思を汲んで、俺は『女王』をアーシアに渡した。

契約（仮）が済んだ所で、アザゼル先生が手を叩いて全員の注目を集めた。

「フューリーの一戦も気にはなるが、他の連中も他人事じゃないぞ。リアス、ソーナ。お前達の勝負の後、他の若手達もそれぞれに勝負を行った。バアルとグラシヤラボラス。そして、実はアスタロトも既にアガレスとの勝負を済ませている」

そう言いながらモニターの準備をするアザゼル先生。

「フューリーとアスタロトの勝負が終われば、今度はリアス、お前達の番だ。相手はサイラオーグ・バアル。若手一の実力と噂される怪物だぞ」

サイラオーグさんか。確かリアスの従兄弟だったよな。

「今からバアルとグラシヤラボラスの試合の映像を流す。ヤツの力がどれくらいか、自分自身の目で確かめろ。そしてフューリー。お前にはこっちだ」

先生がもう一台のモニターを持ち出す。話の流れ的には、おそらくアガレスさんとアスタロトさんの試合映像を流すのだろう。

「お節介かと思っただが、対戦相手の情報を得るのも重要な戦略だからな。これを見て色々考えてみる」

「ありがとうございます。先生」

「別にお前の為じゃねえよ・・・俺の胃の為だ」

先生が何やら呟いたが、既にモニターに集中していた俺の耳には何を言っていたのかまでは聞き取れなかった。

俺や黒歌達が見つめる中、アガレスさんとアスタロトさんの勝負が始まった。勝負は終始アガレスさんのペースで進み、このまま彼女の勝利で終わると誰もが思っていた。

だが、その予想はあつという間に裏切られてしまった。追い込まれ

ていたはずのアスタロトさんが急激なパワーアップを遂げ、アガレスさんと彼女の眷属を瞬く間に沈めてしまった。しかも、彼一人でだ。アスタロトさんの眷属はほぼ何もしていなかった。

映像が終了し、俺達は顔を見合わせた。誰もがアスタロトさんの逆転劇に疑問を抱いているのだろう。そこへアザゼル先生が声をかけて来た。

「お前らが言いたい事はわかる。俺はこの試合を生で観戦していたが、事前に聞いていた実力とはあまりにも違いがあり過ぎた。それこそ別人の様に」

「・・・蛇」

ポツリとカテレアさんが呟く。それに耳聡く反応したのはアザゼル先生だった。

「おいカテレア。今なんて言った？」

「あなたも何となく気付いているのではなくてアザゼル？ あくまでも憶測に過ぎませんが、もしもそれが事実であるならば・・・アスタロト家はすぐにでも潰すべきです」

「・・・そうか。あいつにもそう伝えておく」

「ええ。是非ともそうしてください。・・・フューリー様。あなたの勝利は既に約束されていますが、それでも決して油断だけはなさらないでください」

おそらく出会ってから初めて見せるであろう、カテレアさんの恐ろしいまでの研ぎ澄まされた表情に、俺は薄ら寒い何かを感じつつ答えた。

「わかっています。元々するつもりもありません。俺はただ全力を出すだけです」

そもそも、油断出来るほどの余裕が俺にあるわけがない。俺の答えにカテレアさんは満足したのか恍惚とした表情を浮かべ・・・恍惚？ 「はあ・・・格下のはずの相手にすら決して手を抜こうとしないフューリー様マジで騎士・・・」

「・・・初めてまともな事言ったと思っただらこれにや・・・」

「「・・・」」

そんなカテレアさんを冷たい目で見つめる黒歌と、ちよつと引いている感じのレイナーレさん達。カテレアさんは事あるごとに俺を褒めてくれるが、恥ずかしいので少し自重して欲しいというのは贅沢な願いだろうか。

それはともかく、こうして味方が一気に増えたんだ。すぐにでも鍛練を開始したい。そうと決まれば、早速いつもの場所へ向かう事にしよう。

「みなさん、俺について来てください。これから俺がいつも鍛練している場所まで案内します。みなさんさえ良ければそのまま鍛練を行ってもらって構いません」

「承知しました。お供させて頂きます」

「・・・四人共、今から覚悟しといた方がいいよ」

「「「え？」」」

まずはお互いの実力の確認をして、余裕があれば実戦形式の鍛練を試してみたいな。黒歌の仙術にレイナーレさんのライフル。カラワーナさんの槍にミッテルトさんの拳。そしてカテレアさんの魔法。彼女達との鍛練はきつと俺をまた一步強くしてくれるはずだ。

・・・

翌日、俺は一人走り込みを行っていた。他のみんなはそれぞれの家で休んでいる。ちなみにゲームまでの間、カテレアさんとセラフォルーさんは俺達の家で寝泊まりしている。カテレアさんはわざわざ冥界から一々こつちに来てもらうのが申し訳無かったからだが、セラフォルーさんの監視っていうのはなんなんだろうな。

それにしても、黒歌達には悪い事をした。男女じゃ体力の違いだつて当然あるのに、それを忘れて付き合わせてしまい、気付いたら俺の周りに彼女達が倒れていた時は驚いてしまった。みんな体力には自信があると言っていたが、俺に気を遣う必要なんて無かったんだがな。

そういうわけで、俺はこうして一人走り続けていた。走り込みは以

前からやっていたが、最近では体力に加えて走る速度も少しずつ増してきているのを感じる。

けど、俺が走る度に周りにいる人達が悲鳴の様な声をあげるのとはなんでだろう。そんなに俺の走り方が不気味なのだろうか。それなら某液体金属警察官の様なフォームで走ってみようかな。あれほど完璧な走り方は他に類を見ないからな。

「見つけたわ。ここにいれば会えると思った」
「ん？」

聞き覚えのある声に足を止める。・・・この靴も限界かな。減速が上手く出来なくて止まるまでの距離が伸びてしまう。

「確かにいい走りっぷりだなあ。見ていて思わず勝負したくなっちゃまったぜい」

「あなたは・・・美猴さん？ それにヴァーリさんまで・・・！」
「冥界以来ね。ついこの間の事のはずなのに随分久しぶりに感じるわ。・・・それだけあなたに会いたかったのかしらね、私は」

そこにいたのはヴァーリさん。そして美猴さんだった。すっかりおなじみのコンビだが、ここは冥界では無く人間界。どうしてこの二人がここにいるのだろうか。そしてヴァーリさん、言いたい事はハッキリ言いましたよね。最後の方は小さすぎて聞き取れなかったんですけど。

「俺に何か？」

「ええ。少し話をね。探すのに骨が折れたわ。「青い髪のイケメンが風の様な早さで駆け抜けて行った」なんて話を至る所で聞いたから、ルートの子想を立ててあなたが通りかかるのを待っていたの」

「そんな情報にもならない情報でよく俺を見つけたらな」

「はっはあ。それは愚問ってヤツだぜ。コイツがお前さんの事を間違えるはずが・・・」

「ところで亮真。実は今からこの近くのラーメン屋に行こうとしてたんだけれど、やっぱり別のお店にしようと思うの。どこかいい場所知らない？」

「いやあ！ 運がよかったんだ俺たち達！ うん、そう！ それだ

け！」

ラーメンか・・・最近食べて無いな。アスタロトさんとの勝負が終わったからお礼の気持ちを込めて黒歌達を誘って食べに行くか。

「それより亮真。聞いたわよ。あなた、レーティングゲームをするそうじゃない。冥界中その話でもちきりよ。相手はアスタロト家の次期当主。ゲームの開催日はまだ発表されていないけれど、ちゃんとこの目で見届けさせてもらうわ」

「まあそういうことだ。俺っち達はお前さんの方を応援させてもらうぜい。伝説の騎士様の力ってヤツを存分に見せてくれよ」

・・・ひよつとして、わざわざ激励する為に会いに来てくれたのだろうか。そうだとしたら非常に嬉しい。

「って事でヴァーリ。目的も果たしたし、そろそろラーメン食いに行くとしてようぜい」

「一杯だけよ？」

「そんなぐ無体な！」

「じゃあね亮真。今日あなたに会って、私もまだまだ努力が足りないとわかったわ。帰ってからやる事がたくさん増えそうね」

そう言い残し、二人は去って行った。さて・・・彼女達のおかげでいい息抜きになったし、そろそろ走り込みに戻るか。時間は・・・うん、後三時間は行けそうだ。

腕時計を確認し、俺は再び走り始めるのだった。

・・・

・・・

・・・

夜、風呂から上がって部屋に戻ると机の上の端末が点滅していた。おそらくアガレスさんから連絡が入ったのだろう。

手に取って確認すると、やっぱりアガレスさんからメールが来ていた。ええつと・・・『ディオドラ・アスタロトとレーティングゲームをするとお聞きしました。どうかお気をつけて。あの男、何かを隠しています』・・・か。

直接相対したアガレスさん直々の忠告だ。しっかり肝に銘じてお

こう。とりあえず、わざわざメッセージをくれたお礼の返事をしないと。

送信して数分も経たずにまたメールが来た。『応援してます！
・・・それと、実は前回私の家に来て頂いた時にお話した強化プランなのですが、あれからまた色々考えてみました。こんな時にお送りするものではないかもしれませんが、少しでも気分転換のお役に立てればと思います』との事だった。

添付ファイルを開くと、ラフトクランズ・セイバー（仮）の姿が映し出されたが、アガレスさんの言う通り、前に比べて色々変わっていた。

スクロールすると、説明分らしきものが表示された。それによると、前回は『騎士は剣で戦うもの』というイメージが強すぎたので、今回はその反省点を踏まえてさらに二つの武装を追加してみたい。

一つ目は両手の甲に装着された伸縮自在の爪。俺の知ってる武器で言うなら、ヴァイサーガの水流爪牙みたいな感じのヤツだった。

二つ目は右のスラストー部の格納庫に収められた巨大な槍。他の武器とは違い、これはオルゴン結晶を刃として展開させるらしい。つまり、普段は柄だけだが、抜くと瞬時に結晶が刃となって現れる。これは元々左の大剣と合わせて組み込むつもりだったそうだが、最初に言ったイメージの所為で断念したのだとか。

他にも、周囲三百六十度を見渡せて、味方の状況が常に把握出来るセンサーといった武装以外の強化案もいくつか上げられていた。

・・・と、武装やセンサーといったものばかりに注意を向けていたが、実はそれよりも最初に触れておかないといけない所があった。このラフトクランズ・セイバー（仮）。前回の物に比べて装甲がかなり薄くなっていた。というより、装甲が無くなっていた。顔以外の頭部や両腕及び両足。それと肘や膝の部分は残っているが、ほとんどが剥き出しだ。これではロボットというよりも人間が着る強化スーツみたいだな。

それについて尋ねると、やや遅れて返信が届いた。

『装甲を最低限にする事で、ウエイトを減らし、さらなる速度の向上を図りました。・・・というのは建前で、これを纏って戦う神崎様の姿を想像したら顔が出ている方がカッコイ』

最後まで読み切る前に再びメールが来た。

『殺気之メール見ま下か!? 身て無い槽消してくだ祭! 阻止て忘れてくダサイ!』

速度の向上の所までしか読めて無いんだが・・・文字変換ミスしまくるほど慌てるみたいだし、消しておいてあげよう。

そんな感じで、アガレスさんのやりとりはしばらく続くのだった。

・・・

・・・

・・・

ついに俺とアスタロトさんの勝負の日が決まった。今からちょうど一週間後だ。残り少ない日数を大事にし、最後の追い込みをかけたかったのだが・・・。

「・・・何故俺はこんな所にいる」

今俺が立っているのは冥界のテレビ局。リアス曰く、若手悪魔全員にテレビ出演のオファーが来たそうだ。なら何故俺が連れて来られたのか聞くと、俺もその番組に特別出演してもらおうとか言われてしまった。

・・・こうして連れて来られてしまった以上、今さら断るつもりは無い。それよりもさっさと終わらせて鍛練をする方がよっぽど建設的だ。そう判断し、一人待合室で待機する俺。

スタジオが近いのか、色んな声が聞こえて来る。リアスの名を叫ぶ声。朱乃を褒め称える声。・・・なんか「てんじょうさん」なんて声も聞こえる。誰の事だ?

俺のインタビューは最後になるらしく、結構待たされた。ようやく呼ばれたので待合室を出ると、移動中になんとアスタロトさんを出会った。

「こんにちは、フューリー様」

にこやかな表情を見せるアスタロトさんに俺も軽く頭を下げる。

「今から出番ですか？ 頑張ってくださいね」

「ああ」

「それはそうと・・・あれからアーシアとは話し合いましたか？ 連絡が無いから気にしていたのですが」

・・・ちようどいい。彼には言いたい事があったんだ。

「アスタロトさん」

「何でしょう？」

俺は先程よりも深く頭を下げた。

「ありがとう。キミの言葉で、俺は大切な事に気付けた。一週間後の勝負、アーシアの為、そして俺自身の為、全力でキミに立ち向かわせてもらう。それが、キミに対する俺からの感謝の気持ちだ」

「ッ・・・!?!」

目を限界まで見開き、信じられないものを見たかのような様子を見せるアスタロトさん。・・・これから勝負する相手が頭を下げて来たんだから戸惑うのも無理は無い。だが、これだけは伝えておきたかった。彼の言葉がなければ、俺はアーシアの本心を知る事は出来なかったのだから。

「・・・引き止めて済まなかった。次は一週間後に会おう」

俺はアスタロトさんと別れ、スタジオの方へ足を向けた。そして、俺が曲がり角の先に消えるまで、彼はその場にずっと立ち尽くしていたのだった。

「さて、何を聞かれる事やら」

おそらくメインは今度の勝負についてだろうが、精々簡単な質問で満足してくれればいいんだがな。

そんな事を考えながらスタジオへ入る。まず目についたのはたくさん椅子と、それに座る悪魔のみなさん。男性もちらほら見えるけど、圧倒的に女性の方が多い。・・・あ、あそこにいるのってレイヴェルさんじゃないか。

それにしても空気が重い。さっきまで賑やかだったはずのスタジオが、俺が入った途端静寂に包まれてしまった。

そのままスタジオ内を進み、インタビュー用のソファアに腰掛ける。こうして、俺のインタビューが幕を開けたのであった。

S I D E O U T

イツセーSIDE

いやあ、まさかテレビ出演までする事になるとは思わなかったなあ。前回のゲームで負けてしまった俺達だけど、インタビュー中は観客席からの黄色い声が凄かった。部長とか朱乃さんとか木場がほとんどだったけど、中には俺の名前を呼んでくれる子もいた。．．．若干幼すぎた気がするけどな。

それでも俺は幸せな方だ。不憫なのはゼノヴィアだよ。アイツ、天嬢さん”なんてあだ名を頂戴していた。『天井に突き刺さって動けなくなったお嬢さん』を略して天嬢さん。収録後のアイツの落ち込みっぷりったらもう。こっちまで泣きそうになったくらいだ。

そんな俺達のインタビューが放送されるのはまだ先らしい。だけど、勝負が近い神崎先輩とディオドラの分は先に放送したそうさ。その録画分を、俺達は部屋に集まって今から見ようとしていた。

俺達だけじゃなく、あの日留守番をしていたらしい先輩の眷属達。そして当然アーシア。後イリナもいる。だけど、先輩本人は不在だ。どうもインタビューがあまり上手くいかなかったようで、見るくらいなら鍛練をしたいと出て行ってしまったのだ。

「．．．初めに言っとく。意識だけはしっかり保っておけよ」

よくわからない警告をして来るアザゼル先生に俺達は首を傾げた。流石に寝落ちするようなヤツはいないでしょう。

まず流されたのはディオドラの分だった。だが、インタビューが中頃まで進んだ時には、全員が不快感を隠そうともせず画面に映るディオドラを睨んでいた。

「．．．言ってくるわね、ディオドラ」

ディオドラのヤツ、口調こそ丁寧だったが、所々で先輩を侮る様な事を言っていた。それに気付いたからこそ、俺達はムカついていた。こいつ、先輩がこれまでどんな鍛練を続けて来たのかわかってるのか

？ まあ、わかってないからあんな事が言えるんだろがな。

「あのガキ・・・フューリー様に消される前に私が消してやりましょうか」

カテレアさんが目にヤバい光を灯らせていた。それから十分くらいしてディオドラのインタビューが終了し、続いて先輩の姿が映った。

『そ、それではこれより、かつて三陣営を救った伝説の騎士フューリーこと、神崎亮真様にお話を聞かせて頂こうと思います』

うわ、司会のお姉さんガツチガチじゃん。緊張がこつちまで伝わって来そうだ。それに、客席もすげえ静かだ。俺達の時とは全然違う。

『ま、まずは神崎様のこれまでの足跡を辿っていきたいと思います』

そう言つて隣の巨大ボードを差すお姉さん。一番上に「二天龍との戦い」と書かれている。どうやら先輩のこれまでの行動を追って行くつもりみたいだ。

途中何度も躓きながら質問するお姉さんに先輩はスラスラと答えていた。堂々としてるなあ。テンパつた俺とは全然違うわ。

そして、お姉さんはずいに最後の部分を示す『アスタロトとのレーティングゲーム』か。ここまでくるとだいたい緊張もほぐれたのか、口調がだいぶスムーズになっていた。

『いよいよアスタロト家との勝負まで一週間となりましたが、今回のレーティングゲーム、とある少女を懸けて戦うとの噂があります。それによればディオドラ・アスタロト氏はその少女に想いを寄せているそうです。ひよつとして、神崎様もその少女に特別な感情を？』

うわ、それ聞いちやうのか。確かにみんなそれが気になつてるんだろうけど、こういうのってよくないんじゃないか・・・というか、なんか急に周囲からプレッシャーを感じ始めたんですけど！ 止めてお姉さん！ 俺のライフはもうすぐゼロよ！

『特別・・・。そうですね。俺にとつて、彼女は特別な存在です』

あーあ！ 言っちゃった！ 言っちゃった！ 知ーらね！ 俺知ーらね！

『それはつまり、ディオドラ氏と同じように女性として・・・？』

『・・・少し違います。確かにあの子はとても魅力的ですが、そういう特別じゃありません。彼女は・・・俺の日常の一部なんです』

・・・あれ？　なんか俺の予想してた展開と違う。日常の一部？　それってどういう意味なんだろう。

ふいにプレッシャーが和らいだので恐る恐るそちらに目をやると、部長達が先輩の言葉を一字一句聞き逃さない為にもの凄い集中していた。これはこれで怖い。

『・・・と言うと？』

『彼女と出会い、共に過ごしている間に、彼女がいる日常が俺にとって当たり前になりました。ですが、ある人に言われたんです。そうやって彼女を傍に置く事が、彼女の幸せを奪っているのではないかと』

はっ、そのある人つてのは底なしの馬鹿だな。誰がどう見たって今のアーシアは幸せ一杯じゃねえか。

『今まで考えもしませんでした。彼女が幸せを見つけるまで見守ろうと決めていたはずの俺が、彼女の幸せを奪っているのではないかと思うと不安になりましたよ。だけど、その不安は彼女本人のおかげで消えました』

『何故？』

『彼女が言ってくれたんです。彼女にとっての幸せは俺や仲間達に囲まれて笑っていられる今なんだと。そんなありふれた日常こそが幸せなのだ』

「アーシア・・・」

「あ、あうう。ちよつと恥ずかしいです。でも、今リョーマさんがおっしゃった事が私の気持ちです。私はみなさんと一緒にいられる今が幸せなんです」

や、やべえ・・・泣きそう！　俺もだよアーシア！　俺も今ここにいるみんなと毎日を楽しく過ごしている今が凄く幸せだよ！

『彼女のその言葉がとても嬉しかった。そして気付いたんです。俺も彼女と同じだと。大切な仲間達と一緒にいられる今この瞬間がたまたまなく幸せなのだ。彼女だけじゃない。リアスに朱乃。兵藤君に木場君。ゼノヴィアさんにヴラディ君。塔城さんに黒歌。支取さん

に彼女の眷属の子達。アザゼル先生。・・・その誰もが俺の日常の一部なのだ。そして・・・それは決して失ってはならないものなのだ』

「先輩・・・」

『・・・だから戦います。そして必ず勝ちます。決してアスタロトさんを侮っているつもりはありません。ですが、相手が誰であろうと、何が立ち塞がろうと、絶対に勝ってみせる。彼女を・・・そして、俺の日常を守る為に』

そう締めくくる先輩の表情は、いつものクールな微笑では無く、見た者全てを惹き込んでしまいそうな満面の笑顔だった。・・・先生。あなたが言いたかったのはこれの事だったんですね。

先輩・・・吹っ切れてパワーアップしたのはいいですけど、吹っ切れ過ぎて別の方向にもパワーアップしてませんか？ もう色んな所の破壊力が半端じゃなくなってますよ。俺ですら今のでちよつとグラツと来ましたもん。

「・・・これでヤツのインタビューは終了だ。放送直後、テレビ局へ再放送の希望が殺到したそうぞ。さらに言えば今回のゲーム、実はディオドラも密かに人気があったんだ。伝説に挑もうとする勇氣ある若手なんて具合にな。だが、それも放送直後に一変した。今じゃ誰も彼もがフューリーを応援しているらしいぜ。どうも伝説なんて呼ばれる存在に委縮していたが、ヤツの『日常を守りたい』って言葉を聞いて、そんなごくありふれたものの為に戦おうとする姿に親近感を抱いたとかなんとか。加えてあのタイミングで不意打ち過ぎるあの笑顔に気絶した者も・・・」

「先生。今ここにも絶賛気絶中のみなさんがいるんですけど」

気付けば俺と木場以外の全員が頬を真っ赤にして床に横たわっていた。カテレアさんとか痙攣してるけど大丈夫なのかアレ・・・。

「・・・知らぬは本人ばかりなり」

そう呟く木場に、俺はそつと座布団を手渡したのだった。

第八十話 大いなる怒り

・・・どうもみんなの様子がおかしい。余所余所しいと言えはいいだろうか。おそらく、勝負に向けて集中している俺を気遣い、あまり干渉しないようにしてくれているのだろう。本当に、俺は仲間に恵まれているな。

それはともかく、いよいよ勝負が明日に迫っている。俺は既にベッドに横になっていた。疲れを残さず、万全の状態で明日に臨む為だ。

『いよいよ明日やな』

ああ、オカン。うん、明日で全てが決まるんだ。

『余計な事は言わん。悔いの残らへんようにな。それと、明日は『王』の駒も持っていき』

駒を？ 何故？ 確かサーゼクスさんが言うには、俺は駒を持っておかなくても『王』として認識されると聞いてるけど。

『ただの保険や。・・・今のアンタなら出来るかもしれない。贋作であつたはずのアンタは、既に本物を越えとるんやから』

どう・・・いう・・・意味・・・。ああ、やべ、眠くなって・・・。
『ええよ、お休み。何かあつても、ウチが助けたるからな』

その言葉に、どこか母親の様な温かさを感じながら、俺の意識はゆっくりと沈んでいった。・・・俺の母さんはパンチパーマじゃなかった事は伝えておこう。

・・・

・・・

・・・

そして迎えたゲーム当日。俺達はオカルト部の部室に集まっていた。ここからゲームが行われるフィールドに転移させられる事になつていた。

「・・・いよいよだね、ご主人様」

隣の黒歌の声に黙って頷く。他のみんなも気力に満ち溢れた表情を見せている。・・・大丈夫、彼女達と力を合わせれば、きつと勝てる。

ポケットに入れた『王』の駒をそつと握り締める。そうすれば、彼女の・・・アーシアの声が聞こえて来るような気がした。

リアス達が観客席から俺達の試合を観戦するのは違い、アーシアは家でアザゼル先生の用意してくれたモニターを通して俺達の試合を見る事になっている。あの記事の所為で有名になってしまった彼女を見て、他の人達が騒ぐのを防ぐ為だ。

「・・・時間ですね、行きましょう」

足下の魔法陣が光を放ち始める。そして、俺達は決戦の場へと跳ばされるのだった。

S I D E O U T

アーシアS I D E

「・・・あと少しで始まりますね」

壁にかかった時計を確認して私はそう呟いた。リヨーマさんとディオドラさんとの勝負まであと十分を切っていた。

ディオドラ・アスタロトさん・・・私が教会を追われる事になってしまったあの出来事の悪魔さん。だけど、私は彼を救った事を後悔なんてしていない。目の前で消えかけている命を見捨てるなんて絶対に間違っているのだから。

「誰かに愛して頂けるといふのはとても素敵な事です。だけど、それと同じくらい素敵な事だつてたくさんあります」

今のこの暮らし以上に素敵な事なんてあるだろうか。リヨーマさん達と一緒に過ごせる一日一日がとても輝きに満ちていて、これ以上幸せになっていいのだろうか？　なんて思ってしまったりもする。

「それだけでいいんです。私は・・・リヨーマさんとずっと一緒にいたいんです」

他の人にとっては取るに足らない小さな願いなのかもしれない。だけど、私にとってはこの上も無く大切な願いだった。

リヨーマさんから預けて頂いた『女王』の駒を手の中に納めながら祈りを捧げる。主は亡くなってしまった。だけど、祈らずにはいられなかった。

「どうか。どうか、みなさんが無事で帰って来てくれますように」

『・・・その祈り、確かに聞き届けました』

「え・・・!?!」

慌てて周囲を見渡す。今、どこからか慈愛に満ち溢れた優しい声が聞こえて来た気がしたのだけれど。

ピンポーン!

突然チャイムが鳴った。誰か訪ねて来たのだろうか。こんな深夜に? でも、急を要する事だったら大変だし・・・。

少し悩んで、私は玄関に向かった。そしてドアを開けると、そこには予想だにしない人物が立っていた。

「やあ、迎えに来たよアーシア」

「ど、どうしてあなたが・・・!?!」

アーシアSIDE OUT

IN SIDE

「ッ・・・!」

転移完了と同時に、アルllヴァンセンサーがもの凄い反応を示した。あまりの強さに若干頭が痛い。これは・・・おそらくすぐに何か仕掛けて来そうだ。

「みんな、まずは周囲の警戒をしてくれ」

俺の指示でみんなが円を組みながら周囲を警戒する。支取さん曰く「勝負は常に冷静に。怒りや動揺は相手以上の敵になる事もありえる」との事だ。

俺達が立っているのはとても広大な場所だった。石造りの地面に何本もの巨大な柱が建っていて、向こうの方には大きな神殿の様な建物まで見れる。なんとというか、凄く厳かな雰囲気だ。人間界にあったらさぞかし良い観光名所になった事だろう。

「・・・ちよつと変つすね。確か転移したら審判役からのアナウンスがあるって言ってませんでしたっけ?」

確かにミッテルトさんの言う通りだ。既に転移して五分くらい経っているのだが、肝心のアナウンスが一向に流れない。

誰もが怪訝な表情を浮かべていた・・・その時、突如魔法陣が出現した。しかも一つだけじゃない。至る所に連鎖的に魔法陣が展開し始める。それは全て形がバラバラだ。だが、ただ一つ・・・そこから発せられる悪意だけは共通していた。

そこから現れたのは大勢の悪魔のみなさん。皆例外無く俺達を睨みつけている。その数は最早数える事が出来ないほどまでに膨れ上がっていた。まさか、これが全部アスタロトさんの眷属なわけじゃない・・・？

「見憶えのある顔もありますわね。みなさん、あれは間違いなく『旧魔王派』の連中です」

「！！ツ!?」

「ここでペロリストの襲撃だ?! ヤツ等・・・本当に邪魔ばかりしやがるな! はっ、ひよつとしてアスタロトさんの方にも!」

「我らは貴様の存在を認めない。フューリー・・・貴様にはここで散つてもらおう」

「ふん、暑苦しい顔ばかりですわね。イライザやリコといった他の女性悪魔達はどこへ行ったのですか?」

そう尋ねるカテレアさんに、一番近くにいた男が声を荒げた。

「カテレア・レヴィアタン! 貴様さえ寝返らなければ! 何が『フューリー教』だ! どいつもこいつも惑わされおつて!・・・というか、イライザは私が狙っていたのだぞ! それを・・・それをおおおおお!!!」

「そう・・・あの子ついに動いたのね。今度遊びに行ってみようかしら」
「・・・よくわからないが、どうも仲間割れがあったようだな。ざまあみろ。」

「おいおい、いつまでもくつちやべってないでさ、早いところ殺つちやつてよ」

そこへ第三者の声が届く。この声はアスタロトさん!? 良かった。無事だった・・・。

「・・・え?」

空から聞こえる声の目を向けた瞬間——俺の思考は停止した。

そこにいたのは間違い無いアスタロトさんだった。当然だ。彼は俺と勝負する為にここにいるのだから。でも…何で「彼女」が。アスタロトさんに抱えられ、悲痛な表情を見せているアーシアがここにいる!?

「リヨーマさん…!」

「あははは! そうだ! その顔が見たかったんだよフューリー! カメラを持って来なかったのが残念でならないや!」

「ディオドラ・アスタロト! アンタどういうつもりにや!? 何でアーシアがここにいる!?!」

「どうもこうも。僕の目的は最初からこれだったのさ。ゲームなんて最初からするつもりなんて無かったんだよ。キミ達にはここで『禍の団』にエージェント達に殺されるんだ! これだけの数の上級、中級悪魔を相手に、伝説の騎士様はどこまで立ち向かえるのかな?」

「…やはり私の予想は正しかったようですね。ディオドラ・アスタロト。前回のゲームで見せたあの力はやはり…」

「ふふ、今から死ぬキミ達に教えても意味が無いだろう。だが…そうだな。あの神殿の奥まで辿りつけたら、その時は教えてあげるよ」

アスタロトさんとアーシアの姿が徐々に薄くなっていく。今すぐ二人の元へ行かなければ! そう思うのに体が動かない。予想もしない展開に頭の中がぐちゃぐちゃで何も考えられなくなっていた。

「まあ、不可能だとは思うけど、来るなら急いだ方がいいよ。僕はあの神殿でアーシアと結ばれる。はは、なんならその場面に合わせて来てくれてもいいんだけどね」

アスタロトさんの顔が喜悦に歪む。それを見て俺は理解した。あれが…あの顔こそが彼の本性なのだと。

「リヨーマさん! リヨーマさあああああああん!!!」

叫び声だけを残し、アーシアの姿は消えて行った。

「アー…シァ…」

自分でも間抜けだと思える様な声で彼女の名を呼ぶ俺。そんな俺を立ち直させたのはレイナーレさんだった。

「神崎様! すぐに神殿に向かいましょう! あの男…絶対に許さ

ない！」

「でもお姉様！　これだけの悪魔を無視して向かうのは不可能ですよ！」

「ミツテルトの言う通りです！　まずはここを切りぬける事を考えるべきかと！」

「わかってる！　でも急がないとアーシアが……！」

「ならば、ここはわしに任せてもらおうか」

傍の柱からそんな声が聞こえたと思えば、そこから一人の老人が姿を現した。よく見ると、その人はリアスと支取さんの勝負の後、医務室へ急いでいた俺の前に現れたあの時の老人だった。

「……北欧の主神、オーデイン。何故あなたがここに……！」

オーデイン？　……オーデイン!?　この人が!?

「話すと長くなるので簡潔に言うがの……」

「放てえええええええ！」

オーデインさんが続けて喋ろうとした刹那、周りにいたペロリスト共が一斉に魔力弾を放って来た。だが、それが俺達に直撃するよりも早く、周囲に展開した眩い障壁がその全てを防ぎきった。

「やれやれ、せっかちな者は嫌われるぞ。で、話を戻すがの。このゲームは『禍の団』に乗っ取られてしもうた。あのディオドラ・アスタロトが裏で『禍の団』と繋がっていた証拠がようやく見つかったの。今、運営側と各勢力の面々が協力して迎え撃っておる」

……え？　アスタロトさんがペロリスト……？　じゃあ……

じゃあアーシアは……。

「あーあ。せっかく俺様が説明してやろうと思っただのに、そこのおじーさまの所為で台無しだぜ」

「ッ!?　お前は……！」

「やつほーレイナー様あ。後その腰巾着のお二人さん」

またしても現れる新たな人物。それは姿を消して久しかったクレイジー神父だった。

「何故お前が……！」

「いやあ、俺も苦勞したわけですよ。せっかくエクスカリバーなんて

素敵な物を手に入れたつてのに、それも取られちゃってさあ。あのいけすかねえイケメン悪魔君に斬られちゃった後、何とか逃げ出したのはよかつたんだがよお。正直、何度死ぬかと思つた事やら。でも、このフリードちゃんのしぶとさをなめちやいけませんぜ？　こうしてテメエ等の前に再び姿を現しちやつたんですからねえ！」

「貴様、何の目的で現れた？」

「目的？　そんなもん決まつてるじゃねえか。もう俺には何も残つてねえ。どうせこれから先も何もねえ。だったら、今まで散々俺をナメてくれた相手にお礼参りして潔く死んでやろうと思つただけですわ！　つーわけで、兄ちゃん！　いっちょ俺と最後のパーティーとしやれこもうや！」

「……こいつは何を言っているんだ？　今のこの状況をわかつているのか？」

何も答えない俺に業を煮やしたのか、クレイジー神父が続けて口を動かした。

「おいおい！　ノリが悪いぜえ！　アーシアさんの所に行かないとまずいんだろお？　早くしないと、あの悪魔のお坊っちゃんの素敵な趣味の相手にされて大変な事になつちやうぜえ？」

「趣味……？」

「そうさ。あのお坊っちゃんの女の趣味は大したものなあ。シスターとか、教会に通じている女が好みなんだよ。アイツは熱心な信者や教会の本部に馴染みのある女を言葉巧みに騙しちやあ手籠めにしてんだよ。もう何人もの信仰心に溢れる聖女様達がアイツの餌食になつちやつてるんだなこれが」

「……まさか。いや、ありえない。そう思つても、俺の中で嫌な予感が沸々と湧き上がつて来た。なら、ならアーシアが教会を追放されたのも……」

「そう……アーシアさんが教会を追放されるシナリオを作ったのはディオドラ坊っちゃんさ。シスターとやるのが大好きなディオドラ君は、自分の好みドストライクなとっても可愛い聖女様を見つけました。一目見たその時から、抱きたくて抱きたくてたまりません。でも

でも、教会から連れ出すのはちよつと大変かなー。そう思った彼は作戦を立てました。「そうだ！ あの子は悪魔も癒してしまう神器を持つてる！ なら怪我をした悪魔を癒した所を教会の人間に目撃させれば、あの子はきつと教会を追放されるはず！ やべ、僕って天才!?!」ってな

「・・・」

「信じていた教会から追放され、生きる目的を失えばきつと自分の所に来るだろう。ディオドラ様はそう思ったわけですよ。その苦しみだつてお坊っちゃんにとっては最高のスパイス！ 墮ちる所まで墮ちた所で掬いあげ、徹底的にやる！ とにかくやる！ ヤリまくるんですよ！ 今までも、そしてこれからも、お坊っちゃんはそうやって聖女様を食いまくるつもりです！」

「・・・下衆もここまでくると大したものですわね」

「うわー、流石のわしもドン引きじゃわ」

「つーわけで。早いところ行かないと、聖女様の処女が散っちゃいますよ？ それとも、ひよつとしてNTR趣味でもあるのかなあ？ だもしたら俺も一緒に・・・」

「黙れ」

「・・・ゴメン、支取さん。せつかくのキミの教え、守れそうにないや。俺は・・・俺はもう我慢出来ないよ。あの野郎・・・絶対に許さない。あの子の優しさを踏み躪ったあの野郎を許せるわけがないだろうが!!!」

「ディオドラ・アスタロトオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ヤツに届けとばかりに吠える！ それに呼応するかのように、俺の体から緑色の光が天に向かって伸びて行った。

そして、俺の頭の中にあの声が響き渡った。

———そうだ。神崎亮真よ。騎士としての誓いを果たせ！ あの少女を救ってみせろ！

先生！ アルⅡヴァン先生！ お願いします！ 俺に力を・・・アシアを助ける力を貸してください！

———断る。

懇願する俺に、先生は残酷な言葉を口にしました。な、何ですか?!
先生の力があれば俺は・・・!

——何故ならば、私の力など必要無いからだ。神崎亮真よ。お前はもう私の贗作などでは無い。あの少女の為、自らの足で歩きだしたお前の力は既に私のそれを上回っている。お前は正真正銘、神崎亮真という一人の騎士なのだ。私の貸した“剣”も最早必要では無い。今こそ、お前はお前自身の“剣”を手にするのだ。

俺自身の・・・剣？

——思い出せ、お前が仲間達から与えられたものを。それはお前の中で混じり合い、決して折れる事の無い“剣”となっているはずだ。そして、その“剣”を振るうに相応しい“器”も既にお前は知っている。

剣・・・そして器・・・。前者はリアス達。そして後者は・・・。
『わかりました。不肖、このシーグヴァイラ・アガレス。持てる知識の全てを動員して、必ずや満足して頂ける強化プランを考えさせていただきます!』

アガレスさん・・・。そうか、彼女が示してくれたアレこそが、俺の新しい“器”!

——想像しろ! そして創造しろ! お前の新たな“剣”を!
何者にも屈する事の無い、お前だけの“剣”を!! お前の大切な物を守る為の最強の“剣”を!!!

気付けば、俺はラフト克蘭ズモードになっていた。そして、そんな俺の前に『王』の駒が浮かんでいた。

「・・・奪わせたたまるか。貴様等ごときに!・・・これ以上あの子から何かを奪わせたたまるかアアアアアアアア!!!」

S I D E O U T

黒歌 S I D E

地面・・・いや、世界そのものが震えていた。その原因は今私の前で未だかつて無いほどに感情を爆発させているご主人様だった。「フューリー様の激しい怒りに、大地が震えていますわあ!」

いつも通りのアホな発言だが、カテレアは顔面蒼白だった。彼女だ
けじゃない。レイナーレ達も同じだった。そして私も。

これまでも、ご主人様は怒りを見せる時はあった。だけど、これは
今までのとケタが違う。今に比べれば、今までのものなんて怒りとす
ら呼べないただのイラつきだ。

「・・・彼奴の力に世界が悲鳴をあげておる。このフィールドを覆って
いる結界すらも既に崩壊してしまった。正にフューリー・・・」大い
なる怒り「よ。ほほ、長生きはするものじゃ。これ程までのものを目
にする事が出来るとはのお」

オーディンのおじいちゃんが面白そうな目でご主人様を見つめて
いる。フューリー・・・「大いなる怒り」。私達にはとつても優しい
ご主人様がどうしてそう呼ばれていたのか、この時私は初めて知った
のだった。

「・・・奪わせてたまるか。貴様等ごときに・・・これ以上あの子から
何かを奪わせてたまるかアアアアアアアア!!!」

咆哮するご主人様の体をあの鎧が包み込む。さらに、『王』の駒が激
しい光を発しながらご主人様の眼前に浮かんでいった。

私達が見守る中、『王』の駒の変化が始まった。バラバラに砕け散つ
たかと思えば、それぞれが全く違う形へと変わっていく。それはパー
ツだった。大小様々なパーツがご主人様の周囲を取り囲んでいた。

そして、全てのパーツが一齐にご主人様の元へ殺到した。その刹
那、ご主人様から目を開けていられないほどの激しい光が発せられ、
私は咄嗟に目を瞑ってしまった。

やがて私が目を開けた時、そこに立っていたはずのご主人様はその
姿を大きく変えていた。

「・・・剣」

私は無意識にそう口にしていった。さつきまでの鎧が「騎士」なら
ば、今のこの鎧は「剣」だ。私にはわかった。きつとこの姿は、これ
までのご主人様の努力の積み重ねで得た新たな力だ！

先程までの激情が嘘の様に、ご主人様は静かな面持ちだった。以前
の物と違い、顔が見えるので表情がわかるようになっていた。

その状態のまま、ご主人様は肩の大きな板状の部分から巨大な剣を引き抜いた。私達悪魔が嫌う神聖な気を発している。なのに、私はその剣の美しさに目を奪われていた。だって、あれはきつとご主人様の心そのもの。ご主人様の守りたいっていう想いが形を成したものだと思うから。

そして、ご主人様はその剣を手にエクソシストへと目を向けた。

「あ、あのですね。今のはあくまでもディオドラ坊ちゃんの事でした、決して僕の事を言ったわけでは……」

「……失せろ」

「あっハイ」

……逆らう気も無くなったのね。素直に道を譲るエクソシストを見て、私はそう思った。

「な、何だヤツのあの力は!? あのよな姿はデータに無かったぞ!」

「援軍を呼べ! こんな……こんな存在が許されていいはずが無い!」

「だ、だから私は言ったんだ! まだ手を出すべきじゃないと!」

『禍の団』の連中が戦慄の形相を見せる。もう遅いよ。アンタ達は、この世で一番怒らせたらいけない人の“大いなる怒り”を呼び起こしてしまっただから。

「……俺はアーシアを助ける。邪魔をするならば……誰であろうとヴォーダの闇に還してやる!!!」

うん! 行こうご主人様! アーシアを助けに!

「生ヴォーダ頂きましたわ! ふははは! 滾る! 滾るぞお!

フューリー様! 先陣はこのカテレアにお任せください!」

「……こんな時くらい自重しなさいよ。まあいいわ。カラワーナ!

ミッテルト! 私達も行くわよ! この命に替えてもアーシアは助ける!」

「了解です!」

「承知!」

「ほっほ、こういう展開は嫌いじゃないぞ。どれ、わしも混ぜてもらおうかの。覚悟せい『禍の団』よ。この老いぼれは想像を絶するほどに強いぞ? 精々覚悟する事じゃ」

「ひ、怯むな！ かかれえ！」
こうして、私達と『禍の団』の決戦の幕が開かれたのだった。

幕間その三 騎士の想いと彼らの想い

イツセイSIDE

俺が悪魔になってまだ数カ月しか経っていない。部長達に教えてもらって「こつち側」の常識とか色々憶えたけれど、それでもまだまだ知らない事の方が多い。

そんな俺だが、今モニターの向こうで繰り広げられている光景：上級・中級悪魔であるはずの『禍の団』の連中が、虫けらのごとく次々と地へ墜ちて行くこの光景が、悪魔からすれば正気を失いかねないものだという事は理解出来た。

その光景を作りだした・・・というか今も絶賛継続中であるその人物とは、他の誰でも無い、神崎先輩その人だ。かつてないほどの怒り・・・いや、怒りなんて表現では収まりきれない、正に「激情」を曝け出していた。

・・・

神崎先輩の感情を爆発させた原因・・・それは対戦相手だったディオドラだ。サーゼクス様の計らいで、上級悪魔が利用する観客席に特別に招待された俺達だったが、肝心の勝負は『禍の団』の襲撃によって潰された。

そして俺達はディオドラの正体、その目的を知った。全てはアーンアを手に入れる為、自分の欲望の為、たったそれだけの為に、あの野郎はあの子の人生を狂わせた。

まさかの登場を果たしたフリードの口から語られた内容に、俺達の怒りは頂点に達していた。それは同じく先輩の勝負を見に来た他の若手達・・・会長やサイラオーグさん。そしてアガレスの姉ちゃんも同じだった。ディオドラはこれまで俺が出会って来たどんなヤツよりもクズ野郎だった。ヤツに比べればライザーの方がまだマシだったと思えるくらいに。

俺達はすぐさま先輩の元へ向かおうとした。だけど、先輩達が今い

る戦場は『禍の団』出現と同時に強力な結界に覆われ、サーゼクス様やアザゼル先生みたいなごく限られた人しか突入出来ないとセラフォル様から説明された。

それに突入出来たとしても、敵は大勢の上級・中級悪魔だ。そんな場所へ俺達が飛び込む等自殺行為に等しい。だけど、こうして何もせずにはただ見ておくなんて出来るわけが無い。いくら先輩が強いと言ったって、あれだけの数を相手には……。

『黙れ』

フリードがさらに先輩を挑発しようとか何かを言いかけたその時——世界から先輩の声以外の音が消えた。同時に、先輩を中心に恐ろしいまでの力が急速に溜まり始めたのを感じた。映像で見ている俺にすら届いてしまうほどの力が。

刹那、先輩の様子が一変した。明確な怒りの表情と共に、先輩は天に向かって咆哮した。

『ディオドラ・アスタロトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

「せ、先輩……」

ライザーの時も、コカビエルの時も、確かに先輩は怒っていた。だけど、それは「静かな怒り」だ。感情を理性で抑え、制御していた。対して今の先輩はそれとは真逆だった。怒りという感情を完全に解き放っていた。まるで、その必要が無いと言わんばかりに。

雄叫びと共に、先輩の体……正確には先輩のポケットから飛び出した『王の駒』から天に向かって緑色の光の柱が伸びて行った。

『……奪わせたまるか。貴様等ごときに!!……これ以上あの子から何かを奪わせたまるかアアアアアアアアア!!!』

「これは……神崎君の力が世界そのものに干渉を!?!」

「ッ! 見ろ! 神崎殿の駒が……!」

会長の言う通り、いつしか戦場そのものが震えていた。大地も空も何もかもが、まるで何かに怯えるように激しく。

さらにサイラオーグさんが指差した直後、先輩の『王』の駒が光と共に砕け散った。いつの間にか鎧を纏っていた先輩の周囲を、まるで衛星の様に欠片達が漂う。

変化はそれだけじゃなかった。欠片達はさらに形を変えていった。大きさも形もバラバラのそれらは、まるで機械のパーツみたいだった。

そして、それらのパーツは意思を持っているかの様に一齐に先輩に向かつて飛んで行った。先程の緑色のものとは違う激しい光が先輩を包み込み、俺はその激しさに耐え切れず目を瞑った。

時間にして五秒くらいだっただろうか。でも、その僅か五秒の間に、先輩の姿は全く異なるものへと変貌していた。

全身を覆っていたはずの鎧は、腕や足などの部分しか覆っておらず、その他の部分は体が剥き出しだった。頭部も兜というかヘッドギアみたいになって顔が完全に露出していた。

「何だあの姿は……!? リアス！ お前は何か知っているのか!?」

「し、知らないわ！ あんなのは見た事が……！」

「……嘘。そんな、どうしてアレが……！」

誰もが先輩の姿に驚愕する中、アガレスの姉ちゃんが一人違う様子を見せていた。まるで、ありえない、信じられない様なものを見てしまったかのような表情を顔に張り付けていた。

「アレは……間違い無く、先日送った強化プランの姿そのもの！ 何故神崎様がアレを纏って……！」

「アガレス！ 知っているのなら一人で納得していないで説明しろ！」

サイラオーグさんが説明を求めようとしたその時、先輩が静かに動き始めた。とてもさつきまで怒りの叫びを放っていたとは思えない、普段よりもさらにクールな顔で、肩から伸びるスラストアームみたいな所から大剣をゆっくりと引き抜いた。

「ッ……!?!」

その大剣を見た瞬間、とつともない悪寒が俺を襲った。アレは……アレはやばい。上手く説明出来ないけど、俺の中の何か絶対触れてはならないと警鐘を鳴らしていた。

『あ、あのですね。今のはあくまでもディオドラ坊っちゃんの事でして、決して僕の事を言ったわけでは……』

『・・・失せろ』

『あつハイ』

すげえ・・・あのフリードに一睨みで道を譲らせたぞ。流石のアイツも、今の先輩を目の当たりにして逆らうほどイカれてないみたいだな。

フリードから『禍の団』の連中に視線を移す先輩。一齐に騒ぎ出すヤツ等に向かって、先輩は静かに・・・だけどその中に強い想いを込めて口を開いた。

『・・・俺はアシアを助ける。邪魔をするならば・・・誰であろうとヴォーダの闇に還してやる!!!』

紡がれたのは誓い。そして俺は知っている。先輩の誓いは・・・何が相手だろうと、何が待ち受けていようと、絶対に果たされるものだと！

『ひ、怯むな！ かけえ！』

数で言えば、『禍の団』が圧倒的だ。だけど、今の先輩を前に、そんな戦力差など無に等しいのではないか。・・・俺はそう思った。

・・・
・・・
・・・

そして場面は今へ戻る。俺の予感のまましく的中した。

先輩達と『禍の団』との戦いは、開戦直後から最早戦いですらない一方的な蹂躪劇となっていた。小猫ちゃんのお姉さんもカテレアさんも墮天使の子達三人も・・・元々実力者だった彼女達は存分にその力を発揮して敵を沈めていった。

特にカテレアさんの活躍は一騎当千と言えるものだった。魔力の質とでも言えばいいのか、それがとにかく桁違いだった。信じられるか？ 野球ボールくらいの大きさの魔力弾で上級悪魔を十人以上一度に葬ってるんだぜ？

そこにさらにオーデインのじいちゃんまで参戦してた。前に会った時はただのスケベなじいちゃんだと思っただけど、カテレアさん以上の力で向かって来る敵を殲滅していた。

「ただ俺は……俺達の視線は神崎先輩にくぎ付けになっていた。

『き、来たぞー!』

『止める! 止めギャアアアアアアアア!!』

肩のスラスターから耀きを噴かせ、最早俺なんかじゃ視認出来ない速度で百メートル以上の距離を一気に駆け抜ける先輩。たったそれだけで、進路上にいたはずの敵が悲鳴と共に次々と落下していった。あのヤバい剣に斬られたのは間違いないだろう。でも、それにしても目立った傷とかが見られない。

「……リョーマ。まさか、こんな時にまで不殺を守るっていうの……?」

不殺? ……ツ、そうか! 確かコカビエルを倒した時に先輩が言っただじやないか。人は殺さず、その怨念を殺すって。だから先輩はあえて致命傷を与えずに……!

「……ですが、あれではある意味、死よりも辛いのではないのでしょうか」

「どういう意味、ソーナ?」

「あくまでも私見ですが、神崎君は手加減する事によって相手の命では無く心を奪うつもりではないでしょうか。体では無く心を斬り、精神的なダメージを与える事で二度と立ち上がれなくするつもりなのかもしれません」

それって、サイラオーグさんがヤンキー野郎にやったのと同じ……? でも、あの時とはダメージの質が明らかに違う。だって、ヤンキー野郎は震えながらも最後まで意識は保っていた。だけど、先輩に斬られたヤツ等の中には死んだように動かなくなっているヤツもいる。

「奪うどころか、あれは完全に精神が崩壊している。最早まともな生活は送れないだろう。……神崎殿も酷な事をする。いつそ楽にしてやればいいものを」

「……それだけリョーマの怒りが凄まじいという事よ。私達ですらここまで憤りを感じているのよ。目の前でアーシアを攫われた彼の気持ちはそれ以上のはずだわ」

部長の言う通りだ。先輩はアーシアの事をとても大切にしていた。それこそ“天使”なんて言うくらいに。

：俺は先輩の事をわかってなかった。俺の知ってるあの人は、いつもクールで、カッコ良くて、俺なんかじゃ足下にも及ばない滅茶苦茶すげえ力を持っているのに、決してそれをひけらかさず、常に誰かの為にその力を使っている。かと思えば、命のやり取りをしていたはずの相手を土下座までして助けようとする。正に完璧超人を越える聖人みたいな人だ。

そんな先輩の事を、俺は心の底から尊敬している。だけど、そんな先輩を、どこか人間離れした存在として見ていたのも確かだ。駒王協定の時に聞かされた先輩の正体・・・別の世界からの来訪者というのも、その思いを強くさせた原因だった。

でも、そんなのは所詮俺の勝手なイメージの押しつけだったんだ。こうして、大切なものを奪われて怒る先輩はどこまでも人間らしくかった。

『ありえん！　ありえん！　数はこちらが圧倒しているのだぞ！　それなのにたった一人の人間ごときに何故・・・!?!』

狂乱したかのように喚く悪魔を見て、俺は哀れみの感情を抱いた。こいつら、きつと先輩の事を何にもわかってなかったんだろうな。 ”ごとき”なんて口にする時点でお前らはすでに自分達の命運を決定づけてたんだよ。

『・・・俺は一人じゃない』

怒号が飛び交う戦場の中、先輩の声だけがハッキリと聞こえて来た。

『リアスや支取さんのおかげで戦いに必要な知識を得られた』

魔力弾の雨を剣の一振りで吹き飛ばしながら先輩が言葉を紡ぐ。

『木場君やゼノヴィアさん、真羅さん達のおかげで強くなれた』

自棄になって突っ込んでいった悪魔の腹に先輩が膝から突き出たブレードを深々と食い込ませる。

『朱乃や兵藤君達のおかげで折れる事無く鍛練を続けられた』

『な、何を言って・・・!?!』

『みんなが俺に“力”を与えてくれた。そして、俺の中で一つになったその“形”をアガレスさんが示してくれた。彼女達の誰か一人でも欠けていけば、きつとこの力は得られなかっただろう』

ほんの一瞬だけ目を閉じる先輩。きつと、あの特訓の日々を思い返していたんだろう。何故かそう確信出来た。

『こんな俺をみんなは支えてくれた。だから負けない。みんなの想いが込められたこの力が・・・貴様等ごときに負けるわけが無い!!!』

「先・・・輩・・・」

俺は・・・俺なんか、飲み物を用意するくらいしか出来なかったのに、先輩はそんな俺をそんな風に思っていてくれたんですか・・・。

「・・・イツセー君、泣いているのかい？」

「ッ！　ば、馬鹿言え。何で俺が泣かないといけないんだよ」

「でも・・・」

「そ、そういうお前だって泣いてるじゃねえか」

「え？」

木場の両目から涙が流れている。見れば部長や朱乃さん、他の子達も涙ぐんでいた。

「・・・なるほど。これこそが神崎殿の強さの本質という事か」

そんな俺達を余所に、サイラオーグさんが一人モニターを見つめながら呟いた。その顔は、どこか眩しいものを見ている様な感じだった。

「・・・見届けましょう、みんな。リョーマの戦いを。そして願います。彼の勝利・・・そしてアシアの無事を」

いつの間にか、一緒に観戦しようとしていた他の上級悪魔の方々は姿を消していた。きつとあの戦場に向かったのだろうと部長が言う。残ったのは俺達若手悪魔だけだ。

俺達はそれぞれ客席に着いた。本当なら俺も先輩の元へ駆けつけて一緒にアシアを助けに行きたい。でも、今の俺達の実力でそんな事をすれば、かえって先輩の邪魔になるだけだ。

部長もそれがわかってるからこそ、見届けようと思ったんだろうと思う。本当なら誰よりもあの場へ飛んで行きたいだろうに。

・・・なあ、ドライブ。お前も願ってくれよ。先輩の勝利とアーシアの無事を。

——ふ、願う必要など無いだろう相棒。フューリー様があの程度の敵に負けるはずが無い！

ああ、そうだよ・・・フューリー様？

——愚かな連中だ！ あの程度の数を揃えた所でフューリー様に勝てると思っっているのか！ あの方はかつてこの俺の尻尾を綺麗にぶった切ってくれたんだぞ！ それがパワーアップとかもう相手からしたら絶望しか残らないだろうさ！

ド、ドライブ・・・まさか、また昔のトラウマが!?

——ふははは！ 見る相棒！ 悪魔がゴミのようだ！ フューリー様にたてつく愚か者どもマジザマア！・・・ザマア。

うおおおい！ テンション！ テンションの落差！

——アルビオン。どこにいるんだアルビオン？ 俺はここだ。一人にしないでくれ・・・。

ドライブさーん！ 戻って来てえ！ ここにアルビオンさんはいませんか！

今にも消えてしまいそうな声を出すドライブに必死に呼びかけながら、俺は先輩の戦いへと意識を向ける。・・・一度ちゃんとしたカウンセリングとか受けさせてあげた方がいいのかもしれない。

第八十一話 舞い降りる剣

アザゼルSIDE

ストレスの原因つてのは実に多種多様だ。それは悩みだったり、辛い出来事との直面だったり、自分の理解を越える存在が、これまた理解を越える様な行動を次々と巻き起こしていく様を見せつけられたり様々だ。

最後だけやけに具体的なのは気にしてはいけない。ここで俺が言いたいのは、ストレスを抱えるのは何も人間だけじゃ無い。墮天使、悪魔、天使だって同じだ。

墮天使総督なんて面d・・・責任ある立場ではあるが、俺だって嫌なもの嫌だと言うし、辛いものは辛いと思う。・・・その結果が胃の不調なんだよなこれが。

でもな、ふと思つたわけさ。今そこにある現実を、目の前にいる存在を否定する事の何の意味があるのかつてな。自分がいくら目を瞑ろうと、どれだけ耳を塞ごうと、それらは決して自分の前から消える事は無い。小難しい理屈も、くだらねえ常識も必要無い。・・・ただ、ありのままに受け入れちまえばいいんだ。これはこういうものだって納得すればいいんだよ。

その考えに至った時：俺の心は翼が生えたように軽くなった。まあ、実際生えてるんだが。

ここ最近悩まされていた胃の痛みも嘘の様に消え去った。これでまた美味しい酒が飲めると思うと今から楽しみで仕方無い。

ありのまま・・・なんていい言葉なんだろう。確か人間界で少し前に話題になった映画の主題歌の歌詞にもあったな。思いだしたら歌いたくなつちまつたぜ。

「な、何だ!?! 急に鼻歌を歌い出したぞこの男!?!」

「気をつけろ! あ的笑み・・・何か仕掛けて来るかもしれんぞ!」

「・・・私には何か悟りを開いたかのような表情に見えるのだが」

・・・ああ、そうか。そういえば今俺つて『禍の団』の連中とやりあつてたんだっけか。あまりにも晴れ晴れとした気分について忘れて

しまつてたぜ。

「くそー！ 早くあちらの救援に向かわなければならぬというのに！」
相手の一人がチラリと目を向ける先では、フューリーとその眷属達が『禍の団』相手に無双していた。ふふふ、実に爽快な光景じゃないか。

「止めとけ止めとけ。お前らじゃあいつ等には逆立ちしたつて勝てやしねえよ。それよりもここで俺とゆっくりしていけよ!!!」

「貴様！ 我等を愚弄・・・というかその顔止めろ！ 何故かはわからんがもの凄く腹立たしい！」

おいおい、このワイルドイケメン様の顔を羨むのはわかるが、そんな言い方しなくてもいいじゃねえか。俺が本気を出せば悪魔だろと天使だろうとイチコロ何だぜ？・・・なのによ、何でそんな俺よりも先に周りの連中ばかり結婚するんだよ。ついこの間も一人婚姻してたしよ。

「一人身は俺だけつてかちくしよようがああああああ!!!」

「『ぎやああああああ!!!』」

・・・しまつた。ついイラついて三人とも消し飛ばしてしまつた。いさいいさい。俺は趣味に生きる男なんだからな。

「・・・アザゼル。笑つたり怒つたり、忙しい」

「ん？ おお、こつちから会いに行こうと思つてたのにお前の方から来てくれるとはな」

もうちよつとやそつとの事じゃ俺の心は乱れないぜ？ こうしてお前が・・・『無限の龍神』オーフィス様が姿を見せたつてほら、俺はこんなにも穏やかな気持ちでいられる。

「前に会つた時はジジイだったくせに今回は黒髪少女かよ。で、何となく察してるが、お前さんは何をしに来たんだ？」

「ん」

ああ、やっぱりアイツを見に来たんだな。さつき消し飛ばした悪魔と同じ方向へ顔を向けるオーフィスに俺は確認する事も無く納得した。

「そうかそうか。なら存分に見て行けよ。ここでゆっくりな!!!」

「・・・」

「何だよオーフィス？ お前が見たいのは俺じゃ無くアイツだろ？」

「アザゼル。その顔は止める」

「お前までそんな事を。いいか？ 俺ってば人間界じゃそりやもうモテモテで・・・」

「アザゼル。オーフィスが言っているのはそういう事では無い」

「見つめ合う俺達の前に舞い降りたのはタンニーンだった。」

「よお、タンニーン。今のはどういう意味だ？」

「気付いていないのか？ 今のお前の顔・・・果てしなく不愉快だぞ。もっと簡単に言うならば凄くムカつく」

「へ、モテないオスの嫉妬は見苦しいぜタンニーン」

「タンニーン。久しい」

「オーフィス。貴様には聞きたい事がある。あれほど世界に興味を示さなかった貴様が今頃になってテロリストの親玉になるなどどういうつもりなのだ」

「あ、無視ですか。そうですか。」

「我が求めるのは静寂。ただそれだけ」

「静寂だ？」

「我は次元の狭間に戻りたい。けれど、今そこにはグレートレッドがいる。我はグレートレッドから次元の狭間を取り戻す」

「・・・なるほど。何となく状況が理解出来たぜ。つまりこいつは、故郷に戻りたいがために、『禍の団』を使ってグレートレッドを次元の狭間から追い出すつもりなのだろう。」

「・・・だけど、我は知った。グレートレッドを倒す可能性のある存在を」

「それがアイツか」

「我とフューリーでグレートレッドを倒す。そして、我は静寂を得る」
よかったなフューリー。世界最強からの直々のスカウトだぜ。はは・・・規格外×規格外とかそれなんてハルマゲドン？

「それはいいがな、オーフィス。アイツがお前の言う事を素直に聞くと思うか？ アイツが戦うのはアイツ自身の日常を守る為だ。お前

という存在はそこに入っていない」

「日常？ それに入ればフューリーは我に手を貸す？」

「さてな。それはアイツ自身に聞きな」

俺の言葉に何やら考えている様子のオーフィス。——その時だった。ヤツの横に魔法陣が出現し、そこから一人の男が姿を現した。そいつは自らをアスモデウスの血を引く者……クルゼレイ・アスモデウスと名乗った。

「アザゼル。墮天使の総督である貴殿に決闘を申し込む」

「首謀者様のご登場か。いいのか？ こんな所で俺を相手にしていい？ お前のお仲間のデイオドラ・アスタロトでも助けに行つてやれよ」

デイオドラの名を聞いて、オーフィスが小さく首を横に振った。

「デイオドラ・アスタロトには我の蛇を渡した。アレを飲んだデイオドラ・アスタロトを倒すのは容易ではない」

「それはどうか？」

「？」

首を傾げるオーフィスに俺は説明してやった。

「いい事を教えてやるよ。デイオドラはフューリー直々に片をつけに行く。そしてヤツは以前俺にこう言った。……自分はこの世界最強の存在に攻撃されようと、皮がささくれる程度だとな。さーて、この世界で最強つつたら誰だっけな、オーフィス？」

オーフィスは答えない。だが、ヤツの眉が一瞬ピクリとしたのを俺は見逃さなかった。

「んじやまあ、アイツの事は置いておいて。そろそろ始めるとするか」俺とクルゼレイが互いに戦闘態勢に入ろうとした正にその瞬間、またしても転移魔法陣が出現した。

……やれやれ。お前まで出て来るのかよ。

刻まれた紋様を見て、俺は呆れの混じった溜息を吐くのがあった。

アザゼルSIDE OUT

カテレアSIDE

「ふーりはははは！ 弱い！ 弱過ぎですわ！」

フューリー様の覚醒シーンを間近で見ることが出来た私のテンションは最早天元を突破した！ もう何人目になるかわからない悪魔を消し飛ばしながらあの方の雄姿を目に焼き付ける！ ああ・・・気を抜けば昇天してしまいそう。

「・・・はっ！ 固まっている場合ではありません！ ここでしつかり私が見える女である事をアピールしなければ！」

そうすればきつとフューリー様は私を認めてくださる！ つまり・・・！

私が敵を倒す↓フューリー様に認められる↓正式な眷属に昇格↓私大勝利！

「完璧な作戦ですわ！ ふ、ふふふ・・・自身の聡明ぶりが恐ろしい・・・！」

「カテレア・レヴィアタン！ 『殺戮の人形姫』として悪魔の敵を次々と葬りさつていたはずの貴様が何故そちら側にいる！」

「・・・また懐かしい呼び名を持ち出して来ましたね」

『殺戮の人形姫』・・・大戦時まで呼ばれ続けていた私の呼び名だ。確かに、私はかつて旧レヴィアタンに従い、言われるがままに敵を滅し続けていました。それが私の使命だと信じて」

あの頃の私は正に人形だった。感情らしい感情など無く、世界は全て灰色に見えていた。それすらも当時の私は変だとは思わなかった。これが普通なのだと。このままずっと生きて行くのだとしか感じなかった。

そんな私が初めて感情を覚えたのは・・・皮肉にも死の瀬戸際だった。今でも鮮明に思いだせる。私に向かって迫り来るドライグの巨大な尾を。そして・・・それを一刀の下に斬り飛ばしたフューリー様のお姿を。

死の恐怖と生の喜びを同時に抱いたあの瞬間、私の世界に色が着いたのだ。フューリー様の鎧・・・背中から吹き出す炎・・・その美しい『蒼』に私は目を奪われた。

あの方はきつと気付いていないだろう。セラフォルを救うと同

時に、私を救ってくださった事に。カテレア・レヴィアタンという人形”に色を授け、ただのカテレアにしてくれた事に。

「・・・あなた達にはわからないでしょう。色の着いた世界がどれほど美しいのか。感情を持つ事がどれほど幸せなのか。永遠に得られないと思っていたものが手に入るのがどれほど嬉しいのか」

全てはあの方のおかげ。今の私があるのはあの方のおかげ。だから私はここにいる。あの方の敵を滅し、あの方の為に命を捧げる。あの時からずっと・・・私の願いはそれだけだ！

「殺戮の人形姫”カテレア・レヴィアタンはあの時死にました。ここに立っているのは、あの方を想い戦うだけのただのカテレアです！」

叫びながら放った魔力弾が相手を消し飛ばす。感謝します名も知らぬテロリスト。あなたのおかげで私は改めて自分の気持ちを確認出来ました。

「さあ、次の相手は・・・」

「カテレアさん」

いつの間にかフューリー様が私のお傍に立っていらっしやった。ああ・・・今のこの方の姿は本当に危険だ。気を抜けば鼻から赤黒い液体を吹き出してしまいそう・・・。

「カテレアさん。俺は今から神殿へ向かいます」

「承知しました。ザコは私や他の者に任せて、フューリー様はディオドラ・アスタロトと決着をつけて来てください。離れていても、私の心はいつもあなたのお傍にあります」

「・・・ありがとうございます。カテレアさんもどうかご無事で」

「ツ・・・！」

私の横を通り抜け、フューリー様は神殿へ向かって飛んで行った。その場に残された私の頭に、たった今フューリー様から頂いた言葉が蘇る。

「フューリー様が、私の無事を祈ってくださいました」

「な、何だ？ 急に動かなくなっただぞ」

「よくわからんが今が好機だ！ 今の内に一斉攻撃で仕留めるぞ！」

カテレアさんに無事でいて欲しい↓カテレアさんが大事↓カテレアさんが好き↓カテレアさんは俺の嫁!↓カテレアさんに俺の子どもを産んで欲しい↓二人は末永く幸せに暮らしましたとき!

「えんだあああああああああああ?!!」

「いやあああああああああああ?!!」

「眷属なんて余計な過程は必要無い!?!?いうわけですね! ええ! ええ! むしろ望む所です! 私の方はいつでも準備出来ていますわフューリー様あああああ!!!」

私の制御から離れた魔力が暴走し、至る所で激しい爆発を起こす。それに巻き込まれた何十人もの悪魔達が消滅したが、それすらも今の私には二人の未来を祝う祝砲に見えた。

「夫を助けるのは妻の務め! さあ、『禍の団』!! 今の私を倒したければ、この倍の数でかかって来なさい!」

カテレアSIDE OUT

アーシアSIDE

「馬鹿な・・・馬鹿な・・・!!」

頭を掻き筆りながら叫ぶディオドラさん。ここに連れて来られてすぐ、彼は私に外の様子を見せて来た。リヨーマさん達の死に様を私に見せ、絶望させる為に。

けれど、リヨーマさん達は死ぬどころか逆に次々と『禍の団』のみなさんを倒していった。それがディオドラさんにとっては大きな誤算だったみたいだった。

「ディオドラさん。もう止めてください。今からでも遅くありません。罪を償いましょう」

血走った目で私を睨むディオドラさん。・・・怖いけど耐えて見せる。この人には絶対に弱音を見せたくないから。

「何だよアーシア。何でキミの目はそんなにも綺麗なんだ。どうして・・・どうして真実を伝えたのに絶望しないんだよ!」

真実・・・私を手に入れる為にディオドラさんがやった事は既に聞かされた。きつと、一人でいたらこの人の言う通り絶望していたかも

しれない。

「今の私にはリョーマさん達がいてくれます。だから絶対に絶望なんてしません！」

みなさんが私に勇気を与えてくれる。その勇気を胸に抱き続ける限り、私は決してくじけたりしない！

「くそー。くそー！ どの時もこいつもフューリーフューリー！ あんな人間の何が凄いつてんだ！ 所詮は人間なんだぞ！ 種族も家柄も僕の方がずっと優れているんだぞ！」

まるで子どもの様にわめきたてるディオドラさんの姿に、私はちよつとだけ憐れみの感情を抱いた。でも、それ以上にこの人の事が許せなくなつた。この人は今、リョーマさんの事を馬鹿にした。あんなにも誰かの為に一生懸命なあの人を馬鹿にする事なんて誰にも出来ないし、してはいけない。

「リョーマさんを・・・あの人の事を悪く言わないでください」

私は右手を振り上げた。それを見たディオドラさんが小馬鹿にした様な表情で言葉を発する。

「はは、何だいその手は。もしかして僕を殴るつもりか？ いいよ、やってごらん。どうせ効きやしないんだから」

言われなくてもわかっている。非力な私が叩いた所で、何の痛みも感じないかもしれない。それでも手は止めない。あなたなんか絶対に屈しないと示す為にも！

『・・・アーシア・アルジエント』

(え・・・?)

頭の中に直接届いた声。聞くだけで深い安心と幸福を感じられるその声はまるで『聖母様』の様な声だった。

『私が力を貸します。その男に見せてあげなさい。あなたの怒りを。あなたの勇気を』

「え、えー！ー！ーいっ!!!」

聖母様のお声に従って、私はディオドラさんの顔に向かって全力で手を振り降ろした。そして、私の手がディオドラさんの頬に触れた瞬間、彼の姿が消えた。

「ぶべらっ?!?!」
「ふえ．．?!?!」

つぶれたヒキガエルの様な声が聞こえたと思ったら、五十メートルくらい離れた神殿の壁が音を立てて崩れ落ちた。何かかと思つてそちらを向くと、そこには壁に体をめり込ませているディオドラさんの姿があつた。

「あわわわわ！ わ、私がやっただんですかアレ!?!」

わ、私にこんな力が．．!?! はっ、もしかして、リョーマさんと一緒に頑張つた腕立て伏せの効果!?!

『さあ、今ですアーシア・アルジェント。呼びなさいあなたの“騎士”を。この世界であなたが最も信頼している彼を』

思い当たる人物は一人しかいなかった。

(．．．あなたにはご迷惑をかけてばかりですね。帰つたら私も強くなるよう努力します。だからどうか．．．今この時だけはあなたの名を呼ばせてください)

私は跪き、両手を重ねた。——けれど、その祈りを捧げるのは主では無く．．．。

「リョーマさん!」

彼の名を叫んだ刹那、神殿の天井から甲高い音が鳴つたと同時に、それが一瞬で細切れとなつて消滅した。

「．．．確かに届いたよ。キミの声が」

そして、天井があつたはずの部分に生まれた穴を通り、あの人が．．．私の中で一番強くて、一番優しく、そして．．．一番大好きな“騎士様”が舞い降りて来た。

第八十二話 『F』

俺は楽観視していたのかもしれない。確かにペロリストは救いようが無い。だが、ヤツ等だつて越えてはならない線がある事はわかっているはずだと。

そんな俺の考えの結果がこれだ。ディオドラ・アスタロト・・・いやD。心の中でまであんなクズの名前を呼びたくない。もうDで十分だ。

ともかく、Dは一線を越えた。アーシアを誘拐し、力づくで自分の物にすると言い切った。ならば、俺はどうするか？ そんなのは決まっている。ヤツに協力する為に集まった他のペロリスト共も同じだ。

D 〓ぶちのめす

ペロリスト 〓ぶつ飛ばす

つまり、D+ペロリスト 〓全滅の式が出来上がったわけだ。もう何も考える事は無い。みんなが与えてくれたこの新しい力で連中は：ペロリストは全滅だあ！

「おおおおおおおおお!!!」

考えるんじや無く、感じるままに剣を振るう。動きを再現するんじや無く、自らの意思で剣を動かす。もつと強く！ もつと速く！アル 〓ヴァン先生よりももつと！

「な、何なんだこいつのパワーは!?!」

島田悪魔（仮）を斬り伏せ、俺は突き進む。もちろん『手加減』はかけてある。この力はみんなを・・・アーシアを守る為の力だ。敵を殺す為のものじゃない。

・・・なんてカツコイイ感じで言ってみるが、本音はただビビっているだけだ。でも、ヘタレと言われようが俺は人殺しなんかしたくない。・・・その代わり、死なない程度にはぶちのめすけどな。

『アンタが来るまで、あの子はウチが守る。せやからアンタは思いのままに戦いんさい!』

戦闘開始直前、オカンはそう言ってくれた。オカンがついているな

らばアーシアは絶対に大丈夫。なにせ・・・オカンだからな！

「ツ・・・！ 黒歌！ 右後方から魔力弾が来るぞ！」

「にやつ！」

黒歌が魔力弾を回避する。彼女達の位置、敵の動き、この戦場の状況全てが俺の頭に逐一送られて来る。アガレスさんが追加したセンサーのおかげだろう。

その情報を元に、俺は黒歌達に指示を出していた。バラバラの場所にいるはずなのに、どういうわけか俺の声は彼女達に届いている。おそらく駒を持っている事が関係しているのだろうが、考えるのは後だ。

ともかく、俺はリアス、支取さんから教わった事を思い出しながら、拙いながらもみんなに指示を出していた。

「ミツテルトさん！ 黒歌と合流して反撃を！」

「はいっす！」

「カラワーナさん！ 左側の層が薄い！ あなたの突破力なら抜けられます！」

「はっ！」

「レイナーレさん！ 前方の敵に全力で砲撃を！」

「了解しました！ Aモードで片付けます！」

「カテレアさん・・・は余計な事は言わない方がいいですね。あなたの判断に任せます」

「お任せください！（ふふ、それだけ私の事を信頼してくださいっているという事ですね！）」

・・・やつぱり彼女達は凄い。こんな指示でよくもまああれだけの動きが出来るもんだ。・・・指示しなくても彼女達の判断に任せただ方がいいかもしれない。素人指示じゃ逆に迷惑になるだろうし。

（にゅふふ、何だかご主人様に見守つてもらつてる気分じゃ）

（確かにここは二人一組で臨んだ方が安心出来るっす）

（何故あの方の声が聞こえるのかはわからないが、おかげで囲みを抜けられた）

（Aモードは乱発出来ない分使いどころが難しい。だからこそ、敵が

密集していたこのタイミングだったわけね)

(ああ、でも少しものたりませんわ！ 私にも指示を！ あなたの言われるがままに戦えるなんて最高ではありませんか！)

よし決めた。敵の攻撃にだけ注意して、後はみんなに任せよう。それに、そろそろ彼女の元へ向かいたいしな。

黒歌達に突入の旨を伝え、偶然近くにいたカテレアさんにも口頭で説明し、俺は神殿へ向かった。センサーには正面から見て最奥のフロアに、さきほどからずっと動いていない二つの反応が映っている。おそらくアジアとDだろう。

位置がわかっていているならわざわざ馬鹿正直に正面から突っ込まなくてもいい。そう判断してちようどフロアの真上に移動したその時だった。

——リョーマさん！

その声を聞き間違うわけがなかった。俺は右の腰から剣を抜き、それを神殿に向かって振った。瞬間、そこに大きな穴が開き、そこから覗いた場所にはあの子がいた。

「・・・確かに届いたよ。キミの声だ」

俺は彼女の元にゆっくり降り立った。そして、改めて彼女の名を呼んだ。

「迎えに来たよ、アジア」

「リョーマさん！ わ、私、絶対諦めないって！ あの人の言う通りになんかなあってたまるもんかって！ リョーマさんが・・・みなさんがきつと来てくれるって！」

「うん、わかっている。わかっているよ。・・・よく頑張ったな、アジア」
「うぐ・・・リョーマさ・・・ひぐ・・・」

ボロボロと涙を流すアジアを力一杯抱きしめる。怖かったろう。辛かったろう。こんな場所でペロリストと二人でいなければならなかったんだから。

「・・・」

彼女を抱きしめたまま、俺は右腕を動かした。直後、装備されたシールドが魔力弾を弾き飛ばす。

「なっ!? こちらを見ずに・・・!?」

魔力弾を撃つて来た張本人・・・Dが唾然とした顔でこちらを見ている。なんか顔がエライ腫れてるんだが・・・。

「アーシア。ヤツはどうしたんだ?」

「ふえっ!? あ、あれはその、聖母様が・・・」

「聖母様?」

『ウチの事や。ちよっとお灸を据えてやろう思うてな。その子に力を貸してあげたんよ』

「・・・なるほど、オ・クアーンの力か」

「オ・クアーン様?・・・ええ!? そ、それって確かりョーマさんの・・・!!」

「その話は後でしよう。今はヤツに報いを受けさせる方が先だ」

俺はアーシアを離し、ヤツの方へ向かって一歩進んだ。よお・・・会いたかったぞD。お前には散々してやられたからな。お礼がしたくてしたくてたまらなかつたぞ。

「ふ、ふふ、随分早いご到着じゃないかフューリー。もう少しでアーシアと結ばれる所だったのに、空気の読めないヤツだ」

「・・・人それを負け惜しみという」

「なっ!?」

「俺は無駄話をしに来たわけじゃない。アーシアを助けに来たんだ。そのついでにお前を倒す。さっさとかかって来るがいい」

「舐めるなよ人間風情が! 僕を外の連中と同じと思うな! 世界最強のドラゴン・・・オーフィスから『蛇』を貰った僕に勝てると思つてごぶっ?!?!?」

べらべらとくっつちやべっている間に、スラスターの速度を上乗せした拳を全力で叩き込む。俺は正義の味方じゃない。アホ面で隙を曝け出しているヤツがいれば殴るのは当然だ。

何かを潰したり砕いたりする感触が拳に伝わって来る。生々しくて気分が悪いが、それを悪いとは微塵も思わない。俺はこいつをぶちのめす。そこに躊躇いや後悔は微塵も無い!

思いつきり腕を振り切り、Dを殴り飛ばす。打ち上げられたDは天

井に激突し、そのまま落下して来た。

「・・・それで、最強がどうしたって?」

「うぶ・・・おえええええええええ」

何か色々混ぜざった物を口から吐き出しながらDが呻く。立てよD。お前がやらかした事はこんなもんじゃ済まされないうんだぞ。

「ぐう・・・はあ・・・! あ、あはは、ちよつと油断しちやったかな。そうだとも、~~也~~絛悪魔で現魔王ベルゼブブの血筋である僕がこんな無様な姿がふつ?!?!?」

またしゃべりだしたので殴る。学習能力が無いのかコイツは?

一度支取さんに戦いの心構えを教え・・・駄目だな。こんなクズを彼女に近づかせたくない。

「真面目にやれ。・・・それとも、わざとやっているのか?」

拳を引きながら崩れ落ちるDを見下ろす。・・・あ、十円ハゲ発見。はは、ダツセエ。どうせアーシアをどうしてやろうとかそんなふざけた事を悩んだりしてそうだったんだろう。ペロリストの悩みなんてどうせそんな下らない物に決まっている。

「痛い痛い痛いいいいいいい!! 何でだよ! 何で僕がやられてるんだよ! オーフイスの・・・世界最強の力を与えられたのにどうして?!?」

はっ、最強? 最強だと? 上等じゃないか。ペロリストの親玉ごときから与えられた力がどれほどのものか見せてみるよ。

「だったら、そこで無様に這いつくばってないで、俺の皮をささくれさせてみせろ!」

「い、意味がわからなきやばらつ?!?!?」

サッカーやろうぜ! お前ボ!?!?!ルな! のノリでDの腹を思いっきり蹴る。走り込みで鍛えた脚力は伊達じゃない。ヤツの体は正にボールの様に壁に向かって吹っ飛んで行った。

壁に突き刺さったDを確認し、俺がアーシアの方を向くと、彼女は少し顔を青ざめさせていた。

「あ、あの・・・ディオドラさんは?」

「大丈夫。死んではいない」

「そ、そうですか」

はあ・・・あんなヤツまで心配するなんて。この子の天使っぷりが少し心配になってしまった。いいんだよアーシア。あんなヤツまで心配する必要なんてこれっぽっちも無いんだよ？

「さあ、すぐにここから出よう。みんなにもキミの無事を教えないと・・・」

「ふ、ふひ、ふひひひひー」

・・・やれやれ、まだやる気か。呆れと共に声の方へ振り向こうとしたその時、突如神殿全体が大きく揺れ始めた。

「きゃっ!? な、何ですか!？」

「よくわからないが、急いだ方がよさそうだ」

アーシアを抱きかかえ、俺は穴から脱出した。神殿の揺れはさらに激しさを増し、いつ崩壊してもおかしくは無い様子だった。

ともあれ、まずはアーシアを安全な場所まで連れて行かなければ。そう判断し、俺は神殿から離れるのだった。

S I D E O U T

二人が去り、神殿に残されたディオドラは壊れたかのように笑い続けていた。・・・いや、この時点ですでに彼は壊れていた。最早アーシアへの執着は消え、フューリーへの憎悪だけが彼を動かしていた。

「殺す！ 殺してやるぞフューリー！ ひひひ、僕にはもう一つ切り札があるんだ！ 『皇帝機』さえあれば貴様なんか・・・」

それは突然だった。ディオドラの胸が光で貫かれる。呆然と自身を貫く光を見下ろしながら、ディオドラは永遠の眠りについた。

「・・・壊れた貴様に『皇帝機』は任されん。元々これは私の物になる予定だった。それが少し早まっただけの事」

既に応える術を失ったディオドラの横を通り過ぎ、彼を手にかけた張本人・・・シャルバ・ベルゼブブは奥に設置された玉座へと目を向けるのだった。

イツセーS I D E

「ツ……！ みんな、あそこ！」

先輩が神殿へ突入して十分くらいが過ぎた頃、先輩はアーシアをその腕に抱え戻って来た。ま、当然だけどな。神殿が揺れ始めた時は焦ったけど、あんな野郎に先輩が負けるわけがないっての。

「アーシア……よかった。本当によかった」

ゼノヴィアが涙ぐんでいた。彼女にとってアーシアは親友だからな。顔には出さなかったけど心配でたまらなかったんだろう。

ともかく、アーシアは助かった。他の『禍の団』の連中もほぼ殲滅されてるし、めでたしめでたし……。

「……まだだ。見ろ、神殿から何か出て来るぞ」

「え？」

表情を緩めず、サイラオグさんが神殿を見据える。その時だった。神殿が崩壊し、その中心から何かが姿を現した。

「……何だよアレ」

そいつは血を塗られたかのように全身が赤く染まっていた。手には黒いオーラを放つ禍々しい大剣を携えている。だけど、俺が驚いたのはそこじゃない。

「似ている……先輩の鎧に」

木場の言う通りだった。そいつの姿には先輩の鎧と似ている部分が多く見受けられた。だけど、そこに「騎士」らしきは欠片も無い。そいつから感じられるのはただただ不気味さだけだった。

『お、おお、皇帝機だ！ ついに皇帝機が動いたぞー！』

そいつの出現に『禍の団』の連中が歓声とも取れる声をあげた。皇帝機？ まさか、騎士である先輩に対抗して作ったのか？

「視覚的効果を狙ったのでしょうね。実際、アレが姿を見せたと同時に、他の悪魔達の戦意の向上が見られます」

「皇帝ならば騎士に勝てるか？ ふん、いかにも連中が考えそうなことだ」

「ですが、アレは決して見かけ倒しではありません。おそらく、私達全員で挑んでも勝てるかどうか……」

マ、マジか!? 確かにヤバそうな雰囲気はプンプンするけど、会長

にそこまで言わせるほどなのかよ！

『聞こえているかフューリー！』

『ディオドラの声じゃない・・・？』

神殿から出て来たからってつきりディオドラのヤツかと思ったけど・・・。聞いた事の無い声だ。

『私の名はシャルバ・ベルゼブブ。真なる魔王ベルゼブブの血を引く正当なる後継者だ。私は貴様を認めない。下等な人間ごときにいつまでも調子に乗らせておくわけにはいかんのだ』

何だよコイツ。回りくどい事言ってるけど、つまり先輩の事が気に食わないってだけだろ。つーかさ、今までの先輩の戦いを見てそれでも『下等』とか言うのかよ。現実を見てないガキか。

『私はこの皇帝機で貴様を討つ！。そして現魔王の血筋を全て絶やし、本当の悪魔の世界を取り戻す！』

『シャルバ！。シャルバ！』

『真のベルゼブブよ！。忌まわしき騎士へ皇帝の裁きを！』

「・・・どうやらあの皇帝機とやらがヤツ等の切り札みたいね」

って事は、アレを倒せば今度こそ終わりか。切り札を失ってまで抵抗する気がヤツ等にあれば違うだろうけど。

「あ、先輩・・・」

いつの間にか先輩がシャルバから十メートルくらいの距離に浮かんでいた。アジアは・・・。いたいた。小猫ちゃんのお姉さんに抱きしめられてる。

『来たなフューリー！。さあ、絶望せよ！。この皇帝機の前に跪くがいい！』

既に勝ったかのような声色で先輩へと話しかけるシャルバ。絶望・・・。ああ、確かに俺達だったら心が折れちまうかもしれない。だけどな、今お前の前に立ってる人をお前の物差しで計るんじゃないやねえよ。

『・・・笑わせるな。『その程度』の絶望など、何度も乗り越えて来た！』

その程度と断言した先輩。その姿はやっぱりすげえカッコ良くて、

すげえ強そうで、すげえ頼りになった。

イツセーSIDE OUT

IN SIDE

神殿から飛び出て来たものの正体に、俺は目が飛び出しそうになった。

(アイエエエエ！ ズイー||ガデイン!? ズイー||ガデインナンデ!?)

なんだろう、こんな感じで心の中で絶叫するのも久しぶりな気がする。って、そんな事は今は重要ではない。Jのラスボスさんが何でここにいるんだよ。

『んー。おそらく、本来存在するはずの無かったアンタが介入した事で、この世界にも変化が生まれたんやろうな』

つまり、俺という存在がアレを生み出したという事か？ 何それ怖い。

『まあ、あんまり深く考えんでもええと思うで。今のアンタなら負けやせえへん・・・そうやる?』

それはまあ・・・某掲示板で負ける方がおかしいと評価されてて、事実スパロボシリーズでも弱いラスボスランキングの上位に食い込む機体ではあるけど・・・。

(・・・いや、弱気になるな。例えラスボスが相手だろうと、俺は負けるわけにはいかないんだ)

「来たなフューリー！ さあ、絶望せよ！ この皇帝機の前に跪くがいいー!」

は？ 絶望？ ズイー||ガデイン相手に絶望だと？

「・・・笑わせるな。その程度」の絶望など、何度も乗り越えて来た!

本当の絶望ってのはな、量産機の癖に即死級の火力やトンデモ装甲を持ったゲストさんとか、踏み込みが足りないという理由だけで誘導兵器や必殺技を斬り払ったりするエリートな兵士の方や、何をトチ狂ったのか三機に分身する魔神様の事を言うんだよ!

「お前は本当の絶望というものをわかっていない。成す術もなく味方が散って行くのを黙って見ている事しか出来ない辛さが、決死の思いで放った一撃を理不尽な理由で無駄にされる悔しさが、多くの者が力を合わせようやく対抗出来るはずだった存在がその数を増やした時の恐ろしさが。それに比べれば・・・お前など絶望どころか脅威にすら成りえない！」

S I D E O U T

イツセーS I D E

『——お前など絶望どころか脅威にすら成りえない！』

先輩が言い放つ。お前は絶望には値しないと。自分はそれ以上の絶望を知っていると。それはこの世界に来る前から戦い続けていた先輩だからこそ言える言葉だった。

先輩の過去がまた少し明らかになった。詳しく聞いてみたい思いもあるけど、先輩すらも絶望してしまうほどの内容に俺の精神が持ちそうに無い。

「本当の絶望を知っている・・・。だからリョーマは戦えるのね。仲間を失い、対抗手段も無くし、自分達の力を上回る存在がどれほど数を増やそうとも戦うしかなかった彼だからこそ・・・」

部長が胸に刻み込む様に呟いた。俺も忘れない様に刻んでおこう。絶望を前にしても戦う事を諦めない事の大切さを。理不尽に屈さない意思の力の強さを。

『だ、黙れ！ 何が本当の絶望だ！ 二十年も生きていない小僧が知った様な口を聞くな！』

確かに先輩はまだそれくらいしか生きていない。でも、その短い月に俺達なんかじゃ想像も出来ないほどの激しい戦場に身を置いていたんだ。その間に流した血や涙を、得た経験を、苛まれた無力さを、お前なんかは侮辱していいわけがねえんだよ！

『ならばお前に一つ絶望を見せてやろう。倒せると思っていた敵が目の前でさらなる力を得る絶望の瞬間を』

そして先輩はシャルバにとっての絶望の言葉を口にした。

『・・・モードF、発動』

イツセーSIDE OUT

アザゼルSIDE

「ほお、連中も面白いもんを作ったもんだな」

シャルバ・ベルゼブブの纏う『皇帝機』。俺から見ても中々のもんだ。まあ、精々中の上くらいといった所か。レイナーレ達三人くらいだと手こずりそうだな。

「シャルバ・・・やはりクルゼレイと同じく、彼の憎しみも深いのだろうか」

ついさつきクルゼレイを葬りきったサーゼクスが顔を伏せる。まあ口ではこう言っているがゴイツだってわかっているはずだ。憎しみが無けりやそもそもこんな行動に出ないってな。

「・・・ならば、現魔王として行かなければならない。彼の憎しみを受け止めなければならぬのは私だ。これ以上神崎君に負担を与えるわけには」

「おいおい、待てよサーゼクス。せつかくこれから面白くなるってのにそりゃ無しだぜ」

「何を言うんだアザゼル。そもそも、こんな事に巻き込んでしまっただけでも申し訳無い思いで一杯だというのに」

「はっ、今さら過ぎるだろ。それによ、アイツがああの程度を負担に感じていると思うか？」

「それは・・・」

「それに、今邪魔しに行けば、アイツが黙ってねえぞ」

俺が指差す先では、タンニーンの頭に乗ったオーフィスがフューリーを見つめていた。ホントにアイツはフューリーを見に来ただけみたいだな。

「な？ だから観念してここでゆっくり・・・ッ！」

サーゼクスの肩に手を置こうとした正にその瞬間、再び世界が激しく揺れ始めた。

「はっはあ！ 来た来たあ！ サーゼクス、結界を張るぞ！ このま

まじやマジで次元に穴が開きそうだ！」

「くっ……仕方ない！」

「俺も手を貸そう」

「頼むぜタンニーン！ オーフイス……はまあいい！ 俺達だけでやるぞー！」

さーて、見せてもらうぜフューリー。お前が言う「絶望」とやらの形を。

アザゼルSIDE OUT

イツセイSIDE

モードF……そう唱えた先輩の姿がさらなる変化を遂げた。肩や腕のパーツがスライドし、隠された部分が露わになる。スラスター部から吹き出る炎はより激しさを増し、いつしか翼の様な形を成していた。

「……抜き放たれた剣は大いなる怒りによりさらなる力を解放する。それを静める方法はただ一つ。怒りを呼び覚ましてしまった愚者が滅びるのみ」

アガレスの姉ちゃんの言葉が呪文の様に俺達の耳へと入って行く。

「モード・フューリー……あれこそがあの鎧の真の姿です」

「モード……フューリー……」

いつしか世界の揺れは治まっていた。まるで、暴れ狂っていた力の全てが神崎先輩に取り込まれてしまったかのように。

『モ、モードFだと？ そ、それがどうしたというのだ！ この「皇帝機」と私の力を合わせれば上級悪魔百人以上の力を発揮出来るのだぞー！』

足りねえよシャルバ。たったそれっぽっちの力で今の先輩を止められると思うなよ。

『負けるはずが無い！ 騎士は所詮皇帝の前に平伏すしかないのだからなあああああああ!!』

「……確かに、騎士は皇帝に命を捧げる存在だ」

先輩へ向かってブースターを噴かせながら剣を振りかぶるシャル

バ。そして、その剣が先輩を捉えようとした刹那、シャルバの剣は半ばから先が消えていた。

「だがなシャルバ・ベルゼブブ。愚かな皇帝を討つのもまた騎士の役目だと知れ。貴様がどれほどの力を持つとうが、神崎殿にとって貴様はただの討つべき愚帝でしかない」

サイラオーグさんの言う通りだ。アイツが何者で、どんな力を持つて様が、先輩には関係無い。アーシアを傷付けようとしたヤツの仲間……先輩がヤツをぶちのめす理由なんてそれだけで十分なんだからな！

『ば、馬鹿な!? この剣が折れるはずが……!』

『シャルバ・ベルゼブブ』

『ツ……!?!』

『見せてやる。俺がリアス達から……仲間達から与えてもらった力の集大成を!』

そう叫んだ直後、先輩の姿がかき消えた。アレは……まさか例の瞬間移動か!

『なっ!? ど、どこへ消え……』

『遅い!』

先輩の声と共にシャルバの鎧の一部が弾け飛んだ。どうしよう、速過ぎて何がどうしてそうなったのかまるでわかんないんですけど。

「な、なあ、木場。今どうなったんだ?」

「……辛うじて確認出来たけど、先輩が両手の爪でシャルバの鎧を抉り飛ばしたんだ」

「まさか……神崎様、アレをやるつもりなのですか……」

「アガレス。アレとは何だ?」

「大いなる怒りを静める為、愚者を終焉へ導く刃を振り降ろす。それこそが、大いなる怒りの終焉”。……エンド・オブ・フューリー。私が考えた唯一のコンバットパターンです」

「つまり、先輩の必殺技って事か!?!」

「その通りです。そして、本当の終焉はここからが本番です」

三百六十度から迫る蒼の軌跡がシャルバを襲い、ヤツの鎧が見る見

る内にその姿を変えて行く。頭部の角が折れ、右腕が吹き飛び、両足が同時に地面に落ちる。その様子は恐ろしくもあり、どこか幻想的でもあった。

「綺麗……」

部長が呆けたようにそう言う。それと、ここでわかったが、あれは鎧じゃなくて本当にロボットみたいに乗り込むタイプの物の様だった。じゃなかったら今頃グロイシーンが展開していたはずだ。

「爪、両手剣、双刃剣、合体剣、膝のブレード、それら全て使い敵を追いこむ。そして一定のダメージを与えた所で最後の仕上げに入ります」

スラスラ説明してるけど、アガレスの姉ちゃんには先輩の動きが見えてるのかな。いや、見えて無くてもこの人が考えた技だからわかるか。

『ぬおおおおおおお?!?!?!? 馬鹿な! この皇帝機は我等が総力をあげて作りだした物なのだぞ! それがこうも簡単にやられるはずがあああああ!!』

『戦闘中にしゃべる所はディオドラと同じだな』
『フアツ!』

やっと俺の目に先輩の姿が映った。呆然自失状態のシャルバを正面に見据え、先輩は右肩のスラスタから刃が結晶で出来た巨大な槍を取り出した。それを水平に構えたと思ったら今度は先輩だけじゃなくシャルバの姿も消えてしまった。

「今度はどこだあ!」

なんかもう「先輩を探せ!」なんて本でも出せそうな気分だぜ。
「ツ……空だ!」

木場が叫ぶ。すぐに確認すると、唯一残った左手で槍を防ぎながら空へ向かってロケットの様に飛んで行くシャルバの姿があった。……ってかちよつと待て! 先輩はどこだ! いつの間にか槍しか見えないんですけど!?

「上よ! シャルバの上!」

今度は部長が叫んだ。シャルバの上……確かにそこに先輩はいた。

槍、シャルバ、先輩が一直線に並ぶ。そして、先輩は左肩からあのヤバそうな大剣をゆつくりと引き抜いた。

さらに、抜くと同時に大剣が形を変えた。刀身が二つに割れ、その中心から天に向かって光の刀身が伸びて行く。・・・いや、待ってください先輩。いくらなんでもそれは可哀そう過ぎますって！

『これで終わりだ！ シャルバ・ベルゼブブ！』

自らに迫るシャルバに向かって大剣を振り上げる先輩。やっぱりそうだな！ あの人やる気だ！

「止めたげてよおおおおおおお！！」

俺の叫びも虚しく、先輩はシャルバに向かって迷い無く止めの一撃を振り降ろした。閃光が辺り一面を覆い尽くし、俺は咄嗟に目を瞑った。

そして、視界を取り戻した俺達が見つめる中、先輩は右手に大剣、左手に槍を持ったまま静かに口を開いた。

『・・・わかったか。これが本当の絶望だ』

ああ、うん、そうですね先輩。確かにこりや絶望だわ。

素っ裸＋黒焦げのコンボで地面に落ちて行くシャルバを見て、俺は心底そう思うのだった。

第八十三話 日常への帰還

アザゼルSIDE

「・・・終わったな」

「・・・ああ」

フューリーとシャルバ・ベルゼブブの戦いはフューリーの勝利で幕を閉じた。『皇帝機』という支えを失った『禍の団』の連中は例外無く戦意を失いその場に崩れ落ちていた。連中の拘束は他の悪魔やウチのヤツ等に任せておいて大丈夫だろう。

「にしても、まさか瞬殺するとはなあ。モードFだっけか？　ありやあとんでもねえな。シャルバのヤツ、よくもまああれだけの猛攻を受けて死ななかつたもんだ」

「おそらく手加減したんだろう。普通に考えてあの力に耐えられるはずが無い」

手加減なんて言葉で片付けられるもんじゃねえと思うが・・・まあフューリーだしな。もうアイツが何をやらかそうがこの一言で全部受け入れてやるよ。

「アレが神崎君の真の力・・・彼の騎士としての本当の力なのだろうか」

「俺にやあ騎士つつーか、破壊神に見えたぜ。あの力で暴れまわられたらとんでもない事になりそうだな」

「止めてくれ。想像しただけでここが・・・」

サーゼクスが胃の辺りを押さえる。ああ、懐かしい。今のコイツはかつての俺そのものだ。ならば、同じ経験をした先輩としてアドバイスしてやろう。

「・・・考えるな。感じろ」

「？」

キョトンとするサーゼクス。まあいい。いずれコイツも俺と同じ境地へと至るはずだ。その時は二人で酒でも飲もうや。俺のとおっておきを出してやるからよ。

「まあ、そこまで心配する事も無いと思うぜ。これで連中も嫌という

ほど思い知っただろう。ヤツの身内に手を出したら最後、次は自分が第二のシャルバになるとな」

「こっただけ派手にアピールしたんだ。アーシアの安全は十二分に保証されただろうよ。余程イカれたヤツでもなけりや攫う気なんて起こさねえだろうさ。」

「終わった。行く」

俺がサーゼクスへありがたい助言をくれてやった直後、タンニーンの頭の上でフューリーの戦いを見守っていたオーフェイスが立ち上がった。

「おっと、どうやらお姫様が騎士に会いに行くつもりらしいぞ。どうする、俺達も行くか？」

「ああ。どうか行かないと私の知らない所でとんでもない事が決められてしまいそうだからな」

さて、そうと決まれば・・・ん、ありやあ・・・。

「あの馬鹿娘、いなくなっただと思っただらこんな所で再会するとはなあ」
眷属達の元へ降り立ったフューリーの元へ近づくと、白の姿に、俺はついそんな事を口走るのだった。

アザゼルSIDE OUT

IN SIDE

・・・人間、その気になれば何でも出来るんだな。テンションがおかしかったのは認めるが、まさかあんな激しい動きの攻撃をちゃんと成功させられるとは思わなかった。

はっ、そうか、だからスパロボの必殺技には気力制限がついていたのか。やっぱりノリと勢いってのは大事なんだなあ。

何にせよ、全てはアガレスさんを含めたみんなのおかげだ。あんな動き、イメージだけに頼っていたらとても成功させられるものじゃない。・・・これで調子に乗るつもりは無いが、みんなのおかげで得る事が出来たこの力・・・少しは自信を持ってもいいのかな。

「リョーマさーりーん！」

おっと、天使様がお呼びだ。俺は槍と大剣を仕舞い、声のした方へ

降りて行った。…視界の端に素っ裸で真っ黒なおっさんの姿が映ったがあえて無視した。

俺が地面に足を着けると、アーシアを筆頭に、今回俺に力を貸してくれたみんなが、誰一人欠ける事無くそこにいた。

「みんな。無事でよかった」

「お帰りご主人様！ とつてもカッコ良かったにや！」

「はは、ありがとう。…ところで、何でカラワーナさんがカテレアさんを背負ってるんだ？」

「いえ、その、気絶してしまいました」

え、気絶?! まさか、他のペロリストから何かされたのか!? ……
どこのどいつだ。見つけ出してぶちのめしてやる。

「心配しなくてもいいよご主人様。この女、ご主人様とシャルバ・ベルゼブブの戦いに興奮し過ぎて気絶したただけだから」

「…そうなんですか？」

「え、ええ。神崎様のお姿がさらに変化したのを見た直後、奇声をあげながらその場にばたりと」

レイナーレさん達がそろって頷く。いや、割と本気で意味がわからないんだけど。ま、まあ、大事じゃないのならそれでいいか。

「それで神崎様、これからどうしますか？ 既に残った『禍の団』のメンバーの拘束は始まっています。私達の手が無くとも一時間もせず
に全員の確保は完了するでしょう」

「そうですか。なら、ここにいても仕方無いですし、一度戻って…」

「あら、そんなに急がなくてもいいじゃない」

突然の背後からの声に振り返れば、そこには露出強モードのヴァーリさんの姿があるではありませんか。…久しぶりに見るけど、やっぱり危ないなアレ。

「ヴァーリ。何をしに来たにや。ひよつとして、アンタも今回の件に絡んでいたの？ だとしたらアンタも同罪にや」

「それは誤解よ。私とディオドラ達は何の関係も無いわ。今回は別の用事があったのと、純粹に亮真の戦いを見届けようと思っただけ。…来てよかったわ。亮真の新たな力を目にする事が出来たも

の」

うん、今の言葉で確信した。ヴァーリさんはやっぱりペロリストに染まって無い。後はどうにかして彼女をあゝの組織から抜けさせるだけだ。

「ヴァーリ。久しぶりね」

「ええ。そつちも元気そうで何よりだわ」

親しそうに挨拶を交わすヴァーリさんとレイナーレさんを見て
アーシアが可愛らしく首を傾げる。

「レイナーレ様、ヴァーリさんとお知り合いなんですか？」

「ええ、アザゼル様の下で働かせて頂けるようになってすぐに知り合ったの」

「まさかあなた達が亮真の眷属になっているとはね。ふふ、よかったじゃない。本当に身を捧げたかった人のものになれて」

「「なっ!?!」」

「亮真、レイナーレ達はちゃんとあなたの役に立ったのかしら」

「もちろん。彼女達がいたから俺はアーシアを助ける事が出来たんだ」

「・・・だそうよ、レイナーレ。だからそんなリングみたいな顔でプルプルしてないで素直に喜んだらどう?」

「ヴァ、ヴァーリ! あなた本当に何をしに・・・!」

「フューリー」

ニヤニヤするヴァーリさんにレイナーレさんが詰め寄ろうとしたその時、上空からそんな声が聞こえた。みんな揃って空を見上げると、そこにはおよそこの場には似つかわしくない幼い少女の姿があった。

「キミは・・・って、カテレアさん・・・!?!」

俺が声をかけようとした瞬間、気絶していたはずのカテレアさんが両手に魔力を帯びさせながら俺と少女の間へ割って入って来た。

「い、いつの間?!!」

ビククリしているカラワーナさんを置き去りに、カテレアさんは顔を強張らせながら少女へ向かって声を発した。

「カテレア。久しい」

「あら、旧魔王派の鼻つまみ者だった私の事を覚えていてくださったのですね。世界最強のあなたに名前を呼んでもらえるなんて光栄ですわ」

「カテレアさん。その子は・・・？」

「我の名はオーフィス」

オーフィスちゃんか。・・・ん？ 待てよ。それって確かペロリストの親玉の名前じゃないか。なんてこった、こんなに可愛らしい子なのに、よりもよつて変態共のトップと同じ名前だなんて・・・！
「う、うそ・・・『無限の龍神』が・・・『禍の団』のトップがどうしてここに!？」

・・・ファツ!? え、ま、まさか、名前が同じってわけじゃなくて、この子がペロリストの親玉なのか!? でも、確かオーフィスって男だったはずじゃ・・・!?

いや、待て俺。この際そんな事はどうでもいい。重要なのは、ペロリスト共のトップが女の子だったって事だ。どう考えたってこんな少女がペロリストを率いているはずが無い。・・・ならば答えはただ一つ。この子はただ連中に担ぎあげられているだけだ。いや、担ぎあげられているだけならまだしも、下手すればこの子自身に手を出しているのかもしれない。

ああ、前世の友人よ。お前はホモオじゃなくロリコンだったんだな。お前が言っていた「オーフィスたんPrPr」という言葉の意味がよくわかったよ。・・・もしも今、目の前にいたら俺は躊躇い無くお前をぶん殴っていただろう。

「オーフィス。あなたどこにいたの？ いきなりいなくなるから探したのよ」

「それは違う。ヴァーリの方が我の前から消えた。だから我は一人でアザゼルに会いに行った」

迷子になったのは自分じゃ無くそっち。・・・ああ、なんだろう。今のやり取りでちよつとほっこりしてしまった。

「・・・まあいいわ。それで、何か用かしら？」

「ヴァーリじゃない。私の目的はフューリー」

「俺？」

初対面の俺に用事って一体なんなんだろう。まさか、ウチの連中をボコったお礼に来たとか言わないよね。

「アザゼルが言った。我がフューリーの日常に入ればフューリーは我に手を貸すと。だから日常に入る方法が知りたい」

ん？・・・ん？ いや、え、どういう意味か本気でさっぱりなんだが。目線でアシア達に助けを求めても、彼女達も戸惑ったように首を振るだけだった。

「待て待て。オフィス。お前はもう少しわかりやすい説明のやり方を覚えるべきだ」

オフィスちゃんの言葉に何も返事が出来ないでいると、そこへアザゼル先生とサーゼクスさんが二人並んで姿を現した。

「アザゼル様。ご無事で何よりです」

「はっ、この俺があんな連中にやられるわけねえだろ。お前らこそ、中々の動きだったじゃねえか。褒めてやるぜ」

「ありがとうございます。それで、その、先程オフィスが口にした言葉なのですが・・・」

「ああ、つい口が滑つちまってな。悪い悪い」

なんだろう。気のせいだろうが、アザゼル先生の適当加減が増した気がする。

「フューリー、オフィスは自分の望みを叶える為にお前に協力して欲しいんだよ」

望みを叶える為に俺の日常に入りたい？ その言葉が出るって事は、俺が友達に囲まれる現状を幸せに感じているのだとこの子もわかっているはず。・・・ひよつとして、この子の望みって。

「・・・キミは『禍の団』の連中からどういう扱いを受けているんだ？」

「我は『禍の団』に力を貸す。代わりに『禍の団』は私の望みを叶える」
「なら、『禍の団』はキミの望みを叶えてくれそうか？」

「・・・」

無言・・・それが答えだった。わかった。わかってしまった。この

子は孤独だったんだ。そしてこの子の望みっていうのは、その孤独を消し去ってくれる友達が欲しいって事だったんだ。だから俺の日常に・・・あの輪の中に入りたくないなんて言ったんだ。

だとしたら『禍の団』っていうのは変態どころか血も涙も無い畜生の集まりだな。この子を利用するだけ利用してこんなささやかな願いすら叶えてあげないなんて。

「・・・わかった。なら教えてあげるよ。俺の日常に入る方法を」「どうすればいい?」

俺はオーフィスちゃんの目線まで腰を落とし、微笑みながら告げた。

「いつでもいい。遊びに来てくれ。そうすれば、キミの望み(友達が欲しい)は叶うよ」

「遊ぶ? フューリーは我と遊びたいのか?」

「ああ。俺はキミと遊びたい。仲良くなりたいんだ」

「ま、待ってくれ神崎君。いくらなんでもそれは・・・!」

「だーっはっはあ! 『無限の龍神』と遊びたいなんて言うヤツは初めてだぜ!」

(確かに、オーフィスは孤独・・・ううん、自分が孤独だという事すら認識出来ない。亮真、あの短いやりとりだけでそれに気付くなんて・・・。ふふ、本当にお人好しなんだから。本当に呆れちゃうくらい・・・)

仰天するサーゼクスさんに、大笑いするアザゼル先生。そして思案顔のヴァーリさん。そんな三人の視線を一身に受けつつオーフィスちゃんが口を開く。

「・・・わかった。今度遊びに行く」

「うん。待ってるよ。それと、帰ったら『禍の団』の連中に伝えておいて欲しい」

「伝える? 何を?」

「次に俺の前に現れたら、その時は覚悟しておけ・・・とな」

今の俺には多少なりとも戦う力がある。見かけたら速攻で駆除してやるからな。

(おやおや、向こうが手を出すとかいう問題じゃねえな。今回の件で『禍の団』はフューリーの明確な排除対象に認められたようだ。よかったな『禍の団』。精々楽に逝ける事だけは願つとけよ)

さて、オーフィスちゃんとも約束出来たし、今度こそ戻ろうかな。アザゼル先生かサーゼクスさんに頼めば送ってもらえたりするんだろうか。

「……そろそろ来る」

空を見上げながらポツリとオーフィスちゃんが呟く。気になったので彼女の視線を目で追おうとした刹那、何かが弾ける様な音と共に空中に巨大な穴が出現した。

「な、何ですかアレ!？」

「大丈夫。心配しないで見ておくといいわ。さつき私は用事があるって言ったわよね? その正体がアレよ」

ヴァーリさんの言う正体……それはとてつもなくデカイドラゴンだった。かつてのドライグさんやアルビオンさん、そして今のタンニンさんよりもずっと大きかった。

『真なる赤龍神帝』グレートレッド……『真龍』と称される偉大なるドラゴンよ。次元の狭間を住処とし、永遠にそこを飛び続けているの」

「何故?」

「さあ、私には『真龍』の考えなんてわからないわ。……もしかしたら、オーフィスみたいにあなたに興味湧いて見に来たのかもしれないわね」

いや、流石にそれは無いって。オーフィスちゃんと違って、興味を持たれる理由が無いし。

結局、グレートレッドさんの姿が見えなくなるまで、俺達は黙って見守り続けた。うーん、最後にもうの凄惨なものを見てしまった。いい思い出が出来たな。

「さてと、目的も果たした事だし、そろそろ帰りましようか、オーフィス」

「ん……」

「それじゃあね、亮真。それに他のみんなも。これから忙しくなるでしょうけど、精々頑張つてね」

去り際のそう言い残し、ヴァーリさんとオーフィスちゃんの姿は魔法陣の向こうへ消えて行った。

「さーて、それじゃあ俺達もそろそろ帰るか。後の事は部下に任せてあるしな」

「そうだね。私も戻つてやらなければいけない事がある。神崎君、ついでといつては悪いが、キミ達も家まで送り届けてあげるよ」

「お願いします」

「あの、リョーマさん」

転移の準備を待っていると、アジアが話しかけて来た。

「どうしたんだ、アジア？」

「私・・・今回の事で改めて自分の気持ちを確かめる事が出来ました。だから、その、今まではお傍にいただけよかったんですけど、これからは隣に並んで歩けるように頑張りますね!!」

「え？」

「あ、準備が出来たみたいですね。行きましようリョーマさん!」

「いや、待ってくれ。今のはどういう・・・」

「えへへ・・・教えてあげません!」

そう言つてはにかむアジアは・・・やっぱり天使だった。

S I D E O U T

それから一ヶ月の後、とある国のとある村にて、一人の神父が子ども達へあるお伽噺を話していた。

「こうして、悪い皇帝は騎士によって倒され、囚われていた聖女様は騎士と共に幸せに暮らしましたとき」

最後に神父がそう締めくくると、周りに座っていた子ども達から大きな拍手が送られた。

「騎士様すげー!」

「聖女様よかったね!」

「やっぱり悪い事したらバチがあたるんだね!」

「そうですね。キミ達はお話に出ていた皇帝みたいになってはいけませんよ?」

「「はーいー!」」

元気よく返事をする子ども達の様子に、神父も柔らかな笑みを浮かべる。そこへ、子ども達と一緒に話に耳を傾けていた親達が神父へ声をかけた。

「いやあ、相変わらず神父様のお話は面白いなあ。いい年なのについて夢中になっちまったぜ」

「なんて言ったらいいのかしら、話に臨場感があるっていうか、まるで本当に神父様が体験した事なのかと思っちゃったわ」

「ふふ、ありがとうございます」

「ええ! 神父様、騎士様に会った事あるの!?!」

「じゃあ聖女様にも!?!」

「教えてよ神父様〜!」

「おやおや、さて、どうでしょうかね」

「いいじゃん! 教えてよ『フリード』様あ!」

名前を呼ばれ、神父は困った様に天を見上げた。

「ふふ、仕方ありませんね。これは僕だけの秘密にしておきたかったのですが、特別にキミ達にだけは教えてあげましょう。僕が出会った本物の『騎士』のお話をね」

再び子ども達に語りだす神父の名はフリード・セルゼン。その穏やかで優しい顔には、最早かつての狂気は欠片も存在していなかった。

幕間その四 トップは辛いよ※ただし一名は除く

サーゼクスSIDE

『禍の団』による襲撃事件から早一週間。ようやく全ての事後処理が完了したこの日、僕とアザゼル、そしてミカエルは事件についての話し合いの場を設けた。

「では、そろそろ始めましょうか」

「つつても、事の顛末は既に俺達も十分理解しているからな。事件後から今までの間についての話しをしようぜ。色々わかった事があるんだろ？」

「そうだな。ならばまずはディオドラ・アスタロトについてだが、『禍の団』のメンバーを拘束後、崩壊した神殿を調べたら彼の死体が発見された。死因は瓦礫に押し潰された事による圧死かと思われたが、彼の胸に何かに貫かれた様な痕があったことから、おそらく何者かによって殺されたのだと結論づけた」

「その何者というのはフューリー殿。もしくは……」

「シャルバ・ベルゼブブのどちらかだろうが、俺はこっちの方が殺ったと思うぜ。何だかんだで、フューリーは甘い所があるからな」

確かに、神崎君はあの場においても「不殺」を貫いていた。それを甘さと斬ってしまうのは容易いが、僕はそれでいいと思う。命を奪わずに敵を戦闘不能にする。それはある意味究極の戦術ではないだろうか。

「アスタロト家には処分を下した。現当主は解任、魔王輩出の権利も剥奪した」

「へえ、お優しいこつて。てつきり一族郎党全員処断でもすると思つてたぜ」

「……キミは私を何だと思ってるんだ」

「まあまあ、今のはアザゼルなりの冗談ですよ。ですから気にせず話を続けてください」

ミカエルの言う通りだ。彼の軽口に一々付き合っていたらこちらの身が持たない。なので、話が脱線しないよう、僕は次の話題に触れ

た。

「続いてシャルバ・ベルゼブブの処遇だ。今回の件の首謀者の一人という事で処刑せよとの声が上げられたが、判決は地獄行きとなった。既に身柄は送られている」

「おいおい、いいのかよ。もしかしたら抜け出して来てまた何かやらかすかもしれないぜ?」

「その心配は無い。もうシャルバは何もしない。．．いや、何も出来ないよ」

「何故ですか?」

「彼はもう彼ではなくなってしまった。あの最終局面において、神崎君の壮絶な攻撃をその身に受けたシャルバは精神に異常をきたしていた。地獄行きを言い渡した時、彼はその場で飛び上がって喜んだよ。これであの化物と二度と会わないで済む．．．と言ってね」

「．．．」

「くく、情けをかけてもらったおかげで生きてる癖にそれを化物呼ばわりかよ。今アイツに会わせてやったらどんな反応するんだろうな」
「そんな事をすれば、今度こそ間違い無くシャルバの精神は崩壊するだろうな。ともかく、今回の事件で『禍の団』の一派だった旧魔王派はほぼ壊滅したと言ってもいいだろう。」

「とはいえ、手放しで喜べはしないけどね。アザゼル、ミカエル、単刀直入に聞かせてもらおう。キミ達は神崎君が発現させたあの力を見て何を思った?」

「ディオドラやシャルバについての話はただの前置きに過ぎない。僕達が本当に話し合いたかったのは彼等ではなく神崎君についてだ。レーディングフィールドそのものを揺るがし、結界すらも容易く破壊した上、何十、何百もの上級・中級悪魔を瞬く間に地へ墮としていったあの力．．．。戦闘中の彼の言葉から察するに、元々持っていたものでは無く、あの場で初めて発現させた力のようなが．．．。」

「．．正直に言わせてもらいますと、私はあの時のフューリー殿の姿を見て、畏怖の念を抱くと共に不安を感じました。発現するだけで世界を揺るがせてしまうほどの強大な力．．オーフィスやグレートレッツ

ドまでとは言いませんが、それでも規格外には違いありません。今のフューリー殿はまさしく英雄、騎士としての正道を歩んでいます。今後、万に一つの可能性でその道から外れ、悪に身を墮としてしまった時・・・果たして私達に彼を止める術はあるのでしょうか」

ミカエルの懸念は僕も思っていた事だ。これまでの出来事を通じて、神崎君が素晴らしい人格者だという事はみんなわかっている。力に溺れず、守るべきものの為に戦う彼の姿は誰もが英雄と褒め称えるだろう。だが、僕達は知っている。人間というのはいとも簡単に心変わりする生物だと。ひよつとしたら神崎君も、これから何かをきっかけにして悪の道へ進んでしまうかもしれない。そうなってしまった時・・・僕は、僕達はどうすればいいのだろう。

「あの映像を見た一部の上級悪魔達からは、神崎君を封印するべきだという声もあがっている。旧魔王派ほどでは無いが、元々神崎君をあまりよく思っていない者達の集まりでね、これ幸いとばかりに陳情して来たよ」

「アホかその連中は。んな事しかしたら自分達の首を絞める事になるってわかってんのか？」

冷めた口調でそう言うアザゼルだが、確かに彼の言う通りだ。中には彼等と同じように不満を持つ者もいるだろうが、その何百、何千、何万倍もの悪魔達が神崎君という存在を最大限の好意で受け入れている。そもそも、神崎君は先の大戦で悪魔を救った英雄なのだ。そんな彼を封印でもしようものなら・・・それは冥界そのものを敵に回すと同じだろう。

「にしても、たった一人の人間に悪魔と天使が振り回される時代が来るとはなあ」

「何を他人事の様子。キミ達墮天使だって同じだろう」

「さあな。少なくとも、俺はもうヤツが何をしようが全部受け入れるつもりだぜ？」

「墮天使の長であるあなたがそんな投げ槍になっではいけませんよ」

「別に投げ槍になってるわけじゃねえよ。俺はただ悟っただけさ。考えてみる。そもそも、異世界なんて理解の範疇を越えている様な所か

らやって来た存在に、俺達の常識や概念が通用すると思っ
ていること事態が間違いなんだよ。お前等だつて見て来た
だろう？人間であるはずのフューリーが、これまで幾
度と無く俺達の常識を覆して来た場面をよ。その馬鹿
どもがほざいた通りに封印したとしても、アイツなら
何の苦も無く解いちまうんじゃねえか」

そんな馬鹿な・・・と言いかけて口を噤む。あるいは
神崎君なら本当に・・・。

「もちろん根拠なんてねえがな。俺が言いたいのは、
ヤツの力はそう思わせるほどのものだつて事だ。オー
フィスをしてグレートレッドを倒せる存在だと言わ
れたんだぜ？下手な小細工なんざするだけ無駄さ」

「それは・・・確かにそうかもしれないが・・・」

「それによ、お前等はフューリーが道を間違える事
が不安だとか言うが、かつての世界で闘争に塗れた
人生を送っておきながら、あそこまでのお人好しで
お節介な人格を保ち続けたあの野郎が今さら変わっ
ちまうと思うか？」

「・・・」

答えない僕達に、アザゼルは思い出したかのように
笑みを浮かべながら再びしゃべり始めた。

「アイツが最近何してるか教えてやろう。今回の件で
世話になった連中へのお礼だとか言つて、アイツに叶
えられる範囲で一人ずつの願い事を叶えて回って
るんだぜ。リアス達は当然として、ソーナの眷属
達、果ては俺にまで願い事を聞いて来たんだぞ。俺
なんか、適当な鍛練場所を提供してやっただけな
のにだぜ？」「アザゼル先生。あなたのおかげで
自分を鍛え直す事が出来ました。本当にありがとう
ございました。もし、何か俺に出来る事がありましたら、
いつでも声をかけてください」・・・なんてド真面目な
顔で言われた時は最初なんの事を言つてんのかと思
つたわ」

・・・その場面が容易に想像出来てしまう。いかにも
彼らしい言葉だ。・・・確かに、アザゼルの言う通り、
僕の気にし過ぎなのかもしれない。

今回の事だつてそうだ。神崎君は敵を滅ぼす為にあの力を発現させたわけじゃない。彼の目的はただ一つ……アーシアさんを守る事だけだつた。

「……『日常』を守る為に戦う。確か、フューリー殿はそう言っていましたね」

「かつて失つたであろうものを再び得る事が出来た。それだけでヤツにとつては十分なんだろうよ。それを脅かさない限り、ヤツの剣が俺達に向けられる事はねえだろうさ」

「では、私達は今後……」

「今まで通り、仲良くやればいいんじゃないか。今さら付き合い方を変えた所でこつちの為にはならねえだろう」

「そうですね。先程懸念を口にした私が言える事ではありませんが、私は今後も彼と親交を深める事が出来ればいいと思っています」

「……私もだ。よく考えれば、彼はもしかしたら義理の弟になるかもしれないのだ。むしろ望む所じゃないか」

「あー、どうだろうなあ。アイツ、病気どころか最早呪いレベルで鈍感だからなあ。さっきの願い事の件の事なんだが、リアスやら朱乃が買物に誘つたり、ソーナの眷属達にカラオケに誘われたり、もう誰がどう見てもデートの誘いつてわかる事でも「みんな色々やりたい事があつた中で俺に付き合ってくれてたんだな。俺でよければ荷物持ちでもカラオケの利用料金でも何でも任せてくれ」とか普通に言うんだぜ？ ああいうタイプはハッキリと「好きだ」と伝えないと一生向けられてる好意に気付かないだろうな」

「そ、そこまでののか……？ だが、キミがそう言うのなら確かなのだろうか」

「おや、そういう事ならば、現在最もフューリー殿の関心を集めているのはイリナという事になるのですかね」

「あ？ 何でそこでイリナの名が出るんだ？」

「彼女から聞きましたが、どうもエクスカリバーの事件の時にフューリー殿に口説かれたらしいですよ。思い出しただけで墮天しかけていたのが印象的でしたからよく憶えています」

「いや、それだけじゃ判断出来ないな。自覚無しに口説くなんてアイツにとつちや日常茶飯事だぞ。どうせその時もそうだったんじゃないか」

「・・・イリナには黙っておきましょう」

「ははは・・・」

おかしいな。真面目な話をしていたはずなのに、いつの間にかあの子達の恋愛の話になってしまった。ここにセラフオルーやカテレアがいたら大騒ぎしそうだな。

先程までの張り詰めていたものはうって変わった和やかムードに、僕はつい笑い声をもらすのだった。

第七章 放課後のラグナロク

第八十四話 最強の矛×最強の盾は矛盾ではなく無敵である

季節は夏から秋に変わりながらも、まだまだ暑い日が続いている。あのD及びペロリスト共との戦いから数日が経ち、俺は普段通りの日常へと戻っていた。・・・といっても、以前と全く同じというわけでは無いんだけどな。

まず俺自身についてだが、あの戦いで新しく得る事が出来たラフト克蘭ズ・セイバー（仮）・・・いいかげん名前をなんとかしないと。ともかくアレについてだが、あの時以降発動させる事が出来なくなっていた。

オカン曰く、あの力の源は彼女が魔改造した『王』の駒らしい。で、その力を発動させる為には、心の底から強く湧き上がる感情や思いが必要になると言われた。

つまり、あの時の俺の「アースアを守りたい」という思いをトリガーとして発現したのがあの力だという事だ。さらに補足として、抱く想いや感情、それとイメージによって力そのものも変化すると説明された。もしもあの時、「アースアを守りたい」ではなく「ペロリストをぶちのめす」という思いに支配されていたら、それに応える様な力が発現していたのだとか。・・・たぶん、セイバー（仮）じゃなく、ネオ・ラフト克蘭ズ（仮）になつてたんだろうな。

というわけで、使えなくなつたわけではないが、使いたいのなら何かしらの強い思いが必要になるというのが答えだった。駒そのものは俺と完全に一体化しているので、それさえ満たせばすぐに発動させられるらしいが・・・今後、そういう状況が果たしてやってくるだろうか。もちろん、再びペロリストがアースアを始め、リアスや他の子達に手を出そうとするならば絶対に許さないが・・・ああ、そういうえばサーゼクスさんから出来るだけ使わないで欲しいとお願いされただけ。制限があるから自由に使えないと説明した時のホツと

した表情は今でも思い出せる。

それと、アガレスさんには迷惑をかけてしまった。どうもあの時俺が彼女の名前を口にした所為で、彼女があのかの力に関わっていると勘違いした人達から是非とも自分達も同じ物が欲しいという問い合わせが殺到したとメールが来た。これがきつかけで秘密にしたがっていた彼女の趣味が拡散してしまうかもと心配したが、メールを読んだ限り、そんな事も無かったようだった。

あのかの力についてはこれくらいだろうか。俺の事については他に語る様な事は無い。・・・まあ、特訓漬けの毎日を過ごしていた所為か、今も時間を見つけては鍛練をしていたりはするんだがな。どこぞのプロテイン先輩みたいにトレーニングが趣味・・・という事になったわけではないが、時間が出来たら行う様にはしている。最近はゼノヴィアさんも一緒だ。なんか、「二度と天井に負けたくない」とか言っていたけど、何があったんだらうな。

さて、次はアーシアとオカンについてだ。最初聞いた時は本当にたまげたが、どうもあの二人、いつの間にか会話出来るようになっていたようだった。

「リ、リョーマさん！ 大変です！ 私・・・オ・クアーン様とお話出来るようになってきました！」

驚きと興奮の混ざった顔で部屋に飛び込んで来たアーシアにこつちが驚いてしまったが、とにかく事情を尋ねてみると、あの戦いを終えてから、アーシアは毎日オカンに感謝の祈りを捧げていたらしい。そして、この日も同じ様に祈りを捧げていたら、あの時と同じようにオカンの声が聞こえたのだそう。

本当かどうか確認する為、俺はすぐにオカンへ呼び掛けた。なに普通に声かけてくれちゃってんですかね。

『せやかて工藤』

俺の名字は神崎ですとつっこみもう一度尋ねると、オカンはすまなさそうな声色で答えた。

『ああ、すまんなあ。つい最近ハマってる漫画のキャラのセリフが出てしまった。それはそれとして、そのお嬢ちゃんの事やけど・・・毎

日毎日ウチの事を想って熱心に祈ってくれるんよ。アンタにはわからんと思うけど、ウチ等はそんな風に祈りを捧げてもらう事がたまらなく嬉しいんや。しかも、ただ祈るだけやない。その子の心の中はいつもウチへの感謝でいっぱいやった。ウチはもう嬉しゅうて嬉しゅうて、つい・・・』

声をかけてしまったという事か。まあでも見た感じアーシアは嫌そうじゃない・・・というか凄く嬉しそうだけど。やっぱりシスターとしては異世界の存在ではあるけど、神様と話が出来るようになったのがいいのだろうか。

「それだけじゃありません。オ・クアーン様がこの世界を選んでくださったから、私はリヨーマさんと出会う事が出来たんです。その奇跡を起こしてくださったオ・クアーン様には心からの感謝の想いを捧げたいです」

『うう、なんちゆうええ子なんやろう！ アーシアちゃん！ これから先、何があるうともウチが守ってあげるからな！』

ふ・・・やはりアーシアの天使っぷりは留まる所を知らないようだ。だがオカン、あなただけに任せはしない。俺だって彼女を守ってみせるぞ！

『よう言った！ ならたった今からウチとアンタで、アーシアちゃんを守る会』を結成するで！』

上等！ ならばオカン！ アーシアは!?

『天使！ 天使は!?!』

アーシア！

『アーシアちゃんに手を出す輩は!?!』

ガンホー!! ガンホー!! ガンホー!!!

『アーシアちゃんを泣かせる輩は!?!』

デストロイ!! デストロイ!!!

『アーシアちゃんを傷付けようとする輩は!?!』

ジエノサイド!! ジエノサイド!!!

『よっしやあ！ ええか！ 今の合い言葉を決して忘れるんやないで！』

イエスオカン！

「あ、あれれ？ オ・クアーン様の声が聞こえなくなっちゃいました」
『おおっと、アカンアカン。つい熱が入り過ぎてアーシアちゃんを
ほったらかしにしてしまった。ではでは、ウチはアーシアちゃんとの
お話に戻るとするかな』

了解。．．．ところで、アーシアとの会話もその口調なんですか？
『ちやうよ。ゴツデスマードの時の口調にしとるで。この子の中の神
のイメージを壊したくないからな』

そう言う割には俺との初対面時にはそのまんまでしたよね。

『うふふ、アンタだけ特別やで』

どうしてだろう。特別扱いされてるはずなのにあまり嬉しく無い。

「．．．あ、またオ・クアーン様の声が聞こえました！ え？ お部屋
に戻ればいいんですか？ はい、わかりました！」

ペこりと頭を下げ、アーシアは部屋を出て行った。うん、さつきは
オカンのノリに合わせた所為で変なテンションになってしまったが、
守るという気持ちに嘘は無いぞ。

こうして、俺は改めて彼女を守るといふ思いを強くするのだった。

．．．．．

．．．

「．．．君。神崎君」

「ん．．．？」

気付けば目の前に支取さんがいた。あれ、俺は何してたんだっけ。
「時間切れです。さあ、駒を動かしてください」

．．．ああ、そっか。支取さんに付き合ってチエスをやってたんだっ
たな。どれを動かすか悩んでいたはずなのに、なんであんな回想して
たんだろう。

うーむ、しかし完璧に追い込まれている。ぶっちゃけもう逆転は無
理だなこれじゃ。既に九回勝負して全部負けている。これで負けれ
ばめでたく十連敗だ。

「チエックメイトです」

で、案の定負けてしまいました。いやホント強いわ支取さん。以前の一勝はマジで奇跡だったんだなあ。

「ふふ、これで以前の借りを返せましたね」

「アレは運がよかっただけさ。本来の俺の実力なんてこんなものだよ」

それなのに支取さんてば手加減もしてくれないんだから。容赦無さ過ぎて泣きそうだよ。

「・・・やはり、あなたは守るべきものの為に強くなれる人なんですわね」「ん?」

「何でもありません。では、次はあの時と同じ様に私の『王』をディオドラ・アスタロトと思ってみてください。そして、あなたの『女王』をアーシアさん・・・では無く私に置き換えて・・・」

俺の脳裏に支取さんを抱きかかえて高笑いするDの顔が浮かびあがった。野郎・・・イメージの中とはいえ、許せん!

「(私は何を言って・・・)すみません、今の言葉は忘れてください・・・」

「・・・始めよう、支取さん」

「ッ・・・!?!」

何か頭の中が妙にクリアになって来たぞ。これなら少しはやれるかもしれない。

(・・・自惚れるなソーナ・シトリー。例え神崎君の顔つきがあの時と同じだとしても、彼はディオドラ・アスタロトの名前に反応しているだけ。『女王』を守るように駒を動かしているのも、きつとアーシアさんを重ねているだけ。・・・でも、もしそうじゃなかったら? いや、そもそも何で私はこんな事を気にして・・・)

「支取さん。キミの番だぞ」

「え? あ、は、はい」

そんなに悩ませる様な手を打ったつもりは無いんだがな。・・・まあいいか、おそらくこれが最後の勝負になるだろうし、頑張ろう。

・・・
・・・
・・・

それから数十分後、勝負は俺の勝利で幕を閉じたのだが……これっ
てもしかして、Dのおかげか？ だとしたら最悪だ。今後支取さんと
の勝負の度にあの野郎の顔を思い浮かべないといけないとか何の嫌
がらせだよ。

(いや、まだ決めつけるのは早い。また今度勝負して、その時の結果で
結論を出そう！)

さて、そうと決まればDの事なんかさっさと忘れよう。ええっと、
次の予定は……真羅さんと一緒に生徒会の備品の買い出しだな。確
か今度の土曜日に駅前で待ち合わせだったか。こんな簡単な事でお
世話になったお礼になるとは思えないが、存分にこき使ってもらおう事
にするかな。

帰り道、予定の書かれた手帳を確認しながら、俺はそんな風に思う
のだった。

第八十五話 王道と霸道

「うう、のど飴のど飴・・・」

今、のど飴を求めて全力疾走している僕は駒王学園に通うごく一般的な男の子。強いて違う所をあげるとすればオカンな神様に転生させてもらった事かナ。

何でのど飴かって？ それはね、同じ学園の後輩の女の子達と一緒に行ったカラオケで延々歌わされたからなんだ。僕は「合いの手の神崎」の異名を持ってるけど、歌うのはあまり得意じゃなかったのに、最初にマイクを渡されちゃったからもう大変。断ろうとしたけど、彼女達の期待の込められた視線にノーと言えず、腹を括って俺の歌（騒音及び雑音）を聞けえ！ なノリで歌っちゃったんだ。

結果は散々。歌い終わって彼女達の方を見たら、なんかお通夜みたいな感じになってたんだ。なんか涙ぐんでた子までいた。泣きたいのはこっちなんだけどね。

しかも、その後が酷かった。謝りながらマイクを渡そうとしたらなんともう一度歌ってくれと言われちゃったんだ。おかしいよね。泣くくらい酷かった歌声を何でわざわざもう一度聞きたいんだろうね。

そっからはもうヤケクソ気味に歌いまくって、気付いたら終了時間になってたんだ。結局、後輩の子達は一曲も歌わなかった。なのに、店を出たら深々と頭を下げてお礼を言っただけ。何に對してのお礼だったんだろうね。

そんなわけで、彼女達と別れた僕は帰り道の途中にあるコンビニへとやって来たのだ。そして、目的ののど飴を購入してホクホクと店を後にした僕へ誰かが声をかけて来たんだ。

「初めまして、フューリー・・・いや、神崎君」

ウホッ!! いいおと・・・そろそろこのノリにも疲れて来たな。このくらいで止めとくか。

俺に声をかけて来たのは、見慣れない服装の黒髪の男性だった。初対面の人だが、俺の事をフューリーと呼ぶという事はあっち側の関係者だろうか。

少しだけでいいので話がしたいと言われ、押しに弱い俺はホイホイついて行った。アルIIヴァンセンサーが反応していないので、警戒する必要は無いと判断したからだ。断じていい男だと思ったわけでは無い。

のど飴を転がしながら歩く事数分。連れて来られたのは公園だった。その中心まで進んだ所で、彼は立ち止り振り返った。

そして、彼は自分の事を曹操と名乗った。曹操と言えば、知る人ぞ知る三国志のあの曹操だ。自分はその曹操の子孫で、英雄派に属しているのだと。

いきなりそんなぶっ飛んだ事を言われて戸惑ったが、つまり、この人はそういうキャラを演じているって事でいいのだろうか。って事は、レイヤーさんか？ で、英雄派っていうのはコスプレのサークルの名前か！ ふふふ、どうよこの名推理！

そうだとしたら、レイヤーさんが俺なんかは何の用があるのだろうかと要件を尋ねたら、人間でありながら悪魔や堕天使に英雄と呼ばれている俺に興味湧いたから会いに来たらしい。本当ならもう少し時間を空けて会いに来るつもりだったけど、俺とD達の戦いを見ていてもたってもいられなくなったのだとか。

答えた後に続けて質問された。あの力があればあらゆる物を思いのままにする事が出来る。なのになぜそうしないのだと。・・・俺ってそんなに悪人っぽく見えるのだろうか。

なので、そのイメージを払拭する為にも、俺は俺の大切なもの為にしか力は使わないと返したら、さらに重ねて質問された。

「人が英雄になる為にはどうすればいいと思う？ 生まれか、能力か、それとも・・・」

さっきの質問と全然繋がりが無いけど、曹操さん（仮名）の顔は真剣だった。茶化せる雰囲気じゃなかったの、俺も真面目に答える事にした。

「英雄はなろうとしてなるものじゃない」

例えば世界を救った英雄や救世主がいたとして、彼等は最初から世界の為に戦うつもりだったのだろうか。そんな事は無い。彼等だっ

て、最初は自分達の大切な人やものを守る為に立ち上がろうと決心したはずだ。きつかけはそんな当たり前の想いに突き動かされたからであって、世界を救ったのはあくまでも結果でしかない。理由なんて人それぞれ。中には借金を返す為に戦い続けた者だっているかもしれない。

・・・はい、そうです。またしてもスパロボの話です。でも、俺の中での英雄といえぱりあのゲームの登場人物達なんだよな。史上最強の便利屋と揶揄されながらも、戦い続ける彼等は正に英雄だと思う。

「守りたいものの為に戦う。それだけで人は誰かの英雄になれるんだと思う」

「・・・なるほど。キミの言うそれは正に『王道』だな」

いいじゃないですか、王道。テンプレとか言われようとも俺は王道が好きです。

「だが、その道は本当に正しいのか。英雄に敗北は許されない。卑怯と言われようとも、外道に手を染めようとも、あらゆる手を使ってでも勝利する者こそが英雄ではないかな？」

「確かに、本当に守りたいのならば、手段など選んではいられないのかもしれない。逆に相手の卑劣な手によって窮地に陥るかもしれない」「ならば」

「だが、例えばどんな敵が立ち塞がろうと、決して己を・・・信念を曲げずに戦い勝利する。少なくとも、俺の知る英雄達はそうだった」

「ツ・・・！」

ホント、たまにはこつちも人質とかとっても文句は言われないうんだけどな。まあ、正義の味方がそんな事するわけにもいかないか。それに、やっぱりピンチからの大逆転の方が盛り上がるしな。

「・・・眩しいな。『霸道』を歩む俺にはキミの『王道』は眩し過ぎる。けれど、おかげで決心がついた。俺の『霸道』とキミの『王道』・・・英雄に相応しいのはどちらの道か、いずれハッキリさせよう。・・・その結果次第で、英雄派はその在り方が大きく変わりそうだが、それも面白いかもしれない」

納得しちゃってる所悪いんですけど、俺にもわかるように説明してくれませんか？ ハッキリさせるって何？ テンプレが良いか悪いかデイベートでもさせるつもりですか？

「話が出来てよかった。また会おう、神崎君」

満足そうな表情を見せながら、曹操さん（仮名）は俺の前から静かに去って行った。・・・とりあえず、帰ったら彼の演じてたキャラの出典でも調べてみようかな。

あ、そうだそうだ。お礼の事も忘れない様にしないと。今日で花戒さん達までが済んだから、後は仮眷属として一緒に戦ってくれた黒歌、レイナーレさん、カラワーナさん、ミッテルトさん、そしてカテレアさんの五人だな。

ええつと・・・確か次の休みの日にカテレアさんが家に来るんだつたな。なんかセラフオールさんの計画がどうか言ってたけど、一体何を頼まれる事やら。

そんな事を思いつつ、家に帰って来た俺が扉を開けると、ちょうど黒歌が二階から降りて来た所だった。

「あ、ご主人様。お帰りなさい」

「ああ、ただいま黒歌」

お、ちょうどいい。彼女に言わないといけない事があったんだ。

「黒歌。そろそろ悪魔の駒を・・・」

「ッ！ え、ええつと、私、今からお風呂に入るから！」

そう言うなり風呂場へ早足で向かう黒歌。どうしたんだろう。まあ、今すぐ返してもらわないといけない物でもないし、また言えばいいか。

そう判断し、俺は荷物を置きに自室へと向かうのだった。

第八十六話 来るべき時が来てしまったようです

リアスSIDE

英雄派……『禍の団』の一派閥であり、最近になって私達の住むこの街へ襲撃を行っている連中だ。そのほとんどが人間であり、神器所有者である。聞くところによると、この街だけでは無く、各勢力の重要拠点への襲撃も多発しているらしい。

最初、敵の目的は私達の研究及び攻略かと思っただけで、ひよつとしたら、本当の目的は神器所有者を私達にぶつけさせる事で『禁手』に至らせる事ではないかとの話が眷属達から持ち上がった。

イツセーは腑に落ちない様子だったが、相手からすればイレギュラーばかり揃った私達との戦闘は尋常じゃない経験になると思う。現に、先程まで戦闘を行っていた相手の中にいた影使いの男は転移魔法で消える直前にそんな反応を見せていた。

……とにかく、私達だけであれこれ考えても仕方が無い。後日アザゼル先生に改めて問うという事でこの日は解散した。

「ただいま」

小猫と共に帰宅した私はリビングへ向かった。すると、何やら難しい顔で椅子に座っているリヨーマがいた。

「あ、お帰りなさい、部長さん、小猫ちゃん」

「ただいまです」

「すぐにご飯の支度をするにや」

「ありがとう黒歌。……ところで、リヨーマはどうしたの?」

二人に尋ねてみる。なんでも、ついさっきまでセラフオール様とカテレアが来ていて、リヨーマにある依頼を持ちかけてきたのだとか。それを快諾したリヨーマだったが、その依頼というのがどうも彼には予想外だったみたいで、二人が帰った後から今までずっとあの調子らしい。彼があそこまで悩むなんて……おそらくカテレアが無茶なお願いを言ったんでしょね。セラフオール様も止めてくださいなば……あ、駄目だわ。リヨーマに関する事だとあの二人もの凄い一体感を見せるから。

「リョーマ、何をそんなに悩んで・・・」

声をかけようとしたその時、机の上に一冊の本が置かれているのに気付いた。リョーマの視線はその本に向けられている。もしかしてこれが悩みのタネなのかしら？ ええっと、タイトルは・・・。

「魔装騎士〈THE KNIGHT OF FURY〉第一話台本・・・」

・・・ナニコレ？ 読み上げたタイトルに呆気にとられた私に対し、ここでようやくリョーマが口を開いた。

「ああ、リアス、塔城さんも帰ってたんだな。すまない気付かなくて」「え、ええ、たった今ね。それよりも・・・」

「この分厚い本は何なんですか？」
「・・・見ての通り台本だよ」

「ああ、うん、それは表紙を見てわかったわ。私達が知りたいのは、どうしてこれがここにあるのかって事よ」

「ひよつとして、セラフオール様が・・・？」

「正解よ白音。あの二人、ご主人様に今度新しく始める特撮ドラマに出演させる気にな」

「まさか、リョーマ本人に主役を？」

首を横に振るリョーマ。曰く、初回だけの特別出演で、アクションシーンだけを担当して欲しいと言われたのだとか。まあ、主役を任されても撮影の度に冥界に行くのも大変だし、妥当かもしれないわね。「ご主人様が公に姿を見せて初めての作品だから今までよりもずっと面白いものにしたって言ってたにや。だから視聴者を引きこむ為に、初回は本人でアクションシーンを撮りたいんだって」

「なるほど。そういう事だったの。それで、リョーマ自身はあまり乗り気じゃないと？」

「いや、そういうわけじゃないんだ。ただ、あまりにも予想外な事だったから戸惑っているだけで・・・」

「確かに急な話だけど、でもご主人様も悪いと思うよ。内容を聞く前から領いちゃうんだから」

「だ、だが、カテレアさんには仮眷属として力を貸してもらった恩を返

さないといけないと思っただな」

「うん、まあそんな事だと思っただけど。ご主人様はもう少し疑う事を覚えるべきにや」

「うぐ・・・」

他人に言い包められているリョーマって初めて見るわね。でもまあ、今の様子じややつてもいいと思ってるみたいだし、本人がその気なら外野が言う事は無いわね。

(・・・なにより、私自身もちよつと楽しみだしね。あの作品は子どもの頃好きだったし。・・・そのモチーフとなった人物と話すどころかこうして一緒に生活してるなんて、改めて考えると凄い事よね)

「リアス？ どうかしたか？」

「いえ、何でも無いわ。それで、撮影はいつなの？」

「一週間後だ。けど、明日改めて打ち合わせをしたいから冥界に来てくれと言われた」

「平日なのには？」

「そんなに時間はかからないらしいからな。放課後迎えに来てくれるそうだ」

「わかったわ。とりあえず、頑張っつてね」

「ああ」

本音を言えば私も行きたいけど、英雄派がいつ攻めて来るかわからない以上、不用意にこの街を空ける事は出来ない。

(・・・だけど不安だわ。カテレアがまた暴走しないといいのだけれど)

食器を用意しつつ、私はそんな事を考えていた。

リアスSIDE OUT

IN SIDE

という事で、セラフォルーさんに連れられてやって来ました冥界。前回インタビューを受けたテレビ局の小さな会議室に通されると、そこにはカテレアさんがいた。

「ようこそお越しくださいました、フューリー様。どうぞおかけください」

促されて席に着き、持って来た台本を目の前に置く。二人の前にも同じ物が置かれている。

「まずは、今回のお話を引きうけて頂いた事への感謝を改めて申し上げさせて頂きます」

「そうだね。フューリーさん、ホントにありがとう」
「いえ・・・」

正直今から既に不安だ。果たして本当に俺なんかアクションシーンなんか出来るのだろうか。そりやまあ、今の俺ならある程度の動きなら出来ると思うが、求められるのは演技力なんだろうし・・・。「昨日少しかだけ説明させてもらったけど、フューリーさんにはアクションシーンを担当してもらいたいの。といつても、別に難しく考えずに思うままに立ち振る舞ってくればいいから」

思うままって・・・いいのだろうか。こういうのって殺陣とかそういうのでキツチリ決まってるんじゃないのか？ じゃないと普通に怪我とかしそうなんだけど。

「そこら辺は私達もちゃんと備えるつもりです。何が起ころうとも大丈夫なよう、医療スタッフも用意しますし、スタントマンも屈強な者達を集めました。さあ、入って来てください！」

「失礼しまっす！」

野太い声と共にドアが勢い良く開かれ、そこからガタイのいい男性達は何人も姿を現した。

「フューリー様。この者達が、今回あなた様と共にアクションシーンをを行うスタントマン達です」

「お会い出来て光栄です、フューリー様！」

「「「光栄ッス！」」」

声がかい！　そして熱い！　なんか部屋の温度が上昇した気がする。

「話は聞いてやす。フューリー様とガチでやりあえる日が来るとは、今日までこの仕事をやって来て本当によかったッス！」

「ウチのガキに自慢出来ます！　お前の父ちゃんは伝説の騎士にブツ飛ばされたんだぞって！」

「俺も、田舎の両親にいい報告が出来そうです！」

「・・・という風に、みんな了承済みだから、フューリーさんは気にせずやってくれていいからね。あ、でも、一応手加減はしてあげてね」
「わ、わかりました」

何人か匙君やヴァーリさんと同じような臭いがしないでもないが・・・うん、それだけ仕事熱心な方々という事で納得しておこう。
「ほほほ、騒がしいと思ったら、何やら面白そうな話をしておるではないか」

そこへ突然老人の声が聞こえて来た。みんなが一斉に部屋の入口に目を向けると、そこには見覚えのある老人の姿があった。

「久しぶりじゃの、フューリー」

「あなたは・・・オーデインさん？」

間違いない。あの時手助けしてくれたオーデインさんだ。さらに、その後ろにはこれまた見覚えのある銀髪の女性、そして初めて顔を見る墮天使の男性が立っていた。

「オーデインのおじいちゃん！ どうしてここに？」

「なに、サーゼクスに少々話があつての。まあそれ自体は既に済ませたんじゃが、せっかく冥界に来たのじゃから少し観光しようと思つてのお。そしたらサーゼクスからここで面白い事があると聞いてわざわざ来てみたんじゃよ」

「おかげでかなり目立ってしまいましたけどね」

「・・・すまん」

「あ、いえ、別にバラキエル殿が悪いわけでは」

「やれやれ、護衛してくれとる者を悪く言うなど感心できんぞロスヴァイセ」

「元はと言えばオーデイン様の所為でしょうが！」

突然ハリセンを持ち出したかと思えば、それでオーデインさんをどつく女性。けど、肝心の本人は全く意に介していない様子だった。つて事は、どつかれるのが日常茶飯事だったりするのだろうか。

「何を言う、ワシよりも乗り気じゃつたのはロスヴァイセじゃろうが」
「な、何を言っているのですかオーデイン様。私は別に」

「とぼけても無駄じゃ。ワシは知っておるぞ。この少年、お主の理想とする勇者そのもの……」

「そおい！」

オーデインさんが何か言いかけた瞬間、女性が先程よりもさらに強力な一撃をオーデインさんに叩き込んだ。見間違いでなければ、オーデインさんの頭から煙が立ち昇っている。

「ところでフューリー。お主の本名は？」

「何事も無かったかのように話を変えないでください！」

「ああもう、お主は黙つとれ。それで、教えてもらえるかの？」

「神崎亮真です」

「うむ、憶えたぞ。ではこちらにも改めて名乗らせてもらおう。ワシはオーデイン。北欧の主神じゃ。そしてこちらがヴァルキリーのロスヴァイセじゃ。ほれ、お主からも挨拶せんか」

「ロ、ロスヴァイセです。あなたの勇名はこちらにも流れて来ています」

「俺達、以前レーティングゲームの会場で会いましたよね。あの時は失礼な態度をとってしまいすみませんでした」

「い、いえ、事情は後から聞きました。こちらこそ、お友達の所へ急いでいたのを邪魔してしまい申し訳ありませんでした」

「こやつ、あの時の事をずつと気にしておつてな。いつか謝りたいとか言っておつたが、よかつたではないか」

「だから！ あなたは！ そういう事を！ 軽々しく！」

「ほほほ、そう何度も食らいはせんぞ」

ロスヴァイセさんのハリセンの連撃を、最小限の動きで全て回避するオーデインさん。

「……フューリー殿」

そんな二人の様子を眺めていると、さつきからジツと佇んでいた堕天使の男性が声をかけて来た。

「私はバラキエルと申す。その、突然こんな事を聞かれても戸惑うかと思われるだろうが、教えて頂きたい。あの娘は……姫島朱乃は元気でやっているだろうか」

「朱乃ですか？」

「ツ……！ 既に名前で呼ぶほどの仲なのか……!? いや、どこぞの馬の骨などに任せるよりもフューリー殿ほどの御人であれば。だが、しかし……」

「おい、聞いてますか？ ……駄目だ、何やらブツブツ呟きながら完全に自分の世界に入っちゃってる。というか、そもそも何で墮天使の彼から朱乃の名前が出て……いや、待てよ。バラキエル。バラキエルって確か朱乃の……」

「……まさか、朱乃のお父さん？」

「んなつ!? き、貴殿にお父さんと呼ばれる筋合いはまだ無い！」

「アツハイ。ならバラキエルさんで通しますけど、今の反応……やっぱり間違い無い。」

「今日という今日は言わせてもらいます！ オーデイン様！ あなたには女性に対するデリカシーというものが圧倒的に足りません！」
「のう、セラフォルの嬢ちゃん。ワシもこの話に出演させてくれんか」

「うーん、ゴメンね。もう役は一杯なの。でも、アクションシーンは公開収録する予定だから、時間があるのなら是非とも見に来て欲しいな」

「そうかそうか。じゃが、一人で行くのもなんじゃしな。どこかに一緒に来てくれる者がいればいいのじゃが」

「……コ、コホン。オーデイン様をお一人にはさせられないので、私と一緒に……」

「いや、バラキエルがおるし、必要無いかの」

「……」(ジワア)

「と思ったが、やっぱり連れて行くか。ロスヴァイセ、ついて来るか？」

「し、仕方ありませんね。ヴァルキリーである私がオーデイン様から離れるわけにはいきませんし、お供させて頂きます」

何か知らんが、話は纏まった様だった。それから当日の撮影場所の説明や、その他細かい所の話の話を聞いていると、いつの間にか一時間は

とつづくに過ぎていた。

「それじゃ、大体の話は終わったし、そろそろ解散しよつか。フューリーさんもお家に帰してあげないとね」

「そんなじゃ、俺達はお先に失礼します！ フューリー様！ 当日はよろしくお願いします！」

「「「しやすー！」」」

「では、ワシらもそろそろ帰るか」

「はい」

「それでは失礼する」

スタントマンのみなさんに続いて、オーデインさん達も退室していった。俺はセラフォルーさんが帰還の魔法陣を準備している間を利用してカテレアさんに話しかけた。

「そうだカテレアさん。今悪魔の駒は持ってますか？」

「もちろん。いつも肌身離さず持っていますわ。・・・ひよつとして、この場でお返しさせて頂いた方がよろしいのでしょうか？」

「はい。そのせいでいつまでも周りに俺の眷属扱いとして見られるのも嫌でしょうし」

「では、お返ししますわ」

カテレアさんが胸のポケットから取り出した『僧侶』の駒を受け取る。これで一つ目だ。

「・・・意外。カテレアちゃんがそんなにアツサリ返しちゃうなんて。私はてつきり色々理由をつけて手放さないだろうと思ってたのに」

準備を済ませたセラフォルーさんがカテレアさんを驚いた表情で見つめている。それに対し、カテレアさんはどこか余裕のある顔で答えた。

「心外ですね。これはあくまでもお借りした物なので、お返しするのは当然ではありませんか」

「それはそうだけど・・・」

「それに・・・ふふ、私はもう眷属などという立場に甘える必要はありませんからね」

(あ・・・この目は残念な事を考えてる時の目だ)

さて、とにかく本番は一週間後だ。必要無いとは思うが、一応台本にも目を通しておこうかな。

魔法陣の中央に立ちながら、俺はそんな事を考えるのだった。

S I D E O U T

その頃、冥界のとある建物の一室に数人の悪魔が集まっていた。

「……確かなのか？」

「ああ、間違い無い。当日はセラフオル・レヴィアタン。そしてあの忌まわしき騎士も来るらしい」

「では、次の標的はその会場とする。『禍の団』の一員として、人間ごときに惑わされた愚かな者達の目を覚まさせてやろうではないか」

彼らの中では自分達の行いこそが正義だった。故に、その盲目的な正義の行いが自分達に何をもたらすか、それに気付く事はないのだった。

第八十七話 天使護衛計画

どうも最近二年生の子達の気分がどこか浮かれている様に見えるが、そういえばそろそろ修学旅行の季節だったな。夕食時にアジアから話題を出されてようやく気付いたわ。ちなみに旅行先は京都だ。

「リョーマさん達は去年どこへ行かれたんですか？」

「俺達も京都だったよ」

「ええ、日本好き私としてはとても楽しい旅行だったわ。・・・あ、思い出しついでだけど、リョーマ、あなた三日目の自由時間に何をしていたの？ 女の子達があなたの姿が見えないって騒いでいたから憶えてただけけど」

三日目？ 三日目というと・・・ああ、あの時は「あの子」の相手で丸一日潰れてしまったんだっけ。路地裏を歩いていたら突然声をかけられて、何故か一緒に京都散策する事になって、途中で変な仮装集団に追いかけられたりして大変だった記憶がある。まあ、最終的にはお母さんに引き渡してめでたしめでたしだったんだが。

「・・・色々あつたんだ」

「その色々を聞きたいんだけど・・・まあいいわ。とにかく、京都はとても素晴らしい所よ。あなたもすっかり楽しんで来なさいね、アジア。班はもう決めているの？」

「いえ、まだです。出来たら、ゼノヴィアさんや桐生さんと一緒にさせて頂いたら嬉しいんですけど・・・」

それはいい。やっぱり気心知れた子と一緒に班の方が楽しいいな。そうになると、兵藤君も一緒に班になってもらった方がいいかもしれないな。

アジアは控えめな子だから、ひよつとしたら自分からは中々誘えないかもしれないし、俺から言うておくべきか。・・・我ながらお節介だと思うが、せつかくの修学旅行なんだ。素敵な思い出をたくさん作ってもらいたい。

「みなさんのお土産もちゃんと買って来ますから楽しみにしてくださいね」

「にやはは、今からお土産の話なんてアーシアらしいにや」

「あの・・・出来たらお菓子を・・・」

「ふふ、私達の事を気にしてくれるのは嬉しいけど、一番はあなたが楽しむ事よ。それを忘れないようにね」

「はいー」

そんな感じで、京都の話題で盛り上がりつつ、夕食の時間は過ぎて行くのだった。

S I D E O U T

イツセーSIDE

朝のSHRが終了し、担任が教室を出て行く前にこんな言葉を残していた。

「そろそろ修学旅行の班を決めとけよ」

班決め・・・修学旅行を楽しめるかどうかの重要なファクターである。男なら可愛い女の子と一緒に班を組む事こそが全て。本来であれば俺もそんなお気楽な気持ちで班を決めたのだろう。

だが・・・俺にはそんな事は許されない。何故なら、俺は「あの人」から勅命を受けたのだから。

「アーシアちゃん！俺と一緒に班にならない!？」

「いや、俺とどう!？」

「いやいや俺でしょ!？」

アーシアに殺到しようとする野郎ども。だが、俺、そして俺と同じく勅命を受けたゼノヴィアはそれよりも早くアーシアの元へ辿り着いた。

「・・・アーシア」

「ど、どうされたんですか、お二人とも?」

「アーシア。俺とゼノヴィアと一緒に班を組んでくれ」

「おい兵藤！ 抜け駆けは・・・ッ!？」

抗議して来たヤツを一睨みで黙らせる。抜け駆けがどうした。こちとら命がかかってんだよ！

『兵藤君。ゼノヴィアさん。キミ達にアーシアの事をお願いしたい』
登校してすぐに神崎先輩に呼び出されたと思っただけいきなりそんな事を言われた。お前らは知るはずもねえがな、先輩はアーシアの為なら上級悪魔相手でも無双しちまうんだぞ。そんなにも大切に思っている子が自分の目の届かない場所へ行ってしまう事が心配なんだろう。だから、この言葉の本当の意味は……。

『旅行中、アーシアに悪い虫がつかない様に守ってくれ』

になる。そして、本当にもしもの話だが、アーシアが他の野郎どもの所為で大変な目に遭ったとかそういう話が先輩に耳に届いたりしたら……。

『イツセー。それ以上考えたらいけない』

この時のゼノヴィアは顔が青かった。おそらく、俺と同じ事を考えていたんだろう。こうして、俺達はアーシアの護衛とも言える役目を先輩に任命されたのだった。

「ほ、本当に私と一緒に班を組んで頂けるんですか？」

「もちろんさ。なあ、ゼノヴィア」

「ああ。是非とも」

「は、はい！ こちらこそよろしくお願いします！」

よし！ これで第一関門はクリアだ！ けど、問題はここからだな。

「そういう事なら俺達も一緒だな！」

「抜け駆けは許さんぞイツセー！」

やっぱりと言うべきか、松田と元浜が湧いて出て来た。

「俺達も同じ班でいいよねアーシアちゃん！」

「一緒に色々回ろうぜ！」

鼻息荒くアーシアに迫る二人の肩をガツチリ掴む。ちよつと力入れ過ぎて肩に指が食い込んでいるが問題は無い。

「痛だだだだ!? おい！ 何すんだイツセー！」

「……よく聞け、松田、元浜。お前らが何を企んでいるかしらんが、

アジアにちよつかい出そうとしてみる。・・・その時は一片の躊躇いも無くテメエ等をブチ殺すからな」

「フアツ!」

一応クギを刺しておくが、こいつら相手には意味が無いだろう。警戒しておかないとな。・・・それにしても、何も知らないってのはある意味幸せだとよくわかる。

「はいはい。そういう事なら私達も一枚かませてくださいない?」

「あ、桐生さんにイリナさん」

「桐生にイリナか・・・。イリナは大丈夫として桐生は・・・まあいいや。お前もあまりアジアに変な事教えるなよ」

「何でアンタにそこまで言われなといけないですかね?」

「お前だからな」

「楽しい修学旅行にしようね!・・・ところで、どうしてゼノヴィアはそんなにも気迫のこもった表情をしてるの?」

「・・・後で教えよう。味方は多い方がいいからな」

「?」

そりゃいい。こうなったらイリナも巻き込んでやる。死ぬ時は一緒だからな。

高校生活のビッグイベントである修学旅行。そんなイベントに、俺やゼノヴィアはまるで一大決戦に備えるかのような心持ちで臨む事になりそうだった。

イツセーSIDE OUT

IN SIDE

夜、アジアが兵藤君達と一緒に班になれた事を報告して来た。それはもう心から嬉しそうにだ。やっぱりお願いしてよかった。また改めて兵藤君達にはお礼を言わないといけないな。

「ただ、イツセーさんもゼノヴィアさんも凄く真剣な顔をしてました。イリナさんもです。どうしてでしょう」

うーん、多分だけど、どんな風に観光名所とかを回ろうか考えてたんじゃないだろうか。三泊四日って長いようで短いからな。ちゃん

と計画たてないと楽しめない。昨日の夕食の時もリアスがそれで失敗したって言ってたし。兵藤君、こういうイベントとか凄く好きそうだから、今から色々イメージしてたりして。あと紫藤さんも。ゼノヴィアさんは意外だけどな。

そしてその翌日の放課後。リアス、アーシアと一緒に家路を歩く俺の耳に、つい最近聞いた憶えのある声が聞こえて来た。

「ほほほ。この街は可愛い子が多いのお。いい目の保養になるわい」

「その目つきは不審者にしか見えないので止めてください！」

「この声は……」

思わず声のした方へ振り向く。果たして、そこには声から連想した人物達の姿があった。

「オーデイン……さん？」

「ん？ おお！ フューリーではないか！ いやはや、これからお主の家にお邪魔しようと思っておったのじゃが。見た所お主達も帰宅する途中なのじゃろう。せっかくじゃし同道させてもらおうかの」

俺の顔を見るなり破顔しながら、その人物……オーデインさんはそんな事を言っただけで来たのだった。

第八十八話 現世の神と異界の神

オーディンさん達を自宅に案内してすぐ、リアスがオカルト部のみんなとアザゼル先生を招集し、全員がリビングへ揃った。

しかし、流石にこんな大人数だとこの部屋じゃ狭いな。独り言のつもりでそう呟いたら、リアスがそれならVIPルームも増設しようとか言い出した。いや、そういうんじゃないかと、普通に場所を移した方がいいと思うんだけどね。

「・・・で、アザゼル先生はこの事を知ってたの？」

ロスヴァイセさんとバラキエルさんの紹介が済んだ所で、リアスがアザゼル先生へそう問い質した。

「ああ。この爺さんが日本にいる間、俺達で護衛する事になっている。でもって、バラキエルは墮天使側からのバックアップ要員だ」

「それならそうと言ってくれればよかったじゃないすか」

「もちろんお前らにも教えるつもりだったさ。この爺さんがそれよりも先に来日したってだけの話だ。おい爺さん。予定の日よりも少し早いんじゃないのか」

「実は我が国で少々厄介事が起こったのお。その厄介事の原因とも言える者に動かれる前にこちらが動いてやろうと思ってるな」

「ほお・・・」

「それと、時間が出来たおかげで、色々観光も楽しめたぞい。冥界でも色々面白いものが見れたしのお」

「へ、緊張感の無い爺さんだぜ」

「そりゃ、ワシじゃからの。それよりもアザゼル坊よ、どうも『禍の団』がまた新しい動きを見せておる様じゃな」

「ああ、それも胸糞が悪くなるやり方だな」

え、初耳ですけど。あの畜生集団、懲りずにまた活動始めるつもりか。しかも胸糞悪くなるやり方で・・・。具体的にはわからんが、やはり連中は見敵必殺という事で決まりですかね。

「連中の目的が未だ不明なのが何とも歯がゆいのお」

「それは調査を進めている。ここでどうこう言ってもしょうがない。

ともかく、正式な会談の日までは爺さんは俺達の客人扱いになる。可能な限りの要望には応えてやるよ。どこか行きたい所とか無いのか？」

「もちろんあるにはあるぞ。じゃが、それよりもまずはフューリーと話をさせて欲しいんじゃないか？」

「俺とですか？」

いきなりの名ざしにキョトンとする俺を見てオーデインさんは朗らかに笑った。

「ほっほっほ。そもそもワシの目的はそれじゃったからな。アザゼル坊や他の者まで集まるとは思っておらんかったわい」

あ、そうか。わざわざ俺の家を訪ねようとしたんだから俺の家の誰かに用事があるってのは当然か。にしても、一体話ってなんなんだろうか。

「ふーむ・・・」

「な、何ででしょうか？」

オーデインさんがアーシアを興味深そうに見つめている。・・・あ、ロスヴァイセさんが後ろでハリセン構えてる。

「ロスヴァイセよ。別にワシはこの娘をやらしい目で見ているわけではないぞ」

振り返る事無くそう口に出すオーデインさんに、ロスヴァイセさんがハリセンを引っ込めた。・・・あれ、今のって何気に凄くない？

「お主がフューリーの寵愛を受けておる聖女殿じゃな。なるほどなるほど。確かに、思わず守りたくなってしまっようなほどの愛らしさじゃのお」

「ち、寵愛だなんて、私は、その、あうう・・・」

ええっと・・・寵愛ってどういう意味だっけ？　こういう時は誰かに聞くのが一番だ。というわけでリアス・・・はなんか妙なプレッシャーを感じるからパス。黒歌・・・も同じく。というか、今の女性陣みんな怖くて話しかけれないんですけど。

ならば男子組・・・と視線を向けたら顔を背けられた。兵藤君、そっちの壁には何も無いよ。木場君、そんなに凝視しなくても、ウチの天

井にはシミ一つ無いと思うよ。ヴラディ君、何でそんな怯えたように両手で耳を塞ぎながら目を瞑ってるの。

「・・・ふむ、お主からは不思議な力を感じるのお。神器・・・ともまた違う。ワシも今まで感じた事の無い力じや。何かの加護とでも言えればいいのじやろうか。くくく、ワシの知識欲を大いに刺激してくれるわい」

「加護だあ？ 俺には何も感じねえけど」

「そりやこの娘と違って、お主の心は汚れきっておるからのお」

「けっ！ どの口が言ってるやがる。・・・それよりもアシア。この爺さんの言う加護とやらだが、お前、最近何か変わった事は無いのか？」
変わった事と言ったら・・・やっぱりオカンと話せるようになった事だよな。俺と結成した『アシアを守る会』の会員として、彼女を守る為に動いているのかもしれない。

「ええっと・・・その・・・」

アシアが助けを求めるように俺の方を向いて来た。正直に話しかどうか迷っているようだ。でも、俺がぶつちやけた時もアツサリ信じてもらえたし、別に言ってもいいんじゃないかな。

「・・・え？ お話してよろしいんですか？ はい、はい、わかりました！」

「ア、アシア？」

虚空に向かって話すアシアの姿に戸惑った様子のリアスが声をかける。まあ、事情を知らない人が見たら普通そんな反応するよな。今のはおそらくオカンがアシアに声を届けたんだろう。

そして、アシアはアザゼル先生へオカンと話せるようになった事を伝えた。その瞬間、一部を除いた全員が限界まで目を見開いて驚きを表現していた。この一部っていうのは、前回の会談の場になかった人達の事だ。

「ちよちよちよ！ ちよつと待ってくれ！ オ・クアーン様って確か・・・！」

「う、うん、神崎先輩をこの世界へ送って来たという・・・」

「異世界の・・・神様」

ふと気付くと、オーデインさんが先程までの穏やかだった表情を一変させ、目を細めながら口を開いた。

「・・・話には聞いておったが、なるほど、異界の神が関わっておったのか。流石のワシも異世界の事まではわからんからのお」

(異世界の神との交信だと・・・!?　・・・いや、大丈夫。そうとも、俺は全てを受け入れると決めたんだ。今さら一人二人増えた所で問題は無い)

「アザゼル坊?」

「はあ・・・こりや俺一人で抱えられる問題じゃねえな。アシア、悪いが、サーゼクスとミカエルも混ぜて改めて後日話を聞かせてもらえるか?」

「は、はい」

『あらま!　どないしよう。イケメンちゃんのお話やなんて。当日はしっかりメイクせんとあかんかしら』

話をするのはアシアであってあなたじゃないです。というか、いきなり声送って来ないでくださいよビックリするなあ。

「さて、聖女殿についてはこれくらいにしておくとして・・・フューリー。次はお主についてじゃ。先のレーティングゲームで見せたあの力について説明してくれんか。ワシが知る限り、悪魔の駒があのよくな現象を起こした事例は存在せんのじゃが」

「お、いいぞ爺さん。そういや俺もその事が気になってたんだ。どうなんだよフューリー。アレは『悪魔の駒』の力なのか?　それとも、お前自身が元々持っていた力なのか?」

「そのどちらかと聞かれれば前者です。・・・もつとも、俺の持つ駒は既に『悪魔の駒』とは呼べない代物ですが」

ついでとばかりに魔改造された『オカンの駒』についても説明したらアザゼル先生に駒を二つ貸してくれと言われたので『兵士』の駒を二つ預けた。一つはサーゼクスさんに渡して、もう一つは自分が調べららしい。

(へ、こいつは研究のしがいがありそうだぜ。面白い事の二つや二つくらいはわかればいいんだがな)

「ねえリョーマ。その駒は悪魔への転生機能が無いのよね？ なら『王』の駒を取り込んだ今も、あなたはまだ人間って事？」

「ああ。正真正銘、ただの人間だよ」

「なら・・・あなたの寿命は・・・」

「ん？」

「い、いえ、何でも無いわ。それよりも、オクアーン様っていうのは随分と優しいのね。別の世界に送りこんだ後も色々手助けしてくれるなんて」

まあ、自分の勘違いでこの人外溢れる世界を選んじやった事に責任感じてみたいだな。俺としては責任取るどころか、むしろこちらが何かお返ししないといけないくらい色々やってもらってる気がしてならないんだけど。

「よし、ちよつくら冥界まで行って来るか。バラキエル、後は任せただ。これから忙しくなりそうだ」

「はっ」

「ワシはもう少しここでゆっくりさせてもらおうかの」

「いえ、オーディン様。そろそろ外も暗くなってきましたし、私達もお暇した方がよろしいかと」

「嫌じゃ。ワシはまだこの可愛い子達と一緒にお茶を楽しみたいんじゃない」

「駄々をこねないでください。子どもじゃないんですから」

「グチグチうるさいのお。そんなんじゃないからその年まで彼氏が出来んのじゃぞ」

「ほあっ!?! い、今は彼氏がどうかだなんて関係無いじゃないですかー!」

「別に私は構わないわよ。ただ、他の子達はそろそろ帰った方がいいわね。イツセーなんかは親御さんが心配するだろうし」

「ああ、大丈夫ですよ部長。これくらいで心配する様な親じゃないんで」

「あら、信頼されてるのね」

「どうなんですかね？ まあ、そういう事なら俺はそろそろ失礼しま

すね」

「じゃあ僕も」

「ええ。ゴメンなさいね、急に呼び出したりして」

「ふふ、『王』の呼び出しに参上するのは当然ですよ」

アザゼル先生を先頭にみんなが玄関の方へ移動する。そんな中、紫藤さんがその場を動かずにジッと俺の方を見つめていた。

(神崎先輩……。別の世界とはいえ、本当に神から遣わされた騎士様だったんですね。私、そんな方とお知り合いになっていたただなんて……。こんな、こんな素晴らしい事があつていいのかしら)

「紫藤さん？ 何かまだ用事があるのかな？」

「ひゃい!? い、いいいいえ！ 何でもないでしゅ！ 私もそろそろ失礼しましゅ！」

「あつ……。！」

「はぶっ!？」

リビング入口のドアへ思いっきり顔をぶつける紫藤さん。赤くなつた鼻を押さえ涙目でその場に蹲つた。

「だ、大丈夫か、紫藤さん？」

「ら、らいひようふれす。れ、れは、こんろこそしつれいしまふ」

「あ、待ってくださいイリナさん！ 帰る前に私の神器で……。！」

フラフラで玄関へ向かう紫藤さんをアーシアが慌てて追いかけて行った。そして最後に朱乃がリビングを後にしようとしたその時、バラキエルさんがその背中へ声をかけた。

「待ってくれ、朱乃。帰る前に話したい」

だが、バラキエルさんのその言葉を受けても、朱乃は足を止めようとしなかった。そこでバラキエルさんは朱乃へと近づきその手を掴んだ。

「頼む。私は父親としてお前の事が……。！」

「……。私に父親はいない。私の父親は母様を見殺しにする様な人じゃないもの」

そう言つて一瞬だけ振り返つた朱乃の顔を見て俺はゾツとした。その表情は、普段のにこやかな表情とはうって変わつて恐ろしく冷た

いものだった。本当に彼女は朱乃なのか？ そう思ってしまうほどに。

強引に手を振りほどこき、朱乃の姿は玄関の向こうへ消えて行った。残されたバラキエルさんは悲し気に顔を伏せたままその場で固まっていた。

「・・・バラキエルさん」

その姿にいたたまれない気持ちになり、つい声をかけてしまった。バラキエルさんは顔を上げ、無理矢理笑顔を作って口を開いた。

「お見苦しい所をお見せした。お許し頂きたい」

「見苦しいなんて思ってません。それよりも朱乃は・・・」

「・・・私が悪かったのだ。私の所為で朱乃は母を、朱璃を・・・」

バラキエルさんの言葉はそれ以上続かなかった。どうやら、朱乃とバラキエルさんの確執は相当根深いものなのだろう。

でもな、朱乃。嫌いでも、憎んでいても、親が生きていてくれるつてのは幸せな事なんだよ。俺の両親はこの世界に来る前に既に死んでしまった。もう二人の声を聞く事は出来ない。もちろん、生きていた頃から二人は好きだった。だけど、二人の遺影を見る度に思つたよ。何でもつと話をしなかつたんだろう。何でもつと触れ合つたりしなかつたんだろうって。

朱乃、以前キミはお母さんを亡くしたと言つた。その悲しみは言葉では言い表せないくらい大きいんだろう。でも、キミのお父さんは生きてる。こうしてまだ話も出来るし触れる事だつて出来る。俺はキミにこの時間を大切にしたい。じゃないと、絶対後悔すると断言出来るから。

・・・悪いな朱乃。ひよつとすればキミからすればお節介極まりないのかもしれない。だが、この状況で何もしないという選択肢は俺の中には存在しない。

具体的な案は無い。だが、姫島朱乃という大切な友達の為、例え嫌われようが恨まれようが、俺は俺に出来る事をやらせてもらう。

(じゃないと、俺にお節介を受け継がせたあの二人に怒られてしまうからな)

記憶の奥底に眠る両親の笑顔。それを思い出しながら俺は決意を固めるのだった。

第八十九話 その想いを届ける為に

「朱乃のお母様は朱乃を守って亡くなられたの」

オーデインさん達が帰り、夕食を済ませた所で、リアスは俺達を再び席に着かせそう切り出して来た。もしかしなくても、俺とバラキエルさんのやり取りを聞いていたのかもしれない。

ともかく、リアスは俺達に朱乃とお父さんの確執の理由を語った。その内容の壮絶さに俺達は言葉を失い、ただただリアスの言葉に耳を傾けるだけだった。

「襲われた時、朱乃は襲撃者達からさんざん聞かされたそうよ。父であるバラキエルが他の勢力からどれほど恨まれているかを。だからこうなったのは当然なのだ。そして、お母様は朱乃の目の前で……」
最後まで言葉を紡がず、悲しそうに顔を伏せるリアス。そうか。だから朱乃は自分の中の堕天使の血をあれほどまでに嫌っていたのか。ハーフだからという理由で住む家も追われてしまったのもそれを助長させたのかもしれない。

「だから朱乃は今でもバラキエルに対して心を閉じてしまっている。それでも、以前に比べたらずいぶんと明るくなったのよ。冥界での特訓の際、アザゼル先生に堕天使の血を受け入れるよう言われた時だって、あの子は頷いていた。……お母様の事も、きっと朱乃自身心の底では理解しているはずなの」

だけど、それを素直には受け入れられない。だからバラキエルさんの所為にする事で自分の気持ちを保って来たんだろう。無理も無い話だ。

「あの時、バラキエルが間に合っていれば。……ううん、せめて、お母様の最期の言葉をあの二人が聞く事が出来ていれば、きっと今もあの二人の仲は……。なんて、もしもの話なんてしてもしょうがないわよね」

最後にそう言ってリアスは席を立った。俺達もまた同じ様に立ち上がり、それぞれ自分の部屋に戻るのだった。

.....

・・・

さて、事情は理解出来た。なら、次はどう行動すればいいかだが：：
実は既に一つ案は出ている。二人の不仲の理由はお母さんの死。ならば、そのお母さんを精神コマンド『復活』で蘇らせるのはどうだろうか。大破どころか、普通に原子レベルまで消滅したはずのロボットを完全に元の状態に戻せるほどの力ならば、死者の蘇生も可能だと思う。

でも、それって本当に正しいのだろうか。別に生と死を神聖視しているわけではないが、死んだ人を生き返らせるというのは命を好き勝手に操るという意味だ。そんな事を、同じ人間がやっていいのか。『友情』で怪我を治すのとはわけが違いすぎる。

『ならどうするつもりや？』

・・・もういきなり話しかけられても驚かなくなった自分がいま
す・・・

『アンタがこのまま黙つとるわけないからな』

俺ってそんなに読まれやすい性格なのだろうか。：：まあいい。俺の性格の事なんかよりも朱乃のお母さんの事だ。やっぱり亡くなった人を生き返らせるなんて、良く無い事なんですかね。

『そうやなあ・・・。死者の蘇生なんてやりだしたらキリが無いからなあ。大切な人ともう一度会えるんやったら誰だってそうするんちやうん？』

もつともな言葉だ。なら、やっぱり蘇生で・・・とそつちに傾こうとした俺の頭に、オカンの沈んだ声が響いた。

『せやけど、これだけは言わせてもらうで。蘇生したからといって、必ずしもみんなが幸せになるとは限らへん。アンタが言う様に、命を操るといふ事はそんな軽いもんやない。ある種の覚悟も必要になるで』
なるほど・・・オカンはそうした事例を見て来たのだろう。今の声色から俺はそう察した。駄目だ。やっぱりここはもつと慎重に考えるべきなんだろう。

『考えるのもええけどな、元々の目的を忘れたらあかんで。あの父娘

の仲を取り戻すのがアンタの願いなんやろ』

・・・ああ、そうだ。それが一番の目的であって、朱乃のお母さんを蘇らせるのはその為の手段だ。他に方法があるならば必ずしもそうする必要は無い。

ただ、部外者である俺がいくら言った所で、バラキエルさんはまだしも朱乃は聞く耳を持たないだろう。出来れば二人と関わりがあつて、なおかつ朱乃を抑えられる人じゃないと。といっても、そんな都合の良い人物が簡単に見つかるわけが無い。リアスが言った様に、お母さんの言葉なら朱乃も素直に聞いてくれるかもしれないがな。

『ふむ、ならそうすればええやん』

はい？ いやいや、だからお母さんは亡くなってるんですって。まさか、魂でも呼び戻して話でもさせるつもりですか？ そんな神様レベルの奇跡なんか・・・。

『出来るよ。ウチ神様やもん』

そうだった！ え、いやマジで!? どうやって!?

『もちろん、色々制限はあるんやけどな。まず、時間はアンタらの感覚で言うと約三十分だけ。そして、呼び戻した魂はそのままじゃ何も出来へんから、それを受け入れる器が必要や』

その器っていうのは・・・ひよつとして生きている人間とかですか？

『正解や。憑依と言った方がわかりやすいかな。ともかく、呼び戻した魂は憑依した者を通じて言葉を発したり動いたり出来るんや』

ならお願いします！ 俺に朱乃のお母さんを憑依させて話をさせてあげてください！ そうすればきつとあの二人の仲も・・・！

一拍の間も無くそうお願いすると、オカンは呆れたような、それでいて嬉しそうな声で答えた。

『ふふ、デメリットや危険性の確認もせんと自分に憑依させる言うなんてな。アンタらしいというかなんとか・・・』

あ、す、すみません。新しい方法が見つかつてつい・・・。

『まあ、そんなもん無いんやけどな』

ないんかい!?

『当たり前や。他の神は知らんけど、ウチがアンタに危険な事をさせる思うたんか?』

それは無いな。うん、即答できる。だってオカンだもん。

『ただなあ、アンタのやる気を削ぐ様で悪いんやけど、アンタには憑依させられへんで』

WHY!?! 何故に!?

『女性の魂は女性に、男性の魂は男性にて決まっとるんや。せやないと色々都合が悪い所が出て来るからな』

なら朱乃のお母さんを憑依させる為には女性でないといけないという事か。くそ、せつかくの良い案だと思ったのに。

『勝手に完結してもらったら困るわ。ちよつと待つとき』

その言葉を最後にオカンの声が聞こえなくなつた。待てと言われたのでそのまま五分くらい待っていただろうか。俺の部屋の扉が勢い良く開かれた。

「リョーマさん、お話はオ・クアーン様から窺いました！ 私なんかでよければお役に立たせてください！ 私も、あんな辛そうな朱乃さん見たくありませんから！」

そう言つて、天使は見るだけで浄化されそうな笑顔を俺に向けて来るのだった。

.....

それから数日後。ちょうど冥界での撮影を翌日に控えた今日、俺とアーシアは朱乃の神社へと足を運んだ。

「こんにちは、朱乃さん！」

「あらあら、リョーマにアーシアちゃん。突然やつて来るなんてどうしたのかしら?」

「キミに少し話があつてな」

「まあ、そういう事ならここじゃなくお家で……」

「待ってくれ。そろそろ来るはずだから」

「え?」

たった今上って来た石段の方へ目を向ける。同じ様にそちらへ顔を向けた朱乃の目が大きく見開かれた。

「ッ!? な、何である人が・・・!?」

現れたバラキエルさんの姿に驚く朱乃。オーデインさんの連絡先を知らなかったたので、アザゼル先生の方からこちらへ来てくれるよう連絡してもらった。

『そもそもの原因である俺が言える義理じゃないのは十分承知している。だが、それでも言わせてほしい。・・・頼む、アイツ等を解放してやってくれ』

電話口でのアザゼル先生の言葉には、俺にはわからない大きな何かが進められているのを感じた。

・・・さあ、役者は揃った。ここまで来たらもう引き返せない。この作戦が失敗すれば、おそらくもう俺には何も出来ない。だからこそ絶対に二人の仲を修復させてみせる。

(朱乃、恨むんなら、俺なんかと出会ってしまった自分の不運を恨んでくれよ)

こちらへ近づいて来るバラキエルさんへ視線を向けつつ、俺は横にいる朱乃へ向かってそう心の中で呟くのだった。

第九十話 腹を割って話そう

朱乃の家の一室を重苦しい空気が漂う。理由は言わずもがな、会話どころか視線すら合わそうとしない朱乃とバラキエルさんだ。正確にはバラキエルさんの方は何とかアプローチしようとしているが、朱乃がそれらを一切無視しているといった感じだが。

「・・・それでリヨーマ。どうしてこの人を呼んだのかしら？」

その声は僅かながら攻撃的な色を含んでいた。まあ、無理も無いんだがな。正直、今の彼女の雰囲気と合わさって結構怖いんだが、ここで怯んでいては始まらない。

「バラキエルさんと呼んだのは他でも無い。これから二人には腹を割って話をしてもらいたい。今まで溜めていたもの、抱えていたものを洗いざらいな」

「フューリー殿。まさか・・・」

「・・・聞いたのね、私達の過去を。おそろくしゃべったのはリアス辺りかしら」

バラキエルさんが目を見開き、朱乃は逆に目を細めた。

「リアスを責めないでくれ。彼女に話をさせる様な空気を作ったのは俺だからな」

「そう。まあ、どうでもいいですけど。私はこの人と話す事なんてありませんから」

「キミのそれは話す事がないんじゃない。話す気がないだけだ。俺は今言ったはずだ。表面上の事じゃ無く、キミがずっと心の奥底に抑えていた本当の気持ちをバラキエルさんに伝えるべきだ」

なるべく刺激しない様に淡々とそう口にしたが、それが朱乃の気に触ってしまったのか、彼女は立ち上がり声を荒げた。

「そんなものない！ この人の所為で母様が死んでしまったのは間違いないんだから！ 家族の問題に他人であるあなたが軽々しく踏み込んで来ないで！」

「他人じゃありません！」

そうやって同じ様に立ち上がったのはアーシアだった。彼女はズ

ンズンと朱乃の方へ大股で近寄って行った。

「ア、アーシアちゃん……?」

アーシアの勢いに気圧されたのか、朱乃が表情を戸惑わせる。

「朱乃さんは私の……私達の大切なお友達です! 仲間です! そんなあなたが今こうして自分の気持ちを押し殺して辛そうな顔をしている。そんなの私には我慢出来ないんです! お友達は助けあうものだって、私は朱乃さんや他のみなさんを見て学んだんです! だから……だから、私は踏み込みます! 私は両親の顔を憶えています。でも、朱乃さんはこうしてお父様の顔を見て話が出来るじゃないですか! それなのに、嫌いなままでいるなんて悲しすぎますよ……」
訴えかける様に力強く紡がれるアーシアの言葉に、朱乃の瞳が揺れる。

「はは、言いたい事を全部アーシアに言われてしまったな」

「あうう、すみません。朱乃さんの言葉が凄く悲しくて、気付いたらあんな事を……」

「謝らないでくれ。むしろよく言ってくれた。……朱乃、今アーシアが言った通りだ。俺達は中途半端な気持ちでこの場にいるわけじゃない。それだけはわかって欲しい」

「わ、私は……」

よし、もう一押しして所か。ならばここで切り札を使わせてもらおうぞ! オカン! 準備は!?

『バッチリや! いつでも始められるで!』

了解! ならば起こしてやろう! 三十分だけの奇跡ってヤツを!

「……アーシア。始めよう」

「わかりました!」

「始める? 一体何の話?」

「朱乃、バラキエルさん……。これからアーシアの体にお母さんの魂を憑依させる」

「ッ!?!」

まさに愕然といった表情を見せる二人に対し、俺はさらに説明を続

けた。

「時間は三十分しかないが、その間にお母さんを交えて三人でしっかり話をすればいい。あの時、キミのお母さんが何を思っていたか。そして、キミとバラキエルさんの本当の気持ち」

「ま、待ってリヨーマ！ 魂を憑依って、そんな事が可能なの!?!」

「そうだ！ 神器の中にはそのような力を秘めている物もあるかもしれないが、貴殿はその様な物は持っていないはずだろう!」

「その話はまた後でしましょう。さあ、来ますよ」

祈りのポーズを取るアーシアの頭上に淡く小さな光が生まれる。それは彼女の周囲を漂いながら大きさと光の強さを増して行き、それがある境を越えた時、その光がゆっくりとアーシアの胸へと吸い込まれて行った。

『憑依完了や！ ほな、声をかけてやってな』

「朱乃。お母さんと呼んであげてくれ」

「母、様……?」

朱乃が恐る恐るといった感じでアーシアへ声をかける。それから五秒くらい経過した後、アーシアはゆっくりと目を開いた。

「……あなたは。いえ、わかるわ。あなたは朱乃ね。ふふ、こんなに素敵な女の子に成長するなんて、母親として鼻が高いわ」

朱乃の頭から足までじつくりと見つめた所で、アーシア……いや、朱乃のお母さんである朱璃さんにはっこりと顔を綻ばせた。

「し、朱璃？ 本当にキミなのか?」

「まあ、愛する妻の顔を忘れちゃったの? ……つと、いけない。今はこの女の子の体を借りてるんだからわかるわけないわよね。そうね……あなたが私に言ってくれたプロポーズの言葉でも言えば信じてくれるかしら? あの時は夕日が綺麗だったわよね」

「ツ……朱璃い!」

バラキエルさんが感極まったのか、朱璃さんに抱き着こうとする。……が、対する朱璃さんはそれをひらりと回避し、目標を失ったバラキエルさんは後ろの壁に顔から突っ込んでいた。うむ、とても痛そうだな。

「あがが・・・し、朱璃。何故・・・」

「この子の体で抱き合うわけにはいかないでしょ。うふふ、あなたつたら、鼻の頭が真っ赤じゃない。そんなに私を抱き締めたかったのかしら」

な、なるほど、アーシアの事を考えてくれたわけだな。・・・それにしても何か凄く楽しそうな表情なんだけど。なんだかそこはかたなくSな雰囲気を感じる。つか、アーシアのS顔とか初めてなんですけど。

そんなどうでもいい事をボケーつと考えていたら、不意に朱璃さんの表情が沈んでしまった。

「・・・事情はオ・クアーンさんという方に聞きました。ごめんなさい、私の所為で、あんなにもお互いを愛し合っていたあなた達の仲を引き裂いてしまつて」

「ち、違う！ 母様は何も悪く無い！ 悪いのは母様を殺したヤツ等じゃない！ それに私だつて、母様が殺される時に何も出来なかつた！ 私だつて同罪だわ！」

「そんなわけが無いだろう！ 子どもだつたお前に何の罪があるというのだ！ 悪いのは私なんだ！ 間に合わなかつた私が！ もつと言えば、そもそもあの時私がああに立ち寄りなければ、私と出会わなければ朱璃は死なずに済んだのだ！」

「あら、そうなると朱璃は生まれなかつたのよ。あなたは朱璃の存在はどうでもいいの？」

「馬鹿な！ 私は朱璃を心の底から愛しいと思つている！ 感謝している！ ありがとう！ 私と朱璃の間に生まれてくれて本当にありがとう！ キミだつてそうだ朱璃！ 私はキミの事も、朱璃の事も、一日とて忘れた日は無かつた！」

「父・・・様・・・」

俺の記憶が正しければ、おそらく再会して初めて朱璃がバラキエルさんを父と呼んだ瞬間だつた。

「・・・聞いたでしょ、朱璃？ あの事件は確かにこの人が原因だつたのかもしれない。だけど、この人が私やあなたを心から愛してくれて

いたのも確かなの。だから、ね？　あなたもこの人を愛してあげて。私はもうあなた達と入れないけど、二人が一緒になって笑顔でいてくれる事だけが私の願いだから」

「母様……！　わたし、私、父様が悪くないってわかってたの！　でも、そうしないと、そう思わないと、私の心は耐えられなかった！　けど……けど！　本当はもつと父様に会いたかったの！　もつと父様に頭を撫でてもらいたかったの！　もつと父様と遊びたかったの！　もつと、もつと……！」

「そう……。なら、もう我慢しなくていいわ。これからはもつと父様に甘えなさい。親というのはね、子どもに甘えてもらう事がとっても嬉しいんだから。……そうでしょ、あなた？」

「ああ……。ああ！　朱璃の言う通りだ！　朱乃！　私はもう二度と同じ過ちは繰り返さない！　今度こそ、私は私のかげがえのない家族を守ってみせる！　お前が私を信じてくれるならば、例え伝説の騎士であろうとも命を捨てて立ち向かってみせよう！」

「父様……！」

さりげなく酷い事言われた気がするが、こうやって二人が抱きしめ合う姿が見れたんだから良しとしよう。……っか、さつきから色々ヤバイ。家族の大切な時間を邪魔しない様、一旦クールに去ろうとしたけど、涙とか鼻水とか、とにかく気を抜いたら穴という穴から吹き出しそうなんですけど。

この感動シーンを汚い物で台無しにしたくない。そう思って、俺は気付かれない様にその場を去ろうとしたのだが、朱璃さんに見つかってしまった。

「あら、どちらへ？」

「……邪魔者は退散します。どうぞ、俺の事は気にせず、存分に話をしてください」

なんか涙声っぽくなってしまった。そろそろ本気でマズイぞ。今度こそ部屋を出よう……。としたら今度はバラキエルさんに引き止められた。

「フューリー殿！　この様な奇跡を与えてくれた事、このバラキエル

生涯忘れはしない！ だが何故だ！ 何故伝説の騎士とまで呼ばれる貴殿が私達の為にここまで……！」

「俺が何者かなど関係ありません。友を……大切な人の為に何かしてあげたい。それは人として当然の思いなのですから」

「た、大切……!?!」

「あらあらまあまあ」

「や、やはり貴殿と朱乃は既にそれほどの仲に……!?!」

なんかそれぞれ驚いている様だったが、この隙とばかりに俺はやつと部屋を脱出する事が出来た。そのまま玄関へ向かい、外に出て思いつき深呼吸した。

「……終わった」

『ああ、終わったな』

オカン……。ありがとうございます。見ました、あの朱乃の顔。涙をボロボロ流してましたけど、本当に、本当に嬉しそうに笑ってました。

『もちろんや。そして、あの子の笑顔を取り戻したのはアンタや』

それは違う。朱乃の笑顔が戻ったのは、朱璃さんの魂を呼び戻してくれたオカン。そして、俺のお節介に付き合ってくれたアーシアのおかげであって、俺なんて、偉そうにくっっちゃべってただけだ。

『それも、全てはアンタのあの子の為に何かしてあげたいという思いから始まったんやで。もう少し、自分の事を褒めてやってもええと思っうけどな』

はは、そう言ってもらえるだけで十分ですよ。

『……アンタは目標というか、求めるもののレベルがちよつと高いと思っうんやけどな(ボソツ)』

何か言いましたか？

『何でもあらへんよ。それで、まだ時間があるけどどうするつもりや?』

そうですね……。何だか体を動かしたい気分ですし、この神社の掃除でもしときましようか！

偶然目に留まった竹ぼうきを手に、俺はテンション高くそれを使っ

て掃除を始めるのだった。

第九十一話 魔装騎士とTHE KNIGHT OF
FURY

「ふ……完璧だ」

目の前で山盛りに積もった落ち葉その他のゴミに満足気になって
いると、家の中からアシア、そしてちよつとだけぎこちなさが残る
が、それでもしつかりと寄り添って朱乃とバラキエルさんが出て来
た。

「な、何をやっていたのリョーマ?」

「ああ、少しばかり掃除をな」

「な、何でお掃除なんですか?」

「しかもその量、少しばかりというレベルでは無いぞ」

人間、テンションさえあれば大抵の事は出来るもんですよバラキエ
ルさん。先日のペロリスト達との戦いで俺が学んだ事です。

「それよりも……そちらも終わったみたいだな」

「……ええ」

アシアが元に戻っているという事は、朱璃さんの魂は彼女の中か
ら消えた事になる。本当に短い時間だったが、二人の満足そうな顔を
見る限り、心残り無く話が出来たみたいだ。

「リョーマ、アシアちゃん。改めてお礼を言わせて。あなた達のお
かげで、私は母様の、そして父様の本当の気持ちを知る事が出来た。
本当に……本当にありがとう」

「いや、俺は……」

「次にリョーマさんは『ただ朱乃の悲しむ顔が見たくなかった』と言
います」

「ただ朱乃の悲しむ顔が見たくなかった……はっ!?!」

「あらあら、アシアちゃんたらお見事ね」

「えへへ、リョーマさんなら絶対そう答えるって思いましたから!」

楽しそうに笑うアシアと朱乃。それを見てバラキエルさんも僅
かに口元を緩める。正直、そこまで面白い事かなとも思うが、みんな

から感じられる温かい雰囲気、心地よかったので俺も余計な事は言わず笑っておく事にした。

『うんうん、みんなええ笑顔や』

『そうですね。あの人も朱乃もやつぱり笑っていてくれないと』

・・・あるえー？ 幻聴だね？ オカンに続いて朱璃さんの声まで聞こえて来たんですけど。

『幻聴ちゃうよ。この子の魂はウチが引き取ったからな。あの子達と一緒にこつちでウチの手伝いでもしてもらおう思うてな』

『これで二人を見守り続ける事が出来ます。それにしても・・・うふふ、まさか女神様の正体がこんなひょうきんなおば様だったなんて思いませんでしたわ』

『幻滅したか？』

『とんでもありませんわ。でも、それなら私が最初に見たあのお美しい姿は？』

『アレはゴツデスモード言うてな。言うなればウチの仕事姿や』

『へえ、そうなんですか』

な、なんかめっちゃ仲良さそうに会話してる。

その間に、朱乃は自分の胸に手を当てながら宣言するかのよう、言葉を見つめて決意したわ。私は精一杯生きてみせる。きっと、今も私を見守ってくれているであろう母様の分まで」

うん、そうだね。本当に見守ってくれてるみたいだから頑張らないとね。

『ほんなら、ウチ等はこの辺で失礼するな。この子にこつちでの決まり事やら何やらを説明せんとアカンから』

それつきりオカン達の声は聞こえなくなった。・・・いいのか？ こんな終わり方でいいのか？

「しかしフューリー殿。先程は聞きそびれてしまったが、貴殿は如何にして朱璃の魂を呼び戻したのだ？」

「父様。あまり詮索は・・・」

「むっ、そうだな。恩人に対して今のは失礼だったな。フューリー殿。」

今は忘れて頂きたい」

別に答えても構わなかったんだけど。こつちから話すとなんか恩に着せるみたいだし、バラキエルさんが引っ込んだならこの話題はここで終わらせておこう。

「・・・では朱乃。私はそろそろオーデイン殿の元へ戻る。アザゼル総督に無理を言っつてこちらへ来させてもらったのでな」

「うん・・・」

素直に頷く朱乃だが、その表情はどこか寂しそうだった。それに気付いたバラキエルさんが彼女の頭を優しく撫でる。

「そんな顔をしないでくれ。護衛という立場ではあるが、時間がある限り、こちらに戻るようにするからな」

最後にもう一度朱乃を抱き締め、バラキエルさんは石段の方へ向かって歩き始めた。その背中へ朱乃が声をかける。

「父様！」

「ん？」

「あの・・・その・・・い、行つてらっしゃい！」

「・・・ああ、行つて来るよ、朱乃」

慈しみに溢れた表情を見せながら、バラキエルさんは去って行った。

「・・・リョーマさん。家族つて、本当に素晴らしいですね」

「そうだな・・・心底そう思うよ」

「わ、私も、いつかはあんな素敵な家族を持てるでしょうか」

「そうだな・・・アーシアならきつといいお嫁さん、そしてお母さんになると思うよ」

「な、なら・・・リョーマさんが貰ってくれますか？」

「そうだ・・・ん？」

ちよつと待て、今さらつと凄いな事言われなかったか。アーシアが・・・こんな天使が俺の嫁だと・・・？

「・・・駄目だな」

「え・・・？ あ、そ、そうですよね。私なんかじゃリョーマさんと釣り合わ・・・」

「幸せ過ぎて俺の命が持ちそうに無い」

「ふええ!？」

うん、想像しただけで昇天しそうだわ。妄想だけで俺を殺しかけるとは・・・アーシア、恐ろしい子!

「もう、リヨーマ。さつき父様と母様の前であんな風に言ってくれたのにもう浮気するの?」

ちよつ!?! あ、朱乃さんや! 何でしなだれかかって来るの!?! 近いから! 顔とか色々近いから!

「さつき? な、何を言っただんですかりヨーマさん!?!」

「ゴメンねアーシアちゃん。それは私とリヨーマだけのひ・み・つ」

「むむむ・・・ま、負けませんよ!」

「うふふ、それはこっちのセリフよ」

何を争ってるのかは知らんが、とりあえず離れてください!

俺を挟んで火花を散らす二人を見て、俺は心からそう思うのだった。

・・・
・・・
・・・

最後に妙に疲れてしまったが、とにかく朱乃とバラキエルさんの関係の修復は完了した。これで今日は気持ち良く眠れる・・・と思っていた俺は風呂上がりにハツと思い出した。

「・・・そうだ。明日は冥界で撮影があった」

今日の朝までしつかり憶えていたはずなのに、朱乃とバラキエルさんの事で完全に吹っ飛んでいた。これはマズイ。今からでも明日の確認をしておかないと。

俺は一旦部屋に戻り、台本を手にもう一度リビングへ向かった。

「リヨーマ? どうしたの一人で」

そこへリアスがやって来た。首を傾げる彼女だったが、俺が持つ台本を見て察したようだった。

「そういえば、明日が撮影なのよね。公開収録なんですよ? 残念だわ、明日は私ちよつと用事があつて行けないのよ。でも、放送分は

しつかり見させてもらうつもりだから、頑張つてねリョーマ」

見る事は決定なんですね。これは益々プレッシャーだな。アガレスさんから『今から凄く楽しみです！』なんてメールが送られて来たし。本当に人気の作品だったんだな。

「どんな風に撮影するの？」

「ああ、それなんだがな・・・」

俺は台本の付箋のあるページを開いた。ちようどここからがアクションシーンになる。セラフオールさんが言っていた通り、オールアドリブと書かれてはいるんだが・・・。なんかアクションだけじゃなくセリフもアドリブで入れてくれとか書いてある。

「動きならまだしも、言葉までその場で瞬時に考えるなんて俺に出来るかどうか・・・」

「別に難しく考える必要はないんじゃないかしら。・・・そもそも、最近あなたが口にして来た言葉を思うと、演技とかしなくても素で十分な気がするけどね」

最近つて・・・なんかおかしい発言したかな俺？　ちよつと前までなら確かに恥ずかしいセリフを連発していた憶えもあるけど。

「それにしても、あなたってこんな時にでも真面目なのね。リハーサルだつてあるんでしようし、本当に重要な所なんかはきつとセラフオール様が言つてくださるわよ」

そ、そうかな・・・？　うん、そうだよな。確かにリアスの言う通りだ。俺はただ、俺の役目を務めればいいだけだしな。そう思ったらちよつと気が楽になったぞ。

「ちなみにアクションシーンだけど・・・ちゃんと手加減するんでしよう？」

「もちろんだ」

思うままにやれと言われたつて、あくまで演技なんだからな。けどなあ・・・あのスタントマンのみなさんを見る限り、ガチで俺をボコりに来そうな感じでちよつと怖いんだよな。

「だが、あまりに手加減が過ぎると不自然に映らないだろうか」

「それは大丈夫よ。冥界の編集や合成等の技術は人間界のそれとは比

べ物にならないくらい優れているから」

あ、なるほど。流石冥界。

「ん、ふわあ……。ごめんさい、お先に部屋に戻らせてもらおうね。リヨーマも、あまり遅くならない様にした方がいいわよ」

「ああ。おやすみ、リアス」

自室へ去って行くリアスを見送り、再び一人となった所で、俺は台本の一ページ目を開き、主人公である魔装騎士フューリーのセリフを読み始めた。主人公に合わないセリフを口にしてしまわない様、キャラクターを知っておく必要があると考えたからだ。

そんなわけで始めたセリフの確認だが……。なんとというか、言葉の一つ一つがやけに仰々しいな。でも、思い出してみると、前の世界で小さい頃見ていた特撮もそんな感じだったっけ。現実ではまず口に出来ない熱いセリフや、恥ずかしいセリフの連発。だからこそ、主人公達を応援する気持ちに力が入ったわけだけど。

ゲームだってそうだ。俺の大好きだったスパロボにだってそんなセリフはいくらでもあった。そうだな……。俺の無い頭で考えるよりも、元々あったセリフを引用させてもらった方がいいかもしれないな。

よし、これでセリフに関してはいけそうだな。夜も遅いし、台本を最後まで読んだら俺も寝る事にしよう。まさか、寝坊するわけにもいかないしな。

俺は改めて台本へ視線を落とすのだった。

.....

.....

.....

「.....」

翌日、俺は針の動かなくなっていた目覚まし時計を無言で見つめていた。んー……。どうも電池切れを起こしたみたいですね。

なので別の時計で時間を確認する。撮影開始がこっちでの午前八時丁度からで、今は……。午前七時五十分。……。おい！ギリギリじゃねえか！

「マズイ・・・！」

俺はすぐさま洗面所へ向かい洗顔等を済ませ部屋に戻った。そして、クローゼットから前にセラフオルーさんから貰ったあのアニメ服を取り出し、それを身に纏った。これはセラフオルーさんから当日にこれを着て来て欲しいと言われたからだ。

とにかく、これで最低限の準備は完了した。後はこの転移用の簡易魔法陣の封を切れば向こうに跳ばされるんだっけ。前にリアスの婚約パーティーのお邪魔した時と同じヤツだ。

とりあえず、向こうに着いたらまずはセラフオルーさんを始めとするみなさんに謝らないとな。いくらなんでも、ギリギリの時間に来るとか迷惑以外のなものでもない。

俺は魔法陣の封を切った。同時に眩い光が俺の視界を奪う。それが治まった頃を見計らい、目を開けると、そこは採掘場の様な場所だった。確か、レーティングゲームのフィールドみたいに、撮影用に作られたフィールドなんだっけ。

それはいいとして、セラフオルーさん達の姿が見えない。まずは合流しないとな。そう判断してその場から移動すると、何やら前方の方から騒ぎが聞こえて来た。おそらくみなさんあっちの方に集まっているんだらうな。

歩くスピードを速める。そうすると騒ぎの中に怒号や悲鳴が混じっているのがわかった。これって・・・まさかもう撮影始まっているのか!? 台本では確か、スタントマンのみなさん扮する悪の組織の戦闘員達が暴れている所に魔装騎士フューリーが現れて、そこからアクションシーンが始まるってなっていたよな。

どうする? 飛び出るか? それとも先にセラフオルーさんを探すべきか? 一瞬悩む俺だったが、どちらにせよ姿を見せないと始まらない。乱入OKなら撮影が続くだろうし、駄目ならカットが入るだろう。

ただ、無言でシレっと出るのもアレだし。何か一言言わないとな。

「・・・そこまでだ」

暴れる敵に対してのお決まりのセリフを口にしつつ、俺は撮影現場

に乱入するのだった。

S I D E O U T

オーデイン S I D E

やれやれ、本当にテロリストというのは空気を読まんヤツ等じやな。まさか撮影現場を襲撃してくるとは思わなかったぞ。

「動くな！ 我々は『禍の団』だ！ たった今よりこの場は我々の支配下に置かせてもらう！」

武装した連中の姿に、撮影を見学に来た悪魔達が悲鳴を上げる。にしても・・・見事なまでに女の子ばかりじやな。うーむ、羨ましいぞフューリー。

「むー。まさかスタントマンになりすまして来るなんて。本物のみんなは無事なんでしょうね！」

「安心しろ。命までは奪っていない。今頃は病院に運ばれているだろうさ。・・・思った以上に手こずってしまったがな」

「なら目的は何？」

「我々は『禍の団』において、悪魔至上主義を掲げる者である。故に、人間ごときに心を奪われた諸君等の目を覚まさせる為に参上した」

ふむ、なるほどのお。では、連中が着けておる仮面はその一派の証なのじやろうか。何を掲げるかは個人の自由ではあるが、それをテロによって主張するなど浅はかにもほどがあるわい。しかも、今この場には魔王に旧魔王の血を引く者、さらにワシまでおるのに襲撃してくるとは。まあ、見た所『禍の団』の末端の末端な連中の様じやし、組織の強さをそのまま自分達の強さを勘違いしておるのじやろうて。愚かというよりも哀れじやな。

「・・・貴様等、この記念すべき日を台無しにしてくれた覚悟は出来ているんだらうな」

案の定と言うべきか、カテレアじゃったか？ あの嬢ちゃんがキレてしもうた。瞳に危険な光を宿らせ、右手に濃密な魔力を收拾させていく。

「おっと、下手な真似はよすんだなカテレア・レヴィアタン。こちらに

はいくらでも人質がいるのを忘れないでもらおう」

「・・・チツ」

ギャラリーへ目を向ける男達に、カテレアの嬢ちゃんは舌打ちと共に魔力を霧散させた。

「オーデイン様。どうも連中は私達には気付いていない様です。あの程度の数ならば私一人でも無力化は可能です」

「私も援護しよう」

「待つんじや二人とも」

動こうとするロスヴァイセとバラキエルを止める。何故？ と視線を向けて来る二人に、ワシは答えた。

「ひよつとしたら、面白いものが見られるかもしれんぞ」

「面白いもの？」

「二人とも忘れておらんか？ この場において本当の主役がまだ姿を見せておらんことを」

「ツ・・・！」

「そして、ワシの予想が正しければ・・・」

「・・・そこまでだ」

ほっほっほ。そろそろ来る頃だと思っておったぞ。のお、フューリーよ。

勇壮なる衣に身を包み、威風堂々と現れたのはまさしく伝説の騎士その者であった。彼奴の姿に、ギャラリーの娘達が先程までの恐怖とは別の理由で体を固まらせておった。

「・・・勇者様」

ロスヴァイセよ、ワシに弄られるのが嫌だというならば、そうやって迂闊な事を口にするでないぞ。もうこの娘も完全にフューリーの虜じゃな。くくく、これでまたいいネタが出来たわい。

「待っていたぞフューリー！ 悪魔至上派として、我々は貴様の存在を断じて認め・・・」

「黙れ！」

「「「ツ!?!」」」」

全ての者が、その凄まじい覇気の込められた一喝に畏怖する。前回

のゲームで見せたものに比べれば控えめではあるが、連中からすればそのプレッシャーたるやとんでもないものであるう。

「そして聞け！ 我はフューリー！ 魔装騎士フューリー！ 我は・・・悪を断つ剣なり！」

テロリストという犯罪者へ、今まさに断罪の剣が振り下ろされようとしていた。

オーデインSIDE OUT

IN SIDE

乱入してもカットが入らなかった。つまり、このまま演技を続けていいという事だよな。にしても、グダグダ話そうとする相手をぶった切るにはやっぱり親分のセリフが効果抜群だな。堂々と「黙れ！」なんか普通じゃ中々言えないぞ。

「な、何が悪だ！ 我々からすれば貴様こそが悪だ！ 貴様の存在が今の歪みを生み出したのだ！ 我等は貴様を殺し、その歪みを正す！」

スタントマンのみなさんが一斉に向かって来る。なんだろう。仮面してるからだろうか、前に紹介されたみなさんとちよつと違う様な印象を受けるな。あれがこの作品の敵組織の戦闘員のコスチュームなのかな。

でも、やる気は十分みたいだ。アルIIヴァンセンサーがヤバいくらい反応してる。予想通りというか、みなさん本気で俺をぶっ飛ばすつもりなんだろう。だったら、俺も中途半端だけはしないようにしないと。

かざした右手にオルゴンソードが握られる。その感触を確かめる間も無く、俺は眼前に迫る一人に向かって剣を一閃させる。

「がふっ!？」

『手加減』のおかげで、刃はその人の体を切り裂く事無く、体を宙に大きく吹き飛ばすだけにとどまった。続けて、並んで連携をしかけて来た二人に対し、剣を上空へ放り投げる。

「え・・・？」

それに気を取られている間に、右から来た人の腹部に右拳を叩き込む。前のめりに倒れようとするその人の背中を台にし、空中で剣をキヤツチ。そのままもう一人に対して振り下ろす。

「そ、そんな・・・」

「馬鹿な・・・」

背後で二人がその場に崩れ落ちる。次の相手へ向かおうとする俺に、数十発の魔力弾が飛んで来た。

「死ねえええええええええ!!」

どうやらあそこのローブを纏った人が放って来たようだな。数は多いが、前回のペロリスト達との戦いで魔力弾の相手は嫌というほどさせられたからな。あの時に比べれば大したことないわ。

「甘いー」

隙間をかくぐり、回避不能な物は剣で弾き飛ばす。そうやって少しずつ接近し、魔力弾が途切れた瞬間に一気に飛びかかる。

「ひっ！ ば、化物・・・!」

逃げようとするローブの人を撃破する。ええつと、これで四人目だから、あと・・・え、もう一人だけじゃん。前回の人達と人数が合わないぞ。あ、もしかしたら体調不良とかで欠員が出たのかも。

「・・・さて、残すは貴様一人だな」

「くうっ！ こ、こうなれば・・・!」

「きゃっ!」

最後のリーダー格らしき人が突然ギャラリーから一人の女の子を引っ張り出した。・・・って、あれ？ あの子レイヴェルさんじゃん。あの子も見に来てくれてたんだ。

「は、離しなさい！ 私をフェニックス家の娘と知って・・・!」

「う、うるさい！ 大人しくしろ!」

「ツ・・・!」

レイヴェルさんの首筋にナイフを当てるリーダー。こういう飛び入り参加もアドリブじゃないと出来ないよな。やっぱり役者さんはどうすれば盛り上がるか良くわかってる。そういう事なら、俺もレイヴェルさんをちゃんと活かさないと。

「フユ、フューリー様・・・!」

おお、演技上手いなレイヴェルさん。涙目で体まで震えさせて、まるで本当に人質にされているようだ。

「う、動くなよフューリー! 動けばこの娘の命は無いぞ!」

さて、そろそろクライマックスなんだろうが、そこでふと思う。そういうえば、俺まだラフトクランズモードになつてないな。特撮物なのに变身無しで敵を全滅させるとか面白くないよな。

「可憐な乙女を人質にするなど鬼畜の所業。我が剣、ラフトクランズによつて、貴様をヴォーダの闇に還してやる!」

叫びつつ、俺はラフトクランズモードになった。これで後はリーダーを倒せば完了だ。けど、その前にまずはレイヴェルさんを助けなとな。というわけで、オルゴンクラウド発動。

「ツ!? き、消えた!」

「何処を見ている」

リーダーの背後へ回り込み、腕をねじり上げる。そうやって解放されたレイヴェルさんを抱きかかえ、リーダーから離れる。

「フューリー様!」

ギョツと抱きついて来るレイヴェルさんをそのままに、俺はオルゴンソードを空に向かって掲げた。やっぱり、最後は必殺技で締めないとな。

オルゴンソードが割れ、そこからオルゴン結晶で出来た緑色の刀身が天に向かって伸びて行く。まさか、特撮の撮影がFモードの初披露の場になるとはな。

「これで・・・終わりだ!」

「~~~~~?!?!?」

声にならない叫び声をあげながら、リーダーは巨大な刀身の向こうへ消えていった。・・・いや、死んでないよ? ちゃんと『手加減』かけたし。

閃光と爆発の後、そこには黒焦げアフロのリーダーの姿があった。ふいー。全員倒したし、これで一応終わりだよな。俺はラフトクランズモードを解除し、レイヴェルさんを離した。

「あ……」

ええつと、これからどうすればいいんだ？ とりあえず、シーンが終わったからカットの合図が出るはずなんだけど。

「『『『『きやあああああああああ』』』』」

ギヤアアアアアアアアアア?!?!?! 耳が! 耳が! 耳がああああああ!!.. な、なんじや今の悲鳴は?! ギャララーのみなさんの声みたいだけど、まだなんかあるのか!?

「フューリーさん!」

そこへ、セラフオールさんが駆け寄って来た。今のは何事かと尋ねようと思ったら、思いつきり抱きつかれてしまった。

「ありがとうフューリーさん! みんなを守ってくれて!」

みんな? ああ、作品内のみんなって事か。よし、セラフオールさんは今の内容で満足してくれたみたいだな。

「これが俺の役目ですから」

そうとも、監督であるセラフオールさんに納得してもらおう動きをすることこそが今回の俺の役目だったのだから。

「そういえば、カテレアさんは?」

「カテレアちゃんなら救護室に運ばれて行ったよ。まあ、予想してたんだけどね。あの様子だとカテレアちゃんも大満足みたい」

救護室!?! 何があつたんだ!?!

「はふう、一時はどうなるかと思ったけど、カメラだけは回しておいてよかった! おかげで予定してたよりもずつといいものが撮れたもん!」

安堵の溜息を零すセラフオールさん。なんかトラブルでもあつたのだろうか?

「ほっほっほ。いいものを見させてもらったぞフューリーよ」

あ、オーデインさん。それにロスヴァイセさんとバラキエルさん。本当に見に来てたんだな。

「うむ、少しばかり話したいのじゃが……その前に静かな場所へ移動した方がよさそうじゃな」

「なら、一旦このフィールドから出てお話しよつか。ギャララーの子

達も帰してあげないといけないし」

セラフォルーさんがスタッフのみなさんに指示を与えた後、俺達は撮影用のフィールドを後にするのだった。

S I D E O U T

ミリキャス S I D E

「で、出来た・・・とうとう完成したぞ！」

最後の一文を書き記し、僕はついそんな声を上げてしまった。フューリー様の戦いの歴史を記した『鋼の救世主』。その最終章の最終話をやつと書き終える事が出来た！

「フューリー様の撮影見学を我慢した甲斐があった！ よーし、後はこれを全部纏めてしまおう」

ああ、早くフューリー様にお見せしたいな！ 次はいつグレモリー家に遊びに来てくださるんだろう。おじい様もおばあ様もフューリー様がいらっしやるのを楽しみにしているんですよ。

「・・・そうだ！ リアスお姉様からフューリー様に遊びに来て頂けるようお伝えしてもらおうのはどうだろう！」

もちろん、すぐには無理だろうけど、それでも時間が出来たらきつと遊びに来てくださるはずだ。よし、そうと決まれば早速お姉様に連絡しないと。

そんなウキウキした気持ちで、僕は部屋を出て行くのだった。

第九十二話 一世一代の告白

撮影用フィールドからの転移先は例のテレビ局だった。はてさて、オーデインさんの話とは何だろう・・・と思ったら、普通にさっきの撮影についての感想やら世間話だった。

「なかなかの見応えじゃったぞ。ウチのヴァルキリーもすっかりご満悦のようじゃ。のうロスヴァイセ？」

「・・・」

「ロスヴァイセ殿？ いかがされた」

「え？ あ、は、はい！ そうですね！ あそこの百均は品ぞろえが豊富ですよね！」

バラキエルさんと呼ばれ、熱に浮かされた様な表情のロスヴァイセさんが慌てて返事をする。なんか、さつきからずつとこの調子だけど、体調が悪いようならオーデインさんに言った方がいいと思うのだが。

「誰が百円均一の話をしとるか。・・・まあよい、ともかく見に来てよかったぞい。これは人気が出そうじゃな」

「うふふ、北欧の主神様にお墨付きをもらえるなんて嬉しいな！ 新プロジェクトの第一弾としていいスタートが切れそう！」

「新プロジェクト？ という事はもしかして、この作品の他にまだあるんですか？」

「そうだよフューリーさん。まだ企画の段階なんだけど、次は赤龍帝君を主演にしたヤツを作ろうと思ってるの」

赤龍帝・・・ひよつとしなくても兵藤君の事だよな？

「魔装騎士〜THE KNIGHT OF FURY」は大人が楽しめる作品。それとは逆に、赤龍帝君の作品は子ども達が楽しめる作品にしようと考えてるんだ。ほら、前にソーナちゃんとかリアスちゃんがレーティングゲームした時、結構派手な戦いをしたでしょ？ どうもそれが子ども達に気に入られちゃったみたいなの」

俺、見て無いんでわからないです。それと、特撮って基本子ども向けなんじゃ・・・いや、でも前の世界でも特撮好きな大人って珍しく

なかったし、別に変じやないか。

「タイトルはもう考えてあるの。『それいけ！ せきりゅーてー』なんてどうかな？」

「ツ・・・!?!」

咄嗟に吹き出しそうになったのを何とか抑える。俺の頭に、究極の自己犠牲ヒーローの顔が浮かびあがった。

「どうしたの、フューリーさん？・・・ひよつとして、今のタイトル変だった？」

「い、いえ、そんな事は無いです。・・・ちなみに、まだ企画の段階との事ですけど、主人公の友達に愛と勇気だけだったりしますか？」

「友達というか、仲間は何人か作ろうと思ってるけど・・・」

そうか、ボッチにはならないんだな。まあ、厳密にはあのフレーズには滅茶苦茶深い理由があるそうなんだけど。どんな内容だったかは忘れてしまったが。

「でも、愛と勇気だけか・・・。中々に深い言葉だね。OPの歌詞に盛り込んでおこうかな」

おお、ますます「彼」に近付けてしまったぞ。いやでも、「彼の事を知ってるのは俺だけだし、俺がこれ以上余計な事を言わなければ問題無いよな。」

「ふむ、どうもワシ等は邪魔者の様じゃし。そろそろ帰るとするか」「えー、もう帰っちゃうの？　もう少しゆっくりしていてもいいのに」

「ほほほ、可愛らしいお嬢ちゃんに誘ってもらえるとは嬉しいのお。その気持ちだけ受け取らせてもらうぞ。さあ、二人とも参るとするぞ」

「はっ」

「私はどうすれば・・・。って、あれ?!　オーデイン様!?!」

「二人なら先に出て行きましたよ」

「そ、そうですか。で、では私も失礼します！　オーデイン様！　置いて行かないでくださいよ～～～!」

二人に続いてロスヴァイセさんも去って行った。さてと、これで解

散か？ なら俺もそろそろ家に戻ろうかな。

「セラフオールさん。俺はどうすればいいですか？ 特に問題無いようでしたら、俺もこの辺で・・・」

「あ、待ってフューリーさん！ もしもまだ時間がある様なら、もう一つお願いがあるの！」

可愛らしい上目使いでそう言って来るセラフオールさんに、俺は素直に頷いた。・・・単純だなとか思ったそこのお前。代わってみろ。そしてその破壊力に爆死してしまえ。

・・・
・・・

「はい。次の人どうぞ〜」

セラフオールさんの合図で、新たに一人の女性悪魔が俺の前にやって来る。

ここはテレビ局一階にある大広間。本来はイベントや記者会見の為に使用されるらしい。そんな場所を使って俺がやっているのは、撮影を見に来た人達への握手会だった。

ここで明らかになったが、今回の撮影を見学に来た人達の数はなんと二百人。しかも、その二百人も凄まじい倍率の中から見学権を勝ち取った人達なのだとか。

「外れちゃった子達には残念なんだけど、人数制限しないと撮影どころじゃなくなっちゃうところだったから」

俺としては二百人も来た時点で予想外なんですけど。ちなみに、内訳は女性が八割の男性二割だった。すでに四人くらいと握手したが、その中の一人にいきなり「兄貴と呼ばせてくださいえ！」なんて言われて思わず尻がキュツとなった。いやね、別にあの人はそういう意図で言ったんじゃないとはわかってるんだけど、なまじ余計な知識がある分変な想像をしてしまった俺が憎い。

「あ・・・」

おっと、いかん。女性悪魔さんがどうすればいいか困っている。俺は彼女に向かって手を差し出した。

「今日は来てくれてありがとうございます」

「は、はひ！ こ、こちらこそ助けて頂いてありがとうございます！」

あ、まただ。うーん、どうもさつきから礼ばかり言われているけど、俺なんかしたか？ それとも、このお礼はアクシオンシーンが楽しめた事に対するお礼なのか？ だとしたら、ちよつと嬉しいな。まさか、Dとの勝負の為にした特訓がこんな場所でも役に立つとは思わなかった。

「握手が終わったらこちらから出てね。はい、それじゃ次の人どうぞ！」

続いて姿を見せたのも女性だった。黒いショートヘアに、同じく黒い瞳、胸元が大胆に開かれた黄色いワンピースを纏い、頭からたなびく赤くて長いリボンが目を引く。

何故容姿について触れたかという、この女性がどこことなく他の人達と雰囲気が違うからだ。

「お初にお目にかかります、フューリー様。私はイライザと申します。この度は、こうしてあなた様にお会い出来る機会を得た事に大変感激していると共に、やはり私・・・私達の選択は間違っていないかったと確信いたしました」

射抜く様に俺を見つめて来るイライザさん。当然初対面なのだが、その瞳の感じはどこかで見覚えがあった。このキラキラ加減は・・・そうだ、カテレアさんだ！ カテレアさんが俺に向けて来る瞳にそっくりなんだ！

「イライザ」

と思っていたら、カテレアさんが姿を現した。救護室に運ばれたって聞いてたが・・・どこも悪そうには見えない。これで安心・・・

「あ、お帰りカテレアちゃん」

「セラフォル・・・！ 何故このイベントの前に私を呼ばなかったんですか！ おかげで出遅れてしまったではありませんか！」

「ゴメンねー。てつきりまだ救護班のお世話になってると思っただから」

「はっ！ フューリー様の御為ならば、あの程度の出血五秒もかからず止めてみせますわ！」

出来なかった！ 出血ってホントに何があっただんだカテレアさん!?

「久しぶりね、カテレア」

その時、イライザさんが突然カテレアさんの名前を呼んだ。そして、カテレアさんもそれに応えた。

「そちらも変わりないようで何よりです。ところで、今日はあなた一人ですか？」

「ええ。見学権を得たのは私だけだったから」

「そうですか。・・・連中から聞きましたよ。あなた達、ついに例の計画を実行したらしいですね」

「ええ。だけど本格的な活動はもう少し先になりそうだわ。まだ『経典』と呼ぶべき物が無いのよ」

「『経典』ですか。こればかりは私が用意するわけにもいきませぬね」

「別に難しい物は必要無いわ。そうね・・・どれほどの偉業を成したか、どれほどの戦いを乗り越えて来たのか・・・とにかく、救世主様である事が書かれてあれば十分だと思っわ」

「わかりました。私の方でも探してみましよう」

「それは助かるわ。お願いね」

長年の友の様に仲睦まじく会話するカテレアさんとイライザさん。内容自体は込み入った話のようだけど、何なんだろうな。

「案外、何もしなくてももう少し待てば出て来そうな気がしますけどね」

「ふふ、あなたの勘は鋭いから、ひよっとしたら本当にそうなるかもしれないわね」

「そろそろお話はいいかな？ 後ろの子達がつかえてるから」

「あ、そうですね。ごめんなさい、私ったら。フューリー様。よろしくお願ひします」

イライザさんとガッチリ握手をする。ちよっと冷たかった。

「うふふ、本当に今日は素敵な一日でした。では、私はこれで失礼します。またいつか、お会いできる日を楽しみにしています」

イライザさんの背中を見送る。何となく気になる人だったが、今は握手会に専念しよう。

「はい。それじゃ次の人！」

緊張した様子で俺の前に立つ女性に、俺は手を差し伸ばすのだった。

．．．．．

ひたすらにやって来るお客さんと握手する時間が過ぎて行く。その中には実に多種多様な反応をする人達がいた。

顔を真っ赤にして握手どころじゃなくなる人．．．。

握手した俺にまで振動が伝わって来るほどに震える人．．．。

握手と同時に大粒の涙を流し始める人．．．。

それぞれに反応は違った。だけど、一つだけ共通していた事もあった。それは、みなさん本当に俺との握手を喜んでくれた事だった。

そんなみなさんと触れ合っていれば、嫌でもわかる。この人達は俺を．．．フューリーという存在を心から受け入れてくれているのだと。

思えば、お披露目会の時もそうだった。あの時も、俺に話しかけて来てくれたみなさんは俺に対して好意的な態度だった。もつと言えば、今まで出会って来たほとんどの悪魔のみなさんがそうだった。

それに気付いた時、ちよつとだけ恥ずかしく。そして．．．凄く嬉しかった。みなさんの抱くフューリーと自分は別物。だけど、今なら少しだけ受け入れられそうな気がする。

「．．．こういうのも、悪くないのかもしれないな」

「フューリー様。何かおっしゃいましたか？」

「いえ、ただの独り言です。さあ、次の人をお願いします」

「りょーかい！ 次が最後だよ。どうぞく〜！」

「し、失礼いたしますわ！」

握手会最後の一人．．．それはレイヴェルさんだった。

「やあ、レイヴェルさん。先程以来だな」

「え、ええ。フューリー様にはなんと感謝申し上げればよいか。フェニックスであるわたくしにはあのような物は意味が無いはずなのに、わたくしは動けなかった。情けない限りですわ」

「いやいや、あそこはアレが正解でしょ。人質だったキミがリーダーボコツたら俺がいた意味なかっただろうし。」

「そんな事はない。突然あんな目に遭えば誰だってそうなるさ」

あ、だからスタントの人もギャラリーから人質役を選んだのか。うーん、演技の世界はやっぱ奥が深いな。俺には役者は一生無理だろうな。

「フューリー様・・・」

レイヴェルさんの頬に朱が差す。と思ったたら、何やら決意の込められた表情を見せ、震える声でこう言った。

「フユ、フューリー様！ 身の程知らずなのは重々承知しております！ ですが、それでもお伝えしたいのです！ わた、わたくしは、あなたの事をお、おし、お慕・・・おひたししております！」

どこからかひゅくくと風が鳴く音が聞こえて来た。ええつと・・・おひたし？ おひたしっていうと茹でた野菜に醤油をかけて食べるアレの事だよな・・・？

「レイヴェルさん。何故ここでおひたし・・・？」

固まってしまったレイヴェルさんへそう声をかけると、彼女は最早赤どころか紅蓮といってもいいくらいの顔色を見せ、出口へ向かってもの凄い速度で走り始めた。

「うわああああああん!!! 肝心な所で噛むなんてええええええええ!!! 馬鹿あ！ わたくしの馬鹿ああああああ!!!」

こうして、最後の一人とは握手が出来ないまま握手会は終了し、今度こそ俺は家へと帰るのだった。

(むむ、これはまた競争相手が増えちゃったかな)

(小娘が身の程を知らなさい。ですがまあ、妾でよければ認めてあげてもよろしいですよ。ふふ、これぞ正妻の余裕！)

第九十三話 新たな力の可能性

イツセーSIDE

まさかこの街にオーデインのじいさんがやって来るとは思わなかったぜ。けどまあ、難しい話はアザゼル先生に任せよう。何かあればいつもみたいに先生から指示があるだろうしな。

というわけで、俺はいつもの様にトレーニングを行う為、アザゼル先生の作ったトレーニング用の疑似フィールドへやって来た。ここは前回神崎先輩がディオドラとのゲーム前に利用していた所だが、今じゃすっかり俺もお世話になっている。

「やあ、イツセー君。今日も来たんだね」

先にトレーニングをしていた木場が俺に気付き剣を降ろす。俺は片手を上げながら木場に近づいた。

「へ、そういうお前こそ結局来てるじゃねえか」

「あはは。アザゼル先生からは適度に休めと言われてるんだけど、時間が出来るとつい・・・ね」

「ところで木場よ・・・あつちでイリナ相手にデュランダルの刀身を伸ばして振り回しているゼノヴィアは何があつた？」

「ああ、いつものアレだよ」

「そつか・・・アレならしょうがないな」

「負けない・・・私はもう二度と天井などに負けはしない！ 薙ぎ払えデュランダル！」

「ちよつ！ まつ！ 落ち着いてゼノヴィア！ これはトレーニング！ トレーニンひやあああああああああ！！！！」

「・・・ゼノヴィアの相手は彼女に任せよう」

「・・・だな」

頑張れイリナ。後でジュースくらいならおごつてやるからな。

「あ、イツセー先輩！・・・こんにちはどうですう！」

そこへギヤスパーが手に小さなロボットを持ってやって来た。ちなみにロボットはアザゼル先生が神器の練習用に作った。

「よおギヤスパー。調子はどうだ？」

「えへへ、順調です。見ててくださいね」

ギヤスパーがロボットの背中にあるスイッチを押すと、ロボットがギヤスパーの手を離れ空へ舞い上がる。

「いきます．．．ザ・ワールド！」

ギヤスパーが掛け声を放つと同時に、ロボットはその場でピタリと停止した。おお、すげえ！ 制御出来てるじゃん！

「やるじゃねえかギヤスパー！」

「．．．貧弱貧弱う」

ボソリと何かを呟くギヤスパー。その顔に俺は言い様もない凄みを感じてしまった。

「ギヤスパー君？」

「はい？ 何ですかあ？」

木場が声をかけるといつものギヤスパーに戻った。．．．俺の気のせいだったのかな？

「いや、見事だったよ。キーワードを設定するっていうのは大成功だったみたいだね」

「はい！ 自分でもびつくりしてます！」

キーワード云々は神崎先輩のアイディアなんだよな。ほんと、こんな効果的な案をあっけなく考えつくなんてすげえぜ。

「にしても、変わったなギヤスパー。初めて見た頃に比べたら顔に自信があるように見えるぜ」

「そ、そそそそんな事無いですう！ 僕なんてまだまだ全然で！」

みなさんのおかげでなんとかやって来ただけですよ！」

「んな事ねえよ。木場もそう思うだろ？」

「うん。イツセー君の言う通り、ギヤスパー君は変わったよ。まあ、僕から見ればキミも変わったけどね」

「俺が？ 別に変わった所は無いと思うんだが」

「いや、変わったよ。女の子の事ばかり考えていた昔のキミとは大違いだ」

なん．．．だと．．．!? いや、そんな馬鹿な事があってたまるか！ 俺は兵藤一誠だぞ！ エロをこよなく愛する健全な男の子だぞ

！ 確かに、最近はエロ本やエロDVDに手を出すよりもこうやって体を動かす方が楽しいし、松田や元浜から付き合いが悪いとか言われているが、俺の本質は変わってないはずだ！

「は、ははは、何を言ってるんだい木場君。俺は今もおっぱい大好き兵藤一誠ですよ？」

「なら聞くけど、Hな本を読む時間と、神崎先輩から戦い方についてのアドバイスをもらう時間ならどっちを選ぶ？」

「そんな先輩の方に決まってるだろ。先輩直々のアドバイスなら絶対のためにやる・・・し・・・」

俺は自分の答えに絶句した。い、いやいや待てよ俺！ 迷うどころか即決だど!? エロよりも強くなる事の方が大事とかありえんだろう！

「ほら、やっぱりキミは変わったよ。以前のキミなら間髪入れずに前者を選んでいただろうからね」

「う、嘘だ・・・。俺はそんな熱血キャラなんかじゃないはずだ」

「え？」

「え？」

「え？」

な、なんだよその反応。何でそんな今さらだろ的な顔してんだよ二人とも。

「まさか・・・自覚無かったのかい？」

「イツセー先輩は暑苦しいくらい熱血ですう」

「何だどこの野郎！」

「ひいひい！ ごめんなさいい！」

まずい・・・俺のアイデンティティがクライシスする前にこの話題から離れよう。そうとも、おしゃべりする為にここに来たんじゃないのだよ俺は！

「うっし！ そんじゃ、ギヤスパーに負けない様、俺もいっちょ始めるとすっか！」

「なら僕もそろそろ再開させてもらおうよ。イツセー君、体が温まったら模擬戦お願いしていいかな」

「望む所だ！」

そうして、俺は『禁手』を発動させ、少しだけ体を動かした後、木場と模擬戦を始めるのだった。

・・・

制限時間一杯まで木場とやりあった後、俺は『禁手』を解いた。にしても、木場のヤツまた強くなったな。普通に戦っても速いくせに、風を操る魔剣を使つての『風刃閃』って技はそれ以上で今の俺じゃ対処どころか目で追う事すら出来ない。それにあの風圧を使つての束縛も厄介だ。ブースターを全開にすれば抜け出せるが、もたもたしていれば剣で貫かれて終わりだ。にやろう、先輩から教えてもらった技をここまでするのにはやがるとは。

お返しに俺が教えてもらった『ジェットマグナム』を叩き込んでやろうと思っただけど、かすりもなかった。俺がこの技をマスターするのはまだまだ先になりそうだな。

「くそう・・・また俺の負けか。やっぱりやるな木場」

「いや、こっちもヒヤヒヤものだったよ。キミの攻撃は一発一発が致命傷になりかねないからね」

「それも当てなきや意味がねえんだよなあ。俺もパワーだけじゃなくてスピードについても考えないといけないのかもしれない」

「あはは、そうなるって僕の意味が無くなっちゃうから止めて欲しいな」

それから互いに今の模擬戦の感想を言い合った後、俺達はそれぞれの自主練を始める事にした。さて、それじゃあ今日も「先輩方」に挨拶に行きますか。

俺はその場に座り込み、目を閉じてゆっくりと意識を静めていった。これから俺は『赤龍帝の籠手』の中へ俺の意識を送り、『赤龍帝の籠手』に記録されている歴代の所有者達の思念と会話をする。目的は一つ、『覇龍』と呼ばれる力を発動させる為だ。

——そろそろ試してみてもいいかもしれないな。

会長とのレーティングゲームの後、俺はドライグにさらなる強さを手に入れる為に何かいい方法は無いかな尋ねた。もちろん、楽して強くなるつもりは無い。今の努力で足りないのなら、もつともつと頑張るつもりだった。

そんな俺にドライグが提示したのが『覇龍』だった。確か、ヴァーリちゃんも『覇龍』が使えたよな。見た事は無いけど。

——『覇龍』発動の条件はただ一つ。この『赤龍帝の籠手』の中に存在する歴代の所有者達に認められる事だけだ。彼等の一人一人が楔なのだ。そしてそれらが全て外れる事により、『禁手』を越えた真の『禁じ手』が発現する。

『覇龍』が具体的にどんなものなのかはわからない。だけど、『禁手』を越えるというドライグのその言葉に、俺は躊躇い無くその方法を実行する事にした。

・・・つと、そんな回想をしている間に目的地に到着しそうだ。暗かった視界が急に真っ白になり、いつの間にか俺の目の前には巨大なテーブル席が置かれていた。

「あら、また来たのね」

そこへ座っていた金髪スレンダー美女が俺を見てにっこりしながら立ち上がった。

「ども、エルシャさん！ 懲りずにまた来ちゃいました！」

彼女の名前はエルシャさん。彼女もまたかつての『赤龍帝の籠手』の所有者だ。ついでに言うと、歴代の中でも一、二を争うほど強かったらしい。女性限定で言えば最強だったのだとか。

こうやって歴代の先輩達の所へ来るのも十回は越えている。だけど、未だに俺はエルシャさんともう一人別の先輩にしか認められていない。

「ふふ、ベルザードもあなたが来て嬉しいみたい」

気がつくくと、俺のすぐ横にダンディな男性が無表情で立っていた。

「うおお!? びっくりした・・・。驚かせないでくださいよベルザードさん！」

文句を言う俺に、ベルザードさんは僅かだけど唇を半月状に変え

た。表情が乏しい人だけど、これは笑っているのだとわかった。

ベルザードさん・・・俺を認めてくれたもう一人の先輩。エルシャさんと並んで歴代最強と称される人で、白龍皇を二度も倒したとんでもない人だ。

——その二人に最初に認められる相棒も大概だよ。

ドライグの言う通り、どういうわけか、俺を最初に認めてくれたのはこの最強の二人だった。なんでも、俺が駒王協定の時にアルビオンの力を命がけで手にした時にはすでに俺の事を認めてくれていたらしく、初めてここに来た時は「待つてたわよ」なんて言っただけで抱きしめられてしまった。・・・あれは良かった。

「にしても・・・まだ二人だけツスカ」

俺達以外存在しない空間を見て溜息を吐く。エルシャさん曰く、他の先輩達はここからさらに奥にいて、俺を認めてくれた人だけがこの空間に姿を現すらしい。

「これじゃ、全員に認めてもらえるのはいつのなるのやら・・・」

「そこまで落ち込む事は無いわよ。何となくだけど、もう一步の所まで来ていると思うわ。後は何かきっかけが・・・あなたがさらなる“覚悟”を抱く何かが起これば・・・」

どうやら“覚悟”というのが鍵のようだ。“覚悟”か・・・俺も神崎先輩が『禍の団』との戦いで見せたアシアを絶対に守るという“覚悟”くらいのものを持てば残りの先輩達も認めてくれるのだろうか。

「さ、それじゃあ堅苦しい話はこれくらいにして、そろそろ“彼”の話聞かせてちょうだいよ」

「またですか？　て言っても、もうディオドラ達との戦いまで話しちゃいましたし、ネタが・・・」

「何でもいいのよ。結局、私達の代で現れなかった“彼”がようやく姿を見せたんですもの。かつての赤龍帝としては興味深々なんだから」

はあ・・・しょうがないな。なら・・・インタビューで女性陣を撃沈させた話でもしようかな。

今さら確認するまでも無いが、エルシャさんの言う「彼」とは神崎先輩の事だ。赤龍帝と白龍皇。いつか出会うであろうかつての仇の為に互いを高め合い続けた両者はその仇がどんな存在だったのか凄く興味があるらしい。ヴァーリちゃんの方もひよつとしたら歴代の白龍皇達に色々聞かれているのかもしれない。

「ほら、早く早く」

席に着き、子どもみたいにテーブルをバンバン叩くエルシャさん。・・・ちやつかりベルザードさんも同じ事してた。見た目ダンディなのにそんな事しないでくださいよ・・・。

そんな感じで、俺は『赤龍帝の籠手』の中でひっそりとした時間を過ごすのだった。

そしてその翌日から、俺達はアザゼル先生と共に、オーデインの爺さんの日本観光の護衛として振り回される事となるのだった。

第九十四話 ゲームのデザインはイメージです実際の神様とは異なる場合もございます

「ほれ、出かける用意をせい。今から遊びに行くぞい」

再び家を訪ねて来るなり、開口一番そんなセリフを放つオーディンさん。あまりに突然の事にどう反応すればいいか困っている間に、あれよあれよと外に連れ出されたと思ったら、家の上に巨大な馬車、そしてそれを引くこれまた巨大な馬の姿があった。

それに対し、驚くよりもまず、近所のみなさんがこれを見たら腰を抜かすんじゃないだろうかという心配をする俺。とはいえ、そんな事はちやんと考えてあるらしく、普通の人には見えない様にしてあるとか。

アーシアなんかはあわあわ言いながら目を思いっきり見開いている。素晴らしいリアクションだ。それを見て楽しそうに笑うオーディンさんがスツと手を動かすと同時に、俺達の体が馬車の方へ向かって浮かびあがった。

馬車の扉が開く。中に兵藤君達がいた。俺が尋ねるよりも先に兵藤君がオーディンさんの護衛として付き合わされてるのだと説明してくれた。

「これで全員揃ったの。では出発するぞ」

こうして、俺達はいつものメンバー勢ぞろいで、オーディンさんの言う遊びに付き合う事となったのだった。

.....

それからあつという間に時間は過ぎ、辺りはすっかり暗くなってしまった。いやホント、色々な所に行ったな。こんな立派な馬車を用意するのだから遠出する事は予測していたが、まさか日本中を巡る事になるとは思わなかった。

「いやあ、今日も遊んだ遊んだ。どうじゃフューリー。お主等も楽し

めたかな？」

「ええ。ですが、何故俺達を誘ってくれたんですか？」

「まあそうじゃな。お主がおれば何が襲撃してこようが大丈夫というものもあるが……たまにはワシも部下に対して褒美をやらんといけんからのお。そう思わんかロスヴァイセ？」

「……別に思いませんけど？」

「やれやれ、そこで意地を張らずに素直にありがとうと言えんのがお主の短所じゃな。本当は嬉しいのじゃろう？　こうしてフューリーと共に……」

「ああ、なんだか無性にハリセンを振り回したくなりました。どこかにいいツツコミ相手はいないでしょうか。具体的には人をおちよくって悦に浸るクソジジイとか」

ハリセン片手に笑みを見せるロスヴァイセさんにオーデインさんが口を噤む。その時だった。突然馬車が停車し、その衝撃が俺達を襲った。

「きやつ!？」

ロスヴァイセさんがバランスを崩して倒れ込んで来たので慌てて支える。何が起こったのか理解出来なかったのか、ロスヴァイセさんはポカンとした顔で俺と目を合わせ、次いでその綺麗な顔を真っ赤に染め上げた。……以前セラフォルーさんと同じような状況になった事があるが、今回は言わせてもらいたい。そんな……そんな反応されたら勘違いしちゃうでしょうが！

「おいフューリー。こんな時にまでラブコメってないで警戒しろ」

そう言っただけで呆れた様子アザゼル先生。こんな時にまでって、逆にこんな風に咄嗟の出来事の時じゃないとこんな事出来ませんがな。

「ほら主人様！　外を見てみるにゃ！」

固まっているロスヴァイセさんを俺から引っぺがした黒歌が窓の外を示す。心なしか不機嫌そうだが、どこかぶつけでもしたのだろうか。なら後で『信頼』でもかけてあげようか。

ともかく、窓を全開にして外の様子を見る。馬車の周囲を護衛役の木場君、ゼノヴィアさん、紫藤さん、そしてバラキエルさんが警戒し

ながら飛んでいる。どうでもいいが、ラフトクランズモードなら俺も飛べるから交代しようとしたら全力で断られてしまった。

木場君達の視線は前方に向けられていた。それを追うと、そこには一人の男性が浮かんでいた。イケメンでオーディンさんの物に似たローブを纏っている。

「チツ・・・!」

「まさか・・・あの方が出て来るなんて!」

「やれやれ、早速行動した阿呆が一人現れたようじゃな」

舌打ちしたのがアザゼル先生。心底ビックリしているのがロスヴアイセさん。不機嫌そうに溜息を洩らすのがオーディンさんだった。どうもこの三人はあの男性の事を知っているようだ。

「・・・間違い無いわ。アレはロキ。北欧の神よ」

「その通り! お初にお目にかかる! 我こそはロキ! 北欧の悪神である!」

高らかに名乗りを上げるロキさん。しかしロキ・・・ロキか・・・。「リョーマさん? どうしたんですか?」

「ああ、いや何でも無いんだ。ロキというところも裸マントに禪一丁のイメージが強くてな」

もしくはスタイリッシュなツナギ姿。まあ、オーディンさんで既に全然違うんだから、前世の、しかもゲーム内での姿なんて当てになるはずがないんだけどな。

「!!!!!!!!!!」
「!!!!!!!!!!」
「!!!!!!!!!!」

オーディンさんとアシア以外の全員にツッコまれてしまった。そ、そんなに強く言わなくてもいいじゃないですか。

「え、お主そんな趣味があったの? 正直ドン引きなんじゃけど・・・」
オーディンさんがロキさんに対してアブソリュート・ゼロな目線を送っていた。いや、違いますよ。これはあくまでも俺の勝手なイメージであって・・・。

「く、くくく・・・なるほど、いきなりの挑発、ありがたく受け取らせてもらおう!」

ちよっ!? そんなつもり無いですから! おいこら! 誰だよ誤

解される様な事言ったの！．．．俺じゃねーか！

「これは裸マント殿。我等に何か用ですか？ この馬車には北歐の主神オーディン殿が乗られているのだが、それを承知の上での行動ですかな．．．プツ」

もう止めて！ ロキさんの我慢は限界よ！ もう思いつきり最後笑つちやつてるじゃないですか！

「ッ！ 墮天使ごときが神を侮辱するか！ やはり我等以外の神話体系など存在するべきではない！ 予定通りオーディン共々粛清してくれる！」

最早完全にプツンしているロキさんがそう叫んだ直後だった。彼の後方の空間がぐにやりと歪み、そこから巨大な存在が姿を現した。

「．．．犬？」

その正体は灰色の犬だった。その犬は一度体を大きく震わせた後、ゆっくりと俺達に向かって視線を向けて来た。

「アレは．．．!? おいお前等！ あのデカイ狼には絶対下手を出すなよ！」

あ、狼だったんだ．．．ん、待てよ。北欧神話、ロキ、そして狼といえば．．．。

「先生、あの狼はいつたい．．．!?」

「お前もゲームとかで聞いた事があるんじゃないやねえか、イツセー。アレは神喰狼．．．フェンリルだ」

「その通り！ これこそ神すらも殺す牙を持つフェンリルである！」

我が開発した魔物の中でもトップクラスに最悪の部類だ。神殺しの牙の前では例え上級悪魔や伝説のドラゴンだろうが皆等しく得物に過ぎん！」

自慢だなロキさん．．．まさかその為に呼んだのか？ ペット自慢ならこんな空の上なんかじゃなくて、もっと人がたくさんいる場所であればいいのに。

そんな感想を抱いていると、ロキさんが右手を上げる。そしてその指先を俺に向けて来た。

「まずは先程の挑発の礼をさせてもらおう。出て来たまえ。貴殿には我が愛しき子どもと存分に戯れてもらおう！」

戯れて・・・遊び相手になれってか？ まあ、それくらいでさっきの件を許してくれるなら相手になるけどさ。

「だ、駄目よりヨーマ！ アレは今までの相手とは次元が違うわ！いくらあなたでもフェンリルを一人で相手なんて・・・！」

縫りついて来るリアス。確かに、あんなに大きな、しかも狼を相手にするなんて怖い。でも、こうなったのは俺の所為だし、その責任は果たさないといけない。

「大丈夫だ。彼の言う通り、少し遊んでくるだけだ」

俺は心配は無用とばかりにリアスに向かって微笑んだ。そしてラフトクランズモードになると扉を開け外へ出た。・・・背後でリアス達が驚愕しているのにも気付かずに。

「せ、先輩・・・」

木場君の横を通り過ぎようとしたら彼から声をかけられた。夜の空は寒いからか震えている。我慢出来ないようなら馬車に戻った方がいいよ。

「おや、その姿・・・まさか貴殿があこのフューリーとかいう英雄様ですか？ 噂でしか聞いてはおりませんが、北欧の神である我を下賤な悪魔や堕天使などと同じと思わないで頂こう」

・・・ちよつとムカついた。今のつてつまりリアスやアザゼル先生といった俺の大切な人達を馬鹿にしてくれたんですかね？

「くくく、怒ったのか？ だが、それは我も同じだ。・・・行け、フェンリル！」

「アオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ツ!? ちよ、速っ!?

遠吠えと同時に姿を消すフェンリル。次の瞬間、俺の右腕にフェンリルの牙が突き立てられていた。

S I D E O U T

イツセー S I D E

鎧を纏った先輩が馬車を出て行く。いつもの様にクールに、まるで近くのコンビニへ買い物に行くかの様な余裕を見せながら。

「おや、その姿……。まさか貴殿がああのおふりーとかいう英雄様ですか？　噂でしか聞いてはおりませんが、北欧の神である我を下賤な悪魔や墮天使などと同じと思わないで頂こう」

先輩の姿を見てロキはフューリーの名前を口にする。だけどそれだけで、今までの悪魔や他の勢力のみなさんみたいに激しい驚きや畏怖した様子は見られない。

「ワシも最初はロキと同じじゃったよ。じゃが、サーゼクス坊やセラフォルの嬢ちゃんから映像を交えて話を聞き、そして……。前回のレーティングゲームであの力を見せつけられ、ワシはようやくあの青年がとんでもない存在なのだと理解した。おそらく、他の神話体系の連中も今の段階ではフューリーという存在を侮っておるじゃろう」

先輩の力を知っている俺からすれば思わず鼻で笑ってしまいそうな事実だった。ロキの完全な上からの発言に、先輩から感じるプレッシャーが増した。

「くくく、怒ったのか？　だが、それは我も同じだ。……行け、フェンリル！」

「アオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！」

その遠吠えは聞き惚れてしまうほどに美しく、そしてどこまでも恐ろしいものだった。体の震えがさらに激しくなり、膝をついてしまいそうになってしまった。

「い、いや……。リョーマアアアアアアアアア!!」

部長の悲鳴に顔を上げる。そこにはフェンリルに右手を飲み込まれた神崎先輩の姿があった。う、嘘だろ……。先輩ですらヤツの速度に反応出来なかったっていうのかよ!?

「ふははははは！　英雄殿の最期にしては呆気なさすぎだな！　まさか断末魔さえあげずに逝ってしまうとは！　さあフェンリルよ！　腕だけでなく残りも飲み込んでしまえ！」

「ぐるぐる……。……」

勝ち誇った顔のロキの指示に、フェンリルは低く唸るだけだった。

な、なんだ？　なんか様子が……。

「……どうやら、異世界にはフェンリルなどよりもよっぽど恐ろしい魔物が存在するようじゃな」

「え？」

俺が聞き返そうとした正にその時、フェンリルの口からピキピキと音が鳴り始めた。それが牙に罅が入る音だと理解した瞬間、牙は一気に砕け散った。

「ぎゃんっ!？」

「ば、馬鹿な!?　フェンリルの牙が砕けるなど……」

牙を失った痛みでもなくフェンリルと、それを見て顔から余裕を一気に失ったロキ。そして、そんなロキ達を含めた俺達全員の耳に聞こえるはずのない声が届いた。

「威勢がいいのは結構だが……どうやら躰がなっていないようだな」

「先……輩……?」

こ、こんな事が……神殺しの牙すらも先輩には効かないってのか……？　は、ははは……良かった。良かったけど……なんかとんでもなく恐ろしい事を知ってしまった気がする。

「ぎ、貴様！　何をしたのだ!？」

「別に何もしてはいない。それよりも、自慢のペットならばしつかり教えておくのだな。噛みつく相手を間違えれば、怪我をするのは自分だと」

実力差もわきまえないからこうなる。……今の先輩の言葉にはそんな意味が込められている気がした。

「ふぎけるな！　フェンリル、お前の力はそんなものではないだろう！」

「が、がう……」

「フェンリルめ、怖気づいておる。無理も無いわい。今までの牙に砕けなかったものは無い。それを逆に砕いてしもうた彼奴に得体のしれん恐怖を抱いておるのじゃろう」

マ、マジか……。でもよく見たら体も震えてるし、目の光も鈍い。心なしか先輩から距離も取ろうとしてる。

「どうした？ 来ないのか？ ……ああ、痛いのか？ ならば治してやろう」

先輩がそう言うと同時に、フェンリルの口を光が包み、それが消えるとそこには失ったはずの牙が完璧な状態で並んでいた。

「さあ、これで大丈夫だろう？ では、ここからは俺も本気で相手しよう。先程の様な醜態は二度と晒さない。存分に戯れようじゃないか。もちろん、何があろうとも治してみせるから安心して向かって来てくれ」

や、やべえ……。先輩キレてらっしやる。ボコる↓回復↓ボコるの無限ループで徹底的に痛めつける気ですよあの人！ さっきの“遊ぶ”とか、今の“戯れる”とか意味深過ぎてめっちゃ怖え！

「待て！ それ以上我が子をいたぶるのは許さん！ フェンリル、ここは一度退くぞ！」

ロキがマントを翻すと、先程フェンリルを呼び出した時みたいに空間が大きく歪み始め、一人と一匹はその向こうへと消えて行くのだった。

第九十五話 性癖なんて人それぞれです偉い人にはそれがわからんのです

ロキさんとフェンリルがいなくなった後、俺達は街に戻り、駒王学園近くの公園へ降り立った。・・・そういえば、最近レイナーレさん達に会ってないな。

「リョーマー」

ラフトクランズモード解除と同時に、馬車から弾き出されたかのようには飛び出して来たリアスが俺の右手を取る。続けて他のみんなも俺の周りを取り囲んだ。え、何？

「・・・信じられない。出血どころか傷一つついていないわ」

「ね、念のために私の神器を！」

俺の右腕を淡くて温かい光が包んだ。・・・ここまでされたらわかる。みんな俺がフェンリルに噛まれた事を心配してくれているんだ。まあ、実際は噛まれたどころかハムハムされて終わったんだけど。

「で、でも、今回ばかりは流石に肝を冷やしましたよ先輩」

「まさかフェンリルの牙をその身に受けながら、逆にフェンリルにダメージを与えるとは・・・あの鎧の防御力はどうなっているのだ」

「う、うん、流石神の戦士・・・と言えばいいのかしら」

（神か・・・それを殺せる牙を無効化するという事は、ある意味神を越えているのではないだろうか。人を越え、悪魔を、天使を、そして墮天使を越え、ついには神すらも越える・・・。この世界において、この者の存在は最早「バグ」じゃな。この先、ワシ等の関係がどうなるかはわからんが、敵対すればラグナロクよりも凄まじい事になりそうじゃ）

「爺さん。なんとなくアンタが今考えている事はわかるが、あんまり考え過ぎると以前の俺や最近のサーゼクス達みたいになっちゃうぜ。・・・そういう俺も一瞬懐かしい痛みに襲われちゃったがな」

アザゼル先生がお腹を押さえている。寒空で冷やしちやっただろうか。そして紫藤さん、そっちの呼ばれ方はまだ慣れてないから勘

弁してくれると嬉しいな。

「ともかく、フューリーのおかげでヤツ等を撤退させる事が出来た。お前等はもう帰って休め。フェンリルと対峙した事で想像以上に精神を消耗させているだろう。詳しい話はまた明日にでもしようや」

そういうわけで、次の日の朝から俺達の家集合という事で解散となった。なんだか込み入った話になりそうだが、ウチじゃ狭くないだろうか。

「どうやら、ついにあそこの出番の様ね」

帰り道、リアスがやけに気になる独り言を漏らした。そして翌日、俺は彼女の独り言の意味を知る事となった。

予定通り、兵藤君達が朝の八時過ぎくらいから集まり始めた。それは別に問題は無い。ただ、それに混じって何故か支取さんと彼女の眷属の子達まで訪ねて来た。

「私と呼んだの」

はい！ 犯人発見！ リアスでした！ しかも・・・しかもだ。支取さん達に続いて、さらに予想外の人物達が俺達の元へ姿を現した。

「よお、邪魔するぜい！」

「ここがフューリー殿のご自宅ですか。三階建てとは立派ですね」

「はあい、亮真。元気にしてたかしら？」

玄関に立つ美猴さん、アーサーさん、そして・・・ヴァーリさん。その後ろからアザゼル先生が現れた。

「すまねえな、フューリー。こいつら、どこから嗅ぎつけたか知らねえが、俺達がロキとフェンリルに遭遇した事知って真正面から訪ねて来やがったんだ」

「北欧の悪神に神殺しの牙……。うふふ、素敵じゃない。今からやり合うのが楽しみだわ」

「まあ、そういうことだ。今回はいつちよ共同戦線といこうぜい」
「よろしくお願いします」

え、いや、こ、こちらこそと云えばいいのか？ ともなく、こんな大所帯じゃリビングに全員入りきらないんですけど。

「大丈夫よ。地下室ならみんな入れるわ。さあ、みんなここから下り

てちょうだい」

リアスが廊下の壁を触る。その途端、その部分が駆動音と共に横にスライドし、下へ伸びる階段が姿を現した。ってな、なんじやこりやあ!?! こんなのがあるとか全っ然知らなかったんですけどお!?!

「お、おお! すごい! 地下室だぜ兵藤!」

「なんか秘密基地っぽくてかっけえ! よし! 一番乗りは頂きだ!」

「あ、ずるいぞ兵藤!」

兵藤君と匙君が競った様に階段を駆け下りて行った。小学生みたいな反応の二人に苦笑しながら、他のみんなもそれに続いて行く。

「リヨーマ? みんな行っちゃったわよ?」

「リ、リアス・・・。これは一体・・・」

「こんな事もあるうかと、増築する時に合わせて作っておいたのよ」

・・・ツツコミたい。キミはどこぞの宇宙戦艦の工場長か!? と声を大にしてツツコミたい。けど、元ネタの無いこの世界でそんな事をすれば首を傾げられるだけだ。だから我慢しろ俺。

たった今頭に浮かべていたものを全て追い出し、俺は最後尾で階段を下りて行った。下りて行った先には、確かに全員が揃っても十分なスペースがある大広間があった。・・・はは、本当に改造されてたんだな。

「さて、ここなら全員交えて話が出来るな。・・・その前に、ヴァーリ。お前等の目的は本当にロキと戦う事だけなんだろうな?」

「ええ。私達は私達の目的の為に動いているだけですもの」

「ならいい。だが、少しでも変な真似をすれば、その時点ですぐ捕まえてやるから覚悟しとけ」

「心得ておくわ」

ひょうひょうとした態度のヴァーリさんに対し、アザゼル先生が溜息を吐く。・・・こういう例えは失礼かもしれないが、まるで自由奔放な娘に振り回される父親みたいだった。

「では本題へ移る。そもそも、今回の事の発端はオーデインだ。あの爺さんが来日した目的は日本の神々との会談なのだが、それをよく思

わない連中が存在する」

「その一人がロキって事ですよね？」

「そうだいツセー。こうしてオーディンが他の神話体系に接触しようとしているのがヤツには許せないんだろうさ。ま、ヤツ等からすれば、自分達の領域を土足で踏み込んで、あまつさえ聖書を広げたこつちの神話が心の底からムカつくんだろうよ。まったく、たまったもんじゃねえよな。そういう文句はミカエル辺りに言えつての」

「つまり、自分達の主神が極東の神々と和議をするのを阻止しようとする？」

「友好関係を結ぼうとする両者を実力行使で阻もうとする。・・・ある意味テロだな」

「それはつまり、ロキが『禍の団』と繋がっている可能性があるという事ですか？」

気付けば俺はそんな事を尋ねていた。みんなの視線が俺に集中する。それはいいんだが、どこか顔が引き攣っているのは何故だろう。そこまで変な質問をしたつもりはないんだが。

「その可能性は低いだろう。確認していない以上、ゼロとは言えんがな」

「そうですか。よかった」

「よかった？」

「ええ。もしも彼が連中と手を結んでいたとすれば・・・俺は自分を抑えられそうにありませんでしたから」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」

アースアを攫った時点で絶対だが、その後に聞かされたオーフィスちゃんに対しての仕打ち。もうペロリストという単語を思い浮かべるだけで青筋が浮かびそうになる。構成員だろうが協力者だろうが、俺の前に現れたら全員ぶちのめすと心に決めてあるのだ。

(今のプレッシャー・・・最早「嫌悪」じゃなく「憎悪」ね)

(たぶん、ディオドラがアースアに手を出そうとしなければここまではいかなかったんだろうなあ。巨大どころか特大の地雷を踏み抜いちまったって連中は気付いているのか?)

（最近は英雄派による神器所有者の誘拐等の事件が多発している。それもまた神崎君の心に火をつけているのでしょうか）

（私もテロに参加すれば、亮真も本気で戦ってくれるのかしら。．．．なんて、そんなやり方じゃきつと後悔しそうね）

「あー。その．．．お前の気持ちはわかるが、出来ればお前が出るのは最後の最後にしてくれるとありがたい（こいつに頼ってばかりじゃりアス達の為にならねえし、何よりも『ゆっくり』出来なくなっちゃう）」

「．．．わかりました」

ともかく、ロキさん．．．いや、ロキはせっかくの平穩を乱そうとしている事は確定だ。これだけの面子があれば、おそらく俺なんかの出番は無さそうだが、何かあればすぐに動けるようにしておいた方がいいかもしれない。．．．はは、少し前までの俺なら戦うなんて考えられなかったな。ペロリスト達との一件で自分がどこか変わった気がする。それがいいのか悪いのかはわからないけど、少なくとも、大切な友達を守る為の力を持ったのは喜ばしい事だと思う。

「では、具体的なロキ対策についての話に移るぞ。案としては、まずロキとフェンリルに詳しい者に話を訊きに行く」

「あの、先生。ロキは必要だと思っんですけど．．．フェンリルはいいんじゃないですか？」

「あ？」

「そうだね。おそらくフェンリルについては心配する事は無いと思いますよ」

「ああ、あんな目に遭わされたのだ。神崎先輩を見るだけで戦意を喪失するのでは無いだろうか」

「．．．トラウマ」

「に、逃げる前のフェンリルは完全な負け犬の目をしていました。僕わかるんです。だって、僕がよくしてる目にそっくりでしたから！」

「そこは胸を張ってという所じゃないと思うわよ．．．」

アザゼル先生に向かって、兵藤君が口々に意見を述べていく。それってまた俺が遊び相手になれっていう事？ いやー、みんなが真面

目にしている時に一人だけペットと戯れるつてのは何だかな。やれつていうならやるけど。

「おい兵藤、神崎先輩何をやったんだ？」

「・・・噛みついて来たフエンリルの牙を逆にぶつ壊した」

「へえ、そうなのかあ・・・つてはいいいいいいいいいい!!?!?!?」

「神喰狼の牙を!!?」

「壊した!?!」

「しかも噛みつかれた!?!」

「だ、大丈夫だったんですか!?!」

匙君達の驚愕した声が地下室内に反響した。俺は噛まれた右腕を軽く振って安心してもらえよう答えた。

「あの程度の噛みなら特別問題になる様な事は無いさ」

「「「「「「甘噛み!?!」「」「」「」」」」」」

今度はリアス達の声が反響する。ここなら近所迷惑にならずに思いつきり叫べそうだ。ストレスでも溜まったらここで発散するのもいいかもしれない。

「わかる。お前達の気持ちは心底理解出来る。正直、もうコイツ一人でいいんじゃない? とか何度も思ったさ。だが、ロキだって当然何かしらの対策を考えているはずだ。対抗手段は多いに越した事は無い」

「アザゼル先生。もしもまたフエンリルが出て来たら、俺でよければ」

「遊び相手」になりますよ」

どうもみんな相手するのが嫌みたいだし、消去法でいけばやっぱり俺になる。

(もう疑い様が無いわ。リヨーマはS! はっきりわかるのね)

(今のセリフ、眼鏡をかけてもう一回言つて欲しいにや)

(な、何? 今の神崎先輩を見ると何だか変な気持ちに。ツ、だ、駄目よ! 私はミカエル様のエースなんだから!)

(・・・どうして今のタイミングで朱璃とのあのめくるめく幸福な時間を思いだしてしまうのだ私は・・・)

(うふふ、やっぱり私達、相性抜群の様なね。それと・・・どうやら私の「お仲間」がいるみたいだわ)

「あつはっは！ 心強すぎて涙が出て来るぜ！ とにかく、五大龍王の一匹である『終末の大龍』ミドガルズオルムに会いに行く。イツセー、ヴァーリ、それに匙、お前達に協力してもらおうぞ」

「了解ッス！」

「まあ、順当ね」

「お、俺もですか!?!」

「ああ。龍門を開く為にヴリトラの力がある。大方の事は俺達や二天龍がなんとかするからお前はそこまで気負う必要は無いさ。タンニーンと連絡がつくまではお前達は待機。俺とバラキエルはちよつくらシエムハザの所へ行つて来るからな」

大広間から出て行くアザゼル先生とバラキエルさん。さて、二人が戻つて来るまでどうしていようかな。

「部長、どうしますか?」

「そうね。とりあえずここからは自由時間としましょうか。ただし、すぐに戻つて来れるようあまり遠くには行かない様にね」

「おつしやあ。せつかくだから俺つちはラーメンを食いに行つて来るぜ！」

「ちよつと！ だから遠くには行かないで……って、何でテロリストに注意してるのよ私は……」

「ねえねえ、アーシアさん。よかつたらお家の中を案内してくれない? ちよつと気になるんだよね」

「え、ええつと……リョーマさんがよければ」

「ああ、別に構わないよ。といつても、そこまで面白いものは無いと思うが」

「決まりね！ じゃあまずはアーシアさんの部屋へ行きましょ！ そしてその後は先輩の……」

そうして、みんな時間を潰す為にそれぞれ散つて行く。それからしばらくしてアザゼル先生が戻つて来た所で、兵藤君、ヴァーリさん、匙君が先生と一緒に転移魔法でどこかへ跳んで行った。

それから数時間が経ち、俺達は戻つて来た兵藤君達から情報を手に入れる事が出来たとの報告を受けるのだった。

第九十六話 男女間の友情は成立する

イツセーSIDE

ミドガルズオルムに会いに行った翌日、俺達は再び先輩の家の地下室へ集まっていた。平日ではあるが、オカルト部とシトリー眷属は全員学園を休んでいる。代わりに俺達を模した使い魔達が学園へ行っている。

ただ、神崎先輩とアーシアは普通に学園へ行っている。この休みは、ロキとの決戦に備えてのものなんだけど、アザゼル先生が「お前は必要無いから行って来ていいぞ」と先輩を送りだしたのだ。その言葉に俺達全員納得してしまった。

「オーデインの爺さんからすんばらしいプレゼントを頂いたぞ。ミヨルニルのレプリカだ。・・・あのクソジジイ、マジでこんな物隠してやがって・・・」

「ミドガルズオルムが言ってたヤツですよ。それをロキに撃ち込めとかなんとかなるとか」

「ああ、オリジナルは雷神ツールが持っているが、貸してもらえとは思えんからな。代わりにこれで行く。にしても、ミドガルズオルムが物知りで助かったぜ。アイツに教えてもらえなければ、あのジジイがこれを持っていた事すら気付かなかっただろう」

「オーデイン様はこのミヨルニルのレプリカを赤龍帝さんにならばお貸しするそうです」

「俺ですか？ 神崎先輩じゃなくて？」

「アイツにやあれ以上の攻撃力なんざ必要ねえだろ」

た、確かに先生の言う通りかも……。でも、こんな普通のハンマーで本当にロキと戦えるんだろうか。装飾とか紋様は立派だけど、それ以外は日曜大工で使うハンマーみたいだった。

「オーラを流してみてください」

ロスヴァイセさんにそう言われたので、俺はハンマーを握った手に魔力を込めた。すると、一瞬の閃光の後に、小さかったハンマーがみるみる内に大きくなって——って、お、重っ!?

「うおおおおお!?」

既に俺の背丈を余裕で越える大きさになったハンマーが大広間の床に落ち、そのまま埋まってしまった。

「くううううう!? も、持ちあがらん・・・!」

「オーラを纏わせ過ぎだ。抑えてみる」

嘆息する先生の言う通りに魔力を抑えてみたら、縮小して両手で振り回すのにちょうどいい大きさになった。ただ、重さは変わって無かったので持てないんだけど。

『禁手』になれば持てるだろう。いったん止めろ」

手を離すとハンマーが元のサイズに戻った。

「レプリカとはいええ、本物に近い力を持っている。無暗に振るえばこの辺一帯が高エネルギーの雷で消え去るぞ」

「マジですか!?! うわ、怖い!」

「な、なあ、兵藤・・・」

そこへ匙が声をかけて来た。心なしか顔が青白い様に見える。

「何だよ匙?」

「ミヨルニルの落ちた場所が思いっきり抉れてるんだけど・・・これってマズくね? 先輩が自分のいない間に家に傷付けられたって知ったら・・・」

「——ファツ!」

「大丈夫よ。これくらいならすぐに直せるから。リョーマだって、こんな事で一々怒ったりしないわよ」

そ、そうか。部長が言うんならそうなんだろうな。ちよつと安心した。

「まあ、いざという時は土下座でもすれば何とかなるだろう」

「先にこうなるって言わなかったアンタにも責任はあるでしょうが!」

俺の恨みを込めた視線を受け流し、アザゼル先生はさつきから黙って様子を見ていたヴァーリちゃんへ声をかけた。

「ヴァーリ。お前もオーデインの爺さんにねだってみたらどうだ?」

『禁手』してちよつと甘えればなんでも寄越してくれると思うぜ」

それは間違いないな（迫真）。あのドスケベ爺さんならヴァーリちゃんの『禁手』に絶対反応するだろうし。

「まあ、それも一つの手でしょうけど、色々手を出して器用貧乏にはなりたくないの。まずは天龍の力を完全に自分の物にする。・・・全てはそれからね」

・・・カツコいいな、ヴァーリちゃん。いや、女の子相手にカツコいいとか失礼かもしれないけど、それでも彼女の真っ直ぐな目を見て俺は純粹にカツコいいと思った。・・・ヴァーリちゃんはああいう“覚悟”を持つているからこそ、『覇龍』を使えるようになったんだろうか。

——相棒、これもいい機会だ。あの女に『覇龍』について聞いてみるがいい。

ドライグ？　・・・ああ、そうだな。『覇龍』に関したらヴァーリちゃんが先輩なんだ。なんかアドバイスとかもらえるかもしれない。

「ヴァーリちゃん・・・ちよつといいかな」

「あら、何かしら一誠？」

「実は、『覇龍』の事なんだけど・・・」

「・・・詳しく聞きましょうか」

ヴァーリちゃんの目の色が変わった。な、なんか緊張するな。ともかく、『覇龍』についてこの子に色々聞いてみよう。とりあえず、最初は歴代の所有者について聞いてみるか。

「そう・・・ついにあなたもその段階へ辿り着いたのね。喜ばしい事だわ」

「あはは、まだ道は長そうなんだけどね。ヴァーリちゃんもやっぱり『覇龍』習得までには時間がかかったの？」

「そうね・・・。私の場合、『禁手』に目覚めて『覇龍』を使えるようになるまでは割とすぐだった記憶があるわ」

むう、流石だなヴァーリちゃん。やっぱり才能のある子は違うぜ。

「はは、羨ましいよ。それだけ早く先輩達に認められるなんて。俺なんてまだたった二人だからな」

「・・・その代わり屈辱を味わったけどね。何で『覇龍』発動の度にあ

んな格好しないといけないのよ・・・」

「あんな格好？」

「いい、一誠？ 歴代の連中が何を条件につけて来ても、安易に領いた
りしない方がいいわよ。でないよ・・・絶対後悔するから」

「わ、わかった」

ヴァーリちゃんの声色が、これ以上この件に触れるなど警告してい
る気がした。

「それよりも、その認めてくれた先輩達は何か言ってたの？」

「あ、うん。その人が言うには、俺がもつと強い『覚悟』を抱けば残り
の所有者達も認めてくれるだろうって」

「なるほど、『覚悟』ね・・・。戦いへの覚悟、死の覚悟、敵を殺す覚
悟、何を以ってその『覚悟』になるかわからないけど、それなら今回
のロキ戦、あなた一人でやってみる？」

「いやいやいやいや！ 死ぬから！ 死んじやいますから！」

全力で首と手を横に振ると、ヴァーリちゃんは楽しそうに口元に手
を当てながら笑った。

「ふふ、冗談よ。神との戦いを一人占めなんてさせないわ。亮真との
再戦までに、私はもつともつと強くないといけないもの」

本当に戦うのが好きなんだなこの子。目が凄いキラキラしてるぞ。

「やつぱり、まだ先輩に勝つ事を諦めて無いの？」

「もちろん。私、目指す頂きが高ければ高いほど燃えるの・・・最近
思うのよ、強い者と戦えると思って『禍の団』に入ったけれど、そん
な事しなくても普通に亮真の傍にいればその機会はいくらでも巡っ
て来るんじゃないかって」

「ならそうしなよ。あんな連中の所なんか抜けてさ。なんだったらこ
こに住んじやえばいいよ。先輩、キミの事気にかけてるみたいだし、
きつと歓迎してくれるって」

「それがわからないのよ。どうして亮真はあれほどまでに私の事を心
配するのかしら」

「そりゃ友達がテロリストになったんだから心配するのは当然で
しょ」

「・・・理解出来ないわ。友達だから私を心配するの？　そもそも友達って何？　わからない、私・・・ずっと一人で生きて来たから、他人との関係なんて考えた事無かったもの」

淡々と話すヴァーリちゃん。だけど、その顔はどこか寂しそうで、悲しそうだった。一人・・・か。この子もアースアと同じ様に生きて来たのかもしれない。それにこの子は悪魔だからかなり長い年月を孤独に過ごしていたんだろう。

「私は・・・亮真の友達でいいの？」

「んー・・・ならさ、ちよつと思いい出してみなよ。友達になろうって言ったのは神崎先輩の方からなんだろう？」

「え、ええ。というか、気付いたら既に彼に友達認定されていたわ」

「その時、ヴァーリちゃんはどう思った？　迷惑だった？　面倒臭いと思った？」

「・・・あまり憶えて無いわ。でも、少なくとも嫌な感情では無かったと思う」

「それが答えだよ」

「え？」

ポカンとするヴァーリちゃんへ、俺は笑顔で答えた。

「嫌じゃなかったって事は、ヴァーリちゃんが気付いていなかっただけで、キミは先輩と友達になれて嬉しいと思ってるんだ。・・・そう思える時点で友達の資格は十分だと俺は思うよ」

「・・・わからないわ」

「うん、今のはあくまでも俺の感想だから、キミが本当はどう思ってるかはわからない。だからさ・・・俺とも友達になろうよ！」

「あなたと・・・？」

「ヴァーリちゃんの戸惑いは、今までずっと友達と呼べる相手がいなかった事が原因だと思うんだ。ならさ、友達を増やして、そんな戸惑い無くしちやえばいいんだ。だから俺とも友達になろうよ。ということになってください！　キミみたいな綺麗な子と友達とか自慢になるし！」

バツと右手を差し出すと、ヴァーリちゃんはその手と俺の顔を交互

に見て、そして微笑んだ。

「・・・ふふ、赤龍帝と白龍皇が友達なんて、歴代でもそうなかったんじゃないかしら」

「ど、どうなんだろう。聞いた話じゃいいライバルではあったみたいだけど」

「でも・・・。こういう関係も面白いのかもしれないわね」

「じゃあ・・・!」

「ええ、こちらこそ、よろしくお願いね一誠」

ガツチリ握手する俺とヴァーリちゃん。よっしや! 美人の友達ゲットだぜ! つと、イカンイカン。ヴァーリちゃんに友達とは何かを教えてあげないといけないのにこんな不真面目な態度じゃ駄目だ。・・・でも、後で松田と元浜に写真だけ送りつけてやろつと。

「よし、それじゃ・・・つて、アレ? ど、どうしたのみんな?」

ふと気付くと、大広間にいた全員が俺達に視線を送っていた。あの美猴やアーサーまでもが一緒にだ。な、なんだ? 何でこんな注目を浴びてんだ?

「兵藤が・・・あの兵藤がまともな事を・・・!?!」

「変態三人組の一員であるはずの兵藤君が・・・!?!」

「あんなにも真剣に立派な言葉を・・・!?!」

「に、偽物よ! あの兵藤は偽物だわ・・・!」

おいこらしトリー眷属! 何いきなりdisつてくれてんだ! というか本人の前でそういう事言うなよ! 思い出したら恥ずかしくなつて来たわ!

「ねえ、祐斗。なんだかイツセーがリョーマ化してる気がするんだけど」

「その兆候はちよつと前からありましたよ。ね、ギヤスパ―君?」

「えへへ、そうですね」

ぬおおお! 部長達までなんか優しい表情を向けて来てる!

俺の精神がゴリゴリ削られて行くのがわかるぞ。誰か・・・誰か助けてください!

「おいおいヴァーリイ。なら俺っち達は友達じゃなかったって事か

よお。悲しいねえ。一緒にラーメン食いに行った仲じゃねえか」

「あなた達は友達じゃなくて仲間じゃない」

「その二つはある意味同じですよヴァーリ。ですが、赤龍帝殿が話をしてくれなければ、私達もあなたの気持ちに気付けなかった。その点に関しては感謝しなければなりませんね」

「べ、別にそんなつもりで言ったんじゃないよ」

「んだよお。照れるなよ赤龍帝。でもお前いいヤツだなあ。なあ、俺っちとも友達になってくれよ。そんでもって金貸してくれよ。昨日ラーメン食い過ぎて財布がピンチなんだよお」

「たかるな！」

「・・・ふふ」

俺と美猴のやり取りに大広間が笑い声に包まれた。ヴァーリちゃんも楽しそうだ。

——白龍皇と親交を結ぶ赤龍帝か。面白い。お前に少し興味が湧いたぞ。

(え?)

頭に響く渋い男性の声。なんだ？ 誰の声だ？

「ったく、お前、コイツ等が『禍の団』の一員だとわかってんのか。・・・はは、ホントにしようがねえ奴だ」

アザゼル先生が呆れたように、だけどちよつとだけ嬉しそうにそう言うのだった。

「よし、話を戻すぞ。今から作戦の確認をする。全員心して聞けよ」

そして、俺達はロキとの決戦に向けての作戦会議を始めるのだった。

イツセイSIDE OUT

IN SIDE

放課後、俺とアシアはのんびりとした歩みで家路を進んでいた。リアス・・・というか、彼女達に化けた使い魔達はさっさと家に帰ってしまった。

「こうしてリョーマさんと二人きりで帰るなんて久しぶりな気がしま

す。・・・嬉しいな」

(なんだ、天使か)

「あ・・・」

無自覚にこちらを殺しに来るアーシアに耐えつつ、家まであと少しという所で、レイナーレさんと遭遇した。

「レイナーレ様。こんにちは」

「え、ええ、こんにちは」

「買い物帰りですか？」

手に持った買い物袋を差すと、レイナーレさんは何故か気まずそうな顔で答えた。

「そ、そうです。お二人は学園からの帰りですか？」

「はい」

「そ、そうですか・・・」

「・・・」

「・・・」

そのまま数秒両者沈黙のまま時間だけが過ぎた。これは・・・こつちから何か話を振るべきか。そう思っていたら、レイナーレさんの方が先に口を開いた。

「あの、アザゼル様からロキの事は聞いています。私達はいざという時のバックアップ要員として待機しておくようにとの指示も頂きました」

「よろしくお願いします」

「こ、こちらこそ。・・・それでなのですが、神崎様。この一件が片付いた後でよろしいので、一度私達の家に来て頂けないでしょうか。本来であればこちらが訪ねるべきなのでしょうが、逃げ道を無くさない」と私達の決心が鈍りそうで」

「それはもちろん構いませんけど・・・何かあったんですか？」

「・・・お預かりしている『悪魔の駒』の事で、聞いて頂きたい事があるのです」

「わかりました。必ず訪ねさせてもらいます」

「お願いします。では、私はこの辺で失礼します。アーシアもまたね」

「は、はい」

レイナーレさんと別れ、俺達は再び家路を歩き始める。なんとも気になる言い方だったが、その前にやらないといけない事をすっかりやらないとな。

(レイナーレ様、ひよつとして・・・)

アーシアが何だか難しい顔をしている。考え事でもしてるのだろうか。なら、邪魔しない様に俺も話しかけたりせず黙って歩こう。そうして、俺達は無言のまま自宅へと辿り着くのだった。

第九十七話 ペットのヤンチャは飼い主が責任を取りましょう

いよいよロキとの戦いの時がやって来た。雲一つ無い夜空の下、俺達はオーデインさんが会談をするという高層ホテルの屋上にいた。

会談の仲介役を任されたアザゼル先生の代わりに、バラキエルさんが俺達の傍にいる。周囲のビルにも支取さん達が待機していて、さらに上空にはタンニーンさんの姿もある。月明かりの下を舞うドラゴンって画になるな……。

「時間ね。会談が始まるわ」

リアスが腕時計に目を落とした瞬間だった。空が歪み始め、巨大な穴が開いた。やがてその中からロキ、そしてフェンリルがゆつくりと姿を現した。

「時間だ。作戦を開始する」

バラキエルさんの指示と同時に、ホテル一帯に巨大な魔法陣が展開する。流石にここで戦うのはまずいので、これから俺達はロキやフェンリルごと戦場へ転移させられる事になっている。

「くくく、やはり戦場を移す気か。ならば、我も予定通りに動かせてもらおう！」

ロキがそう言った直後、展開する魔法陣の上にさらに別の魔法陣が覆いかぶさるように出現した。うわあ……見るからに危なそうな雰囲気なんですよけど。

「これは……まさかヤツも転移魔法を!?!」

「ふははは! 今度は前回の様にはいかんぞフューリー!」

眩い光が俺達を包み込む。そして次に目を開けた時、俺は見た事も無い荒れ果てた大地の上に立っていた。

「……は……?」

周囲を見渡す。あれ、おかしいな。ロキどころかリアス達までいないじゃないか。どういう事だ――。

「アオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

三重に聞こえる狼の遠吠え。振り返れば、そこにはフェンリル、そしてフェンリルによく似た赤と白の狼の姿があった。

「……え？」

S I D E O U T

リアスSIDE

古い採石場の跡地。ここがロキとの決戦の場になる。転移直前にロキが発動させた術式がなんなのか気になるが、まずは眷属の数を確認しないと。

そうしてみんなの無事を確認しようとして、私は気付いた。イリナもいる、バラキエルもロスヴァイセもいる。ヴァーリ達だって健在だ。もちろん私の眷属も欠けていないし、アーシア、黒歌の姿もある。なのに彼が……リョーマの姿だけがどこにもなかった。

「部長！ フェンリルのヤツがいません！」

イツセーが指差した方に目を向ければ、確かに先程までロキの傍にいたはずのフェンリルの姿が無かった。

「ロキ……あなたまさか……！」

「気付いたか。そう、この場所へ転移する直前、我は術式に干渉し、フューリーとフェンリルのみを別の場所へ転移させたのだ」

なるほど、あの魔法陣にはそんな意味があったのね。だけど……この男、前回の反省を全然活かせてないみたいね。リョーマとフェンリルの力関係はもうハッキリしてるでしょうに。

「お前馬鹿だろ。あんなに先輩相手にビビりまくっていたフェンリルが勝てると思ってるのか？」

「貴様等こそ、我の最高傑作の実力があの程度だと勘違いしていないか。フェンリルは未だかつて本気を出した事は無いのだ。それは何故か？ 本気を出すまでも無く、あの牙で軽く噛んでやるだけで相手が死ぬからだ。あの鎧の防御力があれほどまでとは予想外だったが、果たしてフェンリルの全力の噛みつきに耐えられるかな？」

その言葉は私達を僅かに動揺させた。同時に悔しさが生まれる。その手加減した状態のフェンリル相手に、私達はあれほどまでに恐怖

を感じていたなんて……。

「さらに、巨人族の女を狼に変え、フェンリルと交わらせた末に誕生したスコル、ハティも送ってやった。親であるフェンリルよりも若干スベックが落ちるが、神殺しの牙は健在だ。はっはっは。神殺しが三匹。今にヤツの死体を啜えこの空間へ戻って来るだろうさ」

「なんですって!?! く、こんな事になるのなら、彼にグレイプニルを預けておくんだったわ……!」

フェンリルがいなければ、持っていてても意味が無い。まさか、開始直後からこんなマネをしてくれるなんて!

「さあ、我等も始めようではないか! それとも、フェンリル達が戻って来るのを待つのかな? まあ、どちらにせよ、貴様らは死への旅路でフューリーと再会出来るだろうさ!」

「おあいにくさま! その道を歩むのはあなたよ! いくわよみんな!」

「いくぜロキ! 俺達の力、見せてやる! ドライグ!!」

——ああ、やろうか相棒!

「一誠に続くわよアルビオン」

——承知した。

イツセーが『禁手』を発動させる。続けてヴァーリも『禁手』発動させる。……今回は最初からあのギリギリな方なのね。

「……これはこれは。赤龍帝の方はいいとして白龍皇よ。それは最早鎧の意味が無いのではないかな?」

「あら、敵の心配なんて余裕ね。なら、その余裕を焦燥に変えてあげるわ!」

「イツセーとヴァーリを中心に攻撃を仕掛けるわ! 各人、準備を! 牽制なんてせこい事は言わないわ! それぞれの全力を叩き込んでやりなさい!」

リョーマを封じられたのは痛手だけれど、それはロキも同じ。結果的にフェンリルを私達に向けられないのだから。

「ならば、まずは私に任せてもらおうか」

魔力をチャージする私の横をゼノヴィアが進み出る。そして彼女

はデユランダルを両手で持ちながらそれを天へと掲げた。

「ここには私を遮るものは何も無い。さあデユランダルよ！ 私の力を！ 私の思いを！ この技で以ってロキに示してやろうではないか！」

ゼノヴィアの叫びに応えるかのように、デユランダルが激しい光を発し始める。その光は刀身へと集まり、そのまま高く伸びて行く。「聖剣か。しかもこのオーラ……。たかが悪魔の攻撃……。とは笑い流せんな」

「おつとお！ そうはさせないぜい！」

「聖剣の前に、聖王剣の一撃を受けて頂きましょうか！」

おそらく防御結界を発動させようとしたであろうロキの背後から美猴が如意棒、アーサーが聖王剣コールブランドを手に襲い掛かる。来るのがわかっていたのか、ロキは慌てる様子も無く、両手でそれぞれを受け止める。

「遅い遅い。それで神に一撃を入れられると思ったか？」

「へっ！ こんなバレバレの奇襲が通じるとは思つて無いぜい！」

「本命は別にありますからね」

「何？」

アーサーの言葉にロキが怪訝な表情を浮かべた次の瞬間、左右から黒歌と小猫が両手に気を纏わせながら肉薄する。

「白音！ 合わせて！」

「はい！」

姉妹だから出来る完璧なタイミングで、黒歌と小猫は膨れ上がった青白い気の塊をロキの脇腹へと叩きつけた。

「白虎咬!!」

「ぬうつ!? 妙な技を・・・！」

ほんの少しだけ顔をゆがめるロキ。それがダメージによるものなのかはわからない。だけど、スキが出来るには十分だった。

「はああああああああ!!!」

ゼノヴィアの咆哮。それを合図にしたように、黒歌達が一斉にロキから離れる。その僅か数瞬後には、ロキはデユランダルの光の中へ消

えていった。ゼノヴィアの全力が込められたその一撃は、ロキだけでなく、戦場すらも破壊し尽くさんとばかりにあらゆる物を飲み込んでいった。

「追撃の手を緩めないで！ 相手は神！ 今ので終わるはずが無いわ！」

「父様！」

「うむ！ さあロキよ！ 我等が親子の絆の一撃を受けよ！」

・・・なんだかノリノリねバラキエル。朱乃から直接和解出来たとは教えてもらったけど、まだ娘の気持ちには鈍いのね。あの子、恥ずかしいのか顔がちよつと赤いわよ。

朱乃とバラキエル・・・重ねたその手から放たれたかつてないほどの凄まじい雷光がロキの立つ場所へ落ちる。デュランダルの光と墮天使の光。二つの光をその身に受けたロキの姿が徐々に明らかになっていく。

「貴様等・・・あまり調子に乗——」

「いいや！ 乗らせてもらおうか！」

「ロキ様！ 御覚悟願います！」

衣装はロボロボだけど、ロキ自体へのダメージは少なそうだった。流石は神ね。だけど、こつちだつて止まらないわよ！

上空からタンニーンの火球。地上からロスヴァイセの北歐魔術が同時にロキを襲う。これ以上受けるのが得策でないと判断したのか、ロキが初めて回避行動に移ろうとする。・・・けれど、その動きが突然止まった。

「何だこの風は・・・!? それに足が動かん・・・!?」

「悪いけど、逃がさないよ」

「こ、この世界は既に僕の支配下なんですう！」

祐斗の魔剣から吹き荒れる風とギヤスパアの魔眼がロキの動きを封じ込める。激しい風が私達の元へまで届いて来た。

「アーシアさん！ 私の後ろに！」

「は、はい！」

貴重な回復役であるアーシアはイリナが守ってくれている。私達

はただ攻めるだけ！

灼熱の炎がロキを包み、何本もの魔力の矢がロキの体を貫いて行く。さあ・・・出番よあなた達！

「ロキイイイイイイイイイイ!!」

「ッ!？」

勇ましい雄叫びと共に、イツセーが背中中の魔力噴出口を全開にしてロキへ迫る。そして、豪快に振り上げた拳を、ただ全力でロキの顔面に向かって叩きつけた。

「ぬうううううう!!」

間一髪で障壁を展開させたロキがイツセーの一撃を受け止めぬ。神の障壁は伊達ではなく、イツセーの攻撃にビクともしていない。だけど、もう一人いる事は忘れているみたいね。

「あらあら、私を無視しないでちょうだいよ」

『Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide Divide』

機械音声なるごとに、ロキの障壁の大きさがみるみる内に小さくなっていく。そして、ついに阻むものの無くなったイツセーの拳が目標へ盛大に撃ち込まれた。同時に、私の魔力チャージも完了した。

「おまけよ！ これも喰らいなさい！」

私の頭上に紫色の魔力球が百以上出現する。ガン・スレイブの練習中に偶然編み出したこの技・・・『滅殺の雨』とでも名付ければいいらし。

「この全てが滅びの力を有しているわ。あなたに受け止められるかしら！」

ロキに向かって右手を突き出すと同時に、魔力球が一斉にロキへ殺到する。着弾と同時に魔力球同士が合体、膨張を繰り返し、ついにはロキを飲み込んだままドーム状になった。

「流石に今のは痛かったんじゃないかしら？」

魔力のドームが弾け飛ぶ。そこに先程と変わらずロキの姿がある。

ただ一つ違うのは・・・右手の肘から先が無くなっていた事だった。「まさか・・・と言いたい所だが、確かに今のは効いたよ。赤龍帝と白龍皇を中心にすると言っておきながら、まさか本命が自分だとは・・・大した詐欺師だ」

「あら、中心⇨本命とは限らないでしょ？　というか、本命というならば、今の攻撃の全部が本命よ。神であるあなたに出し惜しみなんて出来ると思う？」

「くくく、確かに。・・・いいだろう。貴様等を甘く見ていた事は謝罪しよう。ここからは我も本気でいかせてもらおうか！」

瞬間、ロキからのプレッシャーがさらに激しさを増した。・・・本当なら、こちらを舐めている間に決定打を与えておきたかったのだけど、こうなったら仕方無いわね。

「我のお供はフェンリル達だけではないのでね。貴様等にはこいつらの相手をしてもらおう！」

何を・・・と言いかける私の前で、ロキの足下の影が広まって行き、そこから巨大な蛇・・・いや、あれは蛇じゃない。ドラゴンだわ！

「ミ、ミドガルズオルムじゃねえか!？」

イツセーが仰天の声を上げる。まさか、あんなものまで量産しているなんて・・・！　一匹、二匹、三匹・・・ああもう、数えきれないくらい増えてるじゃない！

「ぶ、部長！　流石にコイツ等全員相手にしたら・・・！」
「くっ・・・！」

「出すつもりは無かったのだがな。貴様等の頑張りへの褒美だ。存分に踊るがいい！」

「みんな！　一旦フォーメーションを立て直すわ！　こっちに集まって・・・！」

私がそう指示を出そうとしたその時だった。私達とロキ、ミドガルズオルムの丁度真ん中の空間が突如歪み始めた。これは・・・何かが現れようとしている？

「ふむ、どうやらあちらの決着がついたようだな。さてさて、英雄殿を飲み込んだのはフェンリルか？　スコルか？　それともハティかな

？」

私達の見守る中、歪みは穴へと変化した。……信じてるわ、リョーマ。あなたが負けるはずが無いって！

しかし次の瞬間、私……いや、私達全員は、そこから現れた存在を見て己が目を疑った。ロキすらも表情を凍りつかせていた。

そこから現れたのは……満足そうな微笑みを見せるリョーマ。そして……彼の後ろに従者のように……犬でいう「お座り」のポーズで並ぶ三頭の神喰狼達だった。

この時おそらく……いえ、絶対にこの場にいた者達はこう思ったでしょうね。

……いったい何をしでかした？ と。

第九十八話 調教の基本はアメとムチ

生物はおろか、草一つ生えていない枯れ果てた大地。フェンリル、スコル、そしてハテイの神喰狼三頭は、主であり、父でもあるロキからの命令でこの場所へ立っていた。

その命令とは即ち、自分達の目線の先に立つ一人の“小さきもの”を始末する事だ。名前は知らない。そもそもフェンリル達にとって、神であろうと何であろうと皆すべからず“小さきもの”なのだ。自分達の牙にかかれば、何者であろうが噛み砕けないものは存在しない。その様な矮小なるものを一々区別する必要など無い。……そう、先日までフェンリルは確かに思っていた。

フェンリルにとつて、世界とは“獲物”だった。ロキに従い、彼を邪魔するものに対し、その神殺しの牙を突き立て、己が空腹を満たす。それが自分の役目であった。あの時もそうだった。いつも通りロキの指示に従い、目の前の“小さきもの”を噛み殺す。それだけの事……のはずだった。

だが、その“いつも通り”はやって来なかった。“いつも通り”ならば“小さきもの”は断末魔の声を上げていたはずだった。“いつも通り”ならば突き立てた牙に甘美なる肉の感触があるはずだった。“いつも通り”ならば、自分は空腹を満たせていたはずだった。

——最初はどこから聞こえて来ているのかわからなかった。ピキピキという耳触りの悪い音。それが自分の口の中から鳴っていたものだ。気付いた瞬間、神殺しの牙は呆気無く砕け散った。

抱いた感情は“戸惑い”。そして、次に襲って来たのは激痛だった。もがき苦しむフェンリルに対し、“小さきもの”が放った言葉が彼の心を凍りつかせた。

『威勢がいいのは結構だが……どうやら躰がなっていないようだな』
何故この“小さきもの”がしゃべるのだ？ 何故この“小さきもの”が生きているのだ？ 何故……この“小さきもの”の言葉に自分は震えているのだ？ なぜ？ 何故？ ナゼ？

それが“恐怖”という感情だと理解する事がフェンリルには出来

なかった。彼は恐怖を「与える」側であり、「与えられる」側になる事など皆無だったからだ。

そして今、あの「小さきもの」が再び自分の前に現れた。心が僅かにざわめくが、フェンリルはそれに気付かないフリをした。

そんな父の右に並び、標的である「小さきもの」を見て低く唸り声を上げるのは、フェンリルの娘であり、ハテイの姉であるスコル。彼女にとって世界とは「退屈」であった。誰も彼も、自分がちよつと噛みついただけでアツサリ死んでしまう。それがつまらない。自分もつと遊びたいのだ。スコルは戦いを戦いだと思っていない。彼女はただ遊びたいだけだった。

そんなスコルは今、とてもワクワクしていた。父の父であるロキから、この「小さきもの」は今までの「小さきもの」とは違うと聞かされてきたからだ。父をこき使うロキは好きでは無いが、自分の退屈を紛らわせてくれるかもしれない相手を用意してくれた事には感謝していた。叶うのなら、父の合図を待たずに飛び掛かりたいとすら思うくらいに。

その反対、フェンリルの左に立つ、スコルの妹のハテイもまた、「小さきもの」へ顔を向けているが、その目は「小さきもの」を捉えていなかった。それは、世界を「無価値」とするハテイにとって至極当然であった。彼女の認める価値とは「強さ」のみであり、故にハテイの中で「最強」である父の為に生きる事がハテイの全てだった。その父どころか自分達にすら殺せるはずのロキに命令されるのがハテイには屈辱で、いつかロキを殺して自由になる事を夢見ていた。

今回も渋々ではあったが、父の為にと我慢して命令に従った。さつさとあの「小さきもの」を殺して、父やスコルと一緒に帰りたい。「小さきもの」は所詮「小さきもの」でしか無い。軽く噛み殺してやろう。ハテイはそう思っていた。

三頭それぞれに抱く思いは違っていった。だが、同時に共通している所もあった。それは・・・自分達の運命が既に決定づけられている事に気付いていないという点だった。

「アオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

天を仰ぎ、咆哮するフェンリル達。並みの者であればそれだけで圧倒され、戦う前から戦意を喪失してしまうであろう。

「その二頭は兄弟・・・いや、もしかして親子か？」

だが、「小さきもの」はまるで気にした様子も無くそう呟くだけに終わった。その余裕ある態度にスコルは益々期待し、ハティは自分達を甘く見られたと気分を害した。

今にも飛び掛かりそうな二頭を制し、フェンリルが「小さきもの」を中心に周り始める。スコル、ハティもそれに加わり、徐々に互いの距離が近づいて行つた。そして、牙の届く距離まで近づいた次の瞬間、フェンリルが吠えた。

「グルアアアアアアアアアア!!!」

それが攻撃の合図だった。フェンリルが正面、そしてスコルが左、ハティが背後から一斉に「小さきもの」へ襲い掛かる。その腕に、その脇腹に、その足に、神殺しの牙を突き立てる為に。今の「小さきもの」はあの鎧を纏っていない。アレさえなければ必ず殺せる。そうすればあの謎の震えももう二度と起こる事は無い。

フェンリルは確かに勝利を確信していた。——自分達の牙が「小さきもの」へ食い込む刹那、その「小さきもの」の姿が消滅したその瞬間までは。

「「ギャンツ?!」」

慌てて止まろうとするが既に手遅れだった。一度放たれた弾丸を戻せないのと同じ様に、開かれた口から覗く牙を引っ込める事は出来ない。そのままフェンリルの牙がハティの首筋へ、ハティの牙がスコルの胸に、スコルの牙がフェンリルの頬へ突き刺さった。

神殺しが初めて自ら味わう事となった神殺しの一撃の威力はやはり凄まじく、穿たれた穴から鮮血が滝の様に流れ始めた。しかし、フェンリル達はそんなものに気を取られている場合では無かった。早く「小さきもの」を見つけ——。

「・・・どうやら、俺の忠告は無駄だった様だな」

心臓を鷲掴みにされるとは正にこの事だった。自分達の背後から届く「小さきもの」の声に、何者にも臆する事の無いはずのスコル、

価値を認めないものには一切興味を抱かないはずのハティまでもがその場に縫いつけられたかの様に動きを止めた。

「小さきもの」は後ろにいる。わかっているのにフェンリルは振り向けなかった。足どころか指の一本すらも石のように動かないのだ。まるで、自分の意思に反して体が振り返るのを拒んでいるかの様に。

○い。振り返るのがどうしようもなく○い。けれど、ロキの命令は絶対。自分はあるの。『小さきもの』を必ず殺さなければならない。しくじれば使えないものと判断され、ロキ本人に処分されてしまう。それは娘達も同じ。だからこそ、自分達が生きる為にも『小さきもの』を殺さなければならぬのだ！

意を決し、フェンリルは無理矢理といった感じで体を動かして背後を向いた。

「お前達の為にももう一度言わせてもらおう。その誰彼かまわず噛みつく癖を直さなければ・・・後悔するのはお前達自身だぞ？」

まるで幼子へ言い聞かせる様に穏やかに、優しく、慈しむかの様に言葉を紡ぐ『小さきもの』。だが、フェンリルがその言葉を聞いて感じたのはとてつもない○○だった。この『小さきもの』は神喰狼である自分達を全く脅威として見ていない。ロキですら自分達と接する時には幾分かの警戒心を持っていたが、この『小さきもの』からはそれすら感じられない。強者だからこそ認められる弱者への慈悲・・・『小さきもの』が自分達へ向けているのは正にそれだとフェンリルは思った。

「グ、ガ、ガアアアアアアアアアア!!」

『小さきもの』に威圧され、硬直していたはずのスコルとハティが突然狂ったかの様に『小さきもの』へ向けて突撃した。それが○○に駆られての破れかぶれな行動だとフェンリルが気付いた時にはすでに二頭が『小さきもの』の腕と足に噛みついていていた。

——ピキピキ。

その音が聞こえた瞬間、フェンリルの時が停止した。あの○○の記憶が無理矢理呼び起こされる。やがて、停止した時が再び動き始めた

彼の目に映ったのは、あの時の自分と同じく、牙を失い、苦しみにも
がく娘達の姿だった。

「・・・さて」

“小さきもの”の視線がフェンリルを捉える。

——クルナ。

「ギャウ、ギャウウ・・・」

助けを求めるかのように弱々しい声を上げるスコル。だが、今の
フェンリルにそんな娘の声は届いていなかった。

——クルナ。

「グ、グルル・・・」

ハティは尚も立ち上がりようとしていた。父の元へ“小さきもの”
を行かせたくないのか、“小さきもの”へ向かって手を伸ばそうとし
ている。

——クルナ。

そんな二頭など既に眼中に無いのか、“小さきもの”はただフェン
リルに向かって静かに近付いて来ていた。

——クルナ。クルナ。クルナ。クルナクルナクルナクルナクル
ナクルナクルナクルナクルナクルナクルナクルナクルナクル
ナクルナクルナクルナクルナクルナクルナクルナクルナクル
ナクルナクルナクルナクルナクルナクルナクルナクルナクル
ナ。ナ。

最早フェンリルは声すら出なくなっていた。そして、この瀬戸際に
なつて、ようやく彼は自分が“小さきもの”へ抱いていた感情の正体
を知るのだった。

“恐怖”・・・かつて、自分が命を奪って来た者達が抱いていた
であろうその感情を、今は自分自身が抱いている事を、フェンリルは
身を持って気付かされた。

「ふ・・・ようやく大人しくなつたか」

“小さきもの”がフェンリルの体に触れる。その触れられた場所
が恐ろしく冷たくなっていくのをフェンリルは感じていた。おそら
く・・・いや、間違い無く自分はここで死ぬのだと、フェンリルは覚

悟した。何故、前回の時点で気付かなかったのか。この「小さきもの」は他の「小さきもの」とは次元が違う。自分達やロキすらも足下にすら及ばない「偉大なるもの」なのだ……。

それを理解した瞬間、フェンリルの心から死の恐怖が少しだけ和らいだ。この「偉大なるもの」に殺されるなら本望だと。自分という存在もまた「偉大なるもの」の糧になるのならばそれは幸せな事だと。

だが、「偉大なるもの」は強さだけでは無く、心も「偉大なるもの」だった。トドメを待つフェンリルの体を、温かい何かが包み込む。それは以前、牙を失ったフェンリルを治療した「偉大なるもの」の力の現れだった。

「まさか、互いに噛み合うとは思わなかったぞ。どうだ、まだ痛むか？」

「ガ、ガウ……」

「そうか……」

首を横に振るフェンリルを、「偉大なるもの」は優しく撫でた。たったそれだけで、フェンリルは自分の体が融けてしまいたいようなほどのとてつもない気持ち良さを味わうのだった。目はトロンとし、耳と尻尾は力無くダラリと垂れる。

「すまない。お前達を傷付けるつもりはなかったんだ。許してくれ」

その言葉は甘美にして強烈な毒のごとくフェンリルの耳を、頭を、心を侵していった。ああ、なんとという慈悲深さだろう。愚かにも「偉大なるもの」へ歯向かった自分を許すどころか癒してくれるなんて。

フェンリルが気付かぬ間に、彼の心の中を「偉大なるもの」が徐々に支配していった。それに満足したのか、「偉大なるもの」はスコル、ハティへも慈悲を与えた。牙を取り戻したスコルは嬉しそうに「偉大なるもの」の周りを駆け、ハティは甘えるように「偉大なるもの」へ頬を擦りよせていた。

スコルは「偉大なるもの」に撫でられた事でその快樂の虜となり、ハティは父すら戦わずして屈服させた「偉大なるもの」の強さに心酔した事でフェンリルと同様「偉大なるもの」に心の底まで支配さ

れていた。既にそこにかつての主であるロキの姿は無い。今この時より、神喰狼親子の支配者はこの「偉大なるもの」なのだから。

ならば、自分達のやる事は決まっている。我等が「偉大なるもの」を煩わせる悪神をこの牙で噛み殺してやろう。そうすればきつと「偉大なるもの」は喜んでくれるはずだ。

「アオオオオオオオオオオオン!!!」

フェンリルの雄叫びの数瞬後、空間に大きな穴が誕生した。ここを通ればロキのいる戦場へ跳ぶ事が出来る。

「ここを通ればいいのか?」

「ガウガウ!」

返事をするスコルに頷き、「偉大なるもの」は穴へと飛び込んだ。それに遅れまいと、フェンリル達も穴へ身を投げ出した。

そして、一人と三頭は悪魔達と神が戦闘を繰り広げている戦場へとその姿を現したのだった。

第九十九話 覚悟のススメ

祐斗SIDE

ロキにより別の場所へ転移させられていた先輩が僕達の前に姿を現した。それは別に驚く様な事では無い。先輩があ程度の策でどうにかなる様な人じゃないと、僕達はこれまでの経験でわかっていたから。

でもですね、先輩。確かに僕達も前回の一件でフェンリルは既に先輩の脅威ではないとわかっていましたけど、流石にフェンリル達を後ろに従えながら戻って来るとは予想してませんでしたよ。見てくださいよ。僕達どころかロキやミドガルズオルム達までも固まってるじゃないですか。

・・・こうやって心の中で冷静に状況を見れている辺り、僕の神経も随分太くなってしまったなあ。エクソシスト達を一人で無力化させたり、エクスカリバーを素手で破壊しようとした・・・なんて程度で驚いていた僕が懐かしい。

(・・・いや、ちょっと待て僕！ 驚く理由としては十分だよね！)

先輩・・・あなたの所為で僕の中の価値観がいろいろとんでもない事になってる気がします・・・。

「おい木場。なんでそんな“ガビーン”なんて擬音がピツタリな辛気臭い顔してんだよ。まさか、もう参っちゃったわけじゃねえだろうな？」

「はは、大丈夫。・・・参っているのはロキに対してじゃなくて僕自身にだから」

そんな会話をしている間に、先輩が僕達に気付いてこちらに向かって近づいて来た。その後ろを、地面を揺らしながら当然の様に着いて来るフェンリル達。当然、そんなフェンリル達にロキが黙っているはずが無く、明らかな狼狽の混じった声を張り上げた。

「ま、待て！ 何をしているフェンリル！ お前達の役目はその男の抹s・・・」

刹那、フェンリル達の一睨みにロキが言葉を失う。フェンリル達が

彼に向ける目は、最早完全に敵に対して向けるそれになっていた。そこに、主への忠誠心は欠片も残っていない風に僕は感じた。

「リ、リヨー・・・マ？ どうしたの、ソレ？」

僕達の気持ちに代弁するように、部長が顔をひくつかせながらフェンリル達を指す。普段の部長ならまず先輩の無事を喜んでいただろうけど、やっぱり彼女も相当驚いているみたいだ。

「ああ、気付いたらキミ達とは違う場所にいてな。そこにこの三頭もいたんだ。相変わらぬのヤンチャぶりだったが、元々頭が良かったんだろうな。二、三回声をかけたら大人しくなってくれたよ。こうして俺をみんなの所へ連れて来てくれたし、いい子達で助かった」

そう言って神崎先輩はフェンリル達を撫でた。たったそれだけで、フェンリルは誇らしげに天を仰ぎ、他の二頭は甘えるような声を出しながら先輩に顔を近付けていた。

「し、信じられません。あの神喰狼がまるで犬の様に・・・。スコルはまだしも、ロキ様でも制御が難しいとされていたハティまでもがこれほどまでに大人しくなるなんて」

（・・・）主人様の手は危険にや。私がまだ正体を隠していた頃、ご主人様のナデナデで何度イキかけた事か・・・。特に真耶の家に預けられる直前なんか・・・ああ、思い出しただけで体が疼いちやう・・・。完全に服従モードの三頭に、ロスヴァイセさんが目を丸くしている。あと、黒歌さんは何であんなに悩ましげに体をくねらせているだろう。

「それがこの二頭の名前なんですか？ ならスコルは・・・」

「がうつ！」

赤い方の神喰狼が元気よく返事をする。・・・本来であれば心の底から恐怖を抱くであろう存在のはずなのに、これではまるで忠犬だ。

「では、こつちがハティだな」

「くうーん」

名前を呼ばれた途端、子犬の様な声でその場にペタンと横たわるハティ。目が凄くトロロンとしていて、今にも眠ってしまいそうだ。

「ふふ、可愛いじゃない。でも、これじゃあまるで亮真がマスターみた

いね」

冗談めかしてヴァーリさんがそう言うけど、おそらくそれで正解なんだと思う。であれば、さつきフェンリル達がロキに対してみせたあの敵意や殺意の込められた視線にも納得がいく。新たな主である神崎先輩の敵であるロキを自分達が排除してやろうと思っているのかもしれない。

「今度こそ殺れると信じて送りだしたフェンリル達が神崎先輩の撫でテクで骨抜きになってト口顔を見せるなんて・・・」

「イツセー君？」

「あ、いや、前に元浜から借りたゲームに似たようなタイトルのヤツがあったんだけど、まんま今のロキの心情じゃね？　とか思ってしまっただけだ」

ロクな内容じゃなさそうだね、そのゲーム。でも、確かにこの状況はロキにとって予想外どころのレベルじゃないだろう。前回の一件で味わった屈辱を晴らす為にとった作戦なんだろうけど、完全に裏目に出てしまったな。少なくとも、フェンリル達を先輩に関わらせなければ裏切る事も無かつただろうに。

けれど、全てはロキの自業自得だ。先輩が合流し、神喰狼が味方となった今ならば一気に押し込めるはずだ。

「我を裏切るかフェンリル！　創造主たる我を！　ならばお前達も共に始末してくれる！」

憎悪と怒りを込めた叫びと共に、ロキはさらにミドガルズオルムを召喚した。

「リアス、アレは・・・？」

「ミドガルズオルムよ。ロキはアレも量産していたみたいなの。でも、見た所生物というよりも、ロキの命令に従うようにプログラムされた肉人形といった感じね」

「わかった。ならアレの相手は俺に任せてくれ」

「え、いや、むしろミドガルズオルムは俺達に任せて先輩はロキを・・・」
「待って、イツセー君。アザゼル先生の言葉を思い出してみて」

——出来ればお前が出るのは最後の最後にしてくれるとありが

たい。

先輩の家でアザゼル先生が言った言葉。アレは先輩にはなく、むしろ僕達に対する忠告だったのだろう。先輩に頼ってばかりでは、いつまで経っても強くなれないと。そういう意味だったのかもしれない。コカビエルとの戦いの最中に先輩から喝を入れてもらってそんな考えは捨てたはずだったんだけど、アザゼル先生にはまだ僕達がそんな甘えを持っている様に見えたのだろうか。

「ツ……そうか。そうだよな。先輩！ やっぱり何でも無いツス！ ミドガルズオルムはお任せします！」

イツセー君もそれに気付いたのか、ハツとした様子で先輩にそう言った。これでいい。僕達は僕達の手でロキを倒し、今日こそ甘えと完全に決別してみせる！

祐斗SIDE OUT

IN SIDE

(……気付いたらフェンリル達に懐かれていた件について)

いきなり三頭に増えたり、揃いも揃って噛みつき魔だったり、お互いに噛み合ってもものっせい血を流しまくったり、とにかく予想外だらけだったが、こっちの言葉を理解出来るほどに頭のいい子達だったので、少し強めの語気で注意したら驚くほど素直に言う事を聞いてくれるようになった。やはり問題はこの子達自身では無く、飼い主であるロキの躰が悪かっただけのようだ。

「おのれフューリー！ いったいどのような手でフェンリル達をたぶらかした！」

たぶらかしたって……人聞きの悪い。俺はただ噛みついて来るのを避けて、注意して、怪我を治してあげただけです。

「俺は大したことはしていない。フェンリル達が自らの間違いに気付いただけだ」

何でもかんでも噛みついていたら駄目だってな。むしろそっちにとってはいい事だと思うけど。

(間違い!? 貴様に牙を剥く事が間違いだったとでも言いたいのか

！)

「さあ、お前達。これからどうすればいいかわかるな？」

「ご主人様に、自分達が変わった所を見せてあげなさい。」

「アオオオオオオオオオオオオオオン!!!」

任せろと言わんばかりに力強く吠えた三頭が一斉にロキに向かって走りだす。……って待て待て待て！ 何でそんなに歯を剥き出しにしてんの!? 明らかに噛みつく気満々じゃないの！

「待て！」

慌てて止めると、三頭はピタリとその場に停止した。こんな風に他の言う事は聞いてくれるのに、やっぱり噛みつき癖だけは完全に直つて無いようだ。

「……(じく)……」

いや、そんな「噛ませてください！」みたいな目をされても……。あ、そうだ。ならさつきから視界に映りまくっているあのどつかい蛇みたいなドラゴンでいいんじゃない？ リアス曰く、生物ですらないみたいだし、アレなら全力で噛みついても問題は無いはずだし、ヘタレな俺も遠慮なく戦える。

「お前達。どうせ噛みつくのならばアレの方が大きくて噛みごたえがあると思うぞ」

フェンリル達がミドガルズオルムへと顔を向ける。その瞬間、人形であるはずのミドガルズオルム達が委縮したように見えたのは気のせいだろうか。

……さて、そろそろ俺も気持ち切り替えよう。自らの意思で戦うのはこれで二度目だ。任せろと言った以上、あの大群は絶対にリアス達には近づけさせない！

S I D E O U T

イツセーSIDE

鎧を纏った先輩がフェンリル達を従えてミドガルズオルムへ突撃していった。もうあっちについては勝敗は決まってるみたいなんだ。俺達は俺達の戦いに全力を注ごう！

「我には見向きもせずミドガルズオルムへ……。我が矮小なる者でも言いたいのか！ どこまでも……。どこまでも我を挑発してくれるなフューリーイイイイイイイ!!」

ブチ切れるロキ。あー……。まあ、確かにさっきのフェンリル達への言葉は「最早お前達が相手をする価値は無い」みたいな感じに聞こえたけど……。先輩も結構エグイ挑発するなあ。

「ロキ！ あなたの相手は私達よ！」

「調子に乗るな悪魔風情が！ もう手加減も慈悲も与えん！ 貴様等全員、罨り殺してくれるわ！」

ロキから濃密な殺気と共に魔力波が迸る。それに対し、俺達は密集形態をとり、魔力や魔剣、聖剣による防御結界で凌ぐ。

「へ！ 中々に強烈だぜい！」

「ですが、完全に怒りに吞まれてる所為か、隙だらけですね。プレッシャーや力は上昇していますが、アレでは先程の冷静な状態の方がずっと強敵でしたね」

確かに、今のロキは俺でもわかるくらい隙だらけだった。懐に飛び込みさえすれば、いくらでもぶん殴れそうだ。問題は、どうやって近づかだけど……。

「……。ねえ、一誠？」

「な、なに、ヴァーリちゃん？」

耳元で囁かれるってこんなにもゾクゾクするもんなんだな。って、何くだらねえこと考えてんだ俺は!?

「あなた……。ロキを仕留める自信がある？」

「じ、自信っーか、ぶん殴ってやるって気持ちはあるけど」

「もしもあなたにその『覚悟』があるのなら、私があなたに道を作つてあげる」

「え……。!？」

その言葉に思わず振り返った俺に、ヴァーリちゃんは言葉が続けた。

「私が戦いたかったのは、『強者』であるロキよ。あんなにも余裕を無くした『ただの』ロキには興味は無いわ。だから、一誠。あなたに

その気があるのなら、あなたの拳をあの男に届かせてあげる」

——どうする、相棒？

「わかった。やる。やらせてくれ」

なんだっていい。アイツを……ロキをぶっ飛ばせるなら！ オー
デインの爺ちゃんの思いを踏み躪ろうとしているアイツは絶対に許
してはおけない！

『ワシの執政が祖国とここの若い者達に迷惑をかけておる事は十分理
解しておる。じゃからこそ、ワシの手で若い連中の未来を広げる為
に、新しい道を用意してやりたいのじゃ』

『やりたいじゃねえ。アンタが本気でそう思っているんなら、何があ
ろうともやるんだよ。ウチの連中はこれまでそうして来たんだぜ』

偶然聞いてしまったアザゼル先生とオーデインの爺ちゃんの会話。
難しそうな話だったけど、爺ちゃんの声には深い愛や慈しみといった
感情が込められているのはわかった。それが爺ちゃんの言う「若い
連中」へ向けられているものだとも。

『主神であるアンタが自ら表舞台へ出て来た。それだけで俺はアンタ
を尊敬するぜ』

『ふん、おだてるでないわ。……無駄な争いなど必要無い。そんな事
をするくらいならば、ワシは女の子とキャツキャウフフしとる方がい
いわい』

『……そういう事にしといてやるよ』

爺ちゃんは爺ちゃんなりに、みんなの事を考えてここに来たんだ。
それを、話を聞くでも無く、ただ気に食わないなんてふざけた理由で
台無しになんかさせてたまるか！

「ふふ、即答してくれるなんて嬉しいわ。その代わりと言ってはなん
だけど、あなたにお願いがあるの」

「お願い？」

「ええ。ちょっと欲しい物が出来たから、この戦いが終わった後、一緒
に亮真に譲ってくれるようお願いしてくれないかしら」

「い、いいけど。その欲しい物って？」

「……神喰狼」

あ、神喰狼ね。ハイハイ……って、え!?

「交渉成立ね。なら約束通り、あなたに道を作ってあげる」

そう言って、ヴァーリちゃんは一人俺達から離れ、ロキへ接近した。

「白龍皇！　まずは貴様から死にたいようだな！」

「死ぬ？　……はっ。あなた程度に私が殺せると思っているの？」

「神である我を侮辱するのは許さん！」

「侮辱じゃないわ。あなたに私は殺せない……。それは純然たる事実よ。その証を今からあなたに見せてあげるわ」

ゾツとするほどの冷たい微笑みを浮かべ、ヴァーリちゃんが何やら唱え始める。同時に、背中の光翼が展開し、白銀のオーラが周囲に放たれ始めた。

「我、目覚めるは—— 覇の可能性を極めし真の白龍皇なり——」

—— 相棒、よく見ておけ。アレがお前が目指すものの正体だ。

ああ、わかる。わかるよドライグ。間違いない。ヴァーリちゃんが今から発動させようとしているのは……！

「覇に終わりは無く、その在り方は永遠に留まる事は無い——」

『我等の力に形は非ず！』

『我等の力に限界は非ず！』

いつしか、ヴァーリちゃんの声に合わせる様に、老若男女様々な声が聞こえて来た。誰に教えられるでもなく、俺はその声が歴代の白龍皇のものだと理解出来た。

「今、この場に現れし白龍の可能性を以って——」

ツ……！　来る！

「「「「「「汝を白き輝きの向こう側へ送り届けよう——
！」「」「」「」

『Juggernaut Drive!!!』

初めて耳にする機械音声が耳に届くと同時に、戦場全てを呑みこんでしまうほどの超大出力の光が俺達を包み込んだ。そして、そんな状況でも感じられる圧倒的という言葉すら生温い強大な力の波動。これが……このとんでもない力が『覇龍』……!!

徐々に視界が戻って行く。完全に目が見える様になった所で、俺は

すぐにヴァーリちゃん姿を確認して・・・固まった。

——銀色のティアラ。

——肘まで包み込む白い手袋。

——眩い耀きを放つ白銀のドレス。

最早『禁手』時の面影など欠片も無い。どこからどう見ても、正銘、完全無欠の「お姫様」の姿がそこにはあった。か、可愛い……！ けど、あれがヴァーリちゃんの『覇龍』の正体なのか？

「……なるほど。『今回』はこの格好というわけね」

「ヴァ、ヴァーリちゃん。その姿は……？」

「前に言ったかもしれないけど、歴代の白龍皇達は私が『覇龍』へ至るのを認めて欲しければと条件を出して来たわ。それがこれ……『覇龍』を使う度に、歴代の連中が望んだ格好にならないといけないという条件よ」

な、なんじゃそりやあああああああ……?!?!?!? それってつまりコスプレしろって事じゃねえか！ いくらなんでもそんなふざけた条件をつけるなんて……！

『ふおおおおお!!! お姫様ヴァーリちゃんカワエエ!!』

『プリンセスヴァーリ！ さあ！ 共に参りましょうぞ!!』

『プリプリヒップが見れないのは残念だが、似合ってるからよし!!』

おいこら先輩白龍皇共！ さっきまでの威厳とか迫力に溢れてた声は何処に行った！ ドライグウ！ まさかこっちの先輩達が俺を認めてくれないのって、あっちの変態先輩みたいな人達ばかりだからなのか!?

——ソ、ソナコトナイゾ。ウン、アツチニクラベレバスクナイハズダ。

カタコトで答え……ってやっぱいるんじゃないやねえかあああああああ!!!

「くっ、こんな恥ずかしい格好をさせられるなんて」

いや、一般的には『禁手』の方が恥ずかしいと思うんだけど……。あの子の中の恥ずかしさの基準はどうも一般人とはずれているみたいだな。

「・・・決めた。もう言いなりになるのはゴメンだわ。こうなったら力づくで認めさせてやる。帰ったら憶えてなさいよ先輩。ふ、ふふ、ふふふふ・・・」

あ・・・絶対殺る気だあの子。うん、まあ・・・ご愁傷様とだけ言っておこう。

「ふ、ふはははは！ これはこれは可愛らしいプリンセス！ どうやって我に証を見せてくれるのかな？」

ロキが皮肉を交えてそう言った刹那——ヴァーリちゃんの周囲の空間が文字通り「潰れた」。彼女は何もしていない。ただ、その体から発せられるオーラだけでそれを行ったのだ。

「ええ・・・見せてあげるわ。この屈辱と引き換えに私が手にした力を！」

「何を・・・ッ!?!」

ロキの姿がその場から消える。——正確には、消えた様に見えるほどの超スピードでヴァーリちゃんの元へすっ飛んで来た。そこへ、ヴァーリちゃんが拳を構え、ぶつかる直前にロキの腹へそれを叩き込んだ。

「ぐ・・・ぶ・・・」

口から血を吐き出しながら、ロキが殴り飛ばされる。かと思えば、再びヴァーリちゃんの元へ飛んで来る。いや、飛んで来るといふより・・・引き寄せられている？

「はい、いらっしやい。そして・・・さようなら」
「があっ!?!」

殴り飛ばされ、引き寄せられ、再び殴り飛ばされる。まるでゴムでもつけられているかのような動きを見せるロキ。ドライブ、アレもヴァーリちゃん力なのか？

——間違いないだろう。自分とロキの間の空間を「削り取り」、強引に距離をゼロにしているのだ。だからああして殴り飛ばしても、次の瞬間には互いの距離がゼロになる。引き寄せられている様に見えるのは、離れていた者同士が一瞬でゼロ距離で向き合うという「結果」を世界が無理矢理「過程」づけているだけに過ぎん。

そ、それってヴァーリちゃんの力が世界を越えてるって事だよな？
・・・凄いとかがそういう次元の話じゃねえな。

「ふむ、どうやらかなりご立腹の様ですねヴァーリは。あなたにとっては懐かしい光景じゃないですか美猴？」

「・・・止めてくれい。あの時の事は思い出したくねえんだよう・・・」

美猴、お前もか・・・。

「んな事より赤龍帝。ボケーつと見てていいのかい？ このままじゃヴァーリがロキをブツ倒しちゃうぜい？」

「あ、ああ、そうだな・・・！」

あれだけカッコつけておいて出番無しとかギャグでも酷い。俺は慌ててブースターを噴かせてヴァーリちゃんの元へ飛んで行った。

「ヴァーリちゃん！」

「あら、来たのね一誠？ このヨーヨー面白いわよ。あなたも遊んでみる？」

「い、いや、俺には空間を削るなんて芸当出来ませんから」

この余裕・・・。ヴァーリちゃんの言う通りだったな。この子の力は完全にロキを上回っている。この戦場において、神崎先輩の次に強いのは間違い無くヴァーリちゃんだ。

「そう。なら予定通り、止めはあなたに任せるから、頑張つてね。そろそろタイムオーバーなの」

ヴァーリちゃんの姿がお姫様から『禁手』状態へ戻ってしまった。

そんな彼女と入れ換わるように、俺はロキと対峙した。

「ロキ！ 今度は俺が相手だ！」

「・・・」

？ なんだ？ なんかブツブツ眩き始めたぞ。

「ありえん。我はロキだ。神だ。その我がこうまで追い込まれるなどあり得ん。あり得ん。アリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエンアリエン・・・」

こ、コイツ・・・。目が普通じゃ無くなってやがる・・・。

「あら、あの程度で壊れるなんて情けない神様ね」

「アリエン！　アリエン！　我はロキだぞ！　貴様等などに、貴様等などに負けるはずがないのだああああああああ!!」

絶叫しながら滅茶苦茶に魔力弾をぶっ放し始めるロキ。やべえ、見境無しかよ！

——相棒！　今がチャンスだ！　ミヨルニルを使え！

そ、そうか！　すっかり忘れてたぜ！　よっしゃあ！　いくぜミヨルニル！

俺は腰につけていたミヨルニルを持ち、それに魔力を注ぎ始める。途端に巨大化していくミヨルニル。重さも凄い勢いで増していくが、俺は魔力を送るのを止めなかった。

ぐ、が、ああああああああ!!」

お、重い・・・！　でもまだ耐えろ！

振り上げたまま尚も魔力を注ぎ続ける。後の事は考えない。俺の全てを込めた一撃を叩きつける！

「ミヨルニルだど!?　それもオーディンが用意したのか！　忌まわしい雷槌め！　この場で処分してくれる！」

とんでもない数の魔力弾が迫って来る。ま、マズイ！　今食らったら・・・!!

「やらせないよ！」

「ッ、木場！」

木場がその身を挺して俺を魔力弾から守ってくれた。木場だけじゃない、部長やゼノヴィア、さらにはタンニーンのおっさんや美猴達までもが俺を守るように周りを囲んでいた。

「イツセー！　私達の事は気にしないで！　あなたはあなたのやるべき事をやりなさい！」

「準備が整うまで、お前の事は私達が絶対に守ってみせる！」

み、みんな・・・！　ありがとう！　もう少し、もう少しだけ耐えてくれ！

「はーっはっはあ！　自ら矢面に立つとは。どうやら全員死ぬ覚悟が出来た様だなあ！」

「ぎげんな！　俺達は誰一人そんな覚悟してねえ！」

「なにっ!？」

「死ぬ覚悟とか、命を捨てる覚悟とか、そんな後ろ向きな覚悟は俺達には必要ねえんだよ! 大切なものを守る為に、何があっても生き残る・・・それが本物の『覚悟』って言うんだよおおおおおお!!」
「ほざけええええええ!!」

魔力弾の勢いがさらに激しさを増していく。まだか、まだ終わらねえのか・・・!

——相棒! ミヨルニルの準備が完了したぞ!

待つてたぜ・・・この瞬間を!

顔を上げれば、ミヨルニルはタンニーンのおっさんやミドガルズオールの全長すら余裕で越えた大きさにまでなっていた。後はこれをロキに叩きつけるだけ——。

——どうした、相棒?

・・・駄目だ! 腕が・・・腕が動かない!

——何!? くそ、ミヨルニルの重さに相棒の体が耐えられなかったのか!

動け! 動けよ! 一ミリでもいい! ほんの少し傾ければ後は重さで勝手に落ちるだけなんだ! みんなが俺を信じてくれたんだ!

この一撃だけは絶対に失敗出来ねえんだ! だから・・・だから・・・!

——最後の最後に情けないガキだ。『生き残りたい』んだろ? ならさっさと終わらせてしまえ。その為の力をくれてやる。

ドライブじゃない別の声。それが聞こえたと思った次の瞬間・・・俺の腕を覆う籠手その大きさを二倍、三倍、それどころか五倍、六倍を越える物へと変化した。同時に、支えるだけで精一杯だったはずのミヨルニルがまるで羽の様に軽くなった。

よくわかんねえけど、考えるのは後だ! いくぜロキイ! こいつの神の雷で・・・!

「光にいいいいいい・・・なあああええええええええええええ!!!!」

俺の力の全てと、仲間達の想いの全てを込めた光の槌による超ド級の一撃を・・・ロキは呆然とした表情でその身に受けるのだった。雷

が・・・爆音が・・・振動が何もかもを呑みこんでいった。

(へ、へへ、これだけのモンを叩き込めばロキだって・・・)

魔力を全て失った所為か、意識がどんどん遠くなっていく。そして、俺はそのまま意識を失うのだった。

・・・
・・・
・・・

「ん・・・」

「あ、イツセー先輩が目を覚ましたよお！」

ギヤスパー・・・？ あれ、俺何で寝てたんだっけ？

「・・・ッ！ そうだ！ ロキは！ ロキはどうなった!？」

慌てて起き上がると、勢ぞろいしていたみんながホツとした様に溜息を吐いた。神崎先輩とフェンリル達もいる。

「安心して。イツセー。あの一撃で、ロキは戦闘不能になったわ。既にロスヴァイセによって幾重にも封印をかけてあるから暴れる心配も無いわ」

「な、なら・・・!」

「ええ・・・私達の勝ちよ!」

部長の勝利宣言を聞き、ようやく俺は戦いの終結を実感する事が出来たのだった。

第一百話 家族が増えたよやったね騎士（笑）！

気合いを入れて蛇龍の大群へ突撃をかましたわけだが、正直言って俺の出番は全くと云っていいほど無かった。というのも、俺が相手をしようとする度に、横からフェンリル達がガブリと行つちやつて倒してしまうのだ。なんとなくだけど、俺を守ってくれている様にも思えた。

やっぱいい子達だ。けど、これで諸悪の根源はロキだという事がハッキリした。口ぶりからして、フェンリル達の噛みつき癖はロキが意図的につけさせたみたいだったし、言う事を聞かないだけで裏切り者呼ばわりとかもう見てて痛かった。ペットは意思のあるパートナーであつて、決して所有物ではないのだ。

そんな事を考えつつ、三頭のガブガブタイムを後ろから眺めていると、突然もの凄い光が俺の視界を奪った。それが何なのか確認すると、向こうの方でヴァーリさんがお姫様になっていた。．．．普通に可愛かった。無理にセクシーな方向に進まなくても、ああいう方が俺は好きだ。まあ、俺の好みがどうだろうと彼女には関係無いし、そもそも露出強だしな。

でも、お姫様の格好でロキをボコボコにしている姿は中々にシユールだった。DMなはずの彼女が、遠目でも楽しそうだったのが印象的だった。

しかしまあ．．．本当に驚かされたのはこの後だったんだよな。

「光にいいいいいい．．．なあああえええええええええええええええええ!!!」

兵藤君、まさかの勇者王化！ おかしい。俺はミリキヤス君にしかなスパロボの話はしてないのに、何で兵藤君がああの特ニデモ技を．．．!?

呆然とする俺が見つめる中、兵藤君は「喰らうと光になるハンマー」をロキに向かって振り下ろした。ヴァーリさんの時以上の光や爆音の奔流に耐え、次に俺が目を開けた時には全てが終わっていた。

こうして、ロキとの戦いは決着したのだった。あ、ミドガルズオルムはスタッフ（フェンリル）達が残さず頂きました。．．．あの巨体

を飲み込むとかホラーってレベルじゃ無かった。

にしても、こうしてミドガルズオルムの姿を自分の目で見て改めて思ったが・・・ジエニオン・ガイのあの技はミドガルズオルム要素が本当に皆無だな。スタイリツシユ指パッチンも含めて、後編ではその辺りはどうなったんだろう・・・思い出したらやりたくなってきたわ。

そして、あの一撃で力を使い果たして気絶した兵藤君が目を覚まし、リアスが勝利宣言をした後、俺達がやる事になったのは戦場の修復だった。改めて見ると、地面とか穴ぼこだらけだ。これを全部直すとか中々に大変そうだな。・・・木場君に頼んで守護者の剣（農耕用）でも創ってもらおうか。

「がうがうー！」

と思ったら、ここでもフェンリル達が頑張ってくれた。誰に言われるでも無く、穴に土を盛って大きな足で踏み踏みして平らに直してくれた。その動きが妙に和むんで思わず作業の手を止めて見ていたら、黒歌に「浮気者くー！」と罵られたが、ともかく作業がかなり捗りそうだった。

「そういや、この三頭はどうなるんだろう。ロスヴァイセさん曰く、ロキはこれからしかるべき場所へ運ばれるらしいから離れ離れになるけど、その間誰が面倒みるんだ？ やっぱオーディンさんだろうか。」

「ふふ、神喰狼にあんな事させるなんてあなたぐらいのものね」

そんな心配をしていると、ヴァーリさんに声をかけられた。すでに露出強モードではなく、普段着に戻っている。

「いや、俺は別に何も言っただけ。彼等が自主的にやってくれていいんだ」

「そうすればあなたが喜んでくれるからよ。あの目を見れば、あの三頭があなたに懐くどころか心酔しているのがハッキリわかるわ。本当にどうやって手懐けたのかしら」

本当に懐いてくれたのなら、むしろ俺がその理由を聞きたいです。「でも、終わってみると本当にアツサリだったわね。あなたがフェン

リル達やミドガルズオルム達を相手にしてくれたというものあるけれど、まさかロキがあの程度だったなんて・・・ガツカリもいいところだわ」

「・・・あの一方的なシーンを見ていた者としては、ロキがどうこうよりキミが強すぎるからだと思うのだが」

「あら、見てたの?・・・って、ちよつと待って。という事は、私の『覇龍』も・・・?」

俺が頷くと、ヴァーリさんは何とも言えない表情を浮かべた。・・・まさかとは思うが、露出強だから肌の面積が少なくなる様な格好になるのが嫌・・・とかいうわけじゃないよな?

「はあ・・・一誠の『覇龍』の参考になればと思ったけれど、やっぱり使わない方がよかったわね。よりにもよってあの場面であの格好にさせられるなんて・・・」

「どうしてそこまで不満なのかはわからないが、よく似合ってたと思うぞ」

「え・・・?」

「むしろ、俺はああいふ姿の方が好きだな。遠くからしか見れなかったけど、本当にお姫様かと思ったよ」

「見てるこつちが恥ずかしくなる様な露出強姿よりも、あつちの方がずっといいと思うんだ。」

「やれやれ、何で俺つちまでこんなめんどくさい事をぶっ!」

——— 本当に一瞬の出来事だった。修復作業の為に近くを通りがかった美猴さんの腹に、ヴァーリさんがワンピースをかました。

「うぐおおおおおお・・・! い、いきなり何してくれてんだヴァーリイ・・・!」

「ごめんなさい。自分でもわからないけど、胸の中に渦巻いている変な感覚を追い出そうとしてつい・・・」

「理不尽過ぎ・・・んあ? なんか少し頬が赤えぞぼっ!」

二回目の理不尽ナツクルを受け、美猴さんがその場に倒れ伏した。

「どうも戦闘の熱が治まって無いみたいね。ちよつと向こうでクールダウンして来るわ」

「あ、ああ・・・」

何故この場面で突然グレイファイアさんみたいになってしまったのかは知らないが、余計な発言をして次の標的になりたくなかったので、俺は去って行くヴァーリさんを見送るのだった。

・・・

それから何時間が経っただろう。ようやく修復作業が完了した所で、俺達はオーデインさんが会談していたホテルへ戻って来ていた。「ふむ、やっと戻って来おったか」

すっかりヘトヘトになった俺達を、オーデインさん、アザゼル先生、そして支取さん達が迎えてくれた。続いて、アザゼル先生の指示でロキがどこかへ連れて行かれた。おそらく、俺が彼の姿を見る事はもう無いだろう。

「ご苦労だったな。お前達のおかげで、こっちも無事に終了したぞ」

「それはよかったですけど、アザゼル先生」

「何だ？」

「どうしてこっちじゃなくてあさつての方向を向きながらしゃべるんですか？」

（・・・視界に“そいつ等”を入れたくねえんだよ。なに普通に連れて帰って来てんだお前は・・・）

「「ぐるぐる」」

「ほっほっほ。驚いたのお。まさかフェンリル親子を手懐けてしまうとは」

俺達の後ろに並ぶフェンリル達を見て、オーデインさんが腹を抱えて笑った。

「どうじゃ騎士殿。お主さえよければ、その三頭の面倒、お主が見てくれんか？」

「え？」

まさかの提案に俺は目を丸くする。そこへロスヴァイセさんが慌てた様子で異議を唱える。

「お、お待ちくださいオーデイン様！ 神喰狼を一個人に託す等……！」

「じゃがのお、ロスヴァイセ。正直、ワシですら余裕でぶっ殺されてしまう様な存在は扱いに困ってしょうがないのじゃ。しかし、この青年ならば問題は無い。なにせ、神殺しの牙を砕いてしまうのじゃからな」

「ですが……」

「ええい、ワシが決めたのじゃから文句を言うでない。さあ、答えを聞かせてくれんか騎士殿。この三頭ならばちようどいい番犬になると思うぞい」

「でも、この大きさだと色々マズインじゃねえの？」

兵藤君の言う通りだ。流石にこのサイズじゃ誤魔化しきれない。

「それなら問題無いわい。グレイプニルは使っておらんのじゃろ？」

「え、ええ。必要無かったから」

「ほいほい。ならばこうしてしまえば……」

オーデインさんが何かを詠唱すると同時に、フェンリル達の足下に魔法陣が出現し、そこから伸びて来た鎖がフェンリル達の首に巻きついていった。

直後、フェンリル達の体を光が包み込む。その光の中で、フェンリル達のシルエットが少しずつ小さくなっていくのが確認出来た。

俺達が見守る中、光が徐々に治まっていき、それが完全に消えた時、あれほどの巨体だったフェンリル達の姿が豹変していた。フェンリルは凛々しい成犬サイズ、そしてスコルとハティは可愛らしい子犬サイズにまで小さくなっていった。

「グレイプニルでリミッターをかけた。大きさもこの通りじゃ。これで文句あるまい？」

た、確かにこれなら問題無いと思うけど……どうしようみんな？

「決定権はあなたにあるわ。だから私は何も言わない」

「わ、私もリョーマさんにお任せします」

「……正直、不満しかないけど、ご主人様が私もしっかり可愛がつてくれんなら我慢するにゃ」

「私は問題ありません。．．．べ、別に姉様みたいに可愛がって欲しいとか思ってませんからね」

つまり、結局俺次第というわけか．．．。なら、後は彼等自身に聞いてみるか。

「俺の所に来るか？」

「「わん！」」

尻尾を大きく振りながら俺を囲むフェンリル達。．．．それを見て俺も心を決めた。

「．．．オーデインさん。この三頭、俺に預けてもらってもいいですか？」

「決まりじゃないな。精々可愛がってやってくれ」

こうして、俺の家に新たな家族が増える事となった。帰ったら色々準備しないとな。

(．．．とてもじゃないけど、譲ってくれなんて言える空気じゃないわね。残念だけど、今回は諦めましょう)

「ヴァーリさん？」

「何でも無いわ。ねえ、ちよつと撫でさせてもらっていいかしら」

「ああ、どうぞ」

俺はスコルを抱き上げてヴァーリさんに近付けた。

「ふふ、可愛——」

「がうっ！」

ヴァーリさんが撫でようと手を近付けた途端、スコルはヴァーリさんの手を「ぽつくん」した。

「ふ、ふふ．．．。リミッターをかけてこの痛み．．．。流石神喰狼ね」

納得した表情でそんな事言ってる場合じゃないよ！ 思いつきり血が出てるじゃん！ 決めた！ 俺の家で住む間に、この癖、絶対に直してみせるぞ！

アーシアに手当てされるヴァーリさんと、俺の手をペろペろ舐めているスコル、自分も抱っこしろとばかりにズボンを引っ張って来るハティをそれぞれ見つめながら、俺はそう決心するのだった．．．。

第一百一話 どうやら騎士（笑）だけでなく家主（笑）にもなってしまったようです

「さてと・・・そろそろ私達はお姫様の所へ帰りましょうか」

「だな」

「わかりました」

そろそろ解散しようという流れになり、ヴァーリさん、美猴さん、アーサーさんが最初に動いた。それをアザゼル先生が引き止める。

「おうこらテロリスト共。なに普通に帰ろうとしてやがる」

「ふうん、協力者に対してずいぶん言い方ね。今回来たのは私達の思惑があったからであって、『禍の団』は関係無いって伝えたはずだけど？」

「ふん、いきなり首突っ込んで来やがった癖によく言うぜ。・・・まあいい。結局、俺の警告をしつかり守ったみたいだしな。今回だけは特別に見逃してやる」

「流石ね、アザゼル。適当な所や強引な所が目立つけど、そうやって何だかんだで約束はきっちり果たす所だけは好きよ」

「„だけ” ってお前・・・褒めてんのか貶してんのかどっちだよ・・・」
「もちろん褒めてるのよ」

「・・・そうかい」

懽然としつつちょっと嬉しそうなアザゼル先生。・・・やっぱり、アザゼル先生Ⅱ父親。ヴァーリさんⅡ娘の式は成立するんじゃないだろうか。

「ヴァーリちゃん。色々ありがとな」

「一誠、最後のあの一撃は見事だったわ。あなたの『覇龍』・・・楽しみにしてるから」

「うん。いつになるかわからないけど、俺も絶対にキミと同じ場所に辿りついてみせるから。・・・あ、それと、結局先輩にお願い出来て無いけどいいの?」

「ええ。亮真はともかく、あの様子じゃフェンリル達自身が納得して

くれそうにないから」

「そ、そっか。だからさつき『ぱっくん』されたわけだな。手は大丈夫なの?」

「問題無いわ。あの子の神器のおかげで傷一つ残って無いから」

「おやおや、何だか仲良さそうな雰囲気じゃないですか。俺の知らない間に何があったんですかね。」

「つと、そうだ。先輩! ちよつと来てください!」

「何だ何だ? いきなりのご指名に戸惑いつつ兵藤君とヴァーリさんの所へ向かう。」

「どうしたんだ兵藤君?」

「なんかヴァーリちゃんから話があるみたいですよ」

「え? ちよつと一誠? 私は別に・・・」

「何でもいいから話しときなつて。次にいつ会えるかわかんないんだし。ライバルも多いんだから」

「ライバル? あなた何の話を・・・」

「恋路を応援するのも『友達』の務めつてね」

「なっ・・・!?!」

「へへ。という事で、お邪魔虫は退散させていただきます」

去り際に兵藤君が耳打ちすると、ヴァーリさんが酷く驚いた表情を見せた。普段あまり感情を荒立たせない彼女だけに、珍しい光景だった。一体何を耳打ちしたかもの凄く気になる。

(友達つてそんな事までするの? というか、恋路つて何よ。まさか、周りからは私が亮真に恋愛感情を持っている様に見えるのかしら。それこそありえないのに。私にとって彼は目指すべき目標であり、いつか倒すべき相手であり・・・私の初めての友達で、出会う度に『禍の団』を抜ける様促して来るお節介さんで、実は嗜虐心に溢れてて私と相性が抜群だったり、私の『覇龍』を侮る事も笑う事も無く普通に受け入れてくれたり、話しているとたまに私の心に変なモヤモヤを生じさせる人つてだけで、それ以上でも以下でも無いのに)

「ヴァーリさん。話つて?」

難しい顔で思案中のヴァーリさんへ声をかけると、彼女は一瞬だけ

体をビクツとさせて俺の顔を見つめて来た。

「えつと・・・あれよ。フェンリル達をどうするか気になったの」

「どうもこうも、責任を持って飼うつもりだよ。オーディンさん曰く、番犬にはちょうどいいらしいが」

「ふふ、神喰狼が番犬だなんて、あなたは家を要塞にする気かしら」

そう言つて笑うヴァーリさんだが、どうも笑顔がぎこちない。今のフェンリルについての話題も、本当に聞きたかった事なのか疑問に思えた。

「・・・亮真。あなたは今も私が『禍の団』にいる事に反対なの？」

「ああ」

いきなりの話の転換に面食らいつつしつかり答える。今までもそうだったが、最近立て続けに連中のさらなる腐れっぷりが判明してしまつたのでその考えだけはしつかり示しておかないといけない。

「・・・そう。でも私はまだ『禍の団』を抜けるわけにはいかないの。

あの子を・・・オーフィスを一人にしておくわけにはいかないから」
「なら二人で抜ければいいじゃないか」

「・・・え？」

「簡単な事だ。キミと一緒にあの子も抜ければいいんだよ。連中があの子を利用するだけ利用して、あの子の望みを叶えてあげていない事はあの子自身から聞いたからな」

「それは出来ないわ。それに、仮に一緒に抜けたとして、『無限の龍神』なんて存在を受け入れてくれる所なんて・・・」

「その時は俺の家に来ればいい。既に同居人が四人もいるんだ。これから女の子二人増えた所で問題にはならない」

言うだけ言つて後は知らん・・・なんて無責任な真似をするつもりは無い。それに、こつちに住めばオーフィスちゃんだつてきつと友達を作れるはずだ。

「あはははー！」

いきなりヴァーリさんが腹を抱えて笑い始めた。よつぽどおかしいのか、目に涙まで浮かべている。

「ヴァ、ヴァーリさん？ 何がそんなに面白いんだ？」

「何がですって？　これが笑わずにいられるものですか。オーフィスを・・・あの『無限の龍神』をただの女の子扱いする人なんて、世界中探してもあなただけよ亮真。あなたって、どこか他の人とずれてる気がするわ」

ちよつと待てい！　露出強のキミが言ったってブーメランにしかならんぞ！

「でも、あなたの気持ちは素直に嬉しいわ。これからどうなるかはわからないけど、その時はよろしくね」

おお、これはひよつとして、ヴァーリさんも抜ける方向で気持ちが固まったのだろうか。よくやったぞ俺。諦めずに訴え続けてよかった。

「・・・それじゃあ、そろそろ行くわね。また会いましょう、亮真」

ヴァーリさん達は俺達の見守る中、魔法陣の向こうへと消えていった。そうして、彼女達を見送った後、俺達もそれぞれの家に帰るのだった。

「もしもし。私よ。・・・ええ。またあなた達の力を借りなければならなくなりそうだわ」

帰宅してすぐ、リアスがどこかへ連絡を入れていた。それがちよつとだけ気になったが、疲労と眠気のダブルパンチで限界だった俺は、フエンリル達を連れて自室へ戻った。とりあえず、今日はみんなここで寝てもらおう事にしよう。

・・・

その翌日、オーデインさんが北欧へ帰るといふ事で、みんなで見送りする事になった。本人はもう少しゆっくりしたいみたいだったけど、これから忙しくなるから仕方ないとの事だった。

それはいいのだが、オーデインさんは最後にとんでもない置き土産を置いていった。

「という事で、オーデイン様の命により、本日より駒王学園の教師として働かせて頂く事になりましたのでよろしくお願いします」

そう言つてペこりと頭を下げるのは、オーデインさんの付き人だつたはずのロスヴァイセさん。

「戦乙女である私がオーデイン様の下から離れるのは非常に、非常に心苦しい事ではありませんが、オーデイン様ご自身に命令されては仕方がありませんので、学園生活を通じてフューリー殿を監視するという役目をしつかり果たさせて頂きたいと思ひます」

非常にとか仕方無いとかやけに強調するロスヴァイセさん。だけど、そんな言葉とは裏腹に、顔は嬉しそつだつた。

（へつ、あのジジイにしては随分な氣の遣い様じゃねえか。弄るだけじゃなくて、ジジイなりにちゃんと考えてやつてんだな）

「何ですかアザゼル先生？ そんな微笑ましい物を見る様な目を私に向けて」

「いいや、何でもねえよ。ま、精々頑張るこつた」

「ええ。お役目はキツチリ果たしますよ」

（やれやれ、素直じゃねえ所は主譲りつてか？）

というわけで、ロスヴァイセさん改めロスヴァイセ先生が新たに加わり、また俺の日常が賑やかになりそうだつた。その後、ついでとばかりにフェンリル達の周りの物を買う為にペットショップに寄つて色々買う事にした。ちなみに、食べ物に関してはロスヴァイセ先生から基本的には何でも食べると教えてもらった。

.....

さらに次の日。今度はバラキエルさんがこの街を去る事になつた。護衛対象だつたオーデインさんが既にいないので当然と言えば当然なのだが。

またしばらく離れ離れになるであろう親子の時間を邪魔しないようにと、今回は見送りを止めておこうという流れになつたのだが、そんな俺達の家に、両手一杯に荷物を持った朱乃とバラキエルさんが訪ねて来た。

「おはよう、リョーマ」

「あ、ああ、おはよう。どうしたんだ、バラキエルさんまで一緒に。それに、その荷物は？」

「これは私の私物よ。今日から私もこの家でお世話になるわ」

「・・・え？」

「ちなみにリアス達にも了承を得ているわ」

「ちよつ！ 待って待って待って！ 初耳！ 俺は初耳ですから！

え、一応家主は俺なんですけど、その俺だけはぶられるってどういう事ですか!？」

「フューリー殿。貴殿・・・いや、無礼を承知であえてキミと呼ばせてもらう。朱乃を託せられるのはキミしかない。私のいない間、朱乃を守ってやってくれ」

バラキエルさん、あなたもか！ あなたは立場的に反対せにや駄目でしょうが！ 大事な娘を野郎の家に住ませるとか何か間違いがあつたらどうするんですか！ いや、別に間違いを起こす気は無いですけどね！

「来たわね朱乃。部屋に案内するからついていらつしやい」

「わかったわ」

階段の方から顔を覗かせるリアス達に返事をして、朱乃が呆然とする俺の横を通り過ぎて行こうとしたその時・・・俺の頬に柔らかい何かが触れた。

「うふふ、これから今までの遅れを取り戻してみせるわ。覚悟していてねリョーマ」

最後に可愛らしくウィンクして、朱乃は階段を駆け上って行った。俺はというと、そんな彼女の背を見送りながら、何かが触れた方の頬をそつと擦った。

「バラキエルさん。とりあえず、朱乃の荷物を置いたらリビングの方へ・・・」

そう言つてバラキエルさんの方へ顔を向けると・・・そこにはおつそろしい表情で俺を見つめるバラキエルさんが立っていた。

「ハ、ハハ、ソウダナ。ドウモキミニハイツテオカナイトイケナイコトガタクサンアルヨウダ」

ヤバ過ぎるプレッシャーを放ちながら、バラキエルさんも朱乃の後を追って階段を上っていった。

「ぐるぐる・・・！」

フェンリル、あの人は敵じゃないんだから威嚇するのは止めなさい。

低い唸り声を上げるフェンリルの頭を撫でつつ、俺はひとまず全員の分のお茶を用意する為にリビングへと向かうのだった。

第八章 修学旅行はパンデモニウム 第百二話 今日のわんこ

ロキとの戦いから既に数日が経った。目前に迫る修学旅行へ向けて色めき立つ二年生の子達とは対象に、三年生と一年生は特に変わる事の無い生活を送っている。

あ、でも厳密に言えば俺の周りは変化があったな。家に新しい同居人とペットが増えたのだ。まだ一緒に暮らす様になって日は浅いが、朱乃もフェンリル達もすっかりここでの暮らしに慣れた様だった。・・・というか朱乃は慣れ過ぎだ。長い事一人暮らしだったというはあるだろうが、風呂上がりシャツ一枚でうろついたりとかしないでください。リアスや黒歌に関してはもう諦めてるが、俺の精神を過信しないで欲しいです。

ここまで無防備だとまるで意識されてない様で地味にへこむ。いやまあね、意識してもらいたいなんて身の程知らずな事をほざくつもりは無いが、お互いの為にも、もう一枚だけでいいので何か羽織って欲しいと思うのは決してワガママでは無いはずだ。

だがしかし、そんな風に神経をすり減らしている俺を癒してくれる存在を忘れてはならない。その名はスコル！そしてハティ！俺がソファに座ろうものなら小走りで駆け寄って来て、そのまま俺の膝へジャンプ。全身を使って甘えて来る二頭を前に、俺の心はたちどころにへブン状態！

もちろん、フェンリルだって忘れて無い。頭だけソファに乗せてジツと俺を見て来るので、思う存分撫でまくってあげるのだ。テレビを見る時はもうこのスタイルが定着しつつあった。

ちなみに、三頭とも室内で飼っている。リアスからは問題無いと言われたが、やつぱりスコルとハティは小さいし、フェンリルだけ外に出すのも可哀そうなのでこんな感じになった。

・・・余談だが、このスタイルの時、かなりの確率で猫モードの黒歌が乱入してきて、俺の膝の上でちよつとしたバトルを繰り広げ

る。・・・この時の猫パンチと犬パンチの応酬がまた可愛くてしょうがない。いやあ、動物って本当に素晴らしいですね！

さて、思い返すのはこれくらいにして、そろそろ出かけるかな。今日は日曜日。そして、今から俺とスコルの楽しい散歩タイムが始まるのだ。

「それじゃあ、行って来ます」

「ギョー！」

玄関を開けると同時にスコルが外へ飛び出す。それに遅れまいと俺も駆け足で続いた。三頭の性格については何となく理解出来ているのだが、このスコルはとにかく元気が良すぎる。加えて好奇心も強い。見る物全てに興味があるのか、あっちへ行ったりこっちへ行ったり、とにかくリードを握っているだけでも大変だ。

でも、こんな姿を見ていると、ロキの所にいた頃は、こういう風に散歩もロクにさせてくれなかったのだらうかと思ってしまう。なので、周りの迷惑にならない程度や、危なくない程度には好きにさせてあげている。

ついでに他の二頭に関して言うと、ハティはスコルとは逆にうちよろせずのんびり散歩するのが好きで、ベンチ等で休憩するとそのまま俺の膝の上で眠ってしまい、帰りは抱いて帰るのが基本だった。それでもつてフェンリルはというと、何故か俺の後ろを一定の距離を保ちながら着いて来る。「まるで従者ね」とリアスは冗談めかして言っていたが、これではどちらが散歩に連れ出されているのかわからない。

あと、フェンリルは非常にモテる。たまにすれ違う散歩中の別の犬が雌だった場合。ほぼ確実に擦り寄って来られる。そのモテ力を持ちよつと分けてくれればいいのに。

・・・余計な事を漏らしてしまった。とにかく、三頭の中でスコルの散歩が一番激しくて疲れる。ここは前回と同じ様に公園でボール遊びでもして勘弁してもらおう。

・・・

・・・
というわけで、公園に到着したのだが・・・。

「あ、こんにちは神崎君」

入口で遭遇したのは山田先生だった。・・・なんだか随分懐かしい感じがする。学園でよく顔を合わせてるはずなのに。

「こんにちは山田先生。どこかへお出かけですか？」

「ええ。今度の修学旅行で必要な物の買い出しに」

そういえば、俺達が進級する時に山田先生は俺達の担任から外れてまた二年生の担任になったんだっけ。なんか元々の担任が病気か何かで長期療養が必要だからなんとか・・・あんまり憶えて無いけど。神崎君はどうして・・・ってあら？」

山田先生がスコルに気付く。瞬間、先生の顔がふにやつと蕩けた。

「わああ！ か、可愛い！ ど、どうしたんですかこのワンちゃん!？」

「事情があつてウチで世話する事になったんです」

「名前はなんて言うんですか？」

「スコルです」

「初めまして、スコルちゃん。私は山田真耶です。よろしくね」

山田先生がしゃがみ込んでスコルへ声をかける。・・・それはいいのだが。山田先生、ご自分がスカートをはいているって忘れちゃってませんかね。・・・今日一日は水色の物は視界に入れない様にしよう。ぐるぐる・・・」

で、案の定というか、思いっきり警戒しているスコル。噛みつき禁止令を出しているので山田先生をぱつくんする事は無いだろうが、注意しておかないと。

「大丈夫。大丈夫だよ。私はあなたを傷付けるつもりは無いよ。あなたと仲良くしたいだけなの。ね？ だから安心して」

そんなスコルに対し、優しく、ひたすら優しく微笑みながら語りかける山田先生。するとどうだろう。スコルの唸り声が徐々に小さくなって来たではないか。さらに、スコルの方から少しずつ近づき始めた。そして、互いの距離がゼロになった時、スコルは山田先生が差し出した手をぺろぺろ舐め始めた。

「ありがとう。優しい子ね、あなたは」

驚きはそれだけでは無かった。山田先生が喉を撫でると、スコルは甘える様な声を出してその場にコロんと仰向けになった。耳や尻尾も垂れて完全にリラックスマードに入っていた。

「・・・お見それしました、山田先生」

スコルを抱いて立ち上がった山田先生に、俺は称賛の拍手を送った。いや、マジで凄い。出会って五分もかけずに動物が心を開くとかどこの動物王国園長ですか。

「えへへ、昔から動物には好かれる体質みたいなんです。その所為で大変な目にも遭った事がありますけど、こういう役得もあるんですね」

我が子を可愛がるように、抱いたスコルを撫でる山田先生。スコルも母親に甘えるかのように先生の胸に前足で触れる。

「ふあっ!？」

次の瞬間、ひどく艶のある声と共に山田先生の体が震えた。な、なんだ？ 今の温かなシーンから急展開過ぎやしないか。

「だ、駄目。スコルちゃん。そこは触らないでえ・・・!」

そこってどこ!? すぐに確認すると、スコルは山田先生の胸が気に入ったのか、前足でプニプニ押ししていた。そして、その押している部分というのが、胸の頂点。つまりスコルが今プニプニしている場所は・・・!

「ス、スコル! 離れろ!」

俺はすぐさまスコルを山田先生から引き離れた。尚も先生に向かって足を伸ばすスコルをガツチリ確保したまま、俺は先生へ声をかけた。

「だ、大丈夫ですか、山田先生?」

「ん・・・はあ・・・だ、大丈夫です」

僅かに頬を上気させながら答える山田先生。・・・もしもこの場に学園の山田先生ファンの連中がいたら発狂していただろうな。

「あ、あはは、スコルちゃんはいたずらっ子なんですね」

「すみません。ご迷惑を・・・」

「ううん、そんな事無いです。それじゃあ、私はそろそろ行きますね。スコルちゃん、今度また遊びましようね」

「く〜ん」

最後にスコルの頭を一撫でし、山田先生は去って行った。その後ろ姿を、スコルはいつまでも見つめ続けていたのだった。

.....

.....

.....

「・・・という事があつたんだ」

夜、俺は公園での出来事をみんなに話した。

「不思議ね。どうして山田先生にそんなに懐いたのかしら」

「がうがう」

『あのおねーさんに撫でられるとぽかぽかするのだ』・・・だつてさ」

スコルの声に続いて黒歌がそんな事を口にした。つて、ちよつと待て。まさか黒歌・・・。

「く、黒歌さん、スコルちゃんという言葉がわかるんですか!？」

「仙術を応用すれば簡単にや」

仙術の力つてすげー!

「ぽかぽか? 暖かくなるという事かしら」

「なるほど、何となくわかる気がするにや。ご主人様のナデナデは気持ちいいけど、真耶のナデナデは何か安心するんだよね。イメージとしては・・・母親っていう言葉がピッタリな気がするにや」

「何で山田先生を名前で・・・そういえば、以前先生の家でお世話になった事があるんでしたっけ」

「母親・・・か」

「部長?」

「ロスヴァイセから聞いたけど、スコル達の母親は二頭を産んですぐ、用済みとされてロキに「処分」されたらしいわ。だから、この二頭は母親の愛情を受ける事が出来なかった。もしかしたらスコルは山田先生に母親を重ねたのかもしれないわね」

そうか。山田先生から溢れる母性を感じてあんな風に甘えていた

のか。……ロキのド腐れ野郎め、俺も一発ぐらい殴っておけばよかつたわ。

「でも、どうして山田先生なのでしょう」

「それは……まあ……母性の象徴ともいえる部分があの人立派だからでしょうね」

リアスの言葉に僅かに無言の時間が流れる。うん、直接言葉にしなくてもわかってしまった。

「けど、それなら私達だっていけるはずじゃないかしら」

「私……達？」

塔城さんの眩きに再び言葉が途切れる。おい、なんだこの空気は!? 誰かなんとかしてくれ!

「白音!」

「……何ですか姉様?」

「元氣出して! 諦めたらそこで試合終了だよ!」

満面の笑みで塔城さんの両肩へ手を置きながらそう言い放った黒歌。その目線が塔城さんの顔から下へ動いていく。

「よくも目線下に向けてくれましたね……!」

「痛たたたた!! ま、待って白音! 千切れる! 千切れちゃう!」

軽率な言動によってお仕置きされる黒歌。ふとそこから視線を外した先で、スコルが点けっ放しだったテレビをジッと見つめていて、そこには母親に抱きかかえられている子どもの姿が映し出されていた。

スコルが何を考えているのかはわからない。けど、リアスの意見は決定的外れでは無いと、この時の俺はそう思ったのだった。

第百三話 永久に共に

黒歌SIDE

平日の昼下がり、私は久しぶりに猫の姿で外に出ていた。この街との付き合いはまだ一年ちよつとくらいだけれど、もう随分長く住みついている様な気がするにや。

主殺しの罪を背負っていた頃は、同じ場所に長く居つく事は出来なかつたからなあ。そんな事をすればハンターに襲われちゃうから。

でも、今の私はもうそんな事を気にする必要は無い。ただの黒歌としてこの街でご主人様や白音達と一緒に生きているのにや。

ご主人様は私にたくさんのものを与えてくれた。居場所。家族。自由。数えあげればキリが無い。私がかもう二度と手にする事が出来なかつた、もしくは取り戻す事が出来なかつたものばかり。私は一生をかけてこの恩を返して行かないといけない。

・・・なんて、それっぽく理由をつけてるけど、本当はただご主人様の事が好きだから一緒にいたいだけなんだよね。というか、ご主人様はずるい。カッコ良くて優しくておまけに強い。これで惚れないわけないじゃない。現に私以外にもご主人様ラブな子はたくさんいる。そしてそれは今も拡大中じゃ。

私のご主人様が大好き。だからこそ、もっと役に立ちたいし、もっと深い関係になりたい。具体的に言おうと、仮ではなく正式な眷属になりたい。

街外れの鉄塔に登り、人の姿に戻った私は、懐から『戦車』の駒を取り出した。ディオドラとの戦いからそれなりに日は経ったはずなのに、未だにご主人様に返せていない。

ううん、返せないんじゃないんだ。我ながら未練タラタラで嫌になる。既にご主人様からも返して欲しいと何回か言われているけど、その度に適当な理由をつけて逃げている。こんなの私のキャラじゃないんだけどな。

もちろん、このままでいるのは良くない事はわかってる。案外、お願いしたらアツサリ眷属にしてくれるかもしれない。でも、もしも断られたら？ ご主人様は眷属を得る事にあまり積極的じゃない。悪魔の駒を貰ってからレーティングゲームまで、ご主人様から眷属が欲しいという言葉は一切無かった。あのルールが無ければ、おそらくゲームも一人で挑んでいたはずだと思う。

それがわかってから尻ごみしてしまふ。別に眷属になれなくても、ご主人様と私の仲が駄目になるとは思わない。それでも私は眷属に・・・ご主人様のモノのなりたいのにや。

「ホント・・・私らしく無いよね」

いつもお気楽で気まぐれな猫・・・それが黒歌さんだったはずなのにね。あーもう。それもこれもご主人様が悪いのにや！ というわけで、帰ったらまたたつぷり甘えさせてもらうから覚悟しててね！

「今日こそはご主人様の膝を独占にや。あんなお子ちゃまワンコ達にいつまでも調子づかせる私じゃないんだからね！」

私は駒を仕舞い、鉄塔から飛び降りた。そして、再び黒猫姿になって家までの道をのんびりと戻り始めるのだった。

・・・
・・・

久しぶりの散歩で色々寄り道していたらすっかり夕暮れになってしまっていた。玄関先で人の姿に戻って扉を開ける。

「はい、では明日お邪魔します」

リビングへ入ると、ちょうどご主人様がどこかへ電話をかけていた。受話器を置いた所で私に気付く。

「お帰り黒歌。どこへ行ってたんだ？」

「ちよつと散歩してたにや。ご主人様こそ、今どこに電話してたの？」

「ああ、レイナーレさんの家にな。前に悪魔の駒の事で話したい事があるからと言われてたのを思い出したから、明日お邪魔しようと思つて連絡したんだ」

「え・・・？」

悪魔の駒についてって。．．．もしかしてレイナーレ達．．．！

「ご主人様！ わ、私もついて行っていない？」

「ん？ 俺は別に構わないけど、一応レイナーレさん達に聞いてみるか」

そう言つて、ご主人様はもう一度レイナーレの家に電話をした。結果、私も明日着いて行つていい事になった。

ゴメンね、レイナーレ。でも、あなた達の決意を見れば、きっと私も勇気が持てると思うから。

私は『戦車』の駒をそつと握り締めるのだった。

黒歌SIDE OUT

IN SIDE

次の日、俺と黒歌はレイナーレさん達の家を訪ねた。道中、黒歌の表情がやけに真剣だったのが不思議だったが、話しかけられる雰囲気でも無かったので、何とも言えない無言の時間を味わう俺だった。

ともかく、家に到着したので早速インターホンを押すと、ドアが開いてレイナーレさんが姿を見せた。

「よ、ようこそ神崎様。どうぞお入りください」

「お邪魔します」

これまた表情の固いレイナーレさんにリビングへ通されると、席についていたカラワーナさんとミッテルトさんが揃って立ち上がり、頭を下げて来た。

なんか、俺の思つてた雰囲気と違う。この張り詰めた空気．．．こつちまで緊張して来そうだ。

「こちらにお座りください。すぐにお茶を用意します。ミッテルト」

「はいっすー」

ミッテルトさんがてきぱきとお茶を準備する間、俺は席についてジツと待っていた。しばらくして、いい香りのするお茶が全員の前に置かれた。早速それを飲んでみる。うん、美味しい。

「え、ええつと、神崎様」

「何ですか？」

「あ、その・・・アザゼル様から教えて頂いたのですが、何でも神喰狼を手に入れたそうで」

「ええ。今ではすっかり家の一員ですよ」

「あんな化物まで従えるとか凄過ぎっすよ」

「流石伝説の騎士殿ですね。お見それいたしました」

ひよつとして、この三人フエンリル達に興味があるのかな。それなら今からでも俺の家に会いに行きますかね？

そう提案すると、三人はそうじゃないと首を横に振った。

「すみません。話を逸らしてしまいました。私達が本当にお話したかったのはこれの事です」

レイナーレさんが机の上に『兵士』の駒を置く。他の二人も同じ様に駒を置き、俺の前に三つの駒が並んだ。

「神崎様は当然存知無いでしょうが、あの『禍の団』との戦いを終えてから、他の悪魔の方々から自分の眷属になって欲しいとの話がいくつかありました。中には相当な有力者の方の名もありまして、どうも私達の戦闘中の姿も中継されていたようで、その内容を評価して頂いたらしいのです」

つまり・・・スカウトって事か？ おお、それって凄い事じゃないの。俺も納得だ。確かにあの時のレイナーレさん達は凄く頼りになったもんな。というか、あの場にいたみんなが滅茶苦茶強かった。だからこそ、俺はアーシアを助ける事が出来たんだから。

「驚きましたが、同時に嬉しかったです。下級墮天使である私達にそれほどの評価をして頂いて」

「では、みなさんはその人の眷属に？」

「いえ、確かにありがたいお話でしたが、全て断りました。私・・・私達が眷属にして頂きたいのは、たった一人ですから」

へえ、レイナーレさん達にそこまで言わせるなんて、一体どこの誰だ？ 俺の知ってる人か？ どちらにせよ羨ましい。

「・・・神崎様。今こそ私達の気持ちを伝えさせて頂きます。どうか、私達をあなたの正式な眷属にして頂きたいのです」

へえ、俺の眷属になりたいのかあ・・・・・・・・・・・・・・・・

え!?

「お、俺のですか・・・!?」

「神崎様に救われたあの日からずっと考えていたんです。私達のような下級墮天使ではどうやっても返せないほどの大恩にどうやって報いられればいいか・・・」

「それで三人で話し合って決めつつ。眷属として、この身を一生神崎様に捧げようって」

いや、その理屈はおかしい！ 俺、そんな一生を捧げられるような大それた事をした憶えはまるで無いです！

慌てて訂正を入れようとしたが、レイナーさんは俺がそんな反応をするのがわかっていたとばかりに微笑んだ。

「そうおっしゃられると思っていました。まさしく英雄の心を持つ神崎様にとっては、他人に手を差し伸べる事は当然だったのでしょう。・・・ですが、刃を向けたにも関わらず、私達の為に下げる必要の無かった頭を下げられた神崎様のお姿は、私達にそう思わせるだけのものがあつたのです」

言葉の出ない俺に対し、レイナーさんがさらに続ける。

「ご存知ですが、私達は下級墮天使の中でもさらに底辺に位置していた者です。手を差し伸べられた事はもちろん、蔑まれる事はあれど、優しくされた事などありませんでした。そんな私達に、あなたは迷う事無く手を差し伸べてくれた。いなくなっても誰も気にしない・・・生きているのに死んでいる様な私達の存在を認めてくれた。私達にはそれだけでよかった。それだけで私達は嬉しかったんです」

僅かに表情を沈ませながら、最後には晴れ晴れとした笑顔を見せるレイナーレさん達に、俺は何も言えなかった。彼女達の目は本気だ。もちろん、こんな事冗談で言えるわけが無いとはわかっているが、彼女達の決意の込められた瞳に射抜かれ、俺はただただ圧倒されていた。

「・・・アザゼル先生はこの事を知っているんですか？ 確か、みなさんは先生の助手のはずじゃ」

「アザゼル様からはクビを言い渡されたつす。・・・たぶん、尻ごみし

ていた自分達を後押ししてくれたんだと思うっす」

何やってんスカ先生!?

(あと、ここの言えは神崎様なら絶対に断らないとおっしゃっていたが、何だか点け込む様で申し訳無いな。明らかに神崎様の表情が変わってしまった)

「神崎様、突然こんな事を言われてお困りかと思いますが、どうかお返事をお願い致します。ですが、どのようなお答えだろうと、私達は今後も神崎様のお役に立てるのでしたら何でもさせて頂く所存です」

レイナーレさん達がジツと見つめて来る。・・・きつと、今日までずっとずっと考えた末にこうやって話をしてくれたんだろう。もう理由がとかそんな事は考えない。彼女達の思いに俺もちゃんと答えないとイケない。

眷属か……。どう考えても、俺がリアスや支取さんの様な『王』になれるとは思えない。だけど、『王』は決して情けない姿を眷属に見せてはいけない。リアスだってそう言っていたし、いつも正しい『王』であろうとしている。果たして、俺にそんな覚悟が出来るかどうか……。 (・・・いや、出来るかどうかじゃない。やらないといけないんだよね) そうでなければ、眷属を持つ資格なんてないだろう。もちろん、最初から上手くいくとは思わない。でも、少しずつでも前に進み続ける事が大切なはずだ。その大切さを、俺はあの戦いで学んだはずなのでから……!」

「・・・俺は未熟です。これから先、レイナーレさん達を幻滅させる様な事を何度もやってしまうでしょう」

「「・・・」」

「ですが、そんな俺でも、誰かに支えてもらえれば一歩ずつ成長出来ると思います。いや、成長してみせます。レイナーレさん達に相応しい『王』になる為に」

「ツ・・・で、では・・・!」

「レイナーレさん、ミッテルトさん、カラワーナさん。こんな情けない俺ですが、どうか支えてくれないでしょうか。いつか、あなた達が眷属になった事を後悔しない様な『王』になる為に」

「……はい！」

迷い無く返事をするレイナーレさん達。この瞬間、俺は本当の眷属を得る事となった。三人に並んでもらい、改めて悪魔の駒を渡して行く。

「カラワーナさん」

「我が命、神崎様の御為に……」

「ミツテルトさん」

「絶対にお役に立ってみせるっす！」

「レイナーレさん」

「……この日を迎えられた事を感謝します。私の全て……神崎様に捧げます」

『兵士』の駒が三人の胸の中へ消えて行く。淡い光が生じた以外は特に変化は無い。これでいいんだよな？

「ふふ、これで私達も悪魔の仲間入りね」

「でもお姉様。悪魔の羽が出て来ないっすよ？」

あ、そつか。レイナーレさん達はオカンの駒の事知らないんだよな。まずは説明しないと。

というわけで、早速説明すると、三人は酷く驚いた様だった。まあ、悪魔に転生せずに眷属になれるなんて普通じゃありえないもんな。

そうやって説明している間にいい時間になったので、今日はひとまずお暇する事にした。レイナーレさん達もアザゼル先生に報告するらしい。

お邪魔した時とは正反対のとても朗らかな表情の三人に見送られ、俺と黒歌は彼女達の家を後にするのだった。

S I D E O U T

黒歌 S I D E

レイナーレ達の家を後にした私達は、家までの僅かな道をゆっくりと歩いていた。

私の予想通り、レイナーレ達は眷属にして欲しいとご主人様へお願いした。結果、あの三人は見事眷属となる事が出来た。おめでどうレ

イナレ。あなた達の勇気・・・私にも分けてね。

「そういえば、結局黒歌の用事は何だったんだ？」

私の決意を知らないご主人様はそう言って私の顔を覗き込む。ふう・・・よし、私も伝えよう。私の気持ち。

「ねえご主人様。私も眷属になりたいって言ったら・・・驚くかな」
「・・・え？」

あらら、やっぱり呆けちゃった。そりゃ、ついさつき眷属にしてくれと言われてまた言われたらそうなっちゃうよね。

「私はずっと前から思ってたんだよ。犯罪者だった私を助けてくれて、正体を隠していた私を許してくれて、たくさんのものを私に与えてくれたご主人様。いつか、この人の眷属になりたいって。ずっと、ずっと・・・」

「黒歌・・・」

「私はもうご主人様の傍から離れる気は無いにや。えへへ、運が無かったねご主人様。黒歌さんは一度手に入れたものを手放すなんて事はしないのにや。だからね、私をご主人様の眷属にしてください。私は、ずっと、ずっとご主人様と一緒にいたいんです」

うにやうにや・・・頬が熱くてしようがないにや。眷属の話がいつの間にか告白みたいになってしまった。まだ早い。それに、家の子達にもチャンスをあげないとフェアじゃないしね。

「黒歌、俺は・・・」

いいよ、ご主人様。どんな答えでも、今の私なら受け入れられるはずだから。

そしてこの日——私とご主人様の関係は一步だけ進んだのだった。

黒歌SIDE OUT

???
SIDE

「・・・何故でしょう。何か取り返しのつかない事をしでかしてしまっただ気がします」

第四百四話 白猫が隠していたもの

小猫SIDE

夕方、一緒に帰って来た神崎先輩と黒歌姉様によって、私達はリビングへ集められた。何でも私達に報告しないとイケない事があるらしい。

そうして揃った私達の前で、神崎先輩が姉様を正式な眷属にした事を発表した。さらに、姉様だけじゃなくて、あの堕天使の女性達三人も一緒に眷属にしたのだとか。

もちろん驚いたけれど、それ以上に姉様を祝福する思いの方が強かった。姉様が先輩を慕っているのは私や部長達だって知っている。知らないのはその思いを向けられている先輩だけだ。

「おめでとうございます、黒歌さん！」

「ありがとね、アーシア」

「リョーマ。黒歌達の事・・・大事にしてあげないと駄目よ？」

「もちろんだ。眷属を大切にすることをお手本の人物が目の前にいるんだからな」

アーシア先輩からお祝いの言葉を受けた黒歌姉様は、いつも私をからかう時などに見せるあの飄々とした笑みでは無く、本当に嬉しそうで、心から幸せそうな笑顔を見せた。

部長から眷属を持つ責任について話を聞く先輩は、一切迷いの無い目をしながらしっかりと頷いた。この人になら安心して姉様をお願い出来る。そう私に思わせるくらいに。

先輩は姉様を。姉様は先輩を。互いに互いを思うその姿は、王と眷属という関係に相応しいと思う。恩人である先輩と、私の唯一の肉親である姉様。私の大切な二人がそんな関係になって私も嬉しい。

そう、嬉しい。これは喜ぶべき事。なのに・・・どうして私の胸はこんなにもざわつくのだろう。

「うふふ、今日はお祝いに(´▽`)馳走を作らないといけませんわね、小猫ちゃん」

「・・・そうですね」

自分の事なのに理解出来ないそのざわめきの所為で、朱乃先輩への返しが変に固い声色になってしまった。そんな私の反応がおかしいと思っただのか、朱乃先輩が気にする様な目線を送って来たけれど、私はそれに気付かないフリをした。

「それじゃあ、詳しい経緯は夕食の席で聞くとして、朱乃の言う通り、今日はお祝いという事でちよつと豪勢にいきましょうか」

部長の仕切りで全員で夕食の準備をする事になった。私も小さく頭を振って準備を始める事にした。どうせこの違和感もすぐなくなるはず。・・・そう思つて。

小猫SIDE OUT

黒歌SIDE

みんなのおかげでとつても美味しい夕食を堪能した後、私は一度自室へ戻ってから白音の部屋に向かった。あの子だったら、夕食が済むなりささつと部屋に戻っちゃうんだから。やっぱり朱乃が言う通り、何か悩んでいるのかな。

「白音」

「姉様・・・入る時はノックしてくださいと前から言ってるじゃないですか」

部屋に入ると、白音はベッドに横になったまま私にジト目を向けて来た。ふむふむ、こういう所はいつもと変わらない様だにや。

「いいじゃない。私と白音の仲なんだから。そ・れ・と・も、いきなり部屋に入られたら困る様な事でもしてたのかにや?」

「なっ! は、破廉恥です姉様!」

「ん? 私は具体的な事は言つて無いんだけど。白音ちゃんはナニを想像しちゃつたのかにや?」

「し、知りません! からかうだけで用が無いのなら出て行つてください!」

おつとと、そろそろ止めとかなないとマズそうにや。私はススツと白音の傍へ近寄つた。

「用ならちゃんとおあるよ。白音とちよつと話がしたいの」

「なんですか、改まって」

「まあまあ、とりあえず起きて起きて」

白音をベッドから降ろし、カーペットの敷き詰められた床に二人で座る。そして、机の上に部屋から持って来た物を置く。

「姉様、それってまさか・・・」

「秘酒『猫殺し』。猫？なら死ぬ前に一度は飲んでみたいとっておきのお酒にや。白音も名前くらいは聞いた事あるんじゃない？」

「は、はい。でもそんな珍しいお酒をどうやって・・・？」

「前に合宿で冥界に行ったでしょ？ その時、リアスのお父様に人間界でのご主人様とリアスの事を色々教えてあげたらお礼にくれたの」
「で、それをここに持って来てどうするつもりですか？」

「ほら、白音って本心をあまり出さないツンデレちゃんじゃない？」

だからお酒の力で普段抑え込んでいる部分をはっちゃけさせてあげようと思って」

「私はツンデレなんかじゃありません！」

「はいはい。ツンデレは総じてそう言うにや。とにかく、私にとっておきを出すんだから、諦めて付き合うにや。これから私が色々質問するから、白音はそれに答えて。それで、もしも答えたくない質問だったら、答える代わりに『猫殺し』を飲むにや。」

ふっふっふ、こうすれば飲まざるを得なくなるにや。そして、飲んで酔っ払った所でもう一度同じ質問をすればきつとこの子も答えるはず。完璧な作戦にや。

.....
私の作戦は完璧。・・・そう思っていたのは私だけだった。
「ちよつとお。ちゃんと聞いてるんれすか姉しやまあ！」

正座する私の前で、『猫殺し』の入ったコップ片手に呂律の回っていない言葉を発する白音。顔も真っ赤で、人間界では隠すと決めていた猫耳と尻尾まで出してしまっている。

私の予想通り、白音は私の質問にすぐに答えに詰まった。・・・ま

あ、ご主人様の事好き？　なんていきなり聞いた私も悪いとは思うけど。

事前の決まり通り、白音は『猫殺し』を一口飲んだ。本当にちよつとだけだ。なのに、その直後白音から出た言葉は「姉様、正座」だった。目が完全に座っていて、私はその命令に何故か逆らえなかつた。「だいたいれすね、先輩は酷いんれすよ。部長やアーシア先輩達の事は名前で呼んでる癖に、私だけ未だに塔城さんなんですよ！　何なんですか、私だけ仲間外れですか！」

「え、えつと、それはたぶん、白音が名前で呼んでくれって言わないからだと思うよ。ほら、他の子達も名前で呼んでってお願いしたから呼んでもらってるみたいだし」

「んぐ・・・」

『猫殺し』を一気飲みする白音。あーあ、二日酔い一直線コースだにや。

「ほら、コップが空ですよ姉様」

「は、はい！　すぐに入れます！」

「ありがとうございます・・・って、誰が正座を崩していいって言ったんですか！」

それは流石に理不尽過ぎにや白音え・・・。この子がお酒を飲む所は初めて見たけれど、まさかここまで酒グセが悪いなんて・・・。

「先輩だけじゃないれすよ。姉様達にだって文句があります。いつも私も私の目の前でイチャイチャして、ずるいんですよ！　私だって先輩にナデナデされたりギユツとしてもらったり、甘えたいんですからね！」

「それも白音が言わないか・・・え、ちよつと待って。それじゃあ、白音もご主人様の事・・・？」

「好きれすよ。好きになるに決まってるじゃないれすか。姉様を助けてくれて、私と姉様の仲を取り持ってくれて、こんな可愛げの無い私を可愛いつて言ってくれて、好きにならないわけがないじゃないれすかあ」

・・・そつか。うん、やっぱりそうだったんだ。白音も私達と同じ

だったんだね。なら、もしかして白音は、ご主人様との距離を中々縮められない事に不安や焦りを抱いていたのかな。それがあなたの悩みだったんだね。

「・・・なんですかその目は。もしかして、信じてませんね？」

「え？」

「いいですよ！　なら私が先輩の事をどれだけ好きなのか証明してあげます！」

そう言うなり、立ち上がった白音は勢い良く部屋を飛び出した。酔っぱらってるはずなのになんて俊敏性！　流石私の妹にや。

「って、感心してる場合じゃない！　早く追いかけないと！」

私は慌てて白音の後を追いかけるのだった。

黒歌SIDE OUT

IN SIDE

明日の準備を済ませ、そろそろ寝ようと思っていた矢先、突然部屋の扉が勢い良く開かれた。ノックが無かったので、おそらく黒歌だろうと思って振りかえると、そこには黒歌ではなく塔城さんが立っていた。

「塔城さん。何か用か？　それにその姿は・・・」

白音モード（黒歌命名）の塔城さんにその声をかけた瞬間、彼女は俺の胸に飛び込んで来た。

「えへへ、せうんぱい」

ツ!?　な、なんなの!?!　なんなんなの!?!　てか酒臭!!

「塔城さん、もしかして酔っているのか？」

「・・・」

「塔城さん？」

「先輩。私、先輩に嫌われてるんですか？」

「え？」

「そんなのやーです。私は先輩に名前前で呼んで欲しい。もっと撫でて欲しい。もっとギュってして欲しい。もっと・・・もっと甘えた・・・」

塔城さんの声が徐々に小さくなっていき、同時に体から力が抜けて

行く。まずい、この状況を誰かに見られたら変な誤解を与える恐れが……！

「ご主人様！」

ああだろうね！　こういう事考える事自体がフラグだもんね！

しかも黒歌かよ！　大事な妹が抱きしめられてるとか絶許じゃん！

「く、黒歌、これは……」

「ごめんなさい、ご主人様。白音がそうだったのは私の所為なの」

あ、あれ、思ってた反応と違う。とりあえず事情を聞いてみよう。眠ってしまった塔城さんをベッドに寝かせ、俺は黒歌から詳しい話を聞いた。

「私はただ、白音の本心を聞きたかっただけなの。もしも悩みがあれば力になってあげたくて」

それで酒つていうのはどうかと思うが、彼女なりに真剣だったのだからそれを咎める権利は俺には無い。でも、塔城さんに悩みか……。情けないな、一緒に暮らしているのに気付けなかったなんて。姉である黒歌でも気付かなかったから仕方ない……。なんて言いわけにもならない。

「ご主人様、白音の事でお願ひがあるの。聞いてくれる？」

俺の答えはもちろん決まっていた。

S I D E O U T

小猫 S I D E

朝、目が覚めた私を激しい頭痛と喉の渇きが襲った。風邪ともちよつと違うその不快感にイラつきながら、ひとまず何か飲もうと部屋を出た。

昨日何か変な事をしただろうか。確か、姉様が部屋に来て、それで……。何があつたつけ？　それ以降の事を全く思い出せない。

「あ、神崎先輩……」

リビングには神崎先輩がいた。他の人達はまだ目覚めていないのか姿が無い。先輩も私に気付いて挨拶して来た。

「おはよう、小猫」

「おはようござい．．．え？」

「少し顔色が悪いな」

先輩は私に近づいて来て、右手で私の頭を優しく撫でながらこう言った。

「辛い時．．．いや、いつでもいい。甘えたい時は甘えてくれていいからな」

そのまま私の横を通り過ぎて行く先輩。残された私はその場から動けなかった。

「先輩、今私の事を名前で．．．」

聞き間違いでなければ、先輩は私を塔城さんではなく小猫と呼んだ。

先輩に撫でられた所に妙な熱を感じる。．．．なんでこんなにドキドキしてるんだろう。

「．．．不意打ちだったからしょうがない」

きつとそうだ。不意打ちは先輩の得意技だから、今回だっていきなりされてビックリしてしまっただけだ。

「あ、おはよう小猫ちゃん！」

「おはようございます、アーシア先輩」

「．．．小猫ちゃん、楽しい夢でもみたの？」

「夢どころか昨日の記憶も無いんですけど、どうしてそんな事を聞くんですか？」

「だって、今の小猫ちゃん、とっても嬉しそうな顔をしてるもん」

「．．．気のせいですよ」

何故かこれ以上見られたくなくて、私は洗面所に退避した。相変わらず頭痛は治まっていないけど、さっきまでのイラつきは無くなっていったのだった。

「．．．変なの」

第百五話 旅立ちの日に

アーシアSIDE

修学旅行の前夜、万が一があつてはいけないと、私は最後の荷物チェックを行っていた。私の所為で誰かに迷惑をかけたくないですからね。

「あら・・・？」

部屋のドアからカリカリとひつかく音が聞こえたので開けると、部屋の前にスコルちゃんがいた。

「がうー！」

部屋に入つて来たスコルちゃんが、広げられた荷物を見て私の方を向いて来た。

「あのね、私は明日から修学旅行へ行くの。だから忘れ物が無い様に確認してたんだよ」

「がうがうー！」

尻尾をフリフリさせながら見つめて来るスコルちゃん。・・・もしかして、自分も連れて行って欲しいって思ってるのかな？

「ゴメンね、一緒には連れていけないの。お土産買って来るからお留守番お願いね」

「がう・・・」

シユンとするスコルちゃん。思わずカバンに入れてこっそり連れて行ってあげようかと思つてしまった。し、しっかりしなさいアーシア・アルジエント。

スコルちゃんはその後も、私が荷物を全部確認し終わるまで部屋の隅にジツと座っていた。そうして、私が寝ようとベッドに横になった時に飛び込んで来たので、今日は一緒に寝る事にした。

(早く明日にならないかな・・・)

今からワクワクが抑え切れなくて、私は中々寝付けないのだった。

アーシアSIDE OUT

IN SIDE

修学旅行当日、俺達は揃って玄関でアーシアを見送る事にした。

「楽しんでいらつしやいね、アーシアちゃん」

「たくさん思い出作つてくるにや」

「・・・お土産期待してます」

朱乃、黒歌、塔・・・小猫がそれぞれにアーシアへ声をかける。俺も続けてそれに倣った。

「アーシア、気をつけて」

「リョーマさん・・・」

アーシアが突然抱きついて来た。思わず抱きしめ返してしまった俺に、アーシアは小さな声でこう言った。

「えへへ、離れ離れになる前にリョーマさん成分を補給するのです」

ははは、そうかそうか・・・相変わらずこの天使様は俺を殺す気が満々の様で。誰か、鼻血やらその他を我慢出来た俺を大いに称えてくれませんかね。

「ほら、白音。あなたもああいふ風に甘えたらいいにや」

「勉強になりま・・・って何で私に振るんですか」

「あれを素でやれるのがアーシアちゃんの恐ろしい所ね・・・」

ヒソヒソ話をする三人の前で、俺とアーシアはどちらともなく離れた。

「それじゃ、そろそろ行きましようか、アーシア」

リアスが玄関の扉を開ける。彼女だけは駅まで一緒について行く事になっている。なんでも、兵藤君達に渡しておかないといけなないものがあるらしい。

「はい！」

「みんな、後の事はお願いね。・・・それとリョーマ。帰って来たら私にも同じ事をしてもらうからそのつもりで」

「え？」

最後に謎の言葉を残し、リアスとアーシアは出て行った。同じ事って何すりやいいんだ？・・・まあいいか、帰って来たらリアスに聞こう。

「さて、私達も学校へ行く準備をしないといけませんわね」

「ああ。けどその前にフェンリル達の食事を用意しないと。みんなもう起きてるのか?」

「はい。ここに揃って・・・あれ?」

「スコルがいないにや」

黒歌の言う通り、フェンリルとハティはそこにいたが、スコルの姿がどこにも無かった。まだ寝てるのかと思つて全員で家の中を探してみたのだが、それでも見つける事が出来なかった。

「どういう事だ。これだけ探しても見つからないなんて」

「あの、先輩」

「ん? 何か知ってるのか小猫?」

「いえ、そうじゃないんですけど。アーシア先輩が出て行く直前、持っていた旅行カバンが不自然に動いた様に見えたんですけど」

「・・・まさか」

S I D E O U T

イツセーS I D E

とうとうこの日がやって来た。高校生最大のイベントにして、俺にとっては命をかけた戦いの舞台でもある修学旅行が。

「よし・・・行くか」

靴ひもをしつかり縛り、俺は荷物を手に立ち上がった。

「忘れ物は無いんでしょね、イツセー?」

「まあ、人様に迷惑をかけない範囲で精一杯楽しんで来い」

父さんと母さんが珍しく俺を見送ろうとしてくれた。なんだろう、今なら普段言えない様な事が言えそうな気がする。

「父さん、母さん、今日まで俺を育ててくれてありがとう。本当に感謝してる」

「ど、どうしたのよイツセー。いきなりそんな事言うなんて」「まさかお前からそんな言葉が聞けるとはなあ。こりや今日明日は雨でも降るか?」

俺の言葉に首を傾げる両親。我ながらこのタイミングで言う事ではないと思うが、それでも言いたかった。

「ゴメン。なんか急に伝えたくなくなってさ。それじゃ・・・逝って来ます」
「行つてらっしゃい」

二人に送り出され、俺は家を出た。・・・不思議だ。昨日まで滅茶苦茶不安だったのに、今は凄く気分が落ち着いている。これなら旅行も楽しめそうだ。

——相棒。

おう、おはようドライブ。旅行中もよろしく頼むぜ。

——わかってる。俺は全力でお前をサポートしてみせるさ。
俺とお前が力を合わせれば不可能なんて無い・・・そうだろう？

はは、やっぱりお前は最高の相棒だよドライブ。お前と一緒になら、きつと何だつて出来る。

気付けば駅まで後数分の交差点までやって来ていた。すると、まるでタイミングを計っていたかのように、右からゼノヴィア、左からイリナが姿を現した。そして、俺達は誰が言うでも無く並んで歩きます。

「・・・いい顔してるね、イツセー君」

「そういうイリナこそ。なんか悟った様な顔をしてるじゃねえか」

「昨日、ミカエル様から激励のお言葉を頂いたの。なんだったら天使を数人送ると言ってくれさったけど、丁重にお断りさせて頂いたわ」
「そうか・・・。ゼノヴィアは？」

「脳筋の私があればこれ考えたって無駄さ。全力を尽くす・・・ただそれだけだよ」

それを最後に会話が途切れる。でも問題無い。言葉は交わさなくても、俺達の心はとっくに一つになっているのだから。

((そう・・・俺(私)達の戦いはこれからだ・・・!!))

イツセーSIDE OUT

リアスSIDE

「ツ・・・!?!」

駅に到着すると、既に祐斗が先に来ていた。彼とアシアと一緒に残りの子供達を待っていた私は、突如凄まじいプレッシャーを感じ取っ

た。

「部長、この気配は……」

「中級……いえ、下手すれば上級に迫るプレッシャーだわ」

「いったい何者？　そもそもなぜこのタイミングで現れたの？」

色々疑問は尽きないが、まずはその正体を確認しなければ。

アーシアを背中に隠し、私と祐斗はプレッシャーのする方へ目を向けた。すると、そこには予想だにしない人物達の姿があった。

「イ、■イツセー……？」

真つ直ぐにこちらへ向かって来ているのはイツセーらしき人物だった。このらしきというのは、本当に彼がイツセーなのかどうか自信が無かったからだ。

外見は間違い無く彼だ。だけど、私の知るイツセーは普段、あれほどまでに強烈な覇気を纏ったりしていない。そして、それは彼の両隣に並ぶゼノヴィアとイリナらしき人物達にも当てはまる事だった。……どうでもいいけど、今の彼等のバツクには夕暮れの荒野がよく似合いそうだった。

「おはようございます、部長、アーシア、木場」

いつもの様な明るい挨拶。そこでようやく私は彼がイツセーだと認識出来た。

「お、おはよう、イツセー。な、何だかいつもと雰囲気が違う気がするのだけれど」

「そうですね？　ゼノヴィア、俺なんか変かな？」

「いいや。変じゃないさ」

「そうそう。イツセー君も私達もいつも通りですって」

「いやいや、明らかに違うでしょ！　何なの。私の知らない所で何があったっていうの？」

「みなさん、これから四日間よろしくお願いします！」

深々と頭を下げるアーシアに、イツセー達は互いに顔を見合わせた後、ゆつくりと頷いた。

「……ああ、こちらこそよろしくね、アーシア」

「キミは旅行を楽しむ事だけを考えていてくれ」

「それを阻むものは、何であろうと私達が排除してあげるから」

「あなた達・・・何しに行くつもり？」

アジアへそれぞれに声をかける三人へ、私はそうツツコミを入れてしまうのだった。

リアスSIDE OUT

IN SIDE

一時間目の授業中、俺はチラッと時計を見た。今頃、アジア達は新幹線の中かな。京都の文化は独特な所もあるから、きつと彼女にとっていい体験が出来るだろう。

まあ、兵藤君、ゼノヴィアさん、紫藤さんが一緒だし、彼等と一緒に目一杯楽しんで来てくれればそれでいい。俺は土産話を楽しみにしているよう。

そんな事を思いつつ、俺は板書写しを再開するのだった。

第百六話 見ている人はちやんと見てくれてるんです

桐生SIDE

「……え、もう始まつてるの？ あー、じゃあとりあえず自己紹介ね。どうも、桐生藍華です。……というかこのしゃべり方めんどくさいから止めていい？ いいよね。ハイ終了。」

私達が乗り込んだ新幹線が出発して十分くらい経ったかな。他の班の子達はそれぞれにお菓子やらなんやら取り出して楽しくおしゃべりしてる。そんなもってまあ、ウチの班も適当に持ちあつて色々話でもしようかと思つたわけなんだけど……。

「……」

すみません。誰か後ろの席から庄のある視線を送って来る兵藤、ゼノヴィア、イリナをなんとかしてくださいます。何故にウチの班だけこんな殺伐としてんのかね。

「俺さ、実は新幹線初めてなんだよ。だからちよつとワクワクしてたんだ」

アンタはこんな時でもお気楽だね松田。トリオのメンバーの様子がおかしいくらい気付きなよ。……あ、でも最近で言えば兵藤だけ評価が上がり始めてるんだよね。

つと、話が逸れかけてしまった。とりあえず、このままじゃこつちも落ち着かないし、あの三人を何とかしないと。はあ……こういう時班長は辛いわ。

「アンタ達、何でそんなになつてるか知らないけど、せつかくの修学旅行なんだからもつと楽しい顔しなさいよ」

嗜める様に言うと、三人が顔を寄せ合つて何やら話し合いを始めた。

「どうする？」

「桐生さんの言う通り、私達ちよつと片肘張り過ぎかもしれないね」「確かに、この状態を四日間保つのは難しい。休める所は休んでおこ

う」

「だな。よし、とりあえずこの移動中はのんびりしよう。・・・ただし、警戒は怠らない様に」

「了解」

「いや、アンタらホントに何なの・・・？」

私のツツコミには何の反応もなかったけど、とにかく三人の表情が幾分か和らいだ。・・・何で行く前からこんなに気を遣ってるんだろう私・・・。

「そうだ！ 私もお菓子を持って来たんですよ！」

とそこへ、アーシアがニッコリしながらカバンを取り出した。やっぱりこの子はいいね。見てるだけで癒されるよ。

「あ、でも私の好きな物ばかりだからみなさんのお口に合うかどうかわかりませんが」

「そんなのぜんぜん問題無いよ！」

「そうそう！ アーシアちゃんの好みは俺の好みだから！」

松田と元浜が席を乗り出してアーシアへ顔を近付ける。同時に背後からのプレッシャーが増した。あーもう、やっと落ち着いたと思ったらこれだよ。

「待ってくださいね。今出しますか——」

「がう」

「ツ・・・!?!」

カバンを開けると同時に目にも止まらぬ早さでカバンを閉じるアーシア。目をまん丸にして、なんだか汗まで流し始めている。

「どうしたのアーシアちゃん？」

「え、あ、そ、そのですね、ごめんなさい。私、うっかりして持って来るのを忘れちゃいました！」

後頭部に手を当てて「まいったなー」なポーズをするアーシア。それを見て松田と元浜が興奮する。

「うっかりアーシアちゃん萌ええええええ!!」

「やれやれ、うっかりなら仕方ないな。なら代わりに俺のお菓子を分けてあげよう」

「あ、ありがとうございます」

ぎこちない笑顔で松田からチョコステイクをもらうアーション。・・・うん、怪しい。さつきカバンを開けようとした時に聞こえた変な声も気になる。これは・・・ホテルに着いたら追求しないとね。それからしばらく、松田と元浜のアホトークに付き合いながら時間を潰していると、前の席から女子の黄色い歓声が聞こえて来た。立ち上がって確認すると、木場君が通路を歩いてこちらに近づいて来ていた。

木場君はそのまま私の横も通り過ぎて、後ろに座る兵藤へ声をかけようとしていた。そんな彼に再び女子達が騒ぎ出す。

「ええ!? 木場君が兵藤の所へ・・・!?」

「何で彼がエロの領域へ・・・!?」

「やっぱり兵藤×木場君は鉄板なのね!」

そんな女子達の声など気にする様子も無く、木場君は兵藤の隣へ座った。私を含め、女子達の視線がそこへ集中した。あ、別に私は木場君の事は何とも思っていない。確かにカッコイイとは思っているけど、私は住む世界が違うというか、釣り合うわけがないし。

私には二枚目よりも三枚目の方が相応しい。普段は間抜けだけと、決める時はキツチリ決めるヤツとか。

って、私の好みなんて今は関係ないか。今はあの二人のやり取りを観察しよう。

「よお、どうした木場?」

「駅での事が気になってね。・・・何かあったのかい?」

「お前は気にしなくていいさ。別クラスのお前にまで迷惑をかけたくないしな」

「イツセー君の悩みは僕の悩みだよ。だから話してくれないかな。僕で力になれるのなら何でも協力するよ」

「・・・いいんだな? 聞けば戻れなくなるぞ?」

「覚悟の上さ」

「わかった。ならしつかり聞いてくれよ」

(・・・アイツ、あんな顔もするんだ)

クラスでは見せた事の無い真剣な表情を浮かべる兵藤に、何だか胸がざわついた。それは他の女子達も同じみたいだった。

「ねえ、何の話かわかる?」

「ううん。．．．でも、今の兵藤ってちよつとだけ、本当にちよつとだけだけど．．．カッコいいって思った」

「ええ、マジで言ってるのアンタ? 兵藤だよ? あの変態三人組の兵藤だよ?」

「でもでも、最近は少し大人しくなつたつて噂だよ。前に廊下で兵藤とぶつかった子がいてさ、その時の第一声が「悪い、余所見してた」だったんだつて」

「あ、それ私も聞いた。その後、松田と元浜がその子がまだ近くにいるのに、「柔らかかったか?」とか「いい匂いしたか?」とか聞いたけど、兵藤は「怪我が無くてよかつた」つて言つたらしいよ」

「マジで!? 信じられないわ．．．」

「夏休みくらいからだよね。何かあつたのかな?」

「ついに国家権力のお世話になつたとか?」

「ヤ○ザの娘にセクハラして埋められそうになつたとか?」

口々に憶測を並べ始める女子達。けど、やっぱり兵藤の評価はクラス内だけじゃなくて外にも広がつてるみたいね。これは変態三人組が二人組になる日が来るかもしれないわね。

「でも、それはそれで面白くないわね」

「桐生さん。何かおっしゃいましたか?」

「ううん、何も。あ、そうだアジア。この前テレビで簡単な恋占いのやり方をやつてただけど．．．知りたい?」

「は、はい! ぜひ!」

というわけで、私はアジアに恋占いの方法を教え始めるのだつた。

桐生SIDE OUT

イツセーSIDE

木場．．．やつぱりアイツは最高のダチだ。向こうに着いたら風呂

で背中でも流してやろう。

先頭車両へ戻る木場を見送り、俺は周りを見渡した。ゼノヴィアとイリナはアジア達と何やら話している。松田と元浜は・・・寝てやがるな。アイツ等が大人しくしてればまあ問題は無いだろう。俺も今の内にやる事をやっておこうか。

——始めるか、相棒？

ああ、頼むよドライブ。また歴代の先輩達と話をさせてくれ。

俺の意識が徐々に暗い暗い底へ沈んでいく。それが突然真っ白になれば、そこは歴代の先輩達が集う例の白い空間だった。

以前までは、ここにはエルシャさんとベルザードさんだけしかいなかった。けど、あのロキとの戦いの後、ここには二人を加えて十人以上の先輩達が姿を見せてくれるようになっていた。全員、あの時俺が見せた“覚悟”を認めてくれた人達だ。

「ん？ おお！ また来たのかガキンチョー！」

顔に真横に傷を走らせた筋骨隆々な男性が俺に気付く。あの最終局面でミヨルニルの重さに耐えられなかった俺に力を貸してくれた人だ。

「ちよつと！ 俺の名前は兵藤一誠だって前も言ったじゃないツスカ！」

「へ！ お前なんざガキンチョで十分さ！」

「ぐぬぬぬ・・・！」

「ほらほら、せつかく来てくれたのにその言い方はないでしょ」

奥の方へ座っていたエルシャさん綺麗な微笑を見せながら俺の傍へやって来た。

「イツセー。彼の言う事はあまり気にしないでいいわ。口ではああ言ってるけど、あなたの事はちゃんと認めてるんだから。だからこそここにいてるし、あの時だってあなたに力を貸してくれたんだから」

「・・・けっ！」

顔をそっぽに向けたまま男性は向こうの方へ行ってしまった。・・・ツンデレとか言ったらブツ飛ばされそうだから止めとこう。

「イツセー。次にあなたが来たら話をしようと思ってたの」

「話ですか？」

「ええ。とりあえず座ってちょうだい」

言われるままに席に着くと、他の先輩達も一斉に席に着いた。全員
の視線が俺に注がれ、否応なく緊張してしまう。

「な、なんですか？ 俺、なんかやらかしちやいました？」

「いいえ。その逆よ。おめでとう。あなたは前回の戦いで『第一段階
』を突破したわ」

拍手するエルシャさんに合わせて、他の先輩達も「おめでとう」と
言いながら手を叩く。第一段階？ それって覇龍への第一段階って
事か？

「私達が覇龍を封じる『枷』だという事はドライブから聞いてるで
しょ？」

「は、はい。それが全て外れる……つまり先輩達全員に認められた時、
俺は覇龍を使える様になるって」

「そもそも、あなたは覇龍というものがどんなものかわかってる？」

「……すみません。具体的には何も」

「謝らなくていいわ。そうね……。ならまずは覇龍の正体について教
えてあげましょうか」

覇龍の正体……。ずっと気になっていた謎がとうとう明かされる
時が来たか。

「覇龍というのはね、『赤龍帝の籠手』を持つ者の求めを純粹に叶える
力なの。システムと言ってもいいかしら。「全てを破壊する力が欲し
い」、「光を越える速さを得たい」、「究極の魔術の理が知りたい」……
求めるものは何でも構わない。あなたがロキとの戦いで彼から与え
られたあの力は、彼が覇龍に至った時に発現させた力を模したもの
よ。彼はかつてあの『赤き覇の超剛拳』で大陸を一つ消し飛ばした事
があるわ」

んなっ!?! た、大陸一つ消し飛ばしたですと!?! なんつーヤバいも
んを貸してくれたんですか!

「彼は邪魔するものを粉碎する力を求めた。その結果が『赤き覇の超
剛拳』よ。あなたが覇龍へ至った時、同じ力を求めれば、システムは

あなたにその力を与えてくれる。そこに制限や常識は存在しない。それこそが覇龍・・・あなただけの可能性の力よ」

俺だけの力・・・。お、おお、なんかテンション上がって来たぞ！
まさに「僕が考えた最強の赤龍帝」じゃないですか！

「覇龍についてはこれくらいかしら。さらに詳しい話はまた機会があればしてあげる。それで話を戻すけど、あなたはこれだけの歴代所有者達を認めさせた。それによって第一段階・・・あなたの可能性の「根源」を解放するわ」

「根源ですか？」

「あなたの可能性は全てこの「根源」が元になる。どんな力を求める事になっても、そのきっかけは「根源」になるの」

「よく・・・わかりません」

「ちよつと難しい言い方をしてしまったかしら。つまり、あなたはなぜ力を求めるのか・・・その理由が「根源」になるのよ」

俺が力を求める理由・・・。そんなの答えは一つしかなかった。

「理解出来た様ね」

「これで合ってるかわかんないですけど」

「今はそれでいいわ。最初から全てを理解されたら私達の立場がないもの。だけど、これだけは覚えておいて。その「根源」が純粹であればあるほど、あなたの覇龍はその力を増していく。そう・・・もしかしたら、あの伝説の騎士に並ぶほどのものにね」

「伝説・・・。ツ!? そ、それってまさか神崎先輩!? いやいやいやい

や！ 無理無理無理無理！」

「情けねえぞガキンチョ！ 男なら挑む前から諦めるんじゃないやねえ！」

「やかましい！ アンタ等はあるのディオドラ戦のブチ切れ先輩を見て無いからそんな事言えるんだよ！ 文句があるならあの状態の先輩の前に立つてから言いやがれえ！」

流星に我慢出来なかったので俺は席を立ちながら叫んでやった。それから、何故か他の人を巻き込んでのくだらない言い争いを繰り広げる事になってしまった。

「・・・」

その中で、相変わらず無言のベルザードさんが俺達を煽るようにテーブルをバンバン叩いていた。・・・ひよつとして気に入ったんだろうか。あの人、子どもっぽい所があるんだよな。

最後にそんな感想を抱きながら、俺の意識は神器の中から離れるのだった。

目を開けると、そこは新幹線の中だった。景色以外、潜る前と特に変わった所は無い。

なあドライブ、〃根源〃は？ 解放されたらしいけど特別変化は無い様な気がするけど。

——さあな。目に見えるものではないと思うぞ。

なんだよその含みのある言い方は。お前なら詳しいはずだろ。

——ああ。だが教えない。俺はお前がどんな覇龍を発現させるか今から期待している。その為にも、余計な口出しはしない事にした。

へいへい、お心遣いに感謝させて頂きますよ。

その時、もう少しで京都へ到着するというアナウンスが流れた。それから少しして新幹線がゆっくりと停止し、俺達はついに京都の地へと立った。

「ここが京都か・・・」

「はいはい。まずは集合場所のホテルへ向かうわよ。急がないと午後の自由時間が減っちゃうわよ」

桐生の言う通りだ。とりあえずまずはホテルへ向かおう。そう決めて動くこうとした俺達の前でちよつとした騒ぎが起こっていた。

「おらあ！ 大人しくしやがれ！」

そこでは、男性が別の男性にキヤメルクラッチをかけていた。技をかけられている方の男性が必死でホームの床を叩いている。

「俺の前で痴漢なんてふざけた真似しやがって！ 駅員へ突き出す前に俺が教育してやる！」

「うわあ・・・。完璧に決まってるなアレ」

元浜がぼそりと感想を漏らす。確かに、素人目から見ても滅茶苦茶綺麗に決まっている。見た目はヒョロつとして頼りなさ気な感じ

だけど、人は見かけによらないもんだな。

「お、おい！ どうした田中！ お前そんなアグレッシブなキャラじゃなかっただろー！」

「俺にもわからん！ だが、こいつに痴漢されている女性の涙を見たら我慢出来なかった！ 今なら素手で岩でも砕けそうだぜー！」

熱血漢だな田中さん。ああいう人がもつと増えれば痴漢も無くなるんだろうな。

「なんだかあの人、イツセイさんみたいですね」

「え？」

「あ、わかるかも。イツセイ君って昔から泣いてる人とか見るのが嫌いだったよね」

「誰かの為に怒る所もお前とそっくりじゃないかな」

「な、なんだよそれ・・・」

「おんやあ？ 照れてるの兵藤？」

「う、うっせえぞ桐生！ ほら、荷物持ってやるからさっさとホテル行くぞー！」

「あ・・・」

乱暴に会話を切り上げ、自分のと桐生の荷物を持ち大股で歩き始める俺の後ろを、他のみんなも駆け足で追いかけて来るのだった。

「・・・兵藤の癖に不意打ちなんて生意気な」

第一百七話 やってやる！ やってやるぞお！

イツセイSIDE

京都サーゼクスホテル・・・それが俺達のお世話になるホテルの名前だった。自分の名前をまんまホテルに使用するなんて、流石魔王様はスケールが違うなあ。

「すげえホテルだな・・・。ウチの学校、こんな高そうな所に二年生全員泊まらせて大丈夫なのか？」

松田がもつともな意見を口にする。俺も悪魔側に来てグレモリー家の凄さを知らなければ同じ様に思っていただろう。てか、このホテルですら、冥界の部長の実家に比べればまだ大人しいぞ。あつちは完全に城だったからな。

ロビーから少し進んだ所の入口を潜ると、ホールにはすでに駒王学園の生徒達が大勢集まっていた。そうして、時間が来た所で点呼等を行い、続いて先生達から注意事項が伝えられた。ロスヴァイセさんから何故か百均について熱く語られた後、彼女から山田先生にバトンタッチした。

「では、これからみなさんそれぞれのお部屋に荷物を置いて自由行動に入ってください。時間は午後五時半までですから忘れない様に。あと、あまり遠くまでいって迷子になってはいけないので、範囲は京都駅までとします」

「真耶ちゃんが迎えに来てくれるなら俺迷子になる！」

「あ、俺も！」

「むしろ俺が迷子になって涙目の真耶ちゃんを迎えに行きたい！」

「え、ええ!？」

そこかしこから野郎どものそんな声があげられる。ちやつかり松田と元浜も参加してやがる。んでもって山田先生がテンパっている。やっぱり可愛いなああの先生。年上なはずなのにたまに年下に見えるちやうんだよな。

「こらあなた達！ 先生をからかってはいけませんよ！」

ロスヴァイセさんが注意する。うーん、まだ先生になって日が浅い

のに、何だか貫禄があるな。真面目だけどちよつと抜けてる所がある
せいか、生徒達からも人気があるんだよな。噂じゃ、山田先生とロス
ヴァイセさんでそれぞれ派閥が出来てるらしいし。

ともかく、長かった説明が終了し、俺達はそれぞれに部屋の鍵を受
け取って自分の部屋に向かう事になった。このホテルは二人組の洋
室らしいが、その関係で俺だけが一人余ってしまったらしく、一人部
屋になった。少し寂しい気もするが、先輩達の所へ潜ったり、イメト
レする分には一人の方が丁度いい。

「つーわけでイツセー。お前の部屋の鍵はこれだ」

アザゼル先生から鍵を受け取り、俺は松田と元浜と一緒にエレベ
ーターに乗り込んだ。せっかくだし、こいつらの部屋でも覗いてみよう
かな。

松田が鍵を開け、中へ入る。それに続いて俺も入ると、まず目に飛
び込んだのは大きくて立派なベッド。そして、京都駅周辺を一望でき
る窓からの風景だった。

それらに興奮する二人のはしやぎっぷりを眺めた後、俺は自分の部
屋へ向かう事にした。男子が泊まる階から二つ上に上がった階の
隅・・・そこが俺の部屋だった。

「ここか・・・」

他の部屋とは異なる和風の引き戸を開けると、そこには八畳一間の
空間が広がっていた。一応テレビやテーブルは揃っているが、どれも
古臭いものばかりだった。

「おいおい、いくらなんでもこれは酷くねえか！」

「旅行資金のやりくりがこんな所に影響するとは。同情するぞイツ
セー」

「? 別にそこまで言うほどでもないと思うがな」

そりゃさつき見た部屋と比べれば数段劣っているとは思いますが、そも
そも、俺は以前もつと酷い環境で何日も過ごした事があるのだ。あの
日々に比べれば、ここは天国さー!

「お、おい松田。イツセーの顔見ろよ・・・」

「諦め? いや・・・悟っているのか? ともかく、コイツは別に強がつ

てるわけじゃない。本気でここを気に入ってるんだ」

「ひゃっほう！ 見ろよ二人とも！ トイレどころか風呂までついてるぞー！」

「ここなら用を足している時も体を洗っている時も変な生き物やドラゴンに襲撃される事は無い。正に俺だけの城だぜえ！」

「わかった！ わかったから落ち着けイツセー！ そうだ！ 今日の夜は俺が持つて来たお宝DVDと一緒に見よう！ そうすりやお前だつてきつといつものお前に・・・」

「お宝DVD？」

「え？ ってドワオ!? ロスヴァイセ先生!？」

いつの間にかロスヴァイセさんが俺達の背後に立っていた。露骨に視線を逸らす松田達に首をかしげつつ、ロスヴァイセさんが耳打ちして来た。なんでも、この部屋はこちら側・・・つまり悪魔関係の話をする時に使う為に部長が用意してくれたのだとか。

「とはいえ、あなただけこんなお部屋にしてしまつて申し訳無いと思つてます」

「ははは、何言ってるんですかロスヴァイセさん。むしろ、俺だけの為にこんな良い部屋を用意してもらつて嬉しきしか感じてませんよ」

(なんとという優しい笑顔。不満を一切出さず、この年でこれだけの氣遣いは中々出来る事ではない。・・・兵藤君の評価を上げなくてははいけませんね)

「ロスヴァイセさん？」

「とにかく、そういう事です。私はこれから教師の会合があるので失礼しますね。あなた達は午後からの自由行動を楽しんでください。ただし・・・京都の方々に迷惑をかける事はしないように」

そう言つて、ロスヴァイセさんは立ち去つて行つた。残された俺達は今彼女が口にした自由行動について話し合う事にした。

「自由行動か・・・どうする?..」

「行先はお前等に任せる」

どこへ行くこうが、俺がやるべき事は変わらないからな。

「それなら、俺から一つ提案がある」

京都の地図を取り出す元浜。俺はコイツの言う提案に耳を傾けるのだった。

イツセイSIDE OUT

アーシアSIDE

私は今心の底から実感していた。・・・隠し事は必ずバレてしまうものだ。

「なるほどねえ・・・。これを隠してたわけか」

「がうー」

ベッドに正座する私の前で、桐生さんがチラリと床へ目線を落とす。そこには尻尾をフリフリさせながらお座りしているスコルちゃんの姿がある。あうう・・・まさか鞄の中に紛れ込んで着いて来ちゃうなんて。

新幹線の中で鞄を開けたら、私の着替えや下着に包まっているスコルちゃんと目が合った。見間違いだと、前日に一緒に寝たから幻を見ちやっただと自分を納得させようとしたけれど、結局もう一度確かめる勇氣は私には無かった。

お部屋に入った所で、一緒のお部屋になった桐生さんに気付かれないう様に鞄を開けるつもりだった。けど、桐生さんはお部屋に入った所で突然鞄を開けて欲しいと言つて来た。

明らかに気付いてる感じの視線を向けられ、私は大人しく鞄を開けた。最後の手段としてぬいぐるみです！ と誤魔化そうとした。けれど、私の最後の抵抗は、抱き上げると同時にスコルちゃんが鳴き声を上げた所で呆気無く終了した。

「アーシアがこんな可愛い犬を飼ってるなんて知らなかったな。ねえ、なんて名前なの？」

「ス、スコルちゃんです」

「ふーん、よろしくねスコル」

「くるるる」

桐生さんが声をかけるけど、スコルちゃんは大きなあくびをして床に丸まってしまった。あんな狭い所に長い時間いたから疲れちゃっ

たのかな？

「あはは、マイペースなヤツだね」

「あ、あの桐生さん。この子の事・・・」

「みなまでいわなくていいよ。着いて来ちゃった以上仕方無いし。私も動物嫌いじゃないからね。帰るまで、何とかバレずに乗り切ろう」
「あ、ありがとうございます！」

やっぱり桐生さんは優しい人です。私の知らない知識を色々教えてくださいだったりするだけじゃなくて、こうやってご迷惑をおかけしても笑って許してくださるのだから。

「とはいえ、万が一先生にばれても面倒ね。・・・ここは一人くらい味方に引き込んだいた方が」

「味方・・・ですか？」

「うん、とりあえず私に任せといて。絶対に悪い様にはしないから」

「は、はい！ よろしくお願いします！」

「さて、その子の事は一旦置いて。私達はこれからの予定を・・・」

その時、桐生さんの携帯が鳴った。

「ああ、もしもし。・・・うん、はいはい了解。ゼノヴィアとイリナにも声をかけるわ」

通話を終えた所で桐生さんに声をかける。

「もしかして、イツセーさんですか？」

「残念。元浜だよ。とりあえず、みんな下に降りて来いってさ」

「わかりました。それじゃあ行きましょう」

「スコルは？ そのままでいいの？ なんだったらまた鞆に入れて連れて行けば？」

「大丈夫です。スコルちゃんは一度眠るところから声をかけない限り起きませんから」

「それはそれで問題あると思うけど・・・まあいいわ。戸締りしつかりしとけば大丈夫でしょ」

という事で、私と桐生さんはスコルちゃんをお部屋に残し、ゼノヴィアさんとイリナさんと一緒にエレベーターで下へ向かうのだった。

イツセーSIDE

京都駅から電車で一駅進んだ稲荷駅・・・そこから下車する事で伏見稲荷の参道へ入れる。俺達の自由行動の目的地はそこに決定した。

「・・・にしても、まさかスコルがアーシアに着いて来るとはな」

参道への道すがら、俺はゼノヴィアとイリナと並びながらそう零した。

「アーシアさんが言うには、いつの間にか鞆の中に忍びこんでいたらしいけど・・・」

「・・・本当にそうだろうか？」

「どういう意味、ゼノヴィア？」

「いくらなんでも、神喰狼がいなくなった事に神崎先輩が気付かないはずが無い。それなのにスコルはここにいる」

「まさか・・・気付いていて黙っていたっていうの？ 何でそんな事・・・」

「そもそも、私は不思議だったんだ。先輩がアーシアを大切にしている事は私も十分理解している。だが、ここは冥界ではなく人間界だ。先輩からすれば未熟極まりない私達ではあるが、悪魔や天使である私達に人間相手の護衛をしてくれとわざわざ頼むだろうか？ もしかしたら、私達が気付いていないだけで、真にアーシアに迫る危機は別にあるのではないだろうか？」

「別の危機？ ゼノヴィア、あなたもしかして、この京都で何か起こると思ってるの？」

「その方が納得がいくんだ。だから保険としてスコルを送る事にした。イツセー。イリナ。これがどういう事かわかるか？」

「・・・神殺しの牙を護衛にしなければならぬほどの相手が出て来るとはかもしれないって事だよな」

「そして・・・私達だけではアーシアを守りきれないと判断されたようだ」

ツ・・・！ なんとなく察してたけど、言葉にするとキツイな。ま

さか、開始前から既に力不足の烙印を押されていたなんて。

「そんな顔をするなイツセー。私達はこの上なく頼りになる味方を得たのだぞ。守りに関してはスコルに任せて、私達は私達の役目を果たせばいい」

・・・そうだな。それに、考えようによつては、先輩は俺達を心配してスコルを送ってくれた事になる。うん、そう思う事にしよう。

「今話した事は全部私の想像に過ぎない。だが、神崎先輩が無駄な事をするはずが無い。それだけは頭に置いておいた方がいい」

「一応アザゼル先生達にも相談しておきましょうよ」

「賛成だ。帰ったら話してみよう」

そうやって今後の方針を話し合っている俺達の耳に、桐生のデカイ声が届いて来た。

「アンタ達！　ぐずぐずしてると置いていくわよ！」

どうやら話している間に随分離されてしまったようだ。俺達は会話を中断し、駆け足で桐生達を追いかけるのだった。

・・・
・・・

歩き始めて既に数十分が経過していた。もうすっかりバテバテの元浜を最後尾に、俺達の伏見山への挑戦は続いていた。

「うわあ！　素晴らしい景色ですね」

「アーシア、写真撮るからこっち向いて！」

風景に感動するアーシアと、そんな彼女を写真に収める桐生。そんな二人を一瞥し、俺は階段を駆け上がる足に力を込めた。

「みんな、俺ちよつと先にてっぺんまで行って来るわ！」

みんなに断りを入れ、俺はダツシユで階段を上り始めた。やつぱり、山に登ったら頂きを見ないといけない・・・という思いに駆られたわけではない。・・・山頂付近から感じられる妙な気配。その正体を知る為だ。

他の観光客のみなさんの邪魔にならない様に階段を上って行き、しばらくして頂上らしき場所へ着いた。そこには古ぼけたお社だけが

存在していた。

周りには俺以外誰もいない。せつかくなので、俺はお社の前で手を合わせた。

「・・・どうか、この修学旅行が無事に終わります様に」

全身全霊で念じる。・・・だが、願うばかりで何もしなければ叶うものも叶わない。故に、俺は俺に出来る事を全力でやらなければならぬ。

「・・・出て来いよ。そこにいるのはわかってんだ」

この場所へ辿り着いてからずっと視線を感じていた。しかもそれに敵意が込められていれば、いくら俺でも気付かないわけが無い。

突風で木々が大きくざわめく中、そいつ等は姿を現した。山伏の格好で黒い翼を生やし、頭部が鳥の連中と、狐のお面をかぶった神主姿の連中、そして、二メートル以上の身長で、全身が真っ赤な怪物。

「イツセー！」

そこへ、絶妙のタイミングでゼノヴィア達が姿を現した。アーシアもゼノヴィアにおんぶされて一緒だ。

「悪魔に天使・・・。それに人間？　そうか！　その人間、おそらくヤツ等の仲間だな！　ついに手掛かりを見つけたぞ！　貴様！　八坂様をウボアツ！」

鳥頭の一人がアーシアへ近づこうとした瞬間、俺は迷い無く神器を発現させてそいつの顔を思いっきりぶん殴った。殴り飛ばした鳥頭はそのまま木々の向こうへ消えて行った。

「・・・おうコラテメエ等。今アーシアに何しようとしやがった？」

「なっ!?　あの距離を一瞬で!?!」

思いっきりドスの利いた声を出しながら連中を睨みつける。そんな俺の脳裏に、出発前の部長の言葉が蘇る。

『いい、いい、イツセー?　何があなたにそんな雰囲気を漂わせているのかはわからないけど、京都を壊しては駄目よ?　他の勢力にも怒られるし、悪魔業界にも迷惑をかけてしまう恐れがあるから』

京都は各勢力にとっても重要な場所らしい。だからやり過ぎないようにと釘を刺されたわけだが・・・そんなの関係無い。

「・・・加勢するぞイツセー」

「アーシアさんの周囲は任せて」

アーシアの守りをイリナに任せ、俺はゼノヴィアにアスカロンを渡す。この日の為にデュランダルの強化を進めていたらしいが、結局間に合わなかったのだとか。なので、必要に応じてアスカロンを貸す事になった。

「よおゼノヴィアにイリナ。後で各勢力のお偉いさん方に説教されるのと、神崎先輩にOSHIOKIされるのとどっちがマシだと思う？」

「ふ、私がこの世に生を受けて今まで、そんなにも答える必要の無い質問は無かったぞ」

「ミカエル様からはある程度好きにやっていいとの許可は頂いているわ」

「上等お。おいテメエ等あ。なんのつもりで襲撃かまして来たか知ってたこつちやねえがなあ・・・」

俺は手の骨を鳴らしながら、ゼノヴィアは剣の切っ先を向けながら、そしてイリナはアーシアを背後に庇いながら同時に言葉を発した。

「「テメエ（貴様）（あなた）等（達）は選択を間違えた・・・」」

「「「ッ!?!」「」」」

第一百八話 本能と理性の狭間

イツセーSIDE

「そいやさああああああ!!!」

「たわばっ!?!」

手近な鳥頭へ一発ブチ込む! それだけで鳥頭は吹っ飛んで行く。おいおい、脆すぎんぜ鳥頭さんよお! その程度で今の俺達と止められると思うなよお!

「ほらほらどうしたあ! 私に攻撃を当てられない様では話にならないぞお!」

四方八方から迫る攻撃を、ゼノヴィアは最小限の動きとアスカロンによって全て捌ききる。いいぜいいぜえ。お前も乗って来たじゃねえかよゼノヴィア。

「無理してそいつ等を相手取るな! ともかくあの娘を確保・・・!」
「誰を確保するですってえ・・・?」

そこら辺にあつた木の棒に聖なるオーラをありつたけ込め、イリナが周囲を睥みつける。それだけで、アーシアに近づこうとした連中の動きが止まった。

(す、凄い! なんだか今の皆さんもの凄く頼りになります! ...でも、今の皆さんを見てみると、黒歌さんに貸して頂いた漫画に出て来た不良さん達を思い出してしまふのは何ででしょう)

「ゴアアアアアアアア!!!」

鳥頭や狐を何人か片付けた所で、奥に控えていた赤い巨人が両腕を振り上げて襲い掛かって来た。へ、こっちから仕掛ける手間が省けたぜ! いくぞドライブ!

——いつでもいいぞ相棒!

「っしやあ! 逝けやオラアアアアアアア!!!」

『Explosion!!』

拳と共に打ちつけた力を解放する。同時に巨人の腹がベコリとへこみ、巨人は口から血を吐き出しながらその場に崩れ落ちた。

「な、なんだ! なんなんだコイツ等は!」

それはこっちのセリフじゃボケ。とりあえず一人とつ捕まえて正体をゲロさせてやろうか。そう思つて戦闘不能にした鳥頭の元へ近づこうとしたその時……。

「双方矛を収めるのじゃ！」

甲高いその声は、幼い女の子特有のものだった。声のした方へ俺達が一斉に振り向くと、そこには巫女装束を身に付けた女の子が立っていた。その頭部には、獣の耳が生えている。もしかして、小猫ちゃんと同じく妖怪の子なのかもしれない。

「く、九重様……！」

「何をやっておるお主等！ 不用意に悪魔や天使に手を出すなど言われておるであらう！」

「で、ですが九重様！ この者達はヤツ等の仲間の可能性が！」

「たわけ！ その者達の服装をよく見るのじゃ！」

女の子にそう言われ、鳥頭達が俺達の制服をジロジロチェックする。瞬間、鳥頭達の表情が強張った。

「この服はまさか……!?!」

「うむ、間違い無く、兄様が着ていた物と同じじゃ。ならばこの者達がヤツ等の仲間であるはずが無いであらう」

「た、確かに九重様のおっしゃる通り。であれば、我等は何の罪も無い者達へ危害を加えようとしてしまったのか……！」

「我等は何という事を……！」

「盛り上がっている所悪いが、そろそろ俺達にも説明してくれねえか？」

そろそろ我慢出来なかつたので声をかけると、女の子は俺達に向かって深々と頭を下げた。

「すまんの。そうしたいのは山々じゃが。まずはこやつらの手当てをしてやらねばならん。おそらく近い内に再び顔を合わせる時がある。その時に改めて謝罪させてもらうので、この場はひとまず下がらせてもらうぞ」

次の瞬間、突風と共に女の子達の姿は消えてしまった。

「……にしても、赤剛鬼を拳一つで倒すとは……兄様以来じゃな」

最後に、関心と驚きの混ざったそんな言葉を残して。

「・・・行つてしまったな」

ゼノヴィアが剣を収めながら連中が消えた方向へ目を向ける。な
んとも腑に落ちない終わり方だったが、俺達の使命は無事に果たせ
た。

「アーシア、怪我は無いか？」

「はい。みなさんが守ってくれましたから」

「よし・・・！」

そして、俺達はハイタッチをし、互いの健闘を称え合うのだった。

Mission 01 『謎の連中からアーシアを守れ』クリア。

・・・

・・・

・・・

襲撃を退けた後、俺達は松田達と合流し、伏見稲荷での観光を終え
ホテルへ戻った。そして、豪華な夕食を心ゆくまで堪能した。いや
あ、一仕事終えた後の飯はやっぱり美味かったぜ。

そんでもって夕食後、俺達はアザゼル先生とロスヴァイセさんに襲
撃を受けた事を報告した。それを受けた二人は困惑していた様だっ
た。

それからスコルについて、ゼノヴィアの考察も含めて話そうとした
けど、先生はすぐに確認して来ると言つてどこかへ行つてしまつた。
なので次の機会へお預けとなった。

先生達と別れ、ロビーで松田達と明日の予定を話し合い、俺は部屋
に戻った。その際、二人が妙に興奮していたのが気になったが、俺は
しばらくしてその理由に気付いた。

部屋に戻り、布団の上でジツと過ごす事十数分・・・。

「さて・・・行くか」

俺は立ち上がり、部屋を抜け出した。そのまま大浴場のある階まで
下りて行く。

「あ、イツセイさん！」

俺がその階へ到着すると同時に、アーシアとゼノヴィア、イリナに

桐生がタオルやら着替えを持って姿を現した。

「やあ、アーシア。これからお風呂か？」

「はい！ イッセーさんはどうしてここに？ 男子のみなさんの入浴時間はまだ先ですよ？」

「そうだったけ？ あはは、俺とした事が勘違いしちやつたな。すぐに戻るよ。それじゃアーシア、ゆっくりお風呂タイムを楽しみなよ」
「はいー！」

ニコニコ顔のアーシアが大浴場の入口へ消えて行く。そうだ、アーシア。キミは何も心配しなくてもいい。

「・・・頼むぞ、イッセー」

「中の事は私達に任せておいて」

「ああ。何であろうと侵入はさせねえ。全てここで止めてみせる」

続いて、ゼノヴィアとイリナが俺の肩を叩きアーシアの後を追う。

残された桐生が疑わし気な視線を送って来た。

「アンタ・・・まさかこんな正面から覗くつもりだったの？」

「・・・はは」

思わず笑い声を洩らしてしまった俺を見て、桐生が首を傾げる。

「何よその笑い？」

「心配すんな。そんな事するつもりはねえよ。だから安心して入って来い」

なんだか可笑しな気分になってしまい、俺は思わず桐生の頭を撫でてしまった。・・・さて、ここにいたら変な疑いをかけられちゃうし、ひとまず非常階段の方へ向かうとするか。

「な、何よ・・・調子狂うわね」

桐生の眩きは俺の耳には届かなかった。

イッセーSIDE OUT

ロスヴァイセSIDE

これから女子の入浴時間になる。そうなれば警戒しなければならぬのが男子による覗きだ。特にあの松田君と元浜君には注意しなければならぬ。

それと、一応兵藤君も。けれど、最近の噂を聞くと彼はそんな事しない様に思えるけれど。

そんな事を考えていると、非常階段の扉が開き、なんと兵藤君が姿を現した。な、なんとという事だろう。やっぱり噂なんて当てにならないのね。

「見損ないましたよ兵藤君！ 覗きなんて犯罪行為に手を染めるなんて！」

「ファッ!? 何でいきなりdisられてんだ俺!? ま、待ってください
いロスヴァイセさん！ 俺は覗きをするつもりは無いですって！」

「え？ じゃ、じゃあどうしてここへ・・・？」

「それは・・・」

俺が事情を説明すると、ロスヴァイセさんは慌てて頭を下げて来た。

「ご、ゴメンなさい兵藤君。まさか、あなたがこちら側に回るなんて」
「ロスヴァイセさん。この場所は俺に任せて、あなたは大浴場の入口へ行ってください。流石に正面から攻めて来るとは思いませんが、可能性はゼロじゃないですから」

「いいんですか？ なんならシトリー眷属の誰かをつけて・・・」

「いえ、俺一人で十分です」

「わかりました。頼みますよ兵藤君」

ロスヴァイセさんが扉の向こうへ姿を消す。さて・・・俺の予想が正しければ、そろそろ来るはずだが。

「イツセー!？」

来たか・・・。階段の上から松田と元浜。そして数人の男子が姿を現した。

「部屋にいないから探したぞイツセー。何でこんな所にいるんだよ？」

「それはこっちのセリフだ。何しに来たお前等」

「そんなの、女風呂を覗きに来たに決まってるじゃねえか！」

悪びれる様子も無く元浜が答える。すると、後ろにいた男子が声をあげた。

「おい元浜！ いい物見せてやるって……まさか覗きの事がよ！」

「それ以外に何がある？」

「ぎげんなコラ！ バレた時の事考えろや！」

「リスクを恐れる者に栄光は訪れない！ だから俺は挑戦するのだ
！」

「というわけだイツセー。お前も俺達と一緒に理想郷へ向かおうぜ」

「――断る」

きつぱりと拒絶の意思を示す。すると、松田達は愕然といった表情を俺に向けて来た。

「あ、あれ……。おかしいな。俺の耳がおかしくなってなけりや、お前今断るって言ったか？」

「ああ。俺は女風呂を覗くつもりは無い。そして、覗こうとするお前等を見逃すつもりもない」

「なっ!? 女風呂だぞ!? 裸体パラダイスだぞ!? それを覗かないなんて正気か!？」

「そうだな……。覗きたくないって言ったら嘘になる」

最近じゃ大人しくなっただけの、暑苦しくなっただけの好き勝手言われているが、俺の女の子好きな部分は無くなってしまったわけじゃないのだから。

「だったら……!」

「それでも俺は覗くわけにはいかない。俺は……。俺はまだ死にたくねえんだよー!」

『ぐすん……。イツセーさんに覗かれちゃいましたあ』

『……。モードF発動』

わかっているもんね！ 絶対こうなるもんね！ どう考えても黒焦げアフロじゃ済まないもんね！

「この兵藤一誠がいる限り、何人たりともここは通さない！ それでも覗きたいというのなら、俺の屍を越えて行けえええええええええ!!!」

自身を奮い立たせるよう、腹の底から声を出す。

「くっ……。ここでK I S H I B Eのセリフとは、本気なんだなイツ

セー」

「手伝うぞ兵藤！」

一人の男子が俺の隣へ駆け下りて来た。さつき元浜へ抗議の声を上げたヤツだ。

「お前……」

「今、あそこには俺の彼女も入っているはず。それをむぎむぎコイツ等に見せるわけにはいかない」

「わかった。なら一緒にやるぞ！」

「……誤解してたよ。お前ってこんなに熱いヤツだったんだな。何だか俺も燃えて来たぜ」

思いがけない援軍を得て、俺の女風呂を巡る戦いが幕を開けたのだった。

イツセーSIDE OUT

イリナSIDE

『——俺の屍を越えて行けえええええええ!!』

イツセー君の叫び声が私の耳に届く。たぶん、聞こえたのは私とゼノヴィアだけだと思う。

「やはり覗きを企んでいたヤツ等がいたか」

「ええ。でもイツセー君がいれば大丈夫よ」

「そうだな。アイツはやる時にはやる男だからな」

「ところで話は変わるんだけど。私がない間に神崎先輩と何か進展はあったの？」

私がそう言うと、ゼノヴィアはキョトンとした。

「なんだ藪から棒に」

「えへへ、ちよつと気になっちゃって。ほら、一緒に口説かれた身としてはね？」

「ふうん、アーシアってまだ生えてないんだ」

「はうあ!?! み、見ないください桐生さん!」

押し黙るゼノヴィア。反対からアーシアさんと桐生さんのそんな会話が聞こえて来た所で、ようやく口を開いた。

「・・・別に何も無いさ」

「え、そうなの？」

「お前はまだ先輩と関わるようになって短いからわからないだろうが、あの人の傍にいととな、自分との格の違いを嫌でも理解させられるんだ。先輩の事を聞けば聞くほど、見れば見るほど、自分なんかではとても釣り合う様な人では無いと気付いてしまう」

「そんな事は・・・」

「元々、私は恋愛というものに興味は無かった。だから私が先輩へ抱いているこの想いが恋なのかどうかはわからない。・・・ただ、それに気付いてしまった時、何とも言えない虚しさを感じてしまったのも事実だ」

それって、もう完全に恋だと思っただけだ。

「今の私に出来るのは、精々特訓に付き合ってもらっただけだ。・・・でも、私はそれで構わない。先輩と二人で何かに打ち込む事が出来る。・・・それだけで私は幸せなんだと思う」

そう締めくくったゼノヴィアの顔は、どこか満足している様に見える。ひよつとして、自分の中のモヤモヤを吐きだしてスッキリ出来たのかもしれない。

「・・・なんというか。あなたってそんな健気な人だったかしら？」

「さあな・・・自分でもよくわからないよ。というか、そういうお前はどうかなんだ？」

「え？ あ、わ、私の事はどうでもいいじゃない！ ほら、アーシアさんと桐生さんが移動するから私達も行きましょう！」

誤魔化す様に立ち上がり、私は二人の後を追いかけた。

・・・なんで誤魔化してしまったんだろう、私？

イリナSIDE OUT

イツセーSIDE

覗きを企んだ全員をとっちめて先生に引き渡し、女子の入浴時間が終わるまで、俺は非常階段で待機し続けた。そうしてようやく役目を終えた所で、アザゼル先生が姿を見せた。

「おう、ご苦労さんイツセー。ロスヴァイセから事情は聞いてるぞ」
「先生、何か用ですか？」

「ああ、俺とお前達に魔王少女様から呼び出しがかかった。これから近くの料亭に行くぞ」

魔王少女つて・・・セラフオール・レヴィアタン様か！

Mission02 『覗き魔をぶちのめせ』クリア。

.....

しばらくして、俺達は先生と共にホテルを出て街の一角にある料亭へ足を運んだ。そこには先生の言っていた通りセラフオール・レヴィアタン様がいらっしやった。

さらに、匙を始めとするシトリー眷属の子達もいた。そうして全員が揃った所で、魔王様が何故ここにいるのか説明が行われた。

曰く、この京都の妖怪のみなさんと協力体制を得る為にわざわざお越しになったらしいのだが、どうも良く無い事が起こったらしい。

「この地を束ねていた九尾の御大将が先日から行方不明になってるんだって」

ツ・・・！ それって割と真面目にヤバイ事なんじゃないのか？

「アザゼルちゃんからあなた達の報告は聞いてるよ。おそらく、あなた達を関係者だと勘違いしちゃったみたいだね」

「つまり、こここのトップである妖怪が攫われたって事だ。まあ、間違い無く『禍の団』が絡んでやがるな」

ああ、またあいつ等か。懲りないというかなんとというか・・・。

「事が事だけに公には出来ないわ。だから、何とかして私達だけで事を収束させないといけないの。私はこのまま協力してくれる妖怪のみなさんと一緒に動くつもりよ」

「なら俺も動かせてもらおう。・・・ったく、ここなら思う存分〴〵ゆっくり〴〵出来ると思ったのによお」

「先生、俺達は・・・」

「お前等はまだ動かなくていい。せつかくの修学旅行なんだからな。」

とりあえずは楽しめ。必要になったら俺からまた指示をするからよ」
そういう事で、俺達はこのまま旅行を続けるという結論で解散となった。・・・あ、またスコルの事報告するの忘れてしまった。次こそはちゃんと忘れない様にしないと。

・・・

二日目、この日、俺達は清水寺へ行く事からスタートした。ちなみに、今日はスコルも一緒だ。今はアジアの鞆の中ですやすや眠っている。

三年坂から始まって清水寺、銀閣寺、そして金閣寺と、観光名所を次々と回った。時計を見ると、既に午後二時を過ぎていた。

「ひ、ひったくりよ！ 誰か捕まえて！」

一杯歩いて疲れたのでお茶屋で休憩していると、外から女性の叫び声が聞こえて来た。すぐに出てみると、こっちに向かって鞆を持った男が走って来ていた。

「野郎、逃がすか・・・」

「えいしやおらああああああ!!」

俺が男の前に立ちまはだかろうとした次の瞬間、横から飛び込んで来たスーツ姿の中年男性の飛び膝蹴りが男の顔面に突き刺さり、男は悲鳴と共に倒れた。

「お、お見事です課長・・・!」

そのまま男を取り押さえる中年男性に、部下と思わしき男性が驚きの声を上げている。

「がははは！ まさか健康の為に始めたムエタイがこんな所で役に立つとはのお！」

うーん、昨日の田中さんといい、京都の人ってアグレッシブな人が多いんだな・・・。

「兵藤君」

そんな風に男性達を眺めていると、ロスヴァイセさんがやって来た。

「アザゼル先生からあなた達を迎えに行くよう言われました。今から私と一緒に来て来てください」

「え、でも今は松田達が・・・」

俺の言葉は最後まで続かなかつた。な、なんだ？ 何でアイツ等寝てんだ？

「すみません、勝手ではありませんが、あの方達には眠って頂きました」
驚いている俺の前に、お茶屋の店員さんが姿を見せる。・・・ってあれ!? いつの間にか獣耳と尻尾が生えてる!? じゃあこの人も妖怪!?

「改めて自己紹介を。私は九尾の君に仕える狐の妖でございます。昨日の件で我等が姫君が謝罪の場を設けたいとの事でした、皆様をお連れしたく存じます」

昨日の件？ 姫君？ ……あ、もしかしてあの女の子の事か！

「という事です。九尾の御大将の事も含め、全員で話をするのであなた達も同行してください」

突然の事に頭が追いついていないが、とにかく行かなければならぬ。俺達はそのまま女性の後について行き、金閣寺の敷地内にある人気がない鳥居を潜った。

その瞬間、俺達は別世界へと足を踏み入れていた。

薄暗い空間に古い家屋。そして・・・妖怪達が俺達を出迎えた。

「悪魔か？」

「天使もいるぞ」

「おや、人間もだ。珍しい事もあるものだ」

そんな会話があちこちから聞こえて来る。そのまま家屋群を抜けると、今度は林が現れ、さらにそこを通り過ぎた所で、巨大な赤い鳥居が出現した。

その向こうに佇むデカイ屋敷・・・その前にアザゼル先生達、そして・・・予想通りあの女の子が立っていた。

「よくぞ来てくれた。私は京都に住む妖怪達を束ねる者——八坂の娘である九重と申す」

堂々とした口調で、その子は自分の名を名乗るのだった。

第百九話 呼ばれて飛び出て「フアフアフアツ !?!」

イツセーSIDE

九重と名乗った女の子は、そのまま俺達に向かって深々と頭を下げた。

「まずは昨日の謝罪を。お主達の正体の裏付けもせず、襲撃してしまつた事、心よりお詫び申し上げます。あの者達はあの者達なりに母上を心配して行動したようじゃが、こちらの事情を知らないお主達からすれば迷惑極まりなかつたであろう」

確かに、あの時は何で襲われたかわからなかつた。けど、今はあつちの事情とやらも多少は理解している。それに、こうして謝つてもらつたのだから、俺としては特に何かを言うつもりは無い。みんなも同じだつたようで、それぞれに気にしていない旨を口にした。

「・・・お主達の寛大な心に感謝を」

「なんか、立派だな。お母さんが攫われて辛いだろうに」

「イツセー君!」

ツ・・・。しまった。いくらなんでも今のは無神経過ぎたか。

「わ、悪い」

「確かに母上がいなくなつて不安じゃ。今もどこかで辛い目に遭われているのかと思うと胸が張り裂けそうじゃ。しかし、それは他の皆も同じこと。ここで私まで弱気な所を見せては、皆が益々落ち込んでしまう。だからこそ、母上の娘である私は、たとえ見せかけであろうとも、弱い部分を見せてはならんのだ」

「うう、ご立派です九重様」

「へ、流石ボスの娘。その幼さで既に大将の片鱗を見せてやがる」

その言葉に、傍にいた鳥頭（天狗らしい）のじいさんが号泣し、アザゼル先生が感心したようにそう評する。でも、確かに俺もそう思う。自分が一番辛いだろうに、それでも別の誰かの為にそれを我慢するなんて簡単に出来る事じゃない。

「そこまで大層な事では無い。私は私に出来る事をする。・・・兄様に教えて頂いた事じゃ」

「兄様？ 誰だ？ 八坂姫に息子がいるなんて話聞いた事ねえぞ」

アザゼル先生が怪訝な表情を浮かべる。でも、確か昨日も兄様がどうとか言ってたよな。誰の事なんだ？

「私が勝手にそう呼んでいるだけじゃ。さらに言えば、兄様は妖怪では無く人間じゃ。そういうえば、ちょうど去年のこの時期じゃったかな。私が兄様と出会ったのは」

「あの時は大変でしたなあ」

懐かしむ様に語る九重とじいさんに、俺はつい気になって尋ねてみた。

「その兄様ってどんな人なんだ？」

「聞きたいか？ ふふふ、ならば聞かせてやろう。私と兄様の出会いを！」

このドヤ顔・・・どうやら聞いて欲しかったみたいだな。

「あの日、私は母上と喧嘩し、供も付けずに京の街へ飛び出した。そうやって一人彷徨っていた所へ兄様を通りがかったのじゃ」

その時、自分の耳や尻尾を見ても驚かなかった兄様に興味が湧いた九重は、気まぐれで京都の街の案内役を買って出たらしい。でもって、それからしばらく兄様と一緒に色々回っていたのだが、そこへ飛び出した九重を心配した妖怪の皆さんが現れ、兄様が九重を攫おうとしていると勘違いして襲い掛かってしまった。当然、誤解を解こうとした九重だが、本当に驚くのはここからだった。

「兄様は兄様でそやつ等が私を攫うつもりだと勘違いしてな、反対に全員叩きのめしてしまったのじゃ！ あの時はビックリしたぞ！」

天狗達の連携攻撃を難なく避け、狐の炎を受けてもものともせず反撃し、私を抱えたまま赤剛鬼を拳による一撃であっけなく沈めてしまったのじゃからな！」

赤剛鬼って俺が倒したあの赤い巨人だよな。でも、俺はブースト＋テンションで押し切ったって感じだけど、その兄様って人は純粹にワンプンでブツ倒したって事？ ははは・・・それは本当に人間ですか

？

「私はすぐに兄様を止めようとしたのじゃが、「大丈夫。必ずキミをお母さんの所まで送り届けてみせる」と言われてしまつてな。．．．その時の至近距離から見た兄様の凛々しいお顔に、私は何故か何も言えなくなつてしまつた」

やるな兄様。そんな臭いセリフを堂々と口に出来るなんて。おかげでフラグっぽいもんが建つてるじゃん。

「私も九重様をお助けしようとおの方の前に立ち塞がりましたが．．．正直生きた心地がしませんでしたぞ。あれほどまでの殺気はかつて八坂姫が激怒された時に迫るものがありましたな。仲間の者の中には、あの御人の髪色だった蒼色を見ただけでしばらく震える者がいたくらいですからな」

「ふふん、私は逆に蒼い物を集める事に凝つてしまつたがな。ほれ、この首飾りも蒼いじゃろ？」

思い出すだけで顔を青くさせるじいさんと、自慢げに首飾りを見せて来る九重。滅茶苦茶強くて蒼い髪をした臭いセリフを口にする兄様。．．．あれ、おかしいな？　そんだけしか情報がないのに、なんで俺の頭の中にはある人物のイメージが浮かぶんだらう。

「そうやって襲撃を退けている間に、いつの間にか金閣寺の近くまで来ていてな。ここまで来れば母上の所まであと少しじゃつた。じゃが、飛び出して来た身としては母上にどんな顔をして会いに行けばいいかわからなかった。そんな私の様子がおかしいと思つたのか、兄様は事情を訪ねて来てな、つい口を滑らせてしまつた」

八坂姫の娘として、自分も皆の為に何かしたい。だけど、八坂姫はそんな九重に何もなくていいと言つた。それが喧嘩の原因らしい。「その言葉は思つた以上に私の心に突き刺さつた。まるで、自分は必要無いと思つてしまうほどに。じゃが、そんな私に兄様はこう言つた。私の事を想っているからこそ、母上はそう言つたのだと。まだ幼いキミに、余計なものを背負わせたくないのだと」

その言葉に九重は自分の間違いに気付いた。みんなの為と言つておきながら、結局自分の事しか考えず、周りの気持ちなど知ろうとも

しなかったのだと。

さらに兄様はこう続けた。それでもみんなの為に何かをしたいと思うのなら、まずは自分に出来る事から始めていけばいい。初めから何もかも出来る者なんていない。少しずつ学んで、少しずつ進んでいけばいい。それがいつかは九重の大切な人達の為になるはずだ・・・と。

「どんな小さな事でもいい。私は私に出来る事を全力でこなしていけばいい。それに気付かせてくれた兄様にはどれほど感謝しても足りない。兄様が私にくれたこの言葉は私の一生の宝物じゃ」

「うう、いい話ですね」

ロスヴァイセさんがハンカチで目元を拭っている。うん、俺もまさかこんな所でこんな心温まる話が聞けるとは思わなかった。

「で、そろそろ聞かせてくれよ。その宝物を与えてくれた人間の名前を」

「うむ。兄様の名前は・・・神崎亮真じゃ！」

((あ、やっぱり・・・))

間違い無く、今俺とゼノヴィア、イリナの心の声はシンクロしているだろう。うん、別に驚きはしない。というかそうでないと困る。妖怪相手に無双出来る様な人間様がこれ以上増えてたまるか！

「母上も随分と兄様を気に入っておったぞ。というか、完全に獲物を狙う目をしておったな。何だかそれが気に入らんかったから止める様にいったら頭を撫でられてしまったが、あれは何だったんじやろう・・・？」

うわ、なんとという純粋な瞳・・・。駄目だ、俺には色んな意味で眩し過ぎる。

「あの野郎・・・妖怪とのパイプまで築いてやがるのか」

「総督殿は兄様の事を知っておるのか？」

「ああ知ってるぜ。・・・嫌というほどな」

首を傾げる九重に、アザゼル先生は神崎先輩と俺達の関係、そしてその正体について説明した。案の定、それを聞いた九重は驚きのあまり目を見開いた。

「な、なんと!? 兄様があのフューリーだというのか!」

「そうさ、ヤツこそが、かつて人の身でありながら二天龍から三陣営を救い、この時代になって再び姿を現し、なんやかんややらかして俺の胃に致命傷を与えやがったフューリー様さ」

説明が適当過ぎやしませんか先生……。最後なんか思いつきり個人の事じゃないですか。

「やりましたな九重様! 伝説の騎士殿にご助力頂ければ八坂様の救出は成功するも同然!」

「うむ! 総督殿! 兄様をこの地へ呼ぶ事は可能だろうか!」

「そりや呼ぼうと思えば呼べねえ事も無いが、お勧めは出来んぞ。下手すりや京都が灰塵に帰す事になる」

「え!?!」

「アイツの行動原理は極めてシンプルだ。理不尽に他者を虐げる者をヤツは絶対に許さない。それだけなら聞こえはいいが……。問題はヤツが誰かの為ならばその力を解放する事に微塵も躊躇いをみせない事だ」

「そ、それが何か問題があるのか?」

「……。一つ例をあげてやろう。そこにいるアーシアって娘が以前『禍の団』に与していた悪魔に攫われた事がある。……。その時、ヤツはレーティングフィールドを内側からブチ壊しかけるほどの力を発現させ、上級悪魔の大群をまるでゴミを掃除するかのような勢いで瞬く間に殲滅していった。九重、話を聞くに、ヤツはお前さんの事も気にかけているようだ。そんなお前さんの母親が攫われたと知れば、ヤツは必ず今回の首謀者を血祭りにあげる為にその力を最大限に発揮するだろう。……。そんな力にこの地が耐えられると思うか?」

「ゴクリ……」

アザゼル先生の語りに、九重が冷や汗を流しながら喉を鳴らす。先生、血祭りとかちよつと誇張……。してねえな別に。うん、あった事をそのまんま正直に説明してるだけだわ。

「でもアザゼルちゃん。フューリーさんと呼ぶだけでも敵の動きを制限できると思わない?」

なるほど、それも一理あるな。先輩がただそこにいるというだけで連中に対する抑止力になるってわけか。・・・なんか魔よけのアイテムみたいだな。

「まあ何にせよ、最終的にどうしてもヤバくなりそうだったら呼べばいい。それまではヤツの事を当てにするのは止めといた方がよいぜ」とりあえず、先輩の事については一旦置いておいて、俺達は改めて九条のお母さんの話をする事にした。

そもそも、八坂さんは数日前に須弥山の帝釈天の使者と会談する為に屋敷を出たらしい。けど、その会談の場に八坂さんは姿を見せず、不審に思った妖怪側が調査を開始。八坂さんに同行していた警護の烏天狗を保護した。その烏天狗の最期の言葉から、八坂さんが何者かに襲撃されそのまま攫われた事が明らかになったのだとか。

「八坂姫を攫ったヤツ等が未だにこの京都にいる事は確かだ。九尾である八坂姫がこの地を離れたり殺されたりすればこの地の気が大きく乱れ、何かしらの異変が起きるはずだ。しかし実際はそれらしい予兆は無い。ならば八坂姫はまだ無事であり、攫った連中もまだここにいる可能性が高いってわけだ」

先生の説明に、俺達は予想を確信へと変えた。

「ゼノヴィア、やっぱりあなたのが予想が正しかったみたいね」

「ああ、きつと先輩はこの事を・・・」

「あ？ お前等何の話をしてるんだ？」

ちようどいい、ここで全部ぶちまけちまおう。

「アーシア」

「わかりました。んしょ」

アーシアが鞆の口を開ける。そして次の瞬間、中から出て来た存在に、アザゼル先生達の表情が凍りついた。

「がうー！」

そんなアザゼル先生達など気にも留めてないのだろう。スコルは呑気そうに周囲を興味深そうに眺めているのだった。

.....

「こんのばつきやろおおおおおおおお!!」

説明終了後、俺達を待っていたのはアザゼル先生からのお説教だった。

「なんでそんな超重要案件を俺に教えなかった! ざけんなコラ!

アレか!? お前等が今ここで話さなかったら、俺は知らない間にヤツの怒りに巻き込まれてたかもしれないってのか!」

「だ、だって、説明したくても先生がどつか行ったりしてタイミングが・・・!」

「じゃかあしい! ええい! こうしちやいらねえ! すぐに『神の子を見張る者』から幹部を数名呼び寄せ・・・いや、まずはアースアを誰も手の出せない所へ避難・・・というかスコルの制御どうすんだよおおおお!!」

「も、ももももちついてくださいアザゼルせせせせ先生!!! まままままは深呼吸をををを!!」

「フューリーさん・・・本当に神喰狼をペットにしたんだ・・・」

頭を抱えて絶叫するアザゼル先生&落ち着かせるつもりが自分かと思いつきり動揺しているロスヴァイセさん。そして、興味深そうにスコルを見つめるレヴィアタン様。この違いは何なんだ・・・。

「んぐ・・・!」

先生が懐から小ビンを取り出し、その中からカプセルを二つくらい取り出して口に含んだ。胃薬・・・じゃないよな? 明らかにヤバい色してたし。

「ふう・・・ふう・・・。まさかシャレのつもりで持って来た物を使うハメになるとは・・・」

「せ、先生。今の薬って・・・」

「イツセー・・・世の中には知らない方がいい事もある」

「り、了解ッス」

「で、話を戻すが。フューリーは京都で何かしらの事件が起きると予

見してお前等にアーシアの護衛を頼んだ。だが、お前達では荷が重くなりそうな連中が出て来ると踏んで、さらにスコルを送って来たって言うんだな？」

「は、はい。ゼノヴィアがそれなら辻褃が合うって」

「さ、流石伝説の騎士。凄まじい先見の明ですな」

（そんなレベルじゃねえ。今の意味がわかってんのかロスヴァイセ。フューリーがコイツ等に護衛を命じたのはオーデインのじいさんが来る前だぞ。その時は当然八坂姫も攫われてなんかいなかった。それなのに今回の事件を読んでいた？ 『禍の団』の中にフューリーの味方が潜んでいる？ いや、『禍の団』を憎むヤツが連中を利用するとは思えん。ならば……まさか、未来予知？ くそ、馬鹿らしいと切つて捨てれないのが余計性質が悪いぜ）

黙りこくるアザゼル先生。それから数秒間、何とも重い沈黙が続いた。

「……わかった。お前等の意見やスコルの事、全部ひっくるめて考えさせてもらう。今ここにいないヤツ等にも俺から説明しておく。いか？ くれぐれもスコルを野放しにするな？ マジで頼むぞ？ 本当に頼むからな？」

そんな念入りをお願いされなくたって、俺達もスコルに好き勝手させたらヤバイ事くらい十分理解してますよ。先輩がないここで、コイツの力が解き放たれたら俺達じゃどうしようもないかもしれないし。

「……」

（アーシア？）

アーシアの様子がおかしい。スコルを鞆から出した所からずっと黙ったまんまだ。心なしか気まずそうな表情をしている様にも見える。

（え、え？ スコルちゃんはリョーマさんに言われて私に着いて来たの？ てつきりスコルちゃんがイタズラ心で潜りこんだとばかり。ど、どっちなの？ あうう、頭が混乱して来ましたあ）

「がろうがろう」

「な、なあじい、触ってもいいかの？」

「だ、駄目ですぞ九重様！」

両手をウズウズさせながらスコルへ近づこうとする九重を必死になって止める烏天狗のじいさん。

『禍の団』：話を聞く限りじや英雄派が動いているみたいだけど、本物の英雄が来る前に諦めて帰った方がいいんじゃないかねえのかな。

イツセイSIDE OUT

IN SIDE

「・・・つくしよん！」

「あら、リョーマ風邪でもひいたの？」

「いや、そういうわけじゃないんだが、どうも昨日からくしゃみが止まらなくてな」

「ふふ、誰かあなたの噂でもしてるんじゃない？」

そうだろうか？ 悪い噂でなければいいんだけど。

「あ、それと話は変わるんだけど、この数日中でいいから、私と一緒に冥界に行ってくれないかしら。ミリキヤスがあなたに見せたいものがあるらしいの」

「わかった。キミの都合がいい時に声をかけてくれ」

見せたいものか・・・。なんだろう。面白いものかといいな。

この時、俺は既に処刑台の階段を上り始めていたのだと、俺はその時になって思い出す事になるのだった。

第一百十話 動物好きに悪い人はいません

アーシアSIDE

「はふ・・・」

夜、私はお部屋で今日起こった事を頭の中で整理していた。・・・まさか、こんな所で『禍の団』の名前を聞くななんて。

私の心に恐怖、そしてそれを上回る怒りが込み上げて来た。あんなに幼い子のお母様を攫うなんて絶対に許せない。もしもリョーマさんがここにいれば、きつと同じ事を言うはずだ。

「リョーマさん・・・」

家族に身を案じる九重ちゃんを見ていて、私の頭に浮かんだのはリョーマさんや黒歌さんの顔だった。今の私にとって、家族と呼べるのはあの人達だけだから。そんな人達がある日いきなりいなくなってしまう。・・・考えただけで心が押し潰されそうになる。

『アーシア・アルジエント』

ツ・・・！ オ、オ・クアーン様?! ど、どうされました!?

突然、オ・クアーン様の声が聞こえて来た私は、ベッドの上で慌てて姿勢を正した。そんな私に、オ・クアーン様はあの慈愛に溢れる暖かいお声をかけてくださった。

『あなたの悲しみの感情が強まったのを感じたので様子を知らうと思ひまして。それで、何かあったのですか？ 私でよければ力になりましょう』

そ、そんな、私の事でオ・クアーン様にご迷惑をおかけするわけにはいきませんし・・・。

『構いません。むしろ、あなたはもっと他人へ迷惑をかけてもいいのですよ』

あうう、私なんかが畏れ多いです。で、でも、オ・クアーン様がわざわざこうしてお声をかけてくださったのだから、断ったら逆に失礼なのかな。

・・・そ、それでは、聞いて頂けますか、オ・クアーン様？

『ええ、聞かせてください』

意を決し、私はオ・クアーン様へ現在京都で起こっている事について説明を始めるのだった。

．．．．．
．．．．．

『そうですか。『禍の団』が．．．やれやれ、まだ懲りてへんみたいやな』

え？

『いえ、こちらの話です。そういう事であれば、いざという時にはすぐに力を貸せるように私も気に留めておきましょう』

あ、ありがとうございます！ とつても心強いです！

心からの感謝の気持ちをお伝えしようと祈りを捧げる私に、オ・クアーン様は最後にこうおっしゃった。

『では、そろそろ私は消えましょう。どうやらここへ誰かが訪ねて来るようです。アーシア・アルジエント。助けが必要な時はいつでも私を呼びなさい。いつでもどこでも、私はあなたの味方です』

それつきりオ・クアーン様のお声は聞こえなくなつた。異世界の神様にそんな風におっしゃって頂いて、本当に私は幸せ者です．．．でも、どうして私なんかここまで御心を砕いて下さるのだろうか。

少し考えて、私はこの疑問が意味の無いものだと理解した。神は全ての存在へ平等に愛を注いでくださる。だから私にもそうして下さっているだけなんだろう。きつと、他にもオ・クアーン様に救われた方はいっぱいいらっしゃるはずだ。

「じゃないと、私みたいに、神器さえなければ特別でも無いどこにでもいる様な女の子を気にかけてくださるわけないもんね」

「がう？」

ベッドの近くで観葉植物の葉っぱをペシペシしていたスコルちゃんが私の言葉に首を傾げる．．．そういえば、この子が私について来た理由って実際はどうなんだろう。

「スコルちゃん。あなたともお話出来たらいいのにね」

「がう」

と、スコルちゃんとの一方的な会話をしていたと思った次の瞬間、スコルちゃんは何かに気付いたかのようにペシペシを中断し、お部屋の入口へ駆けていった。

「どうしたのスコルちゃん？」

「がうがう！」

「ただいま〜！ って危ない!? 踏んじやう所だったじゃないスコル〜」

そこへ扉が開き、桐生さんが戻って来た。さっきお部屋を出て行ってから十分くらい経っただろうか。

「お帰りなさい、桐生さん。どちらへ行かれてたんですか？」

「ふふん、まずは見てもらった方が早いね。さ、どうぞ」

「お、お邪魔します」

「ッ!？」

私はビツクリして目を丸くした。桐生さんに続いてお部屋に入ってきたのは、間違い無く山田先生その人だった。

「が〜うがう！」

そして、そんな山田先生を見て、スコルちゃんはとつても嬉しそうに尻尾を振っているのだった。

.....

.....

.....

「.....なるほど、それは大変でしたね」

お部屋に入るなりスコルちゃんを見て驚く山田先生に椅子に座って頂いて、私は事情を説明した。当のスコルちゃんは、山田先生の膝に乗って幸せそうに丸まっていた。

「あれ、でもどうして神崎君の飼っている犬をアーシアさんが連れて来てるんですか？」

「そ、それは、その.....」

ど、どうしよう。一緒のお家に住んでいる事は秘密だっって言われるから言えない。

「まあまあ、そんな事どうでもいいっしょ。大方オカルト部で交代で

お世話してるとかそういう事なんじゃないの？」

答えに詰まる私に何かを察したのか、桐生さんが助け船を出してくださった。正直、嘘を吐くのは心苦しいけれど、ばれたらリヨーマさんと一緒に暮らせなくなるかもしれない。それだけは絶対に嫌だから、ごめんなさい山田先生。

「・・・にしても、見事なまでに懐かれちゃってるね真耶ちゃん先生」
すっかり大人しくなったスコルちゃんを見て、桐生さんが面白そうに目を細めた。私はリヨーマさんがお聞きして既に知っていたから別に驚きはしなかった。

「でも、相性がいいなら話は早いね。ねえ真耶ちゃん先生。ちよつと私達に協力して欲しいんですけどお」

「な、何ですか？」

「いや、そんな怯えないでくださいよ。別に難しい話じゃないですよ。修学旅行は残り半分。その間、他の先生や生徒達にスコルの事がばれない様に協力して欲しいんですよ。真耶ちゃん先生だって、こんな可愛い子犬のイタズラに本気で怒れないでしょ？」

「それは・・・まあ、そうですね・・・」

「はい言質取った！ これでもう真耶ちゃん先生も共犯だね。やったねアーシア、味方が増えたよ」

「は、はい・・・」

い、いいのかな？ なんだか山田先生涙目になっちゃってますけど。あ、スコルちゃんが手を舐めたら顔がふにゃっちゃった。先生も犬が好きなのかな。

「とりあえず、真耶ちゃん先生は明日ホテル待機組でしょ？ んでもって一人部屋」

「え、ええ。でも、どうしてあなたがそれを知って・・・」

「私の情報網を甘く見ないでください。で、私達は明日嵐山方面の観光をするつもりなんですけど、その間真耶ちゃん先生にスコルを預かって欲しいんですよ。そうすれば、私達も安心して観光が出来るし、真耶ちゃん先生もスコルと思う存分戯れられる。ギブアンドテイクですよ」

な、何だか話がどんどん進んで行っちゃってる。けど、桐生さんは私の為に交渉してくださってるんだし、はうう、何も言えないです。

「・・・わ、わかりました。あなた達の言う通りにします」

山田先生が諦めた様に首を縦に振った。こうして、スコルちゃんを山田先生に預かって頂く事が決定したのだったけれど、話はそれで終わらなかつた。

山田先生がお部屋を出ようとしたら、スコルちゃんが先生のロングスカートを啜えて離さなくなってしまったのだ。どうも、山田先生がいなくなる事が嫌みたい。

流石にこれ以上はいけないと思ってスコルちゃんを注意しようとしたら、山田先生が意外な事をおっしゃった。

「あ、あの、よければ今からでもお預かりしましょうか？　そうすればあなた達も明日すぐに出かけられるでしょうし」

という事で、何も持って来られなかつた山田先生に代わって、スコルちゃんを鞆に入れて私達はお部屋を出た。念のため、桐生さんもガードの為にきて来てくださった。

そうして、山田先生のお部屋に到着したところで、私はスコルちゃんを先生にお渡しした。

「本当にこれでよかつたんでしょうか？」

自室へ戻る途中で私はついそんな風に漏らしてしまった。すると、桐生さんはまるで気にしてない様に手を振りながら答えた。

「大丈夫大丈夫。私が山田先生を選んだのはね、他の先生よりも話をわかってくれるってのもあるけど、それ以上にあの人が・・・」

「あ・・・！」

「どうしたの？」

「山田先生のスコルちゃんの睡眠時間についてお話するのを忘れてました」

「・・・ああ、声をかけないと起きないってヤツね。確かに、知らないで死んでるんじゃないかと勘違いするかも」

「私、もう一度先生のお部屋に行つて来ます」

「それなら私も行くよ。・・・ひよつとしたら面白いものが見れるかも

しれないし」

面白いもの？・・・って、いけない。まずは先生のお部屋に行かないと。私は若干の駆け足で先生のお部屋へ戻った。そして、先生のお部屋まで後数メートルの所まで来た時・・・。

「きやあああああああああ！」

ツ!? い、今のは山田先生の悲鳴!? まさか、スコルちゃんが何かご迷惑を!?

「せ、先生！ 大丈夫で——」

「はうううううう！ 可愛いよお！ 可愛すぎるよお！」

ノックもせず部屋に飛び込んだ私が目にしたもの。それはベッドに横たわってスコルちゃんへ頬ずりしている山田先生の姿だった。先程私達のお部屋でスコルちゃんに手を舐められた時以上に顔が凄い事になっていた。

「いい顔してるね真耶ちゃん先生。写真取れば学校のファン連中に高く売れそうだけど、それだとスコルの事もばれちゃうし、我慢するか」
「あ、あの、桐生さん。山田先生どうしたんですか？」

「ああ、やっぱりアジアは知らなかったのね。ならさっきの続きだけど、私が真耶ちゃん先生を味方にしようとした理由のもう一つがアレ。あの人、大の犬好きなんだよ。よく観察すればわかるけど、身の回りの物とかにも犬の意匠の物が多いし。ま、私としては犬より牛の方が似合ってると思うけど」

「う、牛ですか？」

「うん。ほら、いかにもホルスタインって感じでしょ？ ウチの学校で一番大きいんじゃない？」

「えへへー。今日は大浴場は止めてお部屋のお風呂と一緒に入りましょうか。寝る時も一緒に寝ましょうねー」

「がうがうー！」

「よーし！ それじゃ早速お風呂の準備・・・を・・・」

スコルちゃんを一撫でして、ベッドから起き上がった山田先生が私達に気付く。その瞬間、先生の表情が一気に凍りついた。どこからかピシリなんて音が聞こえて来そうだ。

「あ、あの、山田先生・・・」

「・・・いつから見てました?」

「はうううううう! 可愛いよお! 可愛すぎるよお! からですけど?」

桐生さん!? 私でもここは誤魔化すのが正解だつてすぐにわかりましたよ!?! なのにそんな正直に答えたら・・・!!

「そう・・・ですか・・・」

桐生さんの真似を見た山田先生はフラフラと窓際まで歩いて行き、窓を開けた。そして、窓枠に手と足をかけて・・・え、ちよ、ちよつと待つてください!?

「ステイステイステイステイ! 何やってんの真耶ちゃん先生!」

私と桐生さんは慌てて山田先生にしがみついた。

「離してください! 私は今からあのどこまでも広がる空へ飛び立ちます! そう・・・無限の成層圏まで!」

「飛び立つどころかあの世にまっさかさまですから! ていうか無限の成層圏つて何!?! そもそも成層圏つて無限なの!?!」

「と、とにかく落ち着いてください山田先生!」

「これが落ち着いていられますか! よりにもよつて生徒のあなた達に見られるなんて、これじゃ教師としての威厳が・・・!」

「だ、大丈夫! 真耶ちゃん先生には元々威厳とか無いから!」

「桐生さん!」

「あ、やば・・・!」

「うえええええええん! やつぱり、やつぱりみんなそう思つてたんですね! 神崎君の嘘つきい! やつぱりそのままの私じゃ駄目じゃないですかあああああああ!!!」

おそらく、こんなに力一杯誰かを引つ張るなんて、後にも先にも今回だけだと思う。ともかく、私達はなんとか山田先生を窓際から引きはがす事に成功した。

その後、山田先生が教師としてどれだけ立派な人かを、私は誠心誠意伝えた。そのおかげかどうかはわからないけれど、先生はなんとか落ち着いてくれた。

「はあ・・・なんかどつと疲れたわね」

お部屋に戻ると、桐生さんが憔悴しきった様にベッドに倒れ込んだ。私も同じ様にベッドに倒れ込むと、そのまま眠ってしまったのだった。

第百十一話 守護者はいつも命がけ

イツセーSIDE

三日目の朝、俺達は嵐山方面行きの電車に乗り込んだ。このまま観光を続けていいのか微妙だが、ホテルに戻る簡易魔法陣も渡されたし、アザゼル先生の連絡があるまでは楽しんでおこうという結論になった。

それはそうと、まさかスコルが山田先生に懐くとはな。アシア曰く先生に預けておけば大丈夫らしいが、アザゼル先生がなんて言うか。でも、下手に刺激して「ぱっくん」されたらえらい事になるし・・・神喰狼と一緒に行動するだけでも疲れちまうから、これよかつたんだろう・・・。

「最初は天龍寺だよな。どこで降りるんだ？」

俺はそれ以上考えるのを止めた。横に並ぶ桐生に尋ねると、次の次の駅だとの答えが返って来た。ならもう少しだな。

「・・・兵藤、アンタ何かあったの？」

「ん？ なんだよ急に？」

「いや、だっておかしいわよアンタ。行きの新幹線の中でもそうだったし、何よりアンタが覗きする側じゃなくて防ぐ側に回った事が未だに信じられないわ。・・・ひよっとして、なんか企んでんの？」

疑いの目を向けて来る桐生に、俺は真正面から答えた。

「・・・女のお前にはわからないだろうな。俺・・・いや、男には、やらなければならぬ時つてのがあるんだよ。俺の場合、それがこの修学旅行だったってだけの話さ」

「ッ・・・！」

「だから俺は・・・っておい、そっちから話振って来た癖になんでそっぽ向くんだよ？」

「うっさい馬鹿。黙って景色見てろ」

それは流石に酷くねえか!?

(ああもう、だから不意打ちでそういう顔すんなつての。てか、何で私、焦ってんのよ。意味わかんないし)

何だコイツ？ てか、チラツと見えただけど頬がちよつと赤かったぞ。ひよつとして風邪でも引いたか？

「おい桐生」

「なによ兵d・・・」

こちらへ顔を向けた桐生のおでこへ、俺はすかさず手を伸ばした。

「なっ!？」

「ふむふむ、熱は無さそうだな。ひよつとして、なんか変なもんでも食って・・・」

「何いきなり触ってんのよ変態!」

「ヴァイ!？」

腹部を襲う激痛。それは桐生が俺の腹を殴った事が原因だった。

あ、あれ、おかしいな。こいつくらい力の力なら余裕で耐えられるくらの体は持つてるはずなんだけど、この意識がぶっ飛びそうな痛みは何よ!?

「女の子の顔をいきなり触るなんてどういうつもり!? そんなんだから変態って呼ばれるのよ!」

「お、女の子で・・・ お前相手に今さら遠慮する必要なんて無いだろうが」

桐生自身が前に俺達に女の子扱いされる事は諦める・・・みたいな事を言っただのを俺は覚えている。

「そ、それは・・・」

「でもまあ、それだけ元気なら心配する事ねえよな。安心したよ。こつちに来てからお前に結構気を使ってもらってるしよ。それが原因で体調でも崩されたら申し訳がたたねえし」

「はあ? 体調?」

「いや、さつき頬が赤かったからさ」

「それはアンタが・・・!」

「俺?」

「じゃなくて! ええつと・・・その・・・ああほら! 駅に着いたから降りるわよ!」

扉が開くと同時に桐生が外へ飛び出す。うーん、わからん。あと、

俺と桐生の周りにいた皆さんから向けられていた暖かい視線は何だったんだろう？

ともかく、駅から出て看板を頼りに歩く事数分、無事天龍寺へ到着した。早速受付で料金を払っていると、背後から聞き覚えのある声が聞こえて来た。

「待っていたぞ、お主等。約束通り、ここからは私も同道し、ここらの案内をさせてもらおう」

声の主は九重だった。案内つて・・・ああ、そういうや昨日そんな事言つてたっけ。なんかスコルの事で荒れまくるアザゼル先生を宥めるのに必死ですっかり忘れてたわ。・・・あの人、ついこの間まで毎日楽しそうに「ゆつくりしていこうぜー」とか言つてたのに、なんか最近になっておかしくなつたんだよな。てか、あのヤバい色の薬がマジで気になる。七色の時点ですでに異常なのに、それに加えてちよつと発光してたもんな。今度落ち着いてる時にでももう一回聞いてみよう。

「うわ、可愛い女の子だなあ。何だイツセー。こつちなら本性がバレてないからつてナンパしたのか？」

「なわけねえだろ。それと元浜。この子に変な真似すんなよ」

先輩の関係者に手を出したらとんでもない事になるんだからな。

「ふ、ふふ、舐めるなよイツセー。俺は（社会的な意味で）死にたくない。眺めるだけで我慢するさ」

「そうだな。（肉体的な意味で）死にたくないのならこの子にだけは手を出すなよ」

「・・・兵藤、アンタこの子とどうやって知り合つたの？」

「ん？ ああ・・・ちよつと事情があつてな。それがきっかけで知り合つたんだ」

「ふーん」

「何だよ？」

「別に。モテなさ過ぎてとうとう幼女に手を出したのかと思つて」

「よしケンカだ！」

俺をあの眼鏡と一緒にすんなや！ そしてテメエはテメエで写真

撮ってんじやねえよ元浜あ！ 言ったそばからそれとか舐めてんのか！

「いいよ！ 次はこのポーズでお願い！」

「こ、ここのか？」

「よし！ もう少しで見え——」

「ブーストナツココオオオオオオオオオオ!!」

俺の放った右拳が、元浜の構えていた小型カメラを破壊した。この野郎、記念撮影用とは別にこんなもん用意してやがったのか。

「ほあああああ?!? お、俺のカメラがああああああ?!?!?」

「九重！ そのロリコン眼鏡から離れなさい！ じゃないと色々おられちゃいますよー！」

「え、あ、う、うむ、わかった」

感情が高ぶり過ぎて変な口調になってしまったが、とにかく、九重を守る事に成功した。

「さあ、気を取り直してみんなに自己紹介してくれ」

「そ、それはいいのじやが、あそこに崩れ落ちておる者は……」

「ああ、放っておこう。アイツは今この瞬間から俺達とは何の関係も無いただのロリコンだから」

「ろりこん？」

「いいんだよ。九重には全くどうでもいい話だから」

「いまいち理解出来んが。まあよい、私は九重と申す。そちらのお二人は初耳じやろうが、今日は私がお主等の案内をさせてもらう事になっておる。至らぬ点もあるとは思うが、少しでも京都の魅力を感じてもらえるよう精一杯務めさせてもらうのでよろしく頼む」

堂々とした態度でハキハキしゃべる九重に、松田は驚き、桐生は感心した様子だった。拍手を送る二人に、俺もつられて手を叩いてしまった。

「じゃあ、早速この天龍寺を案内してもらおうかな」

「うむ、任せるがよい！」

こうして、俺達一行に九重を加え、改めて観光名所巡りを始める事になったのだった。元浜？ 土下座して来たんで許してやりました

が何か？

.....

九重はガイドの役目を実に立派に果たしてくれた。天龍寺から始まり、大方丈裏の庭園。庭園の法堂の天井に描かれた雲龍図の『八方睨み』、他にも行く所行く所全部を本物のガイドさん顔負けの説明を交えて案内してくれた。

「基本的な情報は周りの者に教わったが、それをそのまま伝えるだけでは味気ないからの。私も私なりにいろいろ調べてみたのじゃ」

おかげで随分観光名所について詳しくなった。そんな俺達は、九重お勧めの湯豆腐屋で昼食を取っていた。そこには木場の班もいて、昼食を済ませたら俺達も行くこうと思っていた渡月橋へ向かうらしい。

「よお、お前等もここにいたのか。九重も加えて楽しそうだった」

さらにそこへアザゼル先生とロスヴァイセさんが姿を現した。アザゼル先生は酒瓶を持っている。

「先生、こんな真つ昼間からお酒ですか？」

「・・・こりや水だよ」

「え？ でも思いつきり酒って書いて・・・」

「んな事よりスコルは？ スコルはどこだ？ ちゃんと大人しくさせてんだろいな」

「え、ええ、実は・・・」

山田先生の事を伝えたら、アザゼル先生から拳骨を喰らってしまった。

「うぐぐ・・・何で殴るんですか」

「馬鹿野郎。いくら懐いて大人しくなったからって、こっち側の関係者でも無い山田先生に預けるなんて何考えてやがる」

「で、でも本当の事を言うわけにもいきませんし」

「・・・大丈夫なんだな？ 暴れたりしないんだな？」

「はい、それはアーシアからちゃんと言われました。神崎先輩並みにベツタリだからきつと大丈夫だって」

「信じるぜ。その言葉。んじゃ、ホテルに帰ったら念の為に山田先生の部屋へ……」

「駄目ですよアザゼル先生。どうせスコルの事は二の次で、本当はただ山田先生のお部屋に入りたいだけなんでしょう?」

ロスヴァイセさんにジト目を向けられ、アザゼル先生はわざとらしく口笛を吹いた。

「そんなつもりじゃないって言うて言うて嘘になるが、マジで俺はスコルの事が気になるんだよ。お前等こそ、アイツが神喰狼だって事忘れてねえだろろうな?」

「もちろんです。あの恐ろしさについては十分理解しているつもりです」

な、なんかロスヴァイセさんが言うてやけに説得力があるな。

「ならいいが……。とにかくそういう事だ。神喰狼はグレイプニルじゃなく、フューリーという鎖のおかげでここに存在しているという事だけは頭に刻んでおけ。ありえないだろうが、もしもこの先、何かの理由によつてフューリーがいなくなった時、ヤツ等を止めれる手段は考えておく必要があるだろう」

神崎先輩が消える……。かは、まるで想像出来ねえな。でもアザゼル先生の言う様に、可能性が限りなく低くてもゼロで無いのなら気にしておかないといけないのだろう。

「……とまあ、小難しい話はこれくらいにして、お前等、飯食った後はどうするつもりだ?」

「渡月橋へ向かうつもりですけど」

「よし、なら俺達も行くぞロスヴァイセ。生徒との交流も教師の務めだもんなあ」

というわけで、何故かアザゼル先生とロスヴァイセさんも一緒について来る事になった。これはまた騒がしくなりそうだな。

……

店を出てしばらく歩いていると、俺達の前に川、そしてそこにかか

る木造の橋が見えて来た。

「ほお、中々趣のある景色じゃねえか」

「ええ、まさに絶景ですね」

「そういえば知ってる？ 渡月橋を渡っている時に振り返ると、今まで授かった知識を全て失ってしまうんだって。それに、男女が別れるって言い伝えもあるみたいよ」

「ならロスヴァイセは問題ねえな」

「ちよ、どういう意味ですか!!!」

アザゼル先生の軽口にロスヴァイセさんが噛みついたその時だった。言い様も無い感覚が俺を包み込み、周囲から人の気配が消えた。正確には、こっち側の関係者以外の一般人の姿が見えなくなった。さらに、俺達の足下に霧らしきものが立ちこめてきていた。

「な、何が起こったんだ？ それにこの霧は・・・？」

「・・・『絶霧』か」

『『絶霧』？』

「どうやら俺達だけ別の空間に転移させられたみたいだな。風景やらなんやらまで全てトレースさせるなんざ、無駄に凝った真似しやがって」

「転移って・・・まさか神器ですか？」

「ああ。『絶霧』の霧は包んだ者を別の場所へ転移させる事が出来る。・・・ようやくおどましてわけか」

「・・・」

「九重ちゃん？」

「皆、警戒するのじゃ。母上の護衛が死ぬ間にこう口にしておった。自分達は、気付いたら霧に包まれていたと」

アザゼル先生と九重の言葉に俺は確信した。そうか、ヤツ等が・・・今回の事件の首謀者共が向こうから出張って来やがったわけだな。

橋の方から気配がいくつも近づいて来る。その先頭・・・学生服を着た黒髪の野郎が口を開く。

「やあ、初めましてアザゼル総督に赤龍帝。そして・・・聖女様」

学生服の上から漢服を羽織り、手に不気味なオーラを放つ槍を携え

ているその男は、先生、俺、そしてアーシアへ順番に目を向けた。そんな男の周囲に、似たような格好をした連中が何人も立っている。

「噂の人相と合致してるな。お前が英雄派のトップか？」

「俺は曹操。三国志で有名な曹操の子孫・・・という事になっている」

曹操って・・・まさかあの曹操!？」

「先生、アイツ何なんですか？」

先生は俺の質問に答えず、皆に向かってこう言った。

「お前等、あの男の槍には最大限警戒しろ。あれは最強の神滅具『黄昏の聖槍』だ。神をも貫く絶対の神器・・・。まさか、その使い手がテロリストとはなあ。・・・どうやら、ゼノヴィアの仮説は合ってたみたいだな」

じゃ、じゃあ、やっぱり先輩はあの男が出て来る事を見越してスコルを？

聖槍の登場に固まる俺達の横から九重が一人前に進み出る。見た感じ表情は落ち付いているが、俺にはわかる。あれは感情が高ぶり過ぎて逆に冷めている様に見えるだけだ。

「曹操と言ったか。私の問いに答えてもらおうか」

「もちろん、この私でよければなんなりとお答えいたしますよ、小さな姫君」

「では答えろ。母上を攫ったのは貴様等か？」

「左様で」

アツサリ認める曹操に、九重はあくまでも冷静に言葉を続ける。

「目的は何じゃ？」

「恐れ多くも、お母上には我々の実験にお付き合いしていただきたいと思ひましてね。少々強引ではありましたが、我々の元へお連れした次第でございます」

「・・・そうか」

そう言つて、九重は曹操に背を向けた。

「おや、もうよろしいので？」

「母上は貴様の所にいる。それだけ聞ければ十分じゃ」

そうか、その確認の為にわざわざ。でもよく我慢したな九重。やつ

ぱりお前は凄——。

その時、九重の手からポタリと何かが落ちた。その正体に気付いた俺は数秒前の自分を殴り殺したくなるほどの後悔をした。

九重の手から落ちたもの……それは血だった。拳を握り締めた際、あまりに力を込め過ぎた生で爪が掌を裂き、そこから血が滴っていたのだ。

馬鹿か……馬鹿なのか俺は!!! 辛く無いわけねえだろ! 悲しく無いわけねえだろ! 我慢なんか……我慢なんか出来るわけねえだろ! 母親を攫った相手を前に冷静になれるわけねえだろ!

なのに九重は耐えたんだ。お母さんを助ける為に、少しでも情報を手に入れる為に、血が出て、声を張り上げたたくても、泣きたくても我慢してたんだ。それが……今の自分に出来る精一杯だと信じて……!

……許さねえ。こいつらは絶対に許しちやいけねえ。俺は今……心の底からコイツ等が許せねえ!

『そうだ。外道を前に正しき怒りの炎を燃えあがらせる……。それが正義』

——相棒。どうやらまたお前を認めたヤツがいるみたいだ。

そうか。そいつは何よりだ。けど、今は喜んでる場合じゃねえぞドライグ。

——ああ、わかっている。お前の熱が俺にも伝わって来るぞ。

「それと、俺の目的はもう一つ。まあ、こっちは既に叶ってしまったわけだが」

「え?」

曹操の瞳が再びアースシアを捉える。

「初めまして、ずっとお会いしたいと思っておりました。伝説の騎士……フューリーの傍らに寄り添う聖女様。一部ではあなたがフューリーを操っているとの噂がありますが、真相はどうなんでしょうね」「え、ええ!? と、とんでもありません! 私なんか、いつもご迷惑をかけてばかりで、それでもお傍に置いてくださっているリョーマさんにはとても感謝してて、その……」

いきなり話しかけられたせい、答えにならない答えを口にする
アーシアに、曹操はさつき九重に向けた作り物の笑顔じゃない、本
物っぽい笑顔を見せた。

「ははは、なるほど。確かにとても愛くるしい聖女様だ。では、そんな
聖女様にお願いが。どうだろう、フューリー殿と一緒に我等の元へ来
てくれないか？ キミが説得すれば、騎士殿も首を縦に振るだろう。
人間であるキミ達がそちら側にいてもいつか絶対後悔する事になる
ぞ。何せ、悪魔は自分の欲望を満たす為なら平気で裏切るからな」

こんの野郎・・・！ 俺達が先輩やアーシアを裏切るわけねえだろ
！ つーか、んな事したら次の瞬間には首が飛んどるわ！

「お断りします」

そうやって曹操へツッコんでいる間に、アーシアは今度はもつた
りせずにきつぱりとそう言った。

「ほお、理由は？」

「それは、イツセイさん達がいい悪魔だからです」

「いい悪魔?! はは、こいつは驚いた！ 悪魔にいいも悪いも無いだ
ろう。『悪』魔だぞ？ 人間からすれば全て敵じゃないかな？」

「違います。イツセイさん達と出会って私は知りました。悪魔だって
人間と同じなんです。同じ様に笑って、同じ様に泣いて、同じ様に誰
かを愛する。そんな、優しい悪魔のみなさんだっているんです。あな
たが今言った悪魔のイメージは、そのままあなた達自身の事です」

「俺達が悪魔？」

「自分達の欲望を満たす為、こんな幼い子を傷付けたあなた達をそう
呼ばずになんと呼びますか？」

尚も俯いたままの九重を抱きよせるアーシア。・・・あの子も俺と
同じだ。コイツに・・・コイツ等英雄派に対して滅茶苦茶腹を立てて
るんだ。

「・・・なるほど。ここにも王道を歩む者がいたか。まあいい、覇道を
歩む俺には手段などいくらでもあるんだからな」

それ以上アーシアと話をする気が無くなったのか、曹操が彼女から
顔を背ける。そこへ、アザゼル先生がポツリと呟いた。

「実験ねえ……」

「おや、あまり驚かれないのですね」

「まあ、お前等の企みは随分前からアイツには露見していたみたいだしな」

「……何？」

アザゼル先生の一言に、曹操の雰囲気が変わった。さっきまでの表面上の穏やかさやわざとらしい丁寧口調を止め、訝し気に先生へ目を向ける。

「ど、どういう事だ？ 我等の計画が知られていただど？」

「馬鹿な。そんなはずは……！」

曹操の周りのヤツ等の中から戸惑いや驚きの声が上げられ、辺りにわかに騒がしくなる。

「アザゼル総督。今のはどういう意味ですか？」

「知りたいか？」

「ええ」

「そうか。なら教え……るわけねえだろボケ。精々悩んで悩んで悩みまくって胃に穴でも開けてろ」

馬鹿にするように笑うアザゼル先生に、曹操は表情を変えない。だが、ヤツから感じるプレッシャーが僅かに強まった。へ、どうやら心の中じゃお冠みてえだな。

「……いいだろう。元々手合わせをしておこうと思っていたんだ。少々手荒だが、力づくで聞かせてもらおうか」

「は、やれるもんならやってみな」

構える先生に俺達も続く。まずはアスカロンをゼノヴィアに渡し、密かに『倍加』を重ね始めた。

「さて、レオナルド。まずは悪魔用のアンチモンスターを頼む」
「うん」

いつの間にか曹操の横にいた少年がその言葉に頷いた次の瞬間、その子の足下から周りに向かって不気味な影が広がっていく。やがてその影が橋全体を包んだ時、さらなる異変が起こった。影が盛り上がり、腕、足、頭が形成されていき、ついには完全なる姿をした怪物と

なる。その数はゆうに百は超えているだろう。

「そのガキ……『魔獣創造』持ちか」

「流石アザゼル総督。そう、その子の神器は神滅具の一つにして、俺の『黄昏の聖槍』とは別の意味で危険視されている神器だ」

『魔獣創造』……その名の通り、どんな魔獣でも創りだせる事が出来る神器。所有者の力次第では、それこそ怪獣映画に出て来そうな超巨大な怪物を、数百体も一気に創造する事が可能だとか。曹操が危険と言っている意味がわかる。コイツは……下手したらとんでもない被害をもたらす恐れがある。

「見た所、あのガキにまだそこまでの力はない。倒すなら今だな」

「出来ますか？ この子はアンチモンスター……つまり相手の弱点をつく魔物を生み出す力に特化してしまってるね。今創り出したのは対悪魔用のアンチモンスター。つまり……」

「……つまねえ話をグダグダグダグダしつけえんだよ」

「イツセー？」

「テメエはおしやべりしに来たのか？ ならお茶屋でお仲間の連中と好きなだけしやべってやがれ。こっちはとつくに我慢の限界なんだよ」

「ではどうするつもりだい？」

「決まってるんだろ。……テメエ等全員ボッコボコにしてやるよお！」

「ああ、行こうかイツセー君！」

「許さない！ 絶対に八坂姫の居場所を吐かせてやるんだから！」

俺の叫びに応える様に、みんなが周囲に並ぶ。さて、始めようか英雄派さん。

「やれやれ、人の話は聞いておいた方がいいと思うがな。では、こちらも行かせてもらおう。ついでだ、聖女様も確保しておけば後で都合がよさそうだ」

「……なんだって？」

セイジ ヨヲカクホ？ アイシアノコトカ？ アイシアノコト

カアアアアアアアアアアアアアアア!!!

「木場あ！ 『魔剣創造』でアイシアと九重の周りを剣で囲め！」

「了解！ とびつきりの堅いヤツでいくよ！」

「イリナは内側から結界を張って二人を守れえ！」

「任せて！ 絶対に破らせない！」

「それでもってゼノヴィアア！ お前にはこれだあ！」

十分に倍加した所で、それを全てゼノヴィアへ譲渡する。考える必要は無え。お前はただ全力でぶちかましてくれればいい！

「任せろ！ さあ、アンチモンスターとやら！ 貴様等が本当に対悪魔用だというならば、この一撃に耐えてみせろおおおおおおお！！！」

アスカロンから天に向かって凄まじい光の刀身が伸びる。その激しさをや、数秒見つめるだけで目が潰れてしまいそうなほどだった。

そして、それを全力で振り降ろすゼノヴィア。光の向こうへ飲み込まれて行くアンチモンスター達。結果、ヤツ等はその数を九割近く失っていた。

「・・・チツ、仕留めそこなったか。やはりデュランダルでなければ上手いかな」

「いや、よくやってくれたぜ、ゼノヴィア」

「イツセー・・・お前、まさかこの為に倍加を重ねてたのか？」

アザゼル先生の問いに、俺は頷いた。

「馬鹿の一つ覚えみたいに開幕『禁手』ばかりじゃ戦い方が狭まります。俺は俺に出来る事をやりますよアザゼル先生」

先輩が九重へ贈ったあの言葉が、結果的に俺の意識を変える事になった。突っ込むばかりじゃ守れない。今の状況を見て適切な判断をする。俺にはそれが全然出来ていなかった。さっきだって、本当は『禁手』のカウントをスタートさせようとしていた。でも、直前になってあの言葉が頭を過ったんだ。

『・・・まだまだ未熟の域を出ていないが、どうやら少しは頭を使う様になったようだな』

今のは先輩の声？ はは、この短い時間で二人も認めてくれたのか。なら、みつともない所は見せられねえよな！

「曹操。自殺志願するのは勝手だがな、アジアには絶対手は出させねえぞ。俺達はテメエ等をぶちのめして九重の母親を助ける。そして・・・A・G計画を遂行する!!!」

こうして、修学旅行三日目にして、ついに俺達と英雄派との戦いの幕が開かれたのだった。

第一百十二話 英雄の資格

イツセイSIDE

「A・G計画？ ふむ、どうやらキミ達にも何か思惑があるみたいだな。ならば、それについても話してもらおうか」

「誰が話すかよ。いいから黙って俺等にブツ飛ばされろやあ！」

「ははは、今代の赤龍帝は血の気が多い事だ。では、そろそろ始めようか」

（誰の所為でこうなったと思っやがる！）

曹操が槍の切っ先をこちらへ向けると同時に、消滅を免れたアンチモンスター達が俺達に向かって押し寄せて来る。・・・が、それがどうした。今の俺達をそんな雑魚共で止められると思うなよ！

「ゼノヴィアがぶっ放してくれたおかげで数は減った。残りもさっさと片付けるぞ！」

「了解だ。木場、私が前に出る。お前は援護とあの剣の盾を維持する事に専念してくれ」

「わかった。ならこれを使ってくれ」

木場が創り出した聖剣をゼノヴィアへ放る。それを掴んだゼノヴィアが突っ込むと同時にアンチモンスターが一気に五体以上消滅した。

「イツセイ。木場達への指示はお前に任せる。中々どうして様になつてるぜ」

「先生は？」

「俺の相手はヤツだ」

アザゼル先生が曹操へ顔を向ける。正直言えば、俺も直接あいつをぶん殴りに行きたいけれど、俺達の後ろには何が何なんでも守りきらなければならぬ存在が二人いる。この戦いの勝利条件は曹操をぶちのめす事じゃない。俺の、木場達の、いや・・・京都という文化財溢れる素敵な場所を失わない為、アジア達を守りきったその時こそが俺達の勝利だ。

「断言してやる。あの合宿を・・・そして、フューリーのアホみたいな

特訓に付き合わされたお前達が、英雄の意味を履き違えたテロリストごときに負けるわけがねえ。見せてやれ、お前達の力をな」

「言ってくれますね総督殿。俺達が英雄の意味を履き違えている？何をどう履き違えているか教えて頂けますかな」

「・・・ならまずは一つ。英雄つてのは自称するもんじゃねえ。ましてや、ガキにあんな顔をさせる様な連中が英雄であつてたまるかよ！」

先生・・・あなたも九重の見えない涙に我慢の限界だったんですね。ずりいよな。こういう時、びっくりするくらい熱血するんだよなこの人。

先生が懐から見た事の無い宝玉を取り出す。その宝玉から溢れだした光が先生を包み込み、次の瞬間、先生の体は黄金色の鎧に包まれて・・・つて、ええ!? な、何じゃそりや!?

「せ、先生！ その鎧何ですか!？」

「へ、駒王協定の頃から準備していた物をようやく披露出来たぜ。ともかく、説明はこの戦いを終えてからゆつくりしてやる。今はただ成すべき事を成せ。さあ曹操！ いっちよ付き合ってもらうぜ！」

「望む所！ 聖書に記された存在と刃を交わせる日が来ようとはな！」

先生の光の槍と曹操の聖槍がぶつかり合う。あの人が負けるわけがねえ。先生の言う通り、俺達は俺達の成すべき事をやればいい！

「いっくぜえええええええええええ!!！」

気合いの雄叫びと共に俺はアンチモンスターへ突撃した。モンスターの一体が口を開け、光を収束させていく。すかさず、俺はその隙だらけなどてつばらを思いつきりぶん殴った！

「が・・・ぎい・・・」

拳は呆気なく腹をつき破り、モンスターは短い断末魔と共に霧散した。『やられる前にやる』。これ鉄則ね。・・・これが先輩相手だと『やられるしかない』。もしくは『諦めるしかない』になる。つて、これじゃどっちも同じか。

——単純に腕力で倒すとは、やるな相棒。

そりや俺だつて成長してますからね。あと、なんか想像してたより

もずっと脆いんだよな、コイツ等。

——それも相棒の実力が増したからだ。さあ、この調子で一気に攻めてやれ。アンチモンスターを創り出すのにも限界がある。あの少年が限界を迎えるまで、とにかく倒し続けるんだ。

おう！ やってやるぜえ！

「赤龍帝！ お前の相手は私達がする！」

そうやって手当たり次第にアンチモンスター達を倒していると、後方で待機していたはずの英雄派のメンバーが俺の前に立ちはだかった。全員女の子で、曹操が着ている物にデザインが似ている制服を纏っている。

まずいぜドライグ。敵とはいえ、流石に女の子の顔や腹を殴るのは俺には無理だ。何とか他の方法で無力化しないと……。

『おっと、悩んでいるようだね』

手をこまねいていた俺の頭に、そんな声が届いた。ええっと、この声は……誰だっけ？ 歴代の先輩の誰かって事はわかるんだけど

『ひどいなあ。けどまあ、今は悠長に話しているヒマも無さそうだし、同じフェミニストとして、僕が手を貸してあげるよ』

おお、マジですか!? ……いや、待てよ。あのオツサンの『赤き覇の超剛拳』みたいなヤバいもの貸してもらっても扱いに困るんですけど。

『大丈夫。僕の力は彼みたいに危険じゃないよ。あくまでも女性を無力化させる為の力だからね』

ほほう、なら安心してわけか。よし、お願いしますぜ先輩！

『うんうん、素直でよろしい。それじゃあまずは籠手に魔力を溜めてくれ』

言われるままに籠手へ魔力を溜める。正直、魔力の扱いは得意ではないが、これくらいなら俺でも余裕だ。

『よし、じゃあその魔力を保ったまま、相手の衣服のどこでもいいから触れるんだ』

触れる？ それだけでいいんですか？

『後は見てのお楽しみってね』

よくわからんが、かつて赤龍帝として戦った先輩のお言葉だ。信じ
てやってやろう!

「かかれ!」

女の子達が正面と左右から一斉に剣や槍を持って襲い来る。中々の
速さだが・・・先輩や木場に比べれば止まってる様に見えるぜ!
先輩に関しては速さがどうかじゃなく瞬間移動だろ! という
ツツコミは無しな!

一瞬の交差の間に、俺は彼女達の攻撃を全て避け、逆に衣服に触れ
る事に成功した。

「ば、馬鹿な!? かすりもしなかつただと・・・!?」

驚く女の子達。今がチャンスだ。先輩、次はどうすればいいんです
か?

『籠手を通じてキミの魔力へ細工をさせてもらった。ブレイク・・・キ
ミがこの言葉を口にした瞬間、彼女達は戦えなくなるだろう』

了解! さあ、いくぜ女の子達!

——ツ、思い出したぞ! 待て相棒、その技は・・・!

「ブレイク!・・・え?」

ドライブの制止の声を聞きながら、俺はその言葉を口にした。そし
て俺の眼前でそれが・・・女の子達の衣服が弾け飛ぶという衝撃的な
出来事が起こった。

「ふえ? あ、い、いやあああああああ!!」

「そ、そんな!? 魔術処理が施されたこの服が破れるはずが!? み、見
ないでえ!」

う おおおおおおおお おおお おおお
な、 なんか じゃ こ
りやあああああああああ?!?!? 俺か?!?!? 俺がやったのかこれえ!?

『あはは! どうやら上手くいったみたいだね』

先輩い! こりやどういう事ですか!?

『どうもなにも、生前の僕もこうやって向かって来る相手の衣服を剥
いで無力化させたもんさ。あ、もちろん女性限定でね。男の裸なんて
見たら目が腐っちゃうからね』

なん・・・だと・・・!? って待てよ、おいドライブ! お前知っ

てたんじやねえのか!?

——だから止めただろう! くそう、もう二度と見なくて済むと思っていたのに。この技の所為で俺がどれほど苦しんだ事か……! 『いい技でしょう? キミにあげるから好きに使いなよ』

——絶対に使うなよ相棒! 次に使ったら……泣いてやる。恥も外聞も無く、お前がドン引きするくらい盛大に泣いてやるからな! お、おう、もちろんだぜドライグ。こんな素晴らし……けしからん技を俺が使うと思っっているのか?

——少し前の相棒なら迷わず使っただろう。だから不安なんだよ……。

「……なるほど、まさかそんな方法で無力化するとは。女性の心を利用しての戦略、中々に面白いな。ひよつとして、常日頃から女性の扱いに長けているのかな?」

「あ、あ、!?!」

——落ちつけ相棒。出したらいけない声になってるぞ。

知るか! この優男、いきなり出て来てふざけた事を……誰が女性の扱いに長けてやがるだと! 嫌味か! 皮肉か! こちとら一部以外の女子にはとことん嫌われてますけど何かあ!?

「テメエ……死にてえようだな」

渦巻く感情全てを込めて優男を睨みつける。すると、ヤツは僅かに目を見開いて周りの連中に向かってしゃべりだした。

「ふむ、データというのは案外頼りにならないものだな。一部では、歴代で最弱とまで呼ばれているが、この覇気……警戒レベルを二段……いや、三段くらいは上げた方がよさそうだ」

「そいつは嬉しいね。お礼に今からテメエを全力でボコってやる」

コイツは禁句を口にした。生まれてこの方、女の子にモテた事の無い俺に向かつて。そりや自業自得だっただけだ。だがな、たつた今初めて会って、しかも敵であるヤツに馬鹿にされるのは我慢ならねえんだよ!

「僕は英雄シグルドの末裔のジーク。仲間はジークフリートと呼ぶが、どちらでも呼びやすい方で呼んでくれて構わない」

お前なんざ優男で十分じゃい!

心の中で呪詛の念を送っていると、アンチモンスターを切り捨てたゼノヴィアがヤツの顔を見て口を開いた。

「ジーク……。それにその腰に帯刀した魔剣達……。間違い無く『魔帝ジーク』だな。悪魔祓いが何故テロ組織の下へいる?」

「知っているのかゼノヴィア!?!」

思わず魁ってしまった俺の前で、二人はやりとりを続けた。

「こっちにいる方が色々都合がいいからね。僕の事なんかより、今は勝負を楽しもうよ。木場祐斗、ゼノヴィア、紫藤イリナ……。は取り込み中みたいだね」

三人の名を呼びつつ、優男……。ええい、めんどくさいからジークフリートでいいや。とにかくジークフリートは手に持った剣へオーラを纏わせた。さつきゼノヴィアが魔帝とか言ってたから、アレは魔剣なのだろうか。

「……。僕が行こう」

聖魔剣を持った木場が前に躍り出る。見つめ合う両者。張り詰めた闘気に思わず喉を鳴らしてしまう。

「はあっ!」

「ふっ!」

それを合図にしたかののように、二人は同時に剣を振るう。甲高い金属音は剣と剣がぶつかり合った事を表した。

「それが聖魔剣か。だが、この剣……。魔剣最強のこの魔帝剣グラムならば余裕で受け止められる」

「……」

鏢迫り合いからの飛び退き、そこから間髪入れずに激しい剣戟が繰り広げられるが……。

「木場が押されてる……。!?!」

あの野郎、木場のスピードに追い付くどころか上回ってるのか!?

その証拠に、木場の攻撃はヤツに全て受け止められていた。フェイントをしかけても通じない、カウンターも出来ない。あの木場が一方的に追い詰められていた。

『魔帝剣のジークフリート』の名は伊達では無い。『聖王剣のアーサー』と並び称される剣豪相手に、木場祐斗では相手にならない」

英雄派の一人がそんな事を言ってきた。アイツ、そんなヤバイヤツだったのか!? このままじゃいくら木場でも……!

「木場、援護を……!」

援護に入ろうとするゼノヴィアを、木場は手で制した。

「待ってくれゼノヴィア。一つだけ試したい事がある。それが駄目だったら援護をお願いするよ」

この状況で試すって……。でも、木場の顔に焦りや気負いは無い。アレは……。笑っているのか?

「いいのかい。二対一でも僕は全然構わないよ」

「その言葉、そのまま返すよ」

「なに?」

「あなたは強い。おそらく全力の風刃閃でもあなたには通じないだろう。だから……。先輩から教えてもらったもう一つの奥の手を使わせてもらうよ」

もう一つの技!? 初耳だぜそんなの! 俺はてつきり風刃閃だけかと……!

驚く俺達が見守る中、木場は聖魔剣を持った手とは反対の手を顔の位置まで上げる。すると、その掌から一本の短剣が生える様に出現した。何だあの剣? オーラとかは特に感じないけど……。

「……リミットブレイカー」

低い声で呟く木場。次の瞬間、木場はその短剣を逆手に持つと、なんとそれを自分の胸に突き刺した! っておい! 何やってんだよ木場!

「何のつもりだい?」

「枷を外すのさ。師匠から、この技はここぞという時にしか使ってはいけないと言われているからね」

剣が突き刺さっているというのに、木場の顔は涼し気だ。そして次の瞬間、俺は木場の言った枷を外すという意味を理解する事となった。

「ッ!? き、木場・・・!?!」

木場の体・・・正確には木場の両足をとてつもないオーラが包み込む。左足に光。右足に闇色のオーラを纏わせ、木場が剣を構える。

「覚悟してくれ。制御がまだ完璧じゃなくてね、手加減する余裕が無いんだ」

「何を言ってる——」

ズン! という爆発音が俺の耳をつんざく。その数瞬の後、ジークフリートの脇腹から鮮血が迸った。

「・・・え?」

俺は何が起きたのか理解出来なかった。ただ一つ、俺にわかったのは、さっきの爆発音は木場が地面を踏みしめた際に発生したものだという事だけだった。現に、たった今まで木場が立っていたはずの場所の地面が大きく抉れていた。木場の脚力に地面が耐え切れなかったのだ。

「・・・何をした? そんな技はデータに無かったが」

血が流れているにも関わらず、ジークフリートは背後に立つ木場へ疑問を投げかける。それに対し木場は事もなげに答えた。

「今のは技でも何でも無い。ただ斬っただけさ。ただ速く、ひたすら速くね」

「技じゃない!? 俺はてつきり超高速で動けるようになる技かなんかを使ったのかとばかり・・・」

「僕が師匠につけられた枷は三つ。『あの技』を使うにはその全てを解かないといけないのだけれど・・・どうやら一つだけで十分のようだね」

わかったぞ。その技つてのが木場の奥の手なんだな! つーか、今のままでもうすげえけど、これ以上速くなるってのか!?

「は、はは、はははははははは!」

突然ジークフリートが笑い始めた。腹を抱え、涙を流し、それはもう嬉しそうに。この状況で大笑いするとか・・・まさか今のおかしくなったのか?

「いいよ! いいよ木場祐斗! さっきの仲間の言葉は謝罪しよう!

キミは強い！ そんなキミを倒せば、僕はまた英雄として一歩強くなれる！」

何じゃそりや？ コイツ所謂バトルジャンキーってヤツか？

あーやだやだ、やっぱりテロリストになるヤツにロクな人間はいない。

「・・・あなたごときが『英雄』という言葉を口にするな」

その言葉に、俺の血は一気に冷え切った。それには明確な憎悪や怒りが込められていた。まるで、聖剣を巡る事件の時の木場に戻ってしまったと錯覚してしまうほど、今のアイツの雰囲気は恐ろしかった。「僕は本物の英雄を知っている。だから許せない。そうやって軽々しく英雄なんて口にするあなた達が。英雄の子孫？ それがどうした。あなた自身が英雄と呼ばれるに相応しい偉業を成し遂げたとしても言うのか？ 絶望の中にありながら、それでも誰かを守る為に歩み続ける事があなた達に出来るとも言えるのか！」

「木場・・・」

誰の事を言っているのかわからないはずが無い。そうだ、俺達は知っている。コイツ等みたいな似非野郎なんかじゃない、本物の英雄を。

「英雄を名乗りたいのなら、あの人の何万分の一でもいいから同じ事をやってみろ。それが出来ないのなら、今すぐ英雄を名乗るのを止めるんだな」

「ふっ、別にキミに認めてもらおうとは思っていないよ。僕は人間の英雄だ。悪魔に英雄扱いされるなど虫唾が走る。・・・キミの言う英雄も僕からすればただの狂人だよ。悪魔にもてはやされる立場になるなんて僕なら死んでもゴメンだ」

こんの野郎・・・！ 俺達を馬鹿にするだけじゃ飽き足らず、先輩まで・・・！

「・・・そうか。よかったよ」

「よかった？」

「これでもう、あなたを斬るのに微塵も躊躇いは無くなった。さあ・・・続けようか」

挑発するように手招きする木場。それを見たジークフリートは喜色満面に木場へ斬りかかるのだった。

第一百十三話 違えた道 取り返しのつかない道

アザゼルSIDE

俺と曹操は桂川の下流へ移動しながらやりあっていた。既に辺りは互いの攻撃の余波やらなんやらでボロボロだ。

「・・・なんだ、この魔力の波動は・・・？」

そんな中、ふと曹操が目線を上流へ移す。その隙に攻撃してやってもよかつたが、光と闇の相反するオーラの放出に、俺もついそちらへ目を向けてしまった。こんなマネが出来るヤツはウチの中で一人しかいねえ。

「くくく、木場の野郎。あんなモン隠してやがったのか・・・」

「聖魔剣の木場祐斗・・・。彼にあれほどの力は無かつたはずだが」

「はん、どうもお前等はアイツ等の事を過小評価している節があるな。若いヤツってのは少し目を離れた間に驚くくらい成長するもんだぜ」
「なるほど、確かにあなたの言う通りだ。だが、一つだけ訂正させてもらえるならば、俺達は決して彼等を過小評価しているつもりは無いよ。赤龍帝、聖魔剣、デュランダル使い、さらにはあのミカエルのエース、それにあれは・・・北欧の戦乙女かな？ あれほどの戦力を相手に侮れる余裕が人間である俺達にあるわけないだろう」

そういう割には、戦力が少なすぎる。あの魔帝剣使いと『魔獣創造』のガキ以外はこれといって目立つ戦力は見られない。俺がコイツの立場ならば、もう二、三人は使えるヤツを用意するはずだ。

「今回はあくまでも顔見せと手合わせのつもりだった。だからあの二人だけで十分だと思っただが・・・」

「イツセー達の方が予想以上だったってか？」

俺の指摘に、曹操はあっさり頷いた。

「そう・・・それだけが俺の予想を越えていた。対悪魔用のアンチモンスターは悪魔の苦手な光を出せる。対天使、対墮天使のモンスターほどではないが、自身にも多少の光への耐性は持っていた。それを呆気無く消し飛ばしたゼノヴィアの「力」。本気で無いとはいえ、あのジークに剣を届かせた木場祐斗の「速さ」。未だ聖女殿と姫君へ手

を伸ばさせていない紫藤イリナの「防御力」。それを支え、誰をどの順番で迎え撃つか瞬時に判断し、的確に対処する戦乙女の「空間認識能力」。能力で押し通るだけでなく、衣服さえ利用し、相手によって戦い方を変える赤龍帝の「柔軟性」。そして、全員に共通する悲壮感さえ感じさせるあの研ぎ澄まされた表情から見える「決意」……それが彼等を突き動かしている様に俺は見える。それが俺には気になってしょうがない。なんとなくだが、その「決意」の所為で、こちらの計算が狂ってしまったのだと思うんだ」

……なるほど、中々にいい読みをしゃがる。正解だぜ曹操。アイツ等……いや、俺も含めて全員、下手すりゃこの京都まるごとの命運がかかっているんだよ。

「その表情……知ってるなら教えて頂きたいですな総督殿」
「わかつちやいねえ。お前等はわかつちやいねえんだよ曹操。ここで何も知らないまま楽にしてやった方がお前等の為だ。慈悲をかけるのはミカエルの専売特許だが、今回だけは俺がその役目を負ってやるよ」

無知つてのは罪であり幸福でもある。コイツ等の「罪」はフリーという男を知らな過ぎた事。そして「幸福」は既にどうあがいてもフリーの排除対象という運命から逃れられない事に気付いていない事。

「慈悲か……。そうやって超常の存在は俺達人間をいつだって見下す。「自分達がいなければ」「自分達が導いてやらなければ」なんて具合にな。まるで支配者だ。……俺達はそんな驕りや高ぶりが許せないんだよ」

「……それがお前等の戦う理由か？」

「そうさ。だから俺達はあなた達に挑戦するのさ。「人間」として、悪魔やその他の超常の存在を倒す。それが「英雄」だ。そして、英雄になるのはいつだって「人間」だ。俺達は英雄を自称しているんじゃない。いずれそう呼ばれる様になるのだから、今から名乗っても別に問題無いだろう？」

「けっ、カツコつけやがって。素直に白状しろよ。「自分達はただ中二

病をこじらせた痛いだけの集団です」ってな」

今の会話で確信したぜ。こいつらは英雄の本当の意味を全くわかつちやいねえ。・・・つーか、それを抜きにしてもやっぱりコイツ等はムカつく。こいつらの言動を見ると、封印したかつての忌まわしい記憶がががが・・・。

「世界中の神器所有者を誘拐、洗脳。幼い子を持つ母親を拉致。その他諸々合わせて、とても英雄がやる様な真似じゃねえぜ」

「それが俺の霸道さ。よわつちい人間が超常の存在に挑む為には手段など選んでいられない。英雄に敗北は許されない。負ければただの人間だ。俺はこの道を極め、そしていつの日か彼の・・・フューリーの王道を越えてみせる」

霸道・・・。霸道ねえ・・・。確かにそう言えば聞こえはいいが・・・。「く、くくく・・・。なるほど、コイツはとんだ勘違い野郎だぜ・・・」

「勘違い？ 俺が何を勘違いしているの？」
「聞きてえか？ なら教えてやるよ。お前のそれは霸道なんて立派なもんじゃねえ。ただの“外道”だ。フューリーの王道を越えるだど？ 越えるどころか、お前はアイツと同じ土俵にすら立ててねえんだよ！」

「ッ・・・!?!」

「よわつちいから人間だから手段を選ばない？ はっ！ 同じ人間のアイツはいつだって真正面からぶつかってたぜ！ かつての二天龍との戦いでも、以前のレーティングゲームでも、アイツはアイツのままだった。大切な者を奪われようが、それでもヤツは外道に手を染めなかった」

「それは・・・彼ほどの力があればこそ出来た事だ」

「そうだな。というか、アイツみたいなのが増えてたまるか。だが曹操、俺が言いたいのはそういう事じゃねえ。お前はヤツみたいに全力なのか？ 全身全霊で、命をかけて、それでも無理だったから外道に手を染めたのか？ 違うだろ？ お前はただその方が楽だと思っただからそつちを選んだんだ。お前は最初から逃げてたんだよ。その時点でお前は霸道から逸れて外道の道を爆進してたってわけさ」

「・・・」

「それと、お前はさつき英雄に敗北は許されないとか言ったな。その理論で言えば、フューリーも英雄の資格は無いって事になるぜ？」
「え・・・？」

「俺も全てを知っているわけじゃねえが、アイツはかつて何度も敗北を味わって来たらしいぜ。特に『重力の魔神』とかいう存在には何度も絶望を与えられたとか言っていた」

あれは・・・確か合宿の時だったな。リアス達への必殺技のプランを話し合っていた時に、ヤツから聞かされたんだ。

「だが・・・それでもヤツは諦めなかった。何度も味方の部隊を失いながら、それでも挑み続け、そして最終的に『重力の魔神』を打ち倒した。何度負けようが、どんなに無様だろうが、決して希望を失わずに立ち上がり続ける。・・・英雄に求められるのは勝利だけじゃねえ。その姿で、その心で、周りに希望を与える。それも英雄に求められるフアクターの一つだぜ。・・・ま、今のお前じゃ一生かかっても無理だろうがな」

・・・つたく、何テロリスト相手に英雄論を語ってんだろうな俺。だが・・・こういう話は嫌いじゃねえんだよな。

「『重力の魔神』・・・。何故だ。そんな存在が何故現代に伝えられていないのだ」

そりやそうだ。この世界の話じゃねえんだからよ。まあ、それもサーゼクスとその息子の『企画』で世に明るみになるんだろうがな。つたく、グレモリーってのは本当に商魂が逞しくて嫌になるぜ。下手すりやマジで新興勢力が出て来そうだが、そうなくても墮天使は手助けしてやらんからな。

「お前は英雄の器じゃねえよ曹操。自分の力を試したいんだったら、ハンターにでも何にでもなればよかったんだ」

「・・・それでも俺は英雄にならなければならない。英雄の子孫、そしてこの聖槍を持って生まれた俺に、それ以外の道なんて無いんだ」

「はっ！　そうやってまた逃げるのか？　お前の御先祖様が見たら泣くぜ？　自分の子孫がこんなにもヘタレ野郎だって知ったらな。生

まればどうする事も出来ねえ。だがな、そこからどう生きて行くのかなんていくらでも修正が出来る」

「アンタは何も知らないからそう言えるんだ・・・！」

おっと、ようやく素のテメエを見せ始めたな。あの作り物の表情よりよっぽどマシだぜ。

「お前がどうやって生きて来たかなんぞ知ったこっちゃねえよ。俺はお前の家族でも友人でもねえ、ただの敵なんだからよ。同情する義理なんざはなっから存在してない。俺にとってお前はテロリストで、妖怪との協力体制の第一歩を邪魔してくれたムカつくヤツつてだけだ」

神器を持って生まれた人間が必ずしも幸せになれるとは限らない。むしろその力の所為で迫害されたりする事の方が多い。その点に關して言えば確かに同情する部分はある。だがこいつは・・・こいつを含めた英雄派の神器所有者達は、その力をよりにもよってテロに使っている。自分を傷付けた者達への復讐のつもりかもしれないが、それがまた別の誰かを不幸にするかわかっていないのだ。

「ヒーローごっこがしてえなら、誰にも迷惑かけずにやるんだな」

「総督殿。・・・どうやら俺は、あなたの事が嫌いらしい」

「奇遇だな。俺もだよ」

互いに口元を歪ませ、俺達は再びぶつかり合うのだった。

アザゼル SIDE OUT

イツセイ SIDE

枷を外した木場とジークフリートの戦いは、さつきとは打って変って終始木場が圧倒していた。ジークフリートは魔帝剣グラムに加え、北欧の伝説の魔剣と呼ばれるバルムンクの二刀流で木場を攻めるが、そんな伝説の剣も、当たらなければ木剣と変わらない。

木場が動く度に、周囲で幾度となく爆発が起こり、地面が抉れていく。それがうまい具合に牽制となり、他の英雄派の連中を援護に入らせなくしていた。・・・こいつ、今の俺達の中で一番強いんじゃない？

———どうやら“壁”を乗り越えたみたいだな。相棒も取り残されない様に頑張れよ。

わかってるよ。俺だってもっと強くならないといけないんだからな。

「ただ放出するだけで無く、極一部へと集中させる。・・・そうか、私に足りなかったのはこれだったのか・・・！」

ゼノヴィアが一人頷いている。何か掴んだのだろうか。

「いいかげん本気になったらどうだい？ このままじゃ『禁手』もせず
に敗北する事になるよ？」

・・・流石に言葉までは速くなるわけねえか。つかジークフリートのヤツ、これでも本気を出してねえって・・・大物ぶってるつもりか？

「ずいぶんと急いでいるじゃないか木場祐斗。まあ、〃それ〃を見れば理由はわかるけどね」

〃それ〃？ 首を傾げる俺の傍で爆発が起こる。その際、俺の頬に生温かい何かが付着した。それは真っ赤な液体・・・即ち血液だった。

「これ・・・まさか木場の!？」

見れば、地面の所どころが赤く染まっている。あの超スピードの代償なのか!?

「さっきから少しずつスピードが落ちている。だから見えるよ木場祐斗。キミのその速さは体の負担を度外視した事で得たもの・・・。既にボロボロのその足でいつまで戦えるのかな？」

ツ！ こいつ、まさか木場が限界を迎えるまで待つ気か!?

「テメエ！ 卑怯だぞー！」

「卑怯？ これも作戦だよ赤龍帝」

それでも納得いかない俺を止めたのは、木場だった。超高速移動を止め、俺の隣に立った木場の足はやっぱりボロボロになっていた。

「いいんだイツセイ君。ジークフリートの言う通り、相手の限界を待つのも立派な作戦さ。だけどね・・・僕が何も考え無しに枷を外したと思うかい？」

「え？」

「祐斗さん！」

その瞬間、木場の体を光が包み込んだ。これ・・・アーシアの癒し

の光!?

木場の足の出血が、光が治まると共に止まっていた。とつさに背後へ振り返ると、そこには両手を突き出しているアーシアの姿があった。

「ありがとう、アーシアさん。最高のタイミングだよ」

「木場、お前ひよつとして」

「ジークフリートと戦う前にアーシアさんをお願いしておいたんだ。僕が戦いを始めたら、いつでも癒しの波動を飛ばせるように準備しておいて欲しいってね」

この野郎、ちゃっかりそんな根回しを・・・!

「どうだい、ジークフリート? キミの言う限界までまだまだ先は長そうだよ?」

ジークフリートの表情が苦虫を噛み潰したようなものへ変わった。

「・・・なるほど。僕とした事が聖女の存在をすっかり忘れていたよ。やはり回復手段を持たれると厄介だな」

「では私達が・・・!」

何人もの英雄派のメンバーがアーシア達の方へ駆けだしていく。俺とゼノヴィアが迎撃しようとして前に割り込もうとしたその瞬間、地面から火柱が立ち上った。

「な、何だこの炎は!」

「見ろ! 他にも魔法陣が! これは・・・北欧魔術!」

慌てふためく英雄派達の前方にロスヴァイセさんが立ちはだかった。

「それ以上近づくとくのであれば、他の魔法も見せてあげますよ。氷漬けがいいですか? 風に切り刻まれるのがいいですか? それとも地割れに飲み込まれたいですか? いいですよ、好きなものを味わわせてあげましょう。ええ、私、久しぶりにこれでもかどタマに來てますから。なんだったら全部まとめてお見舞いしてあげましょうか?」

「た、大変です! ロスヴァイセさんがインフェルノつてます! 美女がキレてるのつてやっぱり怖えわ!」

ロスヴァイセさんの一睨みで英雄派の連中がたじろいだ。そして、俺とゼノヴィアはすかさずロスヴァイセさんの横に並び、改めて迎撃態勢を整えようとしたその時、下流の方へ行っていたアザゼル先生と曹操が戻って来た。二人とも纏っている物が所々壊れたり破けたりしているけど、これといって怪我は見られない。

「お前等無事だな？」

「先生こそ、大丈夫なんですか？」

「ふん、この俺があんなヘタレに負けるわけがねえだろ」

「年寄りのやせ我慢は良く無いですよ総督殿？」

「ああん!？」

な、何だ？ ヘタレとか年寄りとか、何があったんだ？

「いくぞお前等！ あの中二病集団をぶちのめして、とつとと八坂姫を救出するぞー！」

「もうあなたの時代じゃない。それを俺達が思い知らせてあげますよ！」

なんか知らんが、アザゼル先生と曹操がヒートアップしてる!? それに引つ張られる様に俺達も構えようとした次の瞬間、俺達と英雄派の間に見た事の無い紋様の魔法陣が出現し、そこからこれまた見た事の無い女の子が姿を現した。

「あれれ、ひよつとして今から始めるつもりでした？」

向かい合う俺達を見てそんな事を言う女の子。いやいや！ とうかキミ誰よ!?

「キミは・・・確かヴァーリの所の子だったな。何の用だい？ 俺達は派閥同士干渉はしないという取り決めだったはずだが？」

「ルフエイ・ペンドラゴンです。そっちから決まりを破っておいてよく言いますね。監視者の事、バレないとも思っていましたか？」

「キミ達のチームは『禍の団』でも異質だからね。テロに参加せず、それどころか邪魔をする事も何度かあった。拳句の果てに独断でのフューリーや赤龍帝達への接触。これで監視するなという方がおかしいとは思わないかい?」

「思いません。私達は私達の思うままに行動する。それを邪魔するも

のは誰であろうと許さない。……ヴァーリ姉様の言葉です。だから、余計な事をしてくれたあなた達にはお仕置きですよ」

展開についていけない俺を激しい震動が襲った。ええい！ 今度は何じやい!?

「ルフェイ・ペンドラゴン。……ルフェイといえば伝説の魔女、モーガン・ルフェイを思い浮かべるが、それに倣ったのか？ ついでにペンドラゴンと言えばアーサー……ひよつとしてあの野郎の血縁か何かか？」

「冷静に分析してないでちよつとは慌ててくださいよアザゼル先生！」

なんて言ってる間に地面が盛り上がり始めたあ！ んでもつてそこから何か出て来たあ！ 人型の物体ですけど、なんすかこれはあ!?

「これは……間違いねえ、ゴグマゴグか！」

そして、やつぱり知ってるんですかアザゼル先生！ ひやつほう！

流石我等が総督様だぜえ！

……はっ！ 俺とした事がついテンションが上がり過ぎておかしくなってしまった。ともかく、あの巨人が何なのか教えてもらわないと。

「先生！ あれは何ですか!？」

「ありやゴグマゴグつってな。お前が知ってるもんで例えたらゴレムみたいなヤツだ。だが、アレは全て次元の狭間に放置されていたはずだが……」

「はい。その通りです。以前、オーフィス様がまだ動きそうな巨人の反応を感知されて、それを聞いたヴァーリ姉様がいいトレーニング相手になりそうだって回収に出られたんです。あれは確か……フューリー様がレーティングゲームをされた時でした」

「なるほど。その次元の狭間のすぐ傍だったからこそ、あの場に現れたってわけか」

「どちらかというと、フューリー様の勝負の方が気になってたみたいですよ。このゴツくんを発見した後は美猴様達に任せてご自分はこのフィールドに行かれたみたいですよ」

な、なるほど、あの場にいきなりヴァーリちゃんが登場した時は不思議だったけど、まさかそんな事情があったとは。

「曹操・・・」

「ああ、やり合う気分じゃなくなっちゃったな。そろそろ戻るとしよう」

「ッ！ しまった！ あの野郎逃げる気か!？」

曹操達の周りを霧が覆い始める。あれは、俺達をこのフィールドへ転移させた霧か!？ じゃあ、曹操の隣に立つあのローブ姿で手元に霧を発生させている野郎が霧使いか!？」

「曹操!」

「総督殿！ 俺達は今夜、二条城において実験を執り行わせてもらおう！ 止めたければ来るがいい！ 精一杯のもてなしをさせてもらおう!」

たちこめる霧はさらにその濃さを増し、最早完全に視界が霧に包まれてしまった。そこへ、アザゼル先生の声が響く。

「通常空間に戻るぞ！ お前等すぐに武装解除しろ!」

その言葉通り、いつの間にか俺達は観光客の溢れる渡月橋の前に立っていた。・・・英雄派の姿は無い。あのルフエイって子とゴーレムもいなくなっていた。

その後、桐生達と合流し、俺達は二条城を観光してホテルへと戻るのだった。

イツセーSIDE OUT

曹操SIDE

「さすが、若手悪魔でも有名なりアス・グレモリーの眷属達だったね。思わず「アレ」を使いそうになってしまったよ」

「・・・そうか」

ジークの言葉を聞き流しつつ、俺はあの墮天使から投げつけられた言葉をずっと反芻していた。

——お前のそれは霸道なんて立派なもんじゃねえ。ただの「外道」だ。

——越えるどころか、お前はアイツと同じ土俵にすら立ててねえんだよ！

——全身全霊で、命をかけて、それでも無理だったから外道に手を染めたのか？ 違うだろ？ お前はただその方が楽だと思っただからそつちを選んだんだ。

——お前は最初から逃げてたんだよ。

超常の存在らしく、偉そうに戯言をのたまってくれた。あんなもの聞く価値すらなかった。途中で切り上げてさっさと戦闘を再開すればよかった。・・・なのに、何故俺は最後までそれに耳を傾け、あまつさえここまでいらついている・・・？

(何も知らないヤツへの苛立ち？ いや違う・・・。この苛立ちは俺自身へのものなのか・・・？)

自分の感情が何に向けられているのかわからない。それが俺を余計苛立たせた。・・・わからないといえればあれもそうだ・・・。

——アイツはかつて何度も敗北を味わって来たらしいぜ。

俺の知識の中に、“重力の魔神”などというものは存在しない。あの伝説の騎士を倒した者の記録が残されていないはずなのだが、これまで俺が調べて来たデータや資料には全く登場していない。

何故戦えたのか。何故諦めなかったのか。何故・・・立ち上がる事を止めなかったのか。そもそも、人間であるはずの彼がどうしてあれほどまでの力を持つに至ったのか。その力で何を成して来たのか。俺は何も知らない。知らないからこそ・・・興味が湧いてしようがない。

「・・・神崎君、俺はキミの事が知りたい」

「何か言ったかい曹操？」

「いや・・・今日の夜の事を考えていただけさ」

「ふふ、僕も待ちきれないよ。きつと素敵な夜になるだろうさ」

そうだ、今は俺の疑問など二の次だ。まずは今日の夜の事だけを考えておこう。

俺は頭を振り、英雄派の拠点へと戻るのだった。

曹操SIDE OUT

IN SIDE

早いもので、アーシアが修学旅行へ出発して三日目となった。明日には我等が天使様がお戻りになる。

初日の夜にスコルが鞆に紛れ込んでいたという連絡が来た時は驚いたが、それ以降は特に連絡は無い。まあ、緊急の用事以外で連絡する事なんて特に無いし、今頃は班のみんなと楽しく観光しているんだろう。渡月橋とか二条城とか行ったのかな？ 何気に俺のお気に入りだったりするんだよな。

さて、そんな風に一年前の事を思い出している俺はというと、冥界のグレモリー家にお邪魔していたりする。しかもちやつかりお昼ご飯まで頂いてます。

「すみません。お昼までご馳走になってしまつて」

つい謝ってしまう俺に、リアスのお父さんは笑顔で答えた。

「何を言う。私達の間で遠慮は無用だぞ神崎君。以前にも言ったが、自分の家だと思つてもつとリラックスしてくれたまえ」

そりゃ無理です。こんな立派過ぎるお家が自分の家とかありえないですから。

そんな感じで昼食を済ませた後、俺はミリキヤス君とグレイファイアさんに連れられて彼の部屋へ向かう事になった。さて、いよいよミリキヤス君の見せたかった物とご対面だ。

「これは・・・!？」

部屋へ通された俺が見た物。それは、山の様に積まれた大量の本だった。というか一冊一冊がめっちゃ分厚い所為で天井に届きそうになってるんですけど！

「え、えつと、その・・・」

それに目を奪われていると、ミリキヤス君が挙動不審になっていた。顔が強張ってかなり緊張している様に見える。そんな彼の背中を、グレイファイアさんが優しく押した。

「頑張つてミリキヤス。この日の為にあなたは頑張つて来たのでしよう?。」

「お、お母様……。はい、そうですね。僕はこれが僕の使命だと思っ
てこれまで頑張つて来たんです！」

そう言うと、ミリキヤス君はその本の中から一冊抜くと、それを俺
に手渡して来た。

「この本は……?」

「神崎様。以前あなたはミリキヤスへあなたの世界での戦いを話され
たそうですね?」

俺の世界の戦いって言うと……。ああ! ひよつとしてアルファシ
リーズの事か? うん、確かに調子に乗って語りまくった憶えがある
わ。

「それを聞いたミリキヤスが、その全てを本に纏めたのです。『鋼の救
世主』……。それがその本のタイトルです」

全てって……。え!? まさかアルファからサルファまで!? ここに
ある本が全部アルファシリーズのストーリーを文章化したものって
事!?

「あ、あの! 僕、フューリー様からお話を聞いて、もの凄く感動して、
これは僕だけじゃなくてもっと多くの人々に伝えなきゃいけないっ
て思つて……!」

おうふ……。マジか。というか、そんなに気に入ってくれたのかミ
リキヤス君。ゲームの話だよ? それをこんなたくさんの本にし
ちやうなんて……。純粹に凄すぎるだろ!

「本日お越しいただいたのは、この本を出版させるか否か、神崎様に判
断して頂きかったからです。これが世に出れば、あなたが異世界より
やって来た事が明るみになります。もしもそれが不都合というので
あれば、もちろん出版は取りやめさせて頂きます。……。ですが、母
親として、息子が心血を注いで書き上げた物が日の目を見ずに消える
のは……」

「別に構いませんよ」

「え?」

即答する俺に、二人はしばし呆気にとられた顔を見せた。もうこの
人達含めて何人にもバレてるのに、今さら隠しても意味無いし。何よ

り、グレイファイアさんが言う通り、これほどまでに頑張つて書ききつたミリキヤス君の頑張りを無駄になんか出来ないし。てか、そもそもフィクション物で何で俺が異世界から来た事がバレるわけ？ それ以前に俺登場しないよね？

「どうぞ出版してください。俺は別に困りませんし、何よりミリキヤス君の書いたあの戦いがどうなっているのか俺も読んでみたいですし」

そう言うと、ペアつと表情を明るくさせるミリキヤス君とグレイファイアさん。・・・なんか、反応がそっくり過ぎて面白いな。

「ほ、ホントですか!? 本当にいいんですか!?」

「ああ」

「お、お母様！ ほ、僕・・・！」

「ええ、わかっていきます。旦那様と奥様に教えてあげなさい」

「はい！ で、ではフューリー様！ 失礼します！」

勢い良く部屋を飛び出していくミリキヤス君を見送り、部屋の中は俺とグレイファイアさんだけになった。

「神崎様、本当にありがとうございます。あの子のあんな嬉しそうな顔は初めて見ました」

「いえ、別にお礼を言われるほどの事では・・・」

（この本が世に出れば、神崎様は益々注目を浴びる事になる。神崎様をよく思っていない一部の悪魔達も本腰をあげて来るかもしれない。・・・いえ、この方の事です。きつとそれすらも踏まえて許可を出してくださったのでしょうか。この本を世の人々にも知ってもらいたいというミリキヤスの「夢」を守る為に・・・）

「グレイファイアさん？」

「ふふ、この流れでリアスお嬢様の「夢」も叶えてくだされば、義姉としては嬉しいんですけど」

リアスの夢っていうと・・・グレモリー家の立派な当主になるってヤツだよな？ それは俺がどうこうじゃなくてリアス本人の努力が求められるんじゃないか・・・。

その後、何故かお父さんとお母さんにまで感謝され、『鋼の救世主』

の第一巻を土産に、俺は人間界へと戻るのだった。

そしてその夜、俺は自室で早速それを読む事にした。

——この物語を『鋼の救世主』、そして彼らと共に戦い続けた『騎士様』へ捧げます。

そんな一文と共に物語は始まった。この騎士様って、ひよつとしなくても俺の事だよな？　はは、なんだかこれだと俺も登場人物の一員になった気がするな。

そんな感想を抱きつつ、俺は本文へと目を移した。

物語は、総司令官である「俺」という人物の視点で描かれていた。まあ、プレイヤー視点と言った方がわかりやすいか。

でもって、一話目のタイトルが『鋼鉄のコクピット』で数行目でクスハが出て来た。そういや、ニルファに繋げやすいからって理由でクスハ主人公で話をした様な。何人も主人公出て来たらミリキヤス君も混乱してただろうしね。

そのまましばらく読み進めていたが・・・うん、これ面白いわ。俺が説明してない所をミリキヤス君の感性で違和感無く表現してるし、何よりロボット同士の戦いの描写が無茶苦茶上手い。意外な才能・・・と言ったらミリキヤス君に失礼かな。

けど、一つだけ気になった事がある。この「俺」という人物、どうもフィクションではなく、実際にあつた戦いの様な語り方をしてる。これもミリキヤス君の文章力が優れているからだろうが、これ勘違いする人が出るんじゃないだろうか。

「・・・なんて、こんな荒唐無稽な話を信じるわけないか」

うん、俺の考え過ぎだな。俺は余計な考えは放り投げ、久しぶりにアルファの世界を堪能するのだった。

第百十四話 触れるな危険！

イツセーSIDE

就寝時間を間近に控え、俺の部屋へグレモリー眷属とイリナ。さらにシトリー眷属。さらにはアザゼル先生にレヴィアタン様にロスヴァイセさん。そしてアーシアとスコルという大人数が集まっていた。理由は当然、これから始まる英雄派達との戦いに向けての話し合いだ。

「ね、ねえアーシアさん。スコルは？」

シトリー眷属の一人・・・ええっと、巡だっけ？ 彼女が恐る恐るといった様子でアーシアに尋ねる。

「今は眠ってます。どうもお昼に山田先生にたくさん構って頂いた様で、とつても満足そうな顔でぐっすりです」

「そ、そう・・・」

膝の上で丸まったスコルを撫でるアーシアに顔を引き攣らせながら頷く巡。あー、まあ見慣れないヤツからしたら、神喰狼を膝の上に乗せるのって相当ヤバそうに見えるのかもな。

「よし、全員集まった所で作戦を伝えるぞ。既に京都で活動を行っていたこっち側の関係者を総動員して警戒態勢を敷いている。この地に詳しい妖怪達も協力を申し出てくれた。怪しいヤツがいればすぐに知らせてくれるだろう」

「英雄派は実験をするって言ってたんですよ？ 何の実験何でしょう？」

「ふん、中二病集団のやる実験なんざどうせくだらんものに決まっている。んなもんに無理矢理付き合わせられようとしている九尾の大將が不憫でしようがないぜ」

匙の質問に慥然とした顔で答えるアザゼル先生。いつの間にかアイツ等を英雄派じゃなくて中二病集団って呼んでるけど・・・妙にしつくりくるな。

「まずはシトリー眷属。お前達は京都駅周辺で待機だ。おそらく、俺達がこのホテルを利用してある事も向こうは知っているだろう。万

が一襲撃をかけて来たら、その時はお前等が頼りだ。ホテル自体にも境界は張つてある。一般人以外には出入り不可能なシロモノだから展開中はお前達もホテルには入れない。気をつけるよ」

「はい」

「でもってグレモリー眷属とイリナだが・・・」

「もちろん、オフエンスですよね？」

最後まで聞く前に木場が割り込んだ。コイツ、さっきからずっと闘気を体中に纏わせてる。あのジークリートとの再戦が待ちきれないって感じだな。

「おう、そのつもりだ。この会議が終わった後、すぐにお前達には二条城へ向かつてもらう。・・・お前等、昼間のあれだけじゃまだまだ暴力足りねえだろ？俺が許可する。あの勘違い野郎どもをぶちのめして、とつとと八坂姫救い出すぞ」

正面からの殴り込みですと？ んなもん・・・最高じゃないですか！ 思わずヒヤッハー！ と叫びたくなつた俺は悪くないはず！

「それと、アーシア及びスコルも二条城へ向かつてもらう。理由は・・・言わなくてもわかるよな？」

ツ・・・!!? せ、先生、ついに投入する気ですか!?

「例の件を考えれば後方待機させておくのが正解なんだろうが、万が一、いや億が一の為の保険だと思え。何より、本人がそれを望んでいるからな」

「アーシアが？」

「・・・足手纏いなのはわかっています。でも私は・・・九重ちゃんのあの握り締めた拳から流れた血を見て決めたんです。イツセーさん達みたいにも、私も命をかけて戦うって！」

アーシア・・・。凄いや・・・。立派だよ・・・。でもね、命をかけるとか物騒な事を言うのだけは勘弁して欲しいな。

「わかつたなイツセー。お前達の優先事項は八坂姫の救出。及び・・・アーシアを無傷で帰還させる事だ」

「イエッサー！」

どうやらこれが俺達のラストミッションになりそうだ。へ、へへ、

体の震えが止まらねえ。これが武者震いってヤツか。

「ねえアザゼルちゃん。他にも助っ人を呼んでるんでしょ？ ならそのノリでフューリーさんも一緒に……」

「却下に決まってるだろうが」

「ぷくくく！ 何よ何よ！ せつかくフューリーさんと京都の街の散策とかしようと思ってたのに、アザゼルちゃんの所為で結局叶わずじまいだよ！」

「お前、俺の胃がビッグバン起こしそうになってた間にんな事考えてやがったのか……！」

頬を膨らませるレヴィアタン様に割と本気でキレかけているアザゼル先生。とそこへ、匙が声をかけて来た。

「兵藤、神崎先輩の事は聞いている。マジで頼むぞ？」

「何他人事みたいに言ってるんだ匙？ お前もイツセー達の組だぞ？」

「——ファッ？」

レヴィアタン様の頬を引っ張りながらアザゼル先生が軽い口調でそう言うと同時に匙の表情が一瞬で間抜けなものへ変わった。

「お前の新たな力をお披露目するには絶好の機会じゃねえか。連中に見せてやれよ。ヴリトラの……お前の黒い炎をな」

「ちよ、待っててくださいよ！ いきなりそんな事言われても……」

「匙」

「何だよ！」

俺は匙の肩を掴むと、とびっきりのスマイルをお見舞いしてやった。

「ようこそ地獄へ」

「しゃおらあああああ!!!」

「うぼあっ!?!」

や、野郎……。清々しいくらいの右ストレートブチ込んでくれやがってえ……!

「ああそうかよ！ わかったよ！ やってやるよ！ 英雄派だろうがなんだろうがやってやればいいんだろうが！ だがその前にもう一回殴らせろや兵藤お！」

「H A H A H A！ いいぜ匙！ その気迫で頼むぞ！」

「よし殺す！ ぶっ殺してやる！」

「お、落ち着きなさい元士郎！」

「どいてくれ由良！ そいつ殺せない！」

「あわわわ！ 元ちゃんの目から光が無くなってるよ！」

「ね、ねえ、アーシアさん。ちよつと撫でてもいい？」

「え？ あ、はいどうぞ」

「うわあ、モフモフだあ……！」

「わ、私にもモフらせて……！」

「いい機会だから言わせてもらおうよ！ アザゼルちゃんは乙女心が全然わかって無いよ！ そんなんだから周りが結婚する中取り残されるんだよ！」

「ぐふっ!?! て、テメエ、セラフオール……！ 言うてはならん事を……！」

「……つーか誰が乙女だ誰が！」

「え？ 私まだ処女（おとめ）だよ？」

「知るかボケ！」

「そうだ木場。お前のおかげで面白い案が浮かんだ。修理に出していた『アレ』も戻って来たからな。早速試してみようと思っている」

「はは、それは心強いな。僕もあの男との再戦が楽しみだよ」

「私も前に出たいんだけどなく。まあ、アーシアさんを守らないといけないし、しょうがないんだけどね」

「……ぶっ。クスクス」

狭い室内に怒声や叫び声が響き渡る。そうやって誰も收拾がつけられないカオスな空間に静けさを取り戻させたのは、ロスヴァイセさんの笑い声だった。

「あん？ 何笑ってんだよロスヴァイセ？ お前も俺が一人身なのがおかしいのか？ お互い様の癖に」

「違いますよアザゼル先生。さつきから聞いていれば、誰一人英雄派との戦いについての不安を口にしない。まるで、勝つのが当然だと言わんばかりに。それが何だかおかしくって」

……言われてみれば、俺達さつきから神崎先輩とかスコルの事と

か、そう言った事ばかり気にして、英雄派の連中の事をまるで考えて無かった。何でだろう。シトリー眷属とのゲームに負けてから二度と慢心はしないって決めたはずなのに。

「イツセー。お前今、自分が慢心とか油断とかしていると思ってるだろ?」

「え? わ、わかるんですか?」

「その顔を見りゃわかる。だがなイツセー。それは慢心でも油断でもねえ。実力に裏打ちされた『余裕』ってヤツだ。昼間の戦いを思い出せ。お前達に連中より劣ってる所は何一つねえよ」

「余裕って、俺にそんなもの無いですよ。いつも一杯一杯なのに」

俺が手を振りながら答えると、アザゼル先生は俺の頭を乱暴に撫でた。

「はは、そうだな。お前はそうやって全力で走ってる方が似合ってるぜ」

これは・・・もしかして褒められた? うわ、なんか恥ずい。・・・そして匙、テメエは今すぐそのムカつく顔を止める。さっきの仕返しのためか? のつもりか?

「ともかく、みんなそれぞれの役目をしっかり果たせ。それさえ出来れば俺達に負けはねえ。・・・勝って帰るぞ!」

「「「「「「はい!」」」」」」」

拳を突き上げる先生に倣い、俺達も一斉に拳を突き上げた。待ってるよ曹操! 待ってるよ英雄派! 今からぶん殴りに行ってやるからな!

そして、俺達は二条城へ向かう為、ホテルを出てバス停へと向かうのだった。

イツセーSIDE OUT

真耶SIDE

生徒達の就寝時間まで残り三十分を切っていた。私は窓を開けて夜風を浴びながら手もとの写真を眺めていた。

「うふふ、たくさん撮れたなあ」

映っているのは全部スコルちゃん。仰向けで万歳したり、私の指を舐めたり、色々なスコルちゃんの姿を写真に収めてしまった。もちろん、それだけじゃなくて、思う存分モフモフもさせてもらった。結局、それだけで一日が潰れてしまったけど、私は後悔は全くしていません！

「はあ、可愛かったなあ」

オカルト部のみんなで飼ってるって言ってたっけ。．．．今度遊びに行ってみようかなあ。

「．．．あれ？」

ふと、写真から外へ目を移すと、駒王学園の制服を着た子達が何人も外へ出て来た。あれは．．．兵藤君にアーシアさん!? それに木場君達まで!? ど、どうしてこんな時間に!? もうすぐ就寝時間ですよ!?

「と、とにかく止めないと!」

私は寝間着姿のまま部屋を飛び出し、すぐにエレベーターで一階へ降りた。そして急いで外に飛び出たけれど、既に兵藤君達の姿は無かった。

「ど、どこへ行ったの．．．!?」

一瞬だけ悩み、私はひとまず京都駅の方へ向かう事にした。街の明かりがあるとはいえ、夜の一人歩きはやっぱり怖いなあ。

「な、なんて怖がつてる場合じゃない。早く探さないと．．．!」

「何を探すのかしら?」

「ひやあああああああああああ!?!」

背後からの突然の声に、私は思いつきり叫び声をあげてしまった。な、何!? ひよっとしてお化け!?

「はあい、お姉さん。こんな時間にそんな格好で歩いていると危険よ?」

振りかえった私の眼前には、夜でもはっきりわかる綺麗な金髪の女性と、その横に並ぶとっても背の高い男性だった。

「あ、あああああなた達は!?!」

「そんなに怯えないで。私達は．．．ただの観光客よ。そういうあなた

はどなた？」

「え？ あ、わ、私は山田真耶と申します」

「真耶ね。いい名前じゃない。それじゃあ改めて聞くけど、真耶はこんな時間にそんな格好で何をしていたのかしら？」

そ、そうだ。ひよつとしたらこの人達、兵藤君達の事を知ってるかもしれない。

「あ、あの！ この辺りで制服を着た子ども達を見ませんでしたか！」「制服を着た子ども達？」

「私とその子達は修学旅行でここへ来たんです。もうすぐ就寝時間なのに外へ出て行くのが見えたから私・・・！」

「なるほど、探しに来たのね。でもゴメンなさい。そんな集団は見て無いわね」

「そう・・・ですか。兵藤君達、どこへ行ってしまったのかしら・・・」「兵藤君？」

「いなくなった子の一人です。茶髪で結構特徴的な髪形をしているんですけど・・・」

「ふうん・・・」

「おい、ジャンヌ。こいつは使えるぞ」

「使えるって・・・あなたねえ。勝手な真似したら曹操に怒られるわよ？」

「はっ、これまで何人に同じ事して来たと思ってやがる」

「・・・それもそうね」

「あ、あの、何の話を・・・？」

「ああ、こつちの話よ。そうね・・・。真耶、よければ私達も探すのを手伝いましょうか？」

「ふえ!? そ、そんな、見ず知らずの方にご迷惑をおかけするわけには・・・！」

「ふえって・・・可愛い反応するわね。こうして言葉を交わした時点で見ず知らずとは言えないでしょ。いいから手伝わせてよ。困った時はお互い様って言うじゃない」

ど、どうしよう。でも、一刻も早く兵藤君達を見つけないといけな

いいし……。ここまで言ってくださる方の厚意を無下にするわけにも
いかないし……。

悩みに悩んだ末、私はお二人の力を借りる事にした。そして、二人
は早速私に有益な情報をもたらしてくれた。

「そうだわ、真耶。さっきは見えてないって言ってしまったけど、そうい
えばそんな感じの男の子を見た憶えがあるわ」

「ほ、本当ですか!？」

「ええ、案内してあげる」

歩きだす二人の後を、私はぴったりと着いて行つた。

「本当にありがとうございます。なんてお礼を言ったらいいか……」
「いいわよお礼なんて。だって……あなたには私達の役に立つてもら
わないといけないもの」

「え？」

いつの間にか辺りから音が消えていた。闇はさらに深く濃くなり、
まるでこの場だけ隔離されてしまったかのようなようだった。

……怖い。ここにいたら駄目だ。そんな警鐘が頭に響く。それと
同時に、猛烈な睡魔が私を襲った。

「お休み、真耶。いい夢を……」

その言葉が耳に届いたのを最後に、私の意識は完全に沈んでしま
うのだった。

第百十五話 ドラゴン怒りの鉄拳

イツセイSIDE

英雄派め、いきなり仕掛けて来やがったな。まさかバスを待っている最中に跳ばされるとは思わなかったぜ。またあの『絶霧』とかいう神器の仕業だな。

『京都』と表示されたプレートを見上げながら、俺は自分の身に起きた事を分析した。周囲には誰もいない。どうやらバラバラに散らばされてしまったようだ。

「……っておい！ やべえじゃねえかよ！」

アーシア！ アーシアはどこだ!? 早く見つけないと！ うおのれい英雄派あ！ アーシアに指一本触れてみやがれ！ 首根っこ引つ掴んで先輩の前に突き出してやるからな！

アーシアを探す為、全力疾走しようとした直前、俺の携帯の着信音が鳴った。ええい、こんな大変な時に誰じゃい！ つーか通じるのかよ！

「木場……!?!」

画面には木場の名が表示されていた。俺はすぐに通話ボタンを押した。

「木場！ アーシアは！ アーシアはそっちにいるか!?!」

「お、落ちついてイツセイ君。アーシアさんは無事だよ。たった今ゼノヴィアから連絡を受けたけど、イリナさんと九重姫の四人で一緒だっけさ」

「そ、そうか。……って九重？ なんであの子が……?」

「どうやら僕達と一緒に二条城へ向かうつもりだったみたいだよ。それで転移に巻き込まれてしまったらしいんだ」

「なるほどな。とにかく、アーシアも九重も無事ならよかった。ならロスヴァイセさんと匙は……」

「二人は僕と一緒にいるよ。ともかく、互いの無事も確認出来たし、次は合流を目指して移動しよう。……どうやらこのフィールド、思った以上に広いみたいだ。おそらく二条城を中心にした街をそのまま

再現しているんだと思う。ちょうどアザゼル先生からもらった地図くらいの範囲くらいはありそうだよ」

「・・・そりや相当にデケえな。わかった。なら合流は二条城でつて事
でいいな？」

「そう言うと思つてゼノヴィアにも合流地点を伝えてあるよ。今頃彼女達も二条城に向けて移動しているはずだ」

「相変わらず手際がいいなお前は。よし、それじゃあそろそろ切るぞ。そつちも気をつけろよ」

「イツセー君もね」

携帯を切り、俺は籠手を発現させて線路に下りた。こつちの方をずっと歩いていけば、二条城前の地下鉄駅まで行ける。昼の帰り道の逆を辿ればいいってわけだな。

——相棒、わかつているとは思うが、何が出て来るかわからん以上、警戒だけはしておくんだぞ。

「だな。・・・さつそくお一人様がいらつしやつたみたいだぜ」

前方から英雄派の制服を着た男が歩を進めて来た。

「やあ、赤龍帝殿。空を見たかい？ 雲が一切無いから星がとても綺麗だよ」

「さあな。どこかの誰かさんがいきなりこんな地下へ放りこんでくれたんで見たくても見れねえよ。つーか邪魔だから退いてくれ。俺のラストミッションの邪魔するんなら容赦しねえぞ」

「そのラストミッションとやらは初耳だが、俺もただ顔を見せるだけの為にここまで来たんじゃない。悪いが少しばかり付き合つてもらうぞ」

男がそう言った直後、男の影が意思を持ったかのように動き始めた。

——来るぞ相棒。

「これが俺の禁手化だ」

影が男の体を包み込んでいく。不定形だったそれはいつしか鎧の様なものへと形成された。

「アンタの恐ろしさはなんとと言ってもその馬鹿みたいな攻撃力だ。だ

が、この『闇夜の獣皮』を纏った俺を殴れるかな？」

「なら試してやるよ！」

味方はいない。負けは即“死”に繋がる。けど、それがどうした。こちらら京都に来てからずっと命かけてんだよお！

籠手を振りかぶり、避ける素振りさえ見せない男の顔面へ叩きつける様に拳を放つが、俺の一撃は男の顔面をすり抜けてしまった。感触がまるで無い。これじゃまるで煙を殴ったみたいだぜ。

「わかったか？ この鎧の前にはどんな攻撃も無駄だ。アンタのパワーも、当たらなければ意味が無いんだよ」

「・・・」

「ふ、今になって状況を理解出来たのかな？ なんだったらアンタも『禁手化』すればいい。もつとも、それでも俺には拳は届かないだろうがな」

「・・・は？ 禁手化？ たかだが攻撃が通じないくらいで禁手化しろってか？・・・舐めんなよ。」

「そりゃ出来ねえな。俺の『赤龍帝の鎧』はとっておきなんでね。お前程度の相手になんざ使う価値もねえよ」

「・・・何だと？」

俺の言葉を受け、男の額に青筋が浮かびあがる。

「確かにお前のその鎧がある限り、俺の攻撃は通らねえ。なら、通るようにしてやればいいだけだろうが」

「ほざけ！ やれるものならやってみるがいい！ その手段があるのならなあ！」

憤怒の表情で襲い掛かって来る男を前に、俺は倍加を始めると共に籠手に魔力を集中させた。かなり特殊ではあるが、あれは“鎧”なんだ。だったら、この技なら通じるはずだ！

（イメージしろ！ 疑うな！ 必ずやれる！ 破壊してみせる！）

影の刃が迫り来る刹那、俺はありったけのイメージと共に男の鎧へ手を伸ばした。当然掴めはしなかったが、今、確かに俺はヤツの鎧に“触れた”。矛盾しているかもしれないが、俺の認識では確かに触れたんだ。その認識さえあれば実際に触れようが触れまいが関係無い

!

「消し飛べえ！ 『鎧崩壊（アーマー・ブレイク）』ウウウウウウウウ
!!!」

「なっ?!」

瞬間、解き放った魔力の波動が、男の鎧を消滅させた。つしやあ！
見たかこの野郎！ これが先輩から教えてもらった俺の新技だ！

「んでもってコイツを喰らええええええええええええ!!!」

無敵だと思っていた鎧を消され、呆然自失といった様子で棒立ちと
なった男の顔面に、今度こそ俺は拳を叩き込んだ！

「があああああ?!?!」

線路上を激しくバウンドしまくった後、男はベシヤリと地面に叩き
つけられた。

（オロロロロロロ・・・!）

ツ!? な、何だこの頭の中に響く気持ち悪い声は!? いや、声つ
つか、なんか吐いてる様な・・・。

——相棒、今お前にあの技を教えた男が嘔吐しているぞ。

やっぱりかあ！ うわ、俺の頭の中に吐かれてるみたいでこっちな
で気持ち悪いですけど！

——どうやら男相手に使った所為で拒否反応を起こしたらしい。
だが、俺は嬉しいぞ相棒。・・・アイツもこんな風にまともな使い方
をしてくれていれば、俺もあんな目に遭う事も無かったはずなの
に・・・。

な、なんか知らんが、お前も苦勞して来たんだなドライブ。でも、お
かげでこうして勝てたんだし、よしとしようぜ。

声を震わせるドライブをなだめつつ、俺は倒れ伏した男の横を通り
過ぎようとした。その時、男の弱々しい声が俺の耳に届いた。

「・・・ようやく得た『禁手』でも天龍には届かないか。やはり曹操達
と違って、英雄の子孫でも何でも無いただの人間だった俺には悪魔に
勝つなんて無理だったんだな」

その言葉がどうしてかムカついてしまった。俺は男の胸倉を掴ん
で無理矢理立たせた。

「んな事は関係ねえ。九重を・・・あんな小さい女の子のお母さんを利用しようとするテロリストなんかに負けるわけにはいかねえんだよ」
「ふ、ふふ、悪魔の癖に正義の味方を気取るつもりか？ 悪魔も妖怪も人間にとつては脅威でしかない。そんな連中がどうなるうが知った事では無い。だから俺はアンタと戦ったのさ。それが曹操の為になると思ってた。神器を持って生まれた所為で、このクソみたいな世の中で、クソみたいな人生を送っていた俺を、あの人が救ってくれたんだ。俺なら英雄になれるって・・・そう言ってくれたんだよ！」

男の目に涙が浮かぶ。神器を持って生まれた事による悲劇。・・・アーシアもそうだったな。それに俺も神器を持っていた所為でドーナシークに殺されかけたんだ。

「迫害されていただけだった俺の力が悪魔や天使、果ては神々を倒す術に繋がるんだ！ この俺がだ！ そうなったらもう、誰にも俺を否定させねえ！ そうさ、間違っているのは俺じゃねえ！ この世界の方だ——」

「テメエの弱さを誰かの所為にしてんじゃねえよ！」
「ぐっふっ!」

俺はもう一度男の顔面を思いっきり殴った。ただし、籠手では無く素手でだ。

「お前を追い込んだのは確かに周りが悪いさ。恨みを抱くのも仕方ねえかもしれないねえ。だからって、自分の力で誰かを不幸にしていわけがねえだろうが！ それじゃあお前を追い込んだ連中と同じってなんでわからねえんだよ！」

「黙れえ！ 俺が・・・俺があんなヤツ等と一緒にわけが・・・！」
「一緒なんだよ！ お前のやった事で誰かが涙を流す！ 誰かが傷つく！ 誰かが不幸になる！ そうやって第二、第三のお前が生まれ続けるんだ！ だから俺はお前をぶん殴る！」

鼻血やらアザやらで滅茶苦茶の男の顔面へ、俺は止めの一発となる拳を振り上げた。

「・・・お前、さつき俺が正義の味方を気取っているとか言ってたよな？」

「はあっ・・・はあっ・・・。そ、それがどうしたって言うんだ・・・」
「正義の味方ってのは、全ての人を守ってくれる存在だ。そんなの、あの人にしか出来やしねえよ。俺に出来るのは、精々こうやってお前を・・・目の前の相手をぶん殴る事だけさ」

荒い呼吸を繰り返していた男が肩を振るわせる。その顔は笑っていた。

「・・・何だよそれ。カッコつけ過ぎだろ」

「へっ！ 男の子はカッコつけるのが仕事だろうが」

「でも・・・何でだろうな。妙に気分がスッキリしてるよ。思えば、憎しみや恐れじゃ無く、純粹に怒りを向けて来たのはアンタが初めてかもしれない。俺を『神器を持った人間』としてじゃなく、『俺』として真っ直ぐに見つめて来たのもな。それは曹操でもしなかった事だ。あの人は神器を持った特別な人間として俺を見ていたから」

うげ、初めてとか見つめるとか、誤解される様な言い方すんなや！
「なあ、最後に教えてくれよ。アンタが唯一正義の味方だと認めるヤツの名前をさ」

「・・・神崎亮真。伝説の騎士で、滅茶苦茶強くて滅茶苦茶優しい俺の先輩だよ」

「ッ・・・！ は、はは、そうか。そういやアンタ達の傍には本物の英雄が——」

俺は拳を振り降ろした。今度こそ男は動かなくなった。・・・これでいい。コイツは敵なんだからな。目が覚めた時には全てが終わってるだろうが、それからどうするかはコイツ次第だ。

しばし男の腫れあがった顔を見つめ続けた後、俺は改めて線路の上を歩き始めた。そこへ、再び木場から電話がかかって来た。

「イツセー君。こっちは合流地点に到着したよ。案の定、妨害があったけど、そっちはどうだい？」

「こっちも今一人片付けた。悪いがもう少し待っていてくれ」
「わかった。待ってるよ」

俺は携帯を切った。うぬぬ、思ったより時間がかかってしまったか。急がねえと。

——相棒。

何だよドライグ？

——今代の宿主がお前でよかったよ。
な、何だよ急に。

——ふ、言ってみただけだ。それよりのんびりしていいの
か？

へいへい。わかってるっての。

突然のドライグの言葉に妙なむず痒さを感じつつ、俺は走り始める
のだった。

『・・・甘いな。だが・・・心地良い甘さだ。その甘さ、どこまで貫け
るか見物だな』

第一百十六話 シーリング・ブレイク

イツセイSIDE

アンチモンスターの妨害を突破し、俺は二条城前のホームから外へ出て城門前に到着した。木場からの連絡通り、すでに俺以外のみんなが揃っていた。

「来たな兵藤」

「悪いな匙。連中の妨害がしつこくてよ」

最初に俺に気付いた匙に片手を上げて応える。全員、外見からは特に怪我をしている様には見えない。安心したぜ。

「イツセイ君だけ単独での行動だったから仕方ないさ。まあ、キミがやられるはずが無いって信じてたけどね」

「当たり前だろ木場。このラストミツシヨン、俺は不転の覚悟で挑んでるんだ。今さらアンチモンスターごときにやられるかよ」

俺が木場へそう返したと同時に、閉まっていた門が大きな音を立てながらゆっくりと開いて行った。

「どうやら誘っているようだな。大した演出だ」

「アホらしい。だからアザゼル先生に中二病集団って呼ばれるんだよ」

呟くゼノヴィアに続き、俺はワザと声に出してそう言った。こつちの動きが見られてるんなら、多分声も拾われてるはずだからな。挑発とまでは言わないが、これくらいは言わせてもらおう。

「この中に母上が・・・」

誰よりも早く敷地内へ歩みを進める九重。俺達もそれに続き中へ足を踏み入れた。道中、木場から曹操の居場所の説明を受けた。ヤツは本丸御殿で俺達を待っているらしい。倒した刺客が最後にそう言ったのだとか。

そして、俺達が本丸御殿に続く櫓門を潜り、照明の当てられた日本家屋が立ち並ぶ場所へ辿り着き、連中の気配を探ろうとした正にその時、ヤツの声が近くの庭園の方から聞こえて来た。

「やあ、よく来てくれたね。俺達の招待に応じてくれて嬉しいよ」

「曹操お・・・！」

ヤツの姿を捉えると同時に、至る所から英雄派の連中が姿を現した。当然と言うべきか、やっぱり待ち伏せしてやがったな。

「は、母上！」

「え？」

九重の叫び声に目を向けると、あの子の視線の先に着物姿の女性が佇んでいた。あ、あれが九重のお母さんで妖怪の総大将の八坂さんか。すげえ美人だ。

「母上！ 九重です！ 助けに参りました！」

九重の声を受けても、八坂さんは声をあげるどころか反応すらしなかった。・・・おかしい、目も虚ろだし、表情も死んでいる。

——おそらく洗脳か何かの類だろう。

洗脳だ?!? あんの野郎・・・そこまでやるのかよ！

「貴様等！ 母上に何をした!?!」

「おや、お忘れですか？ 我々の実験に付き合ってもらうんですよ。・・・こんな風にね」

曹操が槍の石突きで地面を叩いた刹那、八坂さんの姿が瞬く間に変容していった。

「マ、マジか・・・!?!」

やがてその姿は巨大な金色の狐となり、天に向かって凄まじい咆哮をあげるのだった。・・・怖いって感想よりも綺麗だと思っるのが先になる辺り、俺っておかしくなっちゃったのかな。まあ、もっと恐ろしい存在を知ってるからな。

「母上え！」

「駄目！ 下がって九重ちゃん！」

アーシアが九重の手を引いて後ろに下がる。八坂さんは相変わらずの虚ろな目だったが、特に暴れたりせずには大人しい。それも曹操が合図をすればすぐに暴れ出すのだろうか・・・。

「そろそろ教えろよ曹操。こんな馬鹿でかいフィールドを用意して、八坂さんを操って、いったいテメエ等は何がしたいんだ？」

「ああ、やっぱり気になるかい？ いいよ、教えてあげよう。この京都

という土地、そして九尾の力を組み合わせ、俺達はアレを……グレートレッドを呼び寄せようと思っっているのさ」

「グレートレッド? ……はあ!? グレートレッド!? 神崎先輩がシャルバとかいうヤツを倒した後に出て来たデツカイドラゴンの事か!?!」

曹操の口から飛び出た存在の名に、俺達は揃って目を見開いた。

「この京都という土地は実に面白い。霊力や妖力、魔力といったものにとっても富んでいる。それらの力と九尾の力があれば、あのドラゴンを呼び出す事も可能になる。そうやって呼び寄せた所を捕獲するのさ。捕獲した後は、色々調査してみるつもりだよ」

「……なるほどね」

「わかってくれたかい?」

「ああ、よくわかったぜ。……テメエ等が心底クソ野郎だって事がな!」

あれほど英雄だ、超常の存在を越えるだとかほざいてたくせに、結局は自分達の勝手な理由で動いてたつて事かよ! やつぱりテロリスト様は言う事が違うぜ!

「英雄派などという大袈裟な名前を掲げる連中だからどんな目的かと思っっていたら……なるほど、所詮は混乱しかもたらさないテロリストだったわけか」

ゼノヴィアが剣……ついさつき届いたばかりだという新しいデュランダルを曹操に向ける。決戦前に戦力増強出来て喜んでたなコイツ。

新しいデュランダルには鞘がついていた。次の瞬間、それが音を立ってスライドし、剣自体が変形していった。……なんか、神崎先輩の剣みたいだ。

「だったら、やる事は決まってる。その計画……僕達が止めさせてもらうよ」

「そうね。……でない、と、地獄すら生温い結末を迎えてしまうもの」

木場が聖魔剣、イリナが光の剣を手に続く。

「……兵藤」

「匙……ッ!?!」

ふいに声をかけて来た匙の顔を見て俺は驚愕した。ど、どうしたんだコイツ?　なんか左目が蛇の目みたいになってるぞ?!　しかも体には黒い蛇が何匹も纏わりついてるし!

「お前等やアザゼル先生がキレてた理由がわかったよ。俺も連中がムカついて来た。……八坂姫様は俺に任せろ。俺の力なら止められるはずだ」

「ほ、ホントか……!?!」

「だから兵藤。お前達でヤツ等を絶対に倒せ。いいな?」

「お、おう……」

コイツ……本当に匙か?　俺の知ってる匙はこんなプレッシャーを放つイケメンじゃなかったはずだけど。

「見せてやるよ。これが俺の……『龍王変化』だああああああ!!!」

夜の闇を切り裂く様に匙の雄叫びが響いた瞬間、その体を包んでいた蛇が黒い炎へと変わり、匙の全身を覆い尽くす。

そして俺はその光景を目に焼き付けた。匙が……漆黒の炎を身に纏った匙が、巨大な存在——ドラゴンへと変貌したその光景を。

「さ、さささささささ匙いいいいいいいい!!?!」

「ははは!　こいつは驚いた!　まるで怪獣映画だな!」

なに面白そうに笑ってやがる曹操!　友人がドラゴンになっちゃった俺の気持ちを察しろや!

「けど、楽しんででもいられないな。あの黒い炎はヴリトラだろう。とりあえず実験をスタートさせておかないと面倒な事になりそうだ」

「なら始めよう」

曹操から引き継ぐ様にローブ姿の男が宙に手をかざす。それと同時に男の周囲にとんでもない数の魔法陣が一気に出現した。間違いねえ、アイツが『絶霧』の所有者だ。魔法使いだったのか。

「……北欧式だけじゃない。悪魔、墮天使、黒魔術……。まるで魔術のバーゲンセールですね」

どっかで聞いた様なセリフと共にロスヴァイセさんがそう分析する。……おい、なんか八坂さんの足下にヤバそうな魔法陣が出現し

たんですけど……。

「準備は完了した。後はグレートレッドがこちらの誘いに乗ってくれるかどうかだ。曹操、そっちは任せたぞ」

「ああ。……とはいえ、『魔獣創造』を持つレオナルドは外で頑張ってもらっているからアンチモンスターはあらかじめ呼び出した分だけしか使えない。それも全部使ってしまったからな。……やれやれ、あの二人はいつになったら合流するのやら」

「あら、丁度いいタイミングだったみたいね」

「待たせたな曹操！」

曹操が困った様な表情を浮かべたその時、ヤツの背後から新たな人物が二人現れた。一人は剣を持った金髪の女性。そしてもう一人は筋骨隆々な男だ。アイツ等も仲間か……。

「遅いぞジャンヌ、ヘラクレス。このままお前達抜きで始めようと思っていた所だ」

「悪いな。けど、寄り道したおかげでいいもんが拾えたからな」

「いいもん？」

「私は乗り気じゃなかったんだけどねえ。まあ、今さら手放すのもなんだし、使うタイミングはこっちで決めさせてもらうわ」

「よくわからんが、まあ任せるさ。さて、紹介しよう。この二人は英雄であるジャンヌ・ダルク。そしてヘラクレスの魂を引き継ぎし者達だ。キミ達もきつと満足してくれるだろう」

ヘラクレスってのはよくわからないが、ジャンヌ・ダルクは知っているぞ。確か最期は火炙りにされたんだっけ。

「では組み合わせだが。ジーク……はもう決まってるか」

「わかっているじゃないか曹操。僕の相手は当然キミだよ木場祐斗！」

「ああ、僕もそのつもりだったよ」

魔剣を抜くジークフリートの前に進み出る木場。やつぱりこうなったか。どうも互いにこだわりがあるみたいだし、必然といえれば必然だな。

「私は……そっちの悪魔ちゃんね！ さつきからその素敵な聖剣から目が離せないのよ！」

「なら、俺はそっちの銀髪の姉ちゃんだな」

「で、俺は赤龍帝つてわけか。うーん、中々に面白い組み合わせになったなあ」

俺と曹操。木場とジークフリート。ゼノヴィアとジャンヌ。ロスヴァイセさんとヘラクレスがそれぞれ戦う事になった。

「イツセー君」

「イリナ。お前はこれまで通り、アーシアと九重を守ってくれ」

「うん、任せて！」

さて……いよいよ曹操との直接対決か。流石にコイツ相手に禁手無しで挑むつもりは無い。能力がわからない以上、俺に出来る事はただ一つ……！！

（相手が能力を発揮する前にぶっ飛ばす！）

シンプルな戦法を立てながら、俺は禁手化のカウントをスタートさせるのだった。

イツセーSIDE OUT

ゼノヴィアSIDE

私とジャンヌは九尾と匙がいる場所から少し離れた所へ移動した。得物はレイピア……ならば、おそらくこの女は木場と同じスピードタイプなのだろう。

「あらあら、そんな情熱的に見つめられたら照れちゃうじゃない」

「何故私を選んだ？」

素朴な疑問を投げかけると、ジャンヌは微笑みを崩さず答えた。

「同じ聖剣使いとしてあなたに興味があったのよ」

「お前が聖剣使いだと？」

「そうよ。私の持つ神器は『聖剣創造』って言ってね、あっちでジークんとやりあつてる聖魔剣のイケメン君が持つ『魔剣創造』の聖剣バージョンよ」

「『聖剣創造』……」

「あなたの事は知ってるわよ。元教会の人間で、今は悪魔になっちゃったデュランダル使いのゼノヴィアちゃん」

「何だ？ 調べたのか？」

「敵の情報を知るのって大事な事よ？ …ああ、そうだわ。確かレーティングゲームで随分素敵な二つ名を頂戴したみたいじゃない」

「ツ……！」

「“天嬢さん”。…うふふ、あの時のあなたのオロオロした顔は最高に可愛かったわよ」

…ああ、そうだな。確かにお前の言う通りだ。あの時、私は神崎先輩から教えてもらった技に固執するあまり、あの様な醜態をさらしてしまった。本来であれば、文字通り“二の太刀いらず”の必殺剣となるはずだった技を台無しにしてしまった私の罪は重い。

だから私は誓ったのだ。私はもう二度と同じ過ちは繰り返さない。私の前に立ちをはだかるもの、私の行くてをじやまするもの、そして…私の大切な人達を傷付けようとするものを、必ず断ち切ってみせると。

「その為の力がこの剣…デュランダルとエクスカリバーを融合させた私の新たな相棒、エクス・デュランダルだ」

まさか、教会が追放した私にエクスカリバーを託してくれるとは思わなかったがな。おそらく、私が神崎先輩と繋がりを持っている事を知って、擦り寄って来たのだろう。現に、同封されていた手紙にも神崎先輩の名前が書かれていた。…もつとも、アーシアの事情を知るあの人が教会と親交を結ぶなどあり得ないだろうがな。まあ、悪魔となった私にはどうでもいい事だが。

「あは、素敵よゼノヴィアちゃん。デュランダルとエクスカリバーなんて最高じゃない！ よっし、なら私もとっておきを出してあげるわ」

来るか…禁手化！

ジャンヌの足下からおびただしい数の聖剣達が出現し始めた。その剣が規則的に重なり、いつしかそれはとある形…即ち、聖剣によって創り出された巨大なドラゴンとなってジャンヌの背後へ現れた。

「これが私の禁手である『断罪の聖龍』よ。あなたの戦い方は良くいえ

ば豪快。悪くいえば力任せなのよね。デュランダルに聖なるオーラを纏わせ、刀身として伸ばし、それを敵に叩きつける。あなたにはそれが……いえ、それしか出来ないんでしょ?」

「……」

「でも、そういうのって嫌いじゃないわ。圧倒的な力で敵を蹂躪するのって気持ちがいいものね。だけど、本場に劣るとはいえ、同じ聖剣で出来た私の『断罪の聖龍』相手に通じるかしら。例え通じたとしても、私の魔法力が続く限り、新たな聖剣で修復出来るわ。一回で大量のオーラを消費するあなたと、失った分だけ修復すればいいだけの私。持久戦になればどちらが有利かしらね」

ジャンヌの言う事は最もだ。いつまでもあのやり方が通じるとは私も思っていない。だが……私の限界をお前が勝手に決め付けるな。「言いたい事はそれだけか……?」

「え?」

「確かに、私はパワー馬鹿さ。同じ『騎士』である木場からは呆れられている。けれど、『騎士』であるあの人は私のそれを短所ではなく長所として見てくれたのだ。それを……その証を今からお前に見せてやる!」

私の叫びに応える様に、天に掲げたエクス・デュランダルから大量のオーラが噴出する。それを見たジャンヌが嘲笑の声をあげる。

「あははは! もう、カッコいい事言っちゃって、結局いつものパターンじゃない!」

「……(´▽｀)まではな」

重要なのはここからだ。ただ全力でオーラを解き放つのでは無く、逆に収束する。今は無駄に大きな刀身など必要無い。例え小さくとも……全てを斬り伏せる絶対の剣があればいい!

刀身に纏わせるオーラを最小限にし、残りを全て刃へ回す! 研ぎ澄ませ! 鍛え上げろ! 全てを断ち切る刃を創造するんだ!

「ぐっ……! これはキツイな……!」

収束したオーラの反発が凄まじい。気を抜けば一気に弾け飛んで

しまいそうだ。これを維持したまま戦うのは中々に大変そうだ。だが、これなら一度込めたオーラを失う事無くずっと保ち続けられる。例えるなら、使い捨て電池と充電電池とでも言えばいいかな。放出すればそこで終わりの前者と、繰り返し使える後者。必要に応じて使い分ける事が出来れば、私は一段階上の強さを得る事が出来る。

(感謝するぞ木場。枷を外したお前の足を包むオーラを見て、私はこれに気付く事が出来たのだからな！)

「・・・何よ、ソレ」

ジャンヌの顔から始めて笑顔が消えた。私の握る刀身を二メートルほどに伸ばしたエクス・デュランダルを睨みつけている。

「何なのよ、その膨大という言葉すら生温いオーラの量は。明らかに剣の許容量をオーバーしてるじゃない。下手すれば自滅しかねないのに、そんなの抑え切れるはずが・・・」

「出来るさ。言っただろう？ 私はパワー馬鹿なんだからな！」

言うと同時に、私は羽を飛ばたかせ、上空へ舞い上がった。エクス・デュランダルを両手で握り締め、上段へ構えつつドラゴンへ向かって落下速度を利用して一気に詰め寄り、そして・・・それをただ全力で振り下ろした。

「ちえああああああああああああ!!!」

縦一文字にエクス・デュランダルの刃がドラゴンの額、胸、足を断ち切る。数瞬後、ドラゴンは甲高い音と共に碎け散った。

「我がエクス・デュランダルに・・・断てぬものなし」

振り返れば、そこには狼狽するジャンヌがいた。

「う、嘘・・・!?! 一撃で消滅・・・!?! そんな、聖なるオーラを吸収して出力が上がる聖剣で作ったドラゴンよ!?! どうして・・・!?!」

「簡単さ。エクス・デュランダルに込めたオーラを喰らい切れなかったんだらう。相手がお前では無く木場であれば結果はわからなかったがな」

「くっ、舐めないで！ 言ったはずよ！ 私の魔法力が続く限り、『断罪の聖龍』は復活するって」

「ならば、復活しなくなるまで断ち切るだけだ。喜べ、お前が言う持久戦に付き合ってやる」

さて、本当に有利になったのはどちらだろうか・・・。

再びドラゴンを創造するジャンヌを前に、私はそう心の中で呟きつつエクス・デユランダルを構えるのだった。

第百十七話 彼はあと二つの枷を残しています

祐斗SIDE

「やあ木場祐斗！ 僕はずっと待っていたよ。こうしてまたキミと戦えるこの瞬間をね！」

僕の相手となるジークフリートが熱の籠った声を投げかけて来る。まるで、長い間待ち焦がれていた恋人にようやく出会えたかの様に、その顔は歓喜に染まっていた。

「まさか、この僕が悪魔に心を奪われる日が来ようとはね。さすが、悪魔は人を惑わすのが上手だよ。こうやって話す間も惜しい。早くキミと斬り結びたいよ」

「その狂気じみた戦闘欲・・・さすがあのフリードと同じ機関の出身なだけある。その白髪が何よりの証拠だ」

「おっと、また懐かしい名前を出してくれたな。彼にも英雄派に入っ
て欲しかったんだが、いつの間にか居なくなってしまうてね。居場所を知らないかい木場祐斗？」

「さあね。あんな狂人の行方なんて興味無いよ」
「それは残念」

会話を続けながらも、互いに闘気を漲らせていく。さて・・・無駄話はこれくらいにして、そろそろ始めようか。

僕が聖魔剣を創り出すと同時に、ジークフリートも腰から二本の剣を抜く。前回と同じくグラムとバルムンクで来るつもりか。

数秒見つめ合い、僕達は誰に合図されたわけでもなく、同時に相手に向かって駆けた。僕の振り上げた剣とジークフリートの振り降ろした剣が激突と共に甲高い音を鳴らす。

「木場祐斗。今のキミじゃ物足りないよ。早く枷を外してくれないか！」

ジークフリートの力が増していき、僕の剣が圧されていく・・・初撃はあえて正面からぶつかってみたが、やはり力勝負は向こうに分があるか。なら・・・やっぱり速さで攻めるしかない。

僕はジークフリートの力を利用して自ら後方へ飛び、空中で一回転

しながら着地した。追撃のチャンスだったにも関わらず、ジークフリートはその場から動こうとしなかった。

完全に僕の事を侮っているその様子に、僕は怒りよりも先に疑問が湧いた。人格はともかく、剣士としてのジークフリートの実力は素直に称賛出来る。そんな彼ならわかつているはずだ。枷を外した僕が・・・彼の實力を完全に上回っていると。

決して彼を軽んじているわけでもないし、自分の實力を過信するなどもつての外だ。ただ冷静に、あらゆる可能性を考慮した上で、僕は彼に負ける未来を描けなかった。

「余裕ぶるのは結構だが、やり過ぎると滑稽なだけだよ」

彼が何を考えているのかはわからないが、油断してくれるのならありがたい。さっさと倒して、仲間達の援護に向かおう。

「リミットブレイカー」

鍵となる短剣を胸に刺し、僕は第一段階の枷を外した。同時に、聖と魔のオーラが僕の足を包む。一日で二回の解放・・・師匠にバレたら大目玉をくらうだろうな。

「遊びに付き合っている暇は無い。仲間達が待っているんでね」

地面をしっかりと踏みしめ、僕はジークフリートへ突貫した。案の定、ジークフリートは僕の攻撃を受けるだけで精一杯の様子だった。「とつたぞー！」

背後への高速移動から聖魔剣を一閃させる。防御どころか振り向く事さえ出来ず、無防備に背中をさらすジークフリートはこれで倒れるはずだった。

「・・・甘いよ」

「ツ・・・!?!」

しかし、ジークフリートが捉えられていなかったはずの僕の剣は、彼の背中から突如として出現した三本目の腕が握る剣によつて受け止められた。衝撃的な光景に一瞬体を硬直させてしまったが、すぐさま僕はジークフリートから距離をとつた。

「・・・それがあなたの神器か？」

「驚いたかい？ そうさ、これが僕の神器だよ。『龍の手』っていうあ

りふれた神器の一つなんだけど、御覧の通り、僕のこれは普通の『龍の手』とは違ってね。籠手じゃなくて龍の腕そのものが生えてきちゃったのさ」

ジークフリートの変化はそれだけにとどまらなかった。膨れ上がるプレツシャーが形を成すかのように、背中へ二本目、三本目、四本目の腕が現れる。元々の腕が二本。背中の腕が四本。合計にして六つの腕が、それぞれに持つ剣を僕へと向けて来た。見る者が見ればおぞましさに震えるであろうその異様な姿は、さながら阿修羅とでも表現するべきか。

「そして、これが僕の禁手さ。名前は『阿修羅と魔龍の宴』。いい名前だろう？ 腕の数だけ力が倍加するシンプルな能力だけど、僕にはこれで十分なんだ。ついでに紹介すると、背中の腕が持つ剣は一番右から順にノートウング、デイルヴィング、ダインスレイブ、そして、教会の戦士の時だった頃の名残である対悪魔用の光の剣だ」

「それがあなたの余裕の正体か」

「それは誤解だよ木場祐斗。僕は余裕をかましているつもりは一切無い。ただ、キミとの殺し合いが楽しくて楽しくてしようがないんだよ！」

「戦闘狂め……！ やはりお前は英雄などでは無い！ 殺しに快楽を覚えた時点でお前はただの殺戮者だ！」

「知らないのかい？ 一人殺せば殺人者だが、千人殺せば英雄なんだよ。木場祐斗、キミを斬れば、僕はまた英雄に一步近づける。キミの次はキミの仲間達だ。聖女様も……捕まえる前に腕の一本でも斬り落とせば大人しくなるだろうしね」

その言葉に、僕の心は自分でも驚くくらい急速に冷えていった。

「……やれるものならやってみるがいい。だが、断言してやる。アシアさんに手を出そうとしたその瞬間、お前は『大いなる怒り』によって魂すらも両断され、消滅するだろう」

イツセー君ではないが、僕も今になって連中が自殺志願者に見えて来てしようがない。前回のレーティングゲームの後、三陣営のトップによる話し合いで、アシアさんを最上級の要人に指定したという話

を聞いた。邪気に塗れた手を伸ばせば、それは即ち真の「フューリー」を降臨させてしまう。それがアーシア・アルジェントという少女なのだ。

なのに、何故この連中はここまで愚かなのだろうか。アーシアさんという存在の意味、その重要性、そして・・・その危険性がどうしてわからないんだ。

ひよつとして、あのゲームを観ていないのか？・・・いや、データだ資料だと口にする連中が、アレを観ていないわけがない。まさか、自称英雄である自分達の行動は常に正しい・・・などというお花畑な思考にとりつかれているわけじゃないだろうな。だとしたらもう笑う事すら出来ない。

「一つ聞きたい。お前達はあの人に・・・神崎先輩に勝てると思ってるのか？」

「曹操はそのつもりみたいだよ。対抗策もいくつか考えているみたいだしね。どれほどの強さを誇ろうが、人間である事からは逃れられない・・・彼はそう言っていたよ」

「人間だからこそその弱点がある・・・そう言いたいのか？」

「さあね。それは曹操から直接聞けばいい。最も、彼が教えてくれるとも思わないけどね」

「いや、それだけ聞ければ十分だ」

言葉と同時に不意打ちを仕掛けるが、ジークフリートの背中の腕が反応して僕を止める。今の感じ・・・僕の動きを読んでいたのか？

「ひゅう！ 悪魔お得意の騙し討ちかい？ だけど残念。僕の目は少しずつキミの速さに慣れて来ている。このまま時間をかければ、いざれ完璧に捉えられるだろう。キミの奥の手はそこでお終いつてわけさ」

この短時間で僕の速さに追いつくつもりか・・・やはり、剣士としての実力は本物だ。・・・だがジークフリート。一つ忘れていないかい？ 僕の枷は・・・まだ完全に解かれていない事を。

「・・・リミットデストラクション」

第二の枷を「破壊」するべく、僕は左手に厚い刃を持つ剣を出現さ

せ、それを自身の胸へ突き立てた。その刃は第一の枷を越え、第二の枷を貫く。瞬間、足を包むオーラがさらに増幅し、背中からも聖と魔のオーラが一気に噴出する。

「ぐ、うううううううう……!」

急激に溢れ出す力に翻弄されながらも、僕はそれを必死に制御し続けた。その結果、背中から噴き出ていたオーラは白と黒の巨大な翼へとその形を整えていた。

「その翼は……!?!」

目を見開くジークの問いに答えず、僕はチラリと戦っている仲間達の方へ目を向けた。

「わざわざイツセー君達から距離をとっておいで正解だったよ。ここから先の世界では……僕自身何を斬っているか視認出来ないからね」

ジークフリートが何か言おうとした刹那、一陣の烈風と共に、彼の右腕が宙を舞った。——そうして初めて、僕が今斬ったのは彼の右腕なのだと理解出来た。

「が、ああああああああああ?!?!?!」

流石に脇腹と違って痛みを我慢出来ないのかな。鮮血を迸らせながら絶叫するジークフリートの姿に、僕は前回と今の彼を比較して思うのだった。

「さあ……改めて始めようか。キミの言う楽しい楽しい殺し合いってやつをね」

第一百十八話 解き放たれしは太陽の牙

『出かけるで！ はよ支度しいや！』

すっかり『鋼の救世主』に夢中になっていた俺の頭の中に、いきなりそんなオカンの大声が響き渡った。

もうすぐ日も変わるのに、こんな時間からどこへ行くっていうんですか？ 出来れば明日に回してもらった方が……。

『ええから急ぎ！ 我等が天使のピンチや！』

おK。把握しました。

俺は読み掛けの本をたたみ、すぐさま準備を整えた。服を決める時間さえもどかしかったので、クローゼットにかけておいた例のアニメ服を纏い、リアスの部屋に向かった。

「リアス、今から出て来る」

「え、リヨーマ？ こんな時間からどこへ、というかその服……」

「ちよつと京都へ」

「ふうん……え!?!」

ポカンとするリアスをそのままに、俺は自室へ戻る。同時に、天井に真っ白い穴が開き、俺の体がそこへ吸いこまれる様に浮き始めた。

『「アーシアちゃんを守る会」 会則その一！ アーシアちゃんに手を出す輩は!?!』

ガンホー！ ガンホー!! ガンホー!!!

『その二！ アーシアちゃんを泣かせる輩は!?!』

デストロイ！ デストロイ!! デストロイ!!!

『その三！ アーシアちゃんを傷付けようとする輩は!?!』

ジェノサイド！ ジェノサイド!! ジェノサイド!!!

オカンと共に会則を繰り返しながら、俺は自宅から遠く離れた京都の地へ旅立つのだった。

S I D E O U T

ロスヴァイセSIDE

「どうしたどうした！ 逃げ回るばかりじゃ勝てねえぞお！」

「くっ……！」

回避したヘラクレスの拳が私の背後にあつた樹木に突き刺さると同時に、激しい爆発が起こる。攻撃と同時に対象を爆破する……それが彼の神器である『巨人の悪戯』の力だった。

「そこっ！」

反撃の魔法を一気に叩き込むが、彼はそれをもとせず再び突っ込んで来る。ダメージが無いわけではない。ただ、この男の体が異常なまでに頑丈なのだ！

「いい魔法だぜ！俺じゃなけりや今のでやられてるだろうな！だが、俺を倒したけりやもつと激しいのをブチ込んでこねえと勝てねえぜ！」

「あなた、本当に人間ですか……？」

「おいおい、酷い事言うな！けどまあ、褒め言葉として受け取っておくぜ！お礼つてわけじゃねえが、俺の禁手を見せてやる！」

増幅するプレッシャーと共に、ヘラクレスの巨体が輝き始めた。その輝きが治まった時、そこには全身から異常な突起物を生やす彼の姿があつた。

「これが俺の禁手、『超人による悪意の波動』だ！さあ！派手にいかせてもらうぜええええええ!!！」

叫ぶと同時に、ヘラクレスの体から何かが発射された。あの形……まさかミサイル？

（防御……無理だわ、あれだけの物を正面から受け止められない！ならば回避……駄目だ、間に合わない！）

一瞬の判断の遅れが、回避動作を遅らせた。防御用の魔法陣さえ展開出来なかつた私へ、ヘラクレスのミサイルが殺到する。そして、それが私へ直撃しようとした正にその瞬間――。

「やらせるかよー！」

そんな声と共に、上空から大量の光の槍が降り注ぎ、それに貫かれたミサイル群は爆発する事無く全て消滅してしまった。

「今のは……！」

上空を見上げる。そこには翼を羽ばたかせ、不敵な笑みを見せるア

ザゼル先生の姿があった。

「よお、丁度いいタイミングだったようだなロスヴァイセ」

「アザゼル先生!? どうしてあなたがここに!? 外の指揮はどうしたんですか!?!」

隣へ降り立ったアザゼル先生へ、私はすぐさま尋ねた。すると、彼は何故かどんよりとした表情を浮かべてしまった。嫌な事を聞いてしまったのだろうか？

「安心しろ。外の事はもう心配する必要はねえ。・・・今の俺達にとって、最高にして最悪な援軍が来たからな」

「最高にして最悪?..」

意味が理解出来ず、ただ繰り返すだけの私に、アザゼル先生はその援軍の正体を口にした。

「・・・フューリーだよ。あの野郎、俺達の目の前で巨大な魔法陣からいきなり現れやがった。あんな複雑で神聖さに満ち満ちた魔法陣なんざ俺ですら見た事ねえ。天使の連中なんざ、戦闘中だったのに祈りを捧げてやがったぜ」

「え!?! ゆ、勇・・・神崎君が!?!」

「馬鹿!.. 大声で名前を出すな!..」

ちよ、何でいきなり私の口を抑えるんですか!?! 目で訴えかける私へ、アザゼル先生が低い声で理由を話し始めた。

「お前わからねえのか? アイツが直接出張って来たって事は、イツセー達はアイツの期待に応えられなかったって事だ。あの野郎、こっちから一切連絡してねえはずなのに、テロリストの出現を知ってやがった」

「ええ!?! ど、どうしてですか・・・!?!」

「そこはフューリーだからって事で納得しとけ。ともかく、ヤツは自らテロリストの殲滅。及びアーシアや八坂姫救出の為に出来やがった」

「それなら、何故彼では無くアザゼル先生がここへ?..」

「アイツがここへ来てみる。下手すりやイツセー達が卒倒するぜ。だから俺が説得して代わりにここへ来たんだ。・・・アツサリ納得しや

「がったのが逆にヤバい気がしたがな」

「そ、そうだったんですか」

「だが、安心は出来ねえ。外があらかた片付いたら、アイツもここへ向かうと言っていたからな。：俺がここへ転移する直前だったが、あの野郎、ワンパンで大型のアンチモンスターの腹に風穴開けてやがった。ありや相当キテるぞ」

「た、確かに、そんな彼を兵藤君達に見せるわけにはいかないわね。・・・あれ? というか、私もマズくない?」

「はっはあ! 堕天使の総督様まで来るとは最高じゃねえか! いいぜ、その姉ちゃんだけじゃ物足りなかったんでな! なんなら二人同時に相手してやってもいいぜ!」

「へタレの手下が舐めた口聞いてくれるじゃねえか。ならお望み通りぶちのめしてやるよ」

「アザゼル先生。援護なら私では無く他の子達の所へ・・・」

「何言ってやがる。むしろお前以外に援護が必要なヤツはいねえよ」

「え?」

「ちえあああああああああああああああ!!!」
「が、あああああああああああ!!!」

「ほぼ同時に聞こえて来た雄叫び!ど悲鳴に目を向けると、ゼノヴィアさんが剣で出来た巨大なドラゴンを一刀両断し、ジークフリートの右腕が宙を舞っていた。」

「木場が続いてゼノヴィアもようやく壁を乗り越えやがった。アイツ等はまだまだ強くなるぜ」

「うう、教師として複雑です・・・」

「アイツ等は全員フューリーにしごかれてるからな。なんだったらお前もアイツに個人的に鍛えてもらったらどうだ?」

え? そ、それって所謂個人レッスン・・・!?

—— ロスヴァイセ先生、俺色に染まる覚悟は出来ていますか?

—— ま、待ってください勇者様! 私、まだ心の準備が・・・!

—— 返事は「はい」か「イエス」しか認めません。

—— は、はひ・・・。

「おいロスヴァイセ。カテレアのモノマネなんざ誰がしろって言った」

「え!? わ、私、何かおかしな顔してました!？」

「・・・いや、気にするな。お前がそれでいいんなら俺から言う事はねえよ」

「は、はあ・・・。ともかく、そういう事でしたら、援護の方よろしくお願いします」

こうして、心強いパートナーを得て、私はヘラクレスとの戦いを再開するのだった。

ロスヴァイセSIDE OUT

イツセーSIDE

「おやおや、まさか総督殿にまでお越しいただけるとはな。こいつは参った参った」

曹操が見つめる先では、アザゼル先生がヘラクレスのミサイルを光の槍で薙ぎ払っていた。なのであの人がここへ？ もちろん心強いけど、外は大丈夫なんだろうか。

「そういう割には落ちついてるじゃねえか。自慢のお仲間もやられてるつてのによ」

ジャンヌとかいう女はゼノヴィアに追い込まれてるし、ジークフリートなんざ右手を斬り飛ばされている。ヘラクレスだって流石にあの二人相手に無事でいられるわけがない。

「・・・そうだな。キミ達には本当に驚かされてばかりだよ。キミ達の実力は事前の予測データを遥かに上回っていた。最早中級どころか上級悪魔と比べても遜色ないレベルだ。そこは素直に称賛させてもらうよ」

槍を回しながら曹操が笑む。ジークフリートといい、こいつといい、敵である俺に褒め言葉を投げて来るなんざおかしなヤツ等だ。もつとも、こんなクソ連中に褒められた所で嬉しさどころか嫌悪感しか湧かねえがな。

「元々、実験のついでに赤龍帝の実力を堪能させてもらおうとも思っ

ていたが・・・どうも、それなりに気合いを入れないとマズイようだ。いざとなれば、こつちも禁手を使わせてもらおうくらいには・・・ね」

チツ。コイツ、言葉こそ余裕綽々だが、決して俺を舐めてる様には見えねえ。あの槍の能力はまだ明らかになってねえが、アザゼル先生をして最強の神滅具と呼ぶ槍だ。絶対ヤバイもんじゃ決まってる。万が一にも使われるわけにはいかねえ。

「それにしても、キミは本当に面白いね赤龍帝。いや、兵藤一誠君」「あ？」

「直情型の熱血漢。まるで少年漫画の主人公みたいな性格のキミだが、俺の槍の能力を警戒して攻め手を考える冷静さも持っている。一体どっちが本当のキミなんだろうな」

「知るか。俺にはただ、どうにかしてテメエの面に一発かましてやろうって気持ちしかねえんだからよ」

「おお、怖い怖い。けど、そんなキミにも弱点がある。龍殺しと光だ。わかるかい？ この世に無敵な存在なんていないんだ」

「その言葉、俺じゃなく神崎先輩の前で言ってみろよ。テメエにその度胸があればの話だけだな」

「わかってるさ。俺は近い内に証明するつもりだよ。だがその前に・・・まずはキミだ」

曹操が槍の切っ先を俺に向ける。先端が展開し、金色のオーラで形成された刃が伸びる。・・・あの恐ろしさすら感じる神々しい輝き。悪魔である俺には致命傷必至だろう。

「いくら努力しても克服出来ないものってのは厄介だよな。悪魔であるキミにとつて、この聖槍が正にそれさ。これに貫かれれば、キミは呆気無く死んでしまう。聖槍のダメージは悪魔にとつて絶対だからね。兵藤一誠君。キミに自ら死へ飛び込む勇氣はあるかい？」

んなもんあるわけねえだろ。だがな曹操、勇氣だろうが覚悟だろうが、必要だつてならいくらでも捻り出してやるよ。それでテメエをぶちのめせるのならな！

『その通りだ少年。死を乗り越えた先・・・そこへキミの求めるものがある』

その声が頭の中へ響いた瞬間、俺の体に異変が生じた。な、何だ……。体が熱い。それに、この全身から溢れ出す赤いオーラは……!?

『ついはこの時が来たわね』

この声はエルシヤさん!? お、俺の体に何が起こってるんですか!? 『今この瞬間を以って、あなたは第二の扉を開いた。ここから先、あなたには自らの覇龍を得る為、〃練成〃を始めてもらおうわ』

〃練成〃?

『あなたの〃根源〃……理不尽を憎むその燃え盛る炎の様に〃熱き心〃に相応しい覇龍を、あなた自身で考えるのよ』

うええ!? ちょ、いきなりそんな重要な事決めろって言われても……。

『難しく考えるな! テメエが今求めるものはなんだ!』

俺が今求めるもの……。そんなの、そんなの……。コイツ (曹操) をぶん殴れる力に決まってるじゃねえか!

俺が心の中でそう叫んだ瞬間、噴き出る赤いオーラが左の籠手を包み込む。その中で、籠手がその形を変えていった。甲の部分へ新たなパーツ……。三つの噴出孔が現れ、そこから赤い炎が勢い良く噴出を始める。つておい! これヤバくねえか!?

「うおおおおおおおおお!?」

「ツ……!?!」

!?!?!

そう思った直後、左手に引っ張られる様に、俺の体は弾丸の様に飛び出した! 背中のブースターと左手に現れたブースターの相乗効果は凄まじく、未だかつて経験した事の無い速度で俺は何かに激突した!

「ぶ……ぶ……」

「え?」

気付けば、俺の左手が曹操の腹へ深々と食い込んでいた。目の前にいたんだから当然といえば当然なんだが……。

血を吐き出す曹操に一瞬呆けるが、俺はすぐさま意識を切り替えた。何にせよ、これを利用しない手はねえ!

「おらああああああああ!!!」

未だ激しく炎を噴き出す左手を全力で振り切る！ 今度は曹操が弾丸の様に吹っ飛ぶ番だった。そのまま近くの家屋を巻き込みながら遙か遠くへ吹き飛んで行く曹操。

「つしやあ！ 見たかこの野郎！」

そう吼えつつ、俺は改めて左手に目を向けた。いったい、このブースターは何なんだ？

『それが『練成』よ。この段階に至る事で、『赤龍帝の鎧』はあなたが求める形へ姿を変えていくわ。そのブースターは、あなたがあの男へ拳を届かせたいという願いを鎧が叶えたものなの』

鎧が自ら形を変える!? なら、このブースターは鎧そのものが形を変えた事で出来た物って事か！

『そうやって一つ一つの可能性を模索していくの。そして、あなたが真に求めるものに気付けたその時・・・あなたの覇龍は顕現するわ』
じゃあ、この左手はまだ覇龍によるものじゃないって事ですか？

『ええ。覇龍として顕現したのならば、その程度の威力で収まるはずが無いもの』

・・・曹操がまるで反応出来て無かったこれがその程度って・・・でも、これで覇龍についてまた一つわかったぞ。つまり、『練成』で色々試して、自分にピッタリなものを見つければ、それが覇龍へ昇華されるって事だな。

『理解の早い子は好きよ。それじゃ、負けないでねイツセー。覇龍へ至る前に死んじゃったら意味無いんだから』

オツス！ ありがとうございます、エルシャさん！

「・・・驚いた。まさかこの場面でいきなりパワーアップするとは。やはり赤龍帝は恐ろしいな」

瓦礫の中から曹操が姿を現す。・・・おかしい、何であんなにピンピンしてやがる？

「俺にダメージが無くて不思議かい？ けど、間違い無くさっきのキミの一撃は俺の内臓をいくつも潰してくれたよ。これが無ければそのまま死んでたかもしれないな」

そう言いながら、曹操が懐から小ビンを取り出す。あのビンの形に液体の色はまさか……!?

「フェニックスの涙!?」　なんでテメエがそれを……!?

「驚いているようだな。けど、テロリストである俺でも、裏のルートさえあればいくらでも確保出来るんだ。ああ、フェニックス家は俺達の所にこれが出回っている事には気付いていないよ」

「ざけんな！　それがあれば助かる人は大勢いるんだぞ！　テメエ等みたいな犯罪者共が持つてていいもんじゃねえんだよ！」

「つーか、超常の存在を憎むとかほざいてる癖に、その超常の存在が作った物を使うとか矛盾しまくりだろうが！」

「俺達だって死にたくないんでね。さあ、仕切り直しといこうか。さつきは不覚を取ってしまったが、次は止めてみせるよ」

「上等だ！　こうなればフェニックスの涙が無くなるまで殴り続けてやる！」

「そうして、俺と曹操が第二ラウンドを始めようとしたその時、突如ヘラクレスの怒声が俺の耳へ届いた。」

「そこまでだ！　テメエ等全員動くんじゃねえ！」

「何だ？　いきなり何を言って……」

俺は声のした方へ振り返った。その瞬間、俺の頭は真っ白になった。

「な、なんで、なんであの人がここにいるんだよ!？」

「……山田先生!？」

「いつの間にかボロボロになっていたヘラクレスが抱えているもの……それは山田先生だった。俺だけじゃなく、異変に気付いた木場達もそろって先生の名前を叫んだ。」

「イツセー！」

「ア、アザゼル先生！　山田先生が……!？」

「わかってる！　あの野郎、いきなり逃げ出したと思ったら真耶ちゃんを……。くそ、いつの間に人質されてたんだ……!？」

話している間に、それぞれに戦っていたみんなが戻って来た。後ろに下がっていたアーシア達も合流し、全員で曹操達へ対峙する。ジー

クフリートの右手が治っている。アイツもフェニックスの涙を持っていたんだろう。

「これがテメエのやり方か曹操！ 裏の事情を何も知らねえ一般人である真耶ちゃんまで巻き込みやがって！」

そうだ。山田先生はこつちとは関係無い人だ。悪魔や天使では無いし、神器だつて持つて無い。本当に普通の優しい先生だ。そんな人を人質だと・・・マジでぎげんなよ曹操！

「・・・どういうつもりだ、ヘラクレス」

？ なんだ、曹操の様子がおかしいぞ。てつきりドヤ顔でもしてくると思つたが、アレは・・・怒つてんのか？

「この人、赤龍帝君達の関係者よ」

「お前もグルかジャンヌ。だが、そんな事は聞いていない。何故ここへ連れて来た？」

「文句ならヘラクレスに言つてちょうだい。彼女を攫うのを決めたのは彼なんだから」

「何言つてやがるジャンヌ。お前こそ役に立つてもらうとか言つてたじゃねえか」

「まあ、そういう事よ。それに、使えるものは何でも利用する・・・そう常々言つていたのはあなたじゃない曹操」

「・・・そう、だな。ああ、そうだとも。それが俺のやり方だったな・・・何かを追い出す様に首を振る曹操。ひよつとして、山田先生の拉致はアイツの指示じゃないのか？」

「にしても、デケえな。何食つたらこんなにデカくなんだろうな」
「んっ・・・！」

んあっ!? あ、あの野郎、山田先生の胸をワシ掴みやがった！ あの学園裏ランキングで飛び込んだら一番安心出来るバスの持ち主第一位に輝いた山田先生のお胸様をあんな乱暴にい！

「ごらあ！ ヘラクレステメエ！ 真耶ちゃんの神聖オツパイに軽々しく触れるんじゃねえ！」

その畜生にも劣る所業にブチ切れるアザゼル先生！ そういや、一時期アザゼル先生が山田先生を狙つてるって噂があつたな。

「よく見りゃいい女だしよ。このまま俺の女にしてやろうか」

「あらあら、可哀そうな真耶。今までの女の子みたいに、散々貪られて、飽きたら部下の男の子達の道具にされちゃうのね」

「いいや、これほどの女を部下にくれてやるのは勿体無え。この女には英雄のガキを産むという栄誉をくれてやるぜ」

「下衆があ．．．！」

目線だけで殺せそうなくらいの勢いでヘラクレスを睨みつけるアザゼル先生。たぶん、俺も同じ様な表情をしているだろう。この胸の中で暴れ回る感情．．．これが本物の「殺意」なんだろうか。俺は今、あの野郎を殺す事に微塵も躊躇いが無い。

俺達の中に生まれた殺意というどす黒い感情の炎は——次の瞬間、呆気無く燃え尽きる事となった。

「ぐるぐる．．．！」

まるで地の底から響いて来るような恐ろしい唸り声。心臓を軽く握られているかの様な凄まじい圧迫感。そして．．．かつて経験した明確な「死」のイメージ。その正体．．．アシアの鞆の中で眠っていたはずのスコルがついに目を覚ました。

「アオオオオオオオオオオオン!!!」

地面に降り立つと同時に、スコルは天に向かって高々と吼えた。その声には明らかな「怒り」が込められている事に俺は気付く。コイツ．．．もしかして山田先生を助けようか？

ドクン！ とスコルが震えると同時に、その体が少しずつ大きさを増していく。その中で、何かが軋む様な音が聞こえて来た。

「はっ！ だ、誰かグレイプニルの首輪を外してください！ アレが壊れたら制御する術が．．．！」

「は、はい！」

ロスヴァイセさんの指示に、俺はすぐさまスコルの元へ駆け寄り、首輪を外すと同時に吹っ飛ばされた。や、ヤベえ。なんかわかんねえけど滅茶苦茶やべえぞこれ!!!

「何だ．．．!? コレはなんなんだ兵藤一誠!？」

戦慄する曹操達を無視し、俺達はその場からすぐに下がった。そう

して、その場に居合わせた全ての者が呆然と見守る中、ついに神殺しの牙はその真の姿を取り戻した。その巨軀は、全ての存在を等しく、死へ導く者としてやはり相応しいものだった。

「マズいぞ曹操！ コイツは神喰狼だ！」

『絶霧』の魔法使いが悲鳴に似た声をあげる。その恐怖の感情は瞬く間に英雄派全体に広まっていった。

「何故だ……！ 何故神喰狼がここにいる!? 神喰狼は全てフューリーに忠誠を誓ったはずだ！ ……まさか!？」

「残念。そのまさかなんだよな曹操お……」

何かに気付いた様子の曹操へ、アザゼル先生は墮天使でありながら、まさしく『悪魔』のような笑みを見せながら真相を口にするのだった。

「馬鹿な……！ では彼は……神崎君は、俺達の計画に気付いていたのか!？」

「そう、だからコイツを送り込んだのさ。お前等がアシアへ危害を加えるであろうと予測してな。そして案の定、何も知らねえお前等はノコノコ姿をさらしちまったってわけだ。いやあ、自分達の行動が筒抜けの癖に、自慢気に色々語って来るお前等は実に滑稽だったぜ！」
今までのお返しとばかりに、これでもかとボロクソに連中をこき下ろすアザゼル先生。いいぞ！ もつと言ってやってください！

「そ、それがどうした！ こっちには人質が……!？」

「アホか。それが決定打になったってまだ気付かねえのか。自分から死地へ足を踏み入れるとは、マヌケもここまで来ると逆に凄いわ」

「そうですね。だからここまで接近しても気付けない」「なあっ!？」

いつの間にか至近距離へ移動していた木場がヘラクレスから山田先生を奪い、こっちへ戻って来た。先生、木場から目をそらせる為にはワザと話を引き延ばしてたんですね！

「山田先生!？」

「大丈夫。眠っているだけみたいだ」

「よ、よかった……!？」

俺達は一斉に安堵の溜息を吐いた。

「真耶ちゃんは返してもらったぜ！ さあ、やっちまえスコル！」

「ぐる．．．ぐるるる．．．！」

「スコル．．．ちゃん？」

スコルの様子がおかしい。ひよつとして、元に戻ったばかりで調子が整っていないのか？

「ぐるる．．．あああああああああああああ
!!!」

「!!!!!!」

刹那、スコルの咆哮と共に、夜であるはずの周囲が、まるで昼間の様な明るさに包まれる。鮮やかな炎の火柱がスコルを飲み込んだまま天へと伸びていき、いつしか火柱の先に巨大な火球．．．太陽が姿を現した。

「せ、先生！ もう何が起こってるのかわかりません！」

「ロスヴァイセ！」

「わ、私もわかりません！」

もう、誰でもいいから説明してくれ！ 思わずそう叫びたくなった俺は、つい太陽を見上げた。もちろん、本物ではないだろうが、この肌を突き刺すような光は間違いなく太陽のものだ。スコルが太陽になっちまったのか？

「た、太陽が．．．！」

イリナが叫ぶと同時に、太陽が一番の輝きを放った直後、フツと消えてしまった。まるで、最初から存在しなかったかのように、呆気無く。

再び闇夜に包まれるフィールド。だが、実際は太陽は消えていなかった。そして、〃別の存在〃へ変化した太陽が、ゆっくりと俺達の前に降り立った。

まず目についたのは、鮮やかなオレンジ色の髪。続いて、誰が見ても美女と断定する美しい美貌に、エキゾチックな褐色の肌。とんでもなく自己主張の激しいバスト及びヒップ。そして、それらを辛うじて包む露出の激しい衣装。普通であれば、絶対に鼻の下を伸ばしてしまふであろうその女性は、首をゴキゴキと動かしながらこちらへ目を向

けて来た。

「・・・おい、その龍の雄」

「え？ あ、お、俺ツスか!？」

ルビーの様な真つ赤な瞳に見つめられ、俺の心臓は激しく動く。・・・美女に見つめられたからじゃない。見つめられた瞬間、とてつもない恐怖が俺を襲ったからだ。本能的に理解出来た。この女性(化物)に逆らったらいけない。俺を構成する原子の一つ一つがそう訴えかけて来ていた。

「よく聞け、あのヘカトンケイルとトロールを足した様な不細工な肉塊はオレがやる。お前等はその間アーシアの姐さんとぽかぽかおねーさんを守れ」

「は？ ぽかぽか?」

「い い な?」

「りよ、了解ツス!」

俺の馬鹿野郎! だから逆らったら駄目だったの!

「まさか、いや、そんな事が・・・。だが、ヤツ等の母親は元巨人だったはず。その因子とでもいうべきものがスコルに受け継がれているとしたら、人化する事も不可能じゃねえ」

あごに手を当てながらブツブツ呟くアザゼル先生。駄目だ、こうなったらこの人は役に立たない。ならロスヴァイセさん・・・は固まってるし! ええい、固まりたいのはこっちだったのに!

「来いよ肉塊。ここにいないボスの代わりに、オレがお前をヘルヘイムに送ってやる」

美女に指名されたヘラクレスが前に出る。だが、その顔は若干青ざめ、体は震えていた。

「は、はは! 舐めるなよ化物! お、俺の祖先であるヘラクレスは、ケルベロスを退治した英雄だ! 化物退治なら得意なんだよ!」

「あ? あんな太陽に照らされるだけで逝きかける駄犬とオレを一緒にすんじゃないよ。つーかヘラクレス? ラリって自分で自分のガキを殺したヤツが祖先なんざ自慢できるもんじゃねえだろ」

「テ、テメエ・・・!」

「待てヘラクレス！ 対策も無しに手を出すなど愚の骨頂だ！ アレはそのらの魔物なんかとは次元が違う！ 神喰狼なんだぞ！」

顔面蒼白の魔法使いの制止も聞かず、ヘラクレスは美女へ向かってミサイルを発射した。その場から微動だにしない美女が、爆発の中へ消える。

「へ、へへ、どうだ化物！ こんだけの爆発ならテメエも・・・」

ヘラクレスの言葉はそこで止まった。怪我どころか、衣服すら破れていない美女の姿に、ただ目を見開いていた。

「爆発？ お前が言う爆発ってのは、傷にもならねえ撫でる事を言うのか？」

「な・・・あ・・・!?」

呆然自失となったヘラクレス。直後、ヤツの体が炎に包まれた。

「ぎゃああああああああ!!?」

傍から見ても正に兼!!火と呼べるような激しい炎に包まれもがき苦しむヘラクレスを、美女はつまらなそうに見つめていた。

(神崎先輩に従う所しか見て無いからわかってなかった。これが・・・これこそが神喰狼なんだよな)

その姿に、俺は改めて神殺しの牙の恐ろしさを実感するのだった。

第百十九話 英雄の皆様はお帰りになるようです

おいペロリスト。ペロリストおい。何なの？ お前等本当に何なの？ 俺の可愛い後輩達が最高の思い出作りの為にやって来た場所になに湧いて出て来てくれるの？ 今回は誰かをペロる為じゃなくてテロの為に現れたらしいが、どっちにせよお前等本当に空気読めないんだな。

っーか、さつきからa u派a u派うるせえよ。アレか？ D O C O M O携帯愛用者の俺をd i s t t e n のか？ ここにいる連中全員a u信者か？ それともペロリストはa uじゃないと駄目って決まりでもあんのか？

何にせよ、お前等は見つけ次第即排除って決めてますんで。さつきと片付けて兵藤君達の所へ行かせてもらうぞ。・・・万が一にでも彼等の中の一人にでも怪我させてみる。その時はお前等のボスを同じ目に遭わせてやるからな。

沸々と湧き上がる怒りそのままに、俺は手近にいたペロリストに殴りかかるのだった。

S I D E O U T

イツセーS I D E

「あ、ああ！ あがあああああああああ!!!」

思わず耳を塞ぎたくなるような絶叫の声をあげるヘラクレス。その体を包む紅蓮の炎は、未だその勢いを弱める事無くヤツを侵し続けていた。

「まったく、不細工なのは見た目だけにしとけての」

地面を駆け回り、必死に火を消そうともがくヘラクレスを、まるでゴミでも見下ろすかのような目で見つめる美女。それは生物へ向ける様な目ではなかった。それに気付いた俺の背筋に冷たいものが走る。

「女宝！」

「あん？」

突然現れた球体が美女を包み込む。今のは曹操の声！ 野郎、何をしやがった!?

俺が目を向けた先で、曹操の様子が変化していた。神々しい輝きを放つ輪後光を背負い、自らの周囲にボウリングの球くらいの大きさの球体を六つ浮かべていた。アレは・・・まさか、ヤツの禁手か!?'
『極夜なる天輪聖王の輝廻槍』・・・まだ未完成だが、ここで使わせてもらおうぞ!」

やっぱり禁手か！ くそ、このタイミングで何をしかけて来る気だ・・・!

警戒する俺達だったが、十秒くらい待っても、これといった変化は訪れなかった。俺達の前では、未だヘラクレスが転げまわっている。それを見て表情を崩したのは曹操だった。

「何故だ・・・! 女宝の力で、女の異能は封じられるはず・・・!」
ヘラクレスを包む炎も消えるはずだ・・・!」

「異能? お前は呼吸するのに一々特別な力が必要なのか?」

自分にとって炎を操る事は呼吸するのと同じ。だから異能封じも意味が無いって事か? め、滅茶苦茶な理論だな。でも、こうして目の前でそれが証明されているのだから納得するしかない。

「燃えゝるゝ! 俺のゝ体が燃えゝてゝいゝぐ! 誰かゝ! 誰がこゝのゝ炎をゝ消じてぐれゝえゝえゝえゝえゝえゝえゝえゝ!!」
「だったら、これならどうだ!」

グレートレット召喚の儀式を続けていた魔法使いが魔法陣を出現させ、そこから大量の水が流れ出てヘラクレスを包む。だが、その水の中でヘラクレスは燃えていた。それどころか、洪水レベルで流れる水が瞬く間に蒸発してしまった。

「そんなモンでオレの炎が消せるかよ。消したけりや、ウルズの泉の水を用意するんだな」

「ウルズの泉・・・運命の三姉妹の長女、ウルズを由来とする泉。その泉水は、強力な浄化作用を持っています」

美女の言葉に続いてロスヴァイセさんの説明が入る。うおお、聞くだけで滅茶苦茶貴重な物だってわかるぞ。んなもん今からじゃどう

やつても用意出来ねえだろ。

「~~~~~! ~~~~~!」

「・・・喉も焼けてしまったみたいだね。もう言葉すら絞り出せないよ
うだ」

そう呟く木場の声には恐怖が込められていた。さつきまであれほど激しく転がりまくっていたヘラクレスが突如ピタリと動きを止める。助けを求める様に弱々しく伸ばされた手がぱたりと地面に落ちてしまった。・・・と、とうとう死んじまったのか？

「やれやれ、やつと耳障りな雑音が消えやがった」

スコルがパチンと指を鳴らす。すると、今までどんな方法でも消えなかった炎が一瞬で消えてしまった。そして、地獄という言葉すら生温い正に絶望的な苦しみを味わい続けていたヘラクレスの生死がようやく明らかになった。

「あゝ・・・あゝ・・・」

・・・結論から言えば、ヘラクレスは生きていた。だが、全身が焼けただけ、手足の一部が炭化しており、生きているのが奇跡と呼べるような状態だった。・・・けど、こんなになるまで苦しむのだったら、いっそ死んでしまった方が楽だったんじゃないだろうか。

「ヘラクレス!」

曹操達がヘラクレスの元へ駆け寄り、それぞれが持つフェニックスの涙をこれでもかとぶっかける。目を背けたくなるような姿から、辛うじて人間の姿を取り戻したヘラクレスだが、その精神までは回復する事は出来ていなかった。

「うあああああああ!!! 熱い! 熱い! 俺の体が燃えていくううううううう!!!」

「落ちつけヘラクレス! もう炎は消えた! キミは助かったんだ!」

「ああああああアアアアアアアアアアア a a a a a a a a a a a a a a a a a a!!!」

もう自分の状態すら認識出来ていないのか、ヘラクレスは獣の様な声で喚きながらジークフリート達の制止すら聞かず暴れ回る。無関

係の山田先生を人質にする様な卑劣なヤツに同情する気持ちなんか微塵も無いが、ざまあみろと指差して笑う様な気分にもならなかった。

そんなヘラクレスが突如崩れ落ちた。曹操が槍の石突きによる一撃で昏倒させたのだ。周囲にいた英雄派のメンバー達がヘラクレスを抱え、後ろへ下がっていく。

「ヘラクレスは撤退させる。ここで彼を失うわけにはいかない」
「だが、曹操。あれではもう・・・」

半ば諦めたような魔法使いの言葉は最後まで続かなかつた。俺でもわかる。ヘラクレスは「壊れた」。もう戦う事なんて出来ないだろう。・・・連中お得意の洗脳で無理矢理戦場に立たせる事は可能かもしれないが、まさか仲間にまでそんな真似はしないだろう。

「あの肉塊、しぶとさまでトロール並みかよ。もう少し念入りに燃やしてやればよかつたぜ。・・・まあいい、次はそっちの雌だ」

「ひっ・・・!?!」

スコルがグルリと周囲を見渡し、ジャンヌの所で視線を止める。見据えられたジャンヌの顔は青を通り越して紫色のようになっていた。たった今、ヘラクレスの身に起きた事が自分の身にも訪れる。その恐怖、そしてその絶望感は標的となったヤツにしかわからない。

「お前からほかほかおねーさんの匂いがある。あの肉塊からもだ。つまり、お前はあの肉塊と同罪ってわけだ」

「ま、待ってー！ 違うの！ 私止めようとしたの！ だけどヘラクレスが勝手に・・・！」

言い訳にもなつて無い様な言葉をこれでもかと並べ立てるジャンヌ。だが、そんなものはスコルには一切通じなかった。

「お前の御託なんざどうでもいい。オレが同罪って言ったらお前も同罪なんだよ」

何を語ろうが、自分の判断が絶対に正しい。社会では絶対に通用しない主張も、力を持つ者が口にすればそれはまかり通ってしまう。何故なら、力づくで周囲を納得させてしまうからだ。もうジャンヌが何を語ろうが、スコルの耳には届かない。ヤツはもうヘラクレスと同じ

「罪人」としか見られていないのだから。

「ま、待て！ 同志ジャンヌをやらせはしないぞ！」

「化物め！ 我等が相手だ！」

ジャンヌへ近寄ろうとするスコルの前に、複数の英雄派のメンバーが立ちはだかった。

「止めろ！ お前達では相手になら——」

「失せろ」

スコルがそう口にする。それだけ、たったそれだけで、スコルの進路を阻もうとした者達が火達磨になった。

「ぎゃあああああああ!!!」

「熱い！ 熱い！！！！！！」

「はっ、小さきものが何匹集まろうがオレの相手にやらねえよ。この世界でオレを好きに出来るのは偉大なるものであるボスだけだ」

ボスという部分で僅かに頬を上気させるスコル。続いて、独り言にしてはやけに大きな声で語り出した。

「ええい、くそ！ 早くボスに会いてえ！ アーシアの姐さんやぽかぽかおねーさんの膝もいいが、やっぱりボスのが一番だ。今頃ハティやあの雌猫が独占してるかと思うとムカついてしょうがねえ！ オヤジはオヤジでちやつかり自分のスペース確保してやがるし……！」

な、なんかお冠みたいです。てか、怒るのは勝手ですけど、辺りに炎をまき散らすのは止めてください！ いつこつちに飛んで来るかマジで怖いです！

「ど、どうしましょう。スコルちゃんがあんなにワイルドな子だったなんて……」

この状況でそこを気にするのかいアーシアさんや!? デイオドラに攫われてから何か遅しくなっていないか!?

「アレが本来のスコルなんだろう。リミッターかけた状態で人化すればもう少し大人しくなると思うが」

そして、こんな時でも分析ですかアザゼル先生。子犬スコルもとい子どもスコルか……。なんだろう、ちよつと見てみたいかも。

「うおおおおおおお!!!」

その雄叫びは匙のものだった。見上げれば、ドラゴンとなった匙の体から放たれる黒い炎が、蛇の様な動きで九尾の体を完全に拘束していた。

——猛っているな我が分身！ いいぞ、その猛りで我の力を制御してみせろ！

「言われなくてもやってやらあ！ カッコつけた手前、兵藤達に情けねえ姿は見せらんねえからなあああああ!!」

あらやだ！ 匙ちゃんったらいつの間にあんなイケメンに!? それはそうと、今の声ってヴリトラか？ 龍王の一角だけあって、声に何とも言えない迫力があるぜ。

「しまっ、九尾が!」

「ゲオルク!」

「これで・・・よし！ 始まるぞー!」

魔法使いが叫ぶ。九尾の足下の魔法陣が激しく輝くと同時に、空からバチバチという音が鳴り始めた。まさか・・・本当にグレートレッドを呼び寄せたのか!?

「結果的に神喰狼の存在が真龍を呼び寄せるきっかけになったのかもな。・・・こんな状況でなければ素直に喜べるのだが」

睨むようにスコルを見つめた後、曹操は空に生まれた裂け目へ目をやる。だが、その表情が不意に曇った。

「ツ・・・!?! この鬨気、グレートレッドじゃない・・・!?! まさか、この鬨気は・・・!」

目を見開く曹操。そして、ついに裂け目から巨大な存在が姿を現した。全長十数メートルほどの細長い体のドラゴン。あれ、グレートレッドじゃないじゃん!

「西海龍童、玉龍! そして、やはりあなたか・・・!」

玉龍・・・!?! え、それって確か五大龍王の!?! それにあなたって・・・!?!

曹操が見つめるのは玉龍の背中。そこには小さな人影が・・・って、落ちて来たぞ!

怒涛の急展開にただ着いて行くので精一杯な俺達を前に、その人影

は地面にゆつくりと着地した。まるで幼稚園児の様な背丈しかないその人物は、一目で人間ではないとわかった。だって、黒い肌で、体毛が金色で、猿みたいな顔をしている様な人間がいるわけがない。

「ようやく来てくれたか」

「アザゼル先生、もしかして・・・」

「ああ、このじいさんが援軍だよ。闘戦勝仏・・・初代孫悟空だ」

「へえ・・・え!?!」

「久しぶりじやな聖槍の。前に見た時はこーんなチビだったくせによくもまあそれだけデカくなつたもんじや」

自分の腰辺りへ手をやるその人物・・・初代孫悟空に、曹操は笑みを浮かべて答えた。

「そこまで小さかつた憶えはありませんし、あなたにだけはチビと呼ばれたくはありませんね、闘戦勝仏殿」

「言ってくれるぜい。それと・・・そっちのベツピンさんは神喰狼じやな。まさか、この地で北欧の神殺しに会えるとは思ってなかつたぜい。しかも、人の姿となつておるとは、流石の儂もビックリじや」

「何者だジジイ?」

スコルの視線が孫悟空に移る。その瞬間、ジャンヌは全速力で魔法使いの元へ駆け寄つた。

「ゲオルク! 早く、早く私をこのフィールドから出して!」

「何を・・・?」

「いいからお願い! もうこれ以上この場にいたくないの!」

「逃がしてあげなよゲオルク。これ以上再起不能者を出したくないし」

「自業自得だ・・・と言いたい所だが、あの女性が神喰狼と関係があるなど予想出来るはずが無かつたか」

ジャンヌの足下に魔法陣が展開する。あの紋様・・・転移するつもりか!

「あ、あは、よかつた。助か——」

ジャンヌが魔法陣の中で安堵の溜息を吐いた次の瞬間——ヤツの四肢が爆発と共に吹き飛んだ。

「ひ、ぎいいいいいいいいいい!!?!?!?!」

そして、断末魔ともとれる悲鳴を残し、ジャンヌは姿を消した。その場には本体から分断された手足だけが残されたが、それも炎に包まれ、数秒でこの世から消えてしまうのだった。

「間抜けが。タダで帰すと思ったか」

ジャンヌから四肢を奪った張本人は、ただそうするのが当然だったかの様な表情でジャンヌが消えていった場所を見つめていた。

「くそ、ヘラクレスだけじゃなくジャンヌまで……!」

「まだフェニックスの涙は残っている。大丈夫なはずだ……」

うう、まさかのグロシオンだったな。アーシアと九重にはシヨックが大き過ぎたんじゃ……。

「あ、あのゼノヴィアさん。どうして私の目を手で隠すんですか?」

「ああ、何でも無い。キミにはちよつと刺激が強かったからな」

「むく、何も見えないのじゃ!」

「ゴメンね、九重ちゃん」

おお、ナイス判断だゼノヴィア、イリナ! 咄嗟にアーシア達の視界を隠した二人に、俺は心の中で喝采を送った。

「坊主、もう諦めたらどうだ。今のを見てわかつたら。こつちは既に過剰戦力ともいえるほどの面子が集まってんだぜい。まさか、ここから逆転出来るなんざ思ってねえだろうな?」

「……」

曹操は答えない。だが、その表情からは隠しきれない悔しさが滲み出ていた。ヤツにとって最大の誤算は、スコルという規格外の存在。そして……それを送り込んだ神崎先輩という存在だったのだろう。「……ふ、ふふ。そうですね。あなたのおっしゃる通りです。今回の勝負、どうやら戦う前から勝負がついていた様です。『彼』の掌で踊らされているとも知らず俺達は……滑稽にもほどがある」

「では、曹操……」

「すぐに撤退するぞ。これ以上戦力を失うわけにはいかない。それ

に、神喰狼・・・何よりも「彼」への対抗策を早急に練り上げる必要がある」

指示したわけでもなく、英雄派のメンバーが素早く一ヶ所へ集まり、魔法使いが再び転移魔法陣を展開させ始めた。

「野郎！ 逃がすかよ・・・！」

「待て、イツセー」

ブースターを噴かそうとした俺を止めたのはアザゼル先生だった。

「先生!? 早くしないとアイツ等逃げちゃいますよ！」

「俺達の目的を忘れるな。九尾の大将を助けられれば、連中なんざどうでもいいんだよ」

「それは、そうですね・・・」

「その感情は次に会った時に存分にぶつけてやればいい。なあに、どうせ嫌だって言っても向こうから会いに来るだろうさ」

アザゼル先生と話している間に、向こうは準備を済ませてしまっていた。

「・・・王道の強さ、存分に味わわせてもらった」

「はっ」

謎の言葉を残し、曹操達は消えてしまった。王道？ なんのこっちゃ？

「先生、今のってどういう意味だったんですかね？」

「そうだな・・・お前はお前のままでいろってこった」

うむむ、よくわからん。よくわからんからとりあえず置いておこう。なにはともあれ、英雄派を京都から追い出す事が出来た。後は先生の言う通り、八坂さんを元に戻すだけだ。

「つっても、どうすりゃいいんだ？」

匙と玉龍によって大人しくなった九尾を見上げ、俺はそう漏らした。

「おうおう、ちゃんと事前の打ち合わせ通りにやってくれたな玉龍」

『約束守れよジジイ！ 京料理を腹いっぱい食う事を励みにオイラは頑張ったんだからな！』

「・・・俺だけでも何とかなった様な気が・・・」

『ああん!』

「な、何でも無いツス!」

——何を誤魔化す必要がある。はっきり言ってやるのだ我が分身よ。貴様なぞいなくとも、我と我が分身だけで十分だったとな。

『上等だよヴリトラア! なんだつたら今からおつ始めてやろうかあ!?!』

ちよ、何ケンカ始めようとしてんの!? 止めろよ! 怪獣大決戦なんかスクリーンの向こうでしか望んでねえんだよ!

「ええい、話が進まんから黙っておれ。・・・さて、そうは言ってもどうするべきかのお。儂が仙術で正気に戻してやってもよいが、ここでは時間がかかるしのお」

「・・・私にやらせてください」

誰もが一齐に振り返る。名乗り出たのはアーシアだった。決意を込めた目で九尾を見つめている。

「アーシア。だが、お前の神器は傷は癒せてもこういう分野の治癒は・・・」

「それでもです。結局、守られていただけだった私がお役に立てるのは今なんです」

その言葉には、アザゼル先生ですら圧倒する力強さがあつた。先生はそれ以上何も言わず、アーシアに道を譲つた。

「・・・オ・クアーン様。どうか、お願いいたします。八坂姫様を・・・九重ちゃんのお母様を助ける為に力をお貸しくください」

跪き、祈りを捧げるアーシア。刹那、彼女の体から莫大なオーラが立ち昇り始め、それが九尾の全身を瞬く間に包み込んでいった。

「ア、・アーシア!?!」

「う、嘘・・・!?! この神聖なオーラ・・・ミカエル様以上だわ!」

ゼノヴィアとイリナが目を剥く。てかヤバイ! 今アーシアに近寄ったら絶対消滅してしまう! それだけのオーラを出しているんだ!

「九重ちゃん、手を・・・」

「は、はい!」

その神聖さにあてられたのか、敬語で返事をしつつアーシアの手を握る九重。

「あなたの声を八坂姫様に届けます。あなたの想いを、あなたの気持ちを、八坂姫様に伝えてあげてください」

「私の声……」

九重は一瞬だけ目を瞑ると、静かに口を開いた。

「……母上。母上が『禍の団』に攫われてから、私は精一杯自分に出来る事をやって来ました。皆が不安にならない様、母上の娘として、決して弱い姿を見せない様、全力を尽くしました」

でも……と九重はさらに続ける。その声は震え始めていた。

「でも、本当は誰よりも泣きたかった！ 誰よりも悲しみたかった！もしかしたら、このままもう母上とお会い出来ないのではないかと思つた時など、心臓が止まってしまふかと思いました！」

「九重……」

我慢してたモンがぶつ壊れちまつたんだな。けどいいき、もう我慢する必要なんて無いんだ。

「母上に会いたかった！ 母上に抱き締めてもらいたかった！ 母上に撫でてもらいたかった！ ずっと、ずっとずっと！ ずっとそれだけを望んでおりました！」

ツ！ お、おい、八坂さんの目に光が……！

「戻って来てください母上！ もう……もうこれ以上、私を一人にしないで！」

九重の心からの叫びが夜空へ木霊する。それに合わせて、八坂さんの体を包む光もより輝きを強める。

「くっ……！」

その眩さに視界を奪われる。そうして、再び目を見開いた時、そこには巨大な九尾ではなく、九重と同じ巫女装束の女性……即ち、人の姿を取り戻した八坂さんが立っていた。

「は、母……上……」

「……九重、お前の声が聞こえた。……頑張ったな。お前は自慢の娘じゃ」

「母上・・・母上ええええええええええ!!!」

大粒の涙を流しながら八坂さんに抱きつく九重。そんな九重を、八坂さんもまた優しく抱きしめた

「っしやあああああああああああ!!!」

そして、そんな二人を見て、俺はつい天に向かってそう叫んでしま
うのだった。

幕間その五　もう一度やり直す為に

ジャンヌ・ダルク・・・神の「声」に従い、イングランドからフランスを守る為に戦い続けるも、最期は異端者の烙印を押され、炎の中へ消えていった悲劇の聖女である。彼女の生涯は僅か十九年であったが、その短い人生の間に、彼女は多くの偉業を成し遂げ、また多くの人々に希望を与えた。その生き様は、まさしく聖女・・・英雄であった。

そんなジャンヌ・ダルクの魂を継ぎし女もまた、その命を終わらせようとしていた。だが、ジャンヌ・ダルクが民衆の見つめる中で火刑に処されたのとは違い、女を見つめる者、助けようとする者は周りにはいなかった。女が真の英雄であれば、もしかすればそういった者が現れたかもしれない。しかし、女は決して英雄等では無い。女は人々に希望では無く、混乱や悲しみをもたらすテロリストだった。

「ふう・・・ふう・・・」

弱々しく呼吸を繰り返す女の名はジャンヌ。英雄の魂を継いだにも関わらず、これまで英雄とは程遠い生き方をしてきた彼女は、四肢を奪われ、一人地面に倒れていた。両手両足を付け根の部分から無くし、血だまりに沈む彼女を見れば誰もが最早手の施しようが無いと判断するだろうし、ジャンヌ自身、自分の命がもうすぐ尽きる事を自覚していた。

自らの愚行が招いた最期・・・「神殺し」の怒りに触れてしまったのがジャンヌの運命を大きく変えてしまったのだ。気が狂いそうなほどの激痛。それでも狂えず、ただ泣き叫ぶしかなかった彼女を、仲間であるはずの英雄派の者達は見捨てて逃げた。——それが「神殺し」を越える存在から必死に逃げる為の行動だとしても、彼女が見捨てられた事実は変わらない。

永遠に続くと思われた地獄だが、やがてその痛みすら感じられなくなった。それは、痛みを以つてこの世に留まっていた彼女が、ついに死出の旅路を歩み始める直前まで来てしまった事を意味していた。

この世との別離までの僅かな時間、ジャンヌの脳裏にふと懐かしい

光景が蘇り始めた。自らの人生を、そして、自らの生き方を決定づけたある人物との出会いまで彼女の意識は遡った。

．．．
．．．
．．．

五歳．．．それは、ジャンヌが親に捨てられた歳だった。直接的な理由はいずれわからなかったが、一つだけ確かだったのは、彼女は両親にとって不要な存在だという事だった。

五歳の少女が一人で生きていく等、普通に考えれば不可能である。その例にもれず、ジャンヌはその日に食べる物すら手に入れられず、日に日に痩せ衰えていった。

そして、ついに限界の日を迎えたジャンヌが、道路の片隅でひっそりと死んでいこうとしたその時．．．彼女の運命を変える人物が姿を現した。

「可哀そうに．．．どうしてこんな小さな子がこんな目に．．．」

朦朧とする意識の中、ジャンヌの体がゆっくりと持ち上げられた。暖かい何かに包まれたのを感じたのを最後に、ジャンヌの意識は途切れた。

次に目を開けた時、ジャンヌは見知らぬベッドの中にいた。何で自分はこんな所にいるのだろうか。混乱するジャンヌの鼻に、とても美味しそうな匂いが届いた。その匂いに釣られる様に、ジャンヌはそのそとベッドから出ると、ふらつく足取りで匂いのする方へ歩き始めた。

ベッドのあった部屋を抜け、短い廊下を抜けた先、そこが匂いの発生源場所だった。足を踏み入れたジャンヌの目線の先で、一人の老女が鍋で何かを煮込んでいた。

この老女が自分をここに連れて来たのだろうか？ 何故自分を？
ひよつとして人攫い？ だったら逃げなければ！

ジャンヌの頭に様々な考えが浮かんで消えていく。それに集中していたせいも、近くににあった柵に手が当たってしまった。その音に反応した老女がジャンヌへ振り返る。

「あらまあ！目が覚めたのね！よかったわ。ずっと目を覚まさないから心配していたの」

「あ、あの・・・」

「さあさあ、お腹が空いているでしょう？丁度今スープを作った所なの。一緒に食べましょう」

動けないジャンヌを、老女は半ば強引に席に着かせた。そして、所どころ欠けている器に鍋からスープを移し、それをジャンヌの前に置いた。

「どうぞ、遠慮しないでおあがりなさい」

老女の優しい声、何よりずっと空腹に苦しんでいた事もあり、ジャンヌは迷う事無くスープに口をつけた。具らしい具などほとんど入っていない。味だって薄い。それでも、ジャンヌにとっては正に命を繋ぐスープだった

「お口に合うかしら？」

「・・・美味しい。う・・・ぐす・・・美味し・・・ひぐ・・・」

心配するように覗きこんで来る老女に対し、ジャンヌは大粒の涙を流しながら答えた。それを見た老女は嬉しそうに微笑んだ。その微笑みに、ジャンヌはスープ以上の温かさを感じるのだった。

「うふふ、それはよかったわ。お代わりはまだまだあるからね」

結局、ジャンヌはその後、スープを六杯お代わりし、老女も嬉しそうにそれに応えて器にスープを注ぎ続けるのだった。

そうしてようやく飢えから解放されたジャンヌは、おずおずと老女に尋ねた。

「あ、あの、おばあさんはだあれ？」

ジャンヌの問いに、老女はアンヌと名乗った。さらに、倒れていたジャンヌに気付き、このままではいけないと思い、自宅まで連れて来たと続けた。

「あそこは普段通らない道だったのだけれど、どうしてか今日はその道を通りたくなってねえ。うふふ、気まぐれで行動するのもたまにはいいのかしらね」

「そう・・・だったんだ」

「あなた、お名前は？」

「・・・ジャンヌ」

「ねえ、ジャンヌ。答えなくなったら答えなくていいわ。・・・あなたははどうしてあんな所に倒れていたの？」

老女の問いに、ジャンヌは先程とは違う理由で涙を流し始めた。

「わ、私・・・知らない子だつて。お父さんとお母さんがもうどこかへ行ってしまうって・・・」

実の親から放たれた残酷な言葉は、ジャンヌの心をズタズタに切り裂いた。涙と鼻水で顔がグシャグシャになってしまったジャンヌを、アンヌは優しく抱きしめた。

「・・・ねえ、ジャンヌ。ここで私と一緒に暮さないかしら？」

「え・・・？」

あまりにも予想外の言葉に、ジャンヌは泣く事も忘れて顔を上げた。アンヌは尚もジャンヌを抱きしめながら言葉を続ける。

「ウチは貧しいけど、二人くらいならなんとか生活出来るわ。こんなお婆さんと一緒でもよければ、好きなだけいてくれていいわよ」

「・・・どうして？ 私はいらない子なんだよ？」

「私にもね、娘がいたの。でも、あの子は病気で死んでしまった。ちようどあなたと同じくらいの歳だったわ。あなたによく似て、とても可愛い子だったの。だから、あなたをあの場合で見た時、あの子が私の元へ帰って来たんじゃないのかと思ってしまったわ。・・・あなたにとってはいいい迷惑でしょうけど」

「う、ううん、そんな事・・・」

「優しいのね、ジャンヌ。それで、どうかしら？ 私と家族になつてくれるかしら？」

「家・・・族・・・？」

「そう、家族。血のつながりは無くても、愛さえあれば家族になれるわ。私はあなたを愛する。あなたは・・・私を愛してくれるかしら？」

ジャンヌは少しだけ悩み、決断した。この人は不必要だとされていた自分を求めてくれている。たとえ誰かの代わりだとしても構わない。

「・・・なる。私、おばあさんの家族になる！」

「嬉しいわ、ジャンヌ。あなたは今日から私の娘よ！」

互いに抱きしめ合う二人。こうして、ジャンヌは新たな家族と居場所を得たのだった。

それから五年の月日が経った。アンヌはひたすら優しく、時に厳しく、ジャンヌに愛情を一杯注いだ。その愛に応える様に、ジャンヌもまた清らかな心を育みながら成長していった。

アンヌの家は街から少し離れた場所にあり、人との関わりはそれほど多くは無かったが、一度用事で街に出れば、ジャンヌの愛らしさに誰もが振り返った。

そして、この年になって、ジャンヌは自分がジャンヌ・ダルクの魂を継いだ者であると自覚した。知らないはずの場所、知らないはずの人物、それらが知識となって流れ込んで来たのだ。

自分が英雄の生まれ変わりとも言うべき存在だと判明し、その事実に衝撃を受けるジャンヌ。そんな彼女の異変にアンヌが気付かないわけが無かった。

事情を訪ねるアンヌに、ジャンヌは意を決して自らの正体を明かした。世迷いごとだと切って捨てられる様な内容だったにも関わらず、アンヌはただ優しく微笑むだけだった。

「まあまあ！ あのオルレアンの乙女の生まれ変わりだなんて凄じじゃない！」

「え？ そ、それだけ・・・？」

「あなたが何者であろうと、私の娘に変わりないもの」

あつげらかんと答えるアンヌに、勇気を出して告げた自分はなんだったのかと思うジャンヌだった。けれど、その答えが何よりも嬉しかったのも事実だった。

ジャンヌは、この二人だけの貧しくても幸せな生活をずっと続けばいいと心から願っていた。・・・だがその願いは、裏の世界の住人によって残酷にも引き裂かれる事となった。

その日、街から戻ったジャンヌが目にしたものは、上半身が人、下半身が蛇の異形。そして、その異形の腕に胸を貫かれているアンヌの

姿だった。

「あ、ああ、あああああああああ!!!」

そこから先の事はジャンヌは覚えておらず、気付けば右腕に持っていた輝きを放つ剣で異形の首を斬り飛ばしていた。床に転がる首をそのままに、彼女はアンヌへ駆け寄った。

「母さん！ アンヌ母さん！」

「ジャ、ジャンヌ……ヌ。う、うふふ……さすが、オルレ……ア……ンの乙……女ね……。あん……な……怪物……を……やつつけちやうなん……て……」

「ま、待ってて！ すぐにお医者様を……！」

「いい……の……。私は……もう……助からな……」

「いや！ 嫌よ！ また一人になるのは嫌だよお！ 死なないで！ 死なないでアンヌ母さん！」

「ジャンヌ……ああ、ジャンヌ……。もっと、もっと……顔をよく見せ……て……」

「母さん！」

「あなたは……あの子の生まれ変わりなんかじゃ……無い。あなたは……ジャンヌは……私のもう一人の娘……」

「母さん！ 私の母さんだって母さんだけだよ！ だからお願い！ 死なないでえ！」

「愛してるわ……ジャンヌ……あなたの力……大切に……。私みたいな人……増やさな……」

「母さん！ 母さん！ アンヌ母さん！ うう……うあああああああ!!!!」

それがアンヌの最期の言葉だった。家の中に、愛しき母の亡きがらを抱いたジャンヌの慟哭だけが悲しく響き渡るのだった。

……
……
……

アンヌを埋葬したジャンヌは一人家を出た。アンヌの最期の望みを叶える為に。自分の力で誰かを助ける為に。

その旅の最中、ジャンヌはあの異形の正体がぐれ悪魔だという存在、そして、自らの力が神器と呼ばれるものだを知った。この瞬間、ジャンヌの中に悪魔に対する憎しみ、そしてこれ以上アンヌの様な悲しみを増やさないという誓いが生まれた。

それから数年。ジャンヌがはぐれ悪魔狩りを続ける日々を送る中、ある人物が接触して来た。その人物は自らを英雄、曹操の子孫だと名乗った。

「俺と一緒に超常の存在へケンカを売ってみないか？」

「・・・あなたと一緒に行けば、悪魔を殺せるの？」

「もちろん。他にも堕天使やドラゴン、よりどりみどりさ」

「いいわ。私はあなたについて行く」

こうして、ジャンヌはより多くの悪魔を殺せると信じ、英雄派への参加を決意した。参加当初こそ、悪魔への憎しみ、そしてそれに苦しめられる人々の為に活動していたジャンヌだが、いつしか敵を殺す事が楽しくなり、ついには悪魔、人関係無く、弱者をいたぶる事が楽しみとなっていった。既にその心からは、アンヌと共に暮らしていた頃の純真さは失われていたのだった。

・・・

・・・

・・・

(・・・きつとバチが当たったのね)

あの神喰狼は、アンヌの言葉を忘れ、自らの為に他人を傷付ける様になってしまった自分を罰する為に現れたのだとジャンヌは思った。(馬鹿みたい。なんで・・・なんでこんな大切な事を忘れてしまったの。こんな姿、アンヌ母さんには絶対に見せられない)

・・・見せられない？　そもそも、地獄へ行くだろう自分の姿を、天国のアンヌ母さんにどうやってみせるのだ？　ジャンヌは自分のバカバカしい考えがおかしかった。

(ゴメンね、アンヌ母さん。天国に行ったら、どれだけの人を助けたか自慢しようと思っていたのに・・・)

いつ、どこで自分は間違ってしまったのだろう。ジャンヌはそう考

えようとして、止めた。

(・・・もういいか。今さら何を言ったって、私の過ちは消えないんだもの)

そして、ジャンヌが意識を手放そうとしたその時・・・。

「これは・・・!?!」

(だ・・・れ・・・?)

最早目を開ける事も出来なくなったジャンヌの耳に、男性らしき声が届いた。その声には怒りが滲んでいた。

「外道だ外道だと思っていたが・・・まさかここまで腐っていたとはな・・・!」

声が近づいて来る。誰かが隣にいるのをジャンヌは感覚だけで感じた。

「友情? いや、愛か? とにかく、全てを使っても治してみせる・・・!」

瞬間、ジャンヌの冷え切った体を暖かい何かが包み込んだ。その暖かさに、ジャンヌは亡き母親の笑顔を浮かべ、意識を手放すのだった。

・・・
・・・
・・・

ジャンヌが目を覚ました時、そこは天国でも地獄でも無く、京都駅近くの公園だった。

「私、どうしてこんな場所に・・・」

怪訝に思いつつ、立ち上がる。瞬間、彼女は自らの動きに愕然とした。

「・・・え!?!」

バツと下を向く。そこには失ったはずの足がしっかりと存在し、地面を踏みしめていた。しかも、足だけでなく、両腕まで存在し、毎日手入れを欠かしていなかった爪が街灯に照らされて輝いていた。

「・・・夢だったの?」

あえて口に出すが、すぐさまその線を捨てるジャンヌ。あの痛みも、あの恐怖もしっかり覚えている。あれが夢であるはずが無い。

だったら・・・。

「誰かが助けてくれた・・・？」

おそらく、意識を失う直前に現れた人物だろうが、その意図がわからない。英雄派のメンバー？ いや、あの中に欠損部すら元に戻せるような神器を持つ者は存在しない。というか、そんな強力な神器等が存在するなど聞いた事も無かった。

いくら考えても答えは出て来なかった。なので、ジャンヌは一旦その疑問を放置し、これからどうするべきかを考える事にした。

「とはいえ・・・もうあそこには戻れないわよね」

曹操達は自分を助けるつもりだったようだが、それ以外の者達は死にかけて自分を見捨てたのだ。いくらなんでも、そんな連中のいる所へ戻るほどお気楽な性格はしていない。

「最近のノリにはついていけてなかったし、そろそろ潮時かもね」

この瞬間、ジャンヌは英雄派からの離脱を決めた。

(・・・アンヌ母さん。私、もう一度やり直してみるよ。英雄派のジャンヌじゃなく、あなたの娘のジャンヌとして。・・・そんな資格無いかもしれないけど、今度こそ道を間違えない為に・・・)

どこへともなく歩き始めるジャンヌ。行先は決まっていない。手元には何も無い。だが、不安も無かった。

「とりあえず・・・バイト先でも探そうかしら」

かつて、弱者をいたぶって悦に浸っていた時の様な歪んだ笑顔ではなく、新しいものに挑戦する時の様なワクワクした笑顔を浮かべながら、ジャンヌは夜の京都へ消えていくのだった。

「・・・」

そして、そんな彼女を陰から見守っていた者もまた、一人静かにその場を後にした。

その顔に、満足そうな笑みを浮かべながら・・・。

第二百二十話 リザルト

イツセーSIDE

英雄派が撤退し、八坂さんも元に戻つところで、俺達は疑似フィードから元の世界へ戻る事となった。途端、一気に襲いかかつて来た疲労感に、俺はその場にへたり込んでしまった。

「あ、あれ・・・？」

見れば、木場やゼノヴィア達も同じ様に座りこんでいる。そんな俺の肩を、アザゼル先生が叩く。

「お疲れさん、イツセー。無理せず休んでろ。・・・フューリーやスコルの事で、ずつと気を張りつ放しだったんだ。自分でも気付かない内に疲労が相当溜まってるはずだ」

あー・・・確かにそうだわ。けど、最後にして最大のミッションをクリアしたんだ。疲れだけじゃなく、達成感もひとしおだ――。

「姐さん！ 姐さん！」

周囲でぐつたりしている俺達とは対照的に、そんな元氣溢れる声を出しながらアジアに抱きついてるスコル。アジアの可愛らしい顔が、スコルの豊満な胸の中にすっぽり収まっていた。うん、羨ましい。羨ましいが・・・俺の場合、消し炭にされる未来しか浮かばねえ。

「ふみゆっ・・・！ ス、スコルちゃん・・・？」

「なあなあ姐さん！ どうだった？ オレ、姐さんやぽかぽかおねーさんの役に立てたか？」

「も、もちろんだよ。あなたがいなかったら、山田先生がどんな酷い目に遭っていたかわからなかったもの」

「だろだろ！ ならさ、ごほーびくれよごほーびー！」

「ご、ご褒美？」

「良い事をしたヤツにはごほーびをあげないといけないんだぜ！ ポスも怒ると滅茶苦茶怖えけど、良い事をした時は一杯褒めて撫でてくれるんだ！ だから姐さんも、オレにごほーびをあげないと駄目なんだぞ！」

まるで子どもみたいに、ものっそい目をキラキラさせながらアーシアへ頭を突き出すスコル。何を求めているのかが一瞬でわかってしまった俺はおかしくないはず。

「え、ええっと・・・」

数秒だけ逡巡した後、アーシアはスコルの頭を優しく撫で始めた。スコルの顔が瞬く間に蕩け始め、見えないはずの尻尾が勢い良く左右に揺れていた。

「えへへ・・・」

・・・おい、なんだこの萌える生き物は。さっきまでのワイルドな美女はどこへ消えちまったんだ？ 見た目完全に年上の女性が、年下の女の子に撫でられてニコニコしてる場面の破壊力がここまでとは・・・！

「やっぱり、姐さんに撫でられると気持ち・・・」

「スコルちゃん？」

「・・・すぴー」

寝ちやつたよおい！ アーシアが撫でて十秒くらいしか経ってねえぞ！

「そうだ、今の内に・・・！」

ロスヴァイセさんが背後からスコルの首にグレイプニルの首輪を巻いた。瞬間、スコルの体が光を発し、気付けば子犬の姿に戻っていた。

「ふう、これで一安心ですね」

「・・・本当にありがとうね、スコルちゃん」

「くるるる・・・」

可愛らしい寝息をあげるスコルを、アーシアは慈しむように抱き上げた。・・・なんてかな、アーシアからそこはかとなく母性を感じてしまう。

「アザゼルちゃん」

とそこへ、レヴィアタン様が姿を現した。流石に座ったままにいるのはマズイと思ったけど、レヴィアタン様に手で制された。

「無理しないで。楽な態勢でいいよ」

「あ、すみません」

「ちようどよかったぜセラフオール。アイツの姿が見えねえんだが、どこにいるんだ？」

「・・・帰っちゃったよ」

「帰った？　なんで？」

「わからないの。一人で敵の大群に突っ込んで行った後、もの凄く怖い顔で戻って来て、そのまま魔法陣を展開して帰っちゃった。いつもなら一枚撮っておく所だったんだけど、そんな雰囲気でも無かったから自重しちゃった」

（コイツ・・・撮影機材携帯してやがんのかよ。いや、それよりもフューリーだ。出張って来やがったくせに、最後までイツセイ達に顔を見せずに帰ったって事は、俺の予想とは違って、イツセイ達はヤツの眼鏡にかなう仕事をしたって結論でいいのか？　・・・セラフオールのいう怖い顔っていうのが微妙に気になる所だが・・・おおかた、テロリストを殲滅出来なかった自分への苛立ちか何かの所為だろう）

「先生、誰の話をしてるんですか？」

「ん？　ああ、お前等は気にしなくていいさ」

そういう言い方をされると逆に気になりますけどね。他のスタッフ達に指示を出す為に別の場所へ移動を始める二人を見送り、俺は大の字になってその場に寝転んだ。

「よお、お疲れだな兵藤」

「匙か」

俺の横に腰を下ろす匙。そのまま二人で夜空を見上げながら、俺達は互いの健闘をたたえあった。

「にしても、お前がドラゴンになっちまった時はマジでビビったぜ。どういう仕組みなんだ？」

「アレはヴリトラの神器を統合する事で可能になった俺の新しい力だよ」

「統合？」

「ああ、ヴリトラの神器は元々四つあったんだ。で、ヴリトラの魂はそれぞれに封印されていた。俺の『黒い龍脈』に、『邪龍の黒炎』、そし

て『漆黒の領域』に『龍の牢獄』だ。アザゼル先生の所の組織が、俺の持つ物以外を全部保管していたらしくてな、それを全部俺にくつつけたんだ」

「くつつけたって・・・大丈夫なのか？」

「詳しい話は省くけど、俺だったからなんとかならしい。本当は前回のロキ戦に間に合わせたかったんだけど、ヴリトラとの意思疎通が難しくくてな、結局間に合わなかったんだ」

へえ、コイツも知らない内に強くなってたんだなあ。俺も負けていられないぜ！

「・・・匙、もしもまた勝負する事になったら、今度こそ俺が勝つからな」

「上等だ。返り討ちにしてやるよ」

「はは・・・！」

「へへ・・・！」

俺達はどちらともなく笑いあった。なんか、傍から見るといかにも青春！ つて感じのシーンだけど、うん・・・悪くないな。

「おうおう、若いモンの青臭いやりとりつてのはいいいねえ。こっちまで若返っちまいそうだぜい」

「え？ あ、初代孫悟空さん！」

いつの間にか初代孫悟空さんが俺と匙の後ろにいた。慌てて起き上がり、二人で初代さんと向き合った。

「お前さん達には驚かされたぜい。正直、儂があの方に現れんでも、お前さん達だけでなんとかなっちまいそうだったな」

「いやいや、そんな事無いですつて！ なあ兵藤！」

「そ、そうですね！ 曹操が撤退を決めたのも、あなたが現れたのが決定打だったみたいですし！」

「あの小僧にも困ったものだぜい。あの調子じゃ、真の覇道の意味を解すなど夢のまた夢じゃろうて。・・・下手すれば聖槍にも愛相を尽かされるじゃろうなあ」

「真の覇道？ 何ですかそれ？」

「おっと、つい口が滑っちまったぜい。まあ、対極を歩むお前さん達が

気にする事じやない。次にあの小僧が現れても、お前さんはただヤツを殴ってやればええ。案外、それで目を覚ますかもしれんしの」

「は、はあ……」

はぐらかされてしまった。けどまあ、この人の言う通り、テロリストが何を考えていようが俺はただ殴ればいいだけだよな。

「ふーむ……」

初代さんが俺の顔をジロジロ見つめて来た。な、なんだ？ 何か付いてるのか？

「なるほど……白の娘に続いて、お前さんも『覇』の力に目覚めかけておるようじゃな」

「え……!？」

ど、どうしてそれを……!? 覇龍の事は一言も説明してないのに!?

「お前さんの中で、力が渦巻いておるのを感じる。未だ形は成しておらんが、それも近い内に定まるじやろう。実に楽しみじゃ」

初代さんが俺の胸に手を当てながら続ける。

「紅蓮の炎の如き熱い心……まさに赤龍帝に相応しい心じゃ。じゃが、お前さんには一つだけ足りないものがある。それを満たした時、お前さんの力は解き放たれるじやろうて」

「そ、それって何ですか？ 教えてください！」

思わず肩を掴んでしまった俺を咎めたりせず、二カツと笑みながら初代さんが答えを口にした。

「自分を信じろ。——儂から教えられるのはそれだけじゃよ」

「自分を……信じる？」

「仲間を信じ、共に歩む。それはとても大切な事じゃ。けれど、最後の最後、本当の瀬戸際に立たされた時……信じられるのは自分自身なんじゃないよ」

う、うーん。どういう意味だ？ 仲間ってというのは、木場達の事で間違いないよな。けど、瀬戸際……つまり追い込まれた時に信じるのは自分？

「す、すみません。よくわかんないツス」

「よいよい。今のはあくまでも儂の感想じゃからな。それに囚われず、自ら辿り着く事が大事じゃよ。・・・では、儂はそろそろ九尾の大将の元へ行って来るぜい。精進するんじゃよ赤の坊や」

『ジジイ！ さっさとお使い済ませて飯食いに行くぞ！』

「やれやれ、ジジイ扱いの酷いドラゴンじゃ・・・」

『ドラゴン扱いの悪いジジイが何言ってやがる！』

そんなやりとりをしながら、初代さんと玉龍は行ってしまった。うむむ、思いもよらない人にアドバイスをもらってしまった。

「お前・・・まだ強くなるつもりかよ」

匙が呆れの中に不敵さを混ぜた笑みを向けて来る。

「当然だろうが。俺の目標はあの人なんだからよ」

そんな感じで色々話してたわけだが・・・あー、やべ、そろそろマジで限界だ。早くホテルに戻って眠りたい。

「・・・そういえば、山田先生は？」

・・・
・・・
・・・

「えへへ・・・スコルちゃんモフモフレすう・・・」

俺が山田先生について触れている時、既に本人はメデイカルチェックを受けた後に、ホテルのベッドに送られていたりするのだった・・・

・・・
・・・
・・・

そして数時間後、疲れの取れ切っていない体で最終日のお土産屋巡りを何とかこなし、ついに京都を去る時を迎える事となった。ホームには九重と八坂さんが見送りに来てくれた。

「アザゼル殿や他の皆様にはなんとお礼を申せばよいか。これからレヴィアタン殿や闘戦勝仏殿と会談を行い、今後二度とあのような輩に京都を荒らさせないよう協力体制を築くつもりじゃ」

「皆、今度の恩、この九重、一生忘れぬ。また京都を訪れる時は連絡し

てくれ。最大限のもてなしをさせてもらうからの！」

「なんか、やけに上機嫌だな九重」

「ふふん！ 会談が終わったら、魔王様の兄様コレクションを見せてもらう約束をしておるのじゃ！ それに先程総督殿より、昨夜の戦闘に兄s——」

「ああつと！ そろそろ乗り込まねえとヤバいな！ おら、さっさと乗れ乗れ！」

「ちよ、先生・・・!?」

アザゼル先生によって無理矢理新幹線に押し込まれてしまった。扉が閉まり、列車が静かに走り始める。

三泊四日か・・・。あつという間だったし、大変だったけど、来てよかったな。またいつか、今度は部長や先輩達も誘ってみんなで遊びに来たいな。

そんな事を思いつつ、俺は班のみんなが集まる席へ移動した。えつと、桐生の隣か。

「アンタ、随分疲れた顔してるわね。ひよつとして寝てないの？ それとも、寝る間も惜しんで変な事でもしてたの？」

ああ、やべえ、やつぱり眠いわ。どうせ最初から寝るつもりだったし、桐生が何か言ってるが、このまま眠っちまおう。

「なっ・・・!?!」

んあ？ なんか丁度いい位置に柔らかい物が・・・。まくら代わりにさせてもらおう。

イツセーSIDE OUT

桐生SIDE

(ちよちよちよつ?! なんなの!?)

兵藤が私の肩に頭を乗せて来た。あまりに突然の事に固まる私だが、当の兵藤は寝息を立て始めた。

「ア、・アンタ、人の肩を何だと・・・!」

「ん・・・」

身じろぎし、さらに体重を預けて来る兵藤。チラツと見えた横顔は、とても幸せそうだった。

「・・・し、仕方ないわね。叩き起こすのもなんだし、とつても不本意だけど、我慢してあげるわよ」

後で使用料を請求「パシヤッ!」・・・パシヤ?

「いやいや、これは良い物が撮れましたぞ松田殿」

「そうですね。元浜殿。まさか兵藤と桐生がこんな関係だったとは」

「ア、・アンタ達!?!」

「みなまで言うな桐生。俺達は祝福してやるぜ?」

「他の子なら絶対許さんが、桐生だからな」

「どういう意味よ松田!」

「おいおい、そんな大声出すと兵藤が起きちまうぞ」

「ツ・・・!」

コ、コイツ等・・・憶えてなさいよおおおおお!!!

ニヨニヨする二人へ、私はとびっきりの呪いを込める事にするのだった。

桐生SIDE OUT

イツセーSIDE

夕焼けが辺りを照らす頃、俺達の乗る新幹線はようやく東京駅へ戻って来た。最後の挨拶を終え、解散した俺達の元へ、部長達が勢ぞろいで迎えに来てくれていた。つて、ちよつと待てよ。じゃああの人も・・・。

「お帰り、みんな」

「か、神崎先輩・・・」

「? どうかしたか?」

固まる俺達を見て首を傾げる神崎先輩。や、やべえ、まだ心の準備が・・・!

「覚悟を決めろイツセー」

「私達は精一杯やったよ」

「うん、ベストは尽くしたんだ。後はもう信じるだけだよ」

「お、おう」

アジアと言葉を交わす先輩を黙って見つめる俺やゼノヴィア達。そして、ついに先輩が俺達の前に立った。

「兵藤君……」

「は、はい！」

「……ありがとう。やっぱりキミ達にアジアをお願いしてよかったよ」

「「「ツ……！」」」

そ、それってつまり……ミッションクリアって事でいいんですか!?

「木場！ゼノヴィア！イリナ！」

「夢……じゃないよね？」

「ああ……私達は成し遂げたんだ！」

「やった……やりましたよミカエル様あ！」

人目も憚らず、肩を抱き合いながら歓喜の声を張り上げる俺達。

（やっぱり自分があの場合に現れた事は言わなかったか。へっ、しよっぱなからキツイ指示を与えておいた癖に、変な所で甘い野郎だぜ）

こうして、俺達はついに最後のミッションを潜り抜け、ゴールへと辿り着いたのだった。今日という日を、仲間達と共に駆け抜けた日々を、俺はずっと忘れる事は無いだろう。

Last Mission『アジアを無事に送り届ける』クリア。

第九章 学園祭のライオンハート 第二百一十一話 重要度・・・測定不能

駅で兵藤君達を迎え、はい解散・・・と思っていたら、どういうわけかアザゼル先生達を含めて全員で俺達の家に向かう事になった。「先生、ここまで来て言うのもあれだけれど、イツセー達も疲れているみたいだし、話なら明日でもいいと思うのだけれど」

リアスの言う通り、兵藤君達は長時間の移動に参ってしまったのか、お疲れムードを漂わせている。けど、その顔はどこか晴れ晴れとしていた。・・・向こうで何か凄い事でもやったのだろうか。

「まあな。だが、お前達には早めに教えておいた方がいいと思っただけ」そう前置きし、アザゼル先生は京都で起こった事件について俺達に説明した。その内容にリアス達は目を丸くし、a u 派とかいうペロリスト達が現れたのは知っていた俺も、連中が具体的にどんな事をやらしたのかを聞いて驚かされた。

九重ちゃんと八坂さん。去年、俺が京都で出会ったとても仲の良かった親子。そんな彼女達が実は妖怪だった。しかも、八坂さんはa u 派に誘拐されて酷い目に遭わされたらしい。それも、九重ちゃんの目の前でだ。・・・マジでテメエ等の血は何色だよa u 派。

この時点でどう考えてもギルティだが、連中の非道はそれだけでは無い。学園一優しい先生で、俺にとっての恩師でもある山田先生を人質にしようとしたらしい。・・・マジでテメエ等何様だよa u 派。

そして・・・俺だけが知ってしまったであろう、女性の四肢を奪い、放置するという鬼畜という言葉すら生温い連中の所業。今も目を瞑れば鮮明に思いだせる。赤黒い液体の中心、仰向けに転がされ、虚ろな目で空を見上げていた女性の姿を。・・・マジでテメエ等腐り過ぎだろa u 派。

きっと、筆舌に尽くし難い様な残虐な行為をされたのだろう。もしかしたら、女性としての尊厳を奪われる様な事もされたのかもしれない。あのまま死んでいた方が幸せだった。・・・ひよつとしたら、女

性はそんな風に考えていたのかもしれない。

でも、俺は目の前で人が死んでいくのを黙って見ていたくはなかった。だから、効果があるかはわからなかったが、『友情』や旧『愛』といった回復系の精神コマンドを含めた、ありとあらゆる精神コマンドを発動させて女性を助けようとした。

結果は・・・奇跡的に成功だった。『奇跡』を使ったおかげかもしれない。公園へ女性を運び、目が覚めるまで物陰からずっと様子を見守っていた。目を覚ました時、男の俺がいたらパニックを起こすかもしれないという判断だった。

しばらくして目を覚まし、公園を去って行った女性。その表情が絶望では無く、希望に満ち溢れた様に輝いていたのを見て、俺は自分の行動が正しかったと思えた。

その後、俺は兵藤君達と顔を合わせる事無くオカンに頼んで家に帰してもらった。たぶん、あの時の俺は、人に見せられるような顔はしてなかったと思う。現に、唯一別れの挨拶を交わしたセラフオールさんはどこか怯えた様な表情をしていた。

au派……。どうやら連中を構成するのはペロリストではなく、真正銘のテロリストのようだ。今までに現れた他の変態共とは違い、残虐性、非道性の方に目が行く。けど、それでも・・・連中の所為で悲しむ人が生まれるのは同じだ。だったら難しく考える必要は無い。ペロリストだろうがテロリストだろうが、皆等しく制裁コース一直線だ。

「・・・吐き気すら催してきそうですね」

アザゼル先生の口から語られた内容に、俺はついそんな風にもらしてしまった。ああ、みんな心配する様に目を見開かないで。本当に吐くわけじゃないから。

(リ、リヨーマ、なんて冷たい目をするの・・・)

(この心臓を穿たれる様な感覚・・・これがフューリーの「殺気」か)
(こんな顔見たくないや。ご主人様にはやっぱりいつもみたいない優しい笑顔の方が似合ってるにや)

「すみません、話の腰を折ってしまつて。続けてくださいアザゼル先

生」

「・・・ああ。とにかく、イツセー達の奮闘で、連中の計画は防げた。幹部クラスも二人倒せ・・・てはないが、アレじゃもう出て来ないだろう。だが、俺の予想が正しければ、きつと近い内に活動を再開させるだろう。再戦の時を迎えるまでに、今よりもっと強くなれよお前等」

リアス達と一緒に俺も頷いた。平穏な日常を送るといふ俺の夢は変わらない。けど、俺一人だけが平穏に過ごしたって意味が無い。ここにいるみんな。そしてここにはいない人達。全員で一緒になつて毎日を楽しく過ごしたい。それが、それこそが、今の俺の望みだった。「よし、テロリストに関する話は以上だ。・・・話は変わるが、修学旅行は終わつても、お前達にはまだまだたくさんイベントが待ってるぞ。忘れてないだろうが、サイラオーグとの戦いに向けての準備を怠るなよ」

「そうね。若手交流戦最後と呼ばれているし、絶対に気は抜けないわ」
「ああ、それともう一つ。近い内にフェニックス家の娘が駒王学園に・・・」

「あ、あの、アザゼル先生」

「ん？ どうしたアーシア？」

「その・・・この子の事も説明しておかないといけない気がするんですけど」

そう言つて、アーシアは鞆から赤いモフモフ・・・すやすや眠っているスコルを出した。おのれワンパクっ子め！ こつちがどんだけ心配していたかも知らずに可愛らしい寝顔晒しやがつて！ 起きたら一応説教した後で、思いつきりモフモフの刑に処してやるからな！
「アーシア、スコルがどうかしたの？」

「じ、実は・・・」

そうして、アーシアから語られたスコルの秘密に、俺達はただ仰天するのだった。

S I D E O U T

サーゼクスSIDE

「サーゼクス様、アザゼル総督よりお電話が入っております」

「繋いでくれ」

受話器に耳を当てると、電話の向こうからアザゼルの疲れ声が聞こえて来た。

「やあ、アザゼル。セラフオールから聞いているよ。色々大変だったみたいだね。お疲れ様」

『劳いの言葉を寄越すくらいなら代わってくれ。あの野郎の所為で、初日からいしか酒は飲めなかったし、あの薬まで服用するはめになったんだぞ。ちくしょう・・・もつと芸者遊びとかしたかったのに』

「頑張れ。キミなら出来るさー!」

『ええい、その無駄に爽やかな声止めろ! 逆にムカつくわ!』

「はは、ゴメンゴメン。・・・さて、おしやべりはこのくらいにして、そろそろ本題に移ろうか」

『だな。今からの内容は後日データとして纏めて送る。とりあえず聞いただけ聞け』

「わかった。頼むよ」

京都に現れた英雄派。上位の神滅具を三つも所持し、さらに構成員の多くが禁手に至っている。その目的が、まさか、グレートレッドを呼び出す事だったとは流石に予想していなかった。

そうやって、アザゼルの報告にすっかり耳を傾けていた僕だったが、次に挙げられた報告には流石に声をあげずにはいらなかった。

「スコルが人の姿に・・・!?!」

『そうだ。そしてヤツの手で英雄派は幹部クラスの二人を一気に失った』

「ま、待ってくれ。一から順に説明してくれないか。そもそも、どうしてスコルが京都に・・・」

『・・・お前、胃薬は近くにあるか?』

「は? そ、そんな物置いてはいないが」

『なら、今後は常に携帯するようにしておけよ』

どんよりとした声を発するアザゼルに、僕は嫌な予感しかなかった

た。そして、アザゼルから伝えられた内容に、僕は胃がヒュっとなつた。

「で、では、神崎君は英雄派が京都で活動していた事も、キミ達の前に現れるであろう事も全て読んでいた上でスコルを・・・!?」

『正確にはアーシアを守る為だろうがな。だが、イツセー達が予想以上の頑張りを見せてくれたおかげで、ヤツの出番は無いだろうと思っ
ていたんだが・・・』

「一人の女性の出現で全てが狂った・・・」

『ああ。人質にされた真耶ちゃんを見て、スコルがブチ切れた。グレイプニルを外されたスコルは封印された力を完全に解放し、俺達の目の前で人の姿へと変貌した』

「何故人型に？」

『憶測でしかないが、スコルの母親は元々巨人だった。それが関係している
と俺は思っている。ロキが持っていたであろう神喰狼に関するデータさえ手に入ればより正確な意見が出せると思うがな』

「・・・驚いたという言葉しか出ないな」

『この程度で驚いて貰ったら困るぞサーゼクス。：そーいや、フューリーもかなり驚いてたな。流石の騎士様も、ペットが人になるなんて思っ
て無かつたんだらうぜ。はは、いつもいつもやられてばかりだったから、見ていてスツとしたぜ』

アザゼル・・・。そんなちよつとした事で発散しないと駄目な所まで追
い詰められていたんだね・・・。今度、いいスパを紹介してあげるよ。

「・・・で、スコルの件をその程度と言ってしまうキミの話の続きを聞か
せてくれないか」

『サーゼクス、以前俺達はアーシア・アルジエントという人間の重要性につ
いてとことん話し合つたよな?』

もちろん憶えている。現在、神崎君に最も近い場所にいる少女。さら
に、神崎君をこの世界へ送って来た異世界の神と交信する術を持つ聖女。それが
アーシアさんだ。

『洗脳された八坂姫を救い出す時・・・アーシアはオ・クアーンの力を

使った』

「なっ・・・!?!」

『あの時、アジアが発した聖なるオーラの質と量。とても人間が発せる様なモノじゃなかった。俺の記憶の中のミカエルの全力のオーラすら霞んで見えたぞ。イリナも同じ様な事を言っていた。・・・確信したよ。世界に位というものが存在するならば、フューリーの世界は、俺達の世界の遥か上に存在する世界・・・上位世界だとな。向こうの世界のレベルを100とするならば、俺達の世界は・・・30もあれば上々だろうよ』

「上位・・・世界」

気付かない内に声が震えていた。アザゼルの分析力は本物だ。その彼をしてそう言わしめるほどの世界・・・。その世界の神の力を振るう・・・。それが何を意味するかわからないほど僕は馬鹿では無い。

「・・・ミカエルには?」

『この電話を切ったらすぐに連絡するさ』

「彼がこの話を聞いたらどう思うだろうか・・・?」

『さあな。ただただ驚くか。逃した魚のデカさに改めて後悔するか。何にせよ、前回の話し合いで決めた案は白紙に戻さないといけねえな』

「彼と関わった者は皆変わっていくな。いい意味でも、悪い意味でも」

『その内、リアスも悪魔王みたいになっちまうかもなあ』

「悪魔王? ちよつと待てアザゼル。今のはどういう意味だ?」

『あ、やべ・・・。ん、んん! おおつと、電話のバッテリーがそろそろヤバいな! 一旦切るぜサーゼクス』

「ま、待ってくれアザゼル! 話はまだ終わって・・・!」

僕の制止も虚しく、電話は切れてしまった。というか切られたんだ今のは。

「・・・何だかりーアの声が聞きたくなくなってしまった」

どうしても我慢出来ず、僕はりーアへと連絡を入れるのだった。

第二百二十二話　　そうですわたすが鋼の救世主（泣）で
す

その話を持ち掛けられたのは、アーシア達が修学旅行から帰って来てちょうど一週間経った日だった。

「ミリキヤス君がテレビに出る？　しかも、俺にも一緒に出演してくれと言ってる？」

風呂上がり、冷蔵庫から麦茶を取り出してコップに注いでいる俺に、リアスがそう切り出した。『例の物』を発表するから是非とも来てくれるようお願いして欲しいと言われたらしい。

『例の物』、『発表』と聞いて、俺はすぐにミリキヤス君の書いた『鋼の救世主』を思い浮かべた。おー、ついに出版するんだなミリキヤス君。あれかな？　原作者みたいな感じで俺を紹介してくれるつもりなのかな？　でも、俺はただゲームのストーリーをそのまま話しただけだから恐れ多い気がするけどなあ。

「肝心の理由は教えてくれなかったんだけどね。当日まで知らない方がきつと私もビックリするからって。．．．いったい、あなた達は何を隠してるの？」

ああ、確かに驚くだろうな。あんな幼い子があれほどまでの冊数の物語を書ききったんだから。しかも、プロの作家に迫るほどの見事な書き方で。

「ミリキヤス君がそう言ったなら、俺から言うわけにはいかないな」
きつとミリキヤス君はちよつとしたサプライズを狙っているのだろう。それを台無しにするわけにはいかない。．．．グレイフィアさんにグーパンされたくないし。

「．．．まあいいわ。そういう事なら精々当日を楽しみにさせてもらおうよ。それで、あなたは どうするの？」

「もちろん、応じるさ」

ふふふ、ちよつとだけだがフューリーである事を受け入れた俺ならば、テレビ出演にだって耐えられるはずだからな。

「わかったわ。ならミリキヤスにはそう連絡しておくから。予定日はこつちの日付で表して三日後だからそのつもりでいてちょうだい」

了解。三日後ね。どうせメインはミリキヤス君、俺はおまけみたいな感じで座つとけばいいだけだろうし、なんとかなるさ。

この時の俺にはそんなお気楽な考えしかなかった。・・・本当はもう何もかもが手遅れ。既に取り返しつかない所まで来てしまっているとも知らずに。

そして三日後・・・俺は地獄に突き落とされる事になるのだった。

S I D E O U T

イツセーS I D E

オカルト部の部室、俺達は全員テレビの前に集まっていた。また先輩がテレビに出るらしい。けど、最近何かイベントみたいなのってあったっけ？

冥界のチャンネルが映るテレビの画面には、冥界のCMが流れている。あ、今のつて先輩の特撮ドラマのCMだよな。もうDVDの一卷が絶賛発売中みたいだ。

「そういうえば、イツセー君を主演にしたアニメも作られているみたいだよ」

「なぬっ!？」

は、初耳だぞそんなの!? どんな内容なんだ!? もちろん、燃えと萌えが合わさったヤツなんだろうな!?

「ええつと、確か『それいけ! せきりゅーてー』っていう名前だったっけ。子どもをターゲットにしたアニメで、結構人気があるらしいよ」

子ども向けか・・・まあ、自分が主役で、しかも人気があるっていうなら文句は無いけど・・・。

「私も聞いてますわ。それと本編終了後のミニコーナーも好評なんだとか」

「ミニコーナー? ジャンケンとかするんですか?」

『やったれ天嬢さん』っていうタイトルで、内容は天嬢さんが様々な

天井に挑んでいくチャレンジ物と聞いていますわ。最も、必ず失敗して刺さってしまうのがお約束みたいですけど」

「そ、それって……」

俺が恐る恐る天井……ゼノヴィアの方へ視線を向けると、そこには無表情で渴いた笑い声を上げるゼノヴィアがいた。

「は、ははは……いいだろう。いいかげんその名とは決別したいと思っていた。今度のレーティングゲーム。観客の前で証明してやろう。私はもう天井には負けないと！」

「あ、うん。頑張れ……」

もうそれしか言えなかった。てか他になんて言えばいい？

「あ、始まったわよ」

画面が切り替わり、たくさんの取材陣の前にミリキヤス（呼び捨ての許可はもらっている）と神崎先輩が並んで座っている所が映された。右の方でグレイフィアさんがマイクスタンドを前に佇んでいる。そして、そんな三人の背後には、デカデカとした文字で『ミリキヤス・グレモリー著、鋼の救世主出版記念会見』と書かれた紙が張られていた。

『皆さま、本日はご多忙な所お越し頂き、誠にありがとうございます。進行は私、グレイフィアが務めさせて頂きます』

グレイフィアさんの声が会見場に静かに広がって行った。

『まずは、ミリキヤス・グレモリーより、皆さまへご挨拶をさせて頂きます』

『ただいまご紹介に預かりました、ミリキヤス・グレモリーです。本日は僕……私の書いた『鋼の救世主』の出版をご報告させて頂く為、このような場を設けさせて頂きました』

お、おお、流石魔王様の子ども。なんつー堂々とした態度だ。俺もこれくらいスラスラ言えるようになりたいぜ。

『どうして、私の様な子どもが本を出版するのに、わざわざ会見などを開くのか……。皆さまはそう思われているかもしれません。ましてや、私は魔王の息子でグレモリーです。その立場を利用したのではと思われる方もいるかもしれません……。ですが、私は一人の悪魔……』

ミリキヤスとしてこの本に書かれた内容を多くの方々に知って頂き
たかったのです。魔王様もグレモリー家も関係ありません。それが
私の使命だと、その一心で書き記した物なのです』

真剣に語るミリキヤスの顔は、何かを成し遂げた『達成感』。そし
て、『誇り』で彩られていた。はは、こういう所は部長にそっくりだ
な。

『あ、あの、お聞きしてもよろしいでしょうか?』

『どうぞ。社名と名前をお願いします』

『週刊サタンのコストロです。ミリキヤス氏、その内容というのは、あ
なたの横に座っていらっしやる方に関係のあるものなのですか?』

記者の視線が神崎先輩に移る。先輩、さつきから微動だにしてない
けど、緊張してんのかな? . . . なんて、前回のインタビューであ
れだけハキハキしてたんだからそんなわけないよな。

『その通りです。以前、フューリー様が冥界にいらっしやっただけ、私に
語ってくれたのです。それがこの『鋼の救世主』 . . . かつて、フュー
リー様が別の世界で経験した戦いの歴史を書き記した本なのです!』
「「「「「ツツ!?」」」」」

戦いの歴史って . . . まさか、先輩の過去!? この世界に来る前に
経験した、先輩ですら絶望して、それでも希望を繋ぎ続けたっていう
戦いが、全部記されてるっていうのか!?

衝撃的な内容に愕然とする俺達。それは取材陣も同じだったよう
で、次々に質問の許可を求め始めた。てか、ミリキヤス、今普通に別
の世界ってバラしたけど大丈夫なのか? あ、でも、先輩だって言っ
ていいか駄目かくらいちゃんとか教えてるだろ . . . 。

『なん . . . だと . . . !?』

なんかめっちゃ動揺してるうううううううううううううううううう
すか先輩!?! いつものクールさが全く無いです!?!?! 汗も凄いし、目
がまん丸だし、こんな表情の先輩初めて見るぞ!?! え、ひよっとして
バラしちゃ駄目って言ってなかったんですか!?!

『この本が世に出れば、自分の秘密が明るみになる。それでもフュー
リー様はこの本を認めてくれたのです。だから、私は胸を張ってこの

『鋼の救世主』を皆さまに披露しようと思ったのです』

え、じゃあバラしてよかったって事？　なら、何で先輩はあんな事に……。

『……初めてでした。ここまで何かに没頭してしまったのは。フューリー様にお話を聞かせて頂いてから、私はずっと机に向き合っていました。それこそ、寝食を忘れてしまうほどに。お父様やお母様にも随分と心配をかけてしまいました。でも、筆を置こうとは微塵も思いませんでした。これが、この物語を後世に残す事が、私の……ミリキヤスという悪魔に与えられた使命だと思ったからです！』

「ミリキヤス……。私の知らない間に立派になったのね……。」

部長が涙ぐんでいる。あ、今グレイフィアさんも目元を拭ったぞ。

『この本が、ずっと冥界に残り続けて欲しい。……それが、私の夢です』

そう締めくくったミリキヤスの顔はとても晴れ晴れとしていて、俺達はその表情に目を奪われた。

『冥スポのフロントです！　フューリー氏！　今ミリキヤス氏が語られたのは真実なのですか?!』

会場中、俺達、そして、この放送を見ているであろうたくさん悪魔の視線が先輩へ注がれる。無言の時間が一分、二分と続いて行く。

『……は……い……』

先輩の口から小さく肯定の言葉が出た瞬間、会場内がとてつもない騒ぎに包まれた。記者達が一齐に立ち上がり、会場の出入口へ駆けだす。きつと、大々的に報じるつもりなのだろう。もう会見って空気がじゃなくなっちゃまったな。

「こうしちゃいられないわ!」

「ぶ、部長!?　どこへ行くんですか!」

「決まってるでしょ!　あの本を買いに行くのよ!」

「僕も行きます!」

「私も!」

「あ、じゃ、じゃあ俺も!」

こうして、俺達は急いで冥界へ向かうのだった。

その後、『鋼の救世主』は冥界の書店に並べられる事となり、多くの悪魔達がそれを求めて殺到するのだった。その人気は悪魔だけに収まらず、墮天使、さらには天使までもがそれに描かれた鋼の救世主達、さらに、その救世主達を導き続けた一人の男の戦いを深々と胸に刻み込むのだった。

そして、この物語に影響を受け、本来辿るべきものとは異なる道を歩き始める者達がいた。

「やはり、今以上の強さを得る為には、神崎殿へ師事するのが一番か」
ある者は、さらなる力を得る決意を固める。

「これよ！　これこそが私達が求めていた経典だわ！」

またある者は、待ち望んでいた物を得た悦びに歓喜の涙を流す。

「・・・これがキミの戦い。キミの歩んで来た王道か。・・・総督殿の言う通りだな。俺は、キミと同じ土俵にすら立てていなかったのか・・・」

そしてある者は、自らが歩む道に僅かながらの疑問を抱き始めつつあった。

それぞれにもたらされた変化が良い方向へ進むのか、それはまだ誰にもわからない。ただ、一つだけハッキリしているのは・・・。

（オカン！　オカン！　タイムマシンの物無いですか!?　あるなら今すぐ貸してください！　それに乗ってあの時の俺に真覇剛掌閃叩き込んでやる!!!）

その変化をもたらした張本人が、心の底から自らの過去を後悔しているという事だった。

俺の存在や行動って……。俺がこれまでやって来た事って、大昔の戦いに乱入したり、教会の変態集會に乱入したり、婚約パーティーの會場に乱入したり……。って、乱入ばっかじゃねえか！

それ以降だって特にこれといった事はしてない。Dとの一件は、リアス達のおかげで乗り切れたんだから除外だし。……ええい、まるで思いつかんぞ！

「小学生の頃から「落ちついて人の話を聞きましょう」とか「自分の気持ちはハッキリ伝えましょう」とか通信簿に書かれとつたみたいやけど、その部分はまるつきり成長しとらんようやなあ」

「ちよ、何で知ってるんですか!？」

「ウチ、神様やもん」

それ言われたらもう反論のしようがないじゃないですか！　けど、自分の気持ちをはっきり伝えるって部分は実践してるつもりだぞ。これまでだって、リアス達に服装とかの意見を聞かれた時にはちゃんと似合ってるって伝えて来たし。悩みを聞かされた時だって、自分の思ったままに答えて来たつもりだ。

そうオカんに言うと、方向性が違うと呆れられてしまった。解せぬ。

「そもそも、そこまで嫌がるんなら、何で質問された時に違うって言わんかったんや？」

「それは……」

——…初めてでした。ここまで何かに没頭してしまったのは。

——この物語を後世に残す事が、私の……ミリキヤスという悪魔に与えられた使命だと思っただからです！

——この本が、ずっと冥界に残り続けて欲しい。……それが、私の夢です。

「……俺一人だけが嘘つき呼ばわりされるのならいくらでもかまわない。でも、あの場で違うと言えば、俺だけでなくミリキヤス君まで非難を受けていたかもしれない。俺はあの子が……ミリキヤス君が心血を注いで作り上げた物を絶対に台無しにしたくなかったんです」

先日、グレモリー家にお邪魔した時、俺に出版の許可を求めた際の

ミリキヤス君の不安に溢れた表情。そして、その直後の輝きに満ちた笑顔。彼があの本にどれほどの情熱を傾けていたのか容易に想像できた。あの笑顔を、悲しみに変える事だけは絶対にしたくないし、するわけにはいかなかった。だから俺は、あの時肯定したんだ。

「雰囲気に流されたわけやない。アンタが自らの意思で肯定した瞬間、勘違いは真実になった。それが保身の為じゃなく、あの子の為やったとしても、アンタはもうこの道を引き返せない」

・・・わかつてる。これは俺が犯した罪。誰も知らない、だからこそ誰にも許してもらえない俺の大罪だ。ならば、俺はこの罪を・・・鋼の救世主（泣）の名を死ぬまで背負い続けよう。

「俺って最低ですね」

自重気味に呟く俺に対し、オカンは小さく首を横に振った。その否定の表現に俺は目を丸くした。

「確かに、嘘をつく事は悪い事や。けど、アンタはそうする事で、あの子とあの子の夢を守ろうとした。・・・ようやくたよ、アンタは」

「ツ・・・！」

オ、オカアアアアアアアアン！ あなたって人はあ！ 見た目だけじゃなく、寛容さまでオカンじゃないですかあ！ そんなあなたオカンっぷりに、俺の涙腺は大崩壊ですよお！

「ふふ、男の子がそんな簡単に涙を見せたらアカンで。・・・どうしても泣きたいっちゆうんなら、ウチの胸で良ければ貸したるよ？」

だから、なんでそういう事を平然と言いますかねあなたは！ パンチパーマなのに、オカンなのに、不覚にもドキツとしちやつたじゃないですか！

「・・・いえ、大丈夫です」

「確かに、その顔ならもう大丈夫そうやな。さつきまで喚いていた子とはとても思えんわ」

覚悟は出来た。たった今から、俺は鋼の救世主（泣）としての道を歩み始める。そうとも！ ずっとしていた勘違いに気付けたんだ！

こんなとんでもないレベルの勘違いなんて、きつと最初で最後だろうし、ここはプラスに考えようじゃないか、俺！

「それじゃ、そろそろお別れや。現実のアンタが起きそうやからな」
「現実？　　そういや、そもそもどうやって俺をここへ呼んだんですか？」

「憶えてへんの？　アンタ、家に帰って自分の部屋に入ったと思ったら、そのままベッドに倒れ込んで眠ってしもうたんやで？」

「そうだったのか。あの会話が終わってからの記憶が無いんだが、よく帰って来れたな俺。」

（・・・救世主、英雄、そう呼ばれる存在に必要なのは力だけやない。ウチのあげた力を欲望の為じゃなく、あくまでも他人の為に使い続けるアンタも、十分そう呼ばれる資格はあると思うで。そんなアンタやから、ウチはアンタを気に入ったんや）

オカンの微笑みが光の向こうへ徐々に消えていく。現実の俺が目を覚ますまでもう間も無くだろう。

・・・
・・・
・・・

「ん・・・」

　　瞼を開けると、見慣れたを通り越して見飽きた天井が広がっていた。窓からは朝日が差し込んでいる。時間は・・・六時四十分過ぎ。いつもの起床時間とほぼ同じだ。ひとまず起き上がろうとして、俺は違和感に気付いた。なんか右腕が重い？　　というか、なんかふにふにとしたものがくっついてる？　　ナニコレ？　　新手の金縛り？　　右腕だけとかピンポイント過ぎだろ。

　　とりあえず、右腕の状態を確かめようと、左腕だけで布団を捲りあげると、そこには信じがたいものがいた。

「すぴー・・・すぴー・・・」

　　・・・皆さんに質問です。朝起きて布団を捲いたら、鮮やかなオレンジ色の髪で褐色肌の幼女が右腕に抱きついて幸せそうに寝てたんですけど、この場合の適切な行動を教えてください。

　　!!!
　　というか・・・昨日の俺マジで何したんだよおおおおおおお

第二百二十四話 YESロリータ NOタツチ

変わり映えしない部屋。そこへ少女が加わるだけでなんという事でしょう。途端にカオスな空間に大 変 身！ 騎士（笑）から鋼の救世主（泣）になったと思ったら、最終的にはロリコン（死）ですか。これじゃ教会の連中と一緒にじゃないですか。どうした？ 笑えよベ j・・・俺。

「・・・いや、待て。まだ慌てる時間じゃない」

ともかく、まずはどうしてこんな事になったのかを考えなければ。その為には、やっぱりこの少女に話を聞くのが一番か・・・。

「すぴー・・・すぴー・・・すぴびびー・・・」

しかし、本当に幸せそうな寝顔だなあ。思わずこっちまで和んでしまいそうだ。こんな状況でなければ寝かせておいてあげたいけれど、俺の今後の人生がかかっているし、心苦しいが起きてもらおう。は、ここが俺の部屋で本当によかったわ。第三者から見たら明らかにアウトだよなor・・・。

「おっはよー、ご主人・・・様・・・」

・・・空気が凍るってこういう事を言うんだな。部屋へ入って来るなり動きを固めた黒歌を見て、俺はそんな感想を抱いた。ってか、アレ？ これってマズイよね？

「ご、ご主人様が・・・」

「く、黒歌。これはだな・・・」

「ご主人様が・・・幼女をベッドに連れ込んでるにやあああああああ!!!」

黒歌の叫び声が、早朝の家の中に響き渡る。どうしよう、完全に隣さんにも届くくらいの音量だったんだけど、俺、ここに住めなくなっちゃうかも・・・。

「なんですってえ!?!」

黒歌は仲間を呼び寄せた！ リアスと朱乃が現れた！

（・・・オカン。これも、ミリキヤス君を勘違いさせてしまった俺への罰なんでしょうか？）

『うんにや。全く関係あらへんよ』

(ですよねええええええええ!!!)

俺の鋼の救世主(泣)としての人生は、一日目から早くも危機を迎える事になったのだった。

.....

「.....で、どうしてこうなったのかしら？」

神崎家の住人全てが俺の部屋に揃ったところで、リアスが口火を切る。彼女と朱乃、そして黒歌はものつそい怖い目で俺を見つめている。アーシアは純粹に戸惑っているようで、小猫は.....心なしかちよつと嬉しそうなんですけど。おかしい。キミは人の不幸を見て喜ぶ様な子じゃ無かったはずだ！

「まさか、リョーマが幼女趣味だったなんて、ショツクだわ」

「この状況で説得力が無いのはわかっているが、それでも否定させてもらうぞ。俺はロリコンじゃない」

「なら、その女の子は何？」

ひい！ 朱乃の目のハイライトがヤバい事になってる！ この子が何かとか俺が知りたいよ！

「あ、あの、ちよつといいですか？」

「どうしたの、アーシア？ この子に心当たりでも？」

「も、もしかしたらなんですけど、その子.....スコルちゃんかもしれません」

「「え？」」

「な、何となくなんですけど、髪の色とか、顔つきとか、京都で人の姿になったスコルちゃんに似てる様な気がするんです。それに、その子の首に巻かれてる首輪.....グレイプニルなんじゃないでしょうか」

言われてみると、確かに首にはスコルの首輪と同じ物が巻かれている。え、じゃあ、この幼女は本当にスコルなのか？ 人化云々の説明は受けてるけど、こうして直接見るとやっぱり驚きで一杯だな。

「なら、確認の為に、そろそろ眠り姫に起きてもらいましょうか。」

リョーマ、お願い。この子がスコルなら、声をかけない限り起きないでしょうし」

「わかった。．．．スコル。スコル、起きてくれ」

声をかけながら体を揺する。すると、幼女の目がゆつくりと開かれた。二、三度パチパチと瞬きして、幼女は大きなあくびと共に声をあげた。

「ふわあ．．．おはようお兄ちゃん。．．．あれれ？　アーシアお姉ちゃん達もいる？　どうしたのだ、みんな？」

「スコルちゃん．．．だよね？」

「うん、ボクはスコルなのだ！　って、あれれれ!?　どーしてボク、アーシアお姉ちゃんとおしゃべり出来てるのだ!？」

自身の変化に気付いていないのか、目を丸くしながらそんな事を言う少女もといスコル。そんなスコルへ、事情を説明すると、彼女は合点したように頷いた。

「あ、そういえば、昨日お兄ちゃんが帰って来た時にお迎えしたら、凄く辛そうな顔だったから、心配になってお部屋までついて行ってそのまま眠っちゃったのだ」

「言われてみれば、あなた、昨日は夕食も取らずに部屋から出て来なかったわよね。何かあったの？」

「いや、それについては解決したから大丈夫だ」

そう、鋼の救世主（泣）である事を受け入れる事だな。

「でも、どうして人の姿に？」

「んー、ボクもわかんないけど、辛そうなお兄ちゃんを見て、ボクがお話出来たら元気にしてあげられるのになーって思いながら眠ったのは憶えてるのだ」

「で、眠っている間に人の姿になっていた．．．と。アザゼル先生はグレイプニルの有無が人化に関わっているかもと言っていたけれど、どうやら違う様ね」

「はい。それに、京都の時はもっと大人な女性の姿になってました」

「それが本来のスコルとしての姿なんでしょうね。今のスコルはあくまでもリミッターをかけられている事によってこの姿になっている

のだから。なら、元の姿には戻れるの？」

「やってみるのだ。うむむくく．．．えい！」

なんとも可愛らしい声をあげると共に、スコルの体が光に包まれたと思つた次の瞬間、彼女は子犬の姿へ戻っていた。

「アツサリ戻ったにや」

「不思議です．．．」

「それじゃあ、今度は人の姿になつてみて」

「がう！」

元氣よく返事をするスコルだが、それから五分くらい部屋の中を歩きまわったり、床をコロコロ転がったり色々動きまわるだけで、人の姿になる事はなかった。

「くうくん．．．」

「．．．どうやら、元の姿に戻るのは簡単に出来るけど、人の姿になるのには何かしらの条件がいるようね」

条件か．．．何なんだろうな。それを満たしたら、スコルだけじゃなくて、フェンリルやハティも人の姿になるんだろうか。

「けど、よかつたわ。リョーマが小さい子好きじゃなくて。もしそうなら手の打ちようがなかったもの」

「全くにや。まあ、白音からしたらそつちの方がよかつたんだろうけどねえ」

「よ、余計な事は言わないでください姉様」

「にゅふふ、さっきのドヤ顔のお返しにや」

「だから、最初からそう言ってるじゃないか」

「で、でしたら、リョーマさんの好みの女性ってどんな方なんですか？」

「そうだなあ．．．って、おいおい、アジアさんや。今は俺の好みのタイプの話なんかどうでもいいんじゃないや．．．」

「」「」「」

あ、あれ、どうしたのみんな？ 俺、まだ何の発言もしてないのに、何故にそんな真剣さ通り越して射殺さんばかりの目線を送って来てるの？ 質問というか、もう尋問みたいな空気になってるんですけ

ど、これいかに。

「そ、そうだな……。『この人と一緒にいて幸せ』だと思える人……かな」

俺の両親がそうだった。いつでもどこでも仲睦まじくて、呆れる所も多々あったけれど、やっぱり子どもとしては、両親の仲がいいと嬉しいものだった。俺もいつか、こんな相手が欲しいと思わせるくらいに。

しかし、女の子達の前で自分の好きなタイプを吐けとかどんだけ羞恥プレイだよ。仕返しとばかりにリアス達のタイプも聞いたら、みんな揃って焦った様に秘密だと返されてしまった。……今、俺は泣いている。

「さ、さてと、そろそろ学園へ行く準備をしないと！」

「わ、私も」

「そ、そういえば、今日の朝食の担当は私だったにや」

「お、お手伝いします姉様」

「あわわ……。ま、待ってくださいみなさん」

バタバタと退室していくリアス達。そして、この場には俺とスコルだけが残されたのだった。

「……俺も準備しないとな」

「く〜ん」

のそのそと動きだす俺の足下へ駆け寄って来て体を擦りつけて来るスコル。……うん、大丈夫。今日も一日頑張れそうだ。

制服に着替え、俺はスコルを抱き上げて部屋を後にするのだった。

S I D E O U T

イツセーS I D E

「ふわあ……」

朝の通学路、俺はでかどかどかあくびをした。幸い、周囲に人はいない。まあ、見られたとしても気にしないけどな。

神崎先輩の戦いを綴ったという『鋼の救世主』が出版されてこつちで一週間。毎日夜遅くまで読み続けている所為で寝不足だった。け

ど、小説なんざ口クに読んだ事の無い俺をここまでめり込ませるだけの内容だったからしょうがない。むしろ、寝る時間さえ勿体無いくらいだった。

「今日も放課後はオカルト部に直行だな」

みんなと一緒に本を読みながらのんびりと時間を過ごす。それがこんなにも楽しい事だと思わなかった。

「先輩からも直接話とか聞けたらもつと面白いんだろうけどなあ」

でも、それだとネタバレしちゃうかもしれないしな。まずはしっかりと読んで、それから話を聞いてみよう。へへ、今から楽しみだぜ！『鋼の救世主』を入れた鞆を手に、俺は学園へ向かう足を速めるのだった。

.....

そして放課後、俺はいつもの通り、オカルト部の部室へと赴いたのだが、そこには驚きの人物の姿があった。

「あ、あなたは・・・！」

「邪魔しているぞ、兵藤一誠」

ソファに座ってお茶を飲むその人は・・・間違いなく、俺達の次の相手であるサイラオーグさんその人だった。

「ど、どうしたんですか、サイラオーグさん!? なんであなたがここに!?」

「勝負の前に一度挨拶をと思ってな。それと、神崎殿に頼みごとがあつてお邪魔した」

「連れて来たわよ、サイラオーグ」

そこへ、神崎先輩を連れた部長が姿を現した。先輩を見たサイラオーグさんが立ち上がり、手を伸ばす。

「久しいな、神崎殿」

「ええ、お元気そうで何よりです」

ガッチリと握手をした所で、部長がサイラオーグさんに尋ねた。

「それで、サイラオーグ。リョーマにお願いしたい事ってなんなの？」

第二百二十五話 目標は大きく持ちましょう

「山田先生、さよなら〜」

「じゃあね、真耶ちゃん!」

「さようなら。気をつけて帰ってくださいね」

放課後、学園一階の廊下で生徒達と挨拶を交わす山田先生。そして、そんな先生をジツと見つめている俺。・・・言っておくが、別にストーキングしているわけでは断じてない。

「ほほお、随分熱い視線を送ってやがると思ったら、なるほど、お前のタイプは真耶ちゃんみたいな子だったわけか」

突然肩を叩かれたので振り返ると、そこにはニヤケ顔のアザゼル先生がいた。続いて、その顔を俺から山田先生に移す。

「わかるぜ、その気持ち。同年代とのイチャラブもいいが、年上のお姉さんに甘えるのもいいもんだぜ・・・」

「あの、さつきから何の話を?」

「あ? 真耶ちゃんが好き過ぎてストーキングしてたんだろ?」

ちよ、さつきそく誤解されてるし! 最近ロリコンの濡れ衣を着せられそうになったから、そういう風に見られるのマジで勘弁して欲しいんですけど。

「ち、違います。俺はそんなつもりでは無くてですな」

「じゃあ、何だよ?」

「山田先生、京都で危険な目に遭ったって聞いてから、どうも心配というか気になってしまっ・・・」

「ああ、その事か。心配すんな。こつちに帰って来てからは、真耶ちゃんには監視をつけてある。まあ、監視つつつても、真耶ちゃん自身じゃなく、彼女の周囲に対する監視だがな。怪しいヤツが現れたらすぐに俺の耳に届くようになってるぜ。万が一の時は墮天使が対応するから任せとけ」

おお! なんと頼りになるお言葉! 流石アザゼル先生。ちよつと大げさな気もするが、またあの危険な連中が現れるかもしれないし、むしろそれくらいしておかないといけないのかもしれないな。

「・・・そうとも。この街を焦土にするわけにはいかねえんだ。頑張れアザゼル。お前なら出来るさ」

と思つたら、虚ろな目でブツブツと呟き始めるアザゼル先生。かなりお疲れの様子だな。理由はわからないが、愚痴くらいなら聞きますよ？

「お前が言うな！」

「え・・・!?!」

「あ、いや、すまねえ。なんか急に叫びたくなっちゃまって・・・」

これは・・・重症だな。それにしても、誰に対する叫びだったんだろう。あの悲痛感たつぷりな感じの声からして、かなり困った相手みたいだが。

「そ、それよりもだ。修学旅行に行く前に報告を受けたが、お前、レイナーレ達を眷属にしたそうだな」

「え？ ええ、そうですけど」

「あー、その、なんだ。俺から言うのも何だがよ」

どこか気恥ずかしそうに頬を掻いた後、アザゼル先生は俺に向かって小さく頭を下げた。

「・・・アイツ等の事、大事にしてやってくれ。まだまだ足りねえ部分が多い小娘共だが、お前を想う気持ちだけは本物だからよ」

その姿と言葉には、不器用ながらもレイナーレさん達に対する愛情が確かに存在していた。先生からしたら、大切な部下を俺に託したんだもんね。・・・改めて、眷属を持つ意味を考えさせられる気分になった。

「誓います。絶対に大切にすると」

「そうか・・・。くく、お前が言う『絶対』ほど説得力のある言葉もねえわな」

顔を上げた先生がそんな事を言う。しかし、今のやり取り・・・結婚前の彼女の父親との会話を彷彿とさせる何かが・・・。はいそこ、妄想乙とか言うな。

「眷属になった以上、全てにおいてお前が優先されるが、時々でいいから俺の所に貸してくれ。助手がいるといねえとじゃやつぱり研究の

「神崎殿、回答を頼む」

無理でした。畳み掛けられました。逃げ道が無いです。

「待ってサイラオーグ。いくらなんでも単刀直入過ぎよ。リヨーマだって戸惑っているみたいだし、一から順番に話してちょうだい」

「むっ、すまない。神崎殿を前に少しばかり気を急かし過ぎた様だ」

ナイスサポートだリアス！ そうだよな。やっぱり戸惑ってたのって俺だけじゃなかったんだよな。サイラオーグさんも心なしかソワソワしてるし、彼が言った様に焦ったのかもしれない。

俺とリアス、対面にサイラオーグさんが座り、周りを兵藤君達が囲む。いつの間にか全員分のお茶を用意していた朱乃の気遣いに感謝しつつ、リアスが口火を切った。

「それでサイラオーグ。あなたさつきリヨーマに師事・・・言い換えれば弟子になりたいと言っていたけれど、どういう事？」

え、さつきのってそういう意味だったの!?! 目を丸くする俺を尻目に、サイラオーグさんはスラスラと答え始める。

「俺は魔王になるのが夢・・・いや、絶対になつてみせる。その為には今よりもさらなる力を得なければならぬ。神崎殿に鍛えてもらえれば、俺はさらなる高みへ昇れるはずだと思ったのだ」

「何故このタイミングなの？」

「本来であれば、もう少しの間は自分だけで鍛え続けようと思っていたのだが・・・これを読んで考えが変わったのだ」

サイラオーグさんが取り出したのは一冊の本。・・・間違いない。俺の罪が形となったあの『鋼の救世主』だ。

「人々を守る為に戦い続けた鋼の救世主達。これを読んで思い出したのだ。子どもの頃を・・・伝説の騎士に憧れ、いつか、自分も母上を守るだけの強さを得るのだと誓ったあの頃の事を・・・」

「ミスラおばさまは・・・」

「・・・」

無言のサイラオーグさんを見て察したのか、リアスはそれ以上何も言わなかった。何か、深い事情があるのだろう。なら、ここは追及などせず、次にいこう。

「俺は魔王になって証明する。滅びの魔力が無かろうとも、俺はバル家のサイラオーグだと。母上には何一つ非は無かったのだと。この拳で、この体で、この意志で、凝り固まった頭の連中に思い知らせてやる。必ずな」

自身の拳に目を落としつつ、サイラオーグさんは宣言した。俺が言うのもおこがましいが、その決意の込められた勇壮な顔は、既に魔王としての資質は十分だと思わせるものだった。

しかし・・・この人、一体どこまでイケメンになるつもりなんだろう。見た目も性格もイケメンって別次元にしかないと思つてたのに。

「神崎殿、俺の都合ばかり押し付ける様で心苦しいが、どうか認めてくれないだろうか。財産は少ないが、お礼として渡せるくらいは蓄えている」

「・・・わかりました」

自分でも驚いてしまうほど、その言葉は自然に発せた。

「では・・・！」

「ですが、俺は人に教えられるほどの指導力はありません。出来る事と言えば精々模擬戦くらいにしかありませんが」

「十分だ！　むしろそれを望んでいたのだ俺は！　感謝するぞ神崎殿！」

立ち上がり、深々と頭を下げるサイラオーグさん。正直、師匠とか弟子とか荷が重すぎる。けど、この人もまた鋼の救世主（泣）である俺を頼ってここに来た。だったら、俺はそれに応えなければならぬ。そうする道を俺は選んだのだから。

「あ、あの、サイラオーグさん。それなら別にレーティングゲームの結果でとかじゃなくて、普通に先輩と鍛錬したらいいんじゃないですか？」

兵藤君が尋ねると、サイラオーグさんは不敵な笑みを浮かべながら答えた。

「その方がモチベーションが上がるのでな。何より・・・神崎殿より技を習得させられたお前達に勝てなければ、俺に資格は無い」

「・・・負けるつもりは無いわよ？」

「当然だ。そうでなければ意味が無い」

見つめ合うリアスとサイラオーグさん。その間には見えない火花が散っていた。その後、サイラオーグさんがオカルト部を後にした所で、俺達も解散するのだった。

S I D E O U T

イツセーS I D E

夜になつて、俺はベッドに横になつてジツと天井を見上げていた。今日は本を読む気にはならなかった。代わりに思い出すのはサイラオーグさんの言葉だった。

——俺は魔王になるのが夢・・・いや、絶対になつてみせる。

そう言い切つた時のサイラオーグさんは滅茶苦茶でつかく見えた。冥界での初顔合わせの時以上に、その言葉には「重み」があつた。そんな人と、俺達は戦うんだよな。

「夢・・・か」

サイラオーグさんだけじゃない。俺の周りには、夢に向かつて努力する人達がたくさんいる。部長は立派な当主になる事。会長や匙は学校を建てる事。他のヤツ等だつてそれぞれに夢や目標を持っていて、それを叶える為の努力をしている。夢と現実は違う。夢を叶えられる人間なんてほんの一握りだろう。けど、少なくとも、部長達はみんな夢を叶えるんじゃないかな。あの人達は途中で諦めたりせず、叶えるまで努力し続ける人達だから。

なら、俺自身の夢は？ 今の俺に、部長達みたいに胸を張つて言える様な夢つてあつたか？ ハーレム王・・・は違う。そんな浮ついたものじゃなく、絶対に折れない、誓いとも呼べるようなものを俺は持っていない。

「俺は何をしたい？ 俺は・・・何になりたいんだ？」

一人呟き、掌を見つめる。サイラオーグさんのそれに比べ、ずっと小さく、弱々しく見えた。

第二百二十六話 足りない物は他の部分で補えばいいんですよ

サイラオーグさんの来訪から数日、駒王学園に転入生がやって来た。その転入生の名はレイヴェル・フェニックス。そう・・・あのレイヴェルさんだった。休憩時間にリアスが様子を見に行った所（俺も行こうとしたらパニックになるから駄目だと言われた）、クラスの子達に囲まれ、色々質問されて大変そうだったらしい。けど、彼女の入ったクラスには小猫とヴラディ君もいるからきつと大丈夫だ。

それにしたって、アザゼル先生も事前に教えておいてくれればよかったのに。同じく転入を経験した俺ならば事前に色々アドバイス出来たんだが。・・・いやまあ、彼女と俺とじゃ意味合いが違うのだろうか。

「ああ、悪い悪い。前に説明しそびれてそのままだったわ」

放課後、レイヴェルさんを加えて勢ぞろいした俺達に、アザゼル先生は軽いノリの謝罪をした。続いて、レイヴェルさんがまさしくお嬢様と言える様な優雅な所作と共に挨拶をした。

「本日より、この学園で皆様と一緒に学ばせて頂く事となりましたレイヴェル・フェニックスです。先生、そして先輩方、未熟な私への厳しいご指導ご鞭撻のほど、是非ともよろしくお願い致します。また、そちらのお二人には同じ学年、同じクラスの身として、仲良くさせて頂きたい存じますわ」

「お、おお。こちらこそ、よろしくお願い致しますです」

「イツセー君、無理に言葉遣いを変えなくていいから」

レイヴェルさんの雰囲気によつとテンパリ気味の兵藤君。でも気持ちはわかる。ご指導ご鞭撻なんて言葉を知ってる事だけでも驚きだよな。

「クスクス・・・」

んん？ 何やら小猫の様子がおかしい。口元に手を当てながら笑い声を抑えているようだ。

「な、何かおかしな所がありましたかしら？」

「・・・別におかしくない。ただ、教室であれだけへタレてた人と同一人物だと思えなかっただけ」

「なあっ・・・!?」

「へタレ？」

「聞きたいですか、先輩？ 実はですね・・・」

「お、お待ちなさい！ よりにもよってフューリー様の前で何を言い出すのですか猫又娘！」

「へタレ焼き鳥姫は黙ってて」

「なあっ・・・!? こ、このお・・・！」

ギリギリと歯ぎしりしながら今にも小猫に飛び掛かりそうなレイヴェルさん。対照的に澄ました顔でその視線を受け止める小猫。ひよつとしなくとも、この二人、相性が悪いのか？

「ブラディ君、教室でもあの二人はあんな感じだったのか？」

「い、いえ、そもそも、他の人達が周りにいたから近付けなかったんです。だから、まともに話すのは今のが初めてだったはずなんですけどお」

ふむふむ・・・余計わからなくなっただぞ。

「うふふ、二人とも、良い友達になりそうですね」

「そうね。今まで小猫には同学年でああやって正面からぶつかれる相手がいなかったから」

「うう、ゴメンなさいい。僕がもう少ししっかりしてれば」

「謝る必要は無いわ、ギヤスパー。あなたを弄る時の小猫って良い表情してるのよ」

「素直に喜ばせんよお！」

「ぐぬぬぬ・・・！」

「ふん・・・」

ぶつかり合って友情を育む。少年漫画じゃお約束だよね！・・・二人とも女の子だけだ。

その後、レイヴェルさんはそのままオカルト部に入部する事が決まり、新たな仲間と共に俺達が始める事となったのは、目前に迫る学園

祭に向けての準備だった。オカルト部は旧校舎全体を使つての様々な催し物を企画している。正式に所属していないが、もうほぼ部員となつている俺とアジアもその手伝いをする事になった。クラスの催し物と合わせると中々大変だが、最後の学園祭だし、悔いの残らない様精一杯頑張つてみよう。

そんなわけで、準備を進めていく日々の中、どうにも様子がおかしい子がいた。それは兵藤君なのだが、どうも作業中に考え事に浸る回数が目に見えて多いのだ。

「イツセー君、そつちを持ってくれるかい」

「・・・」

「イツセー君?」

「え? あ、お、おう、悪い!」

今も木場君に声をかけられるまで上の空状態だった。木材相手に格闘する二人を見つめる俺に後ろからリアスがやって来て呟く。

「・・・イツセー、何か悩んでいるみたいね」

「悩んでいる?」

「あの子は自分の心についても正直だわ。だからすぐに顔や態度に出ちゃうのよね。本人は隠しているつもりなんでしょうけど、ハッキリ言つてバレバレなのよ。全く、他人の事には敏感なのに、自分の事は溜めこんでしまうのはあの子の悪い癖ね」

そう兵藤君を評するリアスの顔は、若干の呆れと、それ以上の優しさが浮かんでいた。悩みか・・・。言われてみれば、今の兵藤君は以前の合宿の時に相談して来た時の彼とどこことなく雰囲気似ていた。

「兵藤君の事、よく見ているんだな」

「当然よ。あの子は私の大切な眷属だもの。あなたもちやんと自分の眷属を気にかけてあげないと駄目よ?」

「ああ、気をつけるよ。それはそうとリアス、兵藤君の様子を見にわざわざ来たのか?」

「いえ、用があるのはあなたよりヨーマ。正確には、あなたに用がある人物から私に連絡が来たのだけれど」

「?」

「サイラオーグ・・・彼の執事からあなたにお願いがあるんですけど」

・・・

二日後、俺はリアスと共に冥界に来ていた。しかも、今回はグレモリー領ではなく、シトリー領という所へお邪魔していた。

移動中の車内で、リアスから説明を受けた。なんでも、今回の相談者である執事さんからリアスのお母さんへ話が来て、そこからリアスへ伝わり、さらにリアスから俺へという流れだったらしい。

「このシトリー領は自然保護区が多くて、美しい景観の場所がたくさんあるの。・・・そして同時に、医療機関が充実している領土の一つでもあるわ」

医療機関と口にしたリアスの表情が変わる。ひよっとして、今回の話に関係があるのだろうか。確認すると、案の定これから向かう先が病院だと返された。

しばらくして車が停まり、下車した俺達を一人の男性が迎えた。

「お待ちしております」

「リアス、この人が」

「ええ、今回の依頼人よ。それじゃ案内お願いね」

「はい、こちらでございます」

執事さんの後に続いて病院内へ足を踏み入れる。そのままエレベーターの前まで移動した所で、リアスからさらなる説明が入った。

「リョーマ、これから会うのはサイラオーグのお母様よ。元七十二柱にして上級悪魔の一族、獅子を司る偉大な名家、ヴァプラ家の出の方なの」

あのサイラオーグさんのお母さんか・・・。きつとももの凄い美人か・・・もしくは遅い体をお持ちなのか、どっちなんだろう。出来れば前者の方がありがたい。

エレベーターで上階に移動し、廊下を進む事数分、俺達はある病室の前に辿りついた。

「お入りくださいませ」

執事さんに促され中に入ると、そこには一人の女性がベッドの上で眠っていた。

「この方の名はミスラ・バル様。サイラオーグ様の母君でございます」

「・・・」

「リョーマ？」

「・・・すまない、何でも無い」

ただ、あの時の事を・・・母さんが死ぬ前の事を思い出したただけだから。

「それで、どうして俺達をここへ？」

暗くなる気持ちを追い出す様に執事さんに尋ねると、彼はその場で深々と頭を下げながら告げた。

「フューリー殿。どうかこの方を・・・ミスラ様を目覚めさせるため、ご助力をお願いいたしたいのです」

「どういう事ですか？」

面食らう俺だったが、そこへリアスが口を開いた。

「・・・少し、話をしましょうか」

そして彼女の口から語られたのは、ミスラさんとサイラオーグさんの歩んで来た辛い日々の話だった。それを最後まで聞いた俺の感想はただ一つだった。

「・・・反吐が出るな」

サイラオーグさんを見て、バル家の人達はみなさん立派なんだろうな、などと思っていたが、実態は彼とミスラさん以外はくだらない面子で他人を簡単に傷付けられる下衆な連中しかいなかったってわけか。

「でも、サイラオーグは決して絶望しなかった。諦めなければいつか必ず勝てる・・・おば様から教わったこの言葉を胸に、今までもずっと自分を鍛え続けて来たの」

けれど、ミスラさんは裏でサイラオーグさんに何度も謝り続けていたらしい。滅びの魔力を持たさずに産んだ事をひたすら。眠りについたサイラオーグさんに泣きながら何度も何度も。すると、ある日を

境にサイラオーグさんは今の様に何事にも真正面から立ち向かう様になったのだとか。

——俺は魔王になって証明する。滅びの魔力が無かろうとも、俺はバアル家のサイラオーグだと。母上には何一つ非は無かつたのだと。この拳で、この体で、この意志で、凝り固まった頭の連中に思い知らせてやる。必ずな。

あの言葉に込められたサイラオーグさんの決意、思い。それは俺なんかでは想像もつかないほどに大きなものだったのだ。

「その経験がサイラオーグ様に夢を持たせたのです。ご自分が魔王となって、この冥界を変えるのだと。実力さえあれば、出身など関係無く夢を叶えられる冥界を作るという夢を」

「・・・素晴らしい夢ですね」

本当に、ただ純粋に、心からそう思える夢だった。これはもう、リアスや支取さんの時と同じく全力で応援サポーターになるしかない。

だけど、その夢の為に力をつけていた頃に、ミスラさんが原因不明の病に倒れてしまった。それからずっと、ミスラさんは眠り続けているのだとか。

「サイラオーグはバアル家に帰還し、父と後妻の間に生まれた弟を實力でくだして次期当主の座を得たの。だけど、バアル家の周辺にはサイラオーグを疎む者も多い。そんな者達からおば様を守る為に、サイラオーグはおば様をシトリー領に移した。おば様がこの病院にいるのはそれが理由よ」

そして、そのミスラさんを目覚めさせるために俺が呼ばれた・・・けど、何で俺なんだ？

「聞けば、フューリー殿は強力な癒しの力をお持ちだとか。それを受けた者は絶命一步手前の状態であろうともたちどころに元に戻ってしまうとか何とか。そのお力で、ミスラ様をお助け頂けないかと思いましたが次第でございます」

いつの間にか精神コマンドの事が広まってる!? けど『友情』とか『愛』ってダメージの回復に使えるけど、病気にも効くのか? 試した事ないからわからん。けど、ここまで来てしまったし、何より俺自身、

何とかしてあげたいって思うし、やるだけやってみよう。

「わかりました。やってみます」

「おお！ 感謝いたします！ では早速・・・」

と、そこで病室の扉が開かれ、俺達がそちらへ目を向けると、そこにはサイラオーグさんの姿があった。

「む、リアス、それに神崎殿？ なぜ二人がここに？」

「サ、サイラオーグ様！ 実は・・・」

執事さんから説明を受け、サイラオーグさんは俺達に頭を下げた。

「わざわざ母の為に感謝する」

「いえ、まだ役に立てるかわかりませんし、頭を上げてください」

サイラオーグさんを加えた三人の視線を背に、俺はミスラさんの横に立った。早速精神コマンドをかけようと思ったが、そこでふと思いついた。

「サイラオーグさん、俺の横に」

「？ わかった」

横に立つサイラオーグさんが疑問符を浮かべる。

「神崎殿、俺も何かするの？」

「俺の手にサイラオーグさんの手を重ねてください」

『愛』を使うなら俺だけじゃなく、サイラオーグさんにも協力してもらった方が効果が強まりそうな気がする。あくまでも気分的な問題だが、『精神』コマンドなのだから、こういう事でも意味があるかもしれない。

「これで大丈夫だろうか？」

ミスラさんに向けてかざす俺の手にサイラオーグさんが手を重ねる。その状態で俺は『友情』、『愛』、さらには『復活』や『奇跡』など、とにかく効果がありそうなものを片っ端から発動させた。様々な色の光が俺の手からミスラさんの体へ移っていく。

「ど、どうなの？」

光が治まる。だけど、ミスラさんは目を閉じたままだった。五分待っても十分待っても、その目が開く事は無かった。

「・・・すみません。俺ではお力になれませんでした」

結果は失敗に終わった。けど、サイラオーグさんはそんな俺を責め
もせず、明るい表情で労わってくれた。

「母の為に尽力してくれた……。それだけで俺は嬉しいぞ神崎殿。さ
あ、ひとまずここを出よう」

俺達は病室を出た。だがこの時、俺達の誰一人気付く事は無かつ
た。

「……グ」

病室を出る直前、ミスラさんの指、そしてその口が僅かに動いてい
た事に。

べていた。あれ、ひよつとして認識されてない？

「いけない、幻聴が聞こえて幻覚が見えるくらい疲れが溜まつてるのかしら。しかも、よりにもよって神崎様の幻覚を見るなんてね」

苦笑しながら、アガレスさんは俺の顔に手を伸ばして来た。スベスベで柔らかな手が俺の頬を撫でる。

「それにしても、随分とリアルな幻覚ね。まるで本物だ・・・わ・・・」
アガレスさんの表情が凍りつく。そして、絞り出すような声で俺の名を呼んだ。

「か、神崎・・・様・・・？」

「・・・お久しぶりです」

あ？ もっと他に言うべき事があるだろうって？ なら聞くが、この世の終わりを迎えたかのような表情を見せている女性に追い打ちかける様な真似が許されると思ってるのか？ (精神年齢が) 年上としてここはスルー一択だろうか。

「・・・逝って来ます」

それから、PCの画面に頭から逝こうとするアガレスさんを俺とアリヴィアンさんの二人がかりで抑え込み、彼女が落ち着きを取り戻した所で改めて話をする事になった。・・・アガレスさんの名誉の為に、詳しく思い出すのは止めておこう。

「それで神崎様。この様な無様な醜態をさらした私なんかになんのご用でしょうか」

「今回はアリヴィアンさんに呼ばれてお邪魔しました」

「アリヴィアンが？ どういう事ですか？」

そういえば、俺もただアガレスさんの事で助けて欲しい事があるのしか聞かされてない。

アガレスさんがアリヴィアンさんへ話を振ると、彼は俺を呼んだ理由を話し始めた。きっかけは、アガレスさんが『鋼の救世主』を購入した事。それから連日連夜、食事や睡眠もロクに取らずにずっとこの部屋に籠りつ放しで、流石に心配になったアリヴィアンさんが部屋に入ると、アガレスさんは本を片手にひたすらPCでロボットのデザイン設計の作業を行っていたらしい。いいかげん休めと言っても聞い

てくれないので、俺を呼んだのだとか。

もしかしくなくともアガレスさん、『鋼の救世主』に登場した機体を自分の手で再現しようとしたのだろうか。けど、それなら端末を使って俺に聞いてくれればいくらでも教えてあげられたのに。

そう言うと、アガレスさんは気恥ずかしそうに俯きながら答えた。

「神崎様を驚かせたかったです。かつてのお仲間達の機体を再現すれば喜んで頂けると思っています……」

でも、中途半端な物を作ってはかえってガツカリさせてしまうかもしれない。描いては消し、描いては消しの繰り返しですつと悩んでいた。そこへ俺が現れたものだから、頭の使い過ぎで幻覚が見えたのだと思ってしまうとアガレスさんは続けた。

「なら、アガレスさんは俺の為に……」

「神崎様は私の趣味を認めてくれた。だから、この趣味で、少しでもお返しがしたくて」

よし、OK。アガレスさんは超良い人。あと、照れる姿がめっちゃ可愛い。異論を唱えたければ俺を倒してからにしろ。

「ありがとうございます、アガレスさん。けど、アリヴィアンさんや他の人達も心配しますし、無理はしないでください」

「わ、わかりました。これからはのめり込み過ぎない様自重します」

無茶した事を反省したアガレスさん。とりあえず休んで欲しいとのアリヴィアンさんの言葉に従い、自分の部屋へ戻って行った。俺も役目を終えたので、アリヴィアンさんに見送られ、アガレス家を後にした。

その夜、端末でアガレスさんにPC画面に映っていた機体のデータールについてと、今後、悩んだらいつでも聞いて来て構わないとメッセージを送っておいた。俺も詳しくは憶えていないが、アガレスさんならきつと完璧な機体に仕上げてくれるだろう。

「……完成したら一体譲ってもらえないだろうか」

流星にそれは図々しいかな。いっその事、本当にプラモとして販売してくれたらなあ……。

そんな妄想をしつつ、俺は就寝するのだった。

S I D E O U T

祐斗 S I D E

この日、僕達はグレモリー領にある高級ホテルへやって来ていた。これから行われるのは、グレモリー、及びバアル両眷属の合同記者会見だ。メインはもちろん部長とサイラオーグ・バアルだが、僕達にもいくつか質問が来る予定になっているそうだ。

控室に通され、それぞれ時間が来るまで適当に時間を潰す事にした。小猫ちゃんなんかは用意されていたケーキをひたすら食べている。ギヤスパ―君は相変わらず女子の制服を着ているけど、隠れる為の段ボール箱を持って来ていない。これから大勢の目に晒される事になるのだけれど、彼も成長しているのだろう。

「イツセー君は緊張してないのかい？」

「・・・あ、ああ、してるよ」

一人離れた場所へ座っていたイツセー君の隣に座って話しかけると、彼はワントテンポ遅れて返事をした。・・・そろそろ聞くべきだな。

「ねえ、イツセー君。何を悩んでいるんだい？」

「な、何だよ急に。俺は別に悩みなんか」

「ずっとそんな様子で、誤魔化せると思っているのかい？」

「うっ・・・」

言葉に詰まるイツセー君。それだけでもう悩んでますと言っている様なものだ。素直すぎるのが彼の良い所で悪い所だな。

「水臭いじゃないか。僕達は同じグレモリー眷属で親友だろ。話してみてよ。僕で力になれる事なら何でも協力するよ？」

エクスカリバーの事件の時、イツセー君は僕の為に尽力してくれた。だから、彼が助けを求めているのなら全力でそれに応えたい。

「は、はは、そんな大げさなもんじゃないんだ。うん、ホントに」

曖昧に笑むイツセー君。・・・彼が何かを誤魔化す時に多用する表情だった。

「イツセー君、キミは・・・」

その時、部屋の扉がノックされ、スタッフの方が入室して来た。

「皆さま、そろそろお時間となりますので、移動のほどよろしくお願
いたします」

「よし、行こうぜ木場」

「・・・うん」

イツセー君に続き、僕は部屋を後にした。会場までの通路を進んで
いると、途中で匙君と出会った。

「やあ、匙君。どうしたんだいこんな所で」

「よお木場。なに、お前達と一緒に。シトリー眷属は今度アガレスと
ゲームをする。その記者会見をする為に来たんだよ」

「そういえばそうだったわね。確か、会場はアガレス領の湖上に浮か
ぶ島だったかしら」

「その通りッス。そっちも同じくアガレス領の空中都市でしたよね。
観客もめっちゃ呼びこむって聞いてますよ」

「そうか。お互い頑張ろうね」

「おう。って、さつきからずっと黙ってるけど、どうしたんだ兵藤？」
「なあ、匙。ちよつと聞いていいか？」

「な、なんだよ改まって」

「お前の夢って学校を建てる事なんだよな。その夢っていつから持つ
ようになっただけ？」

直前の会話からいきなりの突飛な質問に面食らう匙君だったが、少
し考える様な素振りを見せた後、答えた。

「ん・・・最初はさ、惚れた人の夢だから俺もって感じだったよ。け
ど、会長が学校にかける想いとか、冥界の現状とか色々知ってさ、俺
も本気で学校を建てたいって思う様になった。だからいつからって
聞かれたら、気付いた時にはって答えになるな」

「・・・そうか。わかった、ありがとな匙」

「? よくわかんねえけど、どういたしまして。そんじゃ、そろそろ行
くわ。またな」

その場を後にする匙君の背を見送るイツセー君。さつきの質問に
何の意味があったのか。それは彼だけにしかわからない。

「さ、私達も行きましょう」

歩きだす部長の後を追い、僕達は記者会見場となるホールへとたどり着いた。入ると同時に写真のフラッシュが至る所から発生した。かなりの人数だが、やはりグレモリーとバアルという事で相当注目されているようだ。

既にバアル側は着席していたので、僕達もそれぞれの席に着いた。・・・この肌を刺す様な闘気はバアル眷属によるものだろう。この場で既に戦いは始まっていると言っても過言ではないだろう。

「では、両眷属の皆さんが揃った所で、記者会見の方を始めさせていただきます」

進行役が記者会見のスタートを宣言する。ゲームの概要や日取りなどが説明され、続いて部長とサイラオーグ・バアルがそれぞれに意気込みを語った。

それから、それぞれの選手への質問の時間へと移り、まず質問されたのはゼノヴィアだった。

「すっかり天嬢さんとして認識されていますが、今回のゲームはどのように立ち回るおつもりでしょうか」

ああ、またそれか。いいかげんゼノヴィアが不憫だからそれについては触れないであげて欲しんだけど。

「・・・私はただ全力を尽くすだけだ」

「それでは今回も・・・」

「ああ、最高のショーをお見せしよう」

・・・後ろの席に着くゼノヴィアの方から「ビキビキ」という音が聞こえて来た様な気がした。というか、質問した記者の方の顔が妙に強張ってるんだけど・・・。

続いて他の女性陣、僕、ギヤスパー君の順で質問があり、最後にイツセー君の番となった。

「『それいけ！　せきりゅーてー』のモデルとして冥界の子ども達の中で人気上昇中の兵藤一誠さん。是非とも、この会見を見ているであろう子ども達へ夢のあるコメントをお願い致します」

結構な無茶ぶりをするなあの人。アニメもまだ直接見て無いし、イツセー君もなんて答えるつもりなんだろう。

「・・・夢を持ってない俺が言っても説得力ねえよ」

「はい？」

「あ、えつと・・・と、とにかく頑張ります！」

直前の呟きを誤魔化す様に声を張り上げるイツセー君。その声の大きさは裏腹に、顔は沈んでいた。

(それがあなたの不調の理由だったのね、イツセー)

そんなイツセー君を見つめる部長。席が隣だから、イツセー君が何を呟いたのか聞こえたのかもしれない。

「では、これ以上質問が無いようでしたら、本日の記者会見を終了させていただきます」

こうして、記者会見は幕を閉じたのだった。終了後、会見場の裏手にグレモリー眷属とバアル眷属が集まった。

「どうだ、リアス。ゲームに向けての準備は順調か？」

「当然よ。あなた相手に不足部分なんて一欠片でも残しておきたくないもの」

「そうか。決戦の日が待ち遠しいぞ。特に兵藤一誠。お前との戦いが一番楽しみだ」

「お、俺ですか？」

名指しされ、戸惑いを隠しきれない様子のイツセー君に、サイラオーグ・バアルは不敵な笑みを向ける。

「お前は俺好みの戦い方をする。そんなお前と全力の勝負がしたい。俺には肉体(これ)しかない。負ければ全てを失う。だからこそ、夢の為、野望の為、俺は俺の全てをかけてお前達との勝負に臨ませてもらう」

・・・大きい。これがサイラオーグ・バアル。『消滅』の魔力を受け継げずとも、愚直に己を極限まで鍛え続けた男の言葉の力強さ、重さは尋常ではない。

だけど、イツセー君だって負けていない。京都で僕達の先頭に立つて『禍の団』と戦っていた彼の姿はサイラオーグ・バアルに勝るとも劣っていないかったのだから。

「次に会うのは決戦の時だ。リアス、兵藤一誠、そしてグレモリー眷属

「達よ——空で会おう」

踵を返し、去っていくサイラオーグ・バアルと彼の眷属達。僕はイツセー君に声をかけようと近づいた。

「直々のぐ指名だね、イツセー君」

イツセー君は答えない。代わりに何かを呟いた。そして、その呟きは先程とは違い、僕の耳にハッキリと届いた。

「・・・勝てねえ。夢を持ってない俺が、夢の為に戦うあの人に勝てるわけねえよ・・・」

それは、今まで諦めや絶望に決して屈しなかったイツセー君の口から出たとは思えないほど、暗く、諦観に満ちた言葉だった。

第二百二十八話 モブだからって無礼るなよ

今日も今日とて文化祭の準備に追われる俺。ただ、これからリアス達は今度のレーティングゲームにむけてのミーティングを行うので、俺とアーシアはそこで帰る事になっている。

「イツセー先輩、大丈夫でしょうか」

ヴラディ君の視線の先では、兵藤君が木場君と共に作業している。けれど、相変わらずの心ここにあらず状態で、作業中のミスも多くなっていた。

「自分が情けないです。プライベートでも戦闘でも役立たずな僕をイツセー先輩はいつも励ましてくれるのに、こういう時に何の力にもなれないなんて」

「キミは役立たずなんかじゃないさ。それに、キミのその優しさはちゃんと兵藤君にも届いているはずだ」

どうも兵藤君が元気を無くしてから、他の子達もそれに引つ張られる様に元気が無い様に見える。これはあまり良い状態では無いのではないだろうか。

「そうだな、俺も一度彼と話をしてみるべきか」

「それは待ってくれないかしら」

兵藤君の元へ向かおうとした俺を止めたのはリアスだった。

「リアス？」

「ど、どうして止めるんですか部長。神崎先輩ならきつとイツセー先輩を」

「そうね。だけど、それは本来私がやらなければならない事なのよ。眷属の悩みは王の悩み。イツセーの悩みは私が解決してあげないといけないの。だからリョーマ、彼の事は私に任せてくれないかしら」
そっか、そういうものなんだな。なら、出しゃばったりせず、ここはリアスに任せておこう。

「わかった。けど、俺に出来る事があつたらすぐに言ってくれ」

「ええ、その時はお願いするわ」

その後、ミーティング開始時間となった所で、俺とアーシアは一足

先に帰宅するのだった。

S I D E O U T

イツセーSIDE

「・・・セー。おい、イツセー！」

「え・・・」

気がつくくと、目の前に松田の顔があった。あれ、何してたんだっけ俺？

「どうしたんだよ、イツセー。さつきからボケーつとマヌケ面晒しやがって。あれか？ 授業中からずつとエロい妄想でもしてたのか？」

「はあ、そんなんじやねえよ」

「なら何なんだよ。ハッキリ言わせてもらおうが、最近のお前おかしいぞ？ 俺達ですら心配になるレベルでな」

「そうだけ、イツセー。悩みがあるなら言えよ。この松田様がビシツと解決してやるからよ。あ、お礼はエロ本一冊でいいからな」

何が心配だよ。普段そんな事一言も言わねえくせに。けど、だからこそコイツ等なりに励まそうとしてくれるのがわかった。

「なあ、松田、元浜。お前等、夢ってあるか？」

「夢？ そんなんお前、モテモテになるって事に決まってるじゃねえか！」

「二次元では無く、リアルで少女と結婚したい」

「・・・お前等に聞いた俺が馬鹿だったわ」

呆れた俺が席を立とうとしたその時、松田が俺の腕を掴んだ。

「なんだよ松田」

「・・・悪い。茶化すつもりは無かったんだけどよ、お前から夢なんて言葉が出て来たからついふざけちゃった」

「座れよイツセー。・・・ガチの悩みならガチで聞く。俺達だつてそれくらいの分別はあるぞ」

二人の雰囲気には圧される様に、俺は席に着いた。

「それで、夢を持つてるかどうかって話だったよな。ぶっちゃけ、俺は胸を張って言える様な大層な夢は持ってねえな。・・・けどよ、それっ

「て悪い事か？」

「え？」

「そりゃよ、夢を持って、それに向かって努力してるヤツはすげえと思うぜ。安っぽい言い方だけど、輝いてるって表現がぴつたりだと思う。なら、夢を持ってないヤツは輝けないってか？ 俺はそうは思わない。だって、それなら夢を持ってないヤツはいくら努力したって輝けないって事になっちゃうからさ」

「イツセー、お前は夢という言葉に拘り過ぎてるんだよ。そんな大げさなモノじゃなく、ちよつとした目標とかを持ってみればいいんじゃないのか」

「目標？」

「さっきの元浜の言った事を踏まえて聞いてくれ。例えばある陸上部員が幅跳びの記録をメートル伸ばすという目標を立てた。その目標を達成する為に、連日遅くまで練習をして、ついに記録を塗り替える事に成功した。けど、その記録は同年代の平均レベルとあまり変わらない飛距離だった。別に飛び抜けた記録じゃない。でも、その部員にとってはそれでよかった。別にオリンピックピク選手になりたいわけじゃない。ただ、自分の記録を伸ばしたかっただけなんだからな。イツセー、お前はこの平均レベルを目指して努力を重ねた陸上部員は夢の無いヤツだから輝けないと思うか？」

「そんな事思わない。思えるわけが無い。きつと、記録を伸ばす為、毎日頑張っていたその陸上部員は誰の目から見ても輝いて見えたはずだ。結果じゃない。その結果に向けて努力する姿に。」

「そういえば松田、中学の時は陸上部だって言ってたっけ。ひよつとして、今の例え話はコイツ自身の・・・？」

「結局、夢や目標ってのはソイツ自身の物であって、他人の存在なんて一切関係無いんだよ。お前の夢はお前だけの夢だし、俺の夢は俺だけの夢だ。他人から何を言われたり思われたりしたって知ったこっちゃないと思うぞ」

「だよな。そもそも、夢なんて見つけろと言われて見つけられるもんじゃねえよ。色々経験してさ、気付いた時には持つてる様なもんじや

ないのか。俺は、無理矢理捻り出した夢より、そうやって出来た夢の方が絶対良いと思うぞ」

そう・・・なのかな。うん、そうなのかもしれないな。俺、周りを見て少しばかり焦ってたのかもしれない。でも、コイツ等の言う通りだ。他の人達がどんな夢を持って様とも、俺の夢には一切関係ないんだ。俺の夢は俺だけが持てるものなんだから。

「・・・ありがとな、二人とも。ちよつと気が楽になった」

「そう思うならエロ本の一冊でも寄越せ。つたく、慣れない事語った所為で恥ずかしくてしようがねえ。なんか周りの女子がこつち見てヒソヒソ話してるしよ」

「ほつとけ。どうせ変態が集まって何やってんだろとか言ってるんだろ
うよ」

いや、あれは嫌悪とかそういうのじゃなくて、驚いてる様な感じなんだけど、何なんだろうな？ お、桐生もこつち見てる。・・・と思ったら思いっきり視線を逸らされた。解せぬ。

四時限目開始のチャイムが鳴り、俺は教科書を出した。今までと比べて、少しだけ授業に集中できるようになった気がした。

・・・

放課後、俺はオカルト部の部室へ向かった。

「来たわね、イツセー」

俺を迎えてくれたのは部長だけだった。あれ、他のみんなは？

「今日は私とイツセーの二人だけよ」

二人つきり!? ま、まさか・・・!

「ここにきてまさかの愛の告白!?!」
「よかった。それくらい冗談が言えるくらいには元気になったみたいね」

お、おおう。わかっていたけど、笑顔で冗談だとぶった切られるのってキツイな。けど、元気になったって言うって事は・・・やっぱり部長にも心配かけてしまったみたいだな。

「すみません、部長。俺・・・」

「いいわ。ゆっくり話しましょう。まずは座ってちょうだい」

「はい」

俺は部長と向かい合う様にソファに座った。しばらく無言で過ごした所で、部長が口火を切る。

「イツセー。最近のあなたは溜息が多く、何か悩んでいる様子だった。他のみんなも心配していたわ。・・・理由、話してくれるわよね？」

「・・・はい」

ここまで来たら逃げられない。何より、王や仲間にまで心配をかけるしまうなんて眷属失格だ。だからこそ、ここで全てをぶちまけてしまった方がいいんだろう。

覚悟を決め、俺は深呼吸を済ませた所で、改めて口を開いた。

「この前、サイラオーグさんが神崎先輩を訪ねて来たじゃないですか」「ええ」

「その時、あの人の話を色々聞いて思ったんです。俺には、サイラオーグさんみたいに立派な夢は無い。サイラオーグさんだけじゃない。部長達だつてそれぞれに夢を持って頑張ってる。それに気付いた時、自分という存在が酷く小さいものだと感じてしまったんです。夢を持たない俺の拳がサイラオーグさんに届くのか。そもそも、俺にサイラオーグさんと戦う資格があるのか。考え出したらどんどん気分が沈んでしまつたんです」

「・・・ちよつと聞いていいかしら？ イツセー、あなたは夢が無ければ戦えないと言いたいの？ そうだとしたらおかしいわね。なら、どうしてあなたはこれまで戦つてこられたの？ 夢を持たないまま、ライザーやコカビエル、ロキに曹操といった相手とどうして戦う事が出来たの？」

「それは・・・俺の大切な人達を傷付けようとしたのが許せなかったから・・・」

・・・そうだ、俺はずつとその気持ちを抱いて戦つて来たんだ。自分だけの為に戦っていたのなら、きつと早い段階で死んでいた。仲間が、大切な人達がいたからこそ、その人達を守りたくて、自分の限界

を越えた力が出せたんだ。

「みんなを傷付けるヤツが許せなかった。そんなヤツ等からみんなを守りたかった。だから、俺は今まで戦って来れたんです」

みんなを守りたい。だから強くなりたかった。だから戦えた。だから悪魔にも墮天使にも神にも英雄にも勝てたんだ。

「そう、あなたはいつだってその想いを胸に戦ってくれていた。私、思うの。あなたの夢は、その真っ直ぐな想いから生まれるんじゃないかって」

「夢は・・・想いから生まれる」

「みんなを守る為、あなたはどうなりたいのか。・・・それに気付いた時、きつとあなたの胸の中には、絶対に揺らぐ事の無い素敵な夢が生まれているはずよ」

「部長・・・」

「そして、あなたならきつとすぐにそれに気付く事が出来るはずよ。私の知っている兵藤一誠はそんな子ですもの」

「・・・はい！」

部長。俺、部長の眷属になれて本当に幸せです。見ててください。

俺、絶対に夢を見つけてみせます！

「私もね、以前に似た様な悩みを持った事があるの」

「え、部長もですか？」

「ええ、その時はリョーマに励ましてもらったの。私があなたに言った事も、彼の受け売りが入ってたわ。リョーマもあなたの事心配してたわよ」

「そう・・・ですか。俺、本当にたくさんの人に心配かけてたんですね」
「そうね。だから、次に会う時には元気な姿を見せてあげなさい。それが一番のお礼になるはずよ」

「了解ッスー！」

俺は部室を飛び出した。何だかよくわからんが、思いつき走りた気分だった。すれ違う生徒達がギョツとしているが、そんなの今の俺には関係ないぜヒヤツハアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

(どうやら、いつもの兵藤に戻ったみたいね。だからどうだってわけ

でもないけど、あの馬鹿が調子悪いと何だかこつちまで調子が狂つちやうし、まあ、よかつたんじやない)

お、桐生。今から帰りか！ お前も一応女の子なんだから帰り道には気をつけるよおおおおおおおおお！！！！

久々のハイテンションを保ったまま、俺は校舎を飛び出し、そのまま家に全力疾走で帰るのだった。

イツセーSIDE

IN SIDE

数日後、俺の知ってる兵藤君が帰って来た。やっぱり彼には明るい表情の方が似合ってるわ。見ているこつちも明るくなる。学園祭の準備も目に見えてスピードが上がった。

でもって、俺は絶賛買い出し中。目的の物も買ったし、そろそろ戻るかな。

「ん・・・」

そうして学園へ戻ろうとした俺の服を後ろから誰かが引つ張つて来た。おやおや、どこのどちらさんですか。早いとこ戻らないとみんな困つちやうんですけど。

そんな感じで振り返った俺は、思わず両手の買い物袋を落としそうになつてしまった。何故なら、俺の背後に立っていたのは・・・。

「はあい、リョーマ」

『ナマコ』とデカデカと書かれたTシャツに、ジーンズ姿のヴァーリさん。そして・・・。

「我、約束を果たしに来た」

ゴスロリを纏った黒髪幼女・・・即ち、オーフィスちゃんだった。

幕間その六 滅びへのカウントダウン

アザゼルSIDE

俺のストマックがブレイクするまで・・・残り三十分。

「ふんふんふん」

鼻歌交じりに職務をこなす俺に、真耶ちゃんが声をかけて来た。

「何だか」機嫌ですね、アザゼル先生」

「お、真耶ちゃんわかっちゃう？ 聞いてくれよ。昨日ようやく医者から酒を飲む許可が下りてな。帰ったら知り合いからふんだく・・・もらった酒で一杯やろうと思ってるんだよ」

今から夜が待ち切れねえぜ。仕事のスピードだってほら、いつもの三倍増しだぜ。普段からそれくらいしろって？ わかってねえな。たまに見せる本気な姿に女は弱いモンなんだぜ？

「お医者様って・・・体調を崩されてたんですか？」

聞いてくれるか真耶ちゃん。なら、教えてやるよ。今まで病氣らしい病気にかかる事の無かった俺を襲ったものの正体をな。

「胃だよ。流石に市販の薬（と自作分）だけじゃヤバいと思ってな、検査してもらったら穴が空く寸前まで来てたらしい。知ってるか真耶ちゃん。胃の表面の胃粘膜は胃粘液に覆われてるんだ。それが胃酸から胃を守ってんだけどな、過労や精神的なストレス・・・そう、精神的なストレスの所為で胃酸と粘液のバランスが崩れちゃう時がある。その結果、増えすぎた胃酸が胃を傷付けちゃう事で胃潰瘍になっちゃうんだぜ」

最近得た知識を即席の解説図つきで真耶ちゃんに披露する。うむ、我ながら良い形の胃が書けたな。

「（なんで二回言ったのかしら）へ、へえ、お詳しいんですねアザゼル先生」

「・・・調べたんだよ。そりやもう胃に関するありとあらゆる事をな。今の俺なら専門医相手でも存分に語れると思うぜ」

いや、むしろ論破してやるね。胃炎についてだろうが、逆流性食道炎についてだろうが、なんでもかかって来な。

「そ、そこまでですか……。でも、それだけ生徒達の為に頑張ってたって事ですよね。尊敬します。私もそれくらい頑張らないと!」

(むしろその生徒の所為でこうなっちゃったんだが、真耶ちゃん感動してるみたいだし、ここは黙って評価を上げておこう)

それと真耶ちゃん。頑張るのはいいが、体調崩すまで頑張る事はねえよ。特に胃の調子はストレスで簡単に変わっちゃまうから気をつけないと駄目だぜ。

俺の胃があぼんするまで……。残り十分。

「アザゼル先生」

「何か用かロスヴァイセ?」

「何か用かって、オカルト部の手伝いに行かなくていいんですか?」

「いいんだよ。俺は生徒の自主性に任せる主義なんぞな。そういうお前こそ行かなくていいのか? 差し入れの一つでも持つていけばフューリーの心象も良くなるんじゃないかねえの」

「な、何を馬鹿な事を。いいですか、そもそも差し入れというのは頑張っている人にちよつとした息抜きを与え、さらに頑張れる様にする為に渡す物であつて、そういつた不純な気持ちで渡すものでは……。」「メンドクセエ考え方してんなあお前。だから行き遅れるんだよ」

「か、関係ないでしょうがそれはあ! もう知りません! 代わりに私が手伝いに行つてきます!」

俺のこれまでの頑張りが全て台無しになるまで……。残り五分。

「うーっし、そろそろ帰る準備でもして……。」「

「せ、先生! アザゼル先生ええええええ!!!」

「はあ……。んだよイツセー。つーか、職員室に入る時はちゃんと失礼しますって……。」「

「それどころじゃないんですってば! いいから来てください!」

俺の相棒が逝つちまうまで……。残り四分。

「おいおい、どこに連れていく気だ。愛しい愛しいお酒ちゃんが俺を待ってんだから帰らせてえんだけど」

オデノカラダガボドボドになるまで……。残り三分。

「先輩が……。先輩が連れて来たんですよ!」

俺の意識がバランスブレイクするまで・・・残り二分。

「連れて来たって、何をだよ」

俺のブレイザー・シャイニングがダークネス・ブレードするまで・・・残り一分。

「オ、オフィ、オフィ・・・」

いつしか、俺はイツセーに引つ張られ旧校舎前までやって来た。次の瞬間、ヤツの・・・ヤツ等の姿が俺の目に飛び込んで来た。

「アザゼル、久しい」

「お邪魔してるわよ、アザゼル」

「オフィスです!!!」

「・・・ファツアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

『禍の団』のオフィスとヴァーリがあらわれた！アザゼルはストマックがブレイクした！アザゼルはそのばにくずれおちた！

「せ、先生!? アザゼル先生!?!」

「イ、イツセー・・・、どうやら俺（の胃）はここまでの様だ。すまねえ、俺はもうお前等の力になれそうにねえみてえだ」

「な、何言ってるんですか先生!」

「お前等がサイラオグに勝利するのを、遠い所（病院）から祈って

る・・・せ・・・」

「せ、先生えええええええええええええええええ!!」

そして、俺の意識は深い深い闇の底へと沈むのだった。

・・・

・・・

・・・

・・・

「・・・はっ!」

次に俺が目を覚ましたのは保健室のベッドだった。胃は・・・痛くねえ。は、はは、何だ。さっきまでの夢だったのか。そうだよな、オフィスがこの学園に姿を見せるわけが・・・。

「アザゼル、目を覚ました」

「・・・まだ夢の中みてえだな」

そうと決まればさつきと現実に戻らねえとな。とりあえず、夢の中

で寝たら起きれたりしねえのかな。よし、今から一眠りしてやるかあ！

「アザゼル、また寝るのか？」

「……」

「……つんつん」

「……」

「……ぐにぐに」

「……」

「……ぶによーん」

「ツツツツ ダアアアアアアアアアア！ うつとおし

いいいいいいいいいい！！！！」

ガバツと飛び起きると同時に、保健室の扉が開かれ、イツセイや他の連中が姿を現した。

「ど、どうしたんですかアザゼル先生！」

「誰でもいい！ この夢の世界の住人を俺の目の届かない所まで連れて行け！ 俺は今から現実の世界に戻るんだ！」

「ここが現実ですよアザゼル先生！ でもってこのオフィスも現実です！」

「あー！ あー！ 聞こえない！ 僕には何にも見えないし聞こえないもーん！」

「黙れ」

「！！！！ツ！！！！」

低い声で紡がれるオフィスの言葉に、場の空気が一瞬で凍りついた。ちいっ！ 理由はわからんがお冠の様だ！

「……そして聞け。我はオフィス。『無限の龍神』オフィス。我は『無限の龍神』なり」

「……はっ！」

な、何言ってるんだコイツ？ しかも、無表情に見えるが微妙にドヤ顔っぽいぞ。説明しろやヴァーリ！ あとそのTシャツどこで買った！

「ああ、みんな気にしないでいいわよ。今のはルフェイに見せられた

フューリーの特撮ドラマでオフィスが気に入っているフレーズを口にしたただけだから」

「な、何でこのタイミング・・・？」

「しかも、『無限の龍神』が被ってるよ・・・」

空気が一瞬で張り詰めたものから微妙な物へと変化した。おい、どうやって收拾するんだよコレ・・・。

「え、ええっと、とりあえずアザゼル先生も目を覚ました事だし、改めてここに来た理由を話してもらいましょうか。みんな、部室へ移動するわよ」

「わ、わかりました」

リアスの提案でそれぞれが保健室を出て行く。俺はこのまま寝る・・・わけにはいかねえよな。ええい、ちくしょう！ 行けばいいんだろが行けば！

俺は乱暴に布団をどかし、オカルト部の面々の後を追いかけるのだった。

第二百二十九話 ようこそ我が家へ

「探したわよ。家にお邪魔したのに迎えてくれたのはあなたの眷属と神喰狼達だけだったんだもの。聞けばまだ学園から帰って無いて言うから街の散策も兼ねてあなたを探していたのよ。けどまさか、こんな所で買い物袋片手に歩いてるとは思わなかったけど」

まさかの登場を果たした二人に対し、驚き過ぎて言葉を失っていた俺の持つ買い物袋をヴァーリさんが指す。そこで何とか言葉を発し、学園祭の準備で使うものだと答えると、ヴァーリさんは少し興味のあがる様な素振りを見せた。

「ふうん、学園祭ねえ。私、学校なんて行った事ないからわからないんだけど、面白いの？」

学校に行った事無い!? ええい、この子のご両親は何考えてたんだ! 同世代との触れ合いがあれば、彼女が露出趣味に目覚める事だつて無かったかもしれないのに!

「興味があるのなら今から一緒に学園に行ってみないか」

「でも、学園祭ってまだ先なんですよ? 今から行っても意味無いと思うのだけれど」

「確かに、今はまだ準備期間中だが、雰囲気は十分感じられると思うぞ」

自分達で考えた出し物に向け、仲間達と遅い時間まで協力して作業を進める。そういった準備も含めて学園祭だと俺は思っている。実際、みんなと一緒に何かをするって思った以上に楽しいものだからな。

「ふうん、あなたがそう言うなら行ってみるのも面白そうね。アザゼルもいるんでしょう? どっちみち彼に話しておかないといけないしね。オーフィスもそれでいいわよね?」

「フューリーが行くなら我も行く。フューリーとの約束を果たす為には、フューリーの傍から離れるのはよくない」

言葉通り、俺の傍に来て俺の顔を見上げて来るオーフィスちゃん。約束。約束か……。俺も忘れて無いよオーフィスちゃん。あのペロ

リスト共との戦いの後に交わした、今度遊びに来るってヤツだよね。そういう事なら大歓迎さ！

「そうと決まれば早速行きましょう。ほらオーフィス、手を寄越しなさい。いつかみたいにはぐれられても困るし」

「ん・・・」

オーフィスちゃんの手を握り、ヴァーリさんが歩き始める。その姿は、何だか仲のいい姉妹みたいで和んでしまいそうになる。・・・が、ヴァーリさんの背中にタテヒダイボウミウシとウチナミシラヒメウミウシが交差している姿が描かれた物がプリントされているのを見た瞬間、そんな気分は一瞬で失せた。ホントに何なのそのTシャツ？前がナマコで後ろがウミウシって・・・。そこは後ろもナマコの絵じゃないの？ハイセンス過ぎて何を訴えたいのか俺にはさっぱり理解出来ないよ。

「それにしても、神喰狼を室内犬と同じ扱いするなんて、あなたってやっぱり面白いわね、亮真。まあ、流石に無限を前にしちやったから少し怯えてたけれど」

「そういや、このオーフィスちゃんこそがこの世界で最強云々って事になってるんだっけ。俺にはどう見ても物静かな女の子にしか見えんのだが、他のみんなからしたらやっぱり凄かったり恐ろしく見えたりするのだろうか。しかも、アルIIヴァンセンサーの反応も皆無って事は、この子は俺に対して敵意とかそういう感情を一切持ってないって事になるんだよな。それもあって、やっぱり俺にはこの子がそういう存在だとはとても思えない。」

「外に出すのは抵抗があつてな。ところでヴァーリさん、そのTシャツは・・・」

「あげないわよ?」

むしろ頼まれたってもらいませんけど！ てかめつちや気に入ってるっばいし。いやけど、ここは逆に考えれば、露出の激しい服よりマシだからいいのか。うん、そうだ。そういう事にしておこう。

俺はそれ以上考える事を止め、二人の後に続いた。数十分後、学園に戻って来た俺は、そのまま二人をオカルト部のみんながいる旧校舎

まで案内した。ちょうど兵藤君と木場君が休憩中なのかペットボトルのお茶に口をつけていた。まずはあの二人に紹介しよう。お、向こうも気付いたのか顔をこっちに……。

「ぶっ!」

向けた瞬間、なんかとんでもない勢いでお茶吹き出したんですけど！ど、どうしたんだ二人とも!! その芸はお笑いの道を歩む者にか許されないぞ。

「ちよ、せ、先ば……え、え!? ヴァ、ヴァーリちゃんとオフィ……ナマコ?」

「ウ、『無限の龍神』オフィス!? 何故ここに……ナマコ?」

正にビックリ仰天といった表情を見せたと思ったら、二人してヴァーリさんのTシャツに書かれた文字を口に出す兵藤君と木場君。そっちかい! とツツコミを入れる資格は俺にはありませんですはい。

「元氣そうね、一誠。それに聖魔剣使い君。言いたい事はわかるけど、私もオフィスも別にケンカを売りに来たわけじゃないわ」

「我はフューリーに会いに来た。お前達は関係無い」

「その言葉を信じろと?」

「亮真と一緒に何よりの証拠だと思っただけ?」

「……イツセー君、部長達を呼んで来てくれ」

「わ、わかった!」

全速力で校舎内へ飛び込む兵藤君。時間にして僅か一分で、彼はリアス達を引き連れて戻って来た。

「ヴァーリ! どういうつもり……ナマコ?」

「テロリストのトップが何を……ナマコ?」

「……ナマコ?」

「みんな、どうし……ナマコ?」

「ミカエル様に知らせ……ナマコ?」

「あなた達! 私の後ろに……ナマコ?」

「ナマコ怖いナマコ怖いナマコ怖いナマコ怖いナマコ怖いナマコ怖いナマコ怖い……」

「その通りよアザゼル。これまでも何度か来ようとしてたんだけど、他の派閥の連中の目が鬱陶しくてね。そうしている間に亮真の本が出たでしょ？ オーフイスだったら、ルフエイと一緒にそれを読んで益々亮真に会いたくなっちゃったみたいなの。だから今回は強引に他の連中を振り切つて連れて来たのよ」

「我は確信した。フューリーと我が一緒なら、必ずグレートレッドに勝てる」

「ちよつと待て！ って事は何だ。オーフィスをここに連れて来たのはお前の独断だつてのわ！」

「私だけじゃないわ。私のチーム全員の意味よ。何か問題があるかしら？」

「ありまくりだ馬鹿！ わかつてんのか！ テロリストのトップが、敵対している相手の所へ訪ねて来たなんて事が知れ渡つてみる！

他の連中が変な勘違いして暴走したらどうするつもりだ！ お前達自身、裏切り者として肅清されるかもしれないんだぞ！」

「あら、心配してくれるの？ けど、今さらって感じよ。私のチーム、京都で英雄派の邪魔をしたからって既に『禍の団』の中で煙たがられてるもの。先に取り決めに破つたのは向こうだっていうのに酷いと思わない？ 最近じゃオーフィスだって軽んじられてるあり様よ？ ハッキリ言つてしまえば、既に組織に私達の居場所は無いわ。そろそろ潮時かもね」

ツ！ 離脱フラグ来た！ これで勝つるぞ！

「それだけじゃねえ！ そもそも、オーフィスを動かすなんて大事を何で事前に連絡しなかつた！」

「私達は誰の指図も受けない」（キリツ

「・・・おい、リアス。この馬鹿娘・・・殺つちまつていいか？」

「き、気持ちわかるけど、とりあえず落ち着きましょう、ね？」

ヴァーリも、倒れて起きたばかりなんだからあまり刺激しないでちやうだい」

荒れてるなあ、アザゼル先生。完全にヴァーリさんに遊ばれてる感じだ。てか、ヴァーリさんもむしろそのつもりっぽく見える。この二

人なりのコミュニケーション方法なのかもしれないが、リアスの言う通り、アザゼル先生の目がちよつとヤバくなつて来たからそろそろ止めておいた方がいいと思うぞヴァーリさん。

「すう．．．はあ．．．。悪い、ちよつと自分を見失いかけてたわ。ここからは建設的な話をしようじゃないか。ヴァーリ、お前等いつまでこつちにいるつもりだ？」

「とりあえず、オフィスが満足するまではいるつもりよ。明日か明後日か、それとも一週間か、全てはお姫様の気分次第ね」

「よし、ならここにいる全員に命じる。オフィス、及びヴァーリの存在を絶対に周囲に漏らすな。何が何でも隠し通せ」

「な、何ですか？　むしろ、サーゼクス様とかに相談した方が」

「テロリスト指定されてえならそうしろ」

「え．．．!?!」

「イツセー君、さっきアザゼル先生が彼女に言った事は僕達にも当てはまるんだ。テロリストと通じていたと判断されて罪に問われてしまふかもしれない」

「だ、だったらなおさら相談を」

「サーゼクス様は理解してくださいさるかもしれない。けど、他の悪魔達も同じとは限らない。僕達の存在をよく思わない者からすれば、格好の攻撃材料になるからね。もちろん、実際にそんな相手がいるかどうかはわからないけど。褒められる方法ではないかもしれないけど、おそらく、これが最善なんだと僕は思う」

「な、なるほど、よくわかつたぜ。けど、滞在中どうやって二人を隠すんだ？」

「それならもう決まってる。フューリー、お前の所でコイツ等の面倒を見る」

アザゼル先生の指名に、現在俺の家で生活している子達が揃って目を見開いた。

「ちよ、ちよつと待つてくださいアザゼル先生。どうして神崎先輩の家なんですか」

「伝説の騎士、魔王の妹、神喰狼．．．。イツセー、仮にお前がフュー

リー達と一切接点の無い普通の悪魔だったとして、そんな連中が住む魔窟に自分から近づく気が湧くか？」

「化け物屋敷だってわかっているのに、入るわけありません！ 引っ越します！」

え、ちよ、言い過ぎじゃない？ 地味に傷付くんですけど。

「それだけのトンデモ要塞化してんだよコイツの家は。この世で一番物騒だが、同時にこの世で一番安全な場所がコイツの家なんだ。それに、もともとオーフィスはフューリーに会いに来たんだ。なら、フューリーが世話をするのが筋つてもんだろ（同じ場所にぶちこんどきや、俺の心労だって少しは和らぐはずだしな）」

うーん、確かにその通りだよな。オーフィスちゃんは俺との約束の為に来てくれたんだし、面倒だって俺が見るべきなのかもなあ。

「どうするリョーマ・・・って、その顔を見れば答えは決まってるみたいね。決定権は家主のあなたにあるのだから、私はそれに従うわ。・・・ただし、警戒はさせてもらおうよ」

まだ何も言っていないのに・・・。顔を見ればって、そんなにわかりやすい顔してたのかな俺。けど、他の子達もリアスと同じ気持ちのようだし、これでみんなの意見が纏まったな。

「わかりました。二人には俺の家で過ごしてもらおう事にします」

「よし決定な。もう撤回は認めねえぞ」

「ふふ、よろしくね、亮真。ロキとの戦いの後の別れ際に交わしたあの言葉が現実になるなんてね」

いやに上機嫌なヴァーリさん。それを見たオーフィスちゃんがそつと何かを呟いたが、あまりに小さかったので、聞きとる事は出来なかった。

「ヴァーリ、嬉しそう。『禍の団』にいた時、そんな顔した事無かった」

・・・

二人を連れて帰ると、黒歌が耳と尻尾をピーンと立てるといふ素晴らしいアクションを見せてくれた。フェンリル達はフェンリル達

で、何故か俺を取り囲むような位置についてジツとしている。まあ、いきなり見慣れぬ人達が現れたから緊張でもしているのだろう。きつとその内なれるさ。

夜七時、ヴァーリさんとオーフィスちゃんを加え、みんなで夕食を取る。今日の当番は俺だったのだが、俺の料理はヴァーリさんには好評でオーフィスちゃんも言葉少なめだが全部食べてくれたので、不味くは無かったはずだ。

そんでもって、順番に入浴を済ませる。今はヴァーリさんとオーフィスちゃんの時間だ。こんな所まで二人一緒とか、やっぱり姉妹みたいだな。

「フューリー」

そんな感想を漏らしつつ、麦茶を飲もうと冷蔵庫を開けていると、背後からオーフィスちゃんの声が出た。どうやらあがった様だな。俺は何の気無しに振り返り・・・己が目を疑った。

「なっ・・・!?!」

そこには全裸のオーフィスちゃんがいた。ちよ、何やってんのキミ!?!

「次はフューリーの番。我、フューリーに教えに来た」

あ、なるほど。風呂が空いたから続いてどうぞって、服を着る間も惜しんでわざわざ教えに来てくれたんだな。・・・いや、そこは服着てからでいいよ!

「ちよつとオーフィス。まだ髪を拭いてないんだから・・・」

続けて、百パーセント肌色状態のヴァーリさんが現れた。なんでキミまで素っ裸なのよ!?! てか、髪の毛の心配より今の状況の心配してくれよ! オーフィスちゃんはまだいい・・・わけじゃないけど、キミの場合、色々ヤバいんだから!

「もう、手間のかかる龍神様だわ。常識というものを知らないんだから」

キミが言うなキミが!

オーフィスちゃんの手を引いてその場から姿を消したヴァーリさん。後で聞いた所、ヴァーリさんからは俺のいた場所が死角になって

いて気付かなかつたらしい。

とりあえず、あの二人にはこの家のルールの前に、学んでおいてもらわないといけないものがあるようだ。

俺は固く、ひたすら固くそう決意するのだった。

第三百三十話 赤と白

イツセーSIDE

世の中つてのは何が起きるかホントわからないな。ヴァーリちゃんがオーフィスを連れて来てから既に三日が経過した。今の所、騒ぎは起きていない。けど、部長や朱乃さんといった神崎先輩の家で暮らしているみなさんの顔が心なしか憔悴している感じがした。無理も無い・・・というか当然だよな。組織内で立場が揺れているらしいとはいえ、敵のトップと一つ屋根の下で暮らしてんだから。

けど、そんな存在相手だろうと、神崎先輩とアジアには全く関係がないらしいけどな。家じゃあの二人だけオーフィスと普通に会話したりしてるって部長から聞いた。先輩は先輩だから・・・で納得できるけど、アジアは・・・やっぱり遅くなったよなあ・・・。俺にや『無限の龍神』に夕飯何が食べたいなんて聞けねえよ。

ともかく、オーフィスが先輩と交わした約束とやらが果たされるまでは、誰にも気付かれない様に、俺も細心の注意を払っておかないといけない。俺って顔に出やすいらしいから特に気をつけておかないとな。

さて、そんな俺は今、特訓用フィールドの中心でヴァーリちゃんと向かい合っていた。彼女にはこれから俺の特訓の相手になつてもらう。きっかけはアザゼル先生の言葉だった。

———お前の無茶を受け入れてやったんだ。少しくらい恩を返しやがれ。イツセーの特訓相手にでもなつてやれ。

この言葉を、以外にもヴァーリちゃんが二つ返事で受け入れた事で、この特訓が実現した。特訓とはいえ、この子と勝負するのって何気に初めてなんだよな。

「いい場所ね。広さも十分だし、亮真の家からも近い。アザゼルも準備が早いじゃない」

「このフィールド自体は結構前から存在してたんだよ。神崎先輩がデオドラとのゲームの為の特訓場所として使ってたんだ。最近じゃ俺達もよく利用してるけど」

「あら、そうだったの。・・・そうだわ、どうせなら亮真も呼んで三人でやりましょうよ。駒王協定の時のリターンマッチよ」

「却下ー!」

ウキウキ顔を見せるヴァーリちゃんの案をすぐさま切って捨てる。にしても、相も変わらず先輩と戦う事を諦めて無いのなヴァーリちゃん。

「ヴァーリちゃんはさ、やっぱり強くなる事が夢なの?」

「急にどうしたの一誠?」

「あ、いやさ、最近夢について色々悩む事があつてな。色んな人の夢を聞いてみたりしたんだ。だから、ヴァーリちゃんの夢も気になっちゃって。もしよかったら教えてくれないかな」

興味本位で質問する。すると、ヴァーリちゃんは意外な答えを口にした。

「夢・・・ねえ。確かにあなたが言った様に、私は強くなりたいとは思っているけれど、それは決して夢なんかじゃないわ」

「え? ... どういう意味?」

「だって、そんな事を夢にした所で、先が無いじゃない。強くなるのが夢って事は、強くなった時点でその夢は終わりでしょ。そもそも、どうして強くなりたいのか。重要なのはそこじゃないかしら。ただ強くなりたいなんて思ったって、そんな漠然としたものに意味なんて無いと思わない? 勘違いしている人が多いけど、〃なりたい〃事と〃したい〃事は似ているようで全く違うものよ。前者だけを夢にしたって、それは決して夢なんかじゃない」

・・・確かに、ヴァーリちゃんの言う事は最もだ。何故強くなりたなのか。強くなつて何をしたいのか。それを考えず、ただ強くなりたいと願ったって意味が無い。目的も無く、ただ手段だけを持っていた所で何にもならない。

「強くなりたいという事に関して言えば、順番が逆なのよ。強くなる為に何かをするんじゃないか、何かをする為に強くなるの」

「なら、ヴァーリちゃんは何をする為に強くなりたんだ?」

「私の願いはただ一つ。・・・この手である男の息の根を止める事。そ

れだけよ」

そう答えたヴァーリちゃんの声は、底無しの闇を孕んでいた。顔からは微笑が消え、憎悪だけが満ち満ちている。その声に、その表情に、俺はただ恐ろしさだけを感じていた。

「・・・少ししゃべり過ぎたわね。どう、少しは参考になったかしら？」
けど、次の瞬間にはいつものヴァーリちゃんに戻った。事情を訪ねたい気持ちもあるが、きつとはぐらかされるだけだろう。なら、俺も見なかった事にしよう。彼女もきつとそれを望んでるはずだ。

「あ、ああ。そういう考えもあるんだなって参考になったよ」

何になりたいかだけじゃなく、何になって何をしたいのか。俺はみんなを守りたい。その為に、俺は何になればいいのか・・・。少しずつだけど、俺の目指す夢が形を成して来た気がする。

「なら、今度は私から質問していいかしら。あれから『覇龍』について何か進展はあったの？」

おっと、何となく聞かれると思ってた質問が来たな。『練成』出来るようになった事を説明すると、ヴァーリちゃんは感心した様子で頷いた。

「へえ、凄いじゃない。そこまで辿りついたって事は、『覇龍』へ至るのも時間の問題ね」

そういや、いきなりだった上に状況が状況だったから聞きそびれてたけど、『練成』が可能になった今、『覇龍』へ至るまで後何人の先輩に認められたらいいんだろう。

——あと一人だ相棒。あと一人認めさせれば、お前は『覇龍』へ至る。

脳内に響くドライブの声に仰天する。マジかドライブ!? マジであと一人なのか!?

『ドライブの言う通りよイッサー。あなたはもう『覇龍』の入口に立っている。・・・それにしても、あなたには驚かされたわ。神器内において歴代所有者との対話が可能になってから、あなたは様々な覚悟を胸に強敵との戦いに臨んで来た結果、歴代の所有者達は次々にあなたを認めていった。前回の戦いで『練成』の段階まで昇りつめたけれ

ど、ここに来るまでの期間は、間違いなくあなたが歴代最速よ』

続いてエルシャさんの声が聞こえて来た。歴代最速って……俺が!?

——ああ、誇つていいぞ相棒。お前は俺やエルシャの予想をあっという間に越えてしまった。お前の見せて来た可能性、そして覚悟は歴代の者達に比べ勝るとも劣らない。

『あなたはこれまでの所有者達とは違う。そんなあなたが至る『覇龍』が今から本当に楽しみだわ。もしかしたら……歴代最強の称号を譲る時が来るのかもしれないわね』

そ、それは流石に畏れ多いツスエルシャさん。だって、俺がこれまで戦って来られたのは、仲間達がいたからで……。

『だからこそよ。最初から最後まで己だけの力を求めて戦い続けた私達と違って、あなたは自分の弱さを認め、仲間に頼り戦って来た。十一のはずだった力を、三にも四にも変えてね』

——仲間がいるから強くなれる。相棒が俺達に証明した事だぞ。や、止めるよ。そうハッキリ言われると恥ずかしいわ!

『ふふ、照れなくてもいいじゃない。他の所有者達もあなたの事を応援しているのよ。認めるって事は、そういう事なの。私達はみんな、あなたの成長が嬉しいの。だから、イツセー。これからも、あなたはあなたらしくいなさい。そんなあなたを、私達はずっと見守り続けるわ』

——そういう事だ相棒。エルシャに愛相を尽かされぬよう頑張るんだな。

お、お前なあ……。他人事みたいに言うけどお前だって責任重大なんだぞ!

——ふ、わかってるさ。俺もお前の相棒として、これからも力を尽くす。よろしく頼むぞ相棒。

へいへい、精々こき使ってやるから覚悟しとけよ。

——望む所だ。

そうやってドライグ達と脳内会話していると、ふとヴァーリちゃんが微笑んでいるのに気づいた。

「どうしたんだ、ヴァーリちゃん？」

「歴代所有者達との仲は良好な様ね。羨ましい限りだわ」

「わかるの!？」

「ええ、何となくね。はあ・・・私も白龍皇じゃなく、赤龍帝として生まれかかったわ」

——ど、どういう意味だヴァーリ!? 私よりもドライグの方がいいというのか!？」

動揺してんなアルビオン。なんか声がめっちゃ不安そうなんですけど。

「あなたはいいのよアルビオン。あなたはね・・・」

ああ、そういやあっちの歴代所有者達って色々残念なヤツが多いんだっけ。力が欲しけりゃコスプレしろって要求するんだもんなあ・・・。

「ま、ロキ戦の後にたっぷりとOHANASHIさせてもらったから多少はマシになったけれどね」

——消滅寸前までボコボコにする事をお話とは言わんぞ・・・。

うわあ・・・あの時の俺の予感って当たってたのか。本当に殺るつもりだったんだなこの子。

「そういえば、ヴァーリちゃんの『覇龍』は何を求めての結果だったんだ?？」

「それはヒ・ミ・ツ。そうね、あなたが『覇龍』に至ったら、その時は教えてあげるわ」

「あ、そうですか」

「さてと、随分長く話しこんじやったけど・・・そろそろ本来の用事に戻りましょうか」

ヴァーリちゃんが俺から距離を取る。そうだったそうだった。話だけならどこでも出来る。俺達は鍛練しに来たんだ。俺達はそれぞれに鎧を纏って対峙した。

「考えてみると、今代の赤と白が戦うのってこれが初めてじゃないかしら。ふふ、何だか興奮して来たわ」

そう言いながら俺をジツと見つめて来るヴァーリちゃん。今回は

あの刺激的な格好じゃない。確か、段階があるって言ってたっけ。「ヴァーリちゃん。『白龍皇の光翼』の禁手って段階があるらしいけど、そもそも禁手に段階ってあるの?」

「いえ、本来の『白龍皇の光翼』の禁手はこの状態の鎧であって、もう一つの状態は元々存在していなかったわ」

「存在してなかった?　じゃあ、ひよつとしてヴァーリちゃんが創り出したの?」

「あなたも知ってるでしょ?　神器は所有者の思いに応じて進化する。私が全力を出せるように、鎧は進化したの。あなただって、駒王協定の時に、アルビオンの力を取り込んで鎧を進化させたじゃない」全然使えて無いですけどね。けど、そういう事なら、俺が強くなるさえすれば、俺の鎧もヴァーリちゃんの鎧みたいに……。

(オロロロロロ……!)

うげげ!　また誰か脳内で吐きやがったな!　誰かつーか、あの先輩なんだろうけど。人のイメージ覗き見た挙句に吐くって勝手にすぎにもほどがあるだろ!

「?　一誠、顔が青いけどどうしたの?」

「な、何でも無いよ。ところでさ、アルビオンにちよつと聞きたいんだけど」

——何だ?

「取り込んだお前の力が使いたいんだけど、その為にはお前に認めてもらわないと駄目だってドライグから聞いたんだ。なあ、どうしたら認めてくれるんだ?」

——ふん、知らんな。そういうのは自分で考えるべきではないのか。

うう、言葉に棘があるな。やっぱり、自分の力を勝手に使われるのって嫌なんだろうな。

「素直じゃないわね、アルビオン。今代の赤龍帝は強くなりそうだって言ってたじゃない」

——なっ、ち、違うぞ!　私は中々に骨のあるヤツだとしか……はっ!

「という事らしいわよ、一誠。とつくにアルビオンはあなたの事を認めてるみたいね」

——情けないな、アルビオン。その様な単純な手に引っ掛かるとは。

——嫌いぞドライグ！ ええい、ヴァーリ！ ヤツ等に思い知らせてやれ！ 実力は我等の方が上なのだとな！

——それはこちらのセリフだ！ 相棒！ 負けるなよ！

ドライグもアルビオンも燃えてるな。口調に熱が籠りまくってるわ。

『それはそうよ。赤龍帝と白龍皇は互いを高め合う戦友で、同時にライバルなんだから』

「アルビオン達もこう言ってるし、そろそろ始めましょうか。あ、言っておくけど、鍛練とはいえ、中途半端な気持ちでいたら・・・死ぬわよ?」

「え・・・?」

聞き返そうとした瞬間、俺は腹部に激痛を感じながら思いっきり吹っ飛ばされていた。その状態で何とか受け身を取ってヴァーリちゃんの姿を探すと、彼女は片足の状態で、もう一方の足を突き出していた。俺、ひよつとして蹴られたのか？ ヴァーリちゃんの姿がまるで見えなかったぞ！

「げほっ、げほっ！ は、速え・・・。それに、パワーも予想以上だ・・・！」

「あら、この程度で褒めてもらっても困るわ。ほら、次行くわよ」

ヴァーリちゃんの姿がかき消える！ 正面?・・・いや！

「左かあ！」

両腕を交差させると同時に、ヴァーリちゃんのキックが腕に直撃する！ くう、痛え。けど、捕まえたぞ。ここから反撃・・・。

「させないわよ?」

『Divide!』

機械音声が聞こえたと思ったら、俺の体から一気に力が抜けた。や、やばっ、支えきれな・・・！

「ぐああああああああ!!」

あつさりと防御を砕かれ、俺は再び吹っ飛ばされた。そこへヴァーリちゃんのさらなる追撃が入る。

「ほらほら、のんびりしてるヒマは無いわよ」

ヴァーリちゃんの突き出した右手から十発以上もの魔力弾が一気に迫って来る。容赦ねえなヴァーリちゃん！ ええい！ こうなりやヤケじゃ！

俺はブースターを全開にし、態勢を整えてから全速力でヴァーリちゃんに突っ込んだ。魔力弾？ 知るか！ 一発や二発くらった所で死にやしねえよ！

「成せばなるー！ 兵藤一誠は男の子おおおおおお!!」

「ツ・・・!!」

構えた右手を「練成」し、曹操にかましてやったあのブースター付きの籠手に変え、俺はヴァーリちゃんに突っ込む！

「おりやああああああ!!」

全力全開の俺の一撃は、衝撃で地面を陥没させ、フィールドそのものを大きく揺るがした。けれど、届かせたかった相手に、その拳が届く事は無かった。

「・・・流石に今のは危なかったわね」

俺の拳を受け止めきったヴァーリちゃん。いつの間にか鎧が本気モードのそれにならわっていた。

「『練成』でこの威力…。ふふ、『覇龍』として発現したのなら、いったいどれほどのものになるのかしらね」

感嘆しつつも余裕を崩さないヴァーリちゃん。・・・これが白龍皇。今までは敵対した事無かったからわからなかったけど、いざ戦うとここまでの実力差があるのか・・・！

「面白くなつて来たわ。さあ、反撃させてもらうわよ一誠」

「え、ええつと、手加減を・・・」

「してもらええると思ってる?」

「ですよねえええええええ!!」

その後、俺は完膚なきまでにボコボコにされ、ヴァーリちゃんに背

負われて神崎先輩の家まで運ばれ、そこでアーシアの治療を受けた。
（ちよつとやり過ぎたかしら。でも、初めて顔を会わせてから今まで、
一誠は驚異的なスピードで成長している。ふふ、これから楽しみが増
えそうだわ）

俺、こんな調子でサイラオーグさんと戦えるのかなあ・・・。

第三百三十一話 龍神様と遊ぼう！

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ー！

日曜日の朝、本来なら鳴るはずのない目覚まし時計によって俺は叩き起こされた。おつかしいなあ、休みの日はセットしない様にしているのに、間違つて設定してたのかな。ま、なにはともあれ起きないとな。ええつと目覚まし目覚ましつと……。

「これか？」

ああ、ありがとうオーフィスちゃ……え？

目覚ましを止めて体を起こした俺がまず目にしたのは、俺のベッドの横で目覚まし時計を持って立っていたオーフィスちゃんだった。あ、あれえ？ まだ寝ぼけてんのかな、俺。

「我、アーシアに頼まれて起こしに来た」

用件だけ言つて、スタスタと部屋を去るオーフィスちゃん。あ、目覚まし時計持ち去られてしまった。取り返しに行かねば。

着替えからの洗面の流れでリビングへ向かうと、既にアーシア、黒歌、ヴァーリさん、そしてオーフィスちゃんが席に着いていた。オーフィスちゃんは自分の横に俺の目覚ましを置いている。

「おはようござ主人様。今日も朝からいい男にやん」

『無限の龍神』に起こされた気分はどうかしら」

「もつきゅもつきゅ……」

「はわっ!? ま、まだ食べちゃ駄目ですよオーフィスちゃん！」

「二「がうっー」」

俺の足にまわりついて来る三匹の頭を撫で、フライングしたオーフィスちゃんとそれを止めようとするアーシアの後ろを周って自分の席に着く。今朝はこれで全員なのかな？

「リアス達は？」

「もう出たわよ。サイラオーグ・バルとのゲームに向けて今日は一日中特訓するって言つてたにや」

朝早くから徹底してるなリアス達。そんだけサイラオーグさんとの勝負にかける想いが強いって事なのかな。……いや、他人事じや

ないな。サイラオーグさんが勝ったら、あの人が俺の弟子になるんだもんな。・・・改めて思うけど、どう考えても逆じゃね？　むしろサイラオーグさんの方が師匠感ありまくりだと思っただけ。

「という事で、今日は久しぶりにのんびり出来そうにやん。ねえ、ご主人様、今日は私と一緒にまったり日向ぼっこでもしない？」

「あら、そんな生産性の無い事をするくらいなら、私と一勝負しましよーうよ」

「あ、あの！　クラスの方から駅前に美味しいケーキ屋さんがあるって聞いたんです。よ、よかったら私と一緒に・・・」

一人寂しく休日を通すと踏んで、俺に声をかけてくれるみんなの優しさに全俺が泣いた！　・・・若干一名、物騒なお誘いをかけて来てる子がいるが。けど、ゴメン。今日の相手は決まってるんだ。

「やつと約束を果たせそうだな」

「もきゅ？」

口いっばいにサラダを含み、ハムスターみたいになってるオーフィスちゃんがコテンと首を傾げる。・・・これは久しぶりに脳内カメラを起動させるしかないな！

「フューリー、我と遊ぶ？」

「ああ。今日は一緒に色々な事をして遊ぼう」

結局、訪ねて来て今日まで遊びらしい遊びに誘えなかったからな。今日は思いっきりはっちゃけるぜえ！

オーフィスちゃんと遊ぼう大作戦その一・・・公園に行こう！

というわけで、オーフィスちゃんを外に連れ出す事をアザゼル先生に連絡したのだが・・・。

『却下に決まってるだろうがボケエ！』

「フアツ!?　いきなり企画終了!?」

『お前、俺の話聞いてなかったのか。隠しとけつつあったヤツを外に出す馬鹿がいるか！』

「で、ですが、流石にずっと家の中というのは・・・」

『知るか！　お前お得意のフューリーパワーで何とかしやがれ！　いいか、絶対に外に出すんじゃねえぞ！　これ以上俺の胃を虐めるつも

りならこつちにだつて考えがあるんだからな!!』

ええええええ……。適当過ぎにもほどがあるでしょ……。てか、フューリーパワーって何よ？ さらに言えば、俺、先生を虐めた記憶なんて皆無なんですけど……。

けど、あそこまで言われたら仕方ないか。言いつけ破ったら後で滅茶苦茶怒られそうだし。外に繰り出すのは無しか……。

オーフィスちゃんと遊ぼう大作戦その二……漫画を読もう！

一発目からグダグダになってしまった。ここは気を取り直して室内でやれる事をしよう。悩む俺にアーシアと一緒に本を読んだらと提案してくれた。困った時に助けてくれるなんて流石天使！

と言つても、小さい子向けの絵本なんて無いし、ここは漫画かな？ 黒歌が自室から漫画の他に『鋼の救世主』を持って来ようとしたので止めた。アレは俺のいない所で読んでください。

ヴァーリさん曰く、そもそも、オーフィスちゃんは漫画なんて読んだ事無いらしく、本自体ヴァーリさんのチームメンバーに読み聞かせてもらったのが初めてなんだとか。ちようどいい。ここは新たな文化に触れてもらうチャンスだ。

様々なジャンルの漫画を持ちあい、オーフィスちゃんに見せるが……。うーん、これはあまり興味が無いのかな。ページを捲つては戻し、捲つては戻しを繰り返してる。

「ん……」

そんなオーフィスちゃんだったが、アーシアが持つて来た漫画を手にしたら様子が変わった。ついに興味が湧いて来たのかな？

「アーシア、我、知りたい」

「何ですか？」

オーフィスちゃんが開いたページを俺達に見せる。そこには、男女の熱烈なキスシーンが描かれていた。え、ちよ、アーシアこんなの読んどの!? 何か舌まで絡ませてんですけどお！

「どうしてこの人間達は口をくつつつけている？ 何か意味があるのか？」

「うわあ……。これはまた何とも濃厚にや……」

「あら、聖女様もこんなの読むのね。意外だわ」

「ち、ちちちち違うんです！ こ、これは凄く面白いからって桐生さんからお借りした漫画で、こ、こんなシーンがあるなんて私も知らなかったんです！」

「なんだか、見てはいけないものを見てしまった気分だ……。いや待て俺。それは偏見だ。アーシアだって年頃の女の子なんだから、こういうのに興味を持ってても別に全然おかしくないじゃないか。はは、そうさ、別に変じゃない。ただ……。衝撃的だったのは否めないが。」

「アーシア……。色を知る年にや」

「どういう立場からの発言ですかね黒歌さん。知ってるんだぞ。キミが勉強会と称してアーシアや小猫に変な知識を吹き込んでんの。二人とも影響されやすい所があるんだから止めて欲しいんですけどね。」

「アーシア、我は答えが知りたい」

「え、ええつと……。こ、これはキスと言ってますね」

「キス？ これをするとどうなる？」

「ど、どうなるって……。き、きつと、幸せな気持ちになるんじゃないかと……」

「どうしてキスをすると幸せになる？」

「キ、キスは好きな人とするものだからで……。ふええ、黒歌さん……。」

「な、なんとという公開処刑！ オーフイスちゃんピュア過ぎだろ。今までペロリスト達の中でどういう生活してたんだこの子……」

「助けを求めて視線を向けて来るアーシアに対し、黒歌はそつと視線を逸らした。きつと、俺が彼女の立場だったら同じ様にしただろう。」

「キスをしたら幸せになる。なら、アーシアはキスをして幸せになりたいのか？」

「わ、私がキス!? そ、そんな……。はう」

「トマトも顔負けなほど真っ赤になったアーシアがぐるぐるすると目を回したと思ったら、その場ではたりと倒れてしまった。容赦ねえ」

なオーフィスちゃん！

「さすが『無限の龍神』。こういう所でも最強ね」

感心してないで氷持つて来てよヴァーリさん。アジアのおでこが恐ろしいくらい熱くなってるんだから！

ちくせう……。漫画を読もうつてだけの話だったのに、どうしてこうなった……。

オーフィスちゃんと遊ぼう大作戦その三……みんなでゲームをしよう！

「ふっふっふ、やっぱりここは私が出るしかないにや」

そう言つて、本当に家を出て行った黒歌。十分ぐらいして戻つて来た彼女は、大きな鞆を持っていた。その間にアジアも復活していた。

「黒歌、それは？」

「レイナーレ達の所からハードごとゲームを借りて来たにや。これみんなで遊びましょう」

そういや、俺の眷属になつてから、よく遊びに行つてたっけ。なんか眷属同士親睦を深めるためとかなんとか。なら俺もつて言つたら駄目だつて言われて地味に傷付いた記憶がある。

「レイナーレ様達つてゲームされるんですね」

「ゲーム趣味があるのはミツテルトなんだけどね。携帯ゲーム機も色々持つてるし、据え置きハードも三つくらい持つてるにや」

相当なゲーマーだなミツテルトさん。

「最初渋られたけど、ご主人様の名前を出したら喜んで貸してくれたにや。そのまま家まで突撃して来そうだったけど、流石にそこは止めたにや」

オーフィスちゃんとヴァーリさんの事を秘密にするためだな。でも、レイナーレさん達になら話してもいい気がするが。

てきぱきとテレビにゲーム機を接続する黒歌。コントローラーは四つ。ソフトも五本以上ある。随分たくさん借りて来たんだな。

「準備完了！ さあさあ、みんなコントローラーを持つにや」

「でも、五人だと一人余つてしまいますよ」

確かにこのままだと一人遊べない。そもそもオーフィスちゃんに楽しんでもらう為なんだから彼女はまず外せないし、どうせならヴァーリさんにも楽しんでもらいたい。

少し悩んだが、今までの様子からしてオーフィスちゃんは絶対にゲーム初心者だから、俺と二人で一つのコントローラーで遊ぶ事になった。結果、1Pが黒歌。2Pがアシア。3Pがヴァーリさんで、4Pがオーフィスちゃん+俺という事になった。

「我はフューリーと一緒に?」

「ああ、一緒に頑張ろう」

「ん・・・」

頷くオーフィスちゃんを膝に座らせる。・・・言っておくが、これはあくまでもコントローラーを持つのに都合がいいだけであって、幼女を膝に乗せたかったからというわけでは断じてない。気付けば左右にスコルとハティが寄り添い、フェンリルが足下で横たわっていた。

(羨ましい・・・)

(羨ましいです・・・)

(ここまで素直なオーフィスも珍しいわね)

黒歌とアシアが羨ましそうに見て来る。オーフィスちゃんを膝に乗せたいのなら後で頼んでみればいいんじゃないかな。たぶんOKしてくれると思うぞ。

「最初はこれで遊ぶにゃー!」

そう言つて黒歌が手にしたパッケージには『マダオパーティー』の文字と、明らかにやる気の無いオツサン達が並んでいる絵が描かれていた。

「このゲームはまるでダメなおっさん・・・つまりマダオを誰が最初に社会復帰させられるかを競うボードゲームにゃ。プレイヤーはマダオを操作して色んなイベントをこなして行って、最終的に一番最初に社会復帰したマダオのプレイヤーが優勝にゃ」

うん、どう考えても子ども向けじゃないよね。なんつーもんを題材にしてんだ・・・。

タイトル画面から切り替わり、キャラクター選択の画面になる。・・・マダオってサングラスかけないといけないルールでもあるのか？ 十人くらいいるのに全員サングラス装備してる。おかげで服の色の違いくらいしか差別化が出来て無い。ちなみに、俺とオーフィスちゃんが選んだキャラの名は長谷川だった。日本人設定なのな。

キャラクター選択を終え、いよいよゲームがスタートした。冒頭、何故か軍服姿の中年男性が現れ、それぞれが選んだマダオの顔を次々と殴って行った。

『いいかマダオ共！これが最後のチャンスだ！人間らしい生活に戻りたけりや、死ぬ気で気張りやがれ！』

「は、はい！が、頑張ります！」

相手がゲームキャラなのに返事してしまうアジア流石天使。

『マダオのお前等には、この俺が相応しい名前をくれてやる。まずはお前だ！』

軍服中年がヴァーリさんの選んだキャラを示すと同時に、画面の中央に派手なエフェクトと共に『ご機嫌ストリッパー』という文字が現れた。

「ゲームを始めたら、こんな感じで強制的にニックネームを与えられるにや。復帰ポイントを貯めてランクを上げない限り、ずっとこのニックネームで呼ばれ続けるの」

ちくしょう、何からツツコンでいったらいいんだ・・・！ だがしかし、ヴァーリさんのこのニックネームに関しては違和感が無い！

『次はお前だ！』

——『やさぐれゲルマニウム』

「え、ええっと、これはどういう意味でしょう？」

「そこは考えないでいいにや。あらかじめ登録されている単語をランダムでくっつけてるだけだから」

ヴァーリさんすげー！

『そしてお前だ！』

——『二日酔いの社会不適合者』

「・・・前回ミツテルトと遊んだ時のヤツよりはましね」

『最後はお前だ!』

き、来た! 俺達の番だ!

—— 『幼女の奴隷』

・・・これ本当にランダムなのか? どっかで誰かが見てんじやねえの?

『さあ! 準備は出来た! さっさと行けこのマダオ共!』

軍服中年が姿を消し、やつとゲームがスタートした。順番決めの結果、最初は俺達の番だった。一から十までの数字が刻まれたルーレットが回転を始める。

「どうすればいい?」

「とりあえずこのボタンを押してみよう」

オーフィスちゃんがボタンを押すとルーレットが止まり、その先が六を指した。長谷川・・・もとい幼女の奴隷がマスを六つ進む。

『妻と離婚した。慰謝料として二百万支払った』

いきなりかよ! しかも三万しか無かったから所持金がマイナスになってるし!

「にやはは、残念だねご主人様。でも、こんなのは序の口。これからもつともつと大変なイベントが起こって行くから楽しみにしててね」
楽しみどころか不安しか無いんですけど・・・。

「はわっ!? お金が無いのに連帯保証人になってしまいました!」

「事業に失敗したわ。やっぱり、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲なんて怪しげな名前の物なんて売れるわけなかったのね。私のキャラがしきりに完成度の高さを褒めてたのに、残念ね」

「にやにや!? ギャンブル依存症になっちゃったにや! 早く回復しないと!」

「株が暴落? フューリー、どうしたらいい?」

怒涛の様に襲い掛かる絶望的なイベントの数々。これはあれか。このゲームの制作者が元マダオとかそういう事なのか?

その後、色々あって最終的に見事マダオを社会復帰させ優勝したの

は、俺とオーフィスちゃんだった。二位が黒歌。三位がアーシア。そして最下位がヴァーリさんだった。

「あーあ、もうちよつとで逆転出来たのに、悔しいにや」

「途中で心が折れそうになりましたけど、何とか最後まで頑張れました」

「最下位・・・私が・・・」

「ヴァーリはマダオ？」

「ツ・・・！ ふ、ふふ、言ってくれるわねオーフィス。いいわ、次は絶対にあなたに勝ってみせる」

「なら、次は『マダオカート』でもやりましょうか」

「またマダオかよ!? え、ひよつとしてマダオシリーズ的な何かなのか!?!」

「次も我とフューリーが勝つ」

オーフィスちゃんは相変わらず無表情だ。けど、無表情でありながらも、どこことなく楽しそうに見えるのは、きっと俺の気のせいじゃない。黒歌には感謝だな。

それから、俺達は心ゆくまでゲームをして過ごすのだった。

第三百三十二話 天然の恐ろしさ

黒歌SIDE

「飽きたわ」

昼下がり、ご主人様達学生組のいない家のリビングで、ソファに座るヴァーリが煎餅片手にポツリと呟く。別に一々反応してあげる事も無いけど、とりあえず聞き返す事にした。

「飽きたって・・・何に？」

「こうやって家の中で過ごす事によ。いかげん体を動かさないと鈍っちゃうわ」

「・・・アンタ、自分の立場がわかってるの？」

本来であれば、この女はこうして煎餅食べながらまったり出来る身分じゃない。オーフィスという超危険な存在を何の連絡も無しにいきなり連れて来たのだ。ご主人様が受け入れなければ間違いなく大騒ぎになっていたはずだ。

「わかってるわよ。正直、私だってここまで好意的に受け入れてもらえるなんて思ってたもの。亮真と聖女様には本当に感謝しているわ」

リアス達には立場があるから難しい。だから自分達だけでもこの家にいる間は、テロリストの親玉でも、構成員でも無い、ただのオーフィスとヴァーリとして接してあげよう。・・・初日の夜、ご主人様とアーシアが言った言葉だ。ご主人様の眷属である私も、その言葉に従って普通に接する様になっている。

「良い子よね聖女様。亮真が天使だって大事にする理由がわかるわ。オーフィスも気に入ってるみたいだし」

「あの『無限の龍神』と一つ屋根の下だなんて、アーシアは怖く無いのかにゃ」

「まあ、人間である彼女からすれば、『無限の龍神』と言われてもピンと来ないんでしょうね。それに、もしも何かあっても、亮真が守ってくれるって信じてるのでしようし」

信じる・・・。そうね、確かにアーシアはご主人様を信じてるんで

しようね。けど……。

「その答えは五十点ね」

「え？」

「アーシアはご主人様だけじゃない。アンタとオフィスも信じてるのにや。アンタ達は決して自分を傷付けたりしないって。アンタ達は既にあの子の信頼を十分に得ているのにや」

例え初対面でも、例えテロリストでも、自分の目で見て、耳で聞いて、心で感じて、その上で信じられると思ったら、どんな相手だって信じる事が出来る。それがアーシアの強さだ。それは、私達悪魔には絶対に得る事の出来ない強さ。

「……敵わないわね」

ヴァーリにも理解出来たのだろう。アーシアのそれは決して甘さなんかじゃない。誰よりも清く、正しく、優しい心を持ったあの子だから得られた強さなのにや。

「ふふん、天使の力を甘く見ないで欲しいにや」

「何であなたがドヤ顔するのよ……」

「あの子だったらきつと恐縮するにや。だから代わりに私がやってやったにや。ふんす」

「ふんす……じゃないわよ。というか、あなたの所為で話が脱線しちゃったじゃない」

「アンタが先に振って来たんでしょ。……で、何を話してたんだっけ？」

「家の中にいるのが退屈って話よ。オフィスだって外に出たがってるわ」

「いやー、あつちは今でも十分楽しんでると思うけどにや」

もの凄く意外……というか、未だに信じられないけど、オフィスは私が持ちこんだゲームにドハマリしている。昨日の夜なんか、マダオファイターⅣのストーリーモードを最高難易度にも関わらずノーコンティニューでクリアしてた。私やミツテルトでも未だに達成出来ないのに。

『……我、マダオを極めし者なり』

うん、間違いじゃなかった。間違いじゃなかったけど、自慢気に言うセリフじゃないよね。極めたらダメじゃん。ダメ人間一直線じゃん。まるでダメなオフィス・・・つまりマダオってことかじゃ。

「そういえば、そのオフィスはどこに行つたにや?」

「亮真の部屋じゃない? あの子、「フューリーの日常に入る方法を探す」って言ってあの子なりに色々やってるみたいだし」

「にやにや!? この後ご主人様のベッドでご主人様の香りに包まれながらお昼寝するつもりだったのに! 余計な匂いをまき散らすなんて許さんにや!」

「匂いって・・・あなた、中々に残念な思考の持ち主ね」

「アンタ、ブーメランって知ってる?」

「それくらい知ってるわよ。投擲型の武器の事でしょ?」

(あ、この顔はわかってないな)

「ま、我慢してちょうだい。今まで、次元の狭間とグレートレッド以外に何の関心も持たなかったあの子が、ここに来て初めてそれ以外に興味を持ったの。理由はどうあれ、それ自体はいい事だと私は思っているわ」

「でも、結局オフィスはグレートレッドを倒すのにご主人様を利用したいだけでしょ。ハッキリ言って、私はあの人を争いに巻き込もうとするのは許せない」

「それは・・・」

声色の変わる私に、ヴァーリもその表情を変えた。

「ご主人様は優しい。口では平穏を望んでるなんて言うけど、誰かを助ける為なら、躊躇い無くその身を投じる。それが自分を平穏から遠ざけるって本人だってわかってるはずなのに。・・・ヴァーリは『鋼の救世主』を読んだ?」

「ええ、少しだけだけど」

「ならわかるでしょ? ご主人様が以前いた世界。それがどれほど凄まじい世界だったかを。人間同士の争いなんて可愛いもの。意思疎通の出来ない化物。異星人の襲来。数え上げればキリが無いにや」

そんな存在達を相手に、ご主人様は戦い続けた。まだ全てを読み終

えたわけじゃないけど、これから先、もつともつと、ご主人様を追いつめる様な相手が現れるのだろう。私は所詮文字でしかご主人様の戦いを知る事は出来ない。そんな私ですら恐ろしさや絶望感を持ってしまった相手とご主人様は戦ったんだ。私の感じたものは、ご主人様のその何十、いや何百分の一にも満たないものなんだろう。

「それでもご主人様は戦い抜いた。司令官として、仲間達の先頭に立って、名前も、顔も知らない人達の為に戦った。・・・でもご主人様は言った。自分は一度死んで、それからこの世界に来たんだって」

誰よりも誰かの為に戦ったご主人様が、なんで死なないといけなかったのか。私にはそれがどうしても納得出来なかった。ご主人様よりも、死ぬべき人間なんて山ほどいたはずなのに。そいつらじゃないくて、何でご主人様だったのか。

「でも、それは所詮別の世界の事。私には永遠に関係の無い事にや。この世界にご主人様がいる。私を救ってくれたご主人様がいる。私にはそれで十分。だから決めたの。ご主人様が誰かを助けるのなら、私のご主人様を助けるって。ご主人様が誰かを守るのなら、私のご主人様を守るって」

それが眷属として・・・ううん、あの人を愛する一人の女としての私の誓いなんだ。

「それ、亮真には伝えているの?」

「必要無いにや。ご主人様にはご主人様のやりたいようにやってもらいたい。オーフィスに力を貸したいっていうなら、私はそれに従うだけ。そこに私の感情なんて関係無いわ」

あの人にはもう少し“自分勝手”に生きてもらいたい。元の世界でそうだったからといって、こっちの世界でまで誰かの為だけに生きる必要なんて無い。これは私だけじゃない。リアス達も共通の思いにや。

「・・・なんだか意外ね。こう言っては失礼だけど、あなた、そんなに健気なタイプに見えなかったのだけけど」

「自分でもらしくないってわかってるにや。私自身、ご主人様に出会うまでは自分勝手に生きて来たんだから。・・・それが結局、白音を

悲しませる原因になったにも関わらずね」

あげく、自分の感情を優先してご主人様まで騙してしまった。これが自分勝手になく何になるのか。正体がバレてしまった時のあの恐怖を、私はずっと忘れる事はないだろうにや。

「どうして、そこまで亮真に尽くそうと思えるの?」

その問いに、私はただ目を丸くしてしまった。

「は? え、いや、ここまで来たら察せるでしょ?」

「わからないから聞いているのよ。あなたは亮真の眷属で、亮真はあなたの恩人なのはわかるわ。けど、あなたが彼に向ける目はなんだかそういうのとは違う気がする。上手く言えないけど……」

何でそこまで来てわかんないのよ!

「それは、私がご主人様の事を……だから」

「え? 何ですって?」

「だから……きだから」

「もっと大きな声で答えてちょうだい」

ブチ!

「ああああああ! もう! 私はご主人様が好きなの! カッコ良くて、優しく、強くて、いつも私を大切にしてくれるあの人が大好きなの! アンタにはわかんないでしょうけどね、あんなの惚れるなっていう方が無理にや! あの人に比べたら、今まで出会って来た雄共なんかみんな石ころ以下よ!」

それから、感情に任せて色々ぶっちゃけまくって、少し気分が落ちていた所で、黙って聞いていたヴァーリがようやく口を開いた。

「……とりあえず、あなたが亮真をどう思っているのかはわかったわ。でも、それならどうして告白しないの?」

「私だって色々アピールしてるわよ。でも、真面目で鈍感なご主人様は全っ然気付いてくれないのにや」

「そういえば、アザゼルが言ってたわね。「アイツはきつと力と引き換えに性欲を失ったんだ。俺がアイツだったらもうとつくに全員に手を出してるのによ」って」

「あのドスケベとご主人様を一緒にするにや!」

「前途多難ね」

「ふ、ふん！　そういうアンタこそご主人様にちよつかい出してるみたいじゃない」

「？　どうしてここで私の話になるの？」

「いや、だってアンタご主人様の事・・・」

そこまで言いかけて私は口を噤んだ。この様子だと、ヴァーリは自覚してない。だったら、わざわざライバルを増やす必要なんて無いにや。

「はいはい、この話はこれでお終いにや。ほら、あっちも戻って来たみたいだし」

「・・・ヴァーリ」

「え？　あら、オフィス。もういいの？　何か面白いものは見つかった？」

「収穫無し」

「そう。ならあなたもこっちに来てお話ししましょう」

ヴァーリの横にちよこんと腰を下ろすオフィス。改めて思うけど、何でこんな姿になっているんだろう。アザゼル曰く、前は老人の姿をとっていたらしいけど、『無限』の考えはわかんないにや。

「ねえオフィス。あなたも家の中でジツとしているより、外に出たいでしょ？」

「アザゼルが言った。我が外に出たらフューリーが困る。そうなれば、我はフューリーの日常に入れなくなるかもしれない」

「つまり、我慢するって事？」

「ん・・・」

なんというか・・・随分とご主人様を気にかける様になったわね。家の中でも、特に用事が無いのにご主人様の後ろをついて回ったりしてるし。事情を知らない者が見たら、兄に構ってもらいたい妹にしか見えなかったにや。流星に風呂場に突撃しそうになった時は全員で阻止したけど。

「ふうん、なら、亮真本人があなたを連れ出す事を望めばその限りじゃないってわけね」

「アンタ、まだ諦めて無いの？」

「要はバレなければいいのよ。例えば……」

『羊の気持ちになるでござえますよ！』

チラリとテレビに目をやるヴァーリ。そこには羊の着ぐるみを纏った女の子が本物の羊に囲まれて笑っている姿が映っていた。

「あんな風に変装したりとか」

「アレじゃ変装じゃなくて変身にや！」

「羊の気持ちは我にはわからない」

「わかんなくていいから！」

おかしい。本来であればツツコミを入れられる側の私が、入れる側になってしまっている！

ピンポーン！

「お客さんかしら。私が出て来るわ」

「待ちなさい！ 私が出るからアンタはここにいて！」

「あら、遠慮しなくていいのよ？」

遠慮とかいう問題じゃなくて……！

「下着姿で出させるわけじゃないでしょうが！」

ヴァーリの今の姿は上下ピンクの下着を着けただけだ。こんな格好で客の対応をさせられるわけがない。

「我が追い払って来る」

「払ったらダメにやあああああ!!!」

早く！ 早く帰って来てご主人様！ この一人と一匹は私だけじゃ捌ききれないにや！

黒歌SIDE

IN SIDE

放課後、俺はアジアに付き添ってドーナツ屋へ立ち寄った。連日特訓を行うリアス達、そしてヴァーリさんとオーフィスちゃんへの土産を買う為だ。友達とよく来るらしく、アジアは慣れた感じでドーナツを購入して戻って来た。

「あのお店は桐生さんに教えてもらったんです。それからよく一緒

に買いに行ったりしてゐるんですよ」

「そうなのか。ところで、そのドーナツの箱と一緒に渡された袋は何なんだ？」

「あ、これですか？ 実は今回でスタンプカードが一杯になったんで、引きかえに景品を頂いたんです」

そう言つてアーシアが見せてくれたのは黄色い球体がリング状に連なっている物体だった。あれ、確かこういう形のドーナツがあった様な。

「それつてもしかして」

「はい！ これはポン・デ・リングの形をしたクッションですよ！ 前からずっと欲しかったんですけど、やっと手に入れる事が出来ました」

ああ、やつぱりね。にしても、人気があるんだなこれ。モチーフにしたキャラクターもいるんだっけ。

「私、これを貰ったらやりたい事があつたんです」

「やりたい事？」

聞き返す俺の前で、アーシアは袋からクッションを取り出すと、その中心の穴へ自分の顔を通した。

「えへへ、ポン・デ・アーシアですよ。がおー」

「?!?!」

『あてと、そろそろ買い物に……ふお!! な、何でアンタまたウチの所に!? はよ戻り!』

……はっ！ 一瞬オカンの姿が見えたぞ……。

「……アーシア」

「え？ あ、ご、ごめんなさい。私、調子に乗つて……」

「ありがとう。とても可愛かつたよ」

「はわっ!」

アーシアがモノマネ好きなんて初めて知つたけど……うん、これはいいものだ。顔が真っ赤だけど、元ネタでそういうシーンあつたっけ？

何故か熱に浮かされた様子で歩くアーシアを気にしつつ、俺達は

ドーナツ屋を後にするのだった。

幕間その七 やっぱりトップは辛いよ※ただし一名は欠席

サーゼクスSIDE

「そろそろ時間だな」

魔王としての仕事を終えた僕は机の上に置いた端末を起動させた。数秒して、画面にミカエルの顔が映った。

「やあ、ミカエル。調子はどうだい？」

『可も不可も無くといった所でしようか』

「つまり、普通というわけだな。それは結構。では、早速話し合いを始めようか」

『待つてください。アザゼルはどうしたんですか？』

「今回、彼は欠席だよ。なんでも体調が優れないらしい」

『そうですか。では、今回は私達だけという事ですね』

「そういう事になる。・・・ところでミカエル。こうして私達が話し合いの機会を設けるのはこれで何回目だったかな」

『私の記憶が正しければ、今回がちょうど五十回目ですよ』

そうか。もうそんなになるのか。駒王協定以前では、ほとんど機会が無かったというのに、ここ最近で一気に回数が増えてしまった・・・まあ、原因は一つしかないのだけれど。

『・・・またフューリー殿関係の話ですか？』

「察しがいいなミカエル」

『察しも何も、最近のあなたはその話しかしないじゃないですか』

画面の向こうのミカエルが目を細めるが、僕はそれに気付かないフリをして話を続けた。

「キミも知っているだろうが、少し前に私の息子がある本を出版した」『鋼の救世主』ですね。天界でも凄まじい人気ですよ。私も読んでます』

「ありがとう。感想はまたの機会に聞かせてもらうとして、実はその本を巡ってとある問題が浮上してな」

『問題・・・ですか?』

「その話をする前に、今からURLを送るのでそこに飛んでみてくれ」
端末を操作し、ミカエルへURLを送った。アザゼル作のこの端末であれば、天界でも冥界のネットを閲覧する事が可能となる。

『届きましたが・・・』『鋼の救世主について語ろうぜ563(723)』
『騎士様に掘られ隊(62)』『堕ちた聖女を妄想してみた(103)』
『フューリー様×レヴィアタン(1)』『モードFってどう見てもオー
バーキルじゃね(381)』『フューリーの二回目のパワーアップは
きつとこうなる3(79)』・・・なんですかこれは?』

「ここは不特定多数の者達が自由に書き込みを行う場所・・・所謂掲示板というものでね。今キミが読み上げたのは、それぞれがそれを題材に話し合うタイトルみたいなものだ」

『・・・ざっと見た所、ほぼ全てがフューリー殿関係のタイトルになっているようですが』

「ああ、その通りだ。ここは神崎君についてのみ交流する場らしい。
ミカエル、そのタイトル群の一番最後を見てみてくれ」

『最後というと・・・ッ!こ、これは・・・』

目を見開くミカエル。最後に表示されているタイトルは『フュー
リー教の集い』となっていた。

『サーゼクス。これは、ここを利用してゐる方々のグループみたいな
物なのですか?』

「・・・いや、ミカエル。このフューリー教というのは実在しているん
だ」

『なんですって!?!』

目を全開にして狼狽するミカエル。それを宥め、僕は話を続けた。

「私も存在を知ったのは最近なのだが、地下組織として随分前から活
動自体はしていたらしい。組織のトップはイライザという悪魔で、旧
魔王派に所属していた。彼女だけでなく、組織の幹部もほとんどが旧
魔王派の者達と聞いている」

『まさか旧魔王派・・・ひいては『禍の団』がフューリー殿の名を利用
して構成員を集めようと画策を?』

「私も最初はそう思ったが、どうやら違うらしい。イライザ達はすでに旧魔王派から離脱しているとの情報が私の元に届いている」

『その情報の信憑性はいかほどのものなのでしょう？』

「間違いなく事実だろう。何せ、それを私に教えてくれたのは同じ元旧魔王派の者だからね。キミはカテレア・レヴィアタンを憶えているかい？」

『・・・ああ、あの残n・・・中々にユニークな性格の女性悪魔ですね。ええ、憶えていますよ。レーティングゲームでフューリー殿の眷属として戦った方ですね』

「カテレアが旧魔王派を離脱したのは駒王協定の時だが、実はそれ以前から旧魔王派内部でイライザ達は離脱の計画を立てていたそうだ」

『組織の分裂自体はだいぶ前から決まっていた様ですね。しかし、何故イライザ達は旧魔王派を離脱したのでしょうか。まさか、カテレアの様にフューリー殿を追いかけて・・・なんて理由ではないでしょう』

『・・・まさか』

「正解だよミカエル。イライザ達は皆カテレアと同じく神崎君に心酔した者達だ。そしてその結果・・・」

『自分達の信仰の対象にしてしまった・・・。それがフューリー教というわけですね』

「ここで最初の話に戻るのだが、どうやら『鋼の救世主』がこの教団の経典にされているらしい。まさか、このような形で使われる様になるとは予想もしていなかったよ。まあ、カテレア曰く、フューリー教“と謳ってはいるが、今の所は一ファンクラブだと思っただけらしいけどね」

「とはいえ、それを鵜呑みにして放置しておくつもりは無い。その存在が冥界の秩序を乱すというのなら、その時は僕も容赦はしない。何せ、悪魔だけでなく、堕天使、さらには天使までもが何名か入信しているとも聞いている。墮天しないのは、純粋な信仰の対象だからだろうか。それも時間の問題かもしれないが。」

「いつか、三大勢力に新たな勢力が加わるかもしれないな」

『お願いですからそういう事を口にしないでください』

「はは、冗談だよ冗d・・・すまない、ミカエル。謝るからそんな目で見ないでくれ」

『・・・いずれにせよ、今後も動向を気にしておく必要がありますね』
「その点については既に手を打ってある。何かあったらキミにもすぐに連絡するよ」

『お願いします。それでは、今回の話は以上ですか?』

「いや、もう一つある。実は、以前神崎君から預かった『悪魔の駒』の調査結果が上がって来たんだ。その報告もしておこうと思う」

『フューリー殿に新たな力を与えた、異世界の神の力が込められた駒ですね。何かわかったのですか?』

「結論から言わせてもらおうと・・・何もわからなかった。私が調査を依頼したのはアジュカだ。『悪魔の駒』の生みの親である彼をして、神崎君の駒の解析は出来なかったんだ」

『そんな事が・・・』

「神崎君はレーティングゲームで共に戦った堕天使の少女達三人を正式な眷属にした。にも関わらず、三人は堕天使のまま、悪魔に転生しなかった。それはつまり、神崎君の駒には悪魔への転生機能が無いという事になる。これは『悪魔の駒』の存在価値そのものを揺るがすものだ。彼の駒は既に『悪魔の駒』とは違う物へと変化しているのは間違いない。間違いないはずなんだ・・・」

「だけど、それ以上はわからない。この分だと、おそらくアザゼルの方もいい結果は得られていないだろう。後でこちらの結果を送っておこう。」

「なに、これまで散々驚かされて来たんだ。今さら一つ二つ増えた所で構わないさ。なあ、ミカエル」

『目が笑ってませんよサーゼクス。ところで、先程から気になっていたのですが』

「なんだい?」

『画面の右に映っている小ピンは何ですか? 中に錠剤が入っている様に見えるのですが・・・』

「ああ、これかい？　これはね・・・」

僕はミカエルにしつかり見える様に小ビンを持って答えた。
「胃薬だよ」

第三百三十三話　それお願いちやう脅迫や

「なんというか・・・すっかり家の一員って感じね」

　眩くりアスの目線の先には、アーシアと一緒にソファに座ってテレビを見ているオーフィスちゃんの姿がある。

「慣れって怖いわ。私、いつの間にかオーフィスと普通に会話出来るようになってるもの」

「・・・私もです」

　朱乃と小猫が続けて口を開く。確かに、最初の頃こそおっかなびつくりだった彼女達も、いつの間にか普通にオーフィスちゃんに接する様になってたな。

「まあその結果、あの二人の非常識さを知る事になったわけだけだ・・・」

「・・・リアス達はまだマシにや。日中ずっと付き合わされる私の身にもなってみなさいよ」

　疲れた声でそう発言したのは黒歌だ。近頃愚痴に付き合わされる回数が増えているが、彼女は彼女で色々大変らしい。

「けれど、本当に拍子抜けするくらい大人しいし、この調子ならオーフィスが満足するまで特に問題は無さそうね」

「それがそうもいかなくなったみたい」

「どういう意味かしら、ヴァーリ？」

「その話の前に・・・入ってちようだい」

「よお！　邪魔するぜい！」

「お邪魔いたします」

　ヴァーリさんに促されてリビングへ現れたのは、なんと美猴さんとアーサーさんだった。それぞれに人懐っこい笑顔と、さわやかな笑顔を見せながら俺達の顔を見渡して来た。

「美猴にアーサー!?　な、なんであなた達が・・・!?」

「実は、オーフィスを連れ出した事が他の派閥の者達にバレてしまいまして」

「いやあ、俺つちの力なら余裕で誤魔化せると思ってたんだが、ちよっ

ち連中の事舐め過ぎてたわ」

「なので、一度オーフィスに戻って来て頂きたいと思つてここへお邪魔させて頂きました」

「ルフエイは？」

「心配すんな。ちゃんと一緒に連れて来てあるぜい」

「・・・というわけよ。お姫様はまだ満足してないみたいだけれど、そろそろ帰らないといけないみたい」

俺達はそろって顔を見合わせた。もちろん、帰る事は決定事項だったが、それにしたつて急だ。ようやくオーフィスちゃんとも仲良く慣れて来ていたと思つていたのに・・・。

「我が戻らなければフューリー達が困るのか？」

「そうね。ここに匿つていると知られば、きつとすぐに追手を差し向けてくるでしょうね（まあ、伝説の騎士や神喰狼のいる家を襲う気概が他の派閥にあるとは思えないけれど）」

「・・・そう。なら、我は戻る」

「オーフィスちゃん・・・」

アーシアが表情を沈ませながらオーフィスちゃんを抱きしめた。このまま何もせずにお別れ・・・つてのは俺も嫌だな。何か、何か最後に思い出になる様な事が出来れば・・・。

「ちよつといいかしら。オーフィスを連れて帰るの、三日くらい遅らせる事は可能かしら？」

「ええ、それくらいでしたら構いませんが」

「なら、みんなでこれに行つてみない？」

リアスが一枚のチラシを机の上に置く。俺達はそれを取り囲むように覗きこんだ。第三十八回 駒王町花火大会のお知らせと大きな文字で書かれていた。

「リアス、これは・・・」

「本当なら先月にあつたはずなんだけど、事情があつて一ヶ月ずれちゃったらしいわ。ゲーム前に気分のリフレッシュも兼ねて眷属の子達と一緒に行くつもりだったのだけれど、最後なんだし、どうせならあなた達も思いつきり楽しんでみたらいいんじゃない」

リアス、ひよっとして俺と同じ事を考えて・・・。

「ふふ」

「ツ・・・！」

顔を上げると、リアスが俺に向かってウインクして来た。ちくせう！ やっぱりそうだったのか！ 惚れてまうやろ！

「花火だけじゃなくて、出店もたくさん出るみたいよ」

「ラーメンはあるのかい!？」

「さ、さあ、そこまではわからないけど」

「よっしゃ！ せっかくだから俺たちはこの花火大会に行くぜい！」

「美猴、私達の意見も聞かずに決めてもらっては困ります」

「いいじゃねえかアーサー！ おめえもたまにはハメを外してはしゃいでみろよ！」

「あらあら、なら浴衣を用意しないといけませんわね」

「どうせなら赤龍帝達も呼ぶにや」

「オーフィスちゃん！ お祭りですよお祭り！」

「？」

美猴さんをきっかけに活気づくみんな。そこへポツリと小猫が咳く。

「あ、でも、外出はアザゼル先生に禁止されてるんじゃないですか？」

「俺が先生を説得する」

確かに、以前はオーフィスちゃんを外へ連れ出す事を許してもらえなかった。けど、今回は絶対に許してもらえるよう全力を尽くす！

必要ならDO☆GE☆ZAの封印を解いてやるぜ！

(ご主人様の目が本気を通り越してヤバい事になってるにや・・・！) そうと決まれば、早速明日アザゼル先生に話してみよう！ いった

そ先生も誘ってみるのもいいかもな！

S I D E O U T

アザゼルSIDE

「ツ・・・!？」

放課後、職員室にいた俺をとんでもないプレッシャーが襲った。これ絶対「アイツ」だろ。俺の胃がキュツとなったから間違いないねえ！

「な、何だか寒気がしますな」

「ち、ちよつと冷房効きすぎなんじゃないですか」

「れ、冷房はついてませんよ」

「で、でも、震えが止まらないんです」

他の教師達が顔を青ざめさせながら口々に異常を訴える。そうしている間にも、プレッシャーは職員室に向かって少しずつ近づいて来ていた。

（来るなよ。来るなよ。そのまま通り過ぎてどっか行っちゃまえ）

職員室の入口まで残り五メートルといった所か。四・・・三・・・二・・・一・・・そして、プレッシャーの発信源は入口の前で止まった。

「・・・失礼します」

否定したくとも、その声が俺の脳裏にヤツの顔を浮かべさせた。そして扉が静かに開かれ、ヤツが・・・青い死神がその姿を現した。

「お、おお、神崎か。何か用か？」

「アザゼル先生に少しお話が。・・・大丈夫ですか？ 震えていますけど」

「あ、ああ、よくわからんが、体調でも崩したかな」

「そうですか。お大事に」

（お前の所為だろうがああああああ!!!）

心の中で絶叫している間に、フューリーは俺の元へ一直線に近付いて来た。つかおかしいだろ！ 何で学園内でこんなふざけたプレッシャー放つてんだよ！ 下手したら気絶者が出るぞこれ！

「すみません、アザゼル先生。実は先生にお願いしたい事がありました」

「・・・場所を変えるぞ」

「アザゼル先生、私も・・・」

「いい。お前はここで待ってるロスヴァイセ」

俺はフューリーを連れて職員室を出た。さて、これ以上被害者を増やさない為にも・・・屋上にでも行くか。

階段を上る俺の後ろを無言でついて来るフューリー。それが逆にプレッシャーを際立たせて、俺の胃が益々悲鳴を上げ始めた。くそ、まだ回復系神器所有者を発見すらしてねえのに……!

屋上は無人大った。これから話をするには丁度よかった。

「……で、話つてのはなんだよ?」

「実は、昨日家に美猴さんとアーサーさんが来まして……」

なるほど、つまりオーフィスを連れ出した事が他の連中にバレちまったわけか。で、オーフィスが帰る前に花火大会に連れて行ってやりたいと。

「こうして俺に話をしに来たって事は、俺が前に言った事は憶えてるみてえだな」

「はい。ヴァーリさんは黙っていれば問題無いと言っていました、やはり先生に許可はもらっておかないといけないと思いましたが」

「ふん、あの馬鹿娘の考えそんな事だな」

「それで、彼女達を連れて行く事を許してもらえないでしょうか」

「俺が許可を出さなかったらどうするつもりだ?」

「出してもらえるまで、何度でもお願いさせてもらうつもりです」

お願い? はっ! お願いつてのはそんな殺る気満々なプレッシャーを向けて来ながらするもんですかねえ! そりゃ脅迫つていうんですよ騎士様よお!

「……お前、どうしてそこまでオーフィスに肩入れする? アイツは

お前が憎むテロリスト達の親玉なんだぞ?」

「お飾りの……です」

「……」

「あの子とは色々話をしました。一緒にご飯も食べましたし、一緒に本を読んだり、ゲームをしたりしました。色んなものに興味を持ち、色んな事を知りたがりました。そうしてあの子と過ごす内に俺は確信しました」

そうして、フューリーは今までで一番のプレッシャーと共に俺に向かって断言した。

「……あの子はあんな連中の所にはいけない。あの子を利用する

だけ利用して、あの子の孤独を理解しようとしもない連中なんかの所に」

「お前・・・」

オーフィスの孤独はなるべくしてなったようなもんだ。オーフィスの目的は次元の狭間へ戻り静寂を取り戻す事だ。静寂つてのはつまり、自分以外何も存在しないって意味になる。それを当たり前の様に求めるといふ事は即ち、オーフィスは自分が孤独だと理解していない。コイツは、そんなオーフィスの孤独に寄り添う・・・いや、孤独そのものから解放するつもりか・・・。

「お前、それがただけ難しい事かわかってんのか？」

「もちろんです」

「その結果、テロリスト共と真正面から戦う事になってもか？」

「叩き潰します」

「・・・お節介にもほどがあるぜ」

「よく言われます」

あーもう無理だ無理。こういう目の色をしたヤツにや何を言っても無駄だ。

「お前は、目についたヤツを全員救っちゃおうつもりなのか・・・。くく、だからこそ騎士ってわけかよ」

「え？」

「何でもねえ。・・・いいぜ、許可を出してやる。精々楽しんでこい」

「ツ！ ありがとうございます！」

おーおー、ガキみてえに喜びやがって。・・・って、コイツまだ十人だったな。

「ただし、お前はオーフィスから絶対に離れるな。あと、当日は俺もついて行くからそのつもりでいろ」

「わかりました。元々先生も誘うつもりでしたし、丁度よかったです」
「祭りは明後日だったな。時間がねえが、用意出来るもんは用意してくか」

そうだ俺。ここはポジティブに考えようじゃねえか。悩みの種の一つがいなくなるんだ。きつと、きつとこれを楽しめれば最高に美味

い酒が飲めるはずだ！

職員室へ戻る道中、俺は何かから手をつけるべきか頭をフル回転させるのだった。

第三百三十四話 祭り・・・それはリア充達の巣窟である

無事アザゼル先生から許可をもらった俺は、すぐさまリアスにその事を伝えた。そのまま彼女がオカルト部の部室に集まったみんなに事情を説明。レイヴェルさんを含めた全員が参加する事になった。さらに、途中で姿を現したアザゼル先生から、ロスヴァイセ先生やレイナーレさん達にも事情を説明して参加させるとの言葉があった。レイナーレさん達はオーフィスちゃんが来ていることから知らないから、アザゼル先生から説明しておいてくれるらしい。

それから、一旦解散した後、女性陣が揃ってどこかへ出かけて行き、帰って来たのは夜の八時半を過ぎた頃だった。みんなが帰って来る間、俺は遊びに来た美猴さんにゲームに付き合わされる事になった。アーサーさんとも色々話したが、彼の妹さんも一緒に祭りに参加するらしい。

そして祭り当日、部屋で着替えをしているとゼノヴィアさんと紫藤さんとレイヴェルさん、続けてレイナーレさん達、最後にロスヴァイセ先生とヴラディ君がやって来た。そして、それと入れ代わるように、俺は家を追い出されてしまった。

「これから色々準備しないといけないから、リョーマは先にお祭り会場に向かっててちょうだい」

こう言われては仕方無いので、俺はそのまま祭り会場へ向かう事にした。歩き始めてすぐ美猴さんとアーサーさんに遭遇したので、せつかくだからと二人にもご一緒してもらおう事にした。

でもって現在、俺は祭り会場の入り口でみんながやって来るのを一人で待っていた。美猴さんは会場から漂って来る美味しそうな匂いに我慢出来ず突撃。アーサーさんはそんな美猴さんを監s・・・見守る為に先に会場に入行ってしまった。

・・・にしても。まだ早い時間だつていうのに、既に相当な数の人達がやって来ている。うーむ、こうして一人この場にいる事が非常に

居心地が悪い。さつきから会場入りする人達からめっちゃ視線を向けられている。俺以外にも待ち合わせしてるっぽい人はいるのに、何で俺だけこんな目に……。

「あ、先輩がいたよイツセー君」

「お、ホントだ！ おーいセンパイー！」

そんな俺の元へ救世主登場！ 元気よく駆け寄って来た兵藤君と木場君に片手を上げて挨拶をする。

「早いな二人とも」

「それはこっちのセリフです。てつきり僕達が一番だと思つてました」

「リアス達に準備があるからと追い出されてしまつてな。仕方無いからここでみんなを待つてようと思つたんだ」

「じゃあ、まだ先輩以外の人達は来てないって事ですか？」

「いや、美猴さんとアーサーさんも一緒だったんだが、二人は先に会場入りしたよ」

「へっ、あの猿野郎のこつた。どうせ食い物の匂いに我慢出来なくなつたんだろうよ」

「そういう事なら、僕達もここで部長達が来るのを待ちますよ。いいよね、イツセー君」

「おう……って、あれ、アイツ等……」

兵藤君の視線を追いかけると、そこには松田君と元浜君の姿があった。向こうもこっちに気付いたのか、手を振りながら近づいて来た。

「イツセーじゃねえか！ それに木場に神崎先輩も！」

「この組み合わせ……はっ！ イツセーお前、このイケメン二人を利用して女の子をナンパするつもりだな！」

「何だと!? おいイツセー！ そんな真似して恥ずかしくねえのか！」

「うるせえ！ 誰がそんな事するか！」

あはは、なんだか一気に賑やかになったな。やりとりを見守る俺と木場君の前で、兵藤君達の会話は続く。

「じゃあこんな所で何やってんだよ。会場に入らねえのか？」

「部長達を待つてんだよ」

「部長つて・・・まさかリアス先輩か!？」

「しかも『達』って事は他の子も!？」

驚愕する松田君と元浜君。その直後だった。前方からおおきなどよめきが聞こえて来たのは。

「何だ?」

俺達はそろってそちらへ目を向け、そのどよめきの正体を知る事となった。赤、青、黒、黄、白、様々な色の浴衣に身を包んだ艶やかな集団がこちらに向かってゆっくりと近づいて来ていた。その集団を率いているのは、赤い浴衣を着た紅髪の美少女・・・即ち、リアス・グレモリーその人であった。

「お待たせ、リョーマ。イツセーと祐斗も来てたのね」

「リアス、その格好は・・・」

「言つたでしょ。準備があるつて」

その瞬間、俺は全てを理解した。そうか、昨日出かけたのは浴衣を買う為で、俺を追い出したのは、みんなの着つけをする為だったのか！

後ろの子達にも目をやる。そこで気付いたが、朱乃は黒、ゼノヴィアさんは青色といったように、みんなそれぞれの髪の色と同じ色の浴衣を着ていた。

「えへへ、浴衣なんて初めて着ました」

「私は普段和服だからあんまり変わらないにや」

「・・・やべえ」

「イツセー君?」

「やべえ。やべえよ木場。俺は今、猛烈に感動している! こんな最高なモノが見れたんだ! 俺はもう死んでもいい!」

「ふふ、イツセー。褒めてくれるのは嬉しいけど、それは大袈裟よ」

「大袈裟なもんですか! ねえ、先輩もそう思うでしょ!」

ここで俺に振るのか兵藤君・・・けど、まあ俺としては概ね彼と同意見だな。これほどの美女、美少女の浴衣姿を見て嬉しく無いわけがない。

「そうだな。確かに兵藤君の言う通りだ。リアスはいつもの長髪を纏める事で全然雰囲気が変わってより艶やかに見えるし、朱乃は正に大和撫子だ。外国生まれのアジアやゼノヴィアさん達も違和感どころか逆に着こなして見える。他の子達も含めて、みんな本当に綺麗なんだが……。すまない。もつと今のキミ達を表現するのに相応しい言葉があるはずなのに、俺の貧相な語彙力ではこれが限界だ……」
くやしいのう、くやしいのう。こういう時、小説家の人達がマジで羨ましくなるわ。よし、これからもう少し本を読む様にしよう。……
鋼の救世主以外で。

(……あれで素なんだよね先輩は)

(俺はもう慣れた。それよりもナチュラルにあの集団に混じって真っ赤になってるギャー助の方が俺は心配なんだが)

(寄る所があるって僕達と別れたのはこの為だったんだね)

(アレって恥ずかしがってるだけだよな？ いや、恥ずかしがってる事自体がおかしいんだけどよ)

(……)

(無言止めて。俺が変な事言ってる感じになるから)

(どうしようこの空気……)

(こういう時はあの人を呼ぶしかねえ)

(あの人?)

「すう……アザゼル先生ええええええええええ!!!」

っ!? な、何事だ兵藤君!? そんなヒーローの助けを求めるかのよう
うにアザゼル先生の名を……。

「おいイツセー! 人の名前を馬鹿みてえな大声で叫んでんじゃねえ
!」

来ちゃったよ先生!?

「つたく、ただでさえ目立つ集団だったのに、これ以上注目浴びる様な
真似をすんな」

注目? って、うお!? 周囲からめっちゃ視線を集めてるぞ俺達!?

さっきの比じゃない!

「おいオーフィス。アレは着けて来たんだろうな」

「ん」

短く返事をしたオーフィスちゃん。その頭には紫色のリボンが着いていた。似合ってるけど、ひよつとしてアザゼル先生がプレゼントしたのだろうか。

「そのリボンの中心の玉は小型の認識阻害装置になっている。いつぞやにフューリーに渡した物よりもずつと強力なヤツだ。急ごしらえで作ったもんだが、それがありやあお前だってバレやしねえだろうぜ」

「わざわざリボンにする所に、あなたの優しさが感じられるわねアザゼル」

「・・・フン」

お、おお。まさかド直球なツンデレをアザゼル先生で見られるとは・・・。言ったら殴られそうだから何も言わないが。

「あ、あの・・・」

軽い衝撃を受けている俺に、ヴァーリさん・・・正確にはヴァーリさんの後ろに隠れていた女の子が声をかけて来た。

「キミは？」

「ル、ルフエイ・ペンドラゴンといいます。えっと、その、兄がお世話に・・・」

兄？・・・あつ！ひよつとしてこの子がアーサーさんの妹さんか！昨日聞いた特徴と合致する所があるし間違いないだろ。

「で、伝説の騎士様に会え、じゃなくて、お会い出来て嬉し、光栄です」

そういう割にはヴァーリさんの後ろの隠れたまま顔も見せてくれないんだけど。

「この子は緊張してるだけだから、気にしないであげてちょうだい。ところで、美猴とアーサーはどこ？」

「あの二人なら先に会場内に入っていったぞ」

「なら、これで全員集まったわけだし、私達も行きましょう」

「待って。いくらなんでもこの人数でぞろぞろと行動したら他の人達の迷惑になるわ」

確かに、改めて人数を確認すると、俺、リアス、朱乃、アーシア、小

猫、兵藤君、木場君、ゼノヴィアさん、紫藤さん、ヴラディ君、黒歌、アザゼル先生、ロスヴァイセ先生、レイナーレさん、カラワーナさん、ミッテルトさん、レイヴェルさん、ルフエイさん、オーフィスちゃん、ヴァーリさん、ついでに松田君と元浜君も入れると・・・二十人越えちやつてるよ。もはや団体レベルだ。リアスの言う通り、この人数そのままに動くのも大変だ。

「そうね。ならこうしましょう。メインイベントの花火までまだ二時間近くあるわ。それまで、各自グループを作って好きに時間を潰しましょう。その後、花火会場で合流というのはどうかしら」

「それは構わんが、フューリーとオーフィスは一緒に行動してもらどうぞ」

「！！！！異議あり（にや）！！！！」

「これは俺が許可を出した条件の一つだ。異論は認めん」

（それだけじゃねえ。下手したら先輩を巡って血の雨が降ってたかもしれない）

（先生はそれを危惧したからこそこの条件を出したんだ）

オーフィスちゃんと一緒か。まあ、元々オーフィスちゃんとの思いで作りの為の企画なんだし、むしろ望む所だな。

「ほら、さっさとグループ決めて中に入っちゃまえ。いかげん周りの視線が鬱陶しいんだよ」

その後、アザゼル先生によって適当にグループを決められ、俺達は祭り会場へ放りこまれるのだった。

S I D E O U T

イツセーS I D E

「ちくしょう、なんでよりもよってコイツ等となんだよ」

松田が恨めしげな視線を送って来る。けど、そりゃこっちのセリフだ。何でお前と元浜と俺の三人組なんだよ。

「おかしいだろ！ あんなにもたくさんの女の子達がいたんだぞ！

なのになんでこの組み合わせになる!?!」

「勝手に入り込んでた癖によく言うぜ」

「それよりもだイツセー！ お前いつの間にあんな黒髪少女と知り合
いになってんだ！ 京都でも九重ちゃんと知り合いになってたし、ア
レか、お前は幼女を惹きつける力でも持ってたのか!？」

「あの子だけじゃねえ！ 他にも見知らぬ女の子が何人かいたぞ！
なんでお前ばっかり良い思いを！」

「お、射的があるな」

こういう時のコイツ等は無視するに限る。俺は二人を置いて射的
の店に向かった。

「おう、らっしやい！」

「おっちゃん。一回ね」

「はいよ！ 玉は六発だ。精々頑張りな！」

「よっし！ やってやるぜ！」

という感じで気合いを入れてやってはみたが・・・結果は悲惨だっ
た。ちくしょう、収穫物ゼロかよ。

「はは！ だっせえなイツセー！」

「んだとコラ！ ならお前やってみるよ！」

「いいぜ。俺の美技に酔いしれな！」

・・・一分後、そこには地面に崩れ落ちる松田君の姿がありました。

「だーっはっはっはあ！ 確かにいい美技(笑)を見せてもらったぜ松
田！」

「元浜あ！ 頼む、俺の仇をとってくれえ！」

「だが断る」

「まあ気を落とすなよ松田。美技(笑)を見せてくれた礼にたこ焼きで
もおごってやるからよ」

「ええい！ (笑)をつけるな(笑)を！ おっちゃん！ もう一回だ
！ 次こそ絶対に・・・！」

「——アンタ達、店の前で何騒いでんのよ」

背後からの声に振り向くと、そこには黄色い浴衣姿の桐生が呆れ顔
で立っていた。

「桐生!? 何でお前がここに!？」

「はあ？ 私がお祭りに来ちゃ変なの？」

「い、いや、そういうわけじゃねえけど」

「ふん。とりあえず松田、邪魔だからどきなさいよ」

「たわばり!」

松田を下駄による一撃でどかした桐生に、おっちゃんが親しそうに声をかけた。

「おおっと、藍華ちゃんじゃねえか! 今年も来てくれたんだな!」

「今年も楽しませてもらうよ。とりあえず一回分ね」

素晴らしいながら、桐生は二回分のお金をおっちゃんに渡した。あれ、コイツ今確かに一回分って……。

「はいよ! じゃあ十二発な!」

「「え?」」

声を揃えて疑問符を浮かべる俺達を尻目に、桐生は玉を銃に込め……さらに別の銃にも玉を込めると、それを両手で持つて構えた。「に、二丁持ち……だと?」

そして、気付けば俺達の背後に人だかりが出来ていた。誰もが桐生を見つめている。まるで、この時を待つていたかのように……。

「で、出た……。トウーハンドの藍華だ!」

群衆の一人が叫ぶ。何その漫画キャラみたいな二つ名。え、こいつってそんな有名なの?

「ねえおじさん。上段の方にある景品だけど」

「お、やっぱりそつちに目がいくかい! 今年はちよつと奮発したんだ!」

「そうなんだ。……けどさ、おじさん」

「なんだい?」

「別に……全て撃ち落ちちゃっても構わないんでしょ?」

この時、横から覗きこんだ桐生の顔は……完全に得物を狙うそれになつていたのであった。

「いくわよおじさん。景品の予備は十分かしら?」

第三百三十五話 あなたは食べる派？それとも遊ぶ派？

朱乃SIDE

立ち並ぶ露店。笑顔の人々。聞こえて来る祭囃子。その雰囲気を楽しむ様に、私とリアスは二人でゆつくりと歩を進めていた。

「それにしても、こうしてあなたと二人だけで行動するのも久しぶりねリアス」

「ん、そうね。モグ……。でも、ハム……。イツセー達には、ング……。羽を伸ばしてもらいたいし、モグモグ……。私達は私達で、精々楽しみましょう」

「……。もう充分楽しんでいるのではなくて？」

チラリと横を向けば、頭に狐のお面、右手に綿あめを持ち、そして左手で水ヨーヨーをベシベシ叩いているリアスがいた。入場から一緒に行動していたのに、いつの間に揃えたのかしら……。

「ち、違うわ。これは……。その……。あ、そうだわ！ みんながちやんと楽しめるかどうか私が率先して確かめる為に仕方無く……。！」
あらあら、思いつきにしたってもう少しい言ひ訳を考えられなかったのかしら。思いつきり“そうだ”って言っちゃってるじゃない。

「でも、せっかくのお祭りですし、私もあなたを倣って楽しんだ方がいいのかしらね」

「そ、そうよ。お祭りは楽しんだもの勝ちなんだから、私は何も間違っていないわ！」

私が正解とばかりにフンスと鼻息荒くドヤ顔するリアス。……ちよつと調子に乗ってるみたいね。私はリアスの持つ綿あめを一口頂く事にした。

「あ、ああ！ 私の綿あめ！」

「ふふ、甘くて美味しいわ」

「うう……」

眉を八の字、そして口をω（どうやってるのかしら）の形にしながら、リアスがガツクリと肩を落とす。その様子は、まさに「シヨポーン」という言葉がピッタリだった。

普段、『王』であろうと心がけるリアスが滅多に見せない表情。だけど、本当のこの子はみんなが思っているよりもずつと子どもなのよね。見栄っ張りなこの子が他の子達に本当の自分を曝け出せるのはまだまだ先になりそうだわ。

「ねえ、リアス、もう一口」

「ダメよ。これは私のだもん！」

うふふ。だもん！ですって。可愛いわね。今のリアスを見てみると、こう・・・私の中のS的な部分が沸々と・・・。

「——聞き覚えのある声が聞こえたと思ったら・・・やっぱりあなたでしたかりアス」

「え？ あ、ソーナじゃない！」

背後からの声に振り返ると、そこには制服姿のソーナさんがいた。人ごみの中で立ち止まるわけにもいかないので、そのまま彼女を加えて歩きながら話をする事にした。

「あなたも来てたのねソーナ」

「学園の生徒が他のお客様に迷惑をかけない様、生徒会は全員で見周りをしています」

「だから制服なのですね」

「そういうあなたは浴衣ですか。とてもお似合いです、わざわざこの日の為に用意したのですか？」

「ええ。今日はちよつと特別な日になるから」

「そうですか。では、私は見周りに戻りますので、あなた達は楽しんでください」

そう言っただけで私達から離れようとしたソーナさんをリアスが引き止める。

「待ってソーナ。せっかくだし、あなたも私達と一緒に来ない？」

「お誘いは嬉しいですけど、説明した通り、私がここに来たのは見周りの為で・・・」

「何もずっと一緒にいなさいって言うわけじゃないわ。けど、ずっと見周りを続けるのも疲れるでしょ？　気分転換だって必要よ」

「……いえ、やっぱり私は……」

「見周りでしたら私達に任せてください」

「断ろうとするソーナさん。とそこへ、今度は副会長の真羅椿姫さんが現れた。」

「椿姫、何かありましたか？」

「いえ、今の所特に問題は起きていません。ですから会長、見周りの事は気にせず、祭りを楽しんでください。後の事は私が引き受けますから」

「あなた達を差し置いてそんな事は出来ません」

「いえ、これは生徒会メンバーの総意です。会長は働き過ぎです。こういう時くらい休んでください。頂くまで私は戻りません」

「椿姫……」

「まだ何か言いたそうなソーナさんだったがけれど、やがて観念したように静かに頷いた。」

「……わかりました。では、三十分だけリアス達と一緒に行動させてもらいます。その後は私も見周りに戻りますので」

「それだけは譲れないと言うソーナさん。真面目過ぎとも思えるけれど、それが彼女の良い所だってみんなわかつている。だから生徒会長として、そして『王』として尊敬されているのだから。」

「それではリアスさん、姫島さん。会長の事、よろしくお願いします」

「そう言って、真羅さんは人ごみの中へ消えて行った。」

「さて、それじゃあソーナも加えて色々回りますよう。何か食べたい物はある？」

「私の事は気にせずあなた達の好きな物を選んでください」

「ほら、遠慮しないの。いいから言ってみてちょうだい」

「再度尋ねるリアスに、ソーナさんは小さな声で答えた。」

「……です」

「え？」

「り、リングアめが食べたいです」

注視しなければ気付かないけれど、ソーナさんの頬が僅かに赤くなっていた。うふふ。これは・・・リアスと同じ匂いがしますわ。

「リンゴあめね。そういうえばさっきお店を見た憶えがあるわ」

「では、そちらまで戻りましょうか」

私達は人の流れの邪魔にならないよう、来た道に戻る事にした。

「ところで、今日ここに来たのはあなた達だけなのですか？」

「いいえ、みんな来てるわ。ただ、ちよつと人数が多くなり過ぎたら、それぞれグループに分かれる事にしたのよ」

今頃、他の子達も思い思いに祭りを楽しんでいるでしょう。そうですね・・・アジアちゃんのグループは今何をしているのかしら。

朱乃SIDE OUT

アジアSIDE

グループ分けの際、私はゼノヴィアさんとイリナさんと一緒にグループに入れて頂いた。学園でも同じクラスのお二人と一緒にだなんてとっても嬉しいです。嬉しいのですが・・・。

「ゼノヴィア！ 焼きそばよ！」

「よし、買いだ！ 店主、三人分頼む！」

「あいよ！」

ソースの香ばしい匂いが漂うお店の前で、ゼノヴィアさんとイリナさんがホクホクした顔でお店の方からパックに入った焼きそばを受け取っていた。

「お待たせアジアさん。ほら、これアジアさんの分ね」

「あ、ありがとうございます」

イリナさんから焼きそばを受け取る。ゼノヴィアさんは既に食べ始めていた。

「しかし、日本の祭りというのは素晴らしいな！ まさかこんなにもたくさん美味しいものを食べられるとは思えなかった！」

「あーこれこれ！ お祭りと言えばやっぱりこれよ！ 久しぶりだけどやっぱりいいわあ！」

お二人ともとっても幸せそうに焼きそばを口に運んでいる。それ

を見ているだけで私はお腹一杯になりそうです。というか、実際にもうお腹一杯です。

フライドポテトから始まって、イカ焼きにアメリカンドッグ、さらには牛肉の串焼きに焼きトウモロコシ、そしてこの焼きそば……。私は三つ目くらいでもう十分でしたけれど、一体このお二人のこの細い体のどこにあんなに入ってしまったのだろうか。

「ん？ どうしたアーシア。食べないのか？」

「は、はい。私もうお腹一杯ですから、お家でお留守番している子達のお土産にしようかと思ひまして」

一緒に付いて来たがつていたスコルちゃん達にそう約束したから。

「神喰狼つて焼きそば食べられるの？」

「ミドガルズオルムすら飲み込むんだ。焼きそばくらい余裕だろ。けど、そういう事ならもう少し土産を増やした方がいいんじゃないか。三匹に対して焼きそば一つだけじゃ物足りないだろう」

「さっきの串焼きとか喜びそうだけど」

「まあ待て。他にも色々あるみたいだし、ここは私達で土産に相応しいか味見をしながら選んでみようじゃないか」

「そうね。そうしましょうか」

「ええ!? ま、まだ食べるんですか!？」

「当然」

ビ、ビツクリです。まさかお二人がこんなに大食いさんだったなんて。きつと小猫ちゃんがここにいたら凄く喜んだでしょうね。黒歌さんのグループと会ったら入れ代わってみようかな。

アーシアSIDE OUT

黒歌SIDE

アザゼルめ、せっかくご主人様と一緒に回れると思ったのに。まあ、代わりに白音と一緒になれたからいいけど。けど、なんでもう一人、しかもよりにもよってこの子なのかしら。

「もう！ さっきから食べてばかり！ 少しは他の事にも興味を持つてはいかがなの！」

フェニックス家から来たというレイヴェル・フェニックス。まともに会話をするのは今日が初めてだから、私は特に何とも思わないけれど、白音はこの子に対抗心のようなものを抱いている様に見えるにや。今日をきっかけに、少しは仲良くしろっていう事なのかしら。

「うまうま・・・」

「ああ、ソースが口から垂れてますわ！　せつかくリアス様をご用意してくださった衣装なのですから気をつけてくださいまし！」

そう言いながら、ハンカチで白音の口元を拭うレイヴェル。あれ、ひよつとしてももう仲良くなってる？　というかマズイ。今のは姉である私の役目だったのに出遅れてしまったにや。

「・・・ありがとう」

「ふ、ふん！　同じレディとして、あなたのはしたなさに我慢が出来なかっただけですわ。まったく、あなたはもう少し慎みを持つてですね・・・」

百点満点のツンデレにや。・・・はっ！　わかったにや！　白音は同じツンデレ枠としてこの子に負けたくないのね！　だからこの子に対して対抗心を・・・！

「ちよっと待ってて」

そう言っつて、白音は近くの屋台で何かを買って戻って来た。そしてその買った物をレイヴェルへ差し出した。

「なんですよ、コレ？」

「お礼。よかったら食べて」

「け、結構ですわ。私はお礼してもらいたくしてたわけでは・・・」

「わかってる。でも、嬉しかったから」

「・・・そ、そこまでおっしゃるのですしたら、頂くのもやぶさかではありませんか」

(チヨロイにや・・・)

レイヴェルがそれを口に含む。ゆっくりと咀嚼し、やがてゴクリと飲み込んだ。

「どう？」

「美味しいですわ。この濃厚なタレがお肉によくマッチしていますし、

お肉が小さいから食べやすいですわ。ところで、これはなんて言うお料理ですか?」

「焼き鳥」

「・・・え?」

レイヴェルの顔がピシリと固まった。そこへ白音が再び告げる。

「焼き鳥」

「な・・・な・・・なあっ・・・」

「焼き鳥娘が焼き鳥を食べる・・・」

「あ、あなたって子はああああああああ!!!」

我が妹ながら中々にやってくれるにや。・・・え、何で買って来た時点で止めなかったって? だってこの方が面白いじゃない。

「あれ、あそこにいるのはレイナーレ達にや?」

店の前で座り込んで何やってるのかしら。

黒歌SIDE OUT

レイナーレSIDE

私は一心不乱に机に向かっていった。それは両隣に座るカラワーナ、ミッテルトも同じだ。

(もう少し・・・もう少しよ)

既に目標の八十パーセントはクリアしている。焦らず、このままいけば必ず成功させられるはずだわ。

「へへ、例えお姉様が相手だろうと、ゲームで負けるわけにはいかないッス・・・って、ああああああああ!!!」

ミッテルトの悲鳴が響き渡る。どうやら失敗してしまったようね。「全く、無駄口を叩くから・・・あっ!?!」

やってしまったとばかりにカラワーナが声を上げる。今の言葉、そっくりそのまま自分に返って来たわね。二人とも、始める前に店主から言われた言葉を聞いて無かったのかしら。・・・このカタヌキは集中力を切らした者から脱落していくって。

「おおっと、残念だったな嬢ちゃん達。ほれ、その嬢ちゃんはもう少しだ。応援してやりな」

「頑張ってお姉様！」

「私達の仇を！」

「ちよ、机を揺らさないで……」

「パキッ！」

「げっ!？」

「むっ!？」

「……」

私は絶望のあまり絶句した。机の上……私が挑戦していた龍の顔に、思いつきり罅が入っていた。

「さ、さあて！ お姉様もダメだったし、そろそろ他の店に行ってみるッスー！」

「そ、そうだな。他にも面白そうな場所がありそうだしな！」

「と、というわけですからお姉様。先に行かせてもら——」

「ドコヘイクツモリ？」

二人の肩を全力で掴む。さあて……どう落とし前をつけてもらおうかしら……。

レインナーRESIDE OUT

ロスヴァイセSIDE

「ぎにやああああああ!!！」

「あん？ 今カラワーナとミツテルトの悲鳴が聞こえた様な……」

アザゼル先生が一瞬人ごみの中へ目を向ける。けど、次の瞬間には元に戻っていた。

「にしてもロスヴァイセ。別に無理して俺に付き合わなくてもいいぞ」

「いえ、私達は一応引率者という立場ですから。何かあった時、すぐに対処できるように一緒にいた方がいいです」

「まあそうだが……。ある程度は自由にしてて構わんぞ。俺はそういうわけにはいかんが」

「いえ、あなたこそこういう時くらい息抜きをするべきです」

「そういうわけにはいかねえよ。不本意だが、アイツ等の責任者は俺

だからな。サーゼクスにミカエルめ、一ヶ月だけでも代わってみろってんだ」

「だからこそですよ。今あなたが倒れたら大変な事になります。勇者s・・・神崎君達の事は私に任せてください」

「へっ、自分の体調くらいわかかって・・・」

「ビールいかがですかあ！」

「ッ!？」

首がもげそうな勢いで振り返るアザゼル先生。その視線の先のお店ではビールを売っているようだった。それにしても、これだけの大勢の人々の声が響く中で、あんな遠くのお店の方の声を聞き分けるなんて・・・。

「ビールか・・・飲まなくなってもうどれくらい経つだろう」

今の眩きで、最近の彼は酒に酔う事すら許されないほどの忙しさに追われていたのだと理解出来た。

「・・・飲みたいのでしょうか？」

「・・・」

「いいんですよ、我慢しないで。そう・・・あなたは今飲んでいいのです」

「あ・・・ああ・・・」

ふらふらと、まるで夢遊病者の様な足取りでお店へ近づいて行くアザゼル先生の後ろをついて行く。店前に立った所で、店主の方がアザゼル先生へ声をかける。

「らっしやいー!」

「ビールを・・・ビールをくれ」

「あざっす! カップのサイズはどうしますか?」

「一番いいヤツを頼む」

「ラージっすね! 了解です!」

アザゼル先生の視線は、プラスチックのカップに並々と注がれる黄金色の液体に釘付けとなっていた。・・・私も飲みたくなって来たけど、我慢我慢。

「はい、お待たせしました!」

「こ、こいつ・・・キンキンに冷えてやがるっ・・・!」

それがビールを受け取ったアザゼル先生が最初に発した言葉だった。そのまま慈しむようにカップを両手で持ちながら、アザゼル先生は一気にそれを口に流し込んだ。

「どうですか、久しぶりのお酒の味は?」

「・・・めえ」

「え?」

「美味え・・・美味えよお。何なんだよこの犯罪的な美味さはあ・・・!」

墮天使の総督であり、愚痴やぼやきはしても、決して弱い部分は見せなかったアザゼル先生。そんな彼が、一杯のビールの為に・・・その双眸から大粒の涙を流していた。

「お、お客さん? どうしました——」

「もう一杯くれ!」

「え? あ、は、はい」

「かあ~~~~~! そうだ! ビールってこんな味だったんだよな!」

「・・・さて、そろそろ行きましようか。おそらく、彼はしばらくここから離れないだろうし、私は私の役目を果たしましょう。」

「とりあえず、彼等を探さないといけませんね」

「足りねえ! もっとだ! もっと飲ませろおおおお!!!」

アザゼル先生の叫びを背に、私はその場を後にするのだった。

ロスヴァイセSIDE OUT

IN SIDE

「それでは、ルフェイはこちらで引き受けますね」

「僕も彼等について行く事にします。花火会場で会いましょう」

「ひい! 助けてください先輩iiiiiiii!!!」

オーフィスちゃんとヴァーリさん。それに木場君とヴラデイ君。

そしてルフェイさんと一緒にグループを作ったのだが、たった今木場君とヴラデイ君とルフェイさんが離脱した。先に会場入りしていた

美猴さんとアーサーさんに偶然遭遇し、色々あってアーサーさんが妹であるルフエイさんは任せて欲しいと言つて来た。木場君はそんなアーサーさんと話がしたいから、ヴラディ君は美猴さんにニンニクラーメンを食わせてやると言われて泣き叫びながら拉致されて行った。正にスポーツ参戦だったな。

「美猴・・・酔つてたわね」

「確かに、顔がちよつと赤かったな。キミ達も何か食べたいものがあったら遠慮無く言ってくれ」

この日の為にお金はたつぷり引き出してある。最近、予想もしてなかった収入があつたからな。・・・というか、何もしてないのにある日いきなり通帳にとんでもない額が振り込まれてるなんて誰が予想出来るかつての。リアスに聞いたら、冥界で売れた俺のグッズやら何やらの売り上げからモデル料的な感じでいくらか頂いた様だ。具体的には言えないが・・・とりあえず、俺が前世で稼いだ額を余裕で上回っていた。

「といつても、私は美猴みたいに特別好きなものも無いし。オーフィスは何か無いの?」

その問いにオーフィスちゃんは答ええない。代わりに視線で俺達に訴えかけた。

「かき氷? あれが食べたいの?」

「初めて聞く。どんなものか知りたい」

「なら、最初はアレにしよう」

俺は早速二人と一緒にかき氷屋さんへ向かう事にした。

「いらつしゃい!」

「すみません、二人分お願いします」

「ありがとうございます! 味はどうされますか?」

「どうする二人とも」

「ん・・・我はこれ」

オーフィスちゃんが選んだのはブルーハワイだった。

「フューリーと同じ色」

え、ひよつとしてそれが理由? ど、どうリアクションしたらいい

んだ？

「なら、私はこれにしようかしら」

俺が困っている間に、ヴァーリさんはイチゴ味に決めた様だ。注文を受けたお店の人が業務用のかき氷機でガリガリと氷を器へ盛っていく。完成した白い山へ、青と赤のシロップをこれでもかとかける。

「はい、お待たせしました！」

まず俺が受け取り、それぞれに手渡した。

「ふうん、これがかき氷ね」

「ヴァーリさんも初めてだったのか？」

「ええ。というか祭り自体初めてですもの。ふふ、初体験の相手があったんだなんて嬉しいわ」

誤解される言い方止めて！ わざと言ってるのバレバレだけど誰が聞いてるのかわからないんだから！

「うっ……ふう……」

「おい、どうしたんだよ急に前かがみになって」

「いや、何でもねえ。ちよつとトイレ行って来るわ」

……振り返るな。忘れる。今のはただの聞き間違いだ。絶対そう
だ。

「それで、これはどうやって味わえばいいのかしら？」

「あ、ああ。その刺してあるストローは先がスプーンみたいになってるからそれですくって食べればいいんだ」

俺の説明を聞いたオーフィスちゃんは言われた通りにかき氷を一口。そして次の瞬間、目をパチクリさせた。

「中々美味しいじゃない。そっちはどうオーフィス」

「……冷たい。それに、不思議な味がする」

「ふふ、氷だから当然じゃない。けど、お気に召したみたいね」

はは、それはよかった。ヴァーリさんも嬉しそうだし、掴みとしては上々だな。

それぞれにかき氷をパクつく二人。五分くらいで完食してしまった。

「我、完食」

「あら？ ちょっとオフィス。舌を出してみてもちようだい？」

「やっぱり青くなってるわ。シロップの色が移っちゃったのね」

「心配しなくても、時間が経てば元に戻るさ」

「じゃあ、私のも変わってるのかしら」

ヴァーリさんが舌を出す。綺麗なピンク色だった。

「ヴァーリ、ピンクのまま」

「イチゴ味だからあまり変わらなかったみたいだな」

「そう、残念ね」

さてと、気を取り直して、今度は何かで遊んでみるか。ええっと、近くに遊べそうな所は・・・金魚掬いと輪投げか。どっちにしよう。

少し悩んだが、どうせ時間はまだたくさんあるんだし、どっちもやればいいという結論になった。なので、まずは金魚掬いで遊ぼうとしたのだが・・・。

「・・・」

ポイを持ったオフィスちゃん。そんなオフィスちゃんから逃げるように水槽の端へ我先にと泳いでいく金魚達。結果、オフィスちゃんの目の前から金魚の姿が消えてしまった。

「どうやら魚達もオフィスという存在を本能で理解した様ね」

本能云々は置いといて、このままじゃゲームにならない。ここは俺が何とかするしかないな。・・・『挑発』使えば近寄って来るかな。

「・・・来た」

流石精神コマンド。金魚にだって効果抜群じゃないですか！ よし、ついでにオフィスちゃんのポイに『不屈』と『鉄壁』かけよう！ 店の人には悪いが、オフィスちゃんとの思い出作りの為ならば、俺は卑怯者でも何にでもなってる！

「亮真、あなた何かしたでしょ？」

「・・・何の事かな」

「ふふ、悪い人」

ヴァーリさんと悪のボスとその側近ごっこをしながら、俺はオフィスちゃんを金魚掬いを見守り続けるのだった。

S I D E O U T

イツセーSIDE

「・・・こんなもんかしらね」

桐生が満足した顔で銃を置く。コイツ・・・宣言通り全部落としやがった！

「「「うおおおおおおお!!」「」」」

ギャラリーの歓声に手を振って応える桐生。ちよつとしたアイドルみたいだ。

「ちつくしよー！　またやられちゃったぜ！　今年こそ負けねえと思っただのにー！」

「また来年に期待させてもらうわ。じゃあおじさん、落とした景品は」
「わかってるよ。こんだけの量は荷物になるからな。明日にでも家に持って行くよ。親父さんによろしく言っておいてくれな」

「うん、わかった。それじゃ私はそろそろ・・・って、まだいたのアンタ達？」

「お、お前・・・凄えな」

「別に、こんなの大した事無いわよ」

「いやいやいや！　十分大した事あるっての！　どこのスナイパーだよお前！　さっきの俺達どんだけ情けないんだよ！」

「おいイツセー！　リベンジするぞ！　せめて一つくらい落とさねえと俺のプライドが許せんー！」

「いや、アレを見た後にやるのは流石に・・・」

「え、アンタ達、まさか一つも獲れなかったの？　うわー、ダサーい。何も獲れないのが許されるのって小学生までだよねー」

煽るように言ってくる桐生。・・・上等だ。そこまで言われて引きさがってられるかよー！

「おっちゃん！　もう一回やらせてくれ！」

「もう小物しか残ってねえけどいいのかい？」

「大きさはねえ！　ゲットする事が重要なんだ！」

「そ、そうか。頑張れ」

「行けイツセー！ お前の力を見せてやれ！」

「無駄に熱い展開だが・・・嫌いじゃないぞこういうの！」

松田と元浜の声援を背に、俺は銃を構え、一発目を撃った。しかし、玉は景品に当たる事無く壁へと激突した。

「くそ！ 次だ！」

間を開けず二発目を撃つが、これも外れだった。くそ、何でだ！
何で当たらねえんだ！

「・・・ああもう！ じれったいわね！」

三発目の玉に手を伸ばそうとしたその時、いきなり桐生が横から俺の手を取った。

「き、桐生さん!？」

「アンタは構えからなつて無いのよ兵藤！ いい？ 銃身を持つ手はここ！ それと、無駄に銃を突き出す様な態勢じゃバランスが悪いから、多少距離が空いてもちゃんと固定できるように腕をここに・・・」
熱心に説明して来る桐生。互いの顔がかなり近づいているのだが、気付いて無いみたいだ。

（桐生、まつ毛長いんだな・・・って、こいつ相手に何考えてんだ俺?!）

「で、後は景品の重心がどこにあるかわかれば落とせ・・・ッ!？」

「き、桐生?！」

「な、何でもないわ！ やるならさっさとやりなさい！（い、いつの間にか兵藤の顔があんな距離に・・・!）」

「な、なら、もう一つ聞いていいか。お前だったら残りの景品の中で何を狙う?！」

「そ、そうね・・・。つて、あら、モツピーのキーホルダーがあるじゃない」

桐生が興味深そうに見つめる先には、両手を頬に当てながら笑っている黒髪ポニーテールの女の子? のキーホルダーがあった。体が肌色一色だけど・・・。服着て無いのか?!

「モ、モツピー?！」

「ラビット束っていう人が書いてる漫画の主人公よ。結構人気なんだけど、知らないの?！」

「は、初めて見た」

「そのはずなんだけど・・・なんでだろう。夏休み明けに出会った彼女」になんとなく似ている気がする。

「迂闊だったわね。気付いていたら真つ先に落としてたのに」

「欲しいのか?」

「べ、別にそういうわけじゃないわよ。それより、アレはアンタじゃ無理だから、もう少し大きいヤツを・・・」

「いや・・・俺はアレを狙う」

「え?」

「無理って言われると燃えるタイプなんだよ俺は。だから絶対にアレを落としてやる」

「ふ、ふーん。どうせ無理だろうけど、やってみれば」

ええつと、持ち方はこうで、構える時は無理に突き出さずにバランスを・・・。

「お、なんか様になってるぞイツセー」

「ああ、これはいけるかもな」

「おりやつ!」

桐生の教えを忠実に守って発射した三発目は、モツピーキーホルダーの中心に当たったが、落とすまでには至らなかった。

『モツピー知ってるよ。グルグル眼鏡の女の子は眼鏡を外したら美人さんだつて』

「「「しや、しやべったああああ?!?!?!」」」

「ああ、コイツはおしやべり機能がついてるんだよ。ホレ、胸の所にボタンがあるだろ。そこへ玉が当たったからしやべったんだよ」

な、なるほど。ちゃんとそういう風に作られてたんだな。知らなかったからビクツたわ。

「兵藤! もう少し下を狙いなさい!」

「え? あ、わ、わかった!」

桐生の指示通り、少し下を狙って四発目を撃つ。今度は景品じゃなくそれを置く台に当たってしまった。

「くそ、下げ過ぎた!」

「まだ二発残ってる！ 諦めるなよイツセー！」
「おう！」

気付いたらすっかりマジモードになっている俺。そんな俺を応援する松田達にも力が入って来ていた。

「・・・ダメだ、外した！」

「次でラストか・・・」

「イツセー、お前はやれば出来る子だ！」

「これで・・・落ちてくれ！」

最後の一発がモツピーキーホルダーに命中した。キーホルダーが大きく揺れ・・・やがてパタリと倒れた。

「よっしゃあー！」

ガッツポーズする俺に、おっちゃんがキーホルダーを渡して来た。

「おめでとう。いい勝負が見れて嬉しかったよ」

「オッス！ ありがとうございます！」

「やったなイツセー！」

「まさか、射的で感動する日が来るとは思わなかったぞ」

「へへ、お前等が応援してくれたおかげだよ。それに・・・」

俺は手に入れたキーホルダーを桐生に差し出した。

「な、何で・・・？」

「俺、このキャラ知らねえし、それに・・・お前のアトバイスが無かったら獲れなかっただろうしな。礼ってわけじゃねえけど、やるよ」

「あ・・・」

答えを聞かず、俺は強引に桐生にキーホルダーを握らせた。これでいい。いらねえならいらねえで捨てるだろうし。

『モツピー知ってるよ。これがフラグだって』

「ツ・・・!?？」

「というか、俺達射のだけで時間潰し過ぎじゃね？」

「そ、そうだ！ まだ何にも食ってねえし、そろそろ移動しよう！」

「とりあえず、無難にたこ焼きから攻めるか」

「なら、行きましよう。美味しいタコ焼きのお店がそこにあるわ」

「おう・・・って桐生？ お前まさか付いて来るつもりか？」

「だって、アンタ達三人だけだと何しでかすかわからないもの。クラスメイトとしてきっちり監視させてもらおうわよ」

「とか何とか言ってる、本当は一人が寂しいんじゃない？」

「何か言った？」

目にも止まらぬ速さで松田の額に銃を突きつける桐生に、俺達は震えた。目が・・・目がやべえよ。

「な、何でも無いツス」

「なら付いて来なさい。グズグズしてたら置いて行くわよ」

「やれやれ・・・仕方ない。行こうぜイツセー」

「おう」

こうして、俺達のグループに桐生が加わる事になった。それから四人で色々な店を回ったり、部長や他のグループと鉢合わせたり、見周りをしているという匙に会ったりしていると、気付いたら花火が始まる時間まで残り十分くらいになっていた。

「そろそろ花火会場に向かった方がよさそうだな」

「じゃあ行こうぜ」

「ああ・・・ん？ どうした桐生？」

桐生の様子がおかしい。右足を庇う様に歩いている。

「別に・・・ちよつと擦っちゃっただけよ」

そつか。こいつ下駄だもんな。慣れない履き物で歩きまわった所為ってところかな。

「おーい！ 置いてくぞイツセー！」

「ほら、呼んでるわよ。私の事は気にせず行きなさいよ。待ち合わせしてるんでしょ？」

・・・つたく、コイツは。

「んな寂しそうな顔してるヤツを放って行けるかよ」

「は、はあ!? 誰が寂しそうな顔してるっていうのよ！ 意味わかんないんですけどー！」

「いいからほら、乗れって」

俺は桐生の前にしゃがみこんだ。それを見た桐生は首を傾げる。

「何してんの？」

「おんぶしてやるって言うてんの。いいから乗りなさい」

「お、おんぶ?! 馬鹿言うんじゃないわよ! 何でアンタなんかにおんぶされないといけないのよー!」

「足痛いんだろ? 会場まで連れてってやるよ」

「お、お断りよ! アンタにおんぶされるくらいなら我慢して……!」

「ほら、やっぱり我慢してたんじゃないか」

「うっ……」

「よし、十秒以内に乗らなかつたら担いで行くからな」

「アンタねえ、女の子を何だと思つて……!」

「くっくっく、それが嫌なら大人しく俺の背に乗るがいい」

「……馬鹿、変態、スケベ」

「はいはい、何とでも言いやがれつての」

数秒して、背中に桐生がおぶさつて来たので、しつかり足を持って立ち上がる。そして、そのまま花火会場まで俺は歩き始めた。

「……ありがとう」

「ああ? なんか言つたか?」

「ツ……! 変な所触つたら殺すつて言つたのよ!」

「それは無……グエエ!? く、首が……!」

「ふふ、このまま落としてやろうかしら」

「つーか、この密着した背中に感じる二つの柔らかな物つて……」

「やば、急に黙っちゃったけど、やり過ぎたかしら」

（き、桐生って結構大きいんだな）

（冷静に考えると、今の状況って相当マズいわよね）

いつしか互いに無言となり、何とも言えない空気のまま、俺は歩くスピードを速めるのだった。

第三百三十六話　それは小さいけれど大きな変化

「あ、こつちよりリョーマー！」

俺達の様子を見に来たというロスヴァイセ先生と合流し、混雑を予想して開始時間の三十分前に花火会場へ向かうと、既にリアスやアシアといった他の子達が会場の一角に揃っていた。

「いい場所だ。よく確保出来たな」

こういうのって大体事前に場所取りとかしておかないといけないと思うのだが。

「大人げないと思うけれど、権力っていうのはこういう時に使わないとね。・・・ところで、それどうしたの？」

リアスが示すのは、俺の背におぶさるオーフィスちゃんだった。ここに向かう途中で、彼女の下駄の鼻緒が切れてしまったので、おんぶして連れて来たのだ。

「我、裸足でもいい。けど、フューリーに止められた」

「普段ならまだしも、今日はどんなゴミが落ちているかわからない。足でも切ったら大変だからな」

『無限』を傷付けられるものなんてあるわけがないと思うのだけれど・・・。リョーマはオーフィスをあくまでも「女の子」として扱うつもりなのね。立場や肩書きが全てでは無いけれど、相手との接し方を考える要素の一つである事は間違い無い。けれど彼には・・・かつての世界で、異なる人種、異なる国籍、果ては異星人や異種族とも協力して戦い抜いたリョーマには、余計なものに惑わされずに、その人の本質を見抜く力があるのかもしれないわね)

リアスが難しい顔をして何やら考え始めた。そんなに悩ませる様な発言をしたつもりはないのだけけど。

・・・そういや、この辺りの土地ってリアスが治めてるんだよな。ひよつとして今の俺の発言にこの街のゴミ問題について思う所があったのだろうか。なら、邪魔するのも悪いしそつとしておこう。

「神崎先輩。私は日本の祭りがこんなにも素晴らしいものだとは思っていないかった。叶うなら毎日でもやってもらいたいくらいだ」

ゼノヴィアさんがパック入りのたこ焼きを片手にホクホク顔で話しかけて来た。その顔を見れば、彼女が今日という日を満喫したのがよくわかる。見ているこっちもなんだか嬉しくなってしまうようだ。「そういえば、たこ焼きは食べてなかったな」

「それは勿体無い！ 先輩、是非ともこれを食べてみてくれ！」

ゼノヴィアさんがつまようじに刺したたこ焼きを俺に差し出す。え、いいの？ そういう事なら遠慮無く頂きます。

「どうだ？」

「ああ、美味しいよ」

「そうだろうそうだろう！ 気に入ってもらえてなによりだ」

「ちよ、ちよつとゼノヴィア・・・！」

そう言つて自分もたこ焼きを口に運ぶゼノヴィアさん。すると、突然紫藤さんが彼女を連れて俺から離れてしまった。こっちをチラ見するその顔が妙に赤らんでいるのが気になる。

(なんだイリナ？ お前も食べたいのか？)

(違うわよ！ あ、あなた、今自分が何やったかわかつてるの!?)

(何つて・・・神崎先輩にたこ焼きを食べてもらっただけが。それが何か問題があるのか?)

(大ありよ！ こ、恋人でもないのにあ、あーんするなんて！)

(なつ!?! え、あ、ま、待て！ 私はそんなつもりでは!)

(し、しかも、自分が使っていたつまようじで食べさせて！ か、かかかか間接キツスなんて破廉恥よ!)

(ツ~~~~~~~~~?!?!?)

ちよつ!?! ゼノヴィアさんが素手でたこ焼き食べ始めたぞ!?

アーシア、ハンカチはいいからまず止めたげて！

「ん？」

ふと、視界に地面に座り込む黒歌の姿を捉えた。気になったので近づいてみると、彼女の膝を枕にして、小猫とレイヴェルさんが眠っていた。

「黒歌、その二人はどうしたんだ？」

「あ、ご主人様。心配しないで。勝負だつていつて、色んなゲームで競

い合つてすっかり体力を使い果たしちやつたみたい。傍で見てたけど、あれだけはしやげば無理もないけどね」

「・・・焼き・・・鳥・・・」

「・・・猫又・・・娘・・・」

「ふふ、ホントにしようがないんだから・・・」

微笑みを浮かべつつ、眠る二人の頭を優しく撫でる黒歌。その姿は、姉であると同時に、どこか母を思わせるものであった。

「お待たせしました」

とそこへ、アーサーさん達のグループが姿を現した。だが、その中に美猴さんの姿が見えない。まさか、あの人だけはぐれてしまったのだろうか。

「木場君、美猴さんはどうしたんだ？」

「あの人でしたら・・・」

「ご、ごめんなさいい！ 僕が悪いんですう！」

いきなり謝罪するヴラデイ君。流石にそれだけではわからないので、詳しい事情を聞いてみる事にした。

「美猴は嫌がる彼にニンニクラーメンを食べさせようと思いました。美猴にとってはただの悪ふぎけのつもりだったのでしようが、どうも他の方々にはそうは見えなかったみたいで」

つまり、嫌がる少女（ヴラデイ君）にちよつかいを出そうとする変質者（美猴さん）だと誤解され、リアル「警備員さんコイツです」されてしまったらしい。

「なので、今彼がどこにいるかは私達もわからな・・・」

「いいかげん観念しろ変質者！」

「だから誤解だつていつてんだろうがああああああ!!!」

どこからかそんな声が届いて来た。

「・・・ともかく、そういう事です」

「む、迎えにいかなくていいんですか？」

「放っておきましょう。どうせ捕まらないだろうし、美猴にはいい薬だわ」

いいのかよ！ ヴァーリさん、美猴さんにちよいと厳しくないです

か？ 俺があの人立場だったら泣いてるわ。

「それよりルフエイ。あなたそのお面どうしたの？」

アーサーさんの背後から顔を覗かせるルフエイさんは、日曜朝八時の戦うヒロインのお面を被っていた。

「どうやら、顔を隠せば騎士殿と話が出来ると思っていたみたいですが・・・この様子では意味が無かったみたいですね」

「うう、だって恥ずかしいんだもん」

「おっうー！ お前等こんなところにいやがったのかっうー！」

ハイテンションながら呂律の回っていない声に俺達が振り向くと、レイナーレさんに支えられたアザゼル先生が、ビールの缶を持った手を上げながらふらふらとこちらへ歩いて来ていた。その後ろを心配そうな顔をしたカラワナーさんとミツテルトさんがついて来る。・・・なんであの二人、ボロボロになってるんだらう。

「だ、大丈夫なのですか、アザゼル様？」

「ああ？ 何がだよレイナーレ？ 俺あこの通り絶好調だぜえ？ んぐ・・・ぷはあ！」

いつものワイルドイケメンな感じはどこへやら。完全に酔っ払いと化したアザゼル先生が缶ビールに口をつける。羨ましくなるくらい幸せそうな顔だな。

「なんだか、あそこまで酔っばらったアザゼル先生を見るのも久しぶりな気がするな。やっぱり、祭りの空気がそうさせたんだらうか」

「・・・飲めなかった原因はあなたただけだね（ボソ）」

「リアス？ 何か言ったか？」

「ううん、何でも無いわ。まあ、今日だけは先生もハメを外しなくなっただんでしようし、好きなだけ飲ませてあげましょうよ」

そうだな。普段お世話になりっ放しだし、こういう時くらいはのんびりしてもらいたいしな。そう思っている間に、アザゼル先生は前の方へ腰をおろしてビニール袋から二本目を取り出した。

「いたいた！ おーい、みんなー！」

続けて、松田君と元浜君が駆け足でやって来た。

「二人とも、イツセー君はどうしたんだい？」

「ありや？　そっぴやアイツがいねえ。おい元浜、イツセーは？」
「わからん。桐生と何か話しているのは見たが。まあ、心配しなくてもすぐやって来るだろう」

これで兵藤君と美猴さんを除いた全員が集まった。腕時計を確認すると、花火の打ち上げ開始時間までもう十秒も無かった。

『皆さま、お待たせいたしました。これより、花火の打ち上げを開始させていただきます』

「お、始まるぞー！」

大勢の人々の見守る中、ついに花火の打ち上げが始まった。雲一つ無い夜空に、様々な色の大輪の花が次々に咲き誇っていく。その迫力、その美しさに、俺達はただただ見惚れた。

「・・・不思議だわ。アレは言ってしまったえば火薬を爆発させているだけなのに・・・私はそれを綺麗だと感じている。私にとって、何の益にもならないものはずなのに、私は今、こうしてアレを見ている事をととても嬉しいと思っている。何でかしらね」

うーん、無駄な物に幸せを感じるって、何やら哲学的な話っぽいな。けどまあ、正直な所、そんな難しい事は考えなくてもいいと思うよヴァーリさん。

「綺麗なものは綺麗・・・それでいいんじゃないかな」

「・・・そうなのかしら」
「きつとな」

というか、そうじゃないと、この花火を見てひゃー！　とか、すごい！　とかしか思っただけ俺が馬鹿みたいじゃないですか！

「・・・ありがとう、亮真。あなた達のおかげで、人間界の暮らしを満喫出来たわ。ずっとここちにくらべていなくなってしまうほどにね」

「ならまた遊びに来てくれ。俺はいつでも歓迎するよ」

「ふふ、そうなるよアザゼルに怒られちゃいそうね」

ヴァーリさんの笑顔が花火に照らされる。この子・・・こんな風にも笑えるんだな。

「ヴァーリ、フューリーと一緒にの時、よく笑う」

「え？」

「フューリーの周り、みんな笑う。アーシア、黒歌、みんな笑顔。ヴァーリも笑う。我は笑わない。どうして笑うのかわからない。我、静寂を求める。フューリーの周り、静寂じゃない」

ここまで饒舌なオーフィスちゃんは初めてだった。この子から何かを伝えたい気持ちが伝わって来る。俺は一字一句聞き逃さない様集中した。

「我、次元の狭間、『禍の団』にいた時には知らなかった事、たくさん知った。キスをすると幸せになる。マダオの中のマダオを極めた。独りでは気付かなかった事、気付いた」

これまでの思い出を、一つ一つ丁寧に口にしていくオーフィスちゃん。俺もその場面を思い出しながら彼女の話を聞き続ける。

「フューリーと過ごす。我の中、知らない感情が生まれた。理解出来ない。言葉に出来ない。でも、不快じゃない。この感情の正体、我は知りたい。次元の狭間に帰るより、静寂を得るより、我はこの感情が何なのか知りたい。フューリー、ヴァーリ、我は知りたい」

・・・何となくだが、俺にはその答えがわかった。自惚れで無ければ、オーフィスちゃんは大ぶん・・・。

「・・・それが『楽しい』という感情よオーフィス」

「楽しい・・・？」

「亮真の家に住む事で、あなたは初めて他者との『触れ合い』を経験した。一緒にご飯を食べて、一緒に遊んで、一緒に寝る。それは、次元の狭間に独りでいても、『禍の団』にいても経験出来なかった事。『無限の龍神』でも、『禍の団』のトップでも無く、ただのオーフィスとして亮真達と過ごす事で初めてあなたは『孤独』では無くなった。そして、他者との触れ合いの中で、自分以外の誰かと一緒にいる事の『楽しさ』を知った。それが、あなたの言う感情の正体よ」

「・・・わからない」

「わからなくていいの。あなたはもうそれを『知った』。頭では無く、心でね。それでも不安だっというのなら、また亮真の家に遊びに行けばいいわ。あなたがそれを理解出来るまで、何度でもね」

「フューリー。我、またフューリーの家に行ってもいいの？」

最早答える必要も無いだろうが、俺はオフィスちゃんにハッキリ告げた。

「もちろんだ。さつきヴァーリさんにも言ったが、いつでも遊びに来てくれ。キミはもう、俺の日常の一部・・・大切な友人の一人なんだからな」

初めて顔を合わせた時、この子は俺の日常に入りたいと言った。その為にわざわざこうして俺を訪ねて来てくれた。むしろこっちからお願ひしたいくらいだわ。

「そうか。今なら少しわかる。それは・・・嬉しいこと」

「ツ・・・。オフィス、あなた今、笑って・・・」

え、ちよ、マジで!? 超見たいんですけど! ええい、おんぶしてるから見えねえよちくしようがあ! 誰かカメラ貸してくれえええええええ!!!

S I D E O U T

リアスS I D E

「・・・ねえ、あの三人から溢れる親子みたいな空気は何なの?」

私達は花火そっちのけでリヨーマ、ヴァーリ、そしてオフィスの三人の様子を凝視していた。

「納得いかないわ、髮色的に、私の方が違和感ないと思うのに」

「そ、それなら私も・・・!」

朱乃とレイナーレの発言は無視するとして・・・。いいかげんあの空気を何とかしないとマズいわね。

「(お願ひだから、無限龍にまでフラグは建てないでちようだいね)」
私は心の中で強くそう願うのだった。

リアスS I D E O U T

イツセーS I D E

「始まつちやっただわね」

会場まであと少しという所で、打ち上げが始まってしまった。

「だから言ったのよ。私なんか置いていけばよかつたって」

「つたく、まだそんな事言うのかお前は」

「・・・ゴメン。私が言っている事じゃなかったわね」

ああくそ、調子狂うぜ。いつものコイツならこういう事言わねえはずなのに。どんだけ俺に対して悪いと思ってるんだ。

「まあ、気にすんなって。一応、目的は果たせたしよ」

「目的？」

「おう、女の子と一緒に花火を見るって目的をな。まあ、相手がお前だって事は目を瞑るとしてだが」

「しつづれいねアンタ。私だってアンタなんかじゃなくて彼氏と一緒に見たかったわよ」

「え、お前って彼氏いんの？」

「そ、それは・・・まだいないけど」

「だと思った」

「な、何よ！　そういうアンタだっていないんでしよう！」

「おい、何で決めつけるんだよ！」

「ふん、ちよつと評価が良くなったからって、アンタが変態なのは相変わらずなんですよ」

評価が良くなった？　何の話だ？

「・・・ね、ねえ、もしかして、ホントに彼女いるの？」

何でそこまで気にするんだコイツ？　そんなに俺を笑いのタネにしたいのか？

「・・・ねえよ」

「え？」

「だから、いねえって言うてるの！　これで満足かよちくしよう！」

うう、何で馬鹿正直に答えてんだよ俺！

「ふ、ふうん。そっか、いないんだ。ま、そりやそうよね。アンタに彼女とか、かなりの物好きじゃないと絶対無理だもんね」

「この野郎、嬉々として傷口に塩をぐっ!？」

「誰が嬉しがってるって言うのよ！」

「だ、だから首は止めろってええええええええ!!！」

もうやだ、何なのコイツ。誰でもいいから代わってくださいよ！

『モツピー知ってるよ。いつか素直になれる時が必ず来るって』

「うわっ!?! ビ、ビックリした。おい桐生、いきなりモツピーキーホルダーのボタン押すなよ!」

「私、押さないわよ?」

「・・・え?」

第三百三十七話 失敗から立ち上がるからこそ価値がある

花火大会終了後、そのままオーフィスちゃん達とはお別れする事になった。夜も遅いし、もう一日くらい泊まっていけばいいとも思ったが、そういうわけにもいかないらしい。

「この浴衣、本当にもらってもいいの?」

「ええ。あなた達に合わせて作った物だから、私達じゃ着れないしね」「オーフィスちゃん、絶対また遊びに来てくださいね!」

「アーシア、我、約束」

最後の別れを済ませ、オーフィスちゃん達は去って行った。．．．なぜだろう。今別れたばかりなのに、近い内にまた顔を合わせる事になる気がする。

「とんでもない来客だったけど、終わってみると呆気無かったわね。．．．さあ、みんな! のんびり気分は今日で終わりよ。サイラオーグとのゲームまで残り三日。最後の仕上げに入るわよ!」

リアスの言葉に頷く彼女の眷属達。三日後．．．リアスとサイラオーグさんが勝負するのか。今回の勝負の結果は俺にも関係があるからちよつと緊張していたりする。

「うーい、ひっく。おお、そういやフューリー、お前に言っておかないといけない事があったんだわ」

「なんですか?」

「お前、今度のレーティングゲームで．．．」

そうしてアザゼル先生の口から語られた内容に、俺やアーシア、黒歌、さらにはレイナーレさん達もそろって目を丸くするのだった。

．．．
．．．
．．．

レーティングゲーム当日、俺と俺の眷属＋アーシアとロスヴァイセ先生は、冥界のアガレス領の都市、アグレアスという所のホテルへ転

移魔法でやって来ていた。すげえな、空中都市って呼ばれてるらしいが、本当に空に浮いてるぞ(´▽｀)。

「おう、来たなお前等」

到着した俺達をアザゼル先生が出迎えてくれた。そのまま用意してもらっているという部屋まで先生に案内してもらった事になった。

「先生、兵藤君達は？」

「もう来てるぜ。お前等と違ってゴンドラとリムジンでの移動だな。都市への入り方にはいくつか方法があるが、お前等みたいに魔法陣による転移ってのは特別なんだぜ？ 伝説の騎士であるお前だから許可が出たんだ。精々アガレスに感謝しとけよ」

先生は他にも色々説明してくれた。試合はこのホテルの隣に建つアグレアス・ドームという所で行われる。会場が開くまでまだ数時間もあるのに、既にドーム前にはたくさん悪魔のみなさんが集まっているらしい。

「それだけリアスとサイラオーグさんの勝負が注目されているという事ですか？」

「もちろん、若手実力ナンバーワンの試合が注目されるのは当然だが、理由はそれだけじゃねえ。このゲームのゲストに呼ばれた『皇帝』デイハウザー・ベリアル。そしてフューリー、お前とお前の眷属達を一目見る為にやって来てるんだらうよ」

そう、それこそが俺達がここに呼ばれた理由だった。リアス達の試合にゲスト出演してくれ・・・あの夜、アザゼル先生は俺にそう頼んで来た。しかも、俺だけじゃなく、俺の眷属である黒歌達、そして何故か関係の無いアシアまで呼ばれてしまったのだ。

「あ、あの、アザゼル先生。本当に私もお呼ばれているのでしょうか？ 私はリョーマさんと違って神器を持っているだけの普通の人間なのですが」

「(神と交信できるヤツを普通とは呼ばん!)戸惑う気持ちはわかるぜアシア。けどな、実は今、冥界ではお前の人気も密かに上がってるんだぜ。「アシアちゃんになら退治されてもいい」「アシアちゃんに罵られながら聖水をぶっかけられたい」「むしろアシアちゃんの

聖水をかけられたい」みたいな感じのファンが急増しているみたいだぞ」

「おいコラ胃痛総督。ウチのアーシアの前で変な事言うんじゃないわよ」

「誰が胃痛総督だテメエ！」

「私の聖水？ あ、私の自作した聖水って事ですか？」

「アーシアは気にしなくていいっすよー」

ミツテルトさんがアーシアを会話から遠ざける。というか、それファンじゃねえだろ。変質者じゃん。今後は冥界に来たらアーシアを一人にしない方がいいな。

「その理由だと、眷属でない私がここにはよくないのでは？」

「お前だって、指導した身としては近くでアイツ等の姿を見ていたいだろ？ ゲスト参加させる条件にお前をねじ込んだ。気にせずコイツ等と一緒に観戦すればいいさ」

「あ、ありがとうございます」

「ま、それでも気兼ねするっていうんなら、さつさとコイツの眷属になるんだな。お前もそのつもりなんだろ？ (ボソ)」

「なっ・・・!？」

気遣い出来る大人って素敵やん。ロスヴァイセ先生の顔が赤くなっただが・・・これはもしかやフラグか？

「っと、着いたぜ。ここがお前達の控室だ」

カードキーで扉を開け中に入る。控室というには豪華すぎる設備が俺達を出迎えた。てか、あの馬鹿でかいベッドは何なんだよ。七人八人は余裕で寝れそうだぞ。

「凄い大ききさだな」

「くくく、使いたければ使っていぜ。ただし、汚すなよ？ 血つてのは落ちにくいもんだからよ」

どんな使い方したらベッドの上で流血する事になるのか教えてもらいたいんですけど。暗殺ごっこでもしろってか？

「ゲームの開始は夜だ。それまで基本的には自由に行動してもらって構わん。ただし、外には出るなよ。マスコミがネタを探すのに血眼に

なつてやがるからな」

そう言い残して、アザゼル先生は部屋を出て行った。まあ、テレビもあるし、時間を潰すだけなら何とかなるだろ。

「さてと、可愛い妹の様子でも見に行ってみるかにやー」

「場所はわかるのか？」

「あの子の気配を手繰れば余裕にや。それじゃご主人様、ちよつと行つて来るね」

続いて黒歌が退出する。さて、俺は何をしようかな。

「アーシアー！ ゲーム持つて来たから一緒にやるつす！」

「は、はい。私でよければ」

「神崎様、お茶を淹れましたのでとりあえず一服いたしませんか」

「ありがとうございます、レイナーレさん」

「い、いえ、お仕えさせて頂く身として当然の事です」

そういえば、せっかく眷属になつてもらつたのに、最近レイナーレさん達とあまり関われなかつたな。丁度いい機会だし、色々話をでもしてみようか。

.....

三十分ほどで黒歌が戻つて来た。彼女曰く、小猫も他の子達も落ちついていて、あれならいつも通りの実力が発揮出来るだろうとの事だった。黒歌はこういう事はハツキリ言ってくれるから、彼女がそう言うのなら間違い無いだろう。

それからさらに二時間くらい経つた頃だろうか、不意に部屋の扉がノックされたので出てみると、そこにはレイヴェルさんが立っていた。

「やあ、レイヴェルさん。キミもここに来ていたんだな」

「お、お休みの所申し訳ありません、フューリー様。今、お時間はよろしいでしょうか？」

「ああ、大丈夫だ。何か用が？」

「実は、どうしてもフューリー様にお会いしたいという者がおりまし

て」

そう言つて、チラリと物影の方へ目をやるレイヴェルさん。つられてそちらに目を向けるが誰もいない。

「・・・少々お待ち下さい」

レイヴェルさんが物影の向こうへ消える。

「もう、何を躊躇っているのですかあなたは！」

「ま、待てレイヴェル！ まだ心の準備が！」

「いいから行きますわよ！」

勢い良く飛び出して来たレイヴェルさん。そんな彼女に手を掴まれて姿を現したのは、見覚えのある男性・・・彼女のお兄さんであるライザー・フェニックスさんだった。

「ライザーさん？」

「はい、私の兄であるライザー・フェニックスですわ。ゲームの前にアス様達にアドバイスを差し上げようと参ったのですけれど、フューリー様もいらっしやると聞いてどうしてもお会いしたいと駄々をこねましたので、こうして連れて来ましたの」

そ、そうなんだ。けど、正直あの婚約パーティーを台無しにしてしまった身としてはめっちゃ気まずいんですけど。

でも、わざわざ向こうからこうして会いに来てくれたんだから、俺も礼義を尽くさないとな。とりあえず、無難に挨拶でもしよう。

「お久しぶりです、ライザーさん」

「オッス！ お久しぶりですフューリー先輩！」

・・・え？ なにその体育会系っぽいノリの挨拶？ この人こんなキャラだったっけ？

「前回のレーティングゲーム見させてもらいました！ 土壇場のパワーアップ！ それからの無双！ やっぱりフューリー先輩は俺の目標です！」

誰か！ 誰か説明して！ 見た目チョイ悪ホストなのに、何でこんなにキラッキラな目をしてんのこの人!?

助けを求める様にレイヴェルさんへ視線を向けると、彼女はわかっているとばかりに頷いた。

「神崎様、以前ご説明させて頂いておりますが、お兄様は神崎様との勝負に負けて以来、ずっと引き籠つておりました。ですが、最近になって引き籠りを脱却したのですわ。その切っ掛けになったのがあの『鋼の救世主』なのです」

またか！ ミリキャス君影響力与えすぎいい！

「あの本を読んで俺は思い出した。レーティングゲームに参加するようになったのは、そもそも強くなりたいと思ったのは……フューリー先輩の様なヒーローになりたかったからだ！ 自己顕示じゃない、かつてのフューリー先輩の様な本物のヒーローになりたかったんだと！」

「お兄様は変わりました。いえ……本来のお兄様に戻ったと言った方がよろしいでしょうか。多用していたサクリファイスを封印して、各眷属の特性と能力をフルに活用した新たな戦法を確立しました。結果、最近のゲームは連戦連勝。ランキングも急浮上しました」

「ははは！ 犠牲を前提とした勝利など、ヒーローには相応しくないからな！ そうでしょう、フューリー先輩？」

「そ、そうですね。ところで、その先輩というのは……」

「あなたは俺の尊敬の対象であり目標ですからね！ その気持ちを忘れない為です！」

齒を光らせながらスマイルを見せるライザーさん。以前のような軽薄そうな笑みでは無く、スポーツマンの様に爽やかさに溢れる笑顔だった。

「それでは、俺はこの辺で失礼します！ いずれリアスやサイラオーグ・バアルとも試合をする事になるだろうし、今から研究をしておかないといけないので！」

「あ、お兄様！ もう、言いたい事だけ言って帰る所は変わってませんわね。では、神崎様、貴重なお時間を頂きましてありがとうございます」

去って行くライザーさんを、レイヴェルさんはぺこりと頭を下げて追いかけて行った。

「……なるほどな。最近のライザー・フェニックスの変わり様にはお

前が関係してたってわけか」

物陰からアザゼル先生が姿を現した。ライザーさんもそうだけど、物影から登場するのが流行ってんの？

「いつからそこにいたんですか、先生・・・？」

「話し中だったから待っててやったんだよ。おかげで面白い話が聞けたから満足だがな」

何か用事があるのか尋ねると、先生も俺に話があるらしく、しかも二人で話したいという事なので、先生の部屋へ行く事になった。

「早速だがフューリー、お前はバアル家の事をどれくらい知っている？」

向かい合って席に着いた所で、先生はそう問いかけて来た。少し悩んだが、ここには俺と先生しかいないのでぶつちやけさせてもらおう。

「くだらない面子やプライドでサイラオーグさんと彼のお母さんを追いつめた連中の集まり」

「ハッキリ言いやがるな」

「・・・すみません」

いま持つてる情報だとそれしか感想が無いんですよ。

「上級悪魔つてのは家柄や血筋を重んじる家がほとんどだ。しかもバアルは大王の家。その拘りは他の家の比じゃねえ。悪魔の価値観は独特だからな。人間であるお前には理解出来ねえ所もあるだろう。会場を設定する際にも、現魔王派とバアル家で揉めに揉めてな、それをアガレスが取り持ったからこそアガレス領になったってわけだ。そういうのもあつて、今回のゲームを魔王とバアルの代理戦争だという者もいる。こうしている今も、裏では政治家連中が色々動いてやがるんだろうぜ」

「それはサイラオーグさんも？」

「志や力だけでは魔王にはなれない。ヤツもそれをわかっているからこそ、パイプ作りの為に関係を持っていくんだろう」

「では、その人達はサイラオーグさんの夢を応援してくれているんですか？」

「ところがそういうわけでもない。アイツの背後にいる連中が欲しいのは、現魔王に一矢報いる為の駒だ。連中が求めるのはサイラオーグの夢に心酔するものを集め、それを後押しする自分達を支持させる為の言わば政治道具。表向きは協力する姿勢を見せてはいるだろうが、裏じゃサイラオーグの事を蔑んでいるだろうさ」

それ本当にバアル家なんですか？ 実は本当のバアル家は別にいて、サイラオーグさんはそっちの生まれ・・・とかなんじゃないの？ 「さらに言えば、その関係はサイラオーグが勝ち続ける事によって続いている。負ければ連中は即座にサイラオーグを捨てるだろう。合理的な考えを持つ悪魔には、利用価値が無いものに用は無いからな。実力だけが価値のある世界・・・それが悪魔業界なのさ」

「・・・」

「とまあ、色々話をさせてもらったわけだが・・・ここで提案がある。お前、俺と一緒に一芝居打ってみねえか？」

その言葉に顔を上げると、アザゼル先生は何やら企んでいる様子の表情を俺に向けていた。

「俺は悪魔の考えを否定出来ねえし、するつもりも無い。利用し、利用される。そうやって悪魔は栄えて来たんだからよ。・・・だが、教師なんてやるようになった所為か、懸命に努力する若いヤツ等を見てるとどうもお節介焼きたくなっちゃうんだよな。失敗を恐れず、全力で夢に突き進む。そこにくだらねえ年寄り共の思惑が入り込む余地なんて本来あつてはならねえんだよ。悪魔だろうがなんだろうがな」

そう語るアザゼル先生は、誰が見ても完璧な「教師」としての顔をしていた。俺の知る、時に厳しく、時に優しく指導してくれるアザゼル「先生」がそこにはいた。

「乗るかどうかはお前次第だ。やったからと言って本当に意味があるのかどうかもわからねえ。だが、お前が・・・英雄であるフューリーがサイラオーグの夢を応援すると大々的に発言すれば・・・」

「やります。やらせてください」

それでサイラオーグさんがちゃんと評価されるんなら、名前だろうがなんだろうが何でも利用してくれて構わん！

「へっ。最後まで言わせろよ。まあいい。なら打ち合わせをするぞ。いいか？ おそらく試合開始前に進行役がグレモリーとバアルの両方についてお前に色々聞いて来るはずだ。そこで、お前がまずこんな風に答えてだな・・・」

そして、俺は一時間ほどアザゼル先生と綿密に打ち合わせを終えた所で、自分の部屋に戻ったのだった。

第三百三十八話　せきりゆーてーが託されたもの

イツセーSIDE

試合開始を間近に控え、俺は一人サーゼクス様のいるというVIPルームへとやって来ていた。さつき控室へ現れたライザーから、サーゼクス様が俺に話があると聞いたからだ。

それにしても、あのムカつくホストキャラだったライザーが随分と変わってたな。正直、以前のアイツを知っている身としては、違和感ありまくりでちよつと気持ち悪かったわ。なのに、部長つてば「サイラオーグに続いて、またあなたのライバルが増えたわね」なんて俺に言うんだ。今回の対戦相手であるサイラオーグさんはまだわかるけど、ライザーは何のライバルだつて言うんだろう？

「よく来てくれたね、イツセー君。試合前で集中したいはずだろうに」
おっと、いかんいかん。焼き鳥野郎の事なんかより、今はサーゼクス様とのお話の方が大事だ。

「お気遣いありがとうございます。ところで、こうしてお邪魔しておいてなんですが、部長じゃなくて俺でいいんですか？」

「ああ。話がしたいのはリーアじゃなくキミだからね」

「お、俺、何かやらかしちゃいました？」

「はは、そうじゃないよ。むしろキミにはお礼を言いたいんだ」

「お礼・・・ですか？」

「・・・ありがとう、イツセー君。キミ達のおかげで、京都での英雄派の計画は阻止され、妖怪達との協力体制を築く事が出来た。私達の目指す平和と安寧の未来へまた一歩進む事が出来たのは、キミ達が命がけで戦ってくれたからだ。本当に感謝しているよ」

引き締まった表情で頭を下げるサーゼクス様。魔王様が下級悪魔に頭を下げる。そのありえない姿に、俺は慌てて声をかけた。

「あ、頭を上げてくださいサーゼクス様！俺なんかそんな・・・！」
「なんか・・・ではないよ。キミ達の功績はキミ達が思っているよりもずつと大きいんだ。これはまだリーアにも話していいのだが、キミや他の眷属の子達の何人かには、四大魔王及び上層部による協議の

元、昇格の推薦が発せられる予定になっている」

「はあ、昇格ですか……。つて、えええええええ!? し、昇格つて、俺がですか!？」

降って湧いた話に、俺は間抜けにも繰り返すだけだった。いや、だって昇格つて。そりゃいつかは出来たらいいなとは思ってたけど、このタイミングですか!？」

「驚く事は無い。キミ達がこれまで重ねて来た功績というのはそれだけのものだからね。聞けば、京都で新たな力の発現に成功したそうじゃないか。実力で言えば中級などつくに通り越して上級レベルと言っても差し支えないだろう。それだけのものを持つキミ達が、下級のままでいるのもおかしい話だからね」

「あ、えつと……。ど、どうもです」

サーゼクス様のべた褒め攻撃に、気の利いた返しも出来ずただ頭を下げるだけの俺。魔王様直々のお褒めの言葉とか、俺なんかには勿体無過ぎだろ。

「で、でも、サーゼクス様は功績と言ってくださいましたけど、正直、俺達はただ俺達の使命を果たすというか……。自分達の命を守る為に英雄派と戦っただけで、結果的に京都は守られたというか……。」

それに、連中へ決定打を与えたのは、俺達じゃなくスコルだしな。今も目を瞑れば、褐色肌の妖艶な美女が英雄派の幹部や構成員達を火達磨にするあの光景が鮮明に思いだせる。あれが本当の地獄絵図つて言うんだろうな。

「……。キミはごうも自己への評価が低い傾向にあるようだ。結果的だろうとなんだらうと、キミ達が守ったという事実は変わらない。そこは素直に誇るべきだよイツセー君」

「あはは、まあ、周りにいる才能の塊みたいなヤツ等に比べたら、俺なんて全然ですからね。置いてかれない様必死に食らいついてますよ」
「自分の未熟さを受け入れ、それでも高みを目指し努力を続ける。……それも立派な才能だ。キミも……。そして『彼』もな」

「……。サイラオーグさんの事ですね」

あの人の過去は俺も部長から聞いている。滅びの力を持たずに生

まれながらも、血の滲むなんて言葉じゃ収まらないほどの壮絶な努力を重ね、今の実力を得たサイラオーグさん。俺があの人立場だったら間違い無く途中で挫折しているだろうな。でも、サイラオーグさんはそうじゃなかった。蔑まれながら、疎まれながら、それでも自分を鍛え続けた。その姿は、一人の悪魔・・・いや、一人の男として、とても尊敬出来るものだった。

「今日の試合は冥界全土に生中継される事になっている。・・・実力さえあれば出自など関係無く押し上げられる冥界を目指すサイラオーグ。転生悪魔でありながら、メキメキと頭角を現して来たキミ達。今回のゲームは一部で代理戦争だと囁かれているらしいが、私はこう言わせてもらいたい。今回のゲームは・・・キミ達と同じ下級悪魔、そして転生悪魔達にとって夢や希望の込められた試合だと」

「夢や希望・・・」

「特にイツセイ君。「それいけ！ せきりゅーてー」のモデルであるキミは冥界の子ども達にとってまさに夢と希望の象徴なんだ。放送局には子ども達からキミへファンレターがたくさん送られて来ているそう。セラフォルも驚いていたよ。まさか、ここまで人気が出るとは思ってなかったらしい」

そう言って、サーゼクス様は俺に手紙を数枚手渡して来た。一枚一枚に目を通して行くと、子どもらしい拙い文字で色々な事が書かれていた。

『せきりゅーてーがすききらいしたらたらダメだっていうから、にがてだったおやさいもがんばってたべるようになったよ！』

『ぼくはなんでもすぐにあきらめてしまいますが、いまちようせんしていることはぜったいにあきらめずになんぼろうとおもっています。じゃないと、せきりゅーてーになぐられちゃうから！』

『おおきくなったらせきりゅーてーみたいになつて。パパとママをまもりたいです！』

「これ・・・こんな・・・」

言葉が出なかった。手にしている手紙がもの凄く重く感じる。これが・・・この重さが、自分じゃない誰かの夢を背負う重さなのか・・・

？

「どうだい、初めてのファンレターは？」

「・・・俺は、自分の夢に対する答えもまだ出せていない半端野郎です。正直、今の俺には荷が重すぎます」

「そうか・・・」

「けど、これだけはわかります。半端野郎だろうがなんだろうが、これは絶対に投げ捨てちゃいけないものだって。俺は、この手紙の重さを・・・この手紙に込められた子ども達の想いを背負えるだけのヤツにならないといけないんだと思います」

俺の答えに、サーゼクス様は嬉しそうな笑みを浮かべた。

「・・・やはり、キミは神崎君によく似ているな」

「先輩と俺がですか？ いやいや、あんな完璧超人と俺に共通点なんて・・・」

「夢を大切にして、それを守る為に戦う。今、子ども達の夢の為に決意を固めたキミを見て、私は神崎君を重ねてしまった。もしかしたら、彼の背中に追いつけるのは、キミの様な者なのかもしれないな」

「サーゼクス様・・・」

「さて、長々と話をして済まなかったね。キミもそろそろ戻るといい。若手悪魔達の全力のぶつかり合い、期待させてもらおうよ」

俺はVIPルーム後にした。昇格の話、子ども達の夢の話、色々考えさせられる内容ばかりだったけれど、ここからは試合に向けて集中しよう。

・・・
・・・
・・・

ゲーム開始を目前に控え、俺達は試合会場となるドームの入場ゲート前に集まっていた。ゲートの向こうからは会場の熱気と共に観客の怒号にも似た歓声が聞こえて来ている。

ゼノヴィアと朱乃さん以外はみんな駒王学園の制服を着ている。けど、この制服はゲーム用の特別仕様であらゆる攻撃に対する防御力が高められている。無敵ってわけじゃないけど、普通の制服よりは遥

かにマシってわけだ。

ゼノヴィアは以前から愛用している自前の戦闘服。そして朱乃さんは・・・何故か巫女服だった。前にお家にお邪魔した時に着ていた物と同じっぽいヤツだ。その姿で懐からお札を取り出す様は、ゲームなどでお馴染の退魔士みたいに見えた。タイトルをつけるなら『退魔士アケノ』って感じ？・・・名前をカタカナにした意味は特にありませんです、はい。

「凄まじい歓声だな。試合開始前からこの熱気は異常とも思えるが・・・」

「無理も無いさ。なにせ、今回はゲストも含め、色々豪華だからね」

「デイハウザー・ベリアル。そして神崎先輩・・・」

「『皇帝』と『騎士』の共演というわけね。特にリヨーマは『鋼の救世主』発表から初めて公の場に出て来たわけだから、大変でしょうね」
「うう、今からその中へ向かう事を考えるだけでもう・・・」

ゼノヴィア達が口々に感想を漏らす。ギャー助以外は緊張している様には見えないし、ギャー助も例の段ボールを持って来てない辺り成長しているようだ。

「みんな、試合開始前に聞いて欲しい事があるの」

部長が俺達一人一人の顔を見渡す。自然と俺達は背筋を伸ばしていた。

「私達は前回のレーティングゲームで醜態といってもいい結果を出してしまった。だけど、あの時の私達と今の私達は違うわ。例えば相手が若手ナンバーワンと言われているサイラオーグだろうと、私達ならきつと勝てるはず。いえ、必ず勝ってみせるわよ」

「当然です」

「私はこの試合で汚名を払拭してみせる」

「ふふ、リヨーマの見ている前で二度も無様な姿は晒せませんわ」

「・・・やってやるです」

「あ、当たって砕けますうー！」

それぞれに決意を口にする木場達。その時、ゲートの向こうからアナウンスが聞こえて来た。

『では、両チームに登場してもらいましょう！　まずは・・・東口ゲートからサイラオーグ・バルチームの登場です！』

声援に歓声。バルチームの入場で会場は大きく震えた。

『そして西口からは・・・リアス・グレモリーチームの入場です！』

「出番ね。行くわよみんな！」

部長が先頭に立って進み始める。そっぴや、俺だけ決意表明してないな。俺は早足で部長に近づき、そつと呟いた。

「部長、俺、この試合で自分の全てを出し切ってみせます。だから、みんなと一緒に見ててください。俺の・・・夢の形を」

この試合の中で、俺は一つの答えを得る事になるだろう。予感ではなく、俺はそう確信していた。

第三百三十九話 悪魔よ！これが騎士（笑）だ！

「おうお前等、そろそろ会場に向かうぞ」

どれくらいの間を控室で過ごしただろう。アザゼル先生からようやくの出番を言い渡された俺達は、先生の案内で会場へと移動した。今歩いているこの通路が、俺達に用意されたゲスト席まで直通になっているらしい。

それにしても、こうして歩いているだけで、会場の熱気やお客さんの声が届いて来ていてヤバイ。俺、今からあの大観衆の中に突撃せにやなんのですね……。行く前からもう帰りたくなって来たんですけど。

「はうう、心臓のドキドキが止まりません」

「あ、あはは。ビビる事は無いっすよアーシア。みんな野菜だと思えばいいっすよ」

「こ、声が震えているぞミッテルト。仕方の無いヤツだ」

「・・・カッコつけたいのならまずはその額の汗を拭きなさいカラワナ」

「そう言うアンタは右手足と左手足が同時に動いてるわよレイナーレ」

「なっ!? こ、これはアレよ！ ロボットの真似をしてるだけよ！」

「みなさん、一度深呼吸した方がいいのでは？」

「ったく、情けねえヤツ等だ。ちつとはフューリーを見習いやがれ」

凄く・・・吐きそうです。

「お前等はもうフューリーの眷属だ。これから先、嫌でも注目される事になるだろう。いつまでもそんな情けねえ姿を晒してたら舐められるぞ。そして、それはフューリーが舐められる事と同じだと思え。王は眷属を映し、眷属は王を映す。伝説の騎士に相応しい眷属になってみせろ。それが、眷属となったお前達の使命だ」

「・・・はい」

「わかってるわよそれくらい」

「へ、ならいいんだけどよ」

はその人気もとうとう伝説級になっちまったってか？」

「なっ・・・」

「くくく、いいぜその呆然とした顔。溜飲が下がるってのは正にこの事だなあ」

「きゆうくく」

「アーシア、しつかりするっす！」

「た、大変だわ！ どこか寝かせられる所を！」

「ヤバい、カオスってまいましたぞ！ 何とか收拾つけんとマズイ！」

などと思いつつ、解決策を思いつけない俺の耳に、誰かの声が届いた。これだけの声が飛び交う中にも関わらず、俺は何故かその声をハッキリと聞き取れた。

「流石の人気ですな騎士殿。かくいう私も、あなたと会えるこの時を楽しみにしていた一人なのだが」

その声の主は、灰色の髪と瞳が特徴的な男性だった。彼の姿を捉えたアザゼル先生が一步前に出る。

「これはこれは、『皇帝』デイハウザー・ベリアル殿。お会い出来て光栄です」

「こちらこそ光栄です。アザゼル総督」

ガツチリ握手を交わす両者。デイハウザー・ベリアルさん。その名前には聞き覚えがある。レーティングゲームのランキングの一位で俺と同じくゲストとして呼ばれた人だ。やっぱりチャンピオンにもなると風格が凄い。

「そちらの少女の介抱もしないといけないでしょうし、まずは席に移動しましょう。出来れば静かに話でもしたいが・・・これだけの観客を抑えるのは流石に不可能ですし、自然に収まるまで待つしかなさそうだ」

という事で、俺達はベリアルさんと一緒にゲスト席へ移動した。豪華な椅子やソファアが並んでいたの、早速アーシアをソファアに横たわらせた。

「お待ちしておりますよみましたよみなさん！ 私は本日の実況を担当します

ナウド・ガミジンと申します！」

派手な格好の男性にそう自己紹介をされ、俺は席に着いた。そして、気絶していたアーシアが目を覚ました頃、ガミジンさんのアナウンスでスタジアムの中心に現れたモニターの向こうにリアスとサイラオーグさんが眷属と共に姿を現した。

「・・・フューリー殿」

その時、ベリアルさんが囁く様な声と共に俺に一枚の写真を見せて来た。その写真には、黒い長髪の日本人男性。そして、ベリアルさんとはどこことなく雰囲気似ている女性が並んで写っていた。

「この二人、いやどちらかだけでも構わない。見覚えは無いだろうか」「いえ、二人とも初めて見る顔ですけど」

「・・・そうか（彼が姿を現して半年ほどしか経っていないと聞く。ならば、やはり二人の前に現れたという蒼の青年は別人か・・・）」

「この二人が何か？」

「ああ、私の従姉妹とその恋人だ。美人だろうか？」

「ここで身内自慢!? いや、確かに美人なのは間違いないですけど・・・。」

ベリアルさんはそれ以上何も言わず自分の席へ戻った。なので、俺もひとまずリアス達の方へ集中する事にしたのだった。

S I D E O U T

イツセーSIDE

観客達のいるスタジアムの上空に浮かぶ浮島。それが俺達の戦うフィールドだった。既にサイラオーグさんとその眷属達はフィールドに揃っている。そこまで伸びる螺旋階段を上り、用意された陣地へ辿り着く。人数分の椅子と謎の台、そして移動式の魔法陣。果たして今回のルールはどんなものなんだろう。

『客席の、そしてテレビの前の皆様、ごきげんよう！ 今夜の実況を務めさせて頂きますのは、元七十二柱ガミジン家の私、ナウド・ガミジンです！』

設置された巨大モニターにイヤホンマイクをつけた男性悪魔が映

し出された。

『既に客席のボルテージはマックス！ それもそのはず！ 今回のゲームは注目も注目！ 大注目のカードなのです！ そしてそして、この大注目のゲームに相応しい、とんでもないゲストがやって来ているのです！』

「まさか、実況までつくとはな」

「これがプロ仕様って事だね」

『ですがその前に、まずは今夜のゲームを仕切る審判役のご紹介！ 元人間の転生悪魔にして、最上級悪魔に位置し、さらにレーティングゲームランキング現在第七位！ その名は・・・リュディガー・ローゼンクロイツ！』

アナウンスと同時に魔法陣が宙に展開し、そこから銀髪のイケメンが現れた。あの人も元は人間……。しかも最上級悪魔で第七位とか凄過ぎだろ。俺からしたら眩し過ぎる存在だ。

「案の定、グレイフィア様ではありませんわね」

「これも大王家が絡んでいるのだろうか」

『さあ！ 続いてゲストの紹介です！ 一人目は、グレモリー家のアドバイザーにして墮天使の総督！ アザゼル様！』

瞬間、画面一杯に映し出されるアザゼル先生。おい、なにちやつかりゲスト出演してんだよあの人お！

『初めまして、アザゼルです。今夜は素敵な夜になりそうですね』

「・・・見事な営業スマイルね。あんな笑顔、今まで見た事無いわ」

「い、違和感ありまくりですう」

「つーか、今の口説き文句誰に言ったつもりなんだろう」

何だか見てはいけないものを見てしまった気分になる俺達だった。

『続いては、バアル家のアドバイザーにしてレーティングゲームランキング第一位！ 我等が王者にして“皇帝”！ デイハウザー・ベリアルさんです！』

『デイハウザー・ベリアルです。今日は解説としてこの場にいます。どうぞよろしくお願い致します』

「・・・あれが皇帝か」

「いつかは、彼と戦う日が来るのだろうか」

「今は雲の上の存在かもしれないが、いずれは必ず・・・」

俺は『皇帝』の姿を目に焼き付けた。

『そしてそしてそしてええええええええ!!! ついにこの方のご紹介です！ 私、まさか本当に来てくれるとは思ってませんでした！ かつて二天龍より悪魔を救い、こうして今私達の前に蘇った生ける伝説！

レーティングゲームで見せた姿は正に大いなる怒り（フューリー）！

鋼の救世主、神崎亮真氏とその眷属の皆さんだあああああああ
!!!!
!!!

『『『『うおおおおおおお!!!』』』』

アザゼル先生、そして『皇帝』の時以上の凄まじい叫声があがる。離れているはずの会場の振動がこっちにまで伝わって来そうな勢いだった。

『さあ、それでは神崎氏より一言・・・』

『フューリーーーーーー!』

『神崎様あああああああ!』

『兄貴いいいいいい! 掘ってくれえええええええええ!』

『鋼の救世主』読んだぞおおおおお!』

『妾でいいからもらってくださーい!』

『アーシアちゃん! 俺だ! 契約してくれえええええええええ!』

『黒歌姐さんこっち向いてくださーい!』

『レイナーレエエエエエエ! あなたに合う鞭作ったからもらってくださーい! そしてその鞭で俺を! 俺をー!』

『カラワーナ様あ! 私女だけどあなたとならイケますううううう!』

『ミツテルトちゃんprpr!』

『ええい! 静かにしてください! 神崎氏がしゃべれないでしょうが!』

「ふふ、まるでアイドルね」

「先輩ならいけるかもしれませんね。シトリー眷属の子から聞きました、歌声も凄いらしいですよ」

「それは音痴的な意味で？」

「少なくとも、歌で泣いた事の無い子を泣かせるくらいの腕前はある
そうだよ」

「・・・聞いてみたいです」

「なら、勝利の打ち上げはカラオケにしましょうか」

「いやいや！ それよりも、所々に聞こえる危ない声援を気にしま
しようよ！ ええい、こんなだから冥界は変態の巣窟だって言われ
るんだよ！」

『ゴ、ゴホン！ 神崎氏へのインタビューはアザゼル総督とベリアル
さんへの見所についての質問と合わせて後ほど改めてという事で、先
に今回の試合のルールについて説明させて頂こうと思います！』

お、ついにルールの発表か。聞き逃さない様にしないとな。

俺は実況の声にしっかりと耳を傾けるのだった。

第四百四十話 努力を笑う者は本当の努力を知らない

「——以上で今回の試合におけるルール、ダイス・フィギュアの説明を終わります！」

丁寧に時間をかけたルール説明をそう締めくくるガミジンさん。とりあえず整理すると、お互いの『王』がサイコロを振って、出た目の大きさを戦う人や人数が決まるって事でOKな感じか？ レーティングゲームには色んなルールがあるって前にリアスが言っていたが、こう考えると俺がDと戦った時のルールってかなりシンプルだったんだな。最も、あの時はペロリスト共の乱入でゲームどころじゃなくなっただが。

「以上のルールを踏まえた上で、両アドバイザーにお聞きします。ズバリ、今ゲームの見所や期待する所はどんな所でしょうか？ まずはアザゼル総督、お願い致します！」

「そうですね。アイツ等・・・失礼、グレモリーチームは、前回のソーナ・シトリーとのゲームで随分不甲斐無い結果を出してしまいました。ですが、本人達はしっかり反省し、今日まで己を鍛え直して来ました。その結果を今回は見せてくれると思います」

「なるほど！ これは期待大ですね！ では、続いてベリアル氏、お願い致します！」

「サイラオーグ選手は心技体、全てにおいて『王』として相応しい人物です。その実力はチーム最強でもあります。決してワンマンというわけではありません。彼の眷属達にも注目してもらいたいです」

「サイラオーグ選手には、〴〵とおき〴〵があると窺っていますか？」

「ああ、〴〵あの技〴〵の事ですね。威力だけで言えば・・・おそらく一撃必殺は確実でしょうが、あまり実戦的向きではないので、この試合で使うかどうかは彼次第です」

「おおっと！ 何とも興味をそそるお言葉！ 果たしてサイラオーグ選手の〴〵とおき〴〵は炸裂するのか！ これも期待が高まります！」

興奮を隠しきれない様子のガミジンさんの煽りに、観客達のボル

テージも上がって行く。等と呑気に観察していたら、ガミジンさんの目が俺を捉えた。

「この流れで神崎氏にもお聞きします！ 神崎氏の日からご覧になりました、両チームはどのような感じなのでしょう！」

ツ……！ アザゼル先生の言う通り、やっぱり俺にも質問が来たぞ。やべえ、緊張して来た。果たして俺に先生の指示通りの受け答えが出来るだろうか……。

——教師なんてやるようになった所為か、懸命に努力する若いヤツ等を見ているとどうもお節介焼きたくなっちまうんだよな。

……何を弱気になってるんだ俺は。あれだけ若者の未来を考える、正に教師の鏡の様な人が俺に頼んで来たんだぞ。これに応えなきや男じゃない。

思い出せ、この世界に来て最初の頃、アルⅡヴァンモードではつちやけまくっていた俺を！ あの時に比べれば、ただ質問に受け答えするだけなんだ。何とかなる！

俺は決意を固め、二度と外すまいと決めた自重という名のリミッターを今一度解除した。

S I D E O U T

アザゼル S I D E

「この流れで神崎氏にもお聞きします！ 神崎氏の日からご覧になりました、両チームはどのような感じなのでしょう！」

さて、狙い通りの流れになったな。後はフューリーの野郎が打ち合わせ通りやるかどうかで決まる。

実況アナウンサーの質問に対し、フューリーはまずグレモリーチームの面々について相変わらざる歯の浮く様なセリフを混ぜながら語り始めた。……まあ、観客達を話に惹きつける効果はあったみたいだな。観客達がヤツの言葉を聞こうとあつという間に黙りこみやがった。

「ありがとうございます！ やはり人間界で同じ学園の通う仲という事で、グレモリーチームのみなさんについてはよくご存知のようで！」

それではバアルチームはいかがでしょう?」

「お答えしたいのは山々ですが、自分はサイラオーグさんの眷属の皆さんについてはあまりよく知らないんです。なので、申し訳ありませんが、サイラオーグさんについてだけお話しさせてもらってよろしいでしょうか?」

「お願いします!」

「彼は、『謹厳実直』な性格で、立ち振る舞いは『質実剛健』、自らの夢を堂々と語る姿はまさに『志操堅固』。尊敬の意味で使われる『男が惚れる男』という言葉がこれほど似合う人もいないでしょう。若手悪魔のみなさんの会合の場で初めて顔を合わせた時から、自分はずっと彼にそんな印象を持っていました」

(お前は別の意味で一部の冥界の野郎共から惚れられてるみてえだな)

それはともかくとして、俺の指示その一』とにかくサイラオーグを褒めまくる』をちゃんと実行したな。お前が褒めれば褒めるほど、サイラオーグはそれだけの逸材だと他の悪魔達に印象付ける事が出来る。しっかりやれよフューリー。

「神崎氏は随分とサイラオーグ選手を買っているのですね!」

「ええ。サイラオーグさんを見てみると、どうしても『ある人物』を思い浮かべてしまいました」

「ある人物とは?」

おっと、その一を終えたと思ったらもうその二に移るつもりか。実況アナウンサーに促され、フューリーは静かにその人物について話し始めた。

——それは、特別な力を持たずとも、真っ直ぐに、ひたむきに努力し、ついには一般人では決して越えられないはずだった限界を越え、真の強さを手に入れた男の物語だった。戦火に巻き込まれ、偶然戦う力を得たその男は、平和の為に集った者達と共に戦う道を選んだ。

「ですが、彼は戦いとは無縁の生活を送っていました。ですから、最初の方は随分と苦勞していたんです」

そんな男が戦えた理由・・・それはその男が得た力に備わっていたシステムの恩恵によるものだったらしい。

「ですが、そのシステムの本当の役目は彼の潜在能力を引き出し、力を振るうに相応しい『兵士』へ変える事だったんです。結果、彼はそのシステムに支配され、仲間には牙を剥きました」

暴走を仲間止められた男は、システムを封印して戦う事を決めた。その決意に応えた仲間達との特訓により実力を増していく男だが、一般人であった男には苦勞も多く、仲間助けられる場面も多く、いつしか面子に拘るようになり、ついには何故自分が戦いの道を選んだのか、そのきつかけさえも忘れてしまっていた。

「彼は仲間達の元を去ろうとしました。ですが、街を・・・人々を傷付ける敵を目の当たりにして、彼は思い出したんです。どうして強くなりたかったのか。それは、こんな非道を行う外道が許せなかったから。そんな外道に虐げられる人々を守りたかったからなんだと」

戦う理由を思い出した男は新たな力と共に、迫り来る百の敵をたった一人で壊滅させた。そこにいたのは最早ただの『一般人』ではなく、燃え盛る闘志を胸に戦う『戦士』だった。

「けれど、彼には最後にもう一つだけ、越えなければならぬものがあつたんです」

とある敵との戦いに男は敗れた。それは、男が百パーセントの力を発揮出来なかった事による敗北だった。だが、百パーセントの力で戦えば、それは男の崩壊を招く事になると仲間達は告げた。

「仲間は彼にこう言いました。以前の力を野球のボールとするならば、今の彼の力はボウリングの球だと。どれほどの速度でも前者であればぶつかっても跳ね返る。だが、後者はぶつかれば砕け散ってしまう。その様な状態で全力など出せるわけが無い。ただ一つ・・・システムを使わない限りは」

そして男は封印していたシステムを解放させようとした。けれど、最後の最後で踏みとどまった。システムを使ってしまうえば、それはもう自分の戦いでは無くなってしまうからと。

「これまでの努力、仲間達の想い、そして、胸に抱く闘志。文字通り、

己の持つ全てを發揮して放った彼の一撃は……まさに「神の雷」のごとく敵を貫きました」

「で、ですが、全力を出せば崩壊してしまうと……」

「それを避ける方法がたった一つあったんです」

「そ、それは？」

「全ての力を一点に集中し、完全に真芯で相手をとらえる事です。常に動きまわる実戦においてそれを見極め、かつ正確に撃つ……彼はそれをやってのけたんです」

己の力のみで手にした神技。それは男がシステムを……定められていた限界を越えた瞬間だった。

「……私も会ってみたいですね。その青年……いや、戦士に。ひよつとして、彼は『鋼の救世主』の一員なのは……？」

「……」想像にお任せします」

言葉を濁すって事は認めてるって事だぜフューリー。例の悪魔王ほどのインパクトは無かったが、それでも驚くには十分だったな。つたく、ヤツの世界じゃ一般人ですら最終的にそんな達人レベルになっちゃうのかよ。

「話は戻りますが、神崎氏はその戦士とサイラオーグ選手を重ねているという事ですね？」

「滅びの魔力を持たずとも、サイラオーグさんは努力を重ね続け今の実力を身につけた。……彼はよくブレイクスルーという言葉を口にしていました。サイラオーグさんはサイラオーグさんのブレイクスルーをいつか成し遂げるはずですよ」

ブレイクスルー……解明や進歩って意味でも使われるが、その男には限界を「突き抜ける」って意味の方が似合ってるな。そして、それはサイラオーグにも。

（さて、指示その二の「鋼の救世主に関連づけて話す」もクリアだ。話題性が絶頂期の今、多少強引でも悪魔達の食いつくネタを入れられればと思ったが……フューリーめ、強引どころかサイラオーグに上手く合わせやがって。そんなじゃ、止めと行きますか。

「失礼、発言してもいいですか」

「どうぞ、アザゼル総督」

「私、人間界では教師をやっております、ここにいるフューリー氏やグレモリーチームの学園に赴任しているのですが、私の耳にもフューリー氏がサイラオーグ選手を高く評価していると届いています」

「そうなのですか？」

「ええ、何せ・・・叶うのなら弟子にしたいと言わせるくらいですからね」

実際はサイラオーグから弟子にして欲しいと言って来たんだが、ここにや真実を知る者は俺とフューリーしかいねえ。嘘だろうがハツタリだろうが言ったもん勝ちだぜ。

弟子にして欲しいと弟子にしたいでは意味が全然違って来る。指示その一、及び指示その二でヤツが語った内容と、今の俺の弟子発言で、「サイラオーグは伝説の騎士にそこまで言わせるほど期待されている」とこれを見ている悪魔達は思うだろう。そうなればサイラオーグ・バアルという悪魔の「価値」を疑う者はフューリーの言う「くだらない面子やプライドを持つ連中」以外ほぼいなくなるだろう。

「フューリー氏は夢を持つ者やそれに向かって努力をする者を尊重しますからね。逆に、それを嘲笑う者や壊そうとする者は絶対に許しません。ですよね、フューリー氏。もしも・・・ええ、本当にもしもの話ですが、今回の試合の結果次第でサイラオーグ選手を見限ったり切り捨てる様な連中がいるとしたらあなたはどうしますか？」

わざとらしく質問する俺に、フューリーは満面の笑みで答えた。

「潰します」

・・・怖えよ馬鹿。つーか潰すってなんだよ。その笑顔も含めて、俺は好きになれないとか、許せないとかそんなくらいのレベルで嫌悪感を見せろって言ったはずだろ。・・・この前の祭りでビール飲んでなかったら多分エライ事になってただろうな俺・・・。

「まあ、あくまでもしもの話ですけどね」

「そうですね、アザゼル先生。まさか、サイラオーグさんみたいに立派な人を見限る様な者なんているはずないですよ」

「ですよね」

「ええ、そうですよ」

「はははは」

ふむ・・・これくらいやりやあいいか。最後の発言が少し過激だったが、フューリーはサイラオーグの味方の立場だと明確に示す事が出来た。・・・ふと思つたが、くだらねえ連中とパイプを築くより、フューリー一人バックにいる事にすりやそれだけでもう十分じゃねえか？（ま、俺がそこまで考える必要はねえか。後は他のヤツ等の考え次第だしな）

そう結論づけた俺はふとスタジアムを見渡してみた。

「・・・なんだありや？」

俺達の真正面・・・そこに蒼いローブを纏った謎の集団がいた。つか待て、あの最前列にいるのってカテレアじゃねえか。

「まさか、アレがサーゼクスの言っていた連中か？」

おいおい、サラツと見ただけでも百人以上いるじゃねえか。あの怪しきでよく入って来れたな。

「第四勢力の誕生・・・冗談じゃ済まなくなるかもな」

アザゼルSIDE OUT

サイラオーグSIDE

モニターの向こうで神崎殿と総督殿が笑い合っている。

「サイラオーグ様、フューリー殿はもしや・・・」

わかっている。神崎殿は俺の為にあのような発言をしたのだ。下手をすれば上級悪魔達と溝が出来るかもしれないというのに。

「憶えているか、お前達。あの会合の席で、ソーナ・シトリーの夢を笑った上層部の者達へ神崎殿が向けたものを」

「幻視してしまうほどの強烈な殺気・・・忘れるわけがありません」

「私は、騎士殿のあの笑顔に、あの時の騎士殿と同じものを感じてしまいました。騎士殿はそれほどまでに我が主の事を・・・！」

「どうしたベルーガ。何故声を振るわせる？」

「私は嬉しいのです！ 伝説の騎士殿に我が主君を認めて頂いた事がこの上なく嬉しいのです！」

「僕も同じです。サイラオーグ様は人間と交じってまで生きながらえた僕達の一族を受け入れてくれた。認めてくれた」

「なのに、そんなサイラオーグ様を認めてくれる者は少なかった。それが許せなかった。我等の『王』は他のどの『王』よりも優れているというのに……」

「けれど、今はもう違う……!」

「ええ。伝説の騎士に認められた。それだけで万の味方を得た様な気分です」

「……そうか」

「サイラオーグ様?」

先程から込み上げて来るこの感情は。全身を走る熱さは。漲る力の正体は……。

「今わかった。俺は神崎殿に認められた事が……嬉しいのだ」

母上や眷属以外の他人からあれほどまで純粋な称賛を受けた事が今まであっただろうか。少なくとも、俺の記憶の中には存在しない。レーティングゲームで勝利した際に観客から浴びる歓声とはまた違う。なんとさえいいのだ……。

「ふふ、サイラオーグ様、子どもみたいな目になってますよ」

「なに?」

「まるで憧れていたヒーローに会えた子どもみたいな……」

「……ああ、そうだな。神崎殿は間違い無く、俺の尊敬する真の騎士だ」

「では、そんな方にみつともない姿は見せられませんね」

「ふつ、そうだな」

相手はリアスだ。北欧の悪神や聖槍を持つ英雄との戦いを潜り抜けたアイツ等の実力は相当なものなのだろう。だが、そんな事は関係無い。俺は……俺の眷属達は誰が相手だろうと必ず勝つ。

「誰であろうと俺の野望を阻ませません! 立ちはだかるものはこの拳で撃ち貫くのみ!」

第四百四十一話 覚悟はいいか？オレは出来てる

???
SIDE

・・・聞こえる。あの子の声。あの子の名を呼ぶ声。

「サイラオーグ様、いい顔をしていらっしやる。こうしてテレビ越しでもあの方がどれほど喜んでいいのかわかりますな」

サイラ・・・オーグ。私の愛しい子・・・。

「奥様、今回もきつとサイラオーグ様は勝利されますぞ」

「・・・グ」

「え？」

「・・・オーグ。サイラ・・・オーグ」

「お、奥様・・・!? い、医者を・・・!」

???
SIDE OUT

イツセーSIDE

「まったく・・・リョーマったら」

口調は呆れた様な感じだが、部長の顔は嬉しそうだった。俺にはその理由がわかる。事情を知っている者なら、神崎先輩が何であんな話をしたのか、その真意を理解出来るから。

「へへ、ああいう事がサラツと出来るから先輩は凄えんだよな」

「そうだね。ある意味、今の悪魔業界の在り方を真っ向から否定した様なものだし」

『それでは、両『王』は台の前にお願ひします!』

いよいよ試合が始まる。部長とサイラオーグさんの振ったダイスの結果で俺達の誰が出るのかが決まる。

『出ました! リアス選手が二! サイラオーグ選手は一! 合計は三となります! 本来『兵士』の価値数は一ですが、両者の『兵士』は複数の駒を消費されているという事なので、今回は価値数が三となる『騎士』か『僧侶』の一名を送り出す事が出来ます!』

俺は八つの駒を使ったから、八以上の数字じゃないと出れないってわけだよな。てか最初で最小の数字かよ。いきなり悩まされるぜ。

『作戦タイムとなる五分の間に出場する選手を選出してください。では作戦タイムスタート!』

待機用の椅子の座り、俺達は話し合いを始めた。

「部長、誰を出します?」

「もう決まっているわ。・・・祐斗、お願い出来るかしら?」

「もちろんです」

迷い無く木場の名を呼ぶ部長に、木場も力強く頷いた。確かに、三が出た以上、ウチから出れるのは木場にゼノヴィア、そしてギヤードだ。ギヤードはサポートタイプだから単独で出すわけにはいかない。必然的に『騎士』のどつちかになるのは俺も納得だけだ。

「初戦は確実にとりたい。誰が出て来ても祐斗の聖魔剣なら応用が効くから臨機応変に対応出来るはずなの」

「なるほど」

その時、審判役のあのイケメンさんから制限時間終了間近だとアナウンスがあった。木場がバトルフィールドへ転送される魔法陣へ向かう。

「それじゃあみんな・・・行って来ます」

振り向いた木場が俺達に笑顔を向けた次の瞬間、魔法陣が光を発し、木場の姿が光の中へ消えて行った。

続けて陣地の上空にいくつかの映像風景が現れた。観客の様子も映されている。それらを眺めていると、一番大きく映しだされている映像に広大な緑の平原、そしてそこに立つ木場の姿が見えた。さらにそれと向かい合う様にして青白い炎を全身から放つ馬に乗った甲冑騎士の姿があった。

『両選手がフィールドに登場しました! この広大な平原でぶつかり合う事となったのは互いに『騎士』! まずはグレモリー眷属より木場祐斗選手!』

実況の紹介直後、観客から木場へ大きな歓声があげられた。木場のヤツ全然動じて無いみたいだ。すでに集中して自分の世界に入っているみたいだな。

『対するバアル眷属は、ベルーガ・フルカス選手!』

甲冑騎士が馬を進ませ、兜のマスクを上げて顔を見せた。・・・なんて鋭い目で木場を睨んでるんだ。戦う前から気力は十分つてわけか。

『私は主君サイラオグ・バル様仕える『騎士』が一人、ベルーガ・フルカス。聖魔剣使い木場祐斗殿。こうして貴殿と剣を交わせる事、剣士冥利に尽きるばかり』

『それはこちらも同じ気持ちですよベルーガ殿』

「フルカス家は馬を司るのが特色だったわね」

「だから馬に乗ってるんですね」

「ええ。それにあの馬はただの馬じゃないわ」

炎を噴き出してる時点で普通じゃないですもんね。そこへ実況がアザゼル先生に馬について尋ねた。先生曰く、あの馬は地獄の最下層に生息すると言われる「青ざめた馬」という魔物らしい。死と破滅を呼ぶ馬とも呼ばれ、気にいらなければ主すらも蹴り殺すのだとか。「そんな馬を従えている。それだけで彼の実力が相当なものだという証明になるわ」

『それでは、第一試合開始してください！』

俺達の見守る中、ついに二人の勝負が始まった。

『木場祐斗殿。魔帝剣使いを退けたという貴殿の妙技、是非とも見せて頂きたい』

『やはり情報は広まっているみたいですね。けれど、期待して頂いて申し訳ありませんが、師匠に無断使用がバレてしまって今回は使用してはダメだときつく言われてしまいました』

『それは残念』

互いに距離を取りながら会話を行う二人。どっちが最初に相手に切りかかるのか。見ているこっちも緊張して来た。

『・・・わかってるな、アルトブラウ。この試合、我等の命を懸け、必ずや主君へ勝利を捧げるのだ。そして証明するのだ。これを見ている観客・・・そして騎士殿へ』

『ブルル・・・！』

な、何だ？ 馬の炎がベルーガの全身と持っているランスを包み始

めたぞ。それだけじゃない、周囲までもが馬の炎で燃え始めたぞ！

『さあ、駆けよアルトブラウ！ 我等これより人馬一体となりて敵を討つ！』

『ヒヒイイイイイイン！』

「ツ……ぐうつ……!?!」

炎だけをその場に残し、ベルーガ達の姿が消える。刹那、甲高い金属音と共に木場が吹っ飛ぶ。態勢を整える間も無く、さらに連続して金属音が鳴り響き、その度に木場は剣で防御しながらも吹っ飛ばされていた。

『な、なんという速度！ ベルーガ選手、木場選手を怒涛の勢いで攻め続けています！ 私には彼の姿を視認する事が出来ません！』

『ベルーガ選手、今日は調子がいい様ですね。私がアドバイザーとして指導している頃にはあれほどの速さを見せた事は一度もありませんでしたよ』

『ベルーガ選手の速さに皇帝も驚いています！ 木場選手、防戦一方のこの状況を打開する事は出来るのでしょうか！』

「木場……!」

「まさか、あの『騎士』があれほどの速さを持つなんて……」
『どうした！ 貴殿の力はその程度ではなからう！』

ベルーガがそう吼えた瞬間、激しい突風がフィールドを奔り、周囲に燃え広がっていた炎がその風によってかき消された。

『少々熱かったからね。消させてもらいましたよ』

木場のヤツ、風属性の魔剣を使ったのか！ 炎に風なんざ、下手すりゃ勢いを増すだけだったのに……。そんだけアイツは風の魔剣に自信があるって事か。

『我が炎を一瞬で消し去るとは……流石は聖魔剣使い』

『そちらこそ、素晴らしい速さです。以前のゲームまでのデータは見させて頂いていますが、これほどのまでの速さを見せた事は一度も無かったはずです』

『自分でも驚いている。今日に合わせて調子は整えていたが、それにして体が軽すぎる。自分自身、どこか恐ろしさを感じてしまうほど

に』

『ブルル……』

『はは、その馬も同じ気持ちみたいですね。だからこそ厄介だ。まずは様子見と思っただらあつという間に攻め立てられてしまったのですから』

『やはりそうであったか。貴殿ほどの剣士があ程度のはずが無い。私の実力を見極めるため、あえて防戦に回っていたという事か』

『それをわかっていて誘いに乗ってくれた。相手の企みに気付きながらも正面から立ち向かう……あなたは正に騎士ですね』

『私にはこんな戦いしか出来ないのな。愚かと言われようともこのやり方を貫いてみせる』

『愚かだとは思いませんよ。だって、僕の親友もあなたみたいに真っ直ぐですから』

『ふっ、貴殿とは一度落ちついて話がしてみたいものだ』

『そうですね。けれどここは勝負の場。そしてあなたと僕は敵同士。だからこそ……』

『僕（私）達は剣で語り合う！』

馬を走らせるベルーガ。木場が迎撃の為に地面から剣を伸ばすが、ベルーガは巧みに馬を操りそれらを全て回避。意味が無いと判断した木場が自らベルーガに跳びかかるが……。

『いない!?!』

『そこだ!』

ベルーガの姿が馬の上から消えていた。馬はそのまま木場の横を高速で通り過ぎて行く。すぐさまベルーガを探す木場を、上空からランスを突き出したベルーガが襲いかかった。

『やらせない!』

木場が両手持ちの馬鹿でかい剣を創り出す。あれでベルーガを受け止めるつもりか。ランスと大剣がぶつかり合い、ギヤリギヤリと音が鳴り響く。けれど、落下速度も加わったベルーガの重さに、木場の体が徐々に押され始める。

『このまま押し切らせてもらおう!』

『舐め……るな!』

木場が思いつきり剣を薙ぐ。結果ベルーガの体が再び上空に打ち上げられるが、空中で器用に体を回転させながら落下。その着地点にはあの馬がいて、ベルーガはそのまま馬にまたがって再び駆け始めた。

『いつの間に……!』

『我等は人馬一体! 互いの考えを共有するなど造作も無い!』

『ただの乗り物では無い……か。まるで二対一で戦わせられている気分ですよ!』

二人の姿がまたかき消える。金属音と火花だけが戦場に奔り、フィールドそのものが二人の激突の余波で見る見る内に挟られていく。

『またしても両者の姿が見えなくなりました! 果たして木場選手、挽回出来るのか!』

確かに、今までの流れだと木場の劣勢だと思われてもしょうがない。けど……。

「私の『騎士』を甘くみないでちょうだい」

反論する様に呟く部長。俺だって同じ気持ちだ。木場を……俺達の『騎士』を侮ってもらっちゃ困るぜ。

『くっ……!』

僅かながらも焦りを含んだその声は木場では無くベルーガのものだった。

『そこだあ!』

木場の叫び声と共に平原に血が迸った。間違い無い、木場の剣がベルーガに届いたんだ!

『今の私達の速さを越えるとは……それが貴殿の本当の力か!』

『少し前の僕なら、おそろくあなたに追いつく事は出来なかつたでしょう。ですが、京都で枷を外してから、僕が持つ本来の速さも上がっていました。それに風の魔剣の力を合わせれば、こうしてあなたを越える事だって出来る!』

『見事! だがしかし! 我等の全力がこの程度だと思っては困る!』

アルトブラウよ！ 神速と呼ばれしその脚の真価を見せよ！』

二人の激突はさらに激しさを増していく。けれど、形勢は徐々に木場の方へ傾き始めていた。

『ぐっ……はあっ……はあっ……』

『すう……はあ……』

ベルーガが姿を見せる。けど、その甲冑からは血が滴り、馬も体のあちこちに怪我をしていた。対する木場も致命傷こそ見られないが、頬や腕から出血していた。

『ここまで追い詰められたのはいつ以来だろうか。だが、それでも私は負けられん！ 我が主の為、私に敗北は許されんのだああああああ！』

ベルーガがありつたけの声を振り絞りながら馬の炎のたてがみに手をつ込み、そこから二本目のランスを取り出した。

「あのたてがみ、違う次元に繋がっている様ですわね」

「槍を二本も持って何をするつもりだ？」

『アルトブラウよ！ 我等の最後の奥義、見せてやろうぞ！』

『ヒヒイイイイイン！』

馬の全身からかつてないほどの極大の蒼炎が放出される。それに合わせるようにベルーガが両手のランスを勢いよく振り回し始めた。

『こ、これは……！ 「青ざめた馬」から放たれた炎がベルーガ選手の回転する槍の勢いで巨大な炎の竜巻になりましたあ！ あれほどの緑が広がっていた平原が今や炎の海となっています！』

『これぞ我等の奥義！ 『地獄より現れし蒼炎』なり！』

『いいのですか？ まだ初戦だというのにその様な奥の手を見せてしまっ』

『貴殿に勝つにはもうこれしかない！ 初戦だろうとなんでであろうと、我が誇りに懸け、貴殿は私が倒してみせる！』

『……わかりました。ならば、僕も見せますよ。それが、あなたの誇りに対する僕の敬意です！』

自らの誇りを懸けると言い放つベルーガの覚悟を正面から受け止め、木場は自分が持つ風の聖魔剣から小さな風を発生させた。それは

瞬く間に大きさを増して行き、荒れ狂う暴風となって木場の周囲を回り始め、いつしかベルーガと同じ竜巻となっていた。

『な、なんと！ 木場選手も竜巻を作りだしました！』

『私は負けん！ 蒼炎よ！ 敵を飲み込めええええええ!!』

『行きます！』

得物を突き出す両者。互いが互いを飲み込まんと凄まじい勢いで激突する竜巻。だが、勢いを保つ木場の竜巻に対し、ベルーガの竜巻が徐々に勢いを弱め始めた。

『ど、どうしたというのだ!? 我が蒼炎が・・・!?』

『・・・この技によって生み出された風の渦の役目は相手の動きを止める事』

『ッ!』

『そして・・・この一撃こそが本命となる!』

竜巻に気を取られていたベルーガの眼前に突如として現れた木場が放った全速の一閃がベルーガの腹に深々と食い込んだ。

『ぐ・・・ふ・・・』

『これが僕の奥義・・・風刃閃です』

木場が剣を抜くと同時に呻きながら落馬するベルーガ。主に続いて馬も倒れ、いつしか竜巻も消滅し、荒れ果てた大地に木場だけが立っていた。

勝負あり。誰もがそう思っていた。だが・・・。

『——まだだ』

『ッ・・・!』

『私は・・・まだ・・・戦える』

『無茶しないでください! もう勝負は尽きました! それ以上出血したら危険です!』

『それがどうしたというのだ。我が主が・・・サイラオーグ様が不平等な扱いを受けている時に何も出来なかった頃の悔しさに比べれば・・・この程度の痛みがなんだと言うのだ!』

目を見開く木場の前で、ベルーガはランスを杖に再び立ち上がりうとしていた。出血はさらに激しくなり、周りを真っ赤に染め上げてい

た。けれど、その兜の向こうに光る目は未だに力強く輝いていた。その光を直視した木場がたじろぐ。確かにこの時、敗者であるはずのブルーガが、勝者であるはずの木場を圧倒していた。

『さあ．．．木場．．．殿．．．いざ、決着を．．．』

グラリとブルーガの体が地面へと倒れる。直後、光と共にブルーガの姿が消えた。

『サイラオーグ・バアル選手の『騎士』のリタイアを確認！』

この瞬間、木場の勝利が確定した。だけど、あの『騎士』の壮絶な最後を見てしまった俺達は素直に喜ぶ事が出来なかった。そして、それは木場も同じだった。魔法陣から戻って来たアイツの顔には悔しさが滲んでいた。

「．．．試合に勝って勝負に負けただってこの事を言うんだろうね。最後の最後、僕はブルーガ殿の気迫に完全に圧されていた。．．いや、正直に言うよ。僕は怖かった。満身創痕のはずのブルーガ殿のプレッシャーに僕は恐怖を感じていた」

「木場．．．」

「それだけの決意と覚悟で戦っていたというわけね。そして、それはあの『騎士』だけじゃない。サイラオーグを含め、眷属全員が同じ決意と覚悟を持ってあそこに立っているはずよ」

『両『王』は台の前へお願いします！』

第二試合のダイスを振る部長とサイラオーグさん。出た目の合計は八。俺が出れる数字だ。

「八か．．．。ここはゼノヴィアと．．．」

「部長、俺に行かせてください」

名乗り出る俺に、部長は首を横に振った。

「イツセー、あなたは私達の主力なのよ。サイラオーグとの戦いに備えてあなたは温存しておきたいの」

「部長の考えは最中です。けど、サイラオーグさんとの戦いに備えるなら、余計な戦力の低下を防ぐのも大事じゃないですか？」

「それも一理あるわ。けど、それであなたが消耗したら意味が無いじゃない」

「お願いします。必ず勝ちますから」

「けど・・・」

「リアス、イツセー君に任せてみたらどうかしら。ここまで言うのだから彼にだって何か考えがあるはずよ」

「・・・わかったわ。けど、気は抜かないでちょうだい」

「はい」

朱乃さんが援護してくれたおかげで何とか部長が折れてくれた。

——いいのか相棒？ 相手のチームには女もいる。もし出て来たらお前は戦えるのか？

『むしろ望む所だよね！ 今のキミにはあの技があるんだか——』

すみません先輩。ちよつと黙っててもらえますか。

『アツハイ』

なあ、ドライグ。あの『騎士』を見て思ったんだ。俺さ、全然わかってなかったよ。サイラオーグさん達の覚悟も決意も、俺なんかが想像出来る様なもんじゃなかったんだ。あの人達は文字通り命を懸けて俺達に挑んで来てる。男だ女だなんてくだらねえ考えで戦うなんてあの人達に対する侮辱にしかならねえよ。

——では。

けど、それは必要以上に傷付けるって意味じゃねえ。だから俺は・・・。

『出場選手は魔法陣へお願いします』

俺は振り返る事無く魔法陣へ向かった。たぶん、後ろでは部長達が心配した顔で俺の背中を見つめているだろう。

「それがサイラオーグさん達の覚悟だっていうなら、俺も俺の覚悟を示してみせる・・・！」

イツセーSIDE OUT

リアスSIDE

祐斗が戻って来てからイツセーの様子がおかしい。結局その違和感は何なのかわからずあの子を送り出してしまったけれど、本当にこれでよかったのかしら。

『おおっと！ ついにグレモリーチームからこの選手が出てまいりました！』『それいけ！ せきりゅーてー』で今や冥界の子ども達に大人気の兵藤一誠選手です！』

『LoveとbraveryをMy heartに秘め♪』

『今流れているのは『それいけ！ せきりゅーてー』のオープニングテーマです。この歌詞はプロデューサーであるセラフォル・レヴィアタン様が、あの冥界屈指の作詞家であるリー・小柴氏に依頼して作成したものです』

『誰だよリー・小柴って!?!』

『ほお、リー・小柴ですか』

『確かに、大胆でありながら繊細・・・彼らしい歌詞ですね』

『知ってんのかよ先生!?! え、知らない俺がおかしいの!?!』

『そして、バアルチームからは『僧侶』のコリアナ・アンドレアルス選手の登場です!』

現れたのはスーツ姿の女性。おそらく、向こうはイツセーが出て来ると踏んで彼女を出して来たんでしようね。

「イ、イツセー先輩、大丈夫なんでしょうか？」

「・・・信じましょう」

そうしている間に、第二試合の開始が宣言された。籠手を発現させたイツセーを前に、コリアナが口を開いた。

『やっぱりあなたが出て来たわね、赤龍帝』

『俺が出て来るのを読んだんですか?』

『ええ』

『それなのにあなた一人なんですか? 『僧侶』なら他にも出せるはずですけど』

『無謀だって言いたいんでしょ? それは私もわかっているわ。おそらく、私一人じゃあなたに勝てない。私はこの試合、はなから勝つつもりは無いわ。あなたの手の内を少しでも晒させて後のみんなに託す・・・それが私の役目よ』

『サイラオーグさんがその作戦を?』

『まさか! あの方はサクリファイスなんて使わないわ。これは私が

望んだ事。あの方の勝利の為ならば、喜んでこの体を捧げるわ』

『・・・それがあなたの覚悟なんですね』

『そうよ。さあ、そろそろ始めましょうか！ 言っておくけど、甘く見ると怪我じゃ済まな——』

コリアナが構えを取ろうとした次の瞬間——イツセーの拳が彼女の腹部に突き刺さっていた。

『か・・・は・・・!?!』

『怪我じゃ済まない・・・。なら、済まなくなる前に最小限の怪我で終わらせてもらいます』

崩れ落ちたコリアナが光と共に消える。それを見送ったイツセーの籠手は三つの噴出孔から赤い炎が噴き出していた。

『な、なななんとおとおおお！ 兵藤選手、コリアナ選手を試合開始三十秒で瞬殺してしまったああああああ!!!』

『『『おとおおお!!!』』』

観客達の凄まじい歓声が私の耳に届く。あまりの決着の早さに、私はしばし呆然とモニターを見つめていた。

『コリアナさん、これが俺の覚悟です・・・』

その向こうでイツセーが呟くように言葉を発する。そして、そのまま魔法陣を通って私達の元へ戻って来た。

「勝ちましたよ、部長」

勝利したにも拘らず、ニコリともせず私達に勝利を報告するイツセー。その表情を見て、私はふとこの子が漏らしたあの言葉を思い出した。

——部長、俺、この試合で自分の全てを出し切ってみせます。だから、みんなと一緒に見ててください。俺の・・・夢の形を。

(イツセー、この試合であなたは答えを得るつもりなのね)

夢を見失ったこの子が苦悩の果てに得た夢の形・・・。それがこの子に何をもたらすのか、私にはわからない。だから私は見守ろう。この子が導き出した答えを。

第四百四十二話 姉の想いと未来の私

「グレモリーチーム、木場選手、兵藤選手と立て続けに勝利を飾りましたあ！」

興奮した様子で叫ぶガミジンさん。俺もまた彼と同じ様に興奮していた。この試合が終わったら彼等の事は木場Ⅱサン、兵藤Ⅱサンと呼ぶ事にしよう。え？ ダメ？

「イツセーの野郎、最近燻ってやがると思ったら、いつの間にか吹っ切れてやがる」

「良いですね、彼。あの迷いの無い目……。強い決意と覚悟を感じます」

アザゼル先生とベリアルさんが兵藤君を褒める様な発言をする。本人が聞いたら喜ぶだろうな。・・・いや、彼の性格からして謙遜しただけ。

「ひよつとしたらひよつとすると、面白いもんが見れるかもしれねえな」

「面白いものとは何でしょう？」

「それはまあ・・・後のお楽しみという事で」

「期待しておきましょう。さあ！ 第三試合の出場選手を決めてくださいー！」

リアスとサイラオーグさんがダイスを振った。出た数は二と三。合計して五か。ええつと、五だと『騎士』と『僧侶』と『戦車』の中から一人出れるんだっつけ。木場君かゼノヴィアさん、ヴラディ君に小猫。果たして誰が出るんだろう。

「黒歌、誰が出ると思う」

特に意味も無く黒歌に聞いてみると、彼女はあごに指を当てながら自分の妹の名を出し、理由を尋ねてみたらカンドと即答された。

「私のカンはよく当たるのよご主人様」

その時、リアス達の様子を映すモニターが小猫の姿を捉える。そこで気付いたが、彼女の両手には格闘家等が着けているオープンフィンガーグローブみたいな物が装着されていた。

「あのグローブは・・・？」

「アレは私からあの子へのプレゼントにや」

「プレゼントですか？」

「そうよ。まあ滅茶苦茶パワーアップするとかそういう物じゃないけど、今のあの子の役には立つてでしょうね」

口ぶりからしてただのグローブでは無い様だ。果たしてどんな効果があるのだろうか。そこも注目しながら見て行こうかな。

S I D E O U T

イツセーS I D E

「私が出ます」

ダイスの目が出てすぐ出場の意を示したのは小猫ちゃんだった。確かにこの合計なら『戦車』の小猫ちゃんも出られる。選択肢には入ってるけど、ここまで自己主張する小猫ちゃんも珍しいな。

「小猫？・・・そうね。お願いするわ」

部長もちよつと驚いた様だったけど、真つ直ぐに見つめて来る小猫ちゃんに何か感じたのか、GOサインを出した。それに対し、小猫ちゃんは返事と共に両拳を胸の前で合わせた。

「つて、小猫ちゃん、そのグローブどうしたの？」

初めて見るグローブだ。気になって聞いてみると、小猫ちゃんは少し恥ずかしそうに答えた。

「これは・・・その・・・修行をやり遂げたご褒美によって姉様から。仙術を使う際の気の練度を高める力があります」

「あら、素敵なおプレゼントね」

「うふふ、黒歌さんもやりますわね」

「妹想いのいい姉じゃないか」

「おかげで秘蔵のお酒を手放してしまったってぼやいてましたけど」
部長達にそんな風に返す小猫ちゃん。でも顔が嬉しそうなので照れ隠しなのがバレバレだぜ小猫ちゃん。

「ただのグローブじゃなさそうだね。僅かにだけど魔力を感じる。黒歌さんは誰に作成を頼んだんだろう」

木場も興味深そうにグローブに目をやる。

「オリガの所にお酒を持って行ったらすぐに作ってくれたって姉様は言っていましたけど」

「オリガ？　・・・ッ!?　まさか、魔具師オリガかい!？」

「知っているのか木場!？」

心底驚いた様子の木場に、俺も驚きながら説明を求めた。オリガっていうのは冥界でも有名な女性魔具師で、彼女が作る魔具（神器とは違う武器みたいな物）は出来によっては神器を上回る力を秘めた物になるらしい。あれ、サラツと説明されたけどそれって結構凄いいんじやねえの？

「オリガの魔具はとても強力だけれど、彼女は気に入った相手にしか魔具を作らないって聞く。そのスタンスの所為で敵も多いから決まった拠点を持たずに冥界を転々としていて、一般の悪魔の前にはほとんど姿を見せないんだ。黒歌さんはどうやって彼女とコンタクトを？」

「は、はぐれ時代に知り合って、今もたまに交流してるみたいです」

小猫ちゃんもビックリしている。まさか、そんな有名人にわざわざ自分の為にこのグローブを作らせたなんて思っても無かったんだろう。あのお姉さん、飄々としても小猫ちゃんをからかったりしてるけど、やっぱり小猫ちゃんが大好きなんだな。妹の晴れ舞台の為にこんな凄い物をプレゼントしちゃうなんて。

「き、きつとそのグローブには黒歌さんの想いが込められてるんだと思いますすう」

「ええ、ギヤスパアの言う通りね。小猫、あなたは一人で戦うけれど一人じゃないわ。あなたを想う黒歌の気持ち、きつとあなたを勝たせてくれるはずよ」

「姉様の・・・想い」

ジツと両手を見つめる小猫ちゃん。その表情がフツと笑みに変わった。

「不思議ですね。何だか本当に姉様が傍にいる様な気がします」

「・・・どうも死んでしまった様な言い方だが、黒歌さんはまだ生き

て・・・」

「シッ！ 今良い所だから黙ってなさいゼノヴィア！」

横からツツコミを入れようとするゼノヴィアの口を塞ぐ。確かに俺も一瞬そう思ったけど、この状況で口に出す勇気はありません。

『時間です。出場選手は魔法陣へ移動を』

「行って来ます」

歩きだす小猫ちゃんの背を見送る。やがてその姿は魔法陣の中へ消え、モニターの向こうに再び姿を見せる。バトルフィールドは神殿の様な場所だった。そして、その対戦相手の姿もまた俺達の目に映るのだった。

「デカイな・・・」

それが対戦相手を見た俺の第一声だった。三メートルくらい巨体に相応しい極太の前腕が目を引く。おそらくパワータイプだろう。「あれは『戦車』のガンドマ・バラムだね。記録映像で見た彼のパワーは凄まじかったのを覚えてるよ」

「バラムは怪力が特色の家よ。一発でももらえば致命傷必至でしょうね。逆を言えば、当たりさえしなければいくらでも攻め手はあるわ」
『おおっと！ 第三試合は『戦車』同士の戦いとなりました！ グレモリーチームからは塔城小猫選手！ そしてバアルチームからはガンドマ・バラム選手です！』

『第三試合、開始！』

選手紹介から間もおかず試合開始が宣言される。同時に小猫ちゃんは今も全身に気を漲らせ、猫耳と尻尾を出現させる。あの子が戦闘モードに入った証拠だ。

『行きます・・・！』

俊敏な動きで瞬く間にバラムの眼前に飛び込んだ小猫ちゃんが、その顔面に向かって右ストレートを叩き込む。派手な音と共に衝撃波が周囲に散らばる岩等を吹き飛ばすが、当のバラムは小猫ちゃんのパンチを顔面で受け止めながらその拳をゆっくりと振り上げた。まさか、あの状態のまま殴り返す気か!?

『ぬんっ・・・！』

バラムの剛腕が唸りを上げて小猫ちゃんに迫るが、落ち着いてそれを避ける小猫ちゃん。その数瞬後、小猫ちゃんの後方の壁が勢い良く吹き飛んだ。

『なんとお！ バラム選手の拳圧で壁が吹き飛びました！』

『ツ……！ なんて力……！』

『サイラオーグ様……比較……兎戯……』

冷や汗を流す小猫ちゃんにバラムがボソツと呟く。

「サイラオーグ・バアルの力に比べれば今のですら兎戯になるんだね……」

言うなよ木場！ 俺もバラムが何を言いたかったのか理解出来たけど言うなよ！ グローブの件で空気読まなかったゼノヴィアですら何も言っていないのに何で気遣い上手のお前が言うかなあ！

『外部からの攻撃は通じない。なら、内部から突き崩します！』

距離を取った小猫ちゃんが両手を向い合せにして構える。その中心に生まれた青白い光が急速に大きさを増して行く。以前に比べれば倍以上の早さだ。これがあのグローブの効果か！

「確かに仙術なら、内部から破壊も可能でしょうね」

「けれど、向こうも仙術について研究しているはずです。何か対抗策を考えているかもしれません」

木場がそう言った時だった。何を思ったのか、バラムが傍の柱を引き抜くと、それを小猫ちゃんに向かってぶん投げた。冗談みたいな速度で迫って来る柱を回避する小猫ちゃんだが、バラムは二本目、三本目と次々に柱を引き抜き、連続で小猫ちゃんへ投げていく。小猫ちゃんを近付けさせない為の作戦だろうか。にしても豪快というか乱暴というか。というか、そんなに柱を抜きまくったら神殿崩れるんじゃない……。

『接近させないつもりですか。なら……！』

柱をかいくぐりながらどうにか接近しようとする小猫ちゃんがその場で思いつきり跳躍した。

『行ってー！』

続けてバラムに向かって両手を振り降ろす小猫ちゃん。瞬間、その

両手から無数の青い光弾が放たれた。って、光弾!? 小猫ちゃんが遠距離攻撃を使った!?

「どこを狙っているの小猫!？」

部長が叫ぶ。小猫ちゃんが放った光弾はバラム本人ではなく、バラムの周囲に着弾し、大量の砂煙を立ち昇らせただけだった。どうした小猫ちゃん!?! まだ遠距離攻撃に慣れて無いのか!?

『塔城選手の攻撃によってフィールドが砂煙に包まれました。両選手の姿が確認出来ません!』

『へっ、小猫のヤツ・・・』

『これが狙いだっただようですね』

アザゼル先生と皇帝が納得したとばかりに発言したその時だった。砂煙の中に再び青白い光が出現した。

『そこです! 白虎咬!』

小猫ちゃんの叫び声と共に、砂煙が一気に吹き飛ぶ。視界が晴れた俺達が目にしたのは、バラムの腹部へ一撃を放っている小猫ちゃんの姿だった。

『・・・不覚・・・』

巨体を傾けさせ膝をつくバラム。そうか! あの光弾は外れたんじゃないなく、最初から砂煙を発生させてバラムの視界を奪う為にわざと外したのか! 自分の視界も潰れるけど、小猫ちゃんならバラムの気を感じられるから見えなくても近付けたってわけか!

『もう一撃!』

間髪入れずに追撃をかけようとする小猫ちゃん。これで決まりかと思っただが、バラムはそれを左腕で以って受け止め、僅かに動きを止めた小猫ちゃんを右手で捕まえる。

『しまっ・・・!』

『ぬうううううううん!』

滅茶苦茶に右手を振り回すバラム。小猫ちゃんは地面や柱に何度も叩きつけられ、最後には上に向かって放り投げられ天井に激突。地面に落下した。

「小猫ちゃん!」

でしょうか!?!』

「なわけねえだろ!」

『黒歌、ありやという事だ?』

アザゼル先生がお姉さんに話を振る。なんであの人落ちついているんだ!

『ある程度の実力を持つ猫?は体内で気を練り込む事で一時的に全盛期の姿を取る事が出来るにや。未来、過去関係無くね。わかりやすく言えば、あの姿はあの子が一番実力を発揮出来る姿。あの子の未来の姿よ』

『つて事は、小猫はこのまま成長していけばあんなボインちゃんになるってわけか』

『それはわからないにや。姿形なんてきつかけがあればいくらかでも変わるもの。あくまでも可能性の姿だと思えばいいにや。あの子がこの段階に至るのはもう少し先だと思ったけれど、あのグローブが、何よりあの子の想いが届いたんでしょうね』

よ、よくわからんが、とにかく色んな意味でパワーアップしたって事だよな! すげえぜ小猫ちゃん! これなら行けるぞ! 猫又モードを越える新たなモード・・・アダルトモードだな!

『お、おお・・・これが“持つ者”だけが体験できる重みですか・・・!』

ちよ、小猫ちゃん! なに自分の胸をタップタプさせてるのお! 気持ちは何となくわかるけど、今試合中ですから! 肩が凝ります・・・とか言ってる場合じゃないから!

『おい、大丈夫なのかアレ?』

『黙って見てなさい。全盛期の猫?の実力をね』

お姉さんが意味深な発言を聞きながら俺がモニターに目を戻した正にその瞬間、小猫ちゃんの膝蹴りがバラムのアゴに炸裂した。凄まじい激突音と共に、先程は顔面を殴られてビクともしなかったバラムの巨体が宙を舞った。

『今なら誰にも負ける気がしません!』

不敵に笑む小猫ちゃん。大人の女性の艶っぽさが感じられ、俺はつ

い見惚れてしまうのだった。

『は、速い！ 塔城選手の目にも止まらぬ攻撃がバラム選手にヒット！ 三メートルはあるであろうバラム選手が吹き飛んだぞお！』

『白音は『戦車』の特性を得てパワー寄りの戦いを得意としている。でも猫？は元々速さを活かして戦うスタイルが主流にや。さすがに『騎士』までとはいかないけれど、それでもあのデカブツ相手なら十分過ぎるわ』

『パワー＋スピードか。単純だが、単純故に恐ろしいな』

本人のポテンシャルそのものが高くなれば技の威力とかも上がるもんな。今の小猫ちゃんがさっきの技撃つたらとんでもない事になるんじゃないか？

『ツ．．．』

「小猫？」

小猫ちゃんが一瞬だけふらつく様な動きを見せた。表情からも何だか疲労している感じが見てとれる。

『どうした事でしょう。塔城選手、苦しそうです』

『黒歌』

『私、解説じゃなくてゲストなんだけど』

『いいから説明しろ』

『あの技は仙術の中でも相当高度な技よ。気の消費だつて普通の仙術の比じゃないわ。あの姿になって確かに力も速さも上がったけれど、気の総量は元のあの子の物。枯渇すれば当然あの姿ではいられなくなるにや。その前に相手を倒せなければ、あの子にはもう成す術は無いわ』

時間制限付き!? そう言う事は先に説明しててくださいよ！

『時間が無いなら、一気に押し込むまでです．．．！』

小猫ちゃんが技の準備に入る。おお！ 光の色がさつきに比べて濃くなってる。見ただけで滅茶苦茶威力がありそうだ！

『うおおおおおおお!!』

バラムも負けじと柱を小猫ちゃんに投げつける。そして、ここで小猫ちゃんがとんでもない動きを見せた。なんと飛んで来る柱の上に

ピョンピョンと飛び移りながらバラムの元へ突っ込んだのだ！ あんな俺にはとても真似出来ない。

『相棒、別に避けずとも正面から全て破壊していけばいいではないか』
まあ、確かに俺にはそっちの方が合ってるけどさ。

『止めですー！』

バラムまで残り五メートルの距離まで来た所で小猫ちゃんの姿が霞んだかと思ったら、二人、三人、四人とその姿を増やしバラムを取り囲んだ。あらやだ！ 分身したわよあの子！ さっきの曲芸みたいな動きと合わせて忍者に見えて来たわ！

『『『白虎咬!!』』』』

バラムを取り囲んだ四人の小猫ちゃんが一瞬の狂いも無く同時にバラムに技を叩き込む。四つの青い光がバラムの体を飲み込んでいった。光が消えた時、そこには横たわるバラムの姿があった。

『はあっ……はあっ……やりました……』

バラムの傍で小猫ちゃんが地面に座り込む。気がすつからかなくなったのか、元の姿に戻ってる。

「やったぜ小猫ちゃん！」

ガッツポーズを取る俺。これでめでたく三勝目……。

「小猫ちゃん！ 早くバラムから離れるんだ！」

焦った様にそう叫んだのは木場だった。

「木場？ いったいどうし——」

「審判からリタイアのコールが無い！ バラムはまだ戦闘不能になっていないんだ！」

『え？』

俺と小猫ちゃんの声がハモったと思った次の瞬間、動かないはずのバラムの右腕が小猫ちゃんへと伸びた。

『バラム選手が意地を見せた！ 塔城選手またしても捕まってしまうぞー！』

『くっ、は、離して……』

『……離さん……。ベルーガ……。コリアナ……。無念……。晴らすツツツ!!』

手の中でもかく小猫ちゃんを潰さんばかりに握り締めながら、バラムが左手に柱を持つと、それを上に向かって振りかぶった。

『バラム選手、何をするつもりだ!?』

「・・・まさか!？」

部長が戦慄の表情を見せる。バラムの意図に気付いたんだろうか。

「部長、バラムのヤツ何をするつもりなんですか!？」

「バラムが柱を抜いた事で神殿内の強度はかなり低下しているはずよ。加えて、さつき小猫が激突した事で天井にも罅が入っている。そんな場所へ衝撃を与えようものなら・・・」

「ツ・・・神殿が崩壊する・・・」

「で、でもそれじゃ自分まで・・・」

「最初から覚悟の上だったのよ。柱は武器にただけじゃない。ひよっとしたら自分が追い込まれた時に小猫を道連れにする為の手段として・・・!」

「小猫ちゃん! 早く逃げて!」

朱乃さんが叫ぶ。でも、疲弊した小猫ちゃんがバラムの拘束から逃げ出す事は叶わず、その間にもバラムの最後の一撃が放たれ様としていた。

『サイラオーグ様・・・勝利・・・確信・・・!』

遺言の様な言葉と共に、バラムが柱を投げる。放たれた柱は罅の中心部に直撃し、神殿が轟音と共に崩壊していくのを俺達は成す術も無く見つめ続けるのだった。

『リアス・グレモリー選手、サイラオーグ・バアル選手の両『戦車』一名のリタイヤを確認しました!』

こうして、第三試合は引き分けに終わったのだった。

イツセーSIDE OUT

小猫SIDE

・・・目を覚ました時、私は見知らぬベッドの上で横になっていた。

「()は・・・」

「会場に設置された医務室よ」

「姉・・・様・・・？ 医務室？ どうして私が・・・」

そこまで言って記憶が蘇って来た。そうだ、こんな所で寝ている場合じゃない！

「ゲームは!? 試合はどうなったんですか!?!」

「落ちつきなさい。そんなに勢い良く起きあがったら」

「ツ・・・!?!」

瞬間、全身を激痛が襲った。視界に映った自分の右腕には両腕には包帯が巻かれていた。おそらく足の方も同じ様な感じになっているだろう。

「ついさつき第四試合が終わったわ。赤龍帝と相手の『騎士』が戦って赤龍帝が勝ったにや。重力を操る相手だったけど、大して苦戦もせずには勝ったわよ」

「そうですか」

流石イツセー先輩だ。それに引き換え私は・・・。

「私は・・・負けたんですよね」

「正確には引き分けだけどね」

「祐斗先輩とイツセー先輩がいい流れを作っていたのに、私が台無しにしてしまいました」

「途中まではすつごくよかったんだけどね。最後の最後で気が抜けちゃったのかにや。けどまあ、私は頑張ったと思——」

「・・・う・・・」

「白音?」

頬を熱い物が流れて行く。それが涙だと気付いた時にはもう止める術が無かった。情けなさ、不甲斐無さ、色んな感情がごちゃ混ぜになっっていた。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・。信じてくれたのに応えられなくてごめんなさい・・・。応援してくれたのに応えられなくてごめんなさい。姉様の想いに応えられなくて・・・裏切ってしまったごめんなさい・・・」

泣いたらダメだ。私には泣く資格なんて無いのに。あと一步で勝てたのに。力を使い果たしたからなんて理由にもならない。

「・・・白音」

それなのに、姉様はそんな私を優しく抱きしめてくれた。

「姉様・・・？」

「馬鹿ね。そんな事を考えていたの？」

「だって、あんな凄惨な物を用意してくれたのに、私は不甲斐無い結果しか残せなかった・・・」

「魔具の事？ ああ、あんなのお酒さえ渡せばいくらでも作ってもらえるわよ」

「そ、そうなんですか？」

「うん」

祐斗先輩の話では気に入った相手にしか作らないはずなのに。どれだけ気に入られてるんだろう姉様。

「それにね、確かに試合には勝てなかったけど、私には白音がとても立派に見えたわよ」

「え？」

「あなたがあの技を使えるのは当分先だと思っていた。でも、魔具の補助があつたとはいえ、あなたはやってのけてみせた。白音は私が思っていたよりもずっとずっと成長していた。それだけで私は嬉しかったにや」

慈しむように私の頭を撫でる姉様。その手から姉様の温かさが伝わって来て、いつしか私の涙は止まっていた。

「姉様、私はまだまだ未熟者です。ですから・・・その・・・これから、色々教えてくれますか？」

私のお願いに、姉様は満面の笑みで答えた。

「ええ、もちろんよ」

私は弱い。だから、これからも精一杯努力を重ねて行こう。姉様と一緒に。

「とりあえず・・・第一歩として明日から毎日牛乳を飲む事にします」

第四百四十三話 グレモリーVSバルその裏で・・・

「塔城選手とバラム選手の対決はまさかの共倒れ！ 波乱に満ちてまいました！」

勝負もまさかだったけど、それ以上に小猫の変身の方が驚きだったわ。彼女も将来は姉の様に破壊力抜群なスタイルになるのか。知りたかった様な知りたく無かった様な・・・。

リアスとサイラオーグさんがダイスを振りに出て来た所で、変な胸騒ぎがした。アルⅡヴァンセンサー・・・とは違う。上手く言葉に出来ないが、俺達が通って来た通路の方から妙な気配を感じる。・・・ついに俺も新人類の仲間入りか？

なんてアホな感想は置いといて、ちよつと見に行ってみるか。Dの時だって、最初からアルⅡヴァンセンサーを信じてたら公園で顔を合わせた時点でどうにか出来てたかもしれないな。気になった事は確認しといた方がいい。

「リョーマさん、どちらに？」

席を立った俺にそう聞いて来るアシアにすぐ戻ると返し、俺は通路の方へ向かうのだった。

S I D E O U T

レーティングゲームに盛り上がる観客達の熱気に包まれるスタジアム。その中でゲームになど目もくれずドーム内の通路を進む二人の男がいた。一人は貴族風の装いをした男。そしてもう一人はロブ姿で軽薄そうな笑みを浮かべている男だった。

「ターゲットはこの通路を抜けた先だ。わかっているな？」

「へいへい。言われなくとも大丈夫だったの。にしても、アンタのご主人様もとんでもない命令を出してくれたもんだな。コレが成功したら冥界中が大騒ぎになるかもしれんぞ」

「我が主は他の腑抜け共に代わり悪魔の誇りを取り戻す為に決断をされたのだ。それを侮辱するのは許さんぞ」

「誇りじゃ腹は膨れねえよ。ましてや、「フューリーを暗殺しろ」だな

んて正気の沙汰とは思えんね。どうせ、他の暗殺者にも依頼したんだろうが、全て断られたから俺に回って来たって所だろ。じゃねえと、俺みたいな底辺も底辺な暗殺者に貴族様・・・ましてや冥界でも屈指の大貴族であるあの・・・」

「それ以上無駄口を叩けば、フューリーの前に貴様を始末するぞ」

男が射殺さんばかりに睨みつけても、暗殺者は涼しい顔をしてそれを受け流した。この二人の目的は、このレーティングゲームにゲストとして呼ばれたフューリーを暗殺する事だった。男は自らの主に命じられ、そんな男に暗殺者が雇われたのだ。

「貴様は暗殺者としては二流だが、毒の知識や扱いは一流だと聞いている。だからこそ貴様を雇ったのだ。頼んでいた物は持つて来ているんだろ？」

「商売道具を忘れるわけねえだろ。言われた通り俺が持つ毒の中でとびつきりにヤバイヤツを持つて来たぜ。一滴でも体内に摂取すれば、全身から血が噴き出して苦しみながら死んでいく。これを塗ったナイフでお前さんがフューリーに背後から襲いかかるつてプランだが・・・本当に大丈夫なのか？　こんな衆人環視の中で決行したつて正直、成功する気が全くしないのだが。失敗したらお前さんの立場も危ういんじゃないの？」

「大勢の者達の中でやる事に意味があるのだ。それに元より生きて帰れるとは思っていない。いざとなったら、人間ごときに決して屈しない事を示す為に潔く自決してやる」

「ああそうかい。ま、金も前金でもらってるし、俺は役目を果たしたらトンスラさせてもらうぜ」

「ふん、勝手にするがいい。そろそろ貴様も準備を——」

そこで男の言葉が停止した。言葉だけじゃない。全身の動きが止まってしまった。突然動かなくなった男に暗殺者が声をかけようとしたその時だった。

「おい、どうし・・・ッ!？」

暗殺者から見た男の首の位置がズルリと動いたと思った次の瞬間、男の頭が冷たい通路の床にゆっくりと落下した。赤黒い液体がじわ

じわと床に広がって行き、同時に体の方も血を吹き出しながら糸の切れた操り人形のようにその場に崩れ落ちた。

「な、何が起きたんだ．．．!?!」

たった今会話を交わしていた相手が一瞬でもの言わぬ骸になってしまった事に狼狽する暗殺者。そんな彼の耳に、通路の前方から何者かの声が聞こえて来た。

「無様な格好。愚か者にはお似合いの最期ね」

現れたのは蒼いローブに全身を包んだ一人の女悪魔だった。つまらなそうな目で男の死体を見下し、手をかざす。すると男の死体が一瞬で炎に包まれ、溜まっていた血と共に数秒で灰すらも残さずに消えてしまった。

「イライザ様の指示で待機していたら中々興味深い話が聞けたわ．．．ねえ、暗殺者さん」

「なっ．．．!?!」

「フューリー様を暗殺？ あなた達ごときがあの方に手を出せると思ってるのかしら。このドームの中も外も“私達”が見張ってるわ。わかる？ “私達”がいる限り、あの方には何人たりとも触れる事は出来ない。だって．．．“私達”が“消す”から」

暗殺者の顔が凍りつく。女の言う“消す”とは誇張でも何でも無い。この女はこの場で自分を本気で消すつもりだと本能で理解してしまったのだ。先程、全く気配を感じさせずに男を殺害した時点で、この女の実力は自分より上だ。暗殺者はどうにかしてこの場を切り抜けようと頭を回転させた。

「ま、待て待て。とりあえず落ちつけよ。コイツは殺る気満々だったがよ、俺は別にそこまで本気じゃなかったんだ」

「本気じゃない？ 一滴でも危険な毒をフューリー様に対して使おうとしたくせに？」

「そ、それは．．．」

「けど．．．そうね。あなたを雇ったという貴族の名前を教えてくださいから考えてあげてもいいわ」

「ほ、本当か!?!」

「ええ」

「わ、わかった。俺を雇ったのは……」

暗殺者はアツサリと雇い主の正体を女性悪魔に教えた。続けて投げかけられた二、三の質問にもベラベラと口を割る。とにかく助かりたい一心で暗殺者は口を動かし続けた。

「ふうん……。それなりに力のある家みたいね。これはイライザ様に報告しないと」

「こ、これで見逃してくれるんだよな？　じゃあ俺はこれで……」

暗殺者がその場から逃げだそうとした次の瞬間、女の手から伸びた魔力刃が暗殺者の胸を貫いた。自身を貫く刃を呆然とした表情で見下ろし、暗殺者が倒れ伏せる。

「ごふ……。な、なん……。で……」

「勘違いしていた様だけど、私は見逃すなんて一言も言っていないわよ」

「だ、騙した……。のか……」

「私は考えるとしか言っていないわ。それをあなたが勝手に勘違いしただけでしょ。私……。いえ、私達の前であの方を害そうとした罪……。死で以って償いなさい」

「お前……。一体……」

それが暗殺者の最期の言葉だった。女は先に消した男と同様に、暗殺者の死体を燃やしつくし、その場には女一人だけが残る事になった。

「排除完了。ひとまずイライザ様に報告ね」

懐から携帯端末を取り出し、女は連絡を始める。たった今得た情報を全て報告し、連絡を終えようとしたその時、背後から何者かが声をかけてきた。

「すみません。ちよつといいですか？」

「ツ……。はい、なんででしょう……。か……」

狼狽しかけつつも、女はすぐさま冷静さを取り戻し振り返った。先程の凶行の証拠になる様な物は念入りに消したので気付かれるはずはない。適当に言い訳してこの場を乗り切ろう。そう判断した女

だったが、振り返った先に立っていた相手の正体に一瞬で思考を停止させた。

『リコ？ どうかしましたかリコ？』

端末の向こうから自身を心配する声が聞こえて来るが、今の女にそれを気にかける余裕は一切存在しなかったのだった。

IN SIDE

通路に向かって数分。いつの間にかあの嫌な気配が消えていた。もう少し調べて何も無かったら戻ろう。そう決めて歩き続ける俺の目線の先に、蒼いローブを纏った人の姿があった。こんな所で何してんだろう。もしかしてこの人が気配の正体？ いやでもこうして近づいても何も感じないし・・・この人は関係無いのかな。

「すみません。ちよつといいですか？」

「ツ・・・。はい、なんでしよう・・・か・・・」

とりあえずこんな所で何してるか聞いてみよう。そう思って声をかける。振り返ったその人は綺麗な女性だったのだが、その表情が俺を見た途端固まってしまった。

『リコ？ どうかしましたかリコ？』

手に持っている携帯電話みたいな物からそんな声が聞こえて来る。ひよつとして、電話中に邪魔してしまったのだろうか。

「イ、・イイイイイイライザしやまああああああ！ あの、げほつ！

あのおk、うぐ！あのお方が私の前にい！ 指示を！ 指示を願ひしますうううう、おえっ!!!」

ちよ、いきなりどうしたのこの人お!? 女性がしたらダメなレベルでえづいてるのに電話なんかしてる場合じゃないでしょ！

「あの、大丈夫ですか？」

「ひいい!? 私ごときを心配して頂くなんて恐れ多すぎますううううう!!!」

アカン、完全に錯乱しとる！ 後ろから声をかけたのがそんなにビックリしたんだろうか。このままじゃロクに話も出来んぞ。

「イ、・イライザ様！ え、代わる？ ちよ、え、あなたは・・・。はあ!？」

そんな感じで困っていると、電話の相手と一言二言交わし、女性が酷く驚いた顔を見せ、それから手に持った携帯電話を俺に差し出して来た。

「あ、あああああの！ で、電話！」

「代わればいいんですか？」

「！」コクコク！

千切れるんじゃないかと思うくらい激しく首を振る女性を心配しつつ、俺は電話を受け取った。こうなったら向こうの人に事情を聞くしかない。だが、受け取った電話の向こうにいたのは予想だにしない人だった。

『はあい、亮真』

「その声・・・まさか、ヴァーリさんか？」

こんな所でヴァーリさんの声を聞く事になるとは全く思っていなかったわ。聞けばこの女性はヴァーリさんの知り合いらしく、施設内で迷子になってしまってヴァーリさんに助けを求めようと電話をしていたらしい。ヴァーリさんの知り合いって事は、やっぱりこの人は何の関係も無いって事でいいんだな。

『私、そのドームに入った事あるから誘導してあげたのよ。だから、その子の事は気にしないでいいわ。ゲストのあなたがそんな所につまでもいたらダメよ』

まあ、気配も完全に消えたし、もう戻ってもいいんだが。

「ヴァーリさん、よければ俺がこの人を観客席まで案内するが」

『あら優しいのね。でも、おそらく今その子、あなたとまともに会話も出来そうに無い状態だと思うんだけど』

「あばばばば・・・！」

「・・・余計に一人しておくのが不安なんだが」

『大丈夫よ。それで平常運転だから』

マジで!?

『しばらくしたら落ちつくと思うからそっとしておいてあげてちょうだい』

「わ、わかった」

そこまで言われたらもうヴァーリさんを信じるしかない。俺は女性に電話を返し、軽く会釈して来た道に戻り始めるのだった。

「フユ、フューリー様の触った携帯……。密閉して金庫に仕舞わないと……!」

S I D E O U T

ヴァーリ S I D E

「……どうやら誤魔化せたみたいね」

役目を終えた私は電話をイライザに投げ渡すと、一分ほど通話してイライザは電話を切った。

「リコは何とか落ちついたみたいです。あなたの機転のおかげで助かりました」

「まあ、本当に誤魔化せたかどうかはわからないけどね。あなたまでいきなり慌て始めるから何事かと思ったわよ」

「突然目の前にあの方が現れれば誰だって慌てますよ」

「でも、あなた前に亮真と会った事あるんでしょ?」

「ああ、握手会の事ですか。あれは私がこの世に生を受けて今までで最大の戦いでした。あの方の前ではなんとか耐えられましたが、会場を後にしてすぐに脱水症状で死の淵に瀕しましたからね。何せ、全身の穴という穴から体液が……」

「それ以上は結構よ」

流石イライザね。組織内でカテレアと並んで変態ツートップだっただけはあるわ。……一時期私も入れてスリートップになっていたとか聞いた事もあるけど、心外だったわ。

「リコには引き続き施設内の巡回をお願いしました。現在、彼女を含め、二十人ほどの者達が不審人物の発見、排除の為に動いています」
「そして、ドームの外にはあなた達つてわけね。随分嚴重じゃない」
「当然です。万が一にもあの方にもしもの事があつてはなりませんもの。観戦組も含め、私が指示すれば皆すぐに動く様に命じてありますから」

「よくやるわね」

「そういうあなただつて、こうして私達に協力しているじゃないですか。どうしてですか？」

「別に大した理由なんてないわよ。一応、彼等の友人としては、せつかくの晴れ舞台を邪魔されるのは気に食わないと思っただけ。ホント、ただそれだけよ」

若手ナンバーワンと言われるサイラオーグ・バルとの勝負。一誠は今回の戦いで新たな段階に上がる。私には予感では無く確信があった。

「そうですか」

何よその優しい目は。何でみんな私が友人云々の話をするとなんな目で私を見るのかしら。なんだか子ども扱いされているみたいで不快なだけけれど。

「それにしても、まさかあの家がフューリー様の命を……。これは調べる必要がありますね。フラン」

「ハンク」

「至急調べて欲しい事があります。人もお金も自由に使つて構いません。一週間後に報告を聞かせてもらいます」

「かしこまりました」

「ではまず・・・」

イライザの指示を受けたフランがその場から消える。早速仕事を始めたみたいね。

「けど、正直驚いてるわ。酔狂で作つたと思つた組織が、今じゃそれなりの規模になつてるんだもの」

「私達はただ、人々にフューリー様の偉大さを広めているだけです。元々、私達は今の悪魔社会・・・上級の貴族達に不満や恨みを持つ者達の集まりです。貴族は私達にとって絶対の力を持った存在でした。そんな中であの方は現れた。貴族どころかあの二天龍すら上回る絶大な力を持ちながら、高潔な心を持つ真の騎士。私達にとって、あの方はまさしく『希望』なのです。ライザー・フェニックスを下した時など、涙を流す者までいましたから。その『希望』を守る為、私達は活動していきこうと決めたのです」

強さというのはただそれだけで人を惹きつける事がある。彼女達は自分達にとつて絶対だったはずのものを上回る力を持った亮真に救いを得たという事かしら。

「いっその事、オーフィスを連れて私達のチームも合流させてもらうのもいいかもしれないわね」

「・・・どうやら決別の時は近い様ですね。歓迎しますよ」

「その時はお願いね。あ、そうだね。オーフィスで思い出したんだけど、ちよつと聞きたい事があるの」

「何ですか？」

「あなた、良いサングラスを売ってるお店知らない？」

「サングラスですか？ それなら私よりもカテレアの方が詳しいと思いますけど、あなたがかけるんですか？」

「私じゃないわ。ウチのお姫様が欲しがってるのよ」

「オーフィスがサングラス？・・・何かの冗談でしょう？」

「私もそうだと思いたいのだけどね・・・」

まさかとは思うけど、あの子・・・。

「・・・なんて、そんなわけないわよね」

私は頭に浮かんだものをそつと消すのだった。

ヴァーリSIDE OUT

ゲオルクSIDE

「曹操、いるか？」

部屋をノックすると、中から曹操が返事をしたので入室すると、彼はジツと椅子に座って窓から外を眺めていた。最近の彼はこうやってよく考え事に更ける時間が増えた気がする。一体何を考えているのかは教えてくれないが。

「ゲオルクか。どうした」

「他の派閥の者達がゲーム会場に襲撃をかけたそうだ」

俺の報告に、曹操は大した興味も無さそうな表情で「そうか」とだけ言った。その態度に俺は思わず声を荒げた。

「そうか・・・じゃない！ 何故こちらからも人員を送らないんだ！」

「無駄だからだよ。考えてみる。向こうには神崎君に総督殿、さらには皇帝を含め名だたる実力者達が揃っているんだ。そんな場所に攻め込むなんざ自殺しに行く様なものだぞ。ただでさえ京都の敗北で仲間の数を減らしたのに、そんな所に送り込めはしないさ。……どうせ、襲撃も失敗したんだろ?」

「……」

「沈黙は肯定と受け取らせてもらうぞ」

「……確かに襲撃は失敗したそうだ。しかも、襲撃組を阻んだ一団の中にヴァーリの姿があったとも報告を受けた」

「ふうん」

「曹操!」

「大声を出さないでくれゲオルク」

「わかっているのか曹操! これは完全な裏切り行為だぞ!」

「今さらだろう。これまでも彼女のチームは散々組織をひっかき回してくれたんだからな」

まるで気にした様子も無く曹操はそう言つてのけた。数日前、ヴァーリチームが無断でオフィスを連れ出した事が発覚した時も、他の派閥の者達が糾弾する中で、曹操だけは何も言わなかった。まるで、そんな事に時間を取られたくないと言わんばかりに……。

「それよりもゲオルク。俺は今から出かけさせてもらうぞ。そうだな……今回は五日間ほど空けさせてもらう。その間の事はキミに任せた」

椅子から立ち上がり、立てかけてあった槍を手に出て行こうとする曹操に、俺は思っていた事をストレートにぶつけた。

「どうしたというんだ曹操……。最近のキミはおかしいぞ。先日も急にいなくなつて、三日前に帰ってきたばかりじゃないか」

しかも、全身ボロボロになつてだ。これで気にしない方がおかしい。なのに、そうやって心配する俺達に曹操が見せたのは、満足そうな笑みだった。

『ふふ、自分がどれほど聖槍の力に頼り切りだったかがよくわかつたよ。おかげで中級相手にこのザマだ。……だが、悪くない。悪くない』

い気分だよゲオルク」

爽やか過ぎるその表情が、逆に俺を戦慄させた。傷だらけなのに、この時の曹操からは言い様も無いプレッシャーじみた何かを感じた。それに圧倒され何も言えない俺達を尻目に、曹操は手当てを受けさつさと部屋に戻ってしまった。これが三日前の出来事だ。

「道をな．．．引き返そうと思ったんだ」

「道？」

「ああ。楽だが先の無い道から、険しくとも．．．その先にある『覇』を手に入れる為の道に戻る為にな」

そう言い残し、今度こそ曹操は部屋を出て行った。一人残された俺の目に、机の上に置かれていた一冊の書物が映る。

「．．．鋼の．．．救世主．．．」

曹操．．．キミは．．．

「ゲオルク！ 曹操は．．．？」

部屋を出て自分の部屋に戻る途中、出くわした仲間の一人がそう聞いて来た。

「出かけたよ。彼の言う事を信じれば、帰って来るのは五日後だ」

「またか．．．。一体曹操は何を考えているんだ．．．！」

「何を考えていようと、俺達は曹操を信じてついて行くだけだ」

それは仲間に行ったのか。それとも自分に言い聞かせる為に言ったのか。今の俺には分からなかった。

「あ、ああ、そうだな」

「だが、例の計画は彼抜きで行う必要があるかもしれん」

「え？」

「．．．何でも無い」

俺は早足でその場を去った。そして、部屋に戻った所で、棚から一冊の書物を手に取った。これは数ヶ月前、仲間の一人が偶然手に入れた物だ。その者曰く、銀髪のファンキーな中年男性にいきなり渡されたらしい。最初聞いた時はもちろん怪しんだが、中身を見てすぐにこの魔術書は『本物』だと理解した。

「第一級禁術『時空転移』．．．。既に必要な物も人も揃えた。後は決

行するだけだ」

場所どころでは無い。文字通り時間と空間すらも越えて対象を転移させる超魔術。人間界どころか、冥界や天界でもこれほどの魔術書は滅多に見られないだろう。

そして、本の裏には悪魔の文字でこう書かれていた。

——ルシファー。

第四百四十四話 やつぱり必殺技にはカッコいい名前を付けたい

イツセーSIDE

サイラオーグさんの『騎士』リーバン・クロセル。視界に映した場所に重力を発生させるといふ神器『魔眼の生む枷』を持った魔法剣士を相手に、俺は見事勝利した。流石にコリアナさんの時の様に無傷の勝利とはいかず重力弾や剣撃を数発もらっちゃまったが、気にするレベルじゃない。小猫ちゃんがあれだけ頑張ったんだ。先輩である俺が気張らなくてどうすんだって話だぜ。

「大丈夫かい、イツセー君」

「心配すんな。このくらいなら問題無いぜ。ほら、ダイスシユートが始まるぜ」

発表された数字は——またしても八。けど、今出場した俺は続けて出る事は出来ない。

「ゼノヴィア、お願い」

「・・・この時を待っていた」

戻って来た部長に指名されたゼノヴィアが静かに一步前が出る。表情こそ澄ましているが、全身から発している怖いくらいの闘気は隠し様が無い。コイツ、今回の試合に並々ならぬ想いをかけてるからなあ・・・。

「そしてもう一人・・・ギヤスパー、お願い」

「え、ええ!?! 僕ですか!?!」

「そうよ、ここはあなたに出てもらいたい」

「で、でも、僕でいいんですか? ここは祐斗先輩にした方が・・・」
「パワータイプにサポート役をつけるのは基本よ。あなたの邪眼とヴァンパイアの能力でゼノヴィアを助けてあげてちょうだい」

「け、けど・・・」

「けど、じゃねえよ」

俺はギヤー助の頭に一発お見舞いしてやった。

「痛いっ！ な、何するんですかイツセー先輩!？」

「いつまでもビビってんじゃねえ。会長とのゲームで最後まで部長を守ろうと頑張ったお前はどこ行っちゃったんだ」

「ギヤスパ―君、普段は弱気でも本当のあなたはとても勇気のある男の子ですわよ」

「僕達は知ってる。あの開かずの教室を出た日から、キミが自分の力に向き合い、懸命に努力して来た事を」

「臆病者だったお前はもういない。私達も、ここにいない小猫も、みんなそう思っている」

「みなさん……」

俺達の顔をぐるりと見渡したギヤスパ―が体を振るわせる。その目には少しだけ涙が溜まっていた。

「ギヤスパ―。あなたは私には勿体無いくらいの力を持った子よ。お願い、その力を私に、私達に貸してちょうだい」

「部長……」

部長の言葉に、ギャー助は目元を拭って力強く頷いた。ギャー助、今のお前『男』の顔してるぜ。

「ゼノヴィア先輩、お供します!」

「頼むぞギヤスパ―。お前と共に勝利を掴み……今日こそ、あの忌まわしい蔑称と決別してやる」

蔑称ね。どっちかというときみなさん愛称として使ってるみたいなんだけど……。本人は相当不満やら鬱憤が溜まってるとみただし、このゲームでそれを爆発させる気満々みたいだったから仕方ないか。

「ゼノヴィア。私はこの試合中に一切指示はしないわ。思うがままに戦いなさい。必ず勝つって信じているわよ」

「……ありがとうございます」

ゼノヴィアとギヤスパ―が並んで魔法陣へと向かう。それを見送る中で、朱乃さんが部長に尋ねる。

「リアス、どうしてゼノヴィアちゃんにあんな事を？」

「あなたも知ってるでしょ。前回のゲーム以降、冥界でゼノヴィアが何て呼ばれているか。あの子がその呼び名に悩んでいた事を。さっ

きあの子が言った通り、今回の勝負はあの子にとって決別の為の戦いなのよ。だから、私はあの子に後悔の無い戦いをして欲しいの」
シリアスに答える部長。だが、語る内容は「天嬢さん」についてである。

『なお、今回のバトルフィールドですが、予定したフィールドから急遽変更し、この会場から少し離れた場所に位置する浮島となりました。ドーム状に結界を張ってありますので、場外に出る心配はありません。存分に戦ってもらいましょう！』

フィールドの紹介から始まり、続けて選手の紹介が始まった。

『さあ、両チームの選手の入場です！ まずバアルチームからは『戦車』のラードラ・ブネ選手と『僧侶』のミステイター・サブノック選手です！ どちらとも断絶した御家の末裔というところでもない組み合わせとなりました！』

『断絶した元七十二柱のブネ家とサブノック家の末裔ですね。能力さえあればどんな身分の者でも引き入れるのがサイラオーグ選手の考えですので、彼等が眷族になったのも納得ですな。まあ、他の血と交じってまで生き残る家が無かった事にした純血重視の上役達には厄介払いと蔑まれているみたいですけどね』

『・・・そうなんですか』

『おっと、フューリー殿は初耳でしたか。いやあ、私とした事がつい口が滑ってしまいましたな』

嘘だ！ 絶対ワザとだろ先生！ 口元がしてやったとばかりににやけてるからバレバレなんですよ！

『続いてグレモリーチームより『騎士』ゼノヴィア選手と、『僧侶』のギヤスパー選手！』

続いてこっちの二人が紹介された途端、ビックリするくらいの歓声が巻き起こった。

『待ってたぜ天嬢さん！』

『今日は天井は無いから安心して戦えよー！』

『ママー！ てんじようしやんだよー！』

『あらあら、本当ね』

大人気だな天j・・・ゼノヴィアア！ こうして見ると、やっぱりみんな馬鹿にしてるわけじゃなくて、純粹に応援してくれてるだけなんだよ。この歓声を聞けばゼノヴィアもきつと気付いて・・・。

『フ、フフフフ・・・ヤツテヤル。ヤツテヤルゾ』

ないっぽいですけどおおおおおおおおお！ なんちゆうおどろおどろしいオーラ放ってんだよゼノヴィアさん！ 隣のギャー助が中てられて今にもぶっ倒れそうなんですけどお！

『では、試合開始——』

『うおおおおおおおおお!!!』

試合開始が宣言された瞬間、ゼノヴィアは天に掲げたデュランダルから尋常じゃない

オーラを噴出させながら光の刀身を伸ばし始めた。見る見る内に長さを増していった刀身は、なんと上空に展開していた結界に届くほどの長さになった。何やってんだゼノヴィア！ それじゃ前回の二の舞じゃないか！

『ゼ、ゼノヴィア選手のデュランダルから伸びた光の刀身が結界に激突しました！ これはもしやシトリー戦の再現なのかあ！』

『今の私はあの時の私とは違う！ デュランダル！ 私の想いに応えろおおおおお!!!』

ゼノヴィアの叫びが届いたかのように、デュランダルから発せられる光がかってないほど激しいものになった。さらにフィールド全体が大きく揺れ始める。その光景を見て、俺は神崎先輩が新たな力に目覚めたあの場面を思いだしていた。

『なんとという光だ・・・ミステイター！』

『わかってる！ すぐに準備を・・・!』

『え・・・え・・・!?!』

それを見た相手側が慌てたように動き始める。ギャー助はどうしていいかわからずオロオロしていた。

後方に下がったミステイターから禍々しいオーラが発せられる。けど、ゼノヴィアのものに比べたらもの凄く小さい様に見える。それだけ、今のゼノヴィアから発せられているオーラはとてつもないもの

だった。

『ラードラ！ 完了までの時間を！』

『わかっている！』

ミステイータを守るように立ったラードラ。その体が突如変化を始めた。ひよろ長い体がどん膨れ上がり、尾や翼が生まれ、さらには口元から牙が剥き出しとなり、手の爪までもが鋭くなっていく。変化が終わった時、そこには黒く巨大な存在——ドラゴンがいた。アイツ、匙と同じ様にドラゴンになっちまった！

「なんて事……！ 確かにブネは悪魔でありながらドラゴンを司る一族よ。でも、変化出来るのは一族の中でも限られた者だけだったはず……！」

『鍛え上げる事で覚醒させたか。へっ、流石はサイラオグって事か』
「やっぱりすげえやサイラオグさん……！ そして、それに応えたラードラも……！」

『速攻で決着をつけるつもりだったようだが、その選択は間違いだったな！』

ラードラがゼノヴィアに向かって突進していく。マズイ！ 今のゼノヴィアは身動きがとれな——。

『……間違い？ いいや、これでいいのさ！』

『何……？』

『突き破れ、デュランダルー——！』

天に向かって咆哮するゼノヴィア。次の瞬間、光の刀身が結界を突き破り、遮る物が無くなった刀身が再び天に向かって際限無く伸びて行く。ア、アイツ……結界ぶっ壊しやがったぞ?! ラードラも驚愕したのか動きを止めてしまった。

『け、結界が壊れた!? 上級悪魔の攻撃にも耐えられる強度で作られたはずなのに!?!』

『ははっ！ あのパワー馬鹿め。あそこまで突き抜けたら大したもんだぜー！』

実況の驚愕の声に重なるように先生の笑い声が木霊する。

『解放と収束、そして反発。これが今の私が撃てる最大最強の一撃だ』

！』

『化物め！ ミステイータまだか!?』

『いける！ 聖剣よ、その力を閉じよ!』

ミステイータの杖から伸びる怪しい光がゼノヴィアへ向かう。だが、もう少しでゼノヴィアの体に届くといった所で、弾けるように光が消えてしまった。

『ば、馬鹿な・・・『異能の棺』が通じない!?』

『異能の棺』？ まさか神器を使おうとしたのか？ けど、それが不発に終わって驚いてるみたいだ。

『『異能の棺』は自身の体力、精神力を極限まで費やす事で特定の相手の能力を一定時間完全に封じる神器です』

『ですが、ゼノヴィア選手には効果が無いようなのですが』

『答えは単純です。ミステイータ選手の体力、精神力はゼノヴィア選手の力を封じるまでには至らなかつたという事です。おそらくミステイータ選手は神器を使えるようになってまだ日が浅いのでは?』
『ええ、おっしゃる通りです』

実況組の解説が聞こえたのか、ゼノヴィアがミステイータへ目を向ける。

『残念だったな。いつもの私ならばもしかしたら止められたかもしれない。だが・・・今の私を止められると思うなああああ!!!』

『く、くそおおおお!!!』

そして、ラードラとミステイータはゼノヴィアの振り降ろした一撃の光の中へ消えて行ったのだった。

『サイラオーグ・バアル選手の『戦車』一名、及び『僧侶』一名リタイヤ』

なんだろう。勝って嬉しいはずなのに、相手に申し訳ない気持ちでいっぱいなんだけど・・・。

『あ、あれ・・・僕の出番は・・・?』

そんなもってギヤール助。あんなに気合い入れて臨んだのにまさかの出番無し・・・。いや、でも、うん、仕方ないな。

『ふう・・・ふう・・・。ど、どうだ。これでもう誰も私を天井に負け

た女などと言わないだろう』

相当な力を消費したのか、肩で息をするゼノヴィアだが、その顔は満足感に溢れていた。

『『わあああああああ!!!』』』』

そんなゼノヴィアを称える様に歓声を送る観客達。だが、次に聞こえて来た声にゼノヴィアは表情を凍らせた。

『おめでとう、天嬢さん!』

『ついに天井に勝ったのね!』

『もう『天井に突き刺さって動けなくなつたお嬢さん』とは呼べないな!』

『ああ! 今日からは『天井に打ち勝つたお嬢さん』で天嬢さんだ!』

『さっきのすげえ技、さしずめ天井爆砕剣って感じだな!』

『おお! ピツタリだな!』

『新天嬢さんの誕生だぜ!』

『おめでとう、新天嬢さん!』

『おめでとう!』

』』

巻き起こる天嬢さんコールを浴びたゼノヴィアは、声もあげずにその場に崩れ落ちた。

『ど、どうしましたゼノヴィア先p・・・ひいつ!? 白目剥いてるうううううう! 誰か、誰か助けてくださいいいいいいい!!!』

「・・・リアス」

「・・・私が悪かったわ」

気まずそうに顔を伏せる部長。場には何とも言えない微妙な空気がジワーツと漂っていた。

第四百四十五話 男の戦い

イツセーSIDE

失神したゼノヴィアが医務室に運ばれて数分後、会場にアナウンスが鳴り響いた。

『えー、次の試合を開始する前に皆さまにご報告があります。先程の試合終了後に倒れたゼノヴィア選手ですが、どうも戦える精神状態ではないとの判断でドクターストップがかかりましたのでリタイア扱いとなりました』

「ゼノヴィアエ・・・」

「すみません！ すみません！ 僕が役立たずだったせいですううううう!!」

「い、いいえ、ギヤスパーは何も悪くないわ・・・」

「そ、そうだよ。まさか開幕からいきなりアレを使うなんて誰も思っ
てなかったんだから・・・」

「え、ええ。それに、ギヤスパー君を温存できたんだからこちらとしてはよかったですわよ・・・」

「うえええええん！ 氣遣いが心苦しいよおおおお!!」

泣くなギヤール助。部長が言う通り、お前には何の非もねえよ。堂々と「俺は悪くねえっ！」って態度でいればいいんだよ。

『ゼノヴィア選手のリタイアにより、グレモリーチームは残り五人、そしてバアルチームは残り三人となりました。人数的にはグレモリーチーム有利ですが、バアルチームに残るのはいずれも強力なメンバーばかり。勝負の行方はまだわかりません』

確かに、残っている『兵士』は駒の消費が七だし、『女王』はいわづもがな。そして、大将であり最大戦力であるサイラオーグさん。こつからが滅茶苦茶きつくなりそうだけ。

ダイスシュートが始まる。サイラオーグさん側の出場選手が少ないので、出れる数になるまで数回振り直した結果、出た目の合計が九になった。この数なら朱乃さんも出れるな。

「九という事は、向こうは『女王』か『兵士』のどちらかね。ただ、こ

これまでの試合の流れから見ても、おそらく『兵士』は出て来ないわ
「何ですか？」

「サイラオーグはあの『兵士』を可能な限り使わない気がするの。大きな数字という事もあるけれど、それでも二回は出す機会があったのに出さなかった。温存というにはちよつと大げさすぎると思ったの」
「となると、出て来るのは『女王』ですね」

「ええ、名前はクイーシャ・アバドン。サイラオーグの『女王』にして、『番外の悪魔』と称されるアバドン家の者よ」

話に聞くとアバドン家の実力は相当なものらしく、現在のゲームランク三位もアバドン家の人だったはずだ。以前見たグラシヤラボラスとのゲームの記録映像でも、クイーシャさんは絶大な魔力と、アバドン家の特色とされる『穴』を使って活躍してたっけ。

「ようやく私の出番のようですね」

そう名乗り出たのは朱乃さんだった。確かに、まだ一度も出場していないけど……。

「……いけるの朱乃？ 相手はアバドンよ？」

「だからこそよ。私よりも実力が上のイツセー君と祐斗君は少しでも温存したい。ギヤスパー君はさつき出たから連続出場は出来ない。だったら、私が出るのが一番ですわ」

「朱乃さん……」

「頼りになる人達が後ろにいてくれる……。イツセー君、あなた達の存在が私に戦う力を与えてくれるのですわ。たとえ勝てなくとも、体力や魔力を少しでも奪ってあなた達に繋がります。みんなで勝利を掴みとりましょう」

ニコニコと、朱乃さんはいつも俺達を安心させてくれる笑顔を俺に向けて来た。……これ以上何か言うのは野暮だよな。

「行ってらっしゃい朱乃。繋ぐなんてケチくさい事言わないで思いつきりやってきなさい」

「ええ。別に倒してしまっても構わないのでしょうか？」

部長に背中を押され、朱乃さんが魔法陣へ向かう。

「……あれ？ あ、朱乃先輩……！」

と思つたら、ギャー助が何かに気付いて慌てて朱乃さんを追いかけた。けど、すでに朱乃さんの姿は魔法陣の向こうへ消えていた。

「どうしたのギヤスパー？」

「あ、な、何でも無いです。．．うん、戻つて来たら渡したらいいよね」

何がしたかつたんだギャー助？　つと、それよりも試合だ試合！

モニターに目を向けると、まず映しだされたのは石で出来た塔が多く立ち並ぶフィールドだった。朱乃さん、そして対戦相手の『女王』クイーシャ・アバドンさんがそれぞれ向かい合う様に塔のてっぺんに立っている。巫女服姿の朱乃さんに会場の男達が興奮した様子の声を上げていた。悪魔が神聖な衣装に興奮するってどうよ？　俺も人の事は言えんが．．。

『やはりあなたが出て来ましたか。雷光の巫女』

『こちらもあなたが出て来ると思っていましたわ』

『試合開始！』

開始の宣言と共に、両者が翼を羽ばたかせ空へ舞い上がる。朱乃さんもクイーシャさんも共に魔力に秀でた者同士だ。なら当然その戦いもそれを使ったものになる。

『いきますわよ！』

『受けて立ちます！』

そして、互いの全力を込めた魔力の撃ち合いが幕を開けた。朱乃さんが放った炎とクイーシャさんが放った氷が二人の中心で激しくぶつかる。なんてパワーだ！　今の衝突で周囲の塔が根こそぎ破壊されてしまった！

『流石、素晴らしい魔力ですわ』

『それはこちらのセリフです。ですが、それがあなたの全てでは無いでしょう？　撃つて来なさい、雷光を』

『言われなくとも見せてあげますわ！』

天空に生まれる暗雲。そこからクイーシャさんに向かって極大の雷光が降り注ぐ。自分の血を受け入れた朱乃さんだからこそ使える雷と光を組み合わせた雷光！　当たれば悪魔にとって致命傷間違い

無しだ。

『これが雷光……！ ですが……』

直撃の寸前、クイーシャさんと雷光の間に円形の『穴』が生まれ、その中へ雷光が吸い込まれて行った。なんでもかんでも吸い込むアバドン家の能力、ここで使つて来たか。

『見事な一撃でした。では……お返ししましょう』

『え……!?!』

朱乃さんの頭上に『穴』が空いた。何をする気だと思った次の瞬間、その『穴』から眩い光が朱乃さんに向かって降り注いだ。あれは……まさか朱乃さんの雷光!?

『ぎやああああああ!!!』

悲鳴と共に朱乃さんの姿が光に飲み込まれる。ど、どうして朱乃さんの攻撃が朱乃さんに!?

『私の『穴』は今みたいな具合に、吸い込んだ相手の攻撃を分解して放つ事も出来るのです』

「何ですって!?! くつ、グラシヤラボラスとのゲームでは使つていなかったのに……!」

確かに、グラシヤラボラス戦では吸収しかしてなかった。あの時は隠してたのか!

『姫島選手、自らの放った雷光が直撃! これで決まりかあ!?!』

『雷光の巫女、切り札は最後まで取っておくものです』

『——ええ、その通りですわね』

『ツ……!?!』

突如として放たれた光線がクイーシャさんを襲い、慌てて回避行動に移ったクイーシャさんが目を見開く。その視線の先には、致命傷どころか衣服すら無傷なまんまの朱乃さんの姿があった。

「よ、よかった……。無事だったんだな朱乃さん」

でもどうして? 確かに直撃したはずだったのに。これじやまるで朱乃さんも『穴』を使つて吸収してしまつたかのようだ。

『まさか、返されるとは思つていませんでしたわ。……ですが、おかげでチャージの手間が省けました』

そう微笑む朱乃さんがかざした右手・・・その指にはバチバチと帯電し、うつすらと発光するお札が挟まれていた。あれって・・・確か朱乃さんが先輩に教えてもらった技だ。名前は・・・。

『爆雷符』・・・札に込めた力を術者のタイミングで発動させる技。私がりョーマに教えてもらった技ですわ。前回のゲームではトラップとして使用する事に拘り過ぎてあんな終わり方をしてしまいました。が、あれから改良して、今ではこうして直接攻撃用のお札も作らせてもらいましたの』

胸元からもう一枚お札を取り出す朱乃さん。またしても観客達が歓声を上げる。ええい、うるせえ！ 朱乃さんの声が聞こえねえだろうが！

『最も、トラップ用のお札に比べて、雷光をチャージするのに時間がかかるのが欠点ですけど。それもあなたのおかげで解消しましたわ』

『・・・まさか、先程のチャージ云々の発言は・・・』

『気付いた様ですわね。あなたが返して来た雷光・・・そのままこのお札に込めさせて頂きましたわ。さあ、どうします？ 返せば返すほど、爆雷符の威力はどんどん上がりますわよ？』

『ならば、それをさらに返すだけです』

『それを私が返します。ふふ、この反撃合戦、はたしてどちらに軍配があがるのか楽しみですわ！』

おお、朱乃さんも反撃吸収の手段を持ってたのか。てかあのお札すげえ！ あんな小さいのにさつきみたいな馬鹿でかい光も吸収できるのか！

そして、再び魔力の撃ち合いが始まった。炎、水、風、ありとあらゆる魔力がフィールドを走り、雷光を互いに飲み込み相手へ返す。互いに決定打を与えられず、時間だけが過ぎて行った。

『持ち込んだお札は二十枚。ここまで使ったのは十九枚。次で最後ね』

『お返ししますー！』

クイーシャさんが何度めかの雷光を放つ。対する朱乃さんもお札を取り出そうと胸元へ手をやるが・・・。

『ッ!? な、何で!? お札が無い!? ツ、嘘、破けて・・・!?』

朱乃さんの顔が驚愕に染まる。その一瞬の隙が全てを決めた。

『ああああああああ!!』

『リアス・グレモリー様の『女王』のリタイヤを確認』

絶叫と共に朱乃さんの姿が光に包まれ、無情なアナウンスが俺達の耳に届いた。朱乃さんが・・・負けた?

「最後がちよつと腑に落ちなかったね。どうして動きを止めてしまったんだろう?」

「ああ、なんか信じられないって顔をしてたよな」

何かトラブルがあったんだろうか。けど、それを確かめる術は無い。

「・・・気を取り直しましょう。朱乃は善戦してくれた。終盤に差し掛かっているのだから気は抜けな・・・ギヤスパー?」

「あ、ああ・・・」

「ギヤスパー君?」

「ぼ、僕の所為だ・・・! 僕があの時もつと早く動いていれば・・・!」

ギヤール助が顔を真っ青にして震え始める。

「僕が・・・僕が・・・!」

「おい! しつかりしろギヤール助!」

『両『王』はダイスの前に』

「行つて来るわ。二人とも、ギヤスパーをお願い!」

ギヤスパーの異変を心配しながらも部長がダイスを振りに行く。出た数字は・・・なんと十二! マックスの数字だ。そしてそれはあの人が出て来るかもしれない事を意味していた。

『十二! 十二です! ついにこの数字が出ました! そう! 価値十二のサイラオーグ選手が出場出来る数字です!』

実況に合わせて向こうの陣地でサイラオーグさんが上着を脱ぐ。

間違い無い、出る気だ!

「・・・イツセー君、僕が出る」

「木場!? 待てよお前、まさか・・・一人で出るつもりか!」

「うん」

「うん・・・じゃねえよ！ わかってんのか!? 間違いなくサイラオーグさんが出て来るんだぞ！」

「もちろんわかっているさ。僕ではあの人に勝てないのもわかってるよ。それでも僕が出る。一太刀でも浴びせてキミと部長に繋ぐ。その為ならば喜んでこの身を投げ打つき。本音を言えばギヤスパ―君にも付き合ってもらいたいけど・・・とても出れそうな状態じゃなさそうだしね」

「けど・・・！」

「それに、これも立派な作戦だよ。この試合の後、おそらくさっきの『女王』が出て来るはずだ。それをイツセー君が倒す。そうすると残りは二人だけど、連続出場禁止のルールである以上、続けてイツセー君は出れない。そこでギヤスパ―君を出してすぐにリザインさせれば、イツセー君はサイラオーグ・バアルと戦える。・・・ですよ、部長？」

「・・・そうか、コイツ・・・そこまで考えたからこそ一人で出るつもりなんだな。それが木場の覚悟なんだな。なのに、俺はそんな事にも気付かずに・・・！」

「・・・わかった。ならもう何も言わねえ」

「ありがとう。では部長、行って来ます」

「祐斗・・・私は・・・！」

「何も言わないでください部長。僕も、これまで倒れて来た仲間達も、あなたの『愛』に報いたいから戦うんです。リアス・グレモリーという、眷属を愛してくれる素晴らしい『王』の為、『騎士』である僕はこの身を捧げます」

「・・・なら、私はその『献身』に報いてみせる。祐斗、約束するわ。必ずこのゲームに勝利してみせる。だからあなたは・・・」

「はい。全てを出し切って来ます」

ニコリと微笑み、木場は勝ち目の無い戦場へと転移していった。

湖の湖畔、先に転移していたサイラオーグさんが木場を見て組んでいた腕を下ろす。

『ほお・・・お前一人か。あの『僧侶』も出て来ると思ったが』

『ギヤスパ―君には別の役目がありますからね。僕だけでお相手させてもらいますよ。あなたからすれば不満かもしれないませんが』

『不満？ あるわけがないだろう。むしろ逆だ。お前のその目・・・。覚悟と決意に彩られた戦士しか持ち得ない目を持つお前と戦える事に、俺は喜びしか感じていない！』

一切の油断を見せず木場を見据えるサイラオーグさん。だよな。あの人ならそう言うと思つてた。

『やれやれ。少しでも油断や慢心をしてくれればよかつたのに・・・』
『試合を開始してください』

試合が開始する。刹那、サイラオーグさんの両腕と両脚に見た事も無い紋様が浮かびあがつた。

『“枷”を外させてもらう。お前の覚悟に全力を以つて応えるために！』

紋様が消えた次の瞬間——空気が、大地が、湖が、世界が爆発した。サイラオーグさんの全力にフィールドが悲鳴をあげていた。

「これが・・・サイラオーグさんの全力・・・！」

戦慄する俺が次に目にしたのは、爆発の中心に佇むサイラオーグさんの姿。その体は白く発光し、全身に闘気を纏わせるその姿は、小猫ちゃんを彷彿とさせた。まさか・・・あれって仙術!?

『どういう事だ・・・。サイラオーグが仙術を習得しているという情報は得ていない。なら、あの可視化するほどの質量の闘気は・・・』

『ど、どういう事なのでしょう、皇帝?』

『あれは仙術では無く、体術を鍛え続けた者だけが目覚めさせる事の出来る闘気です。仙術と区別する為にオーラとでも呼びましようか。魔力では無い、生命の根本とも言わべき純粋なパワーの究極の形といつてもいいでしょう。果ての無い努力の結果、彼だけに許された、正に彼だからこそ得られた努力の結晶です。・・・ここまでくると畏敬の念を禁じ得ません』

皇帝の言う通りだよ。この人、どこまで凄い人なんだ。こんな人と戦うのか、俺は・・・。

『さあ、いくぞ聖魔剣使い！ お前の覚悟と俺の覚悟、どちらが上かこの場で決めようではないか！』

木場へ向かって走り始めるサイラオーグさん。進路上のありとあらゆるものを破壊しながら迫るその様子は、まるで自然災害が人の形をとっているかのようなだった。

『風よー！』

木場がベルーガ戦で見せた巨大竜巻をサイラオーグさんへ放った。
が……。

『散れい！』

サイラオーグさんの右拳が竜巻とぶつかったと思った瞬間、竜巻がかき消えた。ちよっ！ あの人ワンパンで竜巻吹っ飛ばしたんですけど!? パンチだぞ!? 物理でどうにかなる物じゃないでしょうが！

『だったら……！』

冷や汗を流しながら、木場が続けざまに聖魔剣による壁を幾重にも展開させるが、サイラオーグさんの勢いを止まらない。目の前に現れた聖魔剣の壁を拳も振るわず、ただの突進で次々と突き破って行く。め、滅茶苦茶過ぎるぞこの人！

『この程度で俺を止められると思ったかあ！』

『くっ……非常識は神崎先輩で十分だっていうのに……！』

先輩へのさりげないdisりを漏らしつつ、木場がサイラオーグさんから距離を取る為に高速で動き始める。それを追いかけるサイラオーグさん。両者の距離が見る見る内に縮まって行く。パワーだけじゃない。速さも規格外なのかよ！

『捉えたぞ聖魔剣！』

『ッ、しまっ……！』

左手で木場を拘束したサイラオーグさんが、離すと同時に右拳を全力で木場の腹部に叩き込んだ。喰らった木場は冗談の様な速度で湖の向こう岸まで吹っ飛んで行った。

『逃がさんぞー！』

サイラオーグさんが湖に向かって駆けて行く。そして、またしても

あり得ない光景を俺は目撃する事となった。

『は、走っています！ サイラオーグ選手、なんと湖の上を走っています！ はっ！ これはまさか人間界で有名なジャパニーズ・ニンジャ!?!』

水面を割りながら爆走するサイラオーグさんは、一分もかけずに向こう岸に辿りついてしまった。

『はあっ．．．はあっ．．．』

そこでは聖魔剣を杖にしながらも木場が立っていた。誰が見ても満身創痍だ。だけど、その瞳の輝きだけは全然弱くなっていなかった。

『まだ立つか．．．』

『ベルーガ殿に勝った僕が、簡単に諦めては彼に申し訳ないからね！』
『ベルーガ：．．．ああ、そうだ。ヤツの意地を俺は誇りに思う。ベルーガだけでは無い。コリアナ．．．ガンドマ．．．リーバン．．．ラードラにミスティータ．．．。誰もが俺には過ぎた眷属達だ。負けはしたが、ヤツ等が残してくれた物は全て俺の中にある。それを今、お前に見せてやる』

そう言うと、サイラオーグさんは右の拳を力強く握ると、ゆっくりと引いた。全身を纏っていた闘気が全て拳へと流れて行き、右腕そのものが異様な盛り上がりを見せた。ヤバイ．．．あれは本気でヤバイヤツだ！

『すまん、聖魔剣使い。どうやら俺は、眷属がやられた事に、思っていた以上の憤りを感じていた様だ』

拳を放つ寸前、サイラオーグさんは謝罪を口にした。

『ゴメン．．．イツセイ君。結局、何も出来なかったよ．．．』

木場が何か言った直後、映像が激しく揺れ、それが治まった時、サイラオーグさんの位置から直線上の地面が大きく抉れていた。それはあの一撃が．．．眷属達の無念を込めた怒りの一撃がもたらした結果だった。

『リアス・グレモリー様の『騎士』のリタイヤを確認しました』

試合終了が告げられる。結局、木場が成す術も無くやられてしまっ

ただけで終わってしまった。サイラオーグさんの実力を目の当たりにし、俺の心にどうしようもない思いが生まれてしまった。

——俺は、あの人に勝てるのか？

若手ナンバーワンの意味を甘くみていたつもりはない。研究だつてして来た。それでも、こうして直接あの人の戦いを見て、果たして俺はまともに戦えるのだろうか。

「イツセー？ イツセーってば」

マイナスな考えに浸っている俺に部長が声をかけて来た。

「は、はい？ なんででしょう？」

「ダイスを振って来たわ。合計の数字は九よ」

ダメだ。集中しろ、俺。ここで負けたら戦う事すらなくなるんだ。まずはこの勝負に勝たないと。

「わかりました。じゃあ作戦通り俺が——」

「・・・僕が出ます」

「「え？」」

声を揃える俺達の前に立つのはギヤスパーだった。さつきまで錯乱状態だったはずなのに、今は怖いくらい冷静な表情をしていた。

「次の試合、僕が『女王』と戦います」

「ギヤー助、それは・・・」

「あのね、ギヤスパー。あなたは・・・」

「ちゃんと聞いてましたよ。次の試合でイツセー先輩が『女王』を倒して、次に僕が出てすぐにリザインするんですよ？」

「え、ええ・・・」

淀みなくスラスラと作戦について答えるギヤー助。なんだ？ 今のコイツからなんか違和感が・・・。

「それなら、僕が『女王』を倒してしまえばイツセー先輩は余計な消耗をしなくて済みますよね？ だから僕が出て『女王』を倒します。あの人は僕が倒さないといけないんです」

「・・・本気で言っているの、ギヤスパー？」

「本気です。行かせてください部長さん」

いつもならば逸らしてしまう目を、一切逸らす事無く部長と向かい

合うギヤー助。数秒して、部長が静かに口を開いた。

「・・・わかったわ。行つて来なさい、ギヤスパー」

「あ、ありがとうございます！」

深々と頭を下げ、ギヤー助が魔法陣へ向かう。

「いいんですか、部長？」

「確かに、この判断は正しく無いのかもしれない。けどね、イツセー。あの子が・・・ギヤスパーが自分から戦いを志願して来たのよ。私は、あの子の意思を尊重してあげたい」

「部長・・・」

「もちろん、それだけが理由じゃないわ。ギヤスパーは“倒す”と口にした。自分の実力になんか自信を持っていないかったあの子がハツキリとそう言ったの。きつと何か考えがあったからこそ、そう言ったんだと私は思うの」

「そうか、俺が感じてた違和感の正体がわかったぞ！ 部長の言う通り、自分が出たら負けるってビビっていたギヤー助とは思えない発言だ。」

「部長さん、イツセー先輩」

魔法陣まであと一歩といった所でギヤー助が振り返った。

「信じてます。二人がいれば、絶対に勝てるって」

「そう言い残し、ギヤー助は消えて行った。」

「・・・どういう事、ギヤスパー？」

部長の言いたい事がわかった。ギヤー助の今のセリフ・・・まるで自分はもう帰って来ない様な言い方じゃねえか。違うだろ。お前は勝つて帰って来るんだろ・・・？

『試合開始』

ギヤー助とクイーシャさんの戦いは開戦直後から終始クイーシャさんのペースで進んでいった。魔力による攻撃で、あつという間にギヤー助はスタボロになっていった。

『攻撃もせず、ただただ逃げ惑う・・・。何をしに出て来たのですかあなたは？』

『効かない。効かないぞこんなの！ 撃つて来い！ 朱乃先輩を倒し

たあの技を!』

『・・・いいでしょう。まだ雷光は残っています。お望み通り、仲間の一撃で終わらせてあげます』

ギャー助の頭上に『穴』が出現し、そこから光が降り注ぐ。ギャー助は避けようともせず、ただ光を見上げていた。

『――!』
そして、何かを叫びながら、ギャー助は光の中へ飲み込まれて行ったのだった。

イツセーSIDE OUT

クイーシャSIDE

『穴』から放った光が『僧侶』を飲み込む。しかし、リタイヤのアナウンスが流れない。

(・・・驚きました。まだ戦闘不能になっていないようですね)

ならば、今度こそ止めをさそう。そう思い、『僧侶』へ近づこうとした私は、ふと違和感に気付いた。

(何かしら? 体の動きが鈍いわ・・・)

腕が、足が、全身のあらゆる部分が意思に反してどんどん動きが鈍くなっていく。ち、違うわ。動きが鈍いのではなく、体が動かない・・・!?

「・・・僕の頭上に・・・『穴』を開けた時点で、僕が・・・神器であなを・・・止めました・・・」

『僧侶』の姿が視界に映る。私を捉えるその眼が爛々と輝いていた。

クイーシャSIDE OUT

イツセーSIDE

『・・・僕の頭上に・・・『穴』を開けた時点で、僕が・・・神器であなを・・・止めました・・・』

「し、信じられないわ。ギヤスパーがああ光に耐えるなんて・・・」

部長が驚愕している。俺も同じだ。普通に考えて、ギャー助があれに耐えられるわけが無い。それこそ、何かで防がない限り。

それでも、ダメージはデカイ。皮膚の一部は焼けただれていて、見
ていて痛々しい。その状態のまま、ギヤー助はクイーシャさんへ近づ
いていった。今にも倒れそうな動きで、ゆっくり、ゆっくりと。

『……コレが……何かわかりますか……?』

そして、クイーシャさんの目の前に立つと、ポケットからある物を
取り出した。その正体に俺は目を見開く。それは、朱乃さんが使つて
いたお札だった。しかも、チャージまで完了している。なんでギヤー
助があのお札を!?

「まさか……光を込める為にワザと受けたつていうの……!?!」

ギヤー助がそんな捨て身な行動をしたつてののか!?

『あなたとの戦いに向かう前に、朱乃先輩が落としていった物です。
この一枚を持つて行かなかつた所為で、朱乃先輩はあなたに負け
た……。ううん、違う。僕がもつと早く気付いて朱乃先輩に渡して
いればよかつたんだ』

——あ、な、何でも無いです。……うん、戻つて来たら渡した
らいいよね。

ギヤー助のあの試合前の謎の行動はそういう事だつたのか。だか
ら、朱乃さんが負けた時にあんなに取り乱していたつて事か!

『だから、あなたは僕が倒さないといけないんだ! 朱乃先輩の仇は
僕が取るんだ!』

ギヤー助がお札を持った方の手を振り上げる。

「ま、待ちなさいギヤスパー! そんな至近距離で撃つたらあなたま
で……!」。

『イツセー先輩! 後はお願いします!』

ツ……!! お前、まさか最初からそのつもりで……!?!

『僕は……僕は、リアス・グレモリー様の『僧侶』、ギヤスパー・ヴ
ラディだああああああああ!!』

叩きつけるように手を振り降ろすギヤー助。そして、お札から溢れ
出る極光がギヤー助とクイーシャさんを容赦無く飲み込んでいった。

『リアス・グレモリー様の『僧侶』、サイラオーグ・バアル様の『女王』
リタイヤ』

審判からのリタイア宣言が行われる。ギャー助・・・本当にやりやがった。

「・・・そういえば、ギヤスパーは『倒す』とは言っただけで、『勝つ』とは一言も言っていないかったわ。あの子は最初から『女王』を道連れにするつもりで・・・」

——イツセー先輩！ 後はお願いします！

ギャー助・・・いや、ギヤスパー。お前の想い、確かに受け取ったぜ。絶対に無駄にはしねえからな！

「イツセー・・・」

「やりましょう、部長。みんなの想いを背負って、必ず勝ちましょう！」

「・・・ええ！」

『クイーシャ、よくやってくれた。そしてリアスの『僧侶』。ヤツもまた真の戦士だった。敬意を払うと共に、俺は提案したい。どちらも残りは二人。そして『王』と『兵士』だ。もはや細かなルールなど必要無いだろう。俺は次の試合、二対二の団体戦を希望する！』

『おおっと、ここでサイラオグ選手から団体戦の提案が出ました！』
『まあ、出た目によっては彼が赤龍帝と戦えないかもしれないですがね。それならば団体戦にしてしまえというわけですか』

『いいんじゃないか。ここまで来たら個人戦でも総力戦もかわらねえだろう。最も、全ては委員会の判断だが』

「全く、こつちを置いてどんどん話を進めちゃって」

「でも部長」

「ええ。そっちの方がわかりやすくいいわね」

『・・・え？ あ、はい、わかりました。委員会から認めるとのお言葉を頂きましたので、次の試合を事実上の決定戦となる団体戦として執り行いたいと思います！』

こうして、最後の戦いは俺と部長の二人で挑む事となったのだった。

第四百四十六話 夢の形

イツセーSIDE

決戦となるフィールドは、余計な物が一切存在しない広大な平地だった。ここなら思う存分戦う事が出来る。『禁手』状態で立つ俺の隣には部長がいる。この人を勝たせたい。それが、俺達眷属の総意だ。

「ねえ、イツセー」

「なんですか部長？」

「決戦前に聞いていいかわからないけれど、あなたが言っていた『夢の形』……掴めたのかしら？」

夢の形……。ゲーム開始前、会場入りする時に俺が部長へ言った言葉だ。ひよつとして、ずっと気にしていてくれたのだろうか。

「すみません。結局まだ何も……。でも、後一步の所までは来てると思うんです」

「そう……。なら、ひよつとしたら、この戦いで得られるかもしれないわね。私は知りたいわ。夢を見失い、苦悩しながらも掴みとったあなたの『答え』を。叶うなら、その夢の中に私や朱乃達も含まれていたら嬉しいけれどね」

『さあ、激闘に激闘が続いたグレモリーとバアルの勝負もついにこの時を迎えました！ 正真正銘、これが最終決戦です！ グレモリーチームからは『王』のリアス選手と、せきりゅーてーこと『兵士』の兵藤選手！ そしてバアルチームからは先程とてつもない实力を見せてくれた『王』サイラオーグ選手と、謎に包まれた『兵士』レグルス選手です！』

『せきりゅーてー！』

『がんばれ〜！』

歓声の中に子ども達の声が含まれていた。もしかしたら、あの中にファンレターを送ってくれた子がいるのかもしれない。

『最終試合を始めます。両者とも悔いの無い勝負をしてください』

そして、最終決戦の幕が上がった。俺はすぐさま『練成』を行い、両

腕と両脚にブースターを追加した。脚にまでブースターを増やすのは初めてだが、さっきの木場との戦いでサイラオーグさんが見せた速さに対抗するにはこれでもまだ足りないかもしれない。

「リアス、まずはお前に感謝したい。お前と、お前の眷属達と戦えた事を、俺は心の底から嬉しく思っている。お前の眷属は素晴らしい者達ばかりだった」

「それはこちらも同じよ。あなたの眷属達が見せた覚悟や想いは私の眷属達に勝るとも劣らぬものだったわ。今日、あなた達と戦えた事は、きつとあの子達にとつて大きな意味になると思っているわ」

部長とサイラオーグさんが互いの眷属達を称えあう。続いて、サイラオーグさんの視線が部長から俺に移った。

「・・・ようやくだ、兵藤一誠。ようやくお前と戦える時が来た。こうしてお前と対峙しているだけで、歓喜で体がうち震えるぞ」

「サイラオーグさん。俺にはあなたの様な立派な夢や志はありません。そんな俺を信じて仲間達がこの場所に俺を送り届けてくれた。だから俺は・・・俺の全てをあなたにぶつけます！」

「そうだ！ それでいい！ 俺の野望を越えるつもりで来い！ そうでなければ、この俺の拳がお前を打ち砕く！」

「イツセー。存分にサイラオーグと戦って来なさい。あの『兵士』は私が抑えておくから」

部長が『兵士』を見据える。するとそれに応えるように『兵士』が着けていた仮面を外した。その下から現れたのは、俺や木場とあまり変わらないであろう少年の顔だった。だが次の瞬間、『兵士』の体が驚くべき変貌を始めた。

巨大化する体、全身を覆う金色の毛、太さを増す腕や脚、そして、裂けた口から伸びる鋭い牙と、長く伸びる尻尾。既にそこに少年の姿は無く、代わりに一匹の巨大で勇壮なライオンの姿があった。

「な、何だ・・・!?!」

「な、なんと！ バアルチームの『兵士』の正体は巨大な獅子でした！」

『あれは・・・まさかネメアの獅子!? 『獅子王の戦斧』か!?!』

『ご存知なのですかアザゼル総督!?!』

『十三の『神滅具』にも名を連ねる神器だ。元祖ヘラクレスの試練の相手だった獅子を封じたその神器は、極めれば一振りで大地を割るほどの威力を放ち、巨大な獅子にも変化するという。それがまさかサイラオーグの眷属になっていたとは……。報告では所有者はここ数年ずつと行方不明になっていたはずだが』

神滅具!? あのライオンが!?

『獅子王の戦斧』の本来の所有者は既に亡くなっている。俺がコイツと出会った場で、怪しげな集団の手にかかってな。本来であれば所有者が死んだ時点で神器も消滅するはずだったのだが、コイツは消えるどころか戦斧から獅子へと姿を変え、復讐とばかりに所有者を殺した者達を全滅させていた。俺は、この出会いは獅子を司る母の血筋がもたらしてくれた縁だと思い、コイツを眷属にしたのだ』

『運命の出会いって事かしら……。』

『所有者が存在しないにも関わらず、意思を持ち動き、悪魔にまで転生しちまったってのか……。』

「コイツは力が不安定でな。暴走してしまえば勝負どころでは無い。こうして俺と共に出る試合でしか出せないのだ。いざという時は俺がコイツを止める。……。これが、コイツを出さなかった本当の理由だ」

「まさか、相手が神滅具だなんて。……。いいえ、臆するわけにはいかないわ。行くわよイツセー! 何が相手であろうとも、私達は勝利を掴みとってみせる!」

「はい!」

全ブースター最大出力! 初っ端から全力全開
だあああああああ!!!

「うおおおおおおお!!!」

真正正銘、俺のフルパワーを乗せた渾身の一撃をサイラオーグさんの顔面に叩き込んだ……。はずだった。

「……。どういうつもりだ?」

「なっ……。!?」

俺の拳を顔面で受け止めたまま、サイラオーグさんが静かに口を開

だった。

.....

周囲に広がる白い空間。ここは：：神器の中か？ 間違いない、先輩達が座っていたテーブル席がある。

「俺、何でここに……。それに、先輩達の姿が無い……。？」

俺を認めてくれていた歴代の先輩が一人もいない。あのオッサンも、『鎧崩壊』を覚えてくれたあの残念な先輩も、誰もいなかった。

「……はは。そうだよな。あんな情けない姿を見せちまったんだ。見捨てられたって仕方ねえか」

結局、俺の拳は一発もあの人に届ける事が出来なかった。先輩達からしてみれば、こんな出来の悪い後輩なんざ見たくも無いって所か。

「……それは違うわよイツセー」

「ツ!? エ、エルシャ……。さん……」

一人テーブル席の前で佇んでいた俺の背後に、いつの間にかエルシャさんとベルザードさんが立っていた。

「こんな所にまで意識が落ちて来るなんてね。……早く戻りなさい、イツセー。戦いはまだ終わっていないわよ」

「……無理ですよ。エルシャさんも見てたんでしょ？ 俺はサイラオーグさんには届かないんです。あの一撃を受けて、ハッキリそう思ってしまったんです」

「そうね。あの男はかつてないほどの強敵。間違い無く、あなたがこれまでに対峙して来た敵の中で最強の男だわ。……だからこそ、あなたは戦わないといけないわ。それに、この戦いはあなただけの戦いじゃないんでしょう？」

「俺だけの戦いじゃない……。？」

ベルザードさんが空を指差す。つられて見上げてみると、そこには血を吐きだして倒れている俺の姿が映し出されていた。これって……外の映像か……！

『イツセー！ 立ちなさいイツセー！』

その映像の中、レグルスと戦いながら必死に俺に向かって部長が声をかけてくれていた。

『あなたはこれで終わる様な子じゃないわ！　いつだって、誰が相手だって、あなたは絶対に諦めなかった！　だから私達も戦えたのよ！　だから立ってちようだい！』

「部長……」

『イツセー君！』

木場!?　アイツ医務室にいたはずじゃ……！　それだけじゃない、朱乃さんにゼノヴィアに小猫ちゃんまで……！

『僕達は信じてる！　キミなら必ずサイラオーグ・バアルに勝てるよ！　まだ目覚めていないギヤスパー君だって、そう思っているはずだ！　だから！』

木場の叫びに、木場以外の三人が力強く頷く。みんな、こんな事になっちまったも、まだ俺を信じてくれているのか……。

『兵藤！　何やってんだよお前は！』

さ、匙!?　アイツも会場にいたのか!?

『俺達はアガレスに勝ったぞ！　なのに、ライバルであるお前が負けちまってどうするんだよ！　俺と決着をつけたいんだろ！　だったら、俺以外のヤツに負けるんじゃないやねええええ!!!』

「は、はは、無茶苦茶言いやがるぜアイツ……」

『兵藤選手、果たして立つ事が出来るのか!』

『立つさ。アイツは絶対に立ち上がる。アイツは……兵藤一誠は、俺の自慢の生徒だ。アイツの底力を舐めてんじゃないやねえぞ!』

「アザゼル先生……」

そんな事、普段は一言も言ってくれない癖に。ちくしょう、嬉しいよ。

『イツセーさん!』

『白音の頑張りを無駄にしたら私が許さないわよ!』

アーシア、小猫ちゃんのお姉さんまで……。

『立ってよせきりゆーてー!』

『せきりゆーてーが負けるもんか!』

『そうだよ！　せきりゅーてーは絶対に諦めないもん！』

『頑張れせきりゅーてー！』

『せきりゅーてー立ってー！』

会場中の子ども達が俺の名を声を張り上げて呼んでくれている。こんな情けない姿になっちまった俺を、あの子達はそれでも応援してくれるのか……。

——「それいけ！　せきりゅーてー」のモデルであるキミは冥界の子ども達にとってまさに夢と希望の象徴なんだ。

サーゼクス様の言葉が頭を過る。こんな俺を見て子ども達が夢や希望を持つてくれる。だったら、俺はそれだけの男にならないといけない。子ども達にとつてのせきりゅーてーにならないといけない。今なら、ハツキリとそう思える事が出来る……！

『兵藤一誠……これがお前の強さか』

そして、俺を倒した張本人であるサイラオーグさんが、腕を組みながら倒れ伏す俺へ語りかけていた。

『皆がお前を信じている。皆がお前に夢を託している。皆がお前に希望を見出している。お前は……皆の夢や希望が形を成した存在なのかもしれない』

「俺が……みんなの夢や希望を……」

『お前は、やはり俺にとつての真の好敵手になり得る男だ。立て兵藤一誠！　お前を呼ぶこの声が、お前を求めこの声がお前には聞こえているはずだ！　限界を越えてみせろ！　お前は赤き龍帝なのだろう！』

勝利を狙うのなら、俺に止めを刺してしまえばいい。なのにサイラオーグさんはそうしない。この人も、俺を信じてくれているんだ。敵であるはずの俺を……！

『兵藤君……』

「神崎先輩……」

『俺は……俺には、キミにかける言葉が見つからない。だから、ただ信じる。どこまでも真っ直ぐな、兵藤一誠という後輩を……！』

ありがとうございます。それだけで十分ですよ先輩！

「どう？ これでもまだ戻りたくないかしら？」

エルシャさんの問いかけに、俺は首を横に振った。悩んだつもりだった。吹っ切れたつもりだった。だけど、俺は結局何もわかってなかったんだ。

主が、仲間達が、恩師が、ライバル達が、子ども達が、尊敬する人が俺を待っていてくれる。俺を信じてくれている。

「・・・ようやくわかった。俺の夢の形・・・。こんなにもシンプルで、こんなにも大切な物だったんだな・・・」

「その言葉を待っていたぞ」

俺の前に初めて見る男性が立っていた。わかるぞ、この人が最後の歴代所有者だ。この瞬間、俺は歴代所有者全員に認められたんだ。

「へっ、馬鹿な癖に頭を使おうとするからだ」

「まあまあ、それがこの子の良い所でもあるからさ」

「オツサン・・・先輩・・・いつの間に・・・」

「彼等はずっとここにいたわよ。ただ、自分を追い込み過ぎていたあなたが目を逸らしていただけ。さあ、イツセー。今こそあなたの『覇龍』を目覚めさせる時よ。あなたがイメージする最強の存在へ至るのよ」

俺がイメージする最強。それは・・・。

イツセーSIDE OUT

リアスSIDE

「おおおおおおおおおおおお!!!」

「イツセー!?!」

雄叫びと共に立ち上がったイツセー。その体を暗い炎のオーラが包み込んだ。

『こ、これは?!? 兵藤選手になにが起きたんだあ?!?』

『まさか・・・! いや、だがあの暗いオーラは・・・』

誰もが見守る中、オーラがゆっくりと治まって行く。そして、その中から現れたイツセーの姿に、私は目を見開いた。

「イ、イツセー・・・その鎧は？」

イツセーが纏っていたのは赤龍帝の鎧では無く、リョーマの纏う物に瓜二つの鎧だった。ただ一つ違う事と言えば、その鎧を彩るのは赤でも蒼でもなく、赤銅色という所だけだった。

『フユ、フューリー!? 兵藤選手、伝説の騎士と同じ鎧を纏っています! これはどういう事なんでしょう!?!』

「それがお前の奥の手なのか、兵藤一誠?」

サイラオーグの問いかけにイツセーは答えない。代わりに独り言のように小さく声を発したのだった。

「・・・違う。違うよエルシャさん。これじゃダメだ。ダメなんだよ・・・」

リアスSIDE OUT

イツセーSIDE

エルシャさんから最強のイメージを求められた時、俺が思い浮かべたのは神崎先輩だった。それは間違いない。俺の中で最強の存在は神崎先輩だ。その結果が、この神崎先輩と同じ鎧って事か。

『おめでとう、イツセー。それがあなたの得た『覇龍』の形よ』

祝福の声を送ってくれるエルシャさん。だが、俺はこれっぽっちも嬉しく無かった。

「・・・違う。違うよエルシャさん。これじゃダメだ。ダメなんだよ・・・」

『え?』

確かに俺は神崎先輩に憧れてる。目標にしている。だけど、俺は神崎先輩そのものになりたいわけじゃない。先輩の強さは先輩だけのものだ。例えば同じ姿形や力を持って、それはただ真似ただけの別の存在になっちまう。そんなの、先輩に対する最大の侮辱だ。だから俺は、俺の可能性の先で、先輩と肩を並べられる男になりたいんだ!

「俺の夢は・・・俺自身の力で掴みとらないと意味が無いんだ! 大好きな主である部長や仲間である木場達を守る為に! ライバルである匙やサイラオーグさん達に負けない為に! 子ども達の夢や希望を背負う為に! 『禍の団』みたいな悪いヤツ等をぶっ飛ばす為に!

尊敬する神崎先輩の背中に追いつく為に！ 俺は・・・俺は、最強の『兵士』になるんだああああああああああ!!!」

俺は天に向かって高らかと咆哮した！ 刹那、纏っていた鎧が爆散し、鮮やかな紅の炎が俺の体を包み込むのだった。

イツセーSIDE OUT

ヴァーリSIDE

——ヴァーリ。

「ええ、ついに彼が目覚めたみたいね。見てアルビオン。あの天へと伸びる美しい紅の炎を」

——赤き「覇」を越え、紅き「覇」に至るか。歴代の赤龍帝の中でそのような極致へと至った者はいない。あの小僧・・・いや、最早小僧などと呼べんな。兵藤一誠は赤龍帝を越えし男になったという事か。

「ようやく認めたのね、彼を」

——ああ。我が力を使う事も認めよう。おそらく、向こうにいる「アイツ」もそのつもりなのだろう。

「・・・見せてちょうだい、一誠。紅の龍の力を」

ヴァーリSIDE OUT

リアスSIDE

「俺の夢は・・・俺自身の力で掴みとらないと意味が無いんだ！ 大好きな主である部長や仲間である木場達を守る為に！ ライバルである匙やサイラオーグさん達に負けない為に！ 子ども達の夢や希望を背負う為に！ 『禍の団』みたいな悪いヤツ等をぶっ飛ばす為に！

尊敬する神崎先輩の背中に追いつく為に！ 俺は・・・俺は、最強の『兵士』になるんだああああああああああ!!!」

イツセーの体が再び炎に包まれる。けれどそれは、先程の様な暗い炎では無く、どこまでも鮮やかで美しい炎だった。戦闘中であるにも関わらず、私はその美しさに目を奪われてしまっていた。

（最強の『兵士』になる・・・。それがイツセーの中で生まれた夢なの

ね。あなたらしい、シンプルだけどとても立派な夢だわ)

紅の炎の中からイツセーが姿を現す。その姿は赤龍帝の鎧でも、もちろんさっきの鎧でも無かった。

炎をそのまま纏ったかのような、汚れの無い堅牢な紅の鎧。そこに、白銀のラインが走っている。ドラゴンの翼を模した勇壮な機械翼に、剣の様な形の尻尾、両肩から伸びるキャノン砲、そして・・・胸に裝飾されたアルファベットの“D”を崩した様な形のプレート。あれが・・・あの鎧こそが、イツセーが掴みとった本当の力なんだわ

！

「行くぜサイラオーグさん！ 今こそ俺は、あなたを越えてみせるっ
!!!」

力強い宣言と共に構えをとるイツセー。それを聞いた私の奥底からも力が湧き出して来るのだった。

第四百四十七話 紅の龍帝と金色の獅子王

イツセーSIDE

紅の鎧……。これこそが、俺の夢の答え。誰かの真似じゃない。俺自身の想いが辿りついた最強の力……。『覇龍』だ！

『あはははははは！』

うおっ!? この声はエルシャさん!? 何ですかいきなり笑いだして！

『これが笑わずにいられますか！ 一度定まった『覇龍』が再び形を変えるなんて前代未聞だわ！ しかも“紅”ですって？ あなたはどこまで私達を驚かせればいいのよイツセー！』

『ああ……。大したもんだ』

『うん……。本当にね』

オッサンに先輩まで……。止めてくれよ。特にオッサンに褒められるなんて気持ち悪いぜ。

『んだとテメエ！ 人がせつかく素直に褒めてやってるつてのに！』

あはは、嘘だよ。ありがとな、オッサン。

『……。フン』

——相棒。

ドライグ？ あれ、なんかお前の声がいつもより近くで聞こえるんだけど。

——『覇龍』に至った事で、俺と相棒の意思は完全に一つとなった。俺とお前は、真に一心同体となったのだ。

まさに相棒（パートナー）ってわけか。へへ、頼むぜ相棒！

——任せろ相棒！ お前という男と出会わせてくれた運命に、俺は心底感謝している！

『……。自分ではなく、誰かの為に力を求める。それがキミと歴代の者達の違いだった。だからこそ、キミは赤を越え、紅の極致へと至ったんだね』

え、誰だこの声？ 随分若い声だけど、聞いた事無いぞ。

『お前は……。』

『やあ、久しぶりだね、我が戦友。そして初めまして今代の赤龍帝。僕は歴代の白龍皇の一人。キミが以前、アルビオンの力と共に神器の中に取り込んだ者さ』

声の主が先輩の一人と会話した後、俺に話しかけて来た。って、ちよつと待て！ 白龍皇!! それに取り込んだって・・・まさか駒王協定で先輩と戦った時にはめ込んだ宝玉の事か!?

『その通りだ。それから、僕は歴代の赤龍帝達と共に、ずっとキミの戦いを見続けて来た。その中で、僕には気付いた事があった。それは、キミが戦いに臨む時・・・それは私欲ではなく、必ず誰かの為にだったという事だ。そして今、キミは人々の求めに応えて立ち上がった。不思議だよ。キミを見ていると、気付かない内に応援したくなってしまふ。・・・だから、僕もキミに力を貸すよ。僕が持つ白龍皇の力を。アルビオンだつてきつと許してくれるはずだ』

———そうか。ならば、この鎧に伸びる白のラインそのものが、白龍皇に認められた証という事か。

マ、マジで・・・? 俺、歴代の赤龍帝だけじゃなく、白龍皇の先輩にまで認められちゃったのか!?

『ふふ・・・どうやら歴代最強の名を譲る時が来たようだわ。ねえ、ベルザード?』

『・・・その様だな』

『え』

『ちよつ!』

『ベルザードが!』

『『シヤアベツタアアアアア!!』』

驚き過ぎだろアンタ等! いやまあ、俺も驚いたけどさ! つーか、ベルザードさん声渋つ!

『元歴代最強二人からのお墨付きよ。自信を持ちなさい、イツセー。あなたは間違い無く、歴代の中で最強にして最高の赤龍帝だわ』

———自分を信じる。———俺から教えられるのはそれだけじゃよ。

京都で初代孫悟空さんに言われた言葉を思い出した。夢の無い自

分に自信が持てなかった俺が、みんなのおかげで明確な夢を持つ事が出来た。初代さんは、あの時すでに見抜いてたんだろうか……。」「く、くくく……。はははははははは!!」

突然サイラオーグさんが笑いだした。心底嬉しそうに、まるで待っていたといわんばかりに。

「兵藤一誠！ お前は、お前という男は、どこまで俺を楽しませてくれるのだ！ 俺を越えてみせるのだろう！ ならば来るがいい！ その新たに得た力と共に、全力で俺を倒しに来い！」

「言われなくても行きますよ！ 俺はもう一人じゃねえ！ 仲間が、相棒が、先輩達が一緒にいるんだ！ 勝てねえ道理はないんだよおおおおおおお!!」

俺の意思が鎧を奔り、ウイングが勢い良く展開する。両翼の中から噴射口が現れ、背中、そして脚部の物と合わせた計六門のブースターに焰が生まれる。何かが収束する甲高い音が、次の瞬間には爆音へと変わり、ついには衝撃波と共に砂塵が舞い始めた。大地が割れ、空気が唸りを上げる。……。え、ちよ、これつてヤバくね？ 明らかに出力が異常なんですけどお！

——これが『覇龍』の力だ！ さあ相棒！ 行つて来い！

「無理無理無理！ こんなんぶつ放したら俺が逝つちまう——」

『Crimson Nova Booster!!』

「でしようがあああああああ!!」

俺が悲鳴と共にその場を飛び出した瞬間、既に眼前にサイラオーグさんの姿があつた。え、ええい！ こうなりやヤケじやああああああああ!!」
「おらああああああ!!」

「ッ!？」

技でも何でもない、ブースターの推進力を利用しただけのただの力任せの体当たり。それがサイラオーグさんの巨体を吹っ飛ばした。あれだけ必死になって殴ってもビクともしなかつたサイラオーグさんが、まるで紙屑の様につぶ飛んで行つた。

——これで先程の借りを返せたな相棒！

うるせえよドライブ！ 待ってって言うてるのに強制的につつませやがって！

——ふっ、その鎧はある程度俺の意思でも動かせるようになってるからな。言っただろう。俺達は一心同体だと。相棒のサポートが出来るようになって俺も嬉しいぞ！

さっきのはサポートじゃねえ！ むしろ殺しに来てただろうが！

——H A H A H A！

笑ってんじゃねえ！ つーか、さっきからテンションおかしいぞお前！

『それだけあなたが『覇龍』に至った事が嬉しいのよドライブは』

それにしたって限度がありますよエルシャさん！

『あら、私だって同じ様なものよ。叶うなら今すぐあなたを抱きしめてキスしてあげたいくらいなもの』

え……あ……ど、どうも……

『うふふ、照れてるのね、可愛い』

あーもう！ 戦闘中ですから静かにしてください！

「サ、サイラオーグ様——！」

俺に吹っ飛ばされたサイラオーグさんを見て、レグルスが部長との戦闘を投げ出して慌てて追いかけて行った。

「イツセー！」

その隙に、部長が俺に駆け寄って来た。そんな部長に、俺はまず深々と頭を下げた。

「部長、ご心配をおかけしました。そしてありがとうございます。あなた達のおかげで、俺は答えを得る事が出来ました」

「最強の『兵士』になるというあなたの夢……主として確かに胸に刻み込んだわ。それで、その鎧についてなんだけれど……」

「それはこの試合が終わった後にしっかりお話しせてもらいます。ただ今は……」

「——ただの突進でこの威力……。見事だ、兵藤一誠」

視界の先でサイラオーグさんが立ち上がる。まさか、今のも効かなかったのか!? 俺がそう思った直後だった。

「ゴフツ・・・！」

サイラオーグさんが口から血の塊を吐きだす。ダメージは入ってる！ いけるぞドライグ！

——喜ぶのはまだ早い！ 休まず攻撃しろ相棒！

ドライグの声と共に、鎧に存在する武装のデータが次々と頭の中に入り込んで来た。おいおい、歩く武器庫かよこの鎧は！

「おっしやあ！ 次はコイツだああああああ!!!」

ガコン！ と音を鳴らし、サイラオーグさんを捉える二つのキャノン。その砲口に赤い光がチャージされていく。

——チャージと共に、反動制御及び位置固定を行う！

テールブレードが深々と地面に突き刺さり、踵から射出されたスパイクが俺の体をしつかりとその場に固定した。

「部長、離れてください！」

「わ、わかったわ！」

『Desire!』『Diabolos!』『Determination!』『Dragon!』『Disaster!』『Desecration!』『Discharge!』

フィールドに響き渡る『D』の大合唱。同時に胸の『D』に紅蓮のエネルギーが溜まって行く。周囲が歪んで見えるほどの大熱量。さあ行くぜ。耐えられるものなら耐えてみやがれ！

——チャージ完了！ ぶちかませ相棒！

「全部纏めて喰らいやがれえええええええ!!!」

『D』Blast Full Burst!!!』

咆哮と共に、フルパワーのドラゴンショットが豆鉄砲に思えるほどの凄まじい光が解き放たれた。なんて反動だ！ 固定しているはずなのに体が後ろに吹っ飛ばされそうだ！

発射された三つの光が、示し合わせたかのように合体し、一つの極大の光へ・・・そして、その光が紅蓮のドラゴンへと形を変えてサイラオーグさんへ襲い掛かった！

「やらせはせんぞー！」

サイラオーグさんが拳を引く。あれは・・・木場を倒したあの技を

使うつもりか!

迫り来るドラゴンの顎に向かい、サイラオーグさんが拳を突き出す。だが、ドラゴンは消えるどころか全く勢いを衰えさせる事無くサイラオーグさんを飲み込んだ!?

「ぐ……おとおおおおおおお!?!?」

閃光と爆音が辺りを包み込んでいく。数秒後にそれらが治まった時、そこには全身傷だらけで体をよろめかせながらこちらを見つめているサイラオーグさんの姿があった。

「……強い。これがお前の夢の形か、兵藤一誠……!」

——相棒。

わかってるぜドライブ。あの満足そうな笑顔……。あの人はまだまだ戦うつもり満々みたいだ!

「サイラオーグ様! これをお使いください!」

サイラオーグさんの元へ辿り着いたレグルスがサイラオーグさんへ何かを手渡す。あれは……フェニックスの涙!

「この状況で必要無いと言うのは『王』としてあまりにも愚かか。ありがたく使わせてもらおう」

くそ、すっかり忘れてたぜ。これで今までのダメージがパーだ!

「さて、ダメージを回復したはいいが、これからどう戦うか……」

「何を迷う事があります! 私を纏ってくださいサイラオーグ様!

あの禁手さえ使えば、あなたに敵う者は存在しません!」

「レグルス。俺は以前言ったはずだ。あの力は冥界の危機に關してのみ使うとな。この場で、あの男相手に使って何になる」

「いいえ、サイラオーグ様! あなたは間違っています」

「何……?」

「あなたは何度も赤龍帝に全力を求めた! そして赤龍帝はあなたの求めに応じ、新たな力と共に立ち上がった! ならば、あなたも彼に全力で以って応えるのが義務なのではないのですか! 全力を出さずに決着を着ける事があなたの望みなのですか! 私の……私の主はその様な腑抜けでは無いはずです!」

……そっか。この人、まだまだ強くなれる。まだまだ力を出せる

のか。だったら……。

「レグルスの言う通りですよ、サイラオーグさん」

「兵藤一誠？」

「俺、神器の中でみんなが俺を呼ぶ声を聞いてたんです。あなたの声もしつかり聞こえてましたよ。誰よりも勝利に貪欲なあなたが、俺に立てと言ってくれた。止めをさせばいいのに、俺を信じて待っていてくれた。俺がこの力を手に出来たのは部長達だけじゃない！ サイラオーグさん！ あなたも俺を信じてくれたからなんです！ だから禁手を使ってください！ 俺の全力に、あなたも全力で応えて欲しいんです！」

「イツセー……」

「ごめんなさい、部長。でも、これがきつと正しいんです。だって、俺がこうしてサイラオーグさんとともに戦えているのは、この人のおかげなんだから！」

「……ふっ」

自嘲する様に笑うサイラオーグさん。次の瞬間、なんと自分で自分の顔を殴った！ ファツ!? 何してんスか!?

「お前達の言う通りだ。相手に全力を求めておいて、自分が全力を出さぬなど愚の骨頂。兵藤一誠、俺は心のどこかでお前を見下していたのかもしれない。その結果がこのザマだ。お前に対する侮辱への謝罪にすらならぬだろうが、今の一撃は自分への戒めだ」

いや、謝罪のレベル越えてますから！ ゴキイツ！ ってもものっそい音鳴ってましたから！

「すまなかつたな、レグルス」

「いえ、私こそ、主に対して失礼な事を」

「何を言う。お前のおかげで目が覚めたぞ。……さあ、いくぞレグルス！ 今こそお前の本当の力を見せるのだ！」

「はっ！」

レグルスの体が金色の光に包まれ始める。やがて、光そのものと化したレグルスがサイラオーグさんの全身を一気に包み込んだ。

「我が獅子よ！ ネメアの王よ！ 獅子王と呼ばれた汝よ！ 我が猛

りに応じて、衣と化せ！」

まるで凱歌の様に広がるサイラオーグさんの力強い叫び声に合わせ、フィールドが揺れ始める。サイラオーグさんを包む光がさらに激しさを増して行く。

「見るがいい、兵藤一誠！　これが・・・誇り高き獅子王の禁手だああああああ!!!」

神々しさすら感じる極大の光に思わず顔を覆う。その閃光が止んだ時、俺の眼前に現れたのは、金色の姿をした獅子の鎧だった。頭部にはたてがみを思わせる金色の毛がたなびいている。

『獅子王の戦斧』の禁手・・・それがこの『獅子王の剛皮』！　兵藤一誠！　これが真正正銘、俺の全力だ！」

わかる・・・わかりますよサイラオーグさん。こうして対峙してるだけで逃げ出したくなるほどの激烈な闘気と殺気・・・これが全力じゃなかったら俺はもう泣いています！

『サイラオーグ選手までもが鎧を纏ってしまいました！　今、紅の龍帝と金色の獅子王の決戦が幕を開けようとしています！』

——まったく、わざわざ敵に塩を送るとはな。

諦めるドライグ。お前の相棒はこういうヤツだ。

——ふっ、そんな事、ずっと前からわかっていたさ！

「なら、さっきのもう一発行くぜえ！」

俺は再びDブラスターをぶっ放した。それに対し、先程と同じ様に迎え撃とうとするサイラオーグさん。引いた拳に、金色のオーラが収束していく。そして、それをただ全力で突き出した！

「おおおおおおお!!!」

サイラオーグさんの放った黄金の一撃。それはライオンの頭部へと形を変えた。紅のドラゴンと黄金のライオンがぶつかり合い。互いに食い合いながら消滅してしまった。

『獅子王の戦斧』には敵の放った飛び道具から所有者を守る力がある。その特性に俺の闘気を合わせれば、例えお前の一撃であろうとも防げぬものではない！」

ッ——！　　すげえ・・・やっぱりすげえよサイラオーグさんは！

防がれたのにこれっぽっちも悔しくねえ！ たただだ、サイラオーグ・バアルという男の凄さに体が震えるだけだった！

「わかるだろう、兵藤一誠。俺とお前の決着には……やはりコレ以外には存在しないのだと！」

サイラオーグさんが両拳をぶつけ合う。……はい、そうですね。やっぱり、男の戦いと言ったら拳しかありませんよ！

「行きますー！」

「来い！」

俺のブースターとサイラオーグさんのダツシユ。動き出したのはほぼ一緒だった。技術も何も必要としない渾身の一撃……。互いの拳が互いの顔面へ直撃する！

痛つてええええええええ!!! 何だよこのアホみたいな痛さは！ せつかく新しくなった兜も今ので吹っ飛んだぞ！

それでも俺とサイラオーグさんの拳は止まらない！ 顔を、胸を、腹を、拳の届くありとあらゆる場所を殴り、殴られる！ 兜に続いてキャノンや放熱板が破壊される。だけど拳だけは止めない！ 防御なんざ知った事か！ そんな事気にするくらいなら一発でも多く殴らねえと！ じゃないとこの人は倒せないんだ！

『せきりゅーてー！』

『頑張つてー！』

ありがとう子ども達！ 頑張るよ俺！ だから見ててくれ！ キミ達のせきりゅーてーが戦う所を！

「うおおおおおおお!!!」

何度目かに放った拳がサイラオーグさんの腹に突き刺さり、獅子の鎧をぶっ壊す！ そのまま中身にまで拳をねじ込んでやった！

サイラオーグさんが初めて膝をつく。ダメージは確実に蓄積している。このまま押し切つてやるぜ！

「何をしている俺の体よ！ まだやれるはずだ！ まだ俺は全てを出し切っていないのだぞ！」

なんて気迫だ……。もつと、もつと叩き込まないとこの人には勝てねえぞ！ 根性みせろよ兵藤一誠！

『なら、僕の手を使うといい』

『ついでに僕のもね。今回だけは、男に使うのも許してあげるからさ
!』

歴代白龍皇と残念先輩が声を揃える。ツ・・・! そうか、その手
があつたか!

「俺は、俺は負けん! 負けるわけにはいかんだあああああああ
!!!」

サイラオーグさんの強烈な右ストレートが迫る! やるなら今し
かねえ!

「そこだあああああ!!!」

サイラオーグさんの拳に俺の拳をぶつけ、力を発動させる! 拳を
通じてサイラオーグさんの力が俺の中へ流れ込み、獅子の鎧が前触れ
もなく吹き飛ばす!

「何だ!?」

驚愕に固まるサイラオーグさん。俺は今、白龍皇の『半減』と『鎧
崩壊』を同時に発動させた。そしてコイツが本命だ!

「いつけえええええええええ!!!」

奪った力を上乗せした渾身のアッパーが正確にサイラオーグさん
の顎を捉えた! 振り抜いた勢いのまま、サイラオーグさんが空へ舞
い上がり、勢い良く地面に落下する。その衝撃は、地面に巨大なク
レーターを作るほどだった。

「はあっ・・・はあっ・・・!」

『ダウンです! サイラオーグ選手、ついにダウンしました!』

勝てる! この人に勝てるぞ! 俺がそう思った正にその時だつ
た。俺の耳にその声が届いて来たのは。

『サイラオーグ! 立ちなさい、サイラオーグ!』

イツセーSIDE OUT

サイラオーグSIDE

クレーターの中心、俺は横たわりながらぼんやりと空を眺めてい
た。先程から体を動かしたくとも、指先すらピクリともしない。

(・・・俺の負けか)

勝利する事が俺の全てだった。だが、俺の心は驚くほど穏やかだった。考えるまでも無い、あれほどの男とあれほどの殴り合いを演じられたのだ。満足こそすれ、不満などあるはずもない。

(そう、お前になら負けてもいいと思えるほどにな・・・)

意識が徐々に沈んでいく。すまん、レグルス。だが、お前も楽しかっただろう？ 俺は・・・俺は本当に楽しかった——。

『サイラオーグ！ 立ちなさい、サイラオーグ！』

——その声を聞いた時、最初は幻聴だと思った。当然だ。その声の主は今も病院で眠っているはずなのだから。

『ちよ、ちよつと！ なんですかあなたは!?!』

『ちよつと待て！ この女性は・・・!』

実況席の方がにわか騒がしくなる。なんだ、トラブルでも起きたのか？

「う、嘘・・・何であの方が・・・!?!」

驚愕するリアスの声が聞こえる。あの方？ もしや魔王様でもいらつしやつたのか？

「ミスラおば様!」

「ツ・・・!?!」

何を・・・何を言っているのだリアス？ 母上が・・・母上がこんな場所にいるはずが・・・。

『立つのですサイラオーグ！ あなたの想いは・・・あなたの決意はその程度のものでしたのですか!』

「母・・・上・・・?」

『ミ、ミスラ様！ 急に走ってはお体に触ります!』

今のは母上の世話を任せていた執事の声・・・。では、では、本当に母上が・・・!?!

『あなたは私と約束したはずですよ！ 誰よりも強くなると！ 冥界の未来の為に、これから生まれて来る子ども達の為に！ あなたはその拳を握りしめたはずですよ!』

・・・そうだ。俺は、母上の名誉の為だけじゃない。俺の様な思い

を他の者達に味わわせない為に、冥界そのものを変える為に戦うと誓ったんだ。

しかし、その役目は俺では無く、兵藤一誠の方が相応しいのではないだろうか。現に、ヤツは子ども達の夢を背負って俺に立ち向かって来たのだ。

『あなたには聞こえないのですか！ あなたが守ろうとする者達があなたへ送っているこの声を……！』

声？ そんなもの聞こえな——。

『ライオンさん頑張れ〜〜！』

……何だと？

『立ってライオンさん！』

『頑張って——！』

ライオンさん……。まさか、俺の事か!? な、何故だ……。!?

何故兵藤一誠を応援していた子ども達が俺に声援を……!?

『そうだ！ 頑張れサイラオーグ！』

『サイラオーグ様ああああああ！』

『諦めんなよ！ もっと熱くなれよおおおお！』

子ども達だけでは無い。一般の観客達までもが俺の名を呼び始めた。

『サイラオーグ様……』

『レグルス!! 大丈夫なのか!』

「私の事など気にしないでください。それよりも、聞こえていますか。あなた様の名を叫ぶこの声が……」

「あ、ああ。だが、何故だ？ 何故兵藤一誠ではなく、俺を？」

「どうやら、私達はとんでもない思い違いをしていたみたいです。騎士殿だけじゃない。あの会場には、あなたを応援する者が、あなたを認めてくれている者があんなにもたくさんいたのです……!」

『お立ちください、我が主よ!』

ベルーガ！ それに他の者達まで……。ふっ、リアスの眷属と同じ真似を……。

「立ってくださいサイラオーグさん！ こんな事言うと生意気かもし

れないけれど、俺、まだあなたと戦いたいです！　あなたが立つまで、俺はずっと待ちます！　あなたが俺にそうしてくれたように！」

「兵藤一誠・・・」

『サイラオーグ、あなたに倒れる事は許されません！　私はあなたにずつと言つて来たはずですよ！　諦めなければ・・・』

ー泣いてはいけませんサイラオーグ。あなたは誰がなんと言おうとバアル家の子。たとえ魔力がなろうと、たとえ滅びの力が無かろうと、諦めなければ・・・。

『いつか必ず勝てるのだから!!!』

現実の母上と記憶の中の母上・・・。二人が同じ言葉を発した瞬間、俺の体を金色の光が包み込んだ。

サイラオーグSIDE OUT

イツセーSIDE

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

誇りに満ち満ちた猛々しい咆哮と共に獅子が再び立ち上がる。それは、フィールドを、世界そのものを振るわせるものだった。

「何が負けてもいいだ。この期に及んで、貴様はまだ傲慢でいるつもりか。ふざけるなよサイラオーグ・バアル！」

『立った！　サイラオーグ選手が立ちました！　ええい！　もう余計な実況なんざ必要ねえ！　二人とも、思う存分やりやがれえええええええ!!!!』

『『赤龍帝———！』』』

『『サイラオーグ—————！』』』

「は、はは・・・！」

カッコ良過ぎだろこの人・・・！　こんな人とまだ戦えるのかよ俺は！

「・・・不思議だな。お前に打ちのめされ、さきほどまで最早指一本も動かせないはずだった。なのに、今はどうしてこんなにも戦う力が湧いて来る・・・！」

やべえ・・・。ボロボロのはずなのに、体から溢れるオーラはさつ

きまでの比じやねえ！

「レグルス！　『アレ』を使うぞ！」

「なっ！　お待ちくださいサイラオーグ様！　『アレ』は今まで一度も成功していない諸刃の剣！　失敗すれば間違い無く戦闘不能に……！」

「構うものか！　命を賭けねばあの男を倒す事は叶わぬ！　俺を信じろ！　お前の主であるサイラオーグ・バアルはこんな所で終わる男か!?」

「……いいえ！　その様な事、あるはずがありません！　私は信じます。私の主こそが最強なのだ！」

「よく言った！　ならばレグルス、防御に回していたオーラを全て左手に集中させろ！」

「望みのままに！」

「兵藤一誠！　次の攻撃が正真正銘最後の一撃だ！　お前にこれを受け止める覚悟はあるか!?!」

何をする気かわからないけど、俺の答えは決まってる！

「望む所だあ！」

俺の宣言に、サイラオーグさんは満足そうに頷くと、開いた両手にオーラを集中させ始めた。右手に白、そして左手に黄金のオーラを纏わせ、その手を胸の前でしっかりと組む。その瞬間、サイラオーグさんを中心にして、凄まじいトルネードが発生した。

「異世界の勇者王よ！　汝の誇り高き獅子の一撃！　このサイラオーグ・バアル、誠に勝手ながら使わせて頂く！」

『まさかっ……!』

神崎先輩の驚き声が耳に届く。異世界の勇者王って……まさか、先輩の仲間の!?!

——呆けている場合か！　構えろ相棒！

わかってるよ！　どれほどとんでもねえ技だとしても、俺は負けるわけにはいかねえんだからよ！

「この一撃に……俺の全てを込める！」

手甲、そして右腕の肘付近のパーツがスライドし、隠されたブース

了。リアス・グレモリーチームの勝利です！』
こうして、男達による誇りと意地のぶつかり合いが幕を閉じたの
だった。

第四百四十八話 自分REST@RT

兵藤君とサイラオグさんのひたすらに熱いぶつかり合いは、最終的に相打ちという

結末を迎えた。固唾を飲んで見守っていた俺はいつの間にか握り締めていた拳を開いた。力を入れ過ぎていたせいでちよつと赤くなっていた。

「「赤龍帝！ 赤龍帝！」」

「「サイラオグ！ サイラオグ！」」

試合終了後からすでに十分以上が経っている。それなのに、誰一人として会場を後にしようと思わず、総立ちしながら二人の名前を叫び続けていた。

「俺、明日から仕事頑張れそうだわ」

「俺も、なんか努力しなきゃって思った。何をどうするかとか具体的にはねえけど、あの二人を見てとにかく頑張りたいって思った」

「・・・あの試験、もう一回受けてみようかな」

「帰り道走って帰ろうぜ！」

「おうー！」

周囲からそんな声が次々に聞こえて来る。・・・俺も同じ気持ちだった。走り込みでも筋トレでもいい。とにかく、ジツとしているのが我慢出来ない。パワーアップした兵藤君が某紅の牙に見えたとか、サイラオグさんが某勇者王の技を出したりとか色々あったけど、本当に・・・本当にいい試合だった。

「みなさん、本当に凄かったです。私、感動してさっきから涙が・・・」
涙ぐむアジアにレイナーレさんがハンカチを渡す。余計な言葉は必要無い。その涙が全てを語っていた。

信じられるか？ あんなカッコ良く強い子が俺の後輩なんだぜ？ しかも、俺みたいな男を尊敬してくれてるんだぞ？ 嬉しいとかそういうレベルじゃないし、そもそも、俺にそんな価値があるのか？

「・・・俺も今以上に頑張らないとな」

だからこそ、俺に必要なのは努力なんだろう。兵藤君達が尊敬してくれる俺でい続ける事。それが、兵藤君や他の子に対して俺に出来る精一杯の誠意のはずだ。

(なんか今不穏な言葉を聞いた気がするが・・・気のせいかな?)

「私はレーティングゲームの実況歴はそれなりにあるのですが。今回のゲームほど熱く、そして会場が一つとなったゲームはありません！ 今回のゲームを実況出来た事を、私は誇りに思います！」

「そうですね。たゆまぬ努力の果てに得た自分達だけの力……。勝負とは・・・レーティングゲームとは安易に得た才能などではなく、彼等の様な者達が行うから面白い。・・・それを歪める様な『あれ』の存在は、やはりあの子の言う通り必要無いのだろう」

「皇帝？」

「失礼。少し思う所がありました。私も、今日のゲームをこうしてこの場で見届ける事が出来て大変嬉しく思っています。兵藤選手とサイラオグ選手、きつとこの二人は今の、そしてこれから生まれて来る若き悪魔達にとつての道標となってくれるでしょう。さあ、皆で称えましょう、紅と金色・・・二人のヒーローの誕生を」

「「赤龍帝！ 赤龍帝！」」

「「サイラオグ！ サイラオグ！」」

観客達によるコールはさらに激しさを増し、いつまでも会場内に響き続けるのだった。

S I D E O U T

イツセーS I D E

目を覚ました俺がまず目にしたのは、真っ白な天井だった。ここは・・・病室か？ 身動ぎした事でパイプベッドが軋む。体は・・・上手く動かせない。体力がスツカラカンになっちまってる。

「起きたか、兵藤一誠」

「ッ!? サ、サイラオグさん!？」

俺のベッドの隣・・・そこに全身包帯姿のサイラオグさんが横たわっていた。

「ふっ、酷い姿だな」

「そ、そういうサイラオーグさんこそ」

互いの姿を指摘し合い、俺達は小さく笑いあった。

「俺達、どうなったんですかね？ サイラオーグさんと最後に互いの顔を殴りあった所までは覚えてるんですけど・・・」

「俺も覚えているのはそこまでだ。まあどちらにせよ、今回のゲームは俺の負けだ」

「え？ 何ですか？」

『王』である俺が倒れたのだから当然だろう。そちらにはまだリアスが健在だったからな」

「あっ・・・！」

正直、途中から勝敗とかすっかり頭から消えてた。ただ、この人に負けたくないって思いで必死になって拳を握り続けてたんだ。

「何故だろうな。お前が再び立ち上がり、俺に立ち向かって来た辺りから、これがレーティングゲームだという事を忘れてしまった。ただ、お前と戦いたい。お前を倒したいという思いしか湧いてこなかった」

「俺もです。あなたに勝ちたい。あなたに負けたくないってそればかりでした」

まるでガキみたいな意地の張り合い。だけど、この人とならそれでよかった。くだらねえ考えなんか投げ捨てて、ひたすらにぶつかりあったからこそ、今、俺の胸はこんなにも清々しい気持ちでいっぱいになってるんだから。

「・・・次は負けんぞ」

「・・・こっちのセリフですよ」

まったく、匙といいこの人といい、なんで強いヤツらばかりが俺のライバルになるんだよ。

「しかし、これで神崎殿と手合わせをする事は叶わなくなっちゃったな」

手合わせ？・・・あ、そうか！ サイラオーグさん、今回のゲームに勝ったら先輩と模擬戦をするって約束してたんだっけ！

「あ、でも先輩ならお願いしたらきつと・・・!」

「いや、これでいいのだ。それに、仮にお前を倒し、リアスを下して勝利をおさめていたとしても、俺は辞退するつもりだったからな。神崎殿は母上を・・・俺の大切な人を目覚めさせてくれた。これ以上神崎殿に何かを求めるなどという恥知らずにはなるつもりはないのでな」

サイラオーグさんのお母さん。間違い無く、あの場面でサイラオーグさんに立ち上がる様叱咤した女性の事だよな。神崎先輩、俺の知らない間にまた一人・・・いや、サイラオーグさんを含めて救ってたんだな。へへ、やっぱり敵わねえなあの人には。だからこそ憧れるし、だからこそ追いつきたいんだ。

「やあ、失礼するよ。ああ、そのままでもいいから」

その時、病室の扉が開き、サーゼクス様が姿を現した。慌てて佇まいを直そうとしたら先に制されてしまった。

「イツセー君、サイラオーグ。本当に素晴らしかった。心からそう思える試合だったよ。上役達も全員満足していたし、皇帝も絶賛していたよ」

「ありがとうございます」

「さて、こうしてお邪魔させてもらったのは、イツセー君に話があるからなんだ。サイラオーグ、少し彼を借りてもいいかな？」

「ええ、存分にどうぞ。話し難い内容でありならば席を外しますが?」

「そこまでは及ばないよ。それに、キミにとっても損は無い話かもしれないしね」

話? なんだろう?

「イツセー君。試合開始前に話した事を覚えてるかな?」

「え、えーっと・・・」

「キミの昇格についてだよ。あの時はまだ予定としか言っていなかったが、今回の試合で完全に決定される事になった。おめでとう」

思い出そうとする前にサーゼクス様が答える。・・・って、ちよつと待ってくださいいよ! え? え!? 決定しちゃったの!? この短い時間で!?

「受けるべきだ兵藤一誠。戦った俺が断言する。お前はそれに値する

男だ。お前自身が証明したのだ。出自や才能など関係無い。お前は……この冥界の英雄になる男だ」

「サイラオーグさん……」

「サイラオーグの言う通りだよイツセー君。ただ、一つだけ言わせてもらおうと、キミには英雄じゃなく、冥界のヒーローを目指してもらいたい」

「ヒ、ヒーローですか？」

「はは、それはいいな。確かにお前にはその呼び名の方が似合っている気がするぞ」

サイラオーグさんまで止めてくださいよ！ ヒーローなんて立派な呼び名、俺なんかには似合わないですって！

「そ、それならサイラオーグさんだってそうじゃないですか！ ほら、子ども達にライオンさんって応援されてましたし！」

「馬鹿を言うな。俺のような男にその様な名など……」

「あ、私もそのつもりだから」

「……は？」

「紅の龍帝に金色の獅子王。互いを高め合い、ぶつかり合いながら成長するWヒーロー。……いいね、いいぞ、みなぎってきたー！」

「サ、サーゼクス様？」

「では、イツセー君！ 詳細は今後改めて通知させてもらうから！

私はここで失礼するよ！ 昇格の為の準備もあるし、他にも色々考えたい事があるからね！ さあ、忙しくなるぞー！」

すつげえにこやかな顔でサーゼクス様が病室を出て行った。残された俺達は互いに顔を見合わせた。

「サイラオーグさん。俺、なんかすげえ嫌な予感がするんですけど……」

「奇遇だな。……俺もだ」

それからしばらくサイラオーグさんと色々話していると、不意な尿意が俺を襲った。

「すみません、サイラオーグさん。俺、ちよつとトイレに行つて来ま

す」

「ああ、行って来い」

ベッドから降り、置いてあったスリッパを履いて病室を出る。あー、体がだりい……。トイレ行くのも一苦労だわ。

部屋を出てトイレに向かって歩いてみると、一人の女性とすれ違った。……。あれ、今の人って……。

イツセイSIDE OUT

サイラオーグSIDE

兵藤一誠が出て行った事で、部屋の中は俺一人だけとなった。このままもう一眠りでもしてやろうかと思ったその時だった。不意に病室の扉がノックされる。

「開いているぞ」

「失礼しますね」

「ッ!? は、母上……!?!」

母上が……。母上が立っている。これを……。この光景をどれほど待ち望んでいた事か……。!

「隣、失礼しますね」

ベッドの横に供えられていた椅子に座る母上。いつこちらへ?

お体は大丈夫ですか? 聞きたい事は山ほどある。それなのに、俺は声を出せなかった。

「サイラオーグ」

「はい……」

長い眠りの所為で細くなってしまった手を、母上はそつと俺の手に重ねた。ああ、これだ。この暖かさ……。間違い無く母上のものだ。

「よくぞ最後まで諦めずに立ち続けましたね。あなたの誇り高き姿、母はしっかりと見ていましたよ」

「……ですが、俺は負けてしまいました。俺は……。母上の言葉を守りませんでした」

母上を直視できず、俺は顔を伏せた。そんな俺に、母上は優しく、まるで小さな子どもに言い聞かせるような声で語りかけて来た。

「サイラオーグ、あなたは勘違いをしています」

「え・・・？」

「私は、諦めるなどとは言いましたが、負けるなどは一言も言っていないよんよ」

「ッ——!?!」

「敗北は終わりではありません。諦め、逃げ出す事が本当の終わりなのです。サイラオーグ、あなたはこの敗北で全てを投げ出してしまう様な男なのですか？」

「・・・いいえ。いいえ！ そんな事あるはずがない！ この敗北を糧に、俺は前に進み続ける！ リアスにも、そして兵藤一誠にも二度と負けるつもりはありません！」

「それでいいのです。そう思い続ける限り、あなたの道が途切れる事は無いのです。あなたが諦めなければ・・・いつか必ず勝てるのだから。サイラオーグ。私の愛しい子・・・。本当に・・・本当に立派になりましたね」

「はは・・・うえ・・・」

慈しみに満ちた母上の微笑み。それを目にした俺の頬に、熱い何かが流れて落ちて行くのだった。

サイラオーグSIDE OUT

イツセーSIDE

「・・・へへ」

俺は病室の前に立っていた。流石に、いま中に入るわけにはいかねえよな。

(サイラオーグさん。お母さんと好きなだけお話してください)

その間、俺は適当に時間でも潰しときますから。

「さーて、そうと決まれば探検でもしてみるかあ」

ひょっとしたらギャー助や他のみんなに会えるかもしれないねえしな！

室内から聞こえる呻き声をなるべく耳に入れない様にしながら、俺はそつとその場を離れるのだった。

「・・・なんか、俺も父さんと母さんに会いたくなっちゃったな」

・・・

試合から三日後、この日、俺達は人間界へ戻る事になった。いやー、この三日間は極楽だったな。俺達の試合を見たホテルの支配人さんが感動させてくれたお礼と言って、なんとグレモリー家とバアル家、さらに先輩達や先生を含めた全員をタダで泊めてくれたのだ！一緒にメシを食べたり、一緒に風呂に入ったり、この三日間でお互いにすっげえ仲良くなれた！

そして今、俺達はホテル前で最後の挨拶を交わしていた。みんな、それぞれ対戦した相手と話をしている。俺も今リーバンさんと握手を交わしたばかりだ。

「神崎殿、また改めて礼をしにお邪魔させて頂く」

「この度は、本当にお世話になりました」

「はい。お待ちしております」

先輩とサイラオーグさんとお母さんが三人で話している。終わったら俺も挨拶しとかないとな。

「はあい、イツセー」

「あ、コリアナさん。色々お世話になりました」

この三日間、何かと俺を気にかけてくれたもんな。飲み物が無くなったらすぐに淹れてくれたし、外に出る元気も無かった時は面白い雑誌を何冊も用意してくれたし。うう、こんな気遣い出来る素敵な美人の腹を殴っちゃまったのか俺は・・・。

「これであなたと会えなくなるなんて残念だわ」

「あはは。俺もコリアナさんみたいな綺麗な人と離れ離れになるなんて寂しいですよ」

「ホント？ ホントにそう思ってくれてる？」

「え？ ええ、もちろん」

俺がそう言っていると、コリアナさんはスーツのポケットからペンとメモ帳を取り出し、何か書いたメモをちぎって俺に渡して来た。

「あの、コレは・・・？」

「私の連絡先。いつでもいいから連絡してね。あなた、甘い物は好き？」

「は、はい」

「私、美味しいケーキを出す喫茶店を知ってるの。今度一緒に行きましようね」

「え・・・え・・・？」

「うふふ、楽しみにしてるわ」

妖艶な笑みと共に俺の前から去って行くコリアナさん。そこへ入れ代わるように木場が近寄って来た。

「デートの約束を取り付けるなんて、やるじゃないかイツセイ君」

「はは、何言ってるんだよ木場。あんな美人なお姉さんが俺みたいなのがキとデートなんかするわけねえだろ」

「・・・」

「な、何だよその残念なものを見る目は」

「・・・え？ ひよつとして・・・マジで？」

色々なものを得る事が出来たサイラオーグさんとの勝負。俺が最後に手にしたのは・・・美人なお姉さんの連絡先でしたとき。

第十章 殲滅必至のナイト・オブ・フューリー
第四百四十九話 伊達に人生経験積んでませんから

「アザゼル先生、こちらですか？」

「おー、よく来たなロスヴァイセ」

「よく来たな・・・じゃありませんよ。いきなり呼び出しといて。そもそも、二日前に人間界に戻ったばかりなのに、どうしてまた冥界に来ないといけないのですか。しかも・・・」

「落ちつけ。ちゃんと一から説明してやるから。その前に、とりあえずお前にはコレを着てもらおう」

「コレ？・・・ツ!? な、何ですかその衣装は!？」

「いいから着ろ。じゃねえと話が進まねえ」

「くっ・・・！ わかりました！ ただし、ふざけた理由だったらフルバースト魔法をお見舞いしますからね！」

・・・
・・・
・・・

「・・・き、着替えました」

「中々似合ってんじやねえか。んじやあそろそろ始めるか」「始める？」

「ワイルドアザゼルと！」

「え・・・？ え・・・？」

「ほれ、そこにカンペあるからその通りに喋れ」

「は、はい。えっと・・・行き遅れロスヴァイセの！」

「「お悩み相談室くく!!」」

「・・・って、何ですかこのカンペは!？」

「というわけで、今から俺とお前で悩み相談を行うぞ」

「それよりも！ この！ カンペの！ 説明を！」

「うるせえな。いいから黙って聞け」

(・・・憶えてなさいよストマツク総督)

「レーティングゲームも終わり、アイツ等はそれぞれに成長した所を見せてくれた。おかげで昇格の話も出て、何人かはその試験に向けて勉強中だ。そんなアイツ等に、俺達もいっちょ先生らしい事をやってやらにやと思つてな」

「なるほど、それで悩み相談という事ですか。わざわざこんなカウンセリングルームみたいな部屋を用意して．．．ヒマなんですか？」

「空いた時間も生徒達の為に使う。俺って教師の鑑だな」
（本当に教師の鑑なら、自分でそう言う事は言わないと思えますけど。わざわざ自分用の白衣や、今私が着ているナース服まで準備して．．．ちよつと待つて。何でこんなピッタリなサイズの服を用意出来るの？ サイズなんか教えて無いのに。まさか．．．目視だけで？）

「あ、そうそう。もしかしたらアイツ等以外のヤツも来るかもしれないが、まあその時も相談に乗つてやるつもりだ。メインは俺がやるから、お前は何か言いたかつたら後ろから．．．」

「近づかないでください変態ストマック野郎」

「今の一瞬で俺の評価に何があつた!？」

「はいはい。それよりも一人目が来たみたいですよ変態ストマック」

「俺は変態でもストマックでもねえええええ!!!」

「し、失礼しまーす．．．つて、なんだこの衝立?」

「面と向かつては相談しにくいかもしれないので用意しました．．．ですよねアザゼル先生?」

「だから、俺はアザゼルじゃなくて変態ストマックだつて．．．つてこれじゃ逆う!」

「いいから話を進めてください」

「(クールだ。クールになれ俺) 待たせたな、イツs．．．H藤I誠君」

「なんスかその呼び方」

「ちよつとしたプライベート保護つてやつだ。言つとくが、意味がねえとかのツツコミは無しな」

「(先制されてしまった)それで、何か悩み相談するとか言われて強引に連れて来られたんですけど」

「おう」

「なら、『覇龍』の事を・・・」

「却下」

「ええ!? 悩み相談に却下ってありなの!？」

「それについてはいつだって相談に乗ってやる。この悩み相談の目的はお前等の気分転換だ。それこそ、ちよつとした悩みや、くだらねえ愚痴なんかでもいい。吐き出したいもんを吐き出せ」

「吐き出せって言われても・・・」

「なんなら女の話でもいいぜ。ほれ、おっぱいの話でもするか?」

「ふ、不潔ですアザゼル先生!」

「猥談は野郎同士の立派なコミュニケーションだぜ。どうだ?」

「・・・先生」

「おう」

「おっぱいって・・・何でしたっけ?」

「・・・おう?」

「確かに、俺はおっぱいが大好きです。見るだけじゃない。言葉にするだけで、想像するだけで胸がときめきました。いつか、彼女が出来たら思いっきり揉んだりついたりしたいと思ってました。そう・・・以前の俺ならば」

「以前? なら、今のあなたは違うのですか?」

「いえ、今もおっぱいは好きです。でも最近はおっぱいどころか、エロい事そのものへの意識がすっかり減っちゃった気がしてならないんです」

「それはいい事なのでは?」

「でも俺は兵藤一誠ですよ!？」

（あ、本名言っちゃった）

「俺! エロ! 俺だったはずなんです! いるだけで犯罪、猥褻が服を着て歩いてるなんて言われてたのが俺なんですよ!」

（私が彼と出会ってから、彼が破廉恥だなんて一度も思った事無いけれど・・・）

「少し前にも、木場に「変わったね」って言われました。それが俺は怖

いんです。自分の全てと言ってもいいものが、いつの間にか無くなってた事が。俺の・・・俺のアイデンティティはどうなっちまったんでしょうか・・・」

「・・・わかる。わかるぜその気持ち。俺も若い頃はある日突然性癖が変わっちまって戸惑った事もある。・・・だがな、I誠。変わる事を恐れてちや、その先にある新たな世界へ辿り着く事は出来ねえぞ」

(真面目なトーンで何言ってるんですかこの人・・・)

「先生、俺はどうしたらいいんでしょうか・・・」

「どう思うロスヴァイセ？」

「え、ええつと。。。よくわかりませんが、その変化のきつかけになつた出来事を思い出してみたらいいんじゃないでしょうか。そうすれば何かいい考えが浮かぶかもかもしれませんよ」

「そうだな。I誠、お前が最初にそれに気付いたのはいつだ？」

「確か・・・冥界での合宿の時からだった様な。匙達に負けちまったつてのもあつて、あの頃からエロよりも特訓に意識を向けるようになりましたから」

「合宿・・・。つて言うと、考えられる理由はあれだな」

「心当たりが？」

「I誠。お前はあの時、タンニーンの特訓に精神が耐えられずに野生化した。そんなお前を大人しくさせる為、俺はとっておきのエロ本をお前にくれてやった。そしてお前は過酷な特訓と共に溜まっていた性欲を一度に解き放った。もしかしたらお前はその時に性欲と共に、エロにかける思いまでも消化しちまったのかもしれない。今のお前の性欲は一般の男のそれと変わらんレベルにまで落ちているとしたら・・・」

「なん・・・だと・・・!?!」

「いや、そんな事が考えられないくらい目標を持つて特訓する様になつたからとかだと思うんですけど・・・」

「黙ってるロスヴァイセ。これは男にしかわからねえ苦悩なんだよ」

「そろそろ本気で殴ってもいいですか？」

.....

「というわけで、結論としてはむしろ今の方がまともだからいいんじゃない? という事になりました」

「・・・釈然としねえ」

「いいですか、I誠君。女性の立場から言わせてもらうと、やっぱりそういうものを前面に押し出して来る男性には引いてしまいます。そもそも、あなたは冥界の子ども達の夢や希望を背負うと決めたのでしょうか? そんな男性が、エ、エツチな事ばかり考える様な人物では子ども達に悪影響を与えてしまいますよ」

「ツ・・・!?! そ、そうか。そうですよね。俺が間違っていました」

「間違ってたのは、こんなくだらな話題を振ったこの人ですけどね」

「そういやI誠。サイラオーグの『僧侶』とはどうなったんだ?」

「な、なんの事でせう?」

「しらばっくれてんじやねえよ。お前が『僧侶』から連絡先を渡されてんのは知ってんだよ」

「私、初耳なんですけど」

「おめーが前日に酒飲み過ぎて二日酔いになった所為で挨拶の場になかったからだろうが。で、どうなんだよ? もうデートでもしたのか?」

「い、いや、その・・・」

「・・・まさか、連絡もしてないんじやねえだろうな?」

「じ、実はそうだったりして・・・」

「馬ツツツ鹿じやねえのかお前は! 女性から連絡先を教えるでもらったらその日の内に連絡するのがマナーだろうが!」

「だ、だって、俺、こんなの初めてなんですよ!?!」

「知るか! しろ! 今すぐしろ! この場でしろ! しねえとロスヴァイセの嫉妬のフルバーストに俺の光も合わせてブチ込むぞ!」

「するわけないですし、そもそも嫉妬なんかしてません!」

「わ、わかりましたよ! すればいいんでしょうすれば!」

「はあ・・・ったく、世話の焼けるヤツだ」

「こういう時は、第三者が強いるより、お互いのペースに任せた方が」
「恋愛経験ゼロの処女が何言ってるんだ」

「しよ、処女ちゃうわ！ 私はアレですよ！ 北欧ではそれはもう男性達からのアプローチが凄かったんですから！ 一日に十……百……せ、千人の男性から言い寄られた事だって……！」

「……」

「……」

「……悪い。今のは俺が悪かった」

「謝らないでください。よけいみじめになりますから」

「あ、も、もしもしコリアナさんですか？ お、俺です。兵藤一誠です。はい……はい……。ち、違いますよ！ 忘れてなんかないですって！ ただ、ちよつと決心がつかなかったからというか……。と、とにかく、コリアナさんの事が嫌いになったとかそういう事じゃないですって！ だから泣かないで……。って、笑ってる？ は、う、嘘泣き!? 勘弁してくださいよ。俺、いま罪悪感で死にたくまりましたよ！」

「なるほど、あの『僧侶』は小悪魔タイプか」

「……あれ。でも確かI誠君、桐生さんともいい仲だと思っただんですけど。ほら、花火大会の時……」

「ああ、あの娘は冷やかされてキレてたけどな。だが、俺が見るに……ありやまんざらでも無かったようだぜ。野郎……いつの間にかハーレム王への道を歩み初めてやがる」

「何ですかその頭の悪そうな王は」

「アイツが目指してた夢だよ。最も、最近ハハーレムのハの字も聞いてねえがな」

「俺ですか？ はい、今冥界にいますけど。……え!? 今から会いたい!? 約束してた喫茶店に連れてくつて……マジですか!?!」

「おっと、そうこうしている間にデートのお誘いみたいだぜ」

「わ、わかりました。待ってます……」

「よくやった。で、どうだった？」

「な、なんか気付いたら一緒にお茶する事になってました。場所を教

えたら一時間くらいでそつちに着くから準備しててねって・・・」

「一時間か。キツチリ準備するには微妙な時間だな。ま、ジタバタしても世紀末しか来ねえし、適当に時間でも潰してろ」

「いや意味わかんないです。けど、そういう事なら俺はそろそろ失礼しますね」

——待ってくれ、相棒。せつかくの機会だ。俺もヤツに相談させてくれないか。

「え、お前が？」

「おっと、Dライグもか。いいぜ、言ってみな」

——では聞くんが、俺とアルビオンの宿敵である「ヤツ」が少し前にさらなる力を得てしまったのだが、どうすれば「ヤツ」に対抗出来ると思う？

「はあ!? 何言ってるんだよお前!? まだ懲りてねえのか!」

——相棒、お前は「ヤツ」と肩を並べられる男になりたいのだから? お前の力を「ヤツ」に認めさせる為にも、いつかは戦う時が必ずやって来ると思え。

「そ、それは・・・そうかもしれないけどさ」

「・・・たいわ」

「え?」

「そんなもん俺が聞きたいわああああああ!!!」

「せ、先生!」

「あの野郎、チートどころかバグ化しやがって! 俺だって一時は受け入れたさ! なのに、それからあの野郎はやる事なす事ぶっ飛び過ぎなんだよ! その所為で俺はまたこの痛みと戦い続けられないといけなくなっちゃったってのにいいいいいい!!!」

「I 誠君。この人は私に任せていいですから、部屋を出たければどうぞ」

「い、いいんですか?」

「ええ。しばらくしたら落ちつくはずですから」

「わ、わかりました。失礼します」

——待て相棒。まだ回答をもらってないぞ。

「止める！ アザゼル先生のライフはもうゼロなんだよ！」

.....

「落ちつきましたか？」

「おう。これも『七色君』のおかげだぜ」

「あの七色に発光するカプセルですか。いつも思いますが、あなたはまともな物を作りませんね」

「褒め言葉として受け取っておくぜ。そんじゃ次のヤツだ」

「失礼します」

「K場Y斗君ですね。どうぞおかけください」

「で、何か悩みはあるか？」

「そうですね。．．前回のレーティングゲームで露呈してしまいましたが、僕の低い防御力を補う方法を一緒に考えてほし．．．」

「あー。だからそういう真面目な相談はいつでも受け付けてやるつての。そういうんじゃないかって、普段言えない様な事を言つて欲しいんだよこっちは」

「は、はあ．．．。ええつと、それなら．．．。これは最近になって気付いたんですけど、どうも一部の人達に、僕が男好き．．．ストレートに言うどホモだと誤解されているようなんですけど」

「え、違うのか？」

「え、違うんですか？」

「．．．あなた達もでしたか」

「お前、自分のこれまでの言動を顧みてみろよ」

「うーん．．．別に変な事を言った憶えもした憶えも無いんですけど」

「無自覚ですよアザゼル先生（ボソボソ）」

「だから余計性質が悪いんだよ（ボソボソ）」

「何か言いましたか？」

「いいえ、何でもありませんよ。つまり、K場君は男好きという誤解をなんとかかしたいんですね？」

「はい。僕だってちゃんとした男ですから」

「それなら、逆に女性が好きだとアピールしてみたらどうですか？
もちろん、この変態ストマック総督みたいに下品にならないくらいの
レベルですが」

「おう行き遅れ。ケンカしたいなら受けて立つぞ」

「構いませんよワイルド（嘲笑）さん」

「（衝立の向こうから尋常じゃない殺気を感じる・・・）わかりました。
ちよつと考えてみますね」

.....

.....

.....

「・・・三人目だ」

「失礼するわ」

「Rアス・Gレモリーさんですね・・・」

「よろしくお願いするわ（何かしら、この殺伐とした空気は）」

「お前の悩みを教えてください。先に言っとくが、日常生活の悩み限定な」
「悩み相談で悩みを限定されるなんて思わなかったわ。けど、それな
ら・・・そうね。今一番の悩みは、好きな男の子がいくらアピールし
ても気付いてくれない事かしら」

「アピールというと、どんな？」

「家の中でスキンシップしたり、セクシーな下着で彼の前を歩いたり、
色々やってるわ」

「ああ、そりや逆効果だぜ」

「え？ ど、どういう事？」

「少し前にアイツから相談受けてな。あの野郎、お前等がそんな格好
するのは自分が男扱いされてないからだって思ってるぞ」

「そ、そんな・・・。いや、でも、確かに最初の頃は気まずそうに目を
そらしたりしてたけど、最近だとなんだか微笑ましい目を向けられて
る様な気が・・・」

「もうそういうもんだって諦めてるんじゃないか？ 言ってしまう
ば、ズボラな娘とその親・・・みたいなの」

「こ、こうしちゃいられないわ！ 朱乃達と一緒に対策会議をしない

と・・・！」

「・・・行っちゃいましたね」

「ライバルにも教えるのか。ジワジワと包囲網を狭めるつもりだな」

・・・

・・・

・・・

「・・・よし、こんなもんか」

「I誠君から始まって、K場君、Rアスさんと来て・・・K猫さん、Zノヴィアさん、Aーシアさん、Gヤスパー君、A乃さん、Iリナさん、さらにはSーナさんに彼女の眷属の女の子達、まさか、こんなにたくさんの子達が来るとは思いませんでした」

「ま、俺としては色々面白い話が聞けてよかったけどな。さーて、そんなじゃそろそろ撤収・・・」

「失礼します。相談室はここで合ってますか？」

「げっ・・・！」

「こ、この声は・・・K崎君!? あわわ・・・！」

「衝立で見えねえのに手鏡出して身だしなみ整えてんじゃねえよ。初デート前の女子かお前は」

「う、うるさいですよ。それより話を進めてください」

「へいへい。・・・ったく、どいつもこいつもこの野郎の事は全部俺に押し付けやがって。もしも今後俺と同じ状態になったって『七色君』分けてやんねえからな。で・・・伝説の騎士のお前に悩みなんかあるのか？ お前なら全部自分で解決出来んじゃねえのか」

「アザゼル先生。あなたのように人から尊敬される人物になる為にはどんな努力をすればいいんでしょうか？」

「え？」

「・・・どういう事だ？」

「俺には素晴らしい後輩達がいいます。先輩らしい事もあまり出来て無い俺を、その子達はとても慕ってくれて、尊敬までしてくれています。本当に、俺には勿体無い子達ばかりです。俺は、そんな後輩達に相応しい人間になりたいんです。そこで、組織のトップで大勢のみなさん

に慕われているアザゼル先生から助言を頂きたいんです」

「K崎君・・・」

「なるほど。なら、俺から言える事は一つだ。お前は・・・今のお前でいい？」

「え？」

「お前の言う後輩達はいま、お前の背中を必死に追いかけている最中だ。それなのに、お前が先に行っちゃったら、いつまで経っても追いつけねえだろ。そうすりゃ、後輩達はさらに頑張り過ぎて息切れしちゃうかもしれねえ。だから待ってやれ。一人で先に行かず、立ち止まって、振り向いて、アイツ等の姿が見えるくらいまで待ってやれ。お前が先に進むのは、それからでも遅くねえと思うぜ」

「それで・・・いいんでしょうか？」

「難しく考えるな。気楽にいけ気楽に」

「・・・わかりました。ありがとうございます。頂いた助言を素に、自分でも色々考えてみます」

「おう」

「・・・意外ですね。というか、最後にしてようやくまともに相談に乗りましたね」

「アイツ個人だけじゃなく、I誠達にも影響するかもしれん話だったからな」

「私はてつきり、これ以上自分の体を壊されない様、予防線を張りたくてああ言ったのかと」

「・・・」

「まさか・・・そっちが本心ですか？」

「はい撤収撤収！ さっさと帰るぞロスヴァイセー！」

「・・・やっぱりあなたって最低のストマック総督だわ」

第百五十話 試験で結果を出したいなら毎日の積み重ねが大事です

リアスとサイラオーグさんのレーティングゲームから数日の間を空け、駒王学園の文化祭は予定通り開催された。オカルト部の出し物も大盛況となり、手伝った身としては嬉しい限りだった。

占いやお祓いといった様々なコーナーに加え、仮装した部員と一緒に写真が撮れると聞きつけた子達が殺到して、その整理が大変だった。部員じゃない俺やアーシアまでも巻き込まれてしまい、一体何枚の写真を撮られたかわからない。けどまあ・・・最後の文化祭のいい思い出になった事は確かだった。

ちなみに、ダンゴ状態だった女子に比べ、男子は指名の数にバラつきがあった。部外者の俺を除き、一番多かったのが木場君、次がヴラデイ君、そして最後が兵藤君だった。その内訳もなかなか面白く、木場君が二年生の女子、ヴラデイ君が三年生の女子、兵藤君が一年生の女子とキツチリ分かれていたのだ。木場君はイケメン同級生、ヴラデイ君は可愛い後輩、兵藤君は・・・たぶん、頼りになる先輩って感じで見られてたんじゃないかな。

そんな文化祭終了後、まず俺がやる事になったのは、リアス達の前でレーティングゲームの総評を言う事だった。おかしいよね。どう考えてもこれってアザゼル先生の役目だよな。

「コイツ等はお前の言葉が聞きてえんだよ。何せ・・・ソーナとのゲームはほとんど見てももらえなかったんだからな」

あれは見なかったんじゃないかって見れなかったんですよ！ とは言えなかった俺はとんだチキン野郎だ。ああ、リアス達の顔が強張っちゃったじゃないですか！・・・けどまあ、今回は最初から最後まででしっかり見させてもらったから胸を張って言えるぞ。

「・・・みんな素晴らしかった。これ以上の言葉は必要無いでしょう」
本当はもつと色々言いたかった。けど、あの試合はグダグダと言葉を並べて語っていいものじゃない。だから、俺はシンプルにそう言う

だけにとどめる事にした。

それからが大変だった。安心したように顔を綻ばせる子や、声を出して喜ぶ子がいる中、朱乃とゼノヴィアさんがおどおどした様子で俺に尋ねて来た。あんなみつともない姿を見せてしまった自分達は果たして評価に値したのかと。

俺は即座に当然だと答えた。朱乃は俺の素人判断で教えた技を使いこなすどころか自分なりにさらに発展させてたし、バリアすらぶつ壊す様な強力な攻撃を見せたゼノヴィアさんだって凄かった。あれを見てみつともないなんて言える俺じゃないですよ。

そう付け加えると、二人が突然左右から抱きついて来た。これはまづいと離れてもらおうとしたら、なんと二人とも泣いていた。何で泣いたのかという理由は置いておいて、とりあえず落ち着くまではこのままにいようと思った・・・のが不味かった。もうね、周囲からの視線が気になってしょうがなかったわ。

それから、二人が落ちついた所で、最後にアザゼル先生がMVPを選ぶとしたら誰だと聞いて来た。そりゃ全員でしょと言おうとしたら「全員は無しだぞ」と封じられてしまったので、しばし悩んだ後、俺はヴラデイ君の名前を上げた。

「ふええ!? イ、イツセー先輩じゃなくて、僕ですかあ!?!」

仰天するヴラデイ君。確かに、兵藤君は凄かった。だけど、成長したという点では、ヴラデイ君だって負けてなかった。聞けば、二戦目は自ら志願したらしいし、苦手だと言っていた神器だって自分の意思で使っていた。それはこれまでずっと自分の力と向き合おうとして来た彼の努力の結果だ。だからこそ、俺はヴラデイ君にMVPを送りたいと思った。

理由を説明すると、リアス達も納得した様に頷き、ヴラデイ君を称える為に大きな拍手を送った。

「う、嬉しいです! こんな賞、生まれて初めてもらいました! 本当に、本当にありが・・・うええええええええん!!!」

リアスから花束(いつの間にかアザゼル先生が用意していた)を受けとったヴラデイ君が、感極まったのか号泣し始めた。彼へ送られる

拍手は、その後しばらくオカルト部の中に響き続けるのだった。

.....

さて、それからさらに数日が経った今日。俺の家の地下室に設けられたVIPルームにサーゼクスさんとグレイファイアさん。そしてアザゼル先生とオカルト部のみんなを招いての話し合いが行われる事になった。・・・うん、まあこんなにくさんのお客さんを招く為にはこういう部屋も必要なのはわかるよりアス。でもね、何度も言う様だけど、せめて作る前に教えといってくれないかな。初めて地下室に入った時には、こんな部屋無かったよね？ 前にみんなが集まった広間でいいじゃない。ちなみに、その広間では初の地下室に興味深々なスコルとハティが駆けまわっている。正直、俺もそっちに行きたいんだけど、それを防ぐかのように、俺のすぐ後ろにフェンリルが待機している。しかも、何故かサーゼクスさんやアザゼル先生に目線を送り続けている。一体何がしたいんだろう・・・。

ボケーつと室内を見渡している俺を尻目に、サーゼクスさんが口を開く。なんでも、この度、兵藤君と木場君、そして朱乃に魔王様方から昇格の推薦が送られる事になったそうさ。

昇格って何ぞや？ と一瞬思ったが、そういえば、悪魔には上級とか中級とか色々階級があった事を思い出した。今回、三人には中級悪魔になる為の試験を受けてもらうらしい。やっぱりこういう時に試験を受けなければならぬのは、人間も悪魔も一緒なんだな・・・なんて感想が浮かんだ。

「本当なら、中級など飛び越えて上級悪魔相当の昇格が妥当なんだけどね。システム上、それは出来ないんだ」

「上の連中曰く、特例であろうと順序は守れ・・・だそうさ。不本意かもしれないが、まずは中級へ昇格、しばらく活動して、再び昇格の推薦状が出るまでは我慢しろ」

「ふ、不本意どころか・・・」

「むしろ、僕達にそんな資格があるのか・・・」

「ずいぶんと評価して頂いているようで・・・」

驚く三人だったが、すぐに立ち上がってサーゼクスさんに頭を下げ、それぞれに感謝の言葉を述べる。それを受けたサーゼクスさんも嬉しそうに頷いた。

「今回の三人以外の子達にもいずれ昇格の話が出て来るだろう。北欧の悪神に京都のテロリスト・・・キミ達の功績は本当に立派なものなのだから」

京都か・・・あの女性は元気でやっているだろうか。それにしてもa u派とかいう鬼畜集団め。もしかた俺の知る所で同じ様な所業を行ったら、次は腹パンだけじゃ済まさんぞ。

だいたい、コスチュームまで統一して恥ずかしくないのかアイツ等・・・そういや、前に出会った自称曹操のレイヤーさんも似た様な格好だったな。連中より彼の方がずっと似合ってたわ。まあ、趣味で着るのとガチで着るのとじゃ意味が違うしな・・・今度会ったら衣装変えてみたらって言ってあげた方がいいかもしれんな。あんな連中と一緒にされたら彼だって気分悪いだろうし。

「そういうわけで、一番近い試験日である来週にイツセー達三人は冥界で昇格試験に参加してもらおうからそのつもりで頑張れよ」

「ら、来週!? いくらなんでも急すぎでしょう!?!」

「中級悪魔の試験という確か・・・」

「レポート作成に筆記、そして実技でしたね」

「筆記に関しては朱乃と木場は問題無いだろ。悪魔の基礎知識と応用問題やレーティングゲームに関する事が出題されるが、お前等からすりゃ今さらだろうし。イツセーも・・・今から必死こいて勉強すりゃ何とかなるだろ」

「ちくしように、気楽に言ってくれて・・・」

「最強の『兵士』になるんだろ? なら、そろそろ体だけじゃなく、頭の方も鍛えるようにしろ」

「そ、それを言われると・・・」

「はは。でも、レポートの方は今のイツセー君なら簡単だと思っよう。そうだろう、グレイフィア?」

「試験時のレポートは「中級悪魔になったら何をしたいか」という目標と野望をテーマに「これまで自分が得たもの」を絡めて書くのがポピュラーです」

「『目標』と『得たもの』……。イツセー君はもうどちらの答えも持つてるだろう?」

「大勢の前でデカデカと宣言しやがったもんな。試験官があのゲームを観戦してたとしたら、下手なモン書いたら落とされるかもしれんぞお前」

「結局どつちなんですか!?!」

「とにかく、まずはそのレポートから取りかかるぞ。締めきりが試験当日らしいからな。加えて、イツセーは筆記試験に向けてみっちり勉強だ。幸い、先生なら大勢いるしな。精々しっかり教えてもらえ」

「そうね。イツセー、わからない事があつたら何でも聞いてちょうだい」

「僕も色々再確認する必要があるし、付き合おうよ」

「合格するなら三人一緒ですわ」

「あ、ありがとうございます! 俺、頑張りますよ!」

青春だな……。なんて言ってる場合じゃない。俺だって大学の受験勉強頑張らにやならんのに。

「……では、イツセー君達が頑張っている間に、私も頑張つて来る事にしますか」

さつきからずっと黙っていたロスヴァイセ先生が静かに立ち上がった。

「どこか行かれるんですか?」

「ええ、北欧に一度戻ろうと思つています。オーデイン様に報告しないといけない事もありますし、何より……今の私の実力では、あなた達の先生として相応しくありませんからね。今度帰つて来る時は、新しくなった私をみなさんにお見せする事を約束します」

「い、いきなりですね」

「ふふ、けど、これはあなた達の所為ですよ? あなた達の戦う姿を見たからこそ、私ももっと強くなりたいと思う様になったのですから」

「え？」

「ロスヴァイセだけじゃない。そうだろうサーゼクス？」

「ああ。あのレーティングゲーム以降、冥界では若い悪魔達の動きが実に活発になった。もう少し簡単に言うと、積極的に努力する様になったんだ」

「努力・・・ですか？」

「はは、キミ達にとっては当たり前的事だろう。だけど、冥界・・・いや、悪魔の世界ではこれまで、キミ達やサイラオーグの様な者達はむしろ少数だったんだよ。そこら辺の事情はレイヴェルも詳しいんじゃないかな？」

名指しされたレイヴェルさんが口を開く。

「サーゼクス様のおっしゃる通りですわ。例えば、今のレーティングゲームのプロプレイヤー陣は家の特色や生まれ持った才能、戦術に絶対の誇りを持ち、自身を鍛える事なんてしません。努力や修行なんて、才能の前ではたかが知れていると思っっている者もいます。眷属の力が足りなければトレードでより強い眷属を得る。もちろん、リアス様やサイラオーグ・バアル様のように眷属に愛情や誇りを持つ方も多いですが・・・」

「当然よ」

「努力など無駄・・・。それを覆したのが皆さまなのですわ。そして、そんな皆さまの戦いを見た者達の中で、努力というものに対する考えや価値観が変わり始めた。皆さまは、悪魔の固定概念とも呼べるものに小さな亀裂を入れたのです。今はまだ小さなものかもしれませんが、ですが、この亀裂が大きさを増し、そしていつか完全に破壊されたとしたら・・・。もしかしたら、その時こそが冥界そのものが覆る時なのかもしれません」

（まあ、こいつらやサイラオーグ達がここまでの段階に至れたのは・・・）

（間違いなく・・・）

（この方の影響なのですが・・・）

冥界を変える・・・。どうしよう。なんかリアス達の姿が滅茶苦茶

でっかく見えるんだけど。あれじゃね。いずれ偉人扱いされる様になるんじゃない？ あと、なんでアザゼル先生にサーゼクスさん、グレイフィアさんは俺の方見てんの？

「今レイヴェルが話してくれた通りだ。そして・・・私はキミ達にそれを期待している。冥界の未来を担うのはキミ達若手だ。キミ達が、キミ達自身で、キミ達が正しいと思える様な冥界を作って欲しい。現魔王として、私は心からそう思っている」

「お兄様・・・」

・・・ヤバい。なんか泣きそう。

——難しく考えるな。気楽にいけ気楽に。

先生、せっかくアドバイスしてもらって申し訳ないですが、やっぱり自分だけ何もしていないというのは我慢出来ません。俺も、俺のやりたい事、やるべき事を見つけようと思います。

そう最後に決意して、この日は解散となったのだった。

S I D E O U T

イツセーS I D E

試験当日まで五日。俺はオカルト部で木場や朱乃さんと一緒に勉強していた。先生として部長もいてくれている。

「うわ・・・覚える事多過ぎ」

とある転職サイトのキャッチフレーズみたいな言葉が無意識に出る。いや、マジで大変だわ。ぶっちゃけ、学園の試験でもここまで気合い入れて勉強した事ねえし。

「よお、頑張ってるか若人よ」

と思ったらアザゼル先生登場。ノートパソコンなんか持ってどうしたんだ？

「気分転換に面白いもんを見せてやるよ」

「面白い物？」

いそいそとパソコンを机に置く先生。一体何を見せてくれるつもりなんだろう。

『みなさーん！ こんにちはー！』

『僕も!』

『私も!』

『若手は宝・・・か。サーゼクス様、あなたのおっしゃった言葉、今ならわかる気がします・・・』

フツと微笑むサイラオーグさんのアップが映った所で、映像は終了した。

「だーはっはっは! いやあ、いつ見てもおもしろえ映像だぜ!」

「先生、説明してください! 一体サイラオーグさんに何があったんですか!?!」

「ゲーム終了後、サイラオーグが上層部とのパイプを失ったのは知ってるだろ?」

「・・・はい」

「俺もフューリーと一計を案じてみたが・・・連中は安全よりもプライドを選んだってわけだ。まあ今はそんな事はどうでもいい。けどな、捨てる悪魔があれば拾う悪魔もありって具合にサイラオーグは別のパイプを得た。その一つが今の番組を作っているテレビ局だ」

「テレビ局ですか?」

「メディアの力を舐めんなよ? ある意味、上層部よりもずっと強力な後ろ盾を得た事になる。人間と同じで、悪魔も上に行けば行くほど、スキヤンダルを嫌うからな」

「な、なるほど。でも、サイラオーグさんもよく出演しましたね」

「まあ、最初は難色を示していたみたいだが、お前と戦った時、子ども達の声援のおかげで立ち上がれたのだから、その恩を子ども達に返したいって事で決断したそうだぜ」

「サイラオーグらしいわね」

「バル家が何か言ってくるかもしれないが、フューリーやテレビ局以外にもアイツの味方は増えた。加えて母親も目覚めたいま、アイツに怖いモンなんて存在しないだろうさ」

「サイラオーグさんも・・・頑張ってるんですね」

「そうだ。だからお前もアイツに負けない様、今は試験に向けての勉強に全力を注げ」

「はい！ よっしやあ！ 何か燃えて来たぜえ！」

負けませんよサイラオーグさん！ 何せ、あなたは俺のライバルなんですから！

気合いを入れて再びノートに向かう。この日の勉強会はとても充実したものになった。

第百五十一話 目と目が合う瞬間

「……というわけで、みんなの意見を聞かせて欲しい」

そう言つて、俺は眼前の四人……黒歌、レイナーレさん、カラワーナさん、ミッテルトさんの顔を見渡した。

「ええっと……。もう一度確認させて欲しいんだけどねご主人様。あなたはリアスとサイラオーグ・バアルのゲームを見て、自分もこのままじゃいけないと思つた」

「そして、ご自分に出来る事は何かを考えられて思いつかれたのが、『王』としての自分を成長させる事」

「そこで、『王』である自分に眷属である私達が何を求めるのか。どうすれば私達の『王』として相応しくなるか意見を貰いたいと思ひ」
「こうしてお家に招いてくれたつて事でいいつすか？」

「ええ。どんな些細な事でもいいので、お願いします」

黒歌もレイナーレさん達も、それぞれに真剣に悩み、考えてくれた上で俺の眷属になってくれた。なのに、俺は今日までみんなの『王』として何も出来ていなかった。いや……。していなかった。あのゲームで、リアスやサイラオーグさんと、二人の眷属達との関係を見て、俺は改めて思つた。俺がまずやらなくてはならないのは、『王』としての自覚を持つ事だと。

「と、とは申されましても。私達からすれば、眷属にして頂いただけでも奇跡だと言えますのに……」

「この上、あなた様に何を求める事がありましたでしょうか」

「そ、そうつすよ。アザゼル様もおっしゃってましたけど、むしろ相應しい眷属になるために頑張らないといけないのは自分達つすから」

「いやいやいや、そりゃこつちのセリフですつてば。うーん、遠慮してんのかなあ。」

「……わかつたにや」

「黒歌？」

「ご主人様。私もレイナーレ達の意見と同じだよ。とっても強くて、けど、それ以上にとつても優しいご主人様は最高の『王』にや。もし

ご主人様に出会わなければ、私ははぐれとして、レイナーレ達はこの街を脅かした存在としてリアスに始末されていたかもしれない。それでも私達はこうしてここにいる。主殺しと下級墮天使の為に、あなたが下げなくてもいい頭を下げてくれたから。三陣営のトップから与えられた褒美の権利を罪の帳消しに使ってくれたから。あなたが手を差し伸べてくれたから、私達はここにいるの」

「・・・」

「そんなあなたが『王』であるという事だけで、私達は十分なの。とはいえ、ご主人様がこうしてわざわざ意見を言う場を設けてくれたんだから、一つくらい意見を出さないと悪いにや。そういうわけで、私は今からみんなを外に遊びに行く事を提案するにや」

「「え？」」

「遊びに行く？」

「そうね・・・。ちょうどケーキバイキングのお店が近くにオープンしたみたいだから、そこに行くにや」

「ちよ、ちよつと待って黒歌。どういうつもり？」

「レイナーレ。これはアンタ達のためでもあるのよ」

「どういう事っすか？」

「アンタ達はまだご主人様に壁がある。・・・いえ、壁という表現はよくないわね。伝説の騎士にどう接すればいいのかわからないって感じかしら」

「それは・・・」

何か言おうとしたレイナーレさんに黒歌が顔を近付ける。カラワーナさんとミツテルトさんも巻き込み何やらヒソヒソと話し始めた。

（・・・私達と違って、人間であるご主人様の寿命は短い。その限られた時間をずっとその調子で送るつもり？）

（（ツ・・・！））

おおう、レイナーレさん達の目が全開になったぞ。何を言ったんだ黒歌さんや。

「・・・そうですね。黒歌の言う通りです。神崎様、私は・・・いえ、

私達は、眷属として、あなたともつと親睦を深めたいです」

え、ホントに行くの？ いや、別に不満とかそういうんじゃないけど……。

(レイナーレ。「女としても」が抜けてるわよ)

(は、はあ!? な、何を言ってるのかしら黒歌は!)

(そ、そうだ! 神崎様は我等にとつて敬愛すべき主であつて、そ、そういう不埒な感情は抱いていない!)

(そ、そうっす! ケーキバイキングって聞いて、アーンしたりとか、口についたクリームを取つてもらうとか全然考えたりしてないっすよ!)

またヒソヒソ話してる。やっぱり仲いいなこの子達。うーん、俺もあの中に入れる様にもつと仲良くならないといけないなあ。

そういうわけで、俺は四人と一緒に街へ繰り出す事となつたのだつた。玄関で靴を履きながら、俺は心の中で呟いた。

あれ、俺の思っていた展開と違う……。

……
……
……

「あー! あのシリーズの新作って今日発売だったんすか!?

ケーキバイキングの店へ向かう途中、とある家電量販店の正面に張られたゲームのポスターを見てミツテルさんがそう叫ぶ。

「うう、欲しい」

「ちよつとミツテルト。神崎様を待たせるんじゃないわよ」

「でもお姉様あ……」

「はあ……。神崎様、大変申し訳ありませんが、少しお時間を頂いてよろしいでしょうか」

「はは、構いませんよ」

「だ、そうよミツテルト」

「あ、ありがとうございます! ソツコーで買ってくるっす!」

そう言つて店内へ突撃していくミツテルトさん。あ、そういえば最近電子レンジの調子が悪いってアジアが言つてたな。ちよつと見

て行くのもありかもしれん。

「……ん？」

何の気無しに視線を向けた先……。横断歩道の向こう側に佇む人々の中に、一際存在感を放つ人物が立っていた。全身を黒の衣装で包み、こちらからでもわかる金と黒の入り混じった珍しい髪色の人物は、大型のトラックが通って行った直後にその姿を消していた。

「ご主人様、どうしたの？」

「いや、何でも無い」

うーん、何だろうこの既視感……。少し前にああいう感じの人と知り合った様な……。

（……ああ、あの人か）

あれは……。そう、Dとのゲーム直前に受けたテレビ局でのインタビューが終わってからだ。違う環境でトレーニングをすれば新たなものが見えて来ると以前読んだ本に書いてあったので、俺は冥界のある森へ足を運んだ。そして、そこで俺はとある人物と出会った。射抜くように向けられた金と黒の瞳の輝きは今もハッキリと覚えている。

いやあ、あの時ほどこの体に感謝した時は無かったわ。何せ、出会って数秒も経たずに襲って来たんだもんその人。強者がどうか、天龍を下した力がどうか色々言ってたけど、こっちとしてはたまつたもんじゃなかった。これでもかとはかりに殴られたり蹴られたりした。この体じゃなかったらボロ雑巾じゃ済まなかっただろう。けど、俺は反撃だけはしなかった。

もしかしたら、この森はこの人にとって大切な場所だったのかも知れない。そこへ無断で足を踏み入れた俺に対して怒るのは当たり前だ。ティアマツトさんの時といい、俺がトレーニングしようとする場所が決まって誰かの大切な場所になってるのはどうしてなんだろう……。

何度も殴り飛ばされたり、蹴り飛ばされている内に、不意に相手の攻撃が止んだ。フルボッコしている相手がいつになっても倒れないから不思議に思ったのかもしれない。

『どうして倒れない？』

そう投げかけて来た相手に対し、俺はこう答えた。

『この世界で最強ではないあなたでは俺の身体にささくれ一つ作れない』

何であんな馬鹿正直に答えてしまったのかはわからない。だけど、俺のその答えを聞いたその人は、納得した表情で言った。

『なるほど。私ではまだ最強にほど遠いという事か。キリスト教の介入を煩わしく思いかの地を出てからというもの、修行と見聞の為に様々な場所へ足を運んでいたつもりだったが……。世界はまだまだ広いという事か』

構えを解いたその人に、俺はまず謝罪したのだが、当の本人は何の事かと首を傾げ、この場所の事を聞いてみたら、自分には縁もゆかりも無いただの森だと言われた。

つまり、特に理由の無い暴力が俺を襲っていたのだ！

『ところで、何故お前はこんな場所に来た？』

そりゃこつちのセリフですがな！ と心の中でツツコミつつ、俺はトレーニングの為に答えた。

『それだけの強さを持ちながらさらなる力を求めるのか』

『俺は負けられない。けれど、今の俺にはまだ足りないものがある。だから……。』

『そうか。お前も求道者なのだな』

俺の答えがお気に召したのか、その人は小さく笑んだ。そして、なんと俺のトレーニングに付き合ってくれと言って来た。

『なに、ただの気まぐれだ』

それから五時間くらい、俺はその人と何度も手合わせした。参考になる様な動きがたくさんあって、とても充実したものだっただ。

別れの時、ここまで付き合ってくれたお礼をと言ったら、その人は満足そうな表情で首を振った。

『礼なら既にもらっている。・・・お前との戦いは実に楽しかった。久しぶりに元の姿に戻ってやろうかと思うくらいにな。お前との戦いそのものが、私への最大の礼だよ』

それでもと渋る俺に、その人は少し考えてこう言ってきた。

『・・・ならば勝ち続ける。何が相手だろうと、何が立ち塞がろうと、お前は勝利し続ける。覚えておけ、お前を最初に倒すのはこの私だ』
そう言つて、その人は俺に背を向けた。

『また会おう・・・フューリー。私の名前は――』

そして、最後に自分の名前を告げ、その人は森の中へと消えて行つた。というか、俺をそう呼んだという事は、俺を知つてたのだろうか？ 最初に襲われた時はどうしようかと思つたけど、最終的には色々お世話になつてしまった。総評としては・・・物騒だけどいい人・・・でいいのだろうか。

しかしまあ、手合わせそのものがお礼と来たか・・・。某百万ゴードルの男と同じ名前なのに対応が全然違うな。あつちは授業料寄越せとか言いそうだし。

「・・・というか、そもそも性別が違うしな」

「お待たせしたつす！ 無事に購入出来たつすよ！」

つと、回想している間にミッテルトさんが戻つて来た。

「それじゃあ、改めて出発にゃ」

歩き始める四人の後を追おうとして、俺は最後にもう一度だけ横断歩道の方へ視線を向けるが、当然さっきの人物の姿は無かった。

(クロウ・クルワツハさん。物騒だけど根は優しそうな“女性”・・・。また出会う機会はあるのだろうか)

「ご主人様、どうしたのー？」

「ああ、今行くよ」

俺は駆け足で黒歌達を追いかけるのだった。

第一百五十二話 家族に乾杯

曹操SIDE

「・・・機は熟した」

俺は聖槍を手に自室をでる。すると、部屋の前にはゲオルクが待ち受けていた。

「どこへ行くつもりだ」

「なに、少しばかり伝説へ挑戦しに行こうと思っただけ」

「本気・・・なのか？」

「ふ、伊達や酔狂で挑む様な相手じゃない。それはお前だってわかっているだろう？」

「わかっているからこそ、キミの考えが読めないんだ！ 曹操、キミは自分の立場を忘れてしまっているのか!? キミの行動は、既に計画から大きく逸脱しているんだぞ！ 悪魔達だけじゃなく、キミまであの騎士の影響を受けてしまったというのか!?!」

溢れ出す怒気を真っ直ぐにぶつけて来るゲオルク。彼の言う事もわかる。以前の俺が今の俺を見れば、本当に自分なのかを疑うかもしれない。

だが、俺は見てしまった。知ってしまった。運命として定められた英雄ではなく、人々の願い、想いによって生まれた英雄という存在を。「それについては済まないと思っただけだ。だがなゲオルク。超常へ挑むという俺の本質は今も変わっていないさ。ただ、俺は答えを・・・英雄という存在の本当の意味を知りたいんだ。彼に勝てば・・・いや、勝敗は関係無い。戦えば、俺はその答えに至る事が出来るかもしれない。その時、俺は本当の意味で英雄になれるんだろう」

これ以上、言う事は無い。俺はゲオルクに背を向けて歩き始めた。

「曹操・・・!」

「ついて来るなよゲオルク。たとえお前であろうと、この戦いの邪魔はさせない」

この時、俺がほんの少しでも注意を傾けていれば、ゲオルクの呟いた言葉を聞く事が出来たかもしれない。そして、これから起こる後悔

の連鎖を防ぐ事が出来たかもしれない。なかった。

「・・・そういうわけにはいかないんだよ、曹操」

曹操SIDE OUT

IN SIDE

黒歌達とケーキバイキングに行った翌日。俺は朝から兵藤君の家へと向かっていた。リアスから兵藤君へのお使いを頼まれたからだ。

『ごめんなさいね、本当なら私が持って行くべきなのに』

『用事があるなら仕方ないさ。この問題集を渡すだけでいいんだろう？』

『ええ。お兄様とグレイファイアがイツセーに丁度いいレベルの物を見つけたからぜひ使って欲しいって送られて来たの』

そういうわけで、俺の右手には問題集の入った袋。左手には散歩用のリード。その先をハティがちょこちょこ歩いている。あー、今日も癒されるわあ・・・。

・・・そういや、スコルが人の姿になれるって事は、この子も同じなのか？ スコルが元気一杯の子だから、こののんびりで大人しい子は人の姿になってもそんな感じなのかもしれないな。あれだ。ちょうど昨日のテレビ番組でみた「遊佐こずえちゃん」みたいな。

おっと、妄想している間に目的地に到着したぞ。表札も「兵藤」だし、ここで間違いないだろう。ひとまずインターホンを押して・・・と。

「はい」

数秒後、玄関の扉が開き、一人の女性が顔を覗かせた。優しそうな人だ。この人が兵藤君のお母さんだな。

「朝早くからすみません。ここは兵藤一誠君の自宅で間違いないでしょうか？」

「え、ええ、そうですけど。あなたは？」

「初めまして。兵藤君と同じ駒王学園三年生の神崎亮真と申します。今日は兵藤君に渡す物があってお邪魔しました」

「神崎亮真君？・・・あ、もしかしてあなたがイツセーの言っていた

「神崎先輩」ね！」

「え？」

「つと、いけない。お客様をいつまでも玄関先に立たせておくわけにはいかないわね。さ、どうぞ上がってちょうだい」

「いえ、お氣遣いなく。それに、今はこの子もいますので、家の中にお邪魔するのは・・・」

「がうっ」

「あら、可愛いワンちゃんね！ わかったわ。なら足を拭く為のタオルを持って来るから」

そう言つて兵藤君のお母さんは一旦玄関を閉め、数秒してからタオルを持って戻つて来た。最早招き入れる氣満々だ。うーん、ここまでされて断るのは流石に悪いよな・・・。

「では、少しだけお邪魔させて頂きます」

「ええ、どうぞ」

こうして、俺とハティは兵藤家へと足を踏み入れた。兵藤君のお母さんの案内でリビングへ入ると、そこでは一人の男性がソファに座つて新聞を読んでいた。兵藤君のお父さんで間違いないな。

「どうしたんだ母さ・・・つと、そちらの彼は？」

「イツセーの先輩よ。ほら、例の」

「・・・おお！ キミが神崎君か！ ウチのイツセーが随分と世話になつてる様だね」

「それと、えつと・・・」

「ハティです」

「ハティちゃんよ」

「くるるる」

「はは、ずいぶん可愛らしいお客さんじゃないか。母さん、そっちの戸棚にジャーキーがあつたから取つてくれないか」

「ええ」

「あの・・・」

「まあまあ、まずは座つて座つて」

あれよあれよと椅子に座らされてしまった。二人も俺と向かい合

う様に席に着く。

「はい、どうぞハティちゃん……あ、勝手に用意したけど、食べさせて大丈夫かしら？」

「え、ええ。基本的に何でも食べる子なんで」

「よかったわ。それじゃあ改めて、好きなだけ食べてねハティちゃん」
「がうっ！」

小皿に移されたジャーキーを勢いよくパクつき始めるハティ。キミ、さつき朝ご飯食べたばかりだろうに。

「きゃー、可愛い！　こういうのを見ると、ウチでも飼いたくなっちゃうわー！」

「だが母さん。ウチにはもう手のかかるヤツが一人いるからそりや無理だよ」

「……それもそうね」

「済まないね神崎君。ウチのヤツがはしやぎ過ぎて。それで、今日はどうして来てくれたんだい？」

「実は……」

俺は問題集の事を説明した。もちろん、悪魔云々の話は抜きにして。

「そうか。それはわざわざご苦労だったね。しかし……せっかくの問題集をアイツはちゃんと活用するのかねえ」

「でもあなた。最近夜遅くまで頑張ってるみたいよ。昨日も深夜の二時くらいにお手洗いに立ったら、休憩中のあの子とはち合わせたもの」

「そういえば、兵藤君は？」

「夜更かしし過ぎたせいかな、まだ寝てるみたいよ。こうして神崎君が来てくれたっていうのにあの子は……」

「い、いえ、こちらも急にお邪魔したわけですし」

「ふふ、そんな申し訳なさそうな顔をしないでちょうだい。ただの冗談なんだから」

「真面目なんだなキミは。そんなキミがどうしてウチのイツセイなんかと仲良くしてくれているのか不思議でならないよ」

「そんな。兵藤君は自慢の後輩ですよ。俺の方こそ、何で彼が慕ってくれるのか不思議に思ってますから」

俺がそう言うと、二人は目を丸くしながら顔を見合わせた。

「・・・聞いたか、母さん？ あのイツセーが自慢の後輩だとさ」

「ええ、確かに聞いたわ。・・・ねえ、神崎君。ひよつとして、あの子に弱みでも握られてるの？ もしそうなら今ここで話してちょうだい」

「ああ。内容によっては、久々に鉄拳制裁を行わないといけないからな」

ちよ、どんだけ息子さんの事信用していませんか!?

「進級して少しばかり落ち着いた様に見えるが、去年までのアイツには色々苦勞させられたからなあ。おそらく、二年生になって、学校でキミや他の子達の影響を受けて少しずつ変わってきたんだろう」

「そうね。神崎君のご両親が羨ましいわ。いつその事、一度お礼でも言いに行かせてもらった方がいいのかしら」

両親・・・か。

「そう言ってもらえるのは嬉しいですが、俺の両親は既に死んでいます。とある事件に巻き込まれて、二人一緒に」

「ツツ!?!」

俺を残していなくなった両親を恨み、俺から両親を奪った世を憎み、そして同時に、両親が遺したものの大きさを知り、俺に両親と同じ生き方をするように決意させた事件。俺はもうふっ切っているつもりだが、目の前の二人は酷く狼狽した様子で慌てて頭を下げて来た。

「ご、ごめんなさい！ 私ったらなんて無神経な・・・!」

「いいんです。そういうつもりで言ったわけじゃないってわかってますから」

やってしまった・・・。馬鹿か俺は。初対面の人に話す事じゃないだろ。この話になると、決まって余計な事を言ってしまう。考えるよりも先に口が動いてしまう。この癖みたいなものかなんとかならんだろうか・・・。

「いや、それは違う。誰にだって触れて欲しく無い部分や、知られたくない事はある。知らなかったとか、そういうつもりじゃなかったなんてのは、それに無遠慮に踏み込んでいい理由には決してならない。本当に済まない神崎君。俺からも謝罪をさせてもらおうよ」

なおも頭を下げ続ける二人。俺に対して本当に申し訳なく思っているのがひしひしと伝わって来る。

「それに、かつて家族を…家族になるはずだった存在を失ってしまった俺達だけは、同じ様に家族を失ったキミに対してその話題に触れる事は絶対にやってはいけなかったんだ」

「どういう事ですか?」

俺の疑問に、二人はようやく顔を上げた。そして数十秒の沈黙の後、重い口を開いた。

「…本当なら、イツセーには兄か姉がいたはずだった。俺達は、あの子の兄か姉になるはずだった子を…喪ってしまった」

S I D E O U T

イツセーS I D E

「ふわー…眠い…」

『大きなあくびね、イツセー』

許してくださいよエルシャさん。昨日の夜から今日の四時過ぎくらいまでずっと起きてたんですから。

『あら、私は感心してるのよ。勉強嫌いのあなたにしてはよく頑張ってるじゃない』

へへ、どうもつす。さーてと、試験まで日がねえし、とりあえず朝食食ったらまた机に向かうとしますか。

今日のスケジュールを組みながらリビングまで後少しの所まで来た所で、何やら父さんと母さんの話し声と、別の人物の声が聞こえて来た。ありや、お客さんでも来てんのかな?

「そんな。兵藤君は自慢の後輩ですよ。俺の方こそ、何で彼が慕ってくれるのか不思議に思ってますから」

え…この声って、神崎先輩!?! な、何で先輩が俺の家に来て、俺

の親と話ししてんのよ!?

「・・・聞いたか、母さん？ あのイツセーが自慢の後輩だとさ」

「ええ、確かに聞いたわ。・・・ねえ、神崎君。ひよつとして、あの子に弱みでも握られてるの？ もしそうなら今ここで話してちょうだい」

「ああ。内容によっては、久々に鉄拳制裁を行わないといけないからな」

酷い濡れ衣だ！ よし、ここは乗り込んで俺の口から直々に潔白を証明してやる！

意気揚々とリビングへ足を踏みれようとした俺だったが、次に聞かえて来た言葉に一瞬で動きを止めてしまった。

「そう言ってもらえるのは嬉しいですが、俺の両親は既に死んでいます。とある事件に巻き込まれて、二人一緒に」

「なっ・・・!?!」

先輩のご両親はもう死んでる？ しかも事件って事は・・・まさか、殺されたつてののか!? 何で、何でそんな事に・・・。

——相棒。ヤツがかつての世界でどういう存在だったのか思い出せ。

世界を脅かす敵と戦い続けた鋼の救世主達の総司令。だったら、必然的に敵の恨みや憎しみは先輩に集中してた？

——そして、ヤツに手が出せないとわかった者達が、標的をヤツ本人からヤツに近い者へと変えたとしたら・・・。

んだよそれ！ 先輩に敵わないから先輩の親を狙うとか卑怯過ぎるだろうが！

——ああ、いかにも小物が考えそうな事だ。だが、結果的にヤツの両親は何者かによって命を奪われた。もしかしたら、ヤツの目の前でな。

絶句する俺の耳に、父さんと母さんが先輩へ謝罪する声が届く。先輩は気にしていない様に言うが、もしかしたらそう装っているだけなのかもしれない。

「それに、かつて家族を・・・家族になるはずだった存在を失ってしまっ

た俺達だけは、同じ様に家族を失ったキミに対してその話題に触れる事は絶対にやってはいけなかったんだ」

「どういう事ですか？」

「・・・本当なら、イツセーには兄か姉がいたはずだった。俺達は、あの子の兄か姉になるはずだった子を・・・喪ってしまった」

「・・・えっ？」

俺に兄か姉・・・？　ど、どういう事だ？　そんな事聞いた事もねえぞ？

「私達、結婚したらたくさん子どもを作ろうって決めてたの。可愛い子ども達に囲まれて幸せな一生を過ごしたいって、二人でいつか夢を叶えようねって。だけど、数年経っても中々妊娠出来なかった。そこでようやく、私の体が妊娠しにくい体質だって気付いたの」

「もちろん、そんな事でへこたれる俺達じゃなかった。それからさらに数年して、ついに子宝を得るチャンスがやって来たんだ」

「だけど・・・。私がそういう体質だった所為で、その子は私達に抱かれる事無く天国へ行ってしまった」

当時の辛い記憶が蘇ったのか、母さんの声が震えている。どうしよう・・・。俺はこの話を聞き続けていいのだろうか。

『聞いておきなさい、イツセー。きつと、それがあなたと、あなたのご両親の為になるはずよ』

エルシャさん・・・。わかりました。辛い話かもしれないけど、聞く事にします。

「最初の子を喪って二年が経った頃、俺達に再び機会がやって来た」

「あの時のこの人のはしやぎつぷりしたら本当に凄かったのよ。狭い部屋の中を駆け回ったり、出産や育児に関する本を買い漁って、食事中どころかトイレやお風呂の中でまで読みふけてたんだから」

「おいおい、それはお前も一緒だったろう。そんな感じで、とにかく俺達は細心の注意を払って出産の為の準備を進めた。逝ってしまったあの子の分まで、精一杯の愛情を注いで育てるんだって」

「・・・でも、お医者様は再び私達に残酷な言葉を告げて来たわ。私達は、二人目の子どもも喪ってしまった」

「諦めようと思ったよ。確かに子どもは欲しい。だけど、これ以上コイツの体を、コイツの心を傷付けたくはなかった。だから、俺達は二人だけで生きて行こうって決めた」

「それでも、心のどこかで子どもを求めていたのかもしれない。二人目の子を喪つて数年後、この人と一緒になつて八年が過ぎた頃、私のお腹に三人目の命が宿つたの。そして、それがあの子・・・イツセーだつたわ」

八年・・・結婚して俺が生まれるまで八年かかつたっていうのか。「俺は覚悟を決めたよ。俺の命と引き換えにしても、この子を無事に誕生させてみせるって。絶対に、コイツに子どもを抱かせてやるんだって。何冊も本を読んだ。専門の機関にも足しげく通つた。それでも足りないと神様にも祈つた」

「そして・・・あの子は生まれて来てくれた。私達の元にやつて来てくれた。あの子の名前はこの人が考えてくれたのよ。一番、誠実に生きて欲しいと願つて“一誠”って」

「父さん・・・母さ・・・ん・・・」

俺は泣いていた。辛かつたはずなのに、悲しかったはずなのに、それでも二人が願ひ続けたから、俺はこの世に生まれる事が出来た。初めて知つたその事実と、二人の深い愛情に、俺は胸が一杯になつてしまった。

『・・・素敵なご両親ね』

はい・・・。自慢の、最高の両親です！

「・・・はは」

「神崎君？」

「兵藤君がどうしてあんなに真っ直ぐな好青年なのかよくわかりましたよ。こんな・・・こんな素敵で素晴らしいご両親に育てられたんだ。そうならないわけがない」

「・・・ありがとう。私達にとつては最大級の褒め言葉だよ」

——真っ直ぐな好青年か。ふ、随分と評価されたものだな相棒。

わざわざ言うんじゃないやねえよ！　なんか恥ずかしくなつて来たわ！

「神崎君。イツセーはね、私達にあなたの事をよく話して来るのよ。」

女の子にばかり現をぬかしていたあの子が、楽しそうに、嬉しそうに話すの。まるで、兄の自慢をする弟みたいに。私はそれを見て、天国へ行った子のどちらかが、生まれ変わってあの子に会いに来てくれた・・・なんて馬鹿な事を考えちゃったりしたわ。だから、一目でいいからあなたに会ってみたいと思っていたの」

「キミからしたら手のかかるヤツかもしれない。だが、どうかこれからもイツセーと仲良くしてやってくれ。アイツには、生まれるはずだった兄や姉の分までたくさん幸せを掴んで欲しいんだ。親馬鹿だつて自覚はしてるがね」

「もちろんです。それに、俺だけじゃない。同じ部活の仲間や、クラスメイト。兵藤君の周りにはたくさん仲間がいますから」

——相棒、話も落ちついた事だし、そろそろ中に入ってもいいんじゃないか。

・・・そうだな。よし、んじやあ行くとするか！

「おはよーっす！　ってあれ、先輩じゃないツスカ！」

俺は涙を拭い、テンション高く挨拶するのだった。

イツセーSIDE OUT

IN SIDE

「おはよーっす！　ってあれ、先輩じゃないツスカ！」

おっと、ここで寝間着姿の兵藤君の登場だ。寝癖もついてるし、起きてすぐここへ来たっぽいな。

「やっど起きて来たのねイツセー。アンタ、ちよつと目が赤いけどどうしたの？」

「な、何でも無いって。遅くまで勉強してて充血しただけだから」

「それよりイツセー。お客さんの前でなんて格好してるんだ。先に身支度を整えて来なさい」

「へーい」

姿を消す兵藤君。数分して着替えその他を済ませて再び姿を現した。

「先輩、改めておはようございます」

「がうつ！」

「うおつ、ハティもいたのか!? そ、それで、今日はどうしたんですか？」

「キミにコレを持って来たんだ」

問題集を渡すと、兵藤君は察した様に頷いた。

「ありがとうございます！ これでバリバリ勉強しますよ！」

「ああ、頑張ってくれ。では、俺はこの辺りで失礼するよ」

「あら、もう帰るの？ もう少しゆっくりしていいのよっ！」

「そうだぞ。遠慮なんてしなくていいんだ。話をしている間にちようどお昼時だし、せっかくなら昼飯も食べていきなさい」

「そうですよ！ 食べていってください！ ウチの母さん、料理だけは上手ですから」

「アンタは一言多いのよ！」

「ちよつ、顔は止めて！ せめてボディーに！」

「はは、ならご厚意に甘えさせてもらいます」

せっかくのお誘い。何より……この素敵な家族の温かな空気をもう少し感じたいと思い、俺はご一緒させてもらう事にした。

兵藤君の言葉に、彼のお母さんが容赦の無いツツコミを入れ、それを見て彼のお父さんが笑う。眩いばかりの「家族」の光景がそこには存在していたのだった。

.....

「それじゃあな、神崎君」

「またいつでも遊びに来ていいからね。あ、出来ればハティちゃんも」

「はい。必ず」

昼食後、俺は玄関で兵藤家全員からお見送りされていた。

「先輩、えつと……」

「兵藤君。ご両親を大事にな？」

「……うつす！」

「また学園で会おう」

大きく頷いた兵藤君に別れを告げ、俺は兵藤家を後にした。．．．来て良かった。心からそう思える時間だった。

同時に思う。兵藤君が危ない時は、俺の全力で彼を守らなければならぬ。あの家族の絆を、幸せを引き裂く様な外道が現れたら俺は．．．。

「誓いを破るつもりは無い。だが、その時は．．．」

S I D E O U T

ア－シアS I D E

イツセーさん達の試験まで後三日。学園から帰宅してすぐにリョーマさんが出かけようとしていた。

「あれ、リョーマさん、どちらへ？」

「ちよつと走って来るよ。済まないが留守番を頼む」

「またですか？」

「黒歌達にも聞いたが、結局、自分に出来る事を少しずつやって行こうという結論になつてな」

「ふふ。なら、私はリョーマさんに美味しく食べてもらえるよう、夕飯の準備を頑張りますね」

「そうか。今日の当番はア－シアだったな。これは頑張る理由が増えたな」

ランニングシューズを履いたリョーマさんが玄関を開ける。そして、私の方に振り返って笑顔で言った。

「行って来ます」

「行ってらっしゃい」

玄関の向こうへ消えていくリョーマさんの背中。――これが、私とリョーマさんが交わした最後の言葉だった。夕飯の時間を過ぎ、一日が経過し、二日を越え、そしてイツセーさん達の試験当日を迎えても、リョーマさんが再び玄関を開けて帰って来る事は無かった．．．。

第百五十三話 信頼を得るのは大変だが失うのはとても簡単である

イツセーSIDE

いよいよ今日は試験当日だ！ 今日まで必死こいて勉強して来た全てをぶつけてやるぜ。

俺と木場と朱乃さんが立つ前方に描かれた魔法陣。これを利用して俺達は試験会場へ行く事になっている。部長や他のみんなは、試験が終わるまで近くのホテルで待機しているらしい。

「ついにこの日が来たね、イツセー君」

「おう。お互いに頑張ろうぜ。朱乃さんも、絶対三人で合格しましようね！」

「・・・朱乃さん？」

俺の声かけに朱乃さんは応えず、代わりに傍にいたアザゼル先生に継りつく様な声で話しかけた。

「先生、やっぱり私は・・・」

「ダメだ。魔王からの推薦を蹴れば、それはアイツ等の顔に泥を塗る事になるんだぞ。こっちは俺達に任せて、お前は試験に全力を注げ」

朱乃さん、ひよつとして試験を受けたくないのか？ 合格出来るか不安になっちゃったのかもしれないな。

「大丈夫ですよ朱乃さん。俺なんかと違って朱乃さんは頭いいんですから余裕ですって！」

俺がそう言うと、朱乃さんはほんの少しだけ表情を柔らかくした。

「そう・・・ですわね。ありがとう、イツセー君。おかげで少し元氣になりましたわ」

「いえいえ、どういたしまして。・・・にしても、見送りが部長にレイヴェル、そしてアザゼル先生だけとはなあ・・・」

「あら、私達だけじゃ不満かしら？」

「そ、そんなわけないじゃないですか。ただ、その・・・出来れば神崎先輩にも何か一言励ましの言葉をもらいたかったなあ・・・なんて」

——神崎君。イツセーはね、私達にあなたの事をよく話して来るのよ。女の子にばかり現をぬかしていたあの子が、楽しそうに、嬉しそうに話すの。まるで、兄の自慢をする弟みたいに。

くそ、母さんがあんな事言うから、なんか変な感じになっちゃったじゃねえか。……でも、先輩が兄貴か。あんなすげえ人が兄とか、自慢どころかコンプレックスになっちゃまうかもしれんな。

「……それについても説明したろ。アイツは今ギヤスパーと一緒にグリゴリの神器研究機関に滞在しているとな」

なんでも、自分の神器の力をさらに使いこなすべく、先生に頼んで行く事を決めたそうだ。

『ひ、一人だと不安なので神崎先輩について来て欲しいですう！』つてアイツに泣きついたのが三日前。それからすぐに二人揃って送り込んでやったってわけだ」

「……今の、ギヤスパーのモノマネですか？　ぶっちゃけ気持ち悪——」

「じやかましい！　いいからさっさと行きやがれ！」

アザゼル先生に尻を蹴られ、俺は魔法陣に突っ込んだ。いや、だって本当に気持ちわるかったんだからしょうがねえじゃん。

「本当に……そうなんですか？」

「んだよ、木場。俺が嘘をついているとでも思ってたのか？」

「……いえ、今のは忘れてください」

木場まで変な事を言う。何だよ……二人してどうしたっていうんだ？

最後までその理由がわからないまま、俺達は試験会場へと転移するのだった。

イツセーSIDE OUT

リアスSIDE

「……行ったか」

「ええ。……それにしても酷いわね。本当はギヤスパーは研究機関へ一人で行ったっていうのに」

「勝手にアイツをへタレにしたのは悪かったと思ってるさ。だが、試験前に本当の事を言って集中力を削ぐわけにはいかんだろう。最も、朱乃は既に知っているし、あの様子じゃ木場も感じているかもしれない。騙しとおせたのはイツセーだけか」

「あ、あの、お二人とも何のお話をされているのですか?」

「悪いなレイヴェル。少しリアスと二人だけにさせてくれねえか。この話はまだ広めたくねえんだ」

「イツセー達の試験が終わって、みんなが集まった所で改めて話をさせてもらうから」

「・・・わかりました。ですが、必ず聞かせて頂きますからね」

「ええ、約束するわ」

レイヴェルが立ち去った所で、私達は再び話を始めた。

「他の連中の様子はどうか?」

「酷いものよ。アーシアと小猫はすっかり塞ぎこんじゃって。朱乃はこの三日間ロクに勉強出来なかった。フェンリルはリヨーマの帰りを待つかのように玄関の前から動かないし、スコルとハティはリヨーマの部屋の扉を何度も引つ掻いていた。そして黒歌は・・・ろくに休息もとらずリヨーマを探し続けている所為で憔悴しきっているわ」

リヨーマの突然の失踪は私達に大きな衝撃を与えた。ただの外泊ではとも思っただけれど、彼はどこかへ出かける時には誰かに必ず行き先を告げる。そのリヨーマと最後に話をしたアーシアに、彼は走り込みに行くと言ったらしい。ならば、彼は正しく走り込みの為だけに外出したのだ。連絡も無しに三日も家を空けるなどあり得ない。

「お前から連絡を受け、俺の方も手が空いている墮天使を使ってヤツを探させているが、有力な情報は上がって来ていない。もちろん、レイナーレ達にもな。こっちは俺が指示する前に動いていたが。アイツ等からも何も情報は無い。・・・自慢する気はねえが、俺の部下達は優秀だ。その部下達が発見するどころか情報一つ持って来ないってのはハッキリ言って異常だ。それこそ、この街から突然消失でもない限りな」

「・・・やっぱり、何者かがリヨーマを」

「あのバグ野郎に手を出すなんざ正気の沙汰とは思えんが。…実は、以前ヴァーリから気になる話を聞いてな」

「話？」

「ああ。英雄派の首魁、『黄昏の聖槍』を持つ曹操が、フューリーに興味を持っているとな。もしかしたら、近い内に接触を図るかもしれないもな」

「ツ！ それは…人間であり英雄でもあるリョーマを自分達の陣営に引き入れる為に？」

「いや、そういうのとは違うらしい。ただ、最近の曹操は自分と同じ目をしているとは言っていたが」

同じ目？ どういう事かしら。少しばかりその事について考えた所で、私の頭にある仮説が浮かんだ。

「…もしかしたら、曹操の目的はリョーマと戦う事なのかもしれないわ」

「戦うだと？ …いや、確かにヴァーリも未だにリベンジを諦めていない様だし、京都であの野郎とやり合った時、ヤツはフューリーの王道を越えるとか何とかほざいてやがったな」

「英雄として超常の存在を越える…曹操が英雄派を率いるのはそれが理由なんですよ？ 人間でありながら超常の存在を越える力を持つリョーマを狙うという事もありえるんじゃないかしら」

「はっ。あの霸道と外道を履き違えた間抜けが考えそうなことだ。いぞ、リアス。おかげで調査の方向性がだいぶ絞れそうだ。お前等は先に冥界に行ってる。俺はちよつと寄り道してから合流する」

「わかったわ」

先にその場を去ろうとすると、背後から声をかけられた。

「そーいや、さつき家の連中の様子を聞いたが、お前自身は大丈夫なのか？」

「三流恋愛映画の様に、泣いて喚いてリョーマが帰って来るならいくらでもそうするわ。だけど、現実ではそんな事をしても意味が無い。朱乃達にはいつも支えてもらっているのよ。こんな時にあの子達を支えられない者に『王』を名乗る資格なんて無いわ」

「・・・わかった。野暮な事聞いちゃまって済まなかったな」

そうよ。私は大丈夫。『王』である私は大丈夫でないといけない。それに、こうしてあれこれ考えを巡らせたって無駄になる可能性だけである。だってリョーマだもの。その内ヒョッコリ帰って来るかもしれないわ。その時は、心配させた罰として思いっきり抱きついてやるんだから。

「・・・だからリョーマ。帰れるのなら、早く帰って来て頂戴」

リアスSIDE OUT

イツセーSIDE

あつという間に試験は終了し、俺達は予定通りホテルに向かい、貸切状態のレストランで試験後の疲れを労ってもらっていた。

こうして終わってから思い出してみると、やっぱり筆記が大変だった。反面実技は拍子抜けするくらい楽に通過出来た。内容は単純に他の受験者と一対一で戦うだけだったが、俺は全ての勝負において、ワンパンで相手を倒してしまったのだ。

——当然だ。『覇龍』に至った今の相棒の実力にもともに対抗出来る下級悪魔なぞ存在せんぞ。

マジか・・・。俺、相手によつては『覇龍』も辞さないと思っただけだ。

——あの様な場所で使う様な力では無いぞ相棒。そもそも、相棒は『覇龍』の力を完全に発揮出来ていない。本来、『覇龍』とは至った者の全力に合わせて発現するものだが、いま相棒が『覇龍』で全力を發揮しようとすれば、お前の体は力に耐え切れず崩壊するぞ。サイラオーグ・バアルとの勝負でブラスタ―以外の武装を使用していたらお前は今頃あの世に行つていはずだ。

ファツ!? なんだそりゃ!? 聞いてた話と違うじゃねえか!

——そうだな・・・お前が『覇龍』のフルパワーに耐えられるドラゴンの体でも手に入られれば話は違うのだが。

それもう無理って言ってるよね!? 体を手に入れるとかもう意味わかんねえよ!

「イツセー。『覇龍』に目覚めて久しぶりの戦いはどうだった？」

「今その事でドライグと話してましたよ。けどまあ、ぶっちゃけあまり自覚が無いというか」

「そうか。丁度いい機会だから教えといてやるよ。実は『覇龍』の様な力の発現は、お前やヴァーリだけの特権じゃねえんだぜ？」

「特権じゃないって・・・まさか、他にも同じ事が出来る神器があるんですか!？」

「おう。システム上不可能じゃない。強力な魔物やドラゴンが封印されている神器ならばな。サイラオーグの所のレグルスもそうだ。ドラゴン以外の魔物を封印した神器では『覇龍』ではなく『覇獣』と呼ばれている。・・・そういや言っただけでなかったが、レグルスの件でちよつとばかしもめごとが発生した」

「もめごとですか？」

「同盟を結んだ事で、神滅具の所在は三大勢力のトップに必ず知らせるように義務づけられたんだが、俺どころか、サーゼクスすらレグルスの存在を知らされていなかった。これは明確な同盟違反という事で、バアルを筆頭とする大王派は魔王派の連中から激しく追及されているみたいだぜ。あの馬鹿真面目なサイラオーグが故意に隠すわけねえ。大王派のヤツ等に言われて渋々従っていたが、お前との戦いでついに我慢出来なくなつたんだろうよ」

ふーん、そんな事があつたのか。派閥争いって怖いなー。

「・・・くだらない」

俺がそんな感想を浮かべていたその時だった。背筋が凍りそうなほどの冷たい声がレストランの中に広がって行つた。その声を発したのは・・・一番端の席に座っていた小猫ちゃんのお姉さんだった。「気分転換だと無理矢理連れてこられた揚句、神滅具の講義？ 私にはこんな事をしてる暇は無いっていうのに・・・！」

な、なんか知らんが滅茶苦茶ご立腹みたいだ。というか、今になって気付いた。その隣の小猫ちゃんも、そのまた隣のアーシアも出された食事に全く手をつけていない。アーシアはともかく、小猫ちゃんがこんな美味しい料理を食べないなんておかしい！

「・・・そうだな。そろそろ本題に入るべきか。リアス」

アザゼル先生に呼ばれ、部長が席を立つ。必然的にみんなの視線が部長に集中する。

「みんな、落ちついて聞いてちょうだい。・・・実はリョーマが――」

部長がそこまで言いかけたその瞬間、形容しがたい違和感が俺を襲った。・・・この全身を舐めるかのような感覚。同じ風景なのに同じじゃないこの感じ・・・。まさか・・・！

「先生、これは・・・！」

「どうやらめんどくせえ事になったようだな。ほれ、アイツ等もお出ましだ」

先生の視線の先・・・そこにはヴァーリちゃんにルフェイ。そして・・・オーフィス!?

「ヴァーリ、説明しろ」

「必要あるの？ あなただつてわかってるんでしょ、アザゼル？」

「・・・英雄派か」

「正解。あなた達は彼等の用意したフィールドの中にいるわ。英雄派ナンバー二、『絶霧』のゲオルクの手でね」

「京都の時と同じってわけか。それで、どうしてお前も巻き込まれてるの？ ぐ丁寧におーフィスまで連れて」

「ついに曹操が『彼』に接触するって聞いたから動こうとしたんだけど上手く動けなかったの。なら直接聞いてやろうと思って来たらしいでとばかりに跳ばされちゃったってわけ」

「ってわけ」

「繰り返さんでいいオーフィス。まあいい、お前等、ひとまず外に出るぞー！」

「は、はいー！」

小猫ちゃんのお姉さんがアジアを背負うのを確認し、全員でレストランを飛び出す。くそ、人が一人もいねえ。これも京都の時と同じだ。

レストランからロビーへと足を踏み入れた俺達の前方に二人の男が立っていた。漢服とローブ・・・見間違えるはずがねえ。アイツ等

は……!

「曹操! ゲオルク!」

「京都以来だな、赤龍帝」

ゲオルクが俺の名を呼ぶ。それに対し曹操は一言も発さずジツとこちらを見つめている。……おかしい、俺の知る曹操は有利であろうとピンチであろうと、常に笑みを崩さない男だった。それなのに、今のアイツの表情は『無』そのものだ。俺達どころか、世界そのものに興味を失ったかのように。

「やはりオーフィスを連れ出したかヴァーリ」

「計算通りとでも言いたいのかしら。最早隠す事もせずこの子をつけ狙う輩が一杯出て来たから一緒に連れて来たのよ。ねえ、曹操?」

ヴァーリちゃんの声にも全く反応しない曹操。

「我々にはオーフィスが必要だった。けれど、お前に連れられ、外の世界を知った今のオーフィスは必要無い」

「ふうん、だから『龍喰者』なんて奥の手を用意しているってわけね」「ツ……! 既にそこまで掴んでいたか。そうだ、俺達は『龍喰者』を使い無限を食う。その為に準備を進めて来たのだ。始めるぞ曹操」
「……好きにしろ」

吐き捨てる様に言う曹操に溜息を吐きつつ、ゲオルクがロビー全体に広がるほどの巨大な魔法陣を出現させた。その魔法陣からどす黒く禍々しいオーラが噴き出すのを見た瞬間、俺の心身を底冷えさせるかのようなおぞましいプレッシャーが襲って来た。

——この気配は……!?

『ドラゴンのみに向けられた狂おしいまでの悪意……。気をつけてイツセー! コイツは……!』

ドライグとエルシャさんの声と同時に、*ッ* *そいつ* は魔法陣の中からゆつくりと姿を現した。十字架に張り付けられ、締め殺さんばかりに体を包む拘束具に、同じく拘束具で塞がれた目の辺りからは血涙が流れている。これじゃまるで罪人だ。

上半身に続き下半身も露わになる。墮天使を思わせる上半身と違い、下半身は鱗に覆われたドラゴンの様な姿だった。そして、上も下

も、顔も、背中の羽にすら太い釘が何本も打ち込まれていた。

「コイツは・・・!? テメエ等、なんてヤツを・・・! コキユートスの封印を解いたのか!？」

「せ、先生、あのヤバそうなドラゴンは一体・・・」

尋ねる俺に先生が答える。始まりの男女、アダムとイブに知恵の実を食べる様そのかした蛇。その所業が聖書の神の怒りを買ひ、神は蛇・・・つまりドラゴン嫌いになった。あのドラゴンは、そんな神の悪意や毒、呪いを全てその身に受けた。その呪いは究極の龍殺しであり、このドラゴンそのものが凶悪な龍殺し。ドラゴン以外にも影響を与え、ドラゴンを絶滅させかねないとの理由で、コキユートスの奥深くに封印されていた存在。その名は・・・。

『龍喰者』サマエル。それがこの罪深きドラゴンの名前だ」

「サマエル・・・」

コイツは・・・ヤバイ。龍殺しなんざ、俺にとっては天敵じゃねえか!

「何故だ! サマエルを解き放つなんざハーデスが許すはずが・・・まさかあの野郎!」

「ハーデスからは召喚の許可をもらっている。そうでなければこの様な存在を呼び出せるはずが無い」

「ざっけんなよあの腐れ骸骨! ゼウスが俺達との協力体制に積極的なのがそんなに気に食わないってのか!」

ブチ切れるアザゼル先生を尻目に、ゲオルクがサマエルに何やら指示を出す。

「さあ、喰らうがいい」

その瞬間、視認出来ない速度で俺達の横を何かが通り過ぎていった。すぐさま振り返った俺の目に映ったのは、さっきまでオーフィスが立っていた場所を包み込む黒い塊だった。サマエルが・・・オーフィスを飲み込んだ!?

塊から伸びる触手の様なものがサマエルの口元へと続いている。ひよつとして、あれは舌か! 直後、何かを飲み込む様な音と共に、触手が異様な盛り上がりを見せる。コイツ・・・オーフィスから何かを

吸い上げてるのか!?

「オーフィス! 返事しろ! おい!」

「みんな! その塊を破壊するのよ!」

部長の指示でみんな一斉に動く。だが、木場の聖魔剣も、ヴァーリちゃんの『半減』も、さらには必殺の部長の滅びの魔力ですらも塊を破壊どころか傷一つつけられなかった。

「素手のヤツは攻撃するなよ! イッセーもだ! アイツはお前にとって究極の天敵だ! 死にたくなければ絶対に近づくな!」

「曹操、俺はサマエルの制御で動けない。だから・・・」

ゲオルクの言葉を遮るように、曹操が聖槍を片手に前にでる。あのボウリングみたいなの七つの球・・・くそ、いつの間にか禁手も発動させてやがる。

「邪魔をするなら・・・!」

「——輪宝」

ゼノヴィアがエクス・デュランダルで曹操に切りかかろうとした刹那、玉の一つが姿を消し、派手な音と共にエクス・デュランダルが砕け散った。

「なっ・・・!?!」

「なら私が・・・!」

「合わせるわりアス!」

「——女宝」

部長と朱乃さんが魔力による攻撃を撃とうとするが、さっきとは別の球が放った光が二人を包み込み、二人の手元に溜まっていた魔力を霧散させた。

「気をつけろお前達! その七宝はそれぞれに異なる能力を——」

俺達への警告を発するアザゼル先生。その腹を曹操の槍が貫く。は、速い! 人間の出せるスピードじゃねえ!

「ぐふ・・・!?!」

「せ、先生!」

「アーシア、治療を!」

下がった先生をアーシアが神器で治療する。何なんだよコイツ。

京都で戦った時とは雰囲気まるで違うじゃねえか！

「ぐっ……はあ……。へ、今日はお遊びは無しってか？　これがお前の大好きな覇道のやり方ってわけか？」

「……どうでもいい」

「あん？」

先生の挑発を、どうでもいいと切り捨てる曹操。無表情なんてもんじゃないねえ。まるで人形みたいな顔をアザゼル先生へと向ける曹操。

「もう……霸道などどうでもいい。『彼』に……俺の挑戦を受けてくれた神崎君へあの様な事をしてしまった俺など……あなたが言った様にただ外道だ。なら、外道は外道らしく正義の味方に立ち塞がってやるさ」

「曹操、あれは……」

「黙れ。次に何か言ったら殺す」

無表情から一転、射殺さんばかりに睨みつける曹操に気圧されたようにたじろぐゲオルク。てか待て、なんでコイツから先輩の名前が出るんだ!?

「どういう事、曹操！　リョーマの失踪はやっぱりあなた達が関係しているの!？」

失踪？　……し、失踪!?!　神崎先輩が!?!　ど、どういう事ですか部長お!?!

「……ゲオルク。お前が説明しろ。口にする気にもならん」

「騎士殿には退場してもらったよ。この世界……いや、この時代からね」

そして、ゲオルクから語られた真相に、俺達は愕然とするのだった。

イツセイSIDE OUT

とある廃墟の奥。そこに傷を負った二人の男女。そして、その男女を囲む数人の人物がいた。

「くっ……！　昨日悪魔側の襲撃を切りぬけたばかりだというのに！」
体を動かし過ぎたのか、男の腹部の包帯が巻かれた部分から血が流れ始めていた。それに気付いた女が泣きそうな声を発する。

「正臣、血が・・・！」

「大丈夫。それよりクレériaは下がっているんだ」

女を下がらせ、男は剣を構える。それは、教会のエクソシストだけが持つ事を許された光の剣だった。

「手負いの状態で俺達と戦うつもりか、正臣」

「轟木・・・！　とうとうキミ達が出て来たのか。ならあの人もいるんだな？」

「紫藤さんの事か？」

「頼む！　紫藤さんと話をさせてくれないか！　あの人ならきつとわかって・・・！」

「残念だが、今回の任務はあの人から志願したものだ。あの人にとって、お前はもう肅清対象に過ぎんのだよ」

「何故だ！　僕は、僕達はただ愛し合っているだけだというのに！」

「それが罪なのだど何故わからん。最も・・・悪魔側はそれ以外に理由があるようだが」

「ツ・・・!?!」

敵意の込められた視線を向けられ、女が身を縮ませる。

「まあ・・・それは我等には関係無い。さあ、正臣、これが最後の選択だ。我等の元に戻るか。それとも、その悪魔と共に死を迎えるか」

「どちらもお断りだ！　僕は生きる！　生きて、クレériaと添い遂げるんだ！」

「正臣・・・」

「・・・残念だよ、正臣。やれ」

轟と呼ばれた男の指示で、残りの者達が光の剣を手に二人へ襲い掛かった。

（クレériaは・・・彼女だけは絶対を守るんだ！）

満足に剣も振れない今、男が取った行動は、愛する人の盾になるべく襲撃者達の前に立ちはだかる事だった。

「いや、正臣——！」

そして、輝く刃が男の体を貫こうとした正にその時だった。

「——何をしている」

その声を聞いた瞬間、襲撃者達は自らの心臓に突き立てられた剣を幻視した。まるで、この男を貫けば、次は自分達だと思わせんばかりに、襲撃者達の頭に鮮明に、鮮烈に、強烈に「死」をイメージさせた。

男が、女が、轟が、襲撃者達が一斉に振り向く。廃墟の入口。そこから一人の人物が静かに近付いて来ていた。崩れ落ちた場所から注がれる月光が、その人物の鮮やかな青色の髪を照らす。

(綺麗な色だ・・・)

それを目にした途端、こんな状況でありながら男の胸に言い様の無い安心感が溢れ。緊張の糸が切れた男は、その場でゆつくりと意識を失うのだった。

第百五十四話 堕ちた英雄

季節が冬に近づいている所為か、最近日の入りになるのが早くなっている気がする。家を出た時はまだ明るかったのに、こうして三十分走っている間に辺りはすっかり暗くなってしまう。けどまあ、暗くなるのが寒くなるのが今の俺は止まらんぞ！

『おー。随分テンション高いなあ』

あ、オカンじゃないですか。なんか久しぶりですねこうやって話すの。

『そうやなあ。近頃はアンタから相談される事も少なくなってしまうたしなあ。うう、なんだか捨てられた気分や』

いやいやいや！ 恩人相手にそんなわけないじゃないですか！

『わかっとする。ちよつとイジワル言ってみただけや。アンタ、安易にウチに頼りたくないんやろ？』

そういうつもりじゃないです。ただ、今の自分に何が出来るか。誰かに世話になってばかりじゃなく、自分のすべき事をやって行こうと思っただんで。

『そうか。．．．うん、よう言うた。ならウチも、アンタの決意を尊重して、余計なお節介は控える事にするわ。アンタが本当にダメだと思つた時、自分一人じゃどうしようもなくなるような事に直面した時以外は、黙って見守らせてもらう事にするで』

それは．．．．．いえ、それくらい追い込んでもらわないと意味がないかもしれませんね．．．すみません。今まで散々お世話になっておいて調子のいい事を。

『ええんよ。若い子の成長を見守るんはオバちゃんの義務であり特権なんやから．．．あ、言うとかけど我慢するのはアンタに關係する事だけやからな。もしアーシアちゃんから助けを求められたら全力で助けさせてもらうで』

うん、それは仕方無い。というか当然ですな。

『それでこそ『アーシアちゃんを守る会』会長や！』

サムズアップしているであろうオカンの声が遠くなっていく。．．

さてと、脳内会話している間にいつもの公園の近くまで来てしまっていたわけだが、丁度いいしここで少し休憩するか。ここは知り合いとのエンカウント率が高いから、また誰かに会えるかもしれないし。

そう思い公園内へ足を踏み入れると、少しして俺の前に一人の人物が姿を現した。

「やあ……。ここにいれば会えると思っていたよ」

「あなたは……」

その学生服＋民族衣装という珍しい格好は忘れられたくても忘れられない。しかも、今日は前回見なかったカツコいい槍まで持つてる。この寒空の下でコートも着ないなんてレイヤーさんの鑑だな。

「そこにベンチがある。話をさせてくれないかな」

こうして、俺は謎のコスプレイヤーこと曹操（仮）さんと二度目の出会いを果たしたのだった。二人でベンチに腰掛け、しばし無言の時間を過ごした後、曹操（仮）さんが静かに口を開いた。

「……京都では俺の仲間が世話になった様だな」

京都？ 何の話だ？ 確かにオカンの指示で鬼畜ペロリスト団をぶちのめしに行ったけれど、レイヤーさんと何かした憶えはないぞ。

「済まないが、記憶にない」

「そうか……。(キミにとつては記憶に残らないほど矮小な相手だったという事か。キミの戦いを間近で見た者の中には、未だ恐怖から立ち直れていない者や逃亡してそのまま戻って来なかったヤツもいたのだがな)」

「あなたは何故ここに？ そんな槍まで持つてどうしたんだ？」

この辺りで今日イベントをやってるって話は聞いていない。まさか、前回みたいにな人でコスプレして家の周りを歩いてたりしてたんだろうか。警察に見つかってたら間違い無く職質コースだったろうに。

「神崎君。……俺と勝負してくれないか」

「……どういう意味だ？」

「言葉通りさ。今、この場で俺と手合わせして欲しい」

いや、そんなしれつと言われても困るんですけど。というか理由を言ってくださいよ理由を。

『鋼の救世主』・・・読ませてもらったよ。キミの戦いが・・・キミの王道の集大成がそこには書かれていた。だからこそ、俺は覇道を歩む者として、キミとの戦いを望む。そうすれば、俺は答えを・・・英雄という存在の真の答えを掴みとれるかもしれないんだ」

ツ・・・!? そうか。ここにも俺の罪の犠牲者がいたのか・・・! なら、俺には彼の求めに応える義務がある。それが俺の償いなんだからな。

「わかった。その勝負、受けよう」

俺の答えに、曹操（仮）さんは最初驚いた様に目を丸くしたが、すぐに嬉しそうな笑みを見せた。

「感謝するよ。・・・こうしている時間すら惜しい。早速始めさせてくれ」

曹操（仮）さんがはねる様にベンチから立ち上がり、広場の方へ向かう。俺もその後が続いた。

「能力は使わない。槍術のみで挑ませてもらう。そうでなければ、人間の身で至ったキミを越える事など出来はしない」

槍を構える曹操（仮）さん。瞬間、アルllヴアンセンサーが激しく反応し始めた。この人・・・ただのレイヤーさんじゃない!?

・・・いや、考えようによってはこれはチャンスだ。クロウさんの時の様に一方的にボコられるかもしれないが、精々勉強させてもらう事にしよう。・・・あ、でも始める前にどうしても彼に言っておきたい事がある。

「始める前にこういう事を言うのもなんだが、上着だけでも脱いではくれないだろうか」

彼には何の非も無いのは重々承知しているのだが、どうしてもあの格好を見ると鬼畜ペロリストau派を思い出してしまう。無意識に力を入れ過ぎたり手元が狂ったりして大怪我させちゃうかもしれない。

「もちろん、あなたがそれをよしとするならばの話だが」

服を脱げとか一歩間違えたら変態だよな。どうか通報だけは勘弁してください。

S I D E O U T

曹操 S I D E

ついに・・・ついにこの時を迎えた。間違い無く、俺の目の前にいるのはフューリーだ。俺は、今からこの男と戦う。覇道の先・・・英雄の答えを知る為に。

(まさか、快諾されるとは思っていなかったがな)

俺は英雄派であり『禍の団』の一員。つまり、彼の大嫌いなテロリストだ。顔を合わせてすぐに切りかかられてもおかしくなかったはずだが、彼はそれをしなかった。

その疑問の答えを、俺は次の瞬間に知る事となった。

「始める前にこういう事を言うのもなんだが、上着だけでも脱いではいくれないだろうか」

耳を疑ったが、彼が意味も無くその様な事を言うはずが無い。その真意を探るべく、俺は考えを巡らせた。

(この漢服。そしてこの学生服は英雄派の証ともいえる。それを脱げという事はつまり、英雄派としての俺を望んでいないという事なのか)

英雄派としての俺でなく、あるがままの俺で挑んで来い。彼はそう言いたいのかもしれない。・・・なるほど、勝負を快諾した理由もそこに通じているという事か。

「もちろん、あなたがそれをよしとするならばの話だが」

「それでキミが本気になってくれるのなら」

俺は迷い無く学生服を脱ぎ去った。戦闘用の黒いボディスーツ姿となった俺を見て神崎君が目丸くする。

「その傷は・・・」

「ああ、これかい。どれも最近ついたものさ。なんせ、人間である俺が、能力を使わず槍だけで化物達とやり合ったんだ。こうなるのも当然だよ。まあ、おかげで以前の俺よりも格段にマシになったと思うけ

どね。その証拠を、今からキミに見せるよ」

さて、おしやべりはここまでにしておこう。伝説の騎士、超常を越えし英雄よ・・・俺は、俺の全力でキミに挑戦する！」

「いくぞフューリーー！」

槍を振り回しながら神崎君へ向けて走る。そのまま遠心力を利用して上段から一気に槍を振り下ろす。

「ツ・・・!?!」

それを横に跳ぶ事で回避する神崎君に俺はさらなる追撃を行う。槍を支柱にし、連続で回し蹴りを叩き込むが、神崎君は両腕を組んでガードする。俺の蹴りが神崎君の腕に直撃するが、彼のガードは鉄壁のごとくそれを防ぐ。次の瞬間、俺の足を激痛が襲った。

（固すぎる・・・！ 攻撃した俺がダメージを受けるなど・・・人間の体の固さではない！）

神崎君の防御力については俺も知っている。だが、それはあの鎧のものではないのか。まさか・・・彼の肉体そのものの防御力だということか。

（だとしたら、こちらの攻撃は全て・・・）

・・・何を弱気になっている。相手は二天龍を下した男だ。こんな展開になったっておかしくは無いだろう。それに、彼はまだ武器すら手にしていないんだぞ。

（正攻法が王道だというのなら、搦め手で攻めるのが俺だ。伝説であろうと、人間ならばつけいる隙は必ずあるはずだ！）

槍で地面を抉り、大量の土を神崎君へ向けて弾き飛ばす。目くらましにすらならんだろうが、一瞬でも時間を作れば十分だ。

「でやああああああ!!」

裂帛の気合と共に、槍を縦横無尽に突き出す。反応が遅れた神崎君に穂先が突き刺さろうとした刹那、甲高い音と共にその刃が受け止められる。それは、彼の持つ剣によって防がれた結果だった。あの一瞬で武器を出現させたというのか・・・！

「く、くく・・・」

本気の攻撃を防がれたというのに、俺は自分でも驚くほど悔しさを

感じていなかった。それよりも、彼に武器を持たせたという結果に心が沸き立つ。これでいい。これでようやく彼の相手として認められたのだ。

(楽しいな。ああ、本当に楽しいよ神崎君・・・)

思えば、何のしがらみも無くこの槍を振るえるのは初めてではないだろうか。英雄派もロンギヌスも関係無い。今この場にいるのは、ただの男とただの槍だ。

俺の感情に中てられたのか、槍が淡く発光する。そうか相棒、お前も楽しいか・・・!

「さあ、勝負はここからだ・・・」

そう言つて俺が槍を構えたその時だった。聞くはずの無い声が俺の耳に届いたのは。

「・・・いや、遊びは終わりだよ曹操」

曹操SIDE OUT

IN SIDE

やべえ・・・この人強い。動きも速いし一撃も重い。何より、俺以外見る必要も無いと言わんばかりにギラギラした目がめっちゃ怖い！ おい、誰だよこの人をレイヤーさんとか言つてた間抜けは！ ビリ過ぎてオルゴンソード出しちゃったじゃないか!

「さあ、勝負はここからだ・・・」

ねえ、これ手合わせですよね!? 野郎、ぶっ殺してやる! なんてつもりじゃないですよね!?

「・・・いや、遊びは終わりだよ曹操」

その声はあまりにも突然だった。俺と向かい合う曹操(仮)さんの後方から、一人の男性がゆっくりと姿を現した。

「こうして顔を合わせるのは初めてだな騎士殿。俺はゲオルク。『禍の団』英雄派に属している」

ツ!? 来た! 鬼畜ペロリスト来た! ここで潰す! なんて

言ってる場合じゃない。何でa u派がこんな所に・・・!?

「ゲオルクウ・・・!!」

「もういいだろう、曹操。そろそろキミには本来のキミに戻ってもらいたい」

「ふざけるな。手出しはするなと言ったはずだぞ」

「フューリーと勝負するというキミの願いは叶ったじゃないか。人払いの結果まで張つて。．．．まあ、勝負に集中するあまり、俺達がここに来た事にも気付いていなかったようだがな。以前のキミならばすぐに気付いていただろうに」

気付けば、俺と曹操（仮）さんは大勢の人間に囲まれていた。その全員が同じ格好をしている。こいつらもa u派か！

「勝負はまだついていない。俺は英雄派の曹操ではなく、挑戦者曹操として神崎君と戦うのだ．．．！」

．．．え？　ちよ、ちよつと待ってくれ。曹操（仮）さんが．．．a u派？　そんな．．．この人も鬼畜ペロリストの仲間だったのか！？　英雄派Ⅱコスプレサークルじゃなくて、a u派Ⅱ鬼畜ペロリストだったっていうのか．．．！

「そうか．．．そういう事だったのか」
シヨックだわ。ちよつと変わってるけどいい人だと思ってたのにな。

S I D E O U T

曹操S I D E

ゲオルクとの会話に夢中になっていた俺は、そこでようやく気付いた。神崎君が俺を見る目の色が一変していた。

「そうか．．．そういう事だったのか」

明らかな失望、落胆、幻滅の視線が俺を射抜く。

——挑戦だなんだと言っておいて、最初から騙し討ちするつもりだったという事か。

「違う．．．。違うんだ神崎君。俺は、俺は純粋にキミとの勝負を．．．！」

まるで恋人に浮気がばれた男のように、俺は言いわけにもならないような事を口走り続けた。

「本当であれば曹操との戦いで疲弊した所を狙うつもりだったんだがな」

「黙れと言っているだろうゲオルク！」

「いいや、黙らないさ。この千載一遇のチャンスを逃すつもりはない。始めるぞ！」

瞬間、俺と神崎君の足下に巨大な魔法陣が出現した。この紋様……まさか!?

「ゲオルク！ お前、ここでアレを……時空転移を使うつもりか!？」
「その通りだ曹操。騎士殿、突然だが貴殿には計画の邪魔にならぬよう、しばしの間退場して頂く。貴殿達が戦っている間に下準備は済ませてもらっている。発動までもう十秒も無い」

「ちいつ！ 神崎君、すぐにこの魔法陣から離れろ！」

「それも想定済みさ」

突如として神崎君の体を鋼の糸が包み込む。咄嗟の事に反応が遅れ、気付けば俺の体も同じ様に拘束されていた。くそ、これでは『馬宝』も使えん……！

「曹操!? 何をしている！ 動きを封じるのはフューリーだけでいい！」

ゲオルクが放った怒声の先で、メンバーの一人が手から糸を出しながら俺を睨んでいた。この糸はアイツの神器によるものか……！

「うるさい！ 俺が信じた、俺が憧れた曹操はもう死んだ！ こんな腑抜け野郎、フューリーと一緒に消えちまえばいいんだ！」

「止めるゲオルク！ このままじゃ曹操が！」

無駄だ。確かこの術式は一度発動したら止める事は出来なかったはずだ。このままでは、俺は神崎君と共に、どこもしれない時の向こうへ消えてしまうだろう。

「……え？」

魔法陣の光がさらに激しくなる。それをまるで他人事の様に眺めていた俺の体が、トンツと何かに押され、魔法陣の外へ飛び出した。一瞬の事に何が起こったのか処理が追いつかない俺が見たのは……封じられていた右手をこちらに向かって突き出していた神崎君の姿

だった。彼が俺を魔法陣の外へ突き飛ばしたのだと、その時になつてようやく理解した。

「どうして……どうして俺を……!? 神崎君！」
「……これでいい」

満足そうな微笑みを残し、神崎君は魔法陣の向こうへと姿を消した。何故俺を助けた？ 何故キミは満足そうに消えていった？ 俺にはわからない。

だが、これだけは言える。俺は……神崎君への挑戦権を永遠に失つたのだ。騙し討ちの卑怯者が、誇り高き騎士の前になど立てるはずが無い。

この瞬間、俺の覇道は終わりを迎えたのだった。

第百五十五話 騎士（笑）の時間旅行

（やべえ・・・吐きそう）

ペロリスト達の魔法陣に巻き込まれた俺は、猛烈に込み上げて来る吐き気と必死に格闘していた。周囲の風景がぐにやぐにやになり、自分が立っているのかすらわからない。

『なのはは・・・一人でも大丈夫なの』

『俺は桜ちゃんを救う！ その為なら・・・！』

『私達で帝国を・・・あの大臣を討つ！』

しかも、さつきからひっきりなしにそんな声が色んな方向から聞こえて来ていた。なんか助けて欲しそうな感じの事を言ってるけど、それは俺も同じですわ。

『助けて・・・武ちゃんを助けて！』

（助ける！ 助けますから、先に俺を助けてください！）

そう心の中で叫んだ瞬間、俺の視界は閃光に包まれるのだった。

S I D E O U T

イツセーS I D E

「・・・以上が、三日前の顛末だよ」

嘘だろ・・・。先輩が、コイツ等の罠に嵌って消えちまったただなんて・・・！

「第一級禁術 “時空転移”・・・この術を受けた者は文字通り時間と空間を越えるらしい。あまりにも複雑過ぎて俺でもそこまでしかわからなかったがな。過去へ遡ったのか、それとも未来へ行ったのか。それすらも確かめようがない」

「どういう事だゲオルク。禁術は旧魔王の時代に作られ、その危険性から全て抹消され今の時代に遺されているはずがない。それを、何故お前等の様なペロリストが持っている！」

旧魔王時代の遺物!? 先生の言う通り、何でコイツ等がそんなヤバそうな物を手にしてるんだよ!?

「決まってるわ。・・・あの男の仕業ね」

殺意を全開にしたヴァーリちゃんやんがゲオルクを睨みつける。たぶん、アイツを通して「あの男」ってヤツに向けているんだらうけど。「ヴァーリの言う通りさ。この術式が記された本はある人物によって俺達にもたらされた。最も、俺は直接目にしてはいないし、本を受け取った仲間も、数日後に変死してしまい、今となつては確かめようがないがな」

「そうかよ。だが生憎だったなゲオルク。アイツは時を渡る術を持っているはずだ。例えばどんな時代に飛ばそうが、その内戻つて来るだらうぜ」

あ、そつか！ 先輩、二天龍の時代からこの時代に来たんだもんな！ それならきつと・・・！！

そんな俺の希望を、ゲオルクが切つて捨てる。

「もちろん、俺達もそれは承知していますよアザゼル総督。だが、それは彼が自分の意思で時を渡れたらの話だ。聞けば、騎士殿がこの時代に現れたのは自分の意思ではなかったそうじゃないか。本当に自分の力で時を越えられるのなら、俺達に飛ばされた段階で戻つて来てくれるはずじゃないのかな？」

「ツ・・・。テメエ、駒王協定で話した内容を何故知っている」

「何処の誰かは知らないが、迂闊な書き込みほど恐ろしいものはないという事だ」

「書き込みだと？ 何の事を言つて・・・」

そこまで言いかけた所で、アザゼル先生の顔が一変した。目を見開き、大量の冷や汗を流し始める。

「せ、先生？ 心当たりが？」

「ハ、ハハハハ。ナンノコトカサツパリダゼ」

「そして、騎士殿は戻つて来ていない。なら答えは一つ。騎士殿単独で時を渡る術は無いという事だ。それはつまり、彼がこの時代に戻つて来る確率は・・・限り無くゼロだと言える。理解出来たかな？ 騎士殿は、もう二度とあなた達の所へは戻らないという事だ」

「嘘・・・嘘よそんなの・・・」

「もう二度と、先輩に会えない・・・？」

ゲオルクから突き付けられた現実には、仲間達が絶望の表情を浮かべる。くそ、信じねえ！ 俺は信じねえぞ！ あの人が・・・神崎先輩がテメエ等なんかにやられるもんかよ！

「・・・私の所為です」

「アーシア？」

「私が・・・私があの時リョーマさんを止めていればこんな事には・・・！ 私が・・・私が・・・！」

何度も「私が・・・」と繰り返すアーシア。違う。それは違うよアーシア！ キミは何にも悪くない！

（予想はしてたが、アーシアが一番ヤバそうだな。罪悪感でろくに思考が働かない状態になってやがる）

「饒舌だなゲオルク。神崎君に一矢報いた事がそんなに嬉しいか」

「元々はキミが考えた事じゃないか曹操。直接戦えば勝ち目は無い。ならば倒すのではなくどこか別の時代で天寿を全うしてもらおう。人間である騎士殿唯一の弱点ともいえる“寿命”を利用してな」

「ふん、やつぱりお前には外道がお似合いだな曹操。それでよくフューリーに挑戦するだなんて口に出来たもんだ」

「違う！ 俺は、俺は英雄の答えを・・・神崎君に俺の覇道を認めさせたかっただけなんだ・・・！」

曹操が絞り出す様な声で先生に反論する。・・・わかったぞ曹操。どうしてお前がそこまで先輩に拘るのか。

（お前は先輩に認められたかったんだ。自称じゃなくて、本物の英雄である先輩からお前も英雄なんだって認められたかったんだろう？）

その気持ちは・・・俺も何となくわかるよ。だがな・・・。

「・・・先輩がお前を認めるもんかよ。テロリストなんかになって、九重や八坂様を傷付けて、たくさんの人に迷惑をかけたお前を、先輩が認めるわけがねえ。お前は最初から間違ってるんだよ曹操！」

「よく言ったイツセー。その通りだ。曹操、今のお前は所詮テロリスト。そんなお前が今さら正道を歩めると思うなよ」

ほんの少し。もうほんの少しだけ先輩と早く出会っていたら、コイツもテロリストなんかになってなかったかもしれない。でも、それは

どこまでいってもIFの話だ。コイツ等がこれまでやって来た事は、決して許されるもんじやないんだから。

「お前等、オーフィスの事はひとまず置いとけ。まずはコイツ等を……」

アザゼル先生が指示を出す為に振り向いた瞬間、口を嚙む。その視線の先では、全身からどす黒いオーラを発している小猫ちゃんのお姉さんがいた。危険な色に染まったその目は、見つめるだけで人を殺してしまいそうなほど恐ろしさを秘めていた。

「……そっか。そうなんだ。アンタ達が私からご主人様を奪ったのね。にやはは。なーんだ。そういう事なら早く教えなさいよ」

「ね、姉様……?」

「――殺す」

刹那、疾風の如く飛び出した小猫ちゃんのお姉さんが、曹操の顔面に向かって気で覆った拳を全力で叩きつけた！　すげえ、木場並みのスピードだったぞ。

攻撃自体は聖槍で防がれた。それでも曹操の体は十メートル以上後退していた。直撃していたら、間違い無く死んでいただろう。お姉さんもそのつもりで攻撃したんだ。

「おかしいな。ねえ、何で死なないの？　アンタの所為でご主人様はいなくなっちゃったのに、何でアンタはのうのうと生きてるの？　死になさいよ。今すぐ死んでご主人様に謝りなさいよおおおおおおお!!!」

「――馬宝」

お姉さんが追撃しようとしたその時、曹操の背後の球体がお姉さんでは無く小猫ちゃんの方へ飛んで来た。そして次の瞬間、お姉さんの眼前に小猫ちゃんが現れた。

「え……?」

「白音っ!」

無理矢理に攻撃を逸らせたお姉さんがロビーの床に突っ込む。おかげで小猫ちゃんは無傷だったが、溜めていた気の余波を受けたのか、お姉さんはダメージを負っていた。

「任意の相手を転移させる力だ。あの時、この力が使えれば・・・」
「御託はいいい！ テメエ！ お姉さんに小猫ちゃんを攻撃させようとしたな！」

「はは、外道らしいだろ？ もう、何をしようとしても躊躇いが微塵も湧かない。だからこういう事も出来るのさ」

「くそ、捨て鉢になった事で逆にめんどくせえヤツになっちまったみてえだな」

先生の言いたい事はわかる。曹操のヤツ、京都で戦った時よりずっと不気味な感じがする。

「曹操。もう十分だ。四分の三は喰えた。これ以上はサマエルがもたない。俺達も撤退するぞ」

「逃がさないわ。あの男の事、話してもらおうわよ。我、目覚めるは——」

ツ!? ヴァーリちゃん、まさかここで『覇龍』を!?

「さっせんでヴァーリ」

ゲオルクが新たな魔法陣を展開する。それに反応してサマエルの右手を包んでいた拘束具が弾け飛ぶ。

『オオオオオオオオオオオ!!』

おぞましい声を発しつつ、その右手をヴァーリちゃんへ向けるサマエル。刹那、彼女の体が黒い塊に包まれる。その塊は数秒も経たずに四散したが、解放されたヴァーリちゃんは全身を血に塗れさせながら床に倒れ込んでしまった。

「う、うう・・・」

「ヴァーリちゃん!?!」

「悪いが、ここで『覇龍』を使わせるわけにはいかない。さて、ご苦労だったなサマエル。そろそろ戻るがいい」

見ればサマエルの下の魔法陣の光が少しずつ弱くなっていた。同時にオーフィスを包んでいた黒い塊も弾けるように消える。

そして、究極の龍殺しサマエルは呻き声だけを残し魔法陣の中へ消えていった。オーフィスは・・・別に変わった所は見られない。だもしたらあの塊の中で何が・・・?

「我の力、奪われた。これが目的？」

オーフィスの言葉に驚く俺達だったが、直後、ゲオルクから語られた話にさらなる衝撃を受ける。——オーフィスから奪った力で、『禍の団』にとつて都合のいい存在として、新たな『ウロボロス』を作りだす。それがコイツ等の目的だと。

「既にオーフィスから奪った力は研究施設へと流してある。今回の勝負・・・俺達の勝ちだな」

「そこまで聞かされてさようなら・・・なんてわけねえだろうが。その研究施設とやらの場所、吐いてもらおうぞ」

「人間ごときに出し抜かれてご立腹なのはわかるが、俺達ばかりに気を取られている場合じゃないと思うぞ。もうすぐここに死グリーム・リッパ神の一行が到着する。冥府の神、ハーデスに命じられ、力を奪われたオーフィスを回収するために。・・・曹操も限界みたいだからな。代わりにジークフリートも呼ばせてもらおう」

曹操の足下に魔法陣が出現する。野郎・・・逃がしてたまるかよ！
「曹操おおおおおおお!!」

俺は怒りを込め、曹操に向けて特大のドラゴンショットを放った。
だが・・・。

「——珠寶」

ドラゴンショットが曹操の眼前に出現した渦に飲み込まれる。そして次の瞬間、俺達に向かって飛んで来たのは、俺がヤツに向かって放ったはずのドラゴンショットだった。

「結界を張れるヤツは前に出ろ！」

「くそ、くそおおおおお!!」

そして、俺達はドラゴンショットの中へと飲み込まれるのだった。

イツセイSIDE OUT

IN SIDE

気付くと、俺は夜の公園のベンチに横たわっていた。何だろう、なんか妙な夢を見ていた気がする。

たとえば・・・家族の為に一人ぼっちでも我慢する女の子にまどわ

りつく、正義感が強すぎて周りが見えて無い男の子と、やたら人の事を「雑種」とか「踏み台」とか言ってくる男の子とお話したり。

たとえば・・・気持ち悪い虫で溢れた家をオルゴンソードで掃除して、何故か喋れなくなった上にラフトクランズモードが解けない状態で住人の男性と無表情な女の子と暮らしたり。

たとえば・・・名前を聞いてるのに「Sです」と性癖を暴露してくれる美人とその部下の人に追いかけて回された挙句、その美人さんが放った攻撃をよけたら、それが近くにいたマンガ肉を持った偉そうな男性に当たったり。

たとえば・・・ラフトクランズに乗ってスケスケパイロットスーツな方々の乗るロボットと一緒に、某サンプラザの「走る人」を歌いながらグロい化物達をオルゴンクローでちぎっては投げちぎっては投げたり。

うーん、見事なまでに一貫性が無い。所詮夢だし、深く考えても仕方ないとは言えるが。ところで、何で俺こんな所で寝てたんだ？

・・・ええつと、確か、曹操さんとペロリスト達と一悶着あつて：：。周りには誰もいない。みんな帰ってしまったのだろうか。流石鬼畜ペロリスト共。こうやって俺に風邪をひかせようとしたってわけだな。あーあ、何で助けたりしたんだろう、俺。でも、何でかわからないけど、あの時はそれが正しかったって思えたんだよな。

ま、ここでウダウダしててもしょうがないし、とりあえず家に帰ろうかな。アーシアが美味しい料理を用意して待っていてくれるだろうし。

公園を出た俺は最後まで気付かなかった。俺の知る公園にあったはずの遊具や施設が・・・この公園には存在していなかったという事に。

第百五十六話 抵抗は正当な権利です

「・・・変だな」

その違和感に気付いたのは公園を出て少し歩いた頃だった。この道は何度も通っているから、周囲の景色や建物も憶えている。その記憶の中に存在するはずのものが存在せず、存在しないはずのものが、いま俺の目に映り込んでいた。例えば、今の位置から東の方を向けばマンションが見えたはずだし、さつき曲がった角の傍には電柱が建っていたはずだ。

んー・・・。モヤモヤするな。まさか、俺が寝ている間に工事したとか？ いや、それこそありえない話だ。

「きやつ・・・!?!」

うおっ、しまった。景色に気を取られて前方不注意で女性にぶつかってしまった。・・・なんか、ぶつかった割には随分と柔らかな衝撃だった。

「ああ、レ、レポートが!」

なんて言ってる場合じゃない。俺は周囲に散らばった用紙を回収して女性に手渡した。

「すみません。こちらの不注意で」

「いえ、そんな。私の方・・・そ・・・」

どこか見覚えのある、緑色のシヨートヘアに眼鏡をかけたその女性が俺を見て固まる。どうしたんだろう。

「あの、どうかしましたか?」

「い、いいいいえ! なんでもないです!」

「そうですか。それと、一応全て回収したと思いますが、確認してもらっていいですか?」

「え? あ、レ、レポートの事ですね! えつと・・・は、はい、全部あります!」

よかった。レポートって言ってるし、無くしたら大変な事になってただろうしな。改めて謝罪し、俺は女性と別れた。・・・にしても、あの女性から感じる既視感は何だったんだろう。

しばし考え、俺は答えに辿りついた。そうだ、今の俺、山田先生にそっくりだった。今より少しだけ若い・・・ちやうど大学生くらいの山田先生はこんな風だったんだろうって感じの・・・体の一部は既に今と同じレベルだったけれど。ぶつかった時の柔らかな衝撃の正体はあれだったのか・・・。

「先生に妹さんがいるとは聞いていないが・・・」

まあ、他人のそら似ってヤツだろう。たぶん、本人に話したら「へえ、私も会ってみたいです」なんて言うんだろうなあ。

思わぬ話のネタをゲットし、俺は家路を進む。もう少しだ。この角を曲がればほら、天使達が待つ我が空き地が・・・空き地？

「なん・・・だと・・・」

.....

はっ！俺とした事がついフリーズしてしまった。は、はは、どうやら調子に乗って走り過ぎたみたいだな。疲れて幻覚を見ちゃうなんて。うん、一度落ちつこう。目を瞑って大きく深呼吸を三回。そうして目を開ければ、今度こそ・・・空き地ですね。うん、どこからどう見ても、完全無欠に空き地ですね。

ど、どういう事だ・・・!? 空き地の両隣の家は・・・うん、山本さんと佐々木さんで間違いない。なら、間違い無くこの場所に俺達の家が建ってるはずなのに・・・!

まさか、俺の知らない内にリアスがまた改装を!? ステルスか!? ステルス機能でもつけたのか!? もしくは家ごとワープ機能とか!?

「そうだ、リアスに連絡を・・・!」

取り出した携帯が反応しない。ちよっ!? こんな時にバッテリー切れかよおおお!!

充電もせずに外出した過去の自分を全力で呪いつつ、俺は憎たらしいほどに澄み切った夜空を見上げ途方にくれるのだった。

.....

「あじやじやしたー」

帰るべき家が消失するという、普通に生きてたらまず体験する事の無い出来ごとに直面した俺が最初に向かったのはコンビニだった。目的は食料を確保する為だ。夕飯を食べていないという事もあるが、人間、空腹だと考えもネガティブに陥りがちになると聞いた事があるので、気持ち落ち着かせ、冷静に頭を働かせる為にも必要だと思っただからだ。幸い、財布は持つて出たのでお金の心配はしなくてよかった。

にしても、コンビニ弁当なんて久しぶりだ。美味しいのは美味しいんだが・・・アジアやリアス達の手料理に比べたらな。本当なら今頃家でアジアの手料理をみんな食べているはずだったのに・・・。つと、いかんいかん。早速考えがネガティブに。

ロクに味わいもせず弁当を食べ終わる。これでとりあえず腹は膨れた。

さて、落ちついたところで改めて状況を整理してみよう。まず思いつくのは、ペロリスト共によって違う場所へ連れて来られた可能性だが・・・。多少違和感はあるけれど、ここは駒王町で間違いない。さつき歩いてる時に駒王学園があるのを確認したからな。

次に、消えた家とアジア達の所在だが・・・。弁当のついでに充電器を買おうとしたら何故か古いタイプのものしか売ってなく、連絡手段の確保は叶わなかった。アジアにはオカンがついているから、危険な目に遭つてるといふ事は無いだろうが・・・心配だ。本当にリアスのお茶目ならまだいいが、最悪、オカンに頼んで何とかしてもらえないかもしれない。・・・あれだけ大口叩いておいて情けないと思われるかもしれないが、あの子達の安全以上に大事なものなんざ存在しない。

とりあえず、ペロリストの一人でも絞めあげればこの状況について何かわかるかもしれない。まだこの街に潜んでるかもしれないし、探してみるか。

ひとまずの目標を定め、俺は夜の駒王町を一人彷徨い始めるのだった。

.....

・・・

どれくらい歩いただろうか、気付けば俺は街外れに佇む廃墟へとやって来ていた。・・・怪しい気配がビンビンする。いかにもペロリスト共が好みそうな場所だ。

敷地内に足を踏みいれると、何とも言えないヌルつとした感覚が俺を襲う。そのまま奥の方へ進んで行くと、何やら人の話し声のようなものが聞こえて来た。もしペロリストならとっ捕まえて、もしDQNな方々が集会でも開いてたら・・・見なかった事にして回れ右しよう。

物陰からそつと様子を窺う。天井が崩れ、月の光が降り注いでる広間で、一組の男女と、それを囲むように立つ複数の男達の姿が確認出来た。何やら穏やかではない雰囲気だ。

(あれは・・・)

男達が男女に向けている物を見て俺は眉をひそめた。あのライトセーバーもどき・・・間違いない、クレイジー神父や教会の変態共が振り回して遊んでいたあの玩具の剣だ。という事は、アイツ等教会の人間!?

野郎・・・まだこの街に残ってやがったのか。しかも、未だ反省の気配ゼロじゃないか。チャンバラで遊ぶなら身内とやれ。一般人巻き込んでんじやねえよ。

「・・・残念だよ、正臣。やれ」

「いや、正臣——!」

教会側の男の一人の指示で、残りの男達が男女へ襲い掛かる。すると、男性の方が女性を守るように立ちはだかった。その光景を目の当たりにした俺を突然のフラッシュバックが襲う。

『あなたのお父さんは、逃げ遅れた女の子を守ろうとして・・・』

「——何をしている」

気付けば、俺はその場へ身を投じていた。全員が一斉に動きを止め、顔だけをこちらに向けて来た。・・・にしても、アレを思い出したのは久しぶりだな。だが、理由を考えるのは後にしておこう。

「おいスミス! 人払いの結果はどうした!」

「いや、間違い無く張っていたはずだが……」

「……教会の連中だな」

俺がそう言うと、男達が驚いた様子で一斉に目を見開いた。ふん、やっぱりそうだったか。なら、お前等はこの瞬間から俺の敵じゃい！なるほど……どうやら裏の事情を知っているようだ」

「どうする轟木？ ついでに始末するか？」

「馬鹿かお前は。無関係の人間を手にかけるなど紫藤さんが許すわけないだろうが」

「少年、何故ここに来たのかは知らないが、すぐに立ち去——」

「お前達、その二人をどうするつもりだ？」

轟木と呼ばれた男の言葉を遮り、俺はそう投げかけた。これから返される答えの内容で、俺が取るべき行動が決まる。

「悪いが部外者のキミに話す義理は無い。いいから帰りなさい。これから先は、キミの様な若い子が見る様なものではないのだからな」

「いや……その答えで十分だ」

俺は男達の横を通り過ぎ、いつの間にか気絶していた男性と、その男性を介抱している女性の前に立った。

「……何の真似かな？」

「お前等の考えはわかってる。この二人に手出しはさせんぞ」

「このガキ……！ おい轟木、これは教会に対する明確な敵対行為だぞ！ 構う事はねえ！ コイツもやつちまおうぜ！」

ほーら出た出た。所詮教会の人間なんざこんなヤツらばっかだつて事だ。なら、俺も遠慮する必要は無いな。

「……仕方ない。多少痛い目に遭えば考えも変わるだろう。ただし、絶対に殺すなよ。あくまでも抵抗する力を奪うだけにしろ」

「へへ、そうこなくっちゃな！ おいガキ、恨むんなら悪魔なんかに手を貸そうとした自分を恨むんだな！」

男がライトセーバーもどきを振り上げながら迫って来たので、俺は隙だらけな男の腹に思いっきり拳を叩き込んでやった。ズドムツ！

なんて音を響かせながら、俺の拳が男の腹に深々と食い込んだ。

「か……ペ……!?!」

謎の呻き声を発しながら膝をつく男を続けて蹴り飛ばす。廃墟の壁を突き破って外へ飛び出して行く男を見送り、次の相手に目を向ける。

「……まず一人」

「ツ……！ 全員警戒しろ！ こいつ……ただの小僧じゃないぞ！」

「ディックの野郎、油断しやがって……。スミス！ 連携で攻めるぞ！」

「了解した！」

今度は二人がかりか。だが甘い。チョコレートより甘い。そんな遅い動きでどうにか出来ると思うなよ。木場君にでもコーチしてもらって来るんだな！

「ふん！」

左右から迫る剣戟をかくぐり、隙だらけな背中に一発ずつ叩き込む。

「とったぞ！」

直後、三人目の男が真正面から切り込んで来た。迫り来るライトセーバーもどきを右手で掴み、いつぞやの時の様に軽く力を入れればほらこの通り、バツキバキに砕け散るだけだ。

「な……は……え……!?!」

愕然とした様子で後ずさりする男。その時、リーダー格の男が悔しそうな表情で口を開いた。

「……撤退するぞ」

「轟木!? 何を……!」

「いいから撤退だ！ この戦力ではこの少年は止められん！ お前達もわかっているはずだ！」

「くっ……!」

「ディック達を回収し、紫藤さんへ報告する！ 急げ！」

それからの男達の行動は早かった。気絶したヤツ等を連れて逃げる様に廃墟を出ていった。この場に残っているのは、俺と男性達だけだ。

教会の連中の姿が完全に見えなくなった所で、俺は改めて女性と向

き合った。どこことなく快活そうな印象を受ける顔をしている。

「大丈夫ですか？」

「あ、は、はい……。おかげ様で。あの……。あなたは？ どうしてここに？ 何故……。何故私達を助けてくれたのですか？」

「俺は……」

「う……。うう……」

気絶していた男性が呻き声をあげる。って、この男性怪我してるじゃないか！ まさか……。さっきの教会の連中が!?

「ふ……。ふふふ……」

やったな。やってくれたな教会。久しぶりだよ……。ここまで俺をイラつかせたヤツは……。許さん。絶対に許さんぞ教会共！ 次に会ったらボコボコにしてくれるわあ！

「ひっ……。！」

……。おっと、しまった。俺とした事がつい我を忘れてしまった。過去の悪行（アーシアや木場君、ゼノヴィアさん達の件）がある所為でどうしても教会の連中を前にすると自分が抑えられない。

怯えた様子の女性に心の中で謝りつつ、俺は男性に『信頼』をかける。淡い光と共に出血が止まった。

「え……。傷が……」

これで心配はないだろう。男性の呼吸が落ちついたものに変化したのを確認し、俺は男性を背負いあげた。

「ま、待って。正臣をどこに……」

「ひとまず移動しましょう。いつまた教会の連中が来るかもわかりませんので」

「あ、そ、そうですね」

そういう事で、俺は女性と一緒に廃墟を後にしたのだった。

……

数分して俺達が辿りついたのは、高台にある小さな休憩所だった。男性をベンチに寝かせ、俺もその横に腰掛ける。

「……」

「……」

女性との間に無言の空気が流れる。何だろう。この男性が起きるまで話をするつもりないのかな。

「うう……ん……」

「正臣……!」

「ク、クレーリア? 僕は……ッ!」

目を覚ました男性の目線が女性から俺に移った瞬間、ばね仕掛けの様な動きで起き上がり女性を守るように男性が立ち上がった。

「何者だ!? 教会の手の者か!」

「ま、待ってください正臣! この方は私達を助けてくれたんですよ!」

「え?」

女性の制止に男性が何やら思い出すかの様に顎に手を添える。

「……そうだ。確か僕達は轟木達に廃墟へ追い込まれて。そこへ何者かが……。ひよつとして、彼が……。?」

「ええ。私達を守りながら彼等を追い払ってくれたんです」

「そうだったのか……。誰だか知らないが、キミのおかげで助かった。ありがとう」

深々と頭を下げる男性。だが、次に顔を上げた彼の顔には、疑問と疑いの色があった。

「……あの場に現れたという事は、キミも裏の世界を知る者なのだろう。なら、僕達の事情も知っているのかい?」

裏の世界? 事情? ……ああ、そちらの女性が悪魔とかそういう話ですかね? なんか気付いたら羽出ちゃってますし。

「ええ」

「ツ……! で、では、知っている上で僕達を助けてくれたのかい? 教会にも、悪魔にも追われる僕達を……!」

頷く俺に、二人が目を見開く。

「どうして……。僕達に手を貸すという事は、キミも追われる可能性もあるというのに……」

「俺にはそれが正しいと思えた。理由なんてそれだけで十分です。それに、あんな連中にいくら追われた所で返り討ちにするだけですよ」というか、どう考えたってこの人達が被害者でアイツ等が加害者だもの。助けるのは当然だ。

「クレーリア……。僕達は、僕達はやっぱり間違っつてなんかいないんだ……。！」

「ええ。ディー兄様だけじゃない。私達の考えに賛同してくれる方は他にも存在するんですね……。！」

な、何だかよくわからないが、二人がめっちゃ感動した面持ちで俺を見つめて来るんですけど。そんなに助けられたのが嬉しかったんだろうか。

「僕は八重垣 正臣。そして彼女がクレーリアだ」

「妻の八重垣クレーリアです」

「お、おいおいクレーリア」

「いいじゃないですか。いずれこう名乗るようになるんですから」

「クレーリア……。！」

「正臣……。！」

すんませーん！ 誰かコーヒー持って来てくれませんかー！ ブラックの滅茶苦茶濃いヤツでお願いしまーす！ もう真っ暗なのに二人の周りだけピンク色に見えるんですけどー！

「あ……。！」

「あ、ああすまない！ それで、キミの名前は？」

「俺は……。！」

そこでふと思いつ。自分の状況がよくわかっていない今、迂闊に本名を名乗るのは危険ではないかと。いや、別にこの二人が怪しいとかそういうわけではないのだが。

「……。アルⅡヴァン。俺の名前はアルⅡヴァン・ランクスです」

というわけで先生。手前勝手な理由で誠に申し訳ありませんが、あなたのお名前をお借りします。この体だって元はアルⅡヴァン先生のものだし、間違っつてはいないはず！

「では、アル君と呼ばせてもらいますね！」

クレーリアさんが手を叩きながらそう言う。アル君か……。J繋がりですペシャリストの乗る機体に内蔵されているAIを思い浮かべる俺は立派なスパロボ脳だと思いますはい。

「それでアル君。……こう呼ばせてもらっていいかな？」
「どうぞ」

「ありがとう。では改めて聞くけれど、アル君はどうしてあの場所に？ 僕達を助ける以外に何か目的でもあったのかな？」

「どうしよう。……うん、話してみるか。それで何もわからなかったとしてもその時はその時だ。」

「実は……」

……

……

……

「……コスプレイヤーに勝負を挑まれて、戦ってたら変態集団に襲われて、実はコスプレイヤーもその集団の一味で、そいつ等が魔法陣を出現させて、それに飲み込まれたら家が無くなっていた？」

「はい、そんな感じですよ」

「……どうしましょう。正臣。私、何が何だかさっぱりわかりません」
「僕もだよ……」

案の定、困惑する二人。まあ仕方ないか。自分でも話してて「お前は何を言ってるんだ？」って思ったし。

「す、すまないが。僕達が役に立てそうな事案じゃなさそうだ」

「大丈夫です。いざとなったら(オカンという名の)最終手段がありますから」

「そ、そうか。では、僕達は僕達の事を考える事にしよう」

「私も考えたのですが……やっぱり、これ以上この街にはいられないと思います。ここはディー兄様を頼って冥界に身を隠すしかありません。既に兄様には連絡していて、明日の夜十一時に迎えを寄越してくれる手筈になっています」

「あの人か？ 大丈夫なのかい？」

「ディー兄様は私達の味方ですから。……それに、私が掴んだあの

駒の情報は、レーティングゲームトップランカーの兄様に必要なもののはずですから」

「はは、流石だねクレéria。明日の夜十一時・・・それまで逃げ切れば僕達の勝ちという事か」

「その通りです。ですが、その前に散り散りになった私の眷属達と合流しないと・・・」

その時、クレériaさんの懐から音が鳴り始めた。彼女が取り出したのは携帯電話みたいな物で、その液晶に目を落とした彼女が微笑む。

「噂をすれば、シノアからです」

「シノアさんというのは？」

「クレériaの眷属だよ」

「シノア？ 今どこにいるのですか？」

通話を始めるクレériaさん。その表情が見る見る内に曇りだす。なんだ？ 何かあったのか？

「あなたは誰ですか？ どうしてシノアの電話をあなたが使っているのですか！ シノアは・・・シノアは無事なのですか!？」

電話の向こうから下品な笑い声が俺に耳にも届いた。クレériaさんが悲痛な面持ちで電話を切る。

「クレéria、彼女がどうかしたのか？」

「シノアが・・・追手の悪魔達に捕まってしまいました。今電話に出たのは、その追手の者です。シノア以外の眷属達も、みんな捕らえている。返して欲しくば指定した場所まで正臣と一緒に来いと・・・」

「人質か。汚い手を・・・!」

「シノア達を助けないと!」

「落ちつくんだクレéria。これは明らかな罠だぞ」

「でもっ、シノア達は私を信じてついて来てくれたんです！ あの子達が捕まってしまったのは私の所為なんです！ だから、助けないといけないんです!」

「クレéria・・・」

クレériaさんが俺の方を向く。そして先程の様に深々と頭を下

げた。

「アル君。これから私の身に何が起ころうと、あなたの事は決して忘れません。本当に・・・本当にありがとうございますございました！」

「待つんだクレーリア！」

弾かれる様にその場から駆け出すクレーリアさんを八重垣さんが慌てて追いかけていった。一人残された俺の視界が、地面に落ちていくある物を捉える。

「・・・仮面？」

拾い上げたのは真っ白な仮面だった。顔全体を隠す様なものじやなく、目と鼻までを隠すタイプ・・・スパロボで言うウォーダンがつけてたようなヤツだ。もしかしたら、教会から逃げる時にカモフラージュとして着けていたものかもしれない・・・逆に目立つんじゃないかね？ というツツコミは止めておこう。

「落し物は・・・やっぱり落とし主に届けるのが当然だよな」

その先で何かに巻き込まれようとも、その時はその時だ。

俺は仮面をポケットに仕舞い。八重垣さん達の後を追うのだった。

第百五十七話 マスクドナイト・笑

途中何度か見失いそうになりながらも、必死こいてクレーリアさん達を追いかけた先に待ち受けていたのは小さな廃工場だった。ここで間違いない……と思うんだけどな。

「行くしかない……か」

ここまで追いかけて外れとか勘弁してくれよ……。その祈りつつ、俺は工場内へ足を踏み入れるのだった。

S I D E O U T

クレーリアSIDE

指定された廃工場の中を正臣と一緒に慎重に進んで行く。閉鎖してまだ間が無いのか、まだ動きそうな機械等がそのままの状態で見られている。

「この場所のどこかにシノア達が……」

私の大切な眷属達、どうか無事でいて……！

少し進むと、急に開けた場所に出た。嫌な気配がする。間違い無く、ここにシノア達を捕まえた者がいる。

「言われた通り正臣と二人で来ました！ さあ、シノア達を解放してください！」

私の発した声が工場内に響き渡る。数秒後、前方の暗闇から何者かが姿を現した。

「ぐふふふ。待っていたぞクレーリア。そして忌まわしきエクソシストよ」

まるまると太った体を毒々しい紫色の衣服に包んだ男性が、下卑た笑みを見せながらこちらに歩いて来る。さらに、彼の後ろから次々と人が姿を現す。その数は……ざっと見ても三十人を越えていた。

「先日は見事に追手を退けた様だが、悪魔とエクソシストの恋など、今の悪魔社会は決して認めはせん。クレーリアよ。お前が考えを改めるまで、上層部は永遠に追手を送り続けるぞ」

「覚悟の上です。私は……それでも正臣と生きていくと決めたのです」

「強情な女だ。・・・だが、気に入ったぞ」

「あなたなんか気にいられても嬉しくありません。それよりもシノア達はどこにいるのですか!？」

「心配せずともちゃんと連れて来ておる。・・・おい」

「おら、こつちだ」

数人の取り巻きが手に持っていた鎖を引っ張る。すると、それに連動する様に数人の人物が姿を現した。間違い無い、私の眷属達だ！

「みんな！」

「ク、クレーリア様・・・！」

無事を喜ぼうとしたのも束の間、目に映ったシノアの姿を見て私は愕然とした。一糸まとわぬその体に、痛々しい傷がいくつも刻まれていた。密かに羨んでいた豊かな胸も、眷属仲間に安産型だからかわれたお尻も全て、目を背けたくなる様な状態になっていた。

「まさか・・・！」

最悪の展開が頭を過る。そんな私の怖れに気付いたのか、男性がシノアの胸を鷲掴みながら口を開く。

「安心せい。まだ手は出しておらん。ワシは壊れた女を犯すのが大好きでな。今はまだその準備中というわけじゃ。完了まであと少しと言った所かの」

男性がシノアに顔を近付ける。瞬間、シノアが男性に向かって唾を飛ばす。その顔には明らかな怒りが浮かんでいた。

「下衆が・・・汚い顔を近付けるな」

「・・・ふむ、どうやらまだまだいたぶりがいがありそうじゃ・・・な！」

「うぐっ・・・！」

男性が手に持った杖をシノアのお腹へ突き刺す。酷い。シノアや他にみんなは、捕まっただけからずつとこんな酷い目を・・・!？」

「止めて！ 私の眷属をこれ以上傷つけないで！」

「ほお、どうやらこやつ等を随分と大事にしておるようじゃな」

「当たり前です。他の悪魔の方達がどうかは知りませんが、私の眷属はそこにいるみんな以外存在しません！」

「クレーリア様・・・」

「麗しき主従関係じゃな。ならばこうしようではないか。お前の身柄とこやつ等の身柄を交換というのはどうじゃ？」

男性からの提案に横にいた正臣が激昂する。

「お前・・・まさか、最初からクレーリアを狙って！」

「黙れエクソシスト。貴様に発言は許しておらんぞ。さあ、どうするクレーリア？」

「・・・わかりました」

「クレーリア!？」

ありえないとばかりに目を見開く正臣。私はそっと彼に耳打ちした。

「この状況では従うしかありません。シノア達はもう限界です。あのままでは危険ですし、何よりこれ以上彼女達が傷付けられるのを見ていたくありません。私一人ならば、隙さえ見つけられればきつと逃げ出す事も出来るはずです」

「だが・・・！」

なおも引き止めようとする正臣を、私は力一杯抱きしめた。

「正臣。私の愛する人。私の帰る場所はあなたの隣です。だから・・・だから、私を信じてください」

「クレーリア・・・」

正臣の体から力が抜ける。私はそっと彼から離れ、一人、男性の元へ近づいていった。

「よく来たなクレーリア。ぐふふ、こうして間近で見ると、改めてお前の美しさがわかるのう」

男性の手が私の頬を撫でる。正臣の手と比べれば絹と雑巾ほどの差があるように感じた。

「これでいいのでしょうか？ さあ、シノア達を解放してください！」
不快感と怒りを込めて男性を睨みつける。次の瞬間、彼は信じられない言葉を口にした。

「・・・はて？ 何の話かな？」

「なっ・・・!？」

「ぐふふ、どうも最近物忘れが激しくてな。数秒前の会話すら憶えておれんのじゃよ」

「くっ、騙したのですか!」

抵抗する間も無く、私は拘束されてしまった。

「貴様等! クレーリアを離せ!」

正臣が光の剣を抜いてこちらへ走りだす。けれど、取り巻きの者達の魔力による一斉攻撃に近付かず、ついには炎の魔力によって足を負傷してしまった。

「クレーリアは手に入れた。後は貴様を消すだけだエクソシスト。そうすれば、ワシの懐には多額の報酬が入り、同時に上役のポストも手に入れられるという事じゃ。さあお前達! ワシの為にあの男を殺せ!!!」

火傷により思う様に動けない正臣に対し、攻撃を加えようと取り巻き達が魔力を練り始める。このままじゃ正臣が・・・あの人が殺されてしまう!

「・・・いや」

お願い・・・。誰か、あの人を・・・。私の大切なあの人を・・・。

「助けて! 正臣を助けてえええええええ!!!」

溢れだす涙をそのままに、私は絶叫した。

「ぐふふ。諦めろクレーリア。お前はもう、ワシの肉人形になる道しか・・・」

「———待てい!」

「「「「「「「ツ!?」「「「「「「」」」」」」」」」

廃工場内に突如として響き渡る力強い叫び声。それに貫かれたかのように、この場にいた全ての者達の動きが停止する。

「な、何だ!?! どこからの声だ!?!」

「ツ・・・! あそこだ! 二階の通路!」

全員が一斉に上を見上げる。そこにその人物はいた。腕を組み、私達を見下ろすその顔は、白い仮面によって覆われていた。・・・って、ちよつと待って! あの仮面・・・私の持っていた物と同じ!?

「愛し合う二人を引き裂かんとする者よ。己が姿を見るがいい。自ら

の醜き欲望に抗うこともせず、ただ心に暗き情念の炎を燃やす。人、それを・・・嫉妬”という!”

「き、貴様! 何者だ!」

男性が杖の先端を向けながら問い質す。しかし、仮面の人物はそれを一刀の下に切り伏せた。

「貴様等に名乗る名前は無い!」

クレーリアSIDE OUT

IN SIDE

ちよつ、この工場複雑すぎい! なんか気付いたら二階にいたんですけどお!

しかし、おかげでクレーリアさん達の姿を見つけられたぞ。というか、既に滅茶苦茶ヤバそうな雰囲気になってました。

しばしクレーリアさんとボスっぽい人物の会話を聞く。・・・うん、典型的なクズだなあの男。

「貴様等! クレーリアを離せ!」

捕まったクレーリアさんを助けようとする八重垣さんだったが、ヒヤッハーな見た目の部下達の攻撃で足をやられてしまった。

「クレーリアは手に入れた。後は貴様を消すだけだエクソシスト。そうすれば、ワシの懐には多額の報酬が入り、同時に上役のポストも手に入れられるという事じゃ。さあお前達! ワシの為にあの男を殺せ!!!」

動けない八重垣さんを狙うヒヤッハー共。まずい! 何とかしないと・・・!

「助けて! 正臣を助けてええええええええ!!!」

ツ・・・! ええい、ままよお!

「———待てい!」

俺はありったけの大声で叫んだ。クレーリアさんや彼女の眷属達、さらにはボスやヒヤッハー共が一斉に動きを止める。この時、テンパり過ぎた所為かどうかはわからないが、俺は何故か拾った仮面を被っていた。

あ……なんかいいなこの感じ。自分じゃない別の誰かになった気分。漫画やアニメで仮面被ってるキャラの気持ちが無となくわかってしまった。

「な、何だ!? どこからの声だ!?」

「ッ……! あそこだ! 二階の通路!」

全員の視線が一気に俺に集中する。これでいい。俺に意識を向けさせておけば、その間に八重垣さんが回復する時間を稼げる。もつとだ。もつと引きつけなければ!

「愛し合う二人を引き裂かんとする者よ。己が姿を見るがいい。自らの醜き欲望に抗うこともせず、ただ心に暗き情念の炎を燃やす。人、それを……嫉妬」という!

某天空宙心拳の使い手に肖りつつ、俺は口上を述べる。今、俺の中に偉大なるクロノス族のお兄さんの魂が宿った!

「ぎ、貴様! 何者だ!」

「貴様等に名乗る名前は無い!」

腹は括った! ここまで来たらこのテンションとノリで押し切つてやるぜえええええええ!!

「とああああああ!」

俺は通路から空中に向かって飛び出した。そして、そのままヒヤッハー共の中心に向かって足を突き出しながら一気に落下する!

「サンダアアアアアサイクロンッ!」(ただのキック)

「二ギやああああああ!!」

数人のヒヤッハー共を吹き飛ばし、俺は別のヒヤッハーに向かって拳を突き出した。

「サンダアアアアアクロオオオオウ!」(ただのパンチ)

「ぶげらばっ!」

どうだ! 天空宙心拳ならば、ただのキックやパンチでも立派な必殺技となるのだ!

「走れ!」

「ッ! みんな!」

クレーリアさん達を捕まえていたヒヤッハー共をぶつ飛ばし、俺は

「・・・と、いいたい所だが。そちらの仮面の御人にはとても敵いそうにない。可愛い娘のウエディングドレス姿を見るまで、僕は死ぬつもりはないんでね。ここでキミ達からは完全に手を引かせてもらうよ」
「え・・・?」

「見逃して・・・くれるのですか?」

「ま、任務失敗の責任は当然負う事になるだろうが、精々辺境の地へ飛ばされるだけだろうし、それくらいなら問題無いさ」

「ど、どうしてですか? 紫藤さん、あなたは僕達の粛清任務に自ら志願したと・・・」

「僕達が実行部隊になれば、他の連中が手出ししなくなる。我ながらいい案だと思っただけどねえ。まさか上が悪魔と協力してまでキミ達を粛清するつもりだとは思わなかったんだ」

「では、あなたは最初から僕達を逃がす為に・・・!?!」

「はは、エクソシスト失格だろ? だけどね八重垣君。仲間の幸せを奪う様なヤツは、エクソシストどころか人間失格だよ」

「紫藤・・・さん・・・」

「さてと、僕はこの辺りで失礼するよ。報告書をどう纏めるか今から一生懸命考えないといけないからね」

「そう言い残し、男は去って行った。・・・よくわからんが、ひとまぐずこれで八重垣さん達が教会の連中に追いかけられる事は無くなった様だ。」

「紫藤さん・・・ありがとうございます・・・!」

男の去って行った方向に、八重垣さんはしばらくの間ずっと頭を下げ続けていた。

気付けば、外がうつつすらと明るくなってきていた。おおう、いつの間にか朝を迎えていたようだな。

「あ、あの・・・!」

うわビックリした! いつの間にかクレériaさんが至近距離に立っていた。

「違ってたらゴメンなさい。もしかして・・・アル君ですか?」

へ・・・? あ、そっか。そーいや仮面着けたまんまだった。クレéria

リアさんからしたらいきなり現れた仮面野郎が叫び声を上げながらヒヤッハー共をボコリ始めるといいうわけだからん展開だったんだもんな。

俺はそつと仮面を外した。瞬間、クレーリアさんが満面の笑みを浮かべ、八重垣さんが目を丸くし、クレーリアさんの眷属のみなさんは何事かとそろつて首を傾げるのだった。

・・・
・・・
・・・

そして迎えた夜。俺はクレーリアさん達と一緒に駅にいた。クレーリアさん曰く、ここから冥界へ向かうとの事だが。ひよつとして地下のあのつかいホームを利用するつもりなのかもしれない。

「アル君。あなたにはいくら感謝してもし足りないです。本当に・・・本当にありがとうございます」

「キミがいなければクレーリアを守れなかった。キミは僕達の救世主だよ」

「いえ、お役に立てたのなら何よりです」

「私、決めました！ いつか正臣との子どもが生まれてその子が男の子だったら、名前はアルⅡヴァンにするって！」

「はは、それはいいな！ アル君みたいに立派な男に成長してくれそうだ！」

・・・来た。このジワジワと心を抉って来る感じ。久しぶりに特大の地雷が来た！ 止めて！ そんな目で俺を見ないで！

「クレーリア様。列車が到着した様です」

「わかりました。・・・さようなら、アル君。またいつか・・・会える事を願ってますね！」

そうして、クレーリアさん達は駅の中へと去って行くのだった。いやあ、何とか一件落着で終わる事が出来たな。・・・まあ、俺自身の事は全然解決してないんですけど。

・・・仕方ない。最終手段を・・・オカンを頼ろう。

『・・・アンタ』

ツ・・・!? オ、オカン!? なんとという奇跡! ちようど今俺も呼ぼうと思つてたんですよ!

『そうか・・・』

? どうかしたんですか? なんだか酷く声が沈んでますけど・・・。

『すまん・・・。ホンマにすまん。ウチが・・・ウチがあんな事言わへんかったらこんな事には・・・』

ちよ、本当にどうしたんですか!?

『・・・ええか。落ち着いて聞くんやで。アンタの後輩が・・・』
「・・・」
え?」

たつた今オカンの口から飛び出た言葉に、俺の頭が瞬間的に真っ白となった。は、はは・・・いやだなあオカン。そういう冗談はよくないですよ。

『冗談なんかやない! こんな・・・こんな事、ウチが冗談で言うと思うか!?!』

そんな・・・。だつて、だつてあり得ないじゃないですか。兵藤君が・・・兵藤君が死んだだなんて、そんな事あるわけじゃないじゃないですか・・・!

『・・・』

嘘ですよオカン! 兵藤君が死んだなんて嘘なんですよね!?

『・・・すまん』

「そんな・・・な・・・」

死んだ・・・。しんだ・・・。シンダ・・・。俺の“大切な”人が・・・また死んだ・・・。

「あ・・・ああ・・・」

全身から血の気が引いていく。体の震えが止まらなくなり、ついには立っている事すら叶わなくなってしまった。

『ツ・・・!?! あかん! しっかりしいや!』

オカンのその言葉を最後に耳にし、俺の意識は闇へと沈むのだった。

第百五十八話 後ろ向きに前進DA!

イツセイSIDE

撃ち返されたドラゴンショットを何とか防いだ俺達は、ホテルの一室へ移動していた。この部屋を陣地とし、これからの作戦を練る。

「・・・ゲオルクの言った通り、ホテル前の駐車場に死神達が集結しています」

「けっ。ハーデスの野郎。ちよつと目を離した隙にもう動き始めたつてわけかよ」

偵察から戻って来た木場の報告に、アザゼル先生が憎々しげにそう漏らす。曹操に貫かれた際の傷はアジアによって完治している。それと、小猫ちゃんのお姉さんも元通りなんだけど、問題は「彼女」だ・・・。

「戻りました」

入室して来たのはルフェイだった。彼女は隣の部屋に運ばれたヴァーリちゃんの所へ行っていた。『覇龍』を発動させようとしたあの時、ヴァーリちゃんはサマエルによって呪いをかけられていたのだ。ルフェイは呪いを解く術を覚えているので、それでヴァーリちゃんの呪いを解こうとしたのだが・・・悔しそうな顔をしているので上手いかなかったのかな。

「どうだったルフェイ?」

「・・・ごめんなさい。私の力では解く事は出来ませんでした。ですが、最善の処置は施しましたので、命の心配はありません。このまま自然に呪いが解けるまで、ヴァーリ姉様には耐えて頂くしかありません」
そっか。一安心・・・とは言えないけど、ヴァーリちゃんならきつと呪いなんかに負けないだろ。

「それと、これはたった今通達された事のようなのですが・・・」

そう前置きしてルフェイが話を続ける。なんでも、ヴァーリちゃん達のチームがクーデターを企てたとの報告が『禍の団』内部に送られたらしい。しかも、オーフィスを騙して組織を牛耳ろうとした事を掴んだ英雄派がオーフィスを無事救助したので、ヴァーリちゃんのチー

ムの者を見つけたら即刻始末しろ・・・との命令もそれぞれの派閥に出されたらしい。

「英雄派もやる事が一々しようもねえな。同情するぜルフエイ」

「いいんですよ。私達のチームは以前からずっと組織の中で浮いていましたから」

「そういや、ヴァーリがそんな事言ってたな。・・・なあ、今になって聞くのもなんだがよ。お前等は『禍の団』で何をやっていたんだ？

各地からあがってくる『禍の団』によるテロの報告の中にお前等を見たという情報は皆無だったんだが」

それは俺も気になってた。ヴァーリちゃんも彼女のチームのヤツ等も、テロなんかに手を染める様な風には見えない。ラーメンジャンキーな美猴や紳士なアーサー。緊張し過ぎてまともに話す事も出来なくなるほどの神崎先輩ファンなルフエイに、色々自由過ぎるヴァーリちゃん。この個性的な面子で構成されたチームの目的って何なんだろう？

「ヴァーリ姉様が『禍の団』に入ったのは、より強い人と戦える機会を得られると思ったからです。ですが、それもすぐフューリー様にリベンジする・・・という目的に変わっちゃったみたいです。それから、伝説と呼ばれる強者を探し回って勝負を挑んだり、グレートレッドさんをはじめとする世界の『謎』を調べたりして、たまにオーフィス様のお願いを聞いたりする・・・そんな感じでした。それが、他の人達には面白くなかったみたいで、私達は徐々に孤立を始めました。ですが、ヴァーリ姉様も他の二人も全く気にしてないみたいでしたよ」

「強者とか『謎』とか・・・冒険家でも気取るつもりかあの娘は」

「あら、強者についてはヴァーリ姉様本来の性格によるものですけど、『謎』の探求はアザゼル総督の影響だと思えますよ？」

「・・・そうかよ」

先生、こう言ってはなんですけど、顔がお父さんのそれになってます。「生意気な」とか「探究心で俺に勝てると思ってんのか」とか、娘に構ってもらえたのが嬉しいくせに逆の事を言ってるツンデレパパじゃないですか。

「我、ただいま」

「おう、戻ったかオフィス。具合はどうだ？」

「この階層を見て回る」と言って出かけていたオフィスが戻って来た。何しに行ってたんだろう。あと、ただいまの前に我はつけなくていいぞ。

「今の我は、全盛期の二天龍より二回り強い」

「・・・つまり、そこまで弱くなったって事か」

いやいや、それでも十分強いじゃないですか！ などと突っ込もうとしたら、オフィスがゴスロリ服のポケットから何か取り出した。

「え、サングラス？」

予想だにしないアイテムにポカンとする俺の前で、オフィスがそのサングラスを装着した。

「弱くなった我は、まるで、ダメな、オフィス。つまり、我はマダオ。しよぼーん」

「・・・は？」

しよぼーん・・・じゃねえよ！ なんだよまるでダメなオフィスって！ 弱くなった自分が許せないって言いたいのか？ それなら何で微妙に胸を張ってんだお前！

「・・・それにしても妙だな。ゲオルクは四分の三は奪ったと言っていたが・・・これだけの力が残っていれば十分過ぎる」

スルーしたよこの人・・・でもって、先生のその疑問はオフィス本人の口から答えが出た。コイツ、サマエルに力を奪われている間に、自分の力を蛇に変えて別の空間に逃がしていたらしい。じゃあ、さっきまでホテル内を周っていたのは蛇を回収する為だったって事か。

「蛇は回収した。でも、ここからは出られない。ここ、我を捕える何かがある」

「はっはあ！ 流石だなオフィス。ゲオルクめ、オフィスを舐め過ぎたな。お前等もそう思うだろ？」

先生が室内のみんなへ顔を向ける。・・・けど、それに反応する者は誰もいなかった。室内に漂う重苦しいなんてレベルじゃない空気。

原因なんて今さら確認する必要も無い。・・・ゲオルクの野郎・・・
最悪の爆弾を残していきやがった。

(神崎先輩・・・)

俺達にとつて、あの人の存在がどれほど大きかったのか改めて思い知らされる。朱乃さんは虚ろな目でボーっと天井を見上げているし、アーシアはずっと自分を責め続けている。それを慰めるゼノヴィアやイリナの顔も悲痛なものだった。小猫ちゃんのお姉さんは今にも部屋を飛び出して死神達の所へ突撃しそうな雰囲気、それを抑えようとすると小猫ちゃんは普段では決して見せない様な弱々しい顔をしている。レイヴェルも同じ感じだ。

俺だつてシヨツクは大きい。けど、こんな時だからこそ、冷静にならないといけない。ここを乗り切らなければ、先輩を救出する事すら出来なくなるんだから。木場も俺と同じ思いなんだろう。表情は暗いが、偵察も自ら志願してやってくれたし、戦う気力は残ってるみたいだ。

そんな中、みんなと違う様子を見せる人物がいた。それは部長だ。

「・・・オフィスの抵抗を想定したからこそ、ハーデスは死神を寄越したんでしょうね」

「だろうな。今のオフィスは有限に落ちちまつてる。サマエル以外のオフィス封じの策も当然用意してるはずだ。だからこそ、ここは勢い任せではなく慎重にならなければならない」

「どうにかして外に助けを求めする方法があればいいのだけれど。それか、少人数だけでも外に送り出す術があれば・・・」

朱乃さん達の様に取り乱す事も無く、小猫ちゃんのお姉さんの様に怒りに支配される事も無く、状況打破の為に先生と作戦会議を行う部長。その姿が俺にはありがたかった。部長が冷静に見えるからこそ、俺も落ちつく事が出来た。こういう時の部長ほど頼りになる存在は無いな！

「ルフエイ。お前さんの魔法で何か使えそうなものは無いのか？」

「確かに、私と一緒にならこの空間からお二人だけ離れる事は可能です。ただし、一度転移すればあちらも気づくでしょうし、チャンスは

実質一回だけだと思われまます」

「なら、それで外に助けを求めましょう。出来ればオーフィスを真つ先に脱出させたいけれど、さっきの話から察するに、それは不可能でしょう」

「その通りだ。オーフィスは残す。そうだな……イリナ、お前が行け。サーゼクスと天界の連中に英雄派の真意とハーデスの動き……それと、フューリーの事も伝えろ」

「リョーマの事も？」

「おそらく、『禍の団』の連中はフューリーを嵌めた事を吹聴するはずだ。「伝説の騎士がテロリストに屈した」とか何とか言つてな。それが後になるか先になるかの違いだけだ」

確かに、アイツ等ならそう言いそうだな。卑怯な騙し討ちをしたくせに、それで自分達の組織の強さでもアピールするつもりなんだろうか。だとしたらもう、怒りを通り越して呆れちまうわ。

「ま、待つてください！ 脱出するならレイヴェルさんかアーシアさんを……」

「……私の事は気にしないでください。この状況で我が身可愛さに動くつもりはありませんわ」

「……私もです。何があっても私の神器でみなさんを治します。これ以上……私の大切な人達を失いたくないから……！」

立派だなレイヴェル。それでこそオカルト部員だぜ。それにアーシアも……こんな時まで俺達の心配をしてくれるだなんて。先輩の事で一杯一杯のはずなのに。

「コイツ等も覚悟を決めてる。そして、俺がコイツ等を絶対に守る。それが……この状況を招いてしまった原因である俺の責任だ」

先生が原因？ やっぱり、さっきのゲオルクの話について何か知ってるのか先生……。

「先生、あなたは先輩がいなくなった事を知ってたんですか？」

「ああ。三日前にリアスから連絡を受けてな」

じゃあ、何で俺にも教えてくれなかったのか……。なんて、考えるまでも無いか。昇格試験前の俺が集中出来るようにあえて黙って

いたんだろう。それについて俺が文句を言う資格は無い。

「護衛としてゼノヴィア、お前も行け。エクス・デユランダルをぶつ壊された事で、お前は本来の力を発揮出来なくなっただろう。ついでに修理しておけ。どうせ、この戦いで終わりじゃねえんだ。さつさと相棒を直して来い」

「・・・叶うなら、先輩を騙し討ちした連中の仲間を切り捨ててやりたかったが、この状況では仕方無いか」

悔しさを滲ませながらも頷くゼノヴィア。そこヘルフェイが一本の剣を持って来た。

「なら、これを持って行ってください」

「え!? こ、これって・・・『支配の聖剣』じゃないー」

「兄から預かっていた物です。いつか使う時が来ると思って保管していたようですけど、今後も機会が無さそうなのであなた達の誰かに貰って欲しいとの事です。どうぞ、これでああなたの剣を復活させてあげてください」

「あ、ありがとうルフエイさん!」

「感謝する・・・」

「えへへ、どういたしまして。それじゃあ、お二人はこのまま私と一緒に別室に移動してもらいます。そこで転移の術式にあなた達の情報を組みこみます」

頷き、部屋の出入り口へ向かうゼノヴィアとイリナ。そして、その後を追おうとするルフエイを、俺は引き止めた。

「な、なあ、ちよつといいかな?」

「はい、何ですか?」

「その、こんな事言われたらムカつくかもしれないけどさ。キミ、神崎先輩の事好きなんだよね?」

「ふええ!? そ、そんな恐れ多いですよ! わ、私はただのファンと
いうか、その・・・!」

「わ、わかったから落ちつけ!」

「は、はいい・・・」

「で、こっから本題なんだけど。キミ、さつきの話を聞いてもあんまり

ショックを受けて無い様に見えるんだけど」

「それは、フューリー様がもう帰って来ないという話ですか？」

俺が頷くと、ルフエイは苦笑しながら答えた。

「・・・私、フューリー様はきつと戻って来ると思うんです」

「え？」

「だって、あの方は救世主で英雄ですから。そんな方が、自分を求める声に応えないわけないと思います。だからみなさんや私が求め続けたら、きつともう一度姿を見せてくれるんじゃないかなって」

「ルフエイ・・・」

「あ、ご、ごめんなさいこんな浮ついた答えで。みなさんは心からフューリー様の事を心配してるのに」

「いや・・・キミの言う通りだよ」

そうだ。あの先輩がこのままやられっぱなしで終わるわけねえ。だから俺達は信じればいいんだ。先輩の・・・伝説の騎士の帰還を！

・・・

部屋の窓から外の様子を窺う。下の方に漆黒のローブを纏った集団が確認出来た。・・・あれが『死神』か。揃いも揃って趣味の悪い装飾が施された大鎌を手に持っている。

これは明らかにハーデスの越権行為。先生はそう言った。政治的な事は俺にはさっぱりなので、そこら辺の事は先生に任せておけばいい。

ゲオルクの神器で創られたこの空間から脱出する為には三つの方法がある。その中で俺達を選択したのは術者の撃破、もしくはこの結界を支える中心点と呼べる部分を破壊する事だった。

ルフエイの魔術で場所の調べはついた。駐車場、ホテルの屋上、そしてホテル二階のホール会場。そこにこの結界を維持する装置がある。ウロボロスの形をした像。それが俺達の破壊するべきターゲットだった。

「ルフエイ。装置の周りにはやはり死神がいるのか？」

「はい。というか、私が結界を張ったこの階以外には廊下にも死神の方々がいらつしやるようです。ただ、曹操様の姿はありません。ですがゲオルク様は駐車場にいらつしやいますし、ジークフリート様の姿も新たに確認しました」

「そうなると、ゲオルクのいる駐車場のヤツをさっさと破壊したい所だが・・・」

でも、他の場所も忘れちゃ駄目なんだよな。それぞれに分かれるのも得策とはいえないし。うーん・・・『覇龍』のあのキャノンでも使えばいいんだけどなあ・・・。

「イ、・イツセー・・・!?!」

ん？ 部長が俺を見てビツクリしてるぞ。何でだ？

「つて、何じやこりや!?!」

発動させた覚えが無いにも関わらず、俺は禁手状態になっていた。しかも、肩からは二門のキャノン！『覇龍』時のモノとは大きさや長さが控えめだけど、それでも立派な武装だ。で、でも何で急にこんな・・・。

『あら、あなたがキャノンが欲しいって望んだんじゃない。だから『練成』で造り出したのよ』

え!?! ちよ、ちよつと待つてくださいよエルシャさん！俺、てつきり『練成』は『覇龍』に至ったら使えなくなるとばかり思ってたんですけど・・・!!

『その通りよ。これは紅の極致へ至ったあなただから許された権利。さらなる強さを模索する手段として、あなたは今後も『練成』を行う事が出来る様になったのよ』

マ、マジか・・・。いや、俺としては願ったり叶ったりなんだけど。『ならいいじゃない。それで、そのキャノンであなたはどうするつもりなのかしら?』

「先生、部長。俺に考えがあります」

そうして、俺は思いついた作戦を二人に伝えた。それを聞いた二人は目を丸くしながらもそれを認めてくれた。

「なるほど、確かにそれならすぐに駐車場に攻め入れるな」

「凄いわイツセー。この状況でそんな作戦を思いつくなんて」

俺の思いついた作戦は単純明快。この二つのキャノンを上とホールの像にぶつ放して一気に破壊する。ついでに周りの死神も倒してやるつもりだ。

「そういう事なら、正確な像の位置を調べにやらんな。ここは黒歌か小猫の仙術に頼りたい所だが・・・」

「・・・私がやります」

名乗り出たのは小猫ちゃんだった。

「小猫・・・大丈夫なの？」

「平気・・・とは言えません。でも、部長やイツセー先輩達が頑張っているのに、私だけ何もしないわけにはいきません。あの人も・・・神崎先輩にも怒られちゃいますから」

「・・・そうね。じゃあ、お願いするわ」

小猫ちゃんと一緒に部屋を出る。そのまま廊下の一角まで移動した所で、隣に立つ小猫ちゃんが瞑目する。死神達が迫っているのであまり時間はかけられない。それでも、ミスは許されない以上、慎重に狙わなければならない。十分近くかけ、小猫ちゃんが像の位置を調べる。

「・・・わかりました。屋上がそこ、ホールがそこです」

小猫ちゃんの放った小さな気弾が天井と床に傷をつける。よし、この傷に向かってぶつ放せばいいわけだな！

「イツセー。ゼノヴィア達の準備も完了したわ」

すぐそばの部屋から部長が出て来る。部屋の中に目をやれば、魔法陣の中心に立つゼノヴィア達と、窓際に集まっている木場達が確認出来た。俺がキャノンをぶつ放す時・・・それが作戦のスタートとなる。

「二人も部屋の中に」

部長と小猫ちゃんが木場達の所へ移動したのを確認し、俺はキャノンのチャージを開始した。同時に右の砲身を天井の傷、左の砲身を床の傷へ合わせる。

——いいぞ相棒！

「吹っ飛びやがれええええええええええ!!」

『Destroy!!!』

機械音声と同時に放たれた二つの砲撃がホテルそのものを揺らす。やっぱり『覇龍』のに比べると劣るけど、それでも十分過ぎる威力だ！

「ッ——！　屋上とホールの結界装置の破壊を確認しました！　周囲の死神の方々も消滅しています！　後は駐車場の一つだけです！」
「わかった！　お前等はすぐに転移しろ！　アジアは俺の背中に乗れ！」

「は、はい・・・！」

撃ち終わると同時にそんな声が耳に届く。瞬間、部屋の中の魔法陣が輝きを増していく。そしてその光に包まれ、ゼノヴィア達はこの空間から消えていった。

「いくわよみんな！　さっさと全員片付けて、誰一人欠ける事無く脱出するわよ！」

部長の号令に合わせ、俺達は破壊された窓から一気に飛び出す。こうして、俺達の逃げる為の戦いが幕を開けたのだった。

第百五十九話　そして世界は彼を失った

イツセーSIDE

窓を飛び出し、駐車場に降り立った俺達へ死神達が殺到する。俺達はすぐに散らばって戦闘を開始した。俺や木場達が前衛を務め、アシアを背負った先生や呪いの影響で思う様に戦えないヴァーリちゃん、レイヴェルが後方からバックアップする手筈になってる。だから俺は、目の前に迫って来る死神の連中を思いっきり殴り飛ばしてやればいいってわけだ！

「ぎやあああああ?!?!?!」

丁度十人目をぶっ飛ばした直後、そんな悲鳴が俺の耳をつんざいた。チラリと目を見やると、小猫ちゃんのお姉さんに腹に手を当てられている死神の体があり得なくらい膨らんでいた。

「や、止めっ……!　これ以上は入らな——」

「……ブチ撒けろ」

瞬間、死神の体が弾け飛んだ。周囲に散らばる臓物らしき物体がピクピクと蠢いていた。

「殺す……。『禍の団』の連中も、それに手を貸すアンタ達も、皆殺しだ……!」

こ、怖過ぎる……。あの絶対零度の表情……。いつもの飄々とした雰囲気がるで感じられない。

(この人……。本当に先輩の事が大切だったんだな)

先輩の眷属でもあったんだ。もし、俺も『禍の団』に主である部長を奪われたら……。多分同じ様な感じになるんだろう。俺だけじゃなく、きつと木場達もそうなる。

「くっ……!」

「朱乃さん!」

三人の死神が朱乃さんに迫る。まずい!　こっからじゃ援護が……!

「下がちなさい朱乃!」

そこへ、部長の放った滅びの魔力が割り込み、朱乃さんを襲おうと

した死神達を消滅させる。ナイス援護です部長！

「た、助かったわりアス」

助けてくれた部長へお礼の言葉を述べる朱乃さん。けれど次の瞬間、部長は鋭い声で朱乃さんを叱責した。

「いつまで腑抜けているつもりなの！ 戦う気が無い者にうろちよろされてもいい迷惑よ！ 後衛にでも下がってなさい！」

「ツ……！」

目を見開く朱乃さん。さらに部長の怒声は他のみんなにも向けられる。

「突出し過ぎよ黒歌！ 戦線を揃えなさい！」

「ちっ……！」

舌打ちしつつも指示に従うお姉さん。

「祐斗は後ろを気にし過ぎよ！ アザゼルにオーフィスもいるのだからあなたはオフセンスに専念しなさい！」

「は、はい！」

アーシアやレイヴエルを守りながら戦うつもりだったのか、さつきから後衛の近くで戦っていた木場がすぐさま前が出る。

「小猫は黒歌のサポートを！ 今の彼女を一人にしたら危険だわ！」

「了解です……！」

一人暴れまくるお姉さんの傍で戦い始める小猫ちゃん。流石に、妹が傍にいれば無茶はしないだろう。

「後衛組は身を守る事を第一しつつ援護を続けて！ アザゼル！ 自分が言った言葉くらいちゃんと守りなさいよ！」

「わかってるよ。アーシアやレイヴエルに手を出そうとする輩は俺の槍で消し飛ばしてやるさ！」

「それとアーシア！ さつきから回復のオーラを飛ばし過ぎよ！ 軽い傷をいちいち回復しないでちょうだい！」

「で、ですが……！」

「あなたの気持ちはわかるわ。でもね、これから何が出て来るかわからない以上、いたずらに消費して欲しく無いの。これは実戦よ。致命傷を受けた時、回復出来ませんでしたじゃ済まないの！」

「わかり・・・ました・・・」

「レイヴェルはアザゼルから離れないで！ フェニックスだからって油断してはダメよ！」

「こ、心得ましたわ！」

「ヴァーリ！ 魔力弾を撃つのはいいけどちやんと狙って撃ちなさい！ さつき黒歌のすぐ傍に着弾してたわよ！」

「狙ってるつもりなだけだね・・・」

「オーフィス！ ここから出たいんでしょう！ ならあなたも力を貸しなさい！」

「ん、わかった」

頷いたオーフィスが手をかざしたと思った次の瞬間、冗談みたいな爆発音と共に大勢の死神が消し飛んだ！ な、なんちゆう威力だ！

「おかしい。加減、上手く出来ない」

「・・・やっぱりさつきのは無しよ。オーフィス、あなたは何もしないでちょうだい！」

ですよね！ 流石に今のを連発されたら俺達も危ないですもんね！

「それと・・・イツセー！」

部長が俺の方を向いた刹那、紫色の光弾が俺のすぐ横を通り過ぎていった。振り向くと、その光弾に貫かれた死神達が消滅していた。

「さつきから何をつつ立っているの！ 早く動きなさい！」

「す、すみませーん！」

俺とした事が、なんて情けない所を見せてしまったんだろう。・・・けど、凄いな部長。自分も戦いながらみんなの状況もしっかり見てるだなんて。間違い無く、今の部長はこれまでで一番頼りがいがあるぜ！

（やるのよりアス。こんな時だからこそ、私は『王』として振る舞わなければならぬのよ。それが私がやらないといけない務めなのだから・・・！）

この時、部長が本当は何を思い、何を考えていたのか、俺は最後まで気付く事は無かったのだった。

.....

戦闘を開始して感覚的な時間で三十分。もう数えるのも馬鹿らしくなるくらいにの死神をブツ倒した気がする。

そんな俺達の前にあの男……ジークフリートが姿を現す。さらに、空間をねじ曲げて新たな死神……しかも最上級死神と呼ばれるプルートルってヤツまで現れた。道化師みたいな仮面を着け、どす黒い刃の鎌を持っていた。もう見るからにヤバイヤツってわかる。

「伝説に名を残す死神が何の用だ？」

「あなた方はテロリストの首領であるオーフィスと結託し、せっかく結ばれた同盟を陰から崩そうとしました。自分達で同盟を訴えておきながらのこの所業に、ハーデス様も大変お怒りになっておられます」

「……そうか。そうやって理由をつけて俺達を消すつもりだな。テメエ等……どこまで俺を怒らせれば気が済むんだ！」

「別に怒らせるつもりはありませんよ。ただ、私達は為すべき事を為すだけです。そちらの偽物となったオーフィスを回収させていただきます」

「悪魔+墮天使と死神の戦いか。観戦してみたい気もするが……僕も戦いたい相手がいるからね」

既に禁手状態となったジークフリートが木場を見据える。京都では木場に軍配が上がったが、油断出来る相手じゃないのも確かだ。

「……ああ、そうだ。赤龍帝達の相手も用意してあげないとね」

ジークフリートの言葉に合わせる様に、周囲に霧が発生。そこから死神の大群が再び姿を現した。ツ……！ 今の霧もゲオルクの神器か！

駐車場を埋め尽くす勢いでどんどん出現する死神達。すでに二百や三百ではきかない数になっている！ くそ！ まだこれだけの数が控えてたつてのによ！

「どうだい？ 流石にこれだけの数を一度にぶつければキミ達でも防

ぎ切れないだろう。撃破するにしても時間はかかる。その間、僕は木場祐斗と心ゆくまで戦えるというわけさ」

愉快そうに笑むジークフリート。しかし次の瞬間、そのムカつく余裕顔が一瞬で驚愕に染まる事となった。

「——いいえ、十秒もいらぬわ」

「何……?」

部長が空を指差す。俺達、ジークフリート、プルート、そして死神達が一斉に見上げた先には……おびただしい数の魔力球が浮遊していた。アレって……ま、まさか全て部長の滅びの魔力で出来てるのか!?

「どうせ増援を送って来ると思ってたわ。だからそれに備えて少しずつ魔力球の精製を始めていたの」

マジツすか!?! そんな素振り全然見せてなかったのに!

「英雄ジークフリート。そして最上級死神プルート。果たしてあなた達はこれを受けても無事でいられるのかしらね」

「ちいつ! 退避しろお!」

「遅い!」

死神達に向かって腕を振り下ろす部長。それを合図に、魔力球が死神達に向かって凄まじい速度で降り注ぎ始めた。死神達を飲み込みながら着弾と結合を繰り返す魔力球を見て俺は思い出した。この技……確かロキとの戦いで見せたヤツだ! 名前は……。

「消え去りなさい! 『滅殺の雨』!」

そうだ! 『滅殺の雨』だ! いやー、相変わらず見てるだけで死ぬそうなおつそろしい技だなあ。……なんて言ってる場合じゃねえ!

魔力のドームがこっちにまで迫ってきてるんですけどお!

「お前等! 早く空へ!」

先生の叫び声に合わせ、俺達は一斉に上空に舞い上がった。眼下では魔力のドームによって駐車場が完全に飲み込まれていたのだった。やがて、ドームが消滅したのを確認し、俺達は再び地上に降り立った。辺りには何も残って無い。部長が全て「滅ぼした」のだ。

「ジークフリートとプルートは?」

「さあな、死んだんじやねえのか？」

「・・・勝手に殺されては困るな」

ジークフリート・・・そしてようやくゲオルクも姿を見せた。おそらくジークフリートはゲオルクの神器にドームの範囲外へ転移させられて助かったのだらう。プルートは・・・少し離れた場所から俺達を見下ろしている。

「どうやらこれでチェックのようだな。ゲオルク、ジークフリート」

「・・・馬鹿げた攻撃力は赤龍帝の専売特許だと思っていたのだがな」

「おいおい、今さら何を言ってるやがる。グレモリー眷属はゴリゴリのパワータイプばかり揃ってたぞ」

「先生、僕も一緒にされては困るんですけど」

木場が不服を申し立てる。——その時だった。バチバチという快音と共に、空間に穴が開き始めた。まさか、また増援かとも思ったが、ゲオルク達も訝し気な表情を見せていた。じゃあこれは・・・コイツ等も想定していない乱入者なのか？

そして現れたのは、軽鎧にマントを纏った一人の男。俺はその男の顔に見覚えがあった。間違い無い。コイツは神崎先輩とディオドラ達との戦いの最終局面で現れたあの男だ！

「お前は・・・シャルバ・ベルゼブブ」

先生に呼ばれ、男・・・シャルバは優雅に一礼してみせた。

「その通り。私はシャルバ・ベルゼブブ。ベルゼブブの名の正当な後継者である」

「冥府が絡んでる時点でお前が出て来る可能性は確かにあった。・・・が、フューリーにボコられて自分から地獄に引き籠ったヘタレが今さら何の用だ？」

「ふん、あの時は皇帝機が私に馴染んでいなかっただけだ。だが今は違う。もはや皇帝機は私の手足も同然！ それに聞いているぞ。あの忌まわしき騎士は時空の彼方へ消えさったとな。今頃はどこも知れぬ時代で一人孤独な時を過ごしているのだらう。それどころか、孤独に耐えられずに自ら命を断っているかもしれないなあ。はははは！ 伝説の騎士などともてはやされた割にはつまらない最期だとは

思わないかな？」

嘲笑と共に放たれたその言葉は俺をブチ切れさせるのに十分過ぎる燃料だった。

「ふざけた事言ってるじゃねえ！ あの人が・・・先輩が自殺なんかするわけねえだろ！」

「挑発に乗るなイツセー。おい、質問に答えてねえぞシャルバ。お前の目的はなんだ？」

「――宣戦布告だよ」

シャルバがマントを翻す。すると、そこから一人の少年が姿を現した。この子も見覚えがあるぞ！ 京都でアンチモンスターを生み出していた『魔獣創造』の所有者のレオナルドだ！

「レオナルド!？」

「シャルバ・ベルゼブブ！ 何故お前がその子を連れている！ しかもその目・・・まさか、洗脳の類か!？」

「その通り。この少年には少しばかり協力してもらおうと思ってる」「ツ!? う・・・あ・・・ああああああああああああ!!！」

絶叫と共に、レオナルドの影が凄まじい速度でフィールドに広がり始めた。そして、その影を波立たせながら、巨大な存在が姿を現していく。何もかもが規格外の大きさの「ソレ」が鼓膜が破けそうなほどの咆哮を上げた

『ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』

「なん・・・だと・・・!？」

絶句する先生に向けて、勝ち誇ったかのような笑みを向けるシャルバ。

「ふはははははは！ この少年の『魔獣創造』は素晴らしい！ わざわざ拉致して来たかいたったというものだ！ おかげで今の悪魔どもを滅ぼす為の怪物を創り出す事が出来る！」

シャルバがしゃべっている間にも、影から怪物達が生まれ続ける。最初に現れた二百メートル近くはある化物と、それより一回り小さい怪物達の足下に巨大な魔法陣が現れる。

「この怪物達を冥界に転移させ、全てを滅ぼす！ 現悪魔を全てなあ

！」

「止めろ……。全力でアレを止めろおおおおお!!!」

俺達は全力で怪物達に攻撃した。けど、止めるどころか傷一つつけられない！ くそ、固すぎるだろコイツ等！

「怪物達が……。！」

魔法陣の光の中へ消えていく怪物達。ちくしょう……。間に合わなかった！

その途端、フィールド全体が揺れ始めた。空に断裂が生まれ、ホテルが崩壊していく。

「空間が崩壊を始めた！ シャルバ・ベルゼブブめ、これほどまで無理な能力発現をあの子にさせたのか！」

「プルート！ これもハーデスの指示した事——」

ジークフリートがプルートのいた方向を睨みつけるが、すでにそこにプルートの姿は無かった。

「……。それが答えというわけか。わざわざ禁手化の方法まで教えて。あの骸骨神は本気で冥界を滅ぼす気なのか？ ……その為にレオナルドを。あの一瞬の禁手化の為に、この子がどれほどの犠牲を払ったと思っっているんだ……。！」

ジークフリート、ゲオルク、そして気絶したレオナルドの三人が霧の中へ消えていった。

「さて、キミ達はどうするのかね？ 今の三人の様に大人しく逃げ帰るか。それともこの場で私に殺されるか、選択させてあげよう。真の魔王は慈悲深いのだよ」

「真の魔王だあ？ オーフィスにハーデス……。他人の手を借りねえと何も出来ねえ癖によく言うぜ」

「何とでも言うがいい！ 所詮は結果が全てなのだ！ 過程などに拘るなど愚の骨頂なのだよ！ そして、私が望むものはまだある！」

シャルバがオーフィスに向けて手を伸ばす。瞬間、オーフィスの体に螺旋状の魔力が浮かび、縄の様に絡みついた。一瞬の出来事に誰も反応出来なかった。コイツ……。オーフィスの弱体化も知ってたのか!?

「オーフィスを捕える事を条件に私はこの世界に戻って来れたのだ！
ついでに“蛇”も頂こう！そしてその力で私自らが“毒”となり、冥界を覆い尽くしてやるのだ！」

「させるかよおおおおおおお！！！」

俺はブースターを噴かせて一気にシャルバへ詰め寄った。

「赤龍帝！ 貴殿が大切にしているという冥界の子ども達も全滅させてやろう！ 怪物に踏みつぶさせてもいいし、食わせてもいい！ 下級、中級はもちろん、上級悪魔の息子子女も例外無くな！」

「・・・あ？」

お前、今なんつった？ 子ども達を殺す？ 俺なんかを応援してくれる、俺なんかを夢や目標にしてくれている子ども達を殺すだど？

——シャルバ・ベルゼブブ。どうやら貴様は禁句を口にしたようだな。

わかってんじゃねえかドライブ。コイツは・・・この腐れ野郎は今、この場で俺が絶対にブツ倒す！

「イツセー！ 転移の準備が完了したわ！ 早くこつちに！」

「行ってください！ 俺はコイツと戦います！ ついでにオーフィスも助けます！」

振り返らずに答える。きつと、後ろでは部長達が仰天している事だろう。

「イツセー君！ 今までの戦いとは状況が違うのよ！」

「シャルバは見逃せません。オーフィスも渡せません。だから、俺は残ります」

「じゃあ僕も一緒に・・・！」

「おいおい。お前まで残ったら誰が部長達を守るんだよ。木場、お前はグレモリー眷属の『騎士』だろ？ 俺がいない間ちゃんど部長達を守ってくれよ」

木場は答えない。けど、きつとわかってくれてるはずだ。頼むぜ親友。お前だから託せるんだからよ！

「これ以上は待てん！ イツセー！ あとで龍門を開いてお前とオーフィスを召喚する！ そのつもりでいろ！」

「了解です！」

「イツセー！ 必ず・・・必ず帰って来るのよ！」

「もちろんです！ 俺は「せきりゅーてー」ですからね！ それに、オーフィスを助けておかないと先輩が帰って来た時に怒られちゃいますから！ 俺としてはそっちの方が恐ろしいんですよ！」

ホテル上空で哄笑するシャルバの元へ向かう。同時に転移の光が弾ける。みんなの転移が完了した様だ。

「こうして相對するのは初めてだな、今代の赤龍帝。貴殿の情報は私の耳にも届いているぞ。あの忌まわしき騎士の一番弟子だそうだな」

一番弟子!? そんなの名乗った事もねえし聞いた事もねえよ！
なに? 『禍の団』の中で俺ってそんな立場になつてんの?

「誰も彼も騎士騎士騎士！ あの男の所為で冥界が狂ってしまったのだ！ そうだ！ あの男の所為で真なる魔王の血筋である私が蔑にされたのだ！ 何もかもがあの男の所為なのだ！」

いや、それ全部先輩関係ないだろ。自業自得じゃん。

「俺にはお前の言っている事が理解出来ねえよ。ただ・・・これ以上お前に先輩の事を語ってほしくねえ。あの人は俺の・・・俺達の尊敬する人なんだからな！」

「何が尊敬だ！ 人間ごときに心奪われた悪魔など悪魔ではない！ この狭間で果てるがいい！ 赤龍帝ええええええええええええ!!」

シャルバの手が空間を歪ませ、そこから大量の蠅が出現する。その蠅に円陣を組ませ、そこから強力な魔力波を撃ち出して来た。

——突っ込め相棒！ あの程度・・・避ける必要すらない！

「うおおおおおおおおお!!」

背中と『練成』で創り出した両足のブラスターを全開にし、突き出した右腕で魔力波を切り裂きながら俺はシャルバへ突撃した！

「なっ・・・!?!」

魔力波が拳で割られた事に驚くシャルバ。その一瞬の硬直を俺は見逃さなかった。吸い込まれる様にシャルバの腹へ俺の拳が突き刺さる！

「ぶっ飛びやがれええええええええええ!!」

瞬時に『練成』でキャノンを創り出し、俺は躊躇い無くそれをぶつ放した！ 空中で撃つたせいで反動が半端無い。肩が外れるかと思つたわ。けど、無茶した価値はあつた。黒煙を吹き出しながらシャルバが彼方へ吹っ飛んで行くのを確認した。

「がああああああああ！ おのれ！ おのれえ！ 穢れたドラゴンごときが、真の魔王である私を！」

「何が真の魔王だ！ テメエの攻撃は軽すぎるんだよ！ サイラオーグさんと違って、想いが全然籠ってねえ！ そんな攻撃で俺を倒せると思うなよ！」

「黙れ！ ならばこれならどうだああああああああ!!!」

シャルバが新たな魔法陣を展開させ、そこから一本の矢が姿を現す。へっ、あんなもん喰らつたつて大した威力じゃ……。

——アレは……！ いかん、相棒！ 避けるお！

「え？」

「遅いわああああああ！」

予想以上の速度で飛来した矢が鎧を貫通して俺の肩に突き刺さる。その瞬間、肩から全身に向かって耐えがたい苦痛が広がって行くのを感じた。

「ゴフ……」

鎧の中で吐血する俺。やべえ……。なんだよコレ……。

「いかがかな。サマエルの毒は？」

「サマ……エル……？」

……そうか。この矢にはサマエルの毒が塗り込んであつたのか。究極の龍殺しの毒。ヴァーリちゃんは……こんな痛いモンを喰らつたのか。

——相棒。

ドライグ！ 大丈夫なのか？

——まだ戦える程度にはな。だが、気を抜けば意識を持っていかれそうだ。

「ふははは！ さあ、その状態でどこまであがけるかな？」

毒にやられた俺を見て気分をよくしたのか、シャルバが滅茶苦茶に

魔力波を撃つて来る。毒の所為か鎧そのもの耐久力まで低くなったのか、あつという間にボロボロになってしまった。

「ぐうっ……!」

俺はわずかに残っていた地面に落下した。マズイ。ドライブグじゃねえけど、いつ意識を失つてもおかしくない。

——相棒! しっかりしろ相棒!

だ、大丈夫だ。問題無いぜドライブグ。

「ほお、まだ息があるか。ならば、死出の旅への土産に、我が皇帝機の手を見せよう」

何とか空を見上げると、シャルバはあの皇帝機とかいうヤツを身に纏っていた。だが次の瞬間、俺の見つめる先でその皇帝機の姿が変貌を始めた。シャルバがいるであろう胴体部分を除く全てのパーツが分離、変形して再び胴体へ接続する。その姿は、最早皇帝と呼べるものではなく、表現のしようがない正に「異形」だった。

「どうだ! これが皇帝機の真の姿だ! だがまだ終わりでは無い! いでよ! 量産型皇帝機軍団よ!」

異形の周囲の空間がまたしても歪み始める。そしてそこから現れたのは、百体以上の皇帝機だった。

「この量産型皇帝機はオリジナルである私の皇帝機の指示通りに動く! 騎士との戦いでは間に合わなかったがね! 喜ぶがいい、貴殿が最初の得物だ! さあ! 怯えろ! 命乞いをするがいい! そして絶望せよおおおおお!」

量産型皇帝機達の目が俺を捉える。シャルバが命じれば、すぐにも俺を殺しに来るだろう。だけど、それでも……。

「……それが……なんだってんだよ」

「何……?」

「お前と戦った時……先輩はこう言った……。お前は、絶望どころか脅威にすらならないって……」

あの時は、先輩だから言えたんだって思った。けど、こうしてコイツと戦ってみて俺にもわかった。

「お前には……お前にだけは負ける気がしねえ……。お前には何も

無い……。夢も、思いも、誇りも、何も無い……。俺は最強の『兵士』になる……。それが俺の夢……。それが俺の誇り……。俺の夢を……。俺の守るべきものである子ども達を……。テメエみたいな三下で奪わせてたまるかよ！」

「はっはっは！ 負け犬の遠吠えほどみじめなものはない！ 満身創痍の貴殿に何が出来るというのだ！」

「出来るさ。俺にまだ奥の手があるんだ……！」

——ツ……！ まさか、相棒……!? ダメだ！ サマエルの毒を受けた今『覇龍』を使えばお前の体は……！

「——我……。目覚めるは……。夢の果てを追い求めし……。探究者なり」

——止める相棒！ ここは龍門が開くまで逃げるのだ！ まずは呪いを解き、改めてオーフィスを助け出せばいい！

「未来ある者達の無限の夢と希望を背負い……。決して絶えぬ紅蓮の意志をここに示さん」

——止めてくれ相棒！ お前は……。お前はこんなところで死ぬ男では無いんだ！

「愛するものを……。かけがえのないものを守る為に……」

——止める……。止めてくれ相棒……。俺は……。俺はお前を失いたくないんだ！

『ドライグ……。もうイツセーは止まらないわ』

——エルシャ!? お前も無事だったのか!?

『……。私の事はどうでもいいわ。ドライグ。イツセーは命をかけて戦おうとしている。命が燃え尽きる最期の瞬間まで、この子は戦い続けるわ』

エルシャさんの言う通りだぜドライグ。俺は……。俺は死ぬつもりはねえよ。俺にはまだやりたい事がたくさんあるんだ！ お前のリベンジにも付き合わないといけないしな！

——相棒……。

だから見てくれよ。お前が最高の相棒だって言ってくれた俺の戦いを。この詠唱だって、俺の足りない頭でそれっぽくなるよう考え

たんだぜ。

——は、はは、これでは精々三十点だな。

そうかよ。なら……コイツをブツ倒してから、お前も一緒に新しい詠唱を考えてくれよ。

——……いいだろう。紅の龍帝に相応しいヤツを考えてやる。だから相棒……。

わかってる。絶対勝って帰るさ！

そうドライグに誓い、俺は最後の一文を口にした。

「赤き龍帝は今……紅の極致へと至る！」

立ち昇るは紅蓮のオーラ。纏うは真紅の鎧。この『覇龍』でシャルバ！ テメエをブツ倒す！

「紅の鎧……！ あの偽りの男を彷彿とさせる忌々しい色だ！」

吐き捨てるシャルバを正面に見据え、俺はウイングを展開させる。おそらく、この一撃が最初で最後のチャンスだ。それくらい俺の体の限界に近い。だから難しい事は考えない。正面から突っ込んでシャルバをぶつ飛ばす！

『Crimson Nova Booster!!』

全てのエネルギーを推進力に回し、立ち塞がる量産型皇帝機軍団を打ち砕きながらシャルバへ突撃する！ 量産型の持つ剣が俺の全身へ突き刺さるが、それすらも無視してシャルバだけを目指す！

「シャルバアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そして、ついにシャルバの元へ辿り着いた俺は、オリジナルの皇帝機の胴体に向かって最後の力を振り絞って拳を叩きつけた！ 外装が呆気無く破壊され、中にいた人物の姿が露わになる。

「が……はあ……」

「なっ……!?!」

シャルバ……じゃない?! コイツは……この男は、コカビエル!?! ならシャルバは!?! シャルバはどこへ行った——。

「見事……だがそれでも私の勝ちだな赤龍帝」

ズブリ……と、俺の左胸から刃が突き出る。背後を振りかえると……そこには皇帝機から顔を覗かせているシャルバがいた。

「わかるぞ。その鎧の中で貴殿はどうしてという顔をしているだろう。なに、簡単な事だ。量産型皇帝機もオリジナル同様変形出来るのだよ。それを利用し、私は量産型軍団の中へ姿をくらし、量産型の一つを変形させて私を演じさせていた。その男・・・コカビエルも地獄に幽閉されていたのだが、協力者から好きに使えと言われてね。こうやって利用させてもらったというわけさ」

『覇龍』が解けた俺は崩壊する建物の屋上に落ちた。徐々に遠くなつていく意識の中で、シャルバの笑い声だけが聞こえて来た。

「お別れだな赤龍帝。だが心配する事は無い。すぐに貴殿の仲間と貴殿の大好きな子ども達も送つてやるからな！ さあ、行くぞオフィス！」

「待ち・・・やがれ・・・」

オフィスは連れていかせねえ・・・。立て・・・立てよ俺・・・。みんなに約束したじゃねえか・・・。オフィスを連れて帰るって・・・。約束したじゃねえか・・・。

シャルバの声が聞こえない。たぶん、オフィスを連れて転移したのだろう。これで、この空間には俺一人しかない。

——耐えろ・・・棒！ も・・・少・・・だ！ もう・・・しで・・・門が・・・！

悪い・・・ドライグ。もう、お前の声も聞こえなくなって来た・・・。(俺・・・何も出来なかったな)

こんな姿、先輩が見たらきつと呆れるだろうな。けど、それでもいい。それでも、もう一度だけ先輩に会いたかったな・・・。そして、俺の意識が完全に闇に沈もうとした寸前・・・。

『・・・大変だ』

『ドラゴンのお兄ちゃんが死んじゃう・・・！』

『どうしよう・・・』

『助けなきゃ・・・』

『うん、助けなきゃ・・・』

——・・・だ!? お前達・・・だ・・・!?

幼い子ども達の声がやけにクリアに聞こえて来た。でも、ドライグ

の声は途切れ途切れだ。

『母様は……？』

『えつと……今は別の世界のお仕事で忙しいみたいだよ……』

『じゃあ、お兄ちゃんが死んじゃったって伝えて来るね……！』

『え、まだ死んでな……ああ、行っちゃった……』

『それよりも、このお兄ちゃんを助けないと……』

『うん。このお兄ちゃんはイザイヤの大切な友達だもんね……！』

『あの子には……もう仲間を失う悲しみを味わって欲しく無い……』

母様？ イザイヤ？ 何だ？ 一体何の話を……？

『今の僕達のカじやお兄ちゃんは助けられない。僕達に出来るのは祈る事だけだから……』

『だから祈ろう。お兄ちゃんを助けてくれる存在を、この場所に呼ぼう……』

『祈ろう……』

『呼ぼう……』

謳う様に祈ろう、呼ぼうと繰り返す子ども達の声。その声に合わせる様に、圧倒的な存在感を放つ何かの姿を現すのを感じた。

——…な。何故……が。偉……赤……。グレ……ツド！。

ドライグのその言葉を最後に、俺の意識は今度こそ闇へと沈むのだった。

イツセーSIDE OUT

祐斗SIDE

疑似フィールドから脱出した僕達はすぐに龍門を開く為の準備を始めた。タンニン様をお呼びし、ヴァーリさんにも協力してもらう。すでに魔法陣の用意は出来た。後はアザゼル先生に任せるしかない。

先に脱出したゼノヴィアとイリナさんが各勢力の上層部へ事件の顛末を伝えてくれたおかげで、同盟勢力からそれぞれ救援部隊が派遣される事になった。『魔獣創造』によって生み出された規格外の魔物

達に対し、救援部隊に最上級悪魔の眷属チーム。そして僕達若手悪魔も総動員し、魔物を迎撃せよとの命令が下されたばかりだ。

進撃を始めた魔物達は、進行方向上の村や町をことごとく破壊し、さらに自らアンチモンスターを生み出しながら各都市へ向かっている。

「よし、龍門を開くぞ！」

アザゼル先生がそう叫ぶと同時に魔法陣が輝き始める。イツセー君、帰って来て早々に大変かもしれないけど、キミにも頑張ってもらうよ。なにせ・・・キミは「せきりゆーてー」なんだからね！

眩い光を手で遮る。それが止んだ所で、僕達は魔法陣の中央へ視線を向けた。

「・・・え？」

そこに出現したもの——それは紅色の八つの『兵士』の駒だった。イツセー君の姿はどこにも見当たらない。それが何を示しているのか、僕は理解出来なかった。いや、理解したくなかった。だって、これじゃあイツセー君が・・・。

「・・・馬鹿野郎。馬鹿野郎がああああああ!!!」

膝をついた先生が絶叫と共に床を殴る。嘘だ・・・。僕は信じない。イツセー君は約束してくれたんだ。必ず勝って帰るって！ なのに・・・なのに・・・！

「イツ・・・セー・・・」

八つの駒を胸に抱き、部長が彼の名を呼ぶ。その姿を見た瞬間、僕の中の何かが決壊した。

この日、僕達は神崎先輩に続き、イツセー君を失ったのだ。

第一百六十話 受け継がれる遺志

目の前に兵藤君が立っている。彼はどこか寂しそうな笑みを浮かべながら俺に背を向け、そのまま歩き始めた。

「兵藤君？ どこへ行くんだ？」

俺の問いかけに兵藤君は答えない。・・・どうしてか胸がざわつく。このまま彼を行かせてはいけない。何故か俺はそう思った。

「待ってくれ兵藤君——」

ツ!? 足が動かない!! くそ、何でだ！ 早くしないと兵藤君が行ってしまう！

必死になって動かそうとするが、何かに抑えつけられているかのようには俺の体は微動だにしなかった。まるで、俺に彼を追いかける資格はないとばかりに。

「行かないでくれ！ 止まってくれ兵藤君ツ！」

兵藤君の姿が消える。瞬間、俺を縛っていた何か外れた。すぐさま彼を追う為に走る俺の眼前に扉が現れた。もしかして、兵藤君はこの先に・・・!

扉を開けた瞬間——世界が一変した。俺の前に現れたのは兵藤君では無く、小さな一軒家だった。

「これ・・・俺が住んでた家じゃないか・・・」

リアス達と同居している今の家では無い。かつて・・・俺が元の世界で両親と一緒に住んでいた家だ。俺と父さん、そして母さんの名が書かれた表札がそれを証明していた。懐かしい。懐かしいけど・・・何でここに？ そもそもここは何処だ？ まさか、元の世界に帰って来たのか・・・?

戸惑いはあつたが・・・それ以上の懐かしさに駆られ、俺は家の中へ入る事にした。ドアを開ける。鍵はかかつて無かった。玄関から短い廊下を進み、居間へ足を踏み入れる。そこは、今まで一度も使用されていないかの様に、生活感をまるで感じさせない場所だった。

「・・・いるわけないよな」

ひよっとしたらと思っただが。・・・まあいいか。

居間を出た俺が次に向かったのは・・・自分の部屋だった。階段を上つてすぐの部屋。そこが俺の部屋だ。

「・・・え？」

扉を開けた俺は目を丸くした。部屋の中には机と椅子しか存在していなかったのだ。使っていたテレビもベッドも本棚も見当たらない。やつぱり、ここは俺の家であつて俺の家じゃないのか・・・？

室内を見渡していた俺の視線が机の上で止まる。そこには一冊の本が置かれていた。凶鑑くらいの大きさをしている。調べてみるか。もしかしたらこの場所について何かわかるかもしれないし。

「これは・・・写真？」

椅子に座つて本を開く。そこには波打ち際ではしゃいでる男の子と、その傍で微笑んでいる女性の姿が映つた写真が貼られていた。その写真の下には「亮真、始めての海！」と書かれている。・・・もしかしなくても俺か？　じゃあ、この女性は・・・母さん？

ページを捲ると、今度は男性に抱きかかえられて泣いている男の子の写真があつた。「亮真、お化け屋敷で号泣」・・・これ、父さんか。次のページも、その次のページも、映っているのは俺だった。小さかった俺が少しずつ大きくなっていつてる。これじゃ成長記録みたいだな。

「で、これが高校の入学式か」

誰かをお願いしたのか、父さんと母さんが揃つて笑顔で立っている。だが、その間に立つ俺の顔はふてくされたものになつていた。・・・我ながら思い出すのも嫌になるが、この頃の俺は両親の事があまり好きじゃなかつたんだよな。今の俺が聞いたらぶん殴りたくなるくらいの言葉を吐いた事もあつたっけ。たしか・・・。

『俺は、絶対に父さんや母さんのような人間にはならない』

そうそう、こんな感じ・・・って、え？

『赤の他人を助けたつて意味が無い。それで何か返つて来るのか？

二人がやつてる事はただの自己満足なんだよ』

部屋に響き渡る声。それは、俺が昔、父さんと母さんに向けて放つた言葉だった。

瞬間、俺の心が回想を始める。

・
・
・
・
・
・

神崎達人と神崎泰葉。それが俺の両親の名前だった。二人はごく普通の家に生まれ、ごく普通に育ち、ごく普通に進学し、ごく普通の会社に就職し、ごく普通の出会いを果たし、そしてごく普通の結婚を果たした。けどただ一つ違っていた事があった。それは・・・どちらも「超」が三つくらいつくほどのお人好しだったのだ。

たとえば、道に迷う人間がいたら教えるのでは無く必ず案内するなんてのは序の口で。自分は関係ないのに、散らばっていたゴミを一人で回収する。さらには、バス停で忘れ物を持ってバスを追いかけ持ち主に渡す。挙げ出したらキリが無い。これが周りの人間へのいい人アピールならまだいい。しかし、あの二人は素でそれをやってのけるから性質が悪かった。

だが、そのおかげか近所からの評判はすこぶる良く、「町内一の親切夫婦」・・・なんて呼ばれていて、二人の周囲には自然と人が集まる様になっていた。父さんは、仕事先で目撃した事故現場で率先して人命救助をした事で表彰された事もあった。また、母さんは買い物途中で出くわした妊婦さんが産気づいた場面に居合わせ、救急車を手配し、病院に到着するまでずっと妊婦さんを励まし続けた過去があり、その時には旦那さんに泣いて感謝されたらしい。

小さい頃は、親のやっていた事が理解出来ず、ただ単純に自分の親は凄いとしか思っただけだった。そんな俺も、小学校高学年になる頃にはそれを理解し、自慢の両親だと尊敬する様になった。俺も、将来は父さんと母さんみたいに優しい大人になりたいと思うくらいに。

だが、中学二年生になる頃、その思いを捨て去る事になる事件が起こったのだ。

『おい神崎！ お前のところのお節介ババアなんとかしやがれ！』

ソイツは、学校でも札付きの不良だった。不良と言っても、漫画とかに出て来る硬派な不良では無く、典型的なイタイタイプの不良だっ

た。ソイツ曰く、カツアゲしている所を俺の母さんに見られた所為で失敗したとかなんとか。

一緒にいた友人達は「逆恨みだろ馬鹿」と一蹴したが、ソイツは周りに聞こえる様な大声で罵声を浴びせて来た。

『余計な真似をすんなつてんだよ！ 便利屋のくせによお！ どうせ、周りにいい人に見られてえからそういうポーズしてるだけだろうが！』

『便利屋・・・？ おい、今のどういう意味だよ？』

『おめえの親はな、陰で便利屋って呼ばれてんだよ！ ちよいと泣きつきやこつちの望むとおりに動いてくれる奴隷みてえなヤツ等だつてな！』

——そこからの記憶は今でも思い出せない。気付けば、俺は友人達に取り押さえられていて、目の前では顔を血まみれにさせたソイツが泣きながら「ごめんなさい」を連呼していた。確か、プツツンすると記憶が飛び始めたのはこれが最初だったはずだ。

次の日、母さんが学校に呼ばれた。そしてその日の夜、父さんを交えての家族会議が行われた。

『亮真。なんでお友達を殴ったりしたの？』

『あんなヤツ、友達なんかじゃない！ 二人を・・・父さんと母さんを便利屋だの偽善者だの呼んだヤツなんか・・・！』

俺が聞いた事をそのまま伝えると、二人は何が面白いのか揃って微笑んだ。

『便利屋か・・・中々面白い呼び名じゃないか』

『ふふ、そうね』

怒りを全く感じさせない二人を見て俺は啞然となった。

『何で怒らないんだよ！ 父さん達の善意は利用されてたんだぞ！ 感謝どころか馬鹿にされてたんだぞ！ なのに・・・何で怒らないんだよ！』

『・・・そう。亮真、あなたは私達の為に怒ってくれたのね。でもね、亮真。それでも人に暴力を振るってはダメよ』

『母さんの言う通りだ。それにな、俺達は別に感謝されたくて人助け

をしているわけじゃないぞ。それが正しいと・・・それが俺達にとって正しい選択だと信じて行動しているだけだ』

『そして、その行動の結果が偶然人助けに繋がっているだけなの。だからね、人に利用されていたとしても、馬鹿にされていたとしても、私達は私達の信じた道を進むの』

『そもそも、そんな事を考えていたら誰も助ける事なんて出来ないからな。それが偽善だと言うのなら、俺はそれでも構わないと思っっている』

周りになんと言われようと、自分達の心に従って行動する。その信念とでも呼ぶべきものが二人の中にはあった。・・・けど、当時の俺にそれを理解出来るだけの意思は無かった。

『・・・何だよそれ。人に馬鹿にされてもいいなんて・・・俺には理解出来ねえよ!』

そして、俺は二人にあの言葉を叩きつけたんだ。それを聞いた父さんは小さい声で「・・・そうか」とだけ言い、母さんは悲しそうな顔で俺を見ていた。

その日から、俺の目に映る景色が一変した。両親の友人や仕事仲間・・・周りに集まる全ての人間が、二人を利用するつもりで近づいて来ている様に思えて仕方が無かった。感謝の言葉を聞いても、薄っぺらにしか聞こえず、どうせ裏では次はどうやって利用してやろうか考えてるんだろう・・・なんて事ばかりを考えていた。この頃から、俺は少しずつ両親から距離を取る様になっていた。

高校生になってしばらく経った頃、結婚記念日を迎えた両親はわざわざ有休をとって二人でデートしに隣のデパートへ出かけて行った。

『じゃあ、行って来る』

『お土産たくさん買って帰るからね』

『へーへー』

今日くらいは自分達を優先しろよと言いたかったが、どうせ無駄だと思っただけ俺は適当に二人を送り出した。そして——これが俺と両親が交わした最後の言葉だった。

夜の八時を過ぎても帰って来ない両親を流石に不審に思った俺の元に一本の電話が入った。相手は病院の人間だった。次の瞬間、相手の発した言葉に俺の頭は真っ白になった。

『落ちついて聞いてください。・・・あなたのご両親が亡くなりました』俺はすぐさま家を飛び出し病院へ向かった。息を切らせながら飛び込んだ俺を待っていたのは、医者と警察。父さんと母さんの仕事仲間達。そして・・・冷たくなった両親だった。

寝溜めしてやろうと半日以上ベッドで横になっていた俺は、隣町で発生した事件・・・一人の男による無差別殺傷事件の事を知らなかった。父さんと母さんはそれに巻き込まれたのだ。

『キミのお父さんとお母さんは、それぞれ襲われそうになった女子高生と男の子を庇って犯人に刺されたんだ』

父さんは女子高生の盾になって心臓を一突き。そして母さんは、男の子に覆いかぶさってその背中を十数か所も刺されていた。それでも、最後まで男の子を守りきった。

警察の人の説明を、俺は他人事の様聞いていた。後から父さんの同僚の人に言われたが、この時の俺はまるで人形のように生気が感じられなかったらしい。頼るべき親類もない。俺はこの日、天涯孤独の身となったのだ。

それから二日後、父さんと母さんの葬儀が執り行われる事となった。十六のガキに式場の手配出来るはずも無かったが、父さんと母さんの同僚の方達が手伝ってくれたおかげで何とか形だけは整える事が出来た。

式の開始が数分後に迫る中、俺は式場の最前列の席の端に座って、両親の遺影を見つめていた。同僚の方達はずっと泣いていたが、俺は両親が死んでからこの日まで全く泣けなかった。

『・・・だから言ったんだよ。他人なんか助けたって何に意味も無かったんだよ・・・!』

感情がぐちゃぐちゃに混ざり合い、吐き気すら催した。もういい。こんな式さつきと終わらせてくれ。・・・そんな風に思っていた時だった。父さんの上司だった人が慌てた様子で式場に飛び込んで来たの

だ。

『た、大変だ亮真君！　すぐに来てくれ！』

何事かと思つて式場の外へ出た俺は目を見開いた。式場の前には、大勢の人が長蛇の列を作っていたのだ。式場のスタッフ総動員で誘導や整理を行っている。

『この人達は・・・？』

『参列者だよ。キミのご両親の葬儀に・・・これだけの人が集まつたんだ！』

『え・・・』

その言葉はとても信じられるものでは無かった。ウチの親は有名人も何でも無いただの一般人だ。その葬儀にこれだけの人数が集まるわけが無い。どう見ても百や二百で収まる数じゃ無かった。

そして葬儀が始まった。これだけの人数を収容するのは不可能だという事で、焼香だけしてもらう事になった。

俺達が済ませた後、最初に現れたのは両目から涙を溢れさせた女性だった。

『泰葉ちゃん。私です。高校の時、あなたと同じクラスだった香里です。虐められていた私を、あなただけが助けてくれた。あなたがいなければ、私は自殺してたかもしれない。あなたは私の命の恩人。・・・そんなあなたがどうして・・・！』

それ以上言葉に出来ないのか、女性は嗚咽しながら焼香する。それを済ませて振り返り、去り際に俺の前に立った。

『あなたのお母さんは本当に優しい人だった。ありがとう。本当にありがとう・・・！』

『あ、い、いえ、別にお礼なんか・・・』

女性は深々と一礼し去つて行った。次に現れたのは、やけに凄みのある、頬に傷を持つ男性だった。

『・・・よお、兄弟。まさか、俺よりも先に逝っちゃうとはな。だがまあ、他人を守つて散るなんざ、お前らしい最期だと思つて』

男性は父さんの遺影を眺めながら喋り続ける。

『きつかけは勘違いだが、お前はウチのオヤジを守つてくれた。それ

からずつと、お前は俺の組の恩人だ。あの野郎がどういう刑になるかわからんが、万が一クソみてえな判決だったその時は・・・俺達が落とし前をつけてやるからな』

背筋が冷たくなるほどの声でそう言い、男性が俺の前に立つ。

『・・・お前さんがアイツの息子か』

『は、はい。あの、父とはどういうご関係で？』

『恩人だよ。お前さんの親父は・・・強く生きろよ。アイツの息子なら、どんな荒波だって乗りこなせらあ』

ポンと俺の肩を叩き、男性は去って行った。結局、父さんとこの人の中に何があったのかは知る事は出来なかった。・・・まあ、知らない方がよかつたんだろうけど。

それ以降の人達も、父さんか母さんに何をしてもらったか、どう助けてもらったかを語り、去る時には俺にお礼を言って来た。そこでようやく俺は気付いた。式場の前に集まった人達・・・その全てが父さんと母さんが助けて来た人達だったのだと。

『・・・なに言つてんだよ。なに泣いてんだよ。アンタ等は父さん達を利用してたんだろ。馬鹿にしてたんだろ。なのに・・・何で感謝してんだよ。何で・・・何でそんなに悲しそうに泣いてんだよ・・・！』
これじゃあまるで、父さん達が正しかったみたいないない感じがしないか・・・。

『達人・・・お前が貸してくれた金で興した会社。やつと軌道に乗ったよ。これでやつと、お前に恩返しが出来るって思ってたのに・・・こんなのってねえよお！』

後日、この人は貸していた金に加え、さらに巨額の謝礼を俺の所へ持って来てくれた。

気付けば、残りの参列者は六人。それは、父さんと母さんが守った女子高生と男の子、そしてその家族だった。

『私達の娘を、あなたのお父さんが命をかけて守ってくださいました。私達家族は、あなたのお父さんの事を一生忘れません！』

『何度も刺されて苦しかったはずなのに、あの方は息子を庇い続けてくれた。この気持ちは、言葉に出来るものではありません・・・』

土下座する勢いで頭を下げて来るその人達を見ている内に、俺の頬を熱い何かが流れて行つた。

『亮真君、神崎はよく言つていたよ。「自分は特別な才能もない凡人だ。そんな自分だからこそ、人として真つ直ぐに生きていきたい。助け合う事の大切さ・・・それだけが自分が息子に教えられるたった一つの事だ」とね』

——困っている人がいたら、よほどの事が無い限り助けてあげなさい。それがお前自身の幸せに繋がるはずだ。

『意味が無かつたわけじゃない・・・。自己満足だつたわけじゃない・・・』

この瞬間、俺はやつと理解出来た。二人のやって来た事はずっと繋がつていたんだ。あれだけの人達が父さんと母さんの為に泣いてくれた。確かに利用していたヤツもいたのは間違い無いだろう。けれど、純粹に父さんと母さんに感謝していた人達も確かにいたんだ。ここに来てくれた人達はみんな二人に感謝していた。それは・・・父さんと母さんの優しさが紡いだ絆があつたからだ。誰が言つたかはわからないが、人の価値はその人間が死んだ時にどれだけの人が泣いてくれるかでわかるらしい。それに当てはめるならば、俺の両親は・・・間違い無く立派な人達だつたんだと思う。

『あ、あの・・・』

女の子が俺の前に立つ。今にも泣きだしそうな顔になっていた。

『ゴメンなさい・・・。ゴメンなさい・・・。私の所為で、私の所為であなたのお父さんが・・・！』

『・・・いいんだ。きつと父さんはキミを守れて満足したはずだ。・・・だから、キミは精一杯生きてくれ。父さんも、きつとそれを望んでいいはずだ』

『ツ・・・！ う、うう・・・！』

『僕も・・・僕も精一杯生きる！ 僕を守つてくれたおばちゃんの分もたくさん頑張る！』

男の子の決意が籠つた視線が俺を射抜く。母さん・・・。母さんの思いは、この子の中に残つてるよ。

そしてこの日から俺は誓ったんだ。父さんと母さんの様に、俺も人に手を差し伸べられる人間になるのだと。それが・・・あの二人の間に生まれた俺が成るべき姿なのだと。

それこそが俺の・・・「お節介が服を着て歩いている」と揶揄される神崎亮真という人間の始まりだった。それからの事は・・・まあ思い出す必要も無いだろう。

「——それが、今のアンタの根源なんやな」

回想を終えた俺の背後・・・部屋の入り口にオカンが立っていた。

「ここは、アンタの心の最奥の世界。アンタが大切にしまいこんでいた記憶の世界や」

そうか、このアルバムやあの声はそういう事だったのか。

「アンタの精神は大きなショックを受けた。その所為で、こんな場所まで意識が落ちて来てしもうたんや」

精神に大きなショック・・・？

——・・・ええか。落ち着いて聞くんやで。アンタの後輩が・・・。

「ツ・・・!?!」

その瞬間、全ての記憶が蘇って来た。俺はオカンに詰め寄る。

「どういう事ですか！ 何で兵藤君が死なないといけないんですか！

俺が知らない間に彼に何があつたって言うんですか！」

「あー・・・実はその事なんやけど・・・。ウチもな、いきなり言われて慌ててもうたんよ。せやから、ロクに確認もせずにアンタに伝えてしもうたんやけど・・・。」

「何ですか!?! 言いたい事があるならハッキリ言つてください！」

「・・・あの子、生きとつた」

「・・・はい?」

「せやから・・・イッセーちゃん、生きとつた」

.....
フアツ?

「あれからすぐ、別の子がウチの所に来てな。そう教えてくれたんよ。その・・・最初に来た子はちよつとおつちよこちよいな所があつてな。それでつい・・・。」

俺はオカンの肩を力一杯握り締めた。

「痛い痛い痛い！　ちよ、食い込んどる！　指がえげつないくらい食い込んどるってえ！　おかしいわ！　ウチ、神様やから痛み感じへんはずやのにい！」

「・・・人の死を冗談に使わない。あなたはそう言いましたよね・・・？」

「ちやうんや！　あの時はウチもそう思ってたからああ言っただけで！」

「では・・・改めて納得の行く説明をしてもらいましょうか・・・」

（あ、これアカンわ・・・）

第百六十一話 反撃の狼煙

イツセーSIDE

「・・・イツセー」

「・・・誰かが俺を呼んでいる。その声は、今にも消えてしま
いそうなほど儂く、弱々しいものだった。」

「起きて・・・。起きてちようだいイツセー・・・」

「・・・エルシャヤ——!?!」

目を覚ました俺の目に飛び込んできたもの・・・。それは、体の半
分以上が透けているエルシャヤさんの姿だった。

「か、体が・・・!?! どうしたんですかエルシャヤさん!?!」

「サマエルの毒よ。あれが私の魂を消滅させようとしているの・・・」

サマエル・・・? ツ! そうだ! 俺はシャルバからサマエルの
毒を塗った矢を受けて・・・! というか消滅!?! 何でそんな事に!?!
「ベルザードや他のみんな、そして白龍皇の彼は先に逝ったわ。彼等
は、あなたの魂が消滅するのを防ぐため、サマエルの毒を引き受けて
消えていったの」

「お、俺は死んだんじゃ・・・」

「いいえ。あなたはまだ死んでいないわ。あなたの肉体は消滅したけ
れど、魂は『赤龍帝の鎧』に定着させる事が出来たの。そして今、無
幻と無限・・・グレートレッドとオーフィスの力で、あなたの新たな
肉体を創り出している最中よ」

「フアツ!?!」

さつきから衝撃的な言葉ばかりで頭が追いつかない。グレート
レッド!? オーフィス!? アイツはシャルバに連れて行かれたはず
じゃ・・・!!

「あの子、転移直前になって抵抗したのよ。そのおかげで、あなたと仲
良くグレートレッドに次元の狭間へ運ばれたってわけ」

「そ、そうだったのか。で、でもどうしてあの場にグレートレッドが
?」

「・・・それは、私の口から言う事じゃないわ」

ええ!? ここまで来て黙秘って勘弁してくださいよ!

「・・・さてと、伝える事は伝えたいし、そろそろ私も逝くわね。後の事はドライブに教えてもらいなさい」

「え、いや、ま、待つてくださいよ・・・。行くつてどこに・・・」

「さつき言ったでしょ。歴代の所有者達はサマエルの毒と共に消えて行っちゃった。私だって例外じゃないわ。あなたが目を覚ますまで何とか耐えられたけど、もう限界みたい」

俺の見つめる先で、エルシャさんの両足が完全に消滅する。

「みんな、最後まであなたの事を想いながら消えて行っちゃったわ。あなたなら自分を越えられる。あなたならいつか紅の先へ至れるかもしれない。笑顔でそう言い残してね」

「・・・なんだよそれ。そんなん、俺に直接言えばいいじゃないですか! 何で・・・何であの人達が消えねえといけないんだよ! あの人達がいたから強くなれたのに、あの人達がいたから頑張れたのに、俺は・・・まだあの人達に何のお礼も出来て無——」

瞬間、俺の唇にエルシャさんの唇が重なる。・・・え? 俺いま・・・キスされてるうううううううううう!!?!?

「・・・いつか、キスしてあげたいって言ったでしょ? あの時のお言葉は嘘じゃなかったのよ?」

「エ、エ、エル、エルシャさ・・・」

「お礼ならもう十分もらっているわ。私達の誰もが辿りつけなかった紅の極致。あなたはそれを見せてくれた。かつての赤龍帝として、あなたの先輩として、これ以上に嬉しい事は無いわ」

エルシャさんの手が俺の頬を撫でる。その指が先端から消え始めた。

「ふふ・・・。最初の頃は頼り無い弟みたいに思っていたのにね。今のあなたは、もう立派な男よ。あなたの夢の果て・・・私も見たかったわ」

「なら・・・なら見ててくださいよ! これからも俺を導いてくださいよ! こんな別れ・・・俺は嫌ですよ!」

「ゴメンなさい・・・。でもイツセー。あなたは一人じゃないわ。あな

たにはいい仲間がたくさんいるわ。彼等と一緒になら、あなたはきつと大丈夫」

消滅がついに胸の位置へ辿り着く。嫌だ！ 消えるな！ 消えないでくれエルシャヤさん！

「さようなら、イツセー……。あなたと出会えて、本当に楽しかったわ……。」

「エルシャヤさああああああん！」

イツセーSIDE OUT

祐斗SIDE

中級悪魔への昇格試験、そして英雄派及び死神達の襲撃から二日後、僕はグレモリー邸にいた。フロアに備え付けの大型テレビには巨大な魔獣の姿が映し出されている。あの空間でシャルバ・ベルゼブブの外法で生み出された魔物だ。

『きげんよう！ 下劣な悪魔諸君！ 私はシャルバ・ベルゼブブ！ 諸君に破壊と死を与える“毒”である！』

シャルバ・ベルゼブブは電波ジャックによる犯行声明を出した。それを聞いた僕は愕然とした。『彼』が仕留め損ねるわけが無い。あの戦いは相討ちで終わったんだとばかり思っていたのだから。

しかし、映像の向こうであるの男はそれを否定した。

『私が生み出した魔獣は全部で十三体！ 一体でも街を破壊できる強さと大きさだ！ その全てが現在、各重要拠点及び都市部へ向けて進撃中である！ 果たして諸君に止める事は出来るかな？ ……そうそう、諸君等の大好きなフューリーや赤龍帝の助けを期待しても無駄だよ？ 忌まわしきあの騎士は『禍の団』によりこの世界から消え去り、赤龍帝は…。私がこの手で始末したのだからね！』

アザゼル先生の言った通り、敵は先輩を策に陥れた事を吹聴した。おかげで冥界の上層部は市民達から説明責任を果たせと詰め寄られる事となった。

自慢気に高笑いするシャルバ・ベルゼブブを見て、僕は今すぐ首をはね飛ばしたい衝動に駆られた。だが、あの男は犯行声明後、全く姿

を見せていなかった。

テレビに映る魔獣は人型の巨人の様な姿をしている。体長は優に百メートルは超えているだろう。これは全ての魔獣に共通している事だった。

そして、その中で群を抜いて巨大な魔獣が魔王領の主都であるリリスへと向かっている。冥界政府はこの魔獣を『超獣鬼』、その他の十二体は『豪獣鬼』と呼称した。テレビの向こうで最上級悪魔とその眷属の方々が魔獣に攻撃を加えるが、魔獣はまるで意に介した様子も無く進撃を続ける。あれほどの強力な攻撃であろうとも、魔獣の体の表面にしかダメージを与えられていない。

悪魔だけでなく、墮天使部隊、天界の『御使い』、ヴァルハラ of ヴァルキリー部隊、そしてギリシヤの戦士達が共に戦ってくれているおかげで、何とか踏みとどまれている状況だ。

あの「皇帝」デイハウザー・ベリアル of チームですら、『超獣鬼』を止める事は出来なかった。民衆の不安はさらに煽られる。加えて、この混乱に乗じて旧魔王派の者達がクーデターを頻発させていた。おそらく、シャルバ・ベルゼブブに呼応した者達なのだろう。

『超獣鬼』と『豪獣鬼』の迎撃に魔王様方の眷属が出撃されるようだぞ」

背後からかけられる声。テレビに集中していた所為で接近に気付かなかった。僕がそちらへ顔を向けると、そこにはかつて僕達と勝負を繰り広げた相手・・・ライザー・フェニックスが立っていた。以前の様な派手なスーツ姿だが、その首には何故かマフラーの様に炎が巻かれていた。

「兄貴の付き添いでお邪魔した。ホテル以来だな木場祐斗」

「そうですね・・・。部長には会いましたか？」

「これから会いに行くつもりだ。・・・お前から見てリアス達の様子はどうか？」

「・・・最悪ですよ。柱だった二人がいなくなっちゃったんですから」

「・・・悪い。無神経な質問だったな」

頭を下げるライザー・フェニックス。僕達と戦った時とは雰囲気

すっかり変わっていた。こうして僕相手に躊躇い無く頭を下げるのがその証拠だ。

「お前も一緒に来るか？」

「そうですね。なら案内します。みんな集まってるはずですから」

「頼む」

「それじゃあ僕について来てください。．．．それと、今さらな質問ですが、その首の炎は？」

「カッコいいだろ？」

カッコいいかどうかは別にして、室内で炎は出さない方がいいと思いますよ。

ライター・フェニックスと共に部長達のいる部屋を目指そうとしたその時。またしても見知った人物が僕の前に現れた。

「よお、木場。それに．．．そっちはライター・フェニックスさんじゃないですか」

「匙元士郎か」

「ありや、俺の事知ってるんですか？」

「シトリー眷属の中で最も警戒すべき者．．．それがお前だからな。いづれゲームでぶつかるともかもしれんし、今から調べるのは当然だろう」

「ほへー。さすがプロっすねえ」

「匙君。キミも来てたのか」

「会長がリアス先輩の様子を見に行きたいって事で、付き添いき。．．．木場、俺は今回の防衛戦に参加するぜ。都市部の一般悪魔のみんなを守る」

「．．．そうか。僕達もおそらく合流する事になると思うよ」

「．．．大丈夫なのか？」

匙君の心配は最もだ。だけど、それでも行かなければならない。

「力ある者は力無き者を守る義務がある。辛くとも、戦わないといけない時もある」

ライター・フェニックスが真剣な声色でそう言う。その通りだ。きつと先輩や「彼」もこの場にいたら同じ様な事を言っていたはずだろう。

『』『』だから、ゼーんぜんこわくないんだ!』『』『』

「ツ……!」

満面の笑みでそう声を合わせる子ども達を見て、僕は込み上げて来たものを必死に抑えていた。

「子ども達は……信じてるんだな。先輩や兵藤達の事を……!」

「ふん。俺の名前が出ないのが納得出来んが……まあいい。いずれ冥界の子ども達にライザー・フェニックスの名を轟かせてやるぞ! ふははは!」

「——俺達が思っている以上に、冥界の子ども達は強い。こういったものを見せられると、そう思い知らされるな」

その男はいつの間にか僕の隣に立っていた。さつき子ども達の言葉。一人目は先輩、二人目はイツセー君、そして、三人目はこの男……

「しかし……俺の呼称は今後ライオンさんで統一されるのだろうか?」

サイラオーグ・バルその人だった。

……
……

ライザー・フェニックスに匙君、そこへサイラオーグ・バルが加わった所で、僕達は改めて部長達がいる部屋を目指して歩き始めた。そして、目的の部屋まであと少しとなった所で、突然の怒声が僕達に届いた。

「もう一回言ってみなさいよ!」

「今のは……」

「どうやら、穏やかな雰囲気では無さそうだな」

扉を開け部屋へ入る。僕の目に飛び込んで来たのは、部長の胸倉を掴みあげている黒歌さんの姿だった。な、何だ。何が起こったんだ!?

周囲を見渡す。グレモリー眷属にアーシアさん、レイヴェルさん。ソーナ会長、神崎先輩の眷属であるレイナーレさん達。さらにはバラキエルさんに、ライザー・フェニックスの兄であるルヴァル・フェニックス氏。多くの人達がハラハラした表情で部長達を見守っていた。

「お、落ちついてください姉様……!」

「白音は黙ってて。リアス、アンタ自分がいま何を言ったかわかっているの？ 禁術の情報収集と調査・・・上層部の悪魔達はそれを断った。今は冥界の危機。だから人員を割く余裕は無いとか何とか尤もらしい事をほざいてるけど私にはわかる。あの連中はこれを期にご主人様を排斥するつもりなんだ。今までさんざんご主人様に助けてもらって来た癖に！ 自分達のくだらない面子を取り戻す為にご主人様を見捨てる気なんだ！」

「・・・本当ですか、兄上？」

「事実だ。上層部の者達はフューリー殿がいなくとも魔獣は倒せるとの声明を先程発表した。もちろん、自分達は戦いには出向かず、すでに安全な所にいるがな」

ライザー・フェニックスにそう答えるルヴァル氏。それが黒歌さんには許せないのだろう。僕も同じだ。上層部の考えにはほとほと呆れてしまう。だけど、それがどうして部長の胸倉を掴む事に・・・？ 「そうね。黒歌、あなたの言うとおりでしようね。・・・でも今は、そんな事はどうでもいいの。重要な事じゃないわ。私達が考えないといけないのは、どうやってあの魔獣達から冥界を守るかについてよ」 「・・・何なのよアンタ。何で・・・何でそんなに普通でいられるのよ！ アンタ、グレモリーでしょ！ なのに・・・自分の好きな人と眷属を失って、どうしてそんな冷静でいられるのよ！」

・・・それは僕も思っていた。今にして思えば、部長はずっと冷静だった。先輩がいなくなった日から今日までずっと落ちついていた。神崎先輩とイツセー君を失い、絶望のどん底に突き落とされた僕達の中で、ただ一人冷静に物事を対処しようと努めていた。先輩を愛し、誰よりも僕達を愛してくれていた人が、大切な人を失ったショックをまるで感じていないようだった。

黒歌さんの責める様な言葉を受けても、部長は表情を変えない。そして次の瞬間、信じられない言葉を口にしたのだ。

「だって・・・心配するだけ無駄じゃない」

部長・・・!? なんて事を・・・!!

「ツ・・・!! お前ええええええええええ!!」

「姉様！ ダメえ！」

拳を振り上げる黒歌さん。それが部長の顔にぶつかろうとしたその時——部長は怯む事無くこう宣言した。

「私は信じているもの。あの人は……リョーマは必ず帰って来るって」
「え……？」

ピタリと、黒歌さんの拳が止まる。拳圧で部長の長髪がふわりと撒き上がる。それを掻き上げながら、部長は黒歌さんに問いかけた。

「ねえ、黒歌。リョーマは何者？」

「……何よ急に」

「いいから答えて」

「……ご主人様はご主人様よ。伝説の騎士で、強くて優しい私の大好きなご主人様よ」

「そう。リョーマは二天龍を退けた伝説の騎士フューリーよ。そして、かつて別世界を救った鋼の救世主……。黒歌、あなたも見てきたでしょ？ どこまでいっても人間である彼が、悪魔、天使、そして堕天使の常識をことごとく越えて行く姿を。そんな彼が、たかがテロリストの姦計ごときに屈すると思う？」

「それは……」

「そこそありえないわ。時間？ 空間？ リョーマはそんな物で縛れる様な人じゃないもの。時間を越える術が無いのなら、編み出せばいい。彼ならきつとそれぐらいやってのけるわ。だから私は信じてる。あの人は……リョーマは絶対に私達の元へ帰って来てくれるって」

「部長さん……」

「イツセーだって同じよ。あの子は私の……リアス・グレモリーの自慢の眷属よ。あの子は守れない約束をする子じゃない。あの子が帰るって言ったのなら、絶対に帰って来るわ。たとえ駒だけが帰って来たとしても、私はあの子の『王』よ。『王』が眷族を信じないでどうするのよ」

真紅に染まった『兵士』の駒を懐から取り出し、みんなへ見せつける様にそれを持つ部長。その瞳には、迷いも、恐れも、悲しみも存在

していなかった。

「二人は絶対に帰って来る。だから心配するだけ無駄なのよ。それよりも、二人が帰って来た時に不甲斐無い姿を見せてしまう方が私には耐えられないわ」

その言葉にはなんの根拠も無い。・・・けれど、その言葉はどこまでも説得力に満ちていた。沈んでいた仲間達の顔から絶望の色が少しずつ消え始めた。

それにね・・・と部長は傍にいた朱乃さんを抱きしめた。

「リ、リアス・・・？」

「・・・私の悲しみはあなた達の悲しみ。私の怒りはあなた達の怒り。朱乃・・・あなた達が私の分まで悲しんでくれる。私の分まで怒ってくれる。だから私は泣かなくていい。怒りに身を任せたりしないでいい。あなた達の『王』として・・・どこまでも冷静でいられるのよ」
慈愛と力強さが溢れだす笑顔を浮かべる部長。——僕達の敬愛する、誇り高き『王』がそこにいた。

「・・・見事」

ルヴァル氏の呟きが耳に入る。レーティングゲームでトップ十に入った事もあり、近々最上級悪魔へ昇格すると噂されるほどの人物が、部長に賛辞を贈ったのだ。

「くく・・・はははは！ リアスよ、兵藤一誠の熱血が移ったのではないのか？」

「そうかもしれないわ。リョーマとイツセー・・・あの二人が私を変えてくれたもの」

「ならば、俺は先に戦場でお前達を待つ事にしよう。だが、ぐずぐずしていたら俺が全て屠ってしまうかもしれないぞ。それを異とするならば、すぐに追いかけて来るがいい！」

用は済んだとばかりに、サイラオーグ・バアルは踵を返し部屋を出て行った。・・・もしかしたら、彼は部長を励まそうと来てくれたのかもかもしれない。

「獅子王に負けてはいられない。弟よ、私達も出るぞ」

「お任せください兄上！ このライザー・フェニックス、たとえ相手が

何であろうと、我が業火の翼で全て燃やしつくしてやりますとも！」
「・・・ようやく愚弟を卒業したと思ったが、どうやら馬鹿からはまだ卒業出来そうにないな」

「なんですとお!? 兄上、どういう事ですか!?!」

「リアスさん。そちらの机にフェニックスの涙を置いてある。数が少なくて申し訳ないが、役立ててくれたまえ」

「はい。お心遣い感謝いたします」

続けて部屋を出るフェニックス兄弟。不死身のフェニックスはきつと前線の心強い戦力になるのだろう。

「リアス・・・私・・・」

「何も言わないで黒歌。私の言い方が良く無かった所為で嫌な思いをさせてしまつてごめんなさいね」

「・・・先に言うなんてずるいにや」

頬を膨らませて不満をアピールする黒歌さん。もう二人の間に険悪なムードは無い。黒歌さんも、先輩の帰還を信じる事にしたんだろう。

「さあみんな、これから忙しくなるわよ。とりあえず戦いに備えて各々準備して・・・」

「いえ、その前に休息です」

ソーナ会長が部長の言葉を遮る。

「ソーナ? 休まつてどういう事?」

「あなた達は気付いていないかもしれませんが、みんな憔悴した顔をしています。おそらく、ロクに睡眠も取れていなかったのでしょう。ですから、まずは体と心を落ち着かせる事が必要です」

「そう・・・かしら? まあ、あなたがそう言うならそうなんでしょうね。なら三十分・・・いえ、一時間くらい休憩時間にしましょう。時間になったらフロアに集合よ」

そこで一旦解散となり、みんなが部屋を出て行く。そして、僕が部屋を出て行くとしたその時、背後から部長とソーナ会長の会話が聞こえて来た。

「リアス。あなたはここで休んでください。今から一時間・・・この部

屋には誰も近寄らせません」

「・・・どういう事?」

「・・・眷属達の前で、あなたはよく頑張りました。でも、一人でいる時まで『王』でいる必要はありません。もう我慢しないで。溜まってるものを吐き出してください」

会長はそう言つて僕と共に部屋を出た。すると、数秒も経たず中から部長の嗚咽が聞こえて来た。

「うう・・・リョーマ・・・イツセー・・・」

「・・・本当なら、誰よりも泣き叫びたかつたはず・・・。ですが、リアスはそれをよしとしなかった。あなた達の前で必死になって『王』で在り続けた。・・・敵いませんね」

ツ——！ 部長・・・あなたは、あなたという人は、自分の心を殺してまで僕達を励まそうと・・・！

——おいおい。お前まで残ったら誰が部長達を守るんだよ。木場、お前はグレモリー眷属の『騎士』だろ？ 俺がいない間ちゃんど部長達を守ってくれよ。

・・・任せてくれ、イツセー君。部長達は僕が命をかけて守る。だから、キミも早く戻つて来てくれ！

祐斗SIDE OUT

イツセーSIDE

「・・・」

「・・・」

「・・・あの、エルシャさん?」

「・・・何かしら?」

「俺、たった今悲しい別れをしたと思つたんですけど」

「ええ」

「じゃあ・・・なんであなた消えて無いですか!? そんなもつて、あなたの後ろに立っているベルザードさん達は何なんですか!」

エルシャさんが完全に消滅しようとした次の瞬間、彼女は消えるどころか完全に元の姿に戻っていた。それだけじゃない。俺を守つて

エルシヤさんが消えなくて、消えたはずの歴代の所有者が全員戻って来て、拳句の果てには神崎先輩!? どんだけカオスな状況だよおおおおおお!!!

声にならない叫び声に、俺の体の周囲で再び大量の泡が発生するのだった。

第百六十二話 今の僕達には勢いがある

オカンからJ I J Y O UをT Y O U S Y Uした俺は、彼女の力での記憶世界から現実に戻って来た。・・・それにしても、まさかここが過去の世界だったとはな。どうりで家が無いわけだ。

『そ、それで、どうするつもりや?』

オカンが妙におっかなびつくりな声色でそう聞いて来る。そんなの兵藤君に会いに行くに決まっているじゃないですか。生きているのは間違い無いけど、危険な状況なんですよ?

『なら、ウチが責任もってアンタを・・・って、どこ行くんや?』

俺は駅前から最初の公園へ移動した。深夜の時間帯、辺りに人の影は全く無い。ここでなら人目につく事も無い。

「・・・始めるか」

『始めるって・・・何を?』

試したい事があるんですよ。もし、また鬼畜ペロリスト共が同じ手を使って来た時、今回の様にオカンがいない状況でも連中に対抗出来るようにする為に。

公園の中心でラフトクランズモードとなる俺。時間と空間・・・元々この機体にはそれに干渉出来る機能が搭載されている。これまでの経験から、それを模したこの姿にも同じ機能が搭載されているのは確認している。

なら・・・この力を使えばオカンの力を借りなくとも、元の時代に戻れるのではないのか? もちろん、これはあくまでも俺が勝手に思った事だ。元のゲームでも時間を停止させたり、それを解除する機能と説明されているだけで、時間を進めたり巻き戻したり出来るとは一言も言っていない。しかし、あえて言わせてもらおう。それがどうした・・・と。俺のカッコいいラフトクランズに不可能なんてあるわけが無い!

「必ずやれる・・・行けるはずだ・・・!」

———そうだ! 限界を決めるのは他人じゃない、いつも自分自身なんだ!

メージ通りの力を発揮できるとはいえ、既に存在している能力を自分の望むままに改変するなど、よほどの意思の力が働かない限り出来るものではないのだとか。

「つまり・・・シユウゾウに不可能はないという事ですね」

『いやその理屈はおかしい』

えー、でもスパロボだってピンチの時は大体熱血と根性でなんとかするし・・・はっ、という事は、シユウゾウを参戦させたらその時点で勝利確定!? そうか、彼が本当の勝利の鍵か！

さて、とりあえず兵藤君を探しに行かないとな。見た限りかなり広大みたいだし、このままラフトクランズモードで飛んで行こう。

そんな感じで、俺は兵藤君の探索を始めるのだった。・・・後から聞いた話だが、俺が転移する直前、あの公園周辺の温度が二、三度上昇していたらしい。

『・・・何やろう。このいつの間にかウチの手を離れて行ってしまった様な感じ・・・』

S I D E O U T

祐斗 S I D E

その方がこちらにいらつしやつたと聞いたのは、僕がソーナ会長と別れてすぐだった。訪問の理由は・・・おそらく「彼女」の呪いを解く為だろう。

グレモリー邸の地下に位置する部屋・・・そこにいたのはヴァーリさんとその仲間達だった。共にあの空間から脱出して以降、グレモリー卿の計らいで彼女達を匿って頂ける事になったのだ。決別したとはいえ、今はまだテロリストの立場である彼女達を匿う事は下手をすれば大問題に発展してしまう恐れがあるが、それでも卿は受け入れてくださった。

部屋に入ると、ヴァーリさんチームの面々。そして、小柄なご老体・・・京都での戦いで援軍に来てくださった初代孫悟空様の姿があった。

ベッドで上半身を起こすヴァーリさんの体に手を当てる初代様。

その手が白く発光している。闘気が満ちている証拠だ。

闘気の満ちた手をヴァーリさんの腹部から胸、胸から首、そして口元へ移して行く。すると、ヴァーリさんの口から黒い塊がごぼりと吐き出された。初代様はそれを容器に入れ札を貼った。これは・・・封印処理だ。という事は、今の塊こそがサマエルの毒？

「ふいー。これで呪いは取り除けたわい。少し休めば体も楽になるだろうよい」

「おいクソジジイ。ヴァーリはちゃんと治るんだろうな？」

「やれやれ、ちよつとは劳いの言葉くらい寄越さんか。・・・ま、この娘っ子にや切っ掛けさえ与えりや十分だろうさ」

「・・・ありがとう。初代様。だけどね・・・」

その瞬間、ヴァーリさんの拳が初代様の顔面に叩き込まれた！ ええ!?! 何してるんだいきなり!?!

「どさくさにまぎれて人の胸を揉んだのはちよつと頂けないわね」

「かかか、すまんすまん。普段から色々曝け出しまくつとるからお触りOKかと思つとつたぞい！ いやー、ワシとした事が、ついこう揉み揉みつと」

鼻血を垂らしながらも、笑顔で両手をワキワキされる初代様。・・・なんだろう、この何とも言えない残念な感じ。さつきまでの威厳が台無しだ。

「このスケベジジイが！ 用が済んだんならさっさと出ていきやがれ！」

「ふん、お前が呼んで来たくせによくもまあそんな失礼な言葉が吐けるのお。・・・まあいい、元々ワシもテロリスト駆除の為に天帝に遣わされた身じゃしな。今回の件は・・・まあ、ハーデスのヤツがやり過ぎたんだろうぜい」

そう言いながら出て行こうとする初代様。そのタイミングで僕は話を切り出した。

「お待ちください初代様。僕に少しお時間を頂けないでしょうか」

「ん？ 何だい聖魔剣の。聞きたい事でもあるのかい？ このジジイでよければ答えてやるぜい？」

「たった今、サマエルの呪いに触れたあなたに訊きます。この呪いを受けたドラゴンが生き残れるとして、それはどの様な状況なのかを」
仙術と妖術を極め、神格化までされた斉天大聖孫悟空。この方ならば答えを持つているかもしれない。

「そうさな．．．まず肉体は間違い無く滅ぶだろうぜい。そうなりや次は魂だ。器を失った魂の脆さってのはウエハース菓子に迫る勢いだからな」

「ですが．．．」

「お前さんの言いたい事はわかるぜい。．．．だったら、どうして魂と連結しているはずの悪魔の駒が無事だったのか。お前さん達によって召喚された赤龍帝の駒からはサマエルの呪いは検出されなかったんだろう？」

「は、はい。アザゼル先生が確認しました。けど、どうしてそれを．．．？」

「ジジイってのはどいつもこいつも地獄耳なんだぜい？　つまり、駒が消滅していないってえ事は、少なくとも魂は無事な可能性があるって事さねい。あの気持ちのいい坊主がどんな状況になっているかは分からんが、疑似フィールドの崩壊に巻き込まれて、そのまんま次元の狭間のどこかに漂ってたりしてるんじゃないかねい。．．．お前さん達も、あの坊主が死んじまったなんて欠片も思っっていないんだろう？」

「もちろんです！」

間髪入れずに頷く僕を見て、初代様は優しく笑みをを見せて踵を返した。

「若いモンは真っ直ぐでいいもんだねい。それじゃあ、今度こそワシは帰るぜい。外に玉龍を待たせたまんまなんぞねい。．．．美猴、おめえさん達はこれからどうするつもりだい？」

「私はこれからもヴァーリ姉様について行きます！」

「もはや『禍の団』には何の興味も未練もありませんからね。彼女と一緒にいた方が、より強者と戦える機会もありますから。ルフエイ同様、私もヴァーリとの付き合いを続けますよ」

「俺っち達みたいな連中を指揮出来るヤツなんざ、コイツだけだしな。これからもよろしく頼むぜ露出大好きな我等がリーダー！」

「あなた達……」

……正直、「露出大好き」の部分はカットしても良かったと思うが……。まあ、美猴なりの照れ隠しなのかもしれないな。

「種類の違いはあるが、今代の二天龍は他者の心を惹き付ける何かを持っている。面白い……やっぱりお主等は面白いヤツ等じゃよ」

それだけ言い残し、初代様は今度こそ退出して行った。

「……ヴァーリさん、これからキミ達はどうするつもりなんだい？」
「そうね……。前はロクに力を振るう事も出来なかったし、その分も合わせて誰かにぶつけてみるのもいいかもね」

「それは……先輩やイツセー君の為にかい？」

「仇討ちとでも言いたいのか？ あのと二人は負けた。それだけの事でしょ」

そうだね。強さを第一に考えるキミからすればその通りだ。けどそれなら……。どうしてキミの顔はそんなにも怒りで満ち満ちているんだい？

「……そうよ。この胸に渦巻く怒りは、あの二人とは関係無い。関係無いはずなのよ……」

その言葉からは……。純粋な殺気だけが感じられた。

……
……
……

「祐斗さん、こちらにいたのね」

ヴァーリさん達の滞在する部屋から出て上に戻った僕に、グレイフィア様が声をかけて来た。プライベートモードなのか、口調が普段より柔らかい。普段のメイド服では無く、戦闘服を身につけていらっしやるという事は、これから出陣されるのだろうか。

「グレイフィア様、前線に出られるのですか？」

「ええ。サーゼクスは別行動の為、私が他のルシファー眷属を指揮して戦います。狙うは魔王領の主都に向かっている『超獣鬼』。歩みだ

けでも止めてみせるつもりです」

凍り付けや強制転移、さらには落とし穴等、迎撃部隊の方達はあらゆる方法で魔獣達の進行を封じようとしているが、そのことごとくが失敗に終わっている。それらの術式を無効化する呪法が組み込まれているのではないだろうかと考えられていた。それでもこの方達なら・・・悪魔の中で最強と名高いルシファー眷属のみなさんなら、あの魔獣を本当に止められるのではないかと思えてしまう。それだけの實力、安心感がこの方達にはあるんだ。何を隠そう、僕の「師匠」もルシファー眷属のお一人で『騎士』なんだから。

「これをお持ちください。サーゼクスとアザゼル総督からの情報です」

そう言つてメモ書きを渡して来るグレイファイア様。

「現ベルゼブブであるアジユカ・ベルゼブブ様の現在地が記してあります。あの方にイツセーさんの駒を見てもらいなさい。アジユカ様ならば、たとえほんの少しの可能性であろうとも、必ず拾い上げてくださるはずですよ」

アジユカ・ベルゼブブ様。『悪魔の駒』を制作した張本人である方だ。

「ありがとうございます。ちょうど僕も連絡手段を探そうと思つていた所なんです」

「それと・・・彼」から伝言を預かっています」

「彼・・・？」

「今回に限り封印の解除を認める。あなたの「光」を敵に見せつけて来なさい・・・との事です」

「ツ・・・！」

師匠・・・！ ありがとうございます・・・。そういう事なら思い知らせてやりますよ。限界を越えた・・・僕の「光刃」を！

「伝説の騎士は冥界全体の・・・そして赤龍帝は子ども達の希望。あのお二人がこのまま敵に屈したままではいけないわけがありません。ならば私は、その希望が帰還するまで、戦い続けましょう。それが私の務めです」

・・・先輩、イツセー君。僕達以外にも、二人の帰還を信じている人達はある。希望は・・・まだ潰えていないんだ！

・・・

・・・そしてこの日の深夜、部長と朱乃さん、そして護衛役として小猫ちゃんも加え、僕はメモ書きに記される場所に到達していた。久しぶりにゆつくり休めたんだろう。全員の顔には精気が満ちていた。

駒王町から駅で八つほど離れた市街。そこに存在する廃ビル。それがアジユカ・ベルゼブ様が人間界の隠れ家になっている場所の一つだそうだ。

「・・・ようこそお出でくださいました。皆さまがいらっしやる事はすでにあの方もご存知です」

ビルの中に入ると、ロビーの奥からスーツ姿の女性が現れた。目線で示す先には、エレベーターがある。

「屋上へどうぞ。アジユカ様がお待ちです」

言われるままにエレベーターに乗り込み屋上へ向かう。そこは緑に囲まれた美しい庭園だった。

「やあ・・・よく来たね」

庭園の中央に置かれた机と椅子。その椅子に腰かけた妖麗な雰囲気と美しさを持った若い男性。この方こそ、僕達が会いに来たお方だった。

「アジユカ様、突然の訪問でありながらこの様にお話する場を用意してくださってありがとうございます」

「ああ、そんなに畏まらなくていいよ。それにしても、毎回毎回、キミ達は面倒な事に巻き込まれるな。その所為で、変な所で有名になってるよキミ達は」

そう言いながら目を細めるアジユカ様。

「それで、早速件の駒を見せてもらいたいのだが・・・どうやらキミ達以外にもお客様が来訪して来たようだ」

その時になって、ようやく僕達はその気配に気づく事が出来た。庭園の奥に生まれた闇・・・そこから現れたのは、僕達と同じ悪魔だっ

た。

「ようやく見つけたぞ。偽りの魔王アジユカよ」

「このオーラ・・・どうやら上級悪魔クラスみたいね」

部長の分析に僕も頷く。そして、アジユカ様を偽りの魔王と呼ぶという事は、この悪魔達の正体は・・・。

「口調だけで一発で把握出来てしまえるのも、旧魔王派の魅力だな。・・・それとも、嫉妬派と呼んだ方がいいかな？」

「嫉妬派？」

「おや、知らないのかい？ フューリーとの戦いを見た者達はそう言っているよ。あの戦いは騎士に女を奪われたと勘違いした男達が暴走した拳句返り討ちにあつたのだと」

「あの様な者達と我等を一緒にするな！」

アジユカ様の言葉に、一人の男が激しく噛みつく。そんな中、新たな人物が僕達の前に姿を現す。

「初めまして、アジユカ・ベルゼブブ。僕は英雄派のジークフリートです。それと、今あなたが挑発してくれたこの方々は、英雄派に協力してくれている前魔王の関係者です」

ジークフリート・・・まさかこの男までここに来るとは。それにしても、超常を否定する英雄派が悪魔の協力を受けている事に違和感がある。連中からしたら、互いに利用出来る相手としか見ていないんだろうが。

挨拶もそこそこに、本題へ入るジークフリート。その口から飛び出たのは信じられない言葉だった。英雄派と同盟を結んで欲しい。ジークフリートはアジユカ様にそう持ちかけたのだ。

その理由をジークフリートは語る。現ルシファーであるサーゼクス様。あの方に唯一対抗出来る悪魔こそがアジユカ様だと。もし同盟を結んでくれるのなら、英雄派が有している情報と研究の資料を全て提供すると。それは、新しい物を常に求め続けるアジユカ様には魅力的な条件だろうと。

「テロリストになってサーゼクスに敵対する。・・・なるほど、それも面白そうだ。彼の驚く顔を見るだけでもその価値はある」

「では・・・」

「——だが、お断りさせてもらおうよ」

直前まで肯定的に見えたはずのアジユカ様の口から出たのは明確な否定だった。ジークフリートは顔色を変えないが、周囲の悪魔達からの殺気が一段と強くなった。

「・・・理由は？」

「まあ、色々あるのだが、キミも長々と付き合わされるのは嫌だろうし、簡潔に答えよう。彼・・・いや、アイツは俺の“友”だ。理由としてはそれで十分だろう？」

若い頃からお互いを高め合って来たライバルであり親友。アジユカ様とサーゼクス様はそういう関係だと僕も聞いている。きつと、アジユカ様の中で、サーゼクス様との間に確固たるものがあるのだろう。そしてそれは、いくら条件を重ねられようと、テロリストに屈するものではない。

それに怒りを爆発させる旧魔王派の者達、彼等はアジユカ様へ向けて憎しみの籠った声を浴びせながら攻撃を始める。だが、アジユカ様はそのことごとくを手元の小さな魔法陣を操作するだけで全て逸らしていく。

「撃ったからには、当然撃たれる覚悟はあるんだろう。ならば、俺も魔王としての役目を果たそうか」

小型魔法陣の上を、アジユカ様のしなやかな指が超高速で走る。何を入力したのか？ 数秒も経たず、その結果が僕達の目に飛び込んで来る。先程逸らした攻撃がまるで何かに操られる様に、旧魔王派の者達へ襲い掛かったのだ。

あるものは分厚い光線に、またあるものは散弾に、さらにあるものは枝分かれしながら、放った者へ返っていく。

「俺は小さい頃から計算が好きでね。ずっと数式や方程式と向き合っている間に、魔力もそっちの方に特化していった。これくらいの事は、片手でも十分さ」

『『覇軍の方程式』！　こんな・・・こんな馬鹿げた力が・・・！』

そして、たつた今最後の男が消滅した。結局、アジユカ様は椅子か

ら立ち上がる事も無く全て倒してしまった。驚嘆とかそういうレベルじゃない。畏怖の念すら抱いてしまうほどの絶対的な力量だ。

「さて、残りはキミだけとなったわけだが、どうするジークフリート君？ 撤退するというのが俺は止めないよ」

「それはありがたい。けど、このまま帰つても笑いやにしかならないんでね、持つて来た切り札を切らせてもらおうよ」

「ほお、それは興味深い。そういう事であれば、俺は観戦に回りたくないな。．．．その『騎士』君、もしよければ、彼の相手をしてあげてくれないかな？」

アジユカ様が指名されたのは僕だった。

「僕．．．ですか？」

「剣士の相手は、やっぱり剣士が相応しいと思つてね。もちろん、断つてくれてもいいんだが」

「いえ．．．そういう事でしたらお任せください」

魔王様の指名を断るなんでもつてのほかだ。それに．．．彼とはいかがん決着をつけたいとも思つていた。

「ジークフリート．．．」

「木場祐斗。騎士殿や赤龍帝を失つた割には元気そうで安心したよ」

そう言うと同時に、ジークフリートの背中から龍の腕が四本生えて来る。いきなり禁手を見せるとは．．．どうやら向こうも僕と同じ気持らしい。背中の上に魔剣を握らせ、ジークフリートが右手に魔帝剣グラムを握る。

「木場祐斗。京都でキミにやられてからずっと考えていたよ。キミの限界突破に対抗するには、僕もこの魔帝剣の力を全て出し切らなければならぬと．．．けど、僕にはそれが出来ない。魔帝剣の名に相応しい切れ味。攻撃のオーラを纏い、いかなるものも断ち切る剣。それがグラムだ。．．．けれど、この剣にはもう一つ特性がある」

「——龍殺し」

僕の答えに、ジークフリートは満足そうに頷く。

「かつて、あの『黄金龍君』ファーブニルを滅ぼしたのも、その特性があったからだ。そして、その特性の所為で、僕はグラムの真の力を出

せない。僕の神器はドラゴンの性質を持っているからだ。力を解放した瞬間・・・僕自身の体を破滅に導く。・・・けどね、もしも解放しつつ破滅しない方法があったとしたらどうだい？」

そんなものはあり得ない。しかし、ジークフリートは不気味な笑みを見せながら左手に何かを持つ。それは拳銃の様な形をした注射器だった。そしてそれを、躊躇い無く自分の首元に突き刺し、中身を挿入していく。

変化はすぐに訪れた。まず彼の背中の腕が肥大化を始めた。続けて、彼本来の手が持っていた剣と同化していく。顔中に血管が浮かびあがり、筋肉が意思を持つかのように蠢きまわる。それに耐えきれなかったのか、着ていた英雄派の服が破れていく。

その姿は、最早阿修羅とは呼べず、蜘蛛の化物としか形容出来ないものとなっていた。

「-----これこそが『業魔人』^{カオス・ドライヴ}。僕達はそう呼称している。先程注射した薬は『魔人化』^{カオス・ブレイク}と呼んでいてね、それぞれ『覇龍』と『禁手』から名称の一部を拝借しているんだ」

「人間は時として、悪魔や天使を越えるものを作り出す。・・・だからこそ、人間は可能性の塊だと俺は思ってしまうよ」

「みんな、僕達から離れて。アジユカ様もお下がりにください」

「俺の事は気にしないでいい。・・・と言いたい所だが、それでキミの邪魔をしてしまうのはよくないしな」

部長達が十分な距離まで離れた所で、僕はジークフリートに向き合った。

「さあ、限界突破を使うんだ木場祐斗。あの状態のキミを越えなければ意味がない」

「言われるまでもないさー」

第一、・第二の枷を一気に解き放ち、僕は両手に風の魔剣を持ちながらジークフリートに肉薄した。全速の一閃は果たして・・・グラムによって受け止められる。剣と剣のぶつかり合いで生まれた衝撃波が、周囲の木々を大きく揺らす。

それならばと連続で攻撃するが、ジークフリートは肥大した四本の

腕の剣でそれら全てを防いでいく。完全に今の僕の速さに追いついているみたいだ。

「ははは！ 止まって見えるぞ木場祐斗！ キミの自慢の速さも、『業魔人』になった僕には通じないみたいだな！ 今の僕ならば、赤龍帝ともいい勝負が出来そうだ！ もっとも、彼もう死んでしまったがな」

——その言葉は、僕の怒りを呼び覚ますのに十分だった。イツセー君の死を口にしたからでは無い。彼は生きていると僕は信じているから。だがその前の・・・イツセー君といい勝負が出来るというその言葉だけはどうしても許せなかった。

「・・・ふざけるな」

「何・・・？」

「ジークフリード。先程あなたはこう言った。『業魔人』は『覇龍』からその名を取ったと」

「それがどうかしたのか？」

そうか・・・。やっぱり何もわかっていないんだな。なら、ハツキリ言わせてもらう。

「あの力は・・・『覇龍』は！ イツセー君の夢と努力がもたらした彼だけの力だ！ それを・・・その『覇龍』を！ 名前だけとはいえ、そんなくだらない力なんかに使うんじゃない！」

そう、それだけが僕にはどうしても許せなかった。最強の『兵士』になる・・・そんな彼の夢すら汚されてしまったようで本当に許せないんだ！

「全く・・・キミ達は本当によくわからない事で怒るんだな。それで・・・僕を許せないというキミはこれからどうするつもりだ？」

「あなたを倒す。今日、この場で、僕が、必ず！」

師匠。おそらくあなたは魔獣との戦いに備えて許可を出してくださいだったのかもしれませんが。ですが、その前に・・・この男に対して使う事をお許しください。

風の魔剣を消し、僕は瞑目する。剣を出す必要は無い。最後の枷を解き放つのは・・・僕自身の想いなんだから！

「・・・我が名は木場祐斗。リアス・グレモリーの『騎士』にして、立ち塞がる敵を全て切り裂く最強の剣なり・・・」

「何を始めるつもりかは知らないが、隙だらけだぞ木場祐斗！」

「我が信念、我が想い、我が全てを鋼に変え・・・ここに、最後の枷を外さん」

「終わりだあああああ!!!」

ジークフリートの攻撃が迫る中、僕は最後の言葉を口にした。

「・・・リミットオーバー」

瞬間——僕の体から爆発的に溢れ出る聖と魔のオーラが屋上全体を照らしあげる。そのオーラはジークフリートの攻撃から僕を守り、彼の体を遥か後方へ吹き飛ばした。

全身を包み込む聖魔のオーラ。そして、背中に展開されるオーラの翼。僕は今・・・全ての枷から解き放たれた！

「その力は・・・!?!」

「忘れたのかい？　僕が師匠からつけられた枷は全部で三つだと言っただよ」

そして、この状態ならば、先輩から教えてもらった「あの技」を使う事が出来る！

——よっしゃ！　お前の力を見せてやれ木場！

「ッ・・・!?!」

今の声・・・間違いない。イツセイ君・・・キミなのかい!?

「祐斗！」

部長が僕の名を叫んだ。振り向く僕へ向け何かが飛来して来る。それはイツセイ君の駒だった。僕の目の前で紅い閃光を放ちながら、駒はその形を変えていった。そして、その光が治まった所で僕が目にしたのは一本の輝かしい光を放つ聖剣——アスカロンだった。

ふふ、イツセイ君の友達思いには脱帽だよ。駒ですら僕達を助けようとしてくれるんだもの。だったら・・・不甲斐無い姿は晒せないよね！

僕はアスカロンを右手に持ち、左手に鞘を創り出す。そして、その鞘にアスカロンを仕舞い、腰元に構えながら態勢を低くする。

「英雄ジークフリート。自らの力を信じず外道に手を染めた者よ。この一撃で・・・終わらせる」

そう宣言し、僕は無心となってジークフリートへ突っ込む。一瞬の交差——それが勝者と敗者を決定つけた。おそらく、ジークフリートから見たら、何もせずただ自分の背後へ駆け抜けていった様にしか見えなかっただろう。

「はは、どうしたんだい？　終わらせるんだらう？　僕はまだこうして生きて・・・」

「——光刃閃」

僕はアスカロンを鞘に納めた。その瞬間、ジークフリートの体が細切れとなり、主を失った魔剣達と共に庭園の床へと散らばるのだった。

全ての枷を解放した状態で放つ神速の居合術。それが、僕が神崎先輩に教えてもらった技・・・光刃閃だった。

「さようなら・・・ジークフリート」

空に向かって黙とうする。それが、同じ剣士として僕が彼に出来る最後の事だった。

第百六十三話 闇の目覚め

リアスSIDE

「お待たせしました、部長」

ジークフリートを倒した祐斗が私達の所へ戻って来た。正直、待たせたとされるほど待つて無いのだけれど。というか瞬殺だったじゃない。

「・・・イツセーの陰に埋もれがちだけど、あなたも相当よね祐斗・・・」
「あはは、ありがとうございます。でもまだまだです。目標にしている人はもつとずっと高い場所にいますから」

そう言つて微笑む祐斗。その手に持っていたアスカロンが光と共に元の駒に戻った。

「ふむ・・・赤龍帝の残した何かと、アスカロンの残留オーラが起こした奇跡・・・とでも呼べばいいだろうか。何にせよ、実に興味深い現象だったよ」

アジュカ様が私の持つ駒をジッと見つめる。ともかく、これで邪魔者はいなくなつたわ。改めてアジュカ様に駒を見てもらいましょう。

私が駒を渡すと、アジュカ様はそれをテーブルに置かれていたチェス盤の上にセットした。展開された小型魔法陣の光が八つの駒を包み込む。おそらく、中を解析されているのでしょうかね。

「ほお、これは驚いた」

「何かわかつたのですか？」

「八つの駒の内、五つの駒が『変異の駒』になっている。彼が発現させた『覇龍』がもたらした結果なのかもしれないな。価値にばらつきはあるようだが・・・これだけで彼がどれほどの存在だったのかが容易に想像出来る。

「・・・!? 『変異の駒』ですつて!? しかも五つって半分以上じゃない! 私があの子を転生させた時は全て通常の『兵士』の駒だったのに・・・。赤龍帝が至りし『覇龍』・・・ここまでのものだったなんて・・・!」

「結論を言おう。——彼が生きている確率は非常に高い。調べてみ

だが、この駒の記録情報の最後は『死』を示していない。それはつまり、彼の生存を証明している。赤龍帝ドライグの魂と共に、次元の狭間のどこかに辿りついているのかもしれない。ついでに言えば、この駒も機能を停止していない。望むのならば、彼に戻す事も可能だ」

「ッ……！」

言葉を失った私達を見て、アジユカ様がさらに続ける。

「彼はサマエルの毒を受けたのだろうか？ それならば肉体は間違い無く滅んでいるだろう。だが、次に影響を受けそうな魂は消滅していない。駒の中の情報がそれを証明していた。彼は……彼の魂は間違い無く生きているよ」

「生きてる……イツセー君が……！」

全身を振るわせ、絞り出す様な声で祐斗がそう呟いた。

「ほら、私が言った通りでしょ。あの子がそう簡単に死んだりするものですか」

「ふふ、そういうあなたも声が震えているわよりアス」

「……朱乃先輩も涙声です」

私達は泣いた。笑い合いながら泣いた。信じていた。けれど確証は無かった。だけど、アジユカ様が……悪魔の駒を作りだした方が断言してくれた。それが何よりの証拠だわ！

「滅んでしまった肉体を再現する方法もある。細々とした問題もあるが……まあ大したレベルでは無い。その時になったら、俺が力を貸そう」

「ありがとうございます。……アジユカ様はこれからどうされるのですか？」

「ああ、眷属に命令して例の巨大怪獣の討伐の指揮をするつもりだ。……そういえば、次元の狭間の調査に明るいヤツがファルビウムの眷属にいたな。俺の方から頼んでおいてあげよう」

「そうですか。ご武運を」

「まあ、頑張るのは俺の眷属だけだね。……それと、戻るのならアレも回収して行ってくれないか」

そう言ってアジユカ様が見つめる先では……ジークフリートが持つ

ていた魔剣達が淡い輝きを発しながら宙に浮いていた。敵意は感じない。むしろ温かみさえ感じる輝きだった。

『騎士』君、どうやらあの魔剣達は次の主をキミに決めた様だ。俺は興味無いのでね、持って行くといい」

「僕が魔剣を・・・」

祐斗が魔剣達に近づくと、剣達は忠誠を誓うかのように柄の部分を彼に向ける。その中から、祐斗はグラムを手に取り、それを天に掲げた。

「・・・わかった。一緒に行こう。今日から僕達はパートナーだ！」

思いがけない戦力アップね。戦いの前に幸先がいいわ。

(イツセーは生きていた。リョーマ・・・次はあなたの番よ)

早く帰って来てちょうだい。じゃないと・・・抱きしめるだけじゃ済まさないんだからね！

リアスSIDE OUT

IN SIDE

地面を見下ろしながらラフトクランズモードで空を飛び続ける事、約三時間。未だ兵藤君は見つからない。だがしかし！ たかが三時間くらいでこれくらいではへこたれんぞ！ なにせ、俺にはシュウゾウがついているんだからな！

「俺は諦めない！ シュウゾウの熱血が兵藤君を救うと信じて！」

・・・ってこれじゃ終わってしまうじゃないか！ いかん、いかんぞ。とりあえずお米でも食べて気分を上げて行きたいが・・・今は我慢するしかないか。

しかし、本当に何も無いな。人どころか生き物の気配すら感じない。目印になる様なものも見当たらないし、気をつけないと遭難するなこりや。

それからさらに一時間くらい進んだ頃、前方に真っ赤な山が見えて来た。・・・臭いな。怪しい臭いがプンプンする。

徐々に近づいて来る山。だが、ある程度の距離まで近づいた時、俺はそれが山では無い事に気付いた。だって、普通山に馬鹿でかい翼と

か角なんか生えてない。確認した瞬間「あ、これ生き物だわ」って直感したわ。

それでもって、俺はその馬鹿でかい生き物に見覚えがあった。間違い無い。D達をぶちのめした後に姿を見せたあのドラゴン…：グレートレッドさんだ！

「もしかして…ここは彼の住処なのか？」

だとしたら非常にマズイ。下手すればティアマツトさんの悲劇が再び起こってしまう。ここは刺激しない様にそっと通り過ぎて…。

「…ん？」

グレートレッドさんの背中の上を通り過ぎようとした俺の目に、小さな黒い何かが映った。筋肉が盛り上がっている所を行ったり来たりしているソレをジツと目を凝らして見つめてみる。

「ようしよ、ようしよ」

「え…!？」

黒い髪にヘッドドレス。そして真つ黒なゴスロリを纏った幼女。間違い無い…：オーフィスちゃんだ！ な、何であの子がこんな所に…!？

「おーーー」

驚きと戸惑いで固まる俺が視線を送るなか、オーフィスちゃんはグレートレッドさんの背中をスリーつと滑り下りて行った。

「ようしよ、ようしよ」

そしてまた上って行く。わからん…：あの子が何をしているのかさっぱりわからん！

「おーーー」

滑って上ってを繰り返すオーフィスちゃん。…：ひよっとして、滑り台のつもりなのか？ こんな場所で、巨大ドラゴンの背中で滑り台って…：シユールってレベルじゃないな。

「…とにかく、行ってみるか」

滑り降りるタイミングを見計らい、俺はオーフィスちゃんの前に降り立った。急に現れた俺を見て、オーフィスちゃんは目をパチクリさせる。

「・・・フューリー?」

「やあ、奇遇だな」

いや、そうじゃねえだろ俺! アカン、この子の出現にちよつとテンパってしまっている様だ。

「我、ゲオルクから聞いた。フューリー、時空転移した。もう帰って来ない。けど、フューリー帰って来た。どうして?」

どうやらこの子は俺と鬼畜ペロリスト共の間で何があつたか聞いている様だな。

「人間、気合いがあれば大抵の事は何とかなるものなんだよ」

「気合い? フューリーは気合いで帰って来た?」

「ああ。シュウゾウの力は偉大だと改めて気付かされたよ」

「我、理解した。人間、気合いとシュウゾウで次元を越えられる」

納得したように頷くオーフィスちゃん。なんか凄まじい誤解をされた気がするけど・・・なんの問題も無いな! (白目)

「ところで、兵藤君の居場所を知らないか?」

「ドライグ、上にいる」

おお、マジで!?! それなら早速会いに行かないと・・・!

「フューリー、ドライグに会いに行く?」

「ああ。キミも来るか?」

「我、フューリーと一緒に行く」

という事で、俺はオーフィスちゃんと一緒に兵藤君の元へ向かう事にした。

「ところで、どうして滑り台みたいな遊びを?」

「我、前にフューリーの家を見た。テレビでニナチャーンと呼ばれていた者、我と同じ様に遊んでいた」

つまり、前に俺の家で過ごした時に、テレビに滑り台で遊んでいるシーンが流れたって事か? ひよつとして、滑り台で遊んだ事も無かったのかこの子・・・。

「・・・今度、ヴァーリさん達と遊びに来た時は、凄く長い滑り台のある公園に案内してあげるからな」

そうオーフィスちゃんに固く約束し、俺は改めて兵藤君の元へ向か

うのだった。グレートレッドさんの大きな背中を二人揃って上って行く。しばらくして、不自然に盛り上がり上がっている部分を見つけた。そして、その部分のすぐ近くに、兵藤君の鎧が置かれていた。

「兵藤君―」

――なっ・・・フューリー!?

俺はすぐさまその場へ駆け寄った。けれど、返事をしたのは兵藤君では無く、ドライグさんだった。元気そうな声だ。安心したわ。

――何故お前がここに!? 時空の彼方へ飛ばされたのではないのか!?

信じられないとばかりに声を上げるドライグさんに、俺は先程のオーフィスちゃんの時と同じ答えを返した。

――いやその理屈はおかしい。

間髪入れず、一字一句オカんと一緒にツツコミを頂いてしまった。解せぬ。

「それよりも兵藤君は。彼はどうしたんだ?」

微動だにしない鎧を見て訝しむ俺に、ドライグさんは衝撃的な答えを返して来た。

――この鎧の中に相棒はいない。サマエルの毒により肉体を失った相棒は魂だけの存在となつて眠っているのだ。

なん・・・だと・・・!?

――だが安心しろ。グレートレッドとオーフィスの力により、相棒は新たな肉体を得ようとしている。隣にある繭・・・培養カプセルと言った方がいいか。その中で既に肉体の新生は始まっている。あの程度まで構成が進んだ所で、相棒の魂を新たな肉体に注ぎ込む。魂と肉体を馴染ませる為にな。そして、魂の結合と肉体が完成したその時・・・兵藤一誠は蘇る。

「では彼は・・・兵藤君は助かるんだな?」

――ああ。

そう断言するドライグさんに、俺は力が抜けた様にその場へへたり込んだ。兵藤君は生きている。確かに生きている。それだけで俺の胸には喜びが溢れた。

——ククク、随分と腑抜けた面をしているではないか。相棒にも見せてやりたいくらいだ。

「はは、こんな顔でよければいくらでも。……ところで、どれくらいの時間で兵藤君は蘇るんだ？」

——こればかりは俺もわからん。さつきも言ったが、肉体がある程度構築されなければ魂を込める事も出来ん。まあ、気長に待つ事だ。先程オーフィスも待つ事に飽きてふらっとどこかに行ってしまった。

ああ、それであんな所にいたのか。けど、それなら俺も役に立てるかもしれないな。こういう時こそ、精神コマンドが使えるはずだ。

(……『復活』を使ってみるか)

ゼロからの再生というのであれば、『友情』では無く『復活』を使うべきなのだろう。オカン曰く、死んだ人を無暗に蘇らせる事は許されない。だが！　だがしかし！　兵藤君は生きている！　ならば使う事に何の問題があるというのだ！

『使うなよ！　絶対使うなよ！』

『いいや限界だ！　使うね！』

俺は培養カプセルにそっと右手を押し当てた。

——フューリー？

「……『復活』」

目を瞑り、俺は呟くように精神コマンドを発動させた。瞬間、眩い光が右手からカプセルへと伝わり、カプセルの全体を覆い尽くした。時間にして十秒もかからずにその光は消えてしまった。だが、その代わりに、カプセルの中には……体育座りの様な格好で浮かんでいる兵藤君の姿が確認出来た。

——なっ……!?　相棒……!?

まさに愕然したとばかりの声を発するドライグさん。そこへオーフィスちゃんが俺の隣にやって来て兵藤君の様子を窺う。

「……ドライグ、体、九割近く出来てる。魂入れれば目覚める」

——ヒエツ!?

九割？　『復活』なら完全回復するはずなのに。……あ、ひよつと

したら魂を入れないと完成しないって意味なのかもしれないな。そういう事なら、後はドライグさんに任せよう。

——馬鹿なっ！ たった今まで二割程度しか進んでいなかったはずだぞ!? フユ、フューリー！ お前一体何を……！

「さあ……仕上げを頼む」

——アツハイ。

鎧が赤い光の粒子となってカプセルの中へ入って行った。それをジツと見つめる俺とオーフィスちゃん。少しして、カプセルの中にいる兵藤君の目が、少しずつ開いて来た。

「ドライグ、もう少して目覚める」

『復活』を使ったし、無事に出て来てくれたらいいんだが……」

そして、ついに完全に目を開けた兵藤君が俺達を見る。その瞬間……彼は目を見開き、口から大量の泡を吐き出した。

「ごぼごぼごぼっ!?!」

「な、なんか滅茶苦茶泡だっているんだが……」

「ドライグ、驚いてる」

「ごぼごぼごぼっ!」

何か言いたそうな兵藤君だが、カプセル内に水が充滿しているので言葉になっていない。……息出来てるんだろうか？

——魂の結合は成功した。もう一時間も経たずに相棒は出て来るだろう。……フューリー、俺の精神衛生上、お前を問い詰める事はせん。もう、お前だという事で納得する。

ドライグさんは何を納得したんだろう? ……まあ、本人がそれでいいなら俺も気にしなくていいか。

……
……
……

「反省はしても?」

「後悔はするな……」

「今日からキミはっ!」

「富士山……」

オーフィスちゃんとシュウゾウごっこで時間を潰す事三十分。ついにその時が訪れた。カプセルの表面が割れ、大量の水と共に兵藤君がドウルンツ！と出て来た。あれだ。映画で地球外生命体が生まれて来る時みたいな感じ。そして……今の彼は生まれたままの姿。つまりZENRAだった。

「兵藤君……」

「先輩……」(だがZENRAである)

「すまない、こういう時どう言えばいいのか……」

「俺もです。先輩に言いたい事がたくさんあるんですけど、上手く言葉に出来ないというか……」(それでもZENRAである)

「だが、まずキミに言わないといけない事はわかる」

「はい。俺も先輩にまず言わなきゃいけない事があります」(やっぱりZENRAである)

「では、同時に言おう」

「はい」(どうしようもなくZENRAである)

俺達は一呼吸置き、同時に口を開いた。

「お帰りなさい、先輩！」(そしてZENRAである)

「その格好……寒く無いのか?」

「……え?」(完全無欠にZENRAである)

「え?」

兵藤君が唾然とした表情を浮かべ、その視線を俺から自分の体へと移す。

「ドライブ、裸」

そして、オーフィスちゃんのその言葉が止めの一撃となった。

「い、いやああああああああああああ!!」(ついにZENRAに気付く)

その瞬間、乙女? の悲鳴が世界へ響き渡るのだった。

……
……
……

それから、着る物が無いのは鎧を纏う事で解決したので、俺達は改

めて互いの状況について話し合いを行った。

「いやその理屈はおかしいです」

キミもか兵藤君。残念だ。キミなら熱血と気合いは全てを越えろと納得してくれると思っただのに。

「・・・でも、本当によかったですよ、先輩がこうして帰って来てくれて」

「え？」

「ゲオルクから禁術の事を聞かされて、みんな先輩ともう会えないんじゃないかって思ったりしたんです。でも、そんな心配いらなかったですよ！ なにせ先輩はあの伝説のフューリーなんだ！ 本物の英雄が、偽物の連中なんかにはやられるわけがないですもんね！」

「兵藤君・・・」

キミって子は・・・自分が大変な目に遭っていたっていうのに、ずっと俺を心配してくれていたのか・・・。

まるで自分の事のように、本当に嬉しそうに満面の笑みを俺に向けて来る兵藤君。その笑顔を見て俺が抱いたのは、嬉しさでも喜びでも無く・・・果てしない怒りだった。

こんなに人の事を想える子を殺そうとしたのか・・・。こんなに優しい後輩を俺やリアス達から奪おうとしたのか・・・。こんなに良い息子さんとあの素敵なご両親の幸せを引き裂こうとしたのか・・・。大切な人を理不尽に奪われるあの悲しみを、あの痛みを・・・俺以外の人達にも撒き散らすつもりだったのか・・・。

「・・・ユルサン」

その瞬間、俺の全てが一つの感情によって支配されるのだった。

S I D E O U T

イツセー S I D E

なんだか酷く衝撃を受けた様子の神崎先輩。おかしいな。そんなに変な事を言っただつもりは無いのに。

——相棒、新しい体の調子はどうだ？

ああ、悪く無いゼドライブ。違和感も全く無いし、いつでも戦えそ

うだ。

——それは重畳だ。

それにしても、まさかここが次元の狭間だとはなあ。見渡す限り荒野だし、空なんか色んな色が混ざりまくって滅茶苦茶な景色になっている。

「オーフィス、お前が帰りたがってたのってここなんだよな？」

「我、静寂を求める。ここ、何も無い。静寂」

「まあ、静かといえれば静かだけど。俺にはこんな所で一人でいるなんて耐えられねえなあ。お前も、こんな場所じゃなくて、冥界とか人間界で暮らした方がいいんじゃない？ ヴァーリちゃんとか神崎先輩と一緒にさ」

「ヴァーリの傍、静寂じゃない。フューリーも同じ」

「あー・・・確かにそうかもな」

「・・・でも」

「ん？」

「ヴァーリの傍、静寂じゃない。だけど、心地良い。フューリーの家、楽しかった。我、またフューリーと一緒に遊びたいと思った。ここにいたら、一人。それは・・・あまり楽しく無い」

「そっか・・・。コイツ、一人ぼっちが寂しいってようやく気付いたんだな。」

「なら、拘るのを止めちまえよ。こんな何も無い場所の事なんかさ」

「気付くと、周囲を真っ黒い何かが漂っていた。何だこれ、薄気味悪いな。」

「・・・兵藤君」

「はい？ なんですか先p——」

視線をオーフィスから先輩へ移した瞬間、俺は息を呑んだ。心臓が押し潰されるかのような重圧と、いつそ気絶した方がマシだと思えるほどの濃厚な殺気が俺を襲う。

俺の目線の手前：そこには、先輩の形をした「ナニか」がいた。俺達の周囲に漂うものの正体・・・それは、その「ナニか」の体から溢れ出す「闇」だった。魂すら引き摺りこんでしまいそうなその「闇」

“は、一度囚われたら二度と逃げ出せない『牢獄』を俺にイメージさせた。

「もう一度確認させて欲しい……。キミをこんな目に遭わせたのは、サマエル。そして……シャルバ・ベルゼブブ。この二名で間違い無いんだな？」

「は……。は……。い……。い……」

たった一言の返事。それだけで俺の精神が大量にすり減るのを感じた。叶うのなら、今すぐこの場から逃げ出してしまいたい。だが、俺の足は重力に縛り付けられたかの様に一ミリも動かなかった。

「ありがとう。しっかりと胸に刻み込んだよ」

「せ、先輩……。何を……」

何とかそう口に出来た俺に対し、『ナニか』はこう答えた。

「俺の可愛い後輩をこんな目に遭わせてくれたんだ。先輩として……お礼をするのが筋だろう……。？」

「あつ……」

俺は察した。この瞬間……サマエルとシャルバの命運が決定したのだ。そして確信する。これは……ディオドラ戦以上の惨劇が始まる……。と。

——ははは！ よかったな相棒！ どうやらフューリー様はお前の事で大変お冠のご様子だぞ！

ドライグ……。様”つけて事は……。あの時みたいな状態になってるのか。何だろう。今ならお前の気持ちかわかる気がする。

——究極の龍殺し？ 真なる皇帝機？ それがどうした！ 文句があるなら尻尾ぶった切られてから言うがいい！ あ、それ！ 尻尾く尻尾く。俺の尻尾が宙を舞うく。流血く流血く。流れる血は止まらないく。

(シャルバ。やつぱりお前、あの場面で俺にぶつ飛ばされてた方がよかったんだよ……)

ドライグの何の感情も籠って無い機械的な歌声を聞きながら、俺はそう思わずにはいられなかった……。

イツセーSIDE OUT

アザゼルSIDE

冥界の下層に位置し、死者の魂が選別される場所。それが冥府だ。そして、その冥府に俺はサーゼクス達と共にやって来ていた。目的はただ一つ・・・この冥府を統治する神、ハーデスに会う為だ。

部下達に指示を出した後、サーゼクスは俺に冥府に同行するよう頼んで来た。コイツも俺と同様、この魔獣騒動に乗じてあの骸骨野郎が動くんじゃないかと危惧しているようだった。

冥府の最奥に創られた古代ギリシヤ式の神殿。死神達の住処であり、ハーデスが根城にしている『ハーデス神殿』へと足を踏み入れる俺達。入ってすぐ、大勢の死神共が群がって来た。どいつもこいつも敵意を全開にしてこちらに眼差しを向けて来る。あちらにしてみれば、襲撃に近い状況なのだろう。

それでも、実際に襲い掛かって来るヤツはいない。こっちには魔王がいるし、何より・・・俺達の背後に立つ「神殺し」の三匹に手を出すのは自殺行為だとわかっているのだろう。

「ぐんぐん・・・」

スコルの一睨みで、死神共がたじろぐ。コイツ等もご主人様を自分達から奪った連中が許せないだろう。「フューリー」を嵌めたヤツ等に報復したくないか？」と誘ったら三匹ともついて来たからな。

死神達を無視し、神殿の奥を目指す。やがて俺達が辿りついたのは、黄金の装飾が施された冥府には似つかわしく無い雰囲気醸し出す祭儀場の様な場所だった。

その祭儀場の奥から死神を引きつれ、ハーデスが姿を現した。護衛のつもりか、全員が上級から最上級クラスだと察する。あのプルートのここにいないのが気になるが・・・。

「はー。あれが冥府の神ハーデススかあ。マジで骸骨なんですわね。直視したらチビリそうなんで帰っていいですかね？」

「アホ言ってる下がってる」

「へー」

いま発言した男の名はデュリオ・ジエズアルド。この男こそ、天界

の『御使い』のジョーカーであり、天候を支配する神滅具『煌天雷獄』の所有者だ。

《コウモリの首領にカラスの首領。さらには天界の切り札。そして…神殺しの牙が三匹。さて、これだけの戦力を見せびらかして、この老人をどうするつもりか?》

ふん、白々しい。どうせ全てわかってる癖によ。

「お久しぶりですハーデス様。急な来訪、申し訳ありません。少々お尋ねしたい事がございました」

さて、ここからが本番だ。この骸骨野郎が正直に話すとは思えんが、それ以上に、コイツをこの場から動かさない様にするのが俺達の役目なんだからよ。

ズキツ・・・!

「ん・・・?」

「どうしましたアザゼル総督?」

「何でもねえ。気にすんな」

ちよつとばかし・・・胃が疼いたただけだからよ。

第百六十四話 キミの中の英雄

祐斗SIDE

アジユカ様の元を後にした僕達はすぐさま冥界のグレモリー城へ帰還した。準備が出来次第、グレモリー眷属は首都防衛戦へ向かう事になっている。

「木場」

出迎えてくれた黒歌さん達と一緒にゼノヴィアとイリナさんの姿があった。

「ゼノヴィア！ それにイリナさんも。戻って来てたんだね」

「ごめんなさい。遅くなっちゃって。だけど、目的はしつかり果たして来たわ」

ゼノヴィアが携える魔術文字と天界の文字が刻まれた布に包まれた長い得物に目を向ける。どうやら破壊されたエクス・デュランダルはちゃんと修復されているようだ。

イリナさんも新しい剣を腰に差している。ここに来ての戦力アップはありがたい。

「それで部長。魔王ベルゼブブはイツセーについて何と？」

「イツセーは生きています・・・そう断言してくれたわ」

「そうか！ うん、そうだと思った。アイツがそう簡単に死ぬわけが無い」

「ええ、だってイツセー君は『せきりゆーてー』だもの！」

部長の言葉に二人は笑顔を見せる。・・・それにしても「せきりゆーてーだもの」・・・か。なんだろう。神崎先輩の「フューリーなら仕方ない」に迫る説得力を持ち始めている気がするのは僕だけだろうか。

「それで、これから私達はどう動くの？」

「もちろん、防衛戦に参加するのよ。けれどその前に状況確認ね」

部長がフロアに備え付けられていたテレビの電源を入れる。映し出されたのは冥界の各地で暴れる魔獣達の姿だ。魔獣の出現から随分時間が経過している。既に重要拠点まで辿りついている魔獣がいるかもしれない。

けれど、僕達が目にしたのは、『豪獣鬼』を相手に善戦している戦士達の姿だった。ヘリコプターから中継するレポーターが叫ぶように説明する。——アジユカ様と眷属の方々が生み出した対抗術式。それが『豪獣鬼』に効果を与えていると。数時間前に中継を見た時とは形勢が逆転し始めている。

「部長、アジユカ様は・・・」

「・・・魔獣の出現を確認してすぐにアジユカ様はファルビウム・アスモデウス様と共に術式の構築を始められていたそうよ。私達がお会いたした時にはすでに完成させていたというわ」

「この数時間であればどまでの物を・・・」

「流石・・・としか言いようが無いな」

それぞれに感想を漏らしていると、映像が切り替わった。四足歩行型の『豪獣鬼』に対し攻撃を加えているのはセラフオール・レヴィアタン様とその眷属の方々だった。

「・・・凍りつけ」

瞬間、『豪獣鬼』の右前足が完全に凍りついていった。続いて画面に映し出されるセラフオール様の顔は、隠しきれない殺意に彩られていた。

「ッ・・・!?!」

誰かが息を呑む。僕達の知るセラフオール様は、あの様なお顔を見せた事は一度も無い。『レヴィアタン』では無い。あれこそが本物の『魔王セラフオール・レヴィアタン』の姿なのだ、僕達は理解した。

やがて、氷は右足から左足。胴体を通って後ろ足までも覆い尽くして行く。完全に動きを止めてしまった『豪獣鬼』を前に、セラフオール様が右手に魔力を溜め始める。その間に、『豪獣鬼』はとうとう顔を含め、全身を凍りつかせていた。

「・・・砕け散りなさい」

そして、セラフオール様と眷属の方々による一斉攻撃を受け、『豪獣鬼』は甲高い音と共に文字通り『砕け散った』のだった。

『ご、御覧になりましたかみなさん！レヴィアタン眷属の方々によ

り、たった今『豪獣鬼』の一体が撃破されました!』

それをリポートしていたリポーターが絶叫する様な声を上げている。

「・・・」

圧倒的過ぎて言葉が出て来ない。セラフオール様はほとんどお一人で『豪獣鬼』を無力化してしまった。戦場となっていた広大な荒地が、魔力の余波による影響か真っ白になっている。そんな氷の世界に散らばる『豪獣鬼』の残骸を一瞥し、セラフオール様は転移魔法の準備に入られた。

『もうここに用は無いわ。次の場所に向かうわよ。・・・フューリーさん、あなたを陥れたヤツ等は、この私が絶対に・・・!』

最後にそう言い残し、セラフオール様は転移されていった。

「・・・そうよね。あの方が冥界の危機、そしてリヨーマの事で大人しくしているわけがないもの」

部長が小さく呟く。だけど、おそらくここにいる者のほとんどがそれに当てはまるんじゃないだろうか。うん、間違い無い。

戦闘が終了したのでチャンネルを切り替えると、ちようどタンニー様が眷族のドラゴン達と共に『豪獣鬼』に向かって特大の火炎を浴びせている所だった。既に『豪獣鬼』の体は半分以上が炭化している。おそらく、後数回炎を浴びれば倒れるだろう。

さらにチャンネルを変えれば、今度は九尾の狐が『豪獣鬼』を組み伏せている場面が映った。あれは・・・京都の八坂姫!

『母上が『豪獣鬼』を抑えた! 今の内に赤剛鬼隊は前に出ろ! 〃鬼〃としての格はお主等の方が上なのだと、このデカブツに存分に思い知らせてやるのじゃ!』

『』『』『おおおおおおおおお!!』『』『』『』

八坂姫の背に乗っているのは九重ちゃんか! 彼女の指示で屈強な巨人達が『豪獣鬼』へ攻撃を加え始める。流石京都妖怪勢力トップの娘。まだ幼いのに堂々とした指揮だ。

この勢いならば、全ての『豪獣鬼』が倒されるのも時間の問題だろう。そう思った直後、またしても場面が切り替わる。映し出されたの

は、ボロボロになった同盟軍。そして、鳥型の『豪獣鬼』の姿だった。『こ、こちらアグレアスです！ 鳥型の『豪獣鬼』により、戦士達が追い詰められております！』

アグレアス……。先日僕達がサイラオーグ・バアルとレーティンゲームを行った空中都市が、『豪獣鬼』とそれに生み出された魔獣達の脅威に晒されていた。

『くっ……。みなさん！ 攻撃の手を緩めないでください！』

シーグヴァイラ・アガレスが叫ぶ。この同盟軍は彼女が率いているのだろう。眷属や他の悪魔、同盟軍が指示に従って一斉に鳥型『豪獣鬼』へ攻撃するが、何故かその攻撃は『豪獣鬼』に命中する直前に全てかき消されてしまった。

「あの『豪獣鬼』・・・攻撃が通じていないのか？」

「見て！ 『豪獣鬼』の周りに何か・・・！」

画面一杯に映し出される『豪獣鬼』の姿。その周囲に凄まじい風の渦が生じていた。

『ご、御覧の通り、同盟軍の攻撃はあの風の渦によって全て防がれてしまっており、未だ決定打を与えられておりません！』

「ふん、バリアのつもりか。私がいればアレごと本体を断ち切ってやるのに」

「厄介ね。あれほどまで強力な風だと、接近戦を挑むわけにもいかないでしょうし・・・」

『シーグヴァイラ様！ このままでは・・・！』

『諦めてはいけません！ アガレス家次期当主として、私はここを絶対に守らないといけないのです！』

肩で息をしながらも、シーグヴァイラ・アガレスはなおも諦めていなかった。今彼女が言った通り、次期当主としての想いが彼女を支えているのだろう。そんなシーグヴァイラ・アガレスを嘲笑うかのよう、小型の魔獣達が一斉に彼女へ襲い掛かる。

——刹那、鮮やかな炎の波が魔獣達を呑みこんだ。

『・・・えっ？』

何が起こったのか理解出来ない様子の子のシーグヴァイラ・アガレ

ス。そんな彼女の元へ「あの男」が姿を現した。

『よお、随分と手こずっているようだな』

「ラ、ライザー!？」

部長が仰天している。たった今シーグヴァイラ・アガレスを助けた人物。赤いスーツに首元を包むマフラーの様な炎。まさしく、ライザー・フェニックスその人であった。その後ろには彼の眷属達が勢ぞろいしている。

『あ、あれは！ ライザー・フェニックスです！ 最近になってレーティングゲームランクをどんどん上げて行っている話題の男が救援に駆け付けましたあ！』

『どうしてあなたが・・・』

『兄貴にこつちの援護に回れって頼まれたんだよ』

『ふん、どうせならルヴァル氏が来てくれればよかったものを。フェニックスの落ちこぼれが来た所で・・・』

悪魔の一人がそんな悪態をつく。主を悪く言われた眷属達がその悪魔を睨むが、当の本人は涼しい顔でその悪魔に話しかけた。

『おや、ランキング五十四位の實力を持つタイタス氏にしては随分と弱気な発言ですな』

『ツ・・・!? わ、私の事を知っているのか?』

『アンタだけじゃない。そこにいるのは七十一位のバリウス氏。その隣に居るのは六十三位のローズ嬢だろ?』

『わ、私達の事まで・・・!』

『会話どころか、顔すらも合わせた事は無かったはずなのに・・・!』
『ライバル達のチェックは欠かしていないんでな』

匙君の事も知っていたんだ。もしかしたら、ゲームに登録している全ての悪魔の顔を覚えているのかもしれない。今の彼ならそれくらいのをやってのけてしまいそうだ。

『・・・しかし、百位内に収まる實力者達がこれほど揃っているのになんな魔獣一匹相手に何をやっているんだか・・・』

『し、仕方ないだろう! あの『豪獣鬼』は風のバリアでこちらの攻撃を悉く防いでしまうのだぞ!』

『ならば、そのバリアとやらを破壊してしまえばいいではないか』
『それが出来ないから困っているんです。あの激しさでは、接近して破壊するのも難しいですし』

シーグヴァイラ・アガレスの言葉に、ライザー・フェニックスは一瞬考える様なしぐさを見せ、口を開いた。

『ならば、この俺があこのバリアを破壊してやろう』
『どうするつもりですか？』

『知れた事。俺の炎を直接叩き込んでやるのよ』

『は、話を聞いていたのか！ あの風のバリアに近づくなど自殺行為だぞー！』

『俺は不死身のフェニックス！ あの程度のそよ風など問題では無い！ ユーベルーナ！ 雑魚の相手はお前達に任せるぞー！』

『お任せください！』

『さあ、突撃だああああああ!!』

炎の翼を纏い、ライザー・フェニックスと眷属達が『豪獣鬼』の元へ突撃を開始する。当然、それを阻もうと小型、中型、大型の魔獣達が彼等に襲い掛かるが、眷属達は抜群のコンビネーションでそれらを全て撃退していた。驚くべきは、ライザー・フェニックス自身は何の指示もしていないのに、眷属達が見事に連携している事だ。

『あ、あれがライザー・フェニックスの“シンクロ戦術”か……！』
『二声に出さずに指示を与える』……まるで互いの考えがわかっているかの様に戦う事から名づけられた戦術。こうして直に目にするまではとても信じられなかったが……！』

『ふはははは！ 愛する者同士が気持ちを確認し合うのに言葉など不要！ そうだろうお前達！』

『』『』『はい！ ライザー様あ！』『』『』

ノリノリで叫ぶライザー・フェニックスに同じくノリノリで応える眷属達。まさか、戦場で堂々と惚気られるとは思わなかった。

「……愛の力は偉大……って事でいいのかしら？」

部長が何とも言えない表情でそう言った。うん、多分そんな感じがいいと思いますよ部長。それ以上考えると疲れそうなので止めてお

きましよう。

『固まっている場合ではありません。私達も続きましよう……!』
シーグヴァイラ・アガレス達もすぐさまライザー・フェニックス達の援護を始めた。そのおかげで、ライザー・フェニックスと『豪獣鬼』の間に道が生まれた。

『シーグヴァイラ・アガレス! 俺がバリアを破壊したら全員でヤツに攻撃しろ! タイミングと指示はお前に任せるぞ!』

『で、ですが、それではあなたが……!』

『この都市を守りたいのだろう! だったら言う通りにしやがれ!』

それとも、お前の次期当主としての覚悟はその程度のものなのか!』

「ツ……! わ、わかりました……!」

『そうだ! それでいい! さあ、いくぞ『豪獣鬼』! これが俺の……
フェニックスの力だああああああ!!!』

ライザー・フェニックスの全身を鮮やかな炎が包み込む。やがてその炎は猛々しい鳥……フェニックスへとその形を変えた。そして、フェニックスは翼を羽ばたかせながら『豪獣鬼』へと突っ込んだ。

次の瞬間、『豪獣鬼』の体が炎に飲み込まれる。それから数秒も経たず、風の渦が目に見えて衰え始めた。

『シーグヴァイラ様! バリアが!』

『まだ……まだです……!』

バリアはまだ完全に消滅していない。シーグヴァイラ・アガレスは攻撃のタイミングを計っている様だ。

『……消えた! 今です! みなさん、全力で『豪獣鬼』へ攻撃を!』
待っていたとばかりに、同盟軍の者達はそれぞれの最大火力を『豪獣鬼』へと放った。爆発と閃光が『豪獣鬼』の全身で生じる。やがて、『豪獣鬼』は断末魔の声と共に遙か下へ広がる地へと落ちて行った。
『……た、倒した?』

『勝った……我々は勝ったんだ!』

『待て! 彼は……ライザー・フェニックスはどうなったんだ!?』

先程ライザー・フェニックスに悪態をついた悪魔が慌てたように叫ぶ。そんな彼の元へ、ライザー・フェニックスの『女王』ユーベル

ナが近づく。

『先程、あなたはライザー様の事をフェニックス家の落ちこぼれと言いましたね?』

『い、いや、あれは・・・』

『確かに、ライザー様は優秀な御兄弟の方々と比較される事もあります。ですが・・・』

『ツ・・・! み、見ろ! あそこ・・・!』

他の悪魔が指差す方向をカメラが映す。そこには力強く燃える炎が存在していた。

『ライザー様もまた、まぎれも無くフェニックス・・・天才なのです』
『女王』が炎へ目を向ける。数秒後、炎の中からライザー・フェニックスが姿を現した。

『不死鳥は! 炎の中から! 蘇る!』

ポーズを決めるライザー・フェニックス。効果音がつくとしたら
バアーン! だろうか。

『『『『きやー! ライザー様ああああ!!』』』』

黄色い歓声をあげながら殺到する眷属達を抱きしめるライザー・フェニックス。「不死」という特性を持っているとはいえ、躊躇い無くあの渦に飛び込むとは・・・。案外、イツセー君と似たタイプなのかもしれないな。

「・・・この調子だと、『豪獣鬼』達については心配する必要は無さそうね」

「ええ。そうなる後は・・・」

「魔王領の首都へ向かっている『超獣鬼』ですね」

「え? あ、ロスヴァイセ先生!」

突如として会話に加わって来たその声に振り返れば、そこにはロスヴァイセさんが立っていた。・・・私が留守の間に大変な事になって

「つい今しがた帰還しました。・・・私が留守の間に大変な事になっていたようですね」

「ええ。だけど、反撃の狼煙は既にあがっているわ。リョーマとイツセーが帰って来るまで、私達は私達のやるべき事をやるだけだわ」

「その通りです。微力ながら私も手伝わせてもらいますよ」

力強い表情で頷くロスヴァイセさん。そこへ、先程お茶を用意すると言って席を外していたレイヴェルさんが駆け寄って来た。

「皆様ー！」

「どうしたのレイヴェル？」

「都民の方々の避難をお手伝いしていたシトリー眷属の方々から連絡がありました！ 首都リリスに魔獣が出現したそうですわ！ おそらく『超獣鬼』が生み出したものだと思われます！」

「何ですって!?! くっ、グレイフィア達のおかげで本体は足止め出来ているからと油断していたわ」

「部長ー！」

「出撃するわよみんな！ ソーナ達と協力して、魔獣達を倒すのよ！」

「「「了解！」」」

こうして、僕達は出陣する事となった。恐れは無い。みんなで力を合わせて、絶対に守りきってみせるんだ！

祐斗SIDE OUT

ルシファー眷属による足止めにより、都民のほとんどは避難を完了させていた。そんな無人と化した街の中を、一台のバスが走り抜けていた。乗っているのは運転手と一人の女性。そして、大勢の子ども達だった。

「もっとスピードを出してくださいー！」

「わかってるー！」

運転手がバックミラーを確認する。バスの後方から複数の魔獣が追いかけて来ているのが確認出来た。

「せんせい、こわいよー！」

「大丈夫。大丈夫よ。先生が絶対に守ってあげるから」

涙を流しながら抱きついて来る子ども達を優しくあやす女性。彼女はとある幼稚園の先生で、子ども達はそこの園児だった。バスで避難中、運悪く魔獣と遭遇してしまい、逃げている最中なのだ。

「他のお友達はみんな無事に脱出したって聞いたわ。だから、私達も

絶対に大丈夫よ」

「ほんと？」

「ええ。先生が嘘を吐いた事がある？」

「ううん！」

「でしょ？ だから絶対に大丈夫——」

突然バスが停車した。女性はすぐさま運転席に向かう。

「どうしたんですか!？」

「あ、あれ……」

震える指で前方を指す運転手。その先に目を向けた女性の表情が凍りつく。バスの進行方向先——そこに大型の魔獣の姿があった。その不気味な目がバスを捉える。窓から魔獣の姿を見た子ども達も悲鳴をあげる。

「そんな……私達、ここで死ぬの……?」

運転手、女性、子ども達。誰もが絶望の表情を浮かべる。——ただ一人の少年を除いて。

「あきらめちゃだめだ！」

その少年の声に恐怖は無かった。泣いている友達の涙を拭い、再び声を張り上げる。

「みんなあきらめちゃだめだ！ ライオンさんだっかってたってたじやないか！ あきらめなかつたら、いつかぜつたいにかてるって！ だからあきらめちゃだめだ！」

右手に持つライオンさん人形（モデル、サイラオーグ・バアル）をみんなに見せながら何度も諦めては駄目だと繰り返す少年。そして、そんな少年の勇気は奇跡を起こした。

「——そうだ。よくぞ吼えた少年」

聞き覚えの無いその声はバスの右隣から聞こえて来た。そちらに視線を向けた女性が目を見開く。そこにいたのは、巨大な獅子だった。そして、その獅子の上に乗る一人の男。女性はその男に見覚えがあった。先日、テレビで見て以来密かにファンになっていた人物。誇り高き獅子王。その名は……。

「あ、あなたはまさか、サイラオー……!」

「ライオンさんだー！ー！ー！」

女性の声は大興奮状態の少年の声によってかき消されてしまった。

「ほんとだ！ ライオンさんだあ！」

「すごい！」

「カッコいい！」

気付けば、先程まで泣いていた子ども達の顔に笑顔が戻っていた。ライオンさんことサイラオーグ・バアルはそんな子ども達に笑みを浮かべると、運転手に声をかけた。

「後ろの雑魚共は片付けた。あの魔獣も俺が倒す。だからこのまま前進しろ」

「え、そ、それならここで反転して別の場所から逃げた方が・・・」

「脱出するならばこの道が近道だ。子ども達を安心させる為にも、迷っている暇は無いはずだぞ」

「た、確かにそうかもしれないが・・・」

「ライオンさんライオンさん！ ほくねほくね！ おおきくなったらライオンさんみたいになれるようにしゅぎよーしてるんだ！」

憧れの人物との出会いに我慢しきれなかったのか、会話に混ざろうとする少年を、女性が慌てて抑える。

「だ、駄目よカイト君！ 今大事なお話してるんだから！」

「カイト？ そうか・・・お前はカイトというのか」

「うん！ カイト・ブラストルっていうんだ！」

「ではカイト。よく見ておけ。お前が目指すものを。レグルス、行くぞ！」

サイラオーグの指示で走り始めるレグルス。カイトは窓を全開にし、これから起こる事を決して見逃さない様に見開いた。

「うんてんしゅさん！ はやくライオンさんをおいかけてよ！」

「ええい、くそ！ こうなりやヤケだ！」

アクセルをべた踏みし、サイラオーグを追い始めるバス。子ども達が一生懸命応援の言葉をサイラオーグへとかける。

「がんばれライオンさん！」

「まけないでー！」

「ほくもあきらめないからー!」

「わたしもー!」

「・・・不思議なものだなレグルスよ。子ども達からの応援というものは、どうしてこれほどまで心地よく・・・力が溢れるものなのだろうか」

「それは、あの子達の言葉には、ただあなたを想う気持ちだけが込められているからではないでしょうか。打算も何も無い、純粋な、心からの声援だからこそ、心地よさを感じるのではないのでしょうか」

「なるほど。では、不甲斐無い姿は見せられんな!」

不敵な笑みを浮かべつつ、サイラオーグは腰を深く落とし、右拳を引いた。そして、練り上げた闘気を拳に纏わせ、それを魔獣に向かって真っ直ぐに突き出した。

「ぬんっ!!」

次の瞬間、魔獣の体は冥界の空へ舞い上がっていた。十秒以上滞空した後、バスの遙か後方の道路に頭から落下し、そのまま永久に動かなくなった。

「すごい・・・やっぱライオンさんはすごいや・・・!」

カイト・ブラストル。――後にサイラオーグの再来と呼ばれる実力者へと成長する少年は、憧れの人物の背中を輝いた目で見つめて続けていた。

「素敵・・・サイラオーグ様・・・」

そして、もう一人別の意味で憧れる者もいたのだった。

第百六十五話 B i r t h d a y

祐斗SIDE

首都リリス。日本の東京とほぼ同じ規模の面積を誇り、文化、文明という点でもほぼ同じクラスと言える。もしも『超獣鬼』がこの首都に辿りついてしまえば、壊滅的打撃を受け、都市機能は停止、そうなれば冥界の各所にも甚大な影響が出てしまうだろう。

現在、グレイファイア様が率いるルシファア眷属の方々が『超獣鬼』を足止めしてくれている。・・・言い換えれば、あのルシファア眷属でさえ倒す事は叶わず、足止めしか出来ていないのだ。

それでも、諦めるわけにはいかない。僕達一人一人が為すべき事を為せば、必ず冥界を守る事は出来るはずなのだから。

僕達はグレモリー城の地下にある魔法陣から転移し、ついさつきリリスの北西区画に出たところだ。グレモリー眷属では無い黒歌さんと墮天使三人は僕達とは別の区画の防衛に向かっている。そして、非戦闘員であるアーシアさんと、元々ゲストであるレイヴェルさんはグレモリー城に待機してもらっている。

「みなさん!」

「ギヤスパア!?!」

高層ビルの屋上から街を見下ろし、シトリー眷属と合流しようとしたその時、なんとギヤスパア君が姿を現した。

「ここにいればみなさんと合流できると聞いていました!」

「そうだったの。なら、トレーニングの成果、期待してるわよギヤスパア」

「精一杯頑張ります!・・・あれ?　そういえばイツセー先輩や神崎先輩はいないんですか?」

辺りを見渡して首を傾げるギヤスパア君。・・・まさか、彼にはまだ知らせていないのか?」

(説明・・・するべきだろうか)

もちろん、教えるべきなのだろう。けれど、ギヤスパア君のメンタルを考えると、今説明してしまえば、戦う事が出来なくなってしまう

かもしれない。

「部長、あそこ・・・！」

部長に耳打ちで確認しようとした時だった。小猫ちゃんが突然とある方向を指差した。何事かとそちらを確認すると、黒い巨大なドラゴンが同サイズの魔獣の首元に牙を突き立てている姿が見えた。

「あれは、匙君だ！」

「という事は、ソーナ達もあそこね！ みんな、行くわよ！」

僕達は翼を広げ、一斉に空へと飛び出すのだった。

・・・

・・・

・・・

街の中は既に火の海と化していた。建物も道路も公共物も、ありとあらゆる物が抉れ、砕け、裂けている。そんな場所にシトリー眷属のみんなはいた。

「ソーナ！」

「リアス、来てくれたのですね」

「状況は？」

「都民の避難を護衛している途中で『禍の団』の者達が襲撃して来たのです。それは問題無く撃退できたのですが、今度は魔獣が至る所から出現して来まして。たった今、サジが大型を一匹倒してくれたのですが」

「へへ、あの程度のヤツなら何匹来ようが俺がブツ倒してやりますよ！」

既に龍王から元の姿に戻っていた匙君が笑顔で拳を握る。これは頼りになりそうだ！

「ええ。おかげであなた達の居場所が把握出来たわ」

「現在、私達は『禍の団』構成員や魔獣と戦いながら逃げ遅れた方がいないか見て回っています。リアス、手伝ってもらえますか？」

「もちろんよ。みんな、聞いたわね！ シトリー眷属と協力して逃げ遅れた人達がいたら救助するのよ！」

「「「はいー」」」」

行動指針が決まった所で、早速動き出そうとした僕達の元へ、シトリー眷属の巡さんと花戒さんが慌てた様子で駆け寄って来た。

「か、会長！」

「巴柄に桃？ どうしたんですか？ あなた達には東の搜索をお願いしていたはずですが？」

「そ、それが、避難民の搜索をしている最中に、あの男が……！」

「あの男？」

「曹操です！ 英雄派トップのあの男が一人で姿を現したんです！」

「……………」

曹操!? 何故あの男がこのタイミングでこんな所に現れたんだ!?

まさか、またよからぬ企みを……。

曹操の目的について考えを巡らそうとしたその瞬間、背後から強烈な殺気を感じ取った。振り返った僕の視線の先で、殺気の主……匙君が口を開く

「……巴柄、桃。本当にあの野郎が出て来たんだな？」

「げ、元ちゃん？」

「間違い無いかどうか聞いてんだ」

「う、うん。聖槍も持ってたし間違い無いよ」

花戒さんがそう答えた瞬間、匙君は弾かれた様に走り始めた。その背中を見つめながら、僕はグレモリー城で彼と交わした会話を思い出していた。

——神崎先輩を嵌めた英雄派の連中。そして兵藤を殺したシャルバ・ベルゼブブ。どっちでもいい。もし見かけたらすぐに俺に教えてくれ。俺が……ヴリトラの炎で魂まで燃やしつくしてやるから。

「匙君！」

気付けば僕は匙君の後を追いかけていた。背後から部長が僕の名を叫ぶ。

「祐斗!? どうしたのいきなり!」

「部長、会長! 匙君は曹操の所に行くつもりです! あの聖槍相手では彼一人では危険過ぎます!」

「ッ!? サジ……!」

匙君、頼むから無茶だけはしないでくれ……！

祐斗SIDE OUT

「ふっ……！」

男の突き出した槍の穂先が魔獣の腹部を易々と貫いた。引き抜く際、魔獣は一瞬だけ体を震わし、地へ伏せた。

槍にへばりついた泥の様な血を飛ばし、男は背後にいた女性へと目を向ける。この女性は魔獣に襲われそうになった所をこの男に助けられていた。

「あ、あの……ありがとうございます！」

「……礼をいうヒマがあるならさっさと逃げるんだな」

頭を下げる女性に対し、男は興味もなさげにそう返した。女性はどう一度頭を下げると、一人燃え盛る街の中を駆けて行った。本来であれば、女性が無事に避難するまでついて行くのが正解だろう。だが、男が女性を助けたのはただの気まぐれであり、これから先あの女性が助かるうが助かるまいが男にとってはどうでもよかった。

「気まぐれで悪魔を助ける……か。はは、俺は一体何をやっているんだろうな」

自嘲する様に薄く笑う男……曹操。疑似空間でグレモリー眷属と戦った後、彼は魔獣襲撃で混乱する冥界へ一人足を運んでいた。それは、冥界が崩壊する様子を特等席で見物する為か、それとも、中間の能力を利用した者への報復の為か。

——否。彼には最早目的など存在していなかった。あの日、真の英雄と呼べる男を結果的に騙し、その上で救われてしまった時から、曹操は全てがどうでもよくなっていた。もしかしたら、あの女性を助けたのも、あの男の行動を模しただけなのかもしれない。「彼ならば、きっと助けただろう」……と。

「いなくなつてなお、その影を追い続ける。神崎君、どうやら俺は相当キミにまいつてしまっていた様だ。こんな事を言われてもキミからすればいい迷惑だろうけどね」

曹操の人生の中で、ここまで何かに執着した事など一度も無かつ

た。それほどまでに、〃彼〃という存在に焦がれるのは、やはり〃彼〃が本物の英雄と称される存在だからだろうか。曹操は自問を繰り返す。

「キミを失ったあの日、夢を見たんだ。その夢の中で、俺とキミは英雄として共に戦場を駆けていた。互いに背中を預け合い、どんな敵だつて倒してみせた。だから、すぐに夢だつて気付けたよ。キミが俺に背中を預けてくれるなんて、万に一つもありえないのだから。あんなに楽しくて、あんなに幸せで・・・あんなに残酷な夢は初めてだった」

もつと早く〃彼〃と出会えていれば、もつと早く〃彼〃という存在を知っていれば、ひよつとしたらその夢は現実となっていたかもしれない。だが、所詮は可能性、IFでしかないのだ。

「この聖槍を持つて生まれた以上、俺には英雄になる以外に道は無い。そう思っていた。・・・だが、今なら彼が言っていた言葉の意味がわかる気がする。英雄とは、自ら名乗れる様な安いものでは無い。本当の、真の英雄とは・・・」

その時、曹操は不意に背後に人の気配を感じ取った。振り返らずとも、彼にはその気配の正体がわかった。

「・・・ゲオルクか」

そう言つて振り返れば、そこに立っていたのはまさしくゲオルクだった。

「急に姿を消すのは止めてくれ曹操。ここまで探すのに随分苦労したぞ」

「そいつは済まなかった。それで・・・これから英雄派はどう動くつもりだ？」

「それを決めるのはキミだろう」

「ふっ、誤魔化すな。既に英雄派のほとんどはお前の下へついているそうじゃないか。まあ、こんな腑抜けより、野心溢れるお前の方へついて行きたくなるのは当然だろうがな」

曹操は既に仲間達の心が自分から離れている事に気付いていた。そして、それを再び纏め上げているのが目の前の男なのだという事も。

「・・・確かに、英雄派の中には俺を支持してくれている者もいる。だが、それでも俺達のトップは曹操、キミだ。キミがこの組織をこころま大きくしたんだ。キミがこれだけの者を集めたんだ。俺じゃない。キミだから出来た事なんだ。キミという英雄が俺達には必要なんだ。だからこそ、キミには最後まで組織に対する責任があるはずじゃないのか？」

「ゲオルク。お前にとって、俺はまだ英雄なのか？」

「もちろんだ。他者によって認められ、初めて英雄となるのであれば、曹操・・・キミと出会ったあの日から、俺はずっとキミを英雄だと認めて来たよ。これは俺だけじゃない。英雄派全員の総意だ」

「・・・神崎君を嵌めたのも、総意だと？」

測る様な口調に一瞬言葉を詰まらせるゲオルクだが、それでも臆せず答えた。

「・・・騎士殿の事は済まなかったと思っている。だが、俺はキミに負けて欲しくなかった」

「どういう意味だ？」

「キミは騎士殿を真の英雄と認め、接触していた。キミからすればそんなつもりではなかったのだろうが、俺達から見れば、戦わずに敗北を認め、擦り寄っている様に見えたのも確かだ」

「ッ・・・」

曹操が僅かに目を見開く。それを確認し、ゲオルクは続ける。

「超常に挑む・・・そう語るキミの姿は眩しかった。以前のキミはまさしく怖いもの無し。何が相手であろうと怯まずに立ち向かうその姿に俺達は惹かれた。俺は・・・そんなキミに戻って欲しかっただけなんだ・・・」

「・・・そうか。そうだったのか。結局、全ての元凶は俺だったという事なのか・・・」

曹操の中に一つの答えが生まれようとしたその時だった。二人しかいないはずのその場に新たな人物が姿を現した。

「曹操おおおおおお!!!」

祐斗SIDE

「曹操おおおおお!!!」

今のは匙君の声!? くそ、もう接触したのか! 僕はギアをさらに上げ声のした方へ全力疾走した。

数秒後、僕が目にしたのは、匙君と、それに相対する曹操とゲオルクの姿だった。よかった。まだ戦闘は始まっていないみたいだ。しかし、ゲオルクまでいるとはな。巡さん達が見た時は一人だったらしいから、ここに来るまでの間に合流したのかもしれない。

「木場祐斗? キミもいたのか?」

「僕だけじゃないよ」

「サジ!」

「元士郎!」

「元ちゃん!」

「祐斗!」

「木場!」

他のみんなも追いついた様だ。改めて、全員で曹操達と向き合う。「グレモリー眷属とシトリー眷属が勢ぞろい……いや、赤龍帝は既に死んでいるから勢揃いというわけではないか」

「曹操お! テメエの、テメエ等の所為で神崎先輩は消えちまった! 兵藤も、テメエ等が呼び寄せたサマエルの毒を食らった上でシャルバ・ベルゼブブに殺された! 許さねえ……テメエ等だけは絶対に許さねえからなあ!!!」

「シャルバに関してはこちらも出し抜かれた……と言つても納得してくれないだろうな」

匙君の殺気を受けても、ゲオルクは動揺も無くそう答える。この時、僕は匙君の怒りにばかり気を取られ、「彼」の事を考えていなかった。

「……え? どういう事ですか?」

ギヤスパ―君がきよとんとした様子で漏らす。しまった! このタイミングで真実を知ってしまったら……!」

「ま、待ってください! 神崎先輩は!? イッセー先輩は!? あの太

きな魔獣を止めに行ってるんじゃないんですか!？」

「? キミは知らされていないのか? 騎士殿は禁術により過去とも未来ともれない時空の彼方へ消えた。そして赤龍帝は俺達が地獄より呼び寄せた『龍殺し』サマエルの毒を受けた状態で旧魔王派のシャルバ・ベルゼブブと交戦し戦死した。．．．最も、赤龍帝に関してはシャルバが勝手に言っている事だが、サマエルの毒を受けた以上、生存は絶望的だろう」

「嘘．．．嘘だそんなの．．．」

ギヤスパ―君の顔から瞬く間に生気が失われて行く。違うんだギヤスパ―君。イツセー君は間違い無く生きているんだ。だが、ここでそれを言えば曹操達にも聞かれてしまう。だから、それを話すのは後だ。

——この判断が大きな間違いだったと、僕は数秒後に思い知る事となる。崩れ落ち、顔を伏せるギヤスパ―君。その顔が上がった時、そこには『無』が広がっていた。

「ツ．．．!?!? ゲオルク!」

突如として曹操が聖槍を構えゲオルクの前に立つ。そして次の瞬間、ギヤスパ―君の口からおぞましい呪詛めいた声が紡ぎ出された。

《——死ね》

僕達の立つフィールド。それが一瞬で闇に包まれた。地面も、空も、全てが暗闇に支配される。それらの闇は全てギヤスパ―君の体から生まれていた。

「なんだ．．．これは．．．!?!」

「これは．．．ギヤスパ―君の禁手なの．．．?」

「いいえ違うわ! これは．．．この力はヴァンパイアの．．．」

戸惑いと恐怖で混乱する僕達を尻目に、ギヤスパ―君：いや、今のアレをギヤスパ―君と呼んでいいのだろうか? 闇に包まれた人型が異様な動きで曹操達に近づいて行く。

《ウバツタナ．．．僕ノダイジナ人達ヲウバツタナ．．．。ユルサ

ナイ．．．今度ハ僕ガ才前達カラウバツテヤル．．．!》

「部長．．．ギヤスパ―は．．．!?!」

「・・・ヴラデイ家がギヤスパーを蔑ろにしていたのは神器の所為じゃない・・・。これが・・・この存在を知っていたからこそ家から追い出した・・・？」

「くっ・・・！」

赤く輝く双眸を向けられたゲオルクが魔法陣を展開しようとするが、次に瞬間には闇に跡形も無く食われてしまった。

「ッ・・・!? 馬鹿な!? 魔法も神器も使わず、どうやって我が魔法陣を・・・!?」

「止めるゲオルク！ 下手に刺激するな！」

曹操の制止を聞かず、ゲオルクは距離を取り大量の魔法陣を展開させ、ギヤスパー君を攻撃した。だが、それらの攻撃は闇の中に出現した無数の赤い「目」の輝きの前に全て停止させられてしまった。そして、先程と同様、全て闇に食われ消滅していった。

《アハ・・・アハハハ・・・！ ウバツタ・・・ウバツテヤツタ・・・。才前ノ魔法ヲ全部ウバツテヤツタ・・・！ 最高ニ・・・最高ニハイツテヤツダアアアアア・・・！》

こめかみ辺りを指で押さえながらケタケタと笑うギヤスパー君。僕達を知る彼とは言動がまるで違う。もう・・・別の存在といつていいかもしれない。

「そ、曹操・・・！」

「・・・撤退だ。それしか方法は無い」

「この状況で逃げれると思うんじゃないぞ！」

匙君が曹操達を捕えようとその右手に黒い炎を浮かべようとしたその時だった。上空から快音が鳴り響いた。見上げると、闇を通して辛うじて宙に次元の裂け目が生まれようとしているのが確認出来た。

その裂け目の中から・・・それは出現した。『それ』を目の当たりにした今日という日を、僕は一生忘れる事は無いだろう・・・。

祐斗SIDE OUT

グレモリー眷属とシトリー眷属が曹操達と遭遇する最中も、ルシファー眷属と『超獣鬼』との戦いは続いていた。『女王』グレイファイア

が地形を変えてしまうほどの絶大な力を秘めた魔力を放つ。他の眷属達も、それぞれに強大な攻撃を加え続ける。それでも、『超獣鬼』は倒せない。

「くそつたれ！ いいかげんくたばりやがれこのデカブツが！」

「スルト、口を動かす余裕があるなら一発でも多く攻撃しなさい！」

「でも姐御！ このままじゃ埒があきませんぜ！」

「それに、こちらの消耗も無視できないレベルまで来ました」

「誇りあるルシファアー眷属にあるまじき発言ですね。この戦いが終わったら久しぶりに、勉強会、でも開きましょうか？」

「おらテメエ等あ！ ぶつくさ言ってねえでどんどんぶちかませええええええ!!！」

「ちよつ、スルト変わり身早過ぎい！」

「うつせーべオ！ テメエは勉強会の恐ろしさを知らねえからそんな事が……！」

「グレイファイア！」

いきなり名前を呼ばれ、グレイファイアが目を向けると、見憶えのある四人の女性が自分に向かって近づいて来ていた。

「あなた達は、神崎様の……！ どうしてここに？」

「加勢しに来たのよ。首都の方はリアス達に任せてあるにや。……こつちにいれば、『アイツ』に会えるかもしれないしね」

「加勢など……いえ、今は少しでの戦力が欲しい所です。どうか、お力添えをお願いします」

「ほ、本当にあんな化物と戦うんすか？」

「怯むなミツテルト！ 我等は神崎様の眷属として、あの方が御帰還されるまで戦い続ける義務があるのだぞ！」

「カラワーナの言う通りよ。神崎様の帰る場所は私達で守るのよ！」

「……そうッスね。はい！ すみません！ ウチも覚悟出来ました！」
「やれやれ、世話が焼け……危ない！」

黒歌がミツテルトを抱きかかえその場を離脱する。一瞬の後、そこを緑色の光線が通り過ぎて行った。

「今のは……!？」

「ッ！ あそこだ！ 『超獣鬼』の顔の辺りを見ろ！」

全員が『超獣鬼』の顔へ視線を向ける。周囲の空間が歪み、そこから無数のロボットらしき物が姿を現した。百や二百ではきかない数だ。そのロボットに黒歌達は見憶えがあった。

「あれは……間違い無い。皇帝機にや！」

「という事は……まさか!？」

「くははははは！ ごきげんようルシファー眷属の諸君！」

一機の皇帝機が前に出て来る。誰もがその声の正体に気付いた。

「シャルバ・ベルゼブブ……！」

「どうかな、私の用意した毒は？ これこそが、悪魔の歴史に終止符を打つ最終兵器だ！」

「あなたのやっている事は冥界の……悪魔社会への不当な暴虐です。速やかに投降しなさい」

グレイフィアの降伏勧告に対し、シャルバはビームでもって返答した。

「何が降伏だ！ 最早この『超獣鬼』を止める者など存在しない！」

フューリーは消え、赤龍帝は死んだ！ このままりリスを破壊し尽くしてやる。貴様等の守ろうとする物がどれほど無価値な物か、思い知るがいい！」

「はっ、ご主人様がアンタ達みたいな三下ごときにやられるわけがないじゃない。今度は許されると思うんじゃないわよ。精々覚悟しときなさい」

「黙れ雌猫風情が！ フューリーよ！ 私はここだぞ！ 戻れるものなら戻って来るがいい！ はは、はははは、あひやひやひやひや！」

シャルバが高笑いをあげると同時に——黒歌達の耳にその音が聞こえて来た。次元が裂ける時特有の快音。それは、都市と『超獣鬼』との丁度中間位置から鳴っていた。

「何だ……?？」

「見ろ！ 何かが現れるぞ……！」

次元の裂け目から飛び出して来たモノ——それは紅き偉大なるドラゴン。『真なる赤龍神帝』グレートレッドであった。突然現れた

世界最強の存在に目を見開く一同。

「な、何故今グレートレッドが・・・」

誰もがグレートレッドの姿に目を奪われる。・・・その中で一人、違和感に気付いた者がいた。

「・・・グレイフィア様」

「どうしましたマクレガー？」

「次元の裂け目が閉じません・・・それどころか先程よりも大きさを増しています」

グレイフィアは改めて次元の裂け目に目を向けた。・・・確かに、グレートレッドが飛び出して来た時よりも大きさが増している様に見える。さらに、変化はそれだけでは無かった。

「・・・何が噴き出している？」

裂け目の向こうからこちらの世界に噴き出して来ているもの・・・それは、深く、おぞましい「闇」だった。その「闇」が次元の裂け目を侵食し、結果、裂け目は大きさを増していたのだ。

「まさか・・・グレートレッドはあの「闇」から逃げようと・・・？」

だとすれば、あの向こうにはグレートレッドすら逃げ出すほどの「ナニか」が存在していて、それが今にもこちらの世界へ出て来ようとしているという事なのだろうか。グレイフィアは無意識に体を強張らせていた。

「・・・来るー！」

——その瞬間、首都リリス周囲にいた全ての者達が「ソレ」を見上げた。遠く離れ、直接目にしない者達は、「ソレ」の方向に向かって目を向けた。悪魔・・・いや、冥界に存在する全ての命あるモノが「ソレ」の存在に気付いたのだ。ギリシャから呼ばれた屈強な戦士達や、ヴァルハラの子の美しきヴァルキリー部隊も例外では無い。戦闘中

であるにもかかわらず、戦う手を止め、〃ソレ〃に意識を奪われる。

〃ソレ〃は人々の前にゆっくりと姿を現した。闇と交じり合ったかのごとく、どこまでも冥い青き鎧。血に彩られたかのように鈍く輝く赤き双眸。背中に浮かぶ光輪から放たれる光は、神々しさとは真逆の禍々しさに満ち溢れていた。

「あ……ああ……！」

ある者は恐怖で崩れ落ち。

「御覧なさい！ 冥界の危機に、あの方が再臨されました！」

またある者は〃ソレ〃を見て笑いながら涙を流す。

「リヨーマ……さん……？」

そして、またある者は自らの愛する者が帰還した事に気付いた。

歴史家達により、後に「魔神が生まれた日」と名付けられたこの事件は、「鋼の救世主」と共に冥界の歴史において永久に語り継がれる事となるのであった。

第百六十六話 騎士（笑）と魔人

「……どこだ、ここは？」

どこまでも広がる闇の中、俺は一人ポツンとその場に立っていた。おかしい。たった今、俺は復活した兵藤君と言葉を交わして、それで……それでどうしたんだっけ？ まさか、あんな場面で気絶して絶賛夢の中とかいうわけじゃないよな？

『いいえ、ここは間違い無く現実ですよ』

突如として聞こえて来た何者かの声。今は……フェニックスさん？ ……いや、違う。あの人の声はもつとワイルドだ。こんな……こんな胡散臭い声じゃない。

目の前に現れる紫色の光。それは少しずつ人の形へと変わって行った。その変化をただ呆然と観察していた俺だったが、光が治まりその人物の顔が露わになった瞬間、俺は息を呑んだ。

『少々強引ではありますが、対話の場を設けさせて頂きました。あのまま“あの力”を発現させるわけにはいきませんでしたからね』

紫色の髪、整った顔立ち、そして白のロングコートを身に纏うその人物を、俺は嫌というほど知っていた。

“ラスボス”、“天才”、例える言葉はたくさんある。だが、俺がこの人を例えるならばやはりこの言葉以外に無い。

“魔神を駆る魔人”。即ち……。

『クク、どうしました。ハイファミリアを切り払われたマサキの様な顔をして』

「シユウ……シラカワ……」

俺の前に立ち、ニヤリという擬音が相応しい笑みを向けて来る人物……それは間違い無くシユウ・シラカワ博士その人だった。

シユウ・シラカワ……おそらく、スパロボ好きならば一度は聞いた事のある名前だろう。作品によって味方だったり敵だったり立ち位置が忙しないキャラクターだが、総じて言えるのは、このシユウ・シラカワという男は間違い無くスパロボにおける最強キャラの一人

であるという事だろうか。その実力は、彼の愛機「グランゾン」及び「ネオ・グランゾン」と合わせ「スパロボ界のジョーカー」と称されるほどである。

一部では最近のスパロボでは設定的にもっとヤバい奴がいっぱいいるとか言われてみたいのだが、スパロボシリーズ古参の俺にとって、やはり最強のラスボはこの人であると断言出来る。設定ではなく、性能的な話でな。

なにせ、グランゾンはHP回復やEN回復はあたりまえ。ダメージ半減バリアにビーム吸収。高威力かつ長射程武器に広範囲MAP兵器完備。その他諸々、挙げていけばキリが無い。あ、ヤバい。こうして振り返るだけで第三次や第四次のトラウマがががが。

とりあえず、最近のスパロボしか知らない子はウインキー時代のスパロボを一回遊んでみるべきだ。そうすれば、俺のこの気持ちをきつと理解してくれるだろう。そして、「理不尽」という言葉の真の意味も！

『・・・何やら遠い目をしていますが、そろそろ話をさせて頂いてよろしいでしょうか？』

「は、はいー」

背筋を伸ばし返事をする俺に、博士（呼び捨てしたらヤバそうなのでこう呼ぶ事にする）はまたしてもニヤリとする。

『クク、そう緊張する必要はありません。私はただあなたと“お話”したいだけですから』

あなたのOHANASHIとか嫌な予感しかしな感じですけどお！

『さて、本題に入る前に、まずはあなたが抱いているであろう疑問について答えていきましょう。最初に私という存在についてですが、私はシユウ・シラカワであってシユウ・シラカワではありません。あなたの記憶、イメージの中にあるシユウ・シラカワという人物を素に創りあげられた疑似人格とでも思っ頂いて構いません』

「は、はあ・・・」

『では、何故私という存在が創りだされたのか。それは、“あの力”を

発現させる前にあなたの意思を確認する為のいわば最終安全装置としての役割を与えられたからです』

あの力？ 最終安全装置？ それが何を意味しているのか理解出来ず首を傾げる俺に博士は問いかけて来た。

『確認ですが、あなたは自分に何が起きたかちゃんと理解していますか？』

何が？ ええっと・・・曹操さんと勝負してたら、彼の仲間が出て来て、そいつ等の所為で過去の世界に飛ばされて、クレーリアさん達を助けて・・・兵藤君が死んだと聞かされて、気合いとシユウゾウの力で戻って来て、兵藤君とオーフィスちゃんに再会して、それで・・・『そこまでで結構です。では、そもそもこの様な事態を招いてしまった原因については？』

それはもちろん、俺を罠に嵌めた a u 派と兵藤君をあんな目に遭わせたっていうシャルバ・ベルゼブブやサマエルとかいうヤツ等の・・・『そうですね。確かに直接的な原因は彼等なのでしょう。・・・ですが、これはあなたの認識の甘さが招いた事でもあります』

「・・・え？」

冷たい声で言い放つ博士に、俺はそんな間抜けな声しか返せなかった。それってつまり、俺の所為で兵藤君は死んだって事なのか？

『あなたは自らに与えられた力の強大さをまるで理解出来ていない。英雄派を名乗る者達から襲撃を受けたあの場面、時間兵器「ラースイレム」で彼等を停める。もしくは空間跳躍機能「オルゴン・クラウド」で魔法陣から離れる。切り抜ける手段はいくらでもあつたはずですよ？』

「それは・・・」

『ですが、あなたは何もしなかった。あまつさえ、敵であるあの男を助けた。その結果、あなたは一人過去に跳ばされ、あなたの仲間達はあなたを欠いたまま敵に襲われ・・・あなたの後輩は死んだ。あなたがその場にいれば防げた悲劇です』

その過去で別の悲劇を防ぐ所はあなたらしいですが。博士は呆れと感心が混ざった声色でそう続けた。

『人外達が蔓延るこの世界において、あなたはあまりにも甘過ぎる。あなたに比べれば、まだあのアーシアという少女の方が現実を知っていると言えるでしょう。・・・そういえば、あの少女が攫われた時も、あなたは棒立ちでそれを見送るだけでしたね。あの戦いで覚悟を決めたつもりなのでしょうが、それでもまだあなたには足りない物が多すぎる。もう一度言いましょう。この事態を招いたのは、あなたの所為でもあります』

「俺の・・・所為・・・」

俺はその場に崩れ落ちた。俺が兵藤君を殺した。俺の所為で兵藤君が死んだ。俺が・・・俺が・・・。

『・・・それでいいのですか?』

胸の中でグチャグチャになった感情が暴れ回り、最早まともな思考すら出来なくなりかけていた俺の意識を、博士の声が繋ぎとめた。

「博士・・・?」

顔を上げる。博士は真っ直ぐに俺を見つめていた。侮蔑するでもなく、見下す事も無く、ただ真っ直ぐに。

『そうやって過ぎた事をいつまでも悔やみ続けていたいのならば止めはしません。どうぞ好きなだけそうしていてください。ですが、こうしている今も、あなたの仲間達は戦っています。絶望的な状況であるにも関わらず、誰一人として諦めていません。その理由があなたにわかりますか?』

仲間達っていうと、リアス達の事か。・・・そんなの考えるまでもない。彼女達は自分の大切な物を守る為ならどこまでも強くなれる子達だ。簡単に絶望なんかするはずがない。

『確かにそれもあるでしょう。ですが、一番の理由はあなたですよ』

「俺・・・?」

『あなたは必ず戻って来る。それを信じて彼女達は今も戦い続けています。・・・もう一度お聞きしましょう。それでもあなたは何もせずここで悔み続けるだけで終わるつもりですか?』

俺が答える代わりに立ち上がると、博士は満足そうに微笑んだ。

『どうやら、意思是固まったようですね』

「はい。俺はみんなの所に戻ります。．．博士の言う通り、俺には足りない物が多すぎる。それでも．．もう二度と間違えたりしない。今度こそ、俺の大切なものを守る為に！」

『ふっ。それでこそあなたです。ここでまだ愚図るようならば催眠術でも使わせてもらおうかと思っていましたよ』

それってまさかヒーロー戦記の時の．．いや、これ以上は止めておこう。

『さて、だいぶ話が逸れてしまいましたが、そろそろ本題に入りましょうか』

え!?! 今のが本題じゃなかったの!?!

『最初に言いましたよね。私は「あの力」を発現させる前にあなたの意思を確認する為の最終安全装置だと。間違ってもこんな説教まがいの事をする為にここにしているわけではありません』

「あの、さつきから口になっている「あの力」というのは一体．．．」
『あなたが身に宿す「オ・クアーンの駒」の力はあなたの想いや感情に左右されます。後輩を傷付けられたあなたの心に満たされた「怒り」が「あの力」．．あなたがネオ・ラフトクランズと呼ぶあの力の発現させる事となったのです』

ネオ・ラフトクランズ?．．げっ!．．それってまさか、以前アガレスさんのお家にお邪魔した時にテンション任せでネオ・グランズンをベースに他の機体を混ぜて設計したあのラスボス機体の事か!?

『まさか、私の半身とも呼べる存在をあの様に好き勝手弄られるとは思いませんでしたよ。．．まあ、疑似人格である私が言ってもしょうがない事ではありますが』

あばばば!．．やばい、博士が怒ってらっしやる!

『別に怒ってなどいませんよ。あれはあくまでもあなたが設計したものの。グランズンとは別の存在なのですから。何をどうしようとしたあなたの自由です』

すぐさま土下座しようとしたら博士は気にしていない様にそう言ってくれた。

『あのネオ・ラフトクランズの力はあまりにも強大です。悪魔や天使、墮天使はもちろん、神を名乗る者達すらネオ・ラフトクランズの敵では無いでしょう。これが誇張でも何でも無い事は、設計したあなたが一番わかっているはずです』

・・・確かに、あのチートを通り過ぎてバグ・・・いや、最早〃仕様〃レベルのスペックが本当に再現されているなら、本気でヤバいけど。

『神崎亮真。あなたは、この強大過ぎる力を以って何を為すつもりですか？ 自分を嵌めた者への報復ですか？ あなたの後輩の命を奪った者達の命を逆に奪いますか？ あなたにはそうするだけの理由、そしてその為の力があります。あなたを止められる者はいません。全てあなたの自由です』

博士は囁く。報復しろと。全ては俺の自由だと。俺を止められるものはいないと。それでも、俺は首を横に振ってそれを否定した。

「・・・博士。俺は誰も殺すつもりはありません」

『何故ですか？ あなたの大切な人間を傷付けた相手が憎くは無いのですか？ ・・・それとも、復讐は何も生まない。命までは奪わなくとも・・・などとくだらない事を言うつもりではありませんよね？』

明らかに落胆した様子の博士。だけど、彼は誤解している。俺は決してそんな事を考えているわけではない。

「・・・憎いですよ。俺の大切な後輩である兵藤君をあんな目に遭わせたヤツ等を許せるわけじゃないじゃないですか」

『では・・・』

「アイツ等は〃痛み〃を知らないんです」

博士の言葉に被せるように俺は声を出した。

『どういう意味ですか？』

「大切な人を理不尽に奪われる〃悲しみ〃、〃痛み〃。それを知らないから簡単に人の命を奪える。・・・俺の両親を殺したあの男がそうだったように」

あの男は俺を含め多くの人達に〃痛み〃を与えた。その辛さを知っている俺が、それを撒き散らす側になっていいはずがない。殺し

た瞬間、俺はあの男と同じになってしまう。あのクソ野郎と同じになるくらいならば死んだ方がマシだ。

「だから、俺は絶対に命は奪いません。．．．その代わり、思い知らせてやります。自分のしでかした事の重大さを。理解出来るまで何度も、何度でも．．．」

『．．．そうですか』

それつきり博士は口を閉じる。ついさっき甘いと言われたばかりなのに、今の発言で呆れられてしまったのかもしれない。

『あなたの意思はわかりました。では、そろそろ力の解放を始めましょうか』

「え．．．!？」

『何か?』

「いや、あの、てつきりまた甘いと言われるかと．．．」

『私はあなたがどうしたいのかを確認したかっただけで、甘い、甘くない等と議論する気はありませんから』

あ、そうですか。

『そもそも、他人に甘いだのなんだの言われて簡単に翻してしまうほど、あなたのそれは軽いものなのですか?』

．．．いや、なんと言われようとこれだけは譲れない。これは決して甘さから来た思いじゃない。カッコつければ「信念」。悪く言えば「エゴ」みたいなものだ。どれだけ憎くても、どれだけ許せなくても、俺は絶対に誰かを殺したりはしない。

『あなたが何を考え、何を為すのかは、全てあなたの「自由」。私にはそれを妨げる権利はありません』

それは、ひたすらに自由を求めて戦い続けた男の言葉だからこそ、俺の胸に深々と突き刺さった。

『とはいえ、あなたが未熟なのもまた事実。．．．ここはやはり当初の予定通りに行きましょうか』

そう言っ博士は俺の方へゆっくり近づいて来た。な、何? 何が始まるんだ?

『氣を楽になさい。そして、私に続いて詠唱するのです。．．．オン・

マケイシヴアラヤ・ソワカ』

それは、博士が蒼き真なる魔神を呼び出す際に口にする呪文だった。俺は深呼吸し、その呪文を口にした。

「オン・マケイシヴアラヤ・ソワカ」

その瞬間、俺の周囲に広がっていた闇が俺の体に纏わりつく。それは蒼く冥い装甲へと姿を変え、俺の全身を包み込んだ。

・・・

目の前に広がる穴。ここを通れば冥界へ戻れる。兵藤君とオーフィスちゃんを乗せたグレートレッドさんが立った今この穴に飛び込んだばかりだ。なので、ここにはもう俺しか残っていない・・・わけではない。

『呼びましたか?』

はい、そうです博士です。姿を消したと思ったら俺の中に居座っちゃってました。なんでも、未熟な俺がヘマをしない様に、ネオ・ラフトクランズの状態の时限定でサポートしてくれるそうです。

『ネオの名を冠する以上、無様な戦いは私が許しません』

との事ですハイ。しかし、今のこの状況。魔装機神風に例えるなら・・・一体化してるから精霊憑依^{ホゼッション}?

『ククク、マサキが聞いたら怒りだしそうですね』

ああ、確かに。「精霊憑依じゃなくてコイツの場合魔人憑依だろー!」とかツツコミそう。

『そういえば、戦場に出る前にもう一つだけあなたに尋ねておきたい事があります』

なんですか?

『自分達の犯した罪の重さを思い知らせる・・・とあなたは言いましたが、具体的にどのようなようになさるおつもりですか?』

具体的に? ええっと・・・反省するまでぶん殴るとか?

『・・・足りませんか』

足りない?

『中途半端な報復に意味はありません。報復するのならば、二度とあなたに歯向かう事が無い様、徹底的にやるべきなのです。あなたと、あなたの身内に手を出せばどうなるか・・・それを理解させるいい機会です。その為の生n・・・相手もいる事ですし』

今、生贄って言いかけましたよね？ 絶対言いかけましたよね？

言っている事は物騒極まりない。それなのに、博士のその言葉を、俺は不思議と受け入れていた。それは、怒りによるものか。それとも、俺の中に博士の考えに通じる様な何かがあるのか。

『目には目を、歯には歯を。そして・・・理不尽には理不尽を。暴虐は、それを上回る暴虐によって潰されるのが常なのです』

理不尽には理不尽を・・・。暴虐には暴虐を・・・。

・・・

『さて、ここまで私の話を聞き続けて、あなたの中で決心はつきましたか？』

ハイ。ハカセタダシイ。オレガンバル。ミンナシアワセ。

『ククク。いい返事です。ではおしゃべりはこのくらいにして、そろそろ行きましょうか』

『ちよおおおおおと待たんかああああああい!!!』

・・・はっ！ 俺は何を・・・？ 何か博士の「マサキでもわかる正しい暴虐」の講義を聞いている内に意識が・・・。というか、今の声ってオカン？

『ちよつと目を離してたと思ったら、アンタなんちゆう物騒な力を・・・！』

『やれやれ、邪魔しないで頂きたいのですがね』

『だ、誰やアンタ？・・・その子の中におるんか？』

『答える義理はありません。少し黙っててもらいましょうか』

『はあっ!? ちよ、待ち・・・!』

それつきり、オカンの声は全く聞こえなくなっていました。

『話が長引きそうだったので、強制的にシャットダウンさせて頂きます』

した』

フアツ!? シャットダウンって・・・何でそんな事出来るんですか!?

『神ごときに邪魔をされる筋合いはありません。・・・そうでしょう?』
アツハイ。

・・・これ以上蒸し返すのは止めよう。精神的にロクな事にならない
そうだし。

『さあ、報復を始めましょう』

・・・博士、あなたが言うとかチで心臓に悪いんで勘弁してください。
い。

第百六十七話 痛み

次元の裂け目より闇を纏いながら姿を現したナニか。戦場を一瞬で凍りつかせ、誰も彼もがあらゆる行動を停止した。『超獣鬼』すらも歩みを止め、〃異形〃へと視線を送っていた。戦場においてそれが愚行だと頭ではわかっていても、本能の内から湧き上がる〃感情〃がグレイファイア達の体をその場に縫いつけていた。

その感情とは・・・即ち〃恐怖〃以外の何者でも無かった。魔王眷属ほどの実力者でありながら・・・実力者であるからこそ、あの〃異形〃の異常さが理解出来た。出来てしまったのだ。

〃異形〃は何かを探す様に辺りを見渡し始めた。そして、その血の様に紅い目がグレイファイア達を捉えた。

「・・・!?!」

その瞬間、グレイファイアの頭が、体が、魂が、細胞の一片に至るまで、彼女を構成する全てが〃異形〃に屈した。次元が、桁が、レベルが、格が、ランクが違う。いや、自分達と比べる事すらおこがましい。もしこの瞬間、アレが少しでも力を振るえば、自分達は皆等しく〃死〃を迎えるだろう。目を合わせただけで、グレイファイアにはそれがわかってしまった。後に彼女が聞いた話によれば、この時、〃異形〃を直視した戦士達の中には気絶した者も少なくなかったという。

「・・・んだよ、アレ・・・」

ルシファアー眷属一の武闘派で、どんな敵が相手でも真っ先に突っ込んで行くほどの豪快さを持つ『戦車』、スルト・セカンドが戦慄した様子で言葉を発した。

「・・・私の中の妖怪達がざわめいています。抑えておかないと今にも逃げてしまいそうだ・・・」

ルシファアー眷属の『騎士』、沖田 総司。彼はその体に数多の妖怪を巣くわせている。その妖怪達があゝの〃異形〃から逃げようと体から溢れ出ようとしていた。この様な事は初めてですと続ける沖田の額には汗が滲んでいた。

「シャルバ・ベルゼブブ! アレもテメエの差し金かあ!」

『兵士』であるベオウルフが怒鳴るようにシャルバへ問いかける。

「し、知らん。あんな・・・あんなモノ、私は知らん！」

だが、返って来たのは否定の言葉だった。その声は明らかかな恐怖と戸惑いが混ざっていた。

「では、アレは一体・・・」

正体不明の蒼き異形。だが次の瞬間、グレイフィアは信じられない言葉を耳にした。

「・・・ご主人様？」

「え・・・？」

震える声で主の名を呼んだのは黒歌だった。同じく、彼女と同じ眷属であるレイナーレ達もそれに追随する。

「・・・わかる。ウチにもわかるっす」

「駒が・・・あの方から賜った駒が私にそうだと言っている」

「間違い無い。あの方は・・・！」

「！！ご主人様（神崎様）にや（よ）（だ）（っす）！！！！」

声を揃えて叫ぶ四人に、グレイフィアは耳を疑った。あの蒼き異形が神崎様？ ありえない。アレは断じて騎士等では無い。アレは・・・あの姿は・・・。

「魔・・・神・・・」

グレイフィアは絞り出す様に異形をそう呼んだ。これ以降、異形の名は魔神で統一される事となる。

「ご主人様あああああ！！！」

黒歌の叫び声に反応したかのように魔神が動き始めた。グレイフィア達はゆっくりと近づいて来る魔神を前に無防備な姿を晒していた。魔神の放つプレッシャーは未だ彼女達を縛りつけていた。それは魔神からの重圧を感じ取れるからこそだ。

ならば、それを感じ取れない者達の行く末は？ 答えは・・・破滅”だった。

動きを見せた魔神に対し、量産型皇帝機が一斉に砲撃を放った。百をゆうに超える緑色の光線が魔神を貫かんと迫る。しかし直撃の間際、それらは影も形も無く消滅してしまった。

「なっ・・・!？」

目を疑う光景に絶句するグレイファイア。量産型皇帝機達は尚も砲撃を続けているが、それら悉くが魔神に届く寸前で消滅する。

「・・・まさか、吸収しているのですか？」

『僧侶』マグレガーの眩きをグレイファイアは聞き逃さなかった。

「どういう意味ですマグレガー？」

「あの魔神の背後に浮かぶ光輪をご覧ください」

言われるままにグレイファイアは魔神の光輪に目をやる。その光は先程よりも強く、禍々しさを増していた。マグレガーは言う。あの魔神は量産型皇帝機達の攻撃を吸収し、あの光輪にエネルギーを溜めているのではないか。そして、溜めているという事は当然それを放出するつもりであり、あれほどのエネルギーを全て解き放てばどれほど威力となるか、想像に難くない・・・と。

砲撃が無駄だと理解したのか、量産型皇帝機達は剣を手に魔神へと向かう。背中に付けられたブースターによる推進力は、見る者によっては瞬間移動したかと思わせるほどの爆発的な速度を生み出す。だが、だがしかし、その程度魔神にとっては何の脅威にもならないのだと量産型皇帝機達は最期の瞬間まで理解出来なかった。

魔神を斬り伏せんと挑んだ量産型皇帝機達。その全てが一瞬で地へ伏せた。一定距離まで近づいた者から、見えない何かに叩きつけられたかの様な勢いで大地へ落下していくのだ。その姿は、愚かにも魔神へと剣を向けた自分達を許して欲しいと命乞いをしているかのようにも見えた。

しかし、その嘆願を魔神は聞き入れなかった。百を超える量産型皇帝機達は一機残らず圧壊。大地に転がる鉄屑と成り果てた。僅か数十秒の間に起こった悪夢の様な光景に誰もが顔を青ざめさせた。これが本当に夢であつたらどれほど幸せであつただろうか。

「空間・・・。いや、あの不自然に陥没した地面・・・まさか、重力を操った・・・？」

一人冷静にいま起きた出来事を推察するマグレガー。ひよつとしたら冷静であろうと努めているだけなのかもしれないが、今のグレイ

ファイアにはそれがありがたかった。傍に冷静な者がいれば、自分も取り乱す事は無い。

「ぼ、馬鹿な・・・我が皇帝機軍団がこうも簡単に・・・」

秒殺された配下達の姿に慄きの声を発するシャルバ。アレは自らの未来の姿を暗示しているのではないか・・・。そんな風に思ってしまった自分を叱責するシャルバだった。

（な、何を弱気な。まだ私にはこの『超獣鬼』がいるではないか。ルシファー眷属すら止められぬ最強の怪物。コイツがいる限り私に敗北は無いのだ！）

『超獣鬼』の額を撫で、シャルバは幾分か気分を落ち着かせた。

そして、邪魔者が消えた事により、ついに魔神はグレイファイア達から数メートルの距離まで迫りついた。グレイファイアがそれ以上近づかないように言うのと、アツサリと魔神はそれに従った。

「ご主人様・・・なんだよね？」

待ちきれなくなった黒歌が魔神に向かって声をかける。その問いかけから数秒を経て、魔神は初めて言葉を発した。

「・・・久しぶりですね、黒歌。それにレイナーレさん達も。元気そうで何よりです」

名前を呼ばれ、自分達の予感が正しかったと喜びを爆発させる黒歌達。だからだろうか。その違和感に気付かなかったのは。

「マジかよ。これが本当にあのフューリーだったのか？」

「・・・信じられませんね」

「だ、だよな。フューリー殿の鎧ってこんなラスボスっぽいヤツじゃなかったもんな」

そんな黒歌達とは対象的に、ルシファー眷属に広がるのは疑惑と戸惑いだった。直接会話をした事は無いが、彼等もフューリーの事は知っていた。スルト達の中でのフューリーは正しく英雄であり、自分達の主も懇意にし、さらにその御息はファン。そして妹君の将来の婿候補だった。そんな人物が、魔神となって自分達の前に姿を現したその理由がわからなかった。

「申し訳ありません、神崎様。差し支えなければお顔を拝見させて頂

いてよろしいでしょうか。そうしなければこの者達も安心出来ない様なので」

「ええ、構いませんよ」

魔神の頭部が一瞬で消え、男性の顔が露わになる。それを見た黒歌達が目を見開く。

「おや、どうしました黒歌？」

「ご、ご主人様、髪の色がおかしいにや・・・!？」

黒歌達の知る主の髪色は鮮やかな蒼色だ。しかし、目の前の青年の髪の色はどう見ても紫色だった。

「ん？ おや、本当ですね。これも『博士』と一つになった影響ですかね」

「は、博士？ 神崎様、一体何の話を・・・？」

「すみませんねレイナーレさん。今は詳しく話している暇は無いのです。・・・グレイフィアさん、一つお聞きしてもよろしいでしょうか」「な、何でしょう？」

どうにも胡散臭・・・得体のしれない雰囲気醸し出す亮真に、グレイフィアは若干の緊張を覚えた。

「サマエル。もしくはシャルバ・ベルゼブブ。この二名がどこにいるかご存知でしたら教えてくださいませんかねえ」

「サ、サマエルは恐らくハーデスと共に冥府にいるでしょう。シャルバ・ベルゼブブでしたら丁度あそこに・・・」

グレイフィアがシャルバを指差す。奇しくもこの時、シャルバもまた魔神の中から現れた人物の素顔を目にした。そう・・・目にしてしまった。

シャルバを見つめる亮真。その顔が狂気と清々しさの混ざった歪んだ笑みへ変わる。その表情は、亮真の世界で『オリジナル笑顔』と呼ばれているものだった。

ミ ツ ケ タ。

その瞬間、シャルバはその場から全速力で逃げ出した。冥界を滅ぼすという目的も、『超獣鬼』を従えているという余裕も、あの笑顔の前に一瞬で消え失せた。皇帝機の中、涙と鼻水を垂れ流し、股間を濡ら

退した。直後、彼女達は魔神の力の一端をその目に焼き付ける事となる。

「——〇・ワームスマツシャー」

突如として空間に出現した“穴”。そこからおびただしい数の緑色の光の槍が発射され、魔獣達を貫いて行つた。

貫かれた魔獣達の体に異変が始まる。光の槍が突き刺さった部分から緑色の結晶が精製され、魔獣の体を包み込んだ。全身を完全に取り込みなお結晶はその大きさを増していき、ついには別の魔獣の結晶と融合していく。そうして全ての魔獣が結晶に取り込まれる頃には、『超獣鬼』の顔に匹敵するほどの巨大な結晶の塊が完成していた。

「見事なオルゴン結晶ですね。これを破壊するのは少々勿体無い気もしますが・・・」

本気でそうは思っていないであろう魔神が右手を突き出すと、またしても“穴”が出現し、魔神はその中から何かを引っ張り出した。

「剣・・・？」

それは巨大で分厚い剣だった。魔神はその剣を構えると、何と結晶に向かって投擲した。いや、投擲などという生易しいものではない。それは“射出”と呼べるほどの凄まじい速度で結晶に突き刺さった。

甲高い音と共に、結晶が砕け散った。それは、内部に取り込まれていた魔獣達も砕け散った事を意味する。またしても魔神は圧倒的な数の差を呆気無く覆してみせたのだ。

その音は、遠く離れたシャルバの耳にも届くほどの大きさだった。何事かと振り返ったシャルバは地面に落下して行く数多の結晶を見て魔獣達がやられたのだと察した。

「もつとだ。もつと遠くに逃げなければ、私も魔獣達のように・・・」

「——どこへ逃げるおつもりですか？」

「ヒュツ・・・!？」

シャルバがそれを理解するのに数秒の時間を有した。自らの前に立ち塞がる者。それは遙か後方にいたはずの魔神だった。

「また会いましたね、シャルバ・ベルゼブブ」

「ど、どうし・・・貴様・・・」

「この程度、ネオ・ラフトクルアンズには造作も無い事です。時間も空間も、全ては私の意のままなのですから」

それが誇張でも何でも無い事はたった今日の前で証明された。シャルバは理解した。最早自分に逃げ場所は無い。どこへ行くこうと、この魔神は必ず追いついて来ると。

「話は兵藤君から聞きました。私がいけない間に随分好き勝手されたようですねえ。是非とももう一度お会いしてお礼をしたいと思いますと思ったのですよ」

死刑宣告にも等しいその言葉に、シャルバの精神は限界を迎えていた。何故、どうして自分ばかりこの様な目に遭うのだ。自分はただ、下等な転生悪魔を始末しただけなのに。

最早自分の仕出かした事の大ききすらわからなくなっていたシャルバ。今はただ、自分の身に降りかかる理不尽を嘆き、憎む事しか出来なかった。

「……れ」

「何ですか？」

「黙れ黙れ。黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ!!! 私はシャルバ・ベルゼブブ！ 正当な血を引く真のベルゼブブなのだぞ！ 正しいのは私だ！ 間違っているのは冥界なんだ！ 下等共は黙って私の言う事を聞いていればいいのだ！ それを、貴様や赤龍帝の様なクズごときが邪魔をしていいと思って

——」

瞬間、シャルバの腹部に向かって黄金の光の槍が放たれた。皇帝機の装甲を紙屑の様に貫通し、そのままシャルバ自身の腹へ深々と槍が食い込んだ。

「ぎや、あああああああああああ?!?!?!?!?!」

「別に私の事を罵りたいのなら好きになさい。ですが兵藤君を……私の自慢の後輩をクズ呼ばわりして欲しくはありませんね」

冷たく言い放つ魔神だが、シャルバはそれどころでは無かった。激痛にもがきながらありったけの声で絶叫する。

「血が！ 死ぬ！ 死んでしまう！」

「死ぬ？ そんなはずありません。あなたは傷一つ負っていないはずですよ？」

「ふざけるな！ たった今貴様が・・・！」

そこでシャルバは気付いた。今の今まで自分を襲っていた痛みが全く感じられなくなっていた事に。

「な、何故だ。確かに今私は貴様に・・・」

シャルバは混乱していた。まさか、あまりの恐怖に幻痛を感じてしまったとでもいうのか。

「ククク、どうしました？ 言いたい事があるのならばハッキリおっしゃったらどうです」

「その上から視線を今すぐ止めるフューリーイイイイイイ!!」

この時、シャルバは選択を間違えた。本当に助かりたいのならば、何もかも投げ捨てて許しを請うべきだった。

「フ・・・愚かな」

「ガッ!？」

シャルバの全身を見えない何かが絞め上げる。その力は皇帝機を容易く圧壊させ、シャルバの骨を砕き、内臓を押しつぶした。

「世界の根本的な力は四つあります。重力、電磁力、強い力、弱い力の四つです。この中で、重力はもつとも非力です。ですが、その非力な重力ですら、制御すればこうしてあなたの体を破壊する事は容易なのですよ」

「あ・・・が・・・止め・・・」

「痛いですか？ 苦しいですか？ ですが・・・兵藤君はもつと辛かったですよ」

シャルバの意識が消える直前、彼の体は不可視の力から解放された。さらに、全身を襲っていた痛みが消え、破壊されたはずの皇帝機を纏った状態でその場に浮かんでいた。まるで数秒前に巻き戻されたかのような錯覚を覚え、シャルバはまたしても幻痛に襲われたのかと考え、すぐさまそれを捨てた。

(アレは幻痛等では無い。確かに私は骨を砕かれ、内臓を破壊されたはず。・・・まさか、フューリーが私を・・・?)

シャルバにはそうとしか考えられなかった。では何故フューリーは敵であるはずの自分を治療するのか。それが決して善意によるものではない事は辛うじてシャルバにはわかった。

「どうです？ 理不尽に痛めつけられる気分は？ その痛みは、あなたが兵藤君に・・・あなたがこれまで傷付けて来た全ての人達に与えて来た痛みです」

「痛・・・みだと・・・」

「私は理不尽に痛みを撒き散らす者を決して許しません。あなたが自らの仕出かした罪を自覚するまで、私があなたに痛みを与え続けま

す。何度も、何度でもね」
魔神の宣言に、シャルバは先程の疑問の答えを得た。死んでは痛みを与えられない。だからこそ、魔神は自分を治療したのだと。それはつまり、シャルバの命は既に魔神に握られているという事だ。

「何という・・・何という傲慢さだ・・・」

「おやおや、あなたがそれを口にするのですか。・・・あなたが何を思い、何を望んで冥界を攻撃したのは知りませんし知りたくとも思いません。ですが、私の友人達を巻き込んだのは断じて許せません」

魔神の手に剣が握られる。それは先程魔獣の結晶に向かって投げたはずの物だった。

「いきますよ蠅の王。SAN値の貯蔵は十分ですか？」

そこから繰り広げられたのは、魔神による一方的な蹂躪だった。剣が、光の槍が、重力が、休む間も無くシャルバを襲い続けた。しかし次の瞬間、その傷も痛みも癒える。

シャルバは耐えた。耐えようとした。この男は自分を殺すつもりは無い。ならば今は耐えてチャンスを待つのだと。

しかし、死ぬ事は無いというシャルバの考えは、いつしか死にたいのに死ねないへと掬り替わっていた。止めてくれ、もう治さないうでくれ。もう・・・もう死なせてくれ。何度心の中でそう思っても、魔神がそれを聞き届ける事は無い。

何十回目かの治癒が施された所で、魔神がシャルバに言った。

「・・・もう充分な様ですね。これで終わりにしましょうか」

ああ、やつと楽になれる。シャルバはようやく訪れた安らぎを前に両手を広げて喜びを表現した。そして、自らの胸に剣が突き刺さったのを見届けた所で、シャルバの意識は闇へと沈むのだった。

グツタリとするシャルバを抱え、魔神は剣を仕舞った。死んだように動かないシャルバだが、治療は既に施してある。おそらく気絶してしまったのだろう。

その場から動かない魔神。その場には彼一人しかいない。にも拘らず、魔神は誰かに語りかけ始めた。

「・・・博士。あなたの言われるままにやりましたけど、これはちよつとやり過ぎじゃありませんか？ え？ これでもまだ生温い？ 勘弁してください。あれ以上は私の精神が持ちません・・・」

おおよそ似つかわしくない、ひどく疲れた様な声を発する魔神。しかし次の瞬間、その声に力が戻る。

「ええ、わかっていきます。まだサマエルが残っています。それに・・・アレも何とかしないとけませんからねえ・・・」

そう言って振り返る魔神。その視線の遥か先に捉えるのは、進撃を再開した『超獣鬼』の姿・・・そして。

「おりやあああああああああ!!!」

その『超獣鬼』と同じサイズに巨大化し、今まさに『超獣鬼』へ殴りかかろうとしている後輩の姿だった。

「・・・なあにあれえ・・・」

第百六十八話 紅き覇を越えて

イツセイSIDE

グレートレッドの背に乗り次元の狭間を脱出した俺とオーフィス。その眼前にとてつもなく巨大な怪獣の姿が見える。その大きさはグレートレッドを越えていた。あの怪獣・・・あの時シャルバが呼び出しやがった魔獣か！

『・・・僕、あんな化物と戦わないといけなかったのかあ・・・』

『よかった・・・俺の時代に現れなくて本当によかった・・・』

『ふ、ふん。あ、あああんなの大した事ななな・・・』

魔獣の動きを観察する俺の中で、歴代の先輩達が声を震わせながら口々に神崎先輩への思いをこぼしていた。あのオツサンですら気の毒に思うほど声が弱々しくなっている。

——はーっはっは！ フューリー様のお怒りに触れた者は、みなすべからく滅びるのだ！ 全ての者どもよ、フューリー様を称えろ！

平伏せ！ 崇めよお！

ドライグ・・・。うん、この戦いが終わったら、ちよつと休もうか。昇格試験の前にアザゼル先生からドラゴンの気分を落ち着かせる薬があるって聞いてるからさ、それも貰って来てやるよ。

「・・・」

「オーフィス？」

無言のオーフィスの視線の先・・・そこにはたった今抜け出て来た次元の狭間に通じる穴があった。その中から真つ黒い何かが噴き出しているのが確認出来る。・・・あれ？ 心なしか穴が大きくなってる気が・・・。

「先輩についてなくてよかったのか？」

神崎先輩に興味深々なコイツなら、てつきり一緒に残るかと思っただけど、意外なほどアツサリこつちについて来たんだよな。

「我、あのフューリー好きじゃない」

「え？」

「我の知るフューリー、もっと明るい。もっと温かい。あのフューリー

リーは暗い、冷たい。我的心、どうしてかざわつく。私の知るフューリーに戻って欲しい」

「お前……」

相変わらずの言葉足らずだが、言いたい事はわかる。しかしまあ、中々可愛げのある事言うじゃねえか。

『待つてイツセー、あなたは気付いていないの？』

エルシャさん？ あなたは大丈夫なんですか？

『まあ、二天龍を一人で圧倒したって時点である程度わかってたつもりよ。それでもかなりの衝撃はあつたけれどね』

あ、やっぱり……。それで、俺が気付いてないって何にですか？ 『好きじゃない』。戻って欲しい。かつてのオーフィスに好き嫌いなんて無かつたし、次元の狭間に帰る事以外に望みなんて無かつたはず。オーフィスの心の中で、フューリーという存在は決して小さなものではないのかもしれない。ねえ、これってよくよく考えたら凄い事なんじゃないかしら。あの『無限の龍神』が、たった一人の人間に心を開き始めているのよ。ふふ、そう考えると、何だか可愛らしく見えて来るわね』

そう言われるとそんな気がしないでもない……。そういや、以前みんなで祭りに行った時にはすでにそんな感じだったって部長が言つてたつて。俺、あの時桐生とばつかり絡んであんまり先輩達と話せなかつたんだよな。

『そんなオーフィスにも忌避されるなんて……。それだけあの姿になつたフューリーは普段の彼から乖離しているって事なんでしょうね』

んー……。俺はそうは思いませんよエルシャさん。

否定する俺にエルシャさんは疑問を投げかけて来た。

『え、でもあなただつて相当恐怖を感じていたじゃない』

はい。それは間違いないです。ぶつちやけ、直視した瞬間ちよつとちびりましたし。……。けど、次元の狭間から出る直前の先輩の言葉を聞いて、その恐怖はすぐに消えました。

——兵藤君、あなたが危険な目に遭つていたのに何も出来なかつた私がこんな事を言える資格が無いのはわかっています。ですが、ど

うかお願いします。冥界を・・・大切な仲間達を守る為、私と一緒に戦ってくださいませんか。

それを聞いて俺は確信したんです。どんな姿になろうとも、この人は俺の知っている神崎先輩なんだなって。そして、あの人が頼ってくれるのなら、俺はそれに全力で応えたいんです。

『彼の事、信頼しているのね』

当然ですよ。なんたって、俺の目標としている人ですから！

『そう・・・ちよつと妬けちやうわね』

ああ、歴代所有者だった身としては、やっぱり“ブユウリー”っていう存在に何か思うものがあるんですか？

『・・・馬鹿』

なんかいきなり罵倒されたんですけど!? エルシャさん、俺、なんか失礼な事言いましたか!?

『知らないわ。それより、目を凝らしてあの魔獣の周りを見てもらいなさい』

アツハイ。

言われた通りに魔獣の周りに目を遣ると、数人の人影が確認出来た。さらに集中して観察すると、その中の一人はなんとグレイファイア様だった。敵の強大さを考えたらあの人が出撃していてもおかしくない。じゃあ、他の人達もルシファー眷属の方々なのだろうか。みなさん、放ってるオーラのデカさが半端じゃない。

『それでもあの魔獣を止められない。つまり・・・』

わかってますエルシャさん。あのルシファー眷属が苦戦するほどの力をあの魔獣は持っている。シャルバの野郎、めんどくさいヤツ創りやがってえ・・・!

魔獣を睨みつけると、向こうもこちらに目を向けて来た。六つの目の全てに敵意が込められているのがわかる。まあ、グレートレッドほどのデカさの存在に気付かないわけないもんな。

「・・・っておい、アレって・・・」

新たな人影がグレイファイア様達に近づく。それは神崎先輩の眷属の子達だった。と思つたら、そんな彼女達に緑色のビームが放たれ

る。何とかそれを回避した彼女達の前に、あの野郎が姿を現した。

「皇帝機・・・シャルバか！」

今すぐぶん殴りに行ってやりたい気持ちになったが、俺はそれを抑えた。アイツをぶっ飛ばすのは俺じゃねえ。あの人だからな。

瞬間、後方に浮かぶ次元の穴の奥から気が狂いそうなほどの激烈な殺気を纏った存在が姿を現した。闇を孕む蒼き鎧に身を包み、禍々しき光を放つ光輪を背負いながら、“あの人”がついに出陣した。冥界を・・・自分の大切なものを傷付けようとする侵略者達に裁きを下す為。

「シャルバ・・・お前の事は絶対許せねえけど、今だけは同情してやるよ・・・」

——相棒、どうやら俺達の相手はあの魔獣のようだな。

おう、そうだなドラ・・・ド、ドライブ!? 正気に戻ったのかお前!?

——何の話をしている？

お、お前記憶が・・・いや待て！ それじゃ神崎先輩を見たらまたお前・・・!

——？ おかしな事を言うな相棒。フューリーなどどこにもいないじゃないか。

はあ!? お前こそ何言つて・・・!

『ダメよイツセー』

エルシャさん!? でもドライブのヤツ・・・!

『ドライブは今見えているはずのものを見えていないフリをしているの。そうする事で自分の心を保っているの。わかる？ それだけドライブの心はボロボロなの』

ド、ドライブ・・・。お前そこまで追い詰められて・・・。

『だからイツセー。これからこの戦いが終わるまで、フユ・・・“彼”の事は可能な限り口にしない様にね。じゃないと・・・本当にドライブが壊れちゃうわ』

・・・はい。

——ん？ 泣いているのか相棒？ なあに、臆する事は無い!

俺とお前が力を合わせれば魔獣の一匹や二匹物の数ではない！

ああ、頑張ろう。でもって、終わったらアザゼル先生直行コースな。さりげなく目を魔獣からシャルバの方へ向けると、ヤツは皇帝機のブースターから激しい炎を噴かせながらもの凄い速度で移動を始めた。多分逃げ出したんだろうが、きつと無駄に終わるだろう。

——ところで相棒、グレートレッドからお前に提案があるそうなんだが。

提案？ グレートレッドが俺に？

——ああ、「あのモンスターにガンつけられたのが気に入らない。だからアレを倒す気なら力を貸す」だそうだ。

ええ……。いや、力を貸してくれるのは滅茶苦茶ありがたいけど、ガンつけられたからって……。

——あと、「自分のお気に入りの寝場所を台無しにしてくれたのも、元々はアイツ等が原因だろうから」とも言っている。

寝場所……。あの次元の狭間の事か。気に入ってたのかよ。でも台無しって……。

『ゴゴゴゴゴ』↑闇に浸食された次元の穴。

「あっ……(察し)」

いやまあ、あの人がブチ切れたのはアイツ等が原因だから間違いないけど……。これってある意味とばっちりじゃ……。

——赤龍帝と赤龍神帝が手を組むか……。ククク、面白いじゃないか。

面白いかどうかはさておいて。力を貸してくれるつつつても具体的にどんな方法で？

「……合体」

「はい？ 今なんて？」

ぼそりと呟くオーフィスに聞き返すと、今度はハッキリと答えた。「ドライグの体、グレートレッドの中で再生した。今のドライグ、真龍と同じ体。だから、合体出来る」

「が、合体!? 俺がグレートレッドと!? いやいやいや！ ニチアサの戦隊ヒーローが乗り込むロボットじゃねえんだからさ……。！」

——オーフィスの言う通りだ。相棒、今のお前ならそれが出来る。そして、『覇龍』の真の力の解放もな！

「真の力!? おい、それってどういう意味・・・!?」

ドライグにその先を促そうとしたその時・・・突如としてグレートレッドの体から真紅のオーラが放たれた。それは瞬く間に俺を包み込み、周囲一帯を紅に染めていった。

——兵藤一誠の復活だ！ 精々派手に暴れてやろうじゃないか！

「誰でもいいから説明責任果たしやがれええええええええええ!!」

イツセーSIDE OUT

グレイファイアSIDE

逃走するシャルバ・ベルゼブブの後を追う様に、神崎様の姿もまたその場から消え失せていた。

「シャルバとサマエル・・・一体なにをしてくしやがったんだ?」

シャルバの逃げていった方向を見据えながら、スルトがそう口にした。

「忘れたのですかスルト。兵藤様はサマエルの毒とシャルバの策によつて命を奪われた。つまり・・・」

「ご主人様にとつては、自分から大切な後輩を奪った憎むべき敵つて事にゃ」

「シャルバ・ベルゼブブはフューリー殿にお任せしておいた方がよさそうですね」

「てか、下手に首突っ込んだらこつちがヤバそうだ・・・」

「ええ。私達は『超獣鬼』に集中を・・・」

そう言つて、改めて私達が『超獣鬼』と対峙しようとしたその瞬間だった。

「おりやあああああああ!!」

突如として現れた巨大な存在が私達の脇を駆け抜け、『超獣鬼』の顔面へその拳を叩き込んだ。殴り飛ばされた『超獣鬼』は凄まじい音をたてながら大地へ倒れ込んだ。

「えっ?」

「はっ?」

「にゃ?」

『超獣鬼』を殴り飛ばした巨人は、ゆっくりとこちらに振り返った。

「うおおお、なんか勢いのままに殴っちまったけど、マジで巨大化しちまったよ俺ええええええええええええええええええええええええ!!!!」

「……兵藤様?」

赤い鎧を纏い、空に向かって叫び声をあげるその巨人の顔は、間違いない無く兵藤様のものだった。彼の目が私達を捉える。

「あ、グレイフィア様! 兵藤一誠帰って参りました!」

「え、あ、はい。お帰りなさいませ。……ではなくて!」

「おい、聞いたかベオ! あの姐御がノリツツコミしたぞ!」

「サーゼクス様にいい土産話が出来たな!」

「二人とも、少し黙っていなさい」

「兵藤様、あなたの身に何があったのですか?」

「ええつと、話すと長くなるんですけど……」

そこまで言って兵藤様が口を噤んだ。ある一点を見つめるその瞳が瞬く間に鋭いものへと変わった。

一体何を見ているのか。彼の視線を追うと、その先には黒煙が立ち昇っている都市部があった。先行して暴れている『禍の団』構成員や小型魔獣達によりいくつかの建物や施設等の破壊は確認されているが、未だ死者は出ていない。負傷者もほぼ軽傷で済んでいると聞いている。

「兵藤様、『超獣鬼』はあの都市部を目指しています。なんとしてもここで止めなければなりません。お力を貸して頂けないでしょうか」

「……」

「兵藤様?」

私の言葉に何の反応も見せない兵藤様。しかし次の瞬間、私の耳はハッキリとその声を捉えた。

「……許さねえ」

それは静かでありながらその実激しく燃え盛る、理不尽を決して許

さない英雄の怒りの声だった。

グレイフィアSIDE OUT

イツセーSIDE

巨大化の戸惑い、巨大魔獣への不安。それら全てが、煙を上げる都市部を見た瞬間吹き飛んだ。

「・・・許さねえ」

自分を認めないから滅ぼす。そんなテメエ勝手な理由で、悪い事なんて何一つしていない、普通に、穏やかに、幸せに暮らしていた人達を傷付けた。

「許さねえ」

一体どれだけ多くの人を悲しませた。どれだけ多くの人を泣かせた。どれだけ・・・どれだけ多くの子ども達を怖がらせた。

「許さねえー」

俺はシャルバを止められなかった。カツコつけて一人残った挙句負けてしまった。こんな俺では子ども達に応援してもらえる資格なんか無い。けど、それでも・・・！

「これ以上、誰も悲しませねえ！ 誰にも涙は流させねえ！ そして、子ども達の笑顔を守る為にも、『超獣鬼』！ テメエはここで俺がブツ倒す！」

俺の体から紅蓮のオーラが立ち昇る。危険だと判断したのか、グレイフィア様達（オーフィスも混ざってる）はその場から大きく後退した。

——猛っているな相棒！ それでこそだ！

力を貸してくれドライブ！ アイツは、俺の全力で欠片も残さず消し飛ばしてやる！

——望む所！ だが、お前に力を貸したいのは俺だけではないようだぞ！

『そういうこった！ 気合い入れろよ小僧！』

『技だけじゃない。今度こそ真の意味でキミに力を貸す事が出来そうだ』

オ、オツサン!? それに残念先輩まで! いったい何を始めるつもりですか!?

——相棒、いつぞやに俺はお前の『覇龍』はフルパワーではないと言ったのを覚えているか?

は? あ、ああ、そういやそんな事も言ってたな。

——では、その後に行った事は?

その後? ええっと・・・確か、フルパワーに耐えられるドラゴンの体でも手に入られれば・・・って、おい、まさか!?

——気付いたか! そうだ。今のお前の体はドラゴンの物!

故に今ならば解放できるはずだ! お前が辿りついた真の『覇龍』!

『覇龍』を越えた『覇龍』を!

真の『覇龍』・・・。

『正直、ここから先はどうなるかわからない。あなた以外そこまで至った者がいないのだから・・・だけど、気負う必要は無いわ。あなたには私達が・・・歴代の赤龍帝全員がついているのだから』

エルシャさん・・・。はい! もう迷いません! みなさんの力を、俺に貸してください!

『ええー!』

——準備は良いな相棒!

「おう!」

俺は深く深呼吸し、詠唱を始めた。

「我、目覚めるは夢の果てを追い求めし探究者なり!」

『』『』我らは漕ぎださん! 果てしなき夢の大海原へと!』』』』』

ツ!? 先輩達が新たな詠唱を・・・!?

——相棒、お前は一人じゃない! エルシャ達の想いも乗せて行け!

よっしやあああああああ!!!

「未来ある者達の無限の夢と希望を背負い、決して絶えぬ紅蓮の意志をここに示さん!」

『』『』我らの夢! 我らの希望! その全てを未来への礎とせん!』』』』』

第百六十九話 D×D

グレモリー邸の一階フロア。避難所として解放されたこの場所には多くの一般悪魔達が避難して来ていた。不安や恐怖ですっかり憔悴しきっている彼等を、待機していたアーシアとレイヴェル。そしてグレモリー邸のメイドや執事達が介抱していた。

「怪我をされている方はこちらへ！ 私が治します！」

「温かいスープもご用意しておりますわ。これを飲んで落ち着いてください」

絶える事の無い悪魔の行列にアーシアとレイヴェルは一息つく間も無い。それでも彼女達はこれが自分達に出来る事なのだと必死に働いた。こうしている今も、自分達の友人や兄が冥界を守る為に戦っている。これが自分達の戦いなのだと思じて。

「あ、あの、聖女様……」

一人の女性悪魔がアーシアへ話しかける。

「どうかされましたか？」

「本当に……本当にフューリー様も赤龍帝もいなくなっちゃったんですか？ 冥界は……私達はどうなっちゃいますか？」

顔を青ざめさせ、縋る様な目をアーシアへ向ける女性。そんな彼女の手を優しく、ひたすら優しく包みながらアーシアは微笑んだ。

「……大丈夫ですよ」

「え……？」

「不安ですよね。怖いですよね。だけど、諦める必要はありません。こうしている今も冥界を、みなさんを守る為に戦ってくれている人達があります。……私にも戦う力があればお手伝い出来たのですが。無力な自分が嫌になります……」

「そんな！ 聖女様はこうやって私達を助けてくれているじゃないですか！ 決して無力なんかではありません！」

慌てて否定する女性悪魔に、周囲も首肯する。彼等を見ていた。この少女が額に汗を滲ませながら、一生懸命に自分達の怪我を治してくれている所を。そんな彼女を見て、誰が無力だと口に出来るものか。

「ありがとうございます。……みなさん、どうか希望を失わないでください。そして信じてください。みなさんを守る為に戦っている人達を。そして……リョーマさんとイツセイさんが帰って来る事を。私は、お二人は絶対に帰って来ると信じていますから！」

「聖女様……」

根拠など無い。ただ信じていると言うアジア。しかし、その言葉は女性悪魔の顔色を元に戻すには十分なものであった。

「お見事ですわ、アジアさん」

「ふふ、部長さんが私達に言ってくれた事をそのままお伝えしただけなんですけどね」

避難民達の顔に僅かに明るさが戻り始めたその時、誰かが叫んだ。

「お、おい！ みんなテレビを見るー！」

その声に誰もが一齐に備え付けのテレビの方へ目を向ける。アジアとレイヴェルもまた、何かとそちらを見る。

「どうした？」

「わかんねえ。いきなり中継が切り替わって……」

大画面の向こうでは、ヘリの内部でリポーターらしき悪魔が神妙な面持ちでマイクを持っていた。

『みなさん、私達はたった今、首都リリスへと侵攻している『超獣鬼』の傍へとやって来ました。現在、ルシファー眷属の方々が迎撃を行っておりますが、その歩みを止めるまでには至っておりません』

「そんな……ルシファー眷属の方々でも止められないなんて……」

「というか、なんでカメラ外に向けてねえんだよ。外の状況を見せろよ」

『これを御覧のみなさんは憶えておいででしょうか。魔獣侵攻が始まる直前、シャルバ・ベルゼブと名乗る男はこう言いました。騎士は消え去り、赤龍帝は自らが始末したと。それを聞いた時の衝撃と絶望を私は忘れていません。それがデマであると信じたくとも、現に政府は正式にフューリーの消息不明を発表し、赤龍帝も姿を見せません。ならば、シャルバ・ベルゼブの言った事は真実なのか？ 私もここに来るまでそう思っていました。……ですが！ 今は違います！』

今なら確信を持ってそれを否定出来ます！ 何故なら、彼はここに健在なのですから！」

カメラが外の映像を映し出す。そこにはルシファー眷属と『超獣鬼』。そして……都市を背にして立つ真紅の巨人の姿があった。

「お、おいアレって……！」

「所々変わってる所があるが間違いない……アレは！」

巨人の姿を見た悪魔達が目を見開き声を振るわせる。

「二二「せきりゆーてーだー……」二二」

テレビ前に座って映像を見ていた子ども達が瞳を輝かせ、声を揃えて叫んだ。

「赤龍帝?」

「赤龍帝だ……！」

「やっぱり死んだなんて嘘だったのね！」

歓喜の声が次々に伝染していき、やがて怒号の様にフロア内へ響き渡る。

赤龍帝は姿を見せたただけだ。魔獣を止めるどころかまだ戦ってすらいない。それでも、その姿は見るだけで悪魔達の胸の中で希望を奮い立たせる起爆剤となったのだった。

「イツセーさん……！」

大切な友人の帰還に、アーシアもまた喜びの笑みを浮かべる。

(後はリョーマさんが帰って来てくれれば。大丈夫、きっとオ・クアーン様がお守りに……)

そう心の中で自分に言い聞かせようとしたアーシアだったが、次の瞬間ハツとなった。

(オ・クアーン様? ……ツ! そうだ! オ・クアーン様! どうしてこんな簡単な事に気付けなかったの!?)

自分の敬愛する女神。彼女に聞けば、*“彼”*の居場所を知る事が出来るのではないか? 今の今までそれに気付けなかった自分をアーシアは恨んだ。……最も、先日まで精神的に追い詰められていたアーシアならば仕方無い部分もあったのは確かだが。

(オ・クアーン様! オ・クアーン様! ……どうか、どうか私の声をお聞

きくください！)

すぐさまアーシアは交信の為に祈りを捧げた。すると、少しして頭の中にこんな声が聞こえて来た。

『あばばばばー！ えらいこっちやえらいこっちやー！』
(・・・え?)

イツセイSIDE

『真・覇龍』……これが俺とドライブ、そしてエルシャさん達歴代の先輩達の想いの全てを込めて発現した俺だけの本当の覇龍の力だ！

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

『超獣鬼』が馬鹿でかい咆哮をあげながら一直線に俺に向かって突進して来た。

『どうやらあの魔獣、都市への侵攻よりもあなたの排除を優先したようね』

エルシャさんの言う通り、『超獣鬼』の殺気に満ちまくっている目は俺しか捉えていない。

『ふん、望む所じゃねえか！ そうだろうイツセイ！』

へっ、ったりめえだぜオッサン！ こっちは端からアイツをぶちのめす気満々なんだからよお！

「おらあああああああああああああ！」

突っ込んで来る『超獣鬼』が振り下ろす右腕をかくぐり、俺はお返しとばかりにヤツに向かって全力で拳を叩き込む！ インパクトの瞬間、新たに装備された爪が伸び、『超獣鬼』の腹に深々と突き刺さった。

「ぬ、お、おおおおおおおおおお！」

そのまま持ちあげる様に一気に拳を振り上げる。『超獣鬼』の巨体がほんの僅か浮かび上がり、そのまま仰向けに倒れ込んだ。……手ごたえはある。いける。倒せない相手じゃないぞ！

『ヒュウツ！』一瞬とはいえあの巨獣を浮き上がらせるなんて！ 相変わらずだねキミは！』

それって俺がパワー馬鹿って事っすか？

『超獣鬼』が起き上がる。腹部に開いた穴から赤黒い液体が流れヤツの足下を汚して行く。しかし、次の瞬間その穴は閉じてしまった。なるほど、自己再生ってわけか。めんどくせえヤツだな。

「ツ・・・！」

『イツセー！』

わかってますよエルシャさん！

俺は『超獣鬼』の口の中に炎の揺らめきを確認した。野郎、炎まで吐けるのかよ！ 回避……は出来ねえ。俺の後ろには街があるんだ。何とかしねえと。

——相棒！ 俺にやらせろ！

ドライグ？ やらせろって、何か方法があるのか？

——説明しているヒマは無い。俺を信じろ。

信じろか。……へへ、お前にそう言われたらそうするしかねえよなあ！ いいぜドライグ！ 思いつきりやってくれ！

——任せろ！ モードD×D発動！

「モード……D×D？」

え、ちよ、やっぱり説明して！ 何を始める気ですかドライグさん！？

その意味を問おうとする前に、まず右肩のドラゴンヘッドが外れた。続いて両手足の爪、さらにはショルダーキャノンや機械翼。鎧を構成するパーツの悉くが俺から離れていき、最終的に俺の姿は『赤龍帝の鎧』の胸にDがついたそれになっていた。

空中に浮かぶパーツ群、それらが真紅の光に包まれた。そしてその光達は交じり合い、一つの巨大な真紅の光の塊へと姿を変える。俺にはそれが巨大な“卵”の様に見えた。まさか……あの光から何か生まれるのか……？

「ガアアアアアアアアアアア!!」

「ツ・・・!？」

『超獣鬼』の口から冗談とも思える質量の火炎が吐き出される。おいドライグ！ お前間に合ってな……。

——刹那、“卵”から放たれた紅い光線が火炎を飲み込み、その

らうわ』

……ウツス！ 頑張ります！

「グ……オオオオオオオオオ……」

ようやく体から炎を消した『超獣鬼』がゆっくりと立ち上がる。炎に焼かれた体はボロボロになっていたが、それも瞬く間に再生していくのが確認出来た。

「ドライグ、アイツを倒すにはどうしたらいい？」

「生半可な攻撃を何度喰らわせても意味が無いだろう。ならば答えは一つ……再生が追いつかないほどの強力な攻撃で一気に消しきるしかない」

やっぱりそれしかねえか。それならいくつか方法はある。

「しかし、ヤツを消し去るほどの威力を出せば、ここら一帯の被害も甚大なものになるだろう。それはお前の望むどころでは無いのではな
いか相棒？」

もちろんだ。守るべきものを俺自身でぶっ壊しちまったら意味が無い。何とか被害が出ない場所を探さねえと。そうなる……上空
しかなさそうだな。

「どうやら何か思いついた様だな」

「ああ。あの野郎を上空にぶっ飛ばして、そこを狙う！ 問題はど
やってヤツを上を持って行くかだけ……」

「——それは私に任せてもらいましょうか」

背筋が凍りつきそうな声が俺の耳の傍から聞こえて来た。恐る恐るそちらへ顔を向けると、そこにはやっぱり予想通りの人物の姿があつた。

「神崎先輩……」

「あの巨獣を空へ追いやる。……そうすれば後はあなたが決めてくれるのですね兵藤君？」

「本当にあなたにアレが倒せますか？」……そんな確認の意味も込められた言葉なのだろう。俺の意思、覚悟を試しているのだろう。なら、俺も覚悟を以って答えよう！

「はい！ 『超獣鬼』は俺が……俺達が絶対倒します！」

「ククク……わかりました。あなたの『絶対』ほど頼りになる言葉はありません。では、あの巨獣は私が責任を持って空へ落としましょう。」

空へ落とす？ その難解な言葉の意味を、俺は次の瞬間思い知る事となる。

「……座標固定……重力変換の後、ワームホールを展開……」
「ッ!？」

突然、『超獣鬼』の足下にどこまでも冥く巨大な穴が出現した。ゆつくりと『超獣鬼』の体がその穴に沈み始める。しかし、驚くのはそれだけではなかった。

「え……う？」

はるか上空に広がる真っ黒い穴。『超獣鬼』の足下に広がっているヤツと同じ物がそこに存在していた。そして、その穴の中から現れたのは『超獣鬼』の足だった。

「空に落とすって……そういう事か！」

詳しい原理はさっぱりだが、要はサイラオーグさんの『女王』さんの力と似た様なもんか！

「よし！ 俺達も準備を始めるぞドライグ！」

「ああ！ 全くどこの誰がやってくれたのかさっぱりだが、この好機を無駄にはせんぞ！」

お前……そこまで徹底出来たら逆に大したもんだわ。

並び立つ俺とドライグ。お互いに一撃必殺の攻撃を放つ為の準備に入る。俺の胸の『D』に収束する紅い光と、ドライグの口内に灯る赤い光。さらに、機械翼の間から伸びるキャノン砲にも同じ光がチャージされていく。

「ドライグ！」

「こつちはいつでも行けるぞ相棒！」

「先輩！ お願いします！」

「ええ。では、一気に落とします」

ヒュンッ！ と『超獣鬼』の体が地上から消え去り、はるか上空に放り出される。……照準セット完了！ 思いっきりぶつ放してや

らああああああああ!!!

「ツイン・Dブラスタアアアアアア!!!」

同時に発射される紅と赤の光。それらは空中でなんども交差し、ついに交じり合い一つの極光となり『超獣鬼』という存在を飲み込む。それだけには収まらず、光は空そのものを紅く染め上げた。まるで、人間界の黄昏の時の様に……。

……
……
……

『超獣鬼』撃破後、俺は人間サイズに戻っていた。力を貸してくれたグレートレッドは俺、そして先輩を一瞥した後、次元の狭間へ帰って行った。

——二度と来ないでくれ……だそうだ。

それって俺にじゃなくて絶対先輩に言ってるよな。いや、まあ、気持ちにはわかるけど……。

グレートレッドと別れ、次に俺が目指したのは都市部の方だった。先輩曰く、部長達が向こうの方にいるらしい。なので合流して俺の無事を伝えてあげなさいとのお言葉だ。

それなら先輩もですよ、と誘ったのだが、先輩はそれを断った。その理由はこうだ。

「まだ私にはやるべき事が残っていますからね。それを終えた後に、改めて彼女達に会いに行きますよ」

「アツハイ」としか答えられなかった俺は決して悪くない。うん、きつと。

そういうわけで、俺はオフィスと共に部長達の元へ向かう事になった。え？　なんでオフィスを連れてるって？　だって先輩が「キミの様な子に見せるべきでは無い光景になるかもしれないので兵藤君について行ってください」って言うんだもん。未だにオフィスⅡ幼女としか見ていない先輩はある意味すげえと思う。

最後に俺が見たのは、穴の中に沈んで行く先輩とその眷属のみなさん。そして、それを引き攣った表情で見送るグレイフィア様達の姿

——刹那、僕の本能が警鐘を鳴らした。逃げろ！ ここにいてはいけない！ 今すぐこの場から姿を消せ！ それに従わなかったのは正解であり……また不正解でもあった。

「ッ……!?!」

僕達とハーデス神。その間を割る様に床に突如として現れた「闇」。それは円状に形を変え、周囲を浸食していく。誰に言われずとも理解出来た。あれはゲートだ。そして、ゲートが開くという事は、それを通ってこちらへ「何か」が現れると言う事だ。

「おい……おいおいおい！ このイツちまいそうなプレッシャーは……!」

「……照合完了。98.65パーセントの確率でマスターと判断」

聞き慣れない声に振り向けば、そこには見た事の無い二人の女性の姿があった。代わりにスコルとハティの姿が消えていた。まさか……あの姿がそうなのか？

《ハ、ハーデス様……!》

《うろたえるな》

目に見えてうろたえる死神達を黙らせるハーデス神。しかし、彼自身の声にも隠しきれない警戒と戸惑いがあった。

そして、僕達の見守るその中で、それは静かに姿を現した。

「ククク……どうやらみなさんお揃いの様ですね」

冥蒼とでも呼ぶべき全身。不気味に光る血の様に赤き瞳。そして、警戒心を抱かずにはいられないその声。それら全てを認めた瞬間、僕はこう呼ばずにはいられなかった。

「重力の……魔神……」

かつて、鋼の救世主達はその総力で以って打ち倒した最凶最悪の魔神……それが今、僕の眼前に存在していた。

「俺……この仕事が終わったら浴びるくらい酒を飲むんだ……」

「それ死亡フラグですから総督！ ちよつと！ 目を開けてください！ 魔王様あ！ 割とマジで総督がヤバいです！」

幕間その八 冥界に蒼いローブが舞い踊る

都市に迫る『超獣鬼』は、復活した赤龍帝と魔神により討滅された。しかし、小型・中型魔獣によってもたらされた混乱は未だ収束していない。そしてその混乱の中である集団が密かに活動していた。

都市の東、貴族等の富裕層が暮らすエリアの一角に立つ豪邸。主のみが通る事を許されているはずのその豪華な作りの門を今、蒼いローブを纏った集団が潜り抜けていく。

「……この様子では、ここも既にもぬけのからの様ね……」

侵入者達の背を見送る女性。不満そうに溜息を吐く彼女もまた蒼いローブに全身を包んでいた。しばらくして、邸宅の中から侵入者の一人が姿を見せる。その手に書類の束を持ち、そのまま女性に近づいて来た。

「イライザ様」

「セドリック、中の様子はどうか？」

「残念ですが、あの男は既に逃げ出した後の様です。金目の物もごっそり持ち出されていましたが……代わりにこんな物を残して行きましたよ」

セドリックと呼ばれた男がイライザと呼ばれた女性に紙の束を渡す。内容に目を通したイライザは興味深そうな表情を見せた。

「元々、この主……ライウス・シーゲルは反“あのお方”の派閥に属する男です。故に我等もマークしていましたが、このライウスは以前から黒い噂のある男でした」

「確か、ライウスはこの都市の財務課に勤めていたわね」

「ええ、最近になって急に羽振りが良くなったらしいです。それで調べてみましたが、案の定、横領その他不正を行っていた様です。近々この邸宅に忍びこんでその証拠を掴もうと思っていた矢先に今回の魔獣侵攻が起りました」

「そして、その不正の証拠がコレというわけね。お手柄よセドリック」

「勿体無きお言葉。ですが、全ては“あのお方”の御為。愚かにも

「あのお方」の排斥を狙った者達を誅する為に我等は動いているのです」

それが当然だとばかりに言い放つセドリックに、イライザもまた当然とばかりに頷く。

「その通りよ。上層部に潜り込ませていた団員によれば、今回の騒動に乗じて「あのお方」を排斥しようとした者はライウスを含め計三十三人」

「その全員がかつて「あのお方」が降臨されたその場に居合わせた者達だと聞いた時は耳を疑いましたよ。「あのお方」のおかげで今も生きていられると言うのに、感謝どころか「あのお方」を害するつもりなどと……呆れを通り越して哀れです」

時代は変わった。にも拘らず、未だ旧き慣習や血に拘る貴族。そして、そんな貴族達のくだらない面子やプライドがまかり通る今の冥界そのものに対し、イライザ達はほとほと愛想が尽きていた。もし、「あのお方」が命じてくれれば、自分達はいつでも反旗を翻すつもりである。

「ターゲット三十三人の内、始末出来たのは六人。身を隠したのが二十人。そして、行方不明となったのが五人……」

「半分以上逃がしてしまいましたが、連中を黙らせる土産は山ほど手に入れられました。これで宝石の一つでも残しておいてくれれば、我等の活動資金に当てられたのですが」

冗談のつもりでそう口にしたセドリック。しかし、それを聞いたイライザは冷たい口調で彼を叱責した。

「セドリック。私達は私腹を肥やす為に教団を作ったわけじゃないわ。まして、下衆が汚れた方法で手にした金を奪い、あまつさえその金で布教活動などすれば、「あのお方」の御威光まで汚す事になる」その言葉に目を見開くセドリック。続けて、悔いる様に深々と頭を下げた。

「……失言でした。お許しください」

「わかればいいの。……けど、二度目は無いわ」

二人が会話している間に、残りの者達も屋敷から出て来た。その中

から一人がイライザの前に歩み出る。

「イライザ様、中の調査完了致しました。今お持ちの資料以外、特にめぼしい物は残されていませんでした」

「ご苦労様。あなたは……確か最近入信した天使のシャルロットだったわね」

シャルロットと呼ばれた少女は驚いた様に目を丸くした。

「わ、私の名前をご存知なのですか？」

「当然よ。私達は“あの方”に身を捧げた同志ですもの。それにしても、天使。それも貴方の様な若い娘が入信してくれるなんてね。あなた達の大事な“主”の事はいいの？」

「はい！ あんな役立たずに祈りを捧げるなんてまっぴらごめんです！ 私が身を捧げるのは“あのお方”だけです！」

大天使が聞いたら卒倒しそうなセリフを胸を張りながら口にするシャルロットにイライザは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「役立たず……ふふ、 “聖書の神”を役立たず……。気に入ったわシャルロット。あなたは『試練』を受けるに相応しい子よ」

その言葉を聞いたセドリック達にどよめきが広がる。ただ一人、意味を理解出来ないシャルロットが首を傾げる。

『試練』……ですか？」

「入信したてのあなたは『メギロート』の位を与えられている。もしあなたが『試練』を乗り越える事が出来たら一つ上の『ゼカリア』。結果次第ではさらに上の位を得る事も可能よ」

「位が上がると何かあるんですか？」

『ゼカリア』になれば、こういった有事の際、部隊に参加するだけじゃなく独自に動く事が出来る様になるわ。必要とあれば『メギロート』を三人まで率いる事が許可されるの。……ただし、それが“あのお方”の為になると判断された場合のみだけれど。少しでも“あのお方”の名に傷をつけたり、御威光を汚す可能性があるると判断されれば、たとえそれが世間一般的な善行であろうとも一切許されない」

そして……とイライザは興味を引きつける様にたつぷりと間をとって再度口を開く。

『アンティノラ』以上の者のみ、本部地下に設けられた『Fの間』へ立ち入る事が許されるの」

『『Fの間』……そこには何があるんですか？』 “あのお方” に関するものである事は間違いないと思うんですけど」

「察しがいいわね。『Fの間』……そこには未だ世に出ていない “あのお方” の激レアグッズが多数保管されているの」

「げ、激レアグッズ!？」

その言葉に目の色を変えるシャルロット。既に身の周りの物のほとんどを “あの方” のグッズで固めている彼女にとっては寝耳に水であった。

「ポストカード、キーホルダー、ぬいぐるみ、フィギュア……今日現在で冥界では “あの方” のグッズが千二百一十個作られているわ」

ちなみに、イライザはグッズの総数だけではなく、それら全ての名前を憶えていたりする。

「はい、その全部をレヴィアたんP、そしてカテレア終身名誉顧問によつて企画、製造されています」

“入信” 時のテストにも出ていたのでシャルロットはよく憶えていた。

「その企画段階でボツになった物。製造はいいけどイメージと違った物。そういった事情で発売される事の無かった “あのお方” のグッズが『Fの間』に納められているわ。例えば……シャルロット、あなた目覚まし時計は持っているかしら？」

「時間になると “あのお方” のお声が流れるヤツですね？』 はい、三ヶ月待ちでしたけど無事に手に入れました」

「あの目覚まし時計の声は、実際に “あのお方” の声を録音し、それを組み合わせて作られているの。その元々のボイスデータが入った端末……私達は「至高の箱」と呼んでいる物が『Fの間』の最奥に厳重に保管されているの」

「?。」

よくわからないと首を傾げるシャルロットだったが、そのデータを使えば自分の望むままに “あのお方” の声が聞けると説明されて目

を見開く。

「で、では、私の名前を呼んでもらう事も……！」

「お望みなら愛称でも何でも」

「あ、愛の告白とかも……！」

「プロポーズまで思いのままよ」

「ちよ、ちよっときわどいセリフとかも……」

「きわどい？ ……ああ、「お前の○○○○を○○してやる」とか

「きつさと○○○○になれ」とかそういうヤツ？」

きわどいどころか完全にアウトなセリフを涼しい顔で言つてのけるイライザ。シャルロットには刺激が強すぎたのか「きゆう……」と目を回して倒れかけた所を別の仲間に支えられていた。

「他には……そうね、イロモノだけど、最新技術で女体化した“あのお方”がプリントされた抱き枕とか」

「ゴクツ……」

それを聞いたセドリツクが大きく喉を鳴らしていたりするが、追及すると色々不味そうなので彼の事はスルーする。

「他にも色々あるけれど、これ以上言うとなんか減っちゃうわね。

どう、シャルロット？ 『試練』を受けてみ……」

「受けます！」

数瞬前まで仲間に支えられていたはずのシャルロットがイライザの眼前で叫ぶように答えた。後ろで彼女を支えていた仲間が「あれ、いつの間に!？」と驚く。

「それで『試練』の内容は!? 何か必要な物はありますか!？」

「“あのお方”の写真の前に立って何分耐えられるか……それが

『試練』よ」

「……はい？」

ついに明かされた『試練』の内容。しかしシャルロットの反応は鈍い。拍子抜けした様子だ。

「あなた、今「そんな事でいいのか？」と思っただでしょ？」

「あ、い、いえ、その……」

「確かに、あなたが懐に忍ばせている程度の写真ならば問題は無い

でしょうね」

「ツ!? な、何でそれを……!?」

「わからないと思つて?」

周囲から「おお、流石イライザ様!」と彼女を称賛する声があがる。……そろそろツツコむべきであろうが、もう少し見守ってみよう。

「けど、それが普通じゃない写真だったらどう?」

「普通じゃ……ない?」

「……モードF」

「ツ!?」

ディオドラ・アスタロトとの戦いで見せた大いなる怒りの体現。その姿を収めた写真を直視してもらおう。イライザはそう続けた。

「ま、待ってください! あのお姿はあの時一度だけしか……! どうやって写真を!」

「忘れたの? あの戦場には『彼女』がいたのよ?」

「……ツ! カテレア終身名誉顧問!」

「正解。彼女があんな好機を逃すわけがないもの」

世間一般ではそれを盗撮というのだが、それを指摘する者はいなかった。

「そんな……普段のお姿ならまだしも、モードFなんて……そんなの直視したら……」

「墮天してしまう……かしら?」

「え!?!」

『墮天』というワードに表情を固くするシャルロットに、イライザは笑みで以つて問いかける。

「ねえ、シャルロット。あなた、祈りを捧げるのは『あのお方』だけって言っていたけど、本当はそれだけじゃないんでしょ?」

「ち、違います! 私は、そんな……」

「いいのよシャルロット。自分の気持ちを隠す必要は無いわ。純粋な崇拜であろうと、邪な欲であろうと、大切なのは『あの方』を思うその心なのだから」

と、邪な気持ち百パーセントの本人が言つてのけたりする。しか

し、言われた側は感動した面持ちなのでこれはこれでいいのだろう。
「イライザ様……」

「現に、同志となった天使達の四割はこの『試練』で墮天しているわ。けれど、みんな墮天する前より活き活きしているわよ。これで自分の本心を隠さずに済むってね」

なお、この墮天した四割をさらに男女に分けると九割が女性である。もう一度言おう、九割が女性である。

「だから、あなたも恐れる必要は無いわ。たとえ墮天しようとも、あなたは私達の同志である事は変わらないのだから」

「……はいー」

決意した様に頷くシャルロットに、イライザも満足そうに頷いた。

「二分間耐えられれば、『メギロート』から『ゼカリア』に昇格よ。頑張りなさい」

「はい！……ところで、イライザ様も『試練』は受けられたりしたんですか？」

「もちろん。この教団を立ちあげたメンバーも例外無く受けたわ。私は第三位の『ヘルモーズ』よ」

「三位？ え、イライザ様でも三位なのですか？」

「ええ。それも、以前とあるイベントで“あのお方”と至近距離で御尊顔を拝し、直接お言葉を頂たおかげで耐性が出来ていたおかげでね。ああ、今も目を瞑れば思い出せるわ。“あのお方”の麗しきお顔、蕩けるように甘いお声。あ……ああ……んあああああああ
!!!」

「「「「イ、イライザ様!」「」」」」

「はあ……はあ……ごめんなさい。大丈夫よ」

息を整えるイライザ。……その足下にさつきまで存在しなかった水たまりが出来ていたが、誰もそれに触れる事はなかった。

「今現在、二位である『ジュテツカ』、一位の『ズフィールド』、そして天位『ゲベル』に位置する者は存在しないわ。いえ、正確には『ズフィールド』の資格を得た者が一人いたわ。けど、彼女……カテレアはそれを辞退したの。自分は教団の外から“あのお方”の為に動き

たいからと」

先程からシャルロット達がカテレアの名を呼ぶ際、「終身名誉顧問」と付けていたのはそれが理由だった。

「——年季が違うのよ、彼女は」

その一言に全てが集約されていた。ナニがとはとても言えないが、とにかく説得力だけはあった。

「……ずいぶん話し込んでしまったわね。そろそろリコ達が合流する時間だけだよ」

「イライザ様！」

その時、新たな蒼ローブの集団がイライザ達の前に姿を現した。

「噂をすれば……ね。ご苦労様、リコ。そちらの首尾は？」

「申し訳ありません。既に逃亡した後の様でした」

「そう……」

「……？ あの、カテレア終身名誉顧問の姿が見えないのですが」

実は、シーゲル邸に押し入る数分前まで、イライザのグループにはカテレアの姿もあつた。しかし……。

「ああ、彼女ならここに到着する直前になって「感じる！ あの

方”を感じますわあああああああああああ！」と叫びながら物理法則を無視した動きで南の方へ飛んで行ったわ」

「“あのお方”……ッ、まさか!？」

「ええ。先程感じた凄まじいプレッシャー…… “あのお方”の物で間違いないみたいね。ふふ、やはり “あのお方”を阻めるものなど、この世には存在しないのよ」

“あのお方”の復活。しかし、イライザ達の顔に感動は無い。当然である。彼女達にとって、“あのお方”の復活は約束されていたも同然の事だったのだから。

「流石カテレア終身名誉顧問ですよね。私なんか、意識を保つだけで精一杯だったのに」

「呼び止めようとしたんだけど、あまりの変た……衝撃的な軌道に言葉を失ってしまったのよ」

「そういえば、『鋼の救世主』にも物理法則を無視したヤツが出て来

ますよね」

「確かに、あの一号機の動きを映像化したらきつとこんな感じなんだろうな……と思わせる軌道だったわ」

『物理法則？ 何それ美味しいの？』を地で行く鋼の救世主達。イライザの言う一号機はそれの筆頭であった。

「イライザ様、カテレア終身名誉顧問は、その……」

「心配しないで。RECの準備はバッチリよ。何でも、少し前に墮天使総督にカメラ型の人工神器を作らせたらしくて、いつでも撮影出来るって言っていたわ」

「ッ！ 流石カテレア終身名誉顧問！ それを聞いて安心しました！」

「ところで、話を戻すけど、他に何か気になる物は残っていたのかしら？」

「いえ、特に。……ただ、家の地下にこの者達が……」

そう言っただけでリコが示した先には、粗末な衣服に身を包んだ四人の男女の姿があった。それを見たイライザが目を細める。

「……人間？」

イライザは四人が人間であると見抜いた。しかし、なぜ冥界に人間が？ 訝しむイライザにリコが答える。

「どうやら、ターゲットは狩りと称して人間界から人間を拉致しては地下に囲って弄っていたようです。この者達はいく最近連れて来られた様です」

「はぐれならまだしも悪魔が、しかも貴族の身分である者が人間界へ出るにはそれ相応の手続きが必要のはず」

「はい。ですが、ターゲットはそれを行わず、無断で人間界へ向かっていたようです」

「それはそれは……随分面白いネタねえ……。それで？ あなたはどうしてこの四人を連れて来たのかしら？」

「勝手な事をして申し訳ありません。……この四人を見てみると、昔の私を思い出してしまって……」

泣きそうな表情を浮かべるリコに、イライザは合点がいった様子で

声をかける。

「……そう。そうね。あなたもそうだったのよね」

イライザは顎に手を当て、しばし思案に耽った。

(丁度いいわ。そろそろ人間界への進出も考えていたし、足がかりとしてこの四人を……)

口元をニヤリと歪め、イライザは件の人間達の前に立った。憔悴と恐怖で今にも倒れそうな四人に対し、イライザは優しく語りかけた。

「あなた達、家族は？」

その問いに四人は首を振る。拉致される際、家族は目の前で殺されてしまったらしい。

「望むなら、私達があなた達を保護するわ。衣食住。必要なら人間界で生きていくための新しい身分も用意してあげる」

破格とも言える待遇に、しかし四人は一層警戒を強めた。当然である。目の前に立っているのは、自分達に非道の限りを尽くしたあの男と同じ悪魔なのだから。

「私達も、かつてあなた達と同じだったの。だから、私達は理不尽に虐げられる者達を決して見捨てない。それが、*“あのお方”*に救われた私達の使命だから。どう？ 騙されたと思っについて来てみない？ きつと後悔させないから」

悪魔の誘惑。果たして……四人はその誘いに乗る事にした。

「ようこそ、同志。我々*“フューリー教”*はあなた達を歓迎します」

第七十話 もうどうにも止まらない

特撮の世界に迷い込んだんじゃないかと思わせる様なトンデモスケールの決戦にたった今決着がついた。最も、怪獣を倒したのは光の巨人では無く紅の後輩だったのだが……。

とりあえず、兵藤君とドライグさんの最後の合体攻撃を目の当たりにして瞬時にグランティード・ドラゴデウスを思い浮かべた俺は相変わらずのスパロボ脳だと思いました。先生の雄姿をOGでも見たかったなあ。統夜？ あんないつの間にかハーレム築いてるヤツなんか知らん！

『フツ……あなたがそれを言いますか』

何か知らんが博士に笑われてしまった。俺、変な事言いましたか？『いいえ。それよりも気を抜くのはまだ早いですよ。報復対象はまだ残っているのですから』

そうだ。まだサマエルが残っている。……つと、その前にコイツをどうにかしないと。とりあえずグレイファイアさんに引き渡しておこうか。

脇に抱えたシャルバに視線を遣る。博士に言われるがままにポコポコにしてしまったが、罪悪感も欠片も湧いてこない。

——あなたは、報復の意味を正しく理解していますか？

そう問われ、上手く答えられなかった俺に博士は言った。報復とは、報いを復す事。不当な行いに対し、同じく不当な行為で以って返す事である。今回、シャルバ・ベルゼブブとサマエルは兵藤君の命を奪った(魂は生き残っていた)。だからこの場合の報復とは、同じ様に両者の命を以って償わせるという意味合いになるのだが……。

——あなたはあくまでも不殺を貫くと宣言しました。ですが、生かしておけば相手は再びあなたやあなたのお仲間を牙を剥くかもしれません。報復の連鎖……それはあなたも望む事ではないでしょう。

ではどうするのか。博士はいつそ清々しさを感ずるほどの声で俺に教えてくれた。

——二度とあなたに歯向かう事の無い様、完膚なきまでに叩き潰

す事です。心も体も完全に屈服させ、あなたの言う“痛み”を思い知らせる事で初めてこの報復は完遂となるでしょう。同時に、今現在、あなたを狙う他の勢力達への見せしめにもなります。あなたを、そして、あなたに近い者達に手を出せばこうなると。

そうする事が自分達を守る抑止力になる。だからこそ、今回の件が完全に片がつくまで、一切の手加減や躊躇いは無用。博士はそう締めくくった。言ってる事は滅茶苦茶物騒だが、同時に説得力も滅茶苦茶あった。だからこそ、俺はシャルバに対し、過剰とも言える攻撃を繰り返した。俺なりに“魔神”を肖ってみたつもりだが、傍から見たらどんな感じになっているのだろうか。

途中で変な事も口走った気がする。『戦車級』って何だ？ 知らないはずなのに、知っている気がする。うーん、上手く説明出来ない。

『ククク、中々楽しませて頂きましたよ。流石、鋼の救世主は演じるのが得意の様ですね』

グハツ……！ 褒めているはずなのに容赦無くダメージを与えて来る……流石は博士やでえ……。

「せんぱーいーいー！」

お、兵藤君が呼んでる。元のサイズに戻ってるって事は……ああ、いたいた。グレートレッドさん。どうやら次元の狭間に帰る様だ。色々お世話になったし、声は届かないからせめて見送らせてもらおう。

「……！」

？ なんか急にスピードが上がった様な……。寝てる途中で起こしてしまった様だし、早く帰って二度寝したいとかそういう感じかな。

向こう側へ去って行くグレートレッドさんの背中を見送り、俺は兵藤君やグレイファイアさん、黒歌達のいる場所へ向かった。

「何とか片付きましたね」

「え、ええ……」

ん？ グレイファイアさん他数名の方々の表情がまだ強張っている。

流石、まだ警戒を解くなつて事か。

「……神崎様、『超獣鬼』を討伐した今、一度元のお姿に戻られてはいかがでしょうか？」

「そうしたいのは山々ですが、皆さんと違って私は生身で空中に浮かぶ事が出来ませんからねえ。申しわけありませんが、この状態のままですませて頂きます」

「そ、そうですか」

「ああ……なんか俺、あの後輪を見てたら気分がボーっつとして……」

「しつかりなさいベオ！ 戻つて来られなくなりますよ！」

「ではせめて、その後輪の光を弱めて頂けませんか。それは悪魔……いえ、全ての生物にとってよくないものです」

え、何それ。博士、この後輪……バリオン創出へヒロウの光つてそんなにヤバイものなんですか？

『ククク……』

あ、答えなくていいです。その含み笑いで全て理解出来ました。とりあえず弱まれ弱まれと念じてみる事にした。

「ありがとうございます。これで落ち着いてお話が出来ますね」

そう言つてグレイファイアさん達が近づいて来た。どうやら制御出来たみたいだ。

「先輩！ 先輩のおかげであのデカブツをブツ倒せました！」

「私のやった事など大した事ではありませんよ。あなたこそ、最後の一撃は見事でした。思わず見惚れてしまいましたよ」

「へへ、ありがとうございます！」

「ドライグさんも、まさしく“赤龍帝”の名に相応しい雄姿でした」

あれ？ 返事が無い。褒めたつもりだったけど不快にさせてしまったのだろうか？

「あー……その、先輩。ドライグのヤツ、今は先輩の声だけ聞き取れないみたいなんです」

Why? 何故に俺の声だけ？

「まさか、この短時間で何かの病気に？」

「ええ……まあ、(先輩恐怖症という) 病気ですね。あ、でもしばらくしたら勝手に治ると思います」

放置でいいのか？ どこか病院に連れて行ってあげた方がいいんじゃないのか？ こういう時こそアザゼル先生がいてくれたらいいんだが……。

「んぎぎぎぎ……！」

などとドライグさんの心配をしている間に黒歌の様子がおかしい事に気付いた。何やら飛びかかる様な姿勢のまま必死の形相で俺を見つめている。

「黒歌、どうしました？」

「気を抜くと全力でご主人様の胸元に飛び込んじやいそうだけど、まだそういう空気じゃないから全力で我慢してるのにや」

見れば、レイナーレさん達もその綺麗な瞳を潤ませながら黒歌の横に佇んでいる。……相当心配をかけてしまったんだろうな。

「申し訳ありません黒歌。それにレイナーレさん達も。私が不甲斐無いばかりに、いらぬ心配をかけてしまいましたね」

「そんな！ 私達に謝罪して頂く資格なんてありません！」

「神崎様が敵の策略に嵌められていたというのに……！」

「ウチ等は何も出来なかつたつす……」

それは仕方無い。俺だって、まさかド腐れペロリスト共が直接やって来て、しかも曹操さんまでもがa u派だったなんて思いもしなかつたんだから。

「いいえ、今回の件は向こうが一枚上手でした。……ですが、こうして私と兵藤君は帰って来ました。ですから、これ以上あなた達が気に病む必要などありませんよ」

「神崎様、その事について詳しくお聞かせ頂きたいのですが……」

「ええ、もちろん全てお話させて頂きます。ですが、生憎と私にはまだやるべき事が残っていますので、それらを全て片付けてから改めてお話の場を設けさせて頂けないでしょうか」

「それは？」

「報復です」

俺はキツパリと言い切った。グレイファイアさん達にと言うより自分自身に言い聞かせる様に。

沈黙。周囲の人達が愕然とした様子の中、グレイファイアさんがそれを破った。

「……それは、何に對しての報復なのでしょうか?」

「無論、兵藤君の命を奪った者達へのです。実行犯であるシャルバ・ベルゼブブにはすでに済ませました。残りは……その『毒』で兵藤君を苦しませたサマエルとやらに報いを受けさせる事で、私の報復は完遂します」

それ以外の人や物に手を出すつもりは一切ない。あくまでも報復対象は今挙げた両者だけなのだから。

「確か、先程サマエルは冥府にいますとおっしゃいましたね」

『居場所がわかるのなら、後は座標を指定して跳ぶだけです。解析しますので少しばかり時間を頂きますよ』

サラツと言つてのけましたけど、そんな事まで出来るんですか!?

『私と……このネオ・ラフトクランズにかかれば造作ありません』

これ以上に説得力のある言葉が他にあるだろうか? いや無い!

(反語)

「申し訳ありませんが、魔王眷属として、それを承服するわけにはいきません」

心の中で熱弁していた俺に向かって、グレイファイアさんは否と答えました。

「神崎様、あなた様のお気持ちも十分理解出来ます。ですが、どうか思いとどまって頂けないでしょうか」

「理由をお伺いしても?」

「……今、冥界と冥府は水面下で緊張状態となっております。その状態の中、あなた様が冥府に赴けば悪魔、そして死神を巻き込んだの戦争に発展する可能性があります」

戦争? いやいやいやちよつと待つてくださいよグレイファイアさん。何で俺が冥府にケンカ売りに行く様な感じになつてるんですか。そもそも冥府についてだつてよくわかつてないのに。

「グレイファイアさん。私の目標はあくまでもサマエルです。冥府と事を構えるつもりはありませんよ」

「いえ、サマエルに手を出そうとすれば、ハーデス神が黙っていません。本来、サマエルはハーデス神によって嚴重に封印されている存在なのです。それが解かれたという事はつまり、今回の件には冥府……ハーデス神も絡んでいるという何よりの証拠となります」

「……何ですって？」

俺は兵藤君からサマエルの外見の特徴、ヤバい毒を持っていてそれが致命傷となったという話を聞いている。だからこそ、サマエルをぶちのめすと決めた。だが、今のグレイファイアさんの話を聞くに、そんな物騒な存在を解き放った黒幕がいたという事になる。

「神崎様？」

「どうやら……サマエルとは別に問い詰めなければならない相手がい
た様ですねぇ……」

（……どうしましょう。説得するつもりが地雷を踏み抜いてしまった
かもしれません）

自分でも若干引いてしまうくらい、低くおどろおどろしい声が口か
ら紡ぎだされた。兵藤君の顔が真っ青だ。うん、多分俺も自分のじや
なかつたらそんな感じになってると思う。

「現在、サーゼクス様とアザゼル総督がハーデス神に説明を求め冥府
に赴いています」

つまり、ハーデス神とやらも冥府にいるという事でいいんだな。

「先程倒した『超獣鬼』で、冥界に放たれた魔獣は全て討滅されました。
後日、正式な抗議声明も出されるはずです。……『騎士』として、こ
の様な侵略行為はきつと許せないでしょう。ですがどうか、その怒
りを飲み込んで頂けないでしょうか」

「騎士」……「騎士」か……。違うんですよグレイファイアさん。
今の俺は、皆さんが受け入れてくれた「ブューリー」でも、「鋼の救
世主」でもありません。

「グレイファイアさん、どうやらあなたは勘違いなされている様です」
「え……？」

「百歩譲って、兵藤君が怪我を負わせられただけで済んでいたのであれば、私も自分を抑える事が出来たでしょう。ですが、兵藤君は命を奪われました。肉体を失い、魂も消滅しかけた所で何とか復活する事が出来たのです。私は、私から大切な後輩を奪おうとした者達に、理不尽に奪われる“痛み”を思い知らせるつもりです」

今だけは、躊躇いも自制も、倫理も道徳も必要無い。今の俺は、理不尽に理不尽で以って返す“魔神”なのだから。

「言ってしまうえば、これはただの私怨。報復に正義も大義名分も存在しません」

「先輩、どうしてですか。何でそこまで……」

どうして……か。やっぱり、あの話を聞いたからだろうな。

「兵藤君、先日あなたの家にお邪魔した時の事を憶えていますか？」

「え？ あ、は、はい」

ゴメンね唐突に。だけど、話させて欲しい。

「あなたが起きて来るまでの間に、私はあなたのご両親から、あなたが生まれるまでの話を聞かせて頂きました。内容は私ごときが語っていいものでは無いので割愛させて頂きませんが」

(すみません、ガッツリ聞いてました)

「その後、昼食までご馳走になってしまいましたが、その席には笑顔が溢れていました。兵藤君がおどけて、お母さんがそれに乗っかり、お父さんがそれを見て笑う。私にはそれがとても温かく、そしてとても眩しく見えました。……私が失って久しい“家族”の姿がそこにはありました」

だからこそ、俺は心から思ったんだ。“兵藤家”という素晴らしい家族の日常は、誰が、どんな理由であろうとも絶対に壊してはならないものなのだ。この人達に俺と同じ“痛み”を負わせるわけにはいかない。それなのに……。

「その日常を……彼等は壊そうとしました。それだけではありません。確かに兵藤君は復活しました。ですが、ご両親が懸命に祈り、絶望を乗り越え、ようやく授かった息子としての体は消滅してしまつた。あのお二人の必死の努力を冒涇した者達が……私には許せない

んですよ。グレイファイアさん。お腹を痛め、苦しみの先で子どもを授かった喜びは、私よりもあなたの方が良くわかっていらつしやるんじゃないですか」

「……」

「冥府も神も、今の私には関係ありません。私は、私の心（と博士）の命じるままに戦います」

『では、早速動いてもらいましょうか。座標の特定は完了しましたので、いつでも跳べますよ』

ありがとうございますごいます博士。なら、いざとなったら強行突破させてもらいますよ。

「私とサマエル、ハーデス神との間で何が起ころうとも、それは全て私の責任です。罰したいのならば、それも受け入れます。ですが、私はもう止まるつもりはありません」

「先輩、俺は……」

「私の事は気にせず、あなたはリアス達に会いに行きなさい。みんな、あなたの事を待っているはずですよ」

『ちょうどあの都市にあなたのお仲間が集結しているみたいですよ。……何やらヴァンパイアの少年が豹変している様ですが、それも伝えてあげたらどうですか』

ヴァレイ君の事か？ 豹変って……はっ、まさか悪のカリスマに肖り過ぎて性格が……!? とにかく兵藤君に伝えなくては。

「わかりました。なら俺は部長達の所へ行く事にします」

「兵藤君、行くならその子も連れて行ってください」

さつきからじーつと俺を見つめているオーフィスちゃんを示す。こんな子を連れて行く様な場所じゃないしな。

「ご主人様、私達も……!」

「黒歌、あなた達も兵藤君と一緒に行きなさい」

俺の勝手に彼女達を巻き込むわけにはいかない。

「嫌! 絶対について行く!」

「黒歌?」

「罰を受けるのなら私達も一緒に受ける! 消えるのなら私達も一緒に」

に消える！ もう……もう……主人様と離れ離れになりたくないの！」

「神崎様……！」

「どうかお傍に……！」

「もう……ウチ等を置いて行かないで欲しいっす……！」

「レイナーレさん、カラワーナさん、ミツテルトさん……」

『連れて行ったらどうですか？ 眷属……なのでしょう？』

博士……。

『戦力が多いに越した事はありませんからね』

そういうオチですか！

『ですが、実際無理矢理にでもついて来そうな勢いですよ。頼まれたら断れないあなたに彼女達を拒む事は出来ないでしょう？』

流石博士！ 俺の性格読んでるぜ！

「……わかりました。では、“王”としてあなた達に命じます。黒歌。

レイナーレ。カラワーナ。ミツテルト。私の傍から絶対に離れない様に」

「「「はい！」「」」」

俺の宣言に声を揃える四人。……ん？ ちよつと待て。今一人多かつた様な気が……。

「にやにや!? アンタ……カテレア!?」

ツ!? ほ、ほんとだ！ カテレアさんがいつの間にか紛れ込んでる！ バアアアアン！みたいな効果音が鳴りそうなポーズとドヤ顔でミツテルトさんの横にいる！

「い、いつからいたの!?!」

「フューリー様が『女王』と話し始めたくらいからですけど」

そんな時からいたんですか!?!

『ほお……このネオ・ラフトクランズのセンサーを以ってしても捉えられていなかったとは……面白い物を持っている様ですね』

ナニソレコワイ。てか面白い物って何!?!

「フューリー様、まずは御帰還された事を大変嬉しく思います。このカテレア、あなた様の美しく、気高く、尊いオーラを感じ取り、馳せ参じた次第でございます。盗さ……邪魔にならぬ様ステルスモード

でお話を聞かせて頂きました。冥府でふんぞり返っているあの腐れしやれこうべに会いに行くのならば、このカテレアもお供させてください。その四人よりお役に立つ事を証明してみせますわ！」

「はっ！ 行き遅れド変態BBAは引っ込んでろにや！」

「おい……おいっ！」

ど、どうしよう。ほつといたら取っ組み合いになりそうだ。

『連れて行きましょう。彼女の言うステルスモードが気になります』

わ、わかりました。カテレアさんも一緒に連れて行きます。

『では、転移の準備を始めます』

その言葉と共に、俺達の足下に“穴”が出現した。

つと、その前に……。

「すみませんが、この男をお願いします」

「お、おう」

一番力のありそうな男性にシャルバを渡した所で、俺の体は“穴”にゆっくりと沈み始めた。これを潜れば、その先は冥府。そこにサマエル……そしてハーデス神が待ち受けている。

「ええつと、CameraモードからRECモードへの切り替えは……つと、この神器、性能は良いですが操作が面倒なのがネックですね」

背後からカテレアさんの眩きが聞こえて来た。生憎声が小さすぎて聞き取る事は出来なかったが。

そして、俺達は冥府へと突入するのだった。余談だがこの時、俺は自分の口調が博士のそれに似たものになっていた事に最後まで気付かなかった。

第七十一話 正義なんかでは無い

穴（トンネル）を抜けるとそこは雪国……なわけはなく、神殿の様な場所だった。だいたい金をかけてるんだろうな。柱とか装飾が金ぴかだ。

『ここからはあなたの役目です。余計な助言はしません。私は見守らせてもらいますよ』

博士の言葉に頷きつつ、黒歌達がみんないる事を確認し、俺は周囲を見渡した。

（さてと、フューリー様の邪魔にならない様にRECの準備と映像の送信準備を……）

まず、俺の前方……なんか映画とかで悪い魔法使いが儀式でもやりそうな祭壇の前に、物騒な鎌を持った集団。その中央にはなんとローブを纏った骸骨がいた。

さらに、後方にサーゼクスさん、何故か倒れているアザゼル先生と、そんな先生を介抱している男性。

そして、何故ここにいるのかわからないが、元のサイズに戻っているフェンリルと、その横に並び立つ二人の痴女……もとい、露出過多な衣装を纏った女性達。え、何者!?

「ククク……どうやらみなさんお揃いのようですね」

いや、探す手間が省けたわ。あれだけの情報でキツチリ特定してくれた博士にマジ感謝。

「重力の……魔神……」

惜しいです、サーゼクスさん。正確には重力の魔神を悪ノリで魔改造しまくった挙句、発案者である俺自身をドン引きさせた「ネオ・ラフト克蘭ズ」です。

「俺……この仕事が終わったら浴びるくらい酒を飲むんだ……」

「それ死亡フラグですから総督！ ちよつと！ 目を開けてください！ 魔王様あ！ 割とマジで総督がヤバいです！」

それでもって、男性の言う通り明らかにフラグっぽいセリフを口にしたアザゼル先生に何があったのよ。

《き、貴様等、何者だ!?!》

《今の穴は……!?! 一体どうやってここに現れた!?!》

俺達の登場にお鎌集団が騒ぎ出す。向こうからしたら不審者なのだからその反応は正しい。

《——静まれ》

たった一言。それだけで喧騒がピタリと治まる。今声を発したのは……間違い無くあの骸骨さんだろう。何となく読めた。あの骸骨さんこそがグレイフィアさんの言っていたハーデス神なんだろう。

《また羽つきどもが増えおった。それで、貴殿がその羽つき共を率いておるのかな?》

「彼女達は私の眷属です。一人、厚意で同道してくださいました方もいますけれどね」

「はい！ 好意なら満ち満ちておりますわ！」

「今シリアスシーンだからアンタは黙ってなさい」

「な、何をするだあ……!?!」

《不敬な！ 冥府の王であるハーデス様の御前であるぞ！ 今すぐその鎧を脱ぎ素顔を見せよ!》

「いいでしょう」

俺は言われた通り元の姿に戻った。同時に後ろから「その髪は……!?!」というサーゼクスさんの驚きと戸惑いの声が届いて来た。

「あなたがこの世界のハーデス神ですか。初めまして、私の名前は神崎亮真。以後お見知りおきを」

《この世界……まるで私が複数いる様な言い方をするではないか》

「少なくとも、あなたと同じ様な存在を私はあと三柱知っています」

神様の数え方って柱だったよな。原作とOVA、そしてリメイク版。前者二つのは少し違うかもしれないが、リメイク版の方の絶望感には半端じゃなかったっけ。

《フアフアフア、なるほど。貴殿のいた世界というのは随分と混沌に満ちているようだ。それで、異世界からの異邦人である貴殿がこの様な場所に何ようかな? よもや、羽つき共におだてられ、次は冥府

に自分の名を広めよう等というおつもりか?」

「いいえ、その様な無意味な事をしに来たわけではありません。私はただ――」

「ボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

報復に来た……と言おうとした俺の背中に誰かがはね飛ばす様な勢いで抱きついて来た。何事かと確認すると、そこには快活そうな褐色美女がいた。

「なんだよなんだよなんだよボスウ！ 帰って来てたんなら言ってくれよ！ そしたらこんな辛気臭え所になんか来ずにアンタの所にすっ飛んで行つたのによお！」

「……視覚、及び聴覚にて確認。99パーセントの確率でマスターと判断。残り1パーセントの検証の為、嗅覚による照合を開始」

今度はもう一人の色白美女が正面から抱きついて来た。しかも何か胸元でめっちゃ深呼吸してる！

(くすぐりたい！ というか、この人達誰よ!?)

『おや、自分のペットもわからないようでは飼い主失格ですよ』

ペット!? 何言ってるんですか博士!? ほかあ女性をペットにする様な鬼畜じゃないですし、そもそもそんな度胸ありません！ 黒歌? あれは知らなかったんだからノーカンだろうが！

『いるじゃないですかあなたの家に。神殺しの刃である三頭のペットが』

「……………え?」

いやいやいや。まさか、そんなはずは。よく見たら褐色美女さんの方にあの子の面影があるとか、そうなるそこちの色白美女さんはあの子なんだか思ったりしてるけど……。

『ククク。ならば、名前を呼んで確かめてみたらいかがですか』

……………わかりました。

俺は心の中で深呼吸し、その名を口にしました。

「あなた達は……スコルとハティなのですか?」

「おう！ オレがスコルで！」

「ハティ……」

何という事でしよう。元気印なスコルとのんびり屋なハティが、少し見ない間に俺っ子とクールビューティーへ大変身しているではありませんか。…誰か匠を連れて来い!

「なあなあボス。あんなヤベエ姿でこんな所に来てどうしたんだよ。アレか? あの死神共をヤリに来たのか? そういう事なら手伝うぜ?」

煽らないで! 誤解されるから! ……仕方無い、ここは心を鬼にして、大人しくしておくよう注意しないと。

「スコル、ハティ、私は今ハーデス神と話をしている最中なので邪魔しないで頂けますか? (今お話中だから静かに後ろで待っててねー)」

いかん、どうしても子犬の姿を思い出して強く言えん。怒る時はちやんと怒らないと……。

「ごめんなさい!」

と思つたら、いきなりその場で仰向けに寝そべるスコルとハティ。何ぞコレ?

(仰向けは「服従」や「降参」の意味を持つ。もう完全に犬ねアイツ等。まあ、今のご主人様にあんな声色であんな事言われたら逆らえるはずもないにや)

「わかつてくれればいいのです。さあ、黒歌達の所まで下がっていなさい」

「はい!」

慌てて走り出す二人。うんうん、素直な所は変わって無いみたいだ。

「さて、邪魔が入ってしまいもうしわけありませんでしたね」

《…まさか、あの神殺しが人間に従う時が来ようとは。一体どのような方法を使ったのか興味があるな》

「ククク、前の飼い主が躰も出来ない人物でしたからね。引き取らせて頂いただけですよ」

《では、改めて聞かせてもらおうか。不遜にも我が冥府に土足で乗り込んで来たそのわけを》

さて、ここからだ。何とかして答えを聞きださなければ。……その

内容次第で、このハーデス神も“対象”になるかもしれないのだから。

「私がお聞きしたいのは一つだけです。これにお答え頂けたら、私はすぐにここを去りますよ」

S I D E O U T

イツセーS I D E

先輩やグレイフィアさん達と別れて数分、俺は背中にオフィスを乗つけて禁手状態で空を飛んでいた。眼下に広がる街の至る所から煙が昇っている。人氣が無いって事はみんなちゃんと避難出来ているって事なんだろうか。

——相棒、西の方を見てみる。

西? ……ツ!!? な、なんだありや!!? 街の一角が真っ黒になっているじゃねえか!

——あのヴァンパイアの小僧の力だろう。急いだ方がよさそうだぞ相棒。

ギャー助の力だつて!? あれが!? くそ、何がどうなつてんだよ!

“練成”でブースターを増やし全開でぶっ飛ばす。闇に染まった場所の中心部に佇む複数の人影。いた、部長達だ! それに会長や匙達も! おお、サイラオーグさんとレグルスまでいるぞ!

「ツ! アイツ等までいんのかよ……!」

曹操とゲオルクが何とも形容しがたい生物に襲われている。そしてその生物に指示を出しているのが全身を闇で包んだギャー助っぽい人物だった。マジでアイツに何があったのさ! とにかく下りてみよう!

「ちわー! 兵藤一誠とオフィスお届けにあがりましたー!」

「ちわー……」

オフィスが片手を上げて俺の真似をする。何だかんだでノリがいいんだよなコイツ。

「部長、早速ですが向こうで暴れてるギャー助に何があったか教えてもらえませんか?」

「……」

部長の反応が無い。というか、他のみんなも反応してくれない！
ナニコレ。なんか空気読めてないみたいなき感じになってるんですけど。

——お前だと認識されていないんじゃないか。何せ、死んだ事になっ
ていたのだからな。

え、酷くないそれ？ 名前も名乗ったのに。

——あまりに突然過ぎて理解が追いついていないようだ。素顔
でも見せてやれ。

「これでも反応してもらえなかったら流石に泣くからな！ みんな！
俺ですよお！」

禁手状態を解除し、俺は叫ぶように声を上げた。すると……！

『イツセー（君）（先輩）（兵藤（君））！！』

一斉の俺の名を呼ぶ部長達。よかった……信じてたぞみんな！

「イツセー……本当に、本当にイツセーなのね？」

「はい！ 兵藤一誠、帰って参りました！」

俺の元に歩み寄り、何度も頬を撫でて来る部長へ微笑みかけると、
部長はそのご立派な胸元に俺の頭を押し付けた。

「……よく、よく帰って来てくれたわ。やっぱり、あなたは私の自慢の
眷属よ」

一瞬その柔らかさに鼻の下が伸びそうになったが、震える声でそん
な事言われたら浮ついた気持ちなんか一瞬で吹き飛んだわ！

「兵藤！ テメエこの野郎！ 殺されたって聞いて俺がどんだけ……
この野郎お！」

悪いな、匙。お前にも心配かけちゃったようだな。けど、全力で頭
を叩くのは止めれ。最近のお前のパワー割とシャレになってねえか
ら。

「体を失ったと聞いたが……ふっ、お前は不死身か兵藤一誠」

「次元の狭間で色々あったんですよサイラオーグさん」

そうサイラオーグさんに答えたその時、いつの間にか動きを止めて
いたギャー助が俺を見つめている事に気付いた。

《イツセー……先輩?》

「おう、俺だぞギャー助。少し見ない間にイメチェンでもしたか? 止めとけ止めとけ。お前にや似合わねえよ」

《ナンデ……コイツ等ハ死ンダツテ……。神崎先輩モイナクナツタツテ……》

「確かに一度体を失っちまったが、こうして無事に復活したぜ? それと、神崎先輩の事も心配すんな。あの人もこっちに帰って来てるからよ」

《本当ニ……? 本当ニ無事ナノ……》

「ああ! ピンピンしてるぜ!」

《……ヨカッタ》

次の瞬間、周囲に広がっていた闇が呆気無く消滅した。その場に崩れ落ちそうになったギャー助を木場が受け止める。

「ナイス木場」

「ふふ、帰って来るなりギヤスパー君の暴走を止めるなんて。やっぱり僕にはキミが必要みたいだよイツセー君」

「そこは僕達”って言えよ気色悪い!」

「ね、ねえ、イツセー。あなた今さらつとんでもない事を言わなかったかしら?」

「え、俺なんか変な事言い……」

「——神崎君が帰って来た?」

俺達の会話を遮る第三者の声。それは曹操のものだった。ヤツは色んな感情が混ざった様な複雑な表情で俺達を見ていた。

「よお、卑怯者共。なあ、どんな気持ちだ? 自分達がドヤ顔で披露した計画が呆気無く破綻した今、どんな気持ちだ?」

「貴様……!」

ぐぬぬ顔のゲオルク。いやー、コイツのこんな顔が見れて僕は今とても清々しい気分ですよ。

「兵藤一誠。よければ聞かせてくれないかな。キミはどうして復活出来たのか。そして、神崎君は今どこにいるか」

「別にお前等に教えてやる義理はねえが。部長達も気になってる様だ

し、教えてやるよ。サマエルの毒を食らい、シャルバにやられた俺を助けてくれたのはグレートレッドだ。この体も、オーフィスの力を借りてグレートレッドの体の一部から作り出したものだ」

「グレートレッド……だと!? 馬鹿な、あの疑似フィールドに何故グレートレッドが!? ご都合主義なんてレベルじゃない! 常軌を逸している!」

知るか。来たもんは来たんだからしようがねえだろうが。

——相棒、その事で俺から話したい事がある。

話したい事? よくわかんねえけど、いぜ任せろ。

——意識を失いかけていた相棒は憶えていないかもしれないが、疑似フィールドが崩壊する直前、倒れ伏した相棒の周りに突如として小さな人の形をした光が現れた。俺の記憶が正しければ、あの子ども達は木場祐斗……お前のかつての仲間達だった。

「な、何だって!」

——イザイヤという名に聞き覚えはあるか?

「ッ! その名前は祐斗の……!」

「間違いない……その子達は僕のかつての仲間達だ! ど、どうしてみんながイツセイ君の所に……!」

——そこまではわからない。だが、その子ども達が祈り始めてすぐ、グレートレッドが姿を現した。どういう理由かは不明だが、あの子達がグレートレッドを呼び寄せたのだろう。

マジで!? 木場の禁手を目覚めさせ、昇天したはずのあの子達が俺を助けてくれたってのか!?

——それからすぐ『赤龍帝の鎧』に相棒の魂を定着させ、新たな体の作成を始めた。本来であればもう少し時間のかかるはずだったのだが……そこにイツが、イツが、イツガガガガ……。

「つとお! こっから俺が説明するぜ!」

危ねえ。もう大丈夫かと思ったら全然だったわ。

「俺はグレートレッドの中で目を覚ました。で、目の前にオーフィスと……神崎先輩がいたんだ」

「リョーマは次元の狭間にいたの?」

「いえ、何か気付いたら数年前の駒王町にいたって言ってましたよ」

「馬鹿な！ あの時発動させた術式がその程度で済むはずが無い！」

「さあな。お前がミスったんじゃないの？」

「そんなはずは……」

「少し黙れゲオルク。……教えてくれ兵藤一誠。ならば、神崎君はどうやってキミの元へ辿り着いたというのだ」

「気合い」

「……は？」

「だから、気合いで帰って来たって言うてんだよ。本人がそう答えたんだ」

正確には、「時間を制御する力を持つてるけど、あんまり使わないからちゃんと機能する様気合いを入れたら帰って来れた」だけど、敵であるコイツ等にそれを説明する義理は無い。……後で部長達にはこっそり教えてあげるつもりだが。

「……ク、クク……はははははははははは!!」

いきなり曹操が笑い始めた。目に涙を浮かべ、腹を抱え、心の底から愉快だと言わんばかりに盛大に笑う声をあげながら笑っていた。

「気合い!? 気合いだど!? 時間や空間を気合いで跳び越えるなどと魔王や天使でも不可能だ！ 相変わらずキミは俺の想像の遥か上を行くんだな神崎君！ やはりキミは最高だ！」

笑い続ける曹操を無視し、俺は部長達に説明を続けた。

「で、ついさつき二人で一緒にこの都市に迫る魔獣をブツ倒して、俺は部長達と合流する様先輩に言われたんでこっちに来たってわけです」「『超獣鬼』を!? 二人で!」

「ドラゴンの体になったおかげで本当の『覇龍』を使える様になったんです。先輩に援護してもらって俺が跡形も無くふっ飛ばしてやりましたよ！」

「そ、そう……」

……あれ、何か引かれてる？

「で、では、神崎君はどちらに？ 何故兵藤君と一緒にじゃないのですか？」

「あー、それがですね会長。先輩、俺が殺されたって聞いて今までにないくらいブチ切れちゃいまして。『超獣鬼』と一緒にノコノコやつて来たシャルバをフルボッコにして、次はサマエルに報復するって冥府の方へ眷属のみんなと一緒に……」

「はあ、そうですね……つて、ええ!?!」

ああ、そりやビックリするよね。みんな驚き過ぎて目が飛び出そうになってるし。

「報復だと……。まずいぞ曹操。もしかすると俺達も対象に」

「ああ、安心しろ。先輩の口からお前等の名前は全く出て来なかったからな。よかったな曹操。お前等ははなから相手にされてないみたいだぞ」

「ッ……!」

ゲオルクの顔が屈辱に歪む。狙われたらマズイとか言いながら相手にされないのが不満とか面倒臭いヤツだな。

「……俺達が彼にした事を考えれば当然と言えば当然だな」

一方、曹操は是非も無しみたいな反応だった。

やけにもものわかりがいい曹操を不審に思ったその時、突如として俺の耳に先程分かれたはずの人物の声が聞こえて来た。

『私がお聞きしたいのは一つだけです。これにお答え頂けたら、私はすぐにここを去りますよ』

「ッ!? ね、ねえ、今の声って……!?!」

「あそこー! ああのビルのビジョンー!」

花戒が指差した方向に一齐に目を遣る俺達。そこに映し出されていたのは、鎌を持つ死神達の前に一人立つ神崎先輩の姿だった。

イツセーSIDE OUT

IN SIDE

《はて、この老人に答えられる事ならな》

「ならばお聞きします。ハーデス神、サマエルの居場所を教えてください」

《……ほう。何故貴殿がその名を?》

ハーデス神の纏う空気が変わったのがわかる。眼に空いた穴から不気味な光を放ちながらそう問いかけて来た。

「私の後輩が教えてくれたんですよ。自分はシャルバ・ベルゼブブ。そしてサマエルの毒によって命を奪われたのだと。……最も、その後輩は無事に復活しましたけれどね」

「イツセー君が!?! 本当なのか神崎君!?!」

「ええ。死ぬ直前、運よくグレートレッドに助けてもらったようです。私も少しばかりお手伝いさせてもらいましたがね。今頃リアス達と合流しているでしょう」

「そうか……イツセー君が……」

安堵の表情を見せるサーゼクスさん。きつとこの人も気に病んでいたんだろう。魔王様にまで心配してもらえるなんて羨ましいぞ兵藤君。

《サマエルの居場所か。それを聞いて貴殿はどうしたいのだ?》

「私はただ、私の大切な後輩を奪おうとしてくれた相手に最大限のお礼をしたいだけですよ」

《報復すると言いたいのか?》

「有り体に言ってしまうえばそうですね」

オブラートに包もうとしたら向こうから言われてしまった。ならば取り繕う必要は無い。正直に打ち明けるとハーデス神は愉快そうに笑い声をあげた。

《フアフアフア! 神の悪意を体現した原初の罪である『龍喰者』に報復するだど! ……それは流石に蛮勇が過ぎるのでないかな騎士殿》

身の程を知れ……そう言われている気がした。だけど、ここまで来た以上、止まるつもりは無い。

「そうですね。周囲の方々に配慮もせず、自分の感情を優先させる私の行為は確かに蛮勇と呼ばれても仕方ありません」

《ほお、自ら認めるか。その潔さは認めるが、正義の騎士とは思えん発言ではあるな》

正義? 正義と言ったか? 俺が?

「ククク……」

《……何がおかしい》

「失礼。……ハーデス神、あなたは勘違いされている様だ。私は決して自らが正義などと思っはてはしませんよ」

俺は、自分が正しいと思って来た事を、俺に出来る方法で実行して来ただけだ。教会の人間を叩きのめした時も、コカビエルをボコった時も、“D”をぶちのめした時も、ペロリスト共に鉄拳制裁かました時も、クレーリアさん達を助けるために仮面つけてはっちゃけ時も、俺がそうしたいからそうしただけだ。

「以前、ある方に言われた事があります。私は私欲で戦う様な人間ではないと。ですが、私ほど私欲にまみれた人間などいませんよ」

自分の意志を押し通す。それは決して正義ではない。正義ならば、押し通そうとしなくても受け入れられるはずだ。だから、俺の行いはむしろ悪と言ってもいい。俺のやって来た事だっ、誰かからしたら悪だっははずだ。それでも、俺は後悔しない。

「大切な後輩を傷付けられたにも関わらず、何もせず我慢する事が正義ならば、私は悪で構いません。サマエルに報復する……それが私の意志です」

《その後輩とやらにそれだけの価値があると？ 私には理解出来ないな》

価値と来たか……。そういう問題じゃないんだがな。

「ハーデス神、あなたは“死”というものをどう考えていらっしやるのですか？」

《フアフアフア。冥府の王である私にそれを問うか。いいだろう。笑わせてくれた褒美に答えてやろう。我等にとって“死”とは与えるものである。それが我等の役目だからな》

死神の役目は“死”を与える事。その役目に従っただけだとハーデス神は言う。

「では、あなた方によって“死”を与えられた方やその周りの方の想いを考えた事はありますか？ もっと生きたかった。あるいはもつと一緒にいたかった、そういっった本人や遺族の方々の想いを受け止め

る覚悟があなた方にはあるのですか？」

《くだらん。その様な細事に一々拘る様な死神などおらんし、必要無い》

……ああ、そうか。ハーデス神は……いや、ここにいる全員、〃痛み〃を知らない側なんだな。知っていれば、くだらない細事なんて言えるはずが無い。

「そう切り捨てられるあなたは、きっと大切な方を失った経験がないのでしょうか。一方的に命を奪い、それに心を痛めない。その様な方がよく王を名乗れますね」

《言葉に気をつけよ人間！》

《ハーデス様のお気持ちも知らず好き勝手に言いおって！》

《そうだ！ あの時、あの悪魔があのようなモノを持ちこまなければペルセポネ様は今もハーデス様と……》

《その名を口にするな！》

次々に罵声を浴びせて来る死神達をその一喝で黙らせるハーデス神。

《部下が余計な事を言った。許すがいい》

謝罪を口にするハーデス神だが、その声には隠しきれない苛立ちが込められているのを感じた。どうやら、ペルセポネという存在が彼にとっての地雷なのだろう。

《さて、これでも私は忙しい身だな。あまり悠長に話している時間は無い。ここで失礼させてもらうぞ》

「お待ちください。まだサマエルの居場所を教えてくださいませんか」

《サマエルならばコキュートスにて嚴重に封印されている。これで満足か？》

「ほお、封印ですか。ならば、その封印されたサマエルが何故表に出たのです？」

《先程そこにいる魔王殿からも同じ様な事を聞かれたが、そちらの勘違いではないのかね？》

「嘘吐くんじやないわよ。あんな化物が何体もいてたまるもんです

か。アレは間違いなくサマエルだったわよ」

黒歌の援護射撃が入る。そういえば、彼女もその場にいたって兵藤君も言ってたな。

《何と言われようと知らんものは知らんな》

「知らない？ ククク、知らないと来ましたか。聞きましたよ。サマエルの封印はあなたが施していると。自らが管理しているものをキチンと把握していないとは。……世間ではそういう方は“無能”と呼ばれるそうですよ？」

《……私が無能だと言いたいのか》

「さあ、私は一般的な意見を口にしただけですから」

魔神に肖っている今の俺は、普段では思いつきもしない皮肉や嫌味がどんだん頭に浮かんでくる。もし肖るのを止めたらその時点で土下座一直線だわ。

《……いいだろう。そこまで言うのならば会わせてやろうではないか》

しかし、ハーデス神には効果はてきめんだったようだ。プライド高そうだもんな。

「ありがとうございます。それで、サマエルはどこに？」

《慌てるな。案外貴殿の近くにいるかもしれんぞ。例えばそう……貴殿の真上とかにな》

え？

「ツ！ ぐ主人様、上！」

黒歌の叫び声を受けて上を見上げる。

「これは……！」

眼前に広がる巨大な口。俺はそれに飲み込まれるのだった。

S I D E O U T

サーゼクス S I D E

「神崎君！」

神崎君を飲み込んだ捕食口。そこから伸びる触手の先に浮かぶ呪われし存在。龍喰者サマエルがいた。

《ファファファ。だから言っただろう。貴殿の近くにいと》

「ハーデス殿！ やはりあなたはサマエルを解き放っていたのか！」

《いたのではない。今封印を解いたばかりだ。あの人間があまりに会わせると言うものだからそれに応えてやっただけの事》

あくまでも神崎君の願いを聞いただけ。そうする事で今封印を解いた事にする。それが狙いか！ これでは封印術式の色から問い詰める事が出来なくなってしまった。

僕達の見つめる先で触手が不気味にうごめき、サマエルの元に何かが運ばれて行く。考えるのは後だ。まずは神崎君を救出しなければ。

滅びの魔力を手に溜めようとした刹那……。

「——なるほど。こうやってあの子の力も奪ったのですね」

『オ、オオオ……!?!』

「どうしました？ もつと遠慮せず吸ってごらんなさい。吸えるものならね」

『オオオオオオオオオオ!?!?!』

「な、何が……!?!?!」

サマエルの体が急速に膨張を始めた。皮が裂け、全身から血を噴出させながらもその体はなおも膨らみ続け、そして……。

『オオオオオオオオオオオオオオオオ!?!?!』

ついに限界を迎え、その体が爆発した。周囲に肉片を撒き散らしながら落下してくるサマエル。

「……これで終わりですか。拍子抜けもいいところですね」

消失した捕食口の中から姿を現す神崎君。その姿は冥蒼色の鎧に包まれていた。

無言で右手を突き出す神崎君。その右手が光ったと思った次の瞬間、信じられない出来事が起こった。爆発したはずのサマエルが全くの無傷の状態で復活したのだ。

「ククク……ようやく会えましたねサマエル。これでようやく始められますよ。あなたへの報復をね」

『オオ……オオオオオオ！』

サマエルから恐怖の感情が伝わって来る。サマエルにとって、今の

神崎君は全く未知なる存在に見えているのだろう。そして理解しているのだろうか。自分は決して怒らせてはならない相手を怒らせてしまったのだと。目の前の蒼き魔神には絶対に勝てないのだと。

神殿奥の祭壇へ逃げるサマエルと入れ代わる様に死神達が神崎君の前に立ちはだかった。

「どいてください。邪魔をするならば命までは奪いませんが容赦しませんよ」

《それは宣戦布告と受け取っていいのだな？　ならば、冥府の王として命じる。そこにいる狼藉者達を排除せよ》

《《《ハーデス様の御命令のままに！》》》》

鎌を掲げ、高らかに声を上げる死神達。しかし、彼等は理解しているのだろうか。神崎君は決して一人ではないと。

「やっと出番ね。待ちくたびれたにや」

「神崎様、露払いはお任せください」

「死神の鎌は一撃一撃が致命傷だ。気をつけろよミツテルト」

「了解つす！」

「よくわかんねえけど、ボスはその臭えドラゴンをボコりたいんだろ？　ならやる事あ一つだ」

「任務更新。マスターの援護及び死神の排除。なお、先程の発言から殺害は許可されず」

「グルルル……！」

「撮影を続行しつつ死神を無力化して神崎様のお役に立つ。ああ、妻の辛い所ですわね」

背後に並ぶ眷属と神喰狼+ α へ、神崎君は振り返る事無く声をかけていった。

「黒歌」

「にや！」

「レイナーレさん」

「はい！」

「カラワーナさん」

「ここに！」

「ミッテルトさん」

「いつでもいけるっす！」

「スコル」

「おう！」

「ハテイ」

「命令を、マスター」

「フェンリル」

「ガウツ！」

「カテレアさん」

「何でも言ってくださいあなた！」

一 拍置き、神崎君は神殿内に響かせる様に声を張り上げた。

「懲らしめてあげなさい！」 大激励×10

「「「「了解（にや）（っす）!!!」」」」」

「アオオオオオオオオオオオオオン!!!」

こうして冥府、そして後に神崎勢力と呼ばれる者達の戦いの幕が切って落とされるのだった。

第七十二話 いともたやすく行われるえげつない行為

アザゼルSIDE

「……………」

オカルト部の部室前。気付けば俺は扉の前に立っていた。

「どういう事だ？俺は確かサーゼクス達と一緒にハーデスの野郎の所に……………」

それから……………どうしたんだったか？そこから先が靄がかかってる様に思いたせない。

「———思いたせないんじゃない。思いたしたくないんだよキミは」
部室内から聞こえる声。間違い無く俺に向けてのものだ。この中に俺がこの場所にいる理由を知っているヤツがいると見て間違いないだろう。

ならば迷う必要は無い。俺は扉を開けて中に入った。……………特に変わった所は無い。俺の知る部室そのものだった。

「やあ……………待ってたよ」

「ソイツは済まなかったな。……………それで、お前は何者だ？何故俺と

同じ姿をしている？」

そう投げかけると、ソファに座っていた俺が立ち上がり俺の元へ近づいて来た

「僕はキミさ。いや、正確にはキミの一部と言った方がいいかな。急に呼び出してゴメンね。最期にキミと話がしたかったんだ」

「最期？」

穏やかではないその単語に俺は眉を顰める。

「キミは何度も僕を守ろうとしてくれた。おかげで何とか今まで耐えられる事が出来た。そこは本当に感謝しているんだ。出来れば、これからもキミと一緒にいたかったんだけど、アレは……………魔神は流石に無理だ。うん、耐えられるはずが無い」

「魔……………神……………」

その瞬間、頭の中の靄が消えた。そうだ、アイツが帰って来たんだ。そして俺は……。

「待てよ。じゃあ、まさかお前は……」

全てが繋がった。俺の一部で、俺がアイツから守ろうとしたもの。その答えは一つしかねえ！

「ただ受け入れる事が出来ればもしかしたら違った未来が待っていたかもしれない。現に、一時期はキミも受け入れようとした。けれど、結局立場のあるキミにそれは許されなかった。ふふ、口では文句を言いつつもちゃんと責任を果たそうとする所はキミらしいといえづらいんだけどね」

^{アザゼル}俺の体が徐々に薄くなりはじめ、同時にその形が人の姿から、人の体を形作る器官の一つへと変わっていく。ヒトが食べた物を蓄え、じつくりと消化し腸へと送る重要な場所。その名は……。

「さようなら僕^{アザゼル}。僕はそろそろ眠る事にするよ。そうすればキミも苦しみから解放されるはずだから」

「――」

部室内を覆い尽くす眩い光の中で、俺はソイツの名を叫んだ。

アザゼルSIDE OUT

IN SIDE

このドシリアスな空気を壊すつもりはなかった。だが、だがしかし、このシチュエーションで某副将軍に肖ってしまうのは仕方ないじゃないですか！

《ヤツ等をサマエルの元へ行かせるな！》

先に動いたのは向こうだった。三百六十度、見渡す限りに鎌を持った死神達の姿が確認出来る。……なんかコイツ等さつきより増えてないか？

《ハーデス様直々の御命令である。貴様等全員、この神殿から生きて出られると思わない事だ》

《伝説の騎士等と持て囃されていてようが所詮は人間に過ぎぬ事を思い知るがいい》

《ハーデス様の御加護を受けたこの神殿内において、我等死神は不死！ 貴様等は自ら死地へと飛び込んで来たのだと知れ！》

口々にこつちを侮りや嘲りの言葉をこれでもかどぶつけて来る死神達。こつちはとつくにブチ切れているので今さらこの程度の煽りでどうこうなるつもりはないが、その中の一人が口走った言葉だけは無視出来なかった。

「……ほう」

そちらへ視線を向けると、発言したであろうひよろ長の死神がたじろいだ。

《な、何だ？》

「確認します。この神殿内ではあなた達は不死なのですか？ こちらがいくら攻撃しても死なないのですか？」

《ふ、ふははは！ その通りだ。それこそ我らが王、ハーデス様のお力である。今さら命乞い等しても無駄だぞ》

そうかそうか……。つまり、フェニックスさんの時と同じく……。何をしてもいいわけだな。

「……いえ、むしろ好都合ですよ」

俺はあえて鎧を解除し、思いつき笑顔を向けてやった。それだけで死神達が二、三步後退する。

「なあボス。こらしめてやれって事はつまり……。コイツ等全部燃やしちまっつていいんだろ？」

じれったい様子でスコルがそう聞いて来た。

「ええ。たった今、向こうから許可をくれましたからね。遠慮は無用です」

迷い無く答えると、スコルは一瞬目を丸くしたが、すぐさま凶悪な笑顔を浮かべた。

「……いいの、ご主人様？ あんな事言ったら、スコル達自重しないわよ？」

顔に戸惑いの色をにじませる黒歌。確かに、平素の俺ならばこんな物騒な事は言わない。だけど、今回の件は俺の警戒心の無さ、認識の甘さが招いた出来事でもある。俺がいれば大丈夫……。なんて自惚れ

は口が裂けても言うつもりはないが、それでも、もしその場にいたら兵藤君の盾になれたかもしれない。それが出来なかったのは、間抜けにもa u派の罫に嵌められた俺の迂闊さの所為だ。

だからこそ決めたのだ。俺の大切な……かけがえの無い人達に、悪意を以って手を出そうとする者達が現れたら……二度とその様な考えを持たない様、徹底的に、一切の容赦無く、こちらから叩き潰しに行く。

「黒歌、私はこの報復が終わるまで一切の甘さを捨てると決めたのですよ。理不尽に奪われる“痛み”を彼等が理解するまでね」

(……ヤバ。優しいご主人様が一番だけど、こっちの真つ黒ご主人様もいいかも……！)

「黒歌？」

「はっ……！ な、何でもないにや。うん、ご主人様がそれを望むのなら、私達はただそれに従うだけだから」

そう言つて黒歌と、周りで会話を聞いていたレイナーレさん達が頷く。……本当に、こんな迷惑かけてばかりの“王”には勿体無い眷属達だ。

「神崎様、どうぞ指示をお願い致します。いかなる御命令であろうとも私達はただ従います」

ああ、やつぱりこらしめてやりなさいだけじゃわからないですね。一応、俺の中では既に作戦は練つてあるのだが……。

「その前に少しだけ時間を頂けますか」

「え？」

「私はね、レイナーレさん。もう私の目の届く範囲で大切な人達を傷付かせはしないと決めتانですよ。その為なら、たとえ卑怯だの反則だの言われようとも使える物は全て使わせて頂きます」

丸腰となつた俺は目を瞑る。そして、胸に手を当てながらかつての記憶を呼び起こした。

—— I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .
体は剣で出来てい

S I D E O U T

サーゼクスSIDE

百を越えるであろう死神達が殺意を持って神崎君達を取り囲む。しかし、彼等の表情に焦りや恐れは無い。

「いやー、こっちはもう見向きもされなくなっちゃいましたね。ま、アザゼル総督がこんな事になっちゃいましたし、ありがたいっちゃありがたいですけどねえ」

デュリオの言う通り、ハーデス殿はどうやら神崎君達の排除を優先する様だ。

ついでにアザゼルの様子も見てみる。……うん、意識は戻っていないが、先程よりも少し落ち着いた様だ。

「私はね、レイナーレさん。もう私の目の届く範囲で大切な人達を傷付かせはしないと決めたんですよ。その為なら、たとえ卑怯だの反則だの言われようとも使える物は全て使わせて頂きます」

鎧を脱いだ神崎君が瞑目する。……彼の纏う空気が変わったのを感じた。これは……久々にとんでもないものが来るかもしれない。

そして次の瞬間、その予感^体は現実のものとなった。

I am the bone of my sword.

肅々と、しかしその中に力強い意志が込められた詠唱が始まる。同時に、神崎君の体から僕達が扱う魔力とは全く異なる力が奔流となつて溢れ出す。

Steel is my body, and fire is my blood.

「ッ!? な、何、コレ……!?!」

「力が……溢れて来る……!」

神崎君の眷属達、そして彼の味方をする者達の体が光に包まれ、彼女達から感じる力が爆発的に増幅して行くのがわかる。

I have created over a thousand blades.

《な、何が……何が起こっているのだ……!?!》

《体が……重い……!?!》

その一方で、その力の余波を受けた死神達はローブを激しくはため

かせながら目の前で繰り広げられる光景を愕然とした表情で見ている。さらに、黒い靄の様なものが彼等の腕や足に纏わりつく様に覆うのが確認出来る。本人達は気付いていないようだが、もしや僕にしか見えていないのか？

—— Unknown to Death.
—— Norknown to Life.

Have withstood pain to create many w
Yet, those hands will never hold any t
So as I pray, UNLIMITED BLADE WORKS.
神崎君達を包む光が一段と強くなる。彼等の纏う規格外のオーラが弾ける様な音を発しながら上に立ち昇って行く。

《あ……ああ……》

死神達は最早身動きどころか呼吸する事すらままならないといった様子だった。

(……ああ、そういう事なのか)

唐突に、僕はあるの詠唱が示唆しているものが何なのかわかった気がした。

—— 侵略者から人々を守る為、歳端のいかない己が身を彼等の為の剣とした。

—— 鉄血の意志で部下達を死地へ向かわせながらも、子どもだった彼の心は本当は硝子の様に脆かった。

—— 敗北が許されない戦いの日々を、それでも彼は乗り越えて来た。

—— 敵を前に決して背を向けず、平和の為と命をかけ続けた。

—— しかし、そんな侵略者の脅威から一刻も早く解放されたい人々の中には、総司令官である彼の采配に不満を持つ者達がいたのかもしれない。

—— けれど、平和に身を捧げた彼は、勝利の度に人々を守れた自

分を誇りに思い続けた。

——その誇りがあつたからこそ、自らの人生に戦い以外の意味を求めた事は無かった。

——そして、彼はこれからも剣で在り続ける。その意志で、その力で、自分の大切なものを守り続ける為に。

(これは彼の……神崎君が歩んで来た道そのものじゃないか)

鋼の救世主を率いた総司令官にして、自らも仲間達と共に戦場を駆け抜けた騎士。神崎亮真という人間にしか紡げない誇り高き物語。それが、あの詠唱に全て込められていたのだ。

「あれが……神の騎士殿……」

震える声でデュリオが呟く。彼は敏い。きっと僕と同じ結論に達しているのだろう。そして、もう一人……。

「——アホみたいに強化されてやがる。あの野郎、冥府を更地にするつもりか」

この声はアザゼル？ よかった、目が覚めたのか。

僕は振り返り……そして固まった。そこに立っていたのは、口の端から血を垂らしながらも、これまで見せた事の無いほどの柔和な笑みを浮かべたアザゼルだった。

「ど、どうしたんですか総督？ まるでこの世の無常を知りつつ、それでも前に進もうという気持ちが込められたかの様な笑顔なんか浮かべて……」

「……アイツが胃(誤字にあらず)っちまったよ。俺の苦しみを全部背負い込んでな。おかげで生まれ変わった気分だぜ」

「アイツとは誰の事だい？」

僕の問いに、アザゼルは寂しそうに微笑みながらも、具体的な答えは口にせず神崎君達の方へ視線を向ける。

「ただ目の前にあるものを受け入れる。そんな簡単な事が出来なかった。……だが、これからは違う。俺はただ認めて受け入れる。そうアイツと約束したからな。お前等も難しく考えず、この特等席で見物しようぜ。フューリー……いや、魔神の戦いつてヤツをよ」

何だろう。今の彼はどこことなく神崎君のレーティングゲーム後の

彼と同じ感じがする。

「……んあ？ あの女もついて来……何やってんだアイツ」

眉をひそめるアザゼル。

「あ……へ……え……」

「カ、カテレア……？」

神崎君の背後に、女性として完全にOUTな表情を浮かべたカテレアがいた。黒歌達がゴミを見る様な目で彼女を見ている。……気のせいかな、フェンリルが彼女から少し距離を取っているに見えるぞ。「この状況でア○顔晒す理由がどこに……ああ、アイツからしたら、さっきの詠唱なんざたまらんもんだったろうな」

「だからといって、淑女としてあの顔はまずいのでは……」

「お前、アレが淑女だと思ってるのか？」

「……」

「……」

「……すまない。私が間違っていた」

「……わかりやいいんだよ」

サーゼクスSIDE OUT

IN SIDE

(こんなもんか)

どこぞの戦闘民族ばりのオーラを放出する黒歌達を見ながら、俺は心の中でそう漏らした。

『ほう、中々面白い事をするじゃないですか。その力には私も手間取ったものです』

そりやまあ、コレ精神コマンドが無いと博士とまともな戦いなんて出来ませんでしたから。

ちなみに、詠唱中に発動させた精神コマンドはこんな感じである。
——I am the bone of my sword.

(再生・指揮・感応)

Steel is my body, and fire is my
blood

(特訓・理想・熱血・魂)

I have created over a thousand blades
(脱力・戦慄・かく乱・足かせ・威圧)

— Unknown to Death. (挑発・みがわり・見極め)

— Nor known to Life. (鉄壁・不屈・予測)

Have withstood pain to create many works
(ひらめき・迅速・覚醒)

Yet, those hands will never hold anything
(直撃・両断・狙撃)

So as I pray, UNLIMITED BLADE WORKS.
(奇跡・愛・奇襲・勇氣・希望)

ドマイナーなヤツから、派生作品、効果が被っていようが思いつく限りに役立ちそうな精神コマンドを発動させた。自分にしかかけられないものが混じっているが、俺ならば他人にもかけられるのは以前、祭りの時にオーフィスちゃんと一緒にやった金魚掬いで確認済みだ。

『ですが、わざわざあの様な詠唱をせずとも強化出来たのでは?』

確かにこれまで通り精神コマンドだけならばただコマンド名を口にしたるだけで発動出来ましたよ。それを、あえてあの有名な厨二詠唱に合わせて行ったのは、少しでも相手の目を俺に向けさせるためです。

『……続けてください』

いきなりあんな詠唱を始めたら、当然相手は警戒します。そして、実際にパワーアップした黒歌達を見てこうも思ったはずです。あの効果を止めるには俺を何とかするしかない。必然的に俺に向かつて来るヤツ等の数が増えて、黒歌達が相手をする数が少なくなりま

す。そうすれば、彼女達が傷付く確率も少しは低くなるかなど。正直、警戒させる為だけが目的なので、詠唱は何でもよかつたんですけどね。

『そうなのですか？ 私はてっきり、またあなたの例の癖が始まったのかと……』

例の癖？

『ククク、いえ、お気になさらず。……さあ、お膳立ては整いました。報復も大詰めと参りましょう。……あなたの決意が口だけのものにならないよう、願います』

博士の言う通りだ。俺の決意は俺が証明しないとイケない。さあ、行くぞ死神達。この戦いを以って、俺は『自重』と決別する！

第一百七十三話 Guardian (Fallen) Angel

イツセーSIDE

So^そ a^の s^の I^体 p^{は、} r^{きつ} a^っ y^っ U^と N^と L^と I^剣 M^で I^で T^で E^で B^出 L^来 A^て D^て E^て W^い O^い R^い K^た S^た.

大型ビジョンの向こう。大量の死神に囲まれながら、神崎先輩は全く臆する様子もなく詠唱を始めた。それを聞いた俺は全身の震えが止まらなかった。

(おいおいおいおい！ 何だよ今の詠唱めちやくちやカツケエじゃねえか！)

英語かー。本当は俺も入れたかったけど、単語並べるだけ並べて終わりになりそうだしなあ……じゃなくて！

「部長！ みんな！ ほら、俺が言った通りだろ?!」

これでみんなも一安心ですわ。そう思い、ビジョンから安堵の表情を浮かべているであろう部長達へと視線を移す。

「……」

あ、あるええええ？ 思ってた反応と違う。無言でビジョンを凝視してるだけ……じゃない！ 目に！ 目にハートマークが浮かんでる!?! 思いつきり見惚れてるじゃないですか部長！ 漫画でしか見たことないですよそれ！

「あ、あら、あらあらまあまあ」

「な、何だ……下腹部が熱い……」

壊れたロボットみたいに「あら」と「まあ」を繰り返す朱乃先輩。そしてゼノヴィア！ へその下辺りを摩るのは色々まずいから止められ！ てかよく見たら女性陣全滅かよ！ 会長達まで同じような反応してるじゃねえか！

「木場祐斗。神崎殿は味方の強化まで出来るのか？」

「いえ。怪我の手当てだったり僕も何度か見たことがあります、あれほどのものは初めてです」

「フツ……あの御仁は何度俺達を驚かせれば気が済むんだろうな」

「最近じゃ、楽しくもありませんけどね。今度は何をして僕達を驚かせてくれるのかって」

俺の横で会話してる木場とサイラオーグさん。冷静に見えるけど、目がキラキラしてるよ。憧れのヒーローに会った子どもみたいになってるよ。木場はまだいい。サイラオーグさん、あなたもか！

「うおおおおおおおおお！ カツケエ！ めっちゃカツケエツス先輩！ 兵藤！ おい兵藤！ 先輩が！ 先輩カツケエ！」

興奮しまくりの匙が俺の背中をバンバン叩いて来る。あれ、なんだろう。こいつの反応が一番安心できるわ。

「な、何だあの力は!? 魔法……いや、何なんだ……。わからない。何なんだあの男はあ！」

ゲオルクの野郎が頭を抱えながら叫ぶ。奴も魔法が使える分、先輩のヤバさがより理解できるんだろうな。

「……キミは……キミはどこまで……神崎君……」

絞り出したような声で先輩の名を呼ぶ曹操。俺達の事など気にした様子も無くビジョンを凝視しながら、その顔は今にも泣き出しそうなものだった。

イツセーSIDE OUT

IN SIDE

さて、保険もかけまくったし、そろそろ始めるか。報復対象は神殿の最奥に逃げたサマエル。そして、ハーデス神。及び死神が複数。

「みなさん、私はサマエルの元へ向かいます。ですから……」

警戒しているのか、襲ってこない死神達を前に簡単な打ち合わせを行う。

「みなまで言わなくていいぜボス。雑魚の掃除はオレ達にやれっただろ？」

スコルが死神達に目線を向ける。確かに、一直線にサマエルを目指すとなると、必然的にみんなに他の相手をしてもらわないといけないけど……。

「スコル。無理だけはしてはいけませんよっ。」

「おいおいボス。オレが不死にあぐらをかいたイキリ共にやられるわけねえだろ。……つーか、心配すんならそいつらじゃねえの?」

そう言つてスコルが指したのはレイナーレさん達だった。

「その雌猫とババアはギリギリ使えそうだが」

「雌猫(ですって)!!?」

その言葉に黒歌とカテレアさんが同時に反応し、続いて互いの顔を合わせあった。

「何でアンタが反応するのよ。どう考えても雌猫つて私の事でしょ」

「ああ、言われてみれば……つて誰がババアだコラア!」

「真面目な会話シーンだから黙ってなさい」

青筋を立ててスコルに詰め寄ろうとするカテレアさんを羽交い絞めする黒歌。その間にもスコルは挑発するようにレイナーレさん達に問いかける。

「三人揃つてやっつと……つてところだろお前ら。オレは別にどうでもいいけどよ。ボスの手を煩わせるようだったらこの場からさっさと失せな」

瞬間、レイナーレさんが神器を構え、躊躇い無く発砲した。発射された光弾は一直線にスコルに迫り……そのまま顔の横を通り過ぎ、彼女の背後で鎌を振り上げていた死神に直撃した。

「——油断しすぎよ神喰狼」

してやったりとばかりに笑みを浮かべるレイナーレさん。それに続くとはかりにカラワーナさん、ミッテルトさんも神器を手に一歩前に出る。

「確かにあなたに比べれば私達の力は数段劣るものなんでしょう。……けれど、それが何だと言うのかしら?」

「以前の……神崎様に出会うまでのウチ等だったら、恥も外聞のなぐり捨てて逃げ出してたつす。けど、今のウチ等は神崎さまの眷属つす。眷属が『王』を置いて逃げるわけが無いつす」

『王』の敵は私達の敵。ならば、相手が何者であろうと私達は戦い、そして必ず勝つ」

「私達は生半可な覚悟で眷属にさせて頂いたわけじゃない。だから

……」

「私達を舐めないで(ちようだい)(もらいたい)(欲しいっす)!!!」
やだ、俺の眷属格好良すぎ!?

「へっ。口でならなんでも言えるわな」

「だったら、その目でしっかり見てなさい。私達の戦いを」

「やだよ面倒くせえ。……お前らは上の連中をやれ、下はオレと親父、ハティでやる」

広大なハーデス神殿はすでにおびただしい数の死神で溢れている。その勢いは地上だけではなく、上空にも及んでいた。

「行くわよカラワーナ、ミツテルト。私達の力をあの女に見せ付けてやるわよ!」

「承知!」

「やってやるっす!」

墮天使の羽を飛ばたかせ、上へ舞い上がるレイナーレさん達。それを合図に死神達も一斉に俺達に襲い掛かってきた……のだが。

「ぎゃあ!」

「も、燃える!? 私の体がああああ!!」

突如として立ち上る炎の壁に数十の死神があっけなく飲み込まれた。

「さーて、それじゃ掃除を始めるとすつかあ。雌猫、テメエもしっかり働けよ」

「言われるまでも無いわよ。あと、どうでもいいけど、アンタ励まし方下手すぎじゃない?」

「はあ? オレが誰を励ましたってんだよ?」

「いやいやいや。バレてないと思っただの。ま、意外と言えば意外だけどね。アンタ、そういう気遣いとかしそうになかったのに」

「スコル。何故あの場面で死神の攻撃に対処しなかったのか理由を知りたい」

「そりゃあ、わざと気づかないふりをしてレイナーレ達に助けさせたからよハティ」

「適当吹かすな雌猫! あとハティ! くだらねえ事気にしてねえで

テメエも働け！ それと親父、んな生暖かい目でオレを見んじやねえ！」

「ぐるぐる」

……なんだかさつきから置いてきぼりな気がするが。仲がいいならそれでよし！ 俺もみんなに遅れないようにしないとな！

S I D E O U T

ハーデス神殿……荒地ばかりが広がる冥府において唯一の建造物にしてオリュンポス三柱神の「死」を司る神王ハーデスの根城である。不毛の大地に不釣り合いな豪華なその神殿はハーデスを主とする死神達にとってもまた特別な場所であった。神殿全体がハーデスの『加護』に覆われており、神殿内のどこにおいても偉大なる主の慈悲を賜る事が出来るのだ。死神達にとってこれに勝る喜びはない。

死神達にしか効果のない『加護』……彼等の力を高め、不死という特性さえ与えてしまうその『加護』はギリシア神話でも最強クラスの神に相応しい力なのだろう。

——故に侮る。

——故に慢心する。

——故に油断する。

偉大なる神、ハーデスの下において、我等死神に勝てるものは存在しないのだと。自分達は“死”の体現者であるのだと。それが、この冥府における絶対的なルールであるのだと。

——故に気づかない。

——故に理解しない。

——故に認識できない。

目の前に存在する敵が、そんなハーデスの『加護』を鼻で笑うようなとんでもない『加護』を与えられているのだと。侮りも慢心も油断も無く、確固たる覚悟を持って挑んできてきているのだと。こうして味方が次々と落とされていくのにも関わらず彼等には信じる事ができなかった。

「おおおおおおお！！」

カラワナーの槍による渾身のなぎ払いが死神達を紙くずの様に吹き飛ばし……。

「残念！そこはウチの距離っす！」

運よく逃れた別の死神の腹にミッテルトの放った結晶状の拳が容赦無く突き刺さり……。

「馬鹿みたいに動きを止めて、まるで案山子ね！」

それならばと遠距離から攻撃しようとする死神達がレイナーレの神器による強力無比な砲撃によって飲み込まれる。

《お、おのれ。まるで隙が無い……!?!?》

近づけばカラワナーに斬られ。中途半端な位置ではミッテルトに殴られ。離れればレイナーレに撃たれる。近距離・中距離・遠距離。どこにいようがこの三人の前では安全な場所は存在しない。

《何故こうもしてやられるのだ！ 奴らは連中の中では最低戦力のはずなのだろう!?!?》

……

「ふん、最低戦力だからってお前らより弱いなんて理屈があるわけねえだろうが」

狼狽して叫ぶ死神に、安全圏から見ていたアザゼルが呆れたようにため息を吐いた。

「どういう意味ですか総督？」

「レベル100のラスボスやレベル70の大ボスに比べりゃ、レベル50の中ボスが弱えの間違いないが、だからといってレベル30程度の雑魚にやられるのかって話だ」

「なるほどー。中ボスがああ三人。雑魚が死神達って事ですね」

「もともとあいつ等は俺が鍛えて上級墮天使クラスの実力になってんだ。神器も完全に使いこなしているし、フューリーの強化もある。何より……今のあいつ等には『誇り』が、『覚悟』が、『意志』がある。『加護』ごときでいい気になっている連中にあの三人が負けるわけがねえよ」

アザゼルの脳裏に、数週間前の出来事が思い出される。その日、レイナーレ達は神器のメンテナンスとデータ収集のためにアザゼルの元を訪れていた。そこで彼は三人からある相談を受けていた。

『で、話つてのは何だ？』

『アザゼル様……私達は神崎様の眷属として何をすればいいのでしょうか？』

『……どういう意味だ』

問いただすアザゼルにレイナーレは答える。神喰狼という自分達を余裕で上回る実力を持つ者が三頭も加わり、果たして自分達の存在意義は何なのだろうか。

『以前アザゼル様は私達の評価がそのまま神崎様の評価に繋がる。だからその自覚を持つて普段の言動だったり心を心がけるとおっしゃいましたよね』

『ならば、我等の今の実力は神崎様の眷属としてまるで足りないのではないかと』

『もちろん、日々の鍛錬は欠かして無いっす。けど、あんなとんでもない存在が近くにいるとやっぱり気になっちゃうというか……』

『……んだよ、そんな事か』

拍子抜けだとばかりにソファに倒れこむアザゼルの姿にレイナーレ達はムツとなった。

『そんな事つて……私達は真剣に……！』

『わあつてるよ。ならまずハッキリ言つてやるが、お前等は強い。それは俺が保障してやるぜ』

『『え……？』』

『これを見な』

ポカンとする三人を尻目に、アザゼルは先ほどまで操作していたノートPCを開きあるファイルを開いた。

『これはお前等の神器の稼働効率……わかりやすく言えばどれくらい神器を上手く使いこなしているかを数字で表したものだ、それぞれ自分の名前のところをチェックしてみろ』

言われるままに覗き込む三人。その目が一斉に見開かれる。

『ひ、102.3パーセント!?』

『101.6……だと!?』

『ウ、ウチも103.1パーセントになってるっす!』

『驚くのはまだ早いぜ』

アザゼルの操作で画面が切り替わる。

『今のはそれぞれが単体で運用した場合での数字。……そしてこれが、お前等が連携して運用した時の数字だ』

そこには大きく163、7パーセントという数字が表示されていた。信じられないという表情の三人にアザゼルは楽しげな顔を向けた。

『お前等は神器を自分の物にした。いずれ『禁手』にも至る事ができるだろう』

『じ、人工神器も『禁手』するのですか!?!』

『当たり前えだろ。神器なんだから。……で、どうだ? お前等の悩みは解決できたかよ? 神喰狼は確かに一匹だけでもとんでもねえ戦力だが、一人で100の力を出せる奴と、一人で50でも三人合わされば300以上の力を出せる奴らなら俺は後者を取るね。お前等が実力が足りねえから三人なんじゃねえ。実力以上の力を出せるから三人なんだよ』

アザゼルの言いたい事が理解できたのか、三人の顔から険が取れた。

『お前等は既に上級墮天使レベルの実力をつけている。加えて神器も使いこなせている。だから、俺からお前等に言う事はただ一つ……プライドを持って』

『プライド……ですか?』

『フューリーと出会い、心を入れ替えたお前達は俺の課題や注文もきつちりこなし、実力をつけていった。決して驕らず、ひたむきに真っ直ぐにな。それ自体は素晴らしい事だ。だがな、過ぎる謙遜は卑屈と同じだ。お前達は、お前達の努力、経験と同じだけの自信を持ってもいいんだ。だから周りに何を言われようが、神喰狼が傍にようが迷う無くこう言ってやればいい。自分達はフューリーの眷属なの

だ。文句があるならかかって来やがれ！　つてな』

『アザゼル様……』

『レイナーレ、カラワーナ、ミッテルト。お前等は強い。そして……惚れた野郎に尽くそうとするいい女達だ。やれやれ、こんな事ならヤツと出会う前にモノにしときやよかつたぜ』

そう言っておどけるアザゼル。けれどその目にはどこか嬉しさと優しさが込められていた。まるで少し前から世話を焼いているある教え子達に向けるもののように……。

「私達は偉大なる騎士、神崎亮真様の眷属！」

「我等が主の怒りに触れし愚か者どもよ！」

「神崎様の分も併せてウチ等がぶっ飛ばしてやるっす！」

最早揺るがない。自分達はあのお方の眷属として使命を全うしてみせる。その誇りが、その想いが、主が施した力と合わさりそれを呼び起こした。

「……あいつ等は俺の言った事を正しく理解した」

突如としてレイナーレ達の体が光に包まれる。何をするつもりだと近づこうとした死神が光から発せられた波動に吹き飛ばされる。

「だから、こうなる事も必然ってわけさ」

確信を持つて呟くアザゼル。そして光が収まった時、そこには美しくも勇壮な鎧に身を包んだレイナーレ達の姿があった。

「『暴食王の外套』……これが、私の『禁手』なのね」

青、白、そしてオレンジ色に彩られたアーマーを身に纏うのはレイナーレ。背中のパニアから激しく光を噴出させながら両腕から伸びるライフルを死神達に向ける。

「見るがいい！　これが我がグランテイード・ドラコデウス『玉座龍の剣鎧』なり！」

三人の中で一番堅牢な姿となったカラワーナが吼える。すると、そんな主に応えるかの様に彼女の背後から四頭の龍の首が伸び、高らかに咆哮した。

「クストウェル・ブラキウム『幻影守護の闘衣』！　今のウチは誰にも止められないっすー！」

格闘を主とするミッテルトの動きを阻害しない様に装着された鎧。他の二人に比べて覆われている箇所が少ないが、当たらなければどう

ということはない。それだけの速さが彼女にはある。

《こ、この……行けええええええええ！》

これ以上調子づかせてなるものかばかりにレイナーレ達に殺到する百を超える死神。しかし、当の三人は冷静に、しかしその胸に闘志の炎を燃やしながらそれを迎え撃つ。

「落ちなさい！」

大型バーニアを噴かせ、滑る様に移動しながら、レイナーレは背面と脚部のハッチを開く。次の瞬間、そこから無数のレーザーが発射された。

《なっ!? ぐあああああああ?!?!?》

まるで意思を持っているかのように、ありえない軌道を描きながらレーザー群が死神達を貫いていく。

「流石お姉さま! ウチも負けてられないっす！」

《はっ! 馬鹿め! 貴様の攻撃なら落ち着いて見切れば回避など容易……》

そう発言した死神の顔が数秒も経たずに凍りついた。

「!!!!!!!!!!へえ、ならこれも避けれるもんなら避けてみなっす!!!!!!!!!!」

拳を引くミッテルトの周りに同じく拳を引く九人のミッテルトが現れ、一斉に拳を突き出した。放たれた結晶拳の雨が死神達を襲う。

《こ、こんな物おおおおお!!!》

無謀にも破壊しようとする鎌を叩きつける死神がいたが、逆に鎌の刃が甲高い音と共に砕け散った。そして、愕然とするその顔に拳が叩き込まれた。

「退けミッテルト！」

背後からの警告に振り返る事もせずその場から飛び去るミッテルト。それを確認した声の主がその力を解き放った。

「吹き飛ばがいい! ドラコ……スレイブ……!」

胸部に裝飾された龍の頭。その顎から膨大なエネルギーが迸る。なす術も無く飲み込まれた死神達が悲鳴もあげずもなく地へと落ちていく。

一撃。三人がそれぞれにたった一撃放っただけ。時間にして一分も満たないその短い攻防の結末は、死神達の完全敗北だった。

「二さあ、次の相手は誰（かしら）（だ）（っすか）!!!」

「新たな力と誇りを胸に突き進む彼女達を、もう誰にも止める事はできない。」

「うひゃあ。とんでもない暴れっぷりですね彼女ら。……ところで、さっきから黙って何をしてるんですか魔王様？」

「いや、カテレアからカメラを預かったんだが、どう扱ったものかと思っただけ」

「カメラですか？」

「ああ、そりゃ俺があいつに作ってやった神器の一つだ。何だ、フューリーの姿でも録画してろってか？」

「あ、ああ。そんな事を言っていたよ」

「寄越せ。俺が撮ってやるよ。どうせやることねえしな」

「なんていうか、ここだけ本当に緊張感ないですね」

「いいんじゃないねえの。すでにここの主役はあいつ等なんだしよ」

「いそいそとカメラ型神器を操作するアザゼル。サーゼクスとデユリオは少しだけ顔を見合わせると、諦めた様に戦場に視線を戻すのだった。」

第七百七十四話 父として

決意と共に新たな力を手にしたレイナー達。そんな彼女達をスコルは地上からのんびりと見上げていた。

「おーおー、あんな雑魚共相手に張り切っちゃってまあ」

呆れた様な、けれどどこか楽しそうな表情を見せるスコルに背後にいたハティが声をかける。

「戦力の増強を確認。スコルの心配は払拭された」

「だーかーらあ！ オレは心配なんざしてねえっつもの！」

「把握。スコルは彼女達を信頼している。故に心配は不要だと判断」

「お・ま・え・なあああああ……」

見る者が見れば仲の良い姉妹がじやれている様にしか見えない。しかし、彼女達の周囲に広がるのはそんな微笑ましきとは真逆の恐ろしい光景だった。

《あ……ああ……》

《消して……誰か火を消し……》

地面に転がる黒焦げた塊……それはスコルの消えない炎によって全身を燃やされ続けている死神達だった。ハーデスの加護によって神殿内においては不死の彼等は今、その加護によって死を越える苦しみを味わい続けていた。

《……》

《ひ、ひいいい！ 私の腕が！ 私の足があああああ！》

また、燃え盛る死神達の間には地面から生えたように氷柱が伸びていた。スコルの炎により周辺の温度が上昇しているにもかかわらず、溶けるどころか表面に水滴すらついていないその氷は、スコルの妹ハティによって生み出されたものだった。成す術もなく全身を氷柱に飲み込まれたものは、何が起こったのか理解できないまま、氷柱の創造主に許されるまで永遠の時を過ごす事になるだろう。

そして運良く、いや運悪く体の一部だけを飲み込まれた者は抜け出そうともがいた挙句、氷と共に自らの体を自ら破壊する事となるのであった。

「んー……」

「スコル、思案中？」

「いや、最初こそ疑問だったが、こうして雑魚共を適当に相手してたらボスの考えがなんとなくわかった気がする。お前はどうか？」

主は「命は奪うな。痛みを与えよ」と彼女達に命じた。殺すだけならば簡単だ。不死の加護など神殿の外に引き摺り出してしまえば何の意味もない。主であるならば、もしや神殿内であろうとも連中を消し飛ばす力も持っているかもしれない。にも関わらず、この様な回りくどい命令を下す意味とは……。

「これはおそらく示威行為だと思考する」

ハテイの回答にスコルも首肯する。今回、悪魔達の英雄であり自分達にとつて“偉大なる者”である主の逆鱗に、冥府の者達は愚かにも触れてしまった。この先、同じ様な愚者は現れるかもしれない。そんな連中に対し、主は死神達を利用して示そうとしているのかもしれない。冥府の末路が、そのまま未来のお前達なのだと。

「羽虫にまとわりつかれても鬱陶しいだけだしな。ボスほどの雄に威嚇されてケンカ売るようなヤツがいたら、そいつはよっぼどのイカレ野郎だな。オレなら秒で漏らす自信があるぜ」

「同意」

本人達は知る由も無いが、彼女達が導き出した答えは“博士”が主へ示したもののそのものであった。

「ま、そういう事だつてんならもつと派手にやってやるか。いつそこの趣味の悪い小屋もぶっ壊してやろうか」

ざつと神殿内を見渡すスコルの発言に、死神達の顔色が変わった。

《こ、この聖なる神殿を破壊するだ?! おのれ、我等の誇りを何だと思っている!》

《そうだ! それにこの神殿が崩壊すれば“あの方”の封印が……!》

「あん?」

《ッ! おい黙れ! それは禁句であろう!》

不用意な発言をした死神を別の者が一喝するが、その発言はしっか

りスコルの耳に届いていた。興味深いとばかりにスコルは件の死神に視線を向ける。

「お前、今面白い事言ったな。……決めた。おいハテイ、とりあえず手当たり次第にぶつ壊すぞ」

「了解」

手始めに前方に見える黄金の柱に飛び蹴りをかましてやろうとスコルが体勢を低くしようとしたその時だった。

——待テ。我が娘達ヨ。

低く小さな唸り声。しかし、死神達の動きを止めるには十分な威厳とプレッシャーの感じられるその声の意味を聞き取れたのは“彼”の娘であるスコルとハテイだけだった。

「お父様？」

——我がヤル。オ前達ハ下ガツテイロ。

「おいおい親父。こんな奴等親父がやるまでも……」

——下ガツテイロ。

「ッ……」

ゆつくりとスコルの横を通り過ぎていく巨体……フェンリル。それを見送るところか身動き一つしなくなつた姉を不思議に思い近づくとハテイ。

「スコル？」

「……やべえ。親父のヤツ目がマジだ。ありやめちやくちやブチ切れてやがるぞ」

額に汗を滲ませるスコル。よく見れば鳥肌も立っていた。

「？ 何故？」

「わかんねえ。わかんねえけど……こりや相当荒れるぜ」

娘達のひそひそ声を父は聞いていた。そして心の中で頷く。事実、自分の中には激しい怒りが渦巻いている。

当然だ。目の前に散らばる小さき者どもはまた娘達から奪おうとしているのだから。

……

……

：

薄暗い部屋の中、液体の中に浮かぶ自分。それが“彼”の最初の記憶だった。

「おおー。ついに目覚めたか！ ククク、個体No.2030……お前が目覚めるとはな！」

ぼんやりと見える視界の先で何者かが自分を見て笑っている。自分と何者かの間を隔てている薄い壁に手を当てながら、その誰かが自分を呼ぶ。

「お前の名は……フェンリルだ！ お前はこのロキの最高傑作となるべくして生まれたのだ！」

ロキと名乗ったこの存在が、自分の主であると“彼”が理解できたのは、それから少ししての事だった。ロキは“彼”に必要な情報や知識を次々に教え込んだ。教えたとは言っても、それはおおよそ教育と呼べるものでは無かったが。ただひたすら機械を通じて“彼”の脳に直接覚えさせるといふものだったのだから。

情報量に脳が追いつかず、『教育』は激しい痛みを伴うものであったが、ロキがそれを躊躇う事はなかった。“彼”もまた、それが普通だと思っただけ耐えていた。

そんな時間をひたすら繰り返す日々の中、“彼”の肉体もまた成長を続け、目覚めてからずっと居続けたポッドの中から出る時がやって来た。

「フェンリル、これからはお前の体の強化を主に行っていく事にする。だがその前に……入って来い」

「し、失礼します……」

ロキに促され現れたのは一人の女巨人だった。“彼”からすれば主以外で初めて出会う人型の存在だった。

「今日よりお前の世話係となるテュールだ。テュール、お前の役目はわかってるな？」

「は、はい。フェンリルの実験データをより効率よく取れるように、食事や体調の管理をする事です」

「そうだ。だからこそ行き場のないお前を引き取ってやったのだ。せ

いぜい己の役目を全うするがいい」

「はい」

「必要なものは用意する。……が、フェンリルの成長に益になるものしか認めん。お前自身のための物は一切認めんからな」

「それもわかってます。私はこの子の……フェンリルの為だけにここにいるのですから」

「ふん、弁えているのならいい。実験は明日から始める。今日は精々フェンリルにかみ殺されぬよう機嫌を上手くとっておくのだな。もつとも……お前の体は多少の事で傷つきはしないだろうが」

「……」

そう言い残し、ロキは部屋を出て行った。真っ白で何も無い部屋。それが主が用意した“彼”と“彼女”の暮らす部屋だった。

一匹と一人になった部屋。“彼”は“彼女”に興味を示さず、部屋の真ん中に移動すると丸まってしまった。

「え、ええつと……私、頑張ってお世話するから、よろしくね、フェンリル」

意を決してテュールが声をかけるが“彼”は何も応えず目を瞑り、やがて静かに眠りにつくのだった。

さて、ロキの宣言通り、翌日から早速“彼”の身体データの調査が始められた。様々な計器をつけられ、筋肉量や血液、果ては排泄物のチェック等ありとあらゆるものが対象となった。

それが終わると今度は実際に体を動かしての調査へ移った。体力、速力、噛む力。単純な物から段々実戦的なものへと変わっていったが、“彼”はただ主に命じられるままにそれらをこなしていく。そして、“彼”は“彼女”の待つ部屋へと戻るのだ。

「あ、お、お帰りなさい」

テュールがぎこちなく挨拶をするが、“彼”は気にせず定位置となった部屋の真ん中へ向かう。そこには“彼女”が用意した食事が置いてあった。

「今日はお肉だけじゃなく野菜も入れてあるから残さず食べてね」

「ぐるめ」

テュールの言葉にフェンリルは不満そうにうなり声をあげる。すると、“彼女”は何が面白いのか笑みを浮かべるのだ。

「ふふ、そんな風にうなつても駄目だよ。お肉ばかりじゃ栄養が偏っちゃうんだから大きくなれないよ。そうしたらロキ様にも怒られちゃうんだから」

主の名前を出されては仕方が無い。“彼”は残さずそれを食べつくした。実は食事の中にはロキの調合した身体能力増強の薬が混ぜられていた。なので残せばロキが怒るという“彼女”の言葉は間違っていない。

「くああ……」

「あ、もう寝ちやうんだ。お休み、フェンリル。また明日も食べてもらえるよう頑張つて作るからね」

テュールの声は既に“彼”には届いていなかった。

このように、“彼”と“彼女”の関係は世話するものとされるものでしかなかったが——その関係性が変化したのはそれから一ヶ月後であった。

「むう、最近データの伸びが悪い。そろそろトレーニングと薬だけでは限界か。……やはり、当初の予定通り混ぜるしかないか」

その日、ロキは部屋を訪れるとテュールへ向かってこう言った。

「テュール。これから三日間フェンリルを実験室にて移す。お前はその間自由にしている」

「え、ど、どういう事ですか?」

「二度も言わせるな、時間が惜しい。さあ、共に来いフェンリル。お前に新たな力を与えてやろう」

主に従い“彼”は部屋を出た。ふと振り返ると、今にも泣き出しそうな顔をした“彼女”が見えた。

どうしてそんな顔をしているのか“彼”には理解できなかった。けれど、何故か。何故かわからないがその顔はよくないと思った。だからこの時、“彼”は初めて自ら“彼女”へと声をかけた。

「がう」

「ッ……!」

言葉は通じない。けれど、“彼女”は“彼”が「心配するな」と言ったような気がした。

「ふむ、フェンリルよ、ずいぶんあの女に気を許しているみたいだな」
「？」

「いや、何でもない。それよりもこの三日間、お前は苦しみと痛みの地獄を味わう事になる。だが、それを乗り越えればお前は新たな能力を得ることが出来るだろう。これから新しくお前と同じ幼体を作り出すのは少々面倒だ。死ぬな……とは言わんが精々生き延びてみせろよ」

静かに開く実験室の扉。そして、ロキと“彼”はその中へと消えていくのだった。

「ッ!? フェ、フェンリル!？」

そして三日後。“彼”は“彼女”の元へと戻ってきた。——その体を真っ赤な血に染めて。

「ロキ様、これは一体……!？」

「なに、実験中の些細な怪我さ」

「些細って、こんなに血が出てるじゃないですか！」

「だが生きている。そしてフェンリルは新たな力を得た。今回の実験は大成功だ！」

両手を広げ歓喜の声をあげるロキ。テュールはその目に狂気を感じ背筋を凍りついた。

「テュールよ。お前にもこいつの新たな力を見せてやろう。フェンリル！」

ロキの合図と共にフェンリルの背中が盛り上がったと思つた次の瞬間、太く強靱な触手が天井に向かって勢いよく伸びた。

「ハ、これは!？」

「今回行ったのは合成実験。フェンリルに他の生物の混ぜ、その特性を己が物にさせる。まあその際、元の生物もフェンリルを侵食しよう」と暴れまわるため、体がボロボロになるのは仕方が無いことではあるがな」

「ぐ、ぐゑん」

「ッ！ 止めてフェンリル！ もうわかった！ わかったからそれ以上無茶しな——きやあつ!?」

体をふらつかせた“彼”を見て慌てて駆け寄ろうとするテュールは、次の瞬間触手によって吹き飛ばされた。全身を強く壁に打ちつけられ、さらに触手に打たれた腕からは出血していた。

「制御は完全ではないか。これは調整の必要がありそうだ。テュール、フェンリルの手当てはするなよ。回復力の向上の為だ」

伝える事は伝えたと、ロキは部屋を出ていった。テュールは全身をめぐる痛みを涙を流しながら体を起こそうとした。そんな彼女へ近づくと影があった。

「フェン……リル……。よかった。元に戻ったのね」

背中から触手が消えていた。安堵する“彼女”の腕をジッと見つめていた“彼”はおずおずと顔を近づけ、やがて労わる様に腕を舐め始めた。

「くるる……」

「心配してくれるの？ ありがとう、フェンリル。でも私は大丈夫だよ」

そう言つて腕を上げるテュール。その傷が瞬く間にふさがっていった。

「凄いでしょ？ これが私が里を追われ……そしてロキ様に拾われた理由なんだ。あなたが暴れて怪我をしても簡単には死なない。だから私があなたのお世話係りに選ばれたんだよ」

“彼女”は微笑み、“彼”を優しく抱きしめた。

「だから、辛い時は甘えてね。イライラしたら私にぶつけていいから。私はねフェンリル。あなたの事が大好きだよ」

慈しむ様に“彼”を撫でるテュール。“彼”もまた抵抗せず、“彼女”へその身を預けた。

そしてこの日、彼等と一緒に暮らし始めてから初めて横に並んで眠りについたのだった。

翌日から、“彼”は“彼女”に心を開いたのか。ロキの呼び出し以外はずっと彼女の傍から離れなくなった。

「ロキ様にお問い合わせして作ったの。これで寝る時も暖かいよ」

ある日、手製のタオルケットをプレゼントした時の“彼”の喜びようは凄まじく、ロキに呼び出された時まで持つて行こうとするほどであった。

「がうー！」

「お帰りなさいフェンリル。今日の実験もお疲れ様」

「ぐるる」

嬉しそうに周りをグルグルする“彼”を見てテュールも笑顔を見せる。

「……そろそろ頃合か」

「ロキ様、何かおっしゃいましたか？」

「テュールよ。どうやらお前には新たな役目を任せる事になりそう
だ」

「え？」

「なに、案ずる事は無い。むしろお前とフェンリルにとって良い事だろうさ」

ロキは笑う。だが、それは“彼女”のものとは違い邪悪さに満ちていた。そしてこの一週間後、テュールは部屋から姿を消した。

「起きろフェンリル」

“彼女”が消えて数日。“彼”は“彼女”のタオルケットに身を包んだまま部屋の中でジツと横になっていた。そこへロキが訪ねてきたのだ。

「ぐるる……！」

「おやおや、ずいぶん不機嫌そうだな。彼女と離れ離れにされたのがそんなに不服だったのかな？」

「がうっ！」

「くく、これ以上煽って噛まれたくはないな。そろそろ本題に入ろうか」

ドアが開き、何者かが部屋へ入って来た。“彼”が主からそちらへ顔を向けると、そこには一頭の狼が立っていた。

「どうした。お前が会いたがっていた彼女だぞ？ もっと喜んだらど

うだ？」

主が何を言っているのか“彼”には理解できなかった。動かない“彼”に向かつてその狼は静かに近づいてきた。そして……。

——久しぶり。……なんて、数日しか離れてないんだけどね。

「ッ!？」

その言葉が聞き取れた瞬間、“彼”は理解した。目の前の存在が“彼女”なのだ。固まる“彼”を見て、ロキは喜色にまみれた表情を浮かべる。

「いずれ交配実験も行うつもりだった。だが、お前に相応しい番を用意するのに悩んでいたが……こうした方が手っ取り早いと思ってな。お前も嬉しいだろうフェンリル。こうして彼女がお前と同じ存在になったのだからな」

どうして、これでいいのか。“彼”は思った事をそのまま“彼女”に伝えた。同じ存在となった事で互いの思いを正確に伝えられるようになりはしたが、こんな形で意思疎通したいとは思わなかったのに。

——いいの。こうしてあなたとお話出来るようになったし、それに言ったでしょ。私、あなたの事が大好きだって。それこそ、あなたが他の子と仲良くするのを想像するだけで嫉妬しちゃうくらいにね。だから、ロキ様に人の姿を捨てるよう命じられても素直に頷けたんだから。

雄として“彼女”に求められている。……認めよう、自分もまた目の前の“彼女”を雌として求めている。“彼女”が納得しているならば、自分はただ受け入れるだけだ。

こうして、“彼”と“彼女”は一緒になった。二頭は愛を育み続け、そして……新たな命を授かった。

(不服だが)主により「スコル」「ハティ」と名づけられた娘達は、父母の愛情の下スクスクと成長した。この頃になると、ロキは実験でいい結果を出すと外出を許可するようになった。北欧の大地を元氣よく駆ける娘達を見ながら“彼女”と身を寄せ合うその瞬間が、“彼”にとってこの上なく幸せな時間となっていた。

スコルは何かを獲ってきては自慢するように“彼”と“彼女”に見せ、ハティは走り回っていたと思つたら急に眠りだしてこちらを慌てさせる。その性格の違いも“彼”は愛しくて仕方が無かつた。

——ずつと、こうしていられるといいね。

答えるかわりに“彼女”の頬を舐める。自分も同じ気持ちだつた。『家族』と共にこの幸せな時間をずつと過ごすことが出来たらと。

それが、叶わぬ夢となる事を、この時の彼は想像もしていなかつた。「フェンリル。このところ結果が芳しくないようだな」

結果の表示された画面を見ながらロキが“彼”を責める。

「よもお前、早く部屋へ戻るために適当に流しているわけではあるまいな」

「がう」

その言葉を否定する。むしろ逆だ。自分が手を抜けば主は“彼女”達に何かするかもしれない。目覚めたばかりの頃と比べ、“彼”は主への忠誠心が低下していた。それ以上に気にかける相手が出来たのだから仕方ないといえば仕方ないが。

「ちつ、まあいい。さつさと部屋に戻れ」

「ぐるぐる」

主を残し“彼”は部屋へ戻る。この時、もう少しゆつくり実験室を出ようとすれば、もしくはこれから起こる悲劇を食い止められたかもしれない。

「……子どもは作れた。そろそろ潮時か」

部屋に戻り、家族と共に眠りにつこうとしたその時、突然ロキが部屋へ入って来た。

「テュール。お前に最後の仕事をしてもらう時が来た。私について来い」

いきなり現れて“彼女”を連れて行こうとする主に“彼”は牙を剥き出しにし“彼女”を守ろうと前に出ようとしたが、それよりも先に“彼女”が一步踏み出した。

——落ち着いて。子ども達が怯えてるわ。

その言葉に我に帰る。見れば確かに娘達が不安そうに自分を見つ

めていた。

——大丈夫。私じゃ実験の役になんて立てないし、きつとすぐに戻ってこれるわ。だから子ども達のお世話お願いね。

安心させるように言い残し、“彼女”は主と共に出て行った。その日、“彼”は一睡もせず“彼女”が戻ってくるのを待ち続けた。

『フェンリル。お前だけで戦実室へ来い』

主は姿を見せず、声だけで“彼”に指示をだす。言われるままに娘達を残し示された場所へ向かう。

様々な相手と戦わされた戦実室。つい先日もここで空を飛ぶ魔獣二匹と戦わされたばかりだ。ここに呼ばれたという事はまた戦わされるという事か。

「ぐるぐる……い！」

てつきり“彼女”と会えると思っていた“彼”は怒りを隠そうともせずうなり声をあげる。そこへまたロキの声が届けられた。

『今から一匹の魔獣を投入する。お前はそれを仕留めろ。そうすればお前は彼女と会えるだろうさ』

“彼女”と会える！ その一言が“彼”の意思に火を点ける。何が出てこようがすぐさま殺して“彼女”の顔を見てやる。

『では、始めようか』

合図と共に戦実室の奥の床が競り上がる。そこから現れたのは四足歩行の醜い獣だった。恐らく様々な生物の因子が掛け合わされた実験用の魔獣だと“彼”は判断した。

「？」

魔獣と相対した瞬間、“彼”は違和感の様なものを感じた。しかし、それを確かめる前に魔獣が動き始めた。その動きも“彼”にはどこかちぐはぐに見えた。まるで自分の体をコントロール出来ていないような。そのような相手に負けるわけが無い。“彼”は冷静に突撃をかわし、相手が体勢を整えようとしている背後から触手を突き刺し、爪で切り裂き、その牙を突き立てた。

「~~~~~?!?!」

形容しがたい悲鳴をあげながら魔獣が倒れる。いよいよ“彼”の

中の違和感が大きさを増してきた。弱すぎる。こんな相手をあの主が用意するとは思えない。ならば、この魔獣には何か秘密があるに違いない。

警戒しつつ“彼”は魔獣に近づいた。そして、その目を見た瞬間全てを理解した。

なんという事だ！ 何故！ 何故気づけなかった！ この目は、この目の色は、自分を見つめるこの優しい目はまさしく“彼女”のものではないか!!!

「ほお、あの時とは違い今度は自分で気づいたか。成長したなあフェンリル」

“彼女”のこの姿は何だ!? 何故“彼女”と自分が戦わされた!?

何故!? 何故!? 何故!?

「その女は大いに役立ってくれた。だが、お前を腑抜けさせるとは一言も命じていない。実験により神殺しの力を得たお前には、ここいらで昔のお前に戻ってもらわねばならん。そう、私の命令に忠実な神殺しとしてな」

いつの間にかロキが室内にいたが、“彼”はそれに気づくことなく自らが空けた“彼女”の体の穴を塞ごうと必死に舐めた。それが何の意味も無いことを理解していても何かをせずにはいられなかった。

——フェンリル……。

か細い声で自分の名を呼ぶ“彼女”に“彼”は額をこすりつける。すまない。どうして。こんな事をするつもりではなかった。

——わかってる。あなたは優しい子だもの。ロキ様がね。私は邪魔だって。私がいるとあなたが強くなれないから消えてくれって。ふふ、私ね初めてロキ様に逆らっちゃった。そんなの嫌だ。あなた達ともっと一緒にいたいって。結局、見た事もない魔獣と混ぜられて体すら自由に動かせなくなっただけだね。元々の回復能力もあなたと一緒にになる為に捨てちゃったし。残念だけど、ここまでかなあ。

どんどん弱弱しくなっていく“彼女”の声。一言も聞き逃すまいと“彼”はひたすら集中した。

——私ね、幸せだったよ。里を追い出されて。生きる意味も見

失ってたけど、ロキ様に拾われて……あなたに出会えた。まさか、狼のお嫁さんになるとは思ってたけどね。それでも、子ども達も生まれて、みんなと一緒に出かけして……うん、本当に幸せだった。“彼女”はもう助からない。ロキならば何とかなるかもしれないが、この状況を作り出した元凶が助けてくれるとは思えない。それは“彼”も、そして“彼女”もわかっていた。

——フェンリル。最期をお願い聞いてくれないかな。

何だ!? 自分に来る事なら何でもする! 泣きそうな声でそう伝える“彼”に“彼女”は言った。

——私が死んだら、私の事食べてくれないかな。どうせ死ぬなら最後まであなたの為に死にたいの。それに、そうすれば私はずっとあなたと一緒にいられるから。

わかった、骨まで残さず全て自分の物にすると“彼”は約束した。

——ありがとう。あの子達の事もお願い。どうかロキ様から守ってあげて。

最後の力を振り絞り“彼女”は“彼”の頬へ手をやった。

——ずっと……ずっと愛してる……あなた……スコル……ハティ……。

力を失った手がゆっくりと床に落ちる。“彼女”は死んだ。自分が殺した。

“彼女”の亡骸に牙を突きたてる。その肉を食らい、骨を砕き、血をすする。もう、誰にも“彼女”を好き勝手にさせないために。

『し、失礼します……』

初めて出会った時、“彼女”は不安そうな表情をしていた。

『え、ええつと……私、頑張ってお世話するから、よろしくね、フェンリル』

頑張つて声をかけてくれた“彼女”を無視してしまった。

『ふふ、そんな風にうなつても駄目だよ。お肉ばかりじゃ栄養が偏っちゃうんだから大きくなれないよ。そうしたらロキ様にも怒られちゃうんだから』

緑色のアレは嫌いだったが、“彼女”の作ってくれたものは美味し

かった。

『だから、辛い時は甘えてね。イライラしたら私にぶつけていいから。私はねフェンリル。あなたの事が大好きだよ』

“彼女”の暖かさが好ましかった。

『ロキ様をお願いして作ったの。これで寝る時も暖かいよ』

“彼女”の匂いの染み付いた贈り物は今も大事に持っている。

『——いいの。こうしてあなたとお話出来るようになったし、それに言ったでしょ。私、あなたの事が大好きだって。それこそ、あなたが他の子と仲良くするのを想像するだけで嫉妬しちゃうくらいにね。だから、ロキ様に人の姿を捨てるよう命じられても素直に領けたんだから』

元の姿を捨ててまで自分を選んでくれた時は嬉しかった。

『——ずっと、こうしていられるといいね』

自分も同じ気持ちだった。

『——私ね、幸せだったよ。里を追い出されて。生きる意味も見失ってたけど、ロキ様に拾われて……あなたに出会えた。まさか、狼のお嫁さんになるとは思ってたけどね。それでも、子ども達も生まれて、みんなと一緒ににお出かけして……うん、本当に幸せだった』
それは自分の方だ。だって、自分は“彼女”に与えてもらうばかりだったから。

『——ずっと……ずっと愛してる……あなた……スコル……ハティ……』

自分も……いや、“彼女”の命を奪った自分にそれを言う資格はない。そんな“彼女”に自分が返せるものは……。

「食事は済んだか？ まあ元々食わせるつもりだったから命じる手間が省けたな」

“彼女”の全てを平らげた時、背後からロキが“彼”に声をかけた。ゆらりと起き上がった“彼”は振り向くと同時に凄まじい殺気をロキに叩き付けた。

コレは殺す！ 必ず殺す！ 何が何でも殺す！ 後の事など知った事ではない！ ここを出てあの大地で娘達と静かに暮らしてやる。

その為に殺す！ 絶対に殺してやる！

「アオオオオオオオオオオオオン!!!」

一撃さえ入れれば殺せる。“彼”が渾身の力を込めてロキへ襲いかろうとしたその刹那、“彼”の腹部に何かが撃ち込まれた。

「残念だったな。お前が私に反旗を翻す事も想定済みだ」

急速に襲い来る睡魔。“彼”に撃ち込まれたのは特性の麻醉弾だった。

「さて、この後は記憶消去……いや、それでは脳神経に余計な負担を与えるな。ならば封印しておくか。そうだな。死の間際でようやく思い出せるほどの強力なものを……な」

「ぐ、ぐるるる……」

「お休みフェンリル。次に目覚めた時、お前は私の最強の僕となっている。……ああ、心配せずとも娘達も一緒だから安心したまえ」

こうして“彼”の怒り、憎しみ、悲しみは封印された。愛する“彼女”の仇にいい様に扱われる恥辱の時を“彼”は過ごす事となった。それが恥辱である事すら思いだせぬまま……。

しかし、その封印は時を経て一人の青年によって解かれる事となる。ロキは打倒され、“彼”の新たな主となったのは“偉大なる者”。ロキの命で相對したその場で死を疑似体験する事により、“彼”はしばらくして封印された記憶を取り戻したのだ。

取り戻した記憶とこれまでの記憶を照らし合わせる中で、“彼”は娘達の変化に気づいた。亡き“彼女”が残した自分の宝物達から光が失われていた事に。

“彼女”がいなくなり、最初こそどこにいったのかしきりに聞いてきた娘達は、いつしかそれを口にする事はなくなった。おそらく彼女達ももう母が戻ってくる事はないと理解したのだろう。その頃から、娘達は笑わなくなった。

スコルは周りのもの全てを獲物に見立て、襲い掛かるようになってきた。これは、あの北欧の大地で獲ってきた獲物を母に褒められていた頃を追いかけているのかもしれない。

ハティは家族以外のあらゆるものに興味を抱かなくなってしまう

た。自分とスコルを通して母の幻影をひたすら求めているようだった。

そんな娘達が、光を、笑顔を失った娘達が“偉大なる者”とその家族と共に暮らす内に笑うようになった。“彼女”を失い、変わってしまった子ども達があ頃の二頭に戻ったのだ。それがどれほど、どれほど嬉しかった事か！ きつとこの気持ちは誰にも理解できないだろう。

ロキによつて奪われたものを“偉大なる者”が取り戻してくれた。ならば自分は今度こそ守ろう。娘達を取り戻してくれた“偉大なる者”を。そして、愛する娘達を……！

……

……

…

“彼”が……フェンリルが抱く怒りの正体。それは娘達が得た暖かな居場所へ手を出そうとした者達へ向けられたものだった。

《ひっ!?!》

フェンリルが一睨みするだけで周囲の死神達が数歩後ずさる。しかし、最早“彼”の中で死神達に対する慈悲は一欠けらも存在していなかった。

その体に様々な生物の因子を秘めるフェンリル。“彼”はある因子を目覚めさせようとしていた。それはロキによつて与えられたものではなく、《“彼”自らが取り込んだものだった》。

彼女の思いを戦いに利用したくない。けれど今だけは、娘の為に使う事を許してほしい。

四足歩行の状態からフェンリルが《立ち上がる》。前足の指が伸び、関節が生まれる。“彼女”から受け継いだ巨人の因子を発現させる事で“彼”はヒトに似た姿をとる事が可能となっていた。

「おいおい……マジかよ」

「驚愕」

第七十五話 凶兆

立ちほだかる死神達を前に、俺は今一度気持ちを整えるため深呼吸を行った。恐れは捨てた。躊躇いも必要ない。俺の大切な後輩を……日常を奪おうとしたこいつ等をただ全力でぶちのめしてやるだけだ。

『そうです。我慢する必要などありません。あなたの心を、あなたの怒りを縛る事など何者にも出来ない。全てはあなたの“自由”なのですから』

博士がこう言ってくれるんだ。それに、俺の勝手に付き合ってくれた黒歌達のためにも、やってやる！

「では……行きましようか」

目指すは目線のはるか先……神殿の最奥に位置する玉座っぽい場所にいるヤツの所だ。

《ツ！ 魔神が動くぞ！ 全員攻撃準備！ 何としてもハーデス様とサマエルの下まで行かせるな！》

『愚かな。“加護”とやらの力におぼれまともな戦力差も理解出来ないとは』

鎌を振り上げこちらを攻撃しようと一斉に向かってくる死神達。

「カテレアフラッシュュ！」

《うおっ!! 眩しっ!!》

背後からそんな叫び声が聞こえたと思ったら、死神達が一斉に目を押さえてその場に硬直した。え、何事!?

「下賤な死神共。このカテレア・レヴィアタンの前でフューリー様に近づけると思わない事ですね」

カメラを構えたカテレアさんがしてやったりといった顔で立っていた。え、今のつてもしかしてカメラのフラッシュュ? 閃光弾レベルじゃなかった?

「アンタ、それさっきアザゼルの所に置いてこなかったっけ?」

「やれやれ、これだから素人は。シャッターチャンスはいつくるかわかりませんのよ? その時一台しかカメラを持ってなくて、それが壊

何でわかるんですかと言いたくなかったが、博士なら知っててもおかしくないと納得してしまう自分がいる。

『ククク、あなたの心配はどうやら無用のものとなりそうですね。今の彼女達がこの程度の相手に遅れをとる事はないでしょう。これで心置きなく報復を行う事が出来ますね』

そう……ですね。でも、状況は常に把握しておきます。万が一の事……なんて絶対に嫌ですから。

『好きになさい。ところで、興味深い話が聞けました。どうやらこの神殿には秘密があるみたいです』

秘密？ いやその前にその話ってどこで聞いたんですか？

『先ほどフェンリルに吹き飛ばされた死神が口にしていました』

え、いや、結構距離ありましたけどどうやって……。

『ふっ……』

あ、これも“博士だから”パターンか。

『さて、その秘密を確かめるためにも、元凶の元へ急ぎましようか』
確かに、もたもたしていたら逃げられるかもしれないしな。迷っている時間は無いか。

鎧の胸部から駆動音がしたと思ったら、目の前に真っ暗な穴が開いた。シャルバを追いかける時にも使ったワームホール。目的地は当然……。

「やあ、先ほどぶりですね」

『オオオオオッ!?!』

いきなり俺が現れて驚いているのだろう。ヤツ……サマエルが不気味な声をあげながら不可解な動きをしている。

『案の定恐怖に支配されている様ですね。まあ、初めて狩る側から狩られる側に回ったのですから当然といえば当然ですが』

今になって気持ちが悪く感じられたか？ ……だからといって手加減してもらえと思うなよ。

何も考えずその面に思いつきり拳を叩き込んでやろうと構えた瞬間、右の方から強烈な何かを感じてその場から退避する。刹那、数瞬間まで立っていた場所を紫色の光が通り過ぎて行った。

《ファファファ。流石に今のは避けるか》

「……ああ、そういえばあなたがいましたか」

肉の無い右手をこちらに突き出したハーデス神がカタカタと骨を鳴らしながら姿を現した。まあ、サマエルの飼い主みたいなものらしいし当然といえば当然か。てか、今の光がサマエルを包んでるけど、まさかバリアのつもりか？

《認めよう騎士殿。貴殿は確かに人の身でありながら羽つきどもすら凌駕する力を持っているようだ。だが、これ以上この場所で人間にはしゃがれるのは迷惑だ。今すぐ配下共を連れて地上へ逃げ帰るのならばここで働いた狼藉については許してやるがどうかね？》

言い聞かせるように穏やかな口調でここから去る様に言うハーデス神。だが、今の俺にはわかる。その声に含まれているのは怒りと嘲りだけだと。

《それとも、まだ暴れたりないかな？ それならば今一度私の名を聞くがいい。我が名はハーデス。この冥府の、そして死神の王。所詮人である貴殿に死を馳走する方法などいくらでもあるのだ。望むのなら今この場で貴殿に永遠の安らぎを与えてやつてもよいがいかかな？》

つまり、お前を殺す手段なんかいくらでもあるんだよバーカって言ってるわけか……今さらだな。

「ククク……」

《……何がおかしい》

「いえ、この状況でまだそんなおめでたい事を言える余裕があるのだと感心しましてね。……私はその程度の脅しで帰るような中途半端な決意でここに来たわけではありません。自分が“痛み”を知らぬくせに他者には“痛み”を強いる。ハッキリ言いますよ、ハーデス神。私はあなたが……いや、死神という存在そのものが気に食わないのです」

《神を愚弄するか。人間の分際で》

「神を名乗れば私が大人しく従うとでも思いましたか？ 今の私は誰に何を言われようとも自分の選択を曲げるつもりはありません。そ

の道の前に立ちほだかるものは全て超えていく。ハーデス神、あなたも例外ではありません」

奪うしか、痛みを与える事しか知らないこいつ等に、奪われる者の痛みを思い知らせてやる。その想いは、その覚悟は絶対に揺るがない！

《……いいだろう。冥府の王を前によくぞそれだけの大言壮語を口に出来たものだ。褒美に私自らが貴様の魂を永遠にコキユートスへと封じてくれようぞ！》

ハーデス神の周囲から闇色の何かが噴き出し始めた。本気になった証拠だろうか。

『どうしますか？ あの障壁でしたら破壊は可能です。わざわざ相手をする必要もなさそうですが』

構いません。順番が入れ替わるだけです。

『ふっ、それでこそです。ではお手並み拝見といきましょうか』

ハーデス神から噴き出していた瘴気のような物が徐々に何かを形成し始めた。手に握られたそれは、死神達が持っていたものとは大きさも鋭さも、そして禍々しさも何もかもが違う鎌だった。

《我が鎌は“死”という概念が形となったもの。人間であれば触れるどころか近づくだけで命が蝕まれる。さて、貴様はどれだけ耐えられるかな》

「聞いてもいない事をベラベラとしゃべると碌な目に遭いませんよ」

《ほぎけ！ 今すぐその不遜な口を切り裂いてくれるわ！》

ハーデス神が鎌を振ると同時に黒い三日月型がこちらに向かつて飛んできたので肩のスラスターで滑るようにして回避する。見た目は重そうなネオ・ラフトクランズだが、実際は肩のスラスターと背中のブースターで縦横無尽に動き回れるのだ！ ……とはアガレスさんの談である。

「なるほど、斬撃を飛ばせるのですか」

《フアフアフア、驚いたかな？》

「いえ全く。私の後輩にこれと同じ事を出来る子がいますからね」

《口の減らぬ小僧だ！》

俺の答えが気に食わなかったのか次々に斬撃を飛ばしてくるハーデス神。それを避ける俺。動きが大振りだからまさしく“振りかぶり見て回避余裕でした”状態だな。

《おのれ。羽つきですらないくせに小ざかしく飛び回りおって》
「無限に広がる空間をただ直進するだけの弾を避けられないと思いましたが？ 攻撃とはこうするものです」

お返しとばかりにO・ワームスマツシャーを撃ち込む。真正面かつ低速で調節したそれをハーデス神は鎌で弾き飛ばす。

《おやおや、今のが攻撃のつもりか？ 止まって見えたぞ》
「ええ。あなたに受け止めてもらうのが目的でしたから」

《何？ ……ッ!》

刃の部分が緑色の結晶に包まれた鎌を見てハーデス神の眼窩の光が揺れる。手放すと同時に鎌全体が結晶に包まれ、数秒も経たずに呆気なく砕け散った。

「なるほど、威力はあれど頑強ではなかったようですね」

効果がなければもう数発撃ち込んでやろうと思ったけど、必要なかったな。

《……これで私の攻撃手段を奪ったつもりか？ だとしたらとんだ思い上がりだ》

ハーデス神の体から再び瘴気が発生したと思ったら、破壊したはずの鎌が傷一つ無い状態でその手に握られていた。

《言ったはずだ。この鎌は死そのものだと。死という概念そのものが消えない限りこの鎌も消える事はない》

つまり、いくら壊しても無限に復活するわけか。面倒だな。

《今度は直接その身を切り裂いてやろう!》

ふわりと浮き上がったと思ったらハーデス神が予想以上の速度で突っ込んできた。剣……は間に合わないか。だったら……これだ!

《ファッ!》

今のは笑ったのか？ それとも驚いたのか？

『驚いたのだと思いますよ。何せ……』

《ば、馬鹿な……。我が鎌を手で……!?!》

『人間のあなたが死神の鎌を普通に受け止めたのですから』

振り下ろされた鎌が、俺の両手の間でピタリと止まっている。白刃取りの要領でやってみたが何とかなかったな。

「ククク、私、刃物を素手で受け止めるのは得意でしてね」

もつとも、前のアレはおもちゃだったわけだが。……そういえば、あのクレイジー神父いま何やってんだろうな。

少しだけ昔を思い出しつつ、両手に力を込める。流石に本物の刃物だけあって以前のおもちゃに比べたら堅い気がしたが、壊す事自体は普通に出来た。柄だけになった鎌を持つハーデス神が初めてたじろいだ。

《貴様……貴様は何者だ……。本当に人間……なのか……》

何か声まで震えてる気がする。鎌を（素手で）壊されたのがそんなにショックだったのか。

「私は間違いなく人間ですよ。悪魔や墮天使の方々とは違い、羽もなければ寿命も短い。……出会いに恵まれたただの人です」

《嘘を吐くな！ ただの人間がこの鎌を素手で碎けるはずが、いやそれ以前に触れるはずが無い！ まさか、神器の力か！》

『動揺していますね。ちようどいい。今ならば漏らしてくれるかもしれませんね』

博士？ 今度は何を企んでるんですか？

『この神殿の秘密はやはり主に答えてもらうのが一番でしょう。すみませんがあなたの口から質問してもらってもよろしいですか？』

はあ。

というわけで、博士から質問内容を聞いた俺は早速それをハーデス神にぶつけた。

「そういえばハーデス神。この神殿は随分と悪趣……独特な感性の設計がなされていますね」

《何が言いたい》

「いえ、先ほどあなたの部下が面白い事をしゃべっていましたね。なんでも、この神殿が崩壊すれば”あの方”の封印が解けるとか」

《ツ!? 貴様、何故それを知っている!》

「ですから、あなたの部下から聞いたのですよ。その反応を見るに、どうやら本当のようですね。さて、彼等の言う“あの方”とは何者なのか、よければ教えてもらえませんかね」

《黙れ！ 貴様などに教える事など何一つないわ！》

「そうですか。では直接確かめ……」

「ってちよつと博士！ カンペに従ってしゃべってましたけど、直接調べてまさかこの神殿をぶっ壊せて事ですか!？」

『ええ』

ええ……じゃないですよ！ あの金ぴかの柱とか壊したらものすごい金が……。

『やれやれ。弱みを見つけたらすぐに突くのは戦いの基本ですよ。それに、払う必要の無い物の修繕費など気にしても仕方ないでしょう』
でも……。

『それに、これも彼等に痛みを知らせる手段の一つですよ。この神殿は死神達の心のよりどころとなっているようです。かけがえの無いものを理不尽に奪われる痛みを死神達に味わわせてあげようではありませんか』

痛み……。そうか。大切なものって何も命に関わるものだけじゃないのか。それにこいつ等は命を軽視しているし、こういった方向からの方が効果的と博士は言いたいんだな。

「……黒歌！ それに他のみなさんも聞いてください！」

俺は神殿内に響き渡るような声を張り上げた。

「今からこの神殿を破壊します！ 崩壊に巻き込まれぬよう急いで外に避難してください！ アザゼル先生達も一緒に脱出を！」

「にやにや!?! ご主人様何を……!?!」

「黙らっしやい猫娘！ ここはフューリー様の言う通りにすればいいのです！ さあここから出ますよ！」

黒歌達が動き始めるのを確認して、俺は神殿を破壊するべく行動を開始した。

《待て！ 神殿を破壊するだ?!? 許さぬ！ それだけは絶対に許さぬぞ!》

「別に許して頂かなくて結構です。ああ、あなた方も早く脱出したほうがいいですよ」

神殿内にそびえる十一本の柱。全てを倒せばこの神殿の構造上中心から崩壊すると博士は言った。

「まとめて片付けましょう。O・ワームスマツシャー！」

同時に発射した十の緑光がワームホールを通じて十本の柱に直撃した。派手な音を立てて崩壊していく柱達を一瞥し、俺は最後の一本に目を向けた。

「目と鼻の先ですし、これだけは手で壊しましょうか」

背中のブースターを点火させ、柱の上部まで一気に移動する。そこへ割り込んでくる一つの影。

《やらせん！ “彼女”の眠りだけは絶対に妨げさせはせんぞ！

やれ、サマエル！》

『おやおや、守っていたはずのサマエルを前に出すとは、よほど“彼女”を起こしたくないようですね』

ちようどいい。立ちふさがるのなら、その面に一発ぶち込んでやる

！

『オオオオオオオオオオ!!!』

唸りを上げて迫るサマエルの尾を掻い潜り、俺は握り締めた拳をサマエルの顔面に全力で叩き込んだ！

「はあああああああああ！」

そのままサマエルを柱にぶつけ、ブースターをさらに強くする。ヤツの体を中心に柱にヒビが入り始め。サマエルの顔が完全にめり込んだと思つた次の瞬間、最後の柱も砕け散った。

一瞬の静寂。けれどその数秒後、神殿は小さく揺れ始め、ついには巨大な振動と共に天井が崩れ始めた。

『さあ、私達も脱出しましょう』

俺は高度を上げ、天井の穴から脱出した。辺りを見渡すと、渴いた大地に人の姿が見える。……あ、フェンリルがいる。あそこにみんな揃ってるんだろうか。

そこから離れた位置にもかなりの規模の集団が確認できるがアレ

現れた巨大な異形。それはラ・ギアスと呼ばれる異世界にて邪神・破壊神と呼ばれる存在……サーヴァ・ヴォルクルスと瓜二つな姿をしていたのだった。

第七百七十六話 自分らしく誇らしく

サーヴァ・ヴォルクルス。地底世界、ラ・ギアスに存在した破壊神。長い間複数の封印がかけられていたがとある事件にてその封印が解かれ、最終的に完全に目覚めることになった。

その姿は子どもが見たらトラウマ確定なほど醜悪で、上半身と下半身はそれぞれ独立して行動出来たりする。肉片が一欠片あればそれから全身を復元して数を増やしたり、人間相手に暗示をかけて支配したりと滅茶苦茶な存在である。博士もヴォルクルスに目をつけてられた一人だったが、トンデモな方法で支配を抜け出し最終的に仲間達、そして因縁のあった“彼”と共にボコボコにして報復を完遂させた。というか、場合によってはお一人で倒しちゃうんだよな博士……。

ざっと思い出すとこのくらいかな。どうですかね博士。というか、アレって以前の皇帝機みたくにもしかしくなくても俺がこの世界に来た影響で生まれたんですかね？

『ええ、おおむね間違いありません。そして、あなたがおっしゃったように、あの邪神の紛い物はあなたという存在が生んだもので間違いないでしょう』

「馬鹿な、あの怪物がペルセポネ妃だというのか？」

そんな感じで博士と脳内会話をしている俺の耳に、愕然とした様子のサーゼクスさんの声が届いた。そういえば、ハーデス神も我が妻とか言ってたな。

『ギリシャ神話の女神の一柱ですね。花を咲かせ、また花に彩を与える権能を持つ女神で、ハーデスに見初められ彼の妻になりました。ペルセポネという名もハーデスに与えられた名で、元の名はコレーです』

流石博士。説明ありがとうございます。

「おいおい。ペルセポネつつつたら冥府の美花、死者の国の至宝とか言われるほどのすんげー美女神だぞ。俺もかつて一度しか姿を見た事ねえが、間違つてもあんな化け物なんかじゃなかったぞ」

「キミの言うとおりだアザゼル。だが、ある時を境にペルセポネ妃は

姿を消し、表舞台に現れる事は無くなったという。あの怪物と何か関係があるのか……?」

サーゼクスさんがポツリとこぼしたその言葉に対し、一番近い距離にいた死神が射殺さんばかりの目をこちらに向けてきた。肩が震えているのを見るに相当怒っているようだ。

《ふぎけるな！ 関係も何も、ペルセポネ様をあのような姿にしたのは貴様等だろうが!!》

「何……!?!」

「おい、どういう意味だそりゃ」

《魔王である貴様がしらばっくれるか！ どこまで……どこまでハーデス様とペルセポネ様を愚弄する気だ!》

《控えよ!》

最早我慢ならないとばかりに鎌を振り上げる死神達だったが、背後から近づいてきたハーデス神に一喝で動きを止める。

「ハーデス殿、そちらの彼が言った事は……ペルセポネ妃に何があったのですか?」

《今更説明せずとも全て承知のはずではないのかな?》

「知らねえから聞いてんだよ。まさか、『禍の団』の悪魔が何かしでかしたのか?」

《ふん、あんな木っ端共にしてやられる我等ではないわ。我が妻、ペルセポネがあのような姿へ変貌したのは、かつて冥府に堕ちて来た存在に飲み込まれた事が原因だ》

「飲み込まれた?」

《それは我等の前に堕ちて来た途端、周囲に漂っていた死者の魂、果ては神殿そのものを次々と吸収し始めたのだ。止めようとしたこちらの攻撃すらものともせずにな》

そして、いよいよハーデス神にその手が伸びようとした瞬間、身を挺して庇ってくれたのがペルセポネさんだった。ハーデス神の目の前で飲み込まれた彼女の最後の表情は……笑顔だったそう。

《女神である妻を取り込んだ事で、十分に力を蓄えたのだろう。肉の塊のようだったヤツは巨大化し、姿を変えた。それがアレ……」

リスの肉片”を核に、あらゆるものを飲み込み際限無く成長する。それがあの怪物の正体だ。あの時、ペルセポネを失った私の前に飄々と現れた羽つきが楽しそうに語ってくれたわ》

「“リリースの肉片”……おい、サーゼクス。んな悪趣味極まりないネーミングセンスのものを送りつけてかつ自らやらかした場所に見学に来る様なイカレ野郎なんざ一人しかいねえ気がするんだが」

「同感だ。最近目立った活動をしていないと思ったら裏でこの様な非道を働いていたとはな」

どうやらサーゼクスさんとアザゼル先生にはペルセポネさんをあんな風にした犯人に心当たりがあるみたいだ。

《冥府の王として、我はアレを消滅させるべきだった。我にはそれが可能だった。……だが、ペルセポネはどうなる。地上から連れ去った我を愛してくれ、不毛な大地が広がる冥府に花を咲かせ、我の、死神達の光となってくれた愛しき妻に何の罪がある！ だから我はアレを封印し、その上に神殿を移したのだ。それを、その封印を、貴様等が解いたのだ！》

「何故それを黙っていたのですか。相談……いえ、抗議という形でもよかったので伝えていただければ私達も……」

《貴様等羽つきなど信用できるか！》

……そうか、ハーデス神もまた大切な相手を理不尽に奪われた。痛み”を与えられた側だったのか。

『どうしました。まさか同情したのではありませんね？』

違いますよ。

博士の問いに俺は異を示す。むしろ余計腹が立つわ。つまりハーデス神は”痛み”を知った上でそれを他者に与えていたのだから。

罪？ お前等が命を奪った相手はみんな罪があつたつてののか？

愛しき？ 殺された人にも愛する、愛される相手がいたはずだぞ？

《……もうよい》

怒りから一変。諦めのこもったため息と共にハーデス神はヴォルクルスもどきへ顔を向けた。叫び声をあげてから今まで、ヴォルクルスもどきは特に動き出しそうな気配は無い。逆にそれが不気味では

あるが。

《もう封印は出来ん。アレはこのまま冥府の全てを飲み込むだろう。その次は貴様等だ羽根つき。冥界も天界も人間界も、全てはアレの餌に過ぎんのだからな》

「ハーデス殿。ペルセポネ妃と運命を共にする気ですか!?!」

《何故驚く? むしろ我の消滅は貴様等にとつては望むところであらう? さっさと去ね。まあ、逃げたところで無駄だろうがな。フアフアフア!》

ブチッ!

「神崎君?」

「おい、何を……?」

俺は無言でサーゼクスさん達の間を抜け、そのままハーデス神の前に立つ。そして、思いつきり顔面を殴りつけてやった。

《がっ?!?!》

《《《ハ、ハーデス様!》》》

もう無理。限界。これ以上こいつにしやべらせたくないわ。地面に転がるハーデス神の胸倉あたりの骨を掴んで持ち上げる。

《き、貴様! ハーデス様に何を!》

「——黙ってる」

《《ひっ……!》》

騒ぎ出す周囲を睨んで黙らせる。この時、プツンしていた俺は口調が戻っている事に気づいていなかった。

「殴られた気分はどうだ、ハーデス神。いや、卑怯者」

《《何……を……》》

「命を奪い続けてきたお前が、簡単に命を投げ出していいと思ってるのか。お前が死にたいと思っている」今”は、お前達に命を奪われたみんなが生きていたかった”今”なんだぞ。死んで楽になどさせん。お前は生きて責任を果たし続ける」

《《黙れ! 貴様に命について説教をされる理由は無い!》》

激昂し俺の腕を振り払おうとするハーデス神。その時、背後からアザゼル先生が何かを呟くように発した。

「……あるさ。この場でただ一人、フューリーにはその権利も理由もある」

《《どういう意味だ?》》

「ハーデスさんよ。アンタ、今までに失った部下の名前、全員覚えてるか? そいつらが最後に遺した言葉、一字一句覚えてるか?」

《《……》》

「そいつはな、全部覚えてんだぜ。かつていた世界で共に戦った者、戦いの中で失った者、そして……救えなかった者。味方も敵も関係無く、自分が関わった者達全てを、決して忘れる事無く今もその胸に刻み続けているんだぜ。ただ自分達はそういう存在だとしか答ええないあんた等とは命に対する想いがまるで違う」

……え、ナニソレ。僕、そんな事一言も言っていないんですけど!? はっ、まさかミリキヤス君!? ミリキヤス君なのか!? 俺、そんな某エレガントさんみたいな記憶力持ってないですけど!?

「わかるか? 今のアンタは死者をさらに冒瀆している。殴られるのも説教されるのも当然だ」

いや、今はそんな事どうでもいい。アザゼル先生の言うとおりで。けど、俺にはもう一つ、許せない事がある。

「ハーデス神。ペルセポネさんは死んだのか?」

《《……あの羽根つきは生きてはいるとは言っていた。だが、妻という“個”はすでに存在せず、アレを構成する“群”の一つになっているとも言っていたが》》

「ならば何故助けない。生きているのならば取り戻せるはずだ」

《《出来るのならばやっておるわ! だが、今言った通り、ペルセポネという“個”は既に存在しないのだ! 存在しないものをどうやって助けろというのだ!》》

それこそ、当時のサーゼクスさんに相談すればよかったんだ。それが無理なら他にも相談する相手はいただろう。

「本当にペルセポネさんを助けたかったら手段なんか選んでる場合じゃなかった。お前は結局、ペルセポネさんへの愛より自分のプライドを優先させたただけだ」

《ツ……!》

俺は当時の事を何も知らない部外者だ。だからこれもただ自分の考えを押し付けているだけ。それでも言わずにはいられない。俺と違ってハーデス神にはまだ取り戻せる可能性があるのだから。

そうだ。まだ間に合う。彼女の命が消えていないのなら、救えるのだ。

『……助けるのですか？ あなたに“痛み”を与えようとした報復相手のために』

違いますよ。間違ってもハーデス神のためなんかじゃありません。とりあえず後でもう一発殴ろうと思ってますし。

『では、何故ですか？』

だって……ペルセポネさんは今回の報復に関係ないじゃないですか。俺はこいつ等とは違います。俺は、目の前の命を諦めたくない。“傷み”の広がりや黙って見ているつもりはない！

『……やれやれ。ここまで徹底していると最早尊敬の域ですね。いいでしょう。元よりあなたの行動を咎めるつもりはありません。あなたはあなたの自由になさい。それに、誰もが助けられなかった彼女をいきなり現れたあなたが助け出す……自分達の無力さを思い知らせるという意味ではこれも報復になりますね』

いや、そんな事欠片も思ってますからね!?

『冗談ですよ。それで、助けると言いますが方法はあるのですか？』

要はあのヴォルクルスもどきからペルセポネさんを切り離せばいいわけですよ。だったら『復活』を使って“群”から“個”に戻して助け出せばいけると思ってますけど。

例えるならあのヴォルクルスもどきはぐちゃぐちゃに混ざり合った絵の具だ。その中からペルセポネさんという色だけを取り出す。俺にはそれが出来るはずだ。

考えを伝えると、博士は関心したような声色で答えてくれた。

『ククク。こと“助ける”という事に関してのあなたの頭の回転の良さは目を見張るものがありますね。てつきり私に案を求めてくると思っていたのですが』

じゃあ。

『それで大丈夫でしょう。残す問題はアレの動きを止める事ですね。今は大人しいですがもう数分もかからず動き出すと思われれます』

それこそ大丈夫です。俺には頼りになるみんながいますから。

「黒歌。それにななさん。ペルセポネさんを助けるために力を貸してもらえませんか」

第一百七十七話 同じ意志の下で

イツセイSIDE

神崎先輩のカッコいい詠唱から墮天使の皆さんのパワーアップ。かと思ったらフェンリルがヒトみたいな姿になり、最終的に神殿がぶっ壊れて中からとんでもない怪物が現れた。しかもあの怪物の中にハーデスの奥さんが飲み込まれてるらしいし、その原因が三陣営の何者かともう情報量が多すぎて頭が追いつかねえ。

ただ一つわかってる事は、あの化物は放っておけばいずれ冥界に現れる事。つまり、冥府で何とかイツを倒すしかないって事だ。

『黒歌。それにみなさん。ペルセポネさんを助けるために力を貸してもらえませんか』

しかも先輩、あの状況の中でハーデスの奥さんを助け出そうとしてみたいだ。うん、怒ってもらえた身として言うべきじゃないけど、やっぱり先輩には報復なんて物騒なものより、ああやって誰かに手を差し伸べている姿のほうが似合ってるよな。

『まあ、ご主人様ならそういうと思うってたにや』

『私も力を貸そう。アレを放っておくわけにはいかない』

『しゃーねーな。助けりや女神のキスでももらえりやいいが』

『この状況で一人何もしないわけにもいきませんからね。俺も手伝いますよ』

先輩の眷属達にサーゼクス様、アザゼル先生と初めて見る男の人も先輩に力を貸すみたいだ。

《き、貴様等、何をするつもりだ……!?!?》

『既に諦めたあなたには何の関係もないでしょう?』

詰め寄ろうとするハーデスを無視し、先輩は怪物へ目を向ける。

『みなさん、私はあの怪物によく似た存在を知っています』

先輩曰く、あの怪物はサーヴァ・ヴォルクルスという邪神にそっくりだという。てか邪神って……そんな存在とも戦ったんですか先輩

……。

『能力までそのまま同じかどうかはわかりませんが、アレは上半身と

下半身が分離します。さらに肉片一つから全身を再生するほどの回復力をもっています』

『つまり、下手な攻撃は逆効果だと?』

『いえ、絶えず攻撃を続ければそれほど問題はないでしょう。ですが……そうですね……兵藤君やサイラオーグさん達がいればさらに効率はよくなるでしょう。彼等の一撃の強さは折り紙つきですからね』
「……リアス、シトリー、何とか神崎殿の元へ向かう方法はないだろうか?」

腕を組み、ビジョンを見上げていたサイラオーグさんが静かに口を開いた。……よく見たら闘気が全身を覆っている。すげえやる気だよこの人!

「サイラオーグ?」

「まさか、行くつもりですか?」

「神崎殿直々のご指名だぞ。それに、あの怪物は冥界に仇なす者。ならば全力で『獅子王の戦斧』の力を振るえるではないか。何より……俺が憧れる英雄と肩を並べて戦える機会を逃してたまるものか!」

凄まじい熱の込められた声量でサイラオーグさんが吼える。……うん、わかる。その気持ちすっげえわかりますよサイラオーグさん。
「行きましよう部長!」

「イツセー君!」

「絶えず攻撃しないとイケないなら、人手が多いほうがいいに決まっている! 木場! お前だって自慢の速さを存分に発揮出来る機会じゃねえか! これが最後の戦いだ! 勝って先輩と一緒に帰ろうぜ!」

心が、体が訴えてくる。行けと! 戦えと!

木場の目に、いや、ゼノヴィアやイリナ達の目にも炎が宿る。みんな気持ちは一緒なんだ。あの場の乗り込んで先輩と一緒に戦いたって!

「……そうね。もう、見ているだけなのも、置いていかれるのもこりこりだわ。彼がいなくならないように傍で見張っておかなくちゃ!」
「部長!」

「けれど、現実問題、どうやってあそこまで行けばいいかしら。ソナ、何か方法は？」

「冥府への転移ですか……」

頭を悩ませる会長。そこへ意外な人物が声をあげた。

「……方法なら、ある」

「曹操？」

「サマエルを呼び出した魔法陣を逆に利用すればいい。そうすれば冥府まですぐに跳べるはずだ。その場合、俺も同行させてもらうがなるほど、冥府から呼び出したって事は繋がってるって事だもんな。けど……」

「信用出来るか。テメエ、今度は何をたくらんでやがる」

提案者がコイツな時点で怪しさ満点だ。俺の問いに、曹操は自嘲するような笑みを見せながら答えた。

「そうだな……。あの時の弁解がしたいのか、どうして転移から助けてくれたのか。話したい事、聞きたい事はたくさんあるが……。いや、そんなものはいい。ただ……神崎君に会いたい。彼の顔が見たいんだ」

／ホモオ……／

「ッ……!?!」

「どうしたんだいイツセー君？」

「今そこに四足歩行の変な生き物が……」

「生き物？」

「いや、何でもない」

止めどころ。追求したらやばそうだわ。

「どうしますリアス？」

「今から方法を探るもの時間がかかるわ。曹操の提案に乗るしかないわね」

「いいのか？」

「上手く言えないけど、リョーマの事に関して言えばこの男は信用できる気がするのよ」

「……感謝する」

「してもらわなくて結構よ。それで、私達はどうすればいいの」

「ああ、今からゲオルクが魔法陣を展開する。キミ達はその中心に立っているだけでいい」

「勝手に決めるな曹操！ 俺は……」

「頼むよゲオルク。これが最期のお願いだ」

「ッ！ 曹操、死ぬつもりか!?!」

「それだけの事をしたんだ。そうなるならば黙って受け入れるよ。英雄派のみんなを頼んだぞ。お前なら俺よりよっぽど上手くあいつ等を導けるはずだ」

「そんな事……! いや、もう止めても無駄なんだな」

「霸道ではなく外道。その道を選んでしまった時点でこうなる事は必然だったのかもしれないな」

それ以上語る事無く、曹操はその場から離れ、ゲオルクは魔法陣の準備を始めた。

「ソーナ、後はお願ひね。それと、ギヤスパを預かっていて欲しいのだけれど」

「ええ、任せてください。それと、代わりにサジをあなた達につけま
す」

「会長!?!」

「あなたも行きたいのでしょうか？ こちらの事は私達に任せなさい。
シトリー眷属の力、存分に発揮してくるのですよ?」

「ッ~~~~~! はい！ 任せてください!」

「準備出来たぞ。座標はフューリーの所に指定しておいたからな」

地面に広がる巨大な魔法陣、その中心に立つのは俺達グレモリー眷属にサイラオーグさん。そしてイリナと匙にロスヴァイセ先生。最後に曹操だ。

「(先輩、今行きますからね!)」

「跳ばすぞ!」

ゲオルクの合図と共に、周囲の景色がぶれ始める。そして次の瞬間、俺達の目の前に神崎先輩達が立っていた。

「先輩!」

イツセイSIDE OUT

IN SIDE

「先輩！」

うおう!?! ひ、兵藤君……だけじゃねえ!?! リアスに朱乃、サイラオーグさんや匙君……ファツ!?! そこにいるのは曹操さん!? 曹操さんじゃないか!?!

「お前等、どうしてここに!?!」

「こちらの状況は全て把握しているわ。今すぐリョーマを抱きしめたいけれど、それはあの怪物を止めてから存分にさせてもらおうわね」

「何故? まさか……カテレア、キミか?」

「ああ、さつきあなた達にお願いした撮影映像を見たんでしよう」

え、撮影って何の話!?!

「神崎殿。貴殿と並んで戦えると思うと血が沸き、肉が踊る。俺の力、存分に使ってもらいたい!」

「そうね。あの邪神についてあなたが一番詳しいんだし、ここはあなたに指示してもらおうのが一番よさそうね」

気づけばみんなが期待に満ちた瞳で俺を見つめていた。え、何これ。これだけの人数に俺が指示するの!?!

「フフ、魔王になってから誰かに命令されるのも久しぶりだね。神崎君、どのような指揮をしてくれるか楽しみだ」

「俺も普段部下に指示してばかりだからな、たまにやされるのも悪くねえか」

ひええ! サージェクスさんやアザゼル先生までそのつもりになってる!?!

「リョーマ、今はあなたが私達の“王”よ。私達はあなたを信じる。だからあなたは私達を導いて頂戴」

『ククク、これは責任重大ですねえ』

すうー……はあー……（クソデカ深呼吸）

……よし、こうなったらもうやるしかねえ。俺の持つ力の全てを使ってこの場にいるみんなを守りきって見せるぞ。

さて、そうなるかと最後に気になるのは曹操さんだ。兵藤君達と一緒に来たという事はこの人も力を貸してくれると思っただろうか。

視線を向けると、曹操さんは気まずそうな顔で近づいてきた。

「神崎君、俺は……」

「曹操さん。あなたも戦力としてカウントさせてもらっていいんですか？」

そう尋ねると、曹操さんは目を丸くした。そして震える声で俺に聞いてきた。

「俺を……信じてくれるのか？」

「兵藤君達と一緒に来たという事はそういう事なのでしょう？ それとも違うんですか？」

「いや……いや、そんな事はない。俺も手を貸すよ。キミの為に」

「ありがとうございます。ただ、あまり無理はしないでくださいね」
さて、そうなるかどうかという作戦を立てるべきか。

S I D E O U T

曹操 S I D E

魔王やりアス・グレモリー達が神崎君と話をしている。その輪の外から俺はその様子を見ていた。俺は彼の仲間ではない、ただ彼に会いに来た部外者なのだから。

ふと、神崎君がこちらを向いてきた。心臓が鼓動を早める。彼は何を言うのだろうか。罵倒か、皮肉か、それとも言葉ではなく刃を向けてくるか。それだけの事を俺はやったのだ。

「曹操さん。あなたも戦力としてカウントさせてもらっていいんですか？」

ただ淡々とそう確認してきた彼の目には怒りも憎しみもなかった。だからこそ、その問いに答える声が震えてしまった。

「俺を……信じてくれるのか？」

キミをだまし討ちしてしまった俺が。ただ助けられるしかなかった俺が、キミと共に戦ってもいいのか？

「兵藤君達と一緒に来たという事はそういう事なのでしょう？ それとも違うんですか？」

——その信頼は兵藤一誠を通してのもの。俺自身はまだ信じてもらっていないのだろう。だが……。

「いや……いや、そんな事はない。俺も手を貸すよ。キミの為に」

十分、それで十分だ。なら、俺はキミの為に戦おう。この場にいる誰でもない、神崎亮真という“英雄”のために。

曹操SIDE OUT

『超獣鬼』が倒され、残された魔獣達もほぼ全てが討伐され、冥界にもようやく落ち着きを取り戻されて来た。避難していた者達もまたテレビからの情報に安堵の息を漏らす。

「よかった。もう少しで家に帰れそうだ」

「これも魔王様方が懸命に戦ってくださったおかげだな」

その時、突如としてテレビ画面が大きく乱れ始めた。それが落ち着いた時には映っていたのは先ほどまでのリポーターではなく、見知らぬ蒼装束の女性だった。

「何だ？ 何が起きたんだ」

「しっ！ 何か話すぞ」

『ごきげんよう皆様。突然ですが、現在冥界の全ての電波をジャックさせて頂きました』

「電波ジャック!?!」

『ですが、私達は皆様に害をなすつもりはございません。私達の目的はただ一つ。今、こうしている間にも私達の為に戦っているお方のお姿を皆様にも見て頂きたかったのです』

女性がそういうと同時に映像が切り替わる。そこに映っていたのは見た事もないような醜悪な怪物の姿だった。先ほど倒された『超獣鬼』と同等。もしくはそれ以上の存在に見えた。その姿を見てしまった子ども達の何人かが泣き始めてしまう。

『この怪物はいずれ冥界に迫ってきます。ですが、皆様。決して希望を失わないでください。何故ならば、既にあの怪物の元へあのお方が

いるのです』

さらに画面が切り替わる。そこに映った人物達の姿に悪魔達の顔が綻ぶ。

「フューリー?」

「フューリーだ!」

「騎士様がいるわ! あの方ならきつとあの怪物をやっつけてくれるわ!」

「それだけじゃねえ! 見ろ! サーゼクス様もいらっしやるぞ!」

「ママ! ママ! せきりゅーてーがいるよ!」

「サイラオーグの兄貴がいるぞ!」

怪物に立ち向かおうとする勇者達の姿に歓声すら上がり始める。魔獣とは違う新たななる脅威も、きつと彼等なら勝てる。それは確信であった。

そんな中、とある男性悪魔はふと思った。年齢も立場も、種族すらもバラバラな者達が、ある一人の青年の下、力を合わせ巨悪に立ち向かう。そんな伝説 をつい最近知ったばかりじゃないかと。

「……鋼の救世主」

その眩きは瞬く間に伝染していく。やがて、その映像を見ていた全ての者達の意識が一つとなる。

蘇る伝説。自分達はその瞬間に立ち会っているのだと。

第百七十八話 なりたい自分になっただい

イツセイSIDE

「さて、ではペルセポネさんを助け出すにあたっての作戦ですが……」
円状に並んだ俺達をぐるりと見渡しながらか、先輩がハーデスの奥さん救出の為の作戦を俺達に説明し始めようとした……その時。

「ツ！ リヨーマ、邪神が！」

部長の声に目を遣ると、邪神がその巨大な翼をゆつくりと動かし始めてるのが見えた。野郎、まさか冥界に行くつもりか！

「……やれやれ。まだ話の途中なのでですから大人しくしておきなさい」

不機嫌そうな声と共に先輩が邪神に視線を向けたその瞬間——
邪神の体が縫い付けられたかのように動かなくなってしまった。

——アアアアアアアアアアアア!!

怒りとも悲鳴ともとれる声をあげながら邪神がもがこうとするが、その体は微動だにしない。……何やったんすか先輩……。

「か、神崎君、何をしたんだい？」

「好き勝手動かれても鬱陶しいので……アレの周りの重力を操作して動けなくしました」

サーゼクス様の質問にこともなげに答える先輩に何人かの顔が引きつった。重力かー、先輩、とうとうそんなモンまで支配下に置いちゃったんですねー。凄いなー。

「さて、では改めて説明しましょう。と言つても、内容自体はとてもシンプルです。あの邪神の中に混ざってしまったペルセポネさんという「個」を私の力で戻し救出します。その為には邪神に突撃しなければなりません」

「なるほど。俺達は神崎殿がヤツに接近出来るよう援護すればいいのだな」

「ええ。その後、残った邪神を全力で攻撃し打ち倒す。一切の容赦無く。肉片の一つもこの世に残さぬように……ね」

「フューリー。俺達の配置はどうすんだ？ それと、救出と殲滅でメ

ンバーを分けたりしねえのか？」

「いえ、皆さんには最初から全員で援護をお願いします。私の予想通りなら、アレには自己再生。自己増殖の力があるはずですから」

試してみてください……。先輩はそう言っただけで邪神に右手をかぎす。

「O・ワームスマツシャー」

——刹那、邪神の右腕が緑色の光線に飲み込まれる。撃ち抜かれた腕が地面に向かってゆっくりと落下していく中、変化が始まった。「うげっ!？」

「醜悪ですわね」

右腕が不気味な鳴動を起こしたと思った矢先、そこから邪神に瓜二つの存在が次々と生まれ始めた。大きさ自体は大したことないが、とにかく数が多い。百や二百じゃききそうにねえ。

「あれが自己増殖か……。厄介だな」

「うん。それに見なよ。落とされたはずの右腕が再生を始めている」なるほど。確かに厄介だな。けど、それだけだ。

「なんだ、全部ぶつとばしやいいだけの話じゃねえか」

俺がそう言うと、なぜかみんなポカンとした顔になった。けれどそれは一瞬で、数秒も経たずにみんな声を上げて笑い始めた。

「な、なんすかみんなして?」

「う、ううん。違うのよイツセー。ただ、あなたの言うとおりでなっただけ」

よほど可笑しかったのか、部長は目じりに浮かんだ涙を拭いながら謝罪してきた。

「いつも通り」

「うん、そうだね。僕達らしいや」

小猫ちゃんや木場までそんな風に言いやがって。それじゃまるで俺がいつも考えなしに突撃してるヤツみてえじゃねえか。

「ふっ、やはりお前とは気が合うな兵藤一誠。ならば、どちらがより神崎殿に貢献できるか一勝負してみるか」

サイラオーグさんが闘志むき出しの笑みで誘ってきたので頷く。続けて、俺はもう一人のライバルに目を向けた。いい機会だし、前回

のリベンジといくか。

「匙、お前も加われよ。今度は負けねえからな」

「はあつ!? ざけんな! お前とサイラオーグ・バアルの化け物対決に俺が入れるわけねえだろうが!」

「実力の差がありすぎるわ! と憤慨する匙。何言っつんだコイツ? 俺はお前に負けたし、京都でも大暴れしてたお前だつて十分化け物じゃない!」

「それは謙遜が過ぎるのではないですか、匙君」

「ツッコんでやろうかと口を開こうとしたら神崎先輩が不思議そうに匙に尋ねた。対する匙も首を傾げる。

「修学旅行の後、支取さんから聞きましたよ。京都では随分と活躍したそうじゃないですか」

「え、あ、ええつと……」

「そして、彼女はただ一人あなたを援軍として送ってくれた。それはつまり、匙君が最大戦力であるからにほかなりません。その実力……頼りにさせてもらいますよ」

——頼りにさせてもらいますよ↑激励

——頼りにさせてもらいますよ↑激励

——頼りにさせてもらいますよ↑激励

(あ、多分いま頭の中でリフレインスさせてんなコイツ……)

それにしても先輩はホントに、必要な時に必要な言葉をかけてくれるよな。……これがモテる秘訣か。そうなのか。

「……しやああああああ!!! 任せてくださいよ先輩! 先輩の邪魔する奴らはこの俺の『龍王変化』でぶちのめしてやりますよお! 兵藤やサイラオーグ・バアルに負けてたまるかああああああ!!!」

「吠えたな匙元士郎。お前の実力には目を見張るものがあるが、負けるつもりはない。冥界を守るため、『獅子王の剛皮』の全てを以てこの戦いに臨ませてもらうおう!」

「へへ、俺だつて見せてやるぜ! 完成した『覇龍』の力を!」

天に向かつて吠える匙。拳を合わせながら宣言するサイラオーグ

さん。そんな二人に負けないよう、俺も気合いを入れる！

「……お前達だけで盛り上がりたらないでもらおうか」

「『騎士』として、『剣士』として、僕も負けるつもりはないよ」

「……頑張ります」

ゼノヴィアに木場に小猫ちゃん。それどころか気づけば、武器持ち組、体術組が揃って俺達を取り囲んでいた。皆ギラギラとした目をしてすぐにでも暴れたらいつて全身で表現している。

「おーおー、熱血してんな若人よ」

「はは、実に頼もしいじゃないか。ならば、大人として、彼等のサポートを務めさせてもらおうか」

「そうだな。よし、ならイツセー達は地上から、俺達は上空から攻めるか。リアスや朱乃達はこっちについて来い」

「そうね。私はどちらかというと遠距離の方が得意だし。リョーマ、それでいいかしら」

「ええ、お願いします。……さて、最後に曹操さんの配置ですが、あなたは後方支援を……」

「いや、俺も前線に出させて欲しい」

一人輪の外にいた曹操がようやく一言発した。聖槍を持つその表情は悲壮な覚悟に満ちていうように見えた。

「ですが、あなたは……」

「そうだな。聖槍なんて持つてはいるが、俺はただの弱っちい人間だ。……だが、卑怯で、間抜けで、無能。そんな救いようなない愚かな男にはキミに償う方法がこれしか思いつかないんだ。……なんなら捨て駒にしてくれていい。聖槍の力を全開で解き放てばヤツにかなりダメージを与えられるはずだ。俺の命で少しでもキミの役に立てるのなら……死んでも構わないよ」

ひたすら自分で自分を貶し続ける曹操。同情する気なんてこれっぽっちもない。……けど、こんな痛々しい姿の人間を見てざまあみろなんて言える気もしない。

だけど、今の言葉でやっぱりコイツは先輩の事を何もわかってないって思った。先輩の過去を、先輩の想いを理解していたら間違っ

もそんな言葉を使えるはずがないんだから。

「……わかりました」

「では……」

「あなたは絶対に前線に出しません。拘束してでも私の傍にいてもらいます」

ま、そりやそうなるよな。冷たく言う先輩に、曹操は愕然となっていた。

「な、なぜだ!? まさか、俺が兵藤一誠達を騙し討ちするとでも思っているのか!? ……確かに、確かに俺はキミに対してそう思われても仕方ない所業に及んでしまった! 霸道は何だと偉そうに語っておきながら、俺はキミを! だからこそ、俺はキミに償いを……!」

「——本当にそれがお前のやりたい事なのか?」

反射的にそんな言葉が口から出てきた。

「な……に……?」

「お前は霸道ってヤツにこだわってるけど、それは過去の曹操を追いかけてるからだろ。ならお前は、今の曹操が本当になりたかったものって何なんだよ」

「何を……過去だろうと今だろうと俺は霸道を歩むものとして……」

「嘘だね」

そう断言してやると、曹操は怒りを隠そうともせず俺を睨みつけてきた。

「キミに……お前に何がわかる!」

「わかるさ。だってお前……俺と一緒にだもん」

「え……?」

お前が先輩に向ける目。眩しくてたまらないけど、それでも見つめずには、追わずにはいられない。自分なんかじゃ……なんて何度も思いながらも、絶対に見失いたくない。憧れ”を見つめるその目。……お前が本当に目指したかったのは英雄や霸道なんて仰々しいものなんかじゃない。お前が、今の曹操がなりたかったのは……。

「……すみません、先輩。俺がぼっちで見張ってますから、曹操を前線に出してやってくれませんか?」

「イツセー?」

怪訝な様子部長達の前で頭を下げる。すると先輩はため息と共にゆっくりと頷いた。

「……やれやれ。そんな目をされては断れないではないですか。わかりました。兵藤君、彼が無茶しない様に守ってあげてください」

「ありがとうございます!」

「ま、待ってくれ神崎君! 俺は……!」

「曹操さん。兵藤君があなたに言った事は、私が以前からあなたに言いたかった事でもあるんですよ?」

「キミが……?」

食い下がろうとした曹操がピタリと動きを止める。コイツ、先輩の前限定で素直すぎだろ。まるで犬だわ。

「私にはあなたの過去や事情を推し量る事は出来ません。ですが、あなたの居場所にそちら側が相応しくないというのは断言できますよ。今一度、あなたの想いを振り返ってみなさい」

「俺の……居場所」

「そもそも、あなたの言う償いが私には身に覚えがありません。……それでも、あなたがそれを望むというのならば……生きてください。生きて、あなたが本当になりたかったものになってください」

「俺に……生きて。キミが俺にそう言ってくれるのか……」

「当然です。私は目の前で仲間を死なせるつもりはありませんからね」

「ッ……!?!」

「……話はまとまったみたいだな」

「ええ、お待たせしました。ではみなさん。そろそろアレの重力を解きます。準備はよろしいですね」

「もちろんです! みんな、絶対に勝って帰るぜ!」

「」「おうっ!」「」

「おー」

……あるえ? おかしいな。今みんなの掛け声にワンテンポ遅れて聞こえないはずの声が聞こえてきたような……。

「あ、あなた……オーフィス!」

先輩の眷属さんが指さす場所、そこには確かにオーフィスがいた。おおい! ついてきちゃってるよこの無限さん!?

「な、何でここに!? 気配をまるで感じなかったのに」

「我、アレに隠れてついてきた」

オーフィスの目線の先には、何の変哲もない段ボールが置かれていた。は? まさかあんなもんで完全に気配遮断してたつてののか?

「ミッテルトのゲームで学んだ。アレは隠れれば絶対に見つからない最強の迷彩」

「ミ・ツ・テ・ル・トオオオオオオオオ!!」

「ひいいっ!? ウ、ウチのせいっスかあ!」

「神出鬼没な『無限の龍神』……う、お腹が……」

「よお、歓迎するぜ新入り」サーゼクス

「アザゼル先生の顔がかつてないほどの輝きを見せている。……今のどこにそんな要素が……」

「……オーフィスちゃん。あなたは私と一緒にいなさい。では、今度こそ行きますよ」

冥府を舞台にした決戦。その始まりは何とも締まらないものとなってしまうのだった。

イツセーSIDE OUT

曹操SIDE

「遅い!」

分身体の腹に聖槍が深々と突き刺さる。抜くと同時におぞましい体液を吹き出しながら分身体が崩れ落ちる。こいつ等、一体一体の動きは鈍重で耐久力も低くそこまで脅威ではないが……。

「やはり、問題は数か……!」

背後から迫る新たな分身体を振り向きざまに薙ぎ払う。囲まれないうよう絶えず移動しながら周囲を見渡す。

「おらあああああ!!」

「ぬうんっ!」

「どけえええええ!!」

兵藤一誠、サイラオーグ・バアル、匙元士郎。この場において上位の実力を持つ者達が次々と分身体達を屠っていく。

「そこよー、『滅殺の雨』!」

「雷光よ、我が敵を貫きなさい!」

上空を見上げれば、リアス・グレモリーを始めとした面々が魔力による強力な広範囲攻撃を絶えず放ち続け、兵藤一誠達地上班の援護を続けている。

「おら!、そこ撃ち漏らしがあるぞ!」

「私がフォローしよう」

そして、堕天使総督と魔王が地上、上空全てに目を向けながらその実力を存分に発揮していた。皆の想いはただ一つ。彼を……神崎君を邪神の元へ向かわせる事。所属も立場も違う者達が、たった一人の人間のために戦い続けている。

——本当にそれがお前のやりたい事なのか？

——今一度、あなたの想いを振り返ってみなさい。

ひたすら槍をふるいながらも、頭の中では兵藤一誠と神崎君の言葉が繰り返される。

……俺のやりたい事。

……過去の英雄をなぞるのではなく今の俺がなりたかったもの。

……俺の……俺の本当の想い……。

(俺は、人間として超常の存在に挑む)

『どうして?』

(人間を見下し、ふんぞり返っている連中が気に食わない)

『何故?』

(だから、同じ境遇の者達を集めて彼等を導きたかった)

『そんな義理は無いのに?』

これまで抱いて来た想いとそれに対する疑問が浮かんでは消えていく。

——今の曹操が本当になりたかったものって何なんだよ。

——生きて、あなたが本当になりたかったものになってください

い。

(俺の、俺が目指したかったのは……)

「曹操!」

「ッ!」

もう少しで答えが掴めそうだと考えに浸りすぎたせい、目の前に接近する分身体に気づかなかった。迎撃態勢も間に合わず、その醜い口が俺を飲み込もうとしたその時、背後から飛んできた光線が分身体の頭を消し飛ばした。

「デメエこら曹操! ボケつとしてんじゃねえぞ! お前死なせたら俺が先輩に殺されるわ!」

「まさか、キミに助けられるとはな、兵藤一誠」

「うるせえ! スカしてる暇があんなら戦え! そんなんじやいつまで経っても先輩に追い付けやしねえぞ!」

言うだけ言って兵藤一誠は去っていった。追いつく……か。彼は神崎君のいる場所までたどり着くつもりなのか。あの英雄……いや、彼にはもつと相応しい名があるな。

(……ああ、思い出したよ)

悪魔、天使、墮天使……自分達の都合や欲望で人間を弄ぶ連中。俺が槍を手にした始まりは、そんな奴らへの怒りだった。

(人間を無礼るな。毎日を必死に生きる彼等を、お前達が傷つけていい理由なんかない)

だから俺達は超常お前達なんか屈しない。人間の尊厳と誇りはお前達なんかには負けはしない。

(そして、望まぬ力神器によって虐げられてきた者達に知ってほしかった。日陰に生きる必要なんてない。俺は……俺達はヒトとして真つ当に生きていいんだと)

だから、俺はなりたかったんだ。己の宿命を自覚する前……子ども頃の夢中になった、テレビの向こうで戦い続けていた彼らの様に。

——仲間と共に人々を守り。

——どれほど辛く苦しい目に遭っても、決して諦める事なく、守るべきものの為に理不尽へ立ち向かい。

——どんな不可能も可能にし、最後には必ず勝利する。

(俺は……そんなヒーローになりたかった)

難しい理屈も大げさな理想も必要なかった。俺はただ、泣いている人達の為にこの槍を振るだけだったんだ。そう……これまでも、そして今も救うために戦おうとしている神崎君ヒーローの様に。

(すまない、神崎君。やはり俺は救いようのない愚者の様だ)

先ほどまで命など惜しくないと思っていたはずなのに、今は生きてくても仕方ない。そんな資格とつくに無くしているはずなのに、目指したくて仕方ない。キミという憧れを……俺も追いかけてくたくたして仕方ない！

「霸道も外道も必要ない！ どんな理不尽もこの『槍』で正面からねじ伏せてみせよう！ それが俺の……本当に目指す『曹操』の在り方だあああああ!!!」

決意の咆哮と共に槍を力強く握しめる。その時だった。槍から今まで感じた事のない力が流れ込んできた。

「これは……!?!」

——モウ、迷ワナイデ。

かすかに聞こえてきたその声には慈しみと温かさが込められていた。周囲には分身体しかいない。ならば今の声は……

「……ありがとう、相棒」

返事をするかのように淡く輝く聖槍に笑みが浮かぶ。……あの悔やんでも悔やみきれない決闘から、見限られたかのように不調だった槍が今、ここに復活を果たした。これで全ての力を存分に振るう事が出来る。

「二ギシヤアアアアアアア!!」「二」

四方から一斉に迫りくる分身体を前に、俺の心は凧いでいた。最早この程度、何の脅威にもなりはしない。

その場で槍を振り回す。そして勢いをそのままに四体の首めがけて穂先を振り上げる!

「——失せろ。この世界からな」

物言わぬ骸となった分身体の間を抜け、俺は駆ける。

「神崎君の道は俺が切り開く！ さあ来い邪神ども、今の俺達を止められると思うなよ！」

幕間その九 勇者とは勇ある者だけではなく人々に
勇気を与える者の事でもある

『超獣鬼』、『剛獣鬼』による冥界侵攻に伴い、各地に設置された避難所には多くの悪魔達が避難していた。数十分ほど前までは、誰も彼もが不安と恐怖に苛まれ、暗い雰囲気や避難所内を覆っていた。

しかし今、彼等の表情に陰は無い。それどころかまるでアイドルのライブ会場のような熱狂と興奮が悪魔達を支配していた。大人も子どもも、男も女も関係なく、瞳を輝かせ、声を張り上げ、腕を突き上げる。

彼等の視線はただ一つ。各避難所に置かれたテレビやモニターに注がれていた。外の状況を知るために用意されたそれに映し出されているものが悪魔達を熱中させる原因だった。

「がんばれせきりゅーてー!」

『おらああああああ!!!』

一人の男の子が声を張り上げると同時に、画面の先にいた全身を深紅に包んだ少年が眼前の化け物に全力で拳を叩き込む。少年よりも巨躯の化け物がその一発で紙屑の様に宙へ吹き飛ばす様に歓声がある。

「ヒューッ! 見たかよ今の!! あんなデカブツがワンパンで吹っ飛んだぜ!」

「やっぱり赤龍帝のパワーってとんでもねえな!」

「おいおい、パワーならあのヒトだって負けてねえだろ!」

『神崎殿の邪魔はさせん! 邪神共よ、我が拳に耐えられるものならば耐えてみせるがいい!!!』

黄金の鎧をまとった青年が腰を落とし、拳を構える。

『ぬうううううんっ!!!』

裂帛の気合いと共に放たれた拳が生み出した衝撃は迫りくる化け物の腹に巨大な穴を空けるだけにとどまらず、その後方にいた別の化け物達の体すらも貫通させてしまった。ひたすらに鍛え続けた者の

みに許されたその一撃に黄色い声が一層激しくなる。

「きやああああああ!! サイラオーグ様ああああああ!!」

「今の何!?! どうやったの!?!」

「無理……ダメ……カツコ良すぎ……」

「ちよ!?! さっちゃん!?! 鼻血がとんでもない事になってるけどお!?!」

「だ、大丈夫……。サイラオーグ様の雄姿をこの目に焼き付けるまでは耐えてみせるわ……」

己の戦いが一人の少女の命の危機を招いている事を知る由もない青年は倒した化け物には目もくれずに別の獲物に向かって駆け出すのだった。

『食らいやがれええええ!!』

漆黒の巨龍から放たれた黒炎が大量の化け物達を包む。もがき苦しむ化け物達は瞬く間に全身を炭化させ、その場に崩れ落ちる。

『俺は任されたんだ! 尊敬するあの人に! だから、シトリー眷属の代表として、無様な姿は見せられねえんだよおおおお!!』

巨龍は自らの尾を鞭の様にしならせ、自らを取り囲んだ化け物達に一閃させる。数舜の後、化け物達の体は真つ二つとなり大地へ沈んだ。

「うわあ……えげつねえなあのだらゴン。シトリー眷属でドラゴンつつったら……」

「匙 元士郎だな。最近彼女の眷属達の中でも特に実力が伸び始めているヤツだ。まさか、赤龍帝と彼が共に戦場にいるとはな」

「そうか。リアス・グレモリーとソーナ・シトリー。『王』同士もライバルで自分達もライバルだもんな。おお、これは中々熱いものがあるじゃないか」

「うむ。増々目が離せんな。……つと、噂をすれば……」

『イツセー!』

少女の声と同時に上空から無数の魔力球が降り注ぐ。深紅の少年を襲おうとしてその直撃を受けた化け物は被弾箇所には抉り取られたかのような傷が生じ、自らの体を支えきれなくなったのか崩れ落ち

る。

『部長、助かりました!』

眷属からの感謝の言葉に、空に浮かぶ紅髪の少女はその美しい顔を綻ばせる。

『どういたしまして。さあ、イツセー。リョーマの道を切り開くためにも、あなたは真つすぐに突き進みなさい! その為の援護は私達が請け負ったわ。——朱乃!』

『雷光よ!』

紅髪の少女の背後から飛び出した黒髪の少女が放った光を真正面から受けた化け物達が跡形もなく消滅する。

『うふふ、私を忘れてもらっては困りますわ。イツセー君。リアスの言う通り、後ろは気にせず思い切りやりなさい』

『うつつ! 兵藤 一誠、突撃します!』

「「「流石ですお嬢様!」」」

グレモリー邸に残った使用人達は、敬愛するお嬢様の雄姿を声を揃えて称えるのだった。

『ゼノヴィア!』

『任せる!』

戦場に突如として巻き起こる旋風が化け物達の動きを止める。そこへ一人の少女が右手に掲げた輝く剣を振り下ろす。両断された骸を踏みつぶしながら別の個体が少女へ迫るが、そこへ聖なる障壁が現れその攻撃を防ぐ。間髪入れずに風を生み出した少年が反撃に移った。

『風刃閃!』

鋭い風の刃が容赦無く敵を切り刻む。さらなる追撃に備えて周囲を見渡す二人の元へ別の少女が空から近づいてきた。その翼は悪魔の物ではなく天使である事を証明していた。

『二人とも、ちゃんと周りを見て動いてよ!』

『なに、いざとなったら今みたいにお前が守ってくれるんだろう、イリナ?』

『あはは。頼りにしてるよ紫藤さん』

『ツ~~~~~！ もう！ ゼノヴィアはともかく木場君はもつとまともな人だと思ってたのにい！』

反省どころか丸投げしてくる両者に天使の少女は頭を抱える。その嘆きは空しく天へ響き渡るのだった。

「あれ、あの娘って天嬢さんだよな？ バカデカイ剣を振り回すイメージしかないんだけど、あんな剣持ってたっけ？」

「さあ？」

……頑張れ天嬢さん！ いつか、その汚名を返上できるその日まで！

『こうして誰かの下で戦うのなんて久しぶりだなあ』

『おうコラサーゼクス。あなた、フューリー様の指揮の下という誰もがうらやむ状況に不満でもあるのですか？』

『まさか。こんな機会またとないだろうし、精一杯頑張らせてもらうつもりさ』

『魔王になってからは座って仕事する方が多くなってんだろっしな。いいストレスの発散だと思つて気楽にやればいいさ』

『アザゼル先生！ 生徒達があれば頑張っているのにあなたという人はー！』

『ああ、いいんだよロスヴァイセ。今のは彼なりの励ましだからね』

『はあ……』

『まあいいです。あなた達と馴れ合う気もありませんし。私はここで活躍してフューリー様に褒めて頂くという大事な使命がありますので。頭を撫でてもらい。微笑みかけてもらい。そのまま勢いで自宅に招いたりしちゃって。私の手料理を振舞つて。フューリー様の入られた後のお風呂に浸かって瞑想を一時間ほどこなして。そして、そして、寝る時は一緒に、一緒に……あ、やべ、想像しただけで逝きそう』

『……ホント、どうしてこうなっちゃったのかな』

『知るかよお』

……ここが戦場とは思えないほど暢気な会話を交わす四人の男女。しかし、その周囲ではさまざまに暴虐が巻き起こっていた。近づこうと

する異形達は一定距離まで近づくと瞬く間にその身を刻まれ、貫かれ、滅ぼされる。蹂躪につぐ蹂躪。殺戮につぐ殺戮。その犠牲となつたのはすでに百や二百ではきかなくなっていた。

「……なんかあの場所だけ異次元だな」

「そりやまあ、魔王様に墮天使の総督がいるしな。……ところで、なんであの眼鏡の女性はあんな酷い顔してるんだ？」

「……さあ？」

何となく触れない方がいい。そう思い、彼等は意識を別に向けるのだった。

彼はひたすらに目の前の敵を屠り続けていた。故意か偶然か。ほとんど映像に映っていないその青年が見つめるのは自分がただ一人英雄と認め、どうしようもなく惹きつけられる男の姿だった。

（己の気持ちを認める。それだけでこんなにも心が軽くなるものなんだな）

もう疑わない。

もう迷わない。

もう間違わない。

（笑われようが、否定されようが構わない。それら全てを乗り越えた本物がいる。ならば俺も、この先どんな困難が待ち受けていようが必ず乗り越えてみせよう。神崎君、キミのようなヒーローに少しでも近づくために）

聞く者が聞けば失笑される様な夢。それでも、彼は進むのを止めない。誰かに言われたわけではない。ただ自分がそうありたいから。

「だから今は、俺の目指す英雄の為にこの槍を振るう！ 邪神共、命の貯蔵は十分か……！」

こうして、青年は再び英雄への道を歩み始める。かつて違えてしまったその道を、今度こそ踏み間違えない様、ゆっくりと、しかし確実に……。

ただ一つの目的のために、少年達は戦場を駆け抜ける。そして、その活躍はついにこの男を動かす事となった。

『……さて、頃合いの様ですね』

なんでも娯楽にしてしまう悪魔の性か。最早ヒーローショーの様な空気になってしまった避難所だが、それを咎める者も不思議に思う者も誰一人存在しないのであった。